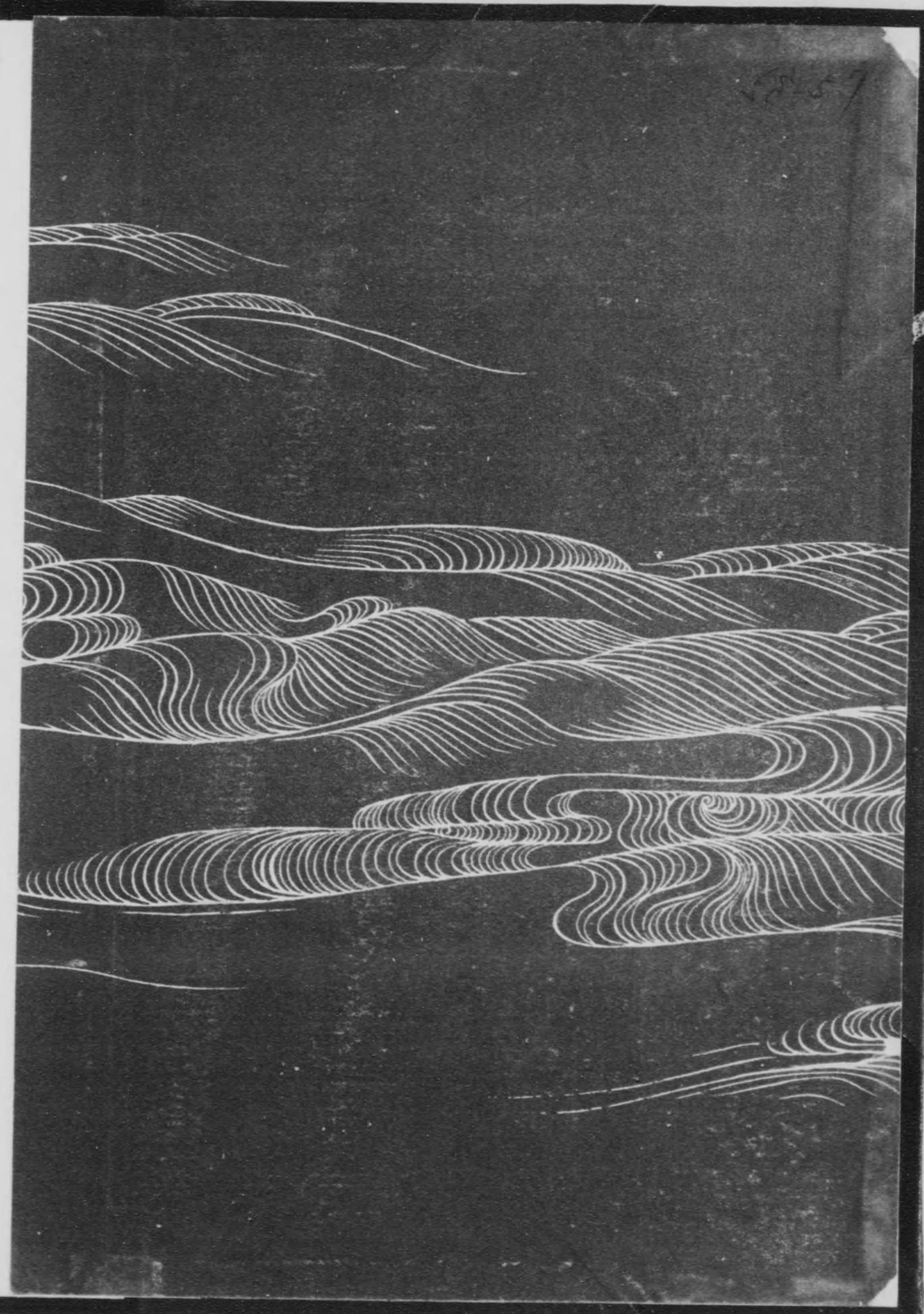
R813.1
015
(3)㋔

始



スト5ゼ-ト7

R
813.1
O.15
(3)

# 日本大辭典

# 言泉

大正
11. 11. 1
内文庫

第六五三三七號　　研究社發行

の如く、一列に眞直になりて飛べ、又鈎の形に折れ曲りて飛べ。〔諺語〕

**棹の歌**【句】ふなうた(船唄)に同じ。本朝三綱記「この追風に千早振、神通丸は加藤が船、夢帆に上げて棹の歌」 長崎繁盛記「棹の歌はやうら涼しめじか船」

**棹の雁**【句】一列に眞直に飛びゆく雁行。 伊勢新迫一網記「棹の雁行くへは雲となりにけり」

**棹の先で星を打つ**【句】『無門關』に「棹棒打月、陳蒲穆、痒有二花廢交渉一」とあるに本づく。不可能なることの譬。

**棹の先へ鈴を附けたやう**【句】喧しきことの譬。

**棹の長(ナガ)**【句】船を行る棹を執る人。夫木「船のをさ棹なすすめえ高瀬船みやこに我れはさせる身ならず」

**棹は三年、櫂は三月**【句】棹をあやつるは、櫂をおすよりも習熟するに縁きをいふ。〔諺語〕

**さ-を** 眞麻(名)+さ(衣)は接頭語。■麻(麻)に同じ。〔古語〕■寒を束ねたる如き粗衣。〔古語〕 萬葉「筑間の手古名が麻衣に青ねび著けひたきをる裳には織りきて」

**さ-を** 眞青(名)『さ(眞)は接頭語』(青)(□)に同じ。〔古語〕 萬葉「さを、色は雪はづかしく白うて、さをに、顔つきこそなうはれたるに」

眞青なる君【句】顔の色の青き君。〔古語〕 萬葉「人だまのさをなるきみがただひとりあへりし雨夜は久しく思ほゆ」

眞青の馬(ウマ)【句】青毛の馬。あをうま。〔古語〕 催馬樂「青馬」「さをのま放れば取繋げ」

**さ-を** 棹・竿【助數】■旗を數ふるに用ふる語。旗。■『棒をその鐵(ヤリ)に通してかつぐよりいふ』長持・乾物などを數ふるに用ふる語。■羊羹又は菓物菓子の長きまなるを數ふるに用ふる語。

**さを-いし** 棹石【名】石塔又は石燈籠などの、臺石の上に建つる、柱狀の細長き石。

**さを-いれ** 棹入【名】間竿(ヤリ)にて、地積をはかること。檢地。

**さをうた** 棹歌【名】ふなうた(船歌)に同じ。夫木「淡路船鍬がくれ漕ぐ棹歌の聲ばかりこそ瀬戸わたりけれ」

**さを-うち** 竿打【名】間竿(ヤリ)にて測量すること。檢地うち。

**さを-かぢ** 棹舵・篙櫂【名】船の棹と、かぢと。萬葉「行き出でて漕ぎにし船はさをかぢもなくてさぶしも漕がむと思へど」

**棹舵千(チ)さず**【句】船の纜えず通航する形容。〔古語〕 觀貞「青海原(ウナバラ)は棹舵千さず、船の鐘(ヤ)の至り留まる極み、大海(ワタツミ)の原に船漕(ヲ)繰けて」

**さを-きんぎん** 棹金銀【名】德川時代に、金座にて、貨幣鑄造の材料として、金銀を鎔解し、竹の筒に流し込みて、棒形とせるもの、卽ち現時、造幣局にて金棒・銀棒と呼ぶもの。棒金。

**さを-こ** 棹子【名】投網船(アミブネ)の鐘(ヤ)に居て棹さす人。かぢこ。

**さを-さす** 棹差す【動四他】船を漕ぐために、棹を水に突入る。

**さ-をしか** 小牡鹿・棹鹿【名】『さ(小)は接頭語』をしか(牡鹿)に同じ。 拾玉集「海より出でて、あはせたる山路かなさをしかのねに蟲のこゑごゑ」

**さをしか-まと** 小牡鹿的【名】射的の一種。草鹿(ウナバラ)の類。

**さを-しぐれ** 竿時雨【名】生菓子(ナマガシ)の一種。青餡のそぼろの上に、白餡の餡棒を横たへ、餅にて捲き、蒸籠にて蒸し、適宜の長さに切りたるもの。「鰹」に同じ。

**さを-しやちつぎ** 竿車知繼【名】さをつぎ(竿繼)を貫ひて、鳥(ヤ)などを補ふること。

**さをだか** 竿鷹【名】隼(ハヤブサ)を貫ひて、鳥(ヤ)などを補ふること。

**さをだけ** 竿竹・棹竹【名】■竿に造るべき竹。■竿としたる竹。竹の竿。一代男「棹竹をわたし、とびさやの脚布(ハバキ)・雨袋壓けてありしは」

**さをだち** 棹立【名】馬の、後足にて、眞直に躍り上ること。ぼうだち。

**さを-ちがひびき** 竿違引【名】江戸時代に於ける減租の一。檢地の時、丈量を誤りたるを、後に至りて發見せし際、その租を減ぜしこと。

**さを-つぎ** 竿繼【名】(建)竿納(ヤ)を納穴に差込みたる上、車知(ヤ)にて固むる鐵手。さをしやちつぎ。

**さをつけ-のを** 竿附緒【名】旗を棹に結び附くるための紐。つけを。平家「さをつけのをのさはるほど」

**さを-つつじ** 竿躑躅【名】つつじの花を竿頭に附けしもの。貴、京都にて、四月八日に、家家にて建てたり。

**さを-つり** 竿釣【名】鈎魚法の一種。釣竿の端に綸(ハリ)と鈎鈎(ハリ)とを著けて釣るもの。

**さ-をとし** さ一昨年【名】『さは接頭語』をとし(一昨年)に同じ。一說に、さきをとし(先昨年)の略なりと。〔古語〕 井蛙「さをとしのきさらぎの十日ごろに」

**さ-をとめ** 早少女・早乙女【名】■『さつき(皐月)』を見よ、乙女の字は、實は正しからず。『田植をする少女、植女。■種蒔きし早苗の稻や生ひぬらんしづ心なく見ゆるさをとめ』■(動)あさびさり(□)に同じ。■(動)みづまし を云ふ。〔加賀國の方言〕

**さ-をとめ** 眞少女【名】『さ(眞)は接頭語』をとめ(少女)に同じ。〔古語〕 山家「磯菜摘むあまのさをとめ心せよ沖吹く風に波高くなる」

**さをとめ-かづら** 早少女葛【名】(植)くそかづら(屁糞葛)に同じ。

**さをとめ-ぐさ** 早少女草【名】(植)はなあやめ(花菖蒲)(□)を云ふ。〔東國の方言〕

**さをとめばな** 早乙女花【名】(植)ふたりしづか(二人靜)に同じ。

**さを-とり** 竿取【名】間竿(ヤリ)にて測ること、又その間竿を執る人。

**さを-とり** 棹取【名】かぢとり(梶取)に同じ。

**さ-をとる** さ踊る【動四自】『さは接頭語』をどる(踊る)に同じ。〔古語〕 萬葉「すきの野にさをとる雉子(キギス)、もじろく音にし泣かんこもりづまかも」

**さを-のぞき** 竿除【名】檢地の外に、別に掲げ記すべき地所。高札場・墓地・溜池の類。

**さを-のび** 竿延【名】檢地の時、從前の地積よりも廣がり延びたる丈量を得しこと。〔江戸時代の語〕

**さを-のぼり** 竿登【名】竿を眞ぐに立て、これに雲(ウ)登りて、頂端に達する輕業。

**さを-の-ま** 眞青の馬【句】さを(眞青)の條下を見よ。

**さを-ばかり** 桿秤【名】秤の一種。金屬・象牙・木製等の桿の一端に、皿又は鈎(ハリ)を有し、その近くに下緒(ハリ)ありて、これを支とし、量るべき物を皿に載せ、又は鈎に吊り、桿の他端に分銅を掛け、桿の水平になるまで、分銅を左右に移動せしめ、桿の目盛によりて、その物の重量を知るもの。

(りかばをさ)

**さ-をばし** 眞小橋【名】『さ(眞)は接頭語』小さき橋。〔古語〕 記「朝霧のみけのさをばしまつ君い渡らすも」

**さをばしり** 棹走【名】船の水押(ヤ)の一部。

**さをぶきやう** 竿奉行【名】江戸時代に、竿入(ハリ)の事を掌りし奉行。

**さを-ぶち** 竿緣【名】(建)細長き角材め、切口の矩形をなせるもの。

**さをぶち-てんじやう** 竿緣天井【名】(建)天井の、板を押ふるためと化粧とのために、一尺五寸ほどづつ間隔をおきて、板と直角に竿緣を打附けたるもの。

**さ-をぶね** 眞小船【名】『さ(眞)は接頭語』をぶね(小舟)に同じ。〔古語〕 萬葉「彦星の河瀨をわたるさをぶねのとゆきてはてむ川津しおもほゆ」

**さをもの** 棹物【名】夫餘の著。

**さをもの-ぐわし** 棹物菓子【名】すべて棒狀に作りて、小口切にする菓子。さをもの。

**さ-をろ** 棹櫓【名】櫓の一種。櫓の脚と櫓臍とを繼がず、一本の木にて造れるもの。まくちろ。

**さ-をを** 眞小絲【名】『さ(眞)は接頭語』をを(絲)を見よ』小さきみね。〔古語〕 記「こもりくのはつせの山のさををには、はたはり立て」

發音 ■しはさ行第二の音。もとは他のさ行音と同じく、sが子音なりしなるべけれども、今は子音shが母音iに結び附きて發す。shは舌尖を下面の前齒の裡面に隱し、舌面の前齒の裡面に接近せしめ、その間に發る狹隘なる空隙より、聲帶の振動を伴はざる聲音を軋ませて發する摩擦音にして、これが母音iと結び附けば、shiとなり、母音a.u.e.oと結び附く時は、拗音sha shui she sho となる。じはしの濁音にして、じと同樣に、もとはziなりしなるべけれども、今はロオマ字のjiに相當し、ただ聲帶の振動を伴ふ點において、しと異なるのみ。なほ秋田・山形等の東北地方の方言中には、si及びziの音も存在せり。■長音は、しいじいと書くとし・じと書くとの兩法あれども、本書は前者に依れり。■拗音しゃ・しゅ・しょにつきては、すでに□に記したるお、その長音も、本書に於てはしやあ・しやうと・しゑしよおと記す方法に依れり。濁音の場合、亦これに準じて知るべし。

■直下にうふの來る時は、相合して拗長音シウ・ジウの發音となる。例へば、しう(三)・じう(三)・しう(秀才)・じふくわい(集會)・じさまし、(淒じう)・じうるね(獨類)・じふ(十)におけるしう・じう・じふ・じふの類。但し動詞の語尾のふの場合、例へばをふ(教ふ)・まじふ(交ふ)等においては、シュウの如く、二音節に分ちて發音す。■しゅう・じゅうはしゅう・じゅうと同じく、お列の拗長音に發音すべし。お列の拗長音には、しゅうにては、しゅじゅを混用することあり。例へば、なし(梨)となす(茄子)と同じく發音し、しゅ(獅子)とすし(鮨)とを混用す。煤と同じく發音するが如し。■山陰・山陽の東部、四國の愛媛邊にては、しをひに誤る癖あり。例へばしちち(七・質)をヒチといふ類。これmiiより母音の脫落せるに外ならず。

**字源** 平假名しは漢字「之」(漢・呉音共にシ)の草體より出で、「志」(漢・呉音共にシ)の草體又は變體乎假名として用ひらる。萬葉假名にては、清音をあらはすに「之」・「志」の外「芝」・「駿」・「此」・「伽」・「始」・「試」・「旨」・「指」・「至」・「司」・「子」・「四」・「矢」・「次」(以上、漢・呉音共にシ)・「士」・「事」・「詞」・「侍」・「時」・「自」(以上、漢音シ)・「色」・「式」(以上、呉音シキ)・「石」(調イシ)・「磯」(調イソ)等、濁音については「事」・「自」・「寺」・「時」・「慈」(以上、呉音ジ)・「兒」・「爾」・「武」(以上、漢音ジ)等あり。片假名のシは、平假名と同源にて、「之」より出でたり。

**石** 【名】いし(石)の略。(他の語の下に附きて、熟語となる時に限る)〔古語〕「さざれし」

**尿** 【名】『しし(尿)の略』ゆばり。小便。〔古語〕

**尿の箱** 【句】『しには私にて、左傳の襄公十五年の條に「師慧過宋朝、將私」とありて、註に「謂小便」とある意かともいふ。「べんき(便器)」に同じ。〔古語〕 和名清器、「師乃波古」

**師** 【名】■專門技藝などを教ふる人。師匠。先生。 ■弟子。いとでしへ。心にいれて、師支那の古の軍制にて、旅(五)の五倍、即ち二千五百人の稱。又、師の五倍を軍(ぐん)といへり。■いくさ。軍隊。■育工部省の判任の技術官。明治四年設置、同十年廢止。初は上師・師・次師の三等に分ちしが、後に上・中・少の三等に改められたり。■海軍省の技術官の、尉官相當の判任官たりしもの。明治五年設置、同十七年廢止。初は大・中・少の三等に分ちしが、後に一等より五等までとせられたり。

**師は三世の契** 【句】師と弟子との關係は、現世はもとより、來世も、その次の世も絕えぬほどに深し。「主從は三世」參照。〔誌語〕

**好んで、人の師となる** 【句】『孟子の離婁上篇に「孟子曰、人之患、在好爲人師」とあるに本づく』物知り顏して、何かにつけて、人の師たるを好む。

**三人行へば、師有り** 【句】さんにん(三人)の條下を見よ。

**七尺去って、師の影を踏まず** 【句】弟子は、師を敬ひて、路を行くにも、七尺退りて歩み、師の影をだに踏まず。〔誌語〕

**詩** 【名】■支那の韻文。古詩・律・排律・絕句等、その體種あり。一句は五字又は七字、一定の平仄(ひょうそく)を用ひ、句の末尾に、韻を踏むを定とす。からうた。漢詩。言志。 ■長・短・まづかたき詩の心を思ひめぐらし。〔書〕しきやう 詩經の略。 ■(文)『英、Poem』美くしき思想・感情等を諷詠に如きも、その一なり。うた。詩歌。韻文。詩は別才あり 【句】『滄浪詩話に「詩有二別才一非二關書也」とあるに本づく』詩才は、學問の淺深に關係せざる、別種の詩を作るより田を作れ 【句】實利主義を執れ。〔誌語〕

**支** 【名】■わかれ。分流。「本支の別」 ■しはらひ。支出。「收・支相償はず」

**肢** 【名】えだ。手足。「肢・體」

**私** 【名】■わたくし。私意。私慾。 ■なういしよと。陰事。■一身・一家に關すること。おほやけのことにあらざること。■女子が、その姉妹の夫を呼ぶ稱。和名、私、關雎云、女子謂二姉妹之夫一爲私、私、今案、公私之私字也、和名與し智同」

**將** 【名】〔天〕二十八宿の一。とろき。

**祀** 【名】■まつること。まつり。祭祀。

**繒** 【名】■黑色。 ■黑色の衣。すみぞめ衣。 ■(動)ぬす(竊)。

**雌** 【名】めす(雌)に同じ。

**至** 【名】〔天〕『英、Solstice』太陽の赤經又は黃經の九十度(夏至)及び二百七十度(冬至)に等しき時を合はせていふ稱。

**史** 【名】■世の中の出來事を記したる書・歷史。 ■記錄を掌る官。 ■歷史を書く人。ふびと。 ■古の神祇(ぢん)官及び太政官の主典。神祇官のは、文案の勘署・稽失の檢出等を掌りて、大・少の二等に分れ、太政官のは、文案の勘署、稽失の檢出、內外諸司より上申せし庶務を取扱ひ、左・右・大・少に分れ、各二人づつなりしより、八史とも稱せられたり。まつりごとびと。 ■央に三長あり 【句】『唐書の銅知微傳に「禮部尙書郗惟忠嘗問、自古文士多、史才少何耶。對曰、史有三長、才・學・識、世罕兼之、故史者少」とあるに本づく』歷史を書く人は、才・學・識の三長所を備へざるべからず。〔誌語〕

**氏** 【名】うぢ(氏)に同じ。

**旨** 【名】おほせ。むね。

**視** 【名】みること。「視・聽・言・動」

**仕** 【名】つかふること。つかへ。官職に就くこと。しふうどり。仕官。

**子** 【名】■こ。こども。 ■(尊)の略。 ■孔子の尊稱。「子曰はく」 ■閑書分類の一。自說を述べたる書。「經・史・子・集」

**士** 【名】■學びて、位に居る者。仕官して、人民の上流に立つ人。 ■支那周代の貴族中の最下位に在りし者、即ち大夫の下にあり、四民の上に立ちしもの。士・上士・中士・下士の三等に別れたり。 ■支那周代の制にて、戰場に將校を助けて、卒伍を諭したる者。 ■道理に通じて尊敬すべき人。賢人。





■男子の通稱。「文雅の士」「樂變の士」

**士は己を知る者のために死す** 【句】『史記の豫讓傳に「士爲知己者死、女爲悅己者容」とあるに本づく』士たる者は、知己者のためには、生命を棄てもなほ惜しむべ。〔誌語〕 其士はおのれを知る者のために死ぬ

**士を好めば、士至る** 【句】『新序に「今君苟好士、則賢士至矣」とあるに本づく』一國の君主たる者、賢人を得んと欲せば、これを好愛すべし。〔誌語〕

**志** 【名】■事柄をしるしたる書。記錄。〔誌〕 ■紀傳體の歷史にて、本紀・列傳の外に、天文・地理・神祇(ぢん)・禮樂などに關する沿革を記しにる記錄。

**誌** 【名】記錄。文書。

**使** 【名】■つかひ。使者、■げびゐし(檢非違使)ほうがし(奉幣使)などの略。「使の宣(せん)」「使の宣旨(せんじ)」

**使の宣** 【句】次條の略。

**使の宣を乘って、九郎判官と申しける** 〔平家物語〕使の宣を乘って、九郎判官と申しける」

**使の宣旨** 【句】古、奉幣使又は檢非違使(けびゐし)を任命せらるる時、賜ひし宣旨。 ■原形、即『使』使宣旨也」

**使の廳** 【句】けびゐしちやう(檢非違使廳)に同じ。

**試** 【名】しけん(試驗)に同じ。

**弑** 【名】長上殊に君父を殺害すること。しいすること。弑逆。

**獅** 【名】(動)しし(獅子)に同じ。

**刺** 【名】めしし(名刺)に同じ。

**刺を通す** 【句】面會を求めんがために、名刺を差出す。

**肆** 【名】みせ(店)に同じ。「肆を開く」

**死** 【名】■死ぬること。 ■しさい(死罪)の略。「死一等を減ず」

**死の別** 【句】しにわかれ(死別)に同じ。『參照』をのこし・女こ生みなどして、死のわかれにぞ別れにける」

**死を致す** 【句】「命(イ)を致す」に同じ。太平記、「務重なり、手を負ひ、死を致すもの、一日が中に五六千人に及べり」

**死を賜ふ** 【句】自殺を命じたまふ。

**死を視ること生くるが如し** 【句】『莊子また漢書の龔遂傳等に見ゆ』死を懼れざる形容。

**死を視ること歸するが如し** 【句】『韓非子また大戴禮(だいたいらい)等に見ゆ』前條に同じ。

**尸・屍** 【名】かばね。しかばね。死屍。

**梓** 【名】『康熙字典に「俗謂上書文於板一曰梓」とあり』梓(あづさ)の木を刻みて、書籍を出版すること。

**鷺** 【名】しらさぎ(鷺鳥)に同じ。

**鷺といふ小鳥は、小さけれども、虎を害する力あり** 〔鶴鳥〕(雲月)

**司** 【名】■つかさ。官職。 ■つかさどる人。役人。 ■古の省の被官。寮の次に位し、正(しょう)・佑(じょう)・令(りょう)等の職員ありたり。「主膳司」「主殿司」 ■明治初年の官又は省の被官。局又は寮の次に位したり。「出納司」

**詞** 【名】(文)■樂府(がふ)より出でたる一種の詩體。例へば、「木蘭詞」の類。辭。 ■てんし(眞詞)に同じ。

**嗣** 【名】あとつぎ。後嗣。嗣子。

**祠** 【名】■やしろ。ほこら。神社。 ■まつること。まつり。

**市** 【名】■まち。いち。市街。 ■市町村制度によりて、市制を施行する土地。町・村と同じく、地方自治團體中の最下級に位すれども、町・村のごとく、郡の區域に屬せず。郡と共に直接に府又は縣を構成し、市會と市參事會とをその機關とし、市長は市會の選擧によりて定む。「見よ。

**市に虎あり** 【句】「三人市虎を成す」を見よ。

**翌** 【名】(動)『英、Constellation』羽毛の一種。中央に羽軸あり、その兩側に羽枝を生ず。

**資** 【名】■たすくること。 ■「助けとなるもの義」材料。資料。「研究の資に供す」 ■もとで。資本。資財。「資を投ず」 ■うまれつき。性質。資質。「聰明の資」

**食** 【名】たべもの。しよくもつ。「一簞の食、一瓢の飲」

**屐** 【名】くつ。はきもの。

**屐を倒にして迎ふ** 【句】『三國志中、魏志の王粲傳・又、北史の朱齡傳に出づ』來客を歡び迎へんとて、あはてて屐を倒に穿つ。

**贄賓** 【名】會見の時、携へゆく禮物。「贄贄を執る 【句】『儀禮の鄭玄註に「君子見二於所三尊敬一必執贄、以贄其厚意也」とあり』進物を携へて往く。

**貿を委(す)す** 【名】『國語の晉語に「委、賣爲二臣」とあり』、寄託に「賣贄也」とあり』進物を差出して、先方に身をまかす。仕官す。

**羊蹄** 【名】〔植〕ぎしぎし(羊蹄)に同じ。〔古語〕 和名、羊蹄菜、之布久佐、一志之」

**四** 【數】二と二とを合はせたる數。よつ。

**四の五の** 【句】なんのかの。とやかう。〔俚語〕 卷花五夫乃、それゆゑ、四の五のと申すのでござらう。いっぱぐち放して」

**四も五も無い** 【句】彼れとこれいふべき餘地なし。

**子** 【代】同輩に對する第二人稱。そなたきみ。汝。

**代** 【代】■(其)の義』中稱の指示代名詞。そ。それ。〔古語〕 馬、さしぶの木しが下に生ひたてる葉廣ゆつま椿しが花の照りましたが葉の ひろりいますは大君ろかも」 ■第二人稱。そちなんぢ。〔古語〕 雲理、あなわかわかしの書簽や、しが身のほど知らぬこそ、いと心うけれ」

**句** 【名】■話詞を整へて、又は强むるに用ふる辭。萬葉、あれをおきて人はあらじとほころへど寒くしあれば麻衾ひきかがふり」 ■口語の動詞に接して、過去又は將來を推量するに用ふる辭。天の磐島、侍も、町人も、客は客、なんぼ綿いても、五本・六本は、描すまいし、よう搦いて、刀・わきざし、たった二本」

**さり** 【句】『前條(ロ)の助詞と動詞あり(有り)との約』云云にてあり。云云となる。(將然形と已然形との外、用例なし)〔古語〕 萬葉、大君のみことにされば父母を

**いはひべとおきてまねて來ましを**」「夕さらば」「秋されば」

**應** 叱る時、戒むる時、止むる時などに、發する聲。しっ。

**師** 【接尾】『す(爲)の連用形しより轉じたるもの』その技術の專門の人たる意。「齊師(ぢし)」「いかものし」「寫眞師」

**子** 【接尾】■男子たる意を示すに用ふる語。「才子」「遊子」 ■姓氏に添へて、後世より、その人を尊びていふに用ふる語。「孔子」「孟子」「莊子」「鳴呼忠臣楠子之墓」 ■名に添へて、親しみの意を示すに用ふる語。四十八願、これこれ好助子、もうちっと待つがいい。 ■姓氏に添へて、子爵の身分を示すに用ふる語。「板本子」

**秭** 【助數】兆の萬倍。一說に、京の萬倍。

**絲** 【助數】小數の單位。毛(もう)の十分の一。忽(こつ)の十倍。

**枝** 【助數】細長き物を數ふるに用ふる語。「長刀一枝」「大槍の傘二枝」

**錙** 【助數】支那の重量の單位。兩の四分の一。銖の六倍。

**字** 【名】■聲音又は言語を、書表にすしるし。もんじ。もじ。 ■かんじ(漢字)の特稱。 ■(尊)の紙に包み、揚弓・雙六等の賭物(かけもの)に用ふるもの。松風村雨等盤「綾錦にていろいろに飾りし錢をぞ出さるる…これは揚弓・雙陸の勝負にかくるおあしならんとありければ、司の前剛き給ひ、いやいや字にて候はず」

**字の思召(ぢ)** 【句】身のたけ低き遊客。〔昔の江戸吉原遊廓の隱語〕

**人生字を識るは憂患のはじめ** 【句】『蘇軾の詩に出づ』文字を學び、學問をなすは、人生に對して不平煩悶を起す種子なれば、何事も知らざるが却って安寧なり。〔誌語〕

**じ** 時 【名】■(時)に同じ。〔古語〕 源氏「このわたりにとまりて、初夜のじ果てんほどに」 ■(昔)じむかし。時間。■の略。

**慈** 慈 【名】いつくしむこと。あはれみいとほしむこと。慈悲。慈愛。 書の門祭、「人の父としては、慈にとどまり」

**じ磁**【名】Ⅰ磁器。陶器。Ⅱ（磁石）の略。Ⅲ（文）（磁）において、すに用ふる語。例へば、$x^2$、$x^3$、$x^4$のすべてに關しては九次代數學にて、項を形成する文字の因數を示して二次、$x^3$、$x^4$に關しては三次、$x^4$に關して四次、$x^5$に關しては五次なる類。また方程式にては、未知數の最高次數を、多項式にては最高次の項の次數とす。「三次方程式」

**じ辭**【名】Ⅰ（文）（詞）に同じ。Ⅱ（詞）に同じ。大賣令の制規にて、雜任の初位以上及び庶人が事を錄して、諸司に申達せしこと。その式、辭（文）に比して大差なく、年月日の下に、位・姓・名・辭の四字を記し、次にその事を錄し、文の末尾に、謹辭の二字を加ふることと定められた。Ⅱ辭は達するのみ。【句】『論語の衞靈公篇に『子曰、辭達而已矣』とあるに本づく』文辭は意義の通達するを本旨とすべく、徒に當麗なるは取らず。「謚語」

**辭**を卑くす【句】『史記に『齊慣必卑辭重幣以事秦』とあり』「言葉を卑くす」に同じ。

**じ壅**【名】『支那にて、秦以來の用例に倣へるもの。秦以前は、上下の差別なく、ただ印章の意に用ひたり』天子の印章。玉璽。國璽。

**じ瓷**【名】次條を見よ。

**瓷の器物**（ヲクバ）【句】じき（瓷器）に同じ。〔古語〕　和名抄、瓷、之乃宇豆、波毛乃、瓦器也」

**瓷の坏**（ツキ）【句】前條に同じ。〔古語〕　字鏡集、瓷、ジノウツハモノ・ジノツキ」

**じ兒**【代】男兒の、我に對する第一人稱。

**じ次**【接頭】（化）主に酸名に添へて、酸類と酸素との割合を同じくし、化合價の割合一つ多き意を表はすに用ふる語。「次硝酸蒼鉛」「次硫酸」

**じ不**【助動】未來を推量して打消す意に用ふる語。まじに似て、その意すこし弱し。ざらん。（動詞の將然形に續けて用ふ）「行かじ」「見じ」

**じ字**【助動】Ⅰもん（文）に同じ。　異語發辭「いかやうとも仕從つて、一錢、一字損かけまじ」　Ⅱもん（文）に同じ。（東量にいふ）

**じ時**【助數】時間の單位。一晝夜二十四分の一。分（ブン）の六十倍。

**じ次**【助數】Ⅰくわい（回）に同じ。「數次の問答」「大正第三次の春」　Ⅱ（數）『英Degree』

**じあい愛**【名】Ⅰ（文）（愛）に同じ。Ⅱ（他愛說）に對して）

**じあい-せつ**　自愛說【名】（哲）前條に同じ。（他愛說）に對して）

**じあえんそさん　かるしうむ**　次亞鹽素酸【名】（化）『英Hypochlorous acid』酸類の一。極めて分解しやすきが故に、ただ溶液として得らるるのみ。必要の生じたる場合に、その鹽類に酸を加へて、その水溶液を得、直ちに使用するを常とす。酸性は弱けれど、酸化力强きにより、酸化劑又は漂白用に供せらる。殺菌力も强し。

**じあえんそさん-かるしうむ**　次亞鹽素酸カルシウム（英Calcium hypochlorite）【名】（化）漂白粉クロオルカルキ（Chlorlalk）の主成分。鹽素に類する臭氣と收斂（シウレン）性の反應を呈す。酸化力强き故に、脫色・漂白・殺菌等の用に供す。

**じあえんそさん-なとりうむ**　次亞鹽素酸ナトリウム（英Natrium hypochlorite）【名】（化）酸化劑の一。苛性曹達の冷溶液に鹽素を通じて製す。その水溶液は當に鹽素を發生し、日光に當り、又は溫度稍高き時殊に著し。漂白劑・殺菌劑・染色・製紙等に用ひらる。

**じあがり**　仕上【名】しあがること、又その結果。しあげ。落成。

**じあがる**　仕上る【動四自】仕事終はる。できあがる。落成す。

**じあき**　爲飽【名】しあくこと。しあきたること。

**じあく**　至惡【名】最大なる罪惡。極惡。

**じあく**　四惡【名】Ⅰ『論語の堯曰篇に『子張曰、伊謂二四惡一乎曰、不教而殺、謂二之虐一、不二戒視一成、謂二之暴一、慢二令致一期、謂二之賊一、猶之與人也、出納之吝、謂二之有司一』とあるに本づく』國を治むるにつきて、四つの惡事。即ち殘敎ふることを爲さずして殺すこと。初に戒めず、急にその成績を檢視して責むること。前に命令を緩慢にして、急に期限を定め、これに背けば、刑を加ふること。民に與ふべきものなるに、これを出すに吝なること。ごあく（五惡）參照。　Ⅱ（佛）しあくじゅ（四惡趣）の略。「同じ。

**じあく**　爲飽【句】Ⅰ（動四自）事をなしあくまで飽くまでなす。

**じあく-**　仕上ぐ【動下二他】Ⅰ仕事を終ふ。出來上るやうにし。　Ⅱ前よりは其ならしむ。出來歡迎、御身も、すんと女房を仕上げたり」　Ⅲいりあく（入上ぐ）に同じ。　丹波奥生、興作といふ博打の盜人めに、有りたけしあげて」

**じあく-じま**　鑄飽島・塩飽島【名】（地）じあくしたう（鑄飽諸島）を見よ。

**じあくしたう**（鑄飽諸島）・塩飽諸島【名】（地）Ⅰ（佛）六道の中、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四つ。即ち三惡趣に修羅を加へたるもの。四惡道。四趣。

**じあく-しょたう**　鑄飽諸島・塩飽諸島【名】（地）讃岐國丸亀市の北方に散在せる群島。その中、大なるは本島（ホンタウ）・高島・與島（ヨシマ）・櫃石（ヒツイシ）島・瀬居（セヰ）島・廣島・高島・佐柳（サナ）島にて、これを鑄飽の七島といひ、その他、長島・向笠（ムカヒガサ）・羽佐島等の屬島ありて、讃岐國仲多度（ナカタド）郡に屬す。

**じあく-だう**　四惡道【名】（佛）じあくじゅ（四惡趣）に同じ。

**じあく-の-しちたう**　鑄飽七島・塩飽七島【名】（地）じあくしたう（鑄飽諸島）を見よ。

**じあくむ**　爲飽【動四自】しあぶ。あつかひ煩ふ。もてあます。

**じあげ**　仕上【名】しあげること、又その結果。できあがり。成果。

**じあげ-かんな**　仕上鉋【名】仕上に用ふる鉋。鉋利にして刃（ハ）薄し。精巧。

**じあげ-こう**　仕上工【名】製製品を更に加工して完全ならしむること、又その人。

**じあげだかばらひ-ちんぎん**　仕上高拂賃銀【名】（經）勞働時間の長短に拘らず、實際成遂げたる仕事の出來高に應じて、賃銀を仕拂ふこと。出來高拂賃銀。請致拂賃銀。仕上拂賃銀。

**じあげばらひ-ちんぎん**　仕上拂賃銀【名】（經）前條に同じ。

**じあげ-ぼり**　仕上彫【名】一と通り彫刻したる物に、更に仕上の加工を施すこと。うはぼり。

**じあげ-もの**　仕上者【名】Ⅰ更に加工して完成すべきもの。　Ⅱ食饌より身を起して、富貴となりたる人。なりあがりもの。

**じあごん　四阿含**【名】（書）次條に同じ。

**じあごんきやう**　四阿含經【名】（書）四種の阿含經、即ち增一阿含經・長阿含經・中阿含經・雜阿含經。共に、釋迦の、帶毒經を說きし後に、十二年間を費して、鹿野苑（ロクヤエン）にて說けるもの。小乘教の根本經典にして、四諦（タイ）・十二因緣・八正道等の法門を明かにせり。

**じあさって**　明明後日【名】明後日の翌日。「を見よ。

**じあすたあぜ**（鑑Diastase）【名】おあすたあぜ（麥芽酒素）を見よ。

**じあすたあぜ**　仕當つ【動下二他】事をなして好結果を得る。思ひ通りに事を成遂ぐ。日本武尊、東征の時、「さては男か。わが懇しあてた」

**じあつかふ**　爲扱ふ【動四他】なしあつかふ。宍鹿に窮す。もてあつかふ。宍鹿



（1837）　じあつき　じあひ　じあん　じあんじ　じあんぶ　じあまる　じあまり　じあまつ　じあやまち　じあやまる　じあやまり　じあやまつ　じあやまる　じあやまり　じあやまつ　じあやまち　じあやまる　じあやまり　じあやまつ　じあやまち　じあやまる　じあやまり　じあやまつ　じあやまち

**しい 徒倚**【名】たちやすらふこと。たちどまること。

**しい 小便**【名】「こ」「小供の語」

**しい 蒿雀**【名】(動)ごしのしの延言。しし。しっ筑紫及び周防國に棲みて、馬牛を害せしといふ。

**しい**【名】■動)鷃(ウヅラ)に似たる怪獣。昔、あさ笑又は苦笑する時の聲。

**しい**【感】■(植)ぎしぎし(羊蹄)に同じ。

**しい**【古語】平蕈「しいと笑ひける」■馬方の、馬を追ひたつる時の掛聲。

**しい**【名】■(法)「しいの」丹波國住「しいといふ馬道駈も聞かぬわいの」■犬・猫などを追ひ、立退かしむる時の聲。■制止または警蹕(ケイヒツ)の聲。

**じ**【名】じふく(時服)に同じ。

**じ 侍醫**【名】■貴人に侍して、その診療に從事する者。■大寶令の制規にて、内藥司(後に典藥寮)に屬し、天皇御不豫の時、御脈を診驗し、醫藥を供奉することを掌りしもの。定員四人、初は正六位下相當、中世以後、多くは、和氣(ワケ)・丹波の兩氏これに任ぜられ、後には四位・五位の任となれり。禁秘抄・著三何子「召三侍醫於小板敷一令見二用所上古例也」■侍醫局に屬して、診脈・醫藥及び宮中衛生の事を掌る勅奏任官。明治八年に大典醫・中典醫・少典醫・大侍醫・權大侍醫・少侍醫・權少侍醫を廢してこれを置く。

**じ 辭意**【名】■ことばの意義。■ことばと意志と。■辭職らんとする心。辭職の意向。

**しいう 四友**【名】■四種の文房具、即ち硯・筆・紙・墨。■雪中に花ある玉梅・蠟梅(ロウバイ)・水仙・山茶(ツバキ)の四種。

**しいう 死友**【名】■「しかう(死交)を見よ」生死を共にせんとするほどの極めて親密なる友。■死にし友。

**しいう 詩友**【名】■詩を以て交る友。

**しいう 師友**【名】■師として尊敬するほどの友。■師と友と。

**しいう 市有**【名】地方自治體たる市の所有。「有。

**しいう 私有**【名】一私人の所有。

**しいう 子游**【名】(人)支那周代の學者。孔子の門人。本名は言偃、子游はその字なり。武城の宰となり、學を以て、孔子に稱せられたり。

**じいう 事由**【名】■事のわけ。■(法)「事實上の原由。

**じいう 自由**【名】■事のわけ。■(法)「みづから由る義」■わが心のまま。おもひのまま。きまま。かって。■他の制肘束縛を受けず、自己の單獨意思にて行動すること。■(法)法律の範圍に於ける隨意の行爲。「言論の自由」「信教の自由」

**憲法上の自由**【句】(法)憲法によりて保證せられたる臣民の自由、即ち居住・移轉の自由、言論・著作・印行・集會・結社の自由。信教の自由の類。

**じいうし 自由意志**【名】『英Free of the wi-ll』■(哲)一一の行動が、毫も止むを得ずして爲せりとは感ぜず、意志の自由なる發動より生ずとの感を有すること。意志の自由。選擇の自由。■(法)爲不爲の自由ある精神狀態。人は、一定の年齢に達すれば、精神に異狀ある者、又は精神發達の不十分なる者に非ざる以上は、善を爲し、惡を避くる自由を有するものにて、犯罪行爲の處罰せらるるは、この自由意思の發動なるによりてなり。「自由意思」

**じいうしき 自由意識**【名】(哲)『英Consciousness of freedom』決意・選擇は自己より起り、自己以外の者によりて規定せらるるにあらずとの意識または感情。

**じいうしろん 自由意志論**【名】(哲)『英Libertarianism』自由意志の解釋上、意志を自律的のものとし、その活動に因果律の適用を拒む說。自由論。意志自由論。非定命論。非定道論。

**じいうしみん 自由移民**【名】殖民地に要する勞働が、勞働者の自由意志に依りて供給せらるること。(强制移民に對して)

**じいうえいげう 自由營業**【名】(法)法律の禁止なく、又は官廳の許可を得ずして、何人も營み得る營業。現今營業の多くは、皆これに屬す。

**じいうたうきう 自由討究**【名】從來の習慣又は政治・宗教などの束縛を受けずして、自由自在に眞理を研究すること。自由研究。

**じいうたん 紫遊丹**【名】古の丹藥の一。

**じいうち 私有地**【名】■私有の土地。■(法)人民の所有に係る田畑・宅地など。(明治初年の名稱にて、同七年に民有地と改稱せらる)

**じいうてきざいくわ 自由的財貨**【名】(經)『英Free goods』勞力又は報酬を要せずして、使用又は占有し得る財貨。日光・空氣等の如く、或場合の外は、勞力・報酬を要せざるものと、時と處とに依りて、勞力・報酬を要するもの。例へば土地の如きものとの別あり。自由財貨。

**じいうてきらうどう 自由的勞働**【名】(經)『英Free-labour』勞働者が自己の意思に從ひて、自由に勞働すること。自由勞働。(不自由的勞働に對して)

**じいうてつだう 私有鐵道**【名】私人の經營せる鐵道。(國有鐵道に對して)

**じいうど 自由度**【名】(化)『英Degree of freedom』物質が溫度・壓力等の變化に拘らず、同一の相(ソウ)を保ちて變化せざる程度。

**じいうどかう 自由渡航**【名】制限束縛を少しも受けずして、任意に海外に航し得ること。(制限渡航に對して)

**じいうとし 自由都市**【名】じいうしかう 自由市府)に同じ。

**じいうはいげふ 自由廢業**【名】藝・娼妓が、その雇主との契約年限中に拘らず、藝・娼業に屆け出でて、任意に廢業すること。

**じいうはうにん 自由放任**【名】■制限又は拘束を設けることなく、思のままに任すること。■(經)國家が、國民の經濟的活動に對して、毫も保護・干涉をなさず、個人





中世、伊太利及び獨逸の、市府の商業上の富によりて、貴族・僧侶の束縛を受けず、獨立の政治を行ひしもの。伊太利のベニス(Venice)・ゼノア(Genoa)・フロオレンス(Florence)・獨逸のリュウベック(Lübeck)・ハンブルヒ(Hamburg)・ブレエメン(Bremen)など有名なりき。自由市。自由都市。

**じいうしんしようこ 自由心證**【名】(法)自己の理解力を以て事實を推理し、これを眞實なりと認識する主觀的作用。(制限證據主義に對して)

**じいうしんしようしゆぎ 自由心證主義**【名】(法)裁判に必要なる事實の認定に關しその證據の取捨及び判斷官の自由なる心證に一任する主義。(制限證據主義に對して)

**じいうしゆき 自由主義**【名】■世より聖肘拘束を受けざらんとする主義。■國民の自由を、政治上に擴張せんとする主義。

**じいうしゆぎう 自由鑄造**【名】(經)『英Free coinage』■(經)自由貿易又は自由放任の主義。■(法)貨幣鑄造制度の一。地金を造幣局に提出して、本位貨幣の鑄造を請ふ者ある時、何等の制限なく、その地金の價格に相當する貨幣を交附すること。(制限鑄造に對して)

**じいうしよ 事由書**【名】事由を記したる書面。事柄を認めたる書面。

**じいうしよくみんち 私有殖民地**私有植民地)【名】■その土地の所有權を私人に與ふる殖民地。■私人の經營する殖民地。

**じいうしよとく 自由所得**【名】(經)『獨Freies Einkommen』『牧入者の自由意思を以て處分し得る所得の義』純所得の中より、生計費を控除せる殘額。(不自由所得に對して)

**じいうしせつりつしゆぎ 自由設立主義**【名】(法)法人の設立に關して、設立者の自由意志に依りて設立するを、法律の特許、行政廳の免許、法定の準則等に依るを要せずとする說。

**じいうしせんぱく 自由船舶**【名】(法)『英Free ship』戰時國際法上、中立性を有し、交戰國にて捕獲するを得ざる船舶。

**じいうたり 自由黨**【名】明治三十年に板垣退助等首唱し、もとの愛國社を解きて、設けたる政黨。佛蘭西流の政論を鼓吹し、民權の擴張を政綱とし、同三十一年に進歩黨と合同して、憲政黨となりしが、同三十九年更に分裂して、政友會となれり。

**じいうちう 自由貿易港**【名】(法)『英Free port』■(經)自由貿易又は輸出入に對して、關稅を課せず、また貨物の加工・包裝等をなすも、稅關において何等の干涉をなさざる港。自由港。(保護貿易港に對して)

**じいうぼうえきかう 自由貿易港**【名】『英Free port』■(經)自由貿易を主要とする主義。(保護貿易主義に對して)

**じいうほけん 自由保險**【名】加入するとせざるとは、一に加入者の任意なる保險。保險契約は、すべてこれに屬す。

**じいうみん 自由民**【名】正當の行爲により、自己の權利を自由に行使し得る人民。

**じいうゆしつつ 自由輸出**【名】(經)『輸の字の音、正しくはしゆ』國家が制限又は拘束を設けず、自由に貨物を輸出せしむること。

**じいうゆにふ 自由輸入**【名】(經)『輸入を課せず、又は輸入の入稅を課するも、他に何等の拘束を設けず、自由に貨物を輸入せしむること。

**じいうらうどう 自由勞働**【名】(經)『英Free labour』(法)人律にて定むるも、憲法上自由なる事項、即ち立法事項又は大權事項ならざる事項。例へば貨幣の鑄造・度量衡の制定・國境の變更・營業の自由など。法令共同事項。

**じいうりつばふ 自由立法事項**【名】(法)法律にて定むるも、命令にて定むるも、憲法上自由なる事項、即ち立法事項又は大權事項ならざる事項。例へば貨幣の鑄造・度量衡の制定・國境の變更・營業の自由など。法令共同事項。

**じいうれんあい 自由戀愛**【名】■個人の私有する「森林。

**じいうろん 自由論**【名】(哲)『英Free-love』男女相愛して、しかも結婚の束縛なく、扶養の義務なきこと。

**じいうろん 自由論**【名】(哲)じいうしろん(自由意志論)に同じ。

**じいか 詩歌**【名】じか(詩歌)の音便。

**じいかあはせ 詩歌合**【名】歌合に倣ひ、詩と歌とを左右に相對せしめて、優劣を判ずる會。樣後撰・江上春望「いくの題にて、詩歌を合せられ侍りしついでに」「菊風」元久の頃、詩に歌を合はせられしも」

**じいかう 至孝**【名】じかう(至孝)の音便。

**じいがく 弑逆**【名】じがゆく(弑逆)の音便。

**じいきよく 侍醫局**【名】■明治十九年に宮内省に置かれし局。診候及び宮中衛生の事を掌りしところ。長官・侍醫・醫員・藥劑師等の職員を置く。■明治四十一年一月以前に於ける侍醫寮の稱。

**じいくく 慈育**【名】いつくしみて養ふこと。

**じいくく 至極**【名】じごく(至極)の音便。

**じいくく 慈室**【名】慈室町・至極殿梁の床の上には」

**じいし 慈**【名】じんし(慈)に同じ。

**じいじい 四時**【名】じし(四時)の音便。

**じいじい**【感】しいの重言。心中萬年草「これしいしいと袖を引く」

**じいじえすしきたんる C G S 式單位**【名】(理)『C.G.S.は佛Centimètre-Gramme-Seconde の首字の略』單位制の一。其本單位たる長さ・質量・時間を表はすに、それに加ふ。自由美術。純正美術。調粹藝術に對して)

**じいじげきちやう 自由劇場**【名】佛Théâtre libre』藝術の自由を主とし、利益又は演出法等の關係上、一般の劇場に於て公演する不適當なる作を、自由に演出せんとする組織の劇場。西曆第十九紀の後期に佛蘭西のアントアヌ(A.Antoine)これを創む。我が國にては、明治四十二年小山内(ヲサ)薫・市川左團次等の試みしを始とす。

**じいけつこん 自由結婚**【名】■男女とも、父母・兄弟・後見人等の承諾を得ず、相互の合意によりて結婚すること。■できあひ・くっつき。野合。

**じいけん 自由權**【名】(法)『英Freiheitsrechte』■人權の一。不法に、その身體の自由を害せられざる各人の權利。■公權の一。所定の法規に依る外は、國家の干涉を受けざる個人の權利、即ち居住・移轉の自由・信教の自由・信書祕密の自由等の類。

**じいけんきう 自由研究**【名】じいうたうきう(自由討究)に同じ。

**じいけんぱふ 自由憲法**【名】(法)なんけんぱふ(欽憲法)に同じ。(固定憲法に對して)

**じいさい 自由財**【名】(經)次條に同じ。

**じいさいくわ 自由財貨**【名】(經)じいうきさいくわ(自由的財貨)に同じ。

**じいさいさん 私有財産**【名】一個人又は私立團體の所有する財産。(公有財産に對して)

**じいさいさんせい 私有財産制**【名】(法)私人の所有權を認ずる制度。

**じいし 自由市**【名】『英Free city 又Free town』じいうしか(自由市府)に同じ。

**じいし 自由詩**【名】(文)『英Free poetry 佛Vers libres』形式の束縛を脫し、内心の動くがままにみづから形式を作る詩。

**じいしさう 自由思想**【名】自由の活動を主要とする思想。自由の範圍を擴張せんとする思想。

**じいさんまい 自由三昧**【名】勝手氣ままなること。勝手しはうだい。

**じいしふ 自由市府**【名】『英Free city』

ぞれ任意の單位を用ふるは煩しきを以て、長さには サンチメエトル、質量には グラム、時間には 秒を以て表はす式。理論上の計算に用ふる諸量の單位は、すべて、この三種の基本單位より適當に組立つべきものとす。しゑじいえす法。

**しいじいえすはふ** CGS法 【名】前條に同じ。

**じいしゅもんもん** 字字紋紋 【名】文字と繪畫〔幼兒の語〕

**じ·いしき** 自意識 【名】〔哲〕『英Self-consciousness』心理上、自己は何を意識するかを知る意識。自己自己の心の狀態を反省すること。これを論理・宗教の上に用ふる時は、自覺と同義に歸す。自識。自己意識。

**し·いしくわい** 市醫師會 【名】一市内に於ける醫師により組織せられし醫師會。

**しい·じん** 西淨 【名】せいちん(西淨)に同じ。

**しい·じんく** (英Shendling) 【名】船底の腐蝕し、又はこれに海草の附着するを防ぐために、水線以下を洗き鋼又は黃銅板又は木板などにて包被すること。

**し·いしゅ** 旨趣 【名】〔文〕『しいは狩の字の音しの音便』君父を殺す。

**しいす** 弑す 【動伊變他】『しいは狩の字の音便』君父を殺す。

**しいそお** (英Sheaf) 【名】萬年筆などを入るる筒。

**しいそ·ぎ** 細長き板を中央の凹に載せ、その兩端に一人づつ相對して跨り、かはるがはる力を込めて壓すれば、一方は上り一方は下るを、繰返して行ふ遊戯。天秤あそび。ぺたんこ。

**しいだす** 爲出す・仕出す 【動四他】 ■なしいだす。つくりいだす。しいづ。十訓、我れとしいだしつる事は、いかにも、くやしきかた多かりなん」

**しいちはん** 四一半 【名】雙六(すごろく)より轉じたる一種の博奕(ばくえき)。四一半錢。東鑑「以二田地一爲二博奕賭一事……大宮三郎盛員與二豐島又太郎時光一相論武藏國豐島庄大食名(大宮有忠打)四一半事起也」

**しいちはん·うち** 四一半打 【名】四一半を打つ人。東鑑、能盛惡黨並四一半打」

**しいちはんせん** 四一半錢 【名】しいちはん(四一半)に同じ。東鑑、雙六者、於侍者可被二許之一、至三下萬者一、永可令二停止之一、四一半錢目勝以下、種種品難、不論二上下一、一向可被二禁制一」

**しいつ** (英Blind) 【名】じいさに同じ。

**し·いづ** 爲出づ・仕出づ 【動下二他】しいだす(爲出す)に同じ。〔古語〕 源氏、しいでたるわざ、いひいでたることの中に」

**しいと** (英Bliss) 【名】しきふ(敷布)に同じ。

**しいとう** 鞭 【名】牛馬を使役する時の掛聲。進め、促すには、しい、止むるには、どうといふ。

**しいとく** 至德 【名】しとく(至德)の音便。

**しいね** 羊蹄 【名】(植)ぎしぎし(羊蹄)に同じ。

**じい·のかみ** 侍醫頭 【名】侍醫寮の長官。勅任官にして、寮務を掌理し、侍醫を兼ねるもの。

**じいはり** 鞭 【名】こはりに同じ。

**しいぶ** 私邑 【名】一個人の領地。

**しいぶ** (英Bleeve) 【名】海底電線布設船の綱(ぶ)、又は鰹(ぶ)に取附けたる大なる鐵車。

**じいは** 侍醫補 【名】侍醫寮の職員。侍醫を助くる奏任官。侍醫の定員内において置かる。

**じいめん·とう** ジイメン瓷 (英Siemen) 【名】瓦斯燈の一種。燃燒產物を室外に導く裝置を施したるもの。

**しいん** 子音 【名】〔語〕■父音と母音との配合によりて、成れる音。即ち、五十音中、「あ、いう、え、お」の五母音を除きたるもの。音節・熟音。 ■ふいん(父音)に同じ。

**しいん** 私印 【名】一私人の用ふる印形。かいん。(官印・公印等に對して)

**しいん** 市隱 【名】『答客の劉參軍に「隱之爲道、朝亦可隱、市亦可隱、隱初在二我、不一在二於物一」とあるに本づく』山林などに隱ることなく、市中に住みて、隱者となること。「大隱は市に隱る」參照。

**しいん** 資蔭 【名】父祖の勳功のお蔭にて、官吏となること。おんね。蔭位。參照。

**しいん** (英Bacon) 【名】光背。堤面(ぢめん)。

**じいん** 寺印 【名】寺院の印章。寺例。

**じ·いん** 自印 【名】自己の印章。

**じ·いん** 自因 【名】〔哲〕じこいん(自己原因)に同じ。

**しいん·ぎさう** 私印僞造 【名】〔法〕他人の印章を僞造すること。

**しいんぎさう·ざい** 私印僞造罪 【名】〔法〕行使の目的にて、他人の印章、若しくは署名を僞造し、又は他人の印章若くは署名を不正に使用し、又は僞造の印章、又は署名を使用せしに依りて成立する罪。

**しいん·しよくぶつ** 嗜陰植物 【名】(植)『英Shade plants』陰濕の地を好む植物の總稱。羊齒(ぢ)植物の多くは、これに屬す。(嗜光植物に對して)

**しいん·ぞうよ** 死因增與 【名】〔法〕附與者が死亡せしに因りて、贈力を生ずる贈與。遺贈の規定に從ふものとす。

**しいん·たうよう** 私印盜用 【名】〔法〕他人の印章を盜捺して、不正に使用すること。

**じ·いん·ほふ·しんわう** 慈胤法親王 【名】(人)後鳥羽天皇第十三の皇子。淸宮・常修院宮、また梶井宮といふ。天台の座主。元祿十二年薨ず。年八十二。

**しいんり** 紫隱里 【名】横井也有の庵名。紫草・けふの無駄定は、紫隱里の捻にして」

**しいら** 鮮・勒魚・鰯・金山・寄魚・鬼頭刀 【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。南海に產し、大さ二三尺に至る。頭、方形にて、身は扁く、色は背部青黑色にして紫色の光輝あり。且つ時要色の斑點散在し、腹部は銀白色に微黃を帶ぶ。脊鰭は頭上より、腹鰭は體の中央下部より起りて、共に尾鰭の附近に達す。皮厚く、肉白し。群居を好み、一群、萬を以て數ふべしと。まんびき、とうやく、ひうを、にんさく、こづら。ひいを。

(らいし)

**しいる** 仕入る 【動下二他】商人が、輸賣の目的にて、生產者又は卸賣商より、商品を買入る。

**しいれ** 仕入 【名】仕入るること。商品の元仕込。

**じ·いれう** 侍醫寮 【名】宮内省の被管。頭(ぢ)一人(勅任)、主事三人(奏任)、侍醫二十五人(判任)、藥劑師又は藥任)、侍醫補(奏任)、醫員十人(判任)、藥劑師長一人(奏任)、藥劑師三人(奏任)、藥劑員八人(判任)の職員ありて、拜診・進藥・調劑及び衞生に關する事務を掌る。じいきそく(侍醫局)に參照。

**しいれ·かがり** 仕入掛 【名】しいれかた(仕入方)に同じ。

**しいれ·がき** 仕入書 【名】商品の仕入に關する事項を記載せる書面。

**しいれ·かた** 仕入方 【名】商店にて、商品の仕入を擔當する者。しいれがかり。

**しいれ·げんか** 仕入元價 【名】かひいれねだん(買入値段)に同じ。

**しいれ·こさく** 仕入小作 【名】〔農〕我が國の小作法の一。地主より肥料その他の必要品を、小作人に給するもの。

**しいれ·ち** 仕入地 【名】商品を仕入れし地。

**しいれ·ちやう** 仕入帳 【名】こやうにんしいれちやう(商品仕入帳)に同じ。

**しいれ·ねだん** 仕入値段 【名】かひいれねだん(買入値段)に同じ。

**しいれ·ひん** 仕入品 【名】次條(二)に同じ。

**しいれ·もの** 仕入物 【名】■仕入れたる商品、買入品。仕入物。 ■出來あはせの粗惡なる品。

**しいろ** 【名】〔動〕じいり(鰯)の轉訛。

**じ·わり** 【名】じいはり(主)に同じ。

**じ·ん** 主 【名】しゅう(主)に同じ。其、いさきかしうにものいはせぬこそ美ましけれ」

**しう** 秀 【名】■すぐれたること。ひいでたること。 ■稻・麥などの穗。

**しう** 醜 【名】■みにくきこと。醜惡。 ■悲しき所爲。缺點。 ■はぢ。汚辱。その醜を忘る 【句】愛しては、その醜を忘るを見よ。

**しう** 州 【名】■くに。 ■支那の行政區劃の一。例へば、郡・縣の上に位す。 ■『英State又Province』獨米諸國の行政區劃の一。例へ





ば亞米利加合衆國のカリフォルニヤ州、露西亞の沿海州など。

**しう** 周 【名】■めぐり。まはり。 ■(數)『英Period』直線形の境界線の長さ、また多角形の各邊の總和。 ■支那の國號の一。武王を祖とし、殷に矢いで起り、三十七王、八百六十七年(西曆前一一二二年より同二五六年まで)にして亡ぶ。 ■こうしう(後周)を見よ。

**しう** 週 【名】■日・月・火・水・木・金・土の七曜目の總稱。 ■七日間の稱。

**しう** 洲 【名】〔地〕■す(洲)に同じ。 ■地球上の大陸を分ちたる名稱。こだいしう(五大洲)參照。

**しう** 岫 【名】■山にある穴。いはあな。ほら。くき。 ■山のいただき。峰。

**しう** 囚 【名】宰令に囚はること、又その人。とらはれ人。めしうど。

**しう** 繡 【名】ぬひとり。ぬひもやう。

**しう** 臭 【名】■にほひ。かほり。 ■惡しきにほひ。くさみ。 ■あしき名聲。

**しう** 羞 【名】はにかむこと。羞恥。

**しう** 四有 【名】〔佛〕『有は、五蘊の色身の、中陰を經て、因果酬報し、輪轉して息まざる意』生有(しやう)とて、一念の心識、中陰身(しんぢ)の生起すること、本有とて、五蘊の色身已生の後、未死の前において、業報(ごう)の色身、中有の前において、一時に壞滅すること、中有とて、已死の後、未生(ぢ)の前において、心識の母胎に託せざることとの併稱。

**しう** 死有 【名】〔佛〕前條を見よ。

**しう** 絲雨 【名】絲の如き雨。霧の如き雨。さざめ。ぬかあめ。細雨。

**しう** 積雨 【名】せきう(積雨)を見よ。

**しう** 紫芋 【名】(植)たうのいも(唐芋)に同じ。

**しう** 千羽 【名】〔人〕支那列仙傳中の人物。嘗て玉を携へて河を渡りしに、鮫に妨げられしかば、これを斬りて、河神を驚かしたりといふ。

**しう** 爲得 【動下二自】爲し得、しおほす。しとぐ。 竹取、翁、しえたりとのたまひて」

**しう** 州 【接尾】■國名を支那風に略していふ時附くる語。「上州」「薩州」 ■人名を國名めかして呼ぶ時に附くる語。〔俚語〕「源州、暮方より無常心になりて」 鳥羽十八三郎、船州いざ言問はん、官尾の松はとうに消きたか」

**しう** 周 【助數】或地域の外延をめぐる度數。「公園を一周す」

**しう** 週 【助數】しうかん(週間)に同じ。「一週に二回の發行」

**じう** 獸 【名】けもの(獸)に同じ。

獸を逐ふ者、目に太山を見ず 【句】「淮南子の說林訓に「逐二獸者目不二見一太山一」とあり見」「應追ふ者は山を見ず」に同じ。〔諺語〕

**じう** 柔 【名】やはらかきこと。力よわきこと。

柔も亦茹(じよ)はす、剛も亦吐かず 【句】『詩經大雅の烝民篇に出づ』弱きとて侮らず、强きとて怖れず。〔諺語〕

柔能く剛を制す 【句】『三略に「軍讖曰、柔能制剛、弱能制强」とあるに本づく』おとなしき者は、却りて强き者に勝つ。〔諺語〕

**じう** 時雨 【名】■ほどよき時に降る雨。 ■しぐれ・時雨)に同じ。

時雨の化 【句】『孟子盡心の章に「君子如二時雨化之者一」とあるに本づく』仁君の教化を、時雨の萬物を成育するに譬へていふ語。

仰いで時雨の化に沾(うるほ)ふ 【句】師に對して、學業の成るを謝する義。

**じう** 滋雨 【名】程よく物をうるほす雨。

**じう** 慈烏 【名】〔動〕『烏は反哺の孝を爲すといふによりていふ。 はんぷく(反哺)を見よ』からす(烏)の美稱。

**しう·あい** 湫隘 【名】地面低くして狹きこと、又その物。

**しう·あく** 醜惡 【名】みにくく、よからぬ

**しう·あふ** 周亞父 【名】〔人〕支那漢の武將。勃の次子。軍紀嚴肅なる假さず、文帝大いに之を賞す。景帝の時功を以て丞相に至る。のち誣告せられて獄に下り、遂に食はずして死す。

**しう·い** 醜夷 【名】みにくきえびす。しこ

**しう·い** 繡衣 【名】ぬひとりのある衣服。

**しう·い** 秋意 【名】秋の氣もち。秋の感じ。

**しう·い** 愁意 【名】ものおもひの心。うれふる心。うれひ。

**じう·い** 獸醫 【名】■獸類の疾病を治療する醫師。 ■陸軍獸醫部の士官部の事務を掌るもの。明治十八年に設けられ、一等より三等に至る。

**しう·いう** 舟遊 【名】ふなあそび。

**しう·いう** 周遊 【名】諸處をめぐりて遊ぶこと。回遊。

**しう·いう·くわん** 脩猷館 【名】筑前國の舊福岡藩の學校。天明四年藩主黑田齊隆(なりたか)の創立、明治三年廢せらる。

**じう·いがく** 獸醫學 【名】獸畜の衞生治病・繁殖等を研究する學問。

**じう·いがくかう** 獸醫學校 【名】■獸醫學を教授する學校。 ■りくぐんじういがくかう(陸軍獸醫學校)の略。

**じう·いがくし** 獸醫學士 【名】大學農學部の獸醫科を卒業したる人の稱號。

**じう·いがくはくし** 獸醫學博士 【名】博士の一。獸醫學の識典を極めたる者に授くるもの。

**じう·いかん** 獸醫監 【名】■明治十八年に置きたる陸軍獸醫部の上長官。 ■りくぐんじういかん(陸軍獸醫監)の略。

**じう·いけふ** 獸醫業 【名】獸醫たる業務。

**じう·いせき** 獸醫籍 【名】農商務省に備へ附けて、獸醫免狀を有する者の氏名・本籍を登錄する帳簿。

**しう·いつ** 秀逸 【名】■すぐれてあること、又その物。 ■(文)かんきん(感吟)四に同じ。

**じう·いぶ** 獸醫部 【名】■陸軍の馬醫部に代りて、明治十八年設けられたる一部局。馬匹及び軍人の食料に供する諸獸の治療を掌りし所。獸醫監・獸醫・看馬長などの職員ありき。 ■りくぐんじういぶ(陸軍獸醫部)の略。

**しう·いん** 收陰 【名】しようおさせい(織女星)に同じ。

**しう·いん** 秋陰 【名】秋のくもり。

**じう·いん·めんきよしよう** 獸醫免許證 【名】臺灣にて、臺灣總督より獸醫に下附する免許證。

**じう·いん·めんじやう** 獸醫免狀 【名】農商務大臣が獸醫に下附する免許狀。

**しう·う** 驟雨 【名】にはかに降りくる雨。にはかあめ。ゆふだち。

**しう·う** 秋雨 【名】秋降る雨。あきさめ。

**しう·うつ** 愁鬱 【名】うれひて氣のふさぐこと。憂鬱。

**しう·うん** 秋雲 【名】秋空の雲。

**しう·うん** 愁雲 【名】恐の氣の滿ちこもること。うれへのくも。

**しう·えい** 修營 【名】家などを造り營むこと。

**しう·えい** 秀英 【名】すぐれぬきんでたること。

**しう·えき** 收益 【名】■利益を收め取ること。利益として收入又は法定の金錢。 ■(法)物より生ずる天然又は法定の果實の收取。例へば樹木の果實を收取し、家賃を取得する類。

**しう·えき** 收益遞減 【句】〔經〕『收穫遞減に同じ。

**しう·えき** 周易 【名】■(易)夏(か)の易なる連山と殷の易なる歸藏とに別ちていふ。 ■支那周の代の卜筮。 ■(書)『前記の易を記したるものなる によりていふ』えききやう(易經)に同じ。

**しう·えき** 就役 【名】四人が苦役に服する

**しう·えき** 囚役 【名】四人の苦役。

**しう·えき** 獸疫 【名】『英Animal plague』■家畜に發する流行病。 ■獸疫豫防法にて、牛・馬・羊・豚・犬の流行病。

**しう·えき·かかく** 收益價格 【名】〔經〕『英Revenue value』經濟上の財貨が間接に利益を生ずる場合の價格(使用價格に對して)

**じう·えき·けいさつ** 獸疫警察 【名】〔法〕衞生警察の一。獸疫の防止を目的とするもの。

**じう·えき·けつ·せい·せいさうしよ** 獸疫血淸製造所 【名】臺灣總督府殖產局に附屬し、

獣役の血清を製造することを掌る所。

**しうえき-さいさん** 収益財産【名】〔法〕さいせいさいさん(財政財産)に同じ。

**しうえき-ぜい** 収益税【名】〔経〕収益その物又は収益を生ずる物件に課する税。地租・家屋税・営業税はその主なるものなり。牧入税。

**じうえき-てうさじょ** 獣疫調査所【名】農商務省農務局の一部をなし、家畜に關する疾病の調査及び試験、並びに血清等の製造・配附に關する事項を掌る所。

**しうえふ-わかしふ** 秀葉和歌集【名】〔書〕烏丸資慶(ゐ)の歌集。附錄に、三行記とて、高野の紀行文あり。二卷。

**しうおん** 嗽音【名】〔語〕しびやんさに同じ。

**しうおんさい** 酬恩祭【名】〔基〕しゅおんさい(謝恩祭)に同じ。

**しうか** 秀歌【名】秀逸なる和歌。よきうた。平家「秀歌と覺しきを、百餘首書き集められたりける卷物を」

**しうか** 秋稼【名】秋のとりいれ。あきをさめ。

**しうが** 周雅【名】〔文〕詩經に載せたる大雅と小雅との總稱。

**しうかい** 州界【名】くにざかひ。州境。國「界」。

**しうかいだうくわ** 秋海棠科【名】〔植〕秋海棠科に屬する多年生の草。庭園に植ゑて、花を賞す。春、地下莖より芽生じて、高さ二尺ほどに達し、枝を分ち、葉莖、共に柔軟多葉にして、莖枝の節部は赤色を帶び、葉は不正形の卵狀にして、先端鋭く光る。秋、淡紅色なる花を開き、翌年に実那より渡來せりといふ。やうらくさう。べにいとばな。

(うだいかうし)

**しうかいだうくわ** 秋海棠科【名】〔植〕顯花植物の一科。草本又は多少の木質を帶び多葉なり。熱帶における濕潤諸地に廣く分布す。秋海棠・ベコニヤ等、これに屬す。

**しうかう** 酒肴【名】しゅかう(酒肴)に同じ。

**しうかう** 舟行【名】船にて行くこと。

**しうかう** 舟航【名】ふなたび。ふなぢ。航海。海路。

**しうかう** 周航【名】ある地點を一巡航すること。

**しうかう** 醜行【名】みにくき所行。恥づべきおこなひ。

**しうかう** 醜交【名】男女のみだらなる交際。

**しうかう** 修好・修交【名】〔政〕修めただす義〕國と國と親しく交際すること。國際間の交誼を養くすること。

**しうかう** 修行【名】をさめおこなふこと。執行すること。身に慣(ゐ)行ふこと。しゅぎやう。

**しうかう** 雛校【名】他と對照して校(ゐ)へ正すこと。

**しうかう** 周耕【名】〔人〕大和國多武峯(ゐ)に住みし畫僧。雪舟に學び、水墨の山水、人物を巧にせり。永正頃の人。

**しうかう** 秋郊【名】秋の郊野。

**しうがう** 秋毫【名】秋に至りて脱けかはりたる獣の毛の、末細く鋭きもの。秋毫の末【句】〔孟子の梁惠王上篇に「明是」以察二秋毫之末一とあるに本づく〕前條に同じ。

**じうかう** 獣行【名】人としてあるまじき行爲。獣慾を逞くする所行。

**じうかう-てうやく** 修交條約【名】〔法〕〔佛 Traité d'amitié〕未だ完全に國際法の原則を守らざる國と交際するために締結する條約。

**じうかう-がう** 柔剛【名】がうじう(剛柔)に同じ。

**じうかく** 收額【名】牧入の金額。といれだか。みいりだか。

**しうがく** 就學【名】學校に入り又は師に就きて、學問を始むること。

**しうがく** 修學【名】學問をならふこと。

**じうかく** 獣革【名】獣の皮のなめしたるもの。なめしがは。

**しうがくぎむ** 就學義務【名】學齢に達せる兒童を、保護者が小學校に入學せしむる義務。

**しうがく-じどう** 就學兒童【名】小學教育を受けをる學齢兒童。

**しうがく-じょうしょ** 修學證書【名】或學術を修了したる者に、該學校より交附する證書。

**しうがく-せい** 修學生【名】〔佛〕修學せる生徒。〔佛〕東寺の住僧。

**しうがく-ち** 就學地【名】就學せる土地。

**しうがく-りふかう** 修學旅行【名】學問の實地研究のため、教師が生徒一同を伴ひて催す旅行。

**しうがぶ** 收合【名】をさめあはすること。あつめあはすること。

**しうかん** 收監【名】〔法〕監獄に拘禁すること。ひとやに入るること。

**しうかん** 醜漢【名】醜惡なる男子。〔物〕醜行をなす男子。

**しうかん** 週刊【名】一週日に一回の刊行。

**しうかん** 週間【名】一週日の間。

**しうかん** 週間【助數】週を單位として、期間を示すに用ふる語。週「三週間」

**しうがん** 秋雁【名】秋わたり來る雁。

**しうがん** 岫巖【名】〔地〕支那・瀋州盛京省の南部、新開嶺の西にある地。日清・日露の兩役によりて著る。又、大理石に富み、岫巖石と稱し、諸種の裝飾品を細工す。

**しうかん-しんぶん** 週刊新聞【名】各一週間に一回づゝ發行する新聞。

**しうかん-じやう** 收監狀【名】〔法〕拘事より收監を命ずる文書。

**しうかん-せき** 岫巖石【名】〔鑛〕しうがん(岫巖)を見よ。

**しうき** 週期【名】ひとまはりの時期。一の現象の起る場合の、その一定の時間ごとに、同例へば振動體の一振動に要する時間、一の一定の時間を週期といふ。

**しうき-うんどう** 週期運動【名】〔理〕〔英 Periodic motion〕一定の時間を經れば、常に同一の狀態に復歸する連續的の運動。その一定の時間を週期といふ。

**しうき-えんしふ** 秋季演習【名】〔兵〕秋季行はるる軍事上の各種の演習。中にも機動の終。

**しうきうんどう** 週期運動參照。

**しうき** 周忌【名】〔佛〕〔梵語〕〔英 Period〕自殺數が、一定の値を增すことに、それと等しき値を函數が取る時、その自殺數の一定の增量。〔八十日〕

**しうき** 周忌【名】くわいき(回忌)に同じ。新古今「暮秋法親王かくれ侍りて、周忌のはてに、慕所にまかりて」

**しうき** 臭氣【名】わるき臭。くさみ。惡臭。

**しうき** 秋氣【名】秋のけしき。秋のけはひ。

**しうき** 秋季【名】秋の末。

**しうき** 秋期【名】秋の時。

**しうき** 淒器【名】病人・老人などの、室内にて、小便を排泄するに用ふる器。しびん。

**しうき** 修技【名】技術ををさむること。

**しうき** 祝儀【名】〔祝の宇の音、正しくは贈る金錢又は品物の稱。ひきで物。〔は馬道に祝儀取らせて」

**しうぎ** 祝儀【名】〔祝の儀式。賀儀。〔祝儀として、心附。孕石「八十八駄の祝儀の石」〔句〕婚禮を行ふ家に、土地の風習として、近所の若者どもの投込む石。心中萬年草「二階の酒のしゅんだ頃、祝儀の石を打込んで」

**しうぎ** 祝儀を附ける【句】祝儀として定まりたることを行ふ。〔祝儀〕を與ふ。

**しうぎ** 祝儀を渡す【句】祝言をすます。心中萬年草「お梅がここへ用るならば、夫をしほに和睦して、祝儀を渡して下され」

**じうぎ** 獣行【名】人としてあるまじき行爲。獣慾を逞くする所行。

**じうかう-てうやく** 修交條約【名】〔法〕〔佛 Traité d'amitié〕未だ完全に國際法の原則を守らざる國と交際するために締結する條約。

**じうかう-がう** 柔剛【名】がうじう(剛柔)に同じ。

**じうかう-てうやく** 修交條約【名】〔法〕〔佛 Traité d'amitié〕未だ完全に國際法の原則を守らざる國と交際するために締結する條約。

**しうかく** 收額【名】牧入の金額。といれだか。みいりだか。

**しうがく** 就學【名】學校に入り又は師に就きて、學問を始むること。

**しうがく** 修學【名】學問をならふこと。

**じうかく** 獣革【名】獣の皮のなめしたるもの。なめしがは。

**しうがくぎむ** 就學義務【名】學齢に達せる兒童を、保護者が小學校に入學せしむる義務。

**しうがく-じどう** 就學兒童【名】小學教育を受けをる學齢兒童。

**しうがく-じょうしょ** 修學證書【名】或學術を修了したる者に、該學校より交附する證書。

**しうがく-せい** 修學生【名】〔佛〕修學せる生徒。〔佛〕東寺の住僧。

**しうがく-ち** 就學地【名】就學せる土地。

**しうがく-りふかう** 修學旅行【名】學問の實地研究のため、教師が生徒一同を伴ひて催す旅行。

**しうがぶ** 收合【名】をさめあはすること。あつめあはすること。

**しうかん** 收監【名】〔法〕監獄に拘禁すること。ひとやに入ること。

**しうかん** 醜漢【名】醜惡なる男子。〔物〕醜行をなす男子。

**しうかん** 週刊【名】一週日に一回の刊行。

**しうかん** 週間【名】一週日の間。

**しうかん** 週間【助數】週を單位として、期間を示すに用ふる語。週「三週間」

**しうがん** 秋雁【名】秋わたり來る雁。

**しうがん** 岫巖【名】〔地〕支那・瀋州盛京省の南部、新開嶺の西にある地。日清・日露の兩役によりて著る。又、大理石に富み、岫巖石と稱し、諸種の裝飾品を細工す。

**しうかん-しんぶん** 週刊新聞【名】各一週間に一回づゝ發行する新聞。

**しうかん-じやう** 收監狀【名】〔法〕拘事より收監を命ずる文書。

**しうかん-せき** 岫巖石【名】〔鑛〕しうがん(岫巖)を見よ。

**しうき** 週期【名】ひとまはりの時期。一の現象の起る場合の、その一定の時間ごとに、同例へば振動體の一振動に要する時間、一の一定の時間を週期といふ。

**しうき-うんどう** 週期運動【名】〔理〕〔英 Periodic motion〕一定の時間を經れば、常に同一の狀態に復歸する連續的の運動。その一定の時間を週期といふ。

**しうき-えんしふ** 秋季演習【名】〔兵〕秋季行はるる軍事上の各種の演習。中にも機動





演習をその主なるものとす。軍隊運用の能力を發達せしむるは、一にこの演習にありとす。

**しうき-かんすう** 周期函數【名】〔數〕〔英 Periodic function〕周期(二)の性質を有する函數。三角函數は、その正弦・餘弦・正割・餘割は2π の周期を有し、正切・餘切は π の周期を有するが故に、これに屬す。

**しうき-く** 秋菊【名】あきぎく(秋菊)に同じ。

**しうき-く** 蹴鞠【名】〔しうは蹴の字の音しゅくの訛〕けまり(蹴鞠)に同じ。

**蹴鞠の家**【名】蹴鞠を世業として、朝廷に仕へし諸家。飛鳥井・冷泉・難波・綾小路のごとき、これなり。

**蹴鞠の三神**【句】さんしん(三神)の條下を見よ。

**じうき-きく** 獣畜【名】〔獣類を畜(ゐ)ふと同樣に取扱ふ義、飼ち養ふ意〕ただ愛するのみにて、役使せぬこと。〔じうちく(獣畜)を見よ。

**しうき-くわうれいさい** 秋季皇靈祭【名】くわうれいさい(皇靈祭)を見よ。

**しうき-さとう** 祝儀座頭【名】德川時代に、町家に祝儀・不祝儀のある時、座頭ども、中には薄目明も交りて、綿服に見苦しき袴を著け、その家に赴きて、金錢を强請せしもの。おめでたさとう。〔紅葉「都花瓶」同じ〕盲人のその中でも、祝儀座頭は捻按や勾當なぞが賃金の催促に歩くゆゑ、意地の惡いものとはきけど」

**しうき-しんてんさい** 秋季神殿祭【名】しんてんさい(神殿祭)を見よ。

**しうぎ-じよ** 修技所【名】陸軍測量部に置き、陸地測量の技手を養成する所。

**しうき-すゐせい** 週期彗星【名】〔天〕〔英 Periodic comet〕一定の週期を以て、吾人の觀界内に復歸する彗星。すべて太陽の周圍に楕圓狀軌道を畫きて運行す。雙曲線狀の軌道を畫く彗星は永久に歸來することなし。

**しうぎ-ぢやうちん** 祝儀提燈【名】昔、劇場にて、舞見世興行の前、看板の出揃ふまで、木戸の右側の上窓に、吊出しし長き提燈。赤地にて、役者の定紋と名前とを記したり。

**しうき-きつ** 臭橘【名】〔植〕からたち。枸橘に同じ。

**しうき-ていりつ** 週期定律【名】〔化〕しうきりつ(週期律)に同じ。

**しうき-とめ** 臭氣止【名】便所その他惡臭ある處に撒布して、その臭氣を消すに用ふる、一種の藥品。アルボオス・片・鯛油等の類。防臭劑。

**しうき-ぶくさ** 祝儀紵紗【名】祝儀の贈物などにする時用ふる紵紗。色彩の華やかなるもの、又は目出度き圖樣あるものを用ふ。〔精進紵紗に對して〕

**しうきふ-てん** 嗚急田【名】〔急を救(ゐ)ふ田の義〕不輪租田の一。王朝時代、凶荒に窮する者を賑救するために、諸國に充て置きし田。

**しうぎ-ぼう** 祝儀棒【名】ほいたけぼうに同じ。

**しうき-きん** 就擒【名】とらへらるること。とりことなること。

**しうき-きん** 囚禁【名】とらへて禁獄すること。

**しうき-きん** 囚擒【名】とりこにすること。とらへらるること。

**しうき-きん** 收金【名】金を取入ること。「收入の金錢」

**しうき-きん** 繡衾【名】錦のふすま。ぬひとりの飾ある美しき夜著。

**しうき-ぶん** 鰍筋【名】鯨の腹腔・背部にある筋を、清水に浸して、脂油を去り、また粘膜を除きて吊下げ、下端に重き石を吊して、伸長せしめ、日に乾したるものゝその色、黄なると、赤褐なるとあり。我が國には、弓弦に使用し來りしが、支那にては、貴重の料理品として、食用に供す。鯨筋(ゐ)。

**しうき-きん** 秀吟【名】〔文〕かんきん(感吟)四に同じ。

**しうきん-はふ** 收銀法【名】鑛石又は鍰(ゐ)に含める銀分を抽收する湿式製煉法。沈澱法に屬す。

**しうき-やう** 州境【名】しうかい(州界)に同じ。

**じうき-ぎやう** 獣形【名】獣類の形象。

**しうき-ぎやう** 州界【名】しうかい(州界)に同じ。

**じうきぎやう-まん** 獣形幔【名】前條に同じ。

**しうきゆう** 秋宮【名】ちやうしうきゆう(長秋宮)の略。

**しうき-よ** 收去【名】とりさること。

**しうき-よう** 秋興【名】秋の感興。

**しうきよく-せい** 周極星【名】〔天〕〔英 Circumpolar stars〕恒見圏内に在りて、地平線の下に沒せずに、常に見ゆる星の總稱。極星。

**しうきりつ** 週期律【名】〔英 Periodic law〕〔化〕げんそしうきりつ(元素週期律)の略。反復的に繰返されて示す一定の規律。

**しうく** 秀句【名】詩歌などの中の、秀逸なる語句。〔秀逸なる詩歌。いひかけ。かるくち。すく。俳諧・御坊を経寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは、ほふしとこそ申さめといはれけり。いみじきしうくなりけり」 枕草紙秘年代記「中古、口合を秀句と改め、秀句を地口とあらたまる」

**しうく** 愁苦【名】うれひ。苦痛。

**しうくう** 秋空【名】あきのそら。秋天。

**しうく-がらかせき** 秀句傘【名】次條に同じ。

**しうく-だいみやう** 秀句大名【名】能(ゐ)の狂言の一。大名、秀句を巧にする者を抱へんとて、太郎冠者に命じて、諸もなき雑言を陳べし來らせ、秀句とて、諸もなき雑言を陳べし來らせ、感心したる樣子をなし、衣類も刀も、皆褒美に與へ、終に秀句は家いものぢやと獨語する事を作りしもの。

**しうぐん** 舟軍【名】ふないくさ。舟師。海軍。水師。

**しうぐん** 州郡【名】〔佛〕州と郡と。〔佛〕地方。

**しうくわ** 繡花【名】ぬひとりの花模樣。

**しうくわ** 秋果【名】秋に熟する果實。

**しうくわ** 愁花【名】〔植〕しうくわしよ(愁花)に同じ。

**しうくわ-あんもにうむ** 秋果【名】〔植〕かんくわ(柑果)に同じ。

**しうくわ-あんもにうむ** 臭化アンモニウム【名】〔化〕鹽類の一。アンモニヤに臭化水素酸を化合せしめ、もしくは臭素をやや過剰のアンモニヤ水に作用せしめて製する、無色の結晶或は白色の結晶性粉末。一・五分の水、一五〇分の酒精に溶解し、久しく空氣に接すれば、やや酸化して微黄色を帶ぶ。醫藥として、臭化カリウムと同樣の効を奏す。臭素あんもにうむ。ぶろおむあんもにうむ。臭素

**しうくわ-えん** 臭化鹽【名】〔化〕臭素と化合して生じたる鹽(ゐ)。

**しうくわ-かりうむ** 臭化カリウム【名】〔化〕臭素酸カリウム(英 Potassium bromide)〔化〕臭素酸カリウムを分解して得る。白色方形の結晶物。水に溶け易く、臭化鹽中、最も要用の品にして、臭化物を造る原料となり、また催眠・鎮痙等の目的にて、醫藥に用ひらる。臭素加里。臭素かりうむ。ぶろおむかりうむ。臭化ぼたしうむ。臭剝(ゐ)。

**しうくわ-ぎん** 臭化銀【名】〔化〕〔英 Silver bromide〕硝酸銀の溶液に臭化カリウムの溶液を加へて得る、帶黄白色の沈澱物。光線に遇へば變色する故、寫眞術の乾板に用ひらる。

**しうくわく** 收穫【名】作物を刈取りて收納すること。かりいれ。

**收穫遞減**【句】〔經〕〔英 Diminishing return〕土地の生産力には限度ありて、これを超ゆれば、肥本勞力を增加せず、却りて比例して增加せず、却りて比例上減少する傾あるものなりといふこと。アンモニヤに臭化水素酸を化合せしめ、もしくは臭素をやや過剰のアンモニヤ水に作用せしめて製する、無色の結晶

**しうくわく** 秋穫【名】秋になりて、作物を刈取ること。秋牧。

**しうくわく-き** 収穫期【名】牧穫の時期。とりいれどき。

**しうくわく-き** 収穫器【名】牧穫に用ふる農具。例へば稻扱(ヰキ)・萬石通(ばんごく)など。

**しうくわく-づき** 収穫月【名】〔天〕『英Harvest moon』北温帯以北において、秋分の頃、毎夕昏と同時刻に滿月の昇るを見るもの。地平線に對する黃道の傾斜最も少き時なるに因る。

**しうくわく-はいぶん-はふ** 収穫配分法【名】〔農〕地主は土地或は資本を出し、小作人は勞力或は資本を出して耕作し、一定の割合によって、糧生産・純生産を分配する法。分益農法。つくりわけ作分〻参照。

**しうくわくじよ** 蕚花序【名】〔植〕『縱Gonnsp』總狀花序の一種。禾本科植物の花穗の一部を構成する小花穗即ち小花群の稱。その外部は、二枚の顆(ぐわ)によりて被はる。蕚花。

**しうくわすいそ** 臭化水素【名】〔化〕『英Hydrogen bromide』鹽化水素に酷似し、刺戟性の臭氣を有する無色の氣體。燐と水とに臭素を作用せしめ、又は臭素と水素とを混じ、熱したる白金の上を通じて製す。極めて水に溶け易く、その水溶液は、酸性强く、鹽素に遇へば直ちに臭素を游離す。ぶろおむ水素酸。臭化水素酸。

**しうくわすいそさん** 臭化水素酸【名】〔化〕『英Hydrobromic acid』前條に同じ。

**しうくわ-そちうむ** 臭化ソヂウム（英Sodium bromide）【名】〔化〕鹽類の一。白色の結晶性粉末。製法、臭化カリウムに類し、一・二分の水、一〇分の酒精に溶解す。略藥に用ひて、臭化カリウムと同樣に神經を鎮靜する効あり。臭素なとりうむ。臭化そちうむ。ぶろおむなとりうむ。

**しうくわしぶつ** 臭化物【名】臭素と化合して生じたる物、即ち臭化ガリウム・臭化銀等の總稱。

**しうくわ-へいげつ** 羞花閉月【句】『その美貌に對して、花もはぢらひ、月もかくるとの義』婦人の容貌の極めて美なるに譬へていふ語。沈魚落雁。

**しうくわはたしうむ** 臭化ポタシウム（英Potassium bromide）【名】〔化〕しうくわかりうむ（臭化カリウム）に同じ。

**しうくわん** 秋官【名】『しうけい（秋刑）を見よ』裁判官。司法官。

**しうくわん** 州官【名】州を治むる官。地方官。

**しうくわん** 臭化メチル（英Methyl bromide）【名】〔化〕アルコルと燐とを混合したるものに、臭素を加へ、熱して得る液。無色にして、クロロホルムに似たる臭氣あり。

**しうけい** 收繫【名】獄屋に收容してつなぐこと。

**しうけい** 秋景【名】秋の景色。秋光。

**しうけい** 秋刑【名】『秋は草木の凋(ぢ)む時なるより、刑罰に譬ふ』しおき。刑罰。太平記「一人づつ大名に預けらる。その秋刑を待つほどに」

**しうけうくわん** 修教館【名】江戸幕府領内の學校の一。文政八年佐渡國相川歳間町に設け、明治六年廢學とす。

**しうけつ** 周闕【名】『闕はをはる義』一周年のをはり。一回忌。東鑑「迎二故幕下將軍周闕御忌營一」

**しうけつ** 秀傑【名】ひいでてすぐれたること、又その人。

**しうけつ** 飭潔・修潔【名】行をさまりて、潔白なること。

**しうげつ** 秋月【名】■秋の季節。■秋の月。

**しうげつ** 秋月【名】〔人〕畫伯。長門國の人。俗姓は高城、名は等觀。雪舟に學ぶ。永正・大永頃の人。

**しうけふ** 醜業【名】淫行を職業とすること。即ち淫賣の類。

**しうけふ** 就業【名】■仕事にとりかかること。■業を成就すること。

**しうけふ** 修業【名】學問・藝術を修め習ふこと。しゆげふ。

**しうけふ-くわん** 修業館【名】蒼龍岡藩の學校。安政六年に藩主松平乘謨(ノリ)江戸麻布に創建し、明治に至り、信濃國佐久郡田野口村に移し、のち廢す。

**しうけふ-しようしよ** 修業證書【名】或學術・技藝を修了したる者に付與する證書。

**しうけふ-ふ** 醜業婦【名】淫賣婦。ぢごく。

**しうけん** 州縣【名】州と縣と、又は地方。

**しうけん** 祝言【名】『祝の字の音、正しくはしゅく』■結婚の祝。婚禮。■祝言能の略。祝言の石打【句】「祝儀の石」に同じ。曾我五人兄弟「祝言の石打にことよせ、一人の兄を打殺さんといたすを、見ては居られず」

祝言の式【句】脇能(ワキ)なるべき「高砂」・「弓八幡」の類を、祝言として、最後に用ふる時の作法。

**しうけん** 酬恩【名】願掛の叶ひたる時、その奉謝のために參詣すること。かへりまうし。ぐわんほどき。

**じうけん-のう** 祝言能【名】武運を祈り、國家の泰平を祝ふ作意の謠曲。「岩船」・「猩猩」などの類。祝言・「江戸時代の語」

**しうこ** 秋季【名】秋季に入りしのち。

**しうこう** 收公【名】官府に取上ぐること。じゆこう。もつしゆ。ぼつしう。東鑑「河村三郎義秀、被二收二公河村郷輔一」曽我紀「末寺庄園及彼寺僧等私領、仰諸國之守護人、早可レ令二收公一」

**しうこう** 周公【名】〔人〕支那の政治家。周の文王の子。武王の弟。名は旦、武王を輔けて紂を滅し、魯に封ぜられ、成王を佐けて、禮樂を作し、康王立つや、また召公とこれを輔けて、文武の業を修む。周代の美績、多くはその經綸に成れり。

**しうこうし** 周興嗣【名】〔人〕支那南北朝時代の梁の文人。字は思纂。高祖武帝に用ひられて、給事中に至り、普通二年歿す。その撰に係るもの、皇帝實錄・皇德記・起居註・職儀等百餘卷、文集十卷あり。又、命を奉じて、王羲之書千字文に次韻し、今に行はるるところの千字文を作る。

**しうこく** 州國【名】くに。州。

**しうこく** 收獄【名】捕へて獄に入るること。投獄。

**しうこく** 囚獄【名】罪人を入れおく處。

**しうこくし** 囚獄司【名】■しゅごくし（囚獄司）に同じ。■明治二年刑部省中に設けられ、同四年後、司法省の所管となりし役所。正・權正大令史・權大令史・中令史・權中令史・少令史・權少令史の職員ありて、囚獄の事務を掌り、四年廢せられたり。

**しうさ** 收差【名】〔理〕『英Abstraction』光學機械において、光の東線の、一點に集らざる缺點のために、映象の鮮明を缺くこと。その主なるものは、色(ヰ)收差と、球面收差となり。

**しうさい** 秀才【名】■すぐれたる學才。才氣の秀でてあること。■古、支那にて、科舉の第一次試驗に及第せし者の稱號。官職を得る資格とはならず。科舉廢止後、高等小學の卒業者にこれを與ふることとなれり。雅稱を孝廉といふ。茂才。■我が國大寶令の制規にて、中古の大學・國學より送られし貢人と舉人との科試のために、定められし四科目中の一。博學高才の者を取り、品行方正にして、名行相副ふ者をこれに當て、その科試には、方略策二條を以って、しその出身者は、正八位上または正八位下に敍せられたり。然るに、天平二年文章(ヤウジン)得業生の置かれてより、後世に至るまで、これを稱し、令制の名義とは、やや趣を異にするに至れり。

**しうさい** 周歳【名】まる一年。滿一年。

**しうさい** 秋齋【名】〔人〕多田義俊の雅號。

**しうさい** 秋材【名】〔植〕木質部の一。秋の間へたる時期なるを以て、年輪中の細密なる部分を形成す。（春材に對して）

**しうさい-かんじ** 秋齋閒語【名】〔書〕多田義俊（秋齋）の隨筆。各種の考證を記したるもの。四卷。





**じうさい-せい** 秀才生【名】〔しゅんじ（俊士）を見よ。〕

**しうさう** 秋草【名】あきぐさ。

**しうさう** 秋霜【名】■あきのしも。■『霜のごとく光り輝くよりいふ』刀劍の異名。■刑罰の威嚴、又は志操・權威のおごそかなる譬。「瑶玉(ヨウ)秋霜」参照。「秋霜の威」

秋霜烈日【句】■秋の霜と夏の太陽と。■志操・權威のおごそかなる譬。

**しうさう** 周桑【名】〔地〕伊豫國十三郡の一。明治二十九年もとの周布(フ)・桑村二郡を合したるもの。

**しうざう** 繡像【名】ぬひとりにしたる佛像。繡織したる肖像。馬丈六・補像等・成。

**しうざう** 修造【名】つくろひ。修復。平造・大内は久しく修造せられざりしかば」

**しうさう** 收藏【名】■とりいれて收めおくこと。■秋の牧穫と、冬季その收穫物を藏め蓄ふることと。しま（四氣）参照。

**しうさく** 搜索【名】そうさく（搜索）に同じ。

**しうさく** 繡錯【名】■彩絲をまじへて刺繍すること。■入りまじへて文采を作ること。

**しうさふ** 周匝【名】■めぐりまはること。とりまくこと。■あまねく行きわたること。

**しうさん** 蓚酸【名】〔化〕『英Oxalic acid』有機酸の一。酢漿草(ヘビイ)・酸模(バイ)その他種種の植物に、酸性カリウム鹽又は結晶狀の蓚酸カルシウムとなりて含まれ、また砂糖脂肪、その他種種の有機物を硝酸に酸化する際に、屢生成す。工業上にては、銅屑を苛性ソオダにて分解して得たるものを、更に硫酸にて扱ひて製出し、また近來、蟻酸鹽より蓚酸鹽を製する法も用ひらる。有毒なる無色・柱狀の結晶物にして、硫酸を加へて熱すれば、炭酸ガスと酸化炭素とに分解す。往往蓚鹽を磨くに用ひられ、その鹽類も有毒にして、色素の製造、インキ消に用ひらる。

**しうさん** 秋蠶【名】秋に養ふ蠶。あきご。

**しうさん** 秋山【名】秋季の山。あきやま。

**じうさん** 蓚酸【名】たんにん（單寒）に同じ。

**しうさん-えん** 蓚酸鹽【名】〔化〕蓚酸を含める鹽類。蓚酸カルシウム中性蓚酸カリウム・蓚酸第一鐵カリウム・蓚酸第二鐵カリウム・蓚酸アンチモンカリウム等これなり。何れも有毒なり。しうさん・蓚酸参照。

**しうさん-かるしうむ** 蓚酸カルシウム（英Calcium oxalic）【名】〔化〕蓚酸鹽の一。カルシウム鹽の溶液に蓚酸を加へて得る、白色の物質。天然に植物體中に存在し、餌屑より蓚酸を得る時の中間物にして、水に溶けがたし。

**しうさん-たう** 舟山島【名】支那浙江省寧波府に屬する島。寧波を距ること四十浬。清の咸豐帝の時、英佛聯合軍の根據地。

**しうし** 祝詞【名】■神に告ぐる詞。のりと。■いはひの詞。賀詞。

**しうし** 舟子【名】せんどう（船頭）に同じ。

**しうし** 舟師【名】ふないくさ。海軍。水戰。水師。

**しうし** 收支【名】收入と支出と。

**しうし** 修史【名】歴史を編修すること。

**しうし** 秀士【名】■勝れたる士人。■支那周代の制にて、地方の鄉より推薦せられ、司徒の試驗を經て學に上せられたるもの。「の項稱。

**しうし** 周子【名】〔人〕しうさん（周敦頤）

**しうし** 秋思【名】秋のものおもひ。秋懷。

**しうし** 愁思【名】うれひおもふこと。思ひわづらふこと。愁懷。

**しうし** 愁死【名】愁ひて死ぬること。うれへじに。太平記「料り知りぬ。我れ遂に謫居に愁死して歸ることを得じと」

**しうし** 修辭【名】■辭をととのへまさむること。■詩歌・文章の技巧を練ること。

**しうし** 秋收【名】秋になりて、作物をとりいるること。秋穫。

**しうし** 啾啾【擬】勢なくあはれげに泣く聲。しくしく。「鬼哭啾啾」

**しうし** 颼颼【擬】■風の聲の形容。■銑丸などの突(ツ)を切て飛ぶ音の形容。

**しうじ** 收支決算【名】しうさん・決算（に同じ。

**しうじ-がく** 修辭學【名】『英Rhetoric』修辭に關する法則を教ふる學問。美辭學。

**しうじき** 秋色【名】〔人〕江戸の女流俳人。名は、お秋。日本橋照降(ヒフリ)町の菓子屋大月某の妻。其角の門人。菊後亭と號す。十三歳の時、上野山清水(ヒ)堂の後なる櫻を見て、「井戸ばたの櫻あぶなし酒のえひ」の詠あり。享保十年歿す。年五十七。

**しうしき-ざくら** 秋色櫻【名】俳人秋色に由りて名を得たる、東京上野清水堂の後なる井戸端の櫻。但し今存するは、後世植ゑつぎしものなり。前項参照。

**しうしき-だう** 修式堂【名】平安京大内裡なる八省院の十二堂の一。永寧堂の北にありしもの。しゆしきだう。すしきだう。北・堂。卯酉・堂。

**しうし-きよく** 修史局【名】明治八年に設置せられ、總裁・副總裁・局長・總閲・修撰等の職員ありて、修史の事を掌りし役所。もとの正院(ヤウイン)歴史課の改稱にして、同十年廢せられたり。

**しうしきよく-そうさい** 修史局總裁【名】修史局の長。修史の體裁を定め、その是非・筆削等の重大なるものは上奏・取裁し、衆れて職員の進退を總掌せしもの。

**しうしきよく-ちやうや** 修史局長官【名】修史局の職員。局中の事務を處分し、編修各員の動惰を監視することを掌りしもの。

**しうし-くわん** 修史館【名】明治十年設けられ、總裁・編修官・掌記・繕寫・館長・幹事・設事の職員ありて、修史の事を掌りし役所。同十九年廢せられ、臨時修史局これに代れり。

**しうしくわん-そうさい** 修史館總裁【名】修史館の職員。結文を總掌し、祕閣を管せしもの。勤任官。

**しうしくわん-ちやうや** 修史館長【名】修史館の職員。庶務を總理し、編修各官の勤惰を監視し、また祕閣の圖書を管せしもの。一等編修官、月番にて兼任せり。

**しうしけいさん** 收支計算【名】一定の期間における收入と支出との勘定。

**しうしけいさん** 收支決算【名】しうさん・決算（に同じ。

**しうしし** 愁思【名】うれひおもふこと。思ひわづらふこと。愁懷。

**しうし-しまつ** 修史始末【名】〔書〕水戸藩の修史事業の始末を紀年的に詳錄したるもの。二卷。薩田澗谷の著。

**しうし-そうさい** 修史總裁【名】明治二年假に設けて、向後閑かんとする各局の事務を總裁せしめたる職。

**しうし-じつ** 週日【名】一週間の日、即ち七日。

**しうし-ぢつ** 秋日【名】秋の日。あき。

**しうし-しつ** 柔質【名】やはらかなる質。柔順なる性質。

**じうし-じつ** 柔日【名】『禮記の曲禮に「內事以柔日」とあり』十干中の乙・丁・己・辛・癸に當る日、即ち陰の日。（剛日に對して）

**しうじ-はふ** 修辭法【名】修辭上の法則。

**しうし-しふ** 蒐集・蒐輯【名】あつめよすること。寄せ集むること。

**しうし-しふ** 收拾【名】ひろひ集むること。とりて纏むること。

**しうし-しふ** 收輯・收集【名】收め集むること。まとめあつむること。

**しうし-しふ** 修習【名】をさめならふこと。

**しうし-しふ** 舟楫・舟檝【名】船とかぢと。舟楫の利【句】次條に同じ。

舟楫の便【句】船に依る交通運搬の便利。舟楫の便。

**しうし-しふ** 鑄造【名】鑄(ヰ)びて、ざらざらとなること。

**しうし-しん** 修身【名】『禮記の曲禮に「修身踐言、謂之義行」とあり』身ををさめ、行を正しくすること。

**しうし-しん** 就寢【名】ふしどに入ること。「し。眠ること。就寢。

**しうしん** 周信【名】〔人〕きたう（義堂）に同

**しうし-じん** 州人【名】州の人。くにびと。

**しうし-じん** 舟人【名】ふなびと。せんどう。かこ。舟子(ヤウ)。

**しうし-じん** 愁人【名】ものおもひのある人。

**しうし-じん** 囚人【名】めしうど。囚徒。罪役人。

**しうし-じん** 狩人【名】かりうど。獵師。

**しうし-じん** 獌心【名】道理を無ぜずして、殘忍卑劣なる心。虎狼の心。

**じうじん** 柔靭【名】柔かにして靭きこと。しんなりづよきこと。

**しうしん-がく** 修身學【名】修身に關する事を研究する學問。倫理學の理論に傾けるに對して、平易に、日常に實踐し得るを主とす。實踐倫理。

**しうじん-がさ** 囚人笠【名】囚人の冠る一種の編み笠。

**しうしん-くわん** 修身館【名】羽後國由利郡本荘町にありし舊本荘藩の學校。天明中、藩主六郷政速の創立、明治四年に廢す。

**しうしん-しや** 修身舍【名】豐後國玖珠(クス)郡森町にありし舊森藩の學校。天保中藩主久留島通嘉創始し、明治四年に廢す。

**じうじん-せい** 柔靭性【名】〔理〕固體の、これを引張して破壞せんとする力に抵抗する性質。その强さは、物質によりて、同一ならず。

**しうしん-だう** 修身堂【名】近江國大島郡大溝町にありし舊大溝藩の學校。天明五年藩主分部光實の創立、明治初年に廢す。

**しう-しや** 秋社【名】しやじつ(社日)を見よ。

**しう-しや** 舟車【名】船と車と。「舟車の便」

**しう-しや** 收捨【名】しゅしや、取捨に同じ。

**しう-しやう** 愁傷【名】憂ひいたむこと。嘆き悲しむこと。愁嘆。

**愁傷の舞**【句】能(ノウ)の替(ガヘ)の形(ナリ)の一。舞の半ばに愁傷の態をなすもの。「人。

**しう-しやう** 繡匠【名】ぬひとりをする職

**しう-しやう** 周章【名】あわつること。急ぎ惑ふこと。狼狽。

**しう-じやう** 愁狀【名】■そじやう(訴狀)に同じ。■愁顔の意を疏陳したる訴狀。

**しう-じやう** 醜狀【名】みにくきありさま。醜態。

**しう-じやう** 州壤【名】こくど(國土)に同じ。

**しうじ-やき** 秋二燒【名】陶器の一。尾張國海部(アマ)郡津島町の人、大橋秋二の創めしもの。五條燒に類す。

**しう-しやく** 周尺【名】支那周代の尺度。現今の約七寸五分に當るといふ。

**じう-じやく** 柔弱【名】■やはらかにして、つよからぬこと。■身心のよわよわしきこと。にうじやく。

**しう-しやく-やく** 秋芍藥【名】(植)しうめいぎく(秋冥菊)に同じ。

**しう-しゆ** 收取【名】とり入るること。

**しう-しゆ** 袖手【名】手を袖にさし入れてゐること。みづから手を下す勞をいとふこと。ふところで。「ること。

**袖手傍觀**【句】手を下さずして傍觀す

**しう-じゆ** 舟首【名】船のへさき。船首。

**しう-じゆ** 收受【名】うけをさむること。受納。領收。

**しう-じゆう** 驂從【名】車馬に隨行すること。ともまはり。ともぞろへ。

**しう-じゆく** 收縮【名】ちぢまること。ちぢまること。

**しう-じゆく** 收熟【名】穀類の實のりたるを取入るること。

**しう-じゆつ** 秀出【名】ぬきんづること。傑出。拔群。

**じう-じゆつ** 柔術【名】柔(ジウ)の理を應用して、對手を制御する術。柔道。

**しう-じゆん** 周諄【名】くりかへして、手落なく、ものいふこと。

**じう-じゆん** 柔順【名】ものやはらかにして、おとなしきこと。やさしくしてすなほなること。溫順。從順。

**じう-じゆん** 柔馴【名】おとなしく馴らさること。ともまはり。ともぞろへ。

**じう-じよ** 洲嶼【名】■洲(ス)と小島と。■小さき島。

**しう-じよ** 洲渚【名】すのなぎさ。

**しう-じよ** 酬書【名】返事。返翰。

**しう-じよ** 愁緒【名】愁ひの心。愁の緒。

**しう-じよ** 周書【名】■書經中、周代に關せる誥篇。今文にては牧誓・洪範・康誥・酒誥・梓材・召誥・洛誥・立政・無逸・顧命・呂刑・文侯之命・費誓・秦誓の十九篇、古文にては、更に泰誓上中下篇・武成・旅獒(ガウ)・微子之命・蔡仲之命・周官・君陳・康王之誥・畢命・君牙・冏命(ケイメイ)の十三篇を加へ、都合三十二篇。■前記以外に、漢代に單行せる七十一篇の書。周の史記なりとも、周代の誥誓・號令なりとも、孔子の序づたる書經百篇の餘なりともいふべど、當時の野史・祕乘なるが如しといふ。今に存せるは五十九篇にして、合せて逸周書と稱せり。■こうしうしよ(後周書)に同じ。

**しう-じよく** 秋色【名】秋のけしき。秋氣。秋意。秋景。

**しう-じよく** 秀色【名】ひいでたる景色。

**しう-じよく** 修飾【名】■ふさりつくろふこと。■〔語〕『英 Modify』或語句が、他の語に係屬して、その意味を限定すること。しうじよくご(修飾語)參照。

**しう-じよく** 就職【名】職務に就くこと。

**しう-じよく** 收贖【名】金を出して罪をつぐのふこと。

**しう-じよく** 就寢【名】しつしん(就寢)に同じ。

**しうじよく-ぐち** 就職口【名】つとめぐち(勤口)に同じ。

**しうじよく-ご** 修飾語【名】〔語〕『英 Modifier 又 adjunct』文の各成分、卽ち主語・目的語・補足語・述語又は他の修飾語等を修飾する語句。別へば、「二十日の夜の月出でにけり」の「夜の」は、主語「月」の修飾語、「二十日の」は「夜」の修飾語、また「月、海より出づ」の「海より」は說明語、また「月、出づ」の修飾語なる類。

**しうじよく-さき** 就職先【名】つとめさき(勤地。

**しうじよく-ち** 就職地【名】就職する土地。

**しうじよく-なん** 就職難【名】適當なる就職口を求むるに困難なること。

**しうしよさん** 收支豫算【名】或期間の收入と支出との見積、又その文書。「ど。

**しう-する** 酋朗【名】しうちやう(酋長)に同

**しう-する** 秋水【名】■秋の出水。■秋の清く澄みたる水。■刀の光芒(ボウ)の譬。「三尺の秋水夏なほ寒し」

**しう-せい** 秋晴【名】晴れたる秋の日。あ

**しう-せい** 秋聲【名】秋風の音。

**しう-せい** 秋成【名】秋になり、穀物の成熟すること。

**しう-せい** 周正【名】陰曆十一月の異稱。

**しう-せい** 修成【名】修正して成就すること。

**しう-せい** 修正【名】■改めなほすこと。■品行の修まりて正しきこと。

**しう-せい** 修整【名】■修正して整理すること。■寫眞原板の缺點を、加筆或は削除してなほし整ふること。

**しう-せい** 修齊【名】修身と齊家と。

**しう-せい** 修省・脩省【名】身を修めて反省すること。

**しう-せい** 鏽・銹・銹【名】金屬のさび。

**しう-ぜい** 收稅【名】稅を取立つること。租稅を徵收すること。

**じう-せい** 就成【名】皮をなめすこと。

**じう-せい** 獸性【名】■獸類の性質。■人間の有する、他の動物にも共通せる性質。肉慾。獸慾「獸性を發揮す」

**じう-ぜい** 柔脆【名】やはらかくもろきこと。「の譬。

**しうせい-あん** 修靜庵【名】〔人〕蒲生君平

**しうせい-あん** 修正案【名】原案に修正を加へたる議案。(原案に對して)

**しうせい-くわんちやう** 收稅官廳【名】收稅に關する事を取扱ふ官廳。

**しうぜい-くわんり** 收稅官吏【名】歲入徵收官の一。租稅を徵收するもの。皆通、稅務署長・命關長これに任じ、その發する納稅告知書によりて、金庫又は收入官吏に納稅せしむ。收稅吏。

**しうせい-けう** 修成敎【名】神道の一派。造化の三神を尊信し、吾人は肉體を父母に受くれど、三神より受けたる至善の心魂こそ一身の根本なれば、これを修理・固成するを主とせざるべからずと說くもの。多少儒佛を混味せり。敎祖は新田邦光(クニ)。明治九年開立す。修成派。

**しうせい-しよ** 收稅署【名】ぜいむしよ、稅務署の舊稱。

**しうせい-そく** 收稅屬【名】收稅長の指揮の下に、その主務に從ひし判任官。明治十七年に設置せられたり。







**しうせいーちか** 修正地價【名】地價を修正せる場合に於けるその地價。

**しうせい-ちやう** 收稅長【名】府縣官の一。府知事・縣令の命を承けて、租稅及び徵稅費の賦課・徵集に關する事務を執りし奏任官。明治十七年の設置。しうぜいぶちやう(收稅部長)參照。

**しうせいーは** 修成派【名】しうせいけう(修成敎)に同じ。

**しうせい-ひ** 收稅費【名】收稅に要する經費、卽ち收稅官廳を設け、收稅官吏を置き、又は納稅上の調査・審査を定むる等に要する費用。徵收費の一種。

**しうせい-ぶ** 收稅部【名】明治三十八年四月以前、府縣廳の一部として、國稅の賦課・徵收及び間諜國稅犯則者の處分などに關する事務を掌りし所。

**しうせいぶ-ちやう** 收稅部長【名】收稅部所部の長、知事の命を承けて、部下を監督し、稅官吏)に同じ。

**しうせいーり** 收稅吏【名】しうぜいくわんり(收稅官吏)に同じ。

**しうせう** 秋霄【名】秋のよひ。秋の夜。

**しうせう** 秋穹【名】秋のゆふぞら。

**しう-せき** 臭石【名】(鑛)石灰石の一種。石油の臭氣を含むもの。

**しう-せき** 囚籍【名】囚人の名を記したる帳簿。

**しう-せき** 就籍【名】無籍者が、戸籍を有すること。「土地。

**しうせき-ち** 就籍地【名】就籍をなしたる

**しう-せつ** 醜褻【名】みにくくけがらはしきこと。

**しう-ぜつ** 愁絕【名】この上なく愁ふること。

**しう-ぜつ** 秀絕【名】この上なく秀でたること。秀逸。

**しうせん** 獻糧【名】ぶねんとも獻糧に同じ。

**しうせん** 周旋【名】■たちめぐること。たちゐ。進退。動作「周旋、禮に中(アタ)る」■いろいろ(周遊)に同じ。■事を處置するためにたちめぐること。奔走。■とりもち。世話。斡旋(アツ)。「周旋の勞を執る」

**しうせん** 收束【名】まとむること。集めてたばにすること。

**しうせん** 〔法〕『英 Chol-ophil』國際間に紛議生じて、談判不調に歸したる時、第三國がその間に立ちて、一旦中絕したる交渉の再開を勸告し、雙方これに同意すれば、第三國は手を引き、雙方をして、直接に談判せしむること。

**しう-せん** 舟船【名】ふね。

**しう-せん** 秋扇【名】■秋になりて、人に顧みられざる扇。■寵の衰へたる婦人の譬。あきのあふぎ。

**しう-せん** 修撰【名】■編輯・撰述すること、又その事を掌る役。■修史局の職員。修纂、又は文辭の結撰を掌り、檢討の事を兼ねし奏任官。

**しう-せん** 宿善【名】〔佛〕しゅくぜん(宿善)に同じ。

**宿善開發**(ホツ)【句】〔佛〕「宿善(ゼン)開發」に同じ。御文章「宿善開發して、善知識にあらずば、往生はかなふべからざるなり」

**しう-ぜん** 秋蟬【名】あきぜみ。

**しう-ぜん** 修繕【名】つくろひ。修復。

**しう-ぜん** 愀然【名】憂ひ懼るるさま。悚(ショウ)れ動くさま。

**じう-せん** 蹂躪【名】ふみにじること。ふみあらすこと。

**じうぜん** 柔然【名】蒙古種なる遊牧民族の一部落。支那の東晉時代より史上にあらはれ、西曆五五五年、その部下たる突厥(トツ)部に滅さる。

**しうせん-かた** 周旋方【名】■周旋をなすこと。■周旋する人。きもいり。「江戸時代の語」

**しうぜん-かふう** 修繕加封【名】郵便物の包裝不完全のため、途中にて毀損したる時、郵便局にて、修理を加ふること。

**しうせん-げふ** 周旋業【名】周旋を營業とすること、又それを營む人。きもいりとせいか。かれこれや。周旋屋。

**公**(ハツ)**なる周旋業**【句】土地・家屋の賃借又は賣買、その他、商行爲にあらざる他人間の取引の媒介・周旋を目的とする營業。

**しうせんげふ-てすうれう** 周旋業手數料【名】廣く人事百般の周旋をなして得る口錢。「をなす所。

**しうせん-おやう** 修繕場【名】船舶の修繕

**しうぜん-どつく** 修繕船渠【名】船舶の修繕をなすための船塢。通常、海岸の地を掘鑿して造る。

**しうせん-にん** 周旋人【名】周旋國をなす人。周旋業を營む人。周旋屋。

**しうせん-ぶぎやう** 舟船奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。舟船に關する件を取扱ひしもの。東鑑「依」爲二當國舟船奉行一獻二數十艘一」

**しうせん-や** 周旋屋【名】■しうせんげふ(周旋業)に同じ。■しうせんにん(周旋人)に同じ。

**しうせん-れう** 周旋料【名】賣買・貸借・雇傭その他の取引の成立を幾分・周旋せる者に、報酬として支拂ふ金。

**しう-そ** 愁訴【名】憂ひ歎きて訴ふること。事情をうちあけて懇願を乞ふこと。

**しう-そ** 醂酢【名】■酒杯のとりやり。獻酬。■あしらひ。應對。

**しう-そ** 祝詛【名】神に祈りて、己が憎む者に災を加ふること。呪咀(ジユ)。

**しう-そ** 臭素【名】〔化〕『英 Bromine』ハロゲン類の元素の一。常溫においては、黑赤褐色の液をなし、揮發しやすく、蒸氣は赤褐色を呈す。鹽素に似て、化學性活潑なるが故に、自然に遊離・存在することなく、殆ど常に鹽素に伴ひて存す。されど鹽素に比すれば、その量甚だ少なし。また蒸氣は、やや鹽素と異なる特異の刺臭を有す。臭化カリウムと二酸化マンガンとに硫酸を加へ、熱して製す。ぶろおむ。

**しうそ-あんもにうむ** 臭素アンモニウム【名】〔化〕しうくわあんもにうむ(臭化アンモニウム)に同じ。

**しうそ-かり** 臭素加里【名】〔化〕しうくわかりうむ(臭化カリウム)に同じ。

**しうそ-かりうむ** 臭素カリウム【名】〔化〕前條に同じ。

**しうそく** 俗醜【名】みにくき風俗。醜風。

**しう-そく** 州俗【名】一地方の風俗。くにふう。

**しうそ-さん** 臭素酸【名】〔化〕『英 Bromic acid』酸の一。其だ鹽素酸に似、且つそれよりも分解しやすきため、その鹽(エン)に相當する化合物を得、それより誘導して、水溶液として得らるるのみ。酸化力に富むことも、鹽素酸に同じ。ぶろおむ酸。

**しうそさん-えん** 臭素酸鹽【名】〔化〕『英 Bromate』臭素酸の鹽(エン)。酸化力に富むこと、鹽素酸鹽に似たり。

**じう-そしき** 柔組織【名】〔植〕『英 Parenchyma』植物の細胞組織の一。薄き細胞膜を有する球形・楕圓形・多角形等をなせる數多の細胞の、その廣く扁き面において相結合せるもの。組織中最も普通なるものにして、質柔く、又その細胞には原形質を含めるによりて、代謝機能以外、諸種の運動・刺戟に對する感應をも司り、種種の營養・作用も、その諸部に行はる。局部組織・蜂窩組織・柔軟組織。

**しうそ-じやう** 愁訴狀【名】愁訴のために差出す書狀。うれへぶみ。

**しうそ-する** 臭素水【名】〔化〕『英 Bromine water』臭素の水溶液。

**しうそ-ちやう** 臭素錠【名】『英 Brome tablets』臭化カリウム・臭化アンモニウムの三種を含める錠劑。主として癲癇(カン)を治するに用ふ。

**しうそ-なとりうむ** 臭素ナトリウム【名】〔化〕しうくわなとりうむ(臭化なとりうむ)に同じ。

**じう-だ** 柔懦【名】いくぢなし。柔弱。

**じう-たい** 醜態・醜體【名】みぐるしきさま。醜狀。

**じう-たい** 獸帶【名】〔天〕『英 Zodiac』くわうだたい(黃道帶)に同じ。

**じうたい-くわう** 獸帶光【名】〔天〕くわうたいくわう(黃道光)に同じ。

**しう-たう** 周到【名】よく行屆くこと、よく行きわたること。緻密。綿密。

**しう-だう** 修道【名】道德を修むること。

**じうだう** 柔道【名】一『易經の下經に「繫辭下」金柅柔道牽也」とあり』柔の道。陰の道。二じうじゅつ(柔術)に同じ。

**しうだうくわん** 修道館【名】一安藝國廣島市に在りし舊廣島藩の學校。慶應二年學問所及び洋學傳習所を併せて改名せしもの。明治四年に廢す。二出雲國松江市に在りし舊松江藩の學校。舊稱、文明館。明治の初年に廢す。三河國幡豆(ハヅ)郡西尾に在りし舊西尾藩の學校。嘉永中、藩主松平乘全(ノリヤス)創立す。明治の初年に廢す。四美作國西北條郡津山にありし舊津山藩の學校。藩の城内に在りしもの。明和中、藩主松平康致(ヤスムネ)創立して、學問所と稱し、明治三年に修道館と改稱し、次いで廢す。五下野國宇都宮市にありし舊宇都宮藩の學校。城中に在りしもの。文化中藩主戸田忠延の創立。明治四年廢す。六大和國添下郡小泉にありし舊小泉藩の學校。天保五年藩主片桐貞信創立し、明治五年奈良縣に引繼ぎたり。七越後國高田市に在りし舊高田藩の學校。慶應二年榊原家敬(ヤスヒロ)建造し、明治四年廢す。八陸奥國白河郡白河會町に在りし舊白河藩の學校。文政八年藩主松平正篤の創立に係り、慶應の末に廢せり。

**しうだうし** 修道士【名】(基)『英Monk』天主教にて、公に服從することと、貞潔と、貧窮との三誓願を立てて、共同的宗教生活をなす人。

**しうだうゐん** 修道院【名】『英Monastery』修道士が共同的生活をなす建物。「ヒ。

**しうたん** 修短【名】ちゆうたん(長短)に同

**しうたん** 愁歎・愁嘆【名】憂ひなげくこと。いたみ悲しむこと。

**じうたん** 獸炭【名】一『晉書に出づ』支那晉の王琰の、豪奢を好み、炭を粉にして、獸の形を作りし故事。洛陽豪貴の輩、これに倣ひて、一時の流行となれりといふ。二粉骨を練りて、獸の形に作り、中に香を入れて、燻(クヅ)しもの。明月記、被レ等「獸炭、求而送之」三(化)『英Animal charcoal』動物の毛皮、爪、凝血、骨などを蒸燒にしたるもの。骨炭。動物炭。

**しうたんば** 愁嘆場【名】芝居にて、悲嘆の仕打を演ずる場面。

**しうち** 仕打【名】一行ふ所。しかた。しわざ。二(茶)に於ける役者の動作。こなし。三芝居の興行者(京・阪地方の語)

**しうち** 羞恥【名】はづること。はぢ。

**しうち** 痩地【名】そうち(瘠地)を見よ。

**しうち** 周知【名】世人のあまねく知りてあること。公知。「つくろひ。

**しうち** 修治【名】をさめととのふること。

**しうちく** 修築【名】をさめ築くこと。つくろひづくこと。『河堤を修築す』

**しうちく** 修竹【名】長き竹。

**しうちく** 獸畜【名】『畜の字の音、正しくはきく又はきう』けもの。けだもの。野獸、家畜。じうきく(獸畜)參照。

**じうちく・あいせい** 獸畜衛生【名】畜類、殊に家畜飼養に關する衛生。飲水・飼料・畜舍・運動等は、その主要なる事項なり。

**しうちん** 袖珍【名】袖又は袂などに入れて携へ得る程の小形なること。ぽっけっと形。

**しうちん・ぼん** 袖珍本【名】袖珍づくりの本。ポケット形の冊子。

**しうちやう** 繡腸【名】文學の才情に富める心情。

**しうちやう** 愁腸【名】愁を心に持つ。

**しうちやう** 繡帳【名】刺繍を施せる美しきとばり。

**しうちやう** 酋長【名】酋夷のかしら。蠻民の長。酋帥。

**しうちやう** 州長【名】州のかしら。

**しうちやく** 祝著【名】『祝の字の音、正しくはしゅく』よろこぶこと。

**しうちゆう** 袖中【名】そでのうち。たもと。

**しうちゆう** 舟中【名】ふねのなか。船中。

**しうちゆう** 袖中【名】『史記の吳起傳に「君不レ修レ德、則舟中之人盡敵國」とあるに本づく』味方の者も背きて、敵となる。

**しうちゆう・しようかしふ** 袖中證歌集【名】(書)二十一代集・六家集・三玉集、その他、家集・歌合などにつきて、題ごとに一首の證歌をあげたるもの。十六卷。撰者詳かならず。

**しうちゆう・せう** 袖中抄【名】(書)萬葉集・古今集より堀川百首までの諸歌集中にある難解の歌詞を解釋せるもの。二十卷。釋顯昭の著。

**しうちゆう・わかろくてふ** 袖中和歌六帖【名】(書)古今六帖・新撰六帖の中にある歌を選びて、題ごとに、五首を載せたるもの。二卷。小澤蘆庵の著。

**しうとおよ** 醜女【名】容貌のみにくき女。惡女。醜婦。

**しうとめ** 姑【名】『姑の字の音、正しくはこ』しうとめ(姑)の略。

**しうとめ** 囚徒【名】しうとん(囚人)に同じ。

**しうとめ・いり** 舅入【名】しうとん(囚人)を訪ふこと。

**しうとめ・おや** 舅親【名】しうと(舅)に同じ。

**しうとめ・ぐ** 宿德【名】『しゅくとく(宿德)の音便』老成にして德高き人。(古語)

**しうとめ・ぐ** 宿德【名】『しゅくとく(宿德)の音便』老成にして德高き人。(古語)

**しうとめ・ぐ・しようめいしよ** 修得證明書【名】一定の學術技藝を修得したる證明書。

**しうとめ・ど** 舅御【名】しうと(舅)の敬稱。博多小女郎浪枕、壁一重授方の、舅御の御面體見ることもかなはぬか」

**しうとめ・ど** 姑御【名】しうとめ(姑御)の略。牛王心中「姑御樣を姑御と宮仕へせうものと」

**じうとん** 柔嫩【名】わかくやはらかなること。

**しうとん** 周敦頤【名】(人)支那宋代の哲學者。字は茂叔、濂溪(レンケイ)と號す。大極圖說の著あり。謂はゆる宋儒性理の學を大成す。熙寧六年歿す。年五十七。

**しうとめ** 姑【名】一夫の母。しうとめ。

**しうとめ** 舅【名】一しうとめ(舅)の音便』夫の父。おや。和名「舅、夫之父曰舅、之字止」二妻の父。しうとおや。外舅。其しうとにほめらるるむこ」





うと。和名「姑、夫之母曰姑、之字牛女」三妻の母。外姑。

**姑の涙汁**(ナミダ)【名】『姑は、嫁に對する同情の涙少なしといふ意にていふ』些少なる物事の譬。(諺語)

**姑の場塞**(バフサ)【句】嫁(ハ)の、老いたる姑を邪見あかつひにすること。(諺語)

**姑の前の見せ麻桶**(ヲケ)【句】姑に對する嫁の見せ働。(諺語)

**しうとめ・ご** 姑御【名】しうとめ(姑)の敬稱。しうとご。『明經博士合點』しやれも座興も年により、人による、姑御が休んでちや」

**しうとめ・さり** 姑去【名】姑の、嫁を逐出すこと。心中二「豐雪、お留守のうちに、思はずも、姑去の、力なく、せう事なさに、すごすごと、里へもどりて」

**しうとめ・なふ** 收納【名】一收め納(ス)ること。取入ること。自己の所有と確定すること。二(法)他より受取りて、自己の所有と確定すること。

**しうとめふき** 收納器【名】農產物を容るる器具。種類多し。

**しうとめふ・ふ** 收納切符【名】(商)現金を收納したる場合に、その受附係の作成する傳票。收入傳票。收納切符。入金切符。入金傳票。

**じうとめ・ふ** 收納傳票【名】(商)現金を收納したる場合に、その受附係の作成する傳票。收入傳票。收納切符。入金切符。入金傳票。

**じうとめ・ん** 柔軟・柔輭【名】やはらかきこと。しなやか。

**じうなん・ぐぶらあと** 柔軟オブラアト(獨Die weichmuhlen)【名】水にて溶きさ、直ちに藥物を包み得るやう、しなやかに製したる半透明のオブラアト。

**じうなん・そしき** 柔軟組織【名】(植)にじうそしき柔軟組織に同じ。

**じうなん・たいそう** 柔軟體操【名】『身體練育の一部として、各種關の凝硬を解溶することに注意したるものなるによりていふ』きじゅうたいさう(徒手體操)の舊稱。

**じうにく** 獸肉【名】獸類の肉。

**しうにふ** 收入【名】をさめ入ること。手に入ること。とりいれ。所得(支出)に對して)

**しうにふ・いんし** 收入印紙【名】印紙稅登錄稅・骨牌(カルタ)稅・狩獵免許稅・賣藥印紙稅・訴訟及び非訴訟事件・諸種免許及び手數料等の租稅及び料金を納附するにあたりて、貼用すべき印紙・從來、證券印紙・訴訟用印紙・賣藥印紙・煙草印紙・登記印紙の別ありしが、明治三十一年にこれらの種別を廢し、單一なる收入印紙を以て、何れの場合にも使用せしむることに改定せり。一厘・二厘・三厘・五厘・一錢・二錢・三錢・五錢・十錢・五十錢・一圓・五圓・十圓・五十圓・百圓の十五種あり。

**しうにふ・かかり** 收入係【名】收入の事務を掌る役員。

**しうにふ・がく** 收入額【名】とりだか。いり。

**しうにふ・くわんり** 收入官吏【名】一租稅以外の收入を徵收する歲入徵收官の一。大方は、各官廳の長官これに任ず。二金庫と納入との中間に關して、現金を收納する官吏。

**しうにふ・しゆぎ** 收入主義【名】(經)自國の產業を保護するを目的とするにあらずして、政府の收入を得るを目的として、關稅を課する主義。

**しうにふ・ぜい** 收入稅【名】(經)しうえきぜい(收益稅)に同じ。

**しうにふ・てんぺう** 收入傳票【名】(商)しうにふでんぺう(收納傳票)に同じ。

**しうにふ・ぼ** 收入簿【名】收入に關する事項を記載する帳簿(支出簿に對して)

**しうにふ・めいれい** 收入命令【名】きんせんしうにふめいれいしよ(金錢收入命令書)を見よ。

**しうにふ・やく** 收入役【名】市町村收入の受領、費用の支拂、その他、會計事務を掌理する、市町村の有給職員。各市町村に一名を置き、任期は、市にありては六箇年、町村にありては四箇年とす。

**しうにん** 就任【名】役につくこと。勤に

**しうねし** 執念し【形一】しふねし(執念し)の音便。

**しうねん** 執念【名】一執馬いみじきげんさにも從はず、しうねきけしき、おぼろげのものにあらず」

**しうねん** 周年【名】しうさい(周歲)に同じ。

**しうは** 秋波【名】一秋のなみ。二『秋の水は澄明なるより轉じていふ』美人のすずしき眼もとを呈する目つき。いろめ。

**秋波を送る**【句】次條に同じ。

**秋波を寄す**【句】いろめを使ふ。

**しうは** 周波【名】(理)『英Cycle』交流發電機にて、コイルに起る電流の一周轉中に起る規則的の變化。即ち發電子の前の半同轉の間にありては、零より次第に强さを增し、また次第に强さを減じて零に至り、後の半同轉にありては、反對の方面に流れて、同一の變化をなすこと。

**しうはい** 臭敗【名】惡臭を放ちて、物の腐敗すること。

**しうはう** 酬報【名】はうし(報酬)に同じ。

**しうはう** 週報【名】一週間ごとに出す報告又は報道。

**しうはう** 州邦【名】くに。邦國・州。

**しうはう** 醜謗【名】みにくき顏つき。醜「と。

**しうばく** 收縛・囚縛【名】捕へらるること。

**しうばく** 就縛【名】縛に就くこと。捕縛せらるること。

**しうはすう** 周波數【名】(理)『理Frequency』一秒間における周波の度數。場磁石の極の數をP對とし、發電子の回轉數をnとすれば、その周波數はnPにて示さる。

**しうはつ** 舟筏【名】人品の秀でたること。

**しうばつ** 秀拔【名】すぐれたること。ずぬけたること。拔群。

**しうばん** 秋晩【名】はんしう(晩秋)に同じ。

**しうばん** 週番【名】一週間ごとに交番すること。二(兵)平時、屯營內における軍隊の風紀、軍紀の維持、業務の執行を監視するために、隊內若干の將校と下士とを以て、一週間交替を以て當る任務。輪隊週番と大隊週番とあり。

**しうばんかし** 週番下士【名】週番(二)の任務に當れる下士。

**しうばん・しくわん** 週番士官【名】週番(二)の任務に當れる士官。

**じうはり** 【艶】じばりに同じ。

**じうび** 醜美【名】一みにくきと、うつくしきと。美醜。二醜女と美女と。

**しうび** 秀美【名】すぐれて美しきこと。

**しうび** 秀眉【名】ひいでたる眉。美し

**しうび** 愁眉【名】憂を帶びたる眉つき。憂へのおもてもち。しかめがほ。うれへの眉。愁眉を開く【句】うれひの顏開なくなる。

**しうび** 周備【名】手落なく仕度の揃ふこと。ゆきとどくこと。

**しうび** 臭鼻【名】(醫)粘膜くして、惡臭ある鼻漏(ハナ)を分泌する一種の病。

**じうび** 獸皮【名】獸類の皮。

**じうび** 柔皮・韉皮【名】皮をなめすこと。なめしがは。

**じうび** 柔媚【名】たをやかなること。婀「法。

**じうびはふ** 韉皮法【名】獸皮をなめす方

**じうびん** 秋旻【名】秋の空。秋天。

**しうふ** 囚俘【名】ふしう(俘囚)に同じ。

**しうふ** 臭腐【名】くさくくさること。くさりたくさみ。

**しうふ** 醜夫【名】容貌のみにくき夫。ぶを

**しうふ** 醜婦【名】顏のみにくき女。みめのわろき女。ぶをんな。醜女。惡女。

**しうふう** 醜風【名】しうぞく(醜俗)に同じ。

**しうふう** 秋風【名】秋の風。あきかぜ。

**しうふうらく** 秋風樂【名】(音)盤涉(バンセ)調の雅樂。もと唐樂。舞鶴天皇の時、換歌二帖を加へ、元歌と合はせて、三帖とす。

**しうふう・れい** 秋風嶺【名】(地)朝鮮慶尙北道にある一山道。阪路峻かならざれども、舊時の要害たりし處にて、今は鐵道京釜線これを通過し、山中に停車場あり。

**じうふ・き** 揉布機【名】手ざはりの硬きもの、又は糊料のために硬くなりたる織物を柔くするに用ふる機械。「に同じ。

**しうふく** 修復・修覆【名】しゅふく(修復)に同じ。

**しうぶつ** 繡佛【名】刺繍にてあらはした

る佛像。

**しう-ぶん** 醜聞【名】聞苦しき噂。恥となるべき評判。醜名。醜聞。

**しうぶん** 周文【名】〔人 ■『周の文王の義』〕文王を見よ。

**しうぶん** 文部【名】〔官職名〕式部大輔在良朝臣、御侍讀にて、始めて御前へ參りたりけるに、まづ詩をしたる、幸逢と遇奉無爲化（後是北辰・太公望遇二周文一等の句なり）■（人）惠僧。字は等慶。越渓又は岳翁と號す。近江國越渓の人。京都相國寺に住す。如雪に學び、人物・花鳥・山水に巧みなり。應永・永享頃の人。

**しうぶん** 秀文【名】〔人〕禪宗の畫僧。明國の歸化人。人物・花鳥・山水を善くす。世に唐秀文と稱せらる。天授・弘和頃の人。

**しう-ぶん** 繡文【名】ぬひとりの模様。

**しう-ぶん** 秋分【名】〔天〕〔英Autumn equinox〕二十四氣の一。秋の半に當りて、太陽の、正東より上りて、正西に入り、地球の赤道を直射し、晝夜殆ど平分なる時。即ち太陽の黄經百八十度に達したる時刻。佛教にては彼岸の中日といひ、舊暦にては八月中、太陽曆にては九月二十一日頃。（春分に對して）

**しうぶん-くわん** 修文館【名】■伊勢國三重郡萬野村に在りし萬野藩の學校。文化中創立し、明治四年廢す。■大和國添上郡柳生村に在りし柳生藩の學校。明治三年開設し、翌年廢す。

**しうぶん-さう** 秋分草【名】〔植〕菊科に屬する草。所在の山地・陰濕の處に自生し、莖は二三尺に達す。葉は被針形にて、鋸齒あり。夏秋の交、葉腋に、綠色の花、頭狀花序に排列す。

**しうぶん-てん** 秋分點【名】〔天〕太陽が黄道上を測行して、赤道の北より南に移る途中、赤道上を通過して、これを直射する位置。春分點を距ること百八十度。（春分點に對して）しうぶん（秋分）參照。

**しうぶん-は** 周文派【名】〔美〕日本畫の一派。東山時代に流行せし畫風。周文を祖とす。

**しう-へい** 鍬兵【名】〔兵〕戰場にて、築壘の造築に從事する兵。

**しう-へき** 鑿壁【名】■しわ。ひだ。■山谷の高低を生じて、ひだの如き狀したるところ。

**しう-へん** 周徧・周遍【名】ゆきわたること。あまねきこと。

**しうへん** 遍遍【名】まはり。へり。ふち。めぐり。

**しうへん-ほう-かい** 周遍法界【名】〔佛〕法身の功德の、無邊の法界に及び滿つること。太平島・佛は、元來本有常住・周遍法界の妙體なれば」

**しうほ** 修補【名】をさめおぎなふこと。「いれ、修理。

**しうほ** 收捕・囚捕【名】めしとること。おさへとらふること。「俘。

**しうぼく** 州牧【名】地方の長官。知事・諸侯。

**しうぼつ** 收沒【名】罪人の資財又は犯罪用の具を、官府に取上ぐること。

**しう-ぼつ** 周勃【名】〔人〕支那前漢の功臣。沛の人。高祖の沛に起るや、これに從ひ、所在に轢戰して功あり。また韓信の叛を擊ち、呂氏の亂を平げ、文帝を位に即かしめ、漢室を安んじ、丞相に任ぜらる。文帝の十一年歿す。

**しう-ぼつ** 臭剝【名】〔化〕しうくわぼたしうむ（臭化ポタシウム）の略。

**しう-まい** 嫦賓【名】せうめい（燒賓）に同じ。

**しう-まつ** 週末【名】■一週間の終。■くさみ。くさき。

**しう-み** 臭味【名】■『同臭味の義』なかま。黨類、同臭。

**しう-みつ** 周密【名】周（ヤマ）く行きわたり、緻密なること。周到。

**しう-みん** 愁眠【名】物思をしながら眠ること。「とと。

**しう-みん** 就眠【名】ねぶりにつくこと。

**しうみん-うんどう** 就眠運動【名】〔植〕〔英Hypnotropic movement〕或種類の植物の葉の、日沒に際して、相閉合し、翌朝に至りて、再び開展する運動。合葉（ガッ）草・合歡草（ガッカン）森を始め、種種の草（ソ）科植物、及び酢漿草（ヤウ）科植物、また醒花植物にありては、蕣（ヤウ）科に見らる。

**しう-む** 州務【名】一州の事務。

**しう-む** 秋霧【名】あきぎり。

**しう-む** 愁夢【名】物思のゆめ。

**じう-ん** 紫雲【名】■紫色の雲。古、瑞兆なりと稱せられ、佛教にても、念佛行者の臨終に、佛菩薩この雲に乘りて來迎したまふと說く。むらさきのくも。出典未詳。風に嘯く浦間より、紫雲をまいて上り龍」

紫雲靉靆（ヒ）く【句】〔佛〕念佛行者の臨終の殊勝なる形容。

**じう-ん** 時運【名】時代のなりゆき。時勢。

**じう-ん** 似雲【名】〔人〕安藝國廣島の歌僧。一說に、播磨國姬路の人なりと。本名は如雲。藤原實陰に學び、西行法師を慕ひて遊歷を事として、世に今西行と稱せらる。伊津吉村に聘せられ、また時に靈元上皇に召さる。寶曆三年寂す。年八十六。

**じうん** 慈雲【名】〔人〕■高僧。名は妙意。信濃國の人。十二歲にして、越後國の國分寺に入り、嘉歷二年後醍醐天皇に召され、清泉禪師の號及び紫衣を賜はり、同寺を勅願所たらしめらる。興國六年寂す。後光明言宗の高僧。伊蕊東涯に就きて、儒學を學び、更に奈良に於て顯・密二教を究む。河內國生駒山の長尾の瀧の上に庵し、自ら葛城（カツラギ）山人と號し、寛政九年河內國高貴寺に住す。これより先、正法律を制定して、後代の模式とせしが、幕命に由りて、高貴寺を捨て、方便圓儀等の著あり。十善法語・梵學津梁等八十七。世に慈雲尊者又は慈雲比丘と敬稱す。

**じうん-さう** 〔名〕〔植〕あきらうとく、秋丁字〕に同じ。

**じうん-そんじゃ** 慈雲尊者【名】〔人〕じうん（慈雲）■を見よ。

**じうん-たい** 紫雲堆【名】ちゃ（茶）■の異

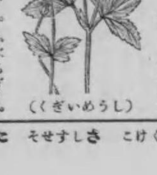
**じうん-てん** 試運轉【名】船體・蒸氣機・造・電氣鐵道又はその車輪などの完成に際し、出來ばえを見るために、初めて運轉すること。

**じうんどう** 觀運動【名】〔天〕〔英Apparent motion〕地球上より視たる諸天體の運動。例へば太陽は、恆星に對しては、運動せざれども、吾人には、日日、東より出でて、西に入るが如く見ゆる類の現象。

**じうん-びく** 慈雲比丘【名】〔人〕じうん（慈雲）■を見よ。

**しうぬい-ぎく** 醜名【名】みにくきこえ。「名。

**しうぬい-ぎく** 秋冥菊・秋壯丹【名】〔植〕毛茛（ヤウ）科に屬する多年生の草。山野に自生し、また園藝せらる。高さ二三尺に達し、葉は複葉にて、三裂もしくは數裂せる數小葉なし、秋、莖頂に紅紫色なる多數の美しき苞片を有せる花を著く。かぶろぎく。きぶねぎく。くわんおんぎく。しうしやくやく。



（くぎいめうし）

**しう-もしゆく** 周茂叔【名】〔人〕しうたいい（周敦頤）を見よ。

**しう-もん** 愁問【名】うれへもだゆること。「頻問。

**しう-や** 秋野【名】秋季の野。

**しう-や** 秋夜【名】秋の夜。秋宵。

**しう-やう** 秋陽【名】秋の日ざし。

**しう-やう** 收養【名】他人の子をひろひあげて養ふこと。

**しう-やう** 修養【名】をさめやしなふこと。學業を修め、德性を養ふこと。

**しう-やく** 修譯【名】ほんやく（飜譯）に同じ。

**しう-ゆ** 周瑜【名】〔人〕支那三國の時の吳の謀臣。字は公瑾。曹操を赤壁に邀擊して大勝し、また北方を圖らんとして、途に歿す。年三十六。

**しう-よう** 醜容【名】みにくき容貌。醜貌。

**しう-よう** 愁容【名】うれはしげなる容子。「き。

**しう-よう** 秋容【名】秋のすがた。秋げし

**しう-よう** 收用【名】■とりあげて用ふること。■〔法〕公用收收の一。公用のため、特定物の所有權又はその他の權利を强制徵收して、國家もしくは第三者の所有に移すこと。さうしようく（土地收用）參照。

**しう-よう** 收容【名】■とりをさむること。■〔兵〕前方部隊をして、退却を得しむる





ために、後方部隊が敵兵を拒拒すること。

**しうよう-くわぶつ** 收容貨物【名】〔法〕船積のため送致し、又は陸揚したる上、七十二時間內に引取發送船積、又は保稅倉庫に庫入せざるため、稅關に一時收容せられたる貨物。收容の日より六箇月を經過したる後、なほ收容の解除を申告する者なき場合には、稅關より競賣又は處分せらるべきものとす。

**しうよう-しんさくわい** 收用審査會【名】土地收用法に依りて收用又は使用せらるべき土地に付き、起業者の申請に因りて裁決する、合議制の機關。內務大臣の監督に屬し、會員は會長一人、委員六人より成り、中、三名は、內務大臣の任命に係る高等文官、他の三名は府縣名譽職參事會員中より互選す。

**しうよう-しんさくわいゐん** 收用審査會員【名】收用審査會を組織する會長及び委員。前條參照。

**しうよう-わんち** 收容陣地【名】〔兵〕收容（二）の目的を以て、一時占據する陣地。

**しうよう-はふ** 收用法【名】とちしようはふ（土地收用法）の略。

**しうよう-ぶたい** 收容部隊【名】〔兵〕一定の場所に收容したる一部分の軍隊。

**しうよう-ほしやうきん** 收用補償金【名】〔法〕土地收用法を適用せられたる者に交附する、損害の補償金。

**じう-よく** 獸慾【名】『獸類と共通なる慾の意』肉慾。色慾。

**しうらいくわん** 修來館【名】上總國市原郡姉崎村にありし萬鶴牧藩の學校。天保中、藩主水野忠誠創立し、維新に至りて廢す。

**しう-らん** 秋嵐【名】■秋の山氣。■秋の

**しう-らん** 秋蘭【名】〔植〕するがらん（駿河蘭）に同じ。（春蘭に對して）

**しう-らん** 周覽【名】へめぐりて見ること。周遊して觀覽すること。

**しう-らん** 收攬【名】收め持つこと。集めて握りたもつこと。「人心を收攬す」

**しう-り** 修理【名】つくろひをさむること。つくろひ。ていれ。しゆり。修復。修繕。

**しうり** 收利【名】利益を得ること。

**しう-り** 州里【名】■支那の周の代に、家數二千五百を州、二十五を里と稱せし行政區劃。■州と里と。一州・一村をなせる處。

**じうり**【名】『じうりがっぱ（じうり合羽）を見よ』あまがっぱ（雨合羽）を云ふ。（伊勢國の方言）

**しう-りう** 周流【名】■めぐりて流ること。回流。■くめぐること。周歷。周遊。

**じうり-がっぱ** じうり合羽【名】あまがっぱ（雨合羽）を云ふ。（大和國の方言）

**じうりん** 秋霖【名】秋の長雨。

**じうりん** 秋霖【名】じうりがっぱ（じうり合羽）を見よ』あまがっぱ（雨合羽）を云ふ。（肥後國の方言）

**じう-りん** 蹂躙・蹂躪【名】ふみにじること。ふみちらすこと。蹂躪。

**しうりやう** 秋涼【名】■秋のすずしさ。■陰曆八月の異稱。

**しうりやう** 習館【名】しうやう（習長）に同じ。

**しうりよ** 囚虜【名】とらふること。とらはれ人。とりこ。

**しうりよ** 醜虜【名】■えびす（虜）を卑しめていふ語。しこのえびす。蝦夷・醜虜。■外國人を卑しめていふ語。

**しう-ゐ** 醜涙【名】うれひの涙。

**しう-ゐ** 醜類【名】わるもの仲間。

**じう-ゐ** 獸類【名】けだものの類。學術上、哺乳類と呼ぶものと殆ど相一致すれども、その範圍やや狹く、鯨の如く、形の魚に似たるもの、穿山甲（センザンカウ）のごとく、皮膚に角質を被る類は除外していふ。

**しうれい** 秀麗【名】秀でてうるはしきこと。

**しうれい** 秀麗【名】秀でて、くすしく妙なること。

**しうれい** 秋冷【名】秋の冷かなる氣候。

**しうれき** 周歷【名】へめぐること。遍歷。周流。

**しうれふ** 狩獵【名】野生の鳥獸を狩ること。しゆれふ。

**しうれん** 聚斂【名】■聚めをさむること。■人民より むごく取立つること。

**しう-れん** 收斂【名】■しめちぢむること。收縮。■とりをさむること。收穫。■祖稅を取立つること。圖〔數〕『英Convergency』一定の法則に從ひて、逐次に數を算出しゆきて止まることなく、且つ逐次算出せらるる數が、次第に或定まれる數、即ち極限に近迫しゆきて、その差が遂にはいかほどにても小さくなる時の狀態。例へば、公比が1より小なる無限等比級數の和の類。（發散・振動に對して）

**しう-れん** 秋歛【名】秋、玉穀の收穫ありたる時、租稅を取りたつること。

**しう-れん** 修練・修煉【名】ねること。修養・鍛練すること。

**しうれん-きふすう** 收歛級數【名】〔數〕『英Convergent（又Converging）series』級數の若干項を取り、その項數を增すに從ひて、その和が一定の數に接近するもの。（發散級數に對して）

**しうれん-ざい** 收歛劑【名】藥味ありて、收縮せしむる効ある藥劑。例へば胃腸を收歛して、下痢を止め、皮膚を收歛して、無汗を止むる等にて、五倍子酸（ゴバイシ）・單寧（タンネイ）酸・硝酸銀などを用ふ。收歛藥。

**しうれん-ず** 收歛レンズ【名】〔光〕『英Converging lens』【名】〔光〕理〕平行光線、凸レンズを照す時は、屈折して、一點に集交するによりていふ』しうれんず（凸レンズ）に同じ。

**しう-ろ** 袖爐【名】そでがうろ。てあぶり。

**しう-ろ** 舟路【名】ふなぢ（船路）に同じ。

**しう-ろ** 秋露【名】秋のつゆ。

**しう-ろ-き** 修路機【名】『英Roller』道路面又は道路の基礎を固むるに用ふる轢。重さ一噸乃至十五噸ある回轉式の鐵を以て、その重量に由りて、路面等を押固むるもの。人力又は蒸氣力に依りて回轉せしむ。轢壓機。ろおらあ。

**しう-ろく** 收錄【名】取りいれて載錄すること。しゆりく。

**しう-わい** 收賄【名】賄賂を受くること。

**しうわい-さい** 收賄罪【名】〔法〕一定の職務又は一定の選擧もしくは議決に關し、賄賂を要求・約束・收受するに由りて成立する犯罪。

**じう-わう** 獸王【名】〔動〕『百獸の王といふよりいふ』しし（獅子）の異稱。

**じうわり**【名】じうはり に同じ。身體文藝。親分・子分・柔和理」

**しう-ゐ** 皺胃【名】〔動〕『英Abomasus』反獸の胃腑の四番目に在る、皺の多き部分。

**しう-ゐ** 秀偉【名】秀でて大柄（オホガラ）なること。すぐれて魁偉なること。

**しう-ゐ** 周圍【名】■ぐるり。めぐり。まはり。四面。周邊。環周。■四垣に接する外邊。四周。環境。■〔數〕『英Perimeter』多角形の各邊の長さの和、又は圓周の長さ。

**しう-ゐん** 囚員【名】罪囚のかず。

**しう-ゐん** 臭穢【名】しうくわい（臭穢）に同じ。

**しう-ゐん** 臭穢【名】『臭穢は滿ちて肪脹し、膚膩（ヒ）悉く壞壞せり』

**しう-ゐん** 周潤【名】道路を前後に按へて、張りたる陣容。

**じう-ゐん** 柔婉【名】柔和にして、婉曲なること。しなやかなること。

**しう-を** 羞惡【名】羞ぢて惡むこと。

**しう-え** 紫衣【名】位ある僧の、勅許を得て著る紫色の袈裟。我が國にては、榮西及び道元を始とす。

**しう-え** 繡衣【名】しゅう（繡衣）に同じ。

**しう-えい** 四裔【名】『裔は衣の裾の義より轉用せられたるもの』四方の國のはて。四邊。

**しう-えい** 詩詠【名】詩を作ること、又その作詩。吟詠。

**しう-えい** 私營【名】個人にて營むこと。

**しう-えい** 市營【名】市の事業として營むこと。「と。

**じう-えい** 自營【名】獨立して事業を營むこ

**しうえい-くわん** 思永館【名】豐前國小倉市萬城內に在りし藤小倉藩の學校。寶曆中、藩主小笠原忠基これを起し、天明中この館

名を稱す。維新の際、これを慧津に遷し、青德館と改稱す。

**しえいでん** 私營田【名】營田の一。中古、荒廢地や開田等を、官許を得て、私に營作せしもの。(公營田に對して)こんでん(墾田)參照。

**しえう** 至要【名】極めて大切なること。

**しえう** 四要【名】『薛文清の讀書錄』に「公期不レ偏、慈問不レ刺、明則能照、剛則能斷」とあり」公平と慈悲と明智と剛氣との四種の肝要なる行の稱。

**しえき** 私益【名】已れのみの利益。私利。(公益に對して)

**しえき** 使役【名】[一]他を逐使ふこと。役使。[二](語)**しえきさう** 使役相)に同じ。

**しえき** 厮役【名】めしつかひ。こもの。

**しえき** 祇役【名】つつしみて職を勤むること。

**しえき** 四驛【名】[一]四道の驛。[二](地)江戸時代に、江戸の四隅に在りて、五街道の出發點たりし驛、即ち千住(せんじゅ)驛・板橋驛・品川驛・四谷(よつや)驛。こがいだう(五街道)參照。

**じえき** 滋液【名】滋味ある液。

**じえき** 時疫【名】はやりやまひ。ときのけ。流行病。

**しえきさう** 使役相【名】(語)他を使役して、或動作をなさしむる意をあらはす語法。「打たす」「起きさす」「行かしむ」等のごとく、動詞にすさしむの一を添へてあらはす。使役。右三助動詞の各條參照。

**しえう** 私謁【名】私事のための謁見。表むきにあらずして謁見すること。內謁見。

**しえう** 刺謁【名】名刺を呈出して、會見を申し込むこと。

**しえな** (英Sienna)【名】『伊太利亞のシエナ(Sienna)市の產有名なるよりいふ』美しき黃赤色の粘土。細かに碎き、水藏(ばう)して、洋畫の繪具に用ふ。

**しえふ** 枝葉【名】[一]樹木の枝と葉と。えだは。[二]事の主要ならぬ部分。すゑ。えだは。末節。[三](語)『盜も命のありてこそ、あら枝葉や退かんとて』

**しえふ** 子葉【名】(植)(英Cotyledon又はSeed leaves)『植物の胚に著生する、最初の葉。植物の種類によりて、その數、一枚なると二枚なると、多數なるとあり。子葉孫枝【句】『子孫・枝葉の義』子子孫孫。東鑑『子葉孫枝、永可レ候二門下一、之由申之』

**しえふ** 四葉【名】[一]四枚の葉。[二]次條の箇の葉より成れる座金(ざがね)。

**しえふざ** 四葉座【名】四葉。

**じえむ** (英Gem)【名】(美)裝飾用として、彫刻を施せる寶石。ぜむ。

**しえん** 紫烟【名】紫色に見ゆる烟。

**しえん** 資緣【名】たすけ。てがかり。憂喜緣なり」『釋迦如來誕生會』林丹が妻瑠璃仙女、樂特が資緣貧ぎのため、緣を求めて、下司泰公』

**しえん** 紙鳶【名】たこ。いかのぼり。

**しえん** 詞筵【名】文人の會合の席。文章。詩歌・俳句などの會。

**しえん** 肆筵【名】さかもり。酒宴。

**しえん** 賜宴【名】貴人より酒宴を賜はること。又その酒宴。

**じえん** 侍宴【名】酒盛の席に列なること。宴席に侍ること。

**じえん** 慈延【名】(人)歌人。天台宗の僧。信濃國善光寺の人。俗姓は塚明。京都に出て、澄月と同じく、洛東岡崎に閑居し、大愚また吐屑庵と號す。歌は冷泉爲村に學び、おのづから新趣を帶ぶ。澄月・小澤蘆庵・伴(ばん)蒿蹊と併はせて、平安の四天王と稱せらる。文化二年歿す。

**しえんく・びいる** (英Schenk beer)【名】『Schenk は酒場(ばん)の意の獨逸語』一種の獨逸製のビイル。原料も製法も普通のと大差なけれど、それよりも酒精分少なくして、エキス分多く、醱酵約一箇月にして飲用に供せらる。主として、冬季用なり。

**しえんくわ・はくきん** 四鹽化白金【名】(化)白金を王水に溶し、その溶液を蒸發せしめて得る、赤褐色の結晶塊。白金鹽參照。

**しえん・はふ** 施鹽法【名】(醫)皮の腐敗を防ぐために、食鹽を生皮に施す方法。

**じえらちん** (英Gelatine)【名】ぜらちんに同じ。

**しえらっく** (英Sielice)【名】ゆっくを見よ。

**じえりい** (英Jelly)【名】ぜりいに同じ。

**じえりい・がた** ジェリイ型【名】ぜりいがた(ぜりい型)に同じ。

**じえりい・けえき** (英Jelly cake)【名】ぜりいけえきに同じ。

**しおき** 仕置【名】(語)(ち)置の義』[一]しおくこと。處置。先例。[二]としまり。警戒。警備。[三]刑にあつること。罪すること。成敗(せい)。處罰。刑罰。大鑑『とてもしおきに選ふ身なり』[四]小供の惡戲を懲し戒むること。

**しおきすみ・わやう** 仕置濟帳【名】江戸時代に、所司或は處分の裁許のすでに濟みたる者を記載せる帳簿。

**しおきば** 仕置場【名】刑を行ふところ。刑場。

**しおきもの** 仕置者【名】[一]取締をなす人。新可美『古代、河內の國守に仕へて、その家の仕置者なり。萬人との下知を受くるは、正道自然とあらはれ』[二]處刑を受くべき人。成敗者。罪人。

**しおく** 仕置く【動四他】仕は爲(ち)の義』しておく。なしのこす。しのこす。處置す。(源氏『國のつかさにて、しおきたることなければ』

**しおくり** 仕送・爲送【名】『仕は爲(ち)の義』しおくること。『春花五大力』家賃から、米塩、まきまで、しおくりの催促がよどざりやうす』

**しおくる** 仕送る・爲送る【動四他】『仕は爲(ち)の義』生計を助くるため、金錢・品物などをみつぎて送る。

**しおかち** 仕落【名】『仕は爲(ち)の義』しそこない。しそんじ。てぬかり。ておち。(國語『あんまり酷いつれない、何の見落・仕落がある』

**しおこす** 仕落す【動四他】劣れるものと見なす。おしつく。ないがしろにす。用明天皇紀『われわれを仕落しておのれ一人が錢とらう、やああたたかなかすわつば』

**しおほす** 爲果す【動下二他】なしとげる。成就す。用中基『はは』はあ嫁し、今日こそしおほせたり』

**しおん** 子音【名】(語)じいん(子音)に同じ。

**しおん** 齒音【名】(語)[一]支那の音韻學上における五音又は七音の一。我が國の佐行音及びこれに近似せる音を發するもの。例へば心・邪・照・禪などの音の類。[二]『英Dental』せったおん(舌齒音)に同じ。

**しおん** 師恩【名】師よりうけたる恩。

**しおん** 四恩【名】(佛)『釋氏要覽』に、出觀經』に見ゆ』父母の恩と、師友の恩と、國王の恩と、施主の恩との併稱。一說には、父母・衆生・國王・三寶の四者の恩なりと。

**しおん** 私恩【名】[一]特にその人にのみ施す恩惠。[二]自己の地位を利用して、恩を賣ること、又その恩。

**しおん** 至恩【名】この上なき恩。

**じおん** 慈恩【名】いつくしみ。なさけ。

**じおん** 字音【名】漢字の發音。古來我が國に入り、國語化して存する、支那の字音。吳音・漢音・唐音・宋音などの區別あり。おん。各その條參照。

**じおん・かなづかひ** 字音假字用格【名】(書)字音の假字遣を正したるもの。一卷。本居宣長の著。

**じおん・じ** 慈恩寺【名】[一]羽前國西村山郡醍醐村大字慈恩寺にある天台眞言宗の寺。本寺は彌勒菩薩。聖武天皇の勅願所にて、行基の開基といふ。末寺三十餘あり。[二]武藏國南埼玉(さいたま)郡慈恩寺村にある天台宗の寺。坂東巡禮第十二番の札所にして、華林山・最上院と號す。本尊は千手觀音。天長中、僧圓仁の開基。

じえん　しえん　しえん　じえん　しおん　しおん　しお

古の志賀の地域に當る。〔三〕近江國十二郡の一。郡役所を大津市に置く。

**じ-か** 時下【名】このごろ。この節。目下。

**じ-か** 寺家【名】〔一〕寺院の内にて、弟子の僧の住する家。〔二〕じけ(寺家)を見よ。

**じ-か** 自家【名】おのれ。自分。

**じ-か** 時價【名】その時の相場。一定の時における市價。

**じが** 爾雅【名】〔書〕爾は邇にて、近の義、雅は正しき義、即ちその言近くして用多く、正を取る意にて名づけしものといふ。主として、經典の訓詁を記載したるもの。著者明かならず。二卷。もと二十篇なりしも、現今は釋詁・釋言・釋訓・釋親・釋宮・釋器・釋樂・釋天・釋地・釋丘・釋山・釋水・釋草・釋木・釋蟲・釋魚・釋鳥・釋獸・釋畜の十九篇を存するのみ。

**じが** 似我【名】〔動〕じがばち(似我蜂)の略。蟲爲、じがじがと世話やく蜂の往來故。

**じ-が** 自我【名】〔哲〕『英 Ego 又は Self』思惟し、經驗する吾人自身、即ち主觀的自己。知の方面よりいへば、認識の主體、情の方面よりいへば、利害を感ずる主體、意志の方面よりいへば、活動の主體たるもの。小我。

**じ-が** 自我の分裂【名】〔哲〕『英 Division of Self』一個人の精神活動が二分し、その分れたる精神活動は、各一箇の系統を作りて、連續を有しながら、相互の間は少しも關和の保たることなく、甚しきに至りては、二者互に相爭ふことあるもの。その結果として生起する人格の障害を二重人格といふ。人格の分裂。

自我の變換【名】〔哲〕『英 Alternions of Self』『人格の變換』に同じ。

**しが** あ(英 Ogi)【名】業卷の煙草。

**しか-あくにち** 四箇惡日【名】壬子・乙卯・戊午・辛酉の四箇の惡日。辛酉殊に凶日なりといふ。〔陰陽家の語〕

**しか-あはせ** 詩歌合【名】しいかあはせ(詩歌合)に同じ。

**じか-あはせ** 自歌合【名】自作のもののみを左右に番(つが)へて、他人にその優劣を判ぜしむる歌合。戀鑑和尚自歌合その始なるべしといふ。

**じか-あんじ** 自家暗示【名】〔哲〕じゐんじ(自暗示)に同じ。

**しか-い** 四海【名】〔一〕四方の海。〔二〕『博物志』に『七戎・六蠻・九夷・八狄・形類不同、總兩言之謂二之四海一』『皆近二于海一也』とあり。四方の夷狄の國國。〔三〕四方の海の内の義。天下。國内。海内。〔四〕〔佛〕四海を保ち、民を治めたまふと」〔四〕〔佛〕須彌山(しゅみせん)を圍繞せりといふ四方の外海。

四海兄弟(けいてい)【名】『論語の顏淵篇に『君子敬而無失、與人恭而有レ禮、四海之内、皆兄弟也、君子何患二無兄弟一也』とあるに本づく。世の中の人人は、皆互に兄弟の如く親しむべきものなり。四海同胞。〔誡語〕

**しかい** 四向【名】〔佛〕しこう(四果)を見よ。

**しかい** 四郊【名】四方の郊野。

**しかい** 四更【名】夜の八つどき。丑の刻。今の午前二時より四時までの間。丁夜。

**しかい** 四行【名】〔一〕孝子に『孝悌者仁之祖也、忠信者交之慶也』とあり。人の行ふべき四つの道、即ち孝・悌・忠・信。〔二〕『書』大家の女誡に見ゆ。しこう(四德)〔二〕に同じ。

**しかい** 施行【名】〔一〕實地にとり行ふこと。執行。施設。〔二〕敕令を實施すること、せぎやう。〔三〕〔法〕『仏 Application』法律の公布後、一定の期限の到來を待ちて、その拘束力を發現せしむること。しかうきげん(施行期限)參照。

**しかい** 私行【名】〔一〕內密の行爲。〔二〕私人としての行爲。

**しかい** 私交【名】うちうちのまじはり。個人としての交際。

**しかい** 恣行・肆行【名】ほしいままに行ふこと。氣ままなる行爲。

**しかい** 死交【名】『しいう(死友)を見よ』事ある折は、死を共にせんと誓ふ交はり。

**しかい** 冢交【名】『孟子の盡心上篇に『食而弗愛、豕之交之也』とあるに本づく。豕のごとくに交る意』人を待遇するに、禮を缺てせざること。

**しかい** 脂膏【名】〔一〕內體のあぶら。〔二〕勞役して得たる收益などの譬。膏血。

**しかい** 嗜好【名】たしなみこのむこと。すきこのみ。

**しかい** 志行【名】〔一〕こころがけと身持と。〔二〕志と行とのよろしきこと。

**しかい** 志向【名】〔一〕こころざし。意向。〔二〕こころざしの向ふかた。こころざしを成遂する上は、生ずるならんと豫期せらるる結果の總稱。

**しかい** 齒腔【名】〔醫〕しすねかう(齒髓腔)に同じ。

**しかい** 絲腰【名】胡絲の本體たる絲素を圍繞する膠質物。炭・酸・水・窒の四元素より成り、その性、膠(にかわ)に類す。

**しかう** 支考【名】〔人〕かがみしかう(各務支考)を見よ。

**しかう** 四皓【名】〔一〕〔佛〕「商山の四皓」を見よ。

**しかう** 諡號【名】おくりな(諡)に同じ。

**しかう** 師號【名】高僧に賜ふ法師・禪師・大師等の稱號。「紫衣(しえ)の師號を賜ふ」

**しかう** 氏號【名】うちと、なと。

**しかう** 試毫【名】かきぞめ。試筆。

**しかう** 絲毫【名】『絲も毫も小數の稱』極めて僅かなること。

**しかう** 詩豪【名】すぐれたる詩人、詩伯。

**しかう** 至剛【名】極めてこはきこと。

**じかう** 侈傲【名】おごること。

**じかう** 事項【名】事がら。箇條。

**じかう** 時効【名】〔法〕『英 Prescription』一定の期間或事實、狀態の繼續したる經過と、その他法定の要件とに因る、權利の取得又は消滅の方法。取得時効と消滅時効の二種あり。各その條を見よ。〔二〕みんじじかう(民事時効)の略。

時効の利益【名】〔法〕當事者の、時効によりて受くる利益。

**じかう** 侍講【名】〔一〕君主に侍して、書を講じ奉る人。侍讀。〔二〕明治十九年宮內省官制改正以前、同省に置かれし職員。天皇に侍して、書を講じ奉りたり。〔三〕東宮職に置かれ、東宮に侍讀・進講して、御學德を涵養することを掌りし高等官。始は東宮侍講と稱し、後草に侍講と稱せられしも、大正元年東宮職官制中を改正し、侍講の條を削除せらる。

**じかう** 時好【名】時のはやり。時代のこのみ。

**じかう** 寺號【名】寺の名號。

**じかう** 次號【名】新聞・雜誌などの、遞次に發行する號。

**じかう** 字號【名】活字の大小の號。

**じかう** 時號【名】當時に名あること。その時の評判。東鑑、長房・保教等、本自芸、爲得時號」

**じかうおんぷ** 次高音部【名】〔音〕『英 Mezzo-soprano』人聲の區域を大分したる中の、第二の高き區域、即ち高音部と中音部との中間に位するもの。女又は少年の中位に高き聲。

**しかう-き** 試硬器【名】鎖物の硬度を精密に計る器械。「大鎌の略。

**しかうき** 施行期【名】〔一〕無行する時。〔二〕

**しかうきげん** 施行期限【名】〔法〕法令がその拘束力を實際に發生する期日。我が國にては、公布の日より起算し、滿二十日後とし、特別の期限を定めたる者は、この限にあらずと規定せらる。施行期日。施行時期。いしかうしゅぎ(異時施行主義)。どうじかうしゅぎ(同時施行主義)參照。

**しかうき-きじつ** 施行期日【名】前條に同じ。

**しかうき-きそく** 施行規則【名】特定の法律又は命令の施行に關する事項を定めたる規則。執行規則。

**しかうきん** 紙胥琴【名】長方形の匣の中に弦を發すべき裝置を設け、別に樂譜を刻みたる厚紙ありて、これを匣に插み、把手を取りて廻せば、自然に樂譜通りの音を發するやうに仕掛けたる洋樂器。著音器の輸入以前に流行せり。

(んきうかし)

**しかうく-わつどう** 思考活動【名】〔哲〕じかう(思惟)〔二〕に同じ。

**じかうく-わんせい** 時効完成【名】〔法〕時効が、一定の期間繼續し終りて、その實効を生ずるに至りたること。

**しかうこもんふ** 至高顧問府【名】さいかうこもんふ(最高顧問府)に同じ。

**しかうさいそく** 施行細則【名】特定の法律又は命令の施行に關する事項の細則。

**しかうさはう** 思考作用【名】〔哲〕じかう(思惟)〔二〕に同じ。

**しかうじき** 施行時期【名】〔法〕しかうきげん(施行期限)に同じ。

**しかうして** 而して【接】『然しての音便』きて。さうして。しかして。

**しかうじやう** 施行狀【名】しぎやうじやう(施行狀)を見よ。

**しかうしよ** 施行書【名】せぎやうしよ(施行書)を見よ。

**しかうせ** 至高善【名】〔哲〕さいかうぜん(最高善)に同じ。

**しかうそ** 嗜好素【名】脂肪素とは別にして、食品に美味を與へ、また消化力を補助し、なほ神經系を興奮せしむる食料及び飲料。最も普通なるは酒精飲料にして、その他、珈琲・茶・カカオ・煙草など、嗜好料。

**しかうち** 施行地【名】法規・命令の施行せらるる土地。

**じかうちゆうだん** 時効中斷【名】〔法〕『英 Interruption of prescription』時効の進行中、時効の要素と兩立すべからざる事實の發生したるため、その既に經過せし期間の利益を消滅せしむること。

**しかう-つうしん** 視號通信【名】〔兵〕彼此兩地點に在りて、互に目視し得る器具を用ひ、符號又は相圖をなしつつ行ふ通信法。即ち手旗信號・回光傳信器・火箭など。

**じかう-ていし** 時効停止【名】〔法〕『英 Suspension of prescription』法律に定めたる原因によりて、一時、時効の進行を中止すること。時効の進行中における停止と時効の完成期における停止との二種あり。

**し-かうり** 視高度【名】〔天〕『英 Apparent altitude』地球上の地平面より觀たる高度。しんかうど(眞高度)參照。

**しかう-にちげん** 施行日限【名】〔法〕しかうきげん(施行期限)に同じ。

**じかう-はうき** 時効拋棄【名】〔法〕『英 Renunciation of prescription』時効の進行中、既に經過せし期間に對する利益を拋棄すること。

**しかう-ひん** 嗜好品【名】人類各自の嗜好に投ずる食品、即ち各嗜好素の混合物、或は嗜好素と食素との混合物の總稱。

**しかうら** 鹿占【名】古の占法の一。鹿の肩骨を燒き、その裂れ方によりて、吉凶を判ぜしもの。

**しかうらゐ** 事項欄【名】文書中、事項を記載することなきもの。犬猫・鼠などの類。これに屬す。

**しかう-れう** 嗜好料【名】しかうそ(嗜好素)に同じ。

しかう　しかう　しかう　

**しがえん** 歯牙縁【名】〔植〕しが 歯牙 ㊀に同じ。

**しか-おどし** 鹿威【名】弓矢などの形を作りて、鹿の畠など覆をおどし防ぐこと、又その物。一代男、あらけなき男、四五人竹の矢鏑(ヤカブラ)鹿おどしの弓ノ山梻(ツバキ)振上げて」

**しか-かくげん** 四箇格言【名】日蓮上人が、他宗折伏のために唱道せし「真言亡国、律国賊、念佛無間(ムケン)、禪天魔」の四句。真言宗は国を亡す邪教、律宗は小乗教を末法に弘めて、大乗の地を奪へるが故に、国賊に、同経の明文に照して、その行者は無間地獄に墮すべく、禪宗は教外別傳・不立文字を立て、釋迦の教を奉ぜざるが故に、天魔の所篤なりとていへるもの。

**しかがれゆり** 鹿隠百合【名】〔植〕うばゆり 姥百合)に同じ。

**しか-かすげ** 鹿糟毛【名】馬の毛色の一。白きさし毛のある鹿毛(カゲ)。

**しか-がは** 鹿革【名】鹿の鞣皮(ナメカハ)。柔軟にして、精密なる機械の研磨、又は時計を包む等の目的に多く鹿用せられ、その他、袋物類にも使用せらる。

**し-かかり** 仕掛【名】しかかること。

**し-かかる** 仕掛る・仕懸る【動四他】『仕は爲(シ)の義』㊀なし始む。㊁著手して、半に至る。

**しかぎ** 鹿木【名】『一説に鹿垣(シガキ)の略、しがきなりともいふ』狩人の隱れ居て、鹿の来るを待つところ。高木の股に、横木を結びつけて、向よりは見えぬやうに造る。〔古語〕夫木「ますらをのしかぎの影もあらはれて忍ぶ隈なき秋のよの月」

**じかきてい** 自家規定【名】〔哲〕『英 self-determination』内的原理、即ち主觀に供はる原理に基づく規定決定。自己規定。

**しかきてう** 鹿暇歸朝【名】外國在勤の官吏の、休暇を得て、本國に歸ること。「く。

**し-かく** 刺客【名】暗殺を行ふ人。せきか

**し-かく** 詩客【名】詩の法式また品格。

**しかくかう-たう** 私學校黨【名】西郷隆盛の職を辭して、郷里鹿兒島に歸りし後に建てたる私學校の生徒の仲間。のち隆盛を擁して、西南の亂を起すに至れり。

**しかく-き** 視覺器【名】〔醫〕『獨 Sinnorgan 又 Sinneswerkzeug』視覺を司る器官、即ち眼の類。視器。視官。

**しかく-くわん** 視學官【名】㊀北海道廳及び各府縣廳に屬し、上官の命を受けて、管内における學事の視察、その他學事に關する事務を掌りし奏任官。明治三十二年設置。同三十八年廢止。㊁文部省に屬して、學事の視察を掌り、また省内の事務を執りし奏任官。今は督學官と改稱せらる。㊂朝鮮總督府及び臺灣總督府に屬して學事に關する視察及び事務を掌る奏任官。

**じかく-くわん** 時角環【名】〔天〕『英 Hour-circle』赤道儀において時角を示す環。

**しかく-けい** 四角形【名】しくけい(四邊形)に同じ。

**しかく-しかい-の-まつり** 四角四堺祭【名】次條に同じ。三中黙『公家被行三四角・四堺之祭』立正安國論『天地神祇を拜して、四角四堺の祭祀を企て』

**しかく-しきやう-の-まつり** 四角四境祭【名】㊀古、朝廷より使を發して、病人の家の四隅と國の四境とにて、疫神を祭りしこと。鎌倉幕府にても、これに倣ひて、鎌倉地内にて行ひたり。四角四堺の祭。四方四角の祭。東鑑、被し行三四角四境祭御所長角・巽角…坤角・乾角…小袋坂…小壺・六浦・固瀬河」㊁陰年朝廷にて、六月三十日に行はれし鎮火祭・道饗祭の稱。公事根源『鎮火・道饗の祭をば、四角四境の祭と申也』

**しかく-しんさ-ゐゐん** 資格審査委員【名】貴族院及び衆議院における委員の一。貴族院にありては、議院議員の資格及び選擧に關する爭訟を審査する常任委員。衆議院にありては、議院議員の資格の異議を審査する特別委員。衆議院における選擧に關する爭訟判決の權は、司法裁判所に屬せしめ、委員はこれを有せず。

**しかく-しめん** 四角四面【名】㊀しかく 四角四面に同じ。㊁至極まじめなること。しかつめらしきこと。春花王丸『日頃より、四角四面な源五兵衛どの、かやうな遊所なぞへ參るやうな仁ではないが』

**じかく-しや** 自覺者【名】自覺したる人。大悟徹底したる人、安心を得たる人、覺者。

**じかく-しようめい-じよ** 資格證明書【名】その資格を證明する文書。

**しかく-する** 四角錐【名】〔數〕『英 Quadrangular pyramid』底面の四角形をなせる角錐。

**しかくせい-かんぞくかく** 視覺性音續覺【名】〔音〕かんぞくかく(音續覺)を見よ。

**じかく-だいし** 慈覺大師【名】ゑんにん(圓仁)を見よ。野守集『慈覺大師は、唐行に如法法花を師として、儀師のなじみの摩を、儀法の妙典にとどめ』

**しかく-たう** 四角塔【名】〔數〕『英 Quadrangular tower』底面の四角形をなせる角塔。

**しかく-だけ** 四角竹【名】〔植〕しほうちく(四方竹)に同じ。

**しかく-はちめん** 四角八面【名】前條に同じ。太平記、四角八方に走りまはって」

**しかく-はばう** 四角八方【名】すべての方面。

**しかく-ばる** 四角張る【動四自】㊀四角の形になる。かどばる。㊁殊更に威儀を裝ふ。しかつめらしく振舞ふ。ちちとけず。

**しか-くび** 鹿首・鹿頭【名】髭笹の一部。上端の、後方へ斜に屈折したる部分。

**しかくまき** 四角播【名】〔農〕方形を蒔き、その四隅に種子を播くこと。種子の相互の間隔相等しく、且つ規則正しきため、管理に便なり。方形播。しかくうゑ(四角植)參照。

**しかく-むぎ** 四角麥【名】〔植〕大麥の一種。穗の縁に四條に列なれる粒より成れるもの。四條麥。

**しか-くろめし** 志賀黑主【名】しが(志賀)㊁に同じ。

**しか-くわいまく** 歯牙外膜【名】〔醫〕しとまく(齒根膜)に同じ。

**しかくゐ** 四角闊【名】〔植〕莎草(ハマスゲ)科に屬する多年生の草。莖は高さ一二尺、細長綠色にして、ほぼ方形をなす。所在の原野・水濕の地に自生す。葉は莖の下部に、小鱗片となりて存するのみ。八九月頃、莖頂に淡褐色長楕圓形の穗を著く。

**しかく-ゐゐん** 視學委員【名】文部大臣の命を承けて、特に指示せられし學事を視察する委員。

**しかけ** 仕掛・仕懸【名】㊀しかくること。爲しはじむること。學生集『白柄の長刀欄干に横はし、仕掛を待てば』㊁爲しはじめて、半ばなること。㊂事を行ふための手段、もちかかた。かまへ。手くだ。策略。一代男『すゐもしき男ははまもせ、初心なる人には泪とぼさせ、喜ばしし、一度に仕懸のかはること、うろたへたる神もだまされたまふべし』心中宵庚申『手の中つまむも一昔、古い仕掛が口舍なり』㊃飯を炊き、又は湯をわかす仕度。生玉櫻『ずれば、これから、湯のしかけと云ひつつ、あたり見まはして』㊄裝置。からくり。曾我馬問田川『此の鎗は龍星と申す花火、水に入り、雲に入り、樣樣の仕掛あり』㊅芝居にて、早變(ハヤガハリ)・幽靈などの役を勤むる者の、道具又は衣裳に施す、特種の裝置。またこれに要する道具又は衣裳を仕掛物といふ。㊆(商)あらたに資建(ツクリ)又は買建をなすこと。(取引所の語)㊇さくり(又探)㊈に同じ。㊉かいどり。うちかけ。かけ。〔補〕

**しかけはなび** 仕掛花火【名】或形に模して組立てたる花火。點火すれば、次第に擬せる全形を現出す。しかけ。しかけもの。(打上げに對して)

**しかけ-ぶんこ** 仕懸文庫【名】〔書〕しかけ(仕懸)㊁を見よ』山東京傳の著したる酒落本。遊女の手管を記したるもの。一卷。

**しかけ-もの** 仕掛物【名】㊀しかけたるもの。㊁しかけ(仕掛)㊀を見よ。㊂しかけはなび(仕掛花火)に同じ。

**しか-し** 零餘子【名】むかご(零餘子)を云ふ。〔甲斐の方言〕

**しか-さま** 然樣【名】さやうなる有樣。〔古語〕

**しか-ざる** 鹿猿【名】安藝國宮島にて作り賣る玩具。鹿の上に猿の乘りたる形に作り、又は鹿と猿を別別に作りたるものあり。宮島は鹿と猿との名物の地なるが故なり。

**しかし** 併【接】しかしながら(乍併)の略。

**しか-しか** 【副】毒蟲に螫されたどしたる局部の痛む感じ。ちくちく。しかほか參照。

**しか-じか** 然然【句】しか然の條下を見よ。

**しか-じか** 云云【句】しか然の條下を見よ。

**しか-しき** 四家式【名】むかしし(支和歌四式)に同じ。

**しがしさう-こつまく** 歯牙歯槽骨膜【名】しとまく(齒根膜)に同じ。

**しか-しがろん** 紫家七論【名】〔書〕才德兼備七事共具作修撰平序文章無愛作者本意二部大事正佛誤說の七項を設けて、紫式部と源氏物語とに就きて論述せるもの。一卷。安藤爲章(ヲサフ)の著。一名、紫女七論。

**じが-じつげん** 自我實現【名】〔哲〕『英 self-realisation』自己の本來具有する諸性能を圓滿に實現・發揮すること。自己實現。自我發展。自我充實。

**じが-じつげん-しゆぎ** 自我實現主義【名】〔哲〕次條に同じ。

**じが-じつげん-せつ** 自我實現說【名】〔哲〕『英 Theory of self-realisation』自我實現を吾人の道德的行爲の最高目的となす倫理學說。この學說を大成するものは、英人グリイン(T. H. Green)なり。

**しか-して** 然して・而して【接】しかうして





**しかく** 紙格【名】紙にて張りたる格子。

**しかく** 資格【名】身分地位、又その要件。

**しかく** 四角【名】㊀四つの角(カド)ある形。方形。矩形。㊁四方の隅。よすみ。四隅。㊂かどかどしき性行。性行の圓轉・滑脱ならぬこと。嚴格。四角四面。

**しかく** 死角【名】〔兵〕銃砲の射界の内にて、しかも彈丸の達し得ざる處。

**しかく** 視角【名】〔理〕『英 Visual angle』物體の兩端より見る人の眼の水晶體の、光心を通過する二光線のなす角度。光角と相俟ちて、眼が物體の大小・遠近を認識する要素をなす。但し光角をも、視角と呼ぶものあり。

**しかく** 視覺【名】〔哲〕『英 Visual sensation』眼に依りて生ずる感覺。特種感覺中の主要なるものにて、眼球の網膜に分布せる視神經に光線の觸るるに因りて、意識に一種の變化の起るもの。分ちて光覺・色覺の二とす。視感。

**しかく** 視覺の中心【句】してん(視點)を見よ。

**しかく** 始覺【名】〔佛〕三覺の一。佛道を修行して、成佛するに至るまでの間に練磨する智慧。本覺の内薫と師教の外緣とに由りて發達す。(本覺に對して) 盛衰記、始覺本覺、身を離れず」

**しかく** 仕掛【名】㊀しかかる(仕掛る)に同じ。㊁動作を仕向く。堂五、いつしかと、きたなきわざをしかけ來らせたまへれば」㊂敷をたき、又は湯をわかす仕度をなす。無名抄『柱焚・奥の臺子もしかきや、庭の小座敷も掃除しや」㊃裝置をなす。工夫を施す。「仕懸く」

**しかく** 爾く【副】そのやうに。しか。

**しかく** 詩學【名】㊀詩に關する學問。㊁『英 Poetics』詩を敎ふる學科。詩論の内容と形式とに關する學問。

**しかく** 四學【名】じがつ(四術)に同じ。正法眼藏、古には、詩・書・禮・樂を以って、國を治むる四術とす。金・石・絲・竹の樂は、四學の一にて、專ら政をする本なり」

**しかく** 史學【名】歴史の學問。

**しかく** 死學【名】實用に適せぬ學問。しにがくもん。

**しかく** 斯學【名】この學問。「斯學の大家」

**しかく** 仕學【名】『論語の子張篇に「子夏曰、仕而優則學、學而優則仕」とあるに本づく』官事と學事と。官に仕へて、功績を擧ぐると學術と。

**しかく** 志學【名】㊀學問に志すこと。㊁『論語の爲政篇に「吾十有五而志三于學」とあるに本づく』男子の十五歳。

「志學の歳の始めより、六義の道に長せざりせばこそ」

**しかく** 視學【名】㊀教育事業の視察。㊁北海道廳及び各府縣廳に屬し、視學官の指揮を受けて、管内における學事の視察、その他學事に關する庶務に從事する判任官。また郡に郡視學、各島廳に島廳視學あり。㊂文部省に置かれ、大・中・小の三等に分れて、學事を掌りし判任官。明治六年設置、同八年大視學は奏任となりしが、同十年廢せられたり。

**しかく** 私學【名】㊀『史記の李斯傳及び秦の始皇本紀などに出づ』私の考へより出でし說。私說。㊁私立の學校。私學校。(官學にして)

**しかく** 四嶽・四岳【名】㊀古、支那にて、四方の諸侯の事を掌りし官。羊蘇、四岳、八元の民を擧げつる」㊁(地)山城國の如意嶽・愛宕(アタゴ)山・比叡山及び日向國高千穗峯の併稱。

**しかく** 試樂【名】音樂をまづ試むること。古、御賀・行幸等の時、當日の舞樂を、期に先だち試奏する等にいへり。どうがく(調樂)參照。菅氏行幸近くなりて、しかくなどののしる頃ぞ、命婦は參れる」

**しかく** 仕覺【名】用意。準備。才覺。一代女『何始末して、樣に附くべきしかくもなく、年月酒に暮れて」

**じ-かく** 自覺【名】㊀みづからさとること。己れの價値・分際などを意識すること。㊁(佛)みづから大悟徹底して、安心を得ること。㊂(佛)三覺の一。阿羅漢の具有せるもの。㊃(哲)『英 Apperception』論理上、自己のいかなるものにして、社會にいかなる關係を有するかを了解し、また宗教上、宇宙の實在たる神等といかに關係するかを了解すること。宇宙の眞理を知りて、自己の行のその眞理と合一すること。少我を捨てて、大我に歸すること。じいしき(自意識)。さうかく(統覺)參照。

**じかく** 寺格【名】寺の格式、即ち門跡・本山・末寺・別院などの類。

**じかく** 時角【名】〔天〕『英 Hour angle』時圈と子午線とのなす角の稱。春分點の時角を恆星時、眞太陽の中心の時角を眞太陽時、平均太陽の中心の時角を平均太陽時といふ。

**じかく** 磁殼【名】〔理〕『英 Magnetic shell』きはめて薄き馬蹄狀の磁石の、その附磁の方向がその面に直角なるもの。即ち一面は北極にして、他面は南極なるもの。

磁殼の強さ【句】〔理〕磁殼の厚さとその受磁の強さとの相乘積。

**じかく** 耳殼【名】〔醫〕『獨 Ohrmuschel』外耳の一部。左右顳顬(コメカミ)部の下に位し、外皮の襞襞と軟骨とより成りて、貝殼狀をなし、一端は逆離し、外部より來る高聲を反射して、耳孔に入りやすからしむ。人類以外にても、哺乳動物は概ねこれを具ふ。俗に、これを耳と呼ぶ。耳翼。

**じかく** 慈覺【名】〔人〕ゑんにん(圓仁)を見よ。

**じかく** 耳學【名】書物を見ずに、ただ耳にその說を聽くこと。うけがく。ききおぼえ。みみがくもん。ききがくもん。耳食。

**じ-がく** 字學【名】文字の構造・組織などを研究する學問。說文(ヒムン)學。

**しかく-あんどん** 四角行燈【名】方形なる行燈。(丸行燈に對して) 曾我物語、大井荘焚、臺所には、四角行燈」

**しかくう-ゑ** 四角植【名】〔農〕苗を移植するに、四角播(ヲサフ)と同樣の方法を取ること。その利もまた四角播に同じ。方形植。

**しかくかう** 私學校【名】㊀しかく(私學)㊁に同じ。

(両して)に同じ。

**しかしながら** 乍併【副】さりながら。さはいへど。されど。しかし。盛衰記、衆徒の咎には非ず。しかしながら天魔の所爲にこそ」

**じか-じやうざう** 自家醸造【名】酒・醤油などを、自家にて醸造すること、又その酒。醤油など。家醸。

**じか-じゆうじつ** 自我充實【名】〔哲〕『英Self-fulfillment』じがじつげん(自我實現)に同じ。

**しかしよ-の-かいだん** 四箇所戒壇【句】しかいだん(四戒壇)に同じ。

**しかす** 敷かす・布かす【動四他】しく(敷く)函の敬語。しきます。治めたまふ。しめしめす。ふさしかす(太敷かす)參照。〔古語〕「見よ。

**しかす** 若かす【句】しく(若く)の條下を見よ。

**しかすが** 然管【名】(地)三河國賀茂(カモ)郡にありし村。明治三十九年下地(ヤチ)町の一部となる。しかすがのわたり(然管渡)參照。萬葉、ありそ越す浪はかしこし然管に海の玉藻のにくくあらずて」

**しかすが【聽】さすが**(流石)に同じ。〔古語〕萬葉、かきくらし雪はふりつつしかすがにわぎへの岡に鶯ぞ鳴く」

**しかすがの-わたり** 然管渡【名】(地)王朝時代に、三河國賀茂(カモ)郡然管村にありし吉田川(一名、豊川)川口の渉津。古來、歌の名所たり。しかすがの(然管)參照。其一渡は、しかすがのわたり」全集「拝風の輪に、しかすがの渡、行く人立ちわづらふかた書ける所を詠める」

**しかーすゐなら** 四家髓腦【名】〔書〕無名抄・綸語抄・奥義抄・童蒙抄の四部の歌學書の併稱。

**じか-せん** 耳下腺【名】〔醫〕『羅Glandula parotis』唾液線の一。外耳道の下前部に在りて、下顎後窩を充塡し、上顎の第二小臼齒の所に開口す。三種の唾液線中最も大なり。

**じか-せんえん** 耳下腺炎【名】〔醫〕『羅Parotitis』耳下線の腫るる病。流行性と機發性の別あり。前者は、專ら小兒を襲ふ。俗に阿多福風(オタフフ)といふ。後者は、口內・顏面の炎症及び腸チフス・猩紅熱等の傳染病に來る。症候は、その部位の緊張性腫脹と疼痛とを起し、從って開口・咀嚼の困難を來す。大抵一二週間にして治癒す。

**しかせん-づ** 示荷線圖【名】『英Load diagram』又load curve 示荷は負荷を示す義。ふか(負荷)を見よ』發電所又は配電所における供給力の變化を示す曲線。

**しかた** 仕方【名】『仕は爲(シ)の義』【一】なす手だて。ふるまひ。方法。書紀、さをとめに仕方望まん信夫摺」【二】身のこなし方、身ぶり。「仕形」

**しかーだいじよう** 四箇大乘【名】(佛)しけだいじよう(四家大乘)に同じ。

**しかたなし** 仕方無し【形ク】『仕は爲(シ)の義』せんかたなし。止むを得ず。

**しかたなしに** 仕方無しに【副】すべきやうもなくて、せんかたなく。やむをえずに。

**しかた-のう** 仕形能【名】江戸時代に社地その他にて、能の眞似を演じたる一種の興行物。

**しかた-ばなし** 仕方咄・仕形話【名】【一】手まね・身振に由りてはなす話。小町鬼おもしろきしかたばなしや富士の雪」【二】萬治・寛永の頃行はれし笑話。今の落語に似て、粗朴・誠樸なるもの。

**しかた-ばなし** 私可多咄【名】〔書〕笑話を集めたるもの。仕方咄の眞と稱せらる。五卷。中川喜雲の著。

**しかた-まひ** 仕方舞【名】『單は、紙片に記載せる事物の稱』その時の相場づけ。相場表。

**しかち** 仕勝【名】【一】爲すだけ勝となること。用明天皇戴人集、手柄は仕勝の、いくさの場(ニハ)【二】とかくに爲す癖あること。

**しかちいぶ**(英Sphiriza)【名】油繪を書きて、早く乾かすために用ふる油、即ち乾性油。その條を見よ。

**じか-ちゆうさく** 自家中毒【名】〔醫〕『獨Autointoxikation』自體內に生ぜる毒物のために起る中毒。體內の或臟器の異常に基づくものにして、例へば胃腸病の結果、尿毒症を發する類。

**しか-つ** 志賀津【名】(地)しがのつ(志賀津)に同じ。雜談集、みるめなきしがつの蜑のいさりぶね君をばよそにこがれてぞ經る」

**しかつ-し-ところ** 然つし處【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しか-つづみ** 鹿鼓【名】そうづかうず(漆水唐白)を云ふ。(上野國の方言)

**しか-づの** 鹿角【名】鹿の角。ろくかく。

**しかつべ-の-まがほ** 鹿部部眞顏【名】(人)きやうがうがほ(狂歌堂眞顏)に同じ。

**しかつべ-らし**【形二】【一】然るべきさまなり。もっともらし。しかつめらし。【二】ようだいぶりてあり。まじめなり。しかつめらし。

**しか-つめ**【名】まじめ。眞摯(シン)。「さうしかつめに出られては困る」

**しかつめ-がほ** しかつめ顏【名】しかつめらしき面。孔子がほ、まがほ。

**しかつめ-らし** 自家傳染【名】〔醫〕『獨Autoinfection』健康體の消化器・呼吸器・その他の粘膜に附着せる病原菌の、宿主體の强壯なる間は潛伏し、發病素因强盛となるに及びて、發育・蕃殖し、發病せしむることと。その病原菌は、もと外界より來りしものにて、體內に自生せしにはあらざれども、侵入するや、直ちに發病せしむる普通の傳染と區別して、特にいふ。

**しかーてら** 志賀寺【名】天智天皇の七年、勅に由りて、近江國志賀郡に建てし寺。今の大津市の北方にあり。本稱は崇福寺、志賀山寺ともいへり。十五大寺の一。天喜承保の間、堂塔丹興の事ありしが、その後衰へて、今は存せず。其寺は壺坂・笠置(ヤウ)・法輪・高野は、弘法大師のおんすみかなるが、あはれなるなり。石山・粉川・志賀」

**じか-とうちやく** 自家撞著【名】『もと禪家の語にて、禪林類聚の看經門に「南泉云、須彌山高不ル見ル嶺、大海水深不ル見ル底、籃ル土揚ル虛無ル處、毋頭撞ニ著自家底ニ」とあり』同一の人の言論・行爲などが、前後背反すること。

**しかーとき** 己時【名】わが心のままなる時。わが得意の時代。わがよ。〔古語〕萬葉「やましろの久世の社の草なび手折りそしがときたち榮ゆともなほ手折りそ」

**しかと-へい** 四箇度幣【名】新年(ニヒ)・月次(ツキ)・例幣・新嘗(ニヒ)の四度に神に獻る幣帛。

**しかな** 【助】かなを見よ。

**しかな-がほ** 無然顏【名】そしらぬ顏。

**しかなから** 然ながら【副】さながらに同じ。〔古語〕大和物語、物かきふるひいにし男なん、しかながら運びかへして」

**しかながら** 然ながら【句】しか(然)の條下を見よ。

**しかなく-さ** 鹿鳴草【名】(植)はぎ(萩)の異稱。〔古語〕秋長集、都にも咲き匂へども鹿の鳴く名に負ふ草は秋の山里」

**しかな-くさ** 鹿鳴草【名】(植)前條に同じ。〔古語〕

**しかなし** 【形ク】まづし・貧し)に同じ。

**しかなれ** 然なれ【句】しか(然)の條下を見よ。

**しかなれこそ** 然なれこそ【句】しか(然)の條下を見よ。

**しかなれば** 然なれば【句】しか(然)の條下を見よ。

**しかぬ** 鹿奴【名】(地)しかの(鹿野)を見よ。

**しかぬ** 仕兼ぬ【動下二他】『仕は爲(シ)の義』爲さじとはいはれず。或は爲すやも知れず。

**しかね** 【名】(植)こん(昆布)を云ふ。(渡島國松前の方言)

**しかの** 鹿野【名】(地)因幡國氣多(ケタ)郡にある町。池田氏の支封三萬石の館ありし地。古稱「鹿奴」(シカヌ)。

**しかの-うら** 志珂浦・志賀浦【名】(地)筑前國志賀島の海岸。萬葉、しかのうらにいさりするあま家人の持ちこらむにあかしつるかも」

**しか-の-うら** 志賀浦【名】(地)近江國志賀の海岸。





**しか-の-おほつ-の-みや** 滋賀大津宮【名】天智天皇の皇居。近江國滋賀郡滋賀村にありしもの。天武の六年大和國飛鳥(アスカ)より移り給ひ、天皇の崩後、壬申の亂起り、弘文天皇崩じて遂に廢す。存續僅かに五年。大津宮。志賀の宮。

**しか-の-おほわた** 志賀大輪田・志賀大和【名】(地)『輪田は渡(ワタ)の義』古、志賀の都の地より對岸草津へ渡る琵琶湖の渡津。今の唐崎邊なりしなるべしといふ。萬葉、ささなみの志賀の大わたよどむともむかしの人にまたあはめやも」

**しか-の-しがらみ** 鹿の柵【句】しか(鹿)の條下を見よ。

**しか-の-しま** 志賀島・鹿島【名】(地)筑前國糟屋郡に屬し、福岡灣の東側を擁する島。周囲五里二十八町。干潮の際は、兩東角、陸地に接續し、海中道(ナカミチ)又は志賀の鼻と呼ばれ、景勝の地なり。島の南に方れる賀島村といふは、古は志珂郷といひ、「賀司・然」などとも書き、支那書には、倭加、倭書には「世界大明浦」と記し、神功皇后征韓の節、碇泊したまひしことあり。弘安の役にも、蒙古の來襲を受けて、古來その名著る。しか・志珂參照。

**しか-の-その** 鹿苑【名】(佛)ろくおをん(鹿野苑)に同じ。〔古語〕夫木「鹿の園にながめし花の色ながら霜もかはらぬ春のみやまぢ」

**しか-の-そのふ** 鹿苑生【名】(佛)前條に同じ。〔古語〕續千載、みな鹿の園生の風の音」

**しか-の-だいじ** 四箇の大事【句】だいじしがのたかあなほの-みや 志賀高穴穂宮【名】景行及び成務二天皇の六十年間の皇居。近江國滋賀郡穴太(アナホ)村に在りしもの。志賀の宮。

**しか-の-たま** 鹿玉【名】(植)深山の朽木に生ずる花紋ある茸。食ふべしといふ。

**しが-の-つ** 志賀津【名】(地)しがのうら(志賀浦)に同じ。

**しか-の-つま** 鹿の妻【句】しか(鹿)の條下を見よ。

**しが-の-はな** 志賀鼻【名】(地)しがのしま(志賀島)を見よ。「の條下を見よ。

**しか-の-はなづま** 鹿の花妻【句】しか(鹿)

**しか-の-はなざくもん** 鹿野武左衛門【名】〔人〕江戸辻講釋の祖。通稱は安次郎。日本橋の塗師・中橋廣小路の見世物場に出でて、仕形噺をなして名あり。事に坐して、伊豆國大島に流され、のち赦されて歸り、元祿十二年歿す。年五十一。鹿の卷筆・鹿野武左衛門口傳噺の著あり。

**しか-の-はふえう** 四箇の法要【句】しかえう(法要)の條下を見よ。

**しか-の-まきふで** 鹿卷筆【名】【一】色色の毛にて、螺旋形に卷きたる筆。大和國奈良の名產。一代男「難波江の……三軒屋に著きぬ。昔は、ここも遊女ありて、淡路に通ふ鹿の卷筆とうたひしが」【二】〔書〕鹿野武左衛門の笑話集。五卷。

**しか-のみ-ならず** 然のみならず【句】しか(然)の條下を見よ。

**しか-の-みや** 志賀宮【名】【一】しがのおほつのみや(滋賀大津宮)に同じ。【二】しがのたかあなほのみや(志賀高穴穂宮)に同じ。

**しが-の-みやこ** 滋賀都【名】近江國の滋賀大津宮の在りし處。**しがのおほつのみや**(滋賀大津宮)參照。千鳥ささなみやしがの都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」

**しか-の-やまごえ** 志賀山越【名】(地)しがやま(志賀山)を見よ。後撰、櫻花道見えぬまで散りにけりいかがはすべき志賀の山ごえ」

**しか-は-あれど** 然はあれど【句】しか(然)

**しかーばかり** 然許【副】さばかり(然許)に同じ。〔古語〕萬葉、うはべなきものかも人はしかばかり遠き家路をかへす思へば」

**じかばち** 似我蜂・蟷螂【名】〔動〕鼎翅類(ケイシ)に屬する昆蟲。體長七八分、黑色にして、頭胸に粗生せる黑褐色の細毛あり。腹部の前端は細長なる柄をなし、第二腹節の末端の兩側及び第三腹節は赤黃色なり。翅は透明にして、やや黃色を帶ぶ。じがさ・さりばち・さすれむし・さそり。腰細蜂。

**じが-はつてん** 自我發展【名】〔哲〕『英Self-development』じがじつげん(自我實現)に同じ。「同じ。

**しかは-とう** 四側胴【名】くつけ(屈戌)に

**しかばね** 屍・尸【名】『死(シ)かばねの義』屍體。

**しかばねをにならふ-つむじ** 負屍旋毛【名】ふし負屍に同じ。

**しかばね-をはさむ-つむじ** 挾屍旋毛【名】けふし挾屍に同じ。

**しかふ** 指甲【名】ゆびの爪。

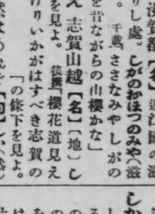
**しかふ** 紫甲【名】し天(紫衣)に同じ。

**しかふ** 仕替ふ【動下二他】『仕は爲(シ)の義』なしあらたむ。なしかふ。しかへす。一代女、疲癖の蓋(ケ)を仕替へて、肩を脫げば、この二三日は、そら手が起りましたと見ぬ顏をする」

**しーがふ** 四合【名】【一】一合の四倍。【二】香罐の灰を四方より壓附けたること。五合・六合といふも、これに準ず。

**しがふ**【動四他】草などを束ねて結び合はす意なりといふ。(古語)山家、みま草に原の小薄しがふとてふしどあせぬとしか思ふらん」

**しか-ぶえ** 鹿笛【名】牝鹿の鳴く音に擬したる笛。獵師の鹿を呼集むるに用ふるもの。鹿の耳の皮、鹿のほねどもりの皮、又は蝦蟇(ヒキ)の皮を張りて作る。俗說には片方を女のはける足袋、片方を牝鹿の頭の骨にて作るといひ傳ふ。ししぶえ。


(えぶかし)

**しかぬる** 仕被る【動四他】『仕は爲(シ)の義』なしあやまつ。しそこなふ。しくじる。

**じか-へう** 時憑表【名】〔商〕さうばづけ(相場附)【二】に同じ。

**しかへし** 仕返【名】しかへすこと。

**しかへし-の-たま** 死返玉【名】十種神寶(トクサノカミノタカラ)の一。(古語)

**しかへす** 仕返す【動四他】『爲(シ)返すの義』【二】再びなす。しかふ。しなほす。【三】仇に報ゆ。報復す。復讐す。

**しかほ** 新河浦【名】雅樂の曲名。壺越(ツボコシ)調の高麗樂。

**しかほか**【聽】毒蟲に螫(サ)されなどしたる局部の痛み、且つほてる感じ。しかしか參照。

**じか-ほけん** 自家保險【名】〔商〕『英Self-insurance』保險法の一。保險料を保險者に支拂ひて、損害塡補の資に任ぜしむる代りに、その保險料を別途に積立金として貯藏し、損害を被りたる時、その積立金の中より塡補するもの。即ち一人にて、保險者・被保險者・保險契約者の三者を兼ぬる仕組にて、積立つる保險料は、損害發生の統計上より豫定す。自己保險。

**じか-ほぞん** 自家保存【名】〔生・哲〕『英Self-preservation』生物が、自己の生命を保護し、存續せしめんとすること。自我保存。「同じ。

**じが-ほぞん** 自我保存【名】〔生・哲〕前條に

**しかほふえん** 四箇法要【名】〔佛〕大法會の時、必ず行ふべき肝要なる四つの佛事。即ち梵唄(ボバイ)・散華(サンゲ)・焚香・錫杖。

**しかま** 飾磨【名】(地)【一】播磨國十三郡の一。郡役所を姫路市に置く。【二】播磨國飾磨郡にある町。船場(ハバ)川支流の河口に位する港にて、即ち古の飾磨津(ツ)なり。姫路市の南五十町。古はその細江町に甲屋ありて、褐(カチ)染に名あり。「鹿問」・思賀麻などとも記せり。家隆卿集、しかながらしかまの市のかんびさし久しき御代につくりかさねよ」

**飾磨の褐**(カチ)【句】褐は假借の字。かちいろ(褐色)を見よ』飾磨町名產の褐(カチ)染。萬葉、我が懇はあひそめてこそまさりけれ飾磨のかちの色ならねども」

**しかま** 色麻【名】(地)陸前國奥郡の一。延喜式時代に陸奥三十五郡中一にて、今は當國賀美(カミ)郡の村名に殘れり。

**しかま**【名】たる(巻氷)を云ふ。(陸奥國津軽の方言)

**しかま-とう** 飾磨甲【名】次條の音便。

**しかま-こん** 飾磨紺【名】〔地〕しかま、飾磨に同じ。

**しかまつ** 飾磨津【名】〔地〕しかま、飾磨に同じ。

**しかま-の-うみ** 飾磨海【名】〔地〕播磨國飾磨郡の南方にある海。

**しかま-ぶね** 飾磨船【名】播磨國飾磨より、常に薪炭を載せて、大阪に通ふ小船。播磨うはに。いぬころし。

**しかみ** 鞏【名】■〔建〕木鼻(ハナ)の側板(イタヅラ)猿頭(サルガシラ)などにある唐草などの模様の組合ひて決れたる部分。■〔能(ノウ)〕の假面(ケメン)の一。「羅生門」「紅葉狩」「大江山」「土蜘蛛」などの曲に用ふ。

**しかみ** 獅嚙【名】兜の眉庇(マビサシ)の上、火鉢の足などに、飾として用ふる獅子の顔。

**しかみ-わほほど** しかみ車前【名】〔植〕おほほこ(車前)に同じ。

**しかみ-がほ** 鞏顔【名】しかみづら(鞏面)に同じ。

**しかみ-くさ** 鹿見草【名】〔植〕しらはぎ(白萩)を云ふ。〔續河國の方言〕

**しかみ-せん** 鞏錢【名】質の粗惡なる錢。〔懷川時代の語〕

**しかみ-つく** 鞏固自【動四自】力を込めてつかみかかる。強く取附く。著聞集「敵にしがみつきて、刀を奪ひとりて」

**しかみ-づら** 鞏面【名】しかみたる顔。しかみがほ。しかめづら。浦面。

**しかみ-ひばち** 獅嚙火鉢【名】金屬製の丸火鉢の足に、獅嚙の飾あるもの。傳聞雜誌(秋色)「ひとりゐやしかみ火鉢も夜牛の伽」

**しかむ** 鞏む・蹙む【動四自】顰の皮ちぢむ。眉の根に皺よる。しわむ。

**しかむ** 鞏む・蹙む【動下二他】しかましむ。

**しかん** 支監【名】監獄の支所。

**しかん** 支干【名】かん(干支)に同じ。今國語生氣、誕生の支干年月をいふて見せん。

**しかん** 支桿【名】しかうう(支柱)に同じ。

**しかん** 枝幹【名】■えだとみきと。幹枝。■末と本と。ほんまつ。幹枝。

**しかん** 視感【名】しかく(視覺)に同じ。

**しかん** 私憾【名】わたくしのうらみ。我が遺恨。

**しかん** 四姦【名】『左傳の僖公二十四年の條に出づ』四姦の惡德、即ち姦(カタ)とて、耳に五聲の和を聽かねことと、眸とて目に五色の章を別たぬことと、鼻(ハナ)とて心德義の穢に明らぬことと、口とて忠信の言を道(ハ)はぬこととの併稱。

**しかん** 此岸【名】こなたの岸。

**しかん** 南枝・北枝の梅の花【名】

**じかん** 兒干【名】昔、惡藥の治療に用ひし藥。今貴身に惡しき藥出づれば……兒干といふを求めて治すべきなり」

**じかん** 時間【名】■時刻と時刻との間。Time■時刻。時限。とき。■〔哲〕『英の關係を決定する直觀世界の一成因。遷と連續との二要素ありて、始めて、この概念を生ず。空間に對して)

**じ-がん** 慈眼【名】じげん(慈眼)に同じ。

**じ-がん** 字眼【名】詩文の句中にある眼目の文字。

**じ-がん** 鮪岩【名】〔鑛〕『英 Oolite』四き小粒狀の岩石片の集合して成れる岩。武藏國五日市(イツカイチ)附近の中生層石灰岩、信濃國高瀬川の鍬石(クワイシ)の集合體、越中國立山(タテヤマ)の玉滴石(ギヨクテキセキ)など、その例なり。

**じかん-きふ** 時間給【名】一時間の勞力に對し、仕拂ふ報酬。

**じかん-きろくき** 時間記錄器【名】じかんさうろくき(時間登錄記)に同じ。

**じかん-ぐわい** 時間外【名】一定の時間以外。

**じかん-ぐわい-でんぱう** 時間外電報【名】電信局所の電報取扱時間の外、特にその取扱を要する內國電報。略符號は、和文ならば『タラ』、歐文ならば『ㄱㄹ』。

**じかんぐわい-とりあつかひれう** 時間外取扱料【名】時間外電報の料金。

**しかん-さい** 止汗劑【名】『羅 Antihidrotica 又 Antihydrotica』發汗を止むる作用ある藥品。即ち冷汗・盜汗(ネアセ)などを防止するに用ふるもの。例へば、アトロピン・樟腦・護謨など。止汗藥。發汗劑に對して)

**しかん-たう** しかん階【名】砂糖を產出めて作れる菓子。

**しかんちやう** 支監長【名】支監の事務を掌理する者。

**しかんちやう** 死勘定【名】〔商〕『英 Dead account』取引關係終り、最早記入すべき必要なき勘定。口座、即ち貸借相平均して、殘額なきに至れるもの。(活動勘定・睡眠勘定に對して)

**じかんてきげいじゆつ** 時間的藝術【名】〔美〕『獨 Zeitkunst』時間美に由りて成立つ藝術、即ち音樂・文學など。演劇はこれと空間藝術とに跨れり。時間美術。(空間的藝術に對して)

**じかん-とうろくき** 時間登錄器【名】『英 Time recorder 又 Time recorder』各人の出勤・退散の時刻又は取引の時刻等を精密に記錄する器。時間記錄器。(仕事高拂に對して)

**じかん-ばらひ** 時間拂【名】次條に同じ。

**じかんばらひ-ちんぎん** 時間拂賃銀【名】〔經〕仕事の出來高如何に關係なく、勞働の時間に應じて支拂ふ賃銀。時間ばらひ。(仕事高拂賃銀に對して)

**じかん-び** 時間美【名】〔哲〕時間の連續によりてあらはるる美、即ち音樂・文學などの美。(空間美に對して)

**じかん-びじゆつ** 時間美術【名】〔美〕じかんてきげいじゆつ(時間的藝術)に同じ。

**じかん-へう** 時間表【名】時間の配當を記したる表。

**しかん-やく** 止汗藥【名】しかんさい(止汗劑)に同じ。

**じかん-わり** 時間割【名】學校にて、諸教科を毎週の各時間に割當つること、又その割當てたるもの。

**しかめ-っつら** 鞏面【名】しかめづら(鞏面)に同じ。

**しかめ-づら** 鞏面【名】しかみづら(鞏面)に同じ。

**しか-も** 然も【副】そのやうにも。さやうにも。

**しか-も** 然も【接】確かに然る意をあらはすにいふ語。その上にも。

**しか-やき** 志賀燒【名】對馬國下縣(シモアガタ)郡嚴原(ゲンバラ)町大字久田道(クタミチ)町字志賀にて製出せし陶器。享保十一年早田惠作の創めしものにて、慶應元年遂に廢す。器底に「志賀」又は「シカ」の二字を銘す。

**じ-か-やき** 直燒【名】炭火の上に、燒くべき物を直接に置きて燒くこと。續紫雲文島「じか燒や麥からくべてやなぎ鰹」

**しかやま** 志賀山【名】〔地〕近江國滋賀郡滋賀村の山嶺。比叡山脈を交け、南、長等(ナガラ)と逢坂の諸嶺に亙る。同郡山中村を經、この山を越えて、山城國白河に通ずるを、志賀の山越また山中越また白河越といふ。六藝・さざなみや志賀の山路のつづらをりくる人たえて荒れにしぬるか」

**しかやま** 志賀山【名】江戸劇場の振附を專門とせし家。

**しかやまりう** 志賀山流【名】〔音曲流〕參照。

**しかやま-でら** 志賀山寺・滋賀山寺・紫鄕山寺【名】しがでら(志賀寺)に同じ。

**しかやまりう** 志賀山流【名】踊の流儀の一。志賀山萬作の創めしもの。

**じか-よう** 自家用【名】他人の用に供するにあらずして、自用に供するもの。

**じかよう-しやうゆ** 自家用醬油【名】政府の免許を得て、自家の用に供する醬油。

**じかよう-れう** 自家用料【名】自家のみの所用に供すること。

**しがらき** 信樂【名】■〔地〕近江國甲賀郡東南の山谷の地。同國栗太(クリタ)郡田上(タナカミ)谷と連亙し、大戸(オヒ)川の水源をなす。東西三里、南北五里、伊賀・山城二國と山嶺を以て相隔つ。古來茶を產あり。大戸川は信樂川ともいひ、末は勞多(セタ)川に注ぐ。新撰姓氏錄、村雲の外山の峯にかかるかと見れば、しぐるるしがらきの里」 後撰・正治「信樂や茶山しにゆく夫疲つれ」■しがらきやき(信樂燒)の略。

**しがらき-がさ** 信樂笠【名】古、近江國信樂より製出せしかぶり笠。新古今・雜「外山のみちのしぐれより信樂笠ぞ見えがくれする」

**しがらき-がは** 信樂川【名】〔地〕しがらきの項。



**しがらきちや** 信樂茶【名】近江國信樂より出だす藥茶。品位、宇治茶に次ぐ。

**しがらきでら** 信樂寺【名】聖武天皇の信樂宮の附近に建てられし大佛殿。奈良の大佛は、もとここにて著手せられ、後、天平勝寶四年東大寺成るに及びて遷りしものなり。その遺の野を、今も內裏野又は寺野と呼べり。一名、甲賀寺。

**しがらきの-みね** 信樂峯【名】〔地〕近江國信樂にある山。六藝「しがらきの嶺たちならす春霞はれずものを思ふ頃かな」

**しがらきの-みや** 紫香樂宮・信樂宮【名】聖武天皇の離宮。その址は、今の近江國甲賀郡雲井村大字黃瀨(キセ)なりといふ。しがらきでら(信樂寺)參照。

**しがらきやき** 信樂燒【名】近江國信樂より出だす陶器。創始はめて古く、弘安・嘉曆の間なるべしといふ。茶道行はるるに及びて、多く茶器を製し、紹鷗・利休・遠州等、みなこれを賞用せり。茶器以前の貯藏壺等雜器の製出に止まりし時代を古信樂といひ、質粗にして、砂を帶び、濁黃色に淡青の模樣を畫く。しがらき。

**しからす** 然らず【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しからず** 然らず【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しからずば** 然らずば【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しからば** 然らば【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しがらみ** 柵・笹【名】■流れの砂土を洗ふを防ぐために、杭を打並べて、横に粗朶又は竹を瓦したるもの。蕉葉、あすか川しがらみわたしせかませば流るる水もまどけからまし」■〔植〕次條の略。

**じ-がらみ** 字絡【名】〔文〕詩歌の句又はその句中の字を句眼として、俳句を作ること。

**しがらみかへて** 笹櫛【名】〔植〕古今集の春道列樹(ハルミチノレツキ)の歌「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」より名を取りたるもの。櫛の培養的變種。葉は中形にして、長さと幅とはいづれも二寸ほどあり。七月裂をなし、裂片は卵狀披針形にして、先端長く尖り、淺緣に微鋸齒あり。しがらみ。

**しがらみ-とうじ** 柵工事・笹工事【名】護岸工事の一。杭を二三尺、ことに打込み、竹・丸太・板などにて、崩壞を防ぐもの。

**しがらみ-せき** 柵關・笹關【名】杭を打ち、柵を打ちわたして、堰きとむる關。

**しがらむ** 笹む【動四他】■からみつかしむ。貫之集「さをしかのをの〳〵咲ける秋萩をしがらみへぬる年ぞ知られぬ」■番にて流水を遮り止む。

**しがら-やき** 信樂燒【名】しがらきやき(信樂燒)に同じ。

**しかり** 叱【名】■しかること。「呵」■德川時代の刑罰の一。正刑の最も輕きもの。庶人に科するを例とし、白洲(シラス)に呼出して、その罪を叱りしものにて、まづ宣告し、與力請書(ヨリキウケガキ)を取り、差添人これに沖印する定なりき。そのやや重きを祭度叱(ツイタチ)といひ、留場(ドメバ)、內の島を捕へたる者、村の組頭、田島を永代賣買入せる者の證人等には叱を科し、隱匿禮を有せる村方、三笠附(ミカサヅケ)博奕(バクエキ)を犯せる者の地主等には、急度叱を科する筈の例なりき。

**しかり** 然り・爾り【動五變自】しかあり。その如くなり。

**しかし** 處【句】然りし所の雷便。出世景淸「千手觀音の御首と變じたまひける、りやくこふ不思議ぞ有りがたし。しかつし所へ、清水寺の大衆達、われもわれもと走參じ」

**しからず** 【句】「然(ヤ)らず」に同じ。

**しからずば** 【句】「然(ヤ)らずば」に同じ。

**しからでば** 【句】「然(ヤ)らでば」に同じ。

**しからでて** 【句】「然(ヤ)りとて」に同じ。

**しからば** 【句】「然(ヤ)らば」に同じ。

**しかりて** 【句】「然(ヤ)りとて」に同じ。

**しかりとて** 【句】「然(ヤ)りとて」に同じ。

**しからぬ** 【古語】拾遺「しかりとて秋のねざめを」

**しからぬ** 間【句】然ある時に。さるほどに。

**しからぬ** 上は【句】然あるからは。さるほどに。

**しかりて** 【句】「ゆゑに。

**しかるが** 故に【句】然あるが故に。かるが

**しかるに** 【句】「然(ヤ)るに」に同じ。

**しかるべう** 【句】「然(ヤ)るべく」の音便。

**しかるべく** 【句】「然(ヤ)るべく」に同じ。

**しかるべし** 【句】「然(ヤ)るべき」の音便。

**しかるべし** 然るべし【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しかるべし** 然るべし【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しかるべし** 然るべし【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しかるべう** 然らるべう【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しかれ** 【句】「然(ヤ)れども」に同じ。

**しかれども** 然れども【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しかれば** 然れば【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しかれば** 然れば【句】しかり(然り)の條下を見よ。

**しかわたり** 志賀渡・志加渡【名】氷を渡ることなりといふ。東鑑・打二磯志加渡之間、氷供消」

**しき** 敷【名】■器物の下にしく物。茵至、その箱のしきに、大納言どの書かせたまふ」■しいた(敷板)[五]に同じ。■しきん(敷金)の略。■しき(商)しようこ(證據金)に同じ。■しき(地)下等なる淫賣宿。(俚語)

**しき** 識【名】■物事に對して、見識・識見・眼識。分くる能力。みわけ。見識。識見。眼識。「識高し」「識淺し」■知を見識りてあること。しりあひ。ちかづき。みしりごし。「一面の識あり」「生面の識」■〔佛〕『梵 Parijñāna 婆呬荼僧』の譯語。了別の義。心境に對して了別することを、一識・六根に依りて、六境を緣するなりと立つる小乘の成實(ジヤウジツ)宗等の說もあり。また二識・三識・六識・八識の項。

**しき** 蓆【名】牛車(ギシヤ)に乘降する際に用ふる梯子。

**しき** 【名】しき(六國)の略。(古語)「子薦、朝、

**しき** 式【名】■一定の形狀・體裁・方法など。かた。形式。儀式。作法(サハ)。法式。千載「やまと歌のしきをつくれりける」■王朝時代に、官職に屬する事務章程を記載せるもの。りりりりうりうりくしき(律令格式)參照。■ことがら。事情。太平記「この程の式をば、身に替へても申し宥むべく候」■しき(式)正)に同じ。(足利時代の語)「式の立文」■しきしやう(式正)に同じ。(足利時代の語)「式の引出物」■〔數〕『英 Formula』數學の、記號によりて、連結せられたる數或は文字の集合。

**しきがみ** 式神【名】しがみ(式神)に同じ。「式の神も、おのづからいとかしこしと」

**しき-の-かず** 式の數値【名】〔數〕式の中の文字に數値を與へ、演算の符號の示せる計算を行ひて得たる數。

**しき-の-ふみ** 式の籐【名】たいいきやう(太平弓)を見よ。「四季の籐」

**しき** 職【名】■大寶令の制規における官司の名目の一。大夫(マヘツキミ)・亮(スケ)・進(ヨリキミ)・屬(サカン)の四等官を置くを常とし、その官位の差等上より塞の下、寮の上に班せしめたり。例へば中宮職・大膳職・左右京職・攝津職の類、又、令制以外にも、修理(シユリ)職・造宮職など設けられたり。■ちゆうぐうしき(中宮職)の略。枕「しきの御さうし」の異の隅」■しきのさうし(職曹司)の略。

**しき** 識【名】■物事に對して、徹底して見分くる能力。みわけ。見識。識見。眼識。「識高し」「識淺し」■知を見識りてあること。しりあひ。ちかづき。みしりごし。「一面の識あり」「生面の識」■〔佛〕『梵 Parijñāna 婆呬荼僧』の譯語。了別の義。心境に對して了別することを、一識・六根に依りて、六境を緣するなりと立つる小乘の成實(ジヤウジツ)宗等の說もあり。また二識・三識・六識・八

識・九識等に分つ諸説もあれど、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識と分つ六識説は、大小乗通説の法門たり。【佛】『梵Vijñāna（毘若那）の譯語』十二因縁の一。その條を見よ。

**しき 色**【名】【佛】『梵Rūpa の譯語。破壊・變碍・質礙の義。色は示現の義。■五蘊（ごうん）中の色蘊、即ち物質、森羅萬象。しきしん 色身）參照。■十八境中の色境、即ち有色又は有形の物。

色、即（そく）是（ぜ）空（くう）【句】【佛】『梵Rūpa śūnyatā の譯語。色は即ちこれ空なりとの意。法界の萬有は假合（かがう）にして、實にその體あるにあらず。（空即是色に對して）舊曲山桂「色則是空見にして、實にその體あるにあらず。（空即是色に對して）舊曲山桂「色則是空

**しき 旨歸**【名】〔統〕『英Archigonium』蘚花植物の雌性生殖器官、内に一つの卵球を有す。（雄器に對して）「じ」

**しき 觀器**【名】〔醫〕しかくき（視覺器）に同

**しき 子器**【名】〔植〕『英Sporocarp』地衣類の生殖器。その中に胞子を藏す。

**しき 死期**【名】死ぬる時期。死ぬべき時期。しご。

**しき 屍櫃**【名】くわん（棺）に同じ。

**しき 始期**【名】或事の始まる時期。初期（終期に對して）

**しき 士氣**【名】■士たる者の氣質。■一般の人士の意氣。

**しき 志氣**【名】こころざし。意氣ぐみ。

**しき 紫氣**【名】紫の雲氣。

**しき 至貴**【名】■この上なく貴きこと、又その人、又その物。■有德の人。

至貴は爵を待たず【句】『淮南子に出づ』有德の人は、人爵を待たずとも、おのづから貴し。（諺語）

**しき 四季**【名】■『品字篇に「俗曰、四時一爲一四季」、指二四時一玄月」とあり』陰曆の四時の末月、即ち三月・六月・九月・十二月。■春・夏・秋・冬の稱。四時。舊曲「敦盛」「面白や、四季をなりは機構なれど」



**しき 四季の篠**（ささ）【句】「式の篠」に同じ。

**しき 四氣**【名】天地間に消長する四つの氣即ち生（春温）・長（夏熱）・敎（秋涼）・藏（冬寒）。

**しき 四器**【名】事物を正す四つの道具、即ち指揮・指麾（さしまね）『指は指示、揮は手使の義、又麾は旌旗の屬を用ひて指揮するにいふ』さしづ。下知。

**しき 式器**【名】じき（磁器）に同じ。

**しき 慈唯**【名】ほしいまま。わがまま。

**しき 廁鬼**【名】厠（かわや）の神。雪隱の神。

**しき 蓍龜**【名】『蓍は「めどぎ」、龜はその甲を燒きて、吉凶を判ずるに用ふるよりいふ』うらなひ。卜筮。

**しき 私記**【名】私人の記錄。私乘。

**しき 史記**【名】■『春秋の序に「春秋者魯之史記之名也」とあり』記錄したる物。歴史。史錄。■（書）黄帝より漢の武帝までの事を記したる紀傳體の支那史。本紀十二卷、年表十卷、書八卷、世家三十卷、列傳七十卷、合はせて一百三十卷。漢の司馬遷の著。

**しき 紙器**【名】厚紙にて作りたる箱などの類。

**しき 子規**【名】■（鳥）ほとときす（子規）に同じ。■（人）ままをかしき正岡子規）を見よ。

**しき 志紀**【名】■（地）河内國の郡の一。明治二十九年、南河内・中河内の兩郡に分屬せしめらる。■姓氏の一。神武天皇の皇子神八井耳（かんやいみみ）命より出でしもの。姓（かばね）は、宿禰（すくね）と首（おびと）と縣主（あがたぬし）とあり。

**しき 磯城**【名】石を積みなどして、堅固に築きたる城。「古語」紀遺三百七十人於百濟、助二築城（きづき）於得爾羅等一」

**しき 磯城**【名】■（地）大和國十郡の一。明治二十九年もとの十市（とをち）と式上（しきがみ）式下（しきしも）の三郡を合はせたるもの。上古の磯城の縣（あがた）の地に當る。郡役所を三輪（みわ）町に置く。城内に、陵墓・宮址その他名所多し。■姓氏の一。饒速日（にぎはやひ）命より出でしもの。大和國磯城の地名に本づきしものにて、姓（かばね）と縣主（あがたぬし）とあり。

**しき 助數**【名】室の廣さを、疊の數にて示すに用ふる語。狂言「ひめのき」「四疊半じきへ所鐘ならしやれて、請ませらるる物の本の内に」

**しき 醜**【接頭】『しこ（穢）の轉』きたなき。みにくき。「古語」萬葉「しきかりいほ」「耳しき手」「耳しき屋」

**しき 式**【接頭】式正（しきがみ）の。正式の。式の。「式三番叟」「式能」

**しき 頻**【名】しぶり（頻）に同じ。「古語」萬葉「日ざらしの麻手づくりをしきもなすしきに取りしき」

**しき 【接尾】**ほど、くらゐ。ばかり。（侮りていふ）（俚語）日本武尊吾妻鳥「我れ等しきの申上ぐるも憚多く」

**しき 鴫・鷸**【名】〔動〕『鴫は田に居る鳥の意の和字。涉禽類の一。鷸、田鴫・小鴫・山鴫・青鷸など種類多けれど、概ね中形の鳥にして、脚四趾あり、前方に向へる三趾は長く、嘴は細長くして、軟皮を被る。鴫の看經（かんきん）【句】鴫の羽搔（はがき）などせずに、田澤に徒らに佇（たたず）み立てる狀。菅野雲鳥「羽根がきの數を所作にやうば鴫の看經をする曉のこゑ」

鴫の羽搔（はがき）【句】鴫を取去らんとして、鴫のしばしば嘴にて羽を搔（はが）くこと。古今「曉の鴫の羽がき百はがき君がこゐ世は我れぞ數かへ」

鴫の羽返（はがへ）【句】婚禮その他祝儀の式の膳都に、鴫を羽返にし、紙を折りて、鶴鈴の形に作りたるものを、その口先に挾みて据うること。

鴫の羽盛【句】はもり（羽盛）を見よ。

**しき 仕儀**【名】事のさま。事のなりゆき。

**しき 四儀**【名】〔佛〕行・住・坐・臥の四つの作法。平常の起居動作。四法。四威儀。

**しぎ 行住坐臥**【句】『行住坐臥はねば、四儀の稱念に領なく』

**しぎ 志木**【名】〔地〕武藏國北足立（あだたち）郡にある町。新河岸（しんがし）川の東南岸。荷稱、引又（ひきまた）。





**じき 磁氣**【名】〔理〕『英Magnetism』磁石の性質。磁氣の趨路【句】〔理〕じろ（磁路）に同

磁氣の子午線【句】〔理〕『英Magnetic meridian』磁針の子午面が地球の表面と交はりて生ずる線。一般に地理學上の子午線とは一致せず。

磁氣の子午面【句】〔理〕『英Magnetic meridian plane』磁針が指示する方向を含む垂直面。一般に地理學上の子午面とは一致せず。

磁氣の赤道【句】〔理〕『英Magnetic equator』地球磁力の方向が、水平面と爲す角、即ち伏角の零度なる諸地點を連結したる線。地球の赤道とほぼ一致せり。

磁氣の能率【句】〔理〕『英Magnetic moment』磁石の一極の強さと兩極間の距離との相乘積。受磁の強さと參照。

**じき 磁器**【名】■じしやく（磁石）に同じ。■燒物の一種。地質堅緻にして、微ね白色なるを普通とし、透明性を帶ぶ。例へば瀬戸燒・伊萬里燒・清水燒・丸谷燒の類。いしやき。（土器・石器・陶器に對して）

**じき 自記**【名】■みづから記すこと。みづから記せるもの。

**じき 自棄**【名】自ら身を棄てて顧みぬこと、すてばち。自暴自棄。

**じき 自欺**【名】みづからあざむくこと。

**じき 辭氣**【名】ことばと、いきと。ことばづかひ。物いひぶり。語氣。

**じき 時機**【名】■適當なる機會。ころあひ。をり。しほ。時宜。■（佛）時季と衆生の根機。

時機純熟【句】〔佛〕時季と衆生の根機も都合よき狀態にあること。

**じき 鑑基**【名】農具の一。鋤の類。

鑑基ありぢ雖も、時を待つに如かず【句】『孟子の公孫丑上篇に見ゆ。農具ありても、適當なる農時を待ちて使用せざれば、功を奏する能はざる意』智能ありても、時勢に乘ぜざれば、功名を成す能はざる譬。（考語）

**じき 貳疑**【名】ぎじ（疑貳）に同じ。

**じき 兒戲**【名】小供のたはむれ。

兒戲に等し【句】次條に同じ。

兒戲に類す【句】次條に同じ。

兒戲の如し【句】稚氣を帶びたる形容。兒戲に等し。兒戲に類す。

**じき 事宜**【名】事の次第。

**じぎ 時宜**【名】■時にとりて宜しきこと。程よき頃。平並「我れ等打負けば、平家に與（くみ）せんと、時宜を計ると憑ゆるぞ」「に同じ。■次條■に同じ。

**じぎ 時儀**【名】■時候の挨拶。■次條■

**じぎ 辭儀・辭宜**【名】■謙虚。辭退。辭讓。心中乃はあの朋日「ひらにお一つ上りません。何しにお辭儀申しましょ、兩人ながらお茶は得たくませぬ」■頭を下げて御禮すること。あいさつ。ゑしやく。「時儀・時宜」組城反魂香「男でもない双原に、侍の辭儀無用の沙汰」傳説苦思當之「續二西時宜する花の樽かな」■挨拶の言葉。狂言「きんじ聟」「聟入には、じぎが有ると承つてござる」

**じぎ 辭義**【名】ことばの意義。桑原「あら、ひつかし假名遣やな、字義に害あらずんば、ああ、ままよ。梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら」

**しきあくにち 四季惡日**【名】九星にて、春・夏・秋・冬の各において、百事に用ふべからざる惡日なりといふ日。春は、甲子・乙亥の日、夏は丙子・丁亥の日、秋は庚子・辛亥の日、冬は壬子・癸亥の日。

**じぎあひ 辭儀合・辭宜合**【名】互に辭儀■をなすこと。會釋しあふこと。手習鶯「あひ嫁同士が門出の辭儀あひ」

**じぎあみ 敷網**【名】魚網の一種。形多くは方形なれど、長方形・圓形などのもあり。全部又は大部分を水中の上層に近く張りて、魚のそのまを逆行するを待ち、又は火光もしくは餌にて誘導し、又は威して、その中に驅入れたる後、水中にある部分を引揚げて漁獲するもの。■蚕しら繭に小鮎ひかれてくだる瀬にもちまうけたるこめのしきあみ」「に同じ。

**しぎあみ 鴫網**【名】しぎつきあみ（鴫突網）

**しきあん 四季庵**【名】昔、江戸日本橋の中洲（なかす）にありし料理屋。じゅうはちだいつう（十八大通）參照。「じ」

**じきあらし 磁氣嵐**【名】〔理〕『磁氣の嵐』に同じ。

**じきいうだう 磁氣誘導**【名】〔理〕『磁氣の誘導』に同じ。

**しきいたし 敷石**【名】■人の歩む所に敷並べみち（踏板）■に同じ。■（建）根太（ねだ）の上に張りたる板、即ち廊の屋板（ゆかいた）の類。■（建）ちいた（地板）に同じ。■船の底板。略して、敷（しき）といふ。かはらどうがはら。「印」

**しきいん 敷印**【名】職（しき）にて用ふる官印。

**しきう 屍柩**【名】かばねを入るるひつぎ。萬葉「殯三宮屍柩」「じ」

**じきう 時球**【名】へうじきう（標時球）に同じ。

**じきうこし 時球**【名】ベエスボオル試合開始の際、主催者又は來賓中の一人投手に代りて、第一球を投ずること。この際、ボオルの正否に關らず、ストライクとすべきものなり。「同じ。

**しきうつし 敷寫**【名】すきうつし（透寫）に同じ。

**しきうつし 色蘊**【名】〔佛〕じうん（五蘊）を見よ。

**しきうん 識蘊**【名】〔佛〕じうん（五蘊）を見よ。

**しきうれい 獅球嶺**【名】〔地〕臺灣基隆（キロ）市街の西北隅にある山。嶺上に砲臺を設けて、港内の防備に充つ。

**しきかい 色界**【名】〔佛〕『梵Rūpadhātu の譯語』三界の一。欲界の上に位し、欲界よりは貪欲うすけれども、なほ色法、即ち現象界に染著する境界。色界天。色天。有色天（うしきてん）。しきてん（四禪天）參照。「じ」

**しきかい・てん 色界天**【名】〔醫〕『英Colon sensation』視覺の一。色彩即ち分解せられたる光に對する感覺。その著しきものは、太陽のスペクトラムにして、光覺に比すれば、その發達後なるもの。■蚕しら繭に同じ。

**しきがね 敷金**【名】■しきん（敷金）に同じ。■『しきがねに目がくれて、嫁にとらうと、いやらしい」

**しきが は 敷皮**【名】むかし陣中などにて、將士の芝居の座に敷きたる毛皮。鹿の秋毛の皮一枚にて作り、白毛を殘すを本儀となし、また虎・熊・豹・鹿等の毛皮にても作り、すべて一枚皮を用ひ、裏は黑漆にて塗り、柿色の布を附くることもあり。

**しきがは 敷革**【名】■鞋の底の、靴・足袋に接觸する部分に敷く革。■しがは（若革）に同じ。

**じきがはら 敷瓦・甃**【名】いしだたみの代りに、地に敷並ぶる瓦。支那より傳來し、今も禪宗の寺院等に用ひらる。

**しきがみ 敷紙**【名】■物の下に敷く紙。司馬「硯のふたに雪を入れて出だされたりけるしきがみに書きつけはべりける」一代男「手づから燈火細め、枕に敷紙して、嘉太夫節のなづむ所を語りけりて」■疊を保護するために、膝手の間などに敷く、厚き貼合はせたる澁紙。

**しきがみ 式神・識神**【名】陰陽師に使役せられて、不可思議のわざをなすといふ神。この神は常人の目には見えざるも、その道の者には、正しく一人の人間とあらはれて、その命令に從ひて、人家に出入し、或は物を捕へ、或は人を殺し、變幻自在なりといふ。「じ」しきのかみ。しきじん。李商隱「御使のために、仰をそむかじとて、しきふせて、既に式神かへりて、おのれただ今しにうてて、死にはべりぬ」

**しきかんぢんけい 自記寒暖計**【名】『英Self-registering thermometer』寒暖計の一。溫度の變化を連續的に紙上に自記するもの。佛學西入リシアル（Bielard）のもの、普通に用ひらる。

**しきかりいほ 醜假盧**【名】『しこ（穢）は接頭語』■見苦しき假の住居。（古語）■假の世の譬。うきよ。塵の世。（古語）萬葉「世の中のしきかりいほに住み住みて至らむ國のたづき知らずも」

**しきき** 敷木【名】すきま(透木)に同じ。

**しきぎ** 鋪著・敷著【名】鎧・大が入坑する時に著る衣服。

**しききう** 色球【名】〔天〕さいきう(彩球)に同じ。

**しきぎっぷ** 四季切符【名】『英 All season ticket』汽車の乗車券の、或一定の期間は、何回にても、或一定の期間を往復し得るもの。その期限は、普通、一箇月・三箇月・六箇月・十二箇月とす。定期乗車券。

**しききん** 敷金【名】■保證のため、擔保として預け置く金。しき。しきぶね。しきせん。■契約保證金の一種。通常、家屋など賃貸借の際、賃貸人が賃借人をして、借賃その他、賃貸借の關係より生ずる債務を擔保するために交附せしむる金額。しき。

**しきぎん** 敷銀【名】■前條に同じ。■ちさんぎん(持參金)に同じ。一代名。見よく大かたなる嫁に、敷銀附けての緣組」

**しききん-こさく** 敷金小作【名】敷金を地主に納めて、小作すること。

**しききやう** 識境【名】〔佛〕心識の對象、即ち萬象。

識境の四相【句】〔佛〕こさう(四相)の條「下を見よ。

**しききやう** 色境【名】〔佛〕五境の一。五根の一なる眼根の對象。

**しきくきやう-てん** 色究竟天【名】〔佛〕『梵 Akanishṭha(阿迦尼吒天)の譯語』うちゃうてん(有頂天)(二)に同じ。

**しきぐさ** 四季草【名】〔書〕泰草二卷・夏草一卷・秋草三卷・冬草一卷の四部に分ち、武家の禮法・故實などを、假名にて記したるもの。伊勢貞丈の撰。

**しきくしふ** 子規句集【名】〔書〕正岡子規の句を集めたるもの。一卷。河東碧梧桐・高濱虛子の著。

**しきぐち** 鉦口・敷口【名】かまぐち(釜口)に同じ。

**しきぐに** 醜國・繁國【名】『しき(醜)は接頭語』くにがらのあしき國。きたなき國。〔古語〕「この二神は、彼のきたなきしき國に至りましし時の汚によりて」

**しきくわい** 式外【名】じきげ(式外)に同じ。

**じきくわいろ** 磁氣廻路【名】〔理〕じろ(磁路)に同じ。

**しきくわん** 指揮官【名】全隊の指揮をつかさどる役。陸軍には、參部隊の指揮を執る者を總指揮官といひ、高等司令部を有する大兵團の司令官以上を高等指揮官といひ、海軍には、艦船・軍隊の指揮に任ずる者、及び陸海軍用船又は倉庫(くら)船舶に乘組みて、これを監督するものをいふ。

**しきけ** 式家【名】『式部省(しきぶしやう)』は參議・式部卿兼太宰帥(だざいのそつ)なりしによりていふ。藤原氏の四家の一。鎌足の子不比等(ふひと)の第三子字合の流。

**しきげ** 式外【名】次條の略。式内に對し式外の社【句】延喜式の神名帳に記されてあらざる神社。延喜式撰進以前の古社にても、男山八幡宮・香椎(かしひ)宮などはこれに屬せり。(式内の社)に對して)

**しきげ** 式下【名】〔地〕大和國の舊都の一。もと城下(しきげ)郡といひしを、後世、式下の字を用ひ、また下の字を音讀するに至りしもの。明治二十九年式上・十市(とをち)の二郡と合して、磯城(しき)郡となる。

**しきげた** 敷桁【名】〔建〕柱上又は煉瓦壁上などに、壁に沿ひて構へ、小屋梁(はり)又は根太などの端を承けしむる横木。

**しきげふ** 私企業【名】〔經〕私人又は私法人の經營する企業。(公企業に對して)

**しきげん** 識見【名】けんしき(見識)に同じ。

**しきげん** 式言【名】じきご(式祝)に同じ。

**しきげん-せう** 職原鈔【名】〔書〕しよくげんせう(職原鈔)に同じ。

**しきけん-もん** 式乾門・式建門【名】平安京大内裏の内郭十二門の一。内裏の西北、朝平門の西にあり。一名、西廂(にしのひさし)御伏門。

**しきげゆ** 式解由【名】正式に作られたる解由。〔古語〕

**しき-ごう** 四季講【名】比叡山橫川(よかは)の定心房の彌勒像の前にて、毎年四季に講大乘經を講ずること。

**しき-ごたつ** 敷炬燵【名】おきごたつ(置炬燵)に同じからんか。大藝「あてやかにふりし女や敷巨燵」

**しき-ごまた**【名】相撲(すまひ)の手の一。我が股の内より相手の足を取るもの。

**しきさい** 色彩【名】■いろ。いろどり。いろつや。■『英 Colour』やうす。けいろ。けなみ。

**しきさい** 飾西【名】〔地〕播磨國の舊郡の一。明治二十九年飾東郡と合して、飾磨(しかま)郡となる。

**しきさう** 色相【名】〔佛〕肉眼にて見得る花の咲く植物・長春花。■〔植〕山茶(つばき)の一品種。

**しきさき** 四季咲【名】■春・夏・秋・冬共に花の咲く植物。長春花。■〔植〕前條に同じ。

**しきさき-いばら** 四季咲薔薇【名】〔植〕次條に同じ。

**しきさき-ばら** 四季咲薔薇【名】〔植〕■しきさきいばら。■かうしんばら。庚申薔薇。

**しきさくら** 四季櫻【名】〔植〕■しきさきいばら。

**しき-さくら** 色代(しきだい)【名】〔植〕■しきさきいばら。

**しき-さはふ** 式作法【名】〔畑〕儀式。ならはし。孕産・産ありても婆が産ふが式作法」

**しき-さん** 信貴山【名】〔地〕大和國生駒(いこま)郡の西南隅、平群(へぐり)村字志貴畑にある山。河內國との境界に當る。高さ七〇三尺。頂上の眺望佳く、また松永久秀の據りし城址を存す。

信貴山の毘沙門【句】信貴山の東麓にある眞言宗の寺。本名は觀音院朝護國孫子寺。延喜中、明蓮上人の開基。本尊は毘沙門天。又、俗に信貴山寺といふ。

**しきさん-えんぎ** 信貴山緣起【名】〔書〕次條に同じ。

**しきさんえんぎ-ゑことば** 信貴山緣起繪詞【名】次條に同じ。

**しきさんえんぎ-ゑまき** 信貴山緣起繪【名】〔書〕信貴山の觀音院朝護國孫子寺の緣起を描ける繪卷。太子軍の卷・飛倉の卷(一に山崎長者の卷)・尼公の卷・延喜加持の卷の四卷あり。最初の一卷は主佐刑部大輔の筆といひ、後の三卷は、藤原時代末期の作とも鎌倉時代の作ともいひ、また鳥羽僧正の筆なりともいふ。寫生的にして、哀情と活動とに富み、繪卷中の一異彩と稱せらる。

**しきさんとん** 式三獻【名】三獻の儀式。一獻とは、酒盃一巡にて、肴核これに伴ふをいふ。獻數は種種あれども、三獻を正しき儀式とす。後國光天連、新御堂檢の御興入、町町の辻がため、鎧の内は式三獻の御用意」

**しきさん-じ** 志貴山寺【名】〔地〕「信貴山の毘沙門」を見よ。

**しきさんば** 式三番【名】『次條の略。しき(式)は接頭語』昔、劇場にて、毎年初春三箇日に興行せし翁・千歳(せんざい)・三番叟の舞。おきなわたし。「じ。

**しきさんばそう** 式三番叟【名】〔前條に同じ。

**しきさんばん** 式三番【名】〔前條を見よ〕

**おきな(翁)四の舞** 天皆天皇」みたりの翁の舞樂を表し、式三ばんとはこの因緣」

**しきざる** 敷笊【名】者物を盛す際、材料を盛りて、鍋中に入れて煮るに用ふる笊。目笊の如く編みたるもの。

**しき-し** 色紙・式紙【名】■短冊と同じく、歌を書く料の厚紙にて、正方形に近き形のもの。表面には、金銀の砂子又は種種の模樣あり。始は大小一定せざりしが、後世、大色紙・小色紙の二種に分ち、大色紙は縱六寸四分・輻五寸六分、小色紙は縱六寸・輻五寸三分と定まりたり。參照中納言の君、紙もがなとのたまへば、黃ばみたる色紙一卷、白き色紙一卷、硯の蓋に入れて出されけり」■しきしがた(色紙形)の略。葉月「苗代の色紙に蒔ぶ蛙かな」

**しき-し** 式師【名】法會の時、式文を讀むを盛りて、鍋中に入れて煮るに用ふる笊。目笊の如く編みたるもの。

**しき-し** 職掌【名】■蔵人所(くらうどどころ)の職員中、頭(とう)及び五位・六位の蔵人の總稱。落葉「衛門のかみの蔵のけいし、しきじども」■しきしどころ(職事官)の略。

**しき-じ** 式事【名】儀式の行事。節會(せちゑ)等の類。ぎしきじ。

**しき-じ** 式辭【名】式場などに述ぶる言葉。式上の挨拶。式言。

**しきしがた** 色紙形【名】■屏風・障子などに、色紙の形を畫きて、彩色などを施し、それに詩・歌などを書くもの。しきし。大鏡「御障子に歌・繪ども書かせたまひしに、色紙形を、この大貳に書けとのたまはするを」■料理にて、野菜類を、薄く方形に切ること。しきし。■苗代(なはしろ)の、正方形もしくはそれに近き形のもの。しきし。(短冊形に對して)





**しきじくわん** 職事官【名】家司(けし)にて、職務あるもの。一定の職務ある常任の官。(散事官に對して)

**じき-しじせん** 磁氣子午線【名】〔理〕「磁氣の子午線」に同じ。

**じき-しじめん** 磁氣子午面【名】〔理〕「磁氣の子午面」に同じ。

**しき-じつ** 式日【名】■儀式のある日。■執務すべき定例の日。

**しき-づつみ** 色紙包【名】折形の一。下の圖を見よ。

(みつづしき)

**しきじつ-ないだん** 式日内談【名】室町時代に、引附頭人の第に、毎月集會して、用務を相談せしこと。

**しきじつ-よりあひ** 式日寄合【名】江戸時代に、最高裁判所なる評定所に、關係吏員の集會せし日。毎月四日・十二日・二十二日に三奉行・大目附・目附出席し、老中もその中の一日には出席して、奉行の捌方(さばきかた)を見たりといふ。

**しきし-ないしんわう** 式子内親王【名】〔人〕後白河天皇第三の皇女。御母は從三位藤原成子。平治元年第三十一代賀茂齋院となり、嘉應元年病によりて退下、薨去して、法名を承如法といふ。和歌に秀で、式子内親王歌集の著あり。建仁元年薨ず。高倉宮。大秋御門齋院。萱(かや)齋院。

**しき-しのぶ** 頻忍ぶ【動四自】しきりに思ひ忍ぶ。〔古語〕萬葉「庭に立ち靡をかりほしにし忍ぶあづまをみなを忘れたまふな」

**しきしばこ** 色紙箱【名】色紙を入るるに用ふる箱。蒔繪を施し、優雅なるもの多し。

**しきしばり** 志賀志針【名】縫針の一種。專ら繼物(つぎもの)をするに用ふ。

**しきしま** 磯城島・敷島【名】〔地〕■大和國磯城郡にありて、崇神・欽明の兩天皇の宮しく都したまひし處。今は城(き)島と書き、村名となれり。■大和國の別稱。■「敷島の道」の略。曾我兄弟が勝ちわが敷島もその通り、日に見えぬ鬼神も、三十一字に和くる」

**しきしまの道**【句】『敷島の大和歌の道の略。

**しきしまの**(敷島の)を見よ』和歌の道。歌道。「就淺(あさ)の道」參照。千載「敷島の道も、さかりにおこり」玉葉「これのみぞ人の國より傳はらで神代を承けし敷島の道」拾玉集「ことに一つの緣はあるものを我れにはゆるせ敷島の道」

**しきしまは** 色紙窓・色紙窗【名】色紙の形のごとく方形に造りたる窓。俳諧江戸繁「色紙窓我が歳且に明けけり」

**しきしまの** 敷島の【枕】大和國の敷島は、崇神・欽明兩天皇の都したまひしより、その名國中に著れしためなるべし。やまと(大和)にかけていふ。萬葉「しきしまのやまとの國の石(いし)の上(かみ)ふるの里に紐とかずまろねをすれば」

**しきしまの-おほみや** 磯城島大宮【名】次條に同じ。

**しきしまの-かなさしの-みや** 磯島金刺宮【名】欽明天皇の皇居。今、大和國磯城郡三輪村大字金屋の東南、山鳴のしきしま金刺宮。磯城島宮。

**しきしまの-みや** 磯城島宮【名】前條に同じ。月詣「まとかもしきしまの宮しき忍ぶむかしをいとど綾や(だてん)」

**しき-しん** 色心【名】〔佛〕有形の物質(色)と無形の精神(心)と。物と心と。賀古教信七墓廻「色心の當體皆是阿彌陀佛」

**しき-じん** 色身【名】〔佛〕「しき(色)を見よ』四大・五塵等の色法より成れる身。肉眼に見るを得べき形體。相貌。肉體。賀古教信七墓廻「魂は色身にかへると覺えて蘇り」

**しき-じん** 式神・職神【名】しきがみ(式神)に同じ。盛衰記「吉凶の橋占を尋ね問へば、必ず職神、人の口に移りて」

**しき-しんがう** 四族信號【名】四餘の族を連繫して示す信號。

**しき-しや** 識者【名】知識・識見を有する人。

**しき-しや** 式社【名】〔式内の社に同じ。

**しき-しや** 指揮者【名】指圖する人。

**しき-しやう** 式正【名】本式。正式。しき。(足利時代及び江戸時代の語)「一代男」「しきしやうの庖丁人」

**しき-じやう** 職掌【名】■大膳式左右京職などの職の緣事を扱ふもの。太政官の官掌(くわんしやう)の類。■寺社などに出仕し、神樂などの役を勤むる僧形のもの。■明治二年に皇太后宮職・皇后宮職に置かれたる判任官。餘人を通じ、書疏を達し、使部を檢することを掌りたり。同十年廢せられたり。

**しき-じやう** 式狀【名】貞永(ていえい)式目と今川狀と。狂言文蔵「それ、讀物によりては、庭訓(ていきん)か、式狀か、古今萬葉・伊勢物語・論語・朗詠」

**しき-じやう** 色情【名】いろけ。色慾。

**しき-じやう** 式上【名】〔地〕大和國の舊郡の一。もと城上(かみ)郡と呼びしを、後世、式上の字を用ひ、また下の字を、音讀するに至りしもの。明治二十九年式下・十市(とをち)の二郡と合して、磯城(しき)郡となる。

**しきじやう-きやう** 色情狂【名】精神に異狀を生じ、色情に關して、常慾を失ひたる事迹をなすこと。又その人。「じ。

**しきしや-でん** 職寮田【名】次條に同

**しきしや-でん** 職寮戶田【名】王朝時代の不輪租田の一。左右京職にて、毎年定例の六月三十日までに計帳の手實を奉らざる戶は、逃亡の例に準じ、舊籍に錄りて、その手實を寫し、その口分田を沒入して、不輪租田とし、これを他人に貸租せしめ、その地子を職の公用に充てしもの。國に在りては、同樣の田地を國寫田と稱したり。

**しき-じやばら** 敷蛇腹【名】龍手(たつて)鯨當(くじら)などの、蛇腹編に作りたるもの。

**しきしやに** 式叉尼【名】〔佛〕しきしやまなに(式叉摩那尼)の略。

**しきしやまな** 式叉摩那・式沙摩那・式叉摩拏【名】次條の略。

**しきしやまなに** 式叉摩那尼・式沙摩那尼〔梵 Śikṣamāṇā〕【名】〔佛〕『學法女又は正學女と譯す』七衆の一。沙彌尼にて、具足戒を受けんとして、十歳より二十歳までの滿二年間、一定の法を學ばしめらるる者。

**しき-しゆ** 色茶【名】〔佛〕■しこしゆ(五衆)を見よ』しきりん(色蘊)に同じ。■「色は色目の義』法會の時、梵唄(ばいばく)・散華(さんげ)等の各職務を帶びて、一座に參する僧衆の總稱。正徳雪『法泉御灌頂の時、色衆につらなりて」

**しき-しゆ** 識衆【名】〔佛〕前條■に同じ。

**じきしりよくせん** 磁氣指力線【名】〔理〕じりよくせん(磁力線)に同じ。

**しき-す** 敷簀【名】敷物にする簀。

**しき-す** 軾【動佐變他】■車中にて禮を行ふ。

**しき-ずな** 敷砂【名】砂を庭などに敷散らすこと、又その砂。

**しきすゐせん** 四季水仙【名】〔植〕たまずだれ(玉簾)(二)に同じ。

**しきせ** 爲著・仕著・四季施【名】主人より、來公人に季節に應じて、著物を與ふること、又その著物。曾我五人兄弟「古手といふ物見て置いて、下女やはしたの仕著には、曾我を頼んで買給へ」■江戸幕府時代に、毎年正月・四月・九月・十二月に同朋頭・敷寄屋坊主等に時服を賜ふこと、又その時服。

四度(たび)の仕著【句】主人より、一年四回の仕著を給することを、町家の仕著は、夏・冬の二回を普通とせり。「代男」われ、四度の御仕著に八十目に定め、一しせ勘めし初の月、きさらぎ二日に、曙早く、その御星形にまかりしに」

**じき-せいうけい** 自記晴雨計【名】氣壓の變化を自記によりて示す裝置の晴雨計。構造種種あれども、大別すれば、寫食(うつし)を用ふるものと水銀を用ふるものとの二種となる。廣く行はるるは前者にして、中にも、佛蘭西のリシャール(Richard)式と呼ぶもの、實用せらる。

**じき-せいだう** 磁氣赤道【名】〔理〕「磁氣の赤道」に同じ。

**しきせ-だい** 四季施代【名】江戸幕府が、

正月・四月・五月・十二月の四回に、衣服代として、右年・同朋等に與へし金。「じ。

**しきせん** 敷錢【名】しきまん(敷金)[1]に同じ。

**じきせめ** 食攻【名】ひやうらうぜめ(兵糧攻)に同じ。太平記「ただ食攻めにすべしとぞ議せられける」

**しきそ** 色素【名】[1]『英Pigment』生物の皮下に在りて、外面の色を呈する根源となる小粒狀の物質。動物の羽毛・皮膚、植物の花・葉などの色は、皆この物の存在するに因る。[2]『化』『英Colouring matter』物體に色を附與する成分。ある色に染著せしむる材料となるもの。その種類に、鑛物性・動物性・植物性及び人造等の別あり。各その特性に關して、用法・用途を異にす。

**しきそくぜーくう** 色即是空【句】しき(色)の條下を見よ。

**しきそ-ぼはん** 色素母斑【名】(醫)ほくろ。

**しきたい** 色對【名】(文)和漢・漢和にて、對句を立つるに黑に白、青に丹等のごとく、色を用ひて、對を取ること。(俳句の話)

**しきたい** 色諦【名】(佛)けたい(假諦)に同じ。

**しきたい** 色代・式退・式體・色體【名】[1]『式は法、退は、しりぞく義にて、禮法を正し、辭退しても、人を先に立て、我れはあとへ退くなりとも、また車の軾に依る體にて、體を前方に屈し、禮を行ふ義ともいふ』禮儀。挨拶。じきあひ。しきれい。(武家時代の語)[2]挨拶。會釋(ヱシャク)。じきれい。盛衰記「あながちに驚き思召すべからずなんど、色代しければ」[3]世辭。追從(ツイショウ)。著聞「おもしろう候ひつるものかな色・色退したりけるを」[4]物物交換すること。嬉興往來「現物色代之價」[5]江戸幕府以前にありて、布・帛・麻・絲などを租米に代用せること。

**しきだい** 色代・式臺【名】前條に同じ。夕顏「式臺の柱をいかめしく立てて、左近親子迄つて出て、色代(ヱシャク)あれば」平家物語「白骨を土にすらせて式臺し」

**しきだい** 敷臺・式臺【名】[1]玄關さきの板敷、地上より五六寸の高さに張れり。德川時代には、駕籠をこの上におろして、上下したり。國經營後日合戰「まだ八歳の初元結、父母の育ての日本風、式臺に手をついて」[2]和船の反臺(ヘリダイ)の下にある垣立(ヘリタテ)の臺。

**しきだいーげゆ** 式代解由【名】前司以往の過怠は不與解由狀に注して上申したれども、當任者には過失なきによりて、解由を支ふること。朝野群載「式代解由」

**しきたり** 指揮刀【名】將校が指揮するため、平時佩用する刀。(軍刀に對して)

**しきだら** 色道【名】いろごとに關する事。女色の道。五人女「そのさまうるはしく、女の好きぬる風俗、十四の秋より色道に身をなして」一代男「とにかくに、心底まことはありながら、かつて色道の慰にはなりがたし」

**じきだう** 食堂【名】寺院の食堂(ジキダウ)。多くは伽藍の東廊に接續し、廊に魚板を懸け、堂内に食卓を列ぬ。齋堂(ヰダウ)。奥の細道「鐘板鳴って、食堂に入る」

**しきだたみ** 敷疊【名】たたみ(疊)[1]に同じ。(元祿時代の語)若草「しき疊の上に坐して」

**しきたつ** 敷立つ【動下二他】[1]『こく(敷く)』[2]を見よ』宮殿の柱をいかめしく立てて、その宮殿を知ろしめす。ふさしきたつ(太敷立つ)參照。(古語)新古今「宮柱下の岩根にしきたてて鎮もくもらぬ日の御影かな」

**しきたつ-さは** 鳴立澤【名】(地)相模國大磯町の西端、國道の左傍にある丘地。今その傍に鳴立庵(ヘタテ)あり。寛文の初、小田原の人崇雪の設けしものにて、元祿中俳人大淀三千風ここに閑居せり。もと西行の山家集に「秋、ものへまかりける道に」とて、「心なき身にもあはれは知られけり鳴立澤の秋の夕暮」と云ふ歌あるに本づける名にして、本來地名にあらず、西行物語には、相模國大庭(ヤ)といふ所、砥上(ヘ)ケ原を過ぐるに云云」とありて、この歌を擧げたるが、大庭・砥上ケ原は、今の鵠沼(ヤ)の邊なるのみならず、西行物語も後世のものなれば、信じがたけれど、その舊跡のこの地と定まりしも、由來久し。

**しきたへ** 敷妙【名】[1]衾床に敷くものとも、織目細かき帛ともいふ。(古語)黄君三気想「上著を敷いて敷妙に、卒塔婆枕のうたたねは、『衾にも又物凄し』」[2]まくら(枕)[1]を云ふ。(女の語)

**しきたへーの** 敷妙の【枕】敷妙は、衾床に敷くものなるより、さと(床)・まくら(枕)にかけ、轉じて、ころも(衣)・たもと(袂)・そで(袖)(家)にかけていふ。萬葉「しきたへの床のべさらず立てれども」同「さ夜ふけていもを思ひでてしきたへの枕もよそに嘆きつるかも」同「玉藻なすなびきわがねしきたへのいもがたもとを」同「敷妙のそでかへし君たまだれのをち野にすぎぬまたもあはめやも」同「とどめえぬ命しあればしきたへの家をばいでて雲がくりにき」

**しきたり** 爲來・仕來【名】以前よりのならはし。先例。因習。

**じきーたりす** 實芝答利斯【名】(植)ぢきたりす(實芝答利斯)を見よ。

**じきーたりすえふ** 實芝答利斯葉【名】ぢきたりすえふ(實芝答利斯葉)を見よ。

**しーきたる** 仕來る・爲來る【動四自】以前より今までひきつづきて爲す。慣例としてなりしきたる。

**しきーち** 敷地【名】ある用途に充てたる土地。しき。東鑑「以御敷地」

**しきちーてん** 識智天【名】(佛)しきむへんしょてん(識無邊處天)に同じ。

**しきーちん** 色塵【名】(佛)ろくちん(六塵)を見よ。

**しきちんーとくだう** 色塵得道【名】(佛)得道の一。眼に經卷を讀みて、佛道を解し、佛果を得ること。

**しきーちやう** 色頂【名】(佛)しきくきやうてん(色究竟天)に同じ。

**しきーちやう** 四季帳【名】古、課役の賦否を四季に調査して記入せし帳簿。雜長「四季帳」

**じきーづ** 磁氣圖【名】(理)『英Magnetic circle』地表上における磁氣の偏角・伏角・磁力等を圖上に記載したるもの。英國の天文學者ハアレ(E. Halley)始めてこれを作れりといふ。

**しきづき-あみ** 鴫突網【名】鴫を捕ふるに用ふる竿網。しぎあみ。

**しきーて** 仕切って【副】切に。かたく。をりいって。門出入島「菊王しきってすすむれば」

**しきつ-の-うら** 敷津浦【名】(地)攝津國にありし浦。今、攝津國東成(ヒガシナリ)郡敷津村の地。或は大阪市西區九條町安治(ヤ)川口・江子(ヤ)島の總稱なりともいふ。拾玉「もしほ草しきつの浦に船とめてしばしと聞かん磯の松風」

**しきつひこ-たまてみ-の-すめらみこと** 磯城津彦玉手看天皇【名】(人)あんねいてんわう(安寧天皇)に同じ。

**しきーつぼ** 鴫壺【名】ゆすみを(柚味噌)を云ふ。(女

**しきつぼやき** 鴫壺燒【名】燒茄子の上に、枝にて、鴫の頭の形を作りておく料理。

**しきーて** 敷手・志岐手・志岐傳【名】雅樂の曲の一。豪越(ヤ)調。古昔、天皇元服の時などに奏せしものにて、四人にて舞ふ。番舞は青海波。渤海國より傳來せしものなるべしといふ。

**しきーて** 醜手【名】(こしき(醜)は接頭語)よごれたる手。(古語)萬葉「かきをらむしこのしきてをさしかへてねなむ君ゆゑ」

**じきーていーかう** 磁氣抵抗【名】(理)『英Inductance』磁力線の通過に反抗する性質。

**しきてい-さんば** 式堂三馬【名】(人)小說家。姓は菊池、名は泰助、字は久德、通稱は西宮太助。また遊戲堂・酒落齋・咏囀哩樓・本町庵・四季亭・四季山人等の別號あり。藥舗を業とす。著書に奉公して、稗史・小說を耽讀し、つひに作者を以て立つ。浮世床・浮世風呂の二作最も著はる。文政五年歿す。年四十八。


(ばんさいてきし)

**しきーてう** 色條【名】しきまく(式目)に同じ。

**しきーてん** 色天【名】(佛)しきかいてん(色界天)に同じ。

**しきーてん** 職田【名】しきぶんでん(職分田)に同じ。田令「凡應給職田位人」

**しきーと** 識度【名】[1]見識と度量と。[2]見識高く、度量廣きこと。

**しきとう** 飾東【名】(地)播磨國の舊郡の一。明治二十九年飾西(ヤ)郡と合して、飾磨(ヤ)郡となる。

**しきーとく** 色讀【名】[1]書を讀みて、文字のままに、その意義を解すること。(體讀に對して)[2](佛)日蓮宗にて、法華經を如法に修業すること。自讀。

**しきな** 【名】(植)がま(蒲)に同じ。

**しきーない** 式內【名】次條の略。(式外(ヤ)に對して)

式內の社(ヤ)【句】延喜式の神名帳に載れる神社。古、特に尊崇せられしものにて、總數三一三二座あり。內、大社は四九二小社は二六四〇座なりき。官社。式社。(式外(ヤ)の社)に對して)

式內の名神(ミヤウ)【句】延喜式の神名帳に載れる名神。みやうじん(名神)參照。園太曆「凡此社者、式內之名神、案上之禮貧也」

**しきーない** 四幾內【名】(地)大倭(ヤ)・河內(ヤ)・攝波(ヤ)・山背(ヤ)の四國の併稱。後、和泉より河內を分ちて、一國とするに及び、五畿內の稱起れり。

**しきーない** 錦內【名】鑛山の鑛穴の犯罪者を鑛穴に閉込めおくこと。(江戸時代の語)

**しきーながる** 布流る【動下二自】普及す。ゆきわたる。流布す。(古語)起信論流行(ヤウ)。

**しきーなく** 頻鳴く【動四自】しきりに鳴く。(古語)萬葉「春しすぐればほととぎすいやしき鳴きぬ一人のみ聞けばさびしも」

**しきなーのーうら** 敷名浦【名】(地)次條に同じ。平家女護島「船は備後のしきなの浦沙待してこそ居たりけれ」

**しきーなーおひこめ** 錦內追込【名】鑛夫の犯罪者を鑛穴に閉込めおくこと。(江戸時代の語)

**しきーなーの-とまり** 敷名泊【名】(地)備後國沼隈郡千年村に在る入江。島嶼海水を抱きて出入の口見えざるより、古は口無(クチナシ)の泊ともいへり。敷名の浦。平家「御船敷島より返り、備後の國しきなの泊に著かせたまふ」

**しきーなぶ** 敷並ぶ【動下二他】[1]『こく(敷く)』[2]を見よ』おしわたして治めたまふ。(古語)萬葉「そらみつ大和の國はおしなべてあれこそ居れしきなべてあれこそませ」

**しきーなみ** 頻浪・重波【名】頻りに寄せ來る波。しくなみの(頻波の)參照。(古語)萬葉「神見ればしき浪たちへ見れば白浪さわぐ」

**しきーなみ** 敷並【動】しき(頻)に同じ。平家「宣旨として、內裏より、しきなみに召されければ」

敷並を打つ【句】しきりに聽す。

**しきなみ-ぐさ** 重波草【名】(植)すすき(薄)[1]の異稱。(古語)篠目抄「水はなし風こそは立て波はたてしきなみぐさに露ぞこぼるる」

**しきなみ-の-せき** 敷浪關【名】(地)古、播磨國にありし關。巢太「道風にいたてに走れ筑紫舟しきなみの關せきとどむとも」

**じきーにく** 食肉【名】にくしよく(肉食)に同じ。(佛語の語)

**しきーにん** 識認【名】識(シ)認むること。認知。認識。

**じきーにん-き** 食人鬼【名】(佛)人を食ふ鬼。羅刹(ラセツ)。

**しきね** 敷寢【名】下敷にして寢ぬること。

**しきね-じま** 式根島【名】(地)伊豆七島の一。新(シ)島の屬島にて、その南方、海上一里にある島。周回三里。

**しきーねん** 式年【名】歷代の天皇又は皇后の、祭祀を行ふと定められたる年、即ち崩御の日より三年・五年・十年・二十年・三十年・四十年・五十年、爾後は毎百年とす。

**しきねん-さい** 式年祭【名】歷代の天皇又は皇后の式年の、その崩御の日に相當するの日、皇靈殿にて行ふ祭祀。先帝以前三代までのと先后のと皇妣たる皇后のとは大祭、その他の天皇のは小祭とし、神武天皇のと先帝のとは、陵所にても行ふ。

**しぎの** 鴫野・鷸野【名】(地)攝津國東成(ナリナリ)郡北新開莊(ハリハリ)の村の大字。大阪城の東半里。大阪冬陣に、上杉景勝この地に城兵と戰へり。

**しきーのう** 式能【名】江戸時代に、將軍宣下・勅使下向・普請祝などの大禮行はれし時に催しし祝能。觀世・寶生・金春・金剛喜多の五座を、城中松の廊下側の廣間に召して、技を演ぜしめ、市人の拜觀をも許せり。

**しきーの-かみ** 式の神【句】しき(式)の條下を見よ。

**しきーの-かみ** 城上【名】(地)しきじやう(式城)[1]を見よ。

**しきーの-ざうし** 職曹司・式曹子【名】平安宮職の東に位せしより、后宮職東院ともいひ、單に職とのみもいひ、皇居火災の折、假の御在所となり、また一時、皇妃の宮殿となりしこともあり。

**しきーの-しも** 城下【名】(地)しきじやう(式城下)[1]を見よ。

**しきーの-たづぶみ** 式の立文【句】たてぶみ(立文)の條下を見よ。

**しきーの-たまがきーの-みや** 磯城玉垣宮・師木玉垣宮【名】まきむくのたまがきのみや(纒向珠城宮)に同じ。

**しきーの-とう** 式籐・四季籐【名】弓に、鏑籐(ヒカヅラ)・矢摺籐(ヤズリ)・鏑扣籐(カブラガケ)を捲けるもの。太平弓。

**しきーの-はがへし** 鴫の羽返【句】しぎ(鴫)の條下を見よ。

**しぎーの-はがへし** 鴫羽返【名】[1]その樣、料理の「鴫の羽返」に似たるよりの名なるべし』相撲(ヤ)の手の一。兩手を差し、相手の首を胸に附け、差したる手にて締附くるもの。

**しきーのはな** 四季花【名】三味線に合はせてうたふ小唄の一。

**しきーのーはがき** 鴫の羽掻【句】しぎ(鴫)の條下を見よ。

**しきーのーはねがき** 鴫之羽掻【名】(書)『鴫の羽掻』を見よ』三鏡・三夕・四季・四隅・五行・五色・八景・十如是・十二月花鳥・廿一代集卷頭卷軸の歌・九十貫歌等、籤を以て、次第して記せるものの。三卷。著者詳かならず。

**しきーのはもり** 鴫羽蓋【名】料理の一。鴫にて作る。はもり(羽蓋)參照。

**しきーのひきでもの** 式引の出物【句】ひきでもの(引出物)の條下を見よ。

**しきーのびやうぶ** 四季屏風【名】清涼殿內に設けたる屏風。四季十二箇月の風景を畫き、それに歌を書連ねしもの。

**しきーのーみづがきーのーみや** 磯城瑞籬宮・磯城水垣宮【名】崇神天皇の皇居。大和國磯城(シ)郡城島(ヤ)村の邊にありき。

**しきーのーみや** 磯城宮【名】前條に同じ。

**しきーのーわらじ** 施基皇子【名】(人)天智天皇第三の皇子。光仁天皇の御父。靈龜二年薨ず。田原天皇又は春日宮天皇と追尊す。

**しきーのーゐん** 職員【名】しきのさうし(職曹司)[1]を見よ』

**じきーは** 磁氣波【名】(理)『英Magnetic wave』導線中に於ける電流は、電氣波と同じ週期を以て方向を變ずるが故に、その周圍に磁場の週期的變化を生じ、この變化より起る波動、磁氣波は、電氣波と同時に相伴ひて傳播す。でんきは(電氣波)參照。

**しきーばう** 式帽【名】儀式の時に用ふべく定まりたる帽子。

**しきーはだ** 敷膚【名】下賤(ヤ)の二三枚重なれるものの最も下なるもの。はだつけ。

**しきーばつ** 識拔【名】技倆を見拔きて登用すること。

**しきーはふ** 式法【名】正しき儀式・作法。正しき方法。女武五人男「俄かに式法卷しく、坊主頭に立烏帽子上段に著坐ある」萬花五大力「大切な呼子のせんぎ、證據をもて用さすが式法」

**しきーはむ** 爲極む【動下二他】爲しつくす。萬葉「殿の御前、よろづをしきはめさせたまひて」

**しきーばらひ** 四季拂【名】借りたる金を、四季の來ごとに拂ふこと。

**しきーばり** 敷梁【名】(建)床梁(ヤ)又は小屋梁(ヤ)を受くる大梁。

**しきび** 式微【名】しよくび(式微)に同じ。

**しきび** 樒【名】〔植〕しきみ(樒)に同じ。

**しきひやうぢやうしゆう** 式評定衆【名】評定衆の中、引附頭・政所・問注所の執事及び評定奉行等の職を兼務せず、例式の評定にのみ與かりしもの。

**しきひら** 敷平【名】〔建〕軒先唐草瓦の下に敷込みたる平瓦。

**しきふ** 支給【名】渡し與ふること。あてがひ。支出給與。

**じきふ** 至急【名】■■樒めていそぐこと。おほいそぎ。■■電報の指定事項の一。至急電報なることを示すもの。その略符號は、和文にてはウナ、歐文にてはHU。

**しきふ** 死念【名】〔佛〕火念の大事。〔禪宗の語〕

**しきふ** 資給【名】あてがふこと。與ふること。

**しきふ** 職封【名】太政大臣より大納言にいたるまで賜はる課戶。じきふ(食封)參照。

**しきふ** 職符【名】古、京職より下し付符。

**しきふ** 敷布【名】褥布團の上に敷きて用ふる白布。しいつ。しいと。

**しきふ** 式部【名】■■古の式部省の職員たる者。■■式部局に屬して、內外の儀式の事を掌りし奏任官。大少の二階級ありたり。■■式部察に屬して、庶務に從事せし判任官。明治十三年設置、同十九年廢止。

**じきふ** 自給【名】自己の力にて生活すること。みづから支給すること。

自給自足【名】〔經〕『英Self-sufficiency』國民經濟上、凡そ一國內に要する貨物は、外國との貿易に依らずして、悉くその國內に於て生產供給すること。自足自給。しんちゆうしやうじゆぎ(新重商主義)參照。

**じきふ** 食封【名】古、皇族・諸臣の勳功位階・職分ある者に賜はりし課戶。位階に對しては位封、職官に對しては職封、勳功に對しては功封と呼び、その課戶をすべて封戶(ふこ)といへり。また封戶より輸するところの調庸は、全部その主に納め、租は官と主とに半ばづつ納むる規定なりき。

**じきふがく** 支給額【名】支給すべき金額。

**じきふきよく** 式部局【名】太政官中の一局。長・助・大式部・少式部の職員ありて、內外の議式及び國書に關する事務を掌りし所。明治四年設置。翌年式部寮と改稱し、頭・權頭・助・權助・大屬・權大屬・中屬・權中屬・少屬・權少屬・大舍人(おほとねり)・權大舍人・大伶人・中伶人・少伶人の職員を置きしが、同八年宮內省の所管より正院(せいゐん)に屬し、同十年復び宮內省の所管に歸し、禮典・陵墓・任叙の事務を掌り、同十七年、廢せられ、式部職これに代れり。

**じきふきよくはう** 至急局報【名】至急電報なる局報。至急官報に次ぎ、その他の諸電報に先だちて送達す。

**じきふく** 式服【名】儀式の時に著用すべく定まりたる衣服。

**じきふくわん** 式部官【名】式部職に屬する高等官。じきぶしき(式部式)[二]參照。

**じきふくわんぱう** 至急官報【名】至急電報なる官報。他のすべての電報に先だちて送達す。

**じきふさいそく** 支給細則【名】給與金錢の支給に關する細則。

**じきふしき** 式部職【名】■■明治十七年式部局に代りて置かれたる宮內省中の一局。帝室の祭典・禮式を掌り、及び雅樂の事を管理したるもの。その職員は式部長官・式部次官・式部官屬・掌典・掌典以下及び雅樂長・雅樂屬以下これに屬す。■■宮內省中の一局。帝室の祭式・交際の事を掌る所。式部長官・式部次官・式部官舍人長・舍人の職員あり。

**じきふしきくわん** 式部次官【名】■■式部職[一]の職員。式部長官を輔くる勅任官。■■式部職[二]の職員。式部長官を輔くる勅任官。

**じきふしはう** 至急私報【名】至急電報なる私報。至急官報及び至急局報に次ぎ、その他の電報に先だちて送達するもの。

**じきふじ-じくわん** 式部官【名】■■式部職[一]の職員。式部長官を輔くる勅任官。

**じきふじそく-しゆぎ** 自給自足主義【名】〔經〕『獨Prinzip der selbstgenügsamkeit』一國の商業政策上、その國內に要する貨物は、外國との貿易に依らず、悉くその國內に於て生產供給せんとする主義。じきふじそく(自給自足)參照。

**しきふ-しんてん** 至急親展【名】電報の指定事項の一。他人の披見を禁る至急電報なることを示すもの。その略號は、和文にては、ウニ、歐文にてはUO。

**しきぶしやう** 式部省【名】古の八省の一。國の典章・禮儀・六位以下の文官の奏任・奏授の事、貢舉・考課などを掌りし所。輔一人、大少輔各一人、大・少丞各二人、大錄一人、少錄三人、史生(ししやう)二十人及び省掌・使部・直丁(ちやう)若干等の職員あり。輔は大抵親王を以て任ぜらるる例なりき。のりのつかさ。解司(げし)。

「職」に同じ。

**しきぶ-しよく** 式部職【名】しきぶし(式部職)に同じ。

**しきぶすま** 敷衾【名】下に敷く夜具。しきぶとん。小町集「上は下に助けられけり敷きぶすま」

**じ-きぶせい** 次念性【名】〔醫〕念性病の持續時間の割合に長きに亙るもの。およそ廿八日乃至四十日以內に及ぶ。亞念性。

**しきふせん** 四級船【名】船舶檢査規定に因りて制定せられたる第四級即ち最下級に屬する船。その船路は、平水航路區域內に限らる。

**しきふたい** 敷舞臺【名】■■座敷を板敷にして、假に設けたる能舞臺。■■おきぶたい(置舞臺)に同じ。

**しきふ-ちやうくわん** 式部長官【名】■■式部職[一]の長官。帝室の祭典・禮式・雅樂等を總管せし勅任官。■■式部職[二]の長官。帝室の祭典・禮式等を總管するもの。親任官又は勅任官とす。

**しきふ-つうわ** 至急通話【名】電話の通話の一。普通通話に先だちて取扱ふもの。

**しきふつうわ-れう** 至急通話料【名】至急通話の料金。普通通話料の二倍とす。

**しきふ-でんぱう** 至急電報【名】至急官報・至急局報・至急私報の三種に分つ。至急電報の料金、官報と私報とによりて、その金額に差あり。官報は通常電報料の二倍、私報はその三倍とす。

**しきふ-ぶとん** 敷蒲團【名】■■寢床に敷く蒲團。三布又は四布にて、長方形をなす。(掛蒲團に對して)■■ざぶとん(座蒲團)に同じ。「を見よ。

**しきふなばり** 敷船梁【名】ふなばり(船梁)。

**しきふ-の-たいふ** 式部大夫【名】式部の丞にて、五位に叙せられしもの。貴式部の大夫」

**しきふ-ひん** 四級品【名】〔商〕運送貨物の、五級品の下、三級品の上に位するもの。毛織物・鮮魚・生絲・器械の類。

**しきぶ-ぶし** 式部節【名】東(ひがし)浜淨瑠璃の一派。薩摩士佐の門人(一說に薩摩外記の門人)廣瀨式部太夫の始めたるもの。式部太夫、後、姓を岸澤と改めしが、流末、常磐津(ときわづ)に屬するに至り、その三味線彈岸澤を名乘るものこれに基づく。

**しきふぶん** 識文【名】しもん(識文)の誤讀。

**しきふぶん-じじん** 職分資人【名】古、大臣・大納言に賜ひて、その警衛及び雜使に供せし資人。太政大臣に三百人、左・右大臣に二百人、大納言に一百人とし、位分資人と同じく、外八位以下の子及び庶人を取りし外、內八位以上をも取ることを得しめたり。(位分資人に對して)令集解、職分資人』

**じき-ぶんしせつ** 磁氣分子說【名】〔理〕鐵その他、磁性體の各分子が、それぞれ一箇の小磁石なりとの假說。

**しきぶん-しき** 職分田【名】古、大臣・大納言及び太宰府の官人、國司・郡司又は諸道の博士等に賜ひし田地。太政大臣は四十町、左・右大臣は三十町、大中納言は二十町など、「職の輕重に應じて、等差あり。輪租田の一。職田。しきふ(職封)參照。

**しきふる** 頻降る【動四自】しきりに降る。〔古語〕萬葉「春の雨はいやしきふるに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも」

**しきふれう** 式部察【名】しきぶきよく(式部局)を見よ。

**しきふでんぱうれう** 至急電報料【名】至急電報の料金。官報と私報とによりて、その金額に差あり。官報は通常電報料の二倍、私報はその三倍とす。





**しきべつ** 識別【名】見わくること。甄別。

**しきほふ** 色法【名】〔佛〕一切諸役の中、物質に屬するもの。(心法に對して)

**しきま** 色魔【名】自己の色慾を滿足せしむるため多くの婦女を誘惑する者。

**しきまう** 色盲【名】〔醫〕『英Colour-blindness』物の色を判然と見分け得ざる病。赤色盲・綠色盲の如く、一部の色に對してのみのものと、すべての色に對してのものとあり、後者は萬物、悉く灰白色に見ゆ。

**しきまき** 重播・頻蒔【名】穀物の種子を、一旦蒔きたる上に重ねて蒔き、その生長を害すること。上古、素盞嗚(スサノヲ)尊これを犯し、天つ罪の一に數へられたり。(古語)萬葉「天つ罪とは、畔放(アハナチ)溝埋(ミゾウメ)樋放(ヒハナチ)頻蒔」

**しきまする** 敷座する【動四他】しく(敷く)[五]の敬語。治めたまふ。しろしめす。しかす(古語)萬葉「高ひかる日のみこしきます大殿のへに」

**しきまつば** 敷松葉【名】霜よけのために、庭に敷く、枯れ松葉。蘆菴集「路地の霜石蓋松葉」

**しきみ** 樒・梻・莽草【名】〔植〕木蘭(モクレン)科に屬する常綠樹。山地に自生し、高さ一丈餘・周圍二尺に達し、樹皮は黑色にして、褐色を帶び、やや平滑なり。葉は鶴木(ツバキ)に似て、深綠色を呈し、月見淡黃白色の小花開き、後、實を結ぶ。根・枝・葉實共に香氣ありて、毒を帶ぶ。枝葉は佛前に供へ、葉と樹皮とは、乾して抹香又は線香に製す。しきびゝ。かうのき。はなのき。和名抄「樒、之岐美、香木也」萬葉「奧山のしきみの花の名のごとやしくしく君に戀ひわたりなむ」

**しきみ** 闕【名】門戶の下、左右の柱の間に横たへたる木。また室の出入口に敷き、多くは溝を穿ち樋・障子を設けたる横木。おしき。とじきみ。しき。しきる。和名抄「闕、門閾也、俗名苑云、國一名閫、和名、之岐美、俗云、庭之敍美」

**しきみそ** 敷味噌【名】料理法の一。酢取の魚肉を小皿に合はせ、味噌を敷き、その上に載せて出すもの。

**しきみん** (英Schimmel)【名】褥に合める有毒成分。水に溶解せざる結晶體をなす。

**しきむし** しき蟲【名】〔動〕鞘翅(シヤウシ)類に屬する昆蟲。體は皆黃色を呈し、口吻(クチバシ)細長く、幼蟲は桑を害す。

**しきむ-へんじよ-おやう** 識無邊處天【名】〔佛〕識無邊處天に生ずる禪定(ゼンヂヤウ)。

**しきむ-へんじよ-てん** 識無邊處天【名】『梵Vijñānānantyāyatana の譯語』三界諸天の一。無色界の第三天。色相を離るると同時に、空をも超越して、無邊なる心識に住する境界。壽四萬劫なりといふ。識智天。

**しきん** 至近【名】きはめて近きこと。

**しきん** 紫禁【名】紫は紫微宮の義。皇居。禁裏。內裡。紫宸。

**しきん** 試金【名】地金・合金又は鑛石を試驗して、その品質・品位を決定し、鑑識すること。

**しきん** 紫金【名】〔鑛〕しやくさう(赤銅)に同じ。

**しきん** 賜金【名】朝廷又は政府などより金を與へらるること、又その金。

**しきん** 資金【名】■■資本の金。もとで。もときん。■■特定の用途に充てらるる金。

形の支拂用に供せんがために、支拂人に提供する金錢的對價・手形資金。

**しきん** 私金【名】私有の金。(公金に對して)

**しきん** 齒齦・齒斷【名】〔醫〕口腔粘膜の一部にして、血管に富める軟組織。齒根膜及び齒槽と共に、直接に齒牙支持の組織たり。はぐき。

**じきん** 自謹【名】自ら謹むこと。謙虛謹厚なる者。「同じ。

**しきんからまつ** 紫金唐松【名】〔植〕しきんからまつさう(紫銀唐松草)の略。

**しきんからまつさう** 紫銀唐松草【名】〔植〕毛茛(ハナウヰ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、莖の高さ二三尺、葉は卵形。夏季、紫雰にして、雄蕊の淡黃色なる花を開く。しきんからまつ。

**しきんからまつさう** 紫銀唐松草【名】〔植〕毛茛(ハナウヰ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は複葉にて、小葉は廣卵形。初夏の頃、帶黃白色の花を圓錐花序に開く。山野に自生す。しきんからまつ。

**しきんぎう** 紫金牛【名】〔植〕やふかうじ(紫金牛)に同じ。

**しきんぎう-くわ** 紫金牛科【名】〔植〕やぶかうじくわ(紫金牛科)に同じ。

**しきん-きむしや** 資金義務者【名】〔法〕『手形資金を供給する義務者の義』小切手の振出人。

**しきん-くわん** 紫中官【名】舊璇球藩三司の一。即ち親方と稱せしものの一。

**しきん-くわんけい** 資金關係【名】〔商〕手形資金に就き、振出人と支拂人との間に存する關係。

**し-きんこ** 支金庫【名】本金庫又は中央金庫に統轄せらるる下級の金庫。本金庫の設置なき地方に置かれ、日本銀行代理店長、又は出張所長、これが事務を取扱ふ。

**しきん-じゆぎよきよはう** 資金受授局報【名】局報の一。郵便爲替金・郵便取立金・郵便貯金の取扱に要する資金の受授に關して、相互の金庫間に往復する電報。

**しきん-じつ** 試金術【名】鑛物の主要成分を、定量分析する術。乾式と濕式との二法あり。前者は、火熱又は融劑を用ひ、目的とする成分を抽收して定量するもの。後者は、試料鑛物の溶液を作り、試藥又は電流を用ひて、目的とする成分を沈澱せしめて定量するもの。試金法。

**しきん-しようけん** 資金證券【名】資金を表はせる有價證券。即ち大藏省證券・公債證書・會社株券・社債など。これを所有する者は利子又は配當を受くるが故に、投資の目的物として取引せられ、又、擔保物件となすを得。

**しきん-せき** 試金石【名】■■〔鑛〕かねつけいし(金附石)に同じ。■■他の事物の價値を判定する試驗となるべきものの譬。

**しきん-たい** 紫金苔【名】〔植〕川苔の一種。筑後國の壽仙苔の小なるもの。高價なり。

**しきん-ぢやう** 紫金錠【名】麝香・龍腦・薄荷などにて製したる煉藥。方形にて、金箔を附け、氣附(キツケ)などに用ふ。

**しきん-ぢやう** 紫金藤【名】夾竹桃(カキウチ)科に屬する蔓性灌木。莖枝は紫黑色、葉は披針形又は長楕圓形の全緣にして、平滑なり。初夏、聚繖花序又は圓錐花序の淡黃の花を綴る。暖國の海邊の山地に生ず。きかきかづら。

**しきん-とう** 紫金牛【名】〔植〕しきんぎうに同じ。

**し-きんなら** 四緊那羅【名】〔佛〕次條の略。

**し-きんならわう** 四緊那羅王【名】〔佛〕緊那羅の四王、即ち法緊那羅・妙法緊那羅・大法緊那羅・持法緊那羅の併稱。

**しきん-はふ** 試金法【名】じきんじつ(試金術)に同じ。

**しきん-ばり** 試金針【名】試金石に擦附けたる條痕により、品位を推定する場合に、對照比較のために用ふる、品位既知の金針。

**しきん-もんく** 資金文句【名】〔商〕手形振出の資金の性質を手形面に指示する文句。

**しきん-ろ** 試金爐【名】乾式の試金術を行ふ際に、試料鑛物を熱し、又は溶すに用ふる爐。

**しきん-わかさう** 紫禁和歌草【名】〔書〕じゆんくわんごしふ(順德院御集)に同じ。

**しきん-め** 敷目・重目【名】しきめをせし(敷目縫)の略。太平記「火縫の曹の、敷目に拵へたるを」

**しきん-めをせし** (敷目縫)

紅(クレナヰ)の敷目【句】しきめをせしを見よ。

**しきめ-いた** 敷目板【名】〔建〕板の縫目の下に取附けたる目板。

**しき-めいれい** 指揮命令【名】〔法〕上級官廳が、職權又は要求により、下級官廳に、その職務上の事項に關して下す命令。官廳內部にのみ効力を有す。調合と指令とに分つ。各その條を見よ。

**しき-めす** 頻召す【動四他】頻りに召す。〔古語〕萬葉「藤原の大宮仕あれつぎやを

とめがともはしきめさるかも」

**しきめ-ぬひ** 敷目縫【名】敷目縫の縫方。

**しきめ-をとこ** 敷目絁・重目織【名】綾の絁の一種。二色の絲にて、袖と草摺とに斜に色を變へて織せるもの。白と紅との絲を用ひたるを紅の敷目といふ。或は小さき松(ヤウ)に、絲目を細かく織せるものともいふ。かしこりをとこ(樫鳥絁)に同じともいふ。

**しきも** 敷裳【名】寢床などに敷きて用ふるもの。しとねの類。〔古語〕「萬葉」日ざらしの麻手づくりをしきもなすしきに取敷き」

**しきも-あふ** 敷裳合ふ【枕】敷裳を敷合はせて寢ぬといふ意より轉じて、いへにかけていふ。「萬葉」そこゆゑになでさめてけるしきもあふいへと思ひてたまだれのをちの大野の」

**しき-もく** 式目【名】〔書〕式は法式、目は條目の義。制度の箇條書。法律。式條。〔武家時代の語〕「太平記」貞永に五十一箇條の式目を定めて」

**しきもく-げんかい** 式目諺解【名】〔書〕しきもくせう(式目抄)に同じ。

**しきもく-しんぺんつるか** 式目新編追加【名】〔書〕しんぺんつるか(新編追加)を見よ。

**しきもくせう** 式目抄【名】〔書〕貞永式目の註釋書。天文三年清原環翠軒が、祖父常忠の說に據りて記したるもの。寛文九年の刊本には、式目諺解と題せり。

**しき-もす** 【動四自】『でくを見よ』繁り合ふ。〔古語〕「紀井上有二鶴津杜樹一枝葉扶疎、ヱダハシキモシ」

**じき-もつ** 食物【名】しよくもつ(食物)に同じ。「保元」食物なければ、忽ち命盡きぬ」

**しき-もの** 敷物【名】坐るために、下に敷く物。卽ち座蒲團・ケットなど。

**しき-ものがたり** 四季物語【名】〔書〕一年中の公事・節物ともを、假名文にて記せるもの。一卷。鴨長明の著といふ。使蘆四季物語にも、玉だれに、後の奏はとまりけりとぞ書きける」

**しきもん** 識文【名】しもん(識文)の誤讀。

**しきもり** 式守【名】相撲(スマウ)の行司の家柄の一。しきもりこだいふ(式守五太夫)參照。

**しきもり-くわざう** 式守蝸牛【名】〔人〕相撲(スマウ)の行司。初名は伊之助。相撲の赤膏を創製す。寛政・文化頃の人。

**しきもり-こだいふ** 式守五太夫【名】〔人〕相撲(スマウ)の行司。式守氏の元祖。名は義則。伊豆國下田の人。力士伊勢海五太夫の弟子。後、木村庄之助に從ひ、行司となる。天明頃の人。

**しき-や** 醡屋【名】きたなき家。〔古語〕「萬葉」さし焼かむをやのしきやにかき捨てむやれどもを敷きて」

**しき-や** 識野【名】〔哲〕『英Field of consciousness』現在覺醒せる意識の全範圍。

**しき-やう** 詩經【名】〔書〕五經の一。殷代より春秋時代までの詩三百十一篇を、風・雅・頌の三部門に大別して、孔子の纂輯したるもの。古は、單に詩と稱せしが、宋の朱子に至り、これを詩經と稱す。まうし・毛詩・りくぎ(六義)參照。

**しき-やう** 四境【名】四方のさかひ。

**しき-やう** 死境【名】しろ(死地)に同じ。

**しき-やう** 市況【名】市の商業の現狀。市場の景氣。

**しき-やう** 執行【名】しぎやう(執行)に同じ。

**しき-やう** 四行【名】〔佛〕菩提(ボダイ)・涅槃・智禁・菊磨(ヘツ)の四種の行。「四隅・四行の薩埵」參照。

**しき-やう** 自强・自彊【名】『易經の上象傳に「天行健、君子以自强不息」、禮記の學記篇に「然後能自强也」とあり』みづから强めて休息せざること。「撰字鏡」の略。

**じき-やう** 字鏡【名】〔書〕『『新字鏡』の略』

**じき-やう** 耳鏡【名】〔醫〕『獨Ohrspiegel』耳の內部の狀態を檢視するに用ふる器。

**じき-やう** 自强【名】〔佛〕■自己の修行。(化他(ケタ)に對して)同じ。■自己の修行。(化他(ケタ)に對して)自行・化他(ケタ)【句】〔佛〕「自利・利他」に同じ。「御文章」いよいよ信心を決定(ケツヂ)して、眞實報土の往生を願ひたる人こそ、まことにその身の德ともなるべし。これまた自行化他の道理にかなへり」と思ふべきものなり」

**じき-やう** 事行【名】識口(ヂキ)の第四識(ヂキ)の者の稱。「唯識述記」「識口:四識號二事行」

**しきやう-さい** 四境祭【名】しかくしきやうのまつり(四角四境祭)を見よ。

**じきやう-しふ** 字鏡集【名】〔書〕漢字を天象・地儀・植物等の部門に分ち、更に各部を偏旁によりて排列したる字書。二十卷。菅原爲長の著。

**しぎやう-じやう** 施行狀【名】武家時代に幕府の執政者が、將軍の御教書(ミケウ)を承けて、その施行を命ぜし副狀。鎌倉時代には、執權より六波羅に、又は執權・六波羅より守護に下し、室町時代には、管領より守護に下したり。

**しぎやうせい** 市行政【名】市の自治行政。市參事會の擔任に屬す。

**しきやう-ゆうずゑ** 四强雄蕊【名】〔植〕『英Tetradynamous stamens』一箇の花の中に六雄蕊ありて、その中、四蕊は長く、二蕊は短きもの。油菜・大根・黃芥(ガイ)等、十字科の植物に常に見るところなり。にきやうゆうずゑ(二强雄蕊)參照。

**しぎ-やき** 鴫燒【名】茄子を油でいためて、味を附けたる擂味噌(ミソ)を塗りし料理。

**しぎやく** 弑逆【名】臣下の君を殺すこと。しいぎやく。

**しぎやく-にち** 四逆日【名】九星にて、往くと歸るとに忌むべしといふ日。卽ち七日に往かず、八日に歸らず、又、申の日に往かず。酉の日に離れずといふ。

**じき-やみ** 食休【名】しよくやすみ(食休)に同じ。

**しき-やみ** 敗闇【名】非常にくらき夜。〔古語〕

**しき-ゆう** 梓宮【名】『支那にて、古、梓の材にて作りしよりいふ』屍體をおさめた棺。「略」

**しき-ゆう** 紫宮【名】しびきゅう(紫微宮)の略。

**しき-ゆう** 子宮【名】女性の生殖器の一部。胎兒のやどる所。小骨盤の中央、膀胱及び大腸の間にあり、形壓平せられたる茄子に似たる筋質性の空洞器官にして厚壁を有し、その類部は腟の上部に表はる。こつぼ。こぶくろ。

**しきゆう-えん** 子宮炎【名】〔醫〕しきゆうじ・しつえん(子宮實質炎)に同じ。

**しきゆう-かいこうき** 子宮開口期【名】〔醫〕出產の際、陣痛ある前後の時期。

**しきゆう-から** 子宮腔【名】〔醫〕子宮腟に圍まれたる空處。

**しきゆう-かすゐ** 子宮下垂【名】〔醫〕しきゆうだつ(子宮脫)に同じ。

**しきゆうがん** 子宮癌【名】〔醫〕子宮內に生ずる癌腫。婦人の癌腫中、その三分一を占むといふ。

**しきゆう-きんそう** 子宮筋層【名】〔醫〕子宮壁の中層、卽ち子宮の主部を成すものにして、外層及び內層(子宮粘膜)より厚きこと、四倍に達す。

**しきゆう-きやう** 子宮鏡【名】〔醫〕子宮腟部の視診及びその手術に際し、使用する器械。種類多し。

**しきゆうぐわい-にんしん** 子宮外姙娠【名】〔醫〕受胎せる卵子の、子宮腔以外に發育すること。

**しきゆうけい** 子宮頸【名】〔醫〕子宮の最下部にして、最も細く、後下方に向ふ部分。腟の上部に圍繞せられ、その空端腟內にあらはる。

**しきゆう-じ-しつえん** 子宮實質炎【名】〔醫〕子宮筋層に起る炎症。多くは內膜炎と併發す。子宮炎。しぎゆうじやう(子宮病)參照。

**しきゆう-たい** 子宮體【名】子宮の中央の長くして、下部に至るに從ひ、細き部分。

**しきゆう-だつ** 子宮脫【名】〔醫〕子宮の常位より垂下すること。子宮下垂。

**しきゆう-てい** 子宮底【名】〔醫〕子宮の最上部の、廣く且つ厚く膨出せるところ。

**しきゆう-ないまくえん** 子宮內膜炎【名】〔醫〕子宮粘膜に起る炎症。原因は痲毒感冒・月經時・及び產褥時の不潔生・急性傳染病等による。しきゆうびやう(子宮病)參照。

**しきゆう-ねんまく** 子宮粘膜【名】〔醫〕子宮內面を蔽ふ、海く軟弱なる皮膜。灰赤色







にして、數多の腺を有し、透明・アルカリ性の粘液を分泌す。妊娠の際は卵巢を支持し、被包する官能を有す。月經は、この膜の脆脆・崩壞ひて、小血管破裂するに因る。

**しきゆう-びやう** 子宮病【名】子宮に發する疾病の總稱。大別すれば、畸形・炎症・腫瘍・位置及び形狀の異常の四種となり。中にも最も多きは、炎症にして、子宮內膜炎と子宮實質炎との二種あり。婦人病。

**しきゆうぶふくまくえん** 子宮部腹膜炎【名】〔醫〕子宮の外面を蔽へる腹膜に起る炎症。發熱して、下腹に疼痛を覺ゆ。

**しきゆう-へき** 子宮壁【名】〔醫〕子宮の腟の側壁。

**し-きゆうらみん** 四窮民【名】「繫蓂(クワツ)孤獨」に同じ。

**し-きよ** 死去【名】死にて、この世を去ること。「文」

**し-きよ** 四句【名】〔文〕律詩の前聯・後聯の四句を、いづれも景物を寫さずして、情思を述べたるもの。(四實に對して)

**じ-きよ** 侍御【名】君主のそばに近く仕ふること、又その人。「を儲すこと。

**し-きよう** 詩興【名】詩情の動くこと。詩思

**しきよき** 視距儀【名】『英Tachymeter又Telometer』距離及び高差を側定するに用ふる器機。構造は、輪鏡儀と殆ど同じ。すたちや。

**し-きよく** 支局【名】本局の管理下に、本局と分離して、事務を取扱ふ局。

**し-きよく** 私曲【名】不平公にして、邪曲なること。よこしま。わたくし。

**し-きよく** 四極【名】四方の極めて高き國。

**し-きよく** 紫極【名】『紫微北極の義』天子の居らるる處。皇居。

**し-きよく** 枳棘【名】枳(カラタチ)と棘(イバラ)と。

**し-きよく** 枳棘は鸞鳳の棲息所に非ず【句】『後漢書の循吏傳に出づ』賢能の士は、小地位に居らざる譬。

**しきよく** 色欲・色慾【名】男女性交の慾。色情。性慾。

**しぎよく** 矢玉【名】やだま(矢玉)に同じ。

**しきりよく** 矢玉【名】やだま(矢玉)に同じ。「鐵砲・石火矢すきまなく、しぎよくを飛ばせて戰ひける」

**じ-きよく** 時局【名】現在の時勢。時事の現狀。世局。

**じ-きよく** 事局【名】〔理〕『英Magnetic potential』磁石の鍔を吸引する力の最も强き部分。通常その兩端近くに在り。磁石を自由に動き得るやうに支へたる時、北に向ふ端なるを、指北極又は正極又は赤極といひ、南に向ふ端なるを、指南極又は負極又は青極といひ、同名の二極は相斥け、異名の二極は相引く。指北極は符號Nにて表はし、指南極はSにて表はすを常とす。

磁極の作用【句】〔理〕磁石の同名の極は相衝き、異名の極は相引く作用。その强は、距離の自乘に反比例す。

**じき-よく** 食慾【名】しよくよく(食慾)に同じ。

**しきよく-ちやう** 支局長【名】支局の長。

**しきよく-そくりやう** 視距測量【名】視距儀を用ひて測量すること。

**しきり** 【名】頻に產氣を催すこと。出產の間際の陣痛。右大將嫌倉實紀「申し早くお出なされませ、御樣のしきりが」

**しきり** 仕切【名】■さかひ。かぎり。■〔商〕帳面又は取引の決算。■〔商〕定期取引にて實買せし物を、その受渡日の到來以前において、轉賣又は買戻をなし、受渡をせずに、始末すること。■しきりきん(仕切金)の略。鈴鹿源馬江戸の問屋へ仕切を取に來りた、巡留中のしやれなり」

**しきり** 頻・荐【名】しりきれ(尻切)に同じ。

**しばしば** 仕切羽【名】仕切場(ヘ)■■〔商〕芝居の仕切場の在金主・座元・會計方・裏役など、俳優以外の役員の詰所。鼠木戸入口の傍に在りたり。■座元の手代。前記の仕切場に詰めをる、「る處。雜事に使はる。

仕切場の平(ヒ)【句】芝居の仕切場の在

**しきり-ば** 仕切羽【名】仕切矧に合はせて、矧(ハ)ぎたる矢羽。新勘彈「しきりばの矢といふことを、人のよませはべりけるに」

**しきり-はぎ** 仕切矧【名】矢羽を矧ぐに、黑・白などにすること。

**しきり-ばん** 仕切判【名】仕切をする時の證に捺(オ)す印。

**しきり-ます** 仕切枡【名】芝居の見物人の居る場所を、木材にて區劃すること。ます。

**しきり-きん** 仕切金【名】仕切りたる金。賣主が買主より受取るべき代金・立替金・諸入費などの總金額。しきりがね。

**しきり-じやう** 仕切狀【名】仕切狀。

**しきり-ぎん** 仕切銀【名】しきりきん(仕切金)に同じ。「元祿時代の語」天の割馬この十七日、岩國の祇の仕切銀に、才覺はしたれども」

**しきり-じやう** 仕切狀【名】〔商〕■賣主が、賣渡したる貨物の品質・數量・荷印・番號・代價及び買主のために立替(ヌキ)し拂ひたる諸出(ヂキ)等、即ち仕切金の全部を計上し、その貨物に添へて、買主に送附する明細書。おくりじやう。■うりあげかんぢやうしよ(賣上勘定書)に同じ。

**しきり-しよ** 仕切書【名】前條に同じ。

**しきり-しよ-ふくほん** 仕切書副本【名】〔商〕仕切書紛失の場合に備ふるため、荷受人に送て別に送附する仕切書副本。

**しきり-ちがひだな** 仕切違棚【名】上下二組の違棚を、一本の束(ヅカ)にて貫き支へたるがごとくに見する造棚。「なす帳簿。

**しきり-ちやう** 仕切帳【名】取引の決算を

**しきり-に** 頻に・荐に【副】しばしば。たびたび。かさねがさねに。

**しきり-のう** 仕切能【名】明治維新前、社地その他にて、能の眞似を行ひしもの。

**しきり-ば** 仕切場【名】■■昔の芝居にて、

**しきり-ばし** 仕切矧【名】矢羽を矧ぐに、黑・白などにすること。

**しきり-はぶく** 仕切羽【名】芝居の見物人の

**しきり-ばん** 仕切判【名】仕切をする時の

**しきり-ます** 仕切枡【名】芝居の見物人の

**しきり-まゐる** 頻參る【動四自】しきりに參る。〔古語〕「萬葉」さるべき御使ども、數知らずしきり參りつるもめでたくぞ」

**しきり-やう** 識量【名】識見と度量。

**しきり-よ** 識慮【名】識見と思慮。

**しきり-よく** 識力【名】識別する能力。

**しきり-よく** 磁氣力【名】〔理〕じりよく(磁力)に同じ。

**しきり-をとこ** 仕切男【名】仕切場に居る「男。

**しきる** 仕切る【動四他】■■仕は偽の義』■さかひを立つ。區劃す。かぎる。■結束をつく。■〔商〕轉賣又は買戻によりて、取引を完結す。仕舞ふ。■帳面の決算をなす。■相撲(スマウ)を行ふ前に、準備の身構をなす。

**しきる** 頻る【動四自】しばしば至るる。たびたび重なる。しく。「源氏」まうのぼり給ふにも、あまりうちしきるをりをりは」「孕産婦」產の氣しきりて、誕生の初靡高く聞え行り」

**しきれ** 尻切【名】■■『しりきれ(尻切)の略』革にて作りたる背の腹物。道の濕ひたる時に用ひしものにて、雪駄(ヂタ)はこれより轉ぜしものといふ。しきり。「尻切草履(ゾウリ)」は、その上に、紺の袴を着用したり。〔古語〕

**しきれい** 式禮【名】しきたい(色代)■■に同じ。「川中島合戰」念かぬ信玄、血氣の輩虎、一散に馬乘過め、兩方鎧猪放し、馬上に式禮」

**しき-れう** 敷料【名】〔商〕くらしきれう(倉敷料)に同じ。

**しき-れんぐわ** 敷煉瓦【名】『英Paving brick』煉瓦鋪道に使用せらるる煉瓦。鋪用煉瓦。

**じき-ろう** 食籠【名】食物を盛るに用ひし一種の器。青銅又は堆朱などにて製し、多くは蓋ありて、上下ともその形圓し。食籠の物【句】食籠に酒の肴を盛りて出すこと。

**しぎ-わな** 鴫罠【名】鳴を捕ふるためのわな。馬「宇陀のたかきにしぎわな張る」

**しき-わら** 敷藁【名】敷物に充つる藁。しきぐさ。じよく。

**しき-ね** 敷居・閾【名】■地上に布きて、座

に充つる物。席などの類。 ▣しきみ〔閾〕に同じ。

**しきみ** 閾が高い【句】不義理又は面目なきことなどありて、その人の家に行きかね。

**しきねかう** 子規遺稿【名】〔書〕正岡子規の文草、及び俳句を集めたるもの。「卷。

**しきねき** 識域【名】〔哲〕『英Threshold of consciousness』意識の起る境域。刺戟の强・弱いづれにしても、その度を超ゆる時は、感覺(意識)の生ずることなきものなるより、その感覺の生ずる適度の場合をいふ。

**しげきねき**〔刺戟閾〕参照。

**しきねぎ** 敷居木・閾木【名】敷居 ▣に用

**しきねごし** 敷居越・閾越【名】▣敷居を隔てであること。 ▣すこしの間隔。 小町

**しきねん** 敷居・敷尹【名】しきねん(敷居)の雅便。〔古語〕公事根源「内辨、しきねんをおほす。しきねんは、敷居なり。堂上に敷きたる席に居よといふ心なるべし」

**しきねんりやう** 職員令【名】大寶令の中、官職上の規定を示したる部分。

**しく** 鍬【名】背、長崎に行はれし小供の遊戯。地面に筋を引きて區劃をし、その中に小石を積みて、守る者一人あり。これを前後左右より來りて、取らんとする衆兒の手を躱ねて、取られずに守り得たるを勝とす。

**しく** 宿【名】しゅく(宿)の訛。

**しく** 四苦【名】〔佛〕四種の苦痛、即ち生・老・病・死。「內法の四相」とも(五苦)はっく(八苦)参照。

四苦八苦【句】『四苦は八苦の中に包ませられてあれども、語調の上より重ねていふ』非常なるくるしみ。心中胸疾里・咽の呼吸も亂るる迄、思ひ切っても四苦八苦、手足をもがき、身をもがき」

**しく** 四句【名】▣四箇の句。 ▣〔佛〕『四句より成るによりていふ』ぶく(偈)に同じ。

四句の偈【句】〔佛〕前條▣に同じ。 ▣『六文字の四句の偈ばかり、この紙に顯現(あらは)せり

四句の偈文(げぶん)【句】〔佛〕前條に同じ。

**しく** 詩句【名】詩の句。

**しく** 死句【名】▣〔佛〕禪宗の語句の、未だ拘泥する所あるもの。(活句に對して) ▣〔文〕俳諧にて、言外に餘韻を有たぬ句。(活句に對して)

**しく** 死苦【名】▣死ぬるほどの苦痛。 ▣人間として免れ得ざる死の苦。 謠曲「歌古天仙なほ死苦の身なり。況や下劣貧賤の報に於てをや」

**しく** 市區【名】▣市と區と。 ▣市街の「區域。

**しく** 敷く・鋪く・布く【動四他】▣一面に廣げ敷く。のべひろげ。 ▣一面に並ぶ。きまちらす。 徒然「秋の野におく白露をけさ見れば玉やしけると驚かれつつ」 ▣敷物とす。下敷にす。「藉く」「草を藉きて坐す」 ▣一般に廣く及ぼす。弘む。「法令を布く」 ▣占む。領す。治む。知る。〔古語〕 萬葉「つづめてし瑞穗の國をかむながらふとしきまして」

**しく** 頻く【動四他】しきる。かさなる。〔古語〕 萬葉「うらがなし春のすぐればほととぎすいやしき鳴きぬ」

**しく** 敷く・鋪く・布く【動四自】▣一面に並ぶ。散らばる。「落花地にしく」 ▣ひろがり覆ふ。一面にかかる。わたる。 新勅集「霞ゐ敷しく木の芽はるさめ降るごとに花の袂はほころびにけり」 ▣四方に及ぶ。弘まる。

**しく** 若く・如く・及く【動四自】▣追ひつく。到りとどく。及ぶ。達す。〔古語〕 記「追ひしきて」 ▣比するに足る。くらべ。及ぶ。(多くは打消又は反語の形に用ふ) 萬葉「錦綾のなかに裏めるいはひ子も妹に及(しき)めや」

**しく** 若かず・如かず【句】次條に同じ。

**しく** 若くは無し・如くは無し【句】『若く物事は無しの意』及ぶものなし。しかず。

**しく**【動下二自】面意を倦す。しける。しぐる。〔古語〕 記「忽然天陰而(しけて)」

**しく** 至愚【名】極めておろかなること。

**しく** 資具【名】使用する器具。什器。

**しく** 四弘【名】〔佛〕しぐせいぐわん(四弘誓願)の略。

**しく** 慈救【名】じけぐ(慈救)の訛。

**じく** 慈救【名】〔佛〕▣慈悲心を以て、衆生を救ふこと。 ▣じけぐ(慈救偶)の略。

**じくぐわん** 慈救の偶(ぐ)【句】〔佛〕じく(慈救)に同じ。 謠曲「道成寺」「不動の慈救の偶、明王の火焔の黑煙を立てて之を祈りける」

**慈救の三洛叉**(さらさ)【句】〔佛〕『洛叉は梵Lakṣaにて、十萬の意』慈救偶を三十萬遍唱ふること。平家「この願に三七日打たれて、慈救の三洛叉を滿てうと思ふ大願あり」

**じく** 字句【名】文字と語句と。

**じく** 司空【名】支那の三公の一。土地と民事とを掌りしもの。「み。

**じくう** 四隅【名】四つかどのすみ。よすみ。

**じくう** 四宮【名】三宮に中宮を加へたる併稱。中宮は令制以後に生じたるもの。

**じくうしき** 四宮職【名】太皇太后職・皇太后職・皇后職・中宮職の總稱。

**じくぎん** 四九吟【名】〔文〕『四と九との乘積三十六なるによりていふ』かせん(歌仙)▣に同じ。

**じくくわつ** 志久活【名】〔語〕形容詞の「しく・しくしき・しけれ」と變化する活用。例へば、「美しく・美し・美しき・美しけれ」の類(へ久活(くわつ))に對して」「に同じ。

**じくぐわん** 宿願【名】じゅくぐわん(宿願)

**じくげ** 慈救偶【名】〔佛〕『大日經に出づ』不動明王の呪文(ぢゅもん)の一。即ち義英(ぎえい)・嫁命の義、三曼多(さまんだ)・戰拏(せんだ)・基惡の義、摩訶路灑拏(まかろしゃだ)・大忿怒の義、薩婆吒也(さばたや)(破壞の義)・怯鉢(きはつ)・恐怖の義、怛羅他(たらた)(堅固の義)・怯鉢(きはつ)・種子。これを誦すれば、災難を避け、所願を成就すといふ。慈救呪。慈救眞言。慈救・慈救の偶。「同じ。

**じくさ** 宿薬【名】〔佛〕じゅくよう(宿薬)に同じ。

**じくさ** 仕種【名】『各種の義』▣行ひかた。表情・動作。しうち。▣俳優の舞臺に於ける

**じくし** 宿紙【名】じゅくし(宿紙)に同じ。

**じくし** 頻頻【副】打續きて。絕えず。しきりに。しくしくに。〔古語〕 萬葉「山吹は目に目に咲きぬうるはしと思ふ君はしくしくおもほゆ」

**しくしく**【副】▣しをれてあはれげなるさま。 右京大夫集「たへがたく悲しくて、しくしくと泣くよりほかの事そなき」 ▣刺戟せられて痛むさま。ちくちく。

**じくじく**【副】水分の多きさま。

**しくしくなみだ** しくしく涙【名】しくしくと泣きて流すなみだ。 丹後集生「ふびんや、三吉、しくしく涙、頭かぶりして、目をかくし」

**しくしくに** 頻頻に【副】しくしく(頻頻)に同じ。〔古語〕 萬葉「しふたにのさきのありそに寄する波いやしくしくにいにしへ思ほゆ」

**しくしふ** 宿習【名】〔佛〕しゅくしう(宿習)に同じ。

**しくしふ** 宿執【名】〔佛〕しゅくしふ(宿執)に同じ。

**じくしん** 肅愼【名】しゅくしん(肅愼)に同じ。

**じくしんじん** 慈救眞言【名】〔佛〕じくげ(慈救偶)に同じ。 謠曲「光明眞言・尊勝陀羅尼・慈救眞言・寶篋印・火界咒・直言」

**じくじゅ** 慈救呪【名】〔佛〕じくげ(慈救偶)に同じ。 十訓「涙を流して、一たび慈救呪を誦てたまひければ、女房、本心になりにけり」

**しくじり**【名】『仕は爲(ス)の義』しくじること。しそこなひ。失敗。 敬計記手紙「さあ、とんだしくじりをやらかした」

**しくじる**【動四他】『仕は爲(ス)の義』▣あやまつ。しそこなふ。失敗す。 ▣解雇せらる。雇を解かる。

**しくせ** 宿世【名】〔佛〕しゅくせ(宿世)に同じ。

**しくせいぐわん** 四弘誓願【名】〔佛〕次條の略。

**しくせいぐわん** 四弘誓願【名】〔佛〕しぐせいぐわん(四弘誓願)▣を見よ。

**しくぜん** 宿善【名】〔佛〕しゅくぜん(宿善)に同じ。

**しくたびる** 仕草臥る【動下二自】『仕は爲(ス)の義』事をなして疲る。 太平記「何者ぞ、人の軍にしたびれて、疲癈したるを驚かすは」





**しくも** 仕口【名】〔建〕木材を接合する時に、切彫みたる面。枘(ほぞ)を附け、或は目途(めじ)などを立つることあり。 ▣塗器の製作の方法。

**しくも** 柴口【名】〔動〕次條の略。 謠「しくもひくあとの獵屋に年ふりていやみに」

**しくもらはら** 柴口鯛【名】〔魚〕めなだ(赤目魚)に同じ。

**しくん** 試掘【名】試みに鑛物を採掘すること。鑛床の探掘に値(あた)するや否やを調査するために行ふ探鑛。

**じくつく**【動四自】じくじくとす。濕潤してやはらかなり。

**しくつくわうく** 試掘鑛區【名】試掘權の登錄を得たる鑛區。

**しくつけん** 試掘權【名】〔法〕鑛業權の一。特定の鑛區內にて、或鑛物を試掘する權利。現行法にては、その存續期間を登錄の日より二箇年とし、その期間は、鑛區の狀況又は改正のために變更せらるることなしと定めらる。さいくつけん(採掘權)参照。

**しくつけんぼ** 試掘原簿【名】鑛業原簿の一。試掘に關する事項を登錄する者。

**しくつこうていへう** 試掘工程表【名】試掘權者が、試掘鑛區圖と共に、その鑛業事務所に備へおきて、一箇月ごとに、開坑に關する狀況、鑛產物の數量、行業目程及び工數を記載すべき帳簿。

**しくつし** 四崩【名】織物の綿柄の、四條の細かき筋を、堅・橫共に同一の長さに編みたるがごとく織出したるもの。

**しくつしゆつぐわんち** 試掘出願地【名】鑛物を試掘せんために、鑛山監督署長に出願する目的の土地。

**しくづす** 仕崩す【動四他】『仕は爲(ス)の義』やりそこなひて、惡しくなす。くづす。 傳傳名代氏系「世帶持たせ、仕崩したら、その身の不運」 ▣「要國の方言」

**じくない** 頻波の【枕】頻く波は頻波(しくなみ)と同じく、頻りに打寄する波の義にて、しくしく又はしばしばにかけていふ。 萬葉

**しくなみの**

「ほとときすとばたの浦にしくなみのしばしば君を見むよしもがな」 同「すみの江の岸の浦みにしく波のしくしく妹を見るよしもがも」

**しくなる** 〔英signal〕【名】あひづ。信號。

**じくねる**【動下一自】すねる。ねぢけたる舉動をす。 天智天皇「じくねるならば、かたつもはし海へとっぱめ鯨の餌食となすべきぞ」

**しくはす** 爲合す【動四自】▣互になす。同時になしあふ。 ▣打合はす。 美人征吉歌切差「すっかり仕くはせた事が、その場になると、とちるからいかね」

**しくはせ** 爲合【名】しくはすこと。うちあはせ。 美人征吉歌切差「こうこう、しくはせをして置いてな、あいつがやくの時すかまたを食はせやう」

**しくはっく** 四苦八苦【名】しく(四苦)の條。

**しくはふ** 爲加ふ【動下二他】なし加ふ。つくり加ふ。〔古語〕 源氏「蓬子(ぬ)・二階など、あやしきまでしくはへて」

**じくばり** 字配・字行【名】文字の排列。

**じくぶ**【動四自】よきぐあひに組み合ふ。そぐふ。〔古語〕 萬葉「うまじものいづくあかねをさかとらが角のふくれにしぐひあひにけむ」

**しくぶんげふ** 市區分業【名】〔經〕國內分業の一。市內の各區に行はるる分業。 淨瑠璃「蟲氣で久しうしくぼく致して居りましたが」

**しくま** 羆【名】〔動〕『南留別志に「羆をしぐま」といふは、何者の附けた調ならん』羆の二字を四熊の二字に分解したるもの。

「羆、志久萬」

**しくまがいこ** しくま柴胡【名】〔植〕ふなさ(翁草)▣に同じ。

**しくみ** 仕組【名】『仕は爲(ス)の義』▣くみたつること。こしらへ。くはだて。設計・計畫。結構。 ▣芝居又は小說などの趣向。脚色。

**しくみ** 仕組繪【名】紙を切拔きて、組立て得るやうに作れる繪。おこしゑ。

**しくむ** 仕組む【動四他】『仕は爲(ス)の義』▣工夫して爲す。構へ造る。くみたつ。 ▣くは、たづ。たくらむ。 豐臣四田川「主の後家と仕組んで、吉田の家を丸呑に」 ▣小說・脚本などの趣向を立つ。脚色す。

**しくむ**【動四自】はぢらふ。はにかむ。

**しくん** 使君【名】▣支那の州郡の長官。 ▣支那にて、天子の命を奉じて、國外に使する者の敬稱。 ▣こくしゅ(國守)の唐名。

**しくん** 師君【名】御匠の敬稱。御の君(し)。

**しくん** 嗣君【名】▣あとつぎの君主。 ▣し(嗣子)の敬稱。

**しくん** 師訓【名】御の教訓。

**しくん** 此君【名】〔植〕『竹書の玉徽之傳に「余は補竹、或問其故、但嘯永指竹曰、何可三一日無此君耶」とあるに本づく』たけ(竹)の異稱。このきみ。

**じくん** 司勳【名】支那にて、古、賞典を司る官。

**じくん** 字訓【名】漢字の訓讀。

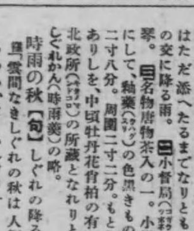
**じくんし** 貳君【名】二人の主君。にくん。

**じくんし** 四君子【名】植物の氣品あるもの四つ、即ち梅・菊・蘭・竹の併稱。文人畫にては、これを初歩の畫題とす。しいう(五友) ▣参照。

**しくんし** 使君子【名】〔植〕使君子科に屬する擧緣性常綠灌木。原產地はマライ地方。廣く熱帶地方に培養せられ、我が國にても、琉球・臺灣に園養せらる。高さ二丈內外に達し、葉は卵形にして對生し、夏秋の際、莖頂及び葉腋に、五瓣の美花、穗狀花序をなして數箇簇り開く。その色、初は白色、次第に紅變し、更に紫色を帶ぶるに至る。からくちなし。

**しくんしくわ** 使君子科【名】〔植〕蘭花植物。被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。熱帶諸地に產す。使君子・河梨勒などと、これに屬す。

**じくやう** 事供養【名】〔佛〕壇飾(ぢ)・壇上にて、本尊に供獻すべき六種の供物、即ち閼伽(あか)・塗香(ずこう)・華鬘(けまん)・燒香(しょうこう)・飯食(おんじき)・燈明。事供養。理供養に對して)


(しんくし)

**しくらう** 宿老【名】しゅくらう(宿老)に同じ。

**じくらべ** 字競【名】數人にて、書籍の或箇所を開き、某字何行某字何行に何箇並べ、各名何字並等の題にて、同一の文字の相競べるを發見することの遲速を競ふ遊戯。

**しくり**【副】▣しくしくに同じ。 ▣樣よく組みあるさま。折りあひのよきさま。しっくり。

**じくり**【副】じくじくに同じ。

**じくり-ふ** 仕繰夫【名】じちゅうふ(支柱夫)を云ふ。〔九州の方言〕

**しくる**【動下二自】頻おしみたるやうに見ゆ。〔古語〕 宇治「いただきはげたる大童子の、まみしくれて」

**しくる** 時雨る【動下二自】▣しぐれが降る。 源氏「秋霧にたちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかおとぞ思ふ」 ▣涙を催す。泣きて落涙せんとす。 源氏「眉のあたりうちしぐれて、ひそみみたり」

**しくれ** 時雨【名】▣顆(ぐ)・粒(ぢ)の義とも、小雨のためにしばし降るる義とも、ともはただ添へのためにしばし降るる義なりともいふ』秋冬の交に降る雨。 ▣小曾局(ぞうきょく)の用ひし琴。 ▣名物唐物茶入の一。小川手の耳附にして、鮎瓢(ぢょう)の色黑きもの。胴の高さ二寸八分。周圍二寸二分。もと和泉國堺にありしを、中國仕丹花育柏の有に歸し、後、北政所(きたまんどころ)の所藏となれりといふ。 ▣しぐれかん(時雨藥)の略。

**時雨の秋**【句】しぐれの降る秋季。落葉雲間なきしぐれの秋は人愁ふる心のうちもかきくらしけり」

**時雨の雨**【句】しぐれ(時雨) ▣に同じ。〔古語〕 萬葉「しぐれのあめもまなくしふれば櫻の葉もあらそひかねて色づきにけり」

**時雨の色**【句】時雨のために色づきたる木の葉の色。 謠曲「定家」「時しも、頃は長月や、まだき時雨の色うすき、紅葉の行幸の道のほとりに」

**秋の時雨**【句】秋の末に降る雨。時雨は冬のものなるにより特にいふ。 古今

「をしむちん人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふりにける」

**しぐれかん** 時雨羹【名】赤小豆の餡を、そぼろにして、蒸して製したる菓子。しぐれ。

**しぐれき** 時雨忌【名】はせを芭蕉忌に同じ。

**しぐれ-じこち** 時雨心地【名】Ⅰ時雨の降りげなる空模樣。〔古語〕Ⅱ涙を催す心地。〔古語〕「貫之集」大空はくもらざりけり神無月しぐれどこちはわれのみぞする」

**しぐれ-づき** 時雨月【名】陰暦十月の異稱。〔古語〕「慶玉集」十二月異名：十、時雨月。散りはてし木の葉の後のしぐれづき冬のはじめに何を染めまし」

**しぐれに** 時雨煮【名】蛤・牡蠣(カキ)の剝身(ムキミ)などを、生姜・山椒などの香味を添へて佃煮(ツクダニ)にせる食品。

**しぐれの-ちん** 時雨亭【名】豐臣秀吉が伏見城中に築造せし茶亭。今は、傘亭(カサテイ)と共に移されて、京都の高臺寺内に存す。

**しぐれ-はまぐり** 時雨蛤【名】Ⅰ時雨煮にしたる蛤。伊勢國桑名の名產。Ⅱやきはまぐり(燒蛤)に同じ。改元紀立「辰の半ばに桑名に著く。：城門を出でて、：町屋川の橋を渡りて、おぶけといふ所を見れば、家家の女、松の毬(マツカサ)を燒きて蛤を蒸して勤む。：富田(ヒタ)の立場に到れば、ここにも燒蛤を鬻く。：初冬の頃の味のことに佳(ヨ)しければ、時雨蛤といふ」

**しぐれまんぢゅう** 時雨饅頭【名】時雨羹(シグレ)にて包みたる饅頭。

**しぐれ-みそ** 時雨味噌【名】蛤の時雨煮に味噌を加へて煮詰め、これに細山椒を撒布したるもの。

**しぐろく** 雙六【名】すごろく(雙六)の轉訛。

**しくわ** 紙花【名】紙の造花。

**しくわ** 史科【名】歷史の科目。歷史科。

**しくわ** 史禍【名】歷史を書きたるために受くる筆禍。

**しくわ** 四科【名】『論語の先進篇に、德行、言語、政事、文學、子游・子夏とあり、朱註に「程子曰、四科乃從ニ夫子ノ於陳蔡者ノ而見ヲ之、又、後漢書の鄭玄傳に「康成曰、仲尼之門、考ニ以ニ四科ノ」とあり』孔子の四種の學科目、即ち德行・言語・政事・文學。

**しくわ** 詞華【名】華やかなる言葉。詞藻。

詞華・言葉(ハヲ)【名】前條に同じ。

**しくわ** 止戈【名】戰をやむること。

**しくわ** 齒科【名】醫術の一科。專ら齒の衛生療治をなす。

**しくわ** 死火【名】Ⅰ消え果てたる火。(活火に對して)Ⅱ〔佛〕死を劫末の大火災に譬へていふ語。さんさい(三災)參照。

**しくわ** 資貨・貨貨【名】用をなさぬ財貨。「じ」。

**しくわ** 雌花【名】〔植〕『英 Pistillate又 Female flower』雌蕊のみを有する花、即ち單性花の一。柳・楽・柳(ヤナギ)・松・公孫樹(イチヤウ)などに見るものの類。雄花に對して)

**しくわ** 紫花【名】紫色の花。

**しくわ** 翅果【名】〔植〕『英 Key』果皮の延長して、翅狀をなし、風に乘るに便なる形をなせる乾果。楡(ニレ)・楓(カヘデ)などの果實はこれなり。

**しくわ** 四くわ【名】『花瓜・菜火の四字、いづれも「くわ」の音なるによりていふ』季節即ち春は花、夏は瓜、秋は菜、冬は火。

**しくわ** 指畫【名】〔美〕長く伸ばしたる小指の爪に墨を含ませて描く繪。支那より傳はりて、池大雅・黑川龜玉等これを善くせりといふ。指頭畫。手畫。指畫。

**じくわ** 自科【名】自分の犯したること。公平對主從向背の自科依ト雖レ遁。その身已に逐電仕りぬる上は、御勢を被レ向までも候まじ」

**じくわ** 自火【名】Ⅰ己れの家より發したる火事。類燒に對して)Ⅱ己れの神經より起りたる苦惱。盛衰記「腦病の自火に攻められて絕入りたりけるにや」

**じくわ** 耳科【名】醫術の一科。專ら耳を療治するもの。

**じくわ** 自畫【名】己が描きたる畫。

**しくわい** 市會【名】市會議員が、市の意思機關、即ちその自治權内に屬する一切の事を議決し、兼ねてその執行を監督するもの。市會議員を以て組織す。

**しくわい** 死灰【名】Ⅰ火氣の失せたる灰。寒灰。冷灰。Ⅱ生氣無き物の譬。

死灰再燃【句】次條に同じ。

死灰また燃ゆ【句】『史記の韓長孺傳に「安國坐レ法抵レ罪、蒙獄史田甲辱ニ安國一、安國曰、死灰不レ復、然乎。甲曰、然。御溺之」とあるに本づく。蒙は縣名。然は燃に通ず』勢を失ひし者、再び熾んになる。一たび落著せし事がまた起る。死灰再燃。

**しくわい** 詩會【名】詩人を會して、詩を作る會。

**しくわい** 私會【名】わたくしの集會。

**しくわ-い** 齒科醫【名】Ⅰ齒科の醫術。Ⅱ齒科の醫師。內務大臣の免許を受くるを要す。齒科醫師。

**しくわい** 市外【名】市街の外。(市內に對して)

**じくわい** 次回【名】次のたび。

**じくわい** 次會【名】次回の會合。

**じくわい** 時晦【名】時に應じて、その才能を隱すこと。

**じくわい** 自晦【名】自ら晦を裝ふこと。自ら韜晦すること。

**じくわい** 寺外【名】寺のそと。

**じくわい-かうくわんき** 市外交換機【名】『英 Toll board』市外通話を取扱ふ電話交換機。市外臺。

**しくわい-ぎゐん** 市會議員【名】市の公民中より、三級選擧法によりて、選擧せられて、市會を組織する名譽職。

**しくわい-さいねん** 死灰再燃【句】しくわい(死灰)の條下を見よ。

**しくわ-いし** 齒科醫師【名】しくわい(齒科醫)Ⅱに同じ。

**しくわい-しくわい** 齒科醫師會【名】公共組合の一。齒科醫師の設立して、齒科の醫事・衛生に關して、官廳の諮問に應じ、又は建議をなすを得るもの。

**しくわい-しめんきよしよう** 齒科醫師免許證【名】內務大臣が齒科醫師に授與する免許證。

**しくわ-いじゅつかいげふめんじゃう** 齒科醫術開業免狀【名】明治三十九年十月以前、內務大臣が齒科醫師に下附せし齒科醫業の免許狀。

**しくわい-せん** 紫外線【名】〔理〕きんぐわいせん(菫外線)に同じ。

**しくわい-だい** 市外臺【名】じくわいかうくわんき(市外交換機)に同じ。

**しくわい-だるき** 枝外桂【名】〔建〕おったてだるき(押立垂)に同じ。

**しくわい-ちゅうけいだい** 市外中繼臺【名】『英 Toll switching section』電話加入者間線を市外電話線に接續するあたり、その市外電話線を取附けある市外交換臺より來れる中繼線と該加入者間線とを直接に連結せしむる交換機。

**しくわい-つうわ** 市外通話【名】『英 Toll call』通話ごとに、料金を徵收する通話。數料金制に依る。(市內通話に對して)

**しくわい-でんわせん** 市外電話線【名】『英 Toll line』異なる電話加入區域に在る二箇の電話交換局又は一の電話交換局とその加入區域外の公衆電話所とを連絡する電話線。

**しくわう** 脂光【名】〔鑛〕脂ぎりたる光澤。

**しくわう** 四荒【名】『漢書の文帝紀に「四荒之外」とあり、顏註に「戎狄荒服、故曰二四荒一、言其荒忽、去來無レ常也」とあり、又、爾雅に「四方昏荒之國」、小學紺珠に「四荒、北・孤竹、南、北戾、西、王母、東、日下」とあり』四方のはてすみに。盛衰記「天馬に乘りて、四荒・八極に到り」

**しくわう** 四光【名】花ガルタの場役にて、松・櫻・桐月の四枚の併稱。さんくわう(三光)參照。

**しくわう** 師曠【名】〔人〕支那春秋時代の音樂者。字は子野。晉の平公に用ひらる。その技、神に入り、琴を鼓して、玄鶴を舞はしめ、また大風を起し、白雲を誘へりと傳へらる。





**じくわう** 慈光【名】Ⅰ太陽の光。Ⅱ〔佛〕諸佛の大慈の光明。

**じくわうじ** 慈光寺【名】姓氏の一。本姓は字多源氏。五辻(ゴツジ)氏の支族。五辻遠兼の次子、從四位上・加賀守仲清の後。明治維新後、子爵を授けらる。

**しくわう-しよくぶつ** 嗜光植物【名】〔植〕『英 Light plant』日光のよく照る地を好む植物。(陰蔭植物に對して)

**しくわうせき** 脂光石【名】〔鑛〕『英 Elæolite』霞石の一種。深造岩の合分となるもの。

**しくわうてい** 始皇帝【名】〔人〕支那秦の第一世皇帝。姓は嬴氏、名は政、莊襄王の子。十三歲にして、秦の主となり、即位後二十六年にして六國を亡して、天下を一統し、三十二年に何奴を伐ち、翌年に萬里の長城を築く。また書を焚き、儒生を坑にせり。三十七年歿す。

**しくわ-がく** 齒科學【名】〔醫〕『英 Dentistry又 Dental surgery』醫學の一分科。齒牙及び口腔の疾患を研究するもの。

**しくわく** 指畫【名】Ⅰ指にて畫がきすること。Ⅱ指示し畫策すること。さしづ。「口誇・指畫」

**じくわく** 字畫【名】漢字を構成する點畫。「なと。

**しくわげん** 四和絃【名】和絃の一。三和絃の第五度の上に、三度を隔てて、一音を添へたるもの。七度の和絃。

**しくわ-くわんもん** 四火關門【名】人體の腰部の上の稱。「灸點の語」女重寶記「盜汗出でぬまに、四花患門といふ穴に灸をしまふべし」「遊行氣の妹背山」千手の御手に、つくづくと、杖とたのみし七九のさと、四火關門をうち越えて」

**しくわざん** 死火山【名】〔地〕『英 Extinct volcano』噴出せし痕跡あれども、その事實の口碑又は史上に傳はらざる火山。赤城山・男體山の類。その噴火口は、湖水をなすもの多し。消火山。熄火山。やけやま。(活火山・休火山に對して)

**じくわ-さん** 自畫讚【名】じくわじさん(自畫自讚)Ⅱの略。

**しくわ-し** 私窩子【名】淫賣婦。ぢごく。

**じくわ-じさん** 自畫自讚【名】Ⅰ己が描きたる畫に、己が讚をすること。自畫讚。Ⅱじさん(自慢)に同じ。

**しくわ-しふ** 詞花集【名】〔書〕しくわかしふ(詞花和歌集)の略。

**じくわ-じゆせい** 自花受精【名】〔植〕『英 Autogamy又 Self-pollination』同一の花の雌蕊と雄蕊とにて生殖作用を營むこと。例へば櫻・桃(モモ)・亞麻(アマ)等の花に見る類。但し動物の近親結婚と同樣の佳質に屬するが故に、この作用を營む者は多からず。自花受粉。(他花受粉に對して)〈いくわ閉花參照。

**じくわ-じゆふん** 自花受粉【名】〔植〕前條に同じ。(他花受粉に對して)

**しくわつ** 死活【名】Ⅰ死ぬると生くること。Ⅱ亡ぶると興ること。

**じくわつ** 四月【名】〔句〕〔佛〕ぢっしがつにち(佛生日)を見よ。

**じくわつ** 自活【名】獨立して衣食すること。「と。

**しくわつおやう-まつり** 死活杖祭【名】古、京都三條、祇園の楊遠(ヤナギ)神社にて、毎年八月行ひし祭。もとこの地にて、處刑を行ひしが故に、その刑死者を祭るといふ。死杖祭。

**しくわつ-まめ** 四月豆【名】〔植〕そらまめ(蠶豆)に同じ。

**しくわつ-もんだい** 死活問題【名】亡ぶると興るとの分れなる、急要なる問題。

**しくわ-ふ** 紫花布【名】支那江南地方に產する棉花、即ち紫花にて織りたる綿布。その巾一尺前後にして、多くは、衣服に用ふ。江蘇・湖北・福建邊の產、名あり。

**しくわん** 史官【名】Ⅰ歷史を編修する官吏。記錄を掌る官。Ⅱ明治元年に置かれたる總裁局・議定官・行政官及び明治二年に置かれし公議所の職員。議定官には、文案の勘署、太政官日誌を造ることなどを掌り、行政官には、詔奏の交勘・稽失を檢治元年に置かれし鎭將府の職員。詔奏を勘へ、文案を勘署するなどの事を掌り奏任官。Ⅲ明治八年に太政官の正院に置かれし大史・權大史・少史・權少史の職員。詔勅・官位勳記等を作り、公文案を草し、文書記錄などの事を掌りたり。大史は勅任、その他は奏任なりき。「修史局。

**しくわん** 史館【名】歷史を編修する役所。

**しくわん** 死關【名】〔佛〕しもん(死門)に同じ。「こと。

**しくわん** 弛緩【名】ゆるむこと。ゆるぶ。

**しくわん** 指環【名】ゆびわ。

**しくわん** 詩卷【名】詩を記したる書卷。

**しくわん** 絲管【名】くわんげん(管絃)に同じ。

**しくわん** 始冠【名】男兒の成人して、始めて冠を著くること。加冠。元服。

**しくわん** 視官【名】〔醫〕しかく(視覺器)に同じ。

**しくわん** 祠官【名】Ⅰ神社に仕ふる神人。かんぬし。Ⅱしゃかん(社司)の舊稱。

**しくわん** 試官【名】しけんくわん(試驗官)に同じ。

**しくわん** 仕官・仕宦【名】官途に就くこと。「と。

**しくわん** 士官【名】Ⅰ兵士を指稱する武官。Ⅱ陸・海軍の尉官と尉官相當官との稱。

**しくわん** 齒冠【名】〔醫〕『英 Zahnkrone』齒の口腔に露出せる部分。琺瑯質に被はる。(齒頸・齒根に對して)

**しくわん** 尸官【名】しかん(尸位)に同じ。

**しくわん** 四患【名】Ⅰ四つの患ふべき事。Ⅱ『後漢書の荀悅傳に出づ』政を爲すに患ふべき事。四つの事、即ち偽・私・放・奢の併稱。

**しくわん** 師管【名】〔佛〕しく(四苦)に同じ。

**しくわん** 師管【名】陸軍管區の最高なるもの、即ち各師團長の管轄區域。

**しくわん** 篩管【名】〔植〕『英 Sieve-vessel又 Sieve-tube』導管の一種。細長き細胞壁に連なりて、その中間の細胞膜の處に孔ありて、篩狀に相通ずるもの。

**しくわん** 止觀【名】〔佛〕Ⅰ『梵 Śamatha (奢摩他) Vipaśyanā(毘鉢舍那)の譯語』散亂を止め心を止め、靜・寂なる明智を以て、萬法を觀照すること。「天台宗の語」「今觀「止觀の明靜なること、前代にいまだ聞かず」」Ⅱ〔書〕まかしかん(摩訶止觀)の略。平治物語の「神鞭と申し候ふ、止觀の第四卷に見えたり」」Ⅲこんだいしゅう(天台宗)の異稱。今鏡「長晉・止觀・金剛・般若ね學びたちん僧」

**しくわん** 止觀・不二(ニ)【句】〔佛〕止は明鏡・止水のごとく、觀は明鏡・止水に影像の映るがごとくものにて、畢竟不二一體なり。

**しくわん** 芝眞【名】〔人〕なかむらしくわん(中村芝版)を見よ。

**しくわん** 志願【名】のぞみ。ねがひ。

**しくわん** 私願【名】ひそかに願ふこと、又その願。「又その願。

**しくわん** 至願【名】しきりに願ふこと、

**しくわん** 始願【名】始よりの願。

**しくわん** 四願【名】〔佛〕しぐぜいぐわん(四弘誓願)の略。

**しくわん** 只丸【名】〔人〕俳人。靈松關また鴨水子と號す。京都の人。椎本(シヒモト)才麿に學ぶ。正德六年歿す。年七十。

**じくわん** 耳環【名】みみわ。

**じくわん** 寺官【名】寺院の役員。寺院の事務を掌るもの。盛衰記「十月二十四日山門衆從・社司・寺官等を以て、解狀を捧げ」

**じくわん** 寺觀【名】Ⅰ寺即ち佛の居る處と、觀即ち道士の居る處と。Ⅱ寺院の堂舍。

**じくわん** 字貫【名】〔書〕四類四十部に分ちて、音義・假同じきものを一所に集め、その音と義とを下に註せるもの。所部を千字文に配して天より霜に至る。その意、康熙字典の誤を覈正するにありたりといひ、幾棗せられて、田版發賣を禁ぜられたり。四十卷。清の平錫侯の撰。

**じくわん** 次官【名】Ⅰ長官の次位にありて、太臣を輔佐する高級輔佐官。

**しくわん-がくかう** 士官學校【名】りくぐんしくわんがくかう(陸軍士官學校)の略。

**しくわん-きやう** 四卷經【名】〔書〕『四卷

に分れたるよりにふ」こんくわうやうやう（金光明經）の異稱。

**しくわん-ぎやうじや** 止觀行者【名】〔佛〕『しくわん（止觀）を見よ』天台宗の修行者。

**しくわん-くわがふつ** 脂環化合物【名】〔化〕『英 Alicyclic compound』有機化合物の二大部類たる脂肪鎖と芳香族との中間の性質なる物質。

**しくわん-げんもん** 止觀玄文【名】〔書〕まかしくわん（摩訶止觀）に同じ。 玄文の窓の前には、一乘圓融の玉を磨き」

**しくわん-こうほせい** 士官候補生【名】中央幼年學校本科及び中學校又はこれと同等以上の學校の卒業者と一年志願兵にして、隊長の保證を得たる者と、陸軍現役各科の下士中、隊長又は所屬長官の保證を得たる者との更に召募試驗に合格して、陸軍士官の補充に任ぜらるべき者。任命後、軍隊に入りて、兵卒下士の實地勤務と軍事とを學び、更に陸軍士官學校に入り、卒業後隊附隊して、見習士官を命ぜられ、更に詮衡の上、少尉に任ぜらる。

**しくわん-じふじよう** 止觀十乘【名】〔佛〕じじようじよう（十乘）に同じ。 平家「止觀十乘の楚風は、かんりよを和朝の外にはらひ、瑜珈三密の法雨は、時俗を堯年の昔に還さん」

**しくわん-しや** 志願者【名】志願する人。 のぞみて。ねがひて。

**しくわん-じやうじよう** 止觀上乘【名】〔佛〕止觀□を最上無上の法として讃へたる稱。 盛衰記「止觀上乘の窓の前に螢雪の勤めを」

**しくわん-しゆう** 止觀宗【名】〔佛〕てんだいしゆう（天台宗）に同じ。 文德實錄「觀山最浸大法師、心持二慈悲一、傳二止觀宗一」

**しくわんすお** 芝麻筋【名】にほんくま（二本隈）に同じ。

**しくわん-そうぜん** 止觀寮前【名】〔佛〕止觀□を圓滿眞實の學窓あり」

**しくわん-わかしふ** 詞花和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。天養元年、左京大夫藤原顯輔の崇德上皇の院宣を承りて撰進せるもの。十卷。所收の歌、僅に四百餘首。

**しけ** 絓【名】□しけいと（絓絲）の略。 □しけいと（絓絲）に同じ。

**しけ** 温氣【名】□しめりけ。水氣。濕氣（シツキ）。 □暴風雨の壞き、海上の穩かならぬこと。「時化」 □漁獲物なきこと。不漁。

**しけ** 四華【名】〔佛〕『法華經の序品に出づ』法華六瑞の一として空より降るといふ四種の花、即ち曼陀羅華即ち白色の蓮華と摩訶曼陀羅華即ち大なる白色の蓮華と曼殊沙華即ち赤色の蓮華と摩訶曼殊沙華即ち大なる赤色の蓮華と、一說に、分陀利（ブンダリ）即ち白蓮華と優鉢羅（ウバラ）即ち青（シヤウ）蓮華と鉢特摩（パドマ）即ち赤蓮華と拘物投（クモツ）即ち黃蓮華といふ。 盛衰記「天より四華降り、大地六種も震動し」

**しけ** 四家【名】□藤原氏の分れて、四氏となりたるもの、即ち南家・北家・式家・京家の併稱。 □（佛）般若家・諸家・捨煩惱家・苦情家の總稱。

**しけ** 四家の大乘【句】だいじよう（大乘）の條下を見よ。

**じけ** 寺家【名】□寺院の家人（ケニン）。寺院に使役する奴婢（ヌヒ）。 貴船今圓、諸國寺家多不知二法一」 □寺中に在る弟子、僧の住する家。 □じたう（執當）に同じ。

**じけ** 寺解【名】寺より役所に奉る公文。

**じけ** 自解【名】〔佛〕御の歌を待たず、みづから悟ること。

**しけい** 死刑【名】□しさい（死罪）に同じ。 太平記「死刑の罪を免して、遠て本國へぞ下だりける」 □（法）犯人の生命を斷つ刑罰。その生命を斷つ方法により、斬罪・絞罪・火刑などの別あり。生命刑。

**しけい** 私刑【名】私人が恣に犯罪者に加ふる制裁。（公刑に對して）

**しけい** 私計【名】自己の考の謙稱。「じ。

**しけい** 紙型【名】〔美〕あふけい（四型）に同

**しけい** 紙型【名】組版を鐵枠の內に締め、厚皮紙一枚を充て、その上に糊と膠との調合物を附けたる紙を、二三枚別に載ひ、一枚ごとに毛刷毛にて、丁寧に敲き、十分に敲き上りたる時、普通の紙一枚を裏打のごとく貼附け、機械にて、壓搾・乾燥せしめたるもの。組みたる活字を取崩したる後も、これによりて、鉛版を作れば、原版と同一の印刷を繰し得。紙型版。

**しけい** 嗣繼【名】けいし（繼嗣）に同じ。

**しけい** 支系【名】□わかれ。えだ。 □ばうけいし（旁系）に同じ。

**しけい** 枝莖【名】枝と莖と。

**しけい** 詩形【名】詩の形式。詩格。律格。

**しけい** 四計【名】〔月令廣義に「一日之計在レ晨、一生之計在レ勤、一家之計在レ身、一年之計在レ春、一生之計在レ勤、一家之計在レ身」、又、「一年之計在レ春、一月之計在レ寅、一家之計在レ和、一身之計在レ勉」とあるに本づく」人の一生における四つの計畫。 さんけい（三計）〔書〕參照。 易經・書經・詩經・春秋の併稱。一說に、左氏傳・穀梁傳・書經・詩經なりと。

**しけい** 師兄【名】〔佛〕師匠と兄と。

**しけい** 司契【名】司契課の職員。一等・二等に分れ、前者は中佐相等、後者は少佐相當なりしが、明治十六年廢せられたり。

**しけい** 司計【名】地方官會議院の職員。司計長に屬し、用度を掌りしもの。明治十一年廢せらる。

**しけい** 齒類【名】〔醫〕『獨 Zahnfleisch』齒の一部やや狹窄して、齒龈の緣に觸るる部分。（齒冠・齒根に對して）

**しけい** 詞兄・詩契・詞契【代】同輩の文人・詩人などを指していふ敬稱。

**しけい** 四藝【名】四つの技、即ち琴・碁・書・畫の併稱。

**しけい** 詞藝【名】詩文の藝。

**じけい** 字形【名】文字のかたち。

**じけい** 時景【名】その時のありさま。

**じけい** 耳形【名】〔植〕『英 Auricles』葉鞘の形狀の一。兩側縁が殊に外方に突出して、耳狀の形をなすもの。

**じけい** 耳形【名】耳を切り去る刑辭。

**じけい** 慈惠【名】いつくしむこと。慈惠。

**じけい** 慈兄【名】慈愛深き兄。

**じけい** 次兄【名】つぎの兄。

**じけい** 自刎【名】我れと、わが首を切ること。自刎。

**じけいいんぐん** 慈惠醫院【名】□貧民施療のために設立したる醫院。慈惠納院。 □朝鮮の各地に置き、疾病の診療、兼ねて朝鮮總督の指定により、醫術の奬成に關する事を掌る所。

**しけいくわ** 司契課【名】明治六年陸軍に設けたる會計部の一課。一等司契・二等司契・副司契以下三等書記に至る職員を置きたり。同十六年に廢せられたり。

**しけいさ** 淑景舍【名】しげいしや（淑景舍）の略。





**しけいさい** 私經濟【名】〔經〕『英 Private economy』私人又法人の營む經濟行爲、即ち個人經濟・會社經濟・組合經濟の總。（公經濟に對して）

**しけいしや** 死刑者【名】□死刑の宣告を受けたる人。 □死刑に處せられたる人。

**しけいしや** 淑景舍【名】古の大內裡の五舍の一。紫宸殿の東北、昭陽舍の北に在りしもの。桐樹の前庭にあるを以て桐壺と稱す。南北に並び二宇ありて、南なるを單に淑景舍といひ、北なるを淑景北舍といひ、淺廊にて連絡を取りたり。

**しけいせん** 視形線【名】〔地〕さうかうせん（等高線）に同じ。

**しけいちやう** 司計長【名】地方官會議院の職員。用度のことを總管せしもの。

**しけいと** 絓絲【名】繭の外側より繰取りたる粗なる絹絲。しけ。くづいと。 和名抄「絓絲、之介以度、惡絲也」

**しけいとおり** 絓絲織【名】しけ絲にて織りたる織物。しけおり。しけぎぬ。しけ。

**しけいばん** 紙型版【名】しけいし（紙型）に同じ。

**じけいびやうゐん** 慈惠病院【名】じけいいゐん（慈惠醫院）に同じ。

**しけう** 四敎【名】〔佛〕□四箇條の敎。 □『論語の述而篇に「子以四敎、文・行・忠・信」とあるに本づく』孔子の四箇條の敎、即ち文（典籍・絲義）と、行（德行）と、忠（人のために謀りて、その心を盡すこと）と、信（僞を言はぬこと）と。 □とじゆつ（四術）に同じ。 圖『干寶晉紀の論に見ゆる四箇條の敎、即ち婦德（貞順）と婦言（辭令）と婦容（綺麗）と婦功（絲麻）と。 □（佛）天台宗に立つる四箇條の敎。化儀（ギ）の四敎と化法（ホフ）の四敎とあり。はけう（八敎）參照。 平家「四敎、五時の花もにほひず」秋の夜長物語內には、玉泉の流を汲んで、四敎・三觀の月をすまし」

**しけう** 四敎・三密【名】〔佛〕天台宗の四敎と、眞言宗の三密の理と、即ち天台眞言兩宗の敎。 盛衰記「四敎・三密の紹隆、其儀不レ恥」

**しけう** 始敎【名】〔佛〕『始は大乘の初步の意』五敎の一。大乘に屬すれども、未だ法理を盡さざる敎。

**しけう** 指敎【名】しだう（指導）に同じ。

**しけう** 師敎【名】師の敎。

**しけう** 示敎【名】□示し敎ふること。 □先輩より受くる說明。

**しけう** 至敎【名】この上なき敎。至極の敎。

**しけう** 司敎【名】〔基〕『佛 bishop』天主敎にて、大司敎の次、司祭の上にある僧。新敎の監督に相當するものにて、一敎區の支配權を有す。

**しけう** 鴟梟・鴟鴞【名】□ふくろふ（鳥）に同じ。 □鳥（ケウ）と梟（ケウ）と。 □奸惡雄傑

**じけう** 耳竅【名】耳の孔。

**じけうぎ** 四敎儀【名】〔書〕てんだいしげう（天台四敎儀）の略。

**しけうーだう** 四敎堂【名】豐後國南海郡佐伯城內に在りし舊佐伯（ヤ）藩の學校。もと學習所と稱し、寶永元年に開き、安永六年頃書の名に改めて、明治四年に廢す。

**しけうち** 繁打【名】打紐の打目の、繁く細きもの。一代女「名古屋の帶、しげうちの下緒」

**しけ-おり** 絓織【名】しけいとおり（絓糸織）の略。

**しけかく** 繁【名】しげきところ。（古語）

**じけ-かなもの** 繁金物【名】しげく打附けたる金物。 本朝三國志「菊に紅葉のしげ金物打ったる鎧」

**しけき** 繁木・茂木・茂樹【名】繁りたる木。（古語）

**しけき** 刺戟・刺激【名】□はげますこと。精神を興奮せしむること。 □（哲）意識を起し、又その變化を誘起する神經激動の原因。

**しけき** 刺戟の界限【句】（哲）しげきの界

**しけき** 史劇【名】〔文〕『英 Historical play』歷史上の事實を材料としたる劇。

**しげき** 刺擊【名】刺し擊つこと。

**しけきうんどう** 刺戟運動・刺激運動【名】〔植〕『英 Paratonic（又は Irritable）movement』植物の或機官が、外界の狀態即ち光線・溫度・重力・電氣・接觸・衝突・摩擦等の刺戟により誘起せらるる運動。例へば向日性・向地性等、又は卷鬚の他物に纏ひ附く類の作用。誘起運動。

**しけきーきよく** 刺戟極・刺激極【名】〔哲〕これ以上に上れば、意識を起さずといふ强度の限界。

**しけきーさよう** 刺戟作用・刺激作用【名】刺戟の影響によりて、末端機官に起れる作用。

**しけきーせい** 刺戟性・刺激性【名】〔「に同じ。〕刺戟する性質。

**しけきぬ** 絓絹【名】しけいとおり（絓絲織）に同じ。

**しけきひれう** 刺戟肥料・刺激肥料【名】肥料の一種。直接肥料としては効なけれども、作物の生理的機能を刺戟して、生育をよくし收穫を增加せしむるもの。滿俺（ハン）・銅・鐵・硼素・臭素・沃素等の化合物、これに屬す。

**しけきーぶつ** 刺戟物・刺激物【名】神經系統に甚大なる刺戟を誘起せしむるもの。飲食物に於ける酒類・茶・煙草など、これなり。

**しけきーゐき** 刺戟域・刺激域【名】〔哲〕『英 Limen（又は Threshold）of stimulation』以下にては意識を起すこと能はずといふ最小最低の限度。刺戟の界限。 しるゐき（識閾）參照。

**しけけし** 繁けし【形一】しげし（繁し）に同じ。（古語） 萬葉「人ごとのしげけき時にわぎも子が衣にありせばしたに著まましを」

**しけ-こ** 茂子【名】〔人〕江戸の歌人。土岐頼侯の室。賀茂翁三才女の一人。「筑波山はやましげやましげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」といへる歌によりて、一に、つゝば子と呼ぶ。

**しけこし** 醜し【形一】みにくし。きたなし。（古語） 駿河原のしけこさをやにすがだたみいやさや疊てわがふたりねし」

**しけ-こむ** しけ込む【動四自】入りこむ。（遊廓・酒樓、その他、遊場所に入込むにいふ）

**しけ-さま** 繁狹間【名】〔建〕組子（ヤ）の數を繁く立てたる狹間（ヤ）。

**しけし** 繁し【形一】□草木など繁りてあり。 萬葉「をつくばの繁き木の間よたつ鳥のめゆかなを見むさねざらなくに」 □數量多し。皮かさなりてあり。 萬葉「心には忘るる日なく思へども人のこととそしげきぎ君にあれ」 心中宵戀「軒の玉水とくとくござれ、しげくござれば名の立つに」

**じけし** 宇治【名】文字を消すために用ゐるゴム又は白墨の類。

**じけ-しき** 時下食【名】九星にて、食初（クハシ）の日の、十二月は寅の日の寅の時、十一月は卯の日の卯の時、十月は辰の日の辰の時、九月は巳の日の巳の時、八月は午の日の午の時、七月は未の日の未の時、六月は申の日の申の時、五月は酉の日の酉の時、四月は戌の日の戌の時、三月は亥の日の亥の時、二月は子の日の子の時、正月は丑の日の丑の時。沐浴・劍梁・伐木・截植等に因なりといふ時刻。

**しけ-しだ** しけ羊齒【名】〔植〕水龍骨（ブツ）科に屬する多年生の草。濕地に自生し、根茎は細長くして匍匐し、葉の長さ七八寸、羽狀複葉をなす。

**しけ-ぞら** 濕氣空・時化空・時氣空【名】濕氣（シツキ）を催す空模樣。 平家「吹晴れて、下り日和に直った」

**しけたーいつく** 重田一九【名】〔人〕じつぺんしやいっく（十返舍一九）に同じ。

**しけだいふ-ぶし** 繁太夫節【名】淨瑠璃節の一派。宮古路（ジユウ）豐後掾の門人繁太夫の創めたるもの。大阪島內（ジマウ）に行はれしが、その曲風は、今、京唄の內に、繁太夫物と呼ばれて、撥かに存するのみ。「よ。

**しけたーていいちもの** 繁太夫物【名】前條を見

**しけたーていいち** 重田貞一【名】〔人〕じつぺんしやいっく（十返舍一九）に同じ。

**しけ-だるき** 繁樺【名】〔建〕しげもの（繁物）に同じ。

**しげ-ぢ** 繁道【名】草などの繁く生ひてある道。『古語』 萬葉『大野路(おほのぢ)はしげぢはしげぢしげくとも君しかよはば道はひろけむ』

**し-けつ** 四傑【名】Ⅰ四人のすぐれたる人。徐敬業・駱賓王の四人の併稱。しちさいし(七才子)の項参照。

Ⅱ支那明代の詩人の李夢陽(りぼうよう)・何景明・唐の四傑【句】支那唐の世の王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王の四人のすぐれたる文人。

**しけつ** 四穴【名】笛の一種。孔は四箇あり。その内の一箇は、三箇と反対の側にあり。また笛の一端は閉ぢて、一端は開放す。三橫撥拗の發明といふ。

**しけつ** 死結【名】Ⅰこまむすび(小問結)に同じ。Ⅱ香道にて、薫りたる木の數十年を經て香氣を發するもの。生結に對して)

**しけつ** 詩訣【名】詩を作る秘訣。

**しけつ** 止血【名】出血・下血・喀血等、すべて血をおさへ止むること。ちとめ。

**し-げつ** 巳月【名】陰曆四月の異稱。

**じ-げつ** 辭訣【名】『辭にて訣(わか)るる義』別れのことばをのぶること。いとまごひ。

**じ-げつ** 時月【名】『時は三箇月、月は一箇月の義』Ⅰ三箇月と一箇月と。Ⅱ僅かの月日。

**しけつ-さい** 止血劑【名】止血の目的にて用ふる藥劑。ちとめぐすり。ちとめ。止血藥。

**しけつ-めん** 止血綿【名】『羅 Coagulum stypticum』僅少の出血を止むるに用ふる綿劑。過酸化鐵液と酒精との混合液を綿に浸して、陰乾にして作る。

**しけつ-やく** 止血藥【名】しけつさい(止血劑)に同じ。

**しけ-とう** 重籐・滋籐・繁籐【名】問を少しづつおきて、細き籐にて幾筒所も卷きたる弓・大斧などの持つもの。村(むら)重籐・本(もと)重籐・中(なか)重籐・末(すゑ)重籐・白(しら)重籐・鏑(かぶら)重籐・追(おい)重籐・篠(しの)重籐・千段重籐・句(まき)重籐・段(だん)重籐・吹寄(ふきよせ)重籐・矢摺(やず)重籐・節巻(ふしまき)重籐・引兩(ひきりやう)重籐などの種類あり。四足弓。平治左衛門佐重盛は、生年二十三、今日の軍の大將なれば、…切文(やぶみ)の矢負ひ、重籐の弓持ちて」

**しげぬ** 繁野【名】草木のしげりたる野。『古語』 萬葉『馬なめてみ狩にたたたす春の茂野に』

**しげぬひ** 繁縫【名】細かに縫とりたること。又そのもの。 萬葉『五色の糸の繁縫の直垂』 曾我『五人兄弟』『唐絲ぐくみの八重絨に繁縫縫うたる打帶の』

**しげの** 滋野【名】姓氏の一。神別にして、神皇産靈(かみむすび)神五世の孫天道根命より出でしもの。姓(かばね)は朝臣(あそん)と宿禰(すくね)との二種あり。その族に海野・支流に貫田・望月・根井等の諸氏あり。

**しげ-の-いと** 絃の絲【句】しげ(絃)の條下を見よ。

**しげの-さだぬし** 滋野貞主【名】(人)学者。文章生より起り、東宮學士となり、諸儒と紀府略一千卷を撰し、淳仁天皇の勅を受けて、經國集二十卷を撰す。官、宮内卿に陞る。仁壽二年卒す。年六十八。

**しげの-せいさい** 重野成齋【名】(人)しげのやすつぐ(重野安繹)に同じ。

**しげの-だいじょう** 四家の大乘【句】(佛)だいじょう(大乘)の條下を見よ。

**しげの-ぶがは** 重信川【名】(地)『慶長四年加藤嘉明の臣足立重信の、堤を築きて、水害を防ぎしより云ふ』伊豫國の中部を源し、諸流を合はせ、松山市の西南約一里半の所にて伊豫灘に注ぐ。上流は久米川といふ。舊稱、森松川。

**しげの-やすつぐ** 重野安繹【名】(人)學者。舊鹿兒島藩士。昌平黌に學び、國史及び漢文に通じ、成齋と號す。東京文科大學教授となり、文學博士を授けられ、帝國學士院會員・史學會長たり。その史論前哲を抉殺り。明治四十三年薨す。年八十四。

**しげのね** 滋野井【名】姓氏の一。姓は藤原、世業とし、羽林家にて、大納言を極官とす。明治維新後、伯爵を授けらる。

**しげはら** 重原【名】(地)三河國碧海(あを)郡にあり。板倉氏の舊藩地。明治三十九年刈谷(かりや)町に合併せらる。

**しげひと-しんわう** 重仁親王【名】(人)崇德天皇の皇子。近衛天皇崩ずるに及び、親王統を承くべきに、後白河天皇立ちて、中外望を失ふ。保元の亂賈にこれに崩せり。軍敗れて仁和寺に入り、薙髪して空性といふ。應保二年薨ず。年二十三。

**しげびやくじやう-さう** 四牙白淨相【名】(佛)さんじゃにさう(三十二相)を見よ。

**しげ-ひら** 重衡【名】『平重衡が奈良の大佛殿を燒きしことあるにより、奈良茶飯に勝るといふ酒落(しゃれ)』握飯(にぎめし)に茶をかけて食ふこと。

**しげふ** 施業【名】業務を施行すること。

**しげふ** 志業【名】學業に志すこと。

**しげふ** 司業【名】Ⅰこくしじげふ(國子司業)Ⅱの略。Ⅲかくい(學階)を見よ。

**しげふ** 試業【名】學業又は業務に對して行ふ試驗。

**しげふ** 始業【名】業を始むること。

**しげふ** 四業【名】Ⅰ四種類の家業。談の四種、即ち神道講釋・心學・軍書講談・音曲の併稱。

**じ-げふ** 事業【名】しごと。しわざ。わざ。新可笑記『過ぎにし世の歌人の魂入れかはり。世上の事業は嘗て知らざりき』

**じげふ-あん** 施業案【名】施業の考案。

**じげふ-か** 事業家【名】事業を起し、又これを經營する技能ある人。

**じげふ-こうさい** 事業公債【名】Ⅰ『獨 Unternehmungsanleihe』或事業を起して、收入又は收益を得んがために募集する公債。Ⅱ我が國債の一。明治二十九年より額面二億三百五十萬圓を限度として、漸次に募集したるもの。官線鐵道の改良・建設、製鋼事業電話擴張及び國防事業の費用などに充てんがためなりき。

**じげふ-しき** 始業式【名】始業の儀式。學校にては、毎學期の始に、全生徒を一堂に集めて、校長の訓話などを爲すを常とす。

**じげふ-しほん** 事業資本【名】『英 Business capital』事業に投じ了り、もはや金融市場において、需要・供給の因となることなき資本。

**じげふ-しや** 事業者【名】事業を起す人。

**じげふ-しゆ** 事業手【名】北海道廳における判任官待遇の屬員の一。土地の處分に關する事業及び土木・水産・農業の事業に從事せしむるもの。

**じげふ-ねんど** 事業年度【名】しど(四五)に同じ。

**じげふ-ぢ** 重綠【名】しど(四五)に同じ。

**じげふ-はうこく** 事業報告【名】産業組合・相互保險會社等、營利を目的とせざる組合會社にて、決算季ごとに、その期間に於ける事業の成績、財産の狀況等を記述して、その團員又は主務官廳に報告すること。即ち營利會社の營業報告に相當するもの。「業報告の書面。

**じげふはうこく-しよ** 事業報告書【名】事業の經營方法を記載せる書面。

**じげふはうはふしよ** 事業方法書【名】事業の經營方法を記載せる書面。

**じげふりん** 施業林【名】撫種・植樹・伐採・また天然生稚樹の保護のごとき人工を加へたる森林。原生林に對して)

**しげ-ぼね** 繁骨【名】陪子の襞の間こまかきもの。

**しげ-み** 繁【名】しげりたるところ。しげり。 萬葉『夏の野のしげみに咲ける姫百合のしらたへ戀はくるしきものを』

**しけ-みづごろも** 絓水衣【名】(襟)の掛ちゐ普通の絲にて織りたる水衣。(寄水衣に對して)「同じ。

**しけ-むし** 湿氣蟲【名】(動)しみ・蠹魚に同じ。

**しけん** 試驗【名】Ⅰこころみ。ためし。Ⅱ學生の學業・才能の優劣を試み判ずること。考試。試業。

**しけん** 至險【名】至って險阻なること。「その所。

**しけん** 至健【名】至って健剛なること。又

**しけん** 思軒【名】(人)もりたしけん(森田思軒)を見よ。

**しけん** 私見【名】Ⅰおのれ一己の意見。





私考。私案。Ⅱ自己の意見の謙稱。

**しけん** 私權【名】(法)『英 Private right』私法上の權利。即ち非統治關係における權利。人格權・親族權(身分權)・財産權の三者に分つ。また人格權と親族權とを合はせて、人身權と呼ぶことあり。(公法に對して)

**しけん** 旨言【名】旨を得たる言。最もなことば。

**しけん** 至言【名】道に協ひたる至極のこと。格言。金言。

**しけん** 屁言【名】『莊子の寓言篇に「屁言日出、和以天倪」とあるに本づく。屁は四升を容るる酒器にて、言の善なるを酒味に譬へていへるもの。一說に、酒器は滿つれば傾き、空しければ仰ぐにより、言の物に因り、變に從ひ從に譬へしなりと』すぐれたることば。

**しけん** 始元【名】げんし(元始)に同じ。

**しけん** 始原【名】げんし(原始)に同じ。

**じけん** 事件【名】Ⅰことがら。Ⅱ(法)そしようじけん(訴訟事件)の略。

**じけん** 時圏【名】(天)天『英 Horizon circle』天球の兩極を通過する無數の大圓。天球その或一點を通過する時は、これをその點の時圏といふ。天球の子午線と呼ぶものも、このものの一なり。

**じけん** 耳言【名】じし(耳語)に同じ。

**じけん** 字源【名】或文字の構成せられたるもと。例へば漢字の中は「日」と「月」との會意によりて構成せられ、月假名時圏といふ。天球の子午線と呼ぶものも、このものの一なり。赤緯圏・赤緯度。

**じ-げん** 邇言【名】『詩經小雅の小旻篇に「維邇言是聽、維邇言是爭」、中庸の第六章に「舜好問、而好察二邇言一」とあり』淺近なることば。野人また俗人の言。

**じ-げん** 示現【名】Ⅰ(佛)佛・菩薩の、機緣に應じて、種種の身を現ずること。例へば觀音の三十三身の類。げんじ(現示)參照。Ⅱ神佛の靈驗を示すこと。盛衰記『方便示現の形、全く本地の眞身にあらじと』

**じ-げん** 時限【名】時間の限界。時のかぎり。劃限。

**じ-げん** 慈眼【名】(佛)佛・菩薩の、慈悲の心にて、衆生を視る眼。盛衰記『その時に、觀世音金冠を動し、慈眼をまじろがしたまひて』

慈眼を垂る【句】あはれみを掛く。慈悲心を以て見る。

慈眼視(シ)衆生(ショウジヤウ)【句】(佛)『法華經』の普門品(観音經)に出づ。觀音菩薩が、慈悲の眼を以て、一切衆生を平等に觀ること。 舊約『聖書』『慈眼視衆生あらはれて』

**じげん** 慈眼【名】(人)てんがい(天海)を見よ。

**じげん-かい** 始原界【名】(地)しげんそう(始原層)に同じ。

**しけん-かうね** 私權行爲【名】(法)私權の變更を目的とする法律行爲。

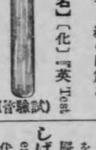
**しけん-がかり** 試驗掛【名】試驗の事を擔當する人。

**し-げん-かく** 視幻覺【名】(哲)『英 Optic hallucination』視覺器に發する幻覺・幻視。

**しけん-きじつ** 試驗期日【名】試驗を行ふべき期日。

**しげん-きん** 四絃琴【名】形、三味線の如く、棹は三尺二寸ほどにて、絃の四筋ある樂器。

**しけん-くわん** 試驗管【名】(化)『英 Test tube』或物質の少量を入れて、その性質を反應等を試驗するに用ふる、底ある硝子管。試管。


(試驗管)

**しけん-くわん** 試驗官【名】試驗を施行する官吏。

**しけん-くわん** 司檢官【名】船舶・司檢所の職員の一。所長の指揮を承けて、事務を分掌せし奏任官。

**しけん-くわんほ** 司檢官補【名】船舶・司檢所の職員の一。所の職員の一。司檢官を助け、邇信省管船局に兼勤し、臨時に事務を助けし奏任官。

**しけん-けう** 四言教【名】支那の王陽明が、その教學の主義を表明せる四箇條の言、即ち一に「無善無惡心之體」、二に「有善有惡意之動」、三に「知善知惡是良知」、四に「爲善去惡是格物」。

**しけん-けんてい** 試驗檢定【名】試驗により行ふ檢定。(無試驗檢定に對して)

**しけん-し** 試驗紙【名】(化)『英 Test-paper』濾紙のごとき紙に指示藥を塗り、溶液又は氣體の酸性なるか、アルカリ性なるか、又はいかなる物質を有するかを檢するに用ふるもの。最も普通なるは、リトマス紙・姜黃(きやうわう)紙・オゾン紙・硫化水素紙等。

**しけん-し** 試驗針【名】或金屬に、他の金屬の混合せる分量を量るに用ふる針。

**じけん-しんくわん** 時限信管【名】えいくわん(曳火信管)に同じ。

**しけん-じよ** 司檢所【名】檢閲の事務を取扱ふ所。

**しけん-せんしふ** 思軒全集【名】(書)森田思軒の著、探偵ユウベル・尊使者等を輯めたるもの。一卷。

**しげん-そう** 始原層【名】(地)『英 Archean group』始原代の地層。地盤の最下部を構成し、主として片麻岩・雲母片岩・絹泥片岩・角閃片岩・千枚岩等より成り、明かなる化石の產物なく、また時代最も古きため、變動を受くることまた最も甚しく、複褶及び斷層多し。始原界。太古界。

**しげん-だい** 始原代【名】(地)『英 Archean era』地質時代の四大別の一。始原層の時代。生物未だ地上に出現せざりきと見え、岩石中に確かなる化石を發見することなし。太古代。

**じげん-だいし** 慈眼大師【名】(人)てんかい(天海)を見よ。「所。

**しけん-おやう** 試驗場【名】試驗を行ふ場

**しけん-ばいばい** 試驗賣買【名】『英 Trial sales』Ⅰ(法)買主の意に適するや否やの試驗を經たる上にて、行ふ賣買。Ⅱ(商)これまで取引なかりし顧客に對し、又は從來取扱はざりし商品につき、賣買を試むること。觀察賣買。

**しけん-ばし** 試驗函【名】『英 Test box』電信回線の活用もしくは試驗に際し、手配上の便宜を計りて、設計せられたる裝置。構造は、木製の函に、數多の眞鍮製タアミナルを取附けたるに過ぎず。本線・地氣線・電池線等は、直ちに通信機に接續せしむることなく、途中必ずこの函に引込みおき、回線の切斷・接地・交叉・直通もしくは環線等の應急處置及び電池の取換・分減等に便ならしむ。

**しけん-はふ** 四元法【名】(數)『英 Quaternion』數學の一分科。大さのみならず、方向をも併せ有する量、即ち空間的幾何學的なる量の一種の算法。西曆一八四四年英人のハミルトン(W. R. Hamilton)の發明に係るもの。

**しけん-ばん** 試驗盤【名】『英 Test board』試驗函の改良せられたるもの。

**しけん-ばんせんばん** 試驗分線盤【名】『英 Test and cross board』單式交換器を使用する電話交換局にて、加入者の電話線を交換機に至る局内ケェブルに接續する接續盤。

**しけん-もんだい** 試驗問題【名】試驗に出す問題。試驗の課題。

**じげん-りう** 自源流【名】銅術の一說。鳥津氏の臣濱戸口伽耶守の創めたるもの。自源坊と稱する者に遇ひて、その術を得たりと稱せらる。

**しげん-りん** 始原林【名】げんせいりん(原生林)に同じ。

**しけん-れう** 試驗料【名】試驗を受くるにつきて納むる手數料。

**しげん-れんりつはうていしき** 四元聯立方程式【名】(數)聯立方程式の一。未知數四つを含むもの。

**しけん-ろんぶん** 試驗論文【名】試驗問題に應じて作る論文。

**しけん-ゐゐん** 試驗委員【名】試驗執行のために設けたる委員。

**しげめ-ゆひ** 繁目結・滋目結【名】目結の目の繁きもの。目の細かき絞子絞。ぬゆひ(目結)參照。 吉野忠臣『時に忠信しげめ結の直垂に』

**しけ-もの** 湿氣物【名】海藻のために損傷せる貨物。海損貨物。

**しげもの** 繁物【名】〔建〕垂剥の一。垂あきを、その幅に等しくなしたるもの。しげだる。

**しげ-やま** 繁山【名】Ⅰ草木の茂りたる山。古今「つくば山はやましげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」Ⅱ〔地〕陸中國にありといふ山。新古「しげやまのそがひの道の谷あひは夏とて風の吹かぬ日ぞなき」

**しげやま** 落山【名】〔地〕(一)(一)郡伊里村の大字。舊名寺口。寛文中巡稼す。熊澤了介の一時退隠せし處。了介依って、落山(ラクザン)息遊軒と號す。

**しげやま-れうかい** 蕃山了介【名】〔人〕くまさはばんざん(熊澤蕃山)に同じ。

**しげゆき-しふ** 重之集【名】〔書〕源重之の歌集。一卷。群書類從に收む。

**しげよし** 重義【名】〔人〕京都の新刀の鍛工。理忠(ヤスタダ)の子。のち明國といふ。寛永頃の人。

**しげり** 繁【名】しげみ。叢茂。萬葉「藤なみのしげりはすぎぬ足曳の山ほととぎすなどか來鳴かぬ」

**しげり** 【名】男女、閨中にて、しめやかに物語りなどして、樂しむこと。信長記「御目がさめぬか、ええ、じれったい」

**しげり-あふ** 繁合ふ【動四自】互にしげる。拾遺「おほあらき森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな」

**しげり-ば** 茂葉【名】茂りてある葉。住吉新巡礼記「しげり葉や青女房の加茂詣」

**しける** 湿氣る【動下自】Ⅰ湿氣を帶ぶし。しめる。しっける。Ⅱ海上荒れ、雨風つづく。一日王丝四日市。此所より桑名に乘行く船あり。しけたる日和に乘るまじき海なり」

**しげる** 繁る・茂る【動四自】しげくなる。さかんに生ひたつ。生ひさかえる。繁茂す。

**しげる** 【動四自】男女睦しく語り合ふ。今宮心中「盆には在所へいて、栗畑でしげろ」五十年忌歌念塔「お夏樣と聟樣と、この蚊帳で



しげらしやんしたらば」

**しげ-をか** 茂岡【名】〔地〕大和國にある岡。今、生駒(イコマ)郡富雄(トミオ)村より郡山城址に連なれる鳥見岡(トミヲカ)の古稱なるべしといふ。夫木「いにしへの子の日幾代になりぬらん神さび立てるしげをかの松」

**しげをか-かはひと** 滋岳川人【名】〔人〕陰陽家。本姓は刀岐(ハ)。宿曜・道甲術に精し。仁壽・天安頃の人。

**しこ** 醜【名】Ⅰ物事を憎みののしりていふ語。〔古語〕萬葉「ますらをや片思せむやとなげけども鬼(シコ)のますらをなほ思ひにけり」Ⅱ自身の上を卑下していふ語。〔古語〕萬葉「今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてと出でたつ我れは」

**しこ** 誤【名】〔動〕ひと(鯤)の略。

**しこ** 【名】しこのき(しこの木)を見よ。

**し-こ** 飼戸【名】大寶令の制規にて、左右馬寮の牧馬を飼ふために充てし戸。この戸より出だす役丁は、飼丁及び雑丁といひ、毎年一番組を分ち、左右馬寮に上直して、役に從はしめ、剏として、正丁には二百圍、次丁には一百圍、中男に五十圍の草を課し、また不輸租田を班給し、これを飼戸田と呼べり。馬戸。

**し-こ** 尻籠・矢籠【名】〔弓〕矢壺の字の音。Ⅱつぼやなぐひ(箙)の異稱。Ⅲ後世、壺胡籙(ツボヤナグヒ)に似て、粗略なる製のものをいへり。

**し-こ** 市賈【名】市場の商人。

**し-こ** 市虎【名】〔市中の虎の義。「三人虎を成す」を見よ。無實の風說。うはさ。

**し-こ** 指呼【名】Ⅰ指して呼ぶこと。Ⅱ呼べば答ふるほどの近距離。指呼の中(ウチ)【句】呼べば答へんとするほどなる近き距離にあること。指顧の中。

**し-こ** 指顧【名】指さしながら、ふりむく間。指顧の中(ウチ)【句】「指呼の中」に同じ。

**しこ** 四股【名】あし(足)を云ふ。〔相撲(スマヒ)の語〕しこを踏む【名】片足をかはるがはる高く揚げて、力を込めて地を踏占む。力足を踏む。相撲通百要子「尻引っからげ、しこを踏み」

**しこ** 四顧【名】Ⅰ四邊を顧みること。見まはすこと。Ⅱあたり。附近。四邊。

**し-こ** 四庫【名】Ⅰ天庫四星に象(カタ)りしものといふ。支那唐の玄宗の時、長安・洛陽の兩都に書を經(經書)・史(歴史)・子(諸子)・集(詩文集)の四部に大別し、庫を分ちて、保存せしめしその庫。四庫の書【句】あらゆる漢籍。

**し-こ** 四鼓【名】しかう(四更)に同じ。

**し-こ** 司鼓【名】鼓を打つことを司ること。司鼓の本位【句】「司鼓の本位」を見よ。

**し-こ** 醜【接頭】みにくく憎むべき意。しき。

**し-こ** 【接尾】しまの轉。〔關西の方言〕「あれしこの事」

**しこ** 仕事【名】掃除・洗濯などをすること。〔周防國・長門國の方言〕

**し-こ** 四五【名】船の荷繰(ニウ)の上に打押樣。大四五、小四五、登(ノボ)四五等あり。すぢ。しげぶち。たまぶち。

**し-こ** 枝梧・支吾【名】枝は小柱、梧は斜柱の義。『さいうご(左支右吾)』參照。

**し-こ** 市語【名】市中のうはさ。

**し-こ** 詩語【名】詩に用ふることば。

**し-こ** 私語【名】ひそひそばなし。ささめごと。耳語。耳言。

**し-こ** 私語千里(ヤウリ)【句】「私語(ヤウ)三里」に同じ。〔誌語〕

**し-こ** 死語【名】今日全く使用せられざる古語。廢語。〔活語に對して〕

**し-こ** 死期【名】しにぎは。死にどき。いまは。末期。「對して」

**し-こ** 死後【名】死にし後。歿後。〔生前に死後强直【句】動物の死後、或時間を經れば、身體硬直となること。この期を過ぐれば、再び柔軟となる。

**し-こ** 事故【名】Ⅰじけん(事件)に同じ。Ⅱ事のわけがら。しさい。

**し-こ** 似虎【名】〔動〕形貌、虎に似たるよりいふ。ねこ(猫)の異稱。

**し-こ** 自己【名】われ。おのれ。自身。自己の計算【句】みづから利益・損失の責任を負ふこと。

**し-こ** 自語【名】自己の發したる言語。

**し-こ** 耳語【名】ささ(私語)に同じ。

**し-こ** 事後【名】事の果てたる後。(事前に對して)

**し-こ** 爾後【名】この後。その後。以後。

**し-こ** あんじ 自己暗示【名】〔哲〕じあんじ(自暗示)に同じ。

**じこ-いうだう** 自己誘導【名】〔理〕じこかんかう(自己感應)に同じ。(相互誘導に對して)

**じこいうだう-さよう** 自己誘導作用【名】〔理〕前條に同じ。(相互誘導作用に對して)

**じこいしき** 自己意識【名】〔哲〕じこ意識に同じ。

**じこ-いん** 自己因【名】〔哲〕じこげいん(自己原因)に同じ。

**じこ-こう** 至厚【名】極めて厚きこと。至って厚きこと。薄からざること。

**じ-こう** 至公【名】極めて公平なること。

**じ-こう** 伺候【名】〔ひ(ヒ)ふ義〕Ⅰかたはらに侍り居ること。奉仕。Ⅱ養蚕をたづねること。御機嫌伺。

**じ-こう** 祇候【名】つつしみて左右に奉仕すること。つつしみて伺候すること。東鑑「祇三候關東之祗」

**じ-こう** 試工【名】土木寮の工員。上・中・下の三等に分れ、上試工と中試工とは判任、下試工は等外吏たり。明治七年廢せらる。

**じ-こう** 司寇【名】上古、支那にて、刑罰及び警察の事を掌りし官。

**じ-こう** 篩孔【名】〔植〕『英Sieve-pores』篩板の有する篩狀の孔。

**じ-こう** 子貢【名】〔人〕孔門十哲の一。衛の人。姓は端木、名は賜。子貢はその字。孔子より少きこと三十一歳。言說を以て著はれ、魯・衛に相となり、齊に歿す。







**じ-こう** 耳孔【名】耳のあな。耳門。耳穴。

**じ-こう** 時候【名】四時の氣節。氣候。季節。

**じ-こう** 事功【名】事の成功。

**じこう-がり** 自紅狩【名】自紅坊(毛蟲)を狩殺すこと。和泉國堺などにては、笠深く身を固め、鋏(ハサミ)にてさし取る。

**じこう-さくろせき** 紫紅柘榴石【名】〔鑛〕柘榴石の一種。これを砕き上ぐる時は、濃紅なる光を放ち、恰も紅玉(ルビ)の如く見ゆるもの。東洋柘榴石。

**じこう-しき** 伺候式【名】陸軍禮式の一。兩陛下又は高貴の人が、軍隊屯在の地に御著發のとき、行在所又は旅館に將校の參伺すること。

**じこう-にち** 四絢日【名】九星にて、その人により萬事に慣むべしといふ四日、即ち酉の年の人は子の日、戌の年の人は丑の日、亥の年の人は寅の日、子の年の人は卯の日、丑の年の人は辰の日、寅の年の人は巳の日、卯の年の人は午の日、辰の年の人は未の日、巳の年の人は申の日、午の年の人は酉の日、未の年の人は戌の日、申の年の人は亥の日。しくにち。

**じこう-ばう** 自紅坊【名】Ⅰ〔動〕けむし(毛蟲)を云ふ。〔和泉國堺の方言〕Ⅱ〔植〕べにたけ(紅菌)を云ふ。〔九州の方言〕

**じこう-はづれ** 時候外【名】普通の時候に先だち、又は後るること。しゆんはづれ。

**じ-こうみん** 市公民【名】市の公民。

**じ-こう-りう** 【名】じとりう(自己流)の訛。

**じ-こう-ろくみん** 四公六民【名】江戸時代の始、その年の牧穫の四割を官に納れ、六割を農民の所有とせし租法。じこうごみん(五公五民)參照。

**じ-かうね** 死後行爲【名】〔法〕法律行爲の一。當事者の死後に、その效力を生ぜしむべきもの。例へば、遺言などの類。(生前行爲に對して)

**じこ-かんかう** 自己感應【名】〔理〕『英Self-induction』輪道自身の電流の變化によりて、輪道に感應電流の起る現象。感應電流は輪道内の磁場の變化によりて起るものなるがためにして、その電流を絕ち、又は



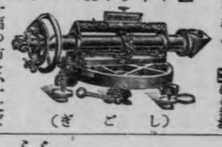
痛むる時は、元の電流と同一の方向なる感應電流起りて、その減少を妨げ、又、電流を急に通はしめ、又はこれを强むる時は、これを反對なる方向の感應電流起りて、その增加を妨ぐ。自己誘導。(相互感應に對して)

**じこ-かんじやう** 自己感情【名】〔哲〕『英Self-feeling』專ら自己を評價するによりて起る感情。その評價、正當なれば、勇氣となり、自信となり、高きに過ぐれば、倨傲となり、高慢となり、低きに過ぐれば、恐怖となり、怯懦となる。自己感動。

**じこ-かんどう** 自己感動【名】〔哲〕前條に同じ。

**しこき** 扱【名】Ⅰしごくこと。Ⅱしごきおび(扱帶)の略。

**しこ-ぎ** 子午儀【名】『英Meridian transit instrument』天體の子午線經過の時刻を測定するに用ふる機器。子午線面内に動く望遠鏡を、水平軸によりて、二箇の架臺に支持せしめたるもの。じごわ(子午環)參照。




**しこき-おび** 扱帶【名】一幅の布を、一丈ばかりの長さに切り、そのまま扱きて用ふる帶。かか、おび。しこおび。しごき。

**じこ-ぎせい** 自己犧牲【名】〔哲〕『英Self-sacrifice』けんしん(獻身)に同じ。

**じこき-ぞめ** 扱染【名】友禪染などの際、模樣の型糊(ノリ)を置きたる後、その地色(ヂイロ)を染出さんがために、適當の染料を混じたる糊を、筐にて、その布面一體に塗附くること。(引染・浚染に對して)

**じこ-きてい** 自己規定【名】〔哲〕じがきてい(自家規定)に同じ。

**じこき-ぶき** 扱拭【名】細長き物の一端を、片手に持ち、他方の手にて扱き拭ふこと。(投元結)に同じ。

**じこき-もとゆひ** 扱元結【名】ときもとゆひ(投元結)に同じ。

**じこ-きやうめい** 自語響鳴【名】〔醫〕『獨Autophonie』己れの發したる言語の、己れの耳に響鳴すること。

**じ-こく** 司刻【名】ろうそくはかせ(湯浅博士)の唐名。

**じ-こく** 紫黑【名】しこくしよく(紫黑色)に同じ。

**じ-こく** 詩國【名】Ⅰ自居易の、鼓・藤・祇・勝事・詩に、「蓮華・吟詠・眞詩國、興入・笙歌・好酔鄉」とあるに本づく。詩趣に富める國。

**じ-こく** 仕國【名】『孟子の滕文公下篇に出づ』仕進に適せる國。

**じ-こく** 四國【名】Ⅰ四つの國。Ⅱ〔地〕山陽道の南方の海中に位する大島、即ち讃岐・伊豫・土佐・阿波の四箇國より成り、南海道の一都たり。

四國を廻りて、猿となる【句】四國猿といふ語あるよりいでし語。『諺語』「猿馬風來二つ長屋の佐次兵衛殿、四國をめぐりて、猿となる人」

**じ-こく** お四國樣(ヤウ)の日和(ヒヨリ)【句】『四國の阿波(ハ)に「あわ」をかけ、日和を「照る」の意にとりなしていふ。「あわてる」は即ちあわつ(慌つ)の口語形』慌(ハ)つること。

**じ-こく** 司獄【名】刑獄を司ること、又、その人。

**じ-こく** 至極【名】Ⅰ極點に達すること。限を極めたること。盛衰記「道理尤も至極せり」「盛衰記」Ⅱ最もなる次第と感ずること。「元祿時代の語」「東井昌」お初・聞かれど、萬事至極した」「傳說」亡人のために、香花の志深く、浮世をふと思切りしを…親人不孝第一、是非と至極させて、無理やりに、又も入緣を取組み」

**じ-こく** 至極【副】もっとも。この上なく。きはめて。至って。

**じ-こく** 扱【動四他】締めて引くこと。抑へながら引きはる。「傳說新選」「風雅」「秋風のしどいて行きし柳かな」「一國」

**じ-こく** 自國【名】おのれの國。わが生れたる國。

**じ-こく** 時刻【名】ときころ。をり。時間。時刻を廻(メグ)らす【句】時を費す。平家「時刻をめぐらさず西光法師父子が命を召取りたまへや」

**じ-こく** 二黑【名】九星の一。土星にて、未申を本位とす。この星に當る者は、風流にて決斷に乏しく、また惰性なるものありといふ。にこく。

**じごく-いろ** 至極色【名】濃き紫の染色。

**じごく-くわん** 司獄官【名】臺灣總督府監獄職員の一。監獄の事務を掌る者、即ち監吏及び看守。

**じごく-くわんり** 司獄官吏【名】監獄の事務を取扱ふ官吏、即ち典獄・看守長の類。

**じこく-さ** 醜草【名】わるき草。みにくき草。『古語』萬葉「わすれぐさわが下紐につけたれどしこのしこくさなほ戀ひにけり」

**じこく-さぶらう** 四國三郎【名】〔地〕阿波國吉野川の異稱。(坂東太郎・筑紫二郎に對して)

**じこく-さんみやく** 四國山脈【名】〔地〕四國(Ⅱ)の脊梁をなす山脈。その主軸は石槌山脈と稱し、陷帶地帶なる豐後水道を隔てて、九洲南部の山脈を承け、佐田半島に起りて、南西西より北東東に向ひ、同じく陷落地帶なる紀伊水道を隔てて、紀伊山脈と相呼應す。なほ主軸の北側に讃岐山脈、南に劍山脈等並走す。

**じこく-さる** 四國猿【名】Ⅰ〔動〕さる(猿)(Ⅱ)を見よ。Ⅱ四國の人を卑しめて云ふ。〔俚語〕

**じこく-しよく** 紫黑色【名】黑みかがりたる紫色。

**じこく-すぢ** 四國筋【名】〔地〕四國の方面。四國の地方。「方言」

**じこく-だま** 【副】しとだまに同じ。(遠江國)

**じこく-はちじふはっかしよ** 四國八十八箇所【名】はちじふはっかしよ(八十八箇所)を見よ。

**じこく-びえ** 四國稗・龍爪稗・鴨脚稗・穆子・田桂【名】(植)禾本科に屬する一年生の草。原野に自生し、又は陸田に耕作せられて、家畜の飼料となる。高さ二三尺、葉は細長く、夏季小穂花を開く。のらひえ。からひえ。こうぼふひえ。かもまたきび。

**じこく-まねり** 四國參【名】四國八十八箇

所を巡拜すること、又その人。おしこく。しこくめぐり。

**しこく-むぎ** 四國麥【名】〔植〕はだかむぎ(鳩麥)に同じ。

**しこく-めぐり** 四國巡【名】しこくまわり(四國參)に同じ。

**じこく-わうどう** 自己活動【名】『英 self-activity』個人が外部の命令・規則等に從ふにあらずして、全く自己の意志に從ひて動作すること。

**じこ-くわん** 子午環【名】〔天〕『英 Meridian circle』子午線觀測、即ち天體の子午線を經過する時刻、及び高度の測定に用ふる器械。子午儀に、分度環と測微鏡とを附したるもの。

**じこ-くわんさつ** 自己觀察【名】〔哲〕『英 Main(又 self 又 Inner)observation』自己の心的現象を省察して、心理上の智識を得ること。自ら吟味・檢査せんとの目的よりする反省。

**じこ-けってい** 自己決定【名】〔哲〕じかきていに同じ。

**じこ-げんいん** 自己原因【名】〔哲〕『經 Causa sui』自己の存在が他の者に制約せられざること、即ち自ら自己の原因となれること。自己因。自因。

**しこ-ごと** 醜事【名】わろき事。みにくき事。〔古語〕

**じこ-じつげん** 自己實現【名】〔哲〕じかじつげん(自我實現)に同じ。

**じこ-しやうげふ** 自己商業【名】〔商〕自分の勘定にてする商賣、即ち損益を自己が負擔するもの。例へば賣買業・銀行業・保險業などの類。(代理商業に對して)

**じこ-しゆぎ** 自己主義【名】〔哲〕りしゆぎ(利己主義)に同じ。

**じこ-しようだく** 事後承諾【名】■承諾を得たる後に爲すべきを、これを經ずして爲したる處置に對し、承諾權者がその處置の適當なりしを承認すること。■〔法〕帝國議會が政府の爲したる緊急勅令の發布、財政上の緊急處分又は豫算外の支出もしくは豫算超過の支出の適當なりしことの決議をなすこと。この場合、議會が承諾をなせば、政府の處置は、豫め議會の決議を經て爲したると同一に見做されど、承諾をなさざる時は、國務大臣はその行爲に就きて、責任を負ひ、緊急勅令は、勅令を以て、將來その効力を失ふべきことを公布せざるべからず。

**しじ-しよぶん** 死後處分【名】〔法〕處分行爲の一。死後にその效力を生ぜしむべきもの。例へば遺贈の類。(生前處分に對して)

**し-じらかす** 【動四他】しこじらかすに同じ。

**し-じらす** 【動四他】しこじるやうにする。

**しじ-じらかす** 【動四他】次條に同じ。なほし損ふ。しじこらかす。こじらす。

**し-じらし** 仕拵【名】『仕は爲(ス)の意』料理などの支度。 俳諧刺語集羽『蕎食や長者の夜のしししらへ』 心中萬年草『今宵の物入仕拵、こちには一文入れさせず、親を樫で請取る樫は』

**し-じる** 【動下二自】腐なほりそこなふ。

**しじ-せん** 子午線【名】〔天〕『英 Meridian』十二支を方角に配すれば、子は北、午は南なるにより、子午は即ち南北の義。天頂と天極とを通過する天球上の大圓。また或地點と地球の兩極とを通過する地球上の線。前者を天球子午線といひ、後者を地上子午線といひて區別す。各その條を見よ。しごめん(子午面)・じけん(時圈)參照。

**しじせん-かうど** 子午線高度【名】〔天〕『英 Meridian altitude』天體が子午線を經過する時の高度。

**しじせん-くわんそく** 子午線觀測【名】〔天〕『英 Meridian observation』子午線經過における時刻、及び高度の觀測。主として、子午環に行ふ。

**しじせん-けいくわ** 子午線經過【名】〔天〕『英 Meridian transit 又 Culmination』天體が日週運動により、天球の子午線を經過すること。同一の天體は、平均一恒星日に、二回子午線を經過す。

**しじせんしよ** 四庫全書【名】〔書〕『しこ(四庫)を見よ』支那清の高宗が蒐輯したる一大叢書。その文庫を四書全書館といふ。次次條參照。

**しこぜんしよ-かんめい-もくろく** 四庫全書總目提要【名】〔書〕支那清の乾隆三十八年、于敏中等の勅を奉じて、四庫全書總目提要に寫きて、節略を加へ、簡明に記したる者。二十卷。

**しこぜんしよ-くわん** 四庫全書館【名】しこぜんしよ(四庫全書)を見よ。

**しこぜんしよ-そうもくていえき** 四庫全書總目提要【名】〔書〕支那清の高宗の朝に設置せられし四庫々書館にて、宗永濟等勅を奉じて撰定し、紀昀(ケイ)主任となりて、內府に寮まれる一萬餘部の書を、校訂・整理の上、分類解題したるもの。三百卷。內一百卷は考證なり。しこ(四庫)參照。

**しこ-だま** 【副】おびただしく。たくさんに。しごくだま。〔東國の方言〕

**しこたん** 色丹【名】〔地〕千島國九郡の一。

**しこたん-さう** 色丹草【名】〔植〕虎耳(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。高山に自生す。葉の高さ三四寸、葉は披針形、夏季、黃色の小花を開く。

**しこたん-たう** 色丹島・醜丹島【名】〔地〕千島列島の一。温順古丹(ケイ)島の西南の海中にあり。長さ八里餘、幅四里乃至六里、周圍二十二里。一島を以て一郡を立て、色丹郡と稱す。根室支廳の管轄。

**しこたん-はこべ** 色丹繁縷【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。高山に自生す。莖の高さ五六寸、葉は卵狀披針形、夏季、白色の小花開く。なきはこべ。ねむろはこべ。

**しこたん-まつ** 色丹松【名】〔植〕松柏科に屬する落葉喬木。落葉松(カラマツ)の類。千島の一部及び北支那・滿洲・蒙古等に生じ、幹は五六丈に達す。枝條多く、小枝は下垂す。材は家屋建築又は橋梁用に供す。ちしまらくえふしよう。

**しこたん-よもぎ** 色丹艾【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。北地に產す。全體に白色の毛あり、莖は直立し、葉は卵形、羽狀分裂をなす。きくよもぎ。

**しこ-ため** 【名】しこたまに同じ。 東海道『そちに、大事の物やらう、火をとぼして、奥へ來いといふより早く、あい、あい、あい、さらば、しこためを來もらうと』

**し-こつ** 肢骨【名】手足の骨。

**し-こつ** 指骨【名】〔醫〕『羅 Phalanges digitorum manus』手の指の中軸をなせる骨。掌骨に連接し、第一指骨(即ち拇指の骨)より第五指骨に至る五箇あり。第一指骨は二節より、その他は三節より成る。

**し-こつ** 趾骨【名】〔醫〕『羅 Phalanges digitorum pedis』足趾の中軸をなせる骨。跗骨に連接し、第一趾骨(即ち拇趾の骨)より第五趾骨に至る五箇あり。第一趾骨は二節より、その他は三節より成る。

**し-こつ** 篩骨【名】〔醫〕『羅 Os ethmoideum』頭蓋骨の一。左右兩眼窠の間に介在して、形蜂窠の如く、蝶骨・前頭骨・鼻骨・淚骨・上顎骨・下甲介骨・鋤骨の七骨に接續す。

**し-こつ** 死骨【名】死人の骨。太平記『死骨滿ちて、屠所の如く』

**し-こつ** 齒骨【名】齒ぐきの骨。

**しこつ** 齒つ【動上二他】そしり告げ。讒言す。よこす。〔古語〕 字鏡『詈、毀也、讒也、志已豆』

**しこつ-おきな** 醜翁【名】しこの老人。みにくき翁。〔古語〕 蜻蛉『たぶれたるしこつ翁のことだにも我れには告げず』

**しこつ-こ** 支笏湖・醜津湖【名】北海道鶴振國千歲(チトセ)郡にある湖。周回約十里。

**しこ-でん** 伺戶田【名】王朝時代に、伺戶に班給せし田。不輸租田の一。

**し-じ** 仕事【名】『仕は爲(ス)の義』■なす業。はたらくこと。勞務。職務。■じいき(針仕事)の略。■〔理〕『英 Work』一物體が、力を他の物體に働かして、これを動かしたる効果を示す量。力とその力を受けたる物體が、その力の方向に動きたる距離との相乘積にて測定す。

仕事の絕對單位【名】〔理〕C.G.S.法に依りて表はす仕事の單位。しいじいえす法參照。

仕事の單位【名】〔理〕普通に瓩(キログラム)又は磅(ポンド)にて、力の單位を表はし、米(メートル)又は呎(フィート)にて、距離の單位を表はす。また貫と尺とを表はすもあり。







單位の仕事【名】〔理〕物體が、單位の力によりて、その力の方向に、單位の距離だけ動きたる場合の仕事。

**しじ-うた** 仕事唄【名】仕事をしながらうたふ唄。 日本振興論『三に早苗(ナヘ)唄・四に仕事唄』

**しじ-ぎ** 仕事著【名】勞働の際に著用する「る衣服。

**しじ-し** 仕事師【名】■消防夫などにして、平生土木の人夫として働く者。■巧に事業を計畫し、經營する人。〔俚語〕

**しじ-だか** 仕事高【名】仕事の出來あがりだか。

**しじ-だかばらひ** 仕事高拂【名】〔經〕次條に同じ。明治拂に對して)

**しじだかばらひ-ちんぎん** 仕事高拂賃銀【名】〔經〕仕事の出來高の多少を標準として支拂ふ賃銀。仕事高拂。筒數拂。出來高拂。筒數拂賃銀。出來高拂賃銀。(明治拂賃銀に對して)

**しじ-ば** 仕事場【名】仕事する場所。工場。工作場。

**しじ-ばこ** 仕事箱【名】仕事に用ふる道具を入るる箱。針箱又は大工の道具箱の類。

**しこ-な** 醜名【名】■あしき名。あだな。〔古語〕 名義抄『謗・シコナ・イミナ』■自己の名の謙稱。 大鏡『大納言どの聞かせたまひて、明理の亂行に行成がしこ名呼ぶべきにあらず』

**し-こなし** 【名】しこなすこと。ふるまひ。身ごなし。 大機庵雜物語『もと親共等がしこなし見よ』

**し-こなす** 【動四他】『仕は爲(ス)の義』程よく振舞ふ。たくみにす。

**しこ-の-き** しこの木【名】茫削りにて、丈手桙子に切りくんで」

**し-こぶ** 四劫【名】〔佛〕世界の變遷の四大時期。即ち世界成りて、人壽卒の木生ずる成劫(ジヤウコウ)といひ、人類の安住するを住劫(ジユウコウ)といひ、世界の壞滅するを壞劫(エカウ)といひ、世界の空虛となるを空劫(クウコウ)といひ、連續して、成住壞空といふ。ちこ(劫)ごち

**じ-こふ** 自業【名】〔佛〕みづから作る善惡の業(ゴウ)。それを因緣として得る苦樂の果報を、自業自得といふ。(但し多くは、惡しき方にいふ)

自業自得【句】〔佛〕前條を見よ。

自業自縛【句】〔佛〕前條に同じ。 枕草子『自業自得なりけり』

**じこふどくごくわ** 自業自得果【名】〔佛〕自業自得によりて招きたる果報。

**し-こぶら** 色那【名】品柄の卑しきことなりといふ。〔古語〕 卷鳥『しこぶらにふるめきたる箱二つに、あづまぎぬ一疋』

**しこへい** 【名】〔被〕がいもの(疏藤)に同じ。

**じこ-ほけん** 自己保險【名】〔商〕じかほけん(自家保險)に同じ。

**じこ-ほぞん** 自己保存【名】〔生・哲〕じかほぞん(自家保存)に同じ。

**しこ-ぼとぎす** 醜時鳥【名】時鳥(ホトトギス)を卑めていふ語。〔古語〕 蜻蛉『うれたきや醜時鳥今こそはおとのかるかに來鳴きとよまめ』

**し-こみ** 仕込【名】■仕込むこと。■もとで。しほんきん。〔芝居の語〕■心(シン)に刀又は槍を仕込みたる杖。しこみ。 發狂五人兄『幸ひこの狩屋を揭屋と名附け、まだうら若き大盡殿、枠に仕込んで貰ひたし』 卷花五大力『飯は、がうきに仕込んでござりまするな』■じいき(仕入る)に同じ。■中に入れて造る。

**し-こむ** 仕込む【動下二他】『仕は爲(ス)の義』圍みて構へ造る。〔古語〕 源氏『茎垣しこめたる西おもてを』

**しこめ** 醜【名】■しこめき物の義。形おそろしく醜き怪物。おに。ここめ。〔古語〕 長恨歌『醜女、此云志許賣』 日本紀『醜女。一說云、黃泉之鬼也、世人爲惡三小兒、稱三許許女者、此語之訛』■みにくき女。醜女。

**しこめ** 醜【名】しこめきさま。しこめきなる目を見ることなりと。〔古語〕 一說に、醜なる目を見ることなり。 記『吾(ワレ)は、いなしこめ、しこめき、きたなき國にいたりてありけり』

**しこめし** 醜し【形一】醜(ミニクシ)なるさまなり。またなく見にくし。〔古語〕 記『しこめき穢(ケガレ)き國』

**じこ-めん** 子午面【名】〔地〕『英 Meridian plane』地球の兩極を通過し、その赤道面に直交する平面。又その地球の表面と交はりて生ずる線は、即ち地上午線なり。じせん(子午線)參照。

**し-こり** 繁凝・癒【名】筋肉の凝固まりて塊狀をなすこと、又その塊狀の筋肉。

**じ-こり** 自己流【名】他の流儀によらぬ、己れ一箇の流儀。我流。

**しこり-ばくち** 繁凝博打【名】博奕(バクエキ)に凝固まること。 丹波國『しこりばくちのわるい遊』

**しこる** 頑【動四自】しこる(頑る)の轉訛。〔東國の古の方言〕 萬葉『わがせこが來むと語りし夜は過ぎぬしゑやさらさらしこりかもよ』

**しこる** 繁凝【動四自】しこりを起す。

**しころ** 鋸・鋸・鑄【名】■兜の鉢の頸を被ふやうに作れるもの。背後より鉢附板に接して垂れ懸り、多くは撓革(ヒガワ)又は鐵板にて作り、普通三五枚、多きは八九枚を、絲又は革にて綴合はせたること鱗(ウロコ)に同じ。或は全部を廣き板一枚にしたるもあり。その三枚なるを三枚兜、五枚なるを五枚兜と呼ぶ。また形狀によりて、一文字割(ヒトモジワリ)・鉢・鮑・頭・鉢・目根・野鉢などの名あり。■〔建〕しころぶね(鐵屋根)の略。■〔建〕しころぶき(鐵屋根)の略。

**しころ** 【名】〔植〕きはだ(黃蘗)に同じ。

**しころ** 【接尾】しきに同じ。〔西國の方言〕「これしころのこと」

**しころ-うち** 鋸打・鑄打【名】■槌にて衣を打つこと。■昔、京阪の芝居にて、二の替(ヒ)に、狂言了りて打出(ウチダシ)の時、振袖を著て、阿多羅(アタラ)の面をかぶりたると、頭巾及び羽織にて、鑄吹の面をかぶりたると、二人にて、「評判、評判」の聲に連れて浮れ踊りしこと。

**しころ-ぶき** 鋸草【名】〔植〕しゆろぶき(棕櫚)

草)に同じ。

**しころ-づきん** 鉦頭巾【名】そうじふのうづきん(宗十郎頭巾)に同じ。芽出童はしころ頭巾や煤拂」

**しころ-づけ** 鉦附・鐵附【名】こし(腰)回に

**しころ-びき** 鉦引・鐵曳【名】源平屋島(やしま)の戰の時、平景清が、源家方の箕尾谷(みのを)十郎國俊と格闘して、國俊の兜の鉦をつかみて、引きちぎりきと云傳ふる故事。芝居にては、丸本物「一谷(いちのたに)嫩軍記」の發端なる一幕として書加へ、天保四年始めて上演せられたり。

**しころ-びさし** 鉦庇【名】〔建〕『形、兜の鉦の如くなるによりていふ』普通の屋根の軒下より少し離して、片流(かたなが)に取附けたる庇。しころ。

**しころ-ぶき** 鐵葺【名】屋根の勾配を、中途より變じて葺きたるもの。行基葺。

**しころ-やき** 志戸呂燒【名】古、遠江國より產出せし一種の陶器。

**しころ-やね** 鐵屋根【名】〔建〕普通の屋根の軒下に少し離れて、片流(かたなが)に取附けたる屋根。雪隱・押入(おしいれ)などの屋根に多し。しころ。

**しこ-を** 醜男【名】㊀見にくき男。㊁男を罵りていふ語。

**しさ** 視差【名】『英 Parallax』二つの異なる場所より同一點を見たる方向を示す二直線間の角。ちがいしさ(地平視差)・天體の視差・參照。

**しさ** 次座【名】なげくこと。

**しさ** 四座【名】足利將軍義政の頃に定められし猿樂の四家。即ち觀世・寶生(ほうしょう)・金春(こんぱる)・金剛。かんがかり(上掛)・しもがかり(下掛)ともいふ。五座・參照。

**じさ** 時差【名】㊀『英 Equation of time』平均太陽時より眞太陽時を減じたるもの、即ち平均太陽時を得んがために眞太陽時に加ふべき補正數。時差率。㊁兩地方の時間の差。經差十五度毎に、一時間の差を生ず。地球上の時角は、經度と一致するに因る。

**じさ** 自差【名】『英 Deviation』羅針儀の指す方位と磁氣子午線の指す方位との間に生ずる差角。鐵製・鐵材を用ひ、又は鐵類を滿載したる船の羅針に、磁氣の感應するに因りて發生す。

**じさ** 侍坐【名】傍に侍り坐すること。

**しさい** 詞采・詞彩【名】詞のうるはしきこと。詞の花。

**しさい** 詩債【名】他より贈られたる詩に對して、我れよりも詩を作りて挨拶を返すべきに、いまだ返さずにあること、又、詩に作るべき材料あり、もしくはこれを作るべき機遇に臨みながら、作らずにあること。

**しさい** 詩才【名】詩を作るる才。

**しさい** 史才【名】歷史を編述する才。

**しさい** 四塞【名】四方にある要塞。

**しさい** 四祭【名】古、支那の四季の祭事。即ち春は軵、夏は禜、秋は�209、冬は烝。

**しさい** 四載【名】「書經の益稷篇に「予乘二四載」とあり」四種の乘物、即ち船・車・橇(ソリ)・樏(かんじき)の併稱。

**しさい** 司祭【名】㊀祭式を掌る人。㊁僧官の一。『英 Priest』天主教及びギリシヤ教の伴官の一。天主教にては司教の次、ギリシヤ教にては主教の次に位し、教會の儀式・典禮を司る。新教の教師に相當す。

**しさい** 司宰【名】つかさどること、又その人。宰領。

**しさい** 市債【名】地方債の一種。市の負債。

**しさい** 私債【名】自己一人の債務。(公債に對して)

**しさい** 齊衰【名】『儀禮の喪服篇に「疏衰裳齊」とありて、傳に「齊者何、斜也、鄭註に「疏猶麤也」、賈公彥疏に「三升正服斬不レ得麤名、至レ此四升始見麤也、造衣之法、衰裳既成、乃始斜刈之」とあり』支那に、喪中の服の、麻にて造りたるもの。

**しさい** 子細・仔細【名】㊀くはしきこと。こまか。綿密。㊁(しさいはれ)事のわけ。事のもと。宇治拾遺「事の子細いはせて聞かせんとて」藝術「雨月」「われ皆顧の子細あるによりて」㊂差支となるべき事柄。平治「平氏の一類を滅さんこと、何の仔細かあるべき」

子細に及ばず【句】かれこれ申すべき筋なし。平家「この身朝廷となりぬる上は、子細に及ばずといひながら、恨めしかりし事どもなり」

**しさい** 肢絕【名】〔動〕甲殼類の有する鰓の一種。即ち蟹・蝦などの、鰓脚及び步脚の基部に有するもの。

**しさい** 資財【名】㊀たから。資產。財產。「貨財」㊁資本にある財產。もとで。資貨。「漢書の蕭望傳に「資財不レ下三五帝」とあり」うまれつき。資質。

**しさい** 史材【名】歷史の材料。史料。

**しさい** 詩材【名】詩の材料。詩料。

**しさい** 死罪【名】㊀死に當る罪。死刑。霜刑。「吾わが朝には、嵯峨天皇の御時より死罪をとどめられけり」㊁『史記の馮唐傳に「匠誠愚朴忌諱、死罪死罪」とあり』臣が君に對する、自己の言行を謙遜していふ語。

**しさい** 私罪【名】〔法〕㊀私人が自ら手を下して、一私人を害する所爲。㊁官吏が賄賂を受けて、正當ならぬ行爲をなしたる罪。(公罪に對して)

**じさい** 時齋【名】〔佛〕さいじき(齋食)に同じ。「自殺。

**じさい** 自裁【名】自ら命を裁(さば)つこと。

**じさい** 自在【名】〔植〕くぬぎ(櫟)に同じ。

**じさい** 自在【名】㊀心のままなること。自由。㊁じざいぎ(自在鉤)の略。一代切「初紅葉の陰に自在をおろし、金(かね)の大鍋(おなべ)」㊂じざいもち(自在餅)の略。

**じさい** 自罪【名】〔基〕自己の意志・言行の惡によりて犯す罪。(原罪に對して)

**じさいあん-きさく** 自在庵祇德【名】〔人〕江戸の俳人。通稱は來藏。竹隱士・遲日園・別號あり。稻津祇空の門人。寶曆四年歿す。年六十四。

**じさい-かぎ** 自在鉤【名」

(ぎかいざじ)

竹筒に鉤形をなせる枝木を插入し、鉤の上に横木を置きて、これを竹筒に結びつけ、その鉤に鍋・鐵瓶などを懸けて、爐上に下げ、自在に上下し得るやうに裝置したる鉤。じざい。俳諧新題・續山「蛸蛉の四羽うちゆく自在かぎ」

**じさい-がほ** じさい顔【名】(植)くぬぎ(櫟)に同じ。

**じさい-かし** 子細顔・仔細顔【名】子細あり げなる顔。日本俗語辨「鼻に鐵よせ仔細顔」

**じさい-きねじやう** 自在吉祥【名】〔佛〕自在の德を備へたる吉祥天女。盛衰記「自在吉祥の化現(けげん)」

**じさい-くわ** 芝菜科【名】〔植〕しばなくわ(芝菜科)に同じ。

**じさい-くわ** 自在畫【名】コンパス・定木等の器具を用ひず、手指のみにて描く畫。(用器畫に對して)

**じさい-せうこんしや** 私祭招魂社【名】政府の公認の下に、民間有志にて奉祀する招魂社。下附金なし。(官祭招魂社に對して)

**じさい-だけ** 自在竹【名】竹にて造りたる自在鉤。

**じさい-ちやう** 資財帳【名】古、寺にて、その資財を記入し、住持・檀家等相連署して、その保管の責任を明かにせし帳簿。寶龜・三代實錄「修定額寺資財帳進上官事」

**しさい-づら** 子細面・仔細面【名】じさいがほ(子細顔)を罵りていふ語。浮世天草「物をも言はぬ子細づらは、心得ず」

**じさい-てん** 自在天【名】〔佛〕だいじざいてん(大自在天)を見よ。

**しさい-に** 仔細に・子細に【副】くはしく。詳かに。

**じさい-に** 自在煮【名】じざいもち(自在餅)

**じさいはう** 刺細胞【名】〔動〕『英 Nematocyst 又 Nematophore』腔腸動物の皮膜中に存し、保護及び攻擊の用をなす一種の細胞。その中に絲絲と毒汁とを有し、外部の刺戟により、刺絲を伸ばして、物を刺し、毒液を注入す。刺絲胞。毒絲胞。

**じさいもち** 自在餅【名】『じんざいもち(善說餅)を見よ』搗きたての軟き餅に餡をつけたるもの。じざい(自在)。







**しさい-もの** 子細者・仔細者【名】㊀仔細のあるらしき人。㊁策略をめぐらすに巧なる人。「くせありげなる人。一代記「此の亭主子細者にて、敷銀つく女房もよばず」

**しさいらし** 子細らし・仔細らし【形二】㊀仔細あるが如し。㊁もったいらしく物めかし。分別あるらし。樋口一葉の「濁り江」「七十許の侍謹んで長まる。やい、あの親父は子細らしい、訴訟ならば家老八郎左衛門にいへ」

**しさいるゐ** 四鰓類【名】〔動〕頭足類の一亞目。外套膜腔中に四箇の鰓を備ふるもの。多くは化石として存し、現存するは鸚鵡貝の類あるのみ。

**しさう** 思想【名】㊀心に思ひ浮ぶこと。かんがへ。㊁〔哲〕『獨 Gedanke 英 Thought』思惟の結果產出せられ、又は發見せられたるもの。

思想の原理【句】〔哲〕『英 Principles of thought』論理學にて、思想上、自明の原理とするもの。通常、自同律・矛盾(むじゅん)律・排中律の三を數ふ。思惟の原理。

思想の三法則【句】〔哲〕前條に同じ。

思想の流(ながれ)【句】〔哲〕『英 Stream of thought』個人の意識活動・意識生活の、時時刻刻に推移しながら、しかも相連續するを、河川の流に譬へたる語。亞米利加合衆國の哲學者ジェムス(W. James)の唱導せしもの。

**しさう** 指爪【名】指のつめ。

**しさう** 齒槽【名】〔醫〕『羅 Alveoli』各齒根の相並びて嵌入する顎骨の窩(くぼみ)。上顎にてはその齒槽緣に存す。齒根膜及び齒龈と共に、直接に齒牙支持の組織たり。

**しさう** 芝草【名】㊀しばくさ。しば。㊁靈草。

**しさう** 詩草【名】詩の草稿。詩稿。

**しさう** 死草【名】枯れたる草。

**しさう** 死相【名】㊀死にてある顏つき。しにがほ。㊁死ぬべき人相。

**しさう** 四草【名】生花にて、八つの藜の一。草のみを四種生くること。

**しさう** 四相【名】四種の相。次の各條參照。

一期(いちご)の四相【名】〔佛〕㊀生・外法(げほう)の四相に同じ。㊁人の一生に起る四種の相、即ち生・老・病・死。しく(四苦)はうさう(八相)參照。田宮長興「斯う申す意清は二相を悟りさとり候へども、童忠は四相を有爲法(うゐほう)の四相【句】〔佛〕「丙法の四相」に同じ。

外法(げほう)の四相【句】〔佛〕じほう(四劫)「に同じ。

識境の四相【句】〔佛〕衆生が心識の對象たる萬象の虛假なるを知らずして、妄に起せる四種の相。即ち我相・人相・自生相・壽命相の併稱。この四者は迷の根本にして、これを破すれば、即ち佛なり。

內法の四相【句】〔佛〕萬物の變化を示す四種の相、即ち生相・住相・異相・滅相の併稱。天地間の萬物、この四相に因りて、生滅無常の姿を呈す。これを有爲法といひ、この四相を超越せるを無爲法といふ。無爲法は、即ち涅槃(ねはん)なり。

**しさう** 四三【名】㊀變六にて、二箇の栄の目に三と四の出づること。㊁花あはせの手役(てやく)の一。同じ札四枚と同じ札三枚と。

**しさう** 四葬【名】〔佛〕天竺に行はるる四種の葬法、即ち江河に投じて魚鼈に食はむる葬と、薪を積みて焚く火葬と、岸傍に埋めて朽ちしむる土葬と、林野に曝して禽獸に食はしむる林葬と。かんりん(寒林)・參照。

**しさう** 市葬【名】その市に功勞ありし人などを、市費にて葬ること。

**しさう** 詞藻【名】㊀言葉のあや。修辭上のかざり。文藻。辭藻。㊁詩歌又は文章。

**しさう** 志操【名】志の堅きこと。みさを。

**しさう** 宍栗【名】〔地〕播磨國十三郡の一。郡役所を山崎町に置く。古は「しさは」といへり。

**しさう** 齒相【名】齒牙にあらはるる人相。

**しさう** 死藏【名】徒に所藏するのみにて、使用せぬこと。「その物。

**しさう** 私藏【名】個人の所藏すること、又

**しさう** 四藏【名】〔佛〕經藏・律藏・論藏(以上を三藏といふ)・呪藏の四種の佛典。呪は陀羅尼(だらに)なり。

**じさう** 時裝【名】流行のよそほひ。時勢

**じさう** 辭藻【名】じさう(詞藻)に同じ。

**じさう** 侍曹【名】じじ(侍史)に同じ。

**じさう** 兒曹【名】小兒のともがら。こどもたち。兒輩。

**じさう** 自葬【名】神佛式に依らず、自家にて勝手に執行ふ葬式。

**じさう** 事相【名】〔佛〕教理よりも、修行を主とすること。〔眞言宗の語〕

**しさう-か** 思想家【名】思案に耽り、又は思想に富む人。

**しさう-かい** 思想界【名】『英 Range of thought』思想の活動する範圍。思想に關する範圍。

**じさう-き** 示相器【名】『英 Phase indicator 又 Phasometer』電氣交流の位相を示す器。

**しさう-くわ** 思想化【名】〔哲〕りさうくわ(理想化)に同じ。

**しさう-くわ** 紫草科【名】〔植〕むらさきくわ(紫草科)に同じ。

**しさう-げき** 思想劇【名】『佛 Drame de idée』遊戲的に看客の目先を樂しましむるよりも、一定の思想を傳達するを主とする演劇。文學上にも、智の要素を重んずるに至れる近代の產物にて、社會劇・問題劇などいふものも、殆ど同一のものなり。

**しさう-しまく** 齒槽齒膜【名】〔醫〕しこんまく(齒根膜)に同じ。

**じさう-たうばん** 咒像靈幡【名】じたうばん(咒願幡)に同じ。

**じさう-とうりつ** 自相同律【名】〔哲〕じどうりつ(自同律)に同じ。

**じさう-ふじやう** 自相不淨【名】〔佛〕五種の不淨の一。小年には獨樂中にありて、その身臭く、老年には相好醜惡となり、又一身九穴を有して、常に不淨を排出する等の不淨。

**しさう-りう** 思想流【名】〔哲〕「思想の流」に同じ。

**しさ-かんだんけい** 示差寒暖計【名】『英 Differential thermometer』相近き二點の溫度の差を示す器械。U字形をなしたる玻璃管の兩頭部に、同質の兩球を附し、管內には少量の液體を入れ、球狀部には空氣を保たしめたるもの。兩脚所在の溫度相等しければ液面の高さ等しく、これを零度とし、兩者の溫度相異なれば、高溫度なる球の空氣膨脹して、液を低溫度の方に押遣ることにより、目盛によりて、溫度の差を知ることを得。

**しさく** 思索【名】理路を辿りて、思想をめぐらすこと。考へ求むること。

**しさく** 紙索【名】こより。かんぜより。

**しさく** 支索【名】㊀支ふる索(ナワ)。㊁『英 Stay』帆船にて、帆檣を前方に維持する大索。

**しさく** 詩作【名】詩をつくること。さくもん。

**しさく** 試作【名】試みに作ること、又その作れるもの。

**しさく** 試策【名】支那の策問の一種。國家の命じたる試驗官の、時事に關する問題を出して、士を試み、士のこれに對ふるもの。(制策・進策に對して)

**しさく** 史策【名】『史は文書の義、策は冊に通じ、同じく文書の義』記錄。文書。

**しさく** 時策【名】その時世に處すべき畫策。

**じさく** 自作【名】㊀自ら作ること、又その物。てづくりてせい。曾我虎が塵「虎が自作の誓唱歌」㊁自己の所有地を自ら耕作すること。(小作に對して)

**しさくかく** 視錯覺【名】〔哲〕『英 Optic illusion』視覺に生ずる錯覺。錯視。

**じさくさんえんえき** 次錯酸鉛液【名】〔化〕甘味ありて、無色・透明なる教猛性の液。醋酸鉛三と、酸化鉛一とに蒸溜水を加へて製す。劇藥にて、腐蝕藥として、丹毒・打傷・火傷等に外用し、又、痳疹・白帶下の注射料に供す。

**じさく-のう** 自作農【名】自己の所有地を

自ら耕作する農業法、又その農夫。〔小作農に対して〕

**しさし 爲止**【名】しさしたること。しかけ。〔平家物語 実説生貫〕昨日の仕さしを仕舞はうとする」

**じさし 字指**【名】じゐき〔字突〕に同じ。

**しさす 爲止す**【動四他】なし果さずに、止めて置く。しのこす。中止す。〔宇治拾遺 陰陽師、心えず仰天して、祓をしさして、これをいかにといふ〕

**しさつ 視察**【名】見とどくること。見きはむること。

**しさつ 伺察**【名】何ひ見ること。

**しさつ 使札**【名】使者に持たせて遣す書狀。

**しさつ 刺殺**【名】さしころすこと。

**しさつ 弑殺**【名】目上の人を殺すこと。

**しさつ 試刷**【名】したずり〔下刷〕に同じ。

**しさつ 四察**【名】『周逸書に「四察、一、目察維棟、二、耳察維聲、三、口察維言、四、心察維念」とあるに本づく』目・耳・口・心の四に察すること。

**じさつ 寺刹**【名】てら。じせつ。寺院。梵語「刹」。

**じさつ 自殺**【名】自ら死ぬること。引決。自害。〔他殺に対して〕

**しさつ・ばいばい 視察賞買**【名】〔商〕しけばいばい〔試驗賞買〕に同じ。

**じさつ・はうじよさい 自殺幇助罪**【名】〔法〕他人の自殺行爲に助力し、その為に自殺の目的を達せしめたるに依りて成立する罪。

**しさつ・でんりうけい 示差電流計**【名】さでんりうけい〔差示電流計〕に同じ。

**しさは 宍粟**【名】〔地〕ししさう〔宍粟〕を見よ。

**しさま 爲樣**【名】事を行ふさま。なしたようをつくしたまへりける」

**しさん 紙傘**【名】紙にて貼りたるさしがさ。からかさ。

**しさん 死産**【名】子の、死體となりて生ること。死胎を生むこと。

**しさん 私産**【名】〔商〕しいさん〔私有財産〕に同じ。

**しさん 資産・貲産**【名】❶所得を蓄積したるものしんだい。財産。資財。財物。❷〔經〕或者に屬する經濟上の財貨の總計。財産。❸〔法〕或者に屬する金錢上の價格あるものの總稱。財産。❹〔法〕民法にて、資本たる財産、又は資本としての力を有する財産。或事業に對し、資本として、その効力を發揮する財産。

**しさん 試鑽**【名】〔英 Bohrung〕基礎工事を行ふ場合に、地質調査のために、地盤に小孔を貫鑿すること。

**しさん 試算**【名】❶試みに行ふ計算。かりに行ふ計算。❷〔數〕けんさん〔檢算〕に同じ。

**しさん 齒算**【名】年齡。よはひ。年齒。

**しさん 四散**【名】四方に散亂すること。ちりぢりばらば。〔に同じ。

**しさん 子産**【名】〔人〕こうさんけう〔公孫僑〕に對して〕

**しさん 雌山**【名】産物の多き山〔雄山に對して〕

**しざん 芝山**【名】〔人〕ごさうしざん〔後藤芝山〕

**しざん 茨山**【名】土皇の居所。

**じざん 自讃・自讃**【名】❶己れ自らほむること。自慢。〔著聞〕あまりに學問をして、四季を左に知らぬやさしさといふさだにこそ乘りて侯へ、と自讃しければ」❷じわしさん〔自畫自讃〕に同じ。

**じざん 慈山**【名】〔人〕高僧。比叡山天台宗安樂院の開山第一世。俗姓は和田、字は妙立。唯認子と號す。美作國の人。元祿三年寂す。年五十四。

**しさんうりあげかんあやうしよ 試算賣上勘定書**【名】〔商〕委託販賣品として、或商品を積送らば、幾何の手取金を得べきかを豫知し、取引上の參考に供せんがために、問屋に請求して、假に計算作成せしむる勘定書。形式は、試算のために作れる旨を附記する以外、通常の賣上勘定書と異なる所なし。試算賣上計算書。豫算賣上勘定書。豫算賣上計算書。

**しさんうりあげ・けいさんしよ 試算賣上計算書**【名】〔商〕前條に同じ。

商品を賣渡したりとせばその仕切金は何程となるべきかを豫知し、取引上の參考に供せんがために、賣主に請求して、假に計算作成せしむる送狀。形式は、試算のために作れる旨を附記する以外、通常の試算送狀と異なる所なし。試算仕切書。豫算送狀。豫算仕切書。

**じさん・か 自讃歌**【名】❶自らよしと思ふ歌。❷〔書〕後鳥羽院・式子内親王・後京極攝政良經・大納言源通具・藤原俊成・俊成女・宮内卿・藤原有家・同定家・同家隆・源通光・藤原雅經・寂蓮・藤原秀能（ひでよし）西行の自讃の歌、十首づつを集めたるもの。一卷。選者詳なしなり。

**じさんか・あすかゐせい 自讃歌・飛鳥井抄**【名】〔書〕まこと自讃歌〕の宗祇の註を記し、更に著者の註を加へたるもの。一卷。著者は、飛鳥井家とあるのみにて、詳かならず。

**じさんか・くわんちゆう 自讃歌管註**【名】〔書〕自讃歌〕を註せるもの。一卷。堂葉庵惠南の著。

**じさんか・せう 自讃歌抄**【名】〔書〕自讃歌を註せるもの。一卷。東常縁（ときつね）の著。

**じさんか・ちう 自讃歌註**【名】〔書〕自讃歌〕を註せるもの。一卷。宗祇法師の著。

**しさん・かんちやう 資産勘定**【名】〔商〕簿記にて、金錢・家屋・貸附金等、金錢に見積り得る權利を總括する勘定。〔負債勘定に對して〕

**しさんさんくわ・えん 四三酸化鉛**【名】えんたん〔鉛丹〕に同じ。

**しさんさんくわ・てつ 四三酸化鐵**【名】〔鑛〕黑光の黑澤を有し、磁性を帶ぶる灰黑色八面體の結晶物。天然に多量に產する、貴重なる鐵鑛。釜石鐵山より產するものの如きはこれにて、砂鐵は、その粒狀をなせるものなり。人工的には、鐵を酸素中に熱し、又は熱したる鐵屑上に、水蒸氣を通じて得る。磁鐵鑛。

**しさん・さんくわなまり 四三酸化鉛**【名〔化〕えんたん〔鉛丹〕に同じ。

**しさんさんくわ・まんがん 四三酸化滿俺**【名〔化〕酸化滿俺を大氣中にて焙燒して得る、赤褐色の粉末。酸化第一第二滿俺。

**しさん・しきりしよ 試算仕切書**【名〔商〕しさんかくりしやさ〔試算送狀〕に同じ。

**しさんじくわい 市參事會**【名〕市の合議制機關の執行機關。市參事會員を以て組織し、市を代表して、市の行政を執行する。

**しさんじくわいゐん 市參事會員**【名〕市參事會を組織する吏員。市長・助役及び名譽職參事會員とする。

**しさんしようしよ 死産證書**【名〕死産を證明する文書。

**しさんぜい 資産稅**【名〕〔經〕ざいさんぜい〔財産稅〕に同じ。

**しさんのほし 四三星**【名〕〔天〕ほくとせい〔北斗星〕を示ふ。東岡の方言〕

**しさんふさい・かんちやう 資産負債勘定**【名〕〔商〕資産勘定と負債勘定との併稱。借方は資産を表はし、貸方は負債を表す。

**しさんふさい・へう 資産負債表**【名〕〔商〕たいしやくたいせうへう〔貸借對照表〕に同じ。

**しさん・へう 試算表**【名〕〔商〕簿記にて、仕譯帳より元帳への轉記の正否を試驗するため、元帳の各口座の貸借の各合計、或は殘高を記入せる表。この表の借方と貸方とは、必ず平均すべきものにて、もし平均せずば、誤謬あるためなり。

**しさや 屁糞**【名〕しりさや〔尻糞〕の略。

**じさり 字去**【名〕〔文〕速句における去（ゃ）の一種。同じ文字の句句に引續きて出づるを繰ふこと。例へば、天象の月に十二箇の月、木枯に木の字などは、三句去にすべき類。〔に同じ。

**じさ・りつ 時差率**【名〕〔天〕じさ〔時差〕に同じ。

**しさる 退る**【動四自】しざる〔退る〕に同じ。

**しさる 爲さる**【動四自】す〔爲〕の敬下を見よ。

**しざる 退る**【動四自】『後（ゃ）玉るの略轉』あともどりす。退く。業平集「みちのくの白川越えてあひみつしざるしざるも行けどはるけき」

**しさわぐ 爲騷ぐ**【動四自】騷ぎて、事をなす。源氏修法などしさわげど」





**しし 尿・小便**【名〕小便。小用。し。〔小供の語〕五人女「お子を清十郎にいだかせ、膝へ、ししかけさせ」

**しし 父**【名〕ちち〔父〕を云ふ。〔東國の古の方言〕萬葉「旅ゆきにゆくと知らずあもししにこと申さずて今ぞくやしき」

**しし 肉・宍**【名〕にく。しし むら。〔古語拾遺〕「肉之之、肌膚之肉也」記「牛酒、シシサケ」

**しし 獸**【名〕❶前條の語の意より轉ぜしものならん。❷けもの。けだもの。獸類。〔古語〕記「鳥獸、トリシシ」❸〔動〕猪（ゐの）又は鹿（しか）の類。〔古語〕萬葉「あたたらのねにふすししのありつつもあれは到らむねどな去りそ、れ」❹しがり〔獸狩〕の略。貫葉「馬の上、徒立、ならぶ人なし。ことにしての上手にて」

**ししあ 食った報**【名〕『猪鹿は伊勢神宮にて忌みしにより、いへる語かといふ』惡事をなしたる報。特に女色に耽りて、梅毒に罹るなどにいふ。蝦食うた報。〔諺語〕

**ししあ 射ゆ鹿**（ゐ）**を繫ぐ**【句】射られて逃れし鹿の跡をもとめ行く。〔古語〕萬葉「いゆししをつなぐ河邊の若草の身のわかへにさねし子らはも」

**ししい 指使**【名〕指圖して使ふこと。手指。

**ししい 粢食**【名〕神にささぐる飯米。

**ししう 四驌**【名〕しく〔駟馬〕に同じ。四驌も追ふ能はずを見よ。

**ししう 四師**【名〕華嚴宗にて、七祖以後の傳統者たる支那の子容・淨源・義和・李通玄の四人の併稱。「七祖・四師」

**ししう 四子**【名〕❶四人の子。❷四番目の子。曾子子思の四人の併稱。

**ししう 四子の書**【句〕〔書〕『大學は曾子の著と稱せられ、中庸は子思の著、孟子は孟軻の著』論語は孔子の言行を記せるものなるよりいふ。しし文〔四書〕に同じ。

**ししう 士子**【名〕さむらひ。士人。

**ししう 死子**【名〕❶死にたる子。

て、死にたる蚕石。あげいし。

**ししう 嗣子**【名〕家督を相續すべき子。

**ししう 私子**【名〕ててなし子。私生兒。

**ししう 胥子**【名〕くわ〔活嘴〕に同じ。

**ししう 獅子**【名〕❶〔動〕食肉類に屬する哺乳類動物。熱帶地方に產す。全身黃赭にて、長き領毛を有し、頭大く、尾長く、四脚强く、腹圓く、腰細く、牡には鬣あり。性猛烈、百獸の王と稱せらる。からしし。らいおん。〔御子〕❷〔しまうま〔狛犬〕〕を見よ。

(獅子)

〔禁經抄「南殿御帳如恒、無元帳、有二獅子狛犬」〕❸雅樂の一。高麗樂にて、沙陀調に屬す。聖德太子の時の傳來といふ。平安朝に至りて、佛會の時、菩薩・迦陵頻（かりやうびん）等の舞樂に交へて奏せり。獅子頭をかぶりて舞ふ。天竺邊の風俗を移せるなるべしといふ。❹〔しやくけう〔石橋〕〕の古稱。❺能（ゐ）にて、謠なし、囃子（ゐ）のみにて、獅子舞を行ふもの。❻しまう〔獅子舞〕の略。太平記「獅子・田樂を召され、日夜に舞ひうたはせ」❼しがしら〔獅子頭〕の略。

**ししう 獅子身中の蟲**【句〕『梵網經に「如獅子身中蟲、自食獅子肉、非餘外蟲」とあり。獅子は、百獸の王とも云はれて、敵するものなければ、却りて、その身中に生ずる蟲のために、肉を食はるといふ意』内部より發する禍、また或人より恩義を蒙りながら、却りて、その人に害を與へんとする者の譬。假名手本忠臣藏「獅子身中の蟲とは己れがこと、我が君より高知をいただき、莫大の御恩を被りながら」出世景清「我慢恩癡の猿智慧を、獅子に諸〔句〕〔佛〕「鬼に金棒」に同じ。〔諺語〕出世景清法日合戰「獅子に諸あるその勢、むかふ敵こそなかりけれ」

**ししう 牡丹**【句〕配合よき物の譬。梅に鶯、竹に虎などの類。〔諺語〕出世景清「松にから竹、牡丹に獅子」

**ししう 獅子の中の蟲**【句〕「獅子身中の蟲」に同じ。〔諺語〕野守鏡「獅子の中の蟲の獅子を食むに譬へき」

**ししう 獅子の頭**（ゐ）**の狛**【句〕ししがしら〔獅子頭〕に同じ。

**ししう 獅子の狛**【句〕獅子の形に類せる狛犬。出世景清「山門には獅子の狛」

**ししう 獅子の嚬眉**（ゐ）**の如**【句〕獅子に嗚のごとく乘ること。曾我物語「山「本地大聖文殊菩薩の ししの嗚御手の如意は鞭となり」

**ししう 獅子の座**【句〕しし〔獅子座〕に同じ。謠曲「石橋」「獅子の座にこそ直りけれ」

**ししう 獅子の嚬眉**（ゐ）****【句〕怒り猛る狀のおそろしき形容。〔諺語〕太平記「いよいよ獅子の嚬眉をして、降人（ゐ）に出でんと思ふ者はなかりけり」

**ししう 獅子の丸**（ゐ）****【句〕獅子〔一〕の形を圓く畫きたる模樣。平並・紺地に、色色の絲を以て、獅子の丸を縫ひたる直衣（ゐ）。

**ししう 獅子の丸の革**（ゐ）****【句〕獅子〔二〕の形を丸く染抜きて模樣としたる革。

**ししう 獅子の床**（ゐ）****【句〕〔佛〕しどき〔獅子座〕に同じ。

**ししう 獅子舞迅**【句〕『法華經の從地涌出品に「諸佛師子奮迅之力」、大般若經に「師子王自在奮迅」、大智度論に「譬如獅子奮迅大吼」とあり』猛進する勤作の譬。金毛（ゐ）の獅子。女殊菩薩これに乘るといひ、また釋迦、因位の時、この物に身を變じて、靈鷲のために、身を捨てたりと傳へらる。

**ししう 四肢・四支**【名〕兩手と兩足と、又は前肢と後肢との併稱。

**ししう 四肢の張身**（ゐ）****【句〕しそう〔手四〕に同じ。

**ししう 四至**【名〕四方のさかひ。貞觀「以四至別「爲二院」「置二田」」

**ししう 四始**【名〕『歲の始、時の始、日の始、月の始の義』ぐわんし〔元日〕の異稱。さんし、三始〕〔一〕參照。

**ししう 四詩**【名〕〔文〕❶詩經に載せたる四種の詩體。國風・大雅・小雅・頌。❷支那漢の學者なる齊人轅固生・燕人韓嬰・魯人申培・魯人毛亨の傳へたる四派の詩。即ち轅固生の傳へたる齊詩、申培の傳へたる魯詩、韓嬰の傳へたる韓詩、毛亨の傳へたる毛詩の總稱。まうし〔毛詩〕參照。

**ししう 志士**【名〕己れを犧牲にして、國家又は世道のために盡さんとする志を有する者。「けの勇士。

**ししう 死士**【名〕死を決して戰ふ士。命がけの士。

**ししう 始士**【名〕〔佛〕『始めて發心する者の意』ほさつ〔菩薩〕〔一〕に同じ。

**ししう 死屍**【名〕しかばね。かばね。死體。死骸。

死屍を鞭つ【句〕『支那において、伍子胥が、父兄の讐を復すとて、楚の莊王の屍を鞭ちし故事』❶深き怨を報ふ。❷死したる人の言行を批難す。

**ししう 刺史**【名〕❶秦漢の代、監察御史あり、三輔及び郡治を察せしが、文帝の時、御史に不法の事ありしため、丞相史を置きて州を分刺し、併はせて御史を監督し、武帝の時、初めて部刺史置かれ、詔を奉じて、十二州の州治を監察し、成帝以後、專ら刺史を以て呼ぶに至れり。刺は周禮に「司刺掌三刺」、一訊・群史、二訊・群臣、三訊・萬民」とあり、「訊（ゐ）ふ義」なり。郡に、前漢以後唐代に亙りて、州を監せし官、郡守。大守。❷こくしう〔國守〕の唐名。

**ししう 紫史**【名〕〔書〕『史記を馬史〔司馬遷の著はしたる歷史〕と稱する等に倣ひ、紫式部の著なるによりていふ』げんじものがたり〔源氏物語〕の異稱。

**ししう 紫芝**【名〕紫色の萬年茸（ゐ）。

**ししう 私資**【名〕自分の資產。私財。自資。

**ししう 師資**【名〕『師は道を傳ふる者、資は學を師に資（と）る者の義』ししい〔師弟〕に同じ。師資相承（ゐ）【句〕道を、師より弟子へ、次第に傳へふること。

へば、父はわが御なり。御貴相承のこの三衣」

**しし恋**【名】ほしいままにして、おごれること。專肆。

**ししの市**【名】市街にある店。市店。

**ししの史**【名】〔文〕『獨Historiches epik』敍事詩の一。歴史上の事實に基きて作るもの。

**ししの私積**【名】一個人の貯蓄。私人のた

**ししの詞姿**【名】〔文〕『英Figure of speech』單純に思想を表現するに止らず、その文章をして、神彩あらしむるために、思想・結構の上に施す文飾。詞品。辭藻。詞藻。詞題。

**ししの詩思**【名】しじゆう(詩情)に同じ。

**ししの詩史**【名】諸子と歴史との書籍。し(四庫)參照。

**ししの子思**【名】〔人〕支那戰國時代の學者。孔子の孫。伯魚の子。名は伋。子思はその字。曾子の門人。孟子の師。衛に事へ、のち退きて中庸を作り、年六十二にして歿す。

**ししの偲偲**【名】『論語の子路篇に「朋友切切偲偲」とあり』つとめはげむさま。勉强するさま。

**ししの施施**【副】[1]『詩經の王風丘中有麻篇に「其來施施」とあり』逸まんとして逸みがたきさま。[2]『孟子の離婁下篇に「施施從外來、驕二其妻妾」とあり』喜悅のさま。いそいそ。

**ししの孜孜**【副】つとめて倦まざるさま。いそいそ。

**ししの孳孳**【副】『前項のかげどろ。警蹕(けいひつ)の聲。[1]喧しきを制し禁むる時に發する聲。

**しし四四**【數】[1]四と四とを掛合はすること、即ち十六。[2]黄金の、曲尺一寸立方にて、重量一百六十匁なるもの。即ち純清百匁の黄金を壺夜焼きつめて純清ならしめに、四十四匁に至りしより、四十四匁の位とも、四四の位ともいへるなりと。「四四の金(きん)」

**ししじ**【名】[1]小供の陰藏。新撰狂歌「女院の御まへの廣くなることは歌月坊がしじの入るゆ名」[2]女子の陰部。(伊豆國の方言)

**ししじ**【名】『親詞のしじを見よ』草木の生繁れる處。(古語) 萬葉「二上のをのへのしじにこもりにししはほとどきすいまだ來鳴かず」

**ししじ進士**【名】しん(進士)に同じ。參語「學生(がくしやう)ども、御前四人、すさいふたり、しじふたり」

**ししじ四時**【名】[1]春夏秋冬の併稱。四季。しいじ。[2]一箇月の中の晦・朔・弦・望の併稱。さんじ(三時)に同じ。[3]一日の中の日・晝・暮・夜の併稱。さんじ(三時)に同じ。[4]一日の中の早・晨・晡時・黄昏・後夜の併稱。さんじ(三時)に同じ。[5]ろくじ(六時)參照。[6]「四時の坐禪」「四時の勤(ごん)」

**ししじ四事**【名】〔佛〕四種の供養の方法、即ち房舍・衣服・飲食・湯藥。

**ししじ師事**【名】師と崇めて仕ふること。

**ししじ子事**【名】親に對する子の如くに仕ふること。

**ししじ私事**【名】[1]自身一個又は自分の一家に關したる事柄。うちむき。(公事に對して) 盛衰記「朝家の重事をこそ、大事とは申せ、これは私事なり」[2]記紀の事がら。

**ししじ至事**【名】至極の事がら。

**ししじ指事**【名】漢字の六書(しりく)の一。一定の形なきものを、その位置又は數量に本づきて、符標にて表示するもの。例へば、「一」「二」「三」「三」「四」の古字「上」「下」「凸」「凹」の古字「上」「下」「凸」「凹」の類。

**ししじ四耳**【名】〔植〕四角の耳狀をなして果實に於けるがことし。

**ししじ**【數】[1]『名詞のしじを見よ』草木などの生繁れるさま。(古語) 萬葉「ありその上に打靡きしじに生ひたるなのりそも」[2]度數の重なるさま。(古語) 萬葉「大船にまかぢしじぬき海原を漕出て渡る月びと男」

**ししじ寺司**【名】上古、寺院の營繕を掌り衙の最初のものにて、推古天皇の三十二年始めて設置せられ、長官を法頭といひ、阿曇(あづみ)連これに任ぜられたり。

**ししじ耳尿**【名】みみくそ。みみあか。

**ししじ貳志**【名】ふたごころ。二心。

**ししじ自資**【名】自己の資本。私資。

**ししじ自恣**【名】[1]みづからの精神と肉體とを放縱にすること。(自肆) [2](佛)『梵Pavāraṇa(鉢利婆那)の譯語。恣に己が犯せる罪を舉ぐる意にて、新課に、了隨意といふも同一の意』夏安居(げあん)の終りたる時、會集の僧が、互に自己の罪過を懺悔、告白して、他の僧より調戒を受くること。また夏安居の最終の日を自恣日といふ。隨意。(小事雜記「七月十五日に自恣の僧を供養せば、解脱を得んと說きたまひし由、孟蘭盆經に見えたり」

**ししじ字子**【名】〔佛〕彌勒の弟子。(釋子に對して)

**ししじ自寺**【名】わが寺。おのが寺。(他寺に對して)

**ししじ事事**【名】この事。かの事。あらゆる事。

**ししじ事事物物**【句】『事物・事物の義』すべての事物。

**ししじ時事**【名】當時の世事。

**ししじ侍兒**【名】貴人の傍に侍りして、小用などを辨ずる小供。こまがかひ。侍童。

**ししじ時時**【名】ときどき。をりをり。

**ししじ爾時**【副】その時。

**ししじ**【數】蜂などの嗜蜜。

**ししあし**【名】しし足。だくあし(駑足)に同じ。

**ししあし**【名】(植)しゆろさう(棕櫚草)に同じ。

**ししあな**猪穴・鹿穴・獸穴【名】獸をおとしいるる穴。(古語) 太平記「シシアナ」

**ししあひ**肉合【名】[1]にくあひ(肉合)に同じ。曾我物語「鞍馬山ほう、むっちりと、抱心地よい甘さうな肉合」[2]盛りたる肉の上を研出したる高蒔繪。即ち高蒔繪と研出蒔繪とを結合したる蒔繪。蒔繪中、手數を要すること頗る多く、その製作殊に困難なり。

**ししあひぼり**肉合彫【名】うすうきぼり(薄浮彫)に同じ。

**ししあん**獅子庵【名】〔人〕かがみしか(各げんぜう)ろげん(虚元坊)を見よ。

**ししあん**獅子庵盧元【名】〔人〕ろ

**ししあらひ**鹿砦【名】しゃろ(鹿砦)の

**ししいち**肉市【名】鳥獸の肉を商ふ市。(古語)

**ししいでん**紫宸殿【名】ししんでん(紫宸殿)に同じ。

**ししうし**刺繍【名】『刺は針にて縫ふ、繡は帛に采を施すをいふ』針に絲を通じて、布帛を表と裏とより刺し、その表又は表裏兩面に、その絲にて、鈴蘭又は模樣をあらはすこと。ぬひ。縫取(ぬひとり)。

**ししうし死囚**【名】死罪に行ふべき囚徒。

**ししうし私鑄**【名】一個人のあだ。私のかたき。盛衰記「民衛の佐宜ひけるは、道武學するに、私鑄を以てし、所榮薦むるに、己が子を以てせり」

**ししうし四洲**【名】[1]四つの洲。[2]『梵Catur-dvīpa の譯語』〔佛〕須彌山(しゅみせん)の四方にある大洲、即ち南贍部洲(なんせんぶしう)・西瞿耶尼洲(さいごやにしう)・東勝身洲(とうしやうしん)・北鬱單越洲(ほくうつたんをつしう)の四大洲。舊魚(梅見記)「須彌の四州のさまざまに、北州の千年つひに朽ちぬ」

**ししうし志州**【名】〔地〕しま志摩に同じ。

**ししうし四獸**【名】[1]『宋書の符瑞志に出づ』虎・豹・熊・羆の四つの獸の總稱。[2]『小學新珠に見ゆ』朱鳥・玄武・青龍・白虎の總稱。四神。

**ししうし**【名】(鶏)あやなめ(鮎並)と云ふ。(佐渡國の方言)

**ししうし時羞**【名】その時節の食物。

**ししうし自修**【名】自ら修むること。



**ししうし・じかん自修時間**【名】自修に充つる時間。

**ししうし・しよ自修書**【名】自修に充つる書籍。ひとりまなび。獨學書。獨案内。

**ししうし・だい刺繍臺**【名】刺繍すべき切地を張るに用ふる臺。木製にて、長方形をなすを普通とす。一に、繡臺ともいふ。

**ししうし・てん仁壽殿**【名】じじゅうでん(仁壽殿)に同じ。

**ししうじゅうでん(仁壽殿)**に同じ。

**ししうと獨活**【名】(植)いぬうど(犬獨活)に同じ。

**ししうを**しし魚【名】(動)あゆめ(鮎並)に同じ。

**ししえびら**鹿簾【名】かりゆなびら(狩胡籙)に同じ。

**ししおき**肉置【名】肉附の有様。肥瘦の工合。にくづき。一代女「裸身のししおき、女は美しき肌を白地になし」

**ししかがまる**蹙る【動四自】『蹙(ちぢ)み屈(かが)まるの略』ちぢむ(蹙む)に同じ。

**ししがき**猪垣・鹿垣【名】竹木の枝にて粗く結べる垣。太平記「船組に廣垣を結ひ、要害逆木を引いて」

**ししがくれゆり**鹿隠百合【名】(植)うばゆり(姥百合)に同じ。

**ししがしら**獅子頭【名】[1]木にて、獅子の頭に擬して作りたるもの。後方に長き布を添へて、體驅に擬し、獅子舞に用ふ。日本武尊吾妻鏡(自木綿かけし唐櫃に、泰山魔軍の獅子頭、皆一樣の花笠著つれ打ちつれ荷ひつれ」[2]ししまひ(獅子舞)に同じ。增鏡「田樂・獅子頭・やぶさめなど、さまざま所にしつけたる事どもおもしろし」[3]兜の、獅噛(しがみ)を眉庇(まびさし)としたるもの。太平記「獅子頭の書に、目の下の頬當して」

**ししがしら**(動)金魚の一品種。頭上に肉の疣起を生じて、頭部に物を頂けるが如く、背鰭なく、體肥大にして圓く、尾は通常分裂して、下方に彎曲す。[2](植)水龍骨(ハカマ)科に屬する多年生の有毒草。山地に自生し、又觀賞用として、園養せらる。葉は根葉より殺左し、羽狀に細かく分裂す。

**ししがたに**鹿谷【名】〔地〕京都市上京區洛東淨土寺町と南禪寺町との間に在る町。如意ケ嶽の西麓。古は山東三井寺より續きたる城郭なりきといふ。後寛僧都が藤原成親・俊西光等を會同して、平家を誅さんと圖りし山莊のありし處。その山莊跡の地、今は談合ケ谷といふ。

**ししがたにたうなす**鹿谷南瓜【名】(植)さいかやうたうなす(西京南瓜)に同じ。

**ししかまる**蹙まる【動四他】『ちぢかまる(蹙む)の略』ちぢむ(縮む)に同じ。著聞「この時、くちなはえよりて、ししかまりたり」

**ししかむ**蹙む【動四自】『蹙(ちぢ)み屈(かが)むの略』ちぢむ(縮む)に同じ。甚「ししかみたる髮に、奏附けたる」

**ししからし**【形ク】むごし。殘酷なり。(古語)

**ししかり**獣狩【名】獣を狩取ること。

**ししがり**猪狩【名】猪を狩取ること。

**ししき**四職【名】左京職・右京職・大膳職・修理(しゅり)職の併稱。しきよく(四職)參照。

**ししき**【名】(植)ひとえ。鹿尾菜の一種。同じ。

**ししき**自識【名】(哲)じいしき(自意識)に同じ。

**ししきじ**四食【名】(佛)『毘羅三昧經に出づ』釋迦が法慧菩薩のために說きたりといふ、食事を取る四つの時。一に、且時(ごじ)即ち曉は、諸天の食事する時にて、天僧の食事する時にて、法食といひ、三に、午後は畜生の食物、四に、夜は鬼類の食時とせらるるもの。

**ししきたくぼく**四色啄木【名】鑑の縁(ふち)方の一。啄木縁の一種。紺・白・鼎黄・紫の四色を取合はせて縁したるもの。

**ししきゆう**獅子宮【名】(天)黄道の十二宮の一。獅子座。

**ししぎる**しし切る【動四他】しきりに切る。きりに切る。

**ししきん**【名】(醫)『羅Musculus extensor digiti indicis』尺骨の示指の背側筋膜にかけて、その薄き膜を以て移行する三角形の小さき筋肉。

**ししけふわう**師子頰王【名】〔人〕『梵Siṃhahanu の譯語』古の印度の王。迦毘羅(かびらえ)城主。淨飯(じやうぼん)王の父、釋迦の祖父。釋迦牟尼誕生記「民主王より八萬餘代、師子頰王の御子淨飯大王と申すなり」

**ししこく**獅子國・師子國【名】〔地〕『梵Siṃhala(僧伽羅)の譯語 Siṃha(獅子)鳥の古稱。執師子(ししこ)國。七度山となり、海となるまで、飲食(おんじき)の名を聞かず」

**ししこくこく**時時刻刻【副】『時刻・時刻の義』時を追ひて次第に。

**ししこつ**四肢骨【名】(醫)『羅Ossa extremitatum』上下兩肢の諸骨の總稱。

**ししこらかす**【動四他】病を直しそこなふ。病を療せんとして、却りて重くす。しこじらす。(古語) 源氏「ししこらかしつる時は、うたて侍るを」

**ししさ**獅子座・師子座【名】〔佛〕[1]『梵Siṃhāsana の譯語』大智度論に「是獅子・非・實師子也、佛爲入中師子、佛所坐處、或床、或地、皆名師子座、如三者國王坐處亦名師子座」とあり。釋迦如來の座席。[2]座(ざ)。[3]高僧の座席。[4]床。[5]高僧の座席。獅子の座。[6]獅子の床(ゆか)。しゃか(釋迦)・獅子の座。[7]獅子の床(ゆか)。しゃか(釋迦)・獅子宮に同じ。

**ししさき**獅先【名】鷹の嘴の一部。

**ししさん**四時散【名】古の散藥の一。和名抄「散藥四時散」

**ししさる**獅子猿【名】(動)『英Mice』鈎爪猿類の一種。長き領毛(えりげ)を有し、尾は長く、外觀獅子に似、蟲類・鳥卵・果實等を食す。南米に産す。

**ししじま**獅子島【名】〔地〕薩摩國の西北方にある島。周回八里二十町餘。出水(いづみ)郡東長島村に屬し、同郡長島の北に位す。

**ししじんきん**示指伸筋【名】(醫)『羅Musculus extensor digiti indicis』尺骨の示指の背側筋膜にかけて、その薄き膜を以て移行する三角形の小さき筋肉。

**ししじ・もの**鹿自物・獣自物【枕】『ものの

(し物)を見よ』Ⅲ鹿といふものの如くといふ意にて、鹿は膝を折りて伏すより、ひざをる(膝折る)こと(逗ふ)にかけていふ。萬葉「ししもの膝折伏せたわやめのおすひとりかけ」 同ししもものいはひをろがみ鶏なすいはひもとほり」Ⅲ鹿を捕るには、弓矢を用ふるより、ゆみや(弓矢)にかけていふ。萬葉「ししものゆみやふくみて大君のみことかしこみ」Ⅲ猪(ゐ)の水に潜(ゐ)隠るといふ意にて、みづくゝこもりにかけていふ。狩ならのはさまにししもののみづくゝこもり」

**じ-じゅう** 次侍従【名】Ⅰ正員の侍従の外に、八省その他の諸官より、四位五位の中にて、年劫ある者の選任せられ、殿上を許されて、御前に候し、雑事を辨ぜし者。Ⅱ宮内省の職員。宮中に交番宿直し、行幸の時、左右に分衛したるもの。明治三年に置かれ、翌年廃せらる。Ⅲ侍従職の定員中よりこれに補し、侍従を助くる奏任官。

**し-せいくわ** 子史精華【名】(書)清の張廷玉等、康熙帝の命を奉じて撰す。子史二部の中より、名言佳句を三十類に分ちて採録し、各條下に分註ありて、首尾を詳にせり。百六十卷。

**じ-しゃん** 慈氏尊【名】〔佛〕『じし(慈氏)を見よ』みろく(彌勒)(ヌ)の敬稱。盛衰記等巻補慶(ヂ)の慈氏尊、因縁の月滿ちなんとす」

**し-しゃんじゃ** 獅子尊者【名】〔人〕『梵Siṅha Siṅhaの譯語』古の印度の高僧。釋迦滅後の傳法第二十三祖。

**し-しゃんそん** 子子孫孫【句】『子孫子孫の義』子孫のすゑずゑ。子孫代代。

**ししだ** 猪田・獣田【名】猪・鹿などの踏荒したる田。(古語)萬葉「あらき田のししだの稲を倉につみてあなうたうたし我が懇ふらくは」

**し-しだいめいし** 指示代名詞【名】〔語〕『英Demonstrative pronoun』事物・場所・方位等を指し示すに用ふる代名詞。近稱・中稱・遠稱・不定稱の區別あり。各條を見よ。

**し-したがらし** 猪唐辛【名】〔植〕茄(ナス)科に屬する一年生の草。唐辛に類し、果實は短小にして紅色、食用に供せらる。

**ししたけ** 猪茸・茅蕈【名】〔植〕かうたけ(香茸)に同じ。

**じし-たん** 四時丹【名】はっせきたん(八石丹)に同じ。和名八石丹。一名、四時丹。

**ししちほん** 四七品【名】〔書〕『二十八品より成れるによりていふ』ほけきやう(法華經)の異稱。 謡曲「身延」「勝命妙法蓮華經一部八卷四七品」

**し-しつ** 齒質【名】〔醫〕ぞうげしつ(象牙質)に同じ。

**し-しつ** 資質【名】うまれつき。天資。天性。

**し-しつ** 紙質【名】紙の性質。紙のたち。

**し-しつ** 摯實【名】まじめ。

**し-じつ** 史實【名】歴史上の事實。

**し-じつ** 至日【名】冬至の日。

**し-じつ** 死日【名】九星にて、各人の性によりて深く禁忌すべしといふ日。木性の人は甲午の日、火性の人は丁酉の日、土性の人は己卯の日、金性の人は庚子の日、水性の人は癸卯の日を忌むといふ。

**し-じつ** 四質【名】(文)漢詩にて、律の前聯・後聯ともに、景物を寫詠したるもの。(四虚に對して)

**じ-しつ** 自失【名】我れを忘るるほどに感じ驚くこと。氣ぬけ。

**じ-じつ** 事實【名】實際の事柄。ことがら。事實が事實を語る【句】事實にまさる證據なし。(諺語)

事實は却つて小説よりも奇なり【句】『强米利加のエマアソン(R. W. Emerson)の語 Fact is often more wonderful than fiction に本づく』世の中には、往往にして、作話よりも奇妙不思議なる事件あり。(諺語)

**じ-じつ** 時日【名】Ⅰ(ジ)と一日との義』すこしの間。Ⅱ「一時(ジ)と一日との義』ときと、ひと。をり。「時日も共に虚(ム)るべからず」

**し-じつき** 方附【名】ほうよう(方附)に同じ。

**し-じつき** 猪突【名】冬季、山中に入りて、野猪を槍にて突捕ふること。

**しじつきやり** 猪突槍【名】野猪を突くに用ふる槍。

**ししとび** 鹿跳【名】〔地〕次條の略。

**ししとびたに** 鹿跳谷【名】〔地〕「兩岸迫りて、鹿も一跳に越ゆるを得との意にて名附く』近江國栗太(クリタ)郡大石村の谷。勢多川の最も狹窄せる所。左右、山峙ち、水白沫をなして流る。川幅二十八間。

**じ-しない** 四座内【名】延暦寺の七座の公人(クニン)の一。無職の衆徒、これに當る。

**じし-にわ** 自恣日【名】〔佛〕じし(自恣)Ⅱを見よ。

**じし-ぬく** 繁貫く【動四他】しげくつらぬく。しばしばつらぬく。(古語)萬葉「大船にまかぢしじぬき海原を漕出て渡る月ひと男」

**ししの-おもて** 獅子面【名】染革の一。赤・白・重などの色を用ひて、獅子の面を染め出したるもの。

**ししのくび-き** 【名】〔植〕次條に同じ。

**ししのくび-くさ** 【名】〔植〕しゆろさう(棕櫚草)に同じ。

**ししのくび-の-き** 【名】〔植〕前條に同じ。〔古語〕和名、梨蘆、夜末宇波良、一名、之之乃久比能敝反』

**ししのけ-ぐさ** 【名】〔植〕ほたるゐ(螢蘭)に同じ。

**ししの-ねば** 【名】〔植〕ひかげのかづら(石松)に同じ。

**ししの-はばき** 【名】〔植〕こばいけい(蕪藜蘆)

**ししの-ひたひ-ぐさ** 鹿額草【名】〔植〕たがらし(田芥子)に同じ。

**ししの-まる** 獅子の丸【句】しし(獅子)の條下を見よ。

**ししのみ** 獅子鼻【名】しし(獅子)の鼻。

**ししばな** 獅子鼻【名】Ⅰ低くして、小鼻のひろがりたる鼻。あまうけばな。ししっぱな。Ⅱ(建)獅子の鼻を彫刻したる木鼻(ハナ)。 同じ。

**ししはじかみ** 奏椒【名】〔植〕さんせう(山椒)に同じ。

**ししはな** 獅子鼻【名】Ⅰ低くして、小鼻のひろがりたる鼻。あまうけばな。しし-ばな。Ⅱ(建)獅子の鼻を彫刻したる木鼻(ハナ)。 同じ。

**ししはばき** 【名】〔植〕こばいけい(蕪藜蘆)に同じ。

**ししばりき** 指示馬力【名】『英Indicated horse power』馬力の一。蒸氣が汽筒内に於て出す動力の額を、指壓器に由りて測定す







るもの。實馬力。

**ししびしほ** 醢肉醬【名】肉のひしほ。今の、しほからの類。(古語) 和名、醢、之之比之保、肉醬也」

**ししびと** 宍人【名】魚肉などを料理する人。(古語)「起二以鳥獸一宍人(ジビト)者」

**ししびとべ** 宍人部【名】宍人のむれ。その長官は、宍人朝臣なり。(古語)「起二貢二狭穂子鳥別一(ヒ)宍人部一」

**し-しふ** 私集【名】一私人の詩・歌集。

**し-しふ** 詩集【名】詩を集めたる書物。

**し-じふ** 詩什【名】Ⅰ詩を十篇づつ集め編みたるもの。Ⅱ詩編。詩稿。

**し-じふ** 四十【數】Ⅰ十の四倍。よそぢ。Ⅱ四十歳。

四十・五十にして聞ゆるなきは畏るるに足らず【句】『論語の子罕編に「子曰、後生可畏、焉知二衆者不一如今也、四十・五十而無聞焉、斯亦不足畏也已」とあるに本づく』身を立て、道を行ふ時期なる四五十歳の頃に至りても、全即分望の實なき者は庸人にして、たとひ悔改むとも、年すでに過ぎ、氣力すでに衰へて、爲すある能はざるが故に、畏るるに足らず。(諺語)

四十にして、心を動さず【句】『孟子の公孫丑上篇に「孟子曰、否我四十不動心」とあり』道を知ること明かなるが故に、四十歳よりして、心を動すことなし。(諺語)

四十にして惑はず【句】『論語の爲政篇に「吾十有五而志乎学、三十而立、四十而不惑」とあり』年四十に至りて、事理を體認し得たるにより、疑惑を起さず。(諺語)

**じ-しふ** 時習【名】『論語の學而篇に「學而時習之、不亦説乎」とあるに本づく』時時復習すること。

**しじふいちぢ** 四十一地【名】〔佛〕菩薩が佛果に達するまでの十住・十行・十回向・十地及び等覺の四十一の階段。四十一位。

四十一地の瓔珞(ヤウラク)【句】〔佛〕四十一地の修行の功德によりて、佛果を莊嚴するもの。平家「八萬四千の相好は、秋の月早く四重の雲に隠れ、四十一地の瓔珞は、夜の星空しう十惡の風に漂ひ」

**しじふいちね** 四十一位【名】〔佛〕前條に同じ。

**じじふうて** 四十腕【名】人四十歳頃に至りて、折折腕に疼痛を感ずること。

**し-しふえ** 鹿笛【名】しかぶえ(鹿笛)に同じ。

**じじふ-から** 四十雀・荘雀【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。雀ほどの大いさにて、頭上と喉とは黒く、頬白く、背上、肩の邊は黄綠なれども、後方に至るに從ひて、灰蒼色となる。腹は白くして、中央に黒條通じ、尾羽は黒くして、多少灰蒼色を帶び、翼羽も黒けれど、一條の白色帶これを横斷し、なほ白色乃至灰青色の條邊を有す。我が國到る處に見らる。春季樹木の空洞に巣を作り、秋より冬にかけて、群をなす。禁止鳥の一。しじふからめ。

(しじふから)

**じじふから-がん** 四十雀雁【名】〔動〕游禽類に屬する鳥。黑雁(ヒシクヒ)よりやや大きく、カムチャツカ地方に産し、我が國にも渡來す。全身黑くして、頬のみ白く、腹部は灰色を呈す。

**じじふから-め** 四十雀【名】〔動〕じじふから(四十雀)に同じ。夫木「朝まだきしじふからめぞたたくなる冬どもりせる蟲のすみかを」

**ししふき-さう** ししふき草【名】〔植〕べんけいさう(辨慶草)に同じ。

**じじふく-ぢゆう** 四十九重【名】四十九層。また、四十九重の摩尼殿の略。

**じじふく-にち** 四十九日【名】〔佛〕Ⅰ中陰の間の日數。Ⅱ人の死後四十九日目に當る日。御ち中陰の滿ずる日。中陰の四十九日間における七度の生死を經て、各果報を感じ、三界・六道に生ずる日なりとて、この日、珠に佛を請じ、佛事を修す。なななぬか。しちしちにち。平氏「かの人の四十九日、忍びて、比叡の法華堂にて事そがずさうぞくより始めて」

四十九日の忌(ミ)【句】〔佛〕中陰の四十九日の間、精進・潔齋して、不淨を忌むこと。 謡曲四十九日の忌だがへんとて、ありしありきの所にわたりたるに」

**じじふくねん-の-ひ** 四十九年の非【句】(非)の條下を見よ。

**じじふくらがり** 四十闇【名】人、四十歳比に達すれば、視力の衰ふること。

**じじふ-くわん** 時習館【名】Ⅰ舊熊本城内二の丸に在りし舊藩本藩の學校。寶暦五年藩主細川重賢開校す。Ⅱ宮際國西芙末郡笠間町字大和田に在りし舊笠間藩の學校。文化中、藩主牧野貞喜創立す。明治に及んで、學制を更改し、小學とす。Ⅲ加賀國大聖寺町字八間道に在りし、舊大聖寺藩の學校。安政中、藩主前田利義創立し、明治に及ぶ。Ⅳ三河國豐橋市八町に在りし舊豐橋藩の學校。寶暦中、藩主松平信復創立し、明治に至りて廃す。Ⅴ下野國那須郡太田原町にありし舊太田原藩の學校。嘉永中、藩主太田原廣清創始し、明治に及んで廃す。

**じじふく-ねん** 四十九院【名】Ⅰ〔佛〕(彌勒上生經に見ゆ』欲界の第四天なる兜率天の内院にある四十九の宮殿。もと、「四十九重の摩尼殿(ハ)」の說に見えたる堅の層數を、後世樹に排列して、各僧の寺院と見做すに至れるものといふ。太平記「かの谷堂(ダウ)と申すは、…奇樹・怪石の池上には、都率の内院を移して、四十九院の樓閣を並ぶ。Ⅱ〔佛〕平安朝以後、一の寺院の境内に、四十九の堂宇を設けたるもの。Ⅲ〔佛〕足利時代以後、墳墓の前面に六基、右に各十四基、後面に十五基、都合四十九基の塔婆を建てたるもの。

**じじふさん-けん** 四十三縣【名】〔地〕我が國の縣數、即ち神奈川・兵庫・長崎・新潟・島根・岡山・奈良・山形・秋田・福井・石川・富山・鳥取・鳥根・岡山・廣島・山口・和歌山・徳島・香川・愛媛・高知・福岡・大分・佐賀・熊本・宮崎・鹿兒島・沖縄各縣の總稱。

**じじふし-さう** 四十齒相【名】〔佛〕三十二相の一。四十齒を具ふるもの。

**じじふしちし** 四十七士【名】〔人〕あかほぎし(赤穂義士)を見よ。

**じじふしちやうだて** 四十一四挺立【名】闘船(ナキ)の一。槍の數四十四挺を用ふるもの。

**じじふ-しまだ** 四十島田【名】女の、四十歳頃になりても、なほ色めきたる心ありて、島田髷に結べること。じじふりもて(四)【句】を見よ。

**じ-じふし-もんめ** 四十四匁【數】じし(四四)【名】〔佛〕『法華經の序品に見ゆ』令利弗(ハツシヤリ)の請に對して、釋迦が容易に法華經を說くことを肯ぜずして言ひし語。「止みなん、止みなん、說くべからず」といふ意。但し、三たび請ふに及びて、つひにこれを說かれたりと傳ふ。 徒然「かかればこそ佛も止止不須說とのたまひけれ」

**ししふせぎ** 鹿防【名】猪・鹿など、獣類の田圃を荒すを防ぐこと、又そのための設備。

**じじふ-ぢつ** 事事物物【句】じじ(事事)の條下を見よ。

**じじふにしやう-ぎやう** 四十二章經【名】〔書〕支那、後漢の明帝の永平十二年に、中印度の骨邏迦葉摩騰(ハ)・竺法蘭の二人、勅を奉じて譯せし經典。大・小乘の諸經の要文四十二章を抜きて編纂せしもの。一卷。梵本渋譯の最初の書。 長明『無百人一首』「天に向つて唾すと四十二章經には說かれたり」

**じじふにちやう-だて** 四十二挺立【名】闘船(ナキ)の一。槍の數四十二挺を用ふるもの。

**じじふ-はち** 四十八【數】Ⅰじふはち(四十八)を見よ。 一代男「その身一生のうちの八手(ハテ)を語らせ聞くに、…總じて、ふやうのくち事ふれてこれ四十八ありけり」Ⅱ(數)阿彌陀佛の誓願の數。じふはちぐわん(四十八願)参照。 太平記「多くとも四十八にはよも過ぎじ阿彌陀が誓願にな

もすかがり火」

**しじふはちぐわん** 四十八願【名】〔佛〕『大無量壽經に見ゆ』阿彌陀佛の未だ法藏比丘と稱せし因位の昔、一切衆生を救はんがために、世自在王佛の前に在りて、五劫の間思惟して立てたりといふ四十八の誓願。その中の至心信樂(シヒシン)願は第十八位にあるを以て、十八願ともいひ、淨土門の基礎とし、他の四十七願はこれに附隨せる枝葉的誓願に過ぎずとなす。弘誓(グセイ)。六八弘誓。選擇本願(センチヤクホングワン)。五劫(ゴカフ)思惟(シイ)の本願。至心信樂(シヒシン)参照。

**しじふはちぐわんしやうごん** 四十八願莊嚴【名】〔佛〕法藏比丘の四十八願に由りて成就したる西方極樂の莊嚴。著土(ヂヤクド)中土(ヂユウド)等四十八願の地なり」

**しじふはちぐわんじよ** 四十八願所【名】阿彌陀佛の四十八願に因めるその鑒像を安置せる四十八箇の寺院。信徒はこれを巡拜すること、觀音の三十三箇所、弘法の四十八箇所に異ならず。

**しじふはちまいみだーのちかひ** 四十八枚彌陀の誓【名】〔佛〕みだ(彌陀)の條下を見よ。

**しじふはっくせ** 四十八癖【名】〔書〕種種の人の奇癖を描き出したる戲著。四卷。

**しじふはっくせ** 四十八癖【名】「無くて七癖、有って四十八癖」を見よ。

**しじふはったか** 四十八鷹【名】■鷹の類の、鷲・熊鷲・隼(ハヤブサ)等四十八ありといふ概數。■諸役人の打揃ひてあること。

**しじふはったき** 四十八瀧【名】〔地〕■大阪市北區後國上益城(ケウ)郡東部なる矢部(ヤ)と稱する地方の、瀑布群だ多きことの俗稱。■

**しじふはったな** 四十八棚【名】床脇(トコワキ)の襖の違棚袋戸棚・地袋(ヂブクロ)の三種を種種に配合して生ずる、四十八の式樣。また五十二棚などとも稱す。

**しじふはっちやうだて** 四十八挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數四十八挺を用ふるもの。

**しじふはって** 四十八手【名】■相撲(スマフ)の手を四十八に分ちたるもの。反(ウ)捻(ヒネリ)・投(ナゲ)・掛(カ)の四手に、各十二づつの變化あるを總稱せるもの。■種種なる手段。かけひき。

四十八手の裏表(ウラオモテ)【句】■四十八手の各表と裏との變化。■種種なるかけひき。諸種の變化ある手段。

**しじふはっふりそで** 四十振袖【名】四十歳になりて、振袖の著作(クワサク)をなすこと。しじふまた(四十島田)参照。日本武尊吾妻鑑、四十振袖・投島田、男えらみに年たけて」

**しじふんじん** 獅子奮進【句】しし(獅子)の條下を見よ。

**しじふろくちやうだて** 四十六挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數四十六挺を用ふるもの。「たる男子。

**しじふをとこ** 四十男【名】四十歳を超えた男子。

四十男ざ七下(ナナサガリ)の雨【句】四十歳以上の男の、女色に耽ると、七つさがり即ち午後二時すぎに降出したる雨とは、共に止まぬものなり。〔諺語〕

**ししーへ**【名】『ししは肉の義なるん』はだへ(肌)に同じ。〔古語〕　名義抄、肌、シシ(ハダ)

**ししーはさつ** 薩氏菩薩【名】〔佛〕みろくぼさつ(彌勒菩薩)に同じ。

**ししーはね** 肉骨・宍骨・骸【名】曝(さ)れたる骨。露骨。〔古語〕

**ししま** 無言【名】『ししまふと同義か』口をつぐみて、ものいはぬこと。〔古語〕　源氏「いくたびか君がしじまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに」

しじまの鐘【句】人を制して靜かならしむる相圖の鐘。〔古語〕　太草子、踊のおんど、しじまのかね」

**ししーまうし**【名】人を呼びかくる言。　狂言(宗教)「いやなうなう、しし申し」

**ししーまひ** 獅子舞【名】■獅子頭を被りて行ふ舞。もと舞樂より出でしものなるべしといふ。後世、太神樂などに行ひて、惡魔を祓ふと稱す。ししーかぐらじし。

**ししーまふ** 獅子舞德太男【名】人名辭書圖彙、獅子舞、惡魔を拂ふといふなり。出所たしかならず」■能(ノウ)にて、獅子の舞狂ふさまに擬したるもの。「石橋(シヤケウ)」、望月(モチヅキ)」等の曲にあり。

**しじまひ・むし** しじまひ蝨【名】〔動〕むし(地蟲)に同じ。

**しじまふ**【動四自】遁もんをえず、退きもえず。さまよふ。たちもとほる。〔古記〕　紀「樓遲不知其所、殺沛(ヘシトマヒタツフフ)」　記「かれはひしじまひて、庭中にひざまづきをる時に」

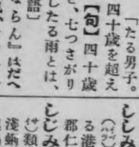
**ししーまめ**【名】〔植〕へくさかづら(屁糞蔓)に同じ。　字彙、蔓、シシマメ、ヘクソカヅラ」

**ししーまる** 獅子丸【名】琵琶の名器の一。

**ししまる** 蹙る【動四自】ちぢむ(縮む)に同じ。〔古語〕　字彙、蹙、志自萬留」

**ししみ** 鹿兒【名】〔地〕對馬國の西岸、鰐原(ワニハラ)を去ること七里餘、伊奈浦の一部にある港。朝鮮との貿易港にして、上縣(カミアガタ)郡仁田(ニタ)村に屬す。

**ししみ** 蜆【名】〔動〕辨鰧(ベンケイ)類に屬する軟體動物。形、淺蛤(ハマグリ)に類して、外面は黑褐色、內面は紫色、淡水に產し、夏秋の交產卵す。食ふべし。しじみかひ。




蜆に上下(カミシモ)【句】小さき男の衣袋を著けたる見にくき狀の形容。〔諺語〕

**しじみ**【名】〔動〕しじみてふ(小灰蝶)に同じ。

**しじみーうり** 蜆賣【名】蜆を荷ひて賣歩く者。

**しじみーかき** 蜆掻【名】蜆を掻集めて捕ふる漁具。

**しじみがは** 蜆川【名】〔地〕■大阪市北區なる曾根崎新地の南に沿ひて東流し、末は淺川に注ぎし小川。明治三十六七年頃の火災の後、埋められたり。　天の數島、これかや、愈の大海を、かへもほされぬ蜆川」■『蜆川その北を流るればいふ』そねざきしんち(曾根崎新地)の俗稱。　曾根崎心中「蜆川の天滿(テン)屋の初(ハツ)めとやちと腐りあひ」

**しじみがひ** 蜆【名】〔動〕■しじみ(蜆)に同じ。

**しじみばな** 蜆花【名】とじのさくら(小米櫻)に同じ。

**しじみーふね** 蜆船【名】蜆を捕ふる船。

**しじむ** 縮む【動四自】ちぢむ(縮む)に同じ。

**しじむ** 縮む【動四・二他】ちぢむ(縮む)に同じ。〔古語〕　源氏「その御勢をも、ひきしじめたまひてこそは」

**しじむし** しじ蟲【名】〔動〕夏秋の間に生じ、形きりぎりすに似て青く、羽鬚あり。夜、しいしいと鳴く蟲なりといふ。〔古語〕　榮華物語、しし蟲はここにはな鳴きそ、ししらはばかししししじが月にゆきて鳴きまれ」

**しじーむし** しじ蟲【名】〔動〕かなへび(金蛇)に同じ。

**しじーむら** 肉團・肉叢・臠【名】截りたる肉塊。字道、そのししむらを食ひなどするものは」

**ししーむぐわんおん** 師子無畏觀音【名】〔佛〕『音の字、觀の韻に引かれてノンと發音す。摩訶止觀に、寄生道の三障を破する能化(ノウ)者として呼べるもの』ばさうくわんおん(馬頭觀音)に同じ。

**ししーむ** 始審【名】〔法〕訴訟の最初の裁判。現行法にては、これを取扱ふものは、普通地方裁判所と區裁判所となれども、皇族に對する民事訴訟のみ、東京控訴院にて取扱ひ、大審院の特別權限に屬する刑事訴訟、即ち天皇以下諸皇族に危害を加へ、又は加へんとしたる者、朝憲紊亂の罪を犯したる者、又その豫備行爲ありし者、及び禁錮以上の刑に處すべき罪にして、皇族の犯したる者に對する訴訟のみ、大審院のみその始審の裁判權を有す。一審。初審。

**ししーむ** 四箴【名】『論語の顏淵篇に本づく』視・聽・言・動に關する四つの戒、即ち非禮視るなかれ、非禮聽くなかれ、非禮言ふなかれ、非禮動くなかれといふこと。

**ししーむ** 指針【名】■磁石盤の針。■嚮導案內となるべき物事。方針。

**ししーむ** 使臣【名】君主又は國家の命を承けて、外國に使する者、即ち大使・公使などの類。

**ししーむ** 史臣【名】しくわん(史官)に同じ。

**ししーむ** 私信【名】私用を報ずる通信。

**ししーむ** 私親【名】■自分の親族。■親しき私交。個人として親しき間柄。

**ししーむ** 私心【名】■自己の考。私意。■私欲を逞けんとする心。(公心に對して)

**ししーむ** 至心【名】〔佛〕三心の一。至誠・眞實なる心。至誠心(シヒジヤウ)。　盛衰記、南無懺悔、至心懺悔・六根罪障と

至心信樂(シヒジン)【句】〔佛〕眞實心を以て佛の誓願を信じて、疑慮なきこと。しじふはちぐわん(四十八願)参照。

**ししーむ** 至神【名】其だ神靈たること。

**ししーむ** 至親【名】■至って親しきこと。■至って血統の近きこと。

**ししーむ** 至信【名】至って誠實なること。

太平記、道を三軍の陣に開かしめたまへと、「と。

至信に祈念し」

**ししーむ** 仕進【名】官に仕へて立身すること。

**ししーむ** 詩讖【名】作りし詩が、たまたま後日の所爲の前表となること。

**ししーむ** 紫宸【名】■紫は紫微星、宸は帝王の居處の義』天子の御殿。皇居。禁中。紫宸殿。　太平記、紫宸・北極の高きに坐して」

**ししーむ** 司辰【名】ろうこくはかせ(漏刻博士)の唐名。

**ししーむ** 四神【名】■四柱の神。■『青・白・朱・玄(黑)は四方の色なること。じし支五色(ニ)を見よ』四方の神、即ち東は青龍、西は白虎、南は朱雀、又は朱鳥、北は玄武。各條を見よ。四獸。■支那にて、四季を神配したるもの、即ち春は句芒(ハウバウ)、夏は祝融、秋は蓐收、冬は玄冥。

四神の族【句】しじんぞく(四神族)に同じ。

**ししーむ** 四神相應【句】地相の、四神(ニ)に相應すること。正面なる南に汗地あるは朱雀、左方なる東に流あるは青龍、右方なる西に大道あるは白虎、後方なる北方に丘陵あるは玄武にして、官位・福祿・無病・長壽を併せ得る最も貴き地相なりといふ。我が國の平安京は、この地相を有するものとせり。四地相應。　平家、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、四神相應の地なり」

**ししーむ** 至仁【名】至って仁慈なること。この上なきいつくしみ。

**ししーむ** 至人【名】道德の至極せる人。

**ししーむ** 詩人【名】詩を作る人。詩に巧なる人。詩客。

**ししーむ** 資人【名】大寶令の制にて、朝廷より位官ある人に賜ひて、雜用に供せしめし者。舍人(トネリ)の類。位分資人・職分(シキブン)資人の別あり。さむらひ。つかひと。

**ししーむ** 士人【名】さむらひ。をとこ。

**ししーむ** 使人【名】君命を奉じて、四方に使する者。つかひ。

**ししーむ** 私人【名】國家又は社會に對して、「一個人の稱。

**ししーむ** 市人【名】■市街に住む人。■商業を營む商人。あきうど。

**ししーむ** 矢人【名】矢を作る職人。

**ししーむ** 梓人【名】大工の棟梁。

**ししーむ** 矢刃【名】■矢と刃と。■ぶき(武器)に同じ。

**ししーむ** 慈仁【名】じんし(慈)に同じ。

**ししーむ** 齒脣音・齒脣音【名】〔語〕英語Labiodental呼氣の上齒と下脣との間の僅少の空隙より軋み出づるによりて發する摩音。例へば、英語のf・vの類。しんおん(脣音)参照。

**ししーむ** 四神族【名】仗旗の中、青龍・朱雀・白虎・玄武の四神をあらはしたる四本の旗。四神の旗。しじんけん。

**ししーむぎ** 時辰儀【名】■さけいき(時計)に同じ。■ろうのめさるに同じ。

**ししーむきくわん** 私人機關【名】〔法〕一個人又は私法人が、その事務を行ふために設くる機關。例へば理事・監事・使用人の類。

**ししーむぎーけいとはふ** 時辰儀經度法【名】クロノメエトルにて、經度を測定する法。

**ししーむぎよくせつ** 詩人玉屑【名】〔書〕五十六門を立て、諸家の詩話を選集せるもの。二十卷。宋の魏慶之の撰。

**ししーむくわいぎ** 使臣會議【名】一國に駐在する各國の大使・公使の、その駐在國に關係せる外交問題につきて行ふ會議。

**ししーむけい** 視神經【名】〔醫〕『羅Nervus opticus』腦神經の十二對より成れる中の第二對、即ち眼球の網膜に分布せるもの。大腦の視神經交叉部より起り、眼窩に出て、白膜及び脈絡膜を穿ちて網膜に達し、視覺を掌る。

**ししーむけいさい** 私人經濟【名】〔經〕一私人經濟。

**ししーむけいさつ** 私人警察【名】〔法〕しあんけいさつ(私安警察)に同じ。

**ししーむけいーしやう** 視神經床【名】〔醫〕『羅Thalamus opticus』四疊體の上方にあり、ほぼ卵形をなせる隆起。上面は側腦室の下底、中央部は第三腦室の上壁、內面は第三腦貧の側壁をなす。

**ししーむけうにんしん** 自信・敎人信【句】ししーむ(自信)の條下を見よ。

**ししーむけん** 使臣權【名】外交官がその駐在國及び第三國に對して有する特權。不可侵權と無責任權・治外法權・これなり。

**ししーむ-けん** 四神劒【名】■棹の頭に劒を附したるよりいふ』ししんぞく(四神族)に同じ。

**ししーむ-さいばんしよ** 始審裁判所【名】明





治。

**ししーむ** 指神【名】火修を見よ。

**ししーむ** 指示の方(カタ)【句】九星にて、逆葬・鬪爭等に忌むといふ方角。子の日は辰の方、丑の日は酉の方、寅の日は亥の方、卯の日は未の方、辰の日は丑の方、巳の日は戌の方、午の日は丑の方、未の日は子の方、申の日は卯の方、酉の日は午の方、戌の日は寅の方、亥の日は巳の方なりといふ。

**しじん** 紫參【名】〔植〕はるさめの食(紫參)に同じ。

**ししーむ** 自身【名】わが身。おのれの身。自己。

自身自佛【句】〔佛〕「即身成佛(ソクシンジヤウブツ)」に同じ。　飯尚、鈍下劣「自身自佛はさていかに」

**ししーむ** 自信　自信・敎人信(シンケウジン)【句】〔佛〕『敎人信は、人をして信ぜしむと調ず』「自覺覺他」に同じ。

**ししーむ** 自新【名】自ら過を悔改むること。

**ししーむ** 貳臣【名】貳心を抱く臣。叛臣。

**ししーむ** 貳心・二心【名】ふたごころ。にしん。

**ししーむ** 慈心【名】なさけぶかき心。慈悲の心。

**ししーむ** 慈親【名】いつくしみの深き親。

**ししーむ** 磁針【名】〔理〕ししやくしん(磁石針)に同じ。

**ししーむ** 時新【名】果物・野菜などの初物(ハツモノ)。

**ししーむ** 時辰【名】とき。時刻。

**ししーむ** 侍臣【名】君の側に仕ふる臣。おそば。

**ししーむ** 侍人【名】近侍の人。おそばづき。

**ししーむ** 時人【名】その時代の人。

**ししーむ** 寺人【名】■『周禮の天官篇に「寺人掌王之內人」となりて、註に「寺之言侍也」とあり』支那にて、上古近侍の臣。■くわんぐわん(官官)に同じ。

**ししーむ** 自刃【名】自ら刃を以て死すること。

**ししーむ** 自盡【名】じさつ(自殺)に同じ。

**ししーむ** 慈仁【名】じんし(仁慈)に同じ。

**ししーむ-おん** 齒脣音【名】〔語〕「英語の上齒と下脣との間の僅少の空隙より軋み出づるによりて發する摩音。例へば、英語のf・vの類。しんおん(脣音)参照。

**ししーむき** 四神族【名】仗旗の中、青龍・朱雀・白虎・玄武の四神をあらはしたる四本の旗。四神の旗。しじんけん。

**ししーむぎ** 時辰儀【名】■さけいき(時計)に同じ。■ろうのめさるに同じ。

**ししーむきくわん** 私人機關【名】〔法〕一個人又は私法人が、その事務を行ふために設くる機關。例へば理事・監事・使用人の類。

**ししーむぎーけいとはふ** 時辰儀經度法【名】クロノメエトルにて、經度を測定する法。

**ししーむぎよくせつ** 詩人玉屑【名】〔書〕五十六門を立て、諸家の詩話を選集せるもの。二十卷。宋の魏慶之の撰。

**ししーむくわいぎ** 使臣會議【名】一國に駐在する各國の大使・公使の、その駐在國に關係せる外交問題につきて行ふ會議。

**ししーむけい** 視神經【名】〔醫〕『羅Nervus opticus』腦神經の十二對より成れる中の第二對、即ち眼球の網膜に分布せるもの。大腦の視神經交叉部より起り、眼窩に出て、白膜及び脈絡膜を穿ちて網膜に達し、視覺を掌る。

**ししーむけいさい** 私人經濟【名】〔經〕一私人經濟。

**ししーむけいさつ** 私人警察【名】〔法〕しあんけいさつ(私安警察)に同じ。

**ししーむけいーしやう** 視神經床【名】〔醫〕『羅Thalamus opticus』四疊體の上方にあり、ほぼ卵形をなせる隆起。上面は側腦室の下底、中央部は第三腦室の上壁、內面は第三腦貧の側壁をなす。

**ししーむけうにんしん** 自信・敎人信【句】ししーむ(自信)の條下を見よ。

**ししーむけん** 使臣權【名】外交官がその駐在國及び第三國に對して有する特權。不可侵權と無責任權・治外法權・これなり。

**ししーむ-けん** 四神劒【名】■棹の頭に劒を附したるよりいふ』ししんぞく(四神族)に同じ。

**ししーむ-さいばんしよ** 始審裁判所【名】明

治二十三年十一月以前の第一審裁判所の稱。現今の地方裁判所に當る。

**しじん-さうおう** 四神相應【句】しじん(四神)の條下を見よ。

**じしん-じぶつ** 自信自佛【句】じしん(自身)の條下を見よ。

**じしんじん** 至信心【名】至極の信心。

**じしん-しんげう** 至心信樂【句】しじん(至心)の條下を見よ。

**ししん-せい** 始新世【名】(地) ししんだい(始新代)に同じ。

**ししん-そう** 始新層【名】(地)『英 Eocene series』始新代の地層。始新統。

**ししん-だい** 始新代【名】(地)『英 Eocene period』地質時代中、近生代の第三紀に屬し、その最底部地層の生じたる時代。始新世。

**しじん-たん** 四神丹【名】古の丹藥の一。和名四神丹、一名重巒丹。

**ししん-でん** 紫宸殿【名】『しでん(紫宸)』を見よ。【圖】支那にて、唐代より起り、後周及び宋の世にも、その名を襲用せし禁中の殿舍。【圖】京都舊內裏の正殿。仁壽殿の南方にありて、南面し、もと朝賀、公事等を行はるる所なりしが、後世、大極殿の類廢後は、即位等の大儀をも行はれたり。正面階下の左右に、左近の櫻、右近の橘あり。儀式は前庭にて行はれたり。叡慮の火災に遭ひ、御造營毎に規模も漸次縮少せしが、安貞元年以後、つひに廢し、德川時代に至り、天明の災上殿と共に造營し奉り、現存せるは安政二年の造營に係る。ししいでん。南殿。前殿。正殿。南大殿。

(紫宸殿)

**ししん-こう** 始新統【名】(地) しこんそう(始新層)に同じ。

**じしん-とり** 自身捕【名】自身番の捕へし罪人。《德川時代の語》

**じしん-ばん** 自身番【名】德川時代に、市中警戒のために、市中各所の四辻に設けし番所。町內の家主、各番組を定め、交番して、ここに詰めたり。**ばんたらう**(番太郎)參照。「一代男」「用心時の自身番にも、人だのみするこそあれ」

**じしんばん-おやかた** 自身番親方【名】次條に同じ。

**じしんばん-かきやく** 自身番書役【名】江戸時代に、自身番に詰めたる書役。「の詰所。

**じしんばん-や** 自身番屋【名】自身番の者

**じしん-りよく** 自信力【名】自己を信ずる意志の力。

**し-しんわうけ** 四親王家【名】伏見宮有栖川宮・桂宮・閑院宮の四家の併稱。伏見宮有栖川・桂の三家の嫡流は、特別の宣下を經ずして、代代親王たること、德川時代以前より の制なりしが、新井白石の議に基づき閑院宮も、世襲親王家の列に加はるに及び、この稱あるに至れり。後、桂宮家は斷絕し、他の三家の世襲親王の制も、明治に至りて廢せられたり。

**じじん-あんるゐ** 似人類【名】(動) るゐ(類人猿)に同じ。

**ししめ** 雀【名】(動) すめ(雀)の轉訛。《古語》「散木奇歌集」「昌生(かうせう)に乘はむ しじめしじめきてかしましきまで世をぞ恨むる」

**ししめ-めかす** 【動四他】しじめくやうにす。《古語》「見叡尉」「腹を立てはやしじめかしからかひて」

**ししめ-がひ** 蜆貝【名】(動) しじがひ(蜆)の轉訛。

**しじめ-めく** 【動四自】やかましくさへづる。ささめく。《古語》「散木奇歌集」「昌生(かうせう)に乘はむ しじめしじめきてかしましきまで世をぞうらむる」

**しじめ-っ-かひ** 蜆貝【名】(動) しじがひ(蜆貝)の轉訛。

**しじめ-ばな** 蜆花【名】(植) ごとみばな(蜆花)の轉訛。

**ししも** 獅子門【名】(文)『派祖渡邊支考の號を獅子門と稱せしに本づく』支考の風を學ぶ俳諧者流。獅子門統。「同じ。

**ししもん-とう** 獅子門統【名】(文) 前條に

**ししや** 獵矢・鹿矢【名】狩獵に用ふる矢。

**ししや** 鹿矢の征矢【句】征矢の雄(やつ)を野矢(のや)に用ひたるもの。

**ししや** 使者【名】使すること、又その人。つかひ。《伊勢古語・淡路》「使者・奏者ともに飛びこむ蛙かな」

**ししや** 支社【名】【圖】ししゃ(分社)に同じ。

**ししや** 詩社【名】詩人の組織したる團體。「吟社。

**ししや** 侈奢【名】ししゃ(奢侈)に同じ。

**ししや** 死者【名】死にたる人。

**ししや** 仕者【名】仕ふる者。使役せらるる者。《盛衰記》「これ淸水寺の夢想の驗なり。鼠は大黑大神の仕者なり」

**ししや** 幅車【名】『左傳』に「施舍不ししゃ(幅重車)に同じ。

**ししや** 施舍【名】『左傳』に「施舍不ししゃ 倦」とあり。舍も施す義。「苦く思德を施すこと。

**ししや** 紫紗【名】紫色の紗。《謠曲・懷中に嗜みし紫紗の冠》「海紫の色を呈する故にいふ」

**ししや** 紫鬼【名】(植)『紫香に同じ。

**ししや** 貳車【名】ふくしゃ(副車)に同じ。

**ししや** 輜車・輜車【名】『漢書王莽傳』に「此似二輜車一非一倦物一也」とあり。

**ししや** 車【名】(植)『櫻』に偏はる。

**ししや** 事障【名】(佛) にしやう(二障)を

**ししや** 次將【名】【圖】大將の次に立つ者。御宇の一時の改稱。

**ししや** 次生【名】(佛) 次の生(しやう)。生れかはること。わうじやう(往生)[]參照。

**じしや** 時尚【名】その時代の人の一般に好みしこと。

**じしや** 自淨【名】(佛) 三自の一。禪を修すること。「自調・自淨・自度」參照。

**じしや** 辭退【名】辭退して、他人に讓ること。辭宜。

**じしやう**事情【名】事のわけ。事の心。

**しじやう-きん** 絲狀菌【名】(植)『獨 Schimmelpilze』黴菌の一。食物その他の有機物に附著し、分岐ある長菌絲と高く直立せる果梗とより成り、白・灰黃・綠等の毛樣・纖維樣の膜を形成す。白癬(はくせん)・黴風(かびかぜ)等の原因となる病原性のものもあれど、多くは非病原性にして、麴ヂヤスタアゼ等を發生せしむるものの如き、その一なり。

**じじやう-きん** 耳上筋【名】(醫)『羅 Musculus auricularis superior』耳翼の後部にある筋。頭蓋の朝狀鰓膜の側部より起りて、耳軟骨の前上部に終り、軟骨を上方に牽く作用あり。





**じじやう** 辭謝【名】辭退。謝絕。

**じじや** 侍者【名】【圖】貴人の傍に控へ居る者。おつき。【圖】(佛) 長老の左右にありて、その給仕に任ずる者。禪宗にては、燒香侍者・書狀侍者・請客侍者・湯藥・衣鉢侍者の五種に分ち、これを五侍者といふ。侍者御中【句】『僧徒に送る書狀に、その侍者を經る意より起る。』書狀の宛名の脇附に書く語。

**じ-じや** 寺社【名】てらと、やしろと。神社・佛閣。社寺。

**じ-しやう** 詞章【名】詩歌又は文章。

**じ-しやう** 志尙【名】『尙はこひねがふ意』こころざし。志尚。

**じ-しやう** 師匠【名】『匠は技術を業とな す者の義』【圖】學術・技藝などを敎ふる人。先生。【圖】遊藝を敎ふる人。

**じ-しやう** 梓匠【名】梓人と匠人と。

**じ-しやう** 支障【名】さしつかへ。さしさはり。故障。障礙。

**じ-しやう** 四障【名】(佛)【圖】正道を修する四つの障害。即ち惡障とて、物に迷ふ障と、業(ごう)障とて、諸の業法を勤行すること能はざる障と、報障とて、地獄・餓鬼・畜生の三惡道の報を感ずる障と、諸の邪見を起す障との併稱。【圖】四種の生死(しやう)に同じ。

**じ-しやう** 四象【名】【圖】四つの物象。【圖】日・月・星・辰の併稱。【圖】易の繫辭上傳に「易有一太極一、是生二兩儀一、兩儀生二四象一、四象生八卦一」とあるに本づく。少陽(陽中の陰即ち春)・大陽(陽中の陽即ち夏)・少陰(陰中の陽即ち秋)・大陰(陰中の陰即ち冬)の併稱。

**じ-しやう** 四象【句】地中に存せる四つの物象、即ち水・火・土・石。

**じ-しやう** 四聖【名】(佛)【圖】十界の中、佛菩薩・緣覺・聲聞(しやう)の併稱。(六凡に對して)【圖】阿彌陀佛・觀世音菩薩・大勢至菩薩・大海衆菩薩の併稱。大海衆菩薩とは、西方淨土の諸菩薩をいふ。《禪宗の語》【圖】(八)東大寺における本願の聖武天皇、開基の良辯、鑑眞の行基、尊師の菩提僊那の四人。





**しせい** (四聖)參照。

**什門**(ぢもん)の四聖【句】鳩摩羅什(くまらじう)の弟子なる道生・僧肇・道融・僧叡の四人の併稱。

**じ-しやう** 四姓【名】古代の印度における社會上の四種の階級。即ち婆羅門(ばらもん)・刹帝利(せつていり)・吠舍(ばいしや)・首陀羅(しゅだら)の併稱。各その條を見よ。しせい(四姓)參照。

**じ-しやう** 四生【名】(佛)『梵 Catur-yoni の譯語』胎生・卵生・濕生・化生(けしやう)の四種。即ち人類のごとく、母の胎內に體を成して後生ずるものと、卵生、即ち鳥類のごとく、卵殼內に體を成して後出生するものと、濕生、即ち蟲類のごとく、濕氣に依りて形を受くるものと、化生(けしやう)、即ち諸天と地獄及び劫初の衆生とのごとく、依託する所なくただ業力(ごうりき)によりて忽ち起るものとの併稱。《太平記》「六道・四生の間、いかなる所に生れておはしますぞ」

**四生の苦輪**(くりん)【句】(佛) 一切の衆生が四生[]の間に輪廻して苦しむこと。《盛衰記》「重ねて永く四生の苦輪を廻らす」

**四生・百刼**(ひやくこう)【句】(佛) 緣覺乘の人の道果を得るに、極めて遠かなるものは四生[]の加行(けぎやう)に於てし、極めて遲きものは、百刼の加行に於てすること。

**じ-しやう** 私娼【名】公に許可せられざる淫賣婦。(公娼に對して)

**じ-しやう** 私償【名】內內にて、債務などを償ふこと。

**じ-しやう** 死傷【名】死ぬると傷つくと。また死者と傷者と。

**じ-しやう** 死生【名】(佛) しやうじ(生死)に死生不知【句】いのちしらず。「死生不知の村人ども、評定して」

**じ-しやう** 史生【名】じしやう(史生)に同じ。

**じ-しやう** 使宰【名】閑拓使・宣敎使・按察使の各使に置かれし判任官。何れも、明治二年設置、宣敎使と按察使とのは、その廢止と共に、閑拓使のは、同十年廢せられたり。「稱。

**じ-しやう** 祠掌【名】じゃしやう(社掌)の舊

**じ-しやう** 司掌【名】【圖】つかさどること、又その人。【圖】中古時代の諸司の雜任官掌(かんしやう)の類。

**じ-しやう** 司鉦【名】鉦を鳴すことを司る司鉦の本位【句】即位式の時、合闕のため、庭上に鉦と鼓とを備ふその鉦を司りし者の地位。鼓を司りし者の地位は、司鼓の本位といへり。古は、兵庫寮の官人奉仕したり。《令》大膳職・高等官左右各一人、同判任官各六人を率ゐ、司鉦司鼓の本位に就く」

**じ-しやう** 四上【名】【圖】(地) 支那の洞水の上(ほとり)。【圖】『孔子、洞水の上(ほとり)に教授せしよりいふ』孔子の門。じゆじ(洙泗)參照。「洞上の弟子」

**じ-しやう** 史生【名】『和名鈔に「史生、俗二音如し食」とあれど、じやうとも稱へしもの』古、太政官・八省にて、四部官の下に位し、公文を繕寫し、上官の所に至りて、文案の署を取ることを掌りし者。ふみびと。ふんびと。一分(ぶん)。

**じ-しやう** 私情【名】【圖】わたくしのなさけ。私人としての情誼。【圖】しん(私心)[]に同じ。

**じ-しやう** 至情【名】至極の人情。まごころ。

**じ-しやう** 詩情【名】詩の興味。詩趣。

**じ-しやう** 姿情【名】(文) 佛說にて、句の姿と、こころばへと、即ち句の外形と內容とを先に情を後にすといふも、初學の事なはれなき事なり。姿を後にすといふは、最もいの論に惑はず、例の如く、物に應ずる事を思ふべし」

**じ-しやう** 姿狀【名】すがたかたち。

**じ-しやう** 支狀【名】しよたふじやう(初答狀)に同じ。

**じ-しやう** 支城【名】支(かう)れの城。ざまる。(本城に對して)

**じ-しやう** 熾盛【名】しせい(熾盛)に同じ。太平記「然熾盛にして、君臣・父子の道をも辨へず」

**じ-しやう** 紙上【名】紙の上。紙面。

**じ-しやう** 市上【名】まちなか。街頭。

**じ-しやう** 時正【名】『晝夜の時正しき義』ちやうしやう(中日)に同じ。《徒然》「花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう過はず」

**じ-しやう** 自性【名】【圖】(佛) 諸法各自に偏ふる不變不改の生。その物、本來の性質。本性。【圖】まことの性。ほんしやう。「蟬山」「楚御太刀彫」「驚きて自性を現はしさうらふぞや」

自性の力【句】自性の淸淨なるを月に譬へていふ語。《謠曲・淡路》「實相の色をあらはし、自性の月の花を添へて」

自性の本佛【句】(佛) 固有の佛性。《盛衰記》「自性の本佛、己身(こしん)に偏はる」

**じ-しやう** 自傷【名】自己の身體を傷害する罪。「見よ。

**じ-しやう** 事障【名】(佛) にしやう(二障)を

**じ-しやう** 次將【名】【圖】大將の次に立つ者。御宇の一時の改稱。

**じ-しやう** 次生【名】(佛) 次の生(しやう)。生れかはること。わうじやう(往生)[]參照。

**じ-しやう** 時尚【名】その時代の人の一般に好みしこと。

**じ-しやう** 自淨【名】(佛) 三自の一。禪を修すること。「自調・自淨・自度」參照。

**じ-しやう** 辭退【名】辭退して、他人に讓ること。辭宜。

**じ-しやう** 事情【名】事のわけ。事の心。

**しじやう-きん** 絲狀菌【名】(植)『獨 Schimmelpilze』黴菌の一。食物その他の有機物に附著し、分岐ある長菌絲と高く直立せる果梗とより成り、白・灰黃・綠等の毛樣・纖維樣の膜を形成す。白癬(はくせん)・黴風(かびかぜ)等の原因となる病原性のものもあれど、多くは非病原性にして、麴ヂヤスタアゼ等を發生せしむるものの如き、その一なり。

**じじやう-きん** 耳上筋【名】(醫)『羅 Musculus auricularis superior』耳翼の後部にある筋。頭蓋の朝狀鰓膜の側部より起りて、耳軟骨の前上部に終り、軟骨を上方に牽く作用あり。

**じじやう-くわう** 熾盛光【名】(佛) しじやうくわうにようい(熾盛光如來)の略。《盛衰記》「堂はこれ祕密眞言の靈場、金胎兩部・熾盛光等の大曼陀羅を安置せり」

**熾盛光の御修法**(みしほ)【句】(佛) じじやうくわうぶつあやうほふ(熾盛光佛頂法)に同じ。「此「熾盛光の御修法」

**じじやうくわうにようい** 熾盛光如來【名】(佛) 天修の略。

**じじやうくわうぶつちやうにようい** 熾盛光佛頂如來【名】(佛)「その毛孔より熾盛の光明を放つといふに本づく。盛衰記「堂はこれ祕密眞言の靈場、金胎兩部・熾盛光等の大曼陀羅を安置せり」

**じじやうくわうぶつちやうはふ** 熾盛光佛頂法【名】(佛) 天台宗にて行ふ四箇の大法の一。熾盛光佛頂尊を本尊とし、曼陀羅を懸けて、息災・除難を祈る。

**じ-しやうたい** 四正見【名】(佛) 三界の眞相を見る正しき見解。「苦空・無常・無我」參照。

**じじやう-しん** 至誠心【名】(佛) しん(至心)に同じ。野守鏡「至誠心を表したまひける上は」《謠曲・葵上》「至誠心・深心・回向發願の征の願、耳に染みて」

**じじやう-しんによ** 自性眞如【名】(佛) 宇宙萬物の自性は、不變・不滅・不增・不減のもの、即ち眞如なること。《謠曲・葵上》「御誓、佛も同じ御心の自性眞如の月讃の神」ともいふ。

**じじやう-ぜん** 至上善【名】(菩) さいかうぜん(最高善)に同じ。

**じじやう-せんけい** 耳狀箭形【名】(植)『諸』に同じ。耳形を呈せる箭形。

**じ-しやうたい** 四聖諦【名】(佛) したい(四諦)に同じ。

**じじやう-たい** 絲狀體【名】(植)『英 Prothorm』蘚類の胞子の發芽して生ぜる綠色の絲狀體。後、その一部に蘚の幼芽發生して、遂に一箇の成體となる。

**じしやう-てん** 支撐點【名】(兵) 據守して、全陣地を支へ得る如き地點。據點。

**じしやう-ふうさ** 紙上封鎖【名】(法)『英 Paper blockade』實力を以てせず、ただ書面によりて、港灣の封鎖を關係諸國に通知

すること。西暦一八五六年の巴里列國會議の宣言以來、封鎖は實力封鎖ならざるべからざることなり、紙上封鎖は、その効を失ふに至れり。（實力封鎖に對して）

**じじゃう-ふじゃう** 自性不淨【名】〔佛〕じしゃうとじゃう（五種不淨）に同じ。

**じじゃがた** 寺社方【名】寺社奉行及びその部下。

**ししやきぐさ** ししやき草【名】〔植〕■ちやんばすく（古菜菊）に同じ。■きんみづひき（金水引）に同じ。

**じ-しやく** 子爵【名】じやく（爵）を見よ。

**じじ-やく** 指示藥【名】〔英 indicator〕特種の化學性を鋭敏に感じ、もしくは化學反應の終を鋭敏に表示する性質の藥品。しげんと試驗紙〈參照〉。

**じじ-やく** 字釋【名】字義を解釋すること、又その解釋したるもの。

**じ-しやく** 磁石【名】〔鑛〕■〔英 magnet〕磁氣を有する天產鐵物、即ち磁鐵鑛の稱。今は弘く同樣の性能を、鋼鐵片に、他の磁石或は電流の作用等にて賦與したるものをもいふ。從つて、天然磁石・人造磁石の稱あり。各條を見よ。ぎしやく。じせき。玄水石。■じしやくばん（磁石盤）の略。■能（ヨク）の狂言の一。遠江國見附（ケン）の者、京見物の途次、人賣と路伴となり、共に宿に投ず。人賣、宿主と相談して、この見附の者、人賣の眞似して、宿主より金を受けて、身を賣る。人賣跡を追ひ、斬らんとして、太刀を抜きかかる。見附の者自ら磁石の精と稱して、口を開き、太神がかりするを、人賣蘇生せしめ、見附の者の道くるを追ひかくる筋のもの。

**磁石に針**【句】接近しやすい戀の敵持つてゐて當てがふは、盜人に藏の番、磁石に針。

**磁石の極**【句】〔理〕じきよく（磁極）に同じ。

**磁石の軸**【句】〔理〕じちく（磁軸）に同じ。

**磁石の能率**【句】〔理〕「磁氣の能率」に同じ。

**磁石の方向**【句】〔理〕磁軸の方向。一時の磁石【句】〔理〕いちじじせき（一時磁石）に同じ。

**じ-じやく** 示寂【名】〔佛〕えいきうじせき（永久磁石）に同じ。

**じ-じやく** 自若【名】〔佛〕佛・菩薩又は高德の死去すること。

**じじ-やく** 平素にかはらぬさま。自如。

**ししやく-ぎゐん** 子爵議員【名】貴族院の華族議員の一。子爵を有して、滿二十五歲に達したる者の中より、同爵の互選により選出せられしもの。

**じしやく-しき** 磁石式【名】〔英 Magneto-system〕電話交換方式の一。磁石發電機と磁石電鈴とを用ひて、信號裝置としたるも電池式に對して）

**じしやく-しん** 磁石針【名】棒狀磁石の小さきもの。中央部を支へて、水平面内に自由に働き得るやう裝置して、方位を知るに用ひ、また電力計・磁力計等に用ふ。磁針。

**じしやく-はつでんき** 磁石發電機【名】〔英 Magneto generator〕馬蹄狀永久磁石の兩極に、ジイメンス形の發電子を迅速に回轉中、最も簡單なるもの。發電子の回線は、平常は切斷すれども、把子の回轉によりて始めて連絡し、交番電流を發生す。

**じしやく-ばん** 磁石盤【名】圓盤の周圍に方位を目盛し、その中に磁石針を横たへて、方位を測るに用ふる器。じしやく。

**ししやく-びやうぶ** 四尺屏風【名】高さ四尺ほどの屏風。■八丈社壁・四尺屏風をおしのくれば」

**じしやくぶんし-せつ** 磁石分子說【名】〔理〕ぶんじじしやくせつ（分子磁石說）に同じ。

**ししや-じさふね** 使者御座船【名】大名の使者の乘る船。

**ししや-にこふ** 四捨五入【名】算用の時、所要の最低の桁の次の數、四又は四以下なる時は、これを捨て、五又は五以上なる時は、十と見做して、一をその所要の桁に加ふること。

**じしやだまり** 寺社溜【名】江戸時代に、勤逸相撲興行の時、場内を取締るために、寺社方の出張して詰め居りし所。

**じしやーでんそう** 寺社傳奏【名】室町・江戸時代に、寺社に關することを執奏せし役。室町時代には稻荷・南都・大德寺等に別別に置かれたれど、江戸時代には、數社・伊勢・賀茂・石清水の三社には、兩時代を通じて、各別に置かれ、公卿の兼職たりき。

**じしやとりつぎ** 寺社取次【名】江戸幕府の職制の一。寺社奉行に屬して、訴訟その他の雜務を掌りしもの。

**じしやぶぎやう** 寺社奉行【名】■鎌倉幕府以後、神社・佛寺に關する雜事、または聽訟の事を掌りし職。■江戸幕府の三奉行の一。神社・佛寺・神職・僧侶・陰陽師・連歌師等に關する事を掌りたり。〔□に同じ。

**ししやーぶね** 使者船【名】くらぶね（鮫船）に同じ。

**ししやーやみ** 肉病【名】肥滿する病。

**ししやらひ**【名】『獸（シ）遺（イ）の義』ろくさい（鹿砦）に同じ。

**じじやーりやう** 寺社領【名】佛寺又は神社の領地。

**ししやをとこ** 使者男【名】使者の男。つかひの男。

**ししゐ** 鏑口はきのふけふ 使者男」

**じ-しゆ** 齋祭【名】積み貯ふる糧秣。

**じ-しゆ** 咨諏【名】問ひはかること。

**じ-しゆ** 詩趣【名】詩歌に歌ふべきほどの面白味。詩的趣味。

**じ-しゆ** 詩酒【名】■詩と酒と。■詩を作りて酒を飲むこと。

**じ-しゆ** 巵酒【名】巵（チヤウ）に盛りたる酒。

**じ-しゆ** 旨酒【名】うまき酒。美酒。太平記・山海の珍物を盡し、旨酒泉のごとくに湛へて」

**じ-しゆ** 旨趣【名】しゆと・趣旨〕に同じ。

**じ-しゆ** 死守【名】命がけにて、城塞などを守ること。

**じ-しゆ** 錙銖【名】『古、支那の量目にて、十黍（ショ）を染（セン）、十染を銖、四十四銖を兩、八兩（一說に六兩）を錙とせしことありていふ』僅かなる量。銖錙。「錙銖を計較す」

**じ-しゆ** 指揮【名】〔哲〕『英 Devotation』ぐわいえん（外延）に同じ。

**じ-しゆ** 四趣【名】〔佛〕しあくじゆ（四惡趣）に同じ。平家・修羅の三惡・四趣は深山・大海のほとりに在り」

**じ-しゆ** 四衆【名】〔佛〕■比丘・比丘尼・優婆塞（ソク）・優婆夷（ソク）の併稱。四部衆。四部の弟子。しあしゆ（七衆）參照。太平記・四衆の佛弟子驚き見て、これを留めんとしたまひけるに」■發起（ホツキ）衆・影向（ヤウ）衆當攝・發動して、所說あらしむる者。當機衆とは、正しく當座の機衆にて、諸衆聞（シツ）のごとき、正しく本經を聞きて、證信の益を得る者、影向衆とは、文殊・觀音のごとき、他方より來至して、佛の敎化を助け、法座を莊嚴する者、結緣衆とは、薄福の衆生、今は證悟の益なきも、見佛・聞法の因緣を結び、未來得道の因緣を作す者。〔天台宗の語〕

**じ-しゆ** 四種【名】四つの種類。

**四種三密**【句】〔佛〕〔四曼・三密〕に同じといふ。太平記・東寺の長者・醍醐の座主に補せられて、四種・三密の棟梁たり」

**四種・三密の花**【句】じしゆけ（四種花）に同じ。葬き」

**四種の佛土**【句】じつど（佛土）の條下を見よ。

**四種の物**【句】禪林・禪林助老・頭子（ジ）の併稱。平家・禪鞠…禪林…助老…頭子…これらを四種の物といふなり」

**じ-しゆ** 指授【名】さし示すこと。さしづすること。

**じ-しゆ** 師授【名】師匠より傳授せらるる

**じ-しゆ** 紫綬【名】紫色の薰綬（クン）。金印紫綬と・金（ハ）を懷き、紫（ハ）を垂る〕參照。

**じ-しゆ** 師儒【名】人に師たる儒者。

**じ-しゆ** 私鑄【名】官の許を得ずして私に鑄造すること。■起・頃者私鑄稍多」

**じ-しゆ** 斯須【副】しばらく。暫時。須臾。

**じ-しゆ** 自守【名】自力にて守ること。





**じ-しゆ** 自首【名】■自ら罪を、官に訴へ出づること。自訴。■〔法〕犯罪の未だ發覺せざる前に、犯罪者自ら犯罪搜査に從事する公務員に對して、自己の犯罪を告知すること。舊刑法には、絕對に刑罰減輕の原因たりしも、新刑法にては、一般に減輕の事由たると同時に、また免除の事由となるものとす。じゆふく（首服）■參照。

**じ-しゆ** 自主【名】■他の力を俟たず、自己に關する一切の事を、自己の力にて處理すること。■〔法〕自己を權利の本體となすこと。

**じ-しゆ** 寺主【名】三綱の一。寺中の庶事を掌り、法會の時は、執蓋の役を勤むるもの。じやじゆ（寺主）參照。〔天台宗の語〕

**じ-じゆ** 駐授【名】印鷹に附けたる紐紐（ヒモ）。太平記・越の軍綏を頸に懸け、自ら吳の下臣と稱して」

**じ-しゆう** 四宗【名】〔佛〕支那齊の曇隱が佛一代の所說を、因緣宗・假名宗・不眞宗・眞宗の四種に判別せしこと。■黑・美光寺にて、月かげや四門・四宗もただ一つ」

**じ-しゆう** 始終【名】もとより名。はじめをはり。ほんまつ。

**じ-しゆう** 始終【副】■始より終まで。經えずに。常に。いつも。終始。十訓・人の敎訓にてしたれば、いかがと、時の人おもひけるに、始終たぶとくて」■つひには。結局は。太平記・寄手は大勢なり。城の構へ未だ若へず、始終如何あるべからん」

**じ-しゆう** 時宗【名】『晝夜六時に往生禮讚を助行として修し、往生の因とするによりていふ』淨土門の一派。一遍上人の創めしもの、淨土門の諸宗中、融通念佛宗と共に、我が國にて開かれしものにて、淨土の三部經を正依（ヨリ）とする中にも、殊に阿彌陀經に重きを置き、法華・華嚴經を傍依とする點は、他の淨土門と共通なれど、一切の萬行を排斥することなく、萬行は念佛の中に攝在すとして、念佛と萬行とは同事なりと說く。本山は相模國藤澤町の清淨光寺。六時往生宗。遊行（ユギヤウ）派。

**じ-じゆう** 侍從【名】■君側にかしづき仕ふること、又その人。■大賚令の制度にて、常に天皇に近侍して諫を上り、遺を拾ひ、獻替を行ひし役。中務省に屬し、一に正侍從といひ、別に次（シ）侍從、擬（ギ）侍從・出居（デヰ）の侍從・非（ヒ）侍從あり。おもとびと。まちぎみ。■宮內省侍從職の職員。君側の事を分掌する奏任官。■名香の一種。源氏「わざとめきよしある火桶に、侍從をくゆらかして」

**じ-じゆう-きよく** 侍從局【名】侍從の詰所。おもとびとめうちぎみ。

**じ-じゆう-しき** 侍從職【名】宮內省の一局。侍從長・侍從職幹事・侍從・次侍從等の職員ありて、天皇の御近側の事を掌る所。

**じ-じゆう-しよく** 侍從職【名】前條に同じ。

**じ-じゆう-せうなごん** 侍從少納言【名】少納言にて、侍從の職を兼ねたる人。

**じ-じゆう-だい** 侍從代【名】公事（クジ）の時、臨時に侍從の事を攝行せし者。多くは少納言を任ずる例なりき。

**ししゆう-だいじよう** 四宗大乘【名】〔佛〕「四家の大乘」に同じ。

**じ-じゆう-ちやう** 侍從長【名】■明治四年制定せられたる宮內省の職員。天皇に常侍規し、兼ねて侍從を監督することを掌りし勅任官。同十年廢せらる。■明治十一年設けられたる宮內省の職員。天皇に常仕し、侍從を監督することを掌りし奏任官。同十七年次項の如く改めらる。■宮內省侍從職の長官。親任官又は勅任官。

**じ-じゆう-でん** 仁壽殿【名】內裏に於ける皇居の中央に位し、初は天皇常御の殿なりしが、のちには內宴・御遊などを行はせらるる所となりたり。中殿。東殿。じんじゆでん。

**じ-じゆう-ばんちやう** 侍從番長【名】宮內省の職員。天皇に常侍奉仕したる奏任官。明治五年制定、同十年廢せらる。

**じ-じゆう-ぶぐわん** 侍從武官【名】侍從武官府を組織する職員。陸・海軍の將校これに補せられ、天皇に常侍奉仕し、軍事の奏上・奏答及び命令の傳達に任じ、觀兵・演習その他公然の儀式に扈從し、又軍事上の視察のために差遣せらるることあり。定員は、陸軍の中・少將佐官及び大尉五人、海軍の中・少將佐官及び大尉三人。

**じ-じゆうぶぐわん-ちやう** 侍從武官長【名】侍從武官府の長官。陸軍の大・中將ことに親補せられ、侍從武官と同じく、參謀とし、侍從武官を監督す。

**じ-じゆうぶぐわん-ふ** 侍從武官府【名】侍從武官長及び侍從武官を以て組織する官府。明治四十一年の創設。

**じ-じゆう-をとりねんぶつ** 時宗踊念佛【名】毎年二季の彼岸中、京都五條西の御影堂にて、踊念佛を修すること。

**じ-じゆ-かう** 十種香【名】じつしゆかう（十種香）に同じ。

**じ-しゆく** 私淑【名】『孟子の離婁下篇に「予未だ得ず爲三孔子之徒一也、予私二淑諸人一」とある」に本づく。私（ヒ）に淑（ヨ）くする義』欽慕する人に直接に就きて學ぶこと能はずして、ただその道を聞きて、私かに自らを善くすること。

**じ-しゆく** 尸祝【名】■神主（カンヌシ）と神前に向ひて祭文を讀む者。■『莊子の逍遙遊篇に「子胡不相與尸而祝之」社（ヤシロ）而稷之乎」とあるに本づく。尸も、祝も、祭時の先に立つ者なるによりていふ』崇拜して、その風に倣ふこと。

**じ-しゆく** 止宿【名】とどまり宿ること。寄宿。留宿。

**じ-じゆく** 私塾【名】個人の經營する塾。

**じ-じゆく-じよ** 止宿所【名】止宿するところ。寄宿所。「同じ。

**じ-じゆ-けい** 四種花【名】〔佛〕じけ（四華）に同じ。

**じ-じゆ-けん** 自主權【名】〔國體〕が、その國體限りに行はるる法規を自ら制定する權。法規制定の權は主權者の有する所なれども、法令の範圍內において、撥括的に或團體に附與することあるによりて發生す。例へば、地方自治體中の市・町・村の如き、また法人にあらざるも、貴族院・衆議院及び有爵者の如きもこれを有し、前者が內部の整理に必要なる諸規則を定める權を有し、後者が家範を定むる權を有する類。

**じ-じゆ-けん** 自首減【名】〔法〕犯人の自首を諒として、その法定の刑を輕減すること。

**じ-じゆ-げんとう** 自首減等【名】〔法〕犯人の自首を諒として、本刑より輕減せらるる等級。自首減。

**じ-じゆ-けんのう** 自主權能【名】〔法〕個人が、その身體・財產の維持・發達を計るために、法律に規定せる範圍內にて、自己の意志を決行し得る權能。

**じ-じゆ-げんめん** 自首減免【名】〔法〕犯人の自首を諒として、その刑を輕減又は全免すること。

**じ-じゆ-さんまい** 四種三昧【名】〔佛〕天台宗にて修行する四種の三昧。即ち常行（ジヤウ）三昧・常座三昧・半行（ハンギヤウ）半座三昧・非行（ヒギヤウ）非座三昧。常行三昧とは、七日又は九十日を一期として、步行の間、常に口に阿彌陀佛を唱へ、心に阿彌陀佛を懷うて息まざること。常座三昧とは、九十日を一期として、淨室に孤坐し、口に名號を唱へて、心を法界に止むること。半行半座三昧とは、或は行道（ギヤウ）して經文を誦し、或は安坐して實相を思惟する三昧法。非行非座三昧とは、行・住・坐・臥の四威儀に關せず、一切の事に通じて、意の起るに從つて修する三昧法。盛衰記・これは止觀行者・四種三昧の大意を釋しける絕句とかや」

**じ-じゆ-さんみつ** 四種三密【名】〔佛〕「四曼・三密」に同じかるべし。じまん（四曼）參照。太平記・東寺の長者・醍醐の座主に補せられて、四種・三密の棟梁たり」

**じ-じゆ-じいう** 自主自由【名】自己の事は、自己の自由に屬し、他人の干涉をゆるさざること。

**じ-じゆ-しやうじ** 四種生死【名】〔佛〕『四種の生死』に同じ。

**じ-じゆ-せん** 私鑄錢【名】官の許可を得ずして、私かに鑄造する錢。官錢・座錢に對して）舊・起・私鑄錢」

**じ-じゆ-せん-しや** 私鑄錢者【名】官の許可を得ずして、私かに錢を鑄造せる者。紀「私鑄錢者斬」

**じ-じゆ-ぜんめん** 自首全免【名】〔法〕犯人

の自首を諜として、その刑を免除すること。

**し-しゅつ** 支出【名】Ⓘ『支(ハラ)れ出づる義』一定の目的のために、金銭を支拂ひ、又は物品を消費すること。しはらひ。つかひはらひ。〈教入に對して〉Ⓘ妾腹の兒女。庶出。

**し-しゅつ** 四出【名】四方へ出づること。

**し-しゅつ** 施術【名】醫者などの、手術を施すこと。

**し-じゅつ** 師術【名】人の師となる道。

**し-じゅつ** 四術【名】『禮記の王制に「樂正崇二四術一、立二四教一、順二先王詩書禮樂一、以造二士一、春秋教以二禮樂一、冬夏教以二詩書一」とあるに本づく』詩(詩經)・書(書經)・禮(禮記)・樂(樂記)の四つの道。四教。正任当、古には、詩書・樂・樂を以て、國を治むる四術とす。本朝は、四術の學を立てらるることは、紀傳・明經・明法の三道に、詩・書・禮・樂を兼すべきにこそ、皇道を加へて、四道といふ」

**し-しゅつ-ぼ** 支出簿【名】支出に關することを記入する帳簿。〈教入簿に對して〉

**じ-しゅつ-てき-ぐわいかう** 自主的外交【名】國家が自主權を行使して、他の國家の意思を羈束する外交。また一國が國際事件の主動者となりて、行動する外交。

**じ-じゅ-ほふらく** 自受法樂【名】〔佛〕自身が實驗する最上最勝の法樂。大平記「大菩薩の御前にして、謹かに自受法樂の法施をぞ被し奉ける」

**し-しゅ-まんだら** 四種曼陀羅【名】〔佛〕しまん(四曼)に同じ。

**し-じゅん** 諮詢・咨詢【名】とひはかること。相談。諮問。

**し-じゅん** 視準【名】〔理〕望遠鏡の軸を、望むべき物體の方向に平行ならしむること。

**じ-じゅん** 耳順【名】『論語の爲政篇に「六十而耳順」とあるに本づく』六十歳の異稱。

耳順の年【名】前條に同じ。

**し-じゅん-き** 視準儀【名】子午環又は子午儀の視準常數を求むるため、子午線の一方又は兩方に設置する固定の望遠鏡。視軸儀。

**し-じゅん-きくわん** 諮詢機關【名】〔法〕自ら進んで發案するを得ず、諮詢を待ちて議決する機關。例へば樞密院・元帥府の類。諮問機關。

**じ-じゅん-きやう** 視準鏡【名】〔天〕天體望遠鏡に附屬する小さき望遠鏡。觀測せんとする天體の方向を知るに用ふ。

**し-じゅん-けい** 四閑刑【名】鎌倉時代以後、文官に課せし召籠(ハリ)・勤勘・解官(ヤメ)・除籍、庶人に課せし制牛糞(ジヒ)・捺火印(ヒヲ)・闕所・過料・徳川時代に庶人に課せし叱(シカリ)・過料・閉戸(ハ)・手鎖(ハ)、又、僧徒に課せし退院・喝(ヤ)・追院・擯(ヤ)の四種の刑の併稱。

**じ-じゅん-じさ** 視準誤差【名】〔理〕視準の正しからざる時に起る誤差。望遠鏡の視準線とその回轉軸とのなす角と直角との差。視準常數。

**じ-じゅん-じやうすう** 視準常數【名】〔理〕前條に同じ。

**じ-じゅん-せつ** 四旬節【名】〔基〕『英Lent』

**じ-じゅん-せん** 視準線【名】望遠鏡の對物・對眼兩レンズの光心と、その筒の內部にありて、十字狀に交叉せる蜘蛛の線の交點とを連結せる直線。視準軸。

**じ-じゅん-ぢく** 視準軸【名】前條に同じ。

**じ-じゅん-もくてき** 自主目的【名】〔法〕自己の生存發達を遂げんとする目的。自存自的。

**じ-じゅう-ど** 自受用土【名】〔佛〕ほうど(報土)に同じ。

**し-しゅうゐ** 四手類【名】〔動〕『四肢皆手の用をなすによりていふ』さるをろ(猿類)に同じ。

**し-しょ** 死所【名】しにばしょ。しにどこ

**し-しょ** 支所【名】本所に屬して、しかもそれと分離して事務を取扱ふ所。

**し-しょ** 支庶【名】えだは血すぢ。

**し-しょ** 支署【名】本署に屬して、しかもそれと分離して、事務を取扱ふ役所。分署。

**し-しょ** 趦趄・次旦【動】逡まんとして逡みあぐき說。ためらふ有樣。しそ。

**し-しょ** 士庶【名】士分の人と平民と。

**し-しょ** 私書【名】私用を認めたる手紙、又は書類。私文書。

**し-しょ** 市署【名】いちのつかさ(市司)の唐名。

**し-しょ** 私署【名】一私人として署名すること。

**し-しょ** 司署【名】Ⓘ書籍を司る役。Ⓘ公立圖書館の職員。奏任文官又は判任文官と同一の待遇を受く。Ⓘ帝國圖書館及び帝國大學附屬圖書館の職員。上官の命を承けて圖書・記錄の整理・保存及び閲覽に關する事務に從事する判任官。

**し-しょ** 史書【名】しせき(史籍)に同じ。太平記「史書に傳置きて、前王の是非を後王の誡に備ふるものなり」

**し-しょ** 賜書【名】君王より賜はりし信書。

**し-しょ** 試書【名】かきぞめ(書初)に同じ。

**し-しょ** 詩書【名】Ⓘ『書』詩經と書經と。Ⓘ道義の書籍。

**し-しょ** 四書【名】『書』大學・中庸・論語・孟子の四部の併稱。

**し-しょ** 齒序【名】年齡によりて、順序を立つること。としじゅん。

**し-しょ** 絲絮【名】絲と綿と。

**じ-しょ** 璽書【名】君主の御璽のすわりてある文書。

**じ-しょ** 辭書【名】Ⓘ言葉を集めて一定の順序に排列し、發音・意義等を說明したる書物。じびき。辭典。辭彙。Ⓘじくう(辭表)に同じ。〈平家「この頃、大貳辭書奉りたれば、有國をなさせたまへれば」〉

**じ-しょ** 字書【名】漢字を集めて、一定の順序に排列し、その發音・意義等を說明したる書物。じびき。字彙・字典。

**じ-しょ** 時處【名】時と處と。時間と空間と。

**じ-しょ** 自署【名】自ら姓名又は華押を書くこと。

**じ-しょ** 自書【名】みづから書くこと。親書。

**じ-じょ** 自助【名】他の力に依賴せず、自己の力に依りて、向上發展を遂ぐること。

**じ-じょ** 自序【名】著者自ら書きたる序文。

**じ-じょ** 時序【名】時の順序。四季變遷の次第。

**じ-じょ** 次序【名】じよじょ(序次)に同じ。

**じ-じょ** 爾汝【名】『孟子の盡心上篇に「人也と、あり。爾も汝と同じく「なんぢ」の義』人を輕んじ賤みて呼ぶこと。

爾汝の交(ハジ)【句】互に爾(ナ)・汝と呼びあふほどの親しき交。

**じ-じょ** 自如【動】じじゆく(自若)に同じ。わがまま。

**し-しょう** 師承【名】師より承傳ふること。

**し-しょう** 刺衝【名】Ⓘ刺し衝くこと。Ⓘじせ(刺殺)に同じ。

**し-しょう** 支證【名】事理を支ふるに足る證據。しようこ。平家「朝敵にくみせざる支證、分明に候ふ」藤典(藤原)「あさましき世を捨て者の所存候ふ。支證なき手柄、似合はぬ僧の腕立」

支證の出後【句】「證文の出後」に同じ。〈謠曲〉

**し-しょう** 市丞【名】いちのつかさのはうぐわん(市司判官)。

**し-しょう** 仕承【名】Ⓘ仕へ從ふこと。奉仕。太平記「大太刀使ふ者とだに申せば、忠無くして、厚恩に下され、左右・前後に仕承す」Ⓘあないしゃ(案內者)に同じ。

**し-しょう** 試乘【名】試みに乘ること。

**し-しょう** 史乘【名】「乘は記錄の義」れきし(歷史)に同じ。

「歷史。

**し-しょう** 私乘【名】「前條を見よ」私撰のじしょう 自稱【名】Ⓘ自ら稱すること。自ら名乘ること。Ⓘ自身を譽めたたふること。盛衰記「袁水は、かれて自稱、今の振舞、げに一人當千とぞ嘆めたりける」Ⓘ〔語〕じしようだいめいし(自稱代名詞)の略。〈對稱・他稱に對して〉

**じ-しょう** 自證【名】Ⓘみづから自己を證明すること。Ⓘ〔佛〕ごしょう(己證)に同じ。







**じ-じょう** 自乘【名】〔數〕『英Square』同數を二度掛けあはすこと。二乘。平方。

**じ-じょう** 自繩【名】次條を見よ。

自繩自縛【句】『自己の繩にて自己を縛る意』自己の心、又は行爲によりて、自己を苦しむること。煩惱のために自ら苦しむこと。

**じ-じょう-くわんぢやう** 自證灌頂【名】〔佛〕三種灌頂の一。自己みづからを菩薩位に置きて、灌頂すること。〈結緣灌頂・傳教灌頂に對して〉

**じ-じょう-こん** 自乘根【名】〔數〕『英Square root』或數を自乘したる積に對して、その或數の稱。平方根。二乘根。

**じ-じょう-すう** 自乘數【名】〔數〕『英Square number』或數を自乘したる積。二乘數。

**じ-じょう-だいめいし** 自稱代名詞【名】〔語〕自己の名に代へて用ふるもの。われ・やつがれの類。第一人稱。一人稱。〈對稱代名詞・他稱代名詞に對して〉

**じ-じょう-ひ** 自乘比【名】〔數〕『英Duplicate ratio』相等しき二つの比の相乘比。二乘比。

**じ-じょう-べき** 自乘冪【名】〔數〕『英Square power』同一の數を自乘したる積の、その數に對する稱。これを記すに、例へば5の自乘冪は$5^2$、nの自乘冪は$n^2$のごとく記す。二乘冪。

**し-しょ-かいだん** 四所戒壇【名】〔佛〕古、勅許ありし四箇所の戒壇、即ち三戒壇に更に山城國の延曆寺の戒壇を加へたる稱。さんかいだん(三戒壇)參照。

**し-しょ-かん** 私書函【名】いちびんしょかん(郵便私書函)の略。

**し-しょ-ぎざう** 私書僞造【名】〔法〕權利義務又は事實證明に關する文書・圖書を僞造し、又は變造すること。

**し-しょ-ぎざう-かりこし** 私書僞造行使【名】〔法〕私書僞造をなして、これを行使すること。

**し-しょ-ぎざう-ざい** 私書僞造罪【名】〔法〕しぶんしょぎざうざい(私文書僞造罪)に同じ。

**し-しょく** 姿色【名】みめかたち。容色。

**し-しょく** 紫色【名】むらさきいろ。

**し-しょく** 試食【名】試に食ふこと。

**し-しょく** 紙燭【名】しそく(脂燭)に同じ。曾我物語「無明の紙燭を照らし」

**じ-しょく** 四職【名】Ⓘし(支)四職)に同じ。Ⓘ室町時代に交互に侍所の所司に補せらるべく定まりたりし四家。即ち山名・一色(ハタ)・細川・畠山の四家の併稱。四殿衆。さんくわんりやう(三管領)參照。

**じ-しょく** 辭職【名】務をことわること。職務を辭すること。

**じ-しょく** 耳食【名】『耳にて食ふ義、即ち自ら直接に味ふことなく、人の言ふ所に從ひて、味を說くといふ意。史記の六國表に「此與二以耳食一無レ異」とあるに本づく』じがく(耳學)に同じ。

**じ-しょく** 侍食【名】貴人の側に侍りて食事すること。陪食。御相伴。

**じ-しょく** 辭色【名】ことばづかひと顏いろと。

**じ-しょく** 自色【名】〔鑛〕『英Idiochromatic』各鑛物の固有の色。眞色。

**し-しょく-きん** 紫色金【名】〔化〕金七十八分にアルミニウム二十二分を加へたる合金。裝飾に用ひらる。

**し-しょく-しゆう** 四職衆【名】四職Ⓘの人たち。元女元秋羽子熬、僞らば繩をかけ、四職衆の自洲に引據ゑ、一家・一門の恥を見るか」

**し-しょく-ばん** 四色版【名】三色版に黑の一色を加へたる製版。さんしょくばん(三色版)參照。

**し-しょくり** 司機吏・司職吏【名】『史記の孔子世家に「孔子嘗爲二司職吏一而吉蒼息」とあり。職は機に通ず』古、支那にて、犧牲を繫ぎ養ふことを掌りし役。

**し-しょく-わん** 司書官【名】帝國大學附屬圖書館及び閲覽に關する事務を掌る奏任官。

**し-しょ-しょうし** 私署證書【名】一私人の手にて署名・捺印などして作れる證書、即ち受取證・借用證書の類。

**じ-じょ-じょえん** 時處所緣【名】〔佛〕『往生要集に「只是男女・貴賤不簡二行住座臥一、不レ論二時處所緣一、修之不レ難、願求二往生一、得レ其便宜一、不知之念佛」とあり』時間(時)と空間(處)と時處の間において、主觀の精神作用を發動せしむる客觀の諸現象(所緣)と。平家「行住座臥・時處所緣をきらはず」

**じ-じょ-たい** 自敍體【名】作中の人物が自ら敍ぶる體に作れる小說・詩歌。

**し-しょ-だいぜん** 四書大全【名】〔書〕四書を註釋せるもの。明の胡廣等、太宗の勅を奉じて撰す。三十六卷。

**し-しょ-ちやう** 支署長【名】支署の長。

**じ-じょ-ちやう** 支所長【名】支所の長。

**じ-じょ-でん** 自敍傳【名】じでん(自傳)に同じ。

**し-じょく** 市助役【名】市參事會員の一。市長の職務を補助し、市長故障ある時、その代理をなす有給吏員。市會にて選擧し、任期は六箇年とす。

**しじら** 縮【名】縮緬に似て、地の縮み方疎(ウブ)き織物。經糸(ナガ)に張力又は太さの異なるものを用ひて織る。しじらおり。しじらのあや。縮線紋。(數半目(ハ)に對して)羽織・しじらの薄色の指貫、人よりは少し用ひたり」

**じ-じらう** 時仕郎【名】すうそらげ(少初位下)の唐名。くらゐ(位)Ⓘ參照。

**しじら-おり** 縮織【名】しじら(縮)に同じ。

**しじら-き** 縮【名】紬の襲文。〔古語〕和名「縮。此間云二之良岐一」

**しじら-く** 縮らく【動四自】ちぢる(縮る)に同じ。〔古語〕

**しじら-くわんとん** 縮廣東【名】名物切の一。自地に黑茶の細き格子縞ありて、地合縮める廣東織のもの。

**しじら-ふぢ** 縮地【名】〔植〕しじらの地質。

**しじら-ふぢ** 縮地【名】〔植〕あをつづら(木防己)に同じ。然然「枝の半に鳥をつく。つくる枝踏まする枝あり。しじら藤の割らぬにて、二所つくべし」

**し-しらん** 獅子【名】〔動〕しし(獅子)に同じ。

**じ-しょ** 趦趄・次旦【動】逡まんとして逡みあぐき說。ためらふ有樣。しそ。

**じ-じょ** 士庶【名】士分の人と平民と。

**じ-じょ** 私書【名】私用を認めたる手紙、又は書類。私文書。

**じ-じょ** 市署【名】いちのつかさ(市司)の唐名。

**じ-じょ** 私署【名】一私人として署名すること。

**じ-じょ** 司署【名】Ⓘ書籍を司る役。Ⓘ公立圖書館の職員。奏任文官又は判任文官と同一の待遇を受く。Ⓘ帝國圖書館及び帝國大學附屬圖書館の職員。上官の命を承けて圖書・記錄の整理・保存及び閲覽に關する事務に從事する判任官。

**じ-じょ** 史書【名】しせき(史籍)に同じ。太平記「史書に傳置きて、前王の是非を後王の誡に備ふるものなり」

**じ-じょ** 賜書【名】君王より賜はりし信書。

**じ-じょ** 試書【名】かきぞめ(書初)に同じ。

**じ-じょ** 詩書【名】Ⓘ『書』詩經と書經と。Ⓘ道義の書籍。

**じ-じょ** 四書【名】『書』大學・中庸・論語・孟子の四部の併稱。

**じ-じょ** 齒序【名】年齡によりて、順序を立つること。としじゅん。

**じ-じょ** 絲絮【名】絲と綿と。

**じ-じょ** 璽書【名】君主の御璽のすわりてある文書。

**じ-じょ** 辭書【名】Ⓘ言葉を集めて一定の順序に排列し、發音・意義等を說明したる書物。じびき。辭典。辭彙。Ⓘじくう(辭表)に同じ。平家「この頃、大貳辭書奉りたれば、有國をなさせたまへれば」

**じ-じょ** 字書【名】漢字を集めて、一定の順序に排列し、その發音・意義等を說明したる書物。じびき。字彙・字典。

**じ-じょ** 時處【名】時と處と。時間と空間と。

**じ-じょ** 自署【名】自ら姓名又は華押を書くこと。

**じ-じょ** 自書【名】みづから書くこと。親書。

**じ-じょ** 自助【名】他の力に依賴せず、自己の力に依りて、向上發展を遂ぐること。

**じ-じょ** 自序【名】著者自ら書きたる序文。

**じ-じょ** 時序【名】時の順序。四季變遷の次第。

**じ-じょ** 次序【名】じよじょ(序次)に同じ。

**じ-じょ** 爾汝【名】『孟子の盡心上篇に「人也と、あり。爾も汝と同じく「なんぢ」の義』人を輕んじ賤みて呼ぶこと。

爾汝の交(ハジ)【句】互に爾(ナ)・汝と呼びあふほどの親しき交。

**じ-じょ** 自如【動】じじゆく(自若)に同じ。わがまま。

**じ-じょ** 恣縱【名】ほしいままなること。

**し-しょう** 師承【名】師より承傳ふること。

**し-しょう** 刺衝【名】Ⓘ刺し衝くこと。Ⓘじせ(刺殺)に同じ。

**し-しょう** 支證【名】事理を支ふるに足る證據。しようこ。平家「朝敵にくみせざる支證、分明に候ふ」藤典(藤原)「あさましき世を捨て者の所存候ふ。支證なき手柄、似合はぬ僧の腕立」

支證の出後【句】「證文の出後」に同じ。〈謠曲〉

**し-しょう** 市丞【名】いちのつかさのはうぐわん(市司判官)。

**し-しょう** 仕承【名】Ⓘ仕へ從ふこと。奉仕。太平記「大太刀使ふ者とだに申せば、忠無くして、厚恩に下され、左右・前後に仕承す」Ⓘあないしゃ(案內者)に同じ。

**し-しょう** 試乘【名】試みに乘ること。

**し-しょう** 史乘【名】「乘は記錄の義」れきし(歷史)に同じ。

「歷史。

**し-しょう** 私乘【名】「前條を見よ」私撰のじしょう 自稱【名】Ⓘ自ら稱すること。自ら名乘ること。Ⓘ自身を譽めたたふること。盛衰記「袁水は、かれて自稱、今の振舞、げに一人當千とぞ嘆めたりける」Ⓘ〔語〕じしようだいめいし(自稱代名詞)の略。〈對稱・他稱に對して〉

**じ-しょう** 自證【名】Ⓘみづから自己を證明すること。Ⓘ〔佛〕ごしょう(己證)に同じ。

**じ-じょう** 自乘【名】〔數〕『英Square』同數を二度掛けあはすこと。二乘。平方。

**じ-じょう** 自繩【名】次條を見よ。

自繩自縛【句】『自己の繩にて自己を縛る意』自己の心、又は行爲によりて、自己を苦しむること。煩惱のために自ら苦しむこと。

**じ-じょう-くわんぢやう** 自證灌頂【名】〔佛〕三種灌頂の一。自己みづからを菩薩位に置きて、灌頂すること。〈結緣灌頂・傳教灌頂に對して〉

**じ-じょう-こん** 自乘根【名】〔數〕『英Square root』或數を自乘したる積に對して、その或數の稱。平方根。二乘根。

**じ-じょう-すう** 自乘數【名】〔數〕『英Square number』或數を自乘したる積。二乘數。

**じ-じょう-だいめいし** 自稱代名詞【名】〔語〕自己の名に代へて用ふるもの。われ・やつがれの類。第一人稱。一人稱。〈對稱代名詞・他稱代名詞に對して〉

**じ-じょう-ひ** 自乘比【名】〔數〕『英Duplicate ratio』相等しき二つの比の相乘比。二乘比。

**じ-じょう-べき** 自乘冪【名】〔數〕『英Square power』同一の數を自乘したる積の、その數に對する稱。これを記すに、例へば5の自乘冪は$5^2$、nの自乘冪は$n^2$のごとく記す。二乘冪。

**じ-じょう-かいだん** 四所戒壇【名】〔佛〕古、勅許ありし四箇所の戒壇、即ち三戒壇に更に山城國の延曆寺の戒壇を加へたる稱。さんかいだん(三戒壇)參照。

**じ-じょう-かん** 私書函【名】いちびんしょかん(郵便私書函)の略。

**じ-じょう-ぎざう** 私書僞造【名】〔法〕權利義務又は事實證明に關する文書・圖書を僞造し、又は變造すること。

**じ-じょう-ぎざう-かりこし** 私書僞造行使【名】〔法〕私書僞造をなして、これを行使すること。

**じ-じょう-ぎざう-ざい** 私書僞造罪【名】〔法〕しぶんしょぎざうざい(私文書僞造罪)に同じ。

**じ-じょう-しょうし** 私署證書【名】一私人の手にて署名・捺印などして作れる證書、即ち受取證・借用證書の類。

**じ-じょう-しらん** 獅子【名】〔動〕しし(獅子)に同じ。

**じ-じょう** 四種【名】料理に、味噌・醬・醉酒の稱。種類・四種事。女房の中、酔を御しすといふ心いかん。御膳に四種といふこ

科に屬する多年生の草。除濕の地に自生す。葉は細長くして、根莖より生じ、長さ一尺內外に達し、漸次下垂す。いはひげ。いはほや。ささげらん。

**じ-じょう-らん-じょう** 獅子亂序【名】曲(ハ)の獅子舞の出づる時の囃子。

**じ-じょう-へう** 試觀力表【名】白紙に大・小種種の文字・圖畫又は符號を記して、壁上等に掛け、その前面適當の距離に人を立たせ、その人の觀力を檢するに用ふるもの。文字・符號は通常六七段に排列せられ、最上段最も大きく、下に至るに從ひて、大いさを減ず。符號には、四字形・山字形・鋏環狀を用ひ、その開口の方向を上下・左右一樣ならざらしむ。

**じ-じる** 爲知る【動四他】爲(ス)て知るる。なしぶみて知る。〔古語〕蜻蛉「みちのなか國の御神は旅ゆきもししぬ君を惠みたまはな」

「じ。〔古語〕

**じ-じる** 縮る【動下二自】ちぢる(縮る)に同じ。

**じ-じろん** 獸論・鹿論【名】狩獵の獲物に附きての爭論。曾我物語「山鹿一匹に矢二筋、稲經太腹、本多は草分、六分の勝に候へども、鹿論(ロン)未だ落居せず」

**し-しわう** 獅子王【名】Ⓘ(動)しし(獅子)の美稱。國性爺合戰「西天の獅子王も恐れつべう見えてけり」Ⓘ古の名劍の一。鳥羽天皇より二條天皇に傳へたまひ、源銀政の、鶴(ハ)を射し時、銀政に賞せられしもの。御前助平の作。平家「主上、御感のあまりに、獅子王と申す御劍を下さる」

**し-しわき** 朕【名】『肉分の義』肌のきめ。膚理。〔古語〕和名「朕、之之和岐」

**し-しをとり** 獅子師・鹿師【名】江戸時代に、一節切(ヒトヨ)に合はせたる曲名。手事にして、前歌あり。

**しし-をり-くわうざん** 鹿折鑛山【名】〔地〕陸前國本吉(ハ)郡鹿折村にある鑛山。金銀を產し、往往大なる金粒を出す。慶長中より採掘を初めて、現在に至る。

**しす** 【名】〔動〕いぐたち(殺鯛)に同じ。

**し-す** 四種【名】料理にて、味噌・醬・醉酒の稱。種類・四種事。女房の中、酔を御しすといふ心いかん。御膳に四種といふこ

とあり。味噌醤・酢・酒の四なり。これを、各一器に入れて參らすべきなり」

**しす 死す**【動下二他】死ぬるやうにする。ことろす。〔古語〕「馬命は、なしせ給ひそ」紀「みまきいりて彦はやおのが夫を死せんと、ぬすまくしらに殺なそひすも」

**しす 死す**【動佐變自】しぬ。命をはる。

**しす 死して後已む**【句】死なざるかぎりは中止せず。斃れて後已む。

死せる孔明、生ける仲達を走らす

**しす 弑す**【名】しいす(弑)を見よ。

**しす 資す**【動佐變自】■たすく。「敵國に資す」「研究に資す」■費用を給す。もとでを與ふ。

**じす 寺主**【名】じしゅ(寺主)の約。

**じす 侍司**【名】〔佛〕方丈に專屬して、親炙(シンシ)の勞を採る者。寺者同。

**じす 侍す**【動佐變自】貴人の傍に在りて奉仕す。はべる。さぶらふ。

**じす 辭す**【動佐變自】■言葉もて挨拶す。■退出す。辭退す。

**じす 辭す**【動佐變他】いなむ。ことわる。辭退す。

空海、春宮の大夫にものしたまふを、じしたまふ表つくらせたまふとて」

**じす 次す**【動佐變自】■『左傳の莊公三年の條に「凡師一宿爲食、再宿爲信、過信爲次」とあり』軍隊が三日以上同一の場所に留宿す。■やとる。とまる。

**しすう 指數**【名】■〔數〕『英Exponent Index』數または文字の累乗羅を表はすために、その數または文字の右肩に附記せられた數字または文字。例へば$a^3$、$x^n$の3、nがらの三乗數、xのn乗羅を示す類。■〔鑛〕『英Index』結晶面が晶軸を切りたる長さの逆數。

**しすう 爲据う**【動下二他】すう。すわらす。〔古語〕「西氏ひひなをしすゑて」

**じすう 字數**【名】文字の數。

**じすう 次數**【名】〔數〕『英Degree』一の項にありては、その各因數の冪を示す指數の和、方程式又は代數式にありては、式中にある未知數の最高冪の指數。

**しすうかんすう 指數函數**【名】〔數〕『英Exponential function』自變數が指數に含まるる函數。

**しすうきふすう 指數級數**【名】〔數〕『英Exponential series』指數函數を展開したる無限級數。

**しすうていり 指數定理**【名】〔數〕『英Exponential theorem』指數函數を指數級數に展開し得る定理。

**しすうしはうていしき 指數方程式**【名】〔數〕『英Exponential equation』未知數を指數とせる項を含める方程式。例へば$a^x=b$の類。

**しすごし 仕過**【名】しすごすこと。天の鹿島「紋日近れて顔かくし、仕すごしせじと忍び風」

**しすごす 仕過す**【動四自】度をこえてなす。程を過ぐるまでなす。

**しすてむ**〔英system〕【名】■事物を系統的に組立つること。■秩序ある搏成法に依ること。次第。

**しすましがほ 爲濟顔**【名】しすましたりと思へる顔つき。したりがほ。井筒業平河内通「憎高主從しすまし顔、ふつぼに入って見給へば」

**しすまさす 爲濟す**【動四他】なしとげ。なし果す。

**しすみ 四隅**【名】〔美〕〔雲題の一〕。豐干(ブカン)和尚と寒山と拾得と虎とが共に睡れるもの。

**しすみ 四垂**【名】〔美〕〔雲題の一〕。豐干(ブカン)和尚と寒山と拾得と虎とが共に睡れるもの。

**しすゐ 試錐**【名】地下の深造鑽床を探知せんがために、垂直の小孔を地中に穿ち、これに依りて、岩石を柱狀又は砂狀となしたるものを採出すること。石炭等のごとく傾斜少なく、鑽床全部に亙りて、鑛質のやや均一なる物に對して最も輕便なる探究法なり。しすゐ(試錐機)參照。

**しすゐ 止水**【名】■ながれぬ水。動かぬ水。■直信流柔道の組の基形(カタ)。

**しすゐ 死水**【名】注口のなき水。たまりみづ。止水。

**しすゐ 脂水**【名】脂粉を洗ひ落したる水。本朝三國志「鬱蔚のかをりよと折れて、脂水を流す堀江川」

**しすゐ 酒酒井**【名】〔地〕下總國印旛(インバ)郡の町。成田鐵道の一驛。

**しすゐ 雌蕊・雌蕊**【名】〔植〕『英Pistil』花の雌性の生殖器。花の中央にありて、絲狀をなす。その頂上を柱頭といひ、膨れたる下部を子房といひ、その中間は花柱といふ。柱頭には粘液ありて、雄蕊の花粉を受くるに適し、子房は果實となる。めしべ。(雄蕊に對して)

**しすゐ 齒髓**【名】〔醫〕齒髓腔内にある柔軟赤白色の物質。神經・血管多く分布せられ、從びて感覺珠に鉄敏に齒根膜と共に、象牙質の知覺と營養とを營む。

**じすゐ 自炊**【名】自身に飯を炊ぐこと。

**じすゐ 自水**【名】みづから水に投じて死ぬること。

**しすゐ-えん 齒髓炎**【名】〔醫〕齒髓に發する炎症。痛み激し。これに化膿するものと然らざるものとあり。

**しすゐ-かう 齒髓腔**【名】〔醫〕齒の中央に位する小腔。その形、凡そ齒形に類し、中に齒髓を容る。齒腔。

**しすゐ-かべき 支水隔壁**【名】かくすゐべき(隔水壁)に同じ。

**しすゐ-き 試錐機**【名】〔鑛〕試錐を行ふに用ふる器機。鋼錐の衝動に由りて、岩石を粉碎したる後、砂喞筒を用ひて、その粉碎せる岩片を掬ひ取る裝置のものと、數箇の金剛石を嵌入せる鋼管の傘を旋回して、岩石を棒狀に截取る裝置のものとあり。

**しすゐ-せん 止水栓**【名】私稻の出舉。

**しすゐ-せん 止水栓**【名】〔管〕水調五曲中の一。我が國にて作れる樂なり。給藻樂。

**しすゐ 屍居**【名】けしゐ(摯子)に同じ。

**しせい 四聖**【名】〔美〕四人の名筑。■『じゅう(四姓)を見よ』源・平・藤原・橘の四つの姓。源(ゲン)・平(ヘイ)・藤(トウ)・橘(キツ)。南留別志「四姓といふことは天竺にある事なり。源・平・藤・橘を四姓といひたるは、佛法を信ずるあまりに、何事も天竺の事をよしと思ひて、それに擬していへるなり。■『源氏の四姓』を見よ。

**しせい 四姓**【名】■世以後、伊勢神宮へ遣られし奉幣使の稱。先づ使王と稱し、王れに中臣(ナカトミ)・忌部(イミベ)・卜部(ウラベ)の三姓の人を隨從せしむる例なりしによりていふ。

**しせい 氏姓**【名】せいし(姓氏)に同じ。

**しせい 姉婿・姉壻**【名】あねのむこ。

**しせい 子婿・子壻**【名】『子として斷とする義』娘のむこ。女婿。

**しせい 施政**【名】政を施行すること。





**しせい 市制**【名】■市の組織・權限等を定めたる規則。■市に自治制度を施くために、市及びその機關の組織・權限などを定めたる法律。明治二十一年の發布。

**しせい 市政**【名】市の自治行政。市行政。

**しせい 市井**【名】『井(即ち井田)』にもとづきて、市を爲すによりていふとも、市に至りて、物を賣らんとする者、まづ井上に洗ひ濯めて赴くによるとも、また市中の道は四達にして、井のごとくなるによるともいふ。まち。いち。坊間。

市井の臣【句】『孟子の萬章下篇に「在レ國曰二市井之臣一、在レ野曰二草莽之臣一、皆謂二庶人一」とあるに本づく』しみん(庶民)に同じ。

**しせい 市人の人**【句】『史記の刺客傳に出づ』市中の俗人。

**しせい 詩聖**【名】秀でたる詩人。詩仙。

**しせい 私生**【名】内縁の夫婦の間に生れること、又は私通して子を生むこと。

**しせい 私誓**【名】私のちかひ。

**しせい 私製**【名】一私人の製作。

**しせい 試製**【名】試に製作すること、又その製作したる物。

**しせい 紙製**【名】紙にて作れるもの。

**しせい 至性**【名】至って善良なる性質。

**しせい 至正**【名】きはめて正しきこと。

**しせい 至精**【名】至って精妙なること。

**しせい 至靜**【名】至って靜かなること。

**しせい 至聖**【名】この上なく聖明なること、又その人。

**しせい 至誠**【名】至極のまこと。

至誠、神の如し【句】『中庸に「至誠之道、可二以前知一。國家將興必有二禎祥一。不善必先知之、故至誠如二神一」とあるに本づく』至誠の力は神のごとし。至誠の感通することは神のごとし。

**しせい 粢盛**【名】『粢は黍穄、盛は器に盛る意』神に供ふる飯米。

**しせい 熾盛**【名】火の燃えあがる如くさかんなること。

**しせい 資性**【名】うまれつき。天性。天賦。女性。(雌性に對して)

**しせい 姿勢**【名】身體のすがた。なり。

**しせい 司成**【名】朝鮮經學院の職員。上官の命を承けて、院務に從事するもの。

**しせい 刺青**【名】しがん(刺文)に同じ。

**しせい 師生**【名】師匠と生徒と。

**しせい 四聖**【名】四人の聖人。しせう(四聖)■■参照。

支那の四聖【句】伏犧(フクギ)・文王・周公・孔子の四人の併稱。

世界の四聖【句】釋迦・孔子・基督・ムハメッドの四人の併稱。

「世界の三聖」参照。

**しせい 著筮**【名】『蓍は、「めどぎ」といふ草。古、支那にて易を占ふに用ひしもの』うらなひ。卜筮。太平記「遐幸の吉凶を著筮に就けてぞ御覽ぜられける」

**しせい 市稅**【名】自治團體たるその市が、市民に賦課する租稅。まづ國稅・府縣稅の附加稅を課し、なほ必要ある場合に限り、別に稅目を起して徵收することを得。

**じせい 自制**【名】自己の感情・意識を抑制して、理性又は良心に從ふこと。

**じせい 自生**【名】自然に生ずること。

**じせい 自製**【名】みづから製すること。てせい。てづくり。

**じせい 辭世**【名】■この世を去ること。死ぬること。■この世を去る時、遺しおく詩歌。最後の一句。絶命の辭。「賛。

**じせい 磁性**【名】磁石に作用せらるる性質。

**じせい 事勢**【名】事の形勢。

**じせい 字勢**【名】文字のいきほひ。

**じせい 時勢**【名】世の形勢。時運。「代。

**じせい 時世**【名】ときよ。よのなか。時時勢。後【名】世の中の進歩に後るること、又その物事。時代おくれ。

**じせい-おん 次清音**【名】〔語〕支那の音韻學にて、音の清濁を五種に分ちたるものの一。その名、もと悉曇(シツタン)學に出づ。例へば、牙音の五字に上につきていへば、見(k)に對する渓(kh即ち kh)の類にて、今日の聲音學における有氣音に相當すべきもの。我が國の聲音には、これを缺く(清音・濁音・次濁音に對して)■『我が國德川時代の音韻學者は、支那の次清音の性質を解せざりしより、半濁音の別稱として用ひたり』はんだくおん(半濁音)に同じ。

**しせいきやう 四聖經**【名】〔書〕■儒教の四書、佛教の大藏經、基督教の聖書、ムハメッド教のコオランの併稱。■しせいだ(四聖陀)に同じ。

**しせい-くわん 司稅官**【名】稅務管理局に屬し、内國稅に關する事務を掌りし奏任官。明治三十五年に同局廢せられ、稅務監督局の置かるるに當りて、廢官となれり。

**しせい-げんそ 雌性元素**【名】(生)めんし(卵子)に同じ。

**しせい-さいばんしよ 市政裁判所**【名】明治の初年、東京に設置せられて、市政を裁判せし役所。

**じせい-さう 時勢粧・時世妝**【名】その時代に流行せるよそほひ。はやりの風俗。本平點「天下時勢粧の事」

**じせい-さんくわてつ 磁性酸化鐵**【名】〔化〕しさんさんくわてつ(四三酸化鐵)に同じ。

**しせい-し 私生子**【名】■夫婦にあらざる男女の間に生れたる子。ててなしご。おやなしご。ないしようご。私生兒。■〔法〕正式の婚姻を經ざる男女の間に出生したる子の、その父の認知を得ざるもの。母方の戸籍に編入せらる。父の認知を得れば、庶子となる。

**しせい-じ 私生兒**【名】前條に同じ。

**しせい-しき 示性式**【名】〔化〕『英Rational formula』分子式に基づき、化學性を一目瞭然たらしめんがために、分子式中の諸元素記號の按配をふまえたる式。化學性質の縮圖たるがごときもの。例へば、エチルアルコオルに水酸基の存在することを示すために、その一原子を分ちて、$C_2H_5OH$又は$(C_2H_5)OH$と記す類。また一物質の全化學性を表示せんと試みたる示性式は、別に構造式といふ。その條を見よ。

**しせい-しよくぶつ 自生植物**【名】〔植〕『英Native plants又Indigenous plants』一國又は一地に自然に生ずる植物。培養植物に對して)

**しせいせきばん 紙製石盤**【名】かみせきばん(紙石盤)に同じ。

**じせい-たい 磁性體**【名】〔理〕『英Magnetic substance』磁氣感應によりて磁性をあらはすべき物體。鐵・ニッケル・コバルト等のごとき、磁極に近き端に異極を生じて、互に吸引するものと、蒼鉛・アンチモン・鉛等のごとき、同極を生じて、互に反發するものとあり。前者を常磁性體又は强磁性體といひ、後者を反磁性體といふ。

**しせい-だう 施政堂**【名】勢城國石城(イハキ)郡平町に在りし藩學(ガクセイ)藩の學校。寶暦中、藩主安藤信成の創設、明治四年に廢す。

**しせい-だう 詩聖堂**【名】〔人〕おほくしだう(大窪詩佛)の號。

**しせい-とぶ 市制都府**【名】市制を布かれたる都府。

**しせいはがき 私製葉書**【名】民間にて、印刷し製造する葉書。我が國にては、明治四十二年遞信省令私製葉書製式規則に基づきて作製す。

**しせい-わう 四世王**【名】くわうげんそん(皇玄孫)に同じ。

**しせう 詩鈔・詩抄**【名】詩を拔書きしたる書物。

**しせう 私消**【名】公の金品を私人として勝手に消費すること。

**しせう 嗤笑**【名】あざけり笑ふこと。冶

**しせう 至小**【名】きはめて、小さきこと。

**しせう 翅箱**【名】〔動〕『英Elytra』甲蟲類の前翅。角質・强硬にして、鞘狀をなし、飛翔の用に當る膜質軟翅の後翅を、その背ふせ、翅を覆ひて保護す。

**じせう 自笑**【名】〔人〕はちもんじやじせう(八文字屋自笑)を見よ。

**じせうさん・さうえん 次硝酸蒼鉛**【名】〔化〕雪白色の重き結晶性粉末。水に溶けず、蒼鉛と硝酸とにて、硝酸蒼鉛を造り、熱湯に攪(ハ)交して加水分解せしめ、集め乾かして製す。吹爆剤として、胃腸病に用ひ、また消毒の効あり。白粉(オシロイ)に配しても用ふ。硝酸第二蒼鉛。

**じせう-じ 慈照寺**【名】■ぎんかくじ(銀閣寺)の正式の名。

寺)に同じ。 ㊂甲斐國中巨摩(コマ)郡龍王寺村にある曹洞宗の寺。有富山と號す。武田信玄の創建。宗見の開山。

**じせうーねん** 慈照院【名】〔人〕あしかがよしまさ(足利義政)の諡。

**しせき** 咫尺【名】〔名〕『咫は周尺の八寸』㊁短き距離。近き距離。「咫尺を辨ずる能はず」平家「策を惟幕の中に運らして、勝つ事を咫尺のもとに得たり」㊂貴人などに接近すること。太平記「殊に龍顔に咫尺し奉って」

**しせき** 士籍【名】さむらひの分限。士分。

**しせき** 史籍【名】歴史に關する書籍。史書。

**しせき** 指斥【名】〔名〕『斥も指す意』指さすこと。

**しせき** 矢石【名】㊀矢と彈石と。やだま。「矢石を蒙る」㊁矢石の飛び來る所。

**しせき** 齒石【名】齒牙の表面に、唾液を介して沈著する物質。主として、石灰鹽類より成る。はじぼ。唾石。

**じせき** 次席【名】㊀次の席。㊁首席のつぎ。

**じせき** 事蹟・事跡・事迹【名】事のあと。事實の形跡。あとかた。

**じせき** 事績【名】事のいきさを。成したる事柄。

**じせき** 磁石【名】〔鑛〕じしゃく(磁石)に同じ。

**じせき** 耳石【名】〔動〕『英 Otolith』下等動物の聽器、即ち耳囊内の液中に存する石。蔵の動搖、即ち耳囊内の液中に存する石。蔵の動搖と共に動搖して、耳囊壁の感覺毛を刺戟すと稱せらる。多くは耳囊壁の皮膜より分泌せられて生ずるものにて、その成分は、炭酸石灰もしくは燐酸石灰なれど、海鼠(ナマコ)のごとく、弗化石灰なるもあり。また蝦蟹のごとく、軍に外界の砂粒を收めて代用するものあり。聽石。

**しせきえい** 紫石英【名】〔鑛〕むらさきいろのしゃ(紫水晶)に同じ。

**じせきーさん** 慈石散【名】古の散藥の一。和名抄「散藥……慈石散」

**しせきーしふらん** 史籍集覽【名】〔書〕塙保己一の群書類從に倣ひて、國史に關係ある書冊を編纂せるもの。全部を前集・後集に分ち、各集を通記類・雜錄類・別記類等に類別し、四百四十五種を收む。近藤瓶城の編。後これを增補し、改訂史籍集覽と稱す。

**しせきーねんぺう** 史籍年表【名〔書〕神武天皇より後陽成天皇の元和二年までの、各年の史實を始るべき書目を擧げたるもの。一卷。伴信友の著。

**しせきーめいしようーてんねんきねんぶつーてうさくわい** 史蹟名勝天然記念物調査會【名】内務大臣の監督の下に、會長一名、委員二十八名以内及び幹事一名を以て組織し、史蹟・名勝・天然記念物に關する事項に就き、各省大臣の諮問に應じて、意見を開陳し、また同事項につき、主務大臣に建議する機關。大正八年の設置。

**しせきーめいしようーてんねんきねんぶつーほぞんほふ** 史蹟名勝天然記念物保存法【名】史蹟・名勝・天然記念物の保存に關する法律。大正八年の公布。

**しせつ** 師說【名】師匠の說。師の考。

**しせつ** 私說【名】自分一己の說。

**しせつ** 私設【名】一私人の設置。(官設に對して)

**しせつ** 施設【名】〔名〕『英 Establish』設くること。

**しせつ** 使節【名】『古、支那にて、他國に赴く使者には、符節を賜はりしよりいふ』㊀若命を奉じて、他國に使する官人。㊁地方官となりて、地方に赴任する者。

**しせつ** 士節【名】士人としての節義。

**しせつ** 志節【名】せつぎ(節義)に同じ。

**しせつ** 支節【名】支體と關節と。

**しせつ** 雌節【名】『淮南子の「聖人守法道而抱雌節」とあるに本づく』柔順なる節義。

**しせつ** 四節【名】「鞍の四節」の略。

**しせつ** 肢節【名】〔地〕『獨 Gliederung』陸地の輪郭より分岐せる半島・岬角・山嶽等の部分。

**しせつ** 紫雪【名】紫色の雪。舊曲「水宮「仙家に、紫雪・紅雪として、藥の雪あり」

**しせつ** 死絕【名】〔名〕死ねること。㊁ぞ家の人人、死に絕ゆること。

**しせつ** 四絕【名】四つのすぐれたる物事。

**しせつ** 齒舌【名】〔動〕『英 Odontophore』多くの軟體動物の有する咀嚼器。喞喉の下壁の隆起して、中に軟骨を含み、且つ筋肉に富みて、舌狀をなし、その表面に數多の小齒列を有する角質の膜、即ち齒板を被れるもの。

**じせつ** 自說【名】自分の意見。

**じせつ** 時節【名】㊀時候。季節。㊁よ。時世。㊂をり。ばあひ。時機。㊃よき時機・好機會。 細坂反連歌「文平、時節と、女房を先へ押出し、背をつき、我が身も手をつき、頭をさげ、訴訟ありげに見えければ」

時節を待てよ柿の種【句】『徐に待てば柿の種も實を結ぶ日あるべしとの意』

何事も時節を待てよ【俚諺】時節柄【副】時節につれて。

**じせつーがら** 時節柄【副】時節につれて。時節相應に。時分がら。

**しせつ**・**しぢやう** 私設市場【名】個人相集りて設立したる市場。(公設市場に對して)

**しせつ**・**たん** 紫雪丹【名】古の丹藥の一。和名抄「紫雪丹」

**しせつ**・**てつだう** 私設鐵道【名】個人又は個人團體の經營せる鐵道。(官設鐵道に對して)

**しせつてつだう**・**はふ** 私設鐵道法【名】私設鐵道設立に關する諸種の事項を規定したる法律。

**しせつ**・**でんしん**・**でんわ** 私設電信電話【名】私人の經營にかかる電信電話。我が國には、一邦内における專用に供し、また電報受信の目的にて、一人の專用に供するため、電信官署との間に數設する等の特別の場合にのみ許可せらる。

**しせつ**・**ほぜいさうこ** 私設保稅倉庫【名】『英 Private bonded warehouse』政府の特許を得て私人の經營する倉庫。

**じせふ** 侍妾【名】こしもと。そばめ。

**じせふ**・**だいし** 慈攝大師【名〔人〕しんじやう(眞盛)に同じ。

**しせん** 詩仙【名】詩に秀でたる人。詩聖。

**しせん** 詩筆【名】詩を書く料紙。種種の模樣あり。吟箋。

**しせん** 指尖【名】ゆびのさき。

**しせん** 子錢【名】りせく(利息)に同じ。(母錢に對して)

**しせん** 紙錢【名】〔名〕かみぜに(紙錢)(一)(二)に同じ。

**しせん** 紙線【名】かみより(紙縒)に同じ。

**しせん** 視線【名】『獨 Gesichtslinie 英 Line of vision』眼の中央小窩と外界の注視點とを連結する直線。また兩眼の視線の過ぐる面を視面と呼ぶ。凝視線。

視線上の運動【句】『英 Motion in the line of sight』物體が觀測者より遠ざかり、又はこれに近よる運動。

視線上の速度【句】『英 Radial velocity』視線上の運動の速度。分光器にて測定するを得。

**しせん** 支線【名】㊀えだはに分れたる線。(幹線に對して)㊁『英 Spur』電柱を支ふるための鐵線。

**しせん** 支戰【名】前哨又は分遣隊など、小部隊の間に行はるる戰鬪。(本戰に對して)

**しせん** 支川【名】支流の川。えだがは。(本川に對して)

**しせん** 死線【名】『英 Dead wire』架空線に於て使用せざる廢線、又は磁界を通じて發電子を廻轉せしむる時、磁力を發せざる線の部分。(活線に對して)

**しせん** 死戰【名】けっせん(血戰)に同じ。

**しせん** 四戰【名】地形上、何れの方面よりも、敵の攻擊を受くべきこと。「四戰の地」

**しせん** 私戰【名】〔名〕個人間の戰。私鬪。

㊁國際上の戰にあらずして、私人又は私團體が他國に對して起す戰。

**しせん** 私賤【名】古の賤民の一。私人に使役せられし奴婢。物品と同じく、交易賣買せられたり。(公賤に對して)

令義解「公賤賣レ輕、私賤賣レ重」「して」

**しせん** 私船【名】私有の船舶。(官船に對して)

**しせん** 私擅【名】氣まま。自分勝手。

**しせん** 絲腺【名】蜘蛛類の腹部にありて粘液を分泌する線。

**しせん** 紫蘇【名】紫色のひげ。あかひ。げ。大平記「紫蘇の老翁は俗二錦綾二」

**しせん** 四善【名】『舊唐書の職官志に見





え、我が國にても、これに倣へるもの。古、支那及び我が國にて、官吏勤勉の成績を考査する標準とせし四つの善行、即ち德義の著しきもの、清儉の著しきもの、公平の稱すべきもの、恪勤にして懈らぬもの。

**しせん** 至善【名】〔名〕最上の善。㊁〔哲〕さいかうぜん(最高善)に同じ。

**しせん** 自然【名】〔名〕自(ヅカ)ら然る狀態。㊁人爲の加はらざる狀態。じねん。てんねん。㊂造化の力。造化の道。㊃人力にて左右するを得ざる狀勢。㊄本性。天性。㊅『英 Nature』宇宙の萬象中、人類以外の全部。自然物と自然力とに分つ。各その條を見よ。「自然と人生」

自然崇拜【句】〔哲〕『英 Nature worship』自然物又は自然力を、神と思惟して崇拜すること。天然崇拜。

自然に反れ【句】〔佛蘭西のルソオ(J. J. Rousseau)の語 Return to nature に本づく』社會の因襲的制度より受けたる惡影響を脱して、人性自然の無垢なる狀態に反れ。〔誌語〕

「しに」に同じ。

**じねん** 自然の齊一(ヒトシ)【名】〔哲〕「天然の齊自然の法則【句】〔哲〕しぜんりつ(自然律)に同じ。

自然の摸倣【句】『英 Imitation of nature』自然界の事物を材料とし、これを摸倣して、藝術品を作り出すこと。

**しぜん** 自然【名〔名〕偶然に事の發生するさま。萬一。「足利時代の語」 狂言記「盆人盡歌「自然見えあたりたりとも、別の事も有るまい」 節曲「鉢の木」「自然の事も候はば」

**じぜん** 自擅【名】わがまま。きままま。

**じぜん** 自撰【名】自己の撰述。

**じぜん** 自選【名】〔名〕みづから行ふ選定。㊁自己の選擧。

**じぜん** 事前【名】事の起る前。(事後に對して)

**じぜん** 寺前【名】寺院の前。

**じぜん** 慈善【名】めぐみ。あはれみ。いつくしみ。「じ。

**しせん**・**か** 子錢家【名】かねかし(金貸)に同じ。

**じぜん**・**か** 慈善家【名】慈善を行ふ人。

**しぜん**・**かい** 自然界【名】『英 Natural world』人間界、又は生物界以外の、天地間にある萬物。てんねん。

**しぜん**・**がくくわ** 自然學科【名】『英 Natural lessons』自然界の現象を研究する學科。理科の類。

**しぜん**・**がす** 自然瓦斯【名】てんねんがす(天然瓦斯)に同じ。

**しぜん**・**かんきん** 私擅監禁【名〔法〕ほしいままに人を私家に監禁すること。

**しぜん**・**きん** 自然金【名〔鑛〕『英 Native Gold』天然に產する金。通常、多少他物を混じ、粒狀・鱗狀・毛狀等をなす。岩石中にあるものを山金、河床中にあるものを砂金といふ。

**しぜん**・**きん** 自然銀【名〔鑛〕『英 Native silver』天然に產する銀。銀鑛脈中に苔狀又は樹枝狀をなして存在し、新鮮なるは銀白色なれど、多くは表面變化して、黑色の銹を有す。但し我が國の鑛山にては稀に產出す。

**じぜん**・**きん** 耳前筋【名〔醫〕耳殼の前側部に存する小筋。その收縮によりて、耳翼軟骨を前駆す。

**じぜん**・**くわい** 慈善會【名】貧民・孤兒・癈疾者・病者・罹災者等を救恤する目的にて設けたる會。

**しぜん**・**くわがく** 自然科學【名】『英 Natural science』自然の物質的現象を研究する科學。即ち天文學・物理學・化學・動物學・植物學の類。(精神科學に對して)

**しぜん**・**けい** 自然形【名】自然のままの形。

**しぜん**・**けいざい** 自然經濟【名〔經〕『獨 Naturalwirtschaft』㊀かぜくけいざい(家族經濟)に同じ。㊁じつかけいざい(實物經濟)に同じ。

**しぜんけいざい**・**じだい** 自然經濟時代【名〔經〕自然經濟の行はれし時代。

**しぜん**・**けう** 自然教【名〔哲〕しぜんしゅうけう(自然宗教)に同じ。

**しぜん**・**けん** 自然權【名〔法〕『英 Natural right』自然法により認められし權利。

**しぜん**・**し** 自然死【名〔醫〕『英 Natural death』孤傷・病氣等のためならで、自然に壽命盡きて死ぬること。

**しぜんじ** 使宣旨【名】檢非違使(ケビ)別當を補する宣旨。

**しぜんじ** 指宣旨【名】『その人の指す所に從ふ宣旨の義なりといふ』分宮を求むる者が、一二國の缺を載せ、その中にて望む國の儉に、畫を點じて出だしたる申文に從つて命ずる宣旨。

**しぜん**・**じ** 司善寺【名】だいぜんじ(大膳職)

**じぜん**・**じげふ** 慈善事業【名】慈善を目的として營む事業。

**しぜん**・**しふ** 私撰集【名】多くの歌人の歌を個人にて撰したる歌集。(敕撰集に對して)

**しぜん**・**じん** 自然人【名〔法〕一個の人類にて、權利の主體たるもの。(法人に對して)

**しぜん**・**しんがく** 自然神學【名〔基〕『英 Natural theology』天啓の興ふる所によらず、自然界にあらはれたる材料に基づきて、神の存在・性質・關係等の問題を系統的に研究する學。(超自然神學に對して)

**しぜん**・**しんけう** 自然神教【名〔哲〕次條に同じ。

**しぜん**・**しんろん** 自然神論【名〔哲〕『英 Deism』神は世界を創造せしかど、その後の進行に對しては、自然の法則を以て支配するのみなりと主張し、奇蹟・豫言・天啓等を排斥し、理性を以て、宗教の軌範となす思想。自然神教。超然神教。超然神論。理神論。理神教。

**しぜん**・**しんわ** 自然神話【名】てんねんしんわ(天然神話)に同じ。

**しぜん**・**しやくわい** 自然社會【名〔社〕『英 Natural society』平等にて、服從關係の未だ生ぜざる狀態にある社會。自然の集會の結果として生じたる社會。(政治社會に對して)

**しぜん**・**しゅうけう** 自然宗教【名〔哲〕『英 Natural religion』自然崇拜によりてのみ發生せる原始的宗教。この宗教により神は、未だ道德的なる心情と行動とを有するに至らず、只管その意に承順し、その慈善によりて、幸福を享けんとするものにて、自然力の數は甚だ多きため、多くは多神教的なり。自然教。

**しぜん**・**しゅぎ** 自然主義【名】㊀『英 Naturalism』〔哲〕しぜんせつ(自然說)に同じ。㊁〔文・美〕『英 Naturalism』一切の技巧を排し、宗教・道德等を蔑して、直ちに人生の現實を描出せんとする主義。その極端なるは、往往肉慾・野性等を寫して、得意とするに至る。第十九世紀の半頃、ロオマン主義の反動として起れるもの。しやじつしゅぎ(寫實主義)參照。㊂男女間の性慾を遠慮なく滿足せしむる主義。(俚語)

**しぜん**・**すう** 自然數【名〔數〕『英 Natural number』一より順次に一つづつ增して得る數、即ち 1・2・3・4・5・6 等。

**しぜんすうはい**・**せつ** 自然崇拜說【名〔哲〕しぜんさうはいせつ(自然崇拜說)に同じ。

**しぜん**・**すいぎん** 自然水銀【名〔鑛〕『英 Native mercury』天然に產する水銀。小滴狀を呈して、辰砂と共に發見せらる。

**しぜん**・**せうどく** 自然消毒【名】自然に行はるる消毒。例へば、人の唾液及び胃液は、黴菌撲殺の効力を有して、胃を强壯ならしむる類。

**じぜんせき** 二千石【名】㊀にせんせき(二千石)に同じ。㊁能(ノウ)の狂言の一。一冠者が主人の許を請はず京見物に行きしが、話を習ひ來れりとて、主人に問はるるまに、二千石の松にこそ云云の曲を謠ひ、却りて主人の怒に觸れて、手討にせられんとして危く助けらるる筋のもの。

**しぜん**・**せつ** 自然說【名〔哲〕『英 Naturalism』㊀精神的出來事を考察するに、物質的出來事の類推に依るか、或はこれと同樣の觀察法に從ふか、或はまた單にこれが連續に過ぎざるものと見る傾向。唯物論と殆ど同義なるもの。又その形而上的原理を排するは、機械論に似たり。物理觀。自然論。自然主義。㊁道德の起源を、人類の自然的衝動に歸せしむる說。自然論。自然主義。㊂宗教より、一切の超自然要素を排斥し、徹頭徹尾、自然的にこれを說明せんとするもの。自然神論のごとき、これな

り。自然論。自然主義。

**しぜん-そうはい** 自然崇拝【名】しぜん(自然)の條下を見よ。

**しぜんそうはい-せつ** 自然崇拝說【名】〔哲〕『英 Naturism』宗教の最も原始的の形は、自然崇拜なりと說くもの。

**しぜん-たいすう** 自然對數【名】〔數〕『英 Natural logarithm』e 即ち 2·7 1 8 23……なる不盡數を底數とする對數。

**しせん-たいほ** 私擅逮捕【名】〔法〕私人が、ほしいままに人を逮捕すること。

**しせんだい** 詩仙堂【名】京都北叡山の西麓一乘寺村にある、石川丈山の遺跡。丈山この閑居に、支那漢代より宋代までの詩家三十六人の詩を選び、探胸をして、その像を畫かしめて、これを額上に掲げたり。今も、その像と丈山遺愛の品とを藏す。さんじふろくしせん(三十六詩仙)參照。

**しぜん-たろだ** 自然淘汰【名】〔生〕『英 Natural selection』すべての生物は、その生存する場所の境遇に適應して、種種の障礙に打克ち得る物のみ能く生存繁殖し、然らざる物は、自然に退歩・絶滅に至ること。自然淘汰說といひ、西曆一八五八年英人ダーウィン(C. R. Darwin)・ウレェス(A. R. Wallace)二人の唱導に係る。(人爲淘汰に對して)(雌雄淘汰)參照。

**しぜんたろだ-せつ** 自然淘汰說【名】〔生〕

**しぜんたろだ-ろく** 自然道德【名】『英 Natural morals』原始時代より、人類相互の間に自然に存在する、人間の行爲の自然的規則。

**じぜん-だんたい** 慈善團體【名】慈善事業のために設立せる團體。

**しぜんち** 自然智【名】■本來具はれる智。■[佛]天竺[名所]。幼けれども觀朝の、凡慮の及ばぬ自然智を知らぬぞ後の悔みなる」■〔哲〕『英 Light of nature』啓示を待たずして、眞理を知ることを得べき人性自然の能力。(神惠智に對して)

**しぜんちゆうだん** 自然中斷【名】〔法〕『獨 Naturliche unterbrechung』時效中斷の一。占有の喪失によりて、所得時効の中斷すること。

**しぜん-ちりがく** 自然地理學【名】〔地〕ちもんがく(地文學)に同じ。

**しぜん-つうふう** 自然通風【名】『英 Natural ventilation(又は draught)』船の汽罐の焚方の一。汽罐の火爐內へ、自然に空氣の吸込まるる裝置。(强壓通風に對して)

**しぜん-てき** 自然的【形動】自然なるさま。人爲の加はらぬさま。

**しぜんてき-いし** 自然的意志【名】〔哲〕『英 Natural will』心理學にて、衝動・欲望の如く、自然的もしくは本能的に發動する意志。これに思慮の加はりて、その發動を決定する時は、惟性的意志といふ。

**しぜんてき-こくきやう** 自然的國境【名】『英 Natural boundary』山川・海湖等によりて、自然に定まれる國境。

**しぜんてき-じつざいろん** 自然的實在論【名】〔哲〕『英 Natural realism』實在論中の最も單純なるものにして、吾人が外界に對する知覺によりて、外物の存在を認め、また內界の內省にて、精神の存在を認むと云ふ事實に基き、これを正確なる認定と見做して、外物及び精神の存在を承認する見解。自然的二元說。**そぼくてきじつざいろん**(素朴的實在論)參照。

**しぜんてき-ちえき** 自然的地役【名】〔法〕『羅 Servitus (juris gentium naturales)』國際地役の一。一國が、國際法上、他國にその領域を使用せしめざるべからざる場合のもの。

**しぜんてき-にげんせつ** 自然的二元說【名】〔哲〕『英 Natural dualism』しぜんてきじつざいろん(自然的實在論)に同じ。

**しぜんてき-はふそく** 自然的法則【名】〔哲〕しぜんはふそく(自然法)に同じ。

**しぜんてき-ひつぜん** 自然的必然【名】〔哲〕『英 Natural necessity』一定の出來事が、自然法に從ひて生起せざるべからざる場合。

**しぜんてき-らうむ** 自然的勞務【名】〔經〕

**しぜん-てつ** 自然鐵【名】〔鑛〕『英 Native iron』遊離して、天然に存在する鐵。

**しぜん-てつがく** 自然哲學【名】〔哲〕『英 Natural philosophy』哲學の一部門。物的自然を對象とするもの。(精神哲學に對して)

**しぜん-てつだう** 支線鐵道【名】支線に通ずる鐵道。

**しぜん-てん** 四禪天【名】〔佛〕色界(しきかい)の十八天を、四天に大別したるもの。即ち梵衆・梵輔・大梵の三天を初禪天、少光・無量光・光音の三天を第二禪天、少淨・無量淨・遍淨の三天を第三禪天、無雲・福生・廣果・無煩・無熱・善見・善現・色究竟(しきくきやう)の八天を第四禪天といふ。四禪。「同じ。

**しぜんと** 自然と【副】しぜんに(自然に)に

**しぜんとう** 自然銅【名】〔鑛〕『英 Native copper』遊離して、天然に存在する銅。硏と純粹なるものにて、通例、樹枝狀又は苔狀をなす。きりめいし。じねんどう。

**じぜん-とうへう** 自選投票【名】みづから自己を選擧する投票。

**じぜん-なべ** 慈善鍋【名】歲末に、人通繁き辻に出して、その中に任意の喜捨を乞ふ鐵鍋。その喜捨を以て、餅その他の物品を購ひ、貧困者に贈與する救世軍の施設。

**しぜんに** 自然に【副】おのづから。じねんに。天然に。しぜんと。

**しぜんは** 自然は【副】遂には。ひとりで。

**しせんばい** 私專賣【名】その主體が一私人たる專賣。

**しせんはっせい-せつ** 自然發生說【名】〔哲〕むせいきげんせつ(無生起源說)に同じ。

**しぜんはふ** 自然法【名】『英 Natural law』■〔哲〕天地間の事物の、存在し且つ變化するに就きて、それぞれ支配せらるる、一定不易の法則。即ち齊一律及び因果律。天然の法則。自然的法則。自然の法則。自然律。■〔法〕時代と同情とを超越したる千古不易萬邦普通の大法。その起原に關しては、原始的社會に行はれし法律の意に解するものと、純思辨的に發見せんとする理想的のものとする說と、人性に基づける法の意に解せらるものとあり。普通には第三の意に解せらるるが故に、一名、性法といひ、また理想的のものとする意にて、理性法ともいふ。(人定法に對して)

**しぜん-び** 自然美【名】〔哲〕『英 Natural beauty』自然界の美觀。即ち風景の美、動・植物の美など。(藝術美に對して)

**じぜん-びやうゐん** 慈善病院【名】慈善のために設けたる病院。

**しぜん-ぶつ** 自然物【名】〔經〕『英 Commodities』■自然界に存する有形物。■自然の一。生產の材料を供給するもの。物質的なる自然。即ち食飲・魚介・草石・鑛物など。天然物。天產物。

**しぜん-ぶんるい** 自然分類【名】〔生〕『英 Natural classification』生物分類法の一。その系統の遠近・親疎を標準としたるもの。主として、進化論の究明に伴ひて發達し來れり。自然分類法。(人爲分類に對して)

**しぜんぶんるいはふ** 自然分類法【名】〔生〕前條に同じ。(人爲分類法に對して)

**しぜん-ぺうしや** 自然描寫【名】〔文〕■山川・草木の如き自然物を描寫すること。■技巧を弄せざるありままの描寫。

**しせん-ぺんごにん** 私選辯護人【名】被告人の自由に選定したる辯護人。(官選辯護人に對して)

**しぜん-ぼく** 自然木【名】栽培によらず、天然に生長したる木。てんねんぼく。〔俳諧〕草鞋・果報生れついたる人は、たとへば自然木のごとし。自然木は風にあたりても枯ること稀なり」

**じせん-まんきんしふ** 自撰漫吟集【名】〔書〕僧契沖の詠歌を自撰したるもの。一卷。

**しぜん-めんえき** 自然免疫【名】〔醫〕『獨 Naturliche immunität』又 Angeborene immunität』動物中、體質により、生來或種の傳染病の病毒に感染せざること。例へば人類・家畜以外の諸動物の、黴毒に對しては感染せざる類。

**しぜん-やみ** 自然止【名】〔商〕帳合米の相場の、火鼎の燃えつくるまでに、直段成







立せずして終ること。ひなはねだん(火鼎直段)參照。

**しぜん-ゆわう** 自然硫黃【名】〔鑛〕『英 Native sulphur』火山・溫泉等に天然に產する硫黃。多くは土を混ず。

**しぜん-りつ** 自然律【名】〔哲〕しぜんはふ(自然法)に同じ。

**しぜん-りよく** 自然力【名】『英 Natural agent』■自然界に行はるる作用。■〔經〕生產要素の一。人の勞力を補ふ自然の力。非物質なる自然。即ち風力・水力・日光・蒸氣力・電力などの類。天然力。

**しぜん-ろん** 自然論【名】〔哲〕しぜんせつ(自然說)に同じ。

**し** 嗜素【名】食官を刺戟して、その分泌物を增し、腸の運動を助くる、香味ある食物。

**しあ** 尸素【名】『尸位素餐の略』無能にして、官に在り、祿を受くること。

**しい** 緇素【名】『緇は黑衣の義にて、僧衣をいひ、素は染めざる衣の義、俗人の衣をいふ』僧と一般の人と。僧俗。平家「貴賤手を束ね、緇素足を藏く」

**しあ** 私訴【名】せんぞ。そせん。

**しあ** 私訴【名】〔法〕犯罪行爲が同時に私法上の結果を生じたる場合に、その私法上の請求のために、公訴に附帶して提起する訴訟。即ち犯罪行爲より蒙りたる損害の賠償、又は賍物の反還を求むる場合等の類。(公訴に對して)

**しあ** 絲素【名】『英 Fibroin』絹絲の本體。

**しあ** 紫蘇【名】(植)唇形(しんけい)科に屬する一年生の草。園圃に培養せらる。高さ二尺餘、葉は銳頂を有する廣卵形にして、長さ約二寸、表面は暗紫褐色、下面は紫紅色を帶び、七、八月の頃、白色又は淡黃色の花を開く。變種に縮緬紫蘇・青紫蘇などあり。ちそ。いぬえ。のらえ。



**じあ** 自訴【名】みづから訴訟を提起すること。

**じあ** 辭書【名】じしよ(辭書)の約。(古語)「須花」かゝるほどに、大武のじあといふもの、公に奉りたりければ」

**しあう** 駛走【名】すみやかに走ること。

**しあう** 使僧【名】使の僧。太平記「使僧に對面もなく、一言の返事にも及びたまはねば」

**しあう** 詩僧【名】詩を作る僧。

**しあう** 師僧【名】師匠の僧。能化。

**しあう** 詩宗【名】『詩の宗匠の義』詩人の敬稱。

**しあう** 詞宗【名】『詞章の宗匠の義』■詩に秀でたる人。辭宗。■文人又は學者に對する敬稱。阿兄。

**しあう** 指嗾・使嗾【名】そそのかすこと。けしかけること。さしづ。

**しあう** 祇承【名】『祇承(ぎしの)の約』古、勅使下向の時、途次の饗應、その他種種のことを司りしこと。(古語)

祇承の官人【名】祇承のことを掌りし役人。伊勢「ある國のしぎうの官人の妻(ゑ)にてなんある」

**じあう** 寺僧【名】その寺の僧。

**じあう** 辭宗【名】じしう(詞宗)に同じ。

**しあ-がゆ** 紫蘇粥【名】乾したる紫蘇を入れたる粥。正月これを食すれば、邪氣を拂ふといふ。

**しあ-きせき** 紫蘇輝石【名】〔鑛〕斜方輝石の一種。輝石安山岩中に產す。小粒狀又は扁粒狀をなして、黑・黑褐又は黑綠等の色を呈し、劈開著しくして、やや金屬光澤あり。

**しあく** 脂燭・紙燭【名】古、室內にて、蠟燭の如く、火を燈すに用ひしもの。松の木を、長さ一尺五寸、太さ徑三分ほどの棒狀に削り、先の方を火にあぶりて黑く焦し、その上に油を引きて炙り乾し、下を紙屋紙(かみやうし)にて卷きたり。即ち小さき松明(たいまつ)の如きもの。また紙撚(こより)を油に浸して代用せしもあり。和名「紙燭、俗音、之曾久」(藥材)紙燭して廊下すくるや五月雨」

**じあく** 退く【動四自】しりぞく(退く)の略。(古語)源氏「うけたまはりながらしぞきて」

**じあく** 膩足【名】あぶらあし。

**じあく** 自足【名】みづから滿足してあること。みづから足れりとすること。

**じあく** 自足自給【名】(經)「自給自足」に同じ。

**じあく** 自則【名】じりつ(自律)に同じ。

脂燭の歌【名】脂燭の發す燃ゆる間にと、時間の制限を立てて詠む歌。

脂燭の詩【名】前條と同樣にて、歌の代りに詩を作るもの。

**しあく** 子息【名】むすこ。せがれ。

**しあく** 四足【名】■よつあし。獸類。■机などの、四本の足のあるもの。よつあし。

**しあく** 四則【名】〔數〕『英 Four fundamental operations 又 Four species』算術の加・減・乘・除の四法。

**しあく** 四塞【名】四方に山川の險阻ありて、隣國との交通ふさがりたること。「四塞の地」「四塞の國」

**しあく** 私屬【名】一家に隸屬せる者。

**しあく** 親屬【名】しんぞく(親族)の略。源氏「藤つぼの御方のしぞくたちの」

**しあく** 氏族【名】一つ氏のやから。うからやから。

**しあく** 士族【名】■士分の家柄。■族稱の一。華族の下、平民の上に位す。明治維新の際、公家・武家・寺社の世襲の家臣に與へ、各その地方廳に貫屬せしめしもの。但し家祿を奉還する者は、一時金を與へて平民とし、後、士族の分家の者も、華族の分家と同じく、平民たらしめたり。

士族の商法【句】明治維新後、士族の家祿を奉還して得たる金を資本として、馴れぬ商法を營み、多くは失敗に終りしこと。

**しあく** 支族・枝族【名】分れたる一族。分家。「じ。

**しあく** 指嗾・使嗾【名】しそう(指嗾)に同

**しあく** 矢鏃【名】やじり。

**しあく** 嗣續【名】跡をつぐこと。あとつぎ。相續。

**しぞく** 退く【動四自】しりぞく(退く)の略。(古語)源氏「うけたまはりながらしぞきて」

**じぞく** 膩足【名】あぶらあし。

**じぞく** 自足【名】みづから足れりとすること。

**じぞく** 自足自給【句】(經)「自給自足」に同じ。

**じぞく** 自則【名】じりつ(自律)に同じ。

**じぞく** 時俗【名】その時代の人情・風俗。

**しぞく-いろ** 脂燭色【名】■經(ぎ)は紫、緯(ゐ)は紅なる織色。火色に同じといふ。■襲(かさね)の色目の一。表は紫、裏は濃き紅。

**しぞく-くわげん** 四足弓【名】しげそう(重藤)に同じ。

**じぞく-くきゆう** 次屬和絃【名】〔音〕『英 Subdominant』音階の第四音。主音の上方四度即ち下方五度の音。

**じぞく-けいざい** 自足經濟【名】〔經〕『英 Self-sufficing economy』かぞくけいざい(家族經濟)に同じ。

**じぞく-けいざい-じだい** 自足經濟時代【名】〔經〕自足經濟にて滿足せる時代。

**しぞく-さん** 四則算【名】〔數〕算術の、四則のみを用ひて計算するもの。

**しぞく-さんびやう** 四仄三平【名】〔文〕漢詩にて、古句平仄法の一。一韻到底の古詩押韻の句の、上の四字に仄聲、下の三字に平聲を用ふるもの。

**じぞく-じきふ** 自足自給【句】じぞく(自足)の條下を見よ。

**しぞく-にん** 嗣續人【名】さうぞくにん(相續人)に同じ。

**しぞく-まち** 士族町【名】昔の城下の地の士族の集まり住める處。

**しぞく-わんけいにん** 私訴關係人【名】〔法〕私訴上の民事原告人及び民事擔當人。

**しぞく-けん** 私訴權【名】〔法〕私訴の訴權、即ち犯罪に因りて生じたる損害の賠償、贓物(ぞうぶつ)の返還を求むる訴權。

**じぞく-こなひ** 爲損【名】しそこなふこと。しそんじ。

**じぞくこなふ** 爲損ふ【動四他】しそんず(爲損ず)に同じ。

**しぞく-しゆ** 紫蘇酒【名】燒酎に紫蘇・桂皮・茴香(ういきやう)等の浸出液を混じたる芳香・甘味の銘酒。また近來は、味醂に紫蘇を混じても製造す。備後國新津(にいつ)の名產。

**じぞく** 爲損ず【動佐變他】しそんず(仕損ず)に同じ。(古語)源氏「老い人どもは、しそじつと思ひて」

**しそつ** 士卒【名】■士分と雑卒と。■つはもの。さむらひ。兵士。

**しそ-てう** 始祖鳥【名】〔動〕『英Archiornis-ornis』古生物の一。世界最古の鳥。爬蟲類と鳥類との間に位する形態を有し、嘴には齒あり。前肢は羽毛を具へて、翼に似たれども、三指を有し、爪を備ふ。蜥蜴(ヤモリ)様の尾を有す。祖先鳥。蛇尾鳥。

**しそなはかす** 爲損かす【動四他】しそんず(仕損ずの)に同じ。〔古語〕 無集抄「きるほどの、いみじき人を、親しき方にもたらば、いつしか、後世をもしそなはかすべき」

**しそば-たつなみ** 紫蘇葉立浪【名】〔植〕唇形(クチビル)科に屬する多年生の草。山地に自生す。高き四五寸、葉は心臓形にして、裏面は紫色を帯び、夏季、紅紫色の花を開く。

**しそ-びしほ** 紫蘇醤【名】赤紫蘇の葉の細かに刻みたるを入れて製したるひしほ。

**しそ-まき** 紫蘇巻【名】■味を附けたる味噌に、麻の實を加へ、紫蘇の葉にて巻きたる食品。■海千・唐辛などの、紫蘇の葉にて巻きたるもの。

**しそまき-うど** 紫蘇姿燭活【名】二寸ほどに切りたる燭活に味を附け、千枚漬の紫蘇の葉にて包み、更に煮たるもの。取肴の附合はせに用ふ。

**しそむ** 爲初む【動下二他】なし はじむ。 雅氏「むつかし事も、しそめてけるかな」

**しそ-むし** 紫蘇蒸【名】食品の一。自身の魚類に、細かに刻みたる青紫蘇を撒布して蒸したるもの。

**しそん** 子孫【名】■子と孫と。見孫。後昆。■血すぢのすゑずゑ。末孫。

**しそん** 至尊【名】■きはめて尊きこと。

**じ-そんわう**(天皇)に同じ。

**じ-そん** 慈尊【名】〔佛〕『じそん(慈氏)を見よ』 みろくぼさつ(彌勒菩薩)(二)の敬稱。 慈氏尊。 書聞、和尚受二持佛法一、至二于慈尊出世一、爲二護持一來向也」

**じ-そん** 自尊【名】自らたかぶること。自重。

**じ-そん** 自存【名】■自己の存在。■〔哲〕『英Egoism』存在するものにつきて、他の原因に制約せられざること。

**じ-そん** 耳孫【名】『耳とは、ただ耳にて聞く義とも、仍と音相通ずるによりて用ふともいふ。 じようそん(仍孫)参照』曾孫の孫。玄孫の子。

**じ-そん** 兒孫【名】子と孫と。子孫。

兒孫の計【句】『宋詩紀事に、天台道士守信の詩なりとて掲げたる「汲汲光陰似二永流一隨時得過便須休、兒孫自有三兒孫計一莫二與兒孫一作牛馬一とあるに本づく。癸辛雜誌には、葉李(ヨウリ)の作とし、紀夢と題して、詩を編に作れり』子孫の生活上の計畫。

**じ-そん-さんゑ** 慈尊三會【名】〔佛〕 りゅうげさんゑ(龍華三會)に同じ。 謡曲「百万」「慈尊三會の曉」

**し-そん-じ** 爲損【名】しそんずること。しそこなひ。失錯。

**し-そん-ず** 爲損す【動佐變他】やりそこなふ。しそこなふ。失錯す。

**じ-そん-もくてき** 自存目的【名】〔法〕じゆもくてき(自主目的)に同じ。

**し-そめ** 爲初【名】しそむること。てはじめ。しはじめ。

**し-ぞめ** 仕初【名】『前條の語の義』德川時代に、正月元日、芝居にて行ひし儀式。初め翁渡(オウナリ)を演じ、次きに一座の役者悉く無憂に出でて祝言を述べ、後に吉例の見得(ミエ)をなし、一同に辭儀を行ひしこと。

**し-そめし** 紫蘇飯【名】紫蘇の葉を鹽にて揉み、細かに刻み、飯の半熟の頃交ぜて炊ぎたるもの。

**し-そら-くがん** 紫蘇落雁【名】干菓子の一。ゆかり紫蘇・梅酢漬の紅粉(コウフン)を混じて製したる落雁。

**じ-そり** 自剃【名】みづから鬚・髪などを剃ること。一代女『小才覺から鬚・髪などを剃して、出類(ヤビ)のかしらを自剃して居る所』

**し-た** 舌【名】■(醫)口腔の下底にある肉發し、咀嚼・嚥下作用を補助し、且つその粘膜には味覺器を有す。舌尖・舌背・舌根の三部より成る。■ことば。言語。 舌が足りない【句】言葉づかひ流暢ならず。言葉どもり勝ちなり。

舌がまはる【句】よく物言ふ。口巧者なり。

舌三寸の喇に、五尺の身を果す【句】言葉を慎まざりしために、身を滅す。口禍に罹る。〔諺語〕

舌存す【句】「齒亡び、舌存す」を見よ。

舌長し【句】多辯なり。多言なり。おしやべりなり。

舌に塵も附けぬ【句】のべつに喋喋と語る。一説に、巧なる言課などを即座になすことをいふと。〔諺語〕

舌の劍は命を絶つ【句】「口の虎は身を破る」に同じ。〔諺語〕

舌の根【句】舌の根もと。舌根。 幕遊却来集生會「二言と吐かば、舌の根引抜いて捻てんず」

舌の根乾かず【句】前言の終るか終らぬ程に、前言を發してより程へず。 幕遊却来集生會、とれどの口で、舌の延びたる奴だ」

舌は鴉の根【句】『老子に「夫舌鴉鵲之門」とあるに本づく。「口は鴉の門」に同じ。〔諺語〕

舌も引かず【句】言ふ處いまだ終らず。 飯田雄「たった今辱めた舌も引かぬに無分別」 平家女護島「笑止笑止と、舌もひかぬに、六波羅より早使」

舌柔かなり【句】言葉の自由に言ひ得るに任せていふ。 平家「悉くも、舌のやはらかなる儘に、口に任せて申し語りける事の淺增しさよ」

舌を咋(ネ)む【句】『後漢書の馬援傳に「姜詩咋二舌一」とあり』 憤(ムカ)りて口を結び、舌端をかむ。

舌を喉ス【句】自らわが舌を喉切りて、自殺をはかる。 丹波奥井「侍ならぬ馬かたを、切って死なすは、勿體ない。舌を喉ふか身を投げるか、似合うたやうに、在郷馬の口取爲て、首くくれ」

舌を出す【句】陰にて嘲る。紅舌三寸。

舌を捫(ヒネ)る【句】『詩經の大雅抑篇に「無易由言、無曰苟矣、莫捫二朕舌一、言不レ可レ逝矣」とあるに本づく』舌を執らしむ。

舌を二枚に使ふ【句】言責を重んぜずして、前後異なりたる言葉を發す。二枚舌を使ふ。

舌を抜く【句】「閻魔に舌を抜かる」を見よ。一代女「もはや五十九になりて、十七といふことは、四十二の大うそ。世の後に鬼が呑めて、舌を抜くべし」

舌を醐(ネブ)す【句】大いに驚く狀にいふ。

舌を振る【句】「舌を卷く」に同じ。平家「妹尾太郎兼康惡れいりてぞ候ひける。その外の侍どもは、舌を振って、ぞ威(オド)合ひける」

舌を振ふ【句】■『史記の淮陰侯傳に「酈生一士、伏二軾掉三寸舌一、下二齊七十餘城一」とあり』雄辯を奮ふ。■天狗に同じ。 保元「この矢を見る者、皆舌を振って、ぞ恐れける」

舌を卷く【句】「淡青の揚雄傳に「醫官博士、卷二其舌一而不レ談」とあり』驚き怖れて、言葉を發する能はず。舌を掉ふ。 用明天皇殯人鹿「命にかけがへらばとて、舌を卷いてぞかぶりぶり振る」

舌を結ぶ【句】『世說の德行篇に「惡子綱不レ能レ結二兒輩舌一」とあり』發言すること能はざらしむ。

閻魔に舌を抜かる【句】虚言をなしたる者は、閻魔に、釘抜にて、舌を抜取らるとの俗說。

三寸の舌【句】舌は、長き僅かに三寸ほどなれども、これを用ひて、雄辯をふるふに足るといふ意。

**した** 簀【名】■『じた(舌)の義』吹奏樂器の要部の一。金屬・竹片又は葦の窠などを薄く切り、その一端は固定し、他端を遊離せしめ、吹きて空氣の流を送る時、振動して、或高さの音を發するやうにしたるもの。音舌。 和名抄「笙……其中受レ簀、俗云二之太一」

**した** 下【名】■低き方。しも。(上(カミ)に對して) 新撰





墓うはせ用したの心も知らなくに深くも人のおもほゆるかな」 ■劣ること、又その人。しも。したやく。めした。 ■少なきこと。としした。 ■相場の安きこと。下落。 ■陰部。しも。

下に【句】次條を見よ。

下に下に【句】土下座(ヒザ)せよ。下に居よ。〔江戸幕府時代に、將軍諸侯の行列が座民に土下座を促せし掛聲〕 一茶「黒門や下に下にと蝋子の聲」

下に出す【句】「下に遣る」に同じ。

下に取る【句】下に出せし物を受く。

下に待つ【句】したまつ(下待つ)に同じ。 拾遺「來ぬ人を下に待ちつつ久方の月をあはれといはぬ夜ぞなき」

下に遣る【句】物を買ふ時、代金の一部に充つるために、不用品を拂ひ渡すこと。 春世風呂「あれを下に遣って、插込のある簪と取替(カヘ)へたがの」

下に居る【句】土下座(ヒザ)をなす。

下へも置かず【句】郷重に取扱ひて、下位にもおらしめず。下座にもおかず。

下結ふ紐【句】したひも(下紐)に同じ。 新勢馬「思へばや下結ふ紐の解けつらん我れをば人の戀ひしものゆゑ」

下よはふ【句】『よは 助辭、よりに同じ』忍び忍びに思をかけて妻とふ。〔古語〕 堀「大和へに行くは誰(ヒ)がつまこもりづのしたよはへつつゆくは誰がつま」

下行く水【句】物に蔽はれたる下を流るる水。 萬葉「したひ山下ゆく水の上に出てずわがもふ心」

下結(ヒ)ふ紐【句】したひも(下紐)に同じ。 古今「花薄穂にいで戀ひば名を惜み下結ふ紐の結ぼほれつつ」

下より這ふ【句】「商人は腹を賣り、客は下より這ふ」を見よ。

**し-た** 心【名】『じた(下)の義。うら(心)を見よ』こころ。心中。心底。〔古語〕 古今「言に出でていはぬばかりぞ水無瀬川したにかよひて戀しきものを」

**した** 【名】こんにゃく(蒟蒻)を云ふ。〔女の語〕

**しだ** 齒朶・羊齒【名】『垂(ダレ)るる物の義』■(植)羊齒(ヨウシ)類に屬する植物の通稱。■(植)うらじろ(裏白)■に同じ。■敎所の一。「だきしだ」等の種類あり。

**じ-だ** 志田【名】〔地〕陸前國十三郡の一。郡役所を古川町に置く。

**じだ** 志太【名】〔地〕駿河國五郡の一。郡役所を藤枝町に置く。

**した** 信太【名】〔地〕常陸國の舊郡の一。霞浦の西岸一帶を占めしもの。明治二十九年河内郡と合して、稻敷郡となれり。

**じ-だ** 接尾【名】したに同じ。東國の古の方言。 萬葉「ひなぐもり春日の坂を越えしだに いもが戀しく忘らえぬかも」

**した** 自他【名】■己れと他人と。彼我。■〔佛〕自力と他力と。

**じ-だ** 自動詞と他動詞と。 〔語〕自動詞と他動詞と。

**じ-だ** 耳朶【名】■みみたぶ。■みみ。耳に入る。聞及ぶ。

**したあき** 下膀【名】次條に同じ。

**したあと** 下膀【名】下方のあご。したあぎ(うは勝に對して)

**したあまし** 舌甘し【形】■物言やさし。言葉やさし。■言葉巧なり。口さき上手なり。

**したい** 支提・支帝【名】〔佛〕『梵Caitya』たふ(塔)の異稱。

**したい** 死胎【名】死したる胎兒。

**したい** 死體【名】しかばね。しがひ。(活體に對して)

**したい** 施體【名】身體の上に加へ行ふ刑の刑。〔句〕〔法〕しんたいけい(身體刑)に同じ。

**したい** 詩體【名】詩歌の體裁。

**したい** 肢體・支體【名】■身體の四肢、即ち手足。■四肢と五體と。身體と手足と。

**したい** 四堆【名】陣形の一。四方に取嬲げ、敵もしその一方を攻破りて、中に入る時は、四方より取圍みて擊つもの。「四堆の陣」

**したい** 四體【名】■頭と胴と手足との總稱。して。 ひたい(五體)参照。■〔文〕佛語の四種の體裁、即ち雅體・野體・俗體・鄙體の併稱。

**したい** 四諦【名】〔佛〕『梵Aryasatyani 又Aryaniatyani 又Tchatusatya の譯語』苦諦・集諦・滅諦・道諦の併稱。苦とは迷界の果報、即ち吾人凡夫の身體等、集とは苦果を招き集むる過去の煩惱、滅とは悟界の果報、即ち迷の苦果を滅して、中道實相の悟に入ること、道とは滅度の因たる正道、即ち苦・集の二者は迷の因果、滅・道の二者は悟の因果にして、この四諦の理によりて道果に至るを、聲聞(ショウモン)といふ。四聖諦。苦集滅道。

**したい** 枝隊・支隊【名】本隊より分れたる隊。

**したい** 齒帶【名】〔動〕しほ(四板)に同じ。

**したい** 姿體・恋體【名】〔文〕しし(詞委)に同じ。

**したい** 詩題【名】作詩の題。

**したい** 次第【名】■上下・前後のならびつづいて。順序。 貴船「三の宮を次第のままに思はれけるに」 ■手つづき。由來。事情。 保元「過たぬ次第を辨へ申せば」 ■能(ノウ)にて、役者の舞臺に現れて、まづその現れたる次第・由來を述ぶる時、又は一番の中、特別なる舞の始まらんとする時に謡ふ七・五・七・五の字數の文句。前者の場合には必ず地取(ヂドリ)を用ひ、後者の場合には、地謡(ジウタ)に謡ひ、又は更に低音に地取を謡ふ。 ■能(ノウ)にて、まづその次第・由來を述べ謡ふ役者の、舞臺に現るる時の囃子(ハヤシ)。大鼓・小鼓を用ひ、冬はあしらひを吹く。

次第不同(ヘイ)【句】順序の整はねこと。 〔古語〕 源氏「元より、しだいならぬ人の御事なれば」

**しだい** 四大【名】■(佛)『圓覺經に「四大謂二人身一、攝二外地水火風四大一、而成二內身四大一、因對二色香味觸一、故稱爲二四大一」とあり』なまみ。人の身。心身。 增鏡「四大本無主、五蘊本來空」 ■『老子の第二十五章に「道大、天大、地大、王亦中有二四大一、王處二其一焉一、人法二地、地法二天、天法二道、道法二自然一」とあるに本づく』道・天・地・王の四つの併稱。四界。四大の歸空【句】〔佛〕『假に形を成せる四大の、本の空に歸する義』形消え失せて死す。四大空に歸す。

四大空(クウ)に歸す【句】前條に同じ。 太平記「五蘊假成形、四大今歸空」

四大の四苦【句】人間の身に於ける生老病死の四つの苦惱。 根源反魂書「四大の四苦を、この身一つに重ね重ねて、空より空に入る」

四大本來空【句】〔佛〕四大種は因緣によりて成れるものなれば、その當體は空なること。

**しだい** 至大【名】極めて大なること。(至小に對して)

**しだい** 次第【接尾】■事の成行に任する意。 義經記「お墓の花も枯れ次第、持佛の香も消え次第」 ■その物事の如何による意。「返答次第に」「出來あがり次第」

**しだい** 事體・事態【名】事のさまざまなること。

「謡退」拒障。

**じ-たい** 辭退【名】へりくだりて否むこと。

**じ-たい** 字體【名】■文字の書きかた。即ち楷書・行書・草書など。■文字の形。

**じ-たい** 自體【名】自分のからだ。

**じ-たい** 自體【副】いったい。ぜんたい。もとより。じたいは。 冥途飛脚「昨今の者は知るまいが、じたいはこれの實子でなし」

**じ-たい** 自大【名】自ら尊大にかまふること。

**じ-たい** 事大【名】『孟子の梁惠王篇に「惟智者能以小事大」とあるに本づく』■小弱國が、大國に依賴して、その存立を維持せんとすること。■弱者が勢力の强き方に附隨ひて、己れの安全を保たんとすること。

**じ-だい** 時代【名】■その頃の世。ときよ。年代。時節。 井筒業平河内通「道を守るも時代による」 ■ふるさきこと。陳腐。■じだいもの(時代物)の略。丹後男生「長刀・袋傘袋、時代の金襴、鶴菱たすき」

時代が附く【句】道具など、何時頃の時代の品なりといひはやさるる程に、古びて價値生ず。時代物らしくなる。

**しーたいあん** 施耐庵【名】〔人〕水滸(スイコ)傳の作者なりと稱せらるる人。元初の武林の人なりといふ。經歷は詳かならず。

**じだい-おくれ** 時代後【名】じせいおくれ(時勢後)に同じ。

**じだい-おやぢ** 時代親父【名】老人を時代おくれの者として輕しめていふ稱。 關八州繁昌記「ひと理屈ある時代おやぢ」

**しーたいかい** 四大海【名】〔佛〕須彌山(シュミ)の四方にある四つの海。 梁王「この御志、須彌山よりも高く、四大海よりも深し」

**しだい-がき** 次第書【名】■理由又は由來を書きたる文書。■順序を書きたるもの。順序書。

**しだい-がら** 次第柄【名】わけがら。なりゆき。仕儀(ギ)。

**しだい-きょう** 四大歸空【句】じだい(四大)の條下を見よ。

**しだい-きょう** 四大奇書【名】〔書〕支那の戯曲小說中、水滸(スイコ)傳・三國演義・西廂記・西遊記の併稱。後には、西廂記・琵琶記を除き、西遊記・金瓶梅を加へていへり。

**じだい-きやうげん** 時代狂言【名】衣冠・甲冑・上下(カミシモ)など著けたる古昔の時代に取材して、脚色したる芝居狂言。時代物。(世話狂言に對して)

**じだい-ぎやうれつ** 時代行列【名】往時に行はれし行列。大名行列の類。

**じだい-ぎれ** 時代切【名】こだいぎれ(古代切)に同じ。 世間子息形氣「時代切の表具に て珍しき掛物を」

**しだい-けんあん** 死體檢案【名】醫師の治療を受けずして死亡したる場合、又は治療を受けし醫師の不明なる場合、その死體に就きて、醫師が外表檢査を行ふこと。

**したい-けんあん** 死胎檢案【名】死胎を檢案すること。檢案する者は、死產に關係なき醫師又は產婆なることを要す。

**したい-けんあんしょ** 死體檢案書【名】醫師が死體檢案の次第を記して作る證書。

**したい-けんあんしょ** 死胎檢案書【名】醫師又は產婆が死胎檢案の次第を記して作成する證書。

**しだい-こじき** 次第乞食【名】〔佛〕次條に同じ。 孝行奇特「なかにも次第乞食とは……」

**しだい-こつじき** 次第乞食【名】〔佛〕■頭陀(ズダ)の行(ギョウ)に十二種ある中の一。身に著せず、衆生を輕んぜず、貧富を擇ばず、次第に食を乞ふこと。■門並に乞食する者。しだいこじき。

**じだい-こんじやう** 事大根性【名】事大主義の根性。事大を重んずる心。

**じだい-さく(じ)** 時代錯誤【名】『英 Anachronism』時代遲れの思想・感情を以て、現代のすべてを律せんとすること。

**しだい-し** 次第紙【名】大和國より產する一種の厚紙。

**しだい-し** 次第司【名】儀式などの時、身分などの次第を立てて、亂れぬやうにする人。賀茂の祭の次第司に出でたちて」

**しーたいし** 四大師【名】大師の號を賜はりたる四人の僧、卽ち傳敎大師(最澄)・慈覺大師(圓仁)・弘法大師(空海)・智證大師(圓珍)の併稱。

**しーたいじ** 四大寺【名】我が國の古代に、朝廷の祈願所たりし四箇の大寺、卽ち藥師寺・元興寺・興福寺・大安寺・又、後には、東大寺・興福寺・延曆寺・園城寺の併稱。四箇の大寺。

**しーたいしう** 四大洲【名】■四つの大なる洲。四つの大陸。■〔佛〕しとう(四洲)に同じ。正法記「この海中に四大洲あり」

**じだい-しさう** 時代思想【名】じだいせいしん(時代精神)に同じ。

**じだい-しでう** 時代思潮【名】前條に同じ。

**じだい-しやうるり** 時代淨瑠璃【名】時代物を仕組みたる淨瑠璃。

**しーたいしゅ** 四大種【名】〔佛〕■地・大・水・火・風大の併稱。古・印度にて、四者共に、その體相用共に大にして、一切の色法(シキホウ)を構成する因種(成分)なりと考へられしもの。卽ち地大は、すべての堅性の屬する所にして、堅凝を性とし、物を任持するを用とし、水大は、すべての濕性の屬する所にして、潤潤を性とし、物を收攝するを用とし、火大は、すべての溫性の屬する所にして、煖熱を性とし、物を成熟するを用とし、風大は、すべての動性の屬する所にして、動轉を性とし、物を長養するを用とす。この四種は萬物の元素なり。■しだい(四大)(ロ)に同じ。

**じだい-しゅぎ** 事大主義【名】一定の主義を有せず、勢力の强大なる者に事ふる主義。

**じだい-せいしん** 時代精神【名】『英 Spirit of the age』或時代において、社會人心の大體を支配せる思想。時代思潮。

**じだい-せわ** 時代世話【名】芝居狂言の、半ば時代物になれば世話物なるもの。(「世話」に對して)

**じだい-たう** 事大黨【名】事大主義を標榜する黨派。

**しだい-だか** 次第高【名】順順に高くなりゆくこと。一代玄(ヒ)集の問(モ)せはしからず、次第高に、口ちひさく」

**しだい-だな** 次第棚【名】床間(ドコ)・書院などの脇に設くる棚。押板の代りに用ひてよしといふ。

**じだい-ちがひ** 時代違【名】■時代を異にすること。五人玄(ヒ)かかる美女のあるべきものか。藥平に、時代違にて見せぬことの口惜し」■その時代違にて見せぬこと。その時代の流行と背反すること。

**じだい-つき** 時代附【名】時代が附くこと。

**じだい-てんわう** 四大天王【名】〔佛〕してんわう(四天王)(ロ)に同じ。

**しだい-な** 次第名【名】順序を逐ひて附けたる人名。太郎・次郎・三郎又は與一・吉二・虎三などの類。

**しだい-に** 次第に【副】つぎつぎに。段段に。順に。漸次に。 源氏「この事次第に、六波羅にて尋ね沙汰するほどに」

**しだい-はばき** 次第脛巾【名】脛巾の一種。下賤の者の用ふるもの。その製詳かならず。 虛實記「次第脛巾に編笠を著」

**しだい-ひり** 下關【名】目下の者を虐待すること。

下關の上詔(ジョウ)【句】目下を虐待して、目上に諂ふこと。(諺語)

**しーたいふ** 士大夫【名】支那にて、士と大夫との併稱。士夫。

**しーたいぶきやう** 四大部經【名】〔書〕華嚴(ケゴン)經・涅槃(ネハン)經・寶積(ホウシャク)經・般若(ハンニャ)經の併稱。四經通じて八百四十一卷。これを五千四十八卷の大藏經に對し、俗に小藏經といふ。

**しーたいほ** 下庵【名】山陰・木の下などに在る家。 俳諧新選「宗祇「下庵の暮るるを知らぬ紅葉かな」

**じだい-まうけ** 時代儲【名】一代まうけに同じからん。 世間娘氣質「これ、みな、唐へなげがねして、時代まうけの分限」

**じだい-まつり** 時代祭【名】山城國京都に鎭座する官幣大社平安神宮の私祭。十月二十五日に行ふ。風俗を先として、時代祭に隨ふ。延曆遷都以來、文物の變移せし各時代の行裝をなし、市中を練(ネ)り、卽日遲御す。行裝は古くは、延曆式官出陣式より藤原鎌倉を初め、明治維新の際の行陣ぶに擬するなど、目のあたりに、各時代を倣ふに足る。明治二十八年始めて執行す。

**じだい-めく** 時代めく【動自四】古代らしく見ゆ。古風に見ゆ。

**じだい-もの** 時代物【名】■■多くの時代を經たる物。古き物。■■歷史上の事柄を仕組みたる脚本・小說・(御家物・世話物に對して)「模樣」

**じだい-もやう** 時代模樣【名】(天)『英 Anachronism』

**しーたいやう** 親太陽【名】(天)『英 Anapsis』に同じ。

**じだい-やせ** 次第痩【名】時を經るにつれて、身體の痩衰ふること。 玉人玄(ヒ)「愚にせめられ、次第やせに、あたら姿の變りゆく」

**したいれ** 下入【名】したかはらけ(下土器)に同じ。

**したいろ** 下色【名】■■下の色。下地の染色。■物事の末となり、衰へたる形勢。







**じだい-をとこ** 時代男【名】■その時代に、勢力強んなる男。その時代の流行男。■年老いて、現代に遠ざかりたる男。老夫。 五人玄「この主人時代男にて」

**しーたう** 至當【名】至極適當なること。あたりまへ。もっとも。

**したう** 私稻【名】官稻にあらざる稻。(官稻に對して)〔古語〕 書記「田畢私稻」

**したう** 私黨【名】一私人の黨與。私の仲間。わたくしのくみ。

**したう** 支黨【名】わかれの仲間。餘類。

**したう** 紫髓【名】くろたう(黑砂糖)に同じ。

**したう** 四倒【名】〔佛〕しでんだう(四顚倒)に同じ。

**したう** 指導・指道【名】教へみちびくこと。

**したう** 祠堂【名】■■祖先の靈位を安んずる場處。たまや。廟。■ほこら。みや。

**しーたう** 至道【名】人道の至極なるもの。まことのみち。

**したう** 四道【名】■四つの國。四つの道路。(古語)■四方の都面。■古の大學寮に置かれし、紀傳・明經・明法・算道の併稱。正法記「古には詩書・禮樂を以て、國を治むる四術とす。本朝は、四術の學を立てらるること慥かならざれども、紀傳・明經・明法の三道に、詩書・禮を攝すべきにこそ、算道を加へて四道といふ」

**しだう** 師道【名】卽の弟子に對する道。卽純たるべき道。

**しだう** 市道【名】■■利益を爭ふ商人の道。「市道を以て交る」■『漢書の劉輔傳に「天人之所レ不レ予、必有レ鶴而無レ鶴、市道皆共知レ之」とあり』。市道の交をなす人。市中の人。■公道の一。市の費用にて維持するもの。

市道の交【句】利あれば交り、利害相反すれば、離叛する交際。

**しだう** 私道【名】■公明ならざる道。私人の專用に供する道路。私有の通路。■

**しだう** 詩道【名】詩に關する學術。作詩の術。

**しだう** 士道【名】士人の履踐すべき道。

**じだう** 斯道【名】『論語の雍也篇に「謂能不レ由レ戶、何莫レ由斯道也」、孟子の萬章上篇に「予將以斯道覺斯民也」など見ゆ。しぶん(斯文)參照』この道。仁義の道。人道。

**じーたう** 自黨【名】わが黨。みかた。

**じーたう** 耳璫【名】支那にて、冠より垂れ下ぐる耳ふたぎの飾珠。

**しだう-きん** 祠堂金【名】菩提寺に寄附して、先祖代代の供養に充つる金。祠堂銀。祠堂錢。長生錢。しだうち(祠堂地)・しだうぶつ(祠堂物)參照。

**しだう-きん** 祠堂銀【名】前條に同じ。 中興雜草「祠堂銀五百枚奉納致され候」

**したう-けー** 下請【名】次條の略。

**したうけかひ** 下請買【名】他人の請負ひと請負ふこと。したうけ。

**したう-けーにん** 下請人【名】下請負をなす人。

**したう-けん** 志道軒【名】〔人〕奇人。姓は深井、初名は政七。京都の人、江戸に住す。俳形より還俗して、酒色を縱にし、御口に窮して、淺草觀音堂脇、三社權現前に軍談をなし、木製の除蜜を手にして、露出時間の間、正しくその方向を指導するために用ふる肉眼望遠鏡。

**じーたうばん** 兒纏幡【名】纏幡の一。朝賀・卽位式の時、衞門の陣に樹つるもの。兒像纏幡。

**しだう-ぶつ** 祠堂物【名】寺院などに寄付して、先祖代代の供養に充つる品物。しだうぶつ(祠堂)・しだうぶつ(祠堂念)・しだうち(祠堂地)參照。

**したうへ** 舌上【名】くちさき。口上。 十訓「かやうの事、舌上のよき人も力及ばぬ事なり」

**したえ** 下枝【名】次條に同じ。

**したえだ** 下枝【名】草木の下方にある枝。したえ。しづえ。

**したおかんぢやうしょ** 上御勘定所【名】しかんぢやうしょ(下勘定所)に同じ。(うち座に對して)

**したおさへ** 舌押【名】■■おさへ(蛇)に同じ。■企屬又は碩子製の筥(ハコ)にて、舌を抑へ、喉嚨・口腔を見るに用ふる診察用器具。「歷舌子」

**したおし** 下押【名】〔商〕相場の下落すること。おし。「三圓餘の下押を示す」

**したおび** 下帶【名】■裝束の下、小袖の上に締むる帶。したひも。(うは帶に對して)■ふどし(犢鼻褌)に同じ。 盛衰記「さらぬだに寒きに、褌計りに裸なり」

下帶の祝【句】始めて、下帶を締むる祝。男になりたるを祝ひてする事なり。「く孔」といふ。

**したおほめ** 【名】舵の一部、舵板(ダバ)を貫の、假面(ハ)をかぶらぬ場合。 吉備「月やその鉢の木の日のしたおもて」

**したーおもひ** 下思【名】心の中にて思ひなやらも、外に出さぬものおもひ。 蜆「みなとあしに交れる草のしりくさの人みな知りねがしたおもひ」

**したーが【篋】** であるが。けれども。だが。狂言「賣聟「此方には、をな上萬と云うて、娘子がどざらうが。なかなか、御座る。したが、それに就いて參りまして」ござる」

**したーがき** 下書【名】■草案。草稿。案。下書(ハ)。 心中萬年草「國許の狀をも人だのみするなと、下書書いて渡せしが」■清書の前に試に書くこと。■人に書狀を贈る場合に、上所(ロウジョ)の下に官名を書くこと。げしょ。逆上何官殿(ロ)の類。

**したーがき** 下搔【名】しなめ(下染)に同じ。(古語) 田舍集「梅の花うすくれなゐのしたがきをむらむら染むる春霞かな」

**したーかげ** 下蔭【名】樹木などの下の暗き所。 新千載「風わたる横川の杉の下蔭に心の水を手に結ぶかな」

**したーがさね** 下襲【名】■■古、束帶の時、下著とせし衣。半臂(ヒジ)の下に著するを常とし、その背後の裾(スソ)を裾(スソ)と呼び、長くして袍の下に出だし、曳きたるまま歩みしが、後には、裾を胴より切放し、また下襲の代りに、大帷(カタビラ)を著、裾と下襲の襟と

をこれに添へ、その上に袍を著ることとなれり。地紋と色目とは、公卿と殿上人とにより、また夏と冬とによりて差別あり。しが、中古、服色の法度廢れし後は、裾の長さによりて、大臣・納言・參議等の階級を差別したり。源氏「たがさねの色、うへのはかまの紋」 ㊁したき〔下著〕に同じ。

**しだ-かざり** 齒朶飾【名】新年に、裏白を七五三縄(ナハ)に插みなどして飾ること。鶴野縫可「花に來て齒朶飾見る社かな」

**した-かぜ** 下風【名】木などの下を吹く風。千鳥「秋のくるけしきの森のしたかぜに立ちそふものはあはれなりけり」

**した-かた** 下方【名】㊀しもつかた〔下つ方〕に同じ。㊁ほやしかた〔囃子方〕に同じ。素人狂言記切形「素人狂言があるから、囃子方をどうぞおたのん申て、へつたあ」

**した-がた** 下形【名】㊀形木(カタ)。摹型(カタ)。源氏「物のしたがた、ゑやうなどをも御覽じ入れつつ」 ㊁したち〔下地〕に同じ。源氏「おほやけの御後見となるべかめるしたかたなるを」

**したがって** 從って【副】したがひて〔從ひて〕に同じ。

**したがね** 下金【名】㊀下地に用ふる金屬。ぢがね。 ㊁ふるかね〔古金〕に同じ。

**したがねーや** 下金屋【名】㊀したがね㊁を賣買する商、又その人。買集めたる金銀地金を賣買する家、又はその人。買集めたる地金は、金座出張所に賣込むべき義務を有したり。

**したかは** 齒朶革【名】藍地に齒朶を白く抜きたるなめし皮。しながは。

**したがはらけ** 下土器【名】酒を呑みて、したみを垂らし入るる土器。凝淘(カタ)つの土器(カタ)。したいれ。

**したがひ** 下交【名】したま〔下前〕に同じ。〔古語〕

**したがひて** 從ひて【接】それによりて。つけて。それ故に。したがって。

**した-がふ** 從ふ・隨ふ【動四自】『下がふの義』㊀あとに附きて行く。㊁下に附く。服從す。さからはず。順ふ・遵ふ。㊂まかす。ままになる。應ず。後撰「秋の夜に雨ちなりけり」

**した-がふ** 從ふ・隨ふ【動四他】したがはしたがへ 下交【名】したま〔下前〕に同じ。〔古語〕 袋草子「たまは見つゐしは誰れとも知らねどもむすびとめつしたがへの つま」

**したがへ** 下がへ【名】したがさね〔下襲〕に同じ。

**したがま** 志田窯【名】陶器の一種。肥前國志田・小田志・吉田等より製出する陶器。明暦年中に開窯し、專ら皿・茶碗等を作る。「じ」。

**した-かまへ** 下構【名】したみ〔下組〕に同じ。

**した-かんぢやうしよ** 下勘定所【名】江戸幕府時代に、大手門内に在りし役所。組頭以下の東員ここに執務す。下御勘定所。

**した-がり** 下刈【名】幼木を保護する目的にて、下草を芟除すること。年に一二回行ふを宜しとす。

**したき** 下木【名】下方に在る木。一說に、葉の散り落ちんとするきざしのある木。 ㊁大雀(サザキ)佩かせる太刀もと御する玉ふゆ冬木のすがたかはやきやき」

**したぎ** 下著【名】下に著る衣。したごろも。下衣(ハ)。「うは著に對して」

**したぎえ** 下消【名】下の方より おひおひに消えゆくこと。古今「かきくらしふる白雪のしたきえにきえてもの思ふ頃にもあかな」

**したぎき** 下聞【名】あらかじめ聞きおくこと。

**したきっつけ** 下切附【名】したため〔下鞍〕を見よ。

**したぎやはん** 下脚絆【名】歴當の下には「く脚絆。

**したきりすずめ** 舌切雀【名】御伽話の一。爺の愛したる雀、糊を舐めたりとて、婆怒り、その舌を切りて放つ。爺悲しみ、その宿を尋ねかば、雀大いに喜び、土産として大小の葛籠(カズラ)を出す。爺小さきものを貰ひて歸れば、中より種種の珍寶出づ。婆羨みて、雀の宿を訪ひ、大きなる葛籠を貰ひしに、歸途その中より妖怪出でたりといふもの。

**した-たく** 支度【名】㊀たくし〔度支〕を見よ』はかること。見つもること。「路程を支度す」 ㊁用意。準備。「仕度」 ㊂他出せんとして、衣服を著かふること。「仕度」 ㊃他出の際又は途中にて、食事をすること。「仕度」

**した-たく** 私宅【名】私の住家。自己の家。

**した-たく** 四澤【名】『陶潛の四時の詩に「春水滿四澤、夏雲多奇峰、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松」とあるに本づく』四方の澤。

**したく** 拉く【動四他】踏みくだく。にじる。あらす。古今「わがやどの花ふみしだく鳥打たん野はなければやここにしもくる」

**じたく** 自宅【名】我が宅。自己の家。

**じだく-おん** 濁音【名】〔語〕支那の音韻學にて、音の濁音を五種に分ちたるその一。その名もと悉曇(シツ)學に出でたるものにて、支那にも、この音學なく、我が國もこれを缺く。喉音につきていへば、濁音kに對する gの類。即ち濁音の無聲有氣音なるもの。音韻學者中、濁濁音を濁濁音と呼びて、濁濁音に對して、有聲有氣音なるもの。音韻學者中、濁濁音を濁濁音と呼びて、濁濁音に對して）

**したく-かんちーしつ** 私宅監置室【名】私宅監置室の略。

**したく-きん** 支度金【名】支度㊁に要する「金。

**した-ぐくり** 下括【名】げぐくり〔下括〕に同じ。太平記「布衣に下括して」

**した-ぐさ** 下草【名】木の下蔭にある草。千鳥「うらやまし雪のしたぐさかきわけて誰れをとぶひの若菜なるらん」

**したぐさ-えい** 下草永【名】次條に同じ。

**したぐさ-ぜに** 下草錢【名】江戸時代に、官有の山林・原野の下草を特許して刈らしめ、その代金を徵したる金。


(ちくたし)

**したし** 親【名】したしむこと。懇親。

**したしむ** 親しむ【動四自】したしくなる。親しくなる。むつむ。「愛す。

**したしむ** 親しむ【動四他】いつくしむ。親

**した-しんざら** 下新造【名】遊廓の新造の まだ一人前にならぬ者。

**したしんず** 親んず【動佐變自】『親みすの音便』したしむ〔親むに同じ。

**したしんす** 親しんす【動佐變他】『親しみすの音便』したしむ〔親しむに同じ。

**した-しめ** 下締【名】女の、帶の下に締むる細き紐。

**した-しもの** 浸物【名】ひたしもの〔浸物〕の訛。 九東「たんぽぽや五柳親父がしたしもの」

**しだしもやう** 仕出模樣【名】新流行の模樣。一代女「國繹繪もふるされ、當流の仕出模樣『隱繪(ヒカ)の綱りわらひ」

**したしや** 仕出屋【名】仕出㊁をする家。

**した-しよく** 下職【名】下仕事をなす職人。げじよく。

**だ-しよくぶつ** 羊齒植物【名】〔植〕隱花植物の一類。この類に屬するものは世代交番にして、その特徴は、葉は葉に比して短く、概ね厥芽より發生し、葉は分裂し、又は複葉をなすものの多し。葉の裏邊又は裏面に子囊ありて、胞子を有す。羊齒類。

**した-しらべ** 下調【名】豫備の調査。したげいこ。

**した-れうり** 仕出料理【名】仕出屋にて「調へたる料理。

**した-だす** 仕出す【動四他】㊀なし始む。著手す。 ㊁作り出す。 ㊂誂行のて、表面にあらはす。しはじむ。丹波奥生「おとましい事しだしやつて、主に厄介かける」 ㊃立派なる事をなす。でかす。平並「右衛門の督の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに仕出したることよ」 ㊄働きて、身代をふやす。稼ぎ出す。 ㊅船を繰して出發す。〔船乘の語〕

**したすがた** 下姿【名】冠も抱も著けざる 髮を結ぎ準備に、よく髮を梳きおくこと、又これをなす女、即







又は鬟斧(ハ)といひ、三枚なる場合には、上のを上切附、中のを下切附又は中切附、下のを肩附又は鬟肩(ハカタ)といふ。きつつけ。

**した-ぐら** 下倉【名】したの方の倉。十訓「右近府のしたぐらに召籠められる」

**した-ぐるし** 下苦し【形二】心の中に、苦しく思はれてあり。〔古語〕 曾丹集「をしどりのみなるるほどはつれなきをしたぐるしとは知るらめや人」

**した-ぐるま** 舌車【名】くちぐるま〔口車〕に同じ。 源義太子傳記「自慢の舌車」

**した-げいこ** 下藝古【名】練習のために、あらかじめなす稽古。豫習。

**した-けんさ** 下檢査【名】本檢査の前に、あらかじめ行ふ檢査。したけんぶん。

**したけんさ-しよ** 下檢査書【名】下檢査の始末を記したる文書。

**した-けんぶん** 下檢分【名】したけんさ〔下檢査〕に同じ。

**じ-だこ** 字凧【名】太き文字或は龍字にて、月龍・魚などの文字を書きたる凧。〔繪凧に對して〕

**した-こがる** 下焦る【動下二自】心の中に思ひこがる。したもゆ。

**した-こがれ** 下焦【名】心のうちにこがること。したく ゆること。したこい。 ㊁したもえ。〔古語〕 千鳥「難波江のすくもたく火のしたこがれ上はつれなきわが身なりけり」

**した-こき** 舌扱【名】舌のあかをこきおとす具。齒みがき楊枝などに附屬す。

**した-ごころ** 下心【名】㊀心のそこ。心のうち。 枕「下心には、いと疎しけれど」 ㊁心のそこの考。狂言「上地蔵「したごころ有つて申した事でござる」 ㊂かねて思ひ設けたること。豫期せること。豫想。 図漢字の脚部の一。思・怒などのごとく、田或は奴の下に在る心の字の稱。

**した-こしき** 下腰巻【名】〔植〕しびとばな〔死人花〕を云ふ。大和國の方言」

**した-こしら** 下拵【名】したくみ〔下組〕に同じ。

**した-こしらへ** 下拵【名】したくみ〔下組〕に 盛衰記「舌强くして、思ふことをも言ひおかず」

**した-こひ** 下戀【名】心のうちに戀ふること。したこがれ。〔古語〕 萬葉「青丹よし奈良の右のわぎへにぬえ鳥のうらなげくしつつ下戀に思ひうらぶれ」

**した-ごろも** 下衣【名】したぎ〔下著〕に同じ。〔古語〕 萬葉「白妙のあが下衣うしなはずもてれわがせこただにあふまでに」

**した-さいく** 下細工【名】下ごしらへ、又は下請(カタ)の細工、又これをなす職人。

**した-さうだん** 下相談【名】本相談の前に、あらかじめなす相談。

**した-さき** 舌先【名】㊀舌のさき。舌頭。舌端。 ㊁くちさき。口頭。言葉。口上。

**した-さく** 下作【名】ささく〔小作〕に同じ。

**した-さしあみ** 下刺網【名】さしあみ〔刺網〕を見よ。

**し-さつ** 試刷【名】こころみに印刷すること。ためしずり。

**した-さん** 下棧【名】鉈(ヤ)の一部。のぼりも、修繕の事に關せしより並べていふ』

**した-さんぶぎやう** 下三奉行【名】『いづ江戸時代に於ける普請奉行・小普請奉行・作事奉行の併稱。

**した-さや** 下鞘【名】㊀太刀の鞘袋ならん。 ㊁〔商〕當月限より翌月限の相場方低きこと。〔上鞘(サヤ)に對して〕

**した-し** 親し【形二】㊀血縁近し。 ㊁親しい。

親しき仲には垣をせよ【句】あまり親密に過ぐるは、却りて、不和の本なれば、親密なる中にも、守る所あれかし。思ふ仲には垣をせよ。〔諺語〕

親しき仲は遠くなれ【句】前條に同じ。〔諺語〕

**し-だし** 仕出【名】㊀しだすこと。造り出すこと。 ㊁新しき流行。新工夫。一代男「これは變った仕出と、樣子を問へば」 代女「小袖の紋がらも、この程の仕出に、縫切の櫻鹿子」 ㊂誂に應じて、料理を誂主へ送ること。〔まへ。調進。 図芝居の幕あきなどに、本筋に關係なくして、一寸舞臺に現はるる人物。狂言の筋を賣り、又はそ

**したしみ** 親【名】したしむこと。

**したしむ** 親しむ【動四自】したしくなる。

**したしむ** 親しむ【動四他】したしくする。

**したしみ-べんたう** 仕出辨當【名】新しく案じいだしたる調味の辨當。一代女「女なから美食好み、鶴屋の餌頭…檜屋の蒲鉾、棟木(ヤ)節の仕出辨當」

**しだし-べんたうーや** 仕出辨當屋【名】仕出辨當を賣る家。五人女「祇園町の仕出辨當屋の蔭に、附紙(ツケ)目印に錐と鋸を書きおきしが」

**したしら** 下拵【名】したくみ〔下組〕に同じ。

**した-しらべ** 下調【名】豫備の調査。したげいこ。

**した-しらべ** 下調【名】豫備の調査。したげいこ。

**した-しんこ** 下鮨【名】㊀したしたる輕き役。多くは、稻荷町(ツケ)の役者、これを勤む。 ㊁蒼田したる汁。すまし。今宮心中「なんの料理につかうても、しだしがうまい」

**しだし-いしやう** 仕出衣裳【名】新流行の衣裳。五人女「すみ所は室町通、仕出衣裳の物ごのみ、當世女のただ中、廣い京にも又あるべからず」

**した-じき** 下敷【名】物の下に敷く物。

**した-しく** 親しく【副】みづから。まのあたりに。直接に。

**した-じくみ** 下仕組【名】したくみ〔下組〕に同じ。

**した-しごと** 下仕事【名】下拵又は下請負。

**した-しころ** 下鉦【名】兜の鉦の下に別に取附けたる鉦。

**したしつ-ぞめ** 仕出染【名】新案の染かた、又その染物。 曾我五人兄弟「縫箔・鹿子物好の思ひ思ひの仕出染」

**した-した** 【擬】柔へしだるるさま。しなしな。〔古語〕 宇治「今はねりぎぬのやうに、したしたとなりたるものを」

**した-した** 下下【名】㊀卑しき者ども。しもじも。下民。 ㊁配下の者ども。組下。

**じた-した** 【擬】㊀濕潤・滑澤なるさま。じとじと。 ㊁ねばりて引容せらるるさま。狂言「骨董屋「青葉の强いに引かれて、証けいでたる馬がじたじたじったと、吸寄せた」 ㊂を見よ。

**した-したくら** 下下鞍【名】したくら〔下鞍〕に同じ。

**した-しば** 下柴【名】物陰に生ずる柴。夫木「した柴の枯れゆくほどにふりぬれば爪木こりつむしがらきの里」

**した-しぶり** 下渋【名】〔商〕相場の下落せんとして、容易に下落せざること。

**しだし-べんたう** 仕出辨當【名】新しく案じいだしたる調味の辨當。一代女「女なから美食好み、鶴屋の餌頭…檜屋の蒲鉾、棟木(ヤ)節の仕出辨當」

**しだし-べんたうーや** 仕出辨當屋【名】仕出辨當を賣る家。五人女「祇園町の仕出辨當屋の蔭に、附紙(ツケ)目印に錐と鋸を書きおきしが」

**したすき** 下襷【名】髮を結ぎ準備に、よく髮を梳きおくこと、又これをなす女、即めし百姓より取立てし稅金。

**したぐち** 下口【名】しもの入口。

**したくちびる** 下脣・下唇【名】下の方の脣。〔うは脣に對して〕

**したくつ** 下沓・襪【名】裝束の時、靴の下にはくもの。白き平絹(ヒラ)の張りたるに製す。今の靴下の類にて、足袋のごとく拇趾と他の四趾との間を開くることなし。あしぶくろ。したうづ。和名抄、襪、之太久豆、足衣也」

**したくづる** 下崩る【動下二他】㊀下の方が崩る。〔古語〕 枕「我執を折りて、他に從ふ。〔古語〕 枕「いとど、この御ものがたりどもに、したくづれたる心地しはべる」

**したくび** 下頸・胡【名】頤(ヒ)の下にある垂れたる肉。〔古語〕 和名抄、胡、釋名云、頤下垂曰胡、之太久比」

**した-くみ** 下組【名】㊀本組(ヒ)の準備として組立つること、又その物。したごしらへ。したじくみ。したづくり。 ㊁假の用意。したがまへ。したごしらへ。したじくみ。準備。支度。 竹馬「さしこめて、守り職あしべきしたぐみしたりとも」

**したく-めし** 支度飯【名】飯屋・小料理屋などにて食事を認むること、又その食事。横城色三葉蘭「伏見へ朝飯時に著いて、京橋に支度飯」

**した-くも** 下雲【名】下方にある雲。萬葉「對馬のねはしたくもあらなふかむのねにたなびく雲を見つつしぬばも」

**した-くゆる** 下薫る【動四自】『火となりて燃上らずに薫る義』 ㊀下焚く・煙に薫る。 ㊁表面にあらはさず、人知れず・懇慕ふ。〔古語〕 碧梧「したくゆる心地にもいと嬉しきものから」

**した-くら** 下鞍・鞦【名】鞍の下に布きて、馬の背の歪を被ふもの。菊にて作り、革にて覆ふ。一枚或は二三枚重ねることもあり。一枚なるは唐切附(ツケ)といひ、二枚なる場合には、上のを上(ウ)切附・上(ウ)下鞍、又は左葉(ハ)と下(ウ)切附・下(ウ)下鞍

ち髪結(ゆひ)のすきて。

**したすすみ** 下涼【名】下除にて涼むこと。書紀「命なりわづかの筆の下涼」 鷹野(後撰)

**したすだれ** 下簾【名】古・牛車(ぎつしや)の簾の内に懸垂せし帳。多くは生絹(すがぎぬ)を作り、長さ約九尺餘、簾の下より外へ出して長く垂れたり。(上簾(うはすだれ)に對して) 枕「簾うちあげ、したすだれひきあげて乗せたまふ」




**したずり** 下摺下刷【名】活版又は版木の出来あがりたる時、試に行ふ印刷。

**したぞめ** 下染【名】本染の前に、先づその補色たる或色に染むること。古今「耳なしの山のくちなしえてしがな思の色のしたぞめにせん」

**したそり** 下剃【名】本剃の前に、先づあらかじめ粗略に剃ること、また散髪屋の弟子のこれをなす者。

**したた** 【鋭】形容・體格・程度・數量などの小なるさま。源氏「したたかにいふ琴の、さだすぎたるも」 太平記「したたかな櫻かたげて夜道かな」 蕉の門松 樹屋の高尾に、又したたか酒うて、心中に生爪を放してくれた」

**したたか-もの** 健者【名】容易に人に屈せぬ者。えらもの。 平家「嘉儀は八幡國に聞えたる健者也」

**したたく** 下焚く【動四自】下より、火を焚く。(古語) 雜手集「かりにだにうへにな てそ蔵の家のしたたく烟おもひきゆとも」

**したたて** 下立【名】次條の略。

**したたていた** 下立板【名】牛車(ぎつしや)の車箱の一部。したたて。

**したたな** 下棚【名】和船棚板の一部。棚合二枚の場合に於いて、下位にあり て、舷、前

**したたまる** 認まる【動四自】認めたるきまになる。ととのふ。(古語) 大鏡「この殿御後見もしたまはば、天の下のまつりごとはしたたまりなんと、ぞ思ひ申したりしかども」

**したたみ** 細螺・小螺【名】(細)きさご(細螺)に同じ。(古語) 萬葉「つく磯の島のしただみをいひろひもちき」

**したたみ** 認【名】しだため(認)に同じ。 聖徳太子傳暦「片岡山の飯に餓ゑ行き惱みたる旅の者……主は他參り、珍重珍重、したたみして立退かんと」

**したたむ** 認む【動下二他】 ①とりまかなふ。ととのふ。支度す。 源氏「みあかしの事どもしたためいでて、いそがせん」 太閤生貴提婆奇計を廻らし、橋の行桁に埋火をしたため、橋板踏めば燃出るやうにしつらひ」 ②食事をなす。食ふ。 義経記「菜子ども……、男子やうにしたためて」 ③書く。しるす。 ④みそむ(認む)に同じ。

**しただむ** 舌鼓む【動四自】擬にごる。ことばなまる。物いひさはやかならず。 枕「あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれ」

**したため** 認【名】①したためること。源氏「帝の御覧ずるに、調ふ「六尺どもと呼ばれど、皆したために歸って」 ②食事をすること。 源氏「帝の御覧ずるに、調ふ「六尺どもと呼ばれど、皆したために歸って」 「同じ。

**したたらす** 滴らかす【動四他】次條に同じ。

**したたらす** 滴らす【動四他】したたるやうにす。したたらかす。

**したたらず** 舌不足【名】物いひの自由ならぬこと。舌のまはらぬこと。したつき。

**したたり** 滴【名】垂れ落つる液類。しづく。點滴。滴脈。

滴積りて、淵となる【句】「摩積りて、山となる」に同じ。(誡語)

**したたる** 滴る【動四自】①下垂の義。液類、下に垂る。雫となりて落つ。 字鏡「淋、志太太留」

**したたるし** 舌たるし【形一】物いひざま、甘えたるやうなり。 五人女「舌たるき」獨言

いふこそをかしけれ」 詞花物語「夫をわが物にして、そばを離れず、したたるぜにつてまはる」

**したち** 下地【名】①したがまへ。したごしらへ。基礎。素地。 ②本來の性質。素質。長町女鑑記「下地は好きに据ゑる膳」 ③まことの心。しんそこ。 船栗毛「下地より調染みたる男」 和名・助枝、之太知。功程式六、志達」 ④かべしたち(壁下地)の略。 ⑤笑人「おのが役の二幕三幕も前より、あたまは、したちに直し」

下地は好(よく)なり、御意は善し【句】もとより好物なり、しかのみならず、相手は好意を以て勧む。性素好む所なる に、幸に他より勧められる。(誡語) 源氏 十二段後撰集「下地は好なり御意はよし、われもわれもと引退け、突退け」

**したち** 下道【名】しだみち(下道)に同じ。 萬葉「うゑつきが上の遊つ人まつの下道ゆのぼりて」 「馬」に同じ。

**したちうま** 下地馬【名】鄙金の彫下地(ぢはだ)を作るを業とする者。主に小柄(こづか)下地、及び笄下地を作る者をいへり。

**したちっと** 下地子【名】藝者に仕立つるために業ひて、遊藝など習はせ置く女の小供。 梅暦「この頃目見(ゐ)に來てゐるしたちっ子が(これ、藝者したちっ子といふ略し ことばなり)ありますあな」

**したちまど** 下地窓・助枝窓【名】壁下地(ぢはだ)の表はれたるが如く見せて作りたる窓。斑竹・荷などを縦横に取附け、つづら藤の蔓などにて餝(かざり)て。 襖障子(かざり)等を用ひたるもあり。 一代男「月明くるをも管せず、下地窓より外を覗かず」

**したちもの** 下地物【名】あつもの(羹)を云ふ。(驢河國の方言) 「通。

**したつ** 四達【名】四方に通ずる道路。四四達・八通【句】「四通八達」に同じ。

**したつ** 滴つ【動下二他】したたらしむ。(古語) 太平記「百官、罪なくして、誤を配所の月に滴て」 同「百官汨を滴て、藤軍の御

迹に順ひ」

**したつ** 仕立つ【動下二他】 ①作りこしらふ。こしらへなす。調ひよそほふ。 枕「車きよげにしたてて見に行く」 ②布帛を裁ちて、衣服に縫ふ。 源氏「賜月(ねび)の御さうぞくなど、……いときよらにしたてたまへる は」 ③養ふ。しこむ。 源氏「無ならはしなどは、さとにて、いとようしたてて」 ④

**したつ-いはね** 下岩根【名】そこついはね(底磐根)に同じ。(古語) 祝詞「したつ磐根に宮柱ふとしり立て」

**したつかさ** 下司【名】①地位ひくき官吏。げし。げす。 ②したやく(下役)に同じ。

**したつかひ** 下使【名】雜事に使ふこと、又その使はる人。 孝経鬼「下使の下部」

**したつき** 躊躇【名】したたらず(舌不足)に同じ。(古語) 書紀「躊躇、之多都岐、舌不正也」

**したつき** 舌附【名】舌のさま。物いふく。

**したつぎ** 舌接【名】接木法の一。臺木と接穂(ほづ)とを二つながら斜に削り、その削りたる面の一部を割きて、舌狀を作り、兩舌を搦合するもの。

**したつ-くに** 下津國【名】よみ(黄泉)に同じ。(うはつ國に對して)(古語) 紀「泉中、シタツ・ニ」

**したつ-づくり** 下作【名】したくみ(下組)に同じ。

**したつ-づくろひ** 下繕【名】本繕(ぬかづけ)の前おく祇。 源氏「右はちんの箱に、せんかうのしたづくろ」

**したつ-つかへ** 下机【名】祇の下に更に据ゑ

**したづけ-うるし** 下附漆【名】繪漆の一種。製子地彩蒔に塗るもの。普通の繪漆よりは、紅殻の量少なし。

**したったらず** 舌不足【名】しだたらず(舌不足)の音便。 浮世風呂「舌っ足らずの眞似をする兒」

**したつづみ** 舌鼓・舌皷【名】したつち(舌打)に同じ。 源平布引滝「うまいうまいと、





**したつば** 【名】階級の低き者。下級のもの。「役者のしたつば」「したつばの役人」

**したっぱら** 下腹【名】したはら(下腹)に同じ。

**したつぼね** 下局【名】女官が常に住める局。(うは局に對して)

**したづま** 下褄【名】下前の褄。 相城島原鮮合戦「二人は小袖の下褄おし切り、筆がほしい、硯がな」

**したづみ** 下積【名】①他の物の下に積むこと、又その下に積みたる物。 鄙廻船東鑑生貴「先づ兩舌の婆將軍、汝們が死骸の下積と、兩足綱んで、二つにさっと引裂き」 ②船の吃水を深くせんがために、木石を船底に積むこと。

**したつ-みち** 下道【名】地下を掘りて作りたる道。(古語) 紀「地道、シタツミチ」

**したつゆ** 下露【名】木の下のつゆ。

**したて** 仕立【名】①仕立つること。 ②衣を縫ふこと。裁縫。 ③しこみ。をしへ。 ④支度して送ること。さしたつること。

**したて** 下手【名】①下の方。下流。下風。 ②他より劣れる地位。 ③相撲(すまひ)にて、右手に相付、下手に下ってむんづと組む」 ④犬追物(ぎやぶもの)にて、我が馬の後に立ちたる射手。(うは手に對して)

下手に立つ【句】他人の下に附く。下風(かぜ)に立つ。下手に附く。 太平記「その心闘如として、人の下手に立たん事を思はざりければ」

**したて** 下手【名】したて(下手)に同じ。

**したて-あがり** 仕立上【名】①仕立てて、出來上がりたること。 ②新調して間も無きこと。

**したて-おろし** 仕立下【名】衣服を新たに仕立てて著ること。

**したて-がほ** 仕立顔【名】殊更めくこと。わざとがましきそぶり。(古語) 源氏「心しら

ひのさまも、あなづるとはなけれど、何かは、ことごとしう、したてがほならんも、なかなか覺えなく、見咎むる人やあらん」

**したて-きば** 仕立際【名】①仕立てあげんとするきは。 ②仕立てたる手きば。 五人女「若い者、あつまって、頭(かしら)づきの吟味、木綿著物の仕立ぎはをあらためける」

**したて-くち** 仕立口【名】裁縫の仕立てざま。 今宮心中「南京縮の上べには、手のないやうに仕立口」

**したて-だい** 仕立代【名】したてちん仕立賃に同じ。

**したて-ちん** 仕立賃【名】仕立てたる賃金。仕立料。

**したて-なげ** 下手投【名】相撲(すまひ)の手の一。四手(よつで)に組み、下手にて、相手の褌(ふんどし)を取り、腰を入れて投げるもの。

**したて-ひねり** 下手捻【名】相撲(すまひ)の手の一。四手(よつで)に組み、相手の褌(ふんどし)を締め、又その恙手を抱へて、下手に捻ること。

**したて-まはし** 下手廻【名】『英 Wenjiri』帆船が航海中、逆風のために、指路を所定の地に向くる能はざる時に、梶と帆とを繰作して行ふ方法。初に船首を風下に向け、船尾を風位に迴過せしめて、他の舷より風を受くるに至らしむるもの。順轉(ぐうは手廻に對して)

**したて-もの** 仕立物【名】①仕立つる物。仕立てたる物。 ②おひもの(縫物)に同じ。

**したて-や** 仕立屋【名】仕立物を業とする家、又その人。

**したて-やぐら** 下手矢倉【名】相撲(すまひ)の手の一。下手に力を籠め、吊上げて廻りながら、上手にて、相手の膝を拂ひて、投倒すこと。

**したて-ゆばり** 臨瀝【名】『したつ(滴つ)を見よ』しばゆばりの類。小便のしたる病。(古語) 和名「臨瀝、之左天由波利、小便滴瀝也」

**したーてる** 下照る【動四自】地まで照りかがやくほどに、花又は葉赤く色づく。(古語) 萬葉「春の岡くれなゐにほふ桃の花下照る道に出でたつ少女」

**したてる** ひめ 下照姫【名】(人)永條に同じ。 書紀「影は天の下照姫か月の顔」 大國主命の女、高彦根命の妹、天稚彦(あまわかひこ)命の妃。一名、高姫・稚國玉。

**したと** 舌疾【名】したはや(舌早)に同じ。 源氏「のたまふけはひの舌どにあはつけきを」

**したとき** 鶯口瘡【名】①舌に粟(ぞく)の如き物の生ずる義。 ②がとうそう(鶯古瘡)に同じ。

**したとし** 舌疾し【形一】舌鋭し。物いひはやし。(古語) 源氏「小寒・小寒といふ聲ぞいとしたどきや」

**したとろき** 下轟【名】底の方にて渺しくひびき鳴ること。 心中二枚鑑重「底ら太鼓のしたとろき」

**したとひ** 下問【名】忍びて、女の許に通ふこと。(古語) 紀「したとひにわがとふ妹を」

**したとほり** 下通【名】下の方にある街路。

**したとも** 下供【名】供の中の下廻りの下供を落す【句】下供を省く。下供を略す。 曾我物語「宮御所島」二人の中間渡のかがりし挟箱を擔ぎ、茶振持一人附きて出で來る、總て下供を落したる行列の模樣」

**したとり-しやくし** 下取杓子【名】饗中を均(ならし)らす時、灰を取る杓子。そことり。(茶道の語)

**したとり-はうろく** 下取焙烙【名】饗中を均(ならし)らす時、火灰を取入るる土皿。底取焙烙(ぢとりはうろく)。(茶道の語)

**したな** 下名【名】よびな。通稱。假名。

**したな** 尻棚【名】船の艫(とも)の方に附けたる板。

**したなか** 下【名】(植)こぶし(辛夷)に同じ。 字鏡「辛夷、志太奈加」

**したなが** 舌長【名】自慢してしやべること。 後撰集毛「戯驚とは舌長な、ほっとう野郎め」

**したなが-あぶみ** 舌長鐙【名】舌先(ぜつさき)の長く出でたる鐙。(舌短鐙に對して)

**したながし** 下流【名】こうばし(低地)の如く地上に設けたるながし。

**したながし** 舌長し【形一】舌長なり。廣言 用明天皇殿人鑑「檢非遣使膳舟がそきうとは、舌長し、と爭ふうちに」

**したなき** 下泣【名】物かに泣くこと。心にて泣くこと。(古語) 宇鏡「殿上の人人、下泣をして、昔笑ふまじきよし、いひあへりけり」

**したなげ** 下投【名】先に茶を入れて、後に湯を注(そそ)ぐこと。

**したなげし** 下長押【名】(廷)敷居の下に、別材にて横に長く亙すもの。(うは長押に對して)

**したなみ** 下波【名】人知れず、心を動かすこと。(うは波に對して)(古語) 素性集「松山の水はかげとも思ほえず鰹しき君に下波ぞたつ」

**したなめずり** 舌嘗【名】幣を嘗めまはすこと。宇鏡「目をいからかして、舌なめずりをして」 「同じ。

**したならし** 下馴【名】うちならし(内馴)に同じ。

**したに** 下荷【名】下積(ぢづみ)の荷。

**したぬき** 下貫【名】他人を迷はして、利を得ること。(江戸時代の語) 繪順天皇甘露雨「わどりよが知仁は村一番下貫の名人、そんな惡い根性で、釋迦所へ行くことか」

**したぬひ** 下縫【名】かりぬひ(假縫)に同じ。

**したぬり** 下塗【名】上塗の準備に、下地を塗ること、又その塗物。(上塗・中塗に對して)

**したね** 下直・下値【名】①賣りたる品の代金の一部として、受取る古物の直段。下(へ)に取る品物の直段。

**したね** 下根【名】下の根。根の下。(古語) 後撰集「田鶴のすむ澤べの蘆のしたねとけ汀もえいづる春は來にけり」

**したねぎ** 下禰宜【名】配下の禰宜。

**したーのうきしま** 信太浮島【名】(地)常陸國霞浦郡に屬し、霞浦の東南に在る島。周回三里二十七町。物部信太造の子孫の城を築きて居りし處。天正中、佐竹氏に滅

さる。今、浮島村と呼ぶ。貞享高常陸の國まで、四十日餘りにまかり至りぬ。至らんとする所は、志太の浮島となん申す」

**したのおび** 下帶【名】したおび(下帶)に同じ。江戸生艶気樺焼「涙にまじる水はなに濡らさん袖はもたぬ故、下の帶をぞしぼりける」

**したのふさぎ** 下褌【名】たふさぎ(犢鼻褌)を見よ。〔古語〕字鏡「褌、之太乃太不佐伎」

**したのはかま** 下袴・褌・裙【名】したばかま(下袴)に同じ。字鏡「褌、裙、志太乃波加萬」

**したのびと** 下帶【名】したのおび(下帶)の略。

**したのむすび** 下結【名】したおび(下帶)に同じ。

**したのり** 下乘【名】他人の馬を乘廻らす。

**したば** 下葉【名】草木の下枝にある葉。〔うは葉に對して〕萬葉「天雲に厳ぞ鳴くなるたかまどの荻の下葉はもみちあへむかも」

**したば** 下歯【名】下の方の歯ぐきに生じたる歯。〔うは歯に對して〕

**したば** 下端【名】下の方。下の部分。

**したばかま** 下袴【名】■あかおびぞろ、赤大口に同じ。■たふさぎ(犢鼻褌)に同じ。

**したばき** 下穿【名】■ずぼんした(洋袴下)に同じ。■はかま、袴に同じ。■家の中などを歩むに對して、地を歩むとき、足に穿く物。履・下駄の類。

**したはし** 慕し【形二】思ひはなれがたし。

**じたばた** 【俗】取りおさへられんとする者などの、手足・身體を烈しく働かして、抵抗するさま。文政二遊萬石通「わるくじたばたすると芋ざしだぞ」

**したばたらき** 下働【名】■他人の下につきて働くこと、又その人。■炊事など下廻(ゲヒ)ての雑事を働くこと、又その人。

**したばなれ** 下放【名】〔商〕從來の直段より遙かに下落すること。

**したばば** 下延ふ【動下二他】心の中に、深く慕しく思ふ。したくゆる。〔古語〕萬葉「こもりぬのしたばへおきてうちなげき妹がいねねば」

**したばへ** 下延【名】したばふること。〔古語〕萬葉「足柄のみ坂かしこみくもり夜のあがしたばへをこちでつるかも」

**したばん** 下盤【名】〔地〕或鐵脈又は鑛層の下に直接する地層。

**したばや** 舌早【名】物いひの疾きさま。くちばや。はやくち。舌疾(ハヤ)。

**したはら** 下原【名】武藏國の刀工の一派。周重・康重・照重以下新刀に至るまで、數十人あり。

**したばら** 下腹【名】■腹の下の方。ほぞした。ほがみ。こがみ。したっぱら。■馬の太腹(ハラ)。

下腹に毛が無い【句】老狡は下腹に毛無しと言傳ふるより、轉齡老狡なる人を評していふ。〔謎語〕

**したばらせついん** 下腹雪隱【名】外雪火(ハヒ)にある雪隱。

**したはらまき** 下腹卷【名】狩衣直垂(ヒタレ)・水干などの下に腹卷(ハラ)を卷くこと。〔うは腹卷に對して〕

**したはらもの** 下腹者【名】貳心のある人。

**したはらもの** 下原物【名】下原一派の者の手に成りたる刀。

**したばり** 下張【名】下地として貼ること、又その物。〔上張(ハリ)に對して〕萬葉「宇治宮第一の書も、壁の中の下張より出で」

**したはる**ーの**みこと** 天兒屋命(ノミコト)に同じ。

**したはれ** 【名】〔植〕まさき(正木)を云ふ。〔上總國の方言〕

**したび** 慕【名】■したふこと。■慕墓。

**したび** 下樋【名】■箏の琴の腹部、即ち甲と裏板との間の空虚なる部分。〔古語〕萬葉「琴取れば、嘆きさきだつけだしくも琴の下びに妻やこもれる」■地中に設けたる樋。うづみひ。〔古語〕萬葉「水鳥の鴨の住む池の下樋なみいぶせき君をけふ見つるかも」

**したび** 下火【名】■■火災の火勢の衰へかけたること。■勢の衰へかけたること。■茶道にて、爐又は風爐へ炭を加ふる時、前より殘り居る火。

**したびえ** 下冷【名】秋冬の頃、しんより冷ゆるやうに感ずること。そこびえ。一茶「したびえの兒と寝かはりて添乳かな」

**したびげ** 下髭【名】口の下に生ひたる鬚。あごひげ。〔うは鬚に對して〕

**したひさま** 慕樣【名】しきりに慕ふ樣子。源氏「したひさまに思したりつる年月は」

**したひば** 慕葉【名】普通の葉のもとの方に別に附きたる小さき葉。托葉。〔古語〕

**したひも** 下紐【名】■裝束の下、小袖の上に結ぶ帶。したおび。〔うは紐に對して〕萬葉「長大如二衣紐一(ナガキコトイヒノヒモノ)」■下衾(ギヤ)。又は下袴の紐。萬葉「われ草わがしたひもにつけたれどしこのしこぐさ」ありけり」■ゆもじ、又その紐。しおび。萬葉「女のすなる緋縮緬足まとひぞと高からげ、男の下紐あらはなる」

下紐解く【句】■男女を論ぜず人に戀ひらるる時は、その下衾の紐自ら解くといふ傳說。萬葉「わぎもこが我をしぬぶらし草枕たびのまろねに下紐とけぬ」古今「思ふとも魚ふとあはんものなれやゆふ手もたゆく解る下紐」■全く隔なくうちとく。書の門松「いつか思の下紐とけて」■日本武尊芳香草薬「今まで結ばれし心の下紐、さあ解けて寝けて下され」

下紐を許す【句】女、男に身を打任す。

狛川源の恵去りとは御内儀、曲がない、人には許す下紐の我れにはなぜつれないぞ」

**したひも** 下紐【名】〔書〕『衣といふ語の緣にて、また狹衣物語が鯉物語の書なるより名づけしもの』狹衣物語を註釋せるもの。著者詳かならず。四卷。本文に附刺す。

**したひもの** 下紐の【枕】發音同じきより、したにかけていふ。新撰古今「さのみまた恨みしもせじ下紐のしたの心の解けぬかぎりは」

**したひものーせき** 下紐關【名】古、坂上田村麻呂が、蝦夷を防がんがために、今の岩代國伊達郡に置きし關。その址、今の六木戸村・國見山の西北麓なりといふ。後、蔵原泰衡が伊達大木戸を設けて、源頼朝を防ぎしも同じ處なり。後拾遺「東路のはるけき道を行きめぐりいつかとくべき下紐の關」

**したひよる** 慕寄る【動四自】跡つけて、ひそかに近寄る。丹後風土記「夜まはりに、ちらりと、氣を附けて、したひよれば」

**したびらめ** 舌平目・舌鮃・鞋底魚【名】〔魚〕硬骨類に屬する魚。我が國の東海及び西南海に達す。體は平扁にして舌狀をなし、左側は濃き橙色にして、黑色の斑點散布し、右側は白色を呈し、頭小さくして、眼は左側にあり。うしのした。くつぞこ。くつぞこがれひ。けんちょ。

**したふ** 慕ふ【動四他】■なつかしく思ふ。戀しく思ふ。離れがたく思ふ。源氏「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」■あとを追ふ。後より追隨す。後千載「したひくる影は袂にやつるとも面がはりすな故郷の月」

**したふ** 【動上二自】〔したに〕を見よ。萬葉「秋山のしたぶる紅なゆ竹のとをよる子らは」

**したふ** 縮緬【名】■ころも。縮衣(ヂミ)。■帽。糸縮。

**したふし** 下臥し【名】物の下座に臥すこと。夫木「露はらふ葛のしたぶし夢たえて路の音近き宇津の山風」

**したたたぞち** 死場場地【名】〔地〕は接尾語。氣力の衰へたるさま。〔活潑潑地に對して〕

**したぶところ** 下懐【名】うちぶところ(内懐)

**したぶくろ** 下袋【名】■■■紙〔一〕包の白銀をしたぶところ〔押込んで〕

**したぶり** 舌風【名】物いふ口つき。〔古語〕源氏「胸に手をおきたるやうに何すると申したまふ舌ぶり、いと物さやかなり」

**したぶるひ** 舌振【名】『「舌を振ぶ」を見よ』非常に驚き怖るること。萬葉集「舌振して進まざりければ」

**したーぺ** 下方・下邊【名】『下の方(ヘ)の義』黄泉(ヨミ)。根の國。〔古語〕萬葉「わかければ道ゆき知らじまひはせむしたべの使召ひて通らせ」

**したまがり** 舌曲【名】〔植〕しひさはなの死







人花」を云ふ。尾張國の方言〕

**したまち** 下町【名】■下手(ヘタ)にある町。低き所にある町。〔山手(ヤマテ)に對して〕■東京の低き部分にある淺草・下谷・神田・日本橋・京橋・芝・本所・深川などの稱。〔山手(ヤマテ)に對して〕

**したまちーしき** 下町式【名】次條に同じ。

**したまちーふう** 下町風【名】『東京の下町は、山手(ヤマテ)の邸多きに對して、町家多く、その風俗・習慣も江戸の面影を存せるもの多きよりいふ』下町の婦女の風俗。淺くいきなる趣味風俗。〔東京の語〕

**したまつ** 下待つ【動四自】心の内にて待つ。〔古語〕大和「おはしましやすると、したまちたまうけるに」

**したまはり** 下廻【名】■したたらき(下働)に同じ。■いなりまち(稲荷町)に同じ。

**したまぶた** 下瞼【名】下の方のまぶた。〔うは瞼に對して〕

**したまへ** 下前【名】衣服の前を合はする時、下にかさなる方。したが。したがひ。したんま。〔うは前に對して〕

**したみ** 清・醴【名】■したむこと。■しにみざけ(醇酒)の略。

**したみ** 簾・笠【名】『滑(ヌメ)むに用ふる物の義』■底の角にして、口の闊きざる。和名抄「之太美」■目のなき籠。

**したみ** 下見【名】■したよみ(下讀)に同じ。■入札又は體(ヤ)實買を爲すに當り、豫め希望者がその目的物を見分すること。■風雨を防ぐために、家の外部の壁を藏して、板を横に羽重(ハヘ)に取附け、その上に、薄き木を、これと直角に、一尺五寸乃至三尺ほどづつ隔てて打附けたるもの。はめ(羽目)板(ヒ)參照。■うぐひすのき(鶯木)を云ふ。〔陸奥國津軽の方言〕

**したみ** 下身【名】俎上に置きし魚肉の、俎に接したる片側。〔うは身に對して〕在言(種包)「一の刀にて、魚頭をつき……さひはひ上身(ウヘ)下身がある」

**したみいた** 下見板【名】したみ(下見)■に

**したみざけ** 醴酒・清酒【名】醴酒・清酒に同じ。

**したみじかーあぶみ** 舌短鐙【名】舌の短き鐙。〔舌長鐙に對して〕

**したーみだれ** 下亂【名】心の中にて思ひみだるること。新千載「穂にいでし蘆の伏葉のしたみだれ入江の浪に朽ちはてつとも」

**したーみち** 下道【名】山の下にある道。物の下にある道。

**したーみづ** 下水【名】物の下を流れゆく水。したゆく水。千載「御室山谷にや奈の立ちぬらん雪のしたみづ岩たたくなり」

**したむ** 醴む・清む【動四他】■汁を澄(ス)し出だす。水を殘りなくしたたらす。字鏡「醴酒。佐介志太牟」山家「見るもうきは鶯巣に逃ぐるいろくづをのがらかさでもしたむもちあみ」■水などを、布帛などに浸透ませて拭取る。一代男「我が脱ぎおきし墨茶字の著物(ヘタ)にて殘らずしたみ、かいやり拾てける」

**したーむき** 下向【名】■下方を向くこと、又下方を向きたるもの。〔うは向に對して〕■物の値のさがること。下落。〔うは向に對して〕

**したーむすび** 下結【名】下方にて結ぶこと、又その結びたる紐。

**したーむせび** 下咽【名】ある物の下にてむせぶこと。吉野「かがり火に鮠(ウヲ)や波のしたむせび」

**したーん** 指彈【名】つまはじきして、緣ふせぶこと。

**したーん** 咨嘆【名】なげくこと。嗟嘆。

**したーん** 四端【名】『孟子の公孫丑上篇に「惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、恭敬之心、禮之端也、是非之心、智之端也。人之有二是四端一也、猶二其有一四體一也」とあるに本づく』仁・義・禮・智の發する端緒、即ち惻隱・羞惡・辭讓・是非の四心の併稱。

**したん** 紫檀【名】〔植〕豆(ハ)科に屬する常綠喬木。熱帶產にして、高さ數丈に達し、葉は螺形・淡黄色にて、總狀花序をなし、實は扁形。材は堅くして、紫赤色をなし、種種の細工に用ひらる。

**したん** 師檀・師旦【名】師匠と檀那と。師弟。蜻蛉記「坂上田村麿・東山遊獵の夫(ヲト)に、種種の瑞異に驚きて、賢心と師檀の契を結びつつ」神皇天皇廿四「空海に法力の超えられたるを憤り、大海原王子の師且となり、天下を覆へし、恨を空海に報ぜんと」

**したん** 詩壇【名】詩人の社會。

**したん** 詞壇【名】詩人の社會。

**したん** 史談【名】歷史のものがたり。

**したん** 師團【名】『師は、支那周代の制度にて、二千五百人を團とする軍隊』陸軍編制上の一名目。平時は、多くは司令部及び歩兵二旅團・騎兵・野砲兵各一聯隊・工兵・輜重兵各一大隊より成れども、騎兵の一聯隊又は一旅團、山砲兵・工兵・大隊、交通兵一旅團の加はれるもの等、多少の相違あり。各要地に配備せられ、戰時に際しては、なほ大小梁に加はる。あだい。鎧塞。參照。

**したん** 事端【名】事柄のいとぐち。事件の端緒。〔事端を滋(ハ)くす〕

**じたん** 自嘆【名】自ら嘆くこと。太平記「御方の勢は助かるまじき虜ぞと自嘆して」

**じたん** 示談【名】爭又は訴訟事などを、雙方の相談にて、解決すること。和談。

**じたん** 寺壇【名】寺院と壇家と。

**したんーかんりょくぶ** 師團監督部【名】師團司令部所在地に置き、近衛と第一師團とには、陸軍糧餉部、第七師團には陸軍經營部、その他には、陸軍糧餉部と陸軍經營部とを管理し、軍隊の會計事務を監視し、金品の收支・出納等を檢査し、その管轄區域内の軍吏部士官・下士の人事を掌りし官廳。明治三十五年に廢せられた。

**したんーかんぶえんしょうかう** 師團幹部演習旅行【名】師團長の指名を以て、師團中の各兵科佐・尉官及び衛生部將校相當官より組織し、師團長自ら統裁するか、又は特に師團長の指名せる將校をして統裁せしめ、隔年一回擧行するもの。

**したんーぐんぱふくわいぎ** 師團軍・法會議【名】軍中にて師團に設け、その師團所屬佐官以下の軍人の犯罪を裁判する所。

**じたんーじり** じだん栗【名】〔植〕くぬぎ(櫟)に同じ。

**したんーけいりぶ** 師團經理部【名】師團司令部内の一部、その師團管内に於ける給養出納等一切の經理事務を監督する所。師團長に隸屬して、師團經理部長之を統ぶ。

**したんーしきよう** 師團輜重【名】師團において、輜重として編成する部隊、即ち彈藥大隊・糧餉縱列・糧食縱列・馬廐衛生隊及び野戰病院。

**したんーしれいぶ** 師團司令部【名】師團長ぶ、その職務を執る處。參謀部・副官部・法官部(近衛師團にてはこれを除く)・經理部・軍醫部・獸醫部より成る。

**したんーちやう** 師團長【名】師團の長官。陸軍大中將をもこれに親補せられ、天皇に直隸し、部下軍隊の統率、師管内の聯隊區司令部の管轄、軍事上の諸件の統理、その主管に係る各部師團の動員計畫及び師管内徵兵事務、並びに召集の統轄に任ず。近衛師團長は、その外、宮闕守衛の事にも任ず。

**したんーぬり** 紫檀塗【名】紫檀の木理に擬したる漆塗。

**したんーまへ** 下前【名】したまへ(下前)の訛。

**したんろう**ーふるき 紫檀樓古喜【名】〔人〕江戸の狂歌師。通稱は蔦間古喜。貧に安んじて、狂歌を樂しむ。天保三年歿す。

**したーめ** 下目【名】■下方を見る目つき。〔うは目に對して〕■他人を侮り見下ぐること。蔑視。

下目に見る【句】見くだす。輕んず。西鶴「奴婢よりは、反つて主人を下目に見て、つとめてやると心得」

**したーめ** 下布【名】■女のしたおび。ゆもじ。湯具。〔うは裳に對して〕〔古語〕■ゆまぎ(湯卷)に同じ。〔古語〕萬葉集「對の宮は、湯はひたしてまつり、御湯かかせおはしまし侍るときに、涙よする松のしたもに萬代となれきてなくや友鶴の聲」

下裳の紐【名】したひも(下紐)に同じ。拾玉「人知るや下裳の紐を解きそめて君と契を結ぶ夜はとは」

**したもえ 下萌【名】** 地下に芽ざすこと。下萌の少將【名】(人)すはうのないし(周防内侍)に同じ。

**したもえ 下燃【名】** したもゆること。したこがれ。古今「夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身したもえにせん」賀古秋信七夕題「火屋の烟の下燃も涙にしめるばかりなり」

**したもち 下持【名】** ねだかけ(根太掛)に同じかるべしといふ。貞丈「墨板敷切りとぼし、したもちまでぞ打入りける」

**したもつれ 舌縺【名】** 言語のさわやかならぬこと。語調の澁滯すること。

**したもと 舌元【名】** 舌のもと。ろれつ。狂言(鶴姫)「十二歳飲うだらば、……舌元も立つまいし、足元も定まるまい」

**したもの 下物【名】** 下等にして安價なる物。だもの。(うは物に對して)

**したもひ 下思【名】** したおもひ(下思)の略。(古語) 萬葉「ともりこひいきづきわたりしたもひになげかふわがせ」

**したもみぢ 下紅葉【名】** 圖葉木葉のもみぢ。詞花「下紅葉一葉づつ散る木 のもとに秋とおぼゆる蟬の聲かな」 ㊁物の下の方にあるもみぢ。 藤生「しら浪やゆらつく檜のしたもみぢ」 ㊂(植)菊科に屬する多年生草獣に淺裂し、秋、白色の花を開く。きっかふはぐま。きじはぐま。

**したもゆ 下燃ゆ【動下二自】** したこがる(下焦る)に同じ。 翠花「下燃ゆる嘆をだに知らせばや類のかみのしるしばかりに」

**したもゆ 下萌ゆ【動下二自】** 地中より萌出づ。(歌に「前條の語の意を兼ねしめて用ふ」 新古今春日野のしたもえわたる草の上につれなく見ゆる春の泡雪」

**したや 下家【名】** 母屋に附屬せる小さき家。 曾我綸心年「男はしたやに抓出し」

**したや 下谷【名】** (地)東京市十五區の一。下谷一番【句】『江戸時代の鞠唄に「おらの姉さん三人ごさる。一人姉さん鼓が上手、一人姉さん太鼓が上手、一番(ヤ)よいのは下谷にござる。下谷一番伊達者でござる。五兩で帶買って、三兩でくけて、くけ目くけ目に七縫(ナヘ)下げて……といふ詞あるに本づく』華美なる服裝をなす者の譬。 芝「下谷一番の頭して衣が へ」

下谷の三人の姉様達【名】前條の鞠歌中の三人の女。 入代目桃太郎「閻王桃八へのは驅走とて…島の千歳和歌の前に踊らせて、下谷の三人の姉様たちに靜御前をまぜて、下方を勤めさせ」

**したやかた 下館【名】しもやしき(下屋敷)に同じ。**

**したやかた 下屋形【名】** 二階作もしくは三階作なる屋形船の、下層の屋形。

**したやく 下役【名】** 上役に支配せられて働く小役、又その人。

**したやくにん 下役人【名】** 下級の官吏。

**したやぐみ 下谷組【名】** 『多くは下谷根岸の邊に住めりしよりいふ』 德川時代の末に、放縱荒醉を以て世に名を得たる龜田鵬齋・大窪詩佛・菊池五山・太田蜀山人・谷文晁・市河米庵・酒井抱一・佐木南湖などの如き、詩人・文人・畫家・歌家などの仲間。

**したやぐら 下矢倉【名】** 相撲(スマ)の手の一。四手(ヨツ)に組み、吊上げて廻りながら、手にて、相手の膝を拂ひて投倒すこと。

**したやしき 下屋敷【名】しもやしき(下屋敷)に同じ。**

**したやすし 下安し【形一】** 心のうちやすし。安心なり。(古語) 六帖「水鳥の下やすからぬは思にはあたりの水も氷らざりけり」

**したやど 下宿【名】げしゅく(下宿)に同じ。** 若風雪「大吉彌がしたやど」

**したやは 志田野坡【名】** (人)俳人。通稱は半次郎、後、彌助と改む。越前國の人。芭蕉の門人。江戸三井南替店に勤む。附合(ツケ)をよくす。元文五年歿す。年七十八。

**したやみ 下闇【名】このしたやみ(木下闇)の略。** 萬葉「下闇や地もしながらの蟬の聲」

**したやり 下槍【名】** 敵と槍を交ふる時、相手を突くに先ちて、我が槍の柄に抑(ヤ)へつけ、いれたるその槍(うは槍に對して)

**したゆひ 下結【名】** 化粧元結などの下に掛くる元結。

**したよふ【句】** し兵(下)の條下を見よ。

**したよみ 下讀【名】** 豫め講讀をして、調べおくこと。したみ。

**したら【接】したらば** の略。 狂言(きんじ聟)「したら、斯う參りまする」 狂言(貰聟)「おお、したらえいは」

**したら 設樂【名】**(地)三河國の舊郡の一。明治十三年南設樂・北設樂の兩郡に分たる。

**したら【名】** ㊀兩手を相拍つこと。 ㊁兩手を相拍ちてなす兒童の遊戯。(井遊) ㊂しまつていたらく。 生玉心中「願事叶はぬのみか、このしたら、及ばぬ願の逆罰か」

**したらが 無い【句】** しまりなし。だらしなし。放恣なり。 浮世風呂「したらもなく醉って來ての、とぼ口を跨ぐばはえ」

**したらか【助】** えか・犬の字にふんぞべって」 しだれたるさま。しだらなきさまに。

**したらく 自墮落【名】** 身を持ちくづしてしまりなきこと。亂りがはしきこと。ふしだら。放縱。 狂言(宗次)「じだらくに寢れば涼しき夕かな」 今宮心中「こちらが居た時分と違ひ、自墮落になったな」

**したらくせかい 自墮落世界【名】** 自墮落なる世の中。ふしだらなる世の中。 東海道名所記「今自墮落世界に、三代の總わづかに佛を殘し」

**したらでん 震動雷電【名】** ㊀大風雨のある日。 ㊁どよめき響くこと。

**したらなし【形一】** しまりなし。亂りがはしたらば【接】 さては。したら。 狂言(ねけがら)「よい酒かの。いや、なにと御坐ったも、覺えませなんだ。したらば、ま一つ飲め」

**したり【感】** ㊀しすましたりといふ意の感。 狂言(枕物狂)「おおしたりし。とくにも出てさせたまふならば」 思徳太子傳傳記「それ、それ、そこにも餅花、したりしたり」

**したり 垂【名】** しだるること。しだれ。

**したりがほ 爲たり顔【名】** 爲おほせたりと、得意なる顏。にこりがほ。でかしがほ。えたりがほ。しすましがほ。 枕「われはと思ひて、したり顏なる人はかりえたる」

**したりさくら 垂櫻【名】** 〔植〕しだれざくら(垂櫻)に同じ。

**したりは 垂葉【名】** しだれば(垂葉)に同じ。(古語) 夫木「みわそぐみつのかしはのしだりはのながなが世を祝ひにけり」

**したりん 尸陀林・屍陀林【名】**(佛)『梵Śītavana(戶多婆那)の譯語』 かんりん(寒林)「桃」に同じ。

**したりもも 垂桃【名】** 〔植〕しだれもも(垂桃)に同じ。

**したりやなぎ 垂柳【名】** 〔植〕しだれやなぎ(垂柳)に同じ。 萬葉「春さればしだりやなぎのとををにも妹が心にのりにけるかも」

**したりを 垂尾【名】** 垂れ下りてある尾。(古語) 萬葉「足引の山鳥の尾のしだり をながながし夜をひとりかもねむ」

**しだる 垂【動四自】** 次條に同じ。(古語) 拾遺「たるひの、いみじうしだり」

**しだる 垂る【動下二自】** じだ(垂ぢ)の變化して、自動詞となれるもの。『垂れ下る。なびく。長く垂る。

**したるし【形一】** しなだれたり。甚しく萎えたり。(古語) 夫木「しづのめも大ぢるづつに夕すずみしたるき麻の衣すすぎて」

**しだるね 羊齒類【名】** 〔植〕しだよどぶつ(羊齒植物)に同じ。

**しだれ 垂・枝垂【名】** しだるること。しだり。 狂言(二人)「青柳のしだれや鯉のすみどころ」

**しだれいと 垂絲【名】** 垂下りたる絲。 拾玉「素綿のかぎに垂絲」

**しだれいとすぎ 垂絲杉【名】** 〔植〕絲杉の一種。枝のしだれたるもの。

**しだれうめ 垂梅【名】** 〔植〕梅の一種。枝の垂れさがりたるもの。多くは紅梅なり。

**しだれざくら 垂櫻・枝垂櫻【名】** 〔植〕櫻の一種。枝の垂れさがりたるもの。花は多しだり柳」 ㊁失策したりと感ずる時に發する聲。しなしたり。







**したれとりげ 垂鳥毛【名】** 鳥毛の垂下りたるもの。 後撰歌「しだれ鳥毛の大小は、これ南部殿」

**したれは 垂葉【名】** しだれたる葉。しだりの葉。

**したれひがん 垂彼岸【名】** 〔植〕しだれざくら(枝垂櫻)に同じ。

**したれひば 垂檜葉【名】** 〔植〕いさひば(絲檜葉)に同じ。

**したれもも 垂桃・軟條桃【名】** 〔植〕桃の一品種。枝のしだれて、恰も柳のごとき觀を呈するもの。主として、觀賞用に供せらる。しだりもも。

**したれやなぎ 垂柳【名】** 〔植〕『枝の上に向ひて生ずる、かはやなぎ(水楊)こりやなぎ(行李柳)などと區別していふ』やなぎ(柳)

**したわらび 下蕨【名】** 物の下蔭に生ずる蕨。 枕「このしたわらびは、手づから摘みつるなどいへば」

**したき 下給【名】** ㊀したがきの略。檜のしたがき。 ㊁紙・布帛などに書きて、その上部に詩文などを書添ふる料とする檜。(古語) 翠花「したゑして、さるべき心ばへある事どもを、大納言さまざまに書き給へり」 ㊂物の下地に供するために描く檜。

**したきす【動四自】** 下笑みたまふ。(古語) 萬葉「明石潟しほひの道をあすよりはしたゑましけむ家ちかづきぬ」

**したきむ 下笑む【動四自】** 心の中にてゑむ。心のうちに、うれしく感ず。(古語)

**したを 下夫【名】** 以前つれそひたる夫。前夫。(上夫(ウハ)に對して)(古語) 和名「前夫、和名、之太乎、一云、毛止乃乎止故」

**したを 下尾【名】** 尾の下部。 盛衰記「栗毛の馬の下尾白かりけるに」

**したをる 下折る【動下二自】** 折れて下に垂る。 千載「おしなべて草葉の上を吹く風にまぢりしたをるる野邊のかるかや」

**したをれ 下折【名】** したをること。 玉藻「吹きはらふ嵐はよわる下折に雪にこそある窓の梁竹」

**しち 室【名】** しつ(室)に同じ。(古語)



**しち 失【名】** 射術にて、的に對へる間に起る過失。弓折(おれ)・弦切(ヤブ)などの生じたる場合。

**しち 質【名】** ㊀約定を守るべき證として、物を預けおくこと。 竹取「もしこがね賜はぬものならば、衣の質返したべ」 傳田民雄名所記「一人貸に渡しなば、二人の命助かる道理」 ㊁借金の抵當として、預けおく物品。 博多女郎淺妓「質を取らずば金貸すな」 ㊂(法)質權の目的物。動產質・不動產質權

**しち 利質に置く【句】** 質物を質屋に預く。質八を置く。 巻慰「この節會にはきたまふ御はかしを質におかん」

**しち 質に取る【句】** 質物として預る。

**しち 質八を置く【句】** 『質の音七に同じきより、八と續けて、語呂を强めていふ』「質を置いて暮らしてゐる所だ」 浮世風呂「この頃は生物商が隙で、…高くは云はれねえが、質八を置いて暮らしてゐる所だ」

**しち 質を置く【句】** 質物を質屋に預く。

**しち 質に置く【句】** 質屋に預く。質八を置く。

**しち 則地・剛地【名】** 肥料を貯へおく處。

**しち 死地【名】** ㊀死ぬべき場所。九死一生。 ㊁逃れて生くべき望の絕えたる場所。九死一生の境遇。「死地に陷る」

**しち 私地【名】** 私有の土地。(官地に對して)

**しち 至治【名】** 至って よく治まること。

**しち 至智【名】** 至極の智慧、又その人。

**しち 四知【名】** 『後漢の楊震が王密に對へし、「震曰天知、神知、我知、人知、何謂無知、密愧而出」とあるに本づく』二人にて密かに行ひ、誰れも知らずと思ひても、その實、天も地も相手も自分もこれを知りてあることゝ。「天知る、地知る、我れ知る」參照。

**しち 四智【名】** 〔佛〕佛の具備する四つのすぐれたる智慧。即ち大圓鏡智・平等性(ビヤウドウ)智・妙觀察智・成所作(ジヤウ)智。四智心品(ボン)。これ(五智)參照。

**しち 詞致【名】** 詞のおもむき。言葉の姿なり。なし。

**しち 七【數】** 三と四とを合はせたる數。

**しち 差池・柴池・茈池【數】** 『紫池・茈池の字面は、司馬相如の上林賦に見ゆ』齊しかもざるさま。擬にぬさま。互違にするさま。

**しち【接頭】** 類雜なる意。「しちくどい」「しち面倒くさい」「しちむづかしい」

**しち 楫【名】** 牛車(ギツシヤ)の牛をはづしたる時、轅(ナガエ)の軛(ヘ)を支へ、又は乘降の踏臺とするに用ふる具。形、杷に似、長足(ナガエ)にて、淡にて塗り、金具を施し、上には錦を押し、四隅に總角(ヤツ)あるもの。大臣には、金具に黃金を用ひ、納言と大將とには、飾金具(ナガエ)納言以下のは、鐵を用ひたり。 和名「林、之知、林也」

(ち し)

**しち 楫の端書(ガキ)【句】** 百夜通ひ來て、楫に伏したらば逢んと女の言ひしを、男信じて、夜毎に來りて、楫に書きつけ、九十九夜は過ぎて、百夜に方りて、障り出で來て、事破れたりといふ傳說。一說に、古今集の「曉の鳴の羽がき百夜かき君が來ぬ夜はわれぞかずかく」とあるを、「楫のはしがき」と訛れるものあるより出でしともいふ。千載「思ひきや楫のはしがきかきつめて百夜は同じまろねせんとは」

**しち 楫の役(ヤク)【句】** 楫を持ちて牛車(ギツシヤ)に隨ふ役。

**しち 支持【名】** ささへ保つこと。

**しち 止持【名】** 〔佛〕止は制止、持は持戒の義。功果の消極的なる戒。積極なるを作持といふ。例へば諸惡莫作(ヤク)は止持、衆善奉行(ヤク)は作持なる類。

**しち 實【名】** まこと。じつ。(古語) 源氏「されど、じちの御心ばへは、いとあはれに、うしろ安く思ひきこえたまひける」

**しち 自治【名】** ㊀己が身を自(ヤ)ら治むること。自(ヤ)ら治まること。 ㊁自(ヤ)ら治まること。無爲にして化すること。 ㊂(法)國家が、法律により、公共團體を認めて、これに特定の事務を委任し、團體をして、その範圍に於て、自らその事務を處理せしめ、以て間接に國家行政の目的を達することゝ。(官治に對して)

**しち 自地【名】** 自己所有の土地。

**しち あくにち 七惡日【名】** 九星にて、その人の生年によりて萬事に慣むべしといふ凶日、即ち午の年の人は子、未の年の人は丑、申の年の人は寅、酉の年の人は卯、戌の年の人は辰、亥の年の人は巳、子の年の人は午、丑の年の人は未、寅の年の人は申、卯の年の人は酉、辰の年の人は戌、巳の年の人は亥の日。

**しち・いん 七音【名】** ㊀(語)支那の音韻學にて、脣音・舌音・齒音・喉音の五音と半舌音・半齒音との併稱。七聲。 ㊁(音)支那の音樂にて、角・羽・商・徵(チ)・宮の五音と半徵・半商の二音との併稱。もと韵記音韻學上のを、音樂の調子に配せるもの。七聲。

**しち・いれ 質入【名】** ㊀金を借る抵當として、物品を質屋に預くること。 ㊁(法)質權設定の目的にて、物又は權利を質權者に提供すること。

**しち いれ・うりがき 質入裏書【名】**(法)手形質入證券、その他の指圖債權に、質權を設定する目的にてなす裏書。

**しち いれ・しょうけん 質入證券【名】**(商)くらにちいれしょうけん(倉荷質入證券)の略。

**しち いれ・にん 質入人【名】** 質入をなしたる人。しちおきぬし。質權設定者。

**しち・う 私錆【名】** しびゆ(私鏽)に同じ。

**しち・う 史籀【名】**(人)支那周の宣王の時の太史。一說に秦の代の卜士なりと。漢字の一體の籀文と稱せらる。

**しち・えう 七曜【名】** 『曜は燿と同じく、光りかがやく義』 ㊀日月と、火・水・木・金・土の五星との併稱。七曜星。くえうせい(九曜星)參照。 ㊁前記の七曜が一日毎に交代して支配すとの考に基づきて、古來これを各日に配當し、八日目毎に、復歸循環すと定めたるもの。即ちその第一日を日曜といひ、以下順に月曜・火曜・水曜・木曜・金曜・土曜といひ、合はせて一週といふ。七値(チ)。 ㊂紋所の一。九曜より二曜少なきもの。

**しち・えう 七曜の御曆(ガキ)【句】しちえうれき七曜曆(ガキ)の敬稱。古、元日の節會の時、中務(ナカツカ)省の官人、陰陽寮をして、これを天

臺に奉らしむる儀式行はれ、これを七曜の御暦の奏といひ、毎年十一月一日の御暦の奏と共に、一種の盛儀たりしが、後には、共に廢せられて、專ら内侍所に附せられたり。公事根源「諸司の奏とは、七曜の御暦、氷(ゝ)のためし、腹赤(ふかう)の奏などの事なり。七曜の御暦をば中務省より奉る」

**七曜の星**【名】Ⅰほくとしちせい(北斗七星)を云ふ。(東京の方言) Ⅱぢうう(昴)に同じ。

**しちえうーく** 七曜供【名】(佛)七曜Ⅰに物を供へて祭る法。

**しちえうーせい** 七曜星【名】Ⅰしちえう(七曜Ⅰ)に同じ。 Ⅱほくとしちせい(北斗七星)に同じ。

**しちえうーれき** 七曜暦【名】七曜Ⅰの位置を記載したる、古の一種の天文上の暦。七陽の御暦(ごよみ)参照。

**しちえふじゅーくわ** 七葉樹科【名】〔植〕**とのきーわ**(七葉樹科)に同じ。

**しちおきぬし** 質置主【名】しちいれにん(質入人)に同じ。

**しちーおん** 七音【名】しちいん(七音)に同じ。

**しちかいーそう** 七階草【名】〔植〕くりんそう(九輪草)に同じ。

**しちーかうざん** 七高山【名】〔地〕『拾芥抄に出づ』山城國の愛宕(ぐ)山・大和國の金峰山(ぶせん)・葛城(かつらぎ)山、近江國の比叡山、比良山、美濃國の伊吹山、摂津國の神峰(かみ)の併稱。

**しちかうざん-あじやり** 七高山阿闍梨【名】前後七高山の七寺に、春秋二季御祈禱の勤命を受けたる高僧。

**しちーかうそ** 七高祖【名】『親鸞上人の自ら定めしもの』釋尊以後、親鸞上人の開宗まで、彌陀他力の本願に歸依して、これを宣傳し、明かに西方淨土の往生を勸めたるにより、淨土眞宗の相承傳統とせらるる高僧七人、即ち龍樹菩・親鸞・曇鸞・道綽・善導(以上支那)・源信・源空(以上日本)の併稱。

**しちかく** 七覺【名】(佛)智慧をもつて法の眞諦を前擇する擇法覺と、勇猛の心をもつて、眞法を行ずる精進覺と、心に善法を得て歡喜を生ずる喜覺と、身心を輕利・安適ならしむる輕安覺(除覺ともいふ)と、定慧覺と明記する念覺と、心を散亂せしめざる定覺と、一切の法を捨てて、平心坦懷なる行捨覺との併稱。釋迦如來誕生日、太子は七覺を表して七歩み、左右の御手を獅子吼し、天地に指し」

**しちかくーいなづま** 七角稻妻【名】紋所の一。稻妻を七角形になしたるもの。

**しちかーじ** 七箇寺【名】〔史〕しちだいじ(七大寺)に同じ。

**しちーかぶ** 質株【名】質屋の株。

**しーちがふ** 仕違ふ【動ハ四他】『仕は爲(ス)の義』しそこなふ(仕損ふ)に同じ。太平記「合戰仕違へて引返しなば」

**しちきーおち** 七騎落【名】Ⅰ謡曲の一。源頼朝・石橋山に敗戰の際、主從七騎にて、相模國眞鶴(ごかう)ケ崎より安房國に渡海する事を作れるもの。 Ⅱ能(ゝ)の狂言の一。前記謡曲のと同一の事實を材料として作れるもの。

**じちーきくわん** 自治機關【名】〔法〕自治團體が、自治行政を行ふ機關、即ち府縣會・郡會・市町村會・府縣郡市參事會・市長・町長・村長等の總稱。

**しちきやう-おち** 七卿落【名】文永三年八月十八日に三條實美・三條西季知・四條隆謌(ふさ)・東久世通禧(ふさ)・壬生基修(もとを)・錦小路頼徳・澤宣嘉の七卿の、長州藩士と共に京都を遁れて、長門に退去せし始末。

**じちーきやうせい** 自治行政【名】〔法〕地方自治團體が、國家の委任を受けて處理する政務。(官治行政に對して)

**しちぎやうーばん** 七行本【名】しちみばん(氣稿)。

**しちきーゆみ** 七騎弓【名】金銀七鈷の異稱。たなばた。(掛弓・大弓の賜物としての謡語)

**しちーきよ** 七去【名】『大戴禮の本命篇に出づ』婦人の、嫁してのちに、去るべき理由七つ、即ち父母に順はざると子なきと・淫と・嫉妬と・惡疾と・多言と・竊盜との併稱。

**しちくーじやう** 七鄙落【名】文永三年八月十八日に三條實美・三條西季知・四條隆謌(ふさ)・東久世通禧(ふさ)・壬生基修(もとを)・錦小路頼徳・澤宣嘉の七卿の、長州藩士と共に京都を遁れて、長門に退去せし始末。

**しちくーかぶ** 仕違ふ【動ハ下二他】『仕は爲(ス)の義』しそこなふ(仕損ふ)に同じ。太平記「合戰仕違へて引返しなば」

**しちくーおち** 七騎落【名】Ⅰ謡曲の一。源頼朝・石橋山に敗戰の際、主從七騎にて、相模國眞鶴(ごかう)ケ崎より安房國に渡海する事を作れるもの。 Ⅱ能(ゝ)の狂言の一。前記謡曲のと同一の事實を材料として作れるもの。

**しちくーいなづま** 七角稻妻【名】紋所の一。稻妻を七角形になしたるもの。

**しちくーかーじ** 七箇寺【名】しちだいじ(七大寺)に同じ。

**しちくーかぶ** 質株【名】質屋の株。

**しーちがふ** 仕違ふ【動ハ下二他】『仕は爲(ス)の義』しそこなふ(仕損ふ)に同じ。太平記「合戰仕違へて引返しなば」

**しちくーおち** 七騎落【名】Ⅰ謡曲の一。源頼朝・石橋山に敗戰の際、主從七騎にて、相模國眞鶴(ごかう)ケ崎より安房國に渡海する事を作れるもの。 Ⅱ能(ゝ)の狂言の一。前記謡曲のと同一の事實を材料として作れるもの。

**じちくーきくわん** 自治機關【名】〔法〕自治團體が、自治行政を行ふ機關、即ち府縣會・郡會・市町村會・府縣郡市參事會・市長・町長・村長等の總稱。

**しちきやう-おち** 七卿落【名】文永三年八月十八日に三條實美・三條西季知・四條隆謌(ふさ)・東久世通禧(ふさ)・壬生基修(もとを)・錦小路頼徳・澤宣嘉の七卿の、長州藩士と共に京都を遁れて、長門に退去せし始末。

**じちーきやうせい** 自治行政【名】〔法〕地方自治團體が、國家の委任を受けて處理する政務。(官治行政に對して)

**しちぎやうーばん** 七行本【名】しちみばん(氣稿)。

**しちきーゆみ** 七騎弓【名】金銀七鈷の異稱。たなばた。(掛弓・大弓の賜物としての謡語)

**しちーきよ** 七去【名】『大戴禮の本命篇に出づ』婦人の、嫁してのちに、去るべき理由七つ、即ち父母に順はざると子なきと・淫と・嫉妬と・惡疾と・多言と・竊盜との併稱。

七田(ぢた)。さんふきよ(三不去)。じとふしゆ(五不取)参照。

**しちーきよ** 質舉【名】質物として出舉(ごす)すること。

**しちーきよく** 七局【名】明治元年に設置せられし中央官廳たる七箇の事務局。即ち神祇事務局・内國事務局・外國事務局・軍防事務局・會計事務局・刑法事務局・制度事務局の併稱。

**しーちく** 絲竹【名】いとたけ(絲竹)に同じ。大鏡「龍神いさめの絲竹のしらべ」

**絲竹・管絃**【句】絲竹と管絃とは、同意なるを、特に重ねていふ語。

**しーちく** 紫竹【名】〔植〕かんちく(寒竹)Ⅰに同じ。柴笠「寒竹・紫竹・塊はな・笛吹の、や、家で紫竹・寒竹塊をささやっと拂うて」

**しーちく** 刺竹【名】〔植〕竹の一種。鳳凰竹の類にて、節に刺を有す。

**しちーく** 七九【數】七と九とを掛合はすること。「七九・六十三」 「區域。

**じちーく** 自治區【名】自治制を行使したる

**しーおく** 觀軸【名】〔理〕じちゆく(觀軸)に同じ。

**じーおく** 磁軸【名】〔理〕じちゆく(磁軸)に同じ。

**しおくーぎ** 觀軸儀【名】〔理〕じちゆくぎ(觀軸儀)に同じ。

**しちくーさ** 質種【名】質に置くべき料の物。しちだね。質物。典物。

**しーちくーづゑ** 紫竹杖【名】紫竹にて作りたる杖。曾我虎が舅「つまみ胴立紫竹杖、格子格子に立ちかかり」

**しちくーじし** 【形ノ】『しちは接頭語』非常にくどし。丹波與生「しちくどい、盜んでいらずば、薬ちやいの」

**しちくーら** 質倉【名】質物を入れおく倉。

**しちくーらん** 【名】〔植〕されっ(沙列布)に同じ。

**しちくわいき** 七回忌【名】七年目の回忌。

**しちくーわつ** 七月【名】一年の中の第七に当たる月。ふみづき。ふづき。

**しちくわん** 七官【名】明治元年閏四月、七局の改名せられしもの、即ち議政官・神祇官・行政官・會計官・軍務官・外國官・刑法官の併稱。

**しちくわんおん** 七觀音【名】Ⅰ『音の字、觀の韻に引かれて、ノンと發音す』(佛)千手觀音・馬頭觀音・十一面觀音・聖觀世音・如意輪觀音・準胝(ぢん)觀世音・不空羂索(けんさく)の總稱。 Ⅱ京都の東堂(ひがし)・河崎・吉田寺・清水寺・六波羅密寺・六角寺・蓮華王院の七箇所の觀音の併稱。

**しちくわんおんーゐん** 七觀音院【名】『音の字、觀の韻に引かれて、ノンと發音す』京都下京區下河原(かはらの)町にある眞言宗の寺。如意輪山と號す。勅號は蓮持院。

**しちくわんーて** 七官手【名】慶長・元和ごろに支那人七官の齎らし來りし青磁器の類。

**しちーけ** 七華【名】七つのはなびら。 り八となること。

**しちーけい** 七經【名】〔書〕七種の經書、即ち詩經・書經・易經・禮記・春秋左氏傳・春秋穀梁傳・春秋公羊傳・春秋穀梁傳の併稱。一説に、易經・書經・詩經・春秋と三禮となりとも、書經・詩經・三禮・春秋公羊傳・論語なりともいふ。じきやう(五經)・きやうい(九經)・じふいちけい(十一經)・じふさんけい(十三經)参照。

**しちけいーおち** 七卿落【名】しちきやうおち(七卿落)を見よ。

**しちーけいーやく** 質契約【名】質權を設定する

**しちーけう** 七教【名】『禮記の王制篇に出づ』人倫の七つの教、即ち君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友・長幼・賓客に關する道義。(五教)参照。

**しちーけぎやうーゐ** 七加行位【名】〔人〕しちけん(七賢)Ⅱに同じ。

**しちーげふ** 質業【名】しちやえいげふ(質屋營業)に同じ。

**しちげふーしや** 質業者【名】質屋を營む人。

**しちげーん** 質權【名】〔法〕債權者が、債權の執行を確實ならしむるため、債務者又は第三者より受取りたる物件を占有し、且つその物件につき、他の債權者に先だちて債權の辨濟を受ける權利。

**しちーけん** 質券【名】質のてがた。しちふだ。

**しちけん** 七賢【名】Ⅰ七人の賢人。七賢







人。Ⅱ支那周の世の七人の賢人、即ち伯夷・叔齊・虞仲・虞逸・朱張・少連・柳下惠の併稱。Ⅲ『荀書の魯康傳に出づ』支那晉代の竹林の七賢(ちくりんしちけん)。阮籍・阮咸・向秀・劉伶・山濤・王戎の併稱。この七人は、隱逸放曠にして、世と交はらず、共に竹林に遊びて、竹林の七賢また竹林の七子といふ。七賢人。せいだん(清談)Ⅱ参照。

**竹林の七賢**【句】しちけん(七賢)Ⅲを見よ。

**しちけん** 七軒【名】〔地〕新吉原遊廓の大門内より、江戸町一丁目までの右側の俗稱。

**しちけん** 七見【名】〔佛〕邪見・我見・愛見・斷見・戒盜見・邪盜見・疑見の併稱。

**しちげん** 七絃【名】Ⅰ七すじの絃。Ⅱ次條の略。

**しちげん-きん** 七絃琴【名】琴の七本ある琴。しちげん。

**しちけんじん** 七賢人【名】Ⅰしちけん(七賢)Ⅱに同じ。Ⅱしちけん(七賢)Ⅲに同じ。

**しちけん-じや** 質權者【名】〔法〕質權を有する人。質取主(しちとりぬし)。

**しちけん-せつていしや** 質權設定者【名】〔法〕しちいれにん(質入人)に同じ。

**しちーこ** 七古【名】〔文〕しちごんこと(七言古詩)の略。

**しちこうーさんみん** 七公三民【名】田租の上納の割合の稱。その年の出來米の七分を年貢として納め、三分を作德とすること。ごろごろみん(四公六民)参照。

**しちーこく** 七國【名】Ⅰ七つの國。Ⅱ支那戰國時代の六國と秦との併稱。七雄。

**しちこく-しやうぎ** 七國將棋【名】(朝鮮より渡來せる一種の將棋。晉の七雄將・或合はせの駒組にて、盤の大いさ三間四方、駒の數多く、七人にて、勝を掛けて、祝の如き竹を用ひて行ふ。

**しちーしさん** 七五三【名】Ⅰ祝儀に用ふる數。一・三・五・七・九の奇數を陽の數にめでたきものと定め、その中より、三つを取りたるもの。Ⅱ饗應にて、まづ三獻とて、勝三つ、五獻とて、初獻に吸物・添肴・三獻に煮・四獻に蒸菱(ふかひし)・添肴、五獻に羊羹・添肴、且ついでれにも、組陪物(くみはい)あるもの。又七獻とて、飯を七の膳まで出すもの。根城反盛者「男は今日の七五三(綜入)とせし戲も、今は誠と繕しげに」 Ⅲしめなは(注連縄)に同じ。

**しちーしつ** 七五三の足洗(ぢ)【句】酒造用の白米を桶に入れ、足にて攪拌するに、最初七十回にて水を替へ、次に五十回にて、最後に三十回にて、また替ふること。七五三の祝【句】男子は三歳と五歳とに、女子は三歳と七歳とに行ふ祝儀。その年の十一月の十五日に行ひ、新衣を著け、氏神に參詣せしむ。男女共三歳の時の髮置、男兒五歳の時の袴著、女兒七歳の時の帶解(ときほど)の名殘として行はるる。

**しちーとん** 七言【名】〔文〕七文字にて、一句

**しちごん-きんたい** 七言近體【名】〔文〕しちごんりつ(七言律)に同じ。

**しちごん-こし** 七言古詩【名】〔文〕漢詩の一體。古詩の七言なるもの。七古。

**しちごん-ぜっく** 七言絶句【名】〔文〕漢詩の一體。絶句にて七言なるもの。七絶。

**しちーごんせん** 七金山【名】〔佛〕しつぎんせん(鐵圍山)を見よ。

**しちごん-の-ひきもの** 七獻の引出物【句】ひきものの(引出物)の條下を見よ。

**しちごん-はいりつ** 七言排律【名】〔文〕排律の七言なるもの。

**しちごん-りつ** 七言律【名】〔文〕律の七言詩の略。

**しちーざ** 七座【名】Ⅰ七つの座位又は座席。Ⅱ鎌倉時代及び室町時代に、商人の株とせしもの七つ、即ち紺の座・炭の座・米の座・千桑積(ちくつ)座・相物(ちぐ)座・馬商座の併稱。一説に、魚・米・酒・鹽・刀・衣・藥なりと。嘉四往來「藍村・七座之店」

**七座の公人**(ぐにん)【句】延暦寺にて、四至内(ないの)維那(ゆい)・會取(ゆい)・出納(ゆい)・車主(ゆい)・政所(ゆい)・專當の七職の併稱。

**しちーさい** 質材【名】抵當物。質物。

**しちーさいし** 七才子【名】Ⅰ『鄧下の七才子』に同じ。Ⅱ支那明代の詩人、李夢陽(ようよう)・何景明・徐禎卿・邊貢・康海・王九思・王廷相の七人の併稱。七才。じつさいし(十才子)参照。Ⅲ支那明の王世貞・李攀龍・謝榛・宗臣・梁有譽・徐中行・吳國倫の七詩人の團體。七子。李王七子。じしし(五子)参照。

**じーさう** 實相【名】〔佛〕じつさう(實相)Ⅱに同じ。

**しちーさうおう** 四地相應【句】しちしさうおう(四神相應)に同じ。盛衰記左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、一つも闕けず、四地相應の靈地なり」

**しちさうさんじんじや** 七座山神社【名】羽後國北秋田郡七座(ぐ)村大字小繁(ぐ)に鎮坐せる縣社。祭神は國常立(ぐ)神・豐斟渟神(ぐ)神・宇比地邇(ぐ)神。

**しちーさばん** 止持作犯【名】〔佛〕殺生・偸盜等の惡法に對しては、止は持戒にして、作は犯戒(ぐ)なること。(佐持止犯に對して)

**しちーさん** 七三【名】藝者の祝儀・玉などを、抱へ主と本人と七分三分に領つこと。

**しちーし** 七紙【名】七枚の紙。

紙の總(ぐ)【句】禮紙の最も正式なるもの。紙三枚重ねて狀を書き、禮紙二枚・表卷二枚を用ふること。ぐいし(禮紙)参照。

**しちーし** 七支【名】〔佛〕『七惡支分せる義にて、支といふ』殺生・偸盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌、即ち十惡中の身三・口四の業(ぐ)の併稱。

**しちーし** 七子【名】Ⅰ七人の子。Ⅱ天條に同じ。

**竹林の七子**【句】『竹林の七賢』に同じ。

**しちーじ** 七寺【名】しちだいじ(七大寺)に同じ。今眞「うちより、故中宮の御ために、七寺に御願經させたまふ」

**しちーじ** 七事【名】しちじき(七事式)に同じ。

**しちーじき** 七事式【名】茶の湯にて、花月・二三(ぢ)・廻炭(ぢ)・廻花(ぢ)・茶かぶき・飲茶(ぢ)・且座(ぢ)・廻花(ぢ)の七を行ふこと。千家の名匠の選定せるもの。しちじ。

**しちーしち** 七七【名】しちしちにち(七七日)の略。太平記「七七の忌日に當るごとに、一日經を書きて、併營して、追孝の作善(ぞん)をぞ致しける」

**しちーしち** 七七【數】七と七とを掛合はすること。

**しちしちーにち** 七七日【名】しちしちにち(四十九日)に同じ。

**しちーじふ** 七十【數】Ⅰ十の七倍。Ⅱ七十人生七十・古來稀なり【句】つじち(古稀)を見よ。『人の生命の短きこと。

**しちじーちやうーだて** 七十挺立【名】關船(ぜき)の一。櫓の數、七十挺を用ふるもの。

**しちじーふいちばんーうたあはせ** 七十一番歌合【名】〔書〕次條に同じ。

**しちじーふいちばんーしよくにんーうたあはせ** 七十一番職人歌合【名】〔書〕月と盤との題を設けて詠みたる七十一番の職人歌合。二卷。七十一番歌合。職人盡歌合。

**しちじーふにーとう** 七十二候【名】Ⅰ陰曆にて、五日を一候とし、一箇月を六候に分ち、一年十二箇月(三百六十日)の時候の變化を示したるものとし、七十二候にて、一年となる。ごじふにこう(二十四氣)参照。Ⅱ(文)連句の法式の一。百韻の初折(ぢ)・二の折・名殘の折の三折にて、句數七十二なるもの。その中に花三つ、月五つあるべきものとす。

**しちじーふにちやうーだて** 七十二挺立【名】關船(ぜき)の一。櫓の數、七十二挺を用ふる

もの。

**しちじゅふはっちゃうだて** 七十八挺立【名】 闕船(ケツセン)の一。櫓の數、七十八挺を用ふるもの。

**しちじゅふろくちゃうだて** 七十六挺立【名】 闕船(ケツセン)の一。櫓の數、七十六挺を用ふるもの。

**しちしみやく** 七死脈【名】〔醫〕漢法にて、命を絕つべき原因となるといふ、七つの脈。搏、即ち彈石脈・解索脈・釜啄脈・魚翔脈・屋漏脈・蝦遊脈・釜佛脈の併稱。

**しちしんぼん** 四智心品【名】〔佛〕『四智は心の品類なるにより、心品といふ』しち四智〔二〕に同じ。

**しちしゃ** 七社【名】 **さんわうしちしゃ** 山王七社(ヤシロ)を見よ。 太平記「天台の教法、七社の靈驗、ひとへに安危を朝廷と共にす」

**しちしゃうう** 質商【名】 **しちやえいげふ** 質屋(ヤ)業に同じ。

**しちしゃう** 七生【名】〔佛〕七度うまれかはること。 太平記「正季からから打笑ひて、七生まで、只同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存候へ」

**しちしゃうう** 七傷【名】身體・精神を損傷する七種のもの。即ち大飽は脾を、大怒は肝を、久し く濕地に坐すれば腎を、寒飲は肺を、憂愁思慮は心を、風雨・寒暑は形を、大恐懼節ならざれば、志を損ふことの併稱。

**しちしゃうう** 七星【名】〔佛〕 **しちせい** 〔七星〕〔二〕に同じ。

**しちしゃう** 七聖【名】〔佛〕小乘教における聖者。即ち見道以上を、根性の利鈍により差別せる七種の階級、即ち隨信行・隨法行・信解・見至・信證・慧解脫・俱解脫の併稱。七賢・七聖〕

**しちしゃう** 七情【名】〔一〕七つの情。〔二〕『禮記の禮運篇に出づ』喜・怒・憂・思・悲・恐・驚の併稱。また喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲の七つの情の併稱。 **ごじゃう** 〔五情〕 **ろくじゃう** 六情〔參照〕。 平家「是れぞと名づけん御病氣無く、只七情に破られ給ひ、御氣の疲れ、御心の結ぼれ深く見えさせ給ふ」

〔三〕漢法にて、藥物の七種の作用、即ち單行するもの、相須(ソウ)つもの、相使ふもの、相惡むもの、相畏るるもの、相反するもの、相殺すものの併稱。

**しちしゃう** 七尺【名】 一尺の七倍。 本朝三國志「琴柱を律に立てかへて、七尺の屏風をこえしからもも」

七尺去って、師の影を踏まず【句】 〔師の條下を見よ。 一茶「節季候や七尺去って小節季候」

**しちしゅう** 七衆【名】〔佛〕佛の弟子たる七種の人、即ち比丘(ビク)・比丘尼・沙彌(シャミ)・沙彌尼・式叉摩那(シキシャマナ)・優婆塞(ウバソク)・優婆夷(ウバイ)の併稱。この中、初の二衆は在家、後の五衆は出家者。在家の二衆は三歸十善・五戒を守り、出家五衆の中、沙彌・沙彌尼はその上に沙彌の十戒を持し、式叉摩那は六法・六隨法を守り、比丘は二百五十戒、比丘尼は三百四十八戒を守る。 **しゅ** 〔四衆〕〔二〕參照。

**しちしゅう** 七宗【名】〔佛〕〔一〕八宗の內の俱舍(ヤ)・成實(ジツ)兩宗を略き、禪宗を加へたる、我が國中世佛教の七つの宗派、即ち律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗・天台宗・眞言宗・禪宗。 平家「本朝流布の法、今は七宗なり」 〔二〕「五家(カ)・七宗」を見よ。

**しちしゅう** 七縱(ジウ)【句】〔七八縱橫の義。七八は七たび八たび從も橫もほしいままの義』幾度も思ふがままになること。 太平記「七縱八橫に破られて」「の條下を見よ。

**しちしゅう** 七種の船【句】 **ふね** 〔船〕

**しちしゅう** 七種不淨【句】〔佛〕 **ふじゃう** 〔不淨〕の條下を見よ。

**しちしゅほう** 七種寶【名】〔佛〕 **しちほう** 〔七寶〕〔二〕に同じ。

**しちしょ** 七所【名】「山王七所」に同じ。 **ほうぜん** 〔奉幣反魂香〕對の金錫、毛彫は波に山王祭、七所御物、薄物の印籠」

**しちしょ** 七澁【名】七種の渋物。即ち、韭・菁・芹・筍茹(ヂ)・炎・浒(ヒ)の總稱。

**しちしょ** 七書【名】〔書〕支那の七部の兵書、即ち孫子・吳子・司馬法・尉繚(ウツリヤウ)子・三略・六韜・太宗問對の併稱。 平明寺殿百人一首「合戰勝負の理非を述べたる七書をよくよく御得心あり」

**しちしょう** 七證【名】〔佛〕衣條に同じ。

**しちしょう** 七證師【名】〔佛〕比丘(ビク)の具足戒を受くる時、これを證明する七人の僧。しちしょう。

「柑の稱。

**しちしょく** 七色【名】 **ぎ** 奇・紅・紫・紺・黃・綠・

**しちしょくびやうぶん** 七處平滿相【名】〔佛〕 **さんじゅうにさう** 〔三十二相〕を見よ。

**しちすごろく** 七雙六【名】雙六の一種。

**しちすんの-わらぢ** 七寸の草鞋【句】 **わらぢ** 〔草鞋〕の條下を見よ。

**しちする** 七出【名】 **しちさん** 〔七去〕に同じ。 蕪里「無二七出一、親樂者、從一年半」

**しちせい** 七生【名】 **しちしゃう** 〔七生〕に同じ。

**しちせい** 七星【名】〔書〕經の彝典を見よ。 **しちえう** 〔七曜〕〔二〕に同じ。〔七政〕〔三〕 **ほくとしちせい** 〔北斗七星〕に同じ。

**しちせい** 七聲【名】 **しちいん** 〔七音〕に同じ。

**じちせい** 自治制【名】〔法〕地方自治團體又は地方公共組合を設け、國家の政務の中、或行政をこれに委任し、みづから處理せしむる制度。自治制度。〔官治制に對して〕を見よ。

**しちせいぐわ** 七清華【名】 **せいぐわ** 〔清華〕

**じちせいど** 自治制度【名】〔法〕 **じちせい** 〔自治制〕に同じ。

**しちせき** 七夕【名】 五節句の一。除暦七月七日の夜。 **たなばた** 〔棚機〕〔三〕參照。

**しちせき** 七赤【名】九星の一。金星にて、西方を本位とす。この屬星の人は柔和なれども、性急にて、忍耐力に乏しといふ。

**しちせつ** 七絕【名】〔文〕 **しちごんぜっく** 〔七言絕句〕の略。

**しちせ-の-わきり** 七世契【名】〔佛〕夫婦の契は七世の過去・現在・未來まで絕えずといふこと。

**しちせんーやしや** 七千夜叉【名】〔佛〕藥師十二神將の眷屬の總稱。 蜻蛉日「十二神將七千夜叉、東西滿山護法聖衆(シヤウ)、山王七社兩所三聖(サンセイ)、時刻を遲らさず召捕りたまへ」

**しちそ** 七祖【名】〔一〕禪・眼・宗の相承傳統者とせらるる馬鳴(バメ)・龍樹(以上印度)・帝心(タイシン)・杜順・雲華・智儼(以上支那)の七人の併稱。「七祖四師」〔二〕 **しちぞう** 〔七高祖〕に同じ。

**しちそう** 七僧【名】〔佛〕法會の時、これを勸むる七つの役僧、即ち講師・讀師・呪願師(ジユガン)・三禮師(サンライシ)・唄師(バイシ)・散花師(サンゲシ)・堂達(ダウタツ)の併稱。一說に、呪願師・散花師・唄師・散花師・梵音師・錫杖師・堂達なりとも。 **くそう** 〔九僧〕參照。 狭衣「七僧なども、すべてならぬまでせさせたまひける」

**しちぞく** 七族【名】〔一〕支那にて、七つの親族。即ち父の一族・姑の子・姑妹の子・女の子・母の一族・妻子・妻の父母の併稱。 **きうぞく** 〔九族〕參照。 〔二〕支那にて、曾祖より曾孫に至る七代の稱。

**しちだい** 七大【名】〔佛〕五大に見・識の二大を併はせたるもの。 **ごだい** 〔五大〕參照。

**じちだい** 自治體【名】〔法〕 **じちだんたい** 〔自治團體〕の略。

**しちだいじ** 七大寺【名】奈良に於ける七つの大なる寺。即ち東大寺・興福寺・西大寺・元興寺・大安寺・藥師寺・法隆寺の併稱。七箇寺。 じゅんにんてんのう 「じゅんにんてんのう」十二大寺・じゅんにんてんのう・十五大寺・じゅんにんてんのう・十二大寺・じゅんにんてんのう・十五大寺などを見くらぶるに、七大寺十五大寺などを見くらぶるに、 **しちだい** 〔七大〕〔一〕支那にて、七つの海。〔二〕〔地〕 **いつしちだい** 〔伊豆七島〕を見よ。〔三〕植〔しちたうあやめ〕七島藺の略。〔四〕しちたうあやめ 〔七島藺〕の略。

**しちだ** 七燵【名】「武藏の七燵」を見よ。

**しちだ** 七道【名】〔一〕七つの道。〔二〕能樂にて、手・足・面・身・意・眼・舌の併稱。〔三〕〔地〕日本全國の七大區劃、即ち東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の併稱。現今は、北海道を加へて、八道とす。「五畿・七道」

**しちだ** 七堂【名】 **しちどうがらんぐ** 七堂伽藍【名】 **しちたうおもて** 七島表【名】 **しちたうゐ** 七島藺【名】

**しちだうがらん** 七堂伽藍・悉堂伽藍【名】古の寺院の七箇の營宇、即ち唐檜の堂、東大・西方丈・鐘樓・経樓・方塔・佛殿・山門の併稱。眞言宗の堂(ドウ)・講堂・五重塔・大







門・經藏(また鼓樓)・中門・鐘樓の併稱なりともいへど、七の數に拘らず、單に堂宇の規模の悉く典型に適ひて具足せるをいへるものの如し。最も古き百濟繡の如きは、例へば撫津國の四天王寺、大和國の法隆寺の如く、南大門より中門を經て、金堂と塔と中央にあり、廻廊これを繞り、その北に講堂、講堂の東に鼓樓・東室、西に鐘樓・西室、北に北室あり。唐樣のは、例へば大和國の東大寺・招提(ショウダイ)寺・興福寺の如く、塔は廻樓の外に、二基相對し、金堂は廻樓の後邊中央にあり。禪宗のは、例へば京都の五山の如く、三門・佛殿・法堂・方丈一列に前後に相並び、禪堂・經藏・鐘樓・浴室・東司(ベンス)等、その左右に適宜に配置せらる。天台・眞言兩宗のには、一定の典型なかりしものの如し。〔吉田〕

**しちたうなだ** 七島洋【名】〔地〕薩摩國寶七島(ダイトウ)の間にある海。

**しちたうーむしろ** 七島莚【名】次條を見よ。

**しちたうーゐ** 七島藺・莊芸【名】〔植〕莎草(ハマスゲ)科に屬する多年生の草。莖は大藺(ウ)に似て大きく、三稜あり。夏秋の際、莖の末に綠褐色なる花、穗をなして開く。水田に培養し、莖は乾し裂きて、疊表又は莚に製す。これを琉球表又は青莚(アヲゴウ)といひ、また寶七島(ヒチタウ)にても製するより、七島表・七島莚といひ、豐後よりも多く製出するより、また豐後表の名もあり。りうきうゐ。なしまさう。しちたう。しったう。

**しちだし** 七出【名】帳合米(ハツ)にて、問屋が七分の附合(ツケ)をなすこと。

**しちだねーしろ** 質種【名】 **しちぐさ** 〔質種〕に同じ。

**しちたん** 悉曇【名】 **しったん** 〔悉曇〕に同じ。

**しちだん** 七壇【名】七つの壇。

七壇の修法(ホウ)【句】〔佛〕密教にて、七佛藥師の各に一つづつの祭壇を設けて、安產・息災等を所ゐるために行ふ修法。七佛藥師法。

七壇の御修法(ミ)【句】〔佛〕前條の敬稱。 平家「七壇の御修法・長日御修法、おほやけ方・宮方と行はせたまふ」

**しちだんーふさ** 七段草【名】〔植〕次條に同じ。

**しちだんくわ** 七段花【名】〔植〕紫陽花の培養的變種。夏、莖の頂に大形の無性花と小形の有性花とを、傘繖花序をなして開き、額狀花は變じて數多の長所圓形の萼片をなし、相重なりて菊花狀をなし、花心より更に抽きて、また花を開き、五七層に及ぶ。しちだんくさ。

**じちだんたい** 自治團體【名】〔法〕 **じちはうじちだんたい** 〔地方自治團體〕に同じ。〔二〕公共團體。

**しちだんーの-そなへ** 七段の備【句】 **そなへ** 〔佛〕の條下を見よ。

**しちーたらじゅ** 七多羅樹【名】〔佛〕『法華經の藥王品、智度論の卷二などに見ゆ』高木なる多羅樹の高さを七倍せるほどの高さ。日本後紀「恐れて虛空に飛上り、その高さ七多羅樹」

**しちーち** 七値【名】 **しちえう** 〔七曜〕〔二〕に同じ。

**しちーち** 七質【名】土地を質入すること、又その質入したる土地。

**しちーちお** 悉地【名】〔佛〕 **しったん** 〔悉地〕に同じ。

**じちーちゃうにん** 自地町人【名】自己の所有地に居住せる町人。〔江戸時代の語〕

**しちーちゆう** 七重【名】七層をなして重なること。

**しちぢゆうーさう** 七重草・旌飾花【名】〔植〕 **くりんさう** 〔九輪草〕に同じ。

**しちぢゆーぎやうじゆ** 七重行樹【名】〔佛〕『阿彌陀經に「極樂國土、七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是周市圍繞」とあり。七重に行列せりといふによりて名づく』次條に同じ。

**しちぢゆーほうじゆ** 七重寶樹【名】〔佛〕『觀無量壽經に「一觀之作七重寶樹想」とあり』極樂浮土の莊嚴の一として、七重に列べりといふ七種の寶樹、即ち金樹・銀樹・瑠璃樹・玻璃樹・珊瑚樹・碼瑙樹・硨磲樹。七重行樹、寶の樹木。 平家「軒に並べる植木をば、七重寶樹とかたどり」

**しちーつがん** 資治通鑑【名】〔書〕支那周の威烈王より、五代に至るまで、百十三主一千三百六十二年間の歷史を、編年體に編纂せるもの。二百九十四卷。宋の司馬光の英宗の勅を奉じて撰びしもの。

**しちーてう** 七條【名】〔一〕七つの條(ジウ)。〔二〕「七條の袈裟」の略。

**しちーでう** 七條【名】〔一〕〔地〕京都市の東西の通路の一。〔二〕廷氏の一。本姓は蘇原。水無瀨(ミナセ)氏の支族。水無瀨隆俊を祖とす。明治維新後、子爵を授けらる。

七條の袈裟(ケサ)【句】三衣(サンエ)の一。七輻(フク)にて作りたる袈裟。七條衣。 **ばんたらえ** 〔萬多羅僧(ヒクソウ)〕上衣(ウワギ)。 太平記「七條の袈裟を取出して」

**しちでうーえ** 七條衣【名】「七條の袈裟」に同じ。

**しちでうーけさ** 七條袈裟【名】前條に同じ。

**しちでうーせん** 七條錢【名】享保十年に、京都の七條にて鑄造せし寶永銅錢。

**しちでうーぬん** 七條院【名】〔人〕 **ふちはらまさこ** 〔藤原殖子〕を見よ。

**しちてんーはったう** 七顚八倒【句】 **しってんばったう** 〔七顚八倒〕を見よ。

**しちと-いり** 七斗入【名】五斗入より三まはり大きく、十斗入より三まはり小さき土器。

**しちーとう** 七等【名】〔一〕七つの等級。〔二〕七番目の等級。〔三〕勝れたる人の七つの階級。即ち五人にすぐるるは義、十人にすぐるるは選、百人にすぐるるは俊、千人にすぐるるは英、二十人にすぐるるは孫、萬人にすぐるるは傑、一億人にすぐるるは聖。〔四〕孫・曾孫・玄孫・來孫・昆孫・仍孫(ジヨウ)・雲孫の併稱。

**しちーとく** 七頭【名】足利時代に、三管領に次ぎて頗る重き家柄、即ち山名・一色(イシキ)・土岐・赤松・京極・上杉・伊勢の七家の併稱。

**しちーとく** 七德【名】〔一〕七つの德。〔二〕左傳の宣公十二年の條に見ゆ』武道の七の德、即ち一に暴を禁じ、二に兵を戢(シウ)め、三に大を保ち、四に功を定め、五に民を安んじ、六に衆を和せしめ、七に財を豐にすること。〔三〕次條の略。

七德の舞【句】『武道の七德を表象せるものなる義。前條〔三〕參照』 **じんわうはちんらく** 〔秦王破陣樂〕に同じ。 樂(ガク)・樂府の御議論の番にめされて、七德の舞を忘れたりければ」

**しちとーやき** 七度燒【名】幾度も燒附けて精製したる鐵金(ケン)。

**しちとりーぬし** 質取主【名】〔法〕 **しちけんしゃ** 〔質權者〕に同じ。

**しちーなん** 七難【名】〔一〕七種の災難。法華經の普門品に依れば、火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難の併稱。藥師經に依れば、人衆疫難・他國侵逼難・自界叛逆難・星宿變怪難・日月薄蝕難・非時風雨難・過時不雨難の併稱。 盛衰記「三災・七難・殘る事なし」 四十八卷「七難卽滅、七福卽生」〔二〕種種の非難すべき點。(主に女の容貌の上にいふ) 蜻「色の白いは七難隱す」

七難九厄【句】人の七と九とに當る歲には、災厄に遇ふといふ迷信。〔諺語〕

**しちなんそくめつ-にち** 七難卽滅日【名】九星にて、萬事に用ひて吉なりといふ日。正月は己の日、二月は午の日、三月は未の日といふ順序に配して、十二月の辰の日に終る。

**しちーに** 七二【數】 **く** 〔九〕に同じ。〔滑稽の隱語〕 丹後興生「や、それについて、小女郎、そなたの敵、松板のしたには、何とて見えぬぞ…むむ、そのしちにとは、九郎助の事か」

**しちにんーがーしやう** 七人合唱【名】〔音〕 **しちぶがっしやう** 〔七部合唱〕に同じ。

**しちにんーさるがく** 七人散樂【名】「賀茂の水無月(ミナ)の節」に同じ。

**しちにんーばり** 七人張【名】六人にて押したわめ、他の一人これに弦を掛くるほどの强弓。三人張・四人張・五人張の類。

**しちーねん** 失念【名】 **しつねん** 〔失念〕に同じ。

**しちーねんき** 七年忌【名】 **しちくわいき** 〔七回忌〕に同じ。 今宮心中「來月は母の七年忌」

**しちーの-じーづくし** 七字盡【名】七の字の附く詞を多く連ぬること、又その詩歌文章。七十の賀の祝などに書く。 蕪雲千紅「瓶馬老人、人生七十古來稀なる賀筵を開く。われ四十年來の知己なれば、世の人のもてはやす七の字づくしでも書かばなを

らぬところなれど」

**しちのへ** 七戸【名】〔地〕陸奥國上北(ジヤウホク)郡にある町。奥州街道に當り、郡役所を置く。南部氏の舊藩地。

**しちはいず** 七杯酷【名】酷一杯、酒乍杯、食慾少量を加へて煮たるもの。

**しちはべん** 七方便【名】〔佛〕次條に同じ。『觀音玄義』五乘・三乘・七方便、諸天善神加被を垂れたまへ」

**しちはべんゐ** 七方便位【名】〔佛〕しちけん(七賢)三に同じ。

**しちはん** 七半【名】博奕(バクエキ)の一種。ちよぼいちの類。

**しちばり** 質針【名】著物の裏をくける時、設りて、そのくけ目の絲の表にあらはるること。

**しちぶが・しやう** 七部合唱【名】〔音〕『英語』七人の樂音に對して歌ふ曲。七人合唱。

**しちぶがそう** 七部合奏【名】〔音〕『英語』七箇の樂器にて合奏する曲。

**しちぶく** 七福【名】〔佛〕『仁王經』に「七難即滅、七福即生」とあり。『七つの幸福』四十八。七難即滅、七福即生

**しちぶくじん** 七福神【名】世俗に、福德の神として崇敬する七人の神仙、即ち寿三郎・大黒天・毘沙門天・弁財天・布袋和尚・寿老人・恵比寿。神佛混淆の時代に、仁王經に「七難即滅、七福即生」とあるに本づき、日本・支那・印度三國の古傳說中より、七個の神仙を見立てて作り出でしものなるべしといふ。足利時代以來の流行なるべく、能(ノウ)の狂言に「七福神」の曲あり。また德川時代には、これを一艘の船に乗合へる狀を描きて、めでたきものとする習慣も生じたり。

(しちふくじん)

また古くは、壽老人に代ふるに、吉祥天又は猩猩を以てせるもあり。

**しちふくじんまうで** 七福神詣【名】新年に、七福神の一神づつを祭れる七箇處の社寺を巡拜すること。しちふくまうで。しちふくまゐり。

**しちふく-たうぞく** 七福盜賊【名】七福神の行裝をなして忍び入る盜賊。足利時代の家にても、福神來れりとして、思ふがままに財物を出し與ふる迷信ありといふ。

**しちふく-まうで** 七福詣【名】しちふくじんまうで(七福神詣)の略。

**しちふく-まゐり** 七福參【名】前條に同じ。

**しちふぶ-しふ** 七部集【名】〔書〕はいかいしちぶしふ(俳諧七部集)を見よ。

**しちふだ** 質札【名】質契約の際、質屋より質置主に交附する證標。新撰狂歌集『その置主さへ知れたれば、質札を買取り、此方へ受戻したき』

**しちふつ** 七佛【名】〔過去七佛〕を見よ。

**しちふつ** 七佛の阿闍梨【句】〔佛〕七佛藥師法を修する時の七人の阿闍梨。『遊鼎』「いみじき願ども立てさせたまふしるしにや、七佛の阿闍梨まゐりて」

**しちふつ-あじやり** 七佛阿闍梨【名】〔佛〕「七佛の阿闍梨」に同じ。

**しちふつ-つうかい-げ** 七佛通戒偈【名】七佛を通じて、教行の根柢とした偈(ゲ)。「諸惡莫作(マサ)・諸善奉行(ウサ)、自淨其意、是諸佛教」の四句より成る。「諸惡は作(サ)す莫く、諸善は奉(ウ)行ひて、自らその意を淨くする。是、諸佛の教なり」との意。諸佛出世の初は、弟子淸淨なりしため、煩瑣なる禁戒を要せず、ただこの一偈を通戒として、事足りしなり。通戒。略戒。

**しちふつ-やくし** 七佛藥師【名】『藥師如來が、衆生を濟度せんがために、分身して現ずる七佛體、即ち善名稱(ゼンミヤウシヤウ)吉祥(キツシヤウ)王如來・寶月智嚴(ゲツ)光音自在王如來・金色(コンシキ)寶光妙行(ミヤウギヤウ)成就如來・無憂(ウ)最勝吉祥如來・法海雷音如來・法海勝慧(ケイエ)遊戲(ゲ)神通(ジン)如來、藥師瑠璃光如來の併稱。この七佛、この世界の東方に、各一淨土を構へて住すといひ、また北斗七星はこの七佛の化現(ゲン)なりとも說かる。

**しちぶ** 京【名】〔地〕甲斐國南巨摩(コマ)郡にある山。白根山脈の東方の支脈に屬し、巻氣川を隔てて、身延山に對す。高さ五二〇〇尺。山上に日朗の祀りし山久遠(クオン)寺の鎭守たり。

**しちめん-たいぼさつ** 七面大菩薩【名】日蓮宗の守護神。甲斐國七面山に鎭坐す。七面大明神。前條參照。

**しちめん-だいみやうじん** 七面大明神【名】前條に同じ。

**しちめんだう** 七面倒【名】『しち(七)は接頭語』甚だ面倒なること。浮世風呂「おめえが嫁で、嫁を姑のやうにあしらふ氣になれば、七面倒なことはねえ」

**しちめん-づくり** 七面造【名】〔建〕七面山上なる七面大菩薩の堂の建築に用ひたる樣式。入母屋(イリモヤ)造に向拜(ハイ)の附きたる屋根の上に、更に一種の樓を載せたるもの。

(しちめんづくり)

**しちめん-ぢう** 七面【名】〔人〕高僧。藤原忠通の子。初名は道快。大僧正に敍せられて、慈圓と號す。學・和・漢・佛を兼ね、また西行に從ひて和歌に名あり。天台座主となり、嘉祿元年寂す。寿齢三年、慈鎭と諡せらる。

**しちめん-くわしやう** 慈鎭和尚【名】〔人〕前條の敬稱。盛衰記「慈鎭和尚荷の末だ慈圓阿闍梨にておはしける時」

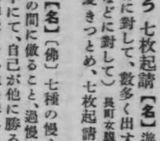
**しちめん-つう** 見枕痛【名】まじめ。かたき。世間娘氣質「じちめんなる春公はとてもせぬ心なれば」

**しちめん-ざん** 七面山【名】〔地〕甲斐國南巨摩(コマ)郡にある山。白根山脈の東方の支脈に屬し、巻氣川を隔てて、身延山に對す。高さ五二〇〇尺。山上に日朗の祀りし七面大菩薩の本祠及び拜殿等あり、身延山久遠(クオン)寺の鎭守たり。

**しちめん-だいぼさつ** 七面大菩薩【名】日蓮宗の守護神。甲斐國七面山に鎭坐す。七面大明神。前條參照。

**しちめん-だいみやうじん** 七面大明神【名】前條に同じ。

**しちめんどくさい** 七面倒臭い【形】『しち(七)は接頭語』甚だ面倒くさし。



(しちめんどくさい)

**しちもつ** 質物【名】質にあづかりたる品物。質權の目的物。太平記「家中に毎事行三絵約一切の質物共も、古き物を用ふ」

**しちもつ-ぎんかう** 質物銀行【名】主として質物を擔保に金錢を貸附くる銀行。

**しちや** 七夜【名】子女の生れてより七日目にあたる夜。うぶたち。この夜祝儀を行ふ。源氏「しちやは、うちより、それも、おほやけざまなり」孕常盤「七夜の內は、横紙さへさせぬもの」

**しちや** 七夜の祝【句】七夜に行ふ祝儀。うぶたちのいはひ。

**しちや** 質屋【名】質屋營業をなす家、又その人・典鋪。天の網島「この風呂敷も氣遣と、引きほどき、とり散らし、さればこそこそ是れも質屋へ飛すのか」

**しちやう** 廂丁【名】〔建〕めしつかひ。こもの。『古、仕丁・掘興丁のために、水汲炊を辨じたる者。しちよ(廂女)參照。雜紀「諸司仕丁・掘興丁等廂丁」

**しちやう** 仕丁・使丁【名】〔建〕『古、五十戸毎に一人づつを徵し、諸司の雜役に服せしめし賤吏。中世以後、院司・親王家・攝關家・大臣家等にも設かれたり。つかへのよぼろ。

**しちよ** 仕女【名】參照。『江戸時代に、御臺所にて、御側身その他諸事の使役に供せし者。『明治の初、各官廳に置き、廳中の雜役に從事せしめし等外吏。明治十年廢止。

**しちやう** 使廳【名】はびくしちやう(檢非違使廳)の略。しのちやう。(古語)後撰「この法師をとらへて、所より使廳へ出だしたりけり」

**しちやう** 視聽【名】しし(視聽)に同じ。

**しちやう** 支廳【名】出張の役所。派出の役所。

**しちやう** 市廳【名】しやくし(市役所)に同じ。

**しちやう** 市長【名】『町の長。』『市を代表する有給吏。內務大臣が、市會をして候補者三人を選擧・推薦せしめ、その中より上奏・裁可を經て任命す。任期は六箇年。また市參事會を組織する一員として、その議長となる。

**しちやう** 師長【名】師匠と長上と。

**しちやう** 仕長【名】仕所(ドコロ)の長。

**しちやう** 止長【名】しちよう(翅鳥)に同じ。師鳥『夕顏の宿に蕁を打てば、……絕ゆまじき筋を尋ねし玉かづら、止長にいざや掛けうよ」

**しちやう** 紙帳【名】『紙を張合はせて作りたるふとん。『紙を張合はせて作りたる蚊屋。持統天皇歌集「その家貧しく、蚊帳も紙帳もなつの夜に」

**しちやう** 弛張【名】『ゆるぶることと、張く張ることと。『綻かにすることと、緩にすることと。

**しちやう** 詞場【名】文藝の場所。文壇・文場。太平記「對策及弟して、自ら詞場に折桂給ふ」

**しちやう** 市場【名】『英 Market』『(經)商品の需要・供給の關係を集注する一定の經濟範圍。その範圍の廣狹によりて、地方市場・一國市場・世界市場等の名あり。國內外によりて、內國(內地)市場・外國(海外)市場の別あり。またその性質によりて、金融市場・運賃市場・株式市場等の種類あり。『貨物若しくは金錢の賣買取引の行はるる場所。賣業者・供給者が貨物・商品等を提供して、その需要者を求めんがために、定時に會合する場所。その取扱ふ商品の種類によりて、綿物市場・魚市場・青物市場・家畜市場等に別たる。いちば。

**しちやう** 觀場【名】しや(觀野)に同じ。





**しちほんゐ** 七本絽【名】絽絲(ロイト)を七筋づつ合はせて、一つの絽目を現はしたる組織。

**しちまい-ぎしやう** 七枚起請【名】遊女などの、數多の客に對して、數多く出す起請文。『一枚起請などに對して』長唄女郎切「いく夜いく夜の変きつとめ、七枚起請・そら誓文」

**しちまん** 七慢【名】〔佛〕七種の慢心。即ち慢とて、同類の間に傲ること、過慢とて、相似たる者の中にて、自己が他に勝るとして傲ること、慢過慢とて、他の勝れたるに闘らず、强慢とて、自己の無力に闘らず、自己を恃みて、他を凌ぐこと、增上慢とて、未だ增上緣を得ざるに、既に得たる如くに誤認して跡ること、不劣慢とて、自己の無能に闘らず、同類に跡ること、邪慢とて、邪見に就して、他を凌ぐことの併稱。

**しちまんぼう** 七萬寶【名】「七珍(チン)萬寶」の約。玄宗五人男「しちまんぼうにも換へがたく、いとしうゆかしく」

**しちみ-みせ** 質店【名】質屋の營業所。

**しちみたらがらし** 七味唐辛【名】なないろたうがらし(七色唐辛)に同じ。

**しちみやう** 七名【名】〔文〕連句の附け方の七種。即ち有心(ウシン)とて、附句(フク)にて前句(ゼンク)の委をあらはすこと、拍子とて、前句が噪なる時、附句にて、その噪せらるる物の委をあらはすこと、色立(ダテ)とて、連句の上に色彩に關する語を用ひて、上下を引立つること、起情(キジヤウ)とて、前句に情なきを、附句にて、その情をあらはすこと、向附(ムカフヅケ)とて、前句の中より趣向を求めずして、別方面の事を捕へ來り、しかも前句と連れ得るやうに附句すること、應答とて、前句と附句と自問・自答の心なるもの、遣句(ヤリク)とて、あまり前句に拘はらず、さらりと附けて、次の句の附きやすきやうにすること。各務(カガミ)支考に始まるといふ。

**しちむつかし** 七六箇敷【形二】しち(七)は接頭語』こみいりてむつかしきこと。手數多くしてむつかしきこと。

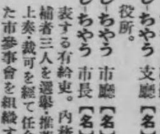
**しちめ** 實目【名】まじめ。かたき。世間娘氣質「じちめんなる春公はとてもせぬ心なれば」

**しちめん-さん** 七面【名】〔人〕前條の敬稱。盛衰記「慈鎭和尚荷の末だ慈圓阿闍梨にておはしける時」

**しちめん-つう** 見枕痛【名】まじめ。かたき。世間娘氣質「じちめんなる春公はとてもせぬ心なれば」

**しちめん-ぢくりづくり** 七面造【名】〔建〕七面山上なる七面大菩薩の堂の建築に用ひたる樣式。入母屋(イリモヤ)造に向拜(ハイ)の附きたる屋根の上に、更に一種の樓を載せたるもの。

**しちめん-てう** 七面鳥・吐綬雞・白露雞【名】『鷄類に屬する鳥。北米の原產。體重七貫目に達するものあり。羽毛種種の色をなす。喉には、獨逸の如き肉垂あり。時に尾を團扇のごとくに擴ぐ。人家に畜ひ、その肉を賞美す。からくんてう。うみきじ。かるくん。』



(しちめんどくさい)

**しちめん** 變り易き心の人に譬ふ。

**しちもつ** 質物【名】質にあづかりたる品物。質權の目的物。太平記「家中に毎事行三絵約一切の質物共も、古き物を用ふ」

**しちもつ-ぎんかう** 質物銀行【名】主として質物を擔保に金錢を貸附くる銀行。

**しちや** 七夜【名】子女の生れてより七日目にあたる夜。うぶたち。この夜祝儀を行ふ。源氏「しちやは、うちより、それも、おほやけざまなり」孕常盤「七夜の內は、横紙さへさせぬもの」

**しちや** 七夜の祝【句】七夜に行ふ祝儀。うぶたちのいはひ。

**しちや** 質屋【名】質屋營業をなす家、又その人・典鋪。天の網島「この風呂敷も氣遣と、引きほどき、とり散らし、さればこそこそ是れも質屋へ飛すのか」

**しちやう** 廂丁【名】〔建〕めしつかひ。こもの。『古、仕丁・掘興丁のために、水汲炊を辨じたる者。しちよ(廂女)參照。雜紀「諸司仕丁・掘興丁等廂丁」

**しちやう** 仕丁・使丁【名】〔建〕『古、五十戸毎に一人づつを徵し、諸司の雜役に服せしめし賤吏。中世以後、院司・親王家・攝關家・大臣家等にも設かれたり。つかへのよぼろ。

**しちよ** 仕女【名】參照。『江戸時代に、御臺所にて、御側身その他諸事の使役に供せし者。『明治の初、各官廳に置き、廳中の雜役に從事せしめし等外吏。明治十年廢止。

**しちやう** 使廳【名】はびくしちやう(檢非違使廳)の略。しのちやう。(古語)後撰「この法師をとらへて、所より使廳へ出だしたりけり」

**しちやう** 視聽【名】しし(視聽)に同じ。

**しちやう** 支廳【名】出張の役所。派出の役所。

**しちやう** 市廳【名】しやくし(市役所)に同じ。

**しちやう** 市長【名】『町の長。』『市を代表する有給吏。內務大臣が、市會をして候補者三人を選擧・推薦せしめ、その中より上奏・裁可を經て任命す。任期は六箇年。また市參事會を組織する一員として、その議長となる。

**しちやう** 師長【名】師匠と長上と。

**しちやう** 仕長【名】仕所(ドコロ)の長。

**しちやう** 止長【名】しちよう(翅鳥)に同じ。師鳥『夕顏の宿に蕁を打てば、……絕ゆまじき筋を尋ねし玉かづら、止長にいざや掛けうよ」

**しちやう** 紙帳【名】『紙を張合はせて作りたるふとん。『紙を張合はせて作りたる蚊屋。持統天皇歌集「その家貧しく、蚊帳も紙帳もなつの夜に」

**しちやう** 弛張【名】『ゆるぶることと、張く張ることと。『綻かにすることと、緩にすることと。

**しちやう** 詞場【名】文藝の場所。文壇・文場。太平記「對策及弟して、自ら詞場に折桂給ふ」

**しちやう** 市場【名】『英 Market』『(經)商品の需要・供給の關係を集注する一定の經濟範圍。その範圍の廣狹によりて、地方市場・一國市場・世界市場等の名あり。國內外によりて、內國(內地)市場・外國(海外)市場の別あり。またその性質によりて、金融市場・運賃市場・株式市場等の種類あり。『貨物若しくは金錢の賣買取引の行はるる場所。賣業者・供給者が貨物・商品等を提供して、その需要者を求めんがために、定時に會合する場所。その取扱ふ商品の種類によりて、綿物市場・魚市場・青物市場・家畜市場等に別たる。いちば。

**しちやう** 觀場【名】しや(觀野)に同じ。





併稱。この七佛、この世界の東方に、各一淨土を構へて住すといひ、また北斗七星はこの七佛の化現(ゲン)なりとも說かる。『京都及びその附近の七箇寺、即ち紙園の祇園寺・鞍倉の法雲寺・八幡(ヤハタ)の護國寺・大秦(ウズマサ)の廣隆寺・法倉の法雲寺及び延曆寺・珍重寺・平等寺なる藥師の併稱。東鑑千葉數「五大明王・六觀音・七佛藥師の御產の守」

**しちぶつ** 七佛藥師・五壇の御修法(ミホフ)【句】〔佛〕七佛藥師法と五壇の修法との敬稱。『皇大法・祕法殘なく行はる。七佛藥師・五壇の御修法・普賢延命・金剛童子・如法愛染など、すべて數知らず」

**しちぶつ** 七佛藥師・熾盛光の法【句】〔佛〕七佛藥師と熾盛光法と。太平記「七佛藥師・熾盛光……の法」

**しちぶつ** 七佛藥師の法【句】〔佛〕しちぶつやくしほふ(七佛藥師法)に同じ。盛衰記「根本中堂にして七佛藥師の法・金堂にして北斗尊星王(ソンシヤウオウ)の法・內法・外法(ゲホフ)、數を盡して行はる」

**しちぶつやくし-ほふ** 七佛藥師法【名】〔佛〕「七壇の修法(シホフ)」に同じ。

**しちぶつりつきふくわいこくこうさい** 七分利附外國公債【名】しちぶこくこうさい(外國新公債)に同じ。

**しちべい** 觀地平【名】ちへいせん(地平線)に同じ。

**しちべう** 七廟【名】支那にて、天子の太祖の廟と三昭・三穆との併稱。さんべう(三廟)・ごびう(五廟)・せうぼく(昭穆)參照。

**しちべん** 七辨【名】左右の大舞、左右の中舞、左右の少舞の六人に、中・少のうちにて、權官に補せられし人を合はせての稱。太平記「大中納言八座・七辨・五位・六位內外」の諸司」

**しちへんげ** 七變化【名】あちさゐ(紫陽花)

**しちへんじん** 七偏人【名】〔書〕江戸柳橋に能樂亭といふ一戸を搆へたる喜多郎といふ若旦居を主人として、茶目吉・虚呂松等の同氣相求むる道樂者七人相集まりて、茶番狂言に浮世を弄びしさまを描きたる滑稽小說。五篇十五冊。讀亭鯉丈の著。

**しちべゑ** 七兵衛【名】尻の隱語。(藝人の語)

**しちほ** 七步【名】步數七つ。ななあゆみ。七步の詩【句】『『世說の文學篇に見ゆ』『支那魏の曹植、詞才に富み、その兄丕(即ち魏の文帝)と善からず。丕、植に命じて、七步の中に句を作らしむ。成らざれば法に行はんといふ。植、辭に應じて「煮豆持作羹、漉豉以爲汁、萁在釜底、然豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急」と應ふ。丕深く慙ぢたりといふ故事。ななあゆみ。』詞藻の才の勝れたること。太平記「靈少將、…詩は捻蹴席波瀾、七在七步才」

**しちほ** 七步の詩【句】前條『にある曹植の作り詩。「五步の詩」參照。

**しちほう** 七寶【名】しつぽう(七寶)『に同じ。

**しちほう-たふ** 七寶塔【名】七重の寶塔。

**しちぼだい** 七菩提【名】〔佛〕次條の略。

**しちぼだいぶん** 七菩提分【名】〔佛〕佛道を覺る七種の智、即ち擇法覺分として、對象の眞僞を撰擇する智、精進覺分として、無益の苦行を僞さず、眞の法にかなへる行をなす智、喜覺分として、美く覺り、眞の歡喜に住する智、除覺分として、諸の虚僞を除き、眞の美根を失はざる智、捨覺分として、執著を全く捨てて、永く迫憶せざる智、定覺分として、禪定(ゼンヂヤウ)に住して、妄想を生ぜざる智、念覺分として、定と慧とを均等ならしむる智、念覺分として、定と慧とを均等ならしむる智の併稱。七菩提。栞玉「過の淚も五根・五力・七菩提分・八聖道を逆ぶ同え」

**しちほん** 七本立【名】本膳に、七種の菜を供ふること。

**しちほん-あふぎ** 七本扇【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(ぎふあんぼちし)

**しちほん-やぐるま** 七本矢車【名】紋所の一。七本の矢より組立てたる矢車。

**しちほん-やり** 七本槍【名】ある戰場にて、抬を以て高名を擧げし七人の武者の併稱。賤(ハウ)ケ嶽の七本槍・小豆坂(アヅキザカ)の七本槍・蟹江の七本槍・賤田の七本槍等あり。各々

**しちやう** 支場【名】出張所。てばりしよ。

**じちやう** 次長【名】長官の次に位して、これを補佐する職。「参謀次長」

**じちやう** 次丁【名】大寶令の制度にて、老丁と殘疾の者との總稱。(正丁・少丁・老丁に對して)

**じちやう** 耳聽【名】じてい(耳聽)に同じ。

**じちやう** 磁場【名】〔理〕『英Magnetic field』磁石の磁力の及ぶ場所。磁界。

磁場の強さ【名】〔理〕『英Intensity of magnetic field』磁場の或點における強さ。單位の磁氣量を持來したる時、これに作用すべき磁力の強さを以て表はす。りあるきし者。

**しちやう・かかく** 市場價格【名】『英Market value』市場にて交易せらるる時の貨物の價格。客觀的價格。

**しちやうそん** 市町村【名】市と町と村。

**しちやうそん・くわい** 市町村會【名】市會と町會と村會との總稱。

**しちやうそん・せい** 市町村制【名】市と町村との制度。市制と町村制と。

**しちやうそん・のうくわい** 市町村農會【名】市農會と町農會と村農會との總稱。

**しちやうだう** 賜杖堂【名】江村北海の詩「杜。

**しちやうだて** 四挺立【名】小早(ハヤ)の、艪の數四挺用ふるもの。

**しちやうちやう** 支廳長【名】支廳の長官。「北海道支廳長」「樺太支廳長」

**しちやうねつ** 弛張熱【名】〔醫〕かんけつねつ(間歇熱)に同じ。

**しちやうまつり** 死杖祭【名】しくわつちやうまつり(死活杖祭)に同じ。

**しちやうれい** 支廳令【名】北海道廳及び樺太廳の支廳長が發する行政命令。

**しちやえいげふ** 質屋營業【名】貨物を取りて、金を貸し、利子を收むる營業。

**しちやえいげふしや** 質屋營業者【名】質屋營業をする人。

**しちやかまし** 七嗔【形二】『しち(七)は接頭語。うるさくやかまし。こめんだらにやかまし。

**しちやの・くら** 質屋庫【名】〔書〕むかしがたりしちやのくら(昔話質屋庫)の略。

**しちやはぢ** 七夜待【名】〔佛〕密教の俗語(ライグ)門の一部として、毎月十七日夜より二十三日夜までの七夜の間、千手觀音・正觀音・馬頭觀音・十一面觀音・準胝(ジュンテイ)觀音如意輪觀音・勢至菩薩を、順次に毎夜の本尊とし、その印明(インミヤウ)を結誦(ケツジユ)して、所願成就を祈ること。にじふくやまち(二十六夜待)を參照。

**しちやう** (英Stew)【名】西洋料理の一。牛肉・雞肉又は豚肉の類に野菜を加へ、バタ文火(ブンクワ)にて、長時間煮詰めたるもの。

**しちやう** 支柱【名】柱を立てて支ふること、又その柱。つっぱり。

**しちやう** 七雄【名】■七つのすぐれたもの。■しちさく(七國)に同じ。

**しちやう** 死中【名】死地にあること。

死中に活を求む【句】『後漢書の岑芝傳に「男子當に死中求活、可坐窮乎」とあるに本づく』次條に同じ。(諺語)

死中に生を求む【句】『晉書の呂光載記に「死中求生正在今日」とあり』死するばかりの位置に陷りて、生くべき手段を求む。死中に活を求む。(諺語)

**しちやう** 市中【名】市中のうち。まちなか。

**しちやう** 四仲【名】『書經の周官篇に出づ』仲春・仲夏・仲秋・仲冬の四つの併稱。

**しちやう** 四注【名】〔建〕よせねづくり(寄棟造)に同じ。

**しちやう** 仔蟲【名】〔動〕さなぎ(蛹)に同じ。

**しちやう** 至忠【名】至って忠誠なること。純忠。

**しちやう** 四重【名】〔佛〕しちゆうきんかい(四重禁戒)の略。佛教國語參照。十重禁戒の略。

**しちやう** 失禮【名】〔古語〕失禮。

**しちらう** 天下のしちらいをつかうまつりあへり」

**しちらう・ねずみ** 七郎鼠【名】鼠の子。

**しちり** 七里【名】〔地〕しりなだ(七里灘)の略。

**しちり** 七里さがる【句】事に後(オク)る。

**しちり・がはま** 七里濱【名】〔地〕關東道六町一里として數へたる長さにより名づく』相模國鎌倉郡腰越(ヨコヅ)と稻村ケ崎との間にある海濱。濱邊に極樂寺・津・腰越の三村あり。東方は由比ヶ濱に接す。袖ケ浦。

**しちり・けつ・かい** 七里結界【名】■〔佛〕七里四方を結界すること。■蔡ひて、近づけぬこと。決して寄せつけぬこと。しちりけっぱい。しちりけんばい。

**しちり・けっぱい** 七里結界【名】前條■の略。

**しちり・けんばい** 七里結界【名】しちりけっぱい。七里結界(ケツカイ)の訛。

**しちり** あやまち。過失。幕廷御家誕生室、若し誕生の御子に失あって、御世繼にかなはぬ時、汝等夫婦は國の滅亡を悅ぶか」■品行又は藝術上の作品などの缺點。

**しちりつ** 自注・自註【名】自身にて註すること、又その註。

**じちゆう** 次忠【名】忠義は忠義なれども、至極の忠義とは稱しがたきもの。曾我兄が舅「伍子胥が夫差における、管仲が桓公における、次忠・下忠と謂つべし」

**じちゆう** 寺中【名】■寺院の中。寺内。■大寺の總門の內にある、配下の小寺。塔頭(タッチウ)。子院。地中(ヂチウ)。

**じちゆう** 侍中【名】『事物紀源に「來・往殿中・奏事、故謂之侍中」とあり』古代の支那にて、君主の侍從たる官。もと宰相に屬せしが、後には宰相と並びて、權力を有するに至りたり。

**じちゆう** 時中【名】『中庸の第二章に「君子之中庸也、君子而時中」とあるに本づく』何時にても、その時に當りて、中道を制すること。

**じちゆうおん** 次中音【名】〔音〕てのるに同じ。

**しちゆうきん** 四重禁【名】〔佛〕次條に同じ。

**しちゆうきん・かい** 四重禁戒【名】〔佛〕■最も重大なる四つの禁戒、即ち殺生戒・偸盜(ヤウタウ)戒・邪淫戒・妄語戒の併稱。これを犯したる僧は再び僧となることを得ずと定めらる。四波羅夷。四重禁。四重罪。四重。■じかい(五戒)・しち(七支)・じつかい(十戒)參照。■寄教にて、不捨正法(シヤウ)戒とて、如來一切の聖教(ケウ)を正しく行ふべきこと、不捨離菩提心戒とて、菩薩萬行の輪旋たる菩提心を喪失すべからざること、不慢聖怪(ケウ)法戒とて、釋尊の遺財なる諸の勝法を惜みて與へざるが如き行爲あるべからざること、不飽慳行(ケウ)戒とて、普く一切衆生を撫して、入道の因緣たらしむべきことの併稱。四菱羅夷。四重禁。四重罪。

**じちゆう・ぐんえう** 侍中群要【名】〔書〕藏人の役の事を詳記せるもの。十卷。橘廣相(ヒロミ)の著。

**じちゆうくわ・げん** 次中和絃【名】〔音〕『英Submediant』音階の基調音の上方六度に位する音。上屬和絃。

**しちゆうさい** 四重罪【名】〔佛〕しちゆうきんかい(四重禁戒)に同じ。

**しちゆう・じゆう** 始中終・始裏終【名】『始裏終の字面は左傳の哀公七年の條に見ゆ』はじめと、なかと、をはりと。御文章「人間の浮生(フジヤウ)なる相をつらつら觀ずるに、おほよそはかなきものは、この世の始中終幻(ゲン)のごとくなる」期(ゴ)なり」

**しちゆう・そしき** 支柱組織【名】〔醫〕人體の諸機關を支持・聯結する組織。結締織・軟骨・骨の三に分つ。

**しちゆう・でんしん・はふ** 四重電信法【名】『英Quadruplex telegraphy』一條の電信線にて、同時に四箇の電報を送受する電信法。二重電信法の二倍、單信法の四倍の作用をなすもの。その原理は二重電信法の重複せるものに外ならず。

**しちゆう・なべ** シチユウ鍋(英Stew pot)【名】シチユウを煮るに用ふる鐵製の鍋。

**しちゆう・ふ** 支柱夫【名】鑛山にて、坑道を巡回・視察して、鑛石・土塊の缺損など、苟も危險と認むる所ある時は、木材を横たへ、とめ木を施して、その陷落を未然に防ぐことを掌る者。

**しちゆう・ぶち** 四重緣【名】〔醫〕『英Visual axis』凝視點と眼の網膜の中央小窩とを連結する直線。視軸。■『英Optical axis』眼の角膜の彎曲及び水晶體の中心を通じ、眼球の後壁まで延長せられたる直線。

**じちゆく・き** 磁石の兩極を連結する直線。

**しちゆく・き** 視軸儀【名】しじゆんぎ(視準儀)に同じ。

**しちゆく** 視軸【名】〔醫〕『英Visual axis』視軸儀に同じ。

**しちよ** 子女【名】じおん(兒女)に同じ。

**しちよ** 士女【名】紳士と婦女と。をとこをんなと。

**しちよ** 仕女【名】女子の仕丁。女丁。仕女丁。脊力婦女。力婦。

**しちよ** 四女【名】■四人の女。■四番目のむすめ。

**しちよ** 紫女【名】〔人〕むらさきしきぶ(紫式部)に同じ。





**しちよ** 廝女【名】女子の廝丁。

**じちよ** 侍女【名】そばつかへの女。こしもと。侍婢。國經會合集「腰元の侍女共よりり集まり」

**じちよ** 兒女【名】■女の子。をなご。女子。■男兒と女子と。子女。

**じちよ** 次女【名】■二番目のむすめ。長女の次。■大寶令の制度にて、男子の中男(ナカヲ)と老丁(ヤウテイ)とに相當する女。

**しちよう** 幅重【名】『幅は衣物を載する車、重は荷車の義』■旅行者の荷物。遠行する人の途中に要する物資。■軍隊に附屬せる被服・彈藥・兵器・食糧等、一切の軍需品。じだんしちよう(御圓幅重)參照。

**しちよう** 至重【名】■極めてをもきこと。■極めて大切なること。至要。

**じちよう** 實用【名】まめやかにして、おとなしきこと。正直。律義。(古語)伊勢「昔、男ありけり。いとまめに、じちようにて、あだなる心なかりけり」

**じちよう** 自重【名】■己れの行を謹みて、輕輕しくせぬこと。自愛。持重(ヂチヤウ)。■〔哲〕『英Self-esteem』自己の價値を意識し、自ら卑下せざること。自愛。

**しちよう・しや** 幅重車【名】幅重に用ふる車。輜車。

**しちよう・へい** 幅重兵【名】陸軍兵種の一。幅重の運搬と監視とに任ずるもの。下士は軍刀と拳銃と、兵卒は軍刀と騎銃とを携帶しいづれも乘馬す。

**しちよう・へい・かん** 幅重兵監【名】次條を見よ。

**しちよう・へい・かん・ぶ** 幅重兵監部【名】教育總監部の一部局。教育總監に隸し、當該兵科教育に關する一切の事項を掌る所。部長を幅重兵監といひ、中將もしくは少將これに任ぜられ、部員これに從屬す。

**しちよう・ゆそう** 幅重輸送【名】陸軍輜重大隊に屬し、戰時・事變に際し、輜重兵の監視の下に、輜重諸般の用に使役せらるる兵卒。練習事項簡單なるがために、現役期限は二年四箇月なれど、三箇月在營の後、歸休せしむ。

**しちよく** 司直【名】■法律の正準をつかさどること。法によりて、正しく裁判すること。■だいはんじ(大判事)の唐名。

司直の吏【句】裁判官。司法官。

**しちよく・きよじ** 司直許事【名】だいはんじ(大判事)の唐名。

**しちよく・げい** 視直徑【名】〔天〕『英Apparent diameter』天體の見顯(ケン)上の直徑の兩端と觀測地點とを連結して生ずる角、即ちその直徑の視角。

**しちよけういく・ほけん** 子女教育保險【名】子女の教育の費用に供するため、積金をなさしめ、その契約上の年齡に達せし時・契約の金額を交付するもの。

**じちよと** 【名】にんぎやう(人形)を云ふ。(磐城國の方言)

**しちよ・しちろん** 紫女七論【名】〔書〕しかろん(紫家七論)に同じ。

**しちよ・ちやう** 仕女丁【名】じちよ。仕女)に「同じ。

**しちらい** 失禮【名】しつれい(失禮)に同じ。〔古語〕參照。

**しちらう・ねずみ** 七郎鼠【名】鼠の子。「つりあへり」

**しちり** 七里【名】〔地〕しちりなだ(七里灘)の略。吉原「桑名に遊びて、熱田に到る。あそび來ぬ河豚釣りかねて七里まで」

七里さがる【句】事に後(オク)る。

**しちり・がはま** 七里濱【名】〔地〕關東道六町一里として數へたる長さにより名づく』相模國鎌倉郡腰越(ヨコヅ)と稻村ケ崎との間にある海濱。濱邊に極樂寺・津・腰越の三村あり。東方は由比ヶ濱に接す。袖ケ浦。

**しちり・けつ・かい** 七里結界【名】■〔佛〕七里四方を結界すること。■蔡ひて、近づけぬこと。決して寄せつけぬこと。しちりけっぱい。

**しちり・けっぱい** 七里結界【名】前條■の略。

**しちり・けんばい** 七里結界【名】しちりけっぱい。七里結界(ケツカイ)の訛。

**しつ** 失【名】■あやまち。過失。幕廷御家誕生室、若し誕生の御子に失あって、御世繼にかなはぬ時、汝等夫婦は國の滅亡を悅ぶか」■品行又は藝術上の作品などの缺點。

**しつ** 温【名】■うるほひ。潤氣。世態風にあたり、温に臥して、病を神靈に訴ふるは」■しつさう(温瘡)の略。

**しつ** 賤【名】『しづ(下)とつづ(垂づ)』しづむ(沈む・鎖む)等と語源を同じくす』いやしきこと、又その者。身分の輕き者。

**しつ** 室【名】■へや。ざしき。屋。■つま(室家)を見よ」貴人の妻。奥方。內室。室家。けいしつ(繼室)とつしつ(後室)・そくしつ(側室)參照。十眞「室を取りて、我がきさきにしたまひ」■刀劍の鞘。■二十八宿の一。はつこぼし。

室に入りて、戈を操る【句】相手の利器をわが物として、却つて、その相手を攻撃す。(諺語)

室に入る【句】■部屋に入る。■〔佛〕禪宗にて、弟子、師の部屋に入りて、道を參問す。久參の弟子にあらざれば許されざる規定なり)にふしつ(入室)參照。平家「我れ悲母の胎內に出で、師匠の室に入りしよりこの方」■〔論語の先進篇に「子曰、由也升堂矣、未入於室也」とあるに本づく。堂は表座敷、室は奥座敷の意。學問・技術の奥を極む。にふしつ(入室)參照。

「室間・シツノマ」

室の間(マ)【句】しつ(室)に同じ。

室を受く【句】『左傳の桓公六年の條に見ゆ』妻を娶る。

室を通ず【句】『左傳の召公十八年の條に見ゆ』妻を交換す。

室を壺す【句】『左傳の成公二年の條に見ゆ』家族の全部をとりまとむ。

室を正す【句】室家を正しく齊ふ。

**しつ** 瑟【名】琴と共に支那最古の絃樂器。形狀詳かならず。箏の前身ならんかといふ。長さは七尺二寸乃至八尺一寸、編は一尺八寸、絃の數は、三十六・二十七・二十五・三十三・十九など種種あり。おほぢと。

**しつ** 質【名】■內容。本體。實體。實質。「量よりも質を以て勝る」■したぢ。きぢ。■まこと。まごころ。性質。資質。素性(スヤウ)。「文、質に勝つ」淳撲。質素。■うるほひ。潤氣。世態風にあたり、温に臥して、病を神靈に訴ふるは」■しつさう(温瘡)の略。

しつ 賤【名】『しづ(下)とつづ(垂づ)』しづむ(沈む・鎖む)等と語源を同じくす』いやしきこと、又その者。身分の輕き者。

**賤が家**(ヤ)【句】いやしき者の住居。 後撰 千載しづが家に閑ふや柴の假の世は住みうしとてもあはれいつまで」

**賤の家**(ヤ)【句】**しづがや**(賤が家)に同じ。 夫木「しづのやはもとは蓬のかたびさしあやめばかりを今日はふかなん」

**賤の子**【句】いやしき者の小供。 西鶴「しづの子や稲すりかけて月を見る」

**賤の女**(ヤ)【句】いやしき女。 馬「この沼の邊に、ある賤のめひるねしたりき」

**賤の男**(ヲ)【句】いやしき男。 馬「また ある賤の男、その狀を怪しと思ひ」

**賤の鞍**【句】賤しき者の用ふる鞍なるべしといふ。 或は、**しづくら**(下鞍)に同じきか。〔古語〕 今昔「寮刈馬の中に、強からん馬に賤の鞍置きて」

**しづ鏡子**【名】おもし。おもり。 鏡子(ケイシ)。 一代男「帶…結び目、うしろに、裾目(ケツ)の隅に鉛のしづを入れ」

**しづ 倭文**【名】**1**古の織物の一種。 穀(クヲ)・麻などにて、縞を織出せるもの。あやぬの。あらたへ。しづおり。しづはた。しどり。 萬葉「昭る鏡しづに取添へ」 **2**姓氏の一。 神皇産靈(カミムスビ)神ののち大味(オホヒ)宿禰より出でしものと、角凝魂(ツノコリ)神より出でしものと、角凝魂神の子伊佐布魂(イサフ)命より出でしものとあり。姓(カバネ)は、前二者は宿禰(スクネ)、最後のは連(ムラジ)。

**倭文の苧環**(ウミ)【句】倭文を織る材料の麻のたまき。 **しづたまき**(倭文環)参照。 伊勢「いにしへの倭文をだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」

**しづ 垂づ**【動下二他】『しだる(垂る)を見よ』 附けて垂らす。しだらす。〔古語〕 拾遺「いそのかみふるやをとこの大刀もがなくみのをしてみやぢ通はん」

**しづ 賤**【代】第一人稱の謙稱。 韓柳觀別月の転。君さへ合點なさるれば、しづが犀になるぢやげな」

**しづ 靜**【接頭】しづかなる意。「しづごころ」「しづ歌」

**じつ 實**【名】**1**僞ならぬこと。まこと。眞實。事實。〔虚に對して〕 冥途案「そちに雙ついて何の德、實ぢや實ぢやといひければ」 **2**軍陣の退退にて、十分に用意せること。〔虚に對して〕 **3**本體。內容。實質。「名ありて、實なし」 **4**事業の結果。功果。功績。できばえ。「實、巢(ヤウ)」 **5**(實意)の略。「實の ある人」 **6**じつこと(實事)・じつごと(實事師)の略。 洋世風呂「今は敵も立役も白い面や、海肉とやらでする故、どれが實か惡かわかりませぬ」 **7**(數)ひとようすう(被乘數)・ひちようすう(被除數)に同じ。

**じつ 實**【接頭】〔佛〕方便ならざる眞實。「意」

**じつあく 實惡**【名】俳優の、實方(ジツカタ)をも兼ねたる者。

**じつい 執意**【名】**1**かたくなに自己の意見を守ること。我執。 **2**〔哲〕『英Volition』能動的に或目的を取り、或行爲をなさんとする決意・決行の作用。意志を動機・思慮・選擇決定の四段に分つ場合の選擇決定の二者に當る。

**じつい 失意**【名】のぞみの叶はざること。あてのはづれること。失望。得意に對して)

**じつい 實意**【名】深切なる心。まごころ。じつ。誠實。

**じつ**(父執)参照。

**じつ**(友執)参照。

**じつ**(同志の友。親友。ふじ同じ。

**じつ**(實有)参照。

**じつ**(實在)に同じ。

**じついうろん 實有論**【名】〔哲〕じつざいろん(實在論)に同じ。

**じつい-てき 執意的**【形】〔哲〕『英Volitional』意的といふよりは狹き意に用ふ。

**じついてきしつ 執意的氣質**【名】〔哲〕『英Volitional temperament』目的を取り、或行爲をなさんとする氣質。意志の强き氣質。活動的氣質。

**じつ-いん 實印**【名】一人一箇に限りて所有するを得る、重要の印章。官廳に屆けたる上にて使用す。

**じつつう 齒痛**【名】齒のいたみ。はいたみ。

**じつつう 私通**【名】みつつう(密通)に同じ。

**じつつう 四通**【名】道路の四方へ通ずること、又その處。

四通・五達【句】道路の四方と中央と、何れへも通ずること。四通八達。

四通・八達【句】前條に同じ。

**じつ-つう 實有**【名】〔佛〕衆生の妄情によりて、萬象を實際に存在せるものと誤認すること。(假有(ケ)に對して) **じつい**(實有)参照。 徒然「怒り、悲しび、樂しむも、皆虛妄なれども、誰れか實有の相に著せざる」

**じつうた 靜歌**【名】靜かにうたふ歌なるべしといふ。〔古語〕 起志都歌、シヅウタ」

**じつえ 下枝**【名】下の方の枝。したえ。したえだ。しづえだ。〔古語〕 馬「ほつえは鳥ゐ枯らししづえは人とり枯らし」

**じつ-えう 疾兩**【名】疾病のために早死すること。 盛衰記「犯ず神者有二疾夭之禍一」

**じつ-えう 執拗**【名】**じつあう**(執拗)に同じ。

**じつ-えき 疾疫**【名】はやりやまひ。流行病。疫病。えやみ。しつやく。

**じつ-えき 實益**【名】實際の利益。

**じつ-えき 實役**【名】陸・海軍の武官の現役に服すること。

**じつえき-ていねん 實役停年**【名】陸・海軍の現役武官が、同一の官等に在りて服務すべき年限。敵前にて殊勳を奏し、首將これを全軍に布告せしもの、戰時に際し、人員缺乏したる場合等の外は、その最下年限を經過したる後、進級す。進級停年。

**じつ-えだ 下枝**【名】しづえ(下枝)に同じ。〔古語〕 万葉集「條・シヅエダ」

**じつ-おり 倭文・倭文織**【名】しづ(倭文)【1】に同じ。 起「倭文、此云二之ヅ一」

**じつ-か 室家**【名】**1**(家)に同じ。 **2**『左傳に「女有二室一、男有二室一」、また孟子の滕文公下篇に「丈夫生而願二爲之有一室一、女子生而願二爲之有一家一」とあるが如く、妻は夫の家、家庭。 **3**じつ(室)【2】に同じ。

**じつ-か 膝下**【名】**1**ひざもと。 **2**父母の

**しづか 靜**【名】〔人〕京師の白拍子。舞妓礫禪師の女なりといふ。容姿艷麗にして、歌舞をよくす。源義經の妾となり、貞操を以て世に稱せらる。

**しづか 靜**【副】**1**靜まりて動かぬさま。落著きたるさま。おだやか。おもむろ。しづや。 **2**靜。閑靜。

**じつ-か 實家**【名】**1**實の父母の家。わが生れし家。さと。生家。 **2**〔法〕婚姻又は養子緣組によりて去りたる家。生家即ち實家なること多けれど、甲家より乙家に婚餘し、更に丙家に轉緣したる場合に、乙家は生家ならざれども、實家なる類。里方(サトカタ)。(婚家・養家に對して)

**じつ-か 實價**【名】眞の値。かけねのなきあたい。

**じつ-かい 執蓋**【名】蓋(ヤ)をさしかくる役。 太平記「二階堂丹後三郎左衞門・執蓋」

**しつ-かい 悉皆**【副】みな。のこらず。悉く。 傳尚「知恵「草木・國土有情・非情も悉皆、成佛の彼岸の海ぎは」に浮び出でたる」

**じつ-かい 十戒**【名】**1**〔佛〕十の戒。即ち不殺戒・不盜戒・不邪婬戒・不妄語戒・不飲酒戒・不說過罪戒・不自讚毀他戒・不慳戒・不瞋戒・不住戒・無悔慢戒・無違諍戒・不惱害戒・不雜戒・不食戒・不求戒・無過失戒・無毀犯戒、一說に、不殺戒・不盜戒・不婬戒・不妄語戒・不飲酒戒・不食肉戒・不邪見戒・不說戒・不說戒・不飲酒戒・不說三寶戒。 **2**〔基〕シナイ(Sinai)山にて、神がモオゼ(Moses)に與へたりといふ十箇條の命令。即ちエホバ(Jehovah)以外に眞の神なきこと、偶像を拜すべからざること、エホバの名を妄に口にすべからざること、安息日を清淨に過すべからざること、父母を敬ふこと、殺生すべからざること、姦淫すべからざること、盜むべからざること、隣人に對して、虛妄・僞誣・牛・驢馬等、すべてその所有物を貪るべからざること。





く保持すること。 太平記「多年趨拜の儒官を解きて、十戒持律の法體に成りたまひけり」

**じつ-かい 十界**【名】〔佛〕佛界・菩薩界・緣覺界・聲聞(ジヤウモン)界(以上悟界、即ち出世間にして、四聖(シセイ)といふ)天上界・人間界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界(以上迷界にして、六凡といふ)の併稱。ろくだう(六道)・かい(九界)参照。

**十界一心**【句】〔佛〕十界の差別を生ずるは、一心の所作にして、外界に實在するには非ず。〔誹諧〕 大鑑「十界一心平等大念・有無(ムム)の間の中道實相」

**十界能化**(ノウケ)【句】〔佛〕十界を能く敎化すること。 入大悲「十界能化の菩薩」

**十界の權實**(ゴン)【句】〔佛〕天台宗にて、十界中の佛界のみを實とし、その他を權とすること。「實。

**十界の圓**【句】十界の光景を盡きたる前側に位し、四頭鼓筋の鼓中に包まれたる扁平の栗實狀の小骨。ひぎさら。

**しつ-かい-や 悉皆屋**【名】**1**衣服の染模・小紋無地又は洗張等を請負ひて、京都に遣るを業とせし家、又その人。〔江戸時代の大阪の語〕 **2**染物洗張を業とする家、又その人。〔京都・大阪の語〕

**しつ-かう 疾行**【名】早足にゆくこと。

**疾行には善迹なし**【句】『西京雜記に出づ』急ぎて爲したる事には、善き結果なき譬。〔諺語〕

**しつ-かう 失効**【名】効力を失ふこと。

**しつ-かう 失行**【名】正道にはづれたる行。ふみもち。

**しつ-かう 質行**【名】著實なる行。

**しつ-かう 膝行**【名】貴人の前に出づる時、體を屈し、膝にて進み、體拜の後、また膝にて退くこと。立ちて進退するは、無禮なればなり。 盛衰記「重代之家君却致二膝行之禮一」

**膝行三度**【句】膝行の作法として、まづ左の膝、次に右の膝、次に左の膝と、三度に進み出づること。 玉葉「著二裝束一膝行三度、先左、次右、次左、合三膝。但最末未レ引二帶右膝一、是左膝也」

**しつ-かう 執行**【名】**1**とりおこなふこと。實際に施行すること。 **2**〔法〕きやうせいしつかう(强制執行)の略。

**しつ-かう 執綱**【名】天蓋より垂れさがれる綱を手に執りて、左右に引くこと。 太平記「二階堂丹後三郎左衞門・執蓋・島津常陸前司・佐佐木三河守兩人執綱にて」

**執綱の役**【句】大嘗祭の時、菅笠の綱の端を左右に分けて執る役。

**じつ-かう 實行**【名】**1**實際に行ふこと。實施。 **2**〔法〕除謀・豫備・著手を經て、已にその目的の犯罪を實施する所爲。

**じつ-かう 實効**【名】實際に顯れたる効能。まことのしるし。

**じつ-かう 實講**【名】誥諭の意を含まぬ講釋。狂講ならぬ講釋。

**しつ-かういよく 執行猶豫**【名】〔法〕「刑の執行猶豫」を見よ。

**しつ-かうかた 執行官**【名】〔法〕官權者の委任によりて、執行機關が强制執行を實施する行爲。

**じつ-かうかた 實行官**【名】〔法〕或事を爲さんとする意志・或事を爲し得る權利等、すべて或滯勞力を具體的に實現せしむる一切の行爲。刑法上にては、犯罪の本體として、重要視せらる。

**しつ-かうきくわん 執行機關**【名】〔法〕**1**法人の意思、即ちその談決機關の意思を執行するために設けたる機關。例へば民法上の法人にありては、理事、また市にありては、市參事會、町村にありては、町村長の類、郡府縣にありては、國家の機關たる府縣知事・郡長これを兼ぬ。 **2**强制執行を行ふ國家機關。即ち執達吏・執行裁判所の類。

**しつ-かう-きそく 執行規則**【名】 **1**或處分の執行に關する規則。 **2**〔法〕しかうきそく(施行規則)に同じ。

**しつ-かう-きろく 執行記錄**【名】强制執行を行ひたる執達吏が、これに關する一切の始末を記載せる書面。

**しつ-かう-くわん 執行官**【名】執行機關たる官吏。檢事・執達吏の類。

**じつ-かう-けう 實行敎**【名】『實行は實踐・躬行の義にて名づけしもの』神道の一派。主として、造化三神を祭り、實所(ジツシヨ)を遙拜し、富士山を崇祀し、皇統・國運の無窮を祈り、惟神(カンナガラ)の道を章明するを敎旨とするもの。本部は東京市牛込區にあり。諸國に分局あり。管長は柴田氏世襲し、その下に大敎正等の職員あり。

**しつ-かう-けん 執行權**【名】〔法〕ぎやうせいけん(行政權)に同じ。

**しつ-かう-さいばんしよ 執行裁判所**【名】〔法〕强制執行の機關の一たる裁判所。强制執行の機關は、通例執達吏なれども、執行行爲の全權を執達吏の職權にのみ委ぬることは甚さる事由あるによりて、この裁判所の必要を生ずるものにして、その執行をなすべき、又はこれをなしたる地の區裁判所、これに當る。

**しつ-かう-しきしよ 執行指揮書**【名】犯罪人に刑を言渡したる裁判所、又は上告裁判所より命を受けたる裁判所の檢事が、刑の執行を指揮する書面。

**しつ-かう-しよぶん 執行處分**【名】〔法〕 **1**さいけつしよぶん(裁決處分)に同じ。 **2**强制執行の處分。

**しつ-かう-ちゆうしほん 實行中止犯**【名】〔法〕中止犯の一。犯罪の實行中、他よりの障礙等に基かず、犯人自ら犯罪の結果を妨げたるもの。

**しつ-かう-ていし 執行停止**【名】〔法〕强制執行の全部に就き、その進行を禁止すること。

**じつ-かう-てんあつ 實效電壓**【名】〔理〕次條に同じ。

**じつ-かう-でんりう 實效電流**【名】〔理〕電氣の交流又は交流の一周波間の、各時刻に於ける値の自乘冪を、平均せるものの平方根。實效電壓。

**しつかう-ばつがい 執行妨害**【名】〔法〕債權者が執達吏に强制執行を委任すること。

**しつかう-えぼし 靜烏帽子**【名】能(ノ)に用ふる烏帽子の一。立烏帽子にて、靜などの白拍子に用ふるもの。

迫を加へ、或は公務員をして、或處分を爲さしめ、若しくは爲さざらしめんがために、暴行・脅迫を加ふること。

**しつ-かう-ばつ 執行罰**【名】〔法〕行政處分に對する臣民の違由を强制する目的にて、その處分に違はざる場合に、官廳の課する罰。將來を强制する性質のものにして、既往の法規違反の行爲に科する、刑法上の刑罰とは異なれり。强制罰。

**しつ-かう-はんけつ 執行判決**【名】〔法〕强制執行をなさんがために、外國裁判所にてなしたる判決又は仲裁判斷に基きて、その判決又は判斷の果して正當なりや否やを、我が國の裁判所が判決すること。この判決を求むる訴は、債務者の普通裁判權を有する地の區裁判所、又は地方裁判所にて受理し、普通裁判籍なき時は、その財產又は訴の目的物の所在地の裁判所にて受理す。

**じつ-かう-ばりき 實効馬力**【名】しやうみばりき(正味馬力)に同じ。

**しつ-かう-ぶん 執行文**【名】〔法〕裁判所の判決に、執行權を生ぜしむる要件たる文。判決の正本の末尾に附記す。

**じつ-かう-みすみはん 實行未遂犯**【名】〔法〕未遂犯の一。犯罪は實行したれども、他よりの障礙のために遂行し得ざるもの。

**しつ-かう-めいれい 執行命令**【名】〔法〕 **1**法令を執行するために、必要なる事項を規定する目的にて發する命令。施行命令。施行令。 **2**裁判所が支拂命令を執行せしむるために附する命令。執行令。

**しつ-かう-りよく 執行力**【名】〔法〕强制執行をなし得る効力。

**しつ-かう-れい 執行令**【名】〔法〕しつかうめいれい(執行命令)に同じ。

**じつ-かう-ねにん 執行委任**【名】〔法〕債權者が執達吏に强制執行を委任すること。

**しっかく** 失格 【名】資格を失ふこと。合格せぬこと。

**じっがく** 實學 【名】實際に役立つ學問。濟世・民福に必要なる學問。

**しっかくきん** 膝關筋 【名】〔醫〕下腿節側深在層の一筋。膝關・下腿を屈折・内轉し、囊狀靱帶を伸張する作用を有す。

**じっかくけい** 十角形 【名】〔數〕『英 Decagon』十箇の直線にて圍まれたる平面圖形。

**しっかくどうみゃく** 膝關動脈 【名】〔醫〕膕動脈の連續部にして、膝關部を占めたるもの。

**しっかくぶ** 膝關部 【名】〔醫〕膝關節の後面。

**じっかくわくへい** 實價貨幣 【名】〔經〕貨幣の價格がその地金の價格と殆ど差異なき貨幣。實貨幣。本位貨幣。(名目貨幣に對して)

**しっかけ** 【名】〔植〕とりまさう(小手刷草)を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕

**しっかけもの** 尻懸物 【名】大和刀工の一派。建治頃の人則弘を祖とす。

**しっかーじぜん** 靜御前 【名】〔人〕しづか(靜)の敬稱。

**しっかーしっかと** 確確ゞ・驚驚ゞ 【副】しっかと・驚とを重ねていへる語。本朝二十四孝「これ、しっかーしっかと採ましやれ」

**じっかーかた** 實方 【名】實家の屬せし血族の、他に婚姻・養子緣組をなさざりし以前の關係。實家は家族關係につきていふ。例へば實家に在りし兄弟・姉妹にして、他家に養子となり、又は婚緣せし者は、もはや實家に屬すとはいひ得ざれども、實方の血族といふを妨げざる類。(養方(やうかた)に對して)

**じっかーかた** 實方 【名】じつごと(實事師)に同じ。(惡方に對して)

**しっかーたけ** 膝ケ嶽 【名】〔地〕近江國伊香(かご)郡餘吾・伊香具の二村に連なり、餘吾湖と琵琶湖との間に挾まれる山。

**膝ケ嶽の役** 【句】天正十一年に、近江國膝ケ嶽にて、羽柴秀吉が柴田勝家を破り役。次條參照。

**しっかーたけ** 膝ケ嶽七本槍 【名】膝ケ嶽の戰に、羽柴氏の臣、福島正則・加藤清正・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・片桐且元・糟屋武則の七士が、槍を提げて、柴田勝家の陣に突破せしこと。しちほんやり(七本槍)參照。

**しっかーと** 確ゞ・驚ゞ 【副】しかと(驚と)に同じ。丹後典侍「乘物の月をしっかと押へ」

**しっかーのを** 【名】鎧の袖に附けたる緒の一。肩上(かた)の袖附緒に繫ぎ懸く。

**しっかは** 志津川 【名】〔地〕陸前國本吉(もとよし)郡にある町。志津川灣の西北岸。入谷(いりや)川に沿ふ。郡役所を置く。蠶業地たり。

**しっかはーわん** 志津川灣 【名】〔地〕陸前國本吉(もとよし)郡にある海灣。道淡(たん)灣に隣る。本吉山の下に灣入し、志津川町その沿岸にあり。

**じっかふーこく** 實合國 【名】〔法〕せいがふこく(政合國)に同じ。

**しっかへ** 師仕 【名】師匠に就くこと。發記「鞍馬寺に師仕させて」

**じっかん** 十干・十幹 【名】えと(干支)を見よ。

**じっかん** 實感 【名】〔哲〕『獨 Realisation sofortige』實在體そのものにつきての觀念より起る實際的感情。假感よりも、强度の刺戟を與ふ。(假感に對して)

**じっかんーてき** 實感的 【形動】〔哲〕じっかんてき(肉感的)に同じ。

**しっがーや** 膝が家 【句】しづ(賤)の條下を見よ。

**しっかり** 確驚 【名】たしかなること。强固。

**しっかり** 確驚 【副】たしかなるさま。確實なるさま。鬼島「風が吹く梅の實はしっかりと」 【副】十分。たんまり。澤山。浮世風呂「三番目の見などは……草雙紙がでる度に買ひますが、莫籠にしっかり溜りました」 【副】蟲などに螫され、また熱湯などに觸れて、痛む感じ。しかしみ。

**しっかりーもの** 駝者 【名】人言などに惑はぬ强固の意志を持てる者。したたかもの。

**しっかる** 爲疲る 【動下二自】なしたるために疲る。源平布引滝「老武者の悲しさは、軍にしつかれ、風にちぢめる古木の力も折れん」

**しっき** 志築 【名】しつきかますの腸にて製せる鹽辛。淡路國志築より產するを佳とし、尾張・伊勢よりも產す。

**しっき** 漆器 【名】漆ぬりの器物。ぬりもの。

**しっき** 濕氣 【名】うるほひ。しめりけ。しつけ。

**しっき** 質義 【名】『漢書の劉歆傳に「質二問大義」とあるに本づく』義理をただし問ふこと。「すこと。

**しっき** 質疑 【名】疑しきことを問ひただし。

**しづき** 後月 【名】〔地〕備中國八郡の一。郡役所を井原町に置く。

**しづき** 志筑 【名】〔地〕淡路國津名郡にある町。洲本町の北三里。淡路島東岸の一海驛。志筑神社あり。

**じっき** 字突 【名】初學の人などの讀書する時、書中の文字を指すに用ふる木竹又は金屬製の具。じし。かくひつ。




**じっき** 實記・實紀 【名】飾りなくして、ありのままに記せるもの。實錄。

**じっーき** 實義・實儀 【名】親切の心。まごころ。信實。實意。 【形】正しき義。眞實の道理。大鏡問答書蒸笛「或滅・無常の實義をも述べずして、僅に欣求淨土の行を至極大乘とは心得ず」 【副】

**じっーき** 實技 【名】實際の技術。實際の技

**しっき** 濕球 【名】乾濕器の球の、布などにて包みたる方のもの。(乾球に對して)

**しっきーかます** 志築棱魚・志築鮞 【名】淡路國志築に產する棱魚。

**じっきく** 十菊 【名】「十日の菊」に同じ。

**しづきーじんじゃ** 志筑神社 【名】淡路國津名(ゐな)郡志築町に鎭坐せる神社。式内の古社にて、祭神は國常立尊。祭日は三月中の申の日。俗稱、田井天神・申宮。

**しっきすーのかんだんけい** シツキス寒暖計 【名】〔理〕『英 Sixs's thermometer』最高最低寒暖計の一。U字狀に彎曲せる硝子管内に酒精と水銀を充たし、酒精中に寢ばねを附したる目標を入れたるもの。右管は最高溫度、左管は最低溫度を示す。

**しっきーとめ** 濕氣止 【名】濕氣を防止する方法。

**じっきん** 十錦 【名】茶碗などの、十箇を一揃として、一箇づつ色又は模樣の異なれるもの。十錦手。

**しっきんじ** 執金吾 【名】『金吾を執るといふ義。漢書の百官公卿表の顏師古の註に「金吾鳥名也、主ゝ辟三不祥一、天子出行、驅主ゝ先導以禦ゝ非常、故執ゝ此鳥之象、以名ゝ官」とあり』 【名】古、支那にて、皇宮警察に相當する職を掌りし者。金吾。 【名】ぶもん(衞門府)の唐名。金吾。

**じっきん-せう** 十訓抄 【名】〔書〕教訓となるべき箇條十目を擧げ、鎌倉時代の見聞の事實二百五十條件を、各項目の下に分載せるもの。三卷。著者詳かならず。但し建長四年の作なること序に見ゆ。

**じっきん-て** 十錦手 【名】じっきん(十錦)に同じ。

**じっーきやう** 實況 【名】まことの狀況。

**じっーきやく** 失脚・失却 【名】 【名】足の滑りて倒るること。足を踏みはづすこと。 【名】立脚地を失ふこと。足場を失ふこと。しくじり。

**しっきやく** 失却 【名】『きやく(却)は接尾語』うしなふこと。消失。

**じっきやくるね** 十脚類 【名】〔動〕甲殼類中の一目。頭胸部に御御用の五對の脚を具ふ。蝦は前者に屬し、蟹は後者に屬す。

**しっきよ** 失據 【名】根據を失ふこと。

**しっきり-さうり** 尻切草履 【名】しきれ(尻切)に同じ。東海道名所記「ふたつぐりの席紙をぬぎて、尻切草履かたかたはきて」

**しっきりやう** 濕氣量 【名】〔理〕しつど(濕度)に同じ。

**しっく** 疾苦 【名】なやみ。くるしみ。

**しっく** 疾驅 【名】早く車馬を走すること。

**しっく** 仕附 【名】〔動下二他〕『仕は爲(へ)の





義』 【動下二他】『つく(附く)は接尾語』す(爲)を强めていふ語。 奈良「今すこし珍しからん事しつけて」 【動】常に馴る。手馴る。馴る。今宮心中「私は幼い時より大阪に育ち、手いた事は仕つけず」 【動】作りつくし。したつ。 【動】禮儀・作法を敎へ習はす。躾(しつけ)を施す。 【名】絲附く。かたづく。心中日本の開目「あの子ばかりを大阪へ、伯母を便りに何方へも仕附けてくれと上されしが」 【名】琉球屋ともいはるる我れ我れが、頼一人を仕附けかね、長持一つ送らぬと、外閉わるい沙汰もいや」 【名】やりこむ。打勝つ。 【名】こなさん拳の上手、脊からちよとせ機に仕附けられて無念な、敵として下んせ」 【名】田植をなす。

**しづく** 雫 【名】水のしたたり。點滴。萬葉「足引の山のしづくに妹待つとわれたちぬれぬ山のしづくに」

雫も 【句】雫ほど僅かも。つゆほども。

雫もこれに倣りない 【句】たらたらと雫を落して。(古語)

雫もよよこ 【句】たうたうなを、つと握りもちて、しづくもよよと食ひぬらし」

**本(もと)の雫** 【句】『遍照集に「末の露もとのしづくや世の中のおくれさきだつためしなるらん」とあるより出づ』人の命のはかなき譬。(古語) 榮花御淚「つくづくともり出てたるほど、もとのしづくやと、あはれにおろかなならず」

**しづく** 【動四自】水中にある物透きて見ゆ。水に映じて見ゆ。(古語) 萬葉「水底にしづく白玉たがゆゑか心つくしてわが思はなくに」

**しづくーあふ** 雫合ふ 【動自】雫が落ちあふ。露滴り合ふ。(古語) 萬葉「足曳の山の紅葉にしづくあひてちらん山路をきみがこえまく」

**しっくい** 漆喰 【名】『石灰の字の唐音』石灰(せき)又は蠣灰(れい)を、布苔(ふの)を煮たる汁に入れ、藍(あい)を交へて溶したるもの。白色なるが常なれど、著色をせるもあり。石・瓦・鏝・瓦等の接合、また壁・天井等の上塗、又は下塗等に用ふ。いしうるし。

**しっくい-ぶし** 石灰節 【名】鏝を用ひて、石灰にて拵きたる蔵。泥鏝蔵。

**しっくーけう** 宝鬲 【名】部屋のすみ。

**しっくーけう** シック教 (英 Sikh 又 Sikhism) 【名】『Sikh は印度語にて、教徒・門徒の義』印度教の一派。教祖をナナク(Nanak)と稱し、第十五世紀末にパンジャブ(Panjab)の地に起る。のち軍隊制度を採用し、第十九世紀以來、英人の印度經略に極力反對せしが、終に東印度會社に屈伏せり。

**しっくし** 字壺 【名】文字を集め並べたること。又その書。小町踊「字壺のこゑや鶯り鳥の跡」

**じっくーじく** 【副】踊るさま。莊言(若衆)「じっくじくと踊りつれて」

**しっくす** 爲壺す 【動四他】殘らずなし終ふなしはつ。

**しづくす** 雫す 【動佐變自】しづく滴る。

**しっくすーのかんだんけい** シックスの寒暖計 【名】〔理〕しっきすのかんだんけい(シキスの寒暖計)に同じ。

**しづくーのーやま** 志筑山 【名】〔地〕常陸國にある山。筑波山脈の一支峯にして、新治(にひはり)郡志筑村に屬する閑居(かきい)山の古稱なるべしといふ。 【名】中世、妹により夜半にや越ゆる志筑山なかも露けくなりまさるらん」

**じっくんーせう** 十訓抄 【名】〔書〕じっきんせう(十訓抄)に同じ。

**しづくら** 下鞍 【名】したぐら(下鞍)に同じ。〔古語〕萬葉「さつ弓をたにぎりもちて赤駒にしづくらうちおき」

**しっくわ** 物事のよくくひあひ、又は事の理かに治まりととのふさま。ぴったり。

**しっくわ** 失火 【名】過ちて火事を起すこと、又その火災。火失。

**しっくーくわ** 漆畫 【名】うるし塗(漆繪)に同じ。

**じっくーくわ** 實貨 【名】せいくわ(正貨)に同じ。

**じっくーくわ** 實科 【名】實用に缺くべからざる教科。

**しっくわい** 室外 【名】室のそと。 【名】じ。

**じっくわい** 日外 【副】いつぞや(日外)に同じ。

**じっくわ-かうこうがくかう** 實科高等女學校 【名】主として家政に關する學科目を修めしむる高等女學校。修業年限は、尋常小學卒業程度を入學資格とする者は四箇年、高等小學第一學年修了程度を入學資格とする者は三箇年、高等小學卒業程度を入學資格とする者は二箇年もしくは三箇年とす。

**しっくわーさい** 失火罪 【名】過失に因りて火災を生じ、自他の建造物その他の物件を燒燬し、或は自己の所有なるも、その燒燬のために、公共の危險を生ぜしめたるに由りて成立する罪。

**しっくわ-しゃ** 失火者 【名】失火をなしたる人。

**じっくわへい** 實貨幣 【名】〔經〕じっくわくへい(實價貨幣)に同じ。

**しっーくわん** 漆冠 【名】漆にて塗れる冠の總稱。天武天皇の御代に、紗の冠に漆を施しに初まる。

**しっくわん** 疾患 【名】やまひ。病氣。

**じっくわん-しゃう** 十卷章 【名】〔書〕眞言宗にて重んずる十部の書。卽ち、空海の卽身成佛義一卷、辨顯密二教論一卷、吽字義(ばんじ)一卷、辨顯密二教論二卷、秘藏寶鑰三卷、般若心經秘鍵一卷、龍樹菩薩の菩提心論一卷の併稱。

**しっくわんせつ** 膝關節 【名】〔醫〕大腿骨の下端、脛骨の上端及び膝蓋骨の間を連接する可動關節。膝の屈伸作用を營み、且つ小腿に僅少の回轉運動を起さしむ。

**しっーけ** 仕附 【名】 【名】したへ(仕立)に同じ。武勇傳蘆「以後の仕附、それ謠遠、その松の木に揚め置けと、引っかんで投出す」 【名】禮儀・作法を敎へ習はすこと。〔躾〕 【名】たる魚(ぎょ)(田植)に同じ。 【名】衣服を縫ふ時、仕立(したて)に狂の生ぜぬやうに、絲を絲にて粗く縫ひおくこと。 【名】しつけいと(仕附絲)の略。 【名】しつけばり(仕附針)の略。

**しっーけ** 濕氣 【名】しっきに同じ。

**しっーけ** 尻附 【名】敍位・除目(ぜも)の大間書(おほまかなかき)に、當日敍任せられたる人人の官位姓名の下に、注意のために、内給・年給・褒辭などを記入せる細書。

**じっーけ** 實化 【名】〔佛〕佛・菩薩が眞實の身を示現して、衆生を化度(けど)すること。(權化・實化の納受を仰ぐ」 發記「能く彼の權化・實化の納受を仰ぐ」「失策。

**しっーけい** 失計 【名】計略をあやまること。

**しっーけい** 執啓 【名】執達して啓上すること。 發記「以「此旨」可ゝ被ゝ執啓ゝ」

**しっーけい** 失敬 【名】敬意に戻ること。失禮。 【形】別るる時に發する挨拶。失敬・もっけい・はなもっけい 【句】表面は敬意に戻りしことを謝する意にて、實は嘲弄していふ時の語。(俚語)

**じっーけい** 實系 【名】自然の血緣の系統。直系と傍系とに分つ。各その條を見よ。

**じっーけい** 實兄 【名】父母を同じくする兄。まことの兄。(義兄などに對して)

**じっーけい** 實景 【名】まことのけしき。

**じっーけい** 實形 【名】實際のかたち。

**じっけいす** 失敬す 【動佐變自】 【名】別れ去る。

**しっけいいと** 仕附絲 【名】仕附 【名】のために縫ふ假の絲。しつけ。

**しっーけう** 漆膠 【名】漆にて塗りたる橋。日光山の神橋を始とし、德川時代に、大名の岡池に多く架したり。

**じっーけう** 十敎 【名】じゅきょう(十義)を見よ。

**じっーけう** 實敎 【名】〔佛〕大乘の敎法。一實圓顱の敎(ぜん)(權(ごん)敎に對して) 太平記「天台・法相互に權敎實敎の奧旨を究む」 大原問答書蒸笛「凡て大乘眞實の理を明むることを實敎と名く」

**しっけーかた** 仕附方・躾方 【名】禮儀・作法の調練。しつけのしかた。

**じっーけき** 實擊 【名】我が實を以て、敵の實を攻むる戰法。正攻。

**しっけし** 靜けし 【形 I】しづかなり。萬葉「いさ子どもあ、てこきでむにはもしづけし」 【名】「絲」。

**しっけそ** 仕附苧 【名】仕附 【名】に用ふる麻。

**じっーけつ** 日月 【名】 【名】太陽と月と。つきひ。 【名】年月。歲月。光陰。

日月明かならんと欲すれば、浮雲これを蔽ふ【句】■人の本性の我欲のために迷亂するに譬へていふ語。■君主の聰明を、姦臣の蔽ふに譬へていふ語。

日月と光を爭ふ【句】功業・道德・日月と光を爭ふほどに盛んなり。

日月の旗【句】日月の紋を畫がきたる旗。日本舊地誌「日月の御旗眞先押立、御理の諸軍勢野に滿ち、山に滿島の」

日月を戴く【句】「天を戴く」に同じ。正統記「神國なれば、神道に違ひては、一日も日月を戴くまじきいはれなり」

じつげつごろうのはた 日月御鋼烏幢【名】象輪・月象輪・鋼烏輪の三種の輪。御即位式の時、四神旗と共に、殿前に樹立するもの。

じつげつもも 日月桃【名】〔植〕げんべいもも。〔源平桃〕に同じ。

しつけばり 仕附針【名】仕附■に用ふる縫針。しつけ。

しつ-けふ 失業【名】職業を失ふこと。

じつ-けふ 實業【名】農・工・商など、經濟生產に關する生業。

じつけふか 實業家【名】實業にたづさはる人。殊に經濟生產に關する人。

じつけふ-かい 實業界【名】實業家の社會。實業の範圍。

じつけふ-がくかう 實業學校【名】實業教育を施す學校。工業學校・農業學校・商業學校・商船學校及び實業補習學校に分つ。又、實業學校・山林學校・獸醫學校・水產學校は農業學校と見做す。又その程度により、高等・中等・初等の三種に分つ。

じつけふ-がくむきよく 實業學務局【名】文部省の一局。實業學校及び實業教育に關する事務を掌るもの。大正二年廢止。同八年復活。

じつけふ-けういく 實業教育【名】實業に從事すべき者に須要なる知識技能を授ける教育。

しつけふ-しや 失業者【名】職業を失ひし者。

じつけふ-せんもんがくかう 實業專門學校【名】實業學校の一、又專門學校の一。實業に關する高等の學術技藝を教授する學校、即ち高等商業學校・高等農業學校の類。

じつけふ-だんたい 實業團體【名】實業に關する團體。實業家の組織する團體。

じつけふ-ぢよがくかう 實業女學校【名】養蠶・製絲・商業・手藝・裁縫等の實業を授くる女學校。

じつけふ-ほしふがくかう 實業補習學校【名】實業學校の一。尋常小學卒業者又は學齡を過ぎて、これ同等以上の學力ある者に對して、その智能を補修し、兼ねて簡易なる方法を以て、實業上の學術・技藝を授くるを目的とするもの。修業期は土地の狀況に由りて一定せず。

しつ-けん 執權【名】■政權を執ること、又その人。 盛衰記「平大納言時忠卿は：主上の御外戚にて、內外に附きたり。執權の臣とぞ振舞ひける。彼位・除目倘にこの卿の沙汰なりければ」■院の廳の別當。■鎌倉時代に將軍を補佐し、政務を總統せる職。執權職。後見職。■くわんりやう(管領)■に同じ。■應仁・文明以降、幕威衰へしために、管領の陪臣又は大名の家臣の僭稱。 曾我物語「秩父殿の執權本田の次郎近經」

しつ-けん 失權【名】權利の喪失。權力を失ひいたること。

しつ-げん 疾言【名】早口にものいふこと。はやこと。はやくち。

じつ-けん 實見【名】實際のありさまを見ること。

じつ-けん 實驗【名】實否を檢査すること。實檢の間(ま)【句】武家にて、首實檢のために設くといふ室。式臺の側に設け、外面に窓ありて、これを實檢窓と呼ぶ。

じけんまど(實驗窓)參照。

じけんの窓【句】じけんまど(實驗窓)に同じ。

じつ-けん 實驗【名】■實際に試むること。實地の試驗。■(英Experiment)故意に或現象を生ぜしめて、その觀察を容易にし、或は觀察の誤を正す目的に供すること。即ち觀察の誤を助ける目的に出づる人工的の實驗。

じつ-けん 實現【名】實際にあらはし出だすこと。實際にあらはれ出づること。

じつけん-かい 實驗界【名】實驗の範圍。

じつけん-くわがく 實驗科學【名】〔哲〕『英Experimental method』實驗的方法に依る科學。自然科學の全部はこれに屬し、精神科學にても、心理學・教育學のごときは、この研究範圍中に適用するを得。

じつけん-けういくがく 實驗教育學【名】〔哲〕『英Experimental pedagogy』教育學の一部。實驗的方法を適用するもの。

じつけん-し 實檢使【名】鎌倉・室町兩幕府及び戰國時代の諸侯の、諜間などの起りたるとき、糾明のために、臨時にその場に赴きし役。

じつけん-しき 實驗式【名】〔化〕『英Empirical formula』實驗の結果を示す化學式。化合物の組成を最も簡單に示すもの。例へば、過酸化水素をHO-OHと記す類。ぶんしきしき(分子式)參照。

じつけん-しんりがく 實驗心理學【名】〔哲〕『英Experimental psychology』心理學の一部。實驗的方法を適用するもの。廣義には、生理的心理學・精神的心理學及び狹義の實驗心理學を包含す。狹義の實驗心理學は、精神の內省的研究に實驗の助を借るをいふ。

しつ-けん-しよく 執權職【名】じつけん(執權)に同じ。

じつ-けん-せつせつ 實驗小說【名】〔文〕『佛國の小說家ゾラ(E. Zola)の論文の題目Le Roman Expérimental の譯語』架空の想像又は作爲を全然除外し、作家の實驗・觀察を經たる事件・人物を基礎として、現實の事實・現象そのままに精密に描き出だした小說。

じつけん-だな 十軒店【名】〔地〕『昔は十間店と書きたれど、柳樽にも「十軒がら公家の宿」などとありて、もと人形を賣る店十軒ありしより名なるべしといふ』東京日本橋區の本町(ほんちやう)と本石町(ほんこくちやう)との間に沿へる大通の通稱。昔より節句の人形を賣る家多きを以て名高し。

じつ-けん 實檢【名】〔哲〕『英Experimental』實驗的方法を適用するもの。廣義には、生理的心理學・精神的心理學及び狹義の實驗心理學を包含す。狹義の實驗心理學は、精神の內省的研究に實驗の助を借るをいふ。

じつけん-ぶつりがく 實驗物理學【名】『英Experimental physics』專ら實驗を行ひて新しき現象を探究する物理學。理論物理學に對して

じつけん-まど 實驗窓【名】實檢の間(ま)の外面に設けたる窓。寢殿造の中門の廊に設けたる連子窓を、後世、實檢窓と呼び、首實檢の時、首將この窓より見るを法とすとの俗說行はれしより、つひに中門なき家作にも、これを設くるに至りしものといふ。

じつけんろん 實驗論【名】〔哲〕じつしようろん(實證論)に同じ。

しつけめ 濕氣眼【名】濕痰のために起る眼病。 伊勢「むかしの惡病、…寄る年にしたがひて、上(ぢ)へ取上げて、しつけ目をわづらひ」

しつける 濕氣る【動下一自】しける(一)に同じ。

しつ-こ【名】『じつは、親が幼兒を抱きて、小もの』せうべん(小便)を云ふ。小供の語。

しつ-こ 疾呼【名】日早に呼ぶこと。あわただしく呼ぶこと。

しつ-じ 失誤【名】あやまち。しそこなひ。

しつ-じ 失語【名】物言ふはたらきを失ふこと。じつごしやう(失語症)參照。

じつ-じ 實語【名】〔佛〕■眞教にては、語の實にかなひ、また行のよく話と相應すること。■密教にては、眞如を說く言語。

しつ-こう 漆工【名】漆を扱ふ職人。ぬりものし。ぬし。漆匠。

じつ-こう 實功【名】實際の功力。實効。

じつ-こう 十講【名】〔佛〕ほつけ(法華)十講)の略。

しつ-こく 錠と足錠。

しつ-こく 漆黑【名】『漆のごとく黑き意』黑くして光澤あること、又その色。

じつ-こく-たうげ 十石峠【名】〔地〕信濃國南佐久郡と上野國北甘樂(かんらく)郡との界に在る峠。上下四里に亙る。

じつ-こく-たうげ 十國峠【名】〔地〕『十州、五島を望見し得べきを以て、この名あり』ひがはさん(日金山)に同じ。







じつご-けう 實語教【名】〔書〕經傳中の格言を錄し、「山高故不貴、以有・樹高貴」などの如く、五字づつ九十六句に排列して、諷誦に便ならしめたる教訓書。一卷。作者詳かならず。德川時代に、寺子屋の教科書として弘く用ひられたり。 慶明寺敷百人一首「先づ物よみの始めるは實語經・童子經」

しづ-こころ 靜心【名】おちつきたる心。しづかなる心。〔古語〕 古今「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」

しづ-こころばせ 靜心走せ【名】前條に同じ。〔古語〕 十訓「樂樂の藝能も、しづごころばせ調へての上の事なり」

しつ-ごし 尻腰【名】浮世床「遊戲に身を入れたもんだから、なに事もしつこしがねいのだ」

しつごし【形一】■濃厚なり。こつてりしたり。■執念ぶかし。しぶとし。うるさし。 世上娘子錄「さあさあ、早う皆皆樣御館へ御供致しませう、と眞面目なる實事師に」

しつ-こと-とり 賤子鳥【名】〔動〕ほととぎす(時鳥)の異稱。〔古語〕

じつ-ごとふ 十切【名】〔佛〕切の十倍。十切に正覺(ぜうかく)を唱ふ【句】〔佛〕阿彌陀如來が、十切の過去において、正覺成就を宣言せるをいふ語。

じつ-ごふ 實業【名】〔佛〕眞實に善惡の業果(ごうくわ)を得ること。 盛衰記「實業の衆生」

じつ-こん 實根【名】〔數〕『英Real root』方程式の根の實數なるもの。(虛根に對して)

じつ-こん 入魂【名】じゅつこん(入魂)の略。

しつ-こんがう 執金剛【名】〔佛〕次條の略。

しつ-こんがう-じん 執金剛神【名】〔佛〕しふこんがうじん(執金剛神)に同じ。

しつ-こり【副】堅くねばりづよきさま。手ざはりの柔にして、しんの硬きさま。

じつ-さ 實査【名】實際に檢査すること。

じつ-さい 十齋【名】〔佛〕『地藏本願經の如來讚嘆品に出づ』毎月一・八・十四・十五・十八・二十・二十三・二十四・二十八・二十九・三十の十日間、日ごとに十齋佛を順次に祀りて、八齋戒を持(じ)つこと。

じつ-さい 實際【名】■まことの場合。■まことの有樣。まこと。事實。■〔佛〕『實は眞實。際は諸の際極なる意』眞如の實理を究めて、その際極に至ること、また眞如法性の理。

じつ-さい 實在【名】〔哲〕『英Being 又 Reality』■すべての思惟せられ得る事物の總稱。實有(ぢついう)・有(うゐ)。■思惟せられ得るのみならず、吾人の思惟または認識を離れて存在する事物。即ち主觀以外に存在する宇宙の事物の總稱。客觀的存在。實有・有。■狹義には、思惟そのもの、即ち精神に對する事物。即ち、心的實在に對する物的實在、又はなほ廣き意味にて、自然・現實などと同意義なる事物。實有・有。■宮に存在して、生滅變化なき實體。認識を離れ、現象の外に存在する本體。實有・有。

じつ-さいし 十才子【名】■支那明の洪武・永樂の間に生存せし詩人、林鴻・郭定・王褒・唐泰・高穀・王恭・陳亮・王偁(ぢついう)・周元・黃元の併稱。■支那明の弘治年間の詩人、李夢陽(ぢつよう)・何景明・徐禎卿・邊貢・朱應登・顧璘・陳沂(ぢつ)・郟善夫・康海・王九思の併稱。

じつさい-しんがく 實際理學【名】〔基〕じつさいきんがく(實際的神學)に同じ。

じつさいきんがく 實際的神學【名】〔哲〕『英Realism』■じつねんろん(實念論)に同じ。■

じつざい-たい 實在體【名】〔哲〕じつたい(實體)に同じ。

じつさい-ちんぎん 實際賃銀【名】〔經〕『英Real wage』その賃銀により、享受し得べき生活の必需品・快樂及び奢侈の總體。

じつざいてき-くわんねんろん 實在的觀念論【名】〔哲〕『英Realidealism』くわんねんてきじつざいろん(觀念的實在論)に同じ。

じつざいてきけいけんろん 實在的經驗論【名】〔哲〕『英Realistic empiricism』吾人は知覺により、客觀的事物の眞相を知り得るといふ論。

じつざいてき-ぢくがく 實際的國家學【名】國家の事實上の關係を說明するもの。政治史と政治統計とに分つ。

じつざいてき-しんがく 實際的神學【名】(基)じつせんてきしんがく(實踐的神學)に同じ。

じつざいてき-しゆりろん 實在的主理論【名】〔哲〕次條に同じ。

じつざいてき-ゆゐりろん 實在的唯理論【名】〔哲〕『英Realistic rationlism』事物の眞想を知るは、知覺によるにあらずして、理性即ち純粹思考によるといふ說。

じつ-さいにち 十齋日【名】〔佛〕十齋を行ふ十日間の日。

じつ-さいふうたい 實際風袋【名】〔商〕『英Real tare』貨物の總重量中より差引くべき包裝物、即ち俵・箱・罐などの實際の重量。

じつ-さいぶつ 十齋佛【名】〔佛〕十齋の各日に配して祀る佛。菩薩、即ち定光(ぢやうくわう)如來・藥師如來・普賢菩薩・阿彌陀如來・觀音・菩薩・勢至菩薩・地藏菩薩・阿虛迦那(ぢやうこん)佛・藥王菩薩・釋迦如來の併稱。

十齋の佛(ぢつ)【句】〔佛〕じつさいぶつ(十齋佛)に同じ。 梁莊「十齋の佛を、等身に造らせたまふ」

じつ-さいりお 實際理地【名】〔佛〕眞如・無相の境界。眞諦(ぢんたい)・卒等の理。俗諦・差別ならぬこと。 碧巖合集「實際理地には、一座をも受けず」

じつさい-ろん 實在論【名】〔哲〕『英Realism』■じつねんろん(實念論)に同じ。■

じつさう-ちゆうだう 實相中道【名】〔佛〕諸法の眞實の相、即ち眞理を悟りて、中正の道を守ること。 用明天皇願文「これぞ實相中道の佛・神の法」

じつさう-むろ 實相無漏【名】〔佛〕諸法實相の妙理を悟れる心は淸淨にして、煩惱(ぼんのう)の塵を著けざること。

實相無漏の大海【句】〔佛〕實相無漏の認識の對象は、客觀世界に實在する或物、即ち意識以外の實在なりと主張する說。實有論・觀念論・現象論に對して)

じつ-さう 漆瘡【名】うるしかぶれ。

じつ-さう 溫瘡【名】かいせん(疥癬)に同じ。

じつ-さう 實相【名】■實際のありさま。■〔佛〕生滅變化の相を離れた萬有の眞實の相。眞如・法性(ぢやうしやう)。實諦(ぢつたい)。實際。涅槃(ねはん)。實體(ぢつたい)。實際。一實。一如。(假相に對して)

實相の風【句】〔佛〕天台の諸法實相の妙理の、凡夫の迷妄を拂ふを、風に譬へていふ語。 舊曲「鶴岡」「實相の風、芝く吹いて、千里が外も雲はれて」

實相の花【句】〔佛〕天台の諸法實相の妙理の美くしさを、花に譬へていふ語。 舊曲「東屋」「堂の岩屋の松風は實相の花ざかり、開く法の摩たてて」

實相の門【句】〔佛〕諸法實相の法門、即ち天台宗の教。 舊曲「東屋」「萬法皆一如なる實相の門に入ちうよ」

じつさう 實像【名】〔理〕『英Real image』物體より發する光線が、鏡・レンズなどのために、反射もしくは屈折して生ずる像の內、光線が實際に集中して生ずる像。(虛像に對して)

じつさう-じ 實相寺【名】■日蓮宗四十箇本山の一。駿河國富士郡岩堅村岩本に在り。もと天台宗の巨刹なりしが、正嘉二年日蓮が當寺の藏經を閱覽せし緣に由りて、全山日蓮宗に改宗す。日蓮の入藏して、立正安國論を著述せる地を本尊とす。■臨濟宗の關東十刹の一。岩代國若松市馬場町に在り。安居山と號す。元德中に復龍宗己の開基せしところ。

じつさう-ちゆうだう 實相中道【名】〔佛〕じつさうちゆうだう(實相中道)に同じ。

じつさう-むろ 實相無漏【名】〔佛〕諸法實相の妙理を悟れる心は淸淨にして、煩惱(ぼんのう)の塵を著けざること。

實相無漏の大海【句】〔佛〕實相無漏の

功德を大海に譬へていふ語。十讃「實相無漏の大海に、五塵・六欲の風は吹かれども」

**じっさうーゐん** 實相院【名】山城愛宕(ヤマシロ)郡岩倉の西に在る天台宗の寺。園城寺の別院。寮司家の出なる僧基信の開基。實相院門跡。

**じっさうるんーもんぜき** 實相院門跡【名】前「條」に同じ。

**じっさく** 失策・失錯【名】しそこなふこと。やりそこなひ。こころあやまり。

**じっさつ** 十刹【名】臨濟宗に於ける十箇の巨刹。異說あれども、鳳凰山等持寺・獅子山臨川寺・萬年山萬壽寺・神雞山安國寺・覺雄山寶鞍寺・淺骨山普門寺・大明山廣覺寺・正覺山妙光寺・龍寶山大德寺・瑞鳳山龍翔寺とし、關東の十刹は、福源山禪興寺・錦屏山瑞泉寺・青龍山東勝寺・乾明山萬壽寺・靈松山大慶寺・功臣山興聖寺・靈鷲山東漸寺・竹園山法泉寺・良田山長樂寺・海雲山萬福寺とす。

**じっさんーていたう** 實産抵當【名】〔法〕具體的財産、即ち動産もしくは不動産のときものの抵當。

**じっさや** 尻鞘【名】しりさや(尻鞘)の音便。

**じっしゃ** 失志【名】〔哲〕さうしん(喪心)に同じ。

**じっしん** 疾視・嫉視【名】にくみて見ること。にらむこと。にらみつくること。

**じっし** 執事【名】■貴人の左右に在りて、事を執る者。その貴人を直接に指すを憚りて、敬していふ場合に用ふ。即ち侍史などの類。■院廳の長官。大別當の次に位して、事を執行ふもの。■朝廷より、摂政・關白に附けて、家司の長官たらしめしもの。■内侍所(ナイジドコロ)にて、別當に次ぎし役。■鎌倉時代には、幕府の執權の異稱、また諸大名の老臣。■鎌倉・室町幕府の職制の一。鎌倉時代には、政所の次官また問注所の長官、室町時代には、政所及び問注所の長官。

**じっくわんりゃう** 〔關東管領〕を見よ。

**じっくわんりゃう** 〔關東管領〕を見よ。

**じっくわん** 〔佛〕しゅじょう(主事)に同じ。

**じっし** 實子【名】■〔佛〕しゅじょう(主事)に同じ。■わが生める子。まことの子。■〔法〕己れの血緣より生れたる子。嫡出子・庶子・私生子の三種に分つ。

**じっし** 實施【名】實際に施行すること。實行。

**じっし** 實指【名】「虛字・實指」を見よ。

**じっし** 十指【名】十本の指。多くの人の指すこと。

**じっし** 十死【名】生くる見込なく、きはめて危きこと。じっしび(十死日)の略。十死一生(シャウ)【句】「九死(キウ)一生」を一層强めていふ語。

**じっしび** 十死日【名】陰陽家にて、出征して生還すべき見込なき大凶日なりといふ日、即ち小の月の晦日。太平記「ともに生きては歸るまじき軍なればとて、十死一生の日を吉日に取りて、大勢の敵に向ひける心の中」

**じっしゅ** 十師【名】〔佛〕尊證七人と和尚・羯磨・教授との總稱。

**じっしゅ** 日時【名】日と時と。にちじ。

**じっしゅ** 實事【名】■まことの事。いつはりならぬ事。■男女のあひびき。

**じっしゅ** 實字【名】〔語〕漢文にて、事物の名を表はす文字。即ち天・地・山・川・男・女・草・木等。(虛字に對して)

**じっしき** 濕式【名】じっぱふ(濕法)に同じ。

**じっしゃ** 櫛齒狀【名】〔植〕櫛の齒の如くに一列にならびて分裂せる形。

**じっしぜんしょ** 十子全書【名】〔書〕老子・莊子・荀子・列子・管子・韓非子・淮南子(ハイナンシ)・揚子・文中子・及び鬼冠子(クワンシ)の十種を收めたる叢書。

**じっじだい** 執事代【名】鎌倉時代の職制の一。執事故障起りたる場合に、臨時に補して、その代理を勤めしもの。後には會庫を管し、出納を掌りしため、開闔(カイコウ)とも稱したり。

**じっしつ** 蟋蟀【名】〔動〕しっしゅつ(蟋蟀)に同じ。

**じっしゅつ** 叱吒【名】■物を逐ひのくる時に發する聲。おさへのかけ詞。■喧騒をおさふる時に發する聲。おさへのかけ詞。

**しっしつ** 瑟瑟【副】■秋風の音の形容。■波の起つさま。

**じっしつ** 實質【名】實際の性質。正味。本質・實體。(外形に對して)

**じっしつ** 十室【名】十戶。十軒。十室の邑【句】『論語の公冶長篇に「子曰、十室の邑、必有忠信如丘者」とあるに本づく。』家の十戶ある邑、即ち狹小なる土地。

**しづーしづ** 靜靜【副】■舉動の靜かなる狀。そろそろ。徐徐。■甚だ靜寂たる狀。

**じっしつーてき** 實質的【形動】〔英substantive〕實質を基とするさま。(形式的に對して)

**じっしつてきけんぽふ** 實質的憲法【名】〔法〕統治權の主體・客體・範圍と、獨立機關の參與すべき統治作用とに關する原則を定めたる憲法。例へば我が國にて、皇室典範中の皇位繼承・攝政の規定、衆議院議員選擧法中の衆議院組織の規定、議院法中の兩議員に共通なる法則等は、これに屬すべきものなる如きは、實質よりいへば、行政法に屬すべきものなる類。(形式的憲法に對して)

**じっしつてきはふりつ** 實質的法律【名】〔法〕國家及び臣民の權利・義務の範圍を定めたる法律。(形式的法律に對して)

**じっしつーはふ** 實質法【名】〔法〕〔英substantive law〕權利・義務の範圍を定めたる法令。民法・刑法・商法の類。實體法。主法。(形式法に對して)

**じっしゅ** 實習【名】實際につきて學ぶこと。

**じつじーつゐ** 實字對【名】〔文〕漢詩にて、一句中に實字を主として對したるもの。例へば、「潤水故都秦二世・成陽秋草漢諸陵」の如きこれなり。

**じっしび** 十死日【名】送葬又は墓所を營み、死者を弔ふ等に忌むべしといふ日。正・四・七・十の四箇月は酉の日、二・五・八・十一の四箇月は己の日、三・六・九・十二の四箇月は丑の日なりといふ。十死。

**じっしふ** 什襲【名】■什は十の義、襲は布帛を襲ぬる義。關子に「宋之愚人、得二燕石一藏レ之以爲寶、革匱十重、緘市什襲」とあり。寶物を祕藏すること。

**しっしん** 濕疹【名】〔醫〕皮膚病の一種。順當に經過する場合には、皮膚紅色に腫上り、漸次、水疱・膿疱と變じ、或は破壞し、或は乾燥し、或は頭部・顏面・陰部・股間に發す。俗に氣觸(ケブ)と呼ぶは概ねこれに屬し、然らざるものは蕁麻疹(ジンマシン)に屬す。

**しっしん** 失神・失心【名】正氣を失ふこと。きゐけ。喪心。

**じっしん** 實親【名】まことの親。生(ミ)の親。新版駄袋文「不義・間男の惡名受け、實親の名を汚すばかり、世間の義理も主の恩も」

**じっしん** 十身【名】〔佛〕佛陀が衆生濟度のために、十種に權化する身。即ち衆生身・國土身・業報身・聲聞身・緣覺身・菩薩身・如來身・智身・法身・虛空身。書紀「三檀頭目窮「成際」十身藥樹接「區廢」」

**じっしんはふ** 十進法【名】〔數〕限りなき多くの整數に、一一命名する煩雜を避くるために、或位の數を十合はせたるものを、その上位の一として數へ、一より起りて、十・百・千・萬等に至る累進の算法。

**しっしゃ** 漆車【名】漆にて塗れる車。

**じっしゃ** 實者【名】〔佛〕本體のままなる佛又は神。(權者(ゴンジャ)に對して)

**じっしゃ** 實寫【名】實際のままを寫眞に撮し取ること。

**しっしゃう** 漆匠【名】じっこう漆工に同じ。

**しっしゃう** 濕生【名】〔佛〕しっしゃう(四生)を見よ。釋迦如來觀生會・濕生・化生はいざ知らず、體を受けて生ずるもの、人間も寄生も出生の門はただ一つ。

**じっしゃう** 實性【名】■實際の性質。■〔佛〕じっさう(實相)に同じ。

**じっしゃう** 實正【名】まことなること。眞は丑の日なりといふ。十死。







實。經驗大象甘蔗出(病死とも刃の死とも取沙汰あり、實正を知らぬ故、問ひ弔ひもせざりしに」

**じっしゃう** 實正【副】まことに。實際に。卷花五大力「然らば、その方は實正知らぬか」

**じつーじゃう** 實情【名】■まことの心。まごころ。■まことの事情。情實。

**しっーしゅ** 執守【名】しゅしゅ(執守)に同じ。

**じっーしゅ** 十手【名】十人の手。多くの人の手。

十手の指(ユビ)の所【句】「十目の見る所、十手の指す所」を見よ。

**じっーしゅう** 十宗【名】〔佛〕八宗と禪宗・淨土宗との併稱。じふいっしゅふ(十一宗)・じふにしゅう(十二宗)・じふはっしゅう(十八宗)參照。

**しつーじゅう** 執銃【名】銃を執ること。

**しつじゅうーけうれん** 執銃教練【名】體操の一種。銃を執りて行ふ教練。(徒手教練に對して)

**じっしゅーかう** 十種香・十炷香【名】十種の組香。志野宗信の案になるものは、古十組、米川宮白の案になるものは中古十組といひ、新十組は選者を詳かにせず。じしゅかう。

**じっしゅくーやう** 十種供養【名】『法華經の法師品に見ゆ。故に法華經を、一に十種供養經とも呼ぶ』華・瓔珞(ヨウラク)・抹香・塗香・燒香・幡蓋・衣服・伎樂・飲食・合掌の十種の供具によりて、法華經を供養すること。台記「於二東北院一行二十種供養一」

十種供養の御經【句】〔書〕ほけきやう(法華經)の別稱。增鏡「十種供養の御經二部」

**しつじゅくーわ** 漆樹科【名】〔植〕うるしわ(漆樹科)に同じ。

**じっしゅくーわんぼふ** 十種觀法【名】〔佛〕じふじょうくわんぼふ(十乘觀法)に同じ。

**しつーしゅつ** 蟋蟀【名】〔動〕こほろぎ(蟋蟀)■に同じ。

蟋蟀のきりぎりす【句】〔動〕■蟋蟀ときりぎりすとの重言』前條に同じ。(こほろぎ(蟋蟀)を見よ)平家諸による涙の雨、袖に宿る月影、千草にすだくしっしゅつのきりぎりす」

**しっしゅつじんざい** 失出人罪【名】〔法〕過失によりて、有罪を無罪と判決し、又は重罪を輕罪と判決すること。(失入人罪に對して)

**しつーじゅん** 濕潤【名】しめること。

**しつじゅんーしらかい** 濕潤周界【名】河川の橫斷面にて、水面以下の水に接する部分。

**しっーしょ** 濕沮【名】水に浸りたること、又その土地。沮洳(ジョジョ)。

**しっーしょ** 漆書【名】うるしがき(漆書)に同じ。

**しつーじょ** 疾徐【名】ときことと、遲きことと。緩急。

**じっーしょう** 實證【名】■實際の證據。事實の證明。確證。■じっけん(實驗)に同じ。■〔佛〕眞實の證語。

**じっしょうーくわがく** 實證科學【名】〔哲〕じっけんくわがく(實驗科學)に同じ。

**じっしょうーてき** 實證的【形動】〔哲〕〔英Positive〕研究法上、確實なる事實に基き、推理の法則に從ひて歸納・演繹するさま。積極的。

**じっしょうーてつがく** 實證哲學【名】〔哲〕『佛Philosophie positive』實證論の創唱者にして又その代表者なる佛蘭西の哲學者コント(A. Comte)が、その哲學體系に名づけたる稱呼。

**じっしょうーはふ** 實證法【名】〔哲〕〔英Positive method〕『實證的なる研究法。じしょうこき(實證的)參照。

**じっしょうーろん** 實證論【名】〔哲〕〔英Positivism〕吾人の知得するは、現象及びその間の關係のみなるが故に、科學の結果と綜合して、現象間の齊一なる法則を發見するが哲學の職能なりとする說。即ち抽象思辨より實驗・觀察を學び、消極的なるより積極的なるを主張し、すべて直接の自明的なる直接經驗と實證とを第一義となすもの。實理論。積極論。實驗論。じっしょうてつがく(實證哲學)參照。

**じつじょうるんーもんぜき** 實乘院門跡【名】〔佛〕天台宗門跡の一。澤蔵坊成圓を祖とす。成圓は參議成賴の子にて、青蓮院の慈鎭に仕へ、建仁元年西塔院主となる。本院は濟東栗田郷岡崎に在るを以て、岡崎坊と稱す。

**しっーしょく** 失職【名】職業又は官職に離るること。

**しっーしょく** 濕蝕【名】濕氣のために生ずる木材の腐蝕。

**しつーじょく** 叱辱【名】しかりはづかしむること。

**しっーしょくーほけん** 失職保險【名】勞働者が職業を失ひ、收入の途を絕たれたる時、家計を維持するために、一定の金を支給するを目的とする保險。

**しっす** 叱す【動佐變他】しかる。

**しっす** 執す【動佐變他】深く心に掛く。執心す。執著す。盛衰記「法住寺殿は、さしも執し思しめし、造り琢かれたり」

**しっす** 失す【動佐變他】■うしなふ。ほろぼす。無くす。■忘る。

相(ミ)失す【句】互に見失ふ。はぐる。

**しっす** 失す【動佐變自】うす。ほろぶ。無くなる。

**じっす** 實す【動佐變自】中に充つ。充實す。

**しっすい** 直歲【名】〔佛〕『漢字の宋音。直は當る意』禪家にて、一歲の幹事に當る僧職。

**じっすう** 實數【名】〔數〕『英Real number』虛數以外のすべての數。(虛數に對して)

**しづすげ** 靜菅【名】小さき菅もしくは一種の菅なるべしとも、石菅(ヤマスゲ)菅の義にて、石に著きたる菅なるべしともいひ、詳かならず。(古語)盛衰記「はしたてのくらはし川の川の靜菅あが刈りて笠にもあまず川の靜菅」

**しっせい** 叱正【名】詩文の添削を乞ふ謙稱。

**じっせい** 失政【名】治國の方法を誤ること。

**しっせい** 執政【名】■政を執り行ふ職。又その人。盛衰記「隱身を召れして、執政のごとし」■參議以上の稱。■らちゆう(老中)に同じ。■明治元年十月に各藩に置き、朝政を體して、藩主を輔け、一藩の政事を總統したる職。翌年七月制度改革のために廢せり。

**じっせい** 日星【名】日と星と。

**しっせう** 失笑【名】笑をもらすこと。ふきだすこと。

**じっせうてん** 實焦點【名】〔理〕〔英Real focus〕しゆせうてん(主焦點)に同じ。(虛焦點に對して)

**しっせき** 叱責【名】しかり責むること。しかりなじること。

**しっせき** 失跡【名】跡方の知れずなること。行方不明。

**じっせき** 實績【名】實際の事績。

**じっせき** 實積【名】實際にある坪數。

**じっせき** 實跡・實蹟【名】たしかなる形跡。實際の事跡。

**じっせつ** 實說【名】まことの話。虛言ならぬ說。

**じっせつ** 實接【名】(文)漢詩の絕句の轉句に、實事を用ひて、起・承の二句に接すること。(虛接に對して)

**じっせつ** 十刹【名】じっさつ(十刹)に同じ。

**じっせん** 十千【數】『易林に「水中大寶、求一萬錢。」』直錢・商人不レ至、市空無有なりとあり』

**じっせん** 實踐【名】實際に履行すること。實踐躬行【句】自身に實際履行すること。

**じっせん** 實線【名】『英Full line』圖上の線の、長く接續せるもの。

**じっせん** 實戰【名】まことのいくさ。實際の戰爭。

**じっせん・きんくわ** 十錢銀貨【名】次條の「略」。

**じっせん・きんくわへい** 十錢銀貨幣【名】明治四年の新貨條例、及び三十年の貨幣法に基づきて發行せる十錢の補助銀貨。

**じっせん・さつ** 十錢札【名】■めいぢうつうは う明治通寶を見よ。■大正七年に補助貨の不足を補はんがために發行せられたる紙幣の一。十錢銀貨と同一の價格なるもの。十錢紙幣。

**じっせん・しへい** 十錢紙幣【名】前條に同じ。

**じっせん・しんがく** 實踐神學【名】〔哲〕次條に同じ。

**じっせんてき・しんがく** 實踐的神學【名】

〔哲〕『英 Practical theology』神學の一部。教會の共同生活に於ける信仰・說教・傳道・禮拜・勸行等のことを研究するもの。實際的神學。實際神學。實踐神學。

**じっせんてきゆぶつせつ** 實踐的唯物說 【名】〔哲〕『英 Practical materialism』富・物質的快樂・肉慾上の滿足等を以て、正當なる人間勢力の目的なりとなす說。物質主義。實利主義。

**じっせんてつがく** 實踐哲學 【名】〔哲〕『英 Practical philosophy』主として倫理學・法理學・政治學等、すべて善・意志・行爲等に關する哲學。/理論哲學に對して)

**じっせんりんり** 實踐倫理 【名】〔哲〕『英 Practical ethics』じつじんがく(修身學)に同じ。

**じっせんろん** 實踐論 【名】〔哲〕ぶらぐまちず「むに同じ。

**じっそ** 質素 【名】かざらぬこと。儉約にして、奢らぬこと。つつましやかなること。

**じっそう** 失踪 【名】Ⅰ踪跡を失すること。行くへの知れぬこと。出奔。Ⅱ〔法〕從來の住所もしくは居所を去りて、七年間生死分明ならざる場合、又は出征などの死亡の原因となるべき事實に際會したる後、三年間生死分明ならざる場合に、利害關係者の請求に依りて、裁判所が宣告して、死亡者と見做すこと。

失踪の宣告 【句】〔法〕失踪者の利害關係人の請求により、その失踪者の住所地の區裁判所が、失踪として宣告すること。

**じっそう** 執奏 【名】取次きて奏上すること。

**じっそう** 疾走 【名】早く走ること。疾驅。

**じっそうしゃ** 失踪者 【名】Ⅰ失踪せる人。かけおちもの。しっそうにん。Ⅱ〔法〕失踪の宣告を受けたる人。

**じっそうにん** 失踪人 【名】前條に同じ。

**じっそく** 疾足 【名】Ⅰはやあし。かけあし。Ⅱいっそく(逸足)に同じ。「高村・疾足」

**じっそく** 疾速 【名】はやきこと。ときこと。汎速。

**じっそく** 實測 【名】實地の測量。

**じっそくつぼすう** 實測坪數 【名】實際に測量せる現在の坪數。(容積坪數に對して)

**じった** 叱咤 【名】怒りて叱ること。怒氣あらはれて大聲を發すること。いきまきて舌打をなすこと。

**じった** 悉達・悉多・悉陀 (梵 Siddhārtha) 【名】(人)一切義成と譯す。釋迦の、淨飯(ぢやう)王の太子たりし時の名。悉達太子。盛衰記 悉達誕生の御巡礼(ごぜ)城」

**じったい** 失體 【名】體裁をそこなふこと。不體裁。

**じったい** 膝退 【名】膝にて退くこと。跪きて退くこと。しっかう(膝行)參照。

**じったい** 十體 【名】漢字の十種類の書體、卽ち古文・大篆・籀文(ちゅう)・小篆・八分(はつぷん)・章草・隸書・行書・飛白・草書。一說に、古文・大篆・八分・小篆・飛白・倒薤・散隸・鳥蟲・鳥書・垂露なりと。さんたい(三體)・ごたい(五體)・はったい(八體)參照。

**じったい** 實體 【名】Ⅰまことのすがた。實質。本質。本體。本味。內容。Ⅱ〔哲〕『英 Substance』性質又は作用を支持し、箇箇の性質又は作用を統一する本體。精神實體と物質實體とに分たる。Ⅲ〔哲〕『英 Substance』他に依存せず、それ自身において存在するもの。Ⅳ〔哲〕『英 Substance』箇箇の物を、通性その中に存在して、その本質を成せりと見て名づけたる稱呼。

**じったい** 實諦 【名】〔佛〕しんたい(眞諦)に同じ。(理諦に對して)

**じったいきやう** 實大 【名】實際の大きさ。

**じったいきやうこ** 實體鏡 【名】同一物體を左右兩眼にて、同時に別別に見たるごとく、二つに撮影せる寫眞を奥の方に置き、前方に、焦點距離小なる凸レンズを切半したるものを、兩眼にあてはまるやうに組合はせ、これを透して、寫眞を見る時、二箇の像の重なり合ひて、實物實景に對すると同じく、立體的に見ゆるやうに裝置したるもの。


(うやきいたつじ)

**じったいしつ** 實大乘 【名】〔佛〕次條に同じ。

**じったいしょうけう** 實大乘教 【名】〔佛〕方便を帶びざる大乘教、卽ち天台・眞言・華嚴・禪等の教。

**じったいせつ** 實體說 【名】〔哲〕じったいろん(實體論)に同じ。

**じったいてきくばつ** 實體的俱發 【名】〔法〕いうけいてきつ(有形俱發)に同じ。

**じったいはふ** 實體法 【名】〔法〕じっしつはふ(實質法)に同じ。

**じったいろん** 實體論 【名】〔哲〕『英 Ontology』精神の性質に關する學說の一。恒常不變にして、破壞すべからざる精神的實體を假定し、精神現象をその實體の性質に過ぎずとするもの。佛國のデカルト(Descartes)始めてこれを唱ふ。

**したつ** 執刀 【名】外科手術のために、刃物を持つこと。

**したつ** 失當 【名】道理にあたらぬこと。不當。

**したつ** 七島 【名】(植)しちとう(七島)に同じ。

**したつ** 執當 【名】『執事・別當の義』延暦寺にて、その諸堂を司り、諸役の補任をなす職。三綱交代して、これに當る。寺家(じけ)。盛衰記 執當法眼御尋(へ)とぞ有りけり」

**したつだう** 濕道 【名】しっぱふ(濕法)に同じ。

**したつだうはふ** 濕道法 【名】水中にて行ふ魚類の人工受精法。

**したつせん** 十當錢 【名】『二箇の價が當時の通用銀十文に當るよりいふ』はうえいつうばん(寶永通寶)に同じ。

**したたいし** 悉達太子 【名】〔人〕しった(悉達)に同じ。謠曲(大原御幸)「悉達太子は、淨飯(ぢやう)王の都を出で」

**したたつ** 執達 【名】上の意を承けて、下に通達すること。盛衰記 依二廻宣之狀一執達如レ件」

**したたつじやう** 執達狀 【名】『その終に「執達如レ件」の句あるによりていふ』みぎつよ(御教書)に同じ。(室町時代の語)

**したたつり** 執達吏 【名】裁判所職員の一。罰裁判所に屬し、訴訟書類の送達及び裁判の執行・令狀の執行等をなすもの。司法大臣これを任補す。



**じったん** 實談 【名】Ⅰ實際の事を語る談話。Ⅱ實際に聞きし談話。

**じつだんえんしふ** 實彈演習 【名】實彈射擊を行ふ演習。

**じったんさんみつ一せう** 悉曇三密鈔 【名】〔書〕梵字の意義・梵語の文法を述べて、眞言秘術の教義に說き及ぼしたるもの。三卷。僧覺書の著。

**じったんしやう** 悉曇章・悉檀章 (梵 Siddhirastu) 【名】〔書〕梵語の字母を列ね、その結合法を述べて、初步の科本に用ふるもの。

**じつだんしやげき** 實彈射擊 【名】實彈丸を込めて、行ふ射擊。

**じったり** 【副】垂れさがりたる狀。重糎子、尾は青柳のしったりしったりした」

**じったち** 悉地 (梵 Siddhi) 【名】〔佛〕『妙成就と譯す』祕法を修して、眞言の妙果を成就すること。盛衰記 八は悉地の成ずる數なり」

**じっち** 悉知 【名】知りつくすこと。よく知

**じっち** 濕地 【名】濕氣の多き土地。水氣のある地。(乾地に對して)

**じっち** 執持 【名】しふち(執持)に同じ。

**じっち** 實地 【名】實際の場合。まことのところ。

**じっち** 實智 【名】〔佛〕こんぜんち(根本智)に同じ。濕土。(褄(つま)地に對して)

**じっち** 十地 【名】〔佛〕じふち(十地)に同じ。

**じっちえんしふ** 實地演習 【名】實地に就きて演習すること。「に同じ。

**じっちきき** 質直 【名】〔佛〕しっちよく(質直)に同じ。

**じっちく** 實竹 【名】〔植〕竹の一種。幹の中空なるもの。陸前國松島の一なる蒲島の名產にして、印材などに用ふ。

**じっちけいざいがく** 實地經濟學 【名】〔經〕おうようけいざいがく(應用經濟學)に同じ。

**じっちけうれん** 實地教練 【名】〔兵〕秋季演習の一。重砲兵が、その操典の示す所の原則を、實地に應用すること。野戰砲兵の野外教練と同樣なる性質のもの。

**じっちしうしふ** 實地修習 【名】實地に臨みて習ふこと。

**じっちしけん** 實地試驗 【名】Ⅰ實地に就きて行ふ試驗。Ⅱ實際に於ける技術の試驗。(學說試驗に對して)

**じっちじやうじゆ** 悉地成就 【名】〔佛〕しっち(悉地)に同じ。

**じっちしよくぶつ** 濕地植物 【名】〔植〕水中・濕地などに生ずる植物。卽ち浮草・澤瀉・水草等の總稱。體は概して軟弱・葉は常に薄し。

**じっちてんもんがく** 實地天文學 【名】天文學の一科。天文學用器械の種類と、その使用法及び觀測の方法を說明し、又とれ等の事項の研究を目的とするもの。

**じっちん** 繻珍 【名】しゅちん(繻珍)の誤。

**じっちん** 七珍 【名】〔佛〕しっぽう(七寶)Ⅱに同じ。七珍・萬寶(ばう) 【句】〔佛〕七珍及びその他のあらゆる珍寶。平家 七珍萬寶、一として開けたることなし」

**しっちんまんぼう** 七珍萬寶 【名】〔人〕戮作者。通稱は福島仁左衛門、南湖子と號す。江戸芝の菓子舗翁屋の主翁なり。二世森羅亭萬象の門に學びて、その三世を襲ぐ。また狂歌を四方眞類に學びて、竹杖爲輕(ばく)と稱し、四方側の判者として名あり。天保二年歿す。年七十。

出世景淸 樽の木にて、あげほだしを打たせ、

**しっちやう** 執杖 【名】刑具の名ならん。

**じっちやう** 實定 【名】たしかにきまりたること。新可笑記 一方は詠筆正筆にして、太刀は復拵(ごしらへ)に實定」

**じっちやうこばや** 十挺小早 【名】次條に同じ。

**じっちやうだち** 十挺立 【名】次條に同じ。

**じっちやうだて** 十挺立 【名】小早(ばや)Ⅱの、櫓の數十挺を用ふるもの。じっちやうこばや。じっちやうだち。「し。

**じっちやく** 實著 【名】じっちよく(實直)に同じ。(粘著語)に同じ。

**じっちやくご** 漆著語 【名】〔語〕ねんちやくご

**じっちゆうかく** 室中隔 【名】〔醫〕心臟の左右兩室の中間なる縱隔。

**しつちよ** 失除 【名】とりのくこと。除去。

**しつちよ** 悉除 【名】ことごとく除去すること。「病難悉除」「衆病悉除」

**しつちよきゆう** 室女宮 【名】〔天〕黃道十二宮の一。をとめ。

**じっちよく** 實直 【名】實撰にして、正直なること。きまじめ。眞摯。

**じっちよく** 實直 【名】誠實にして、正直なること。信實。律義。

**じっちれんしふ** 實地練習 【名】實地に臨みて練習すること。

**じっつう** 疾痛 【名】いたみなやむこと。

**じっつう** 漆桶 【名】〔佛〕無明(むみやう)の堅厚なるに譬へいふ語。眼識なく、分明なきこと、又その人。黑漆桶。無眼子(むがんし)。

**じつづく** 實意 【名】實意をつくすこと。親切盡。浮世床 この位に深切をつくして、實づくでしてやるぜ」

**じっつこし** 【形Ⅰ】じつこしの音便。

**じっつな** 失墜 【名】Ⅰとりおとすこと。失ふこと。Ⅱ徒らに費すこと。浪費。

**じって** 十手 【名】德川時代に、捕吏の携へし具。長さ一尺五寸餘の鐵製の棒にて、犯人に抵抗の樣子見ゆる時、まづその右腕に打ちて、利腕を抱したる後、捕縛したりといふ。又、手元近くに鉤ありて、刀劍にて切込みくるを防ぐやうにし、柄には總紐(ふさ)を結びて垂れ、その紐の色に紫・赤・黑等の區別を設けて、捕吏の所管を明かにしたり。手木(ぢ)。

**じって** 【感】砧(ぢ)を打ち、また機(ぢ)など。

**じってい** 實體 【名】質直なること。實直。

**じってい** 實弟 【名】まことの弟。父母を同じくする弟。

**じっていけいやく** 實定契約 【名】〔法〕その効力が契約の當時より確定せる契約。卽ち賣買契約・貸借契約の類。(射倖契約に對して)

**じってつ** 十哲 【名】十人のすぐれたる人物。或人の門下の高弟十人の併稱。「孔門の十哲」「蕉門の十哲」「蕉門の十哲」參照。

**じってん** 質點 【名】〔理〕『英 Material point 又 Material particle』物體の運動を論ずるに當りて、大いさなく、ただ質量のみを有すと假想する點。大いさある物體にても、その運動につきて、大いさを考へざる場合の、力學上の假想にして、この點の集團がその物體なりと見るなり。

**じってん** 失點 【名】けってん(缺點)に同じ。

**じってん** 濕田 【名】地勢のため、又は排水不良のために、常に水濕多き田。(乾田に對して)

**じつてん** 實傳 【名】眞實の傳說、又は實際の經歷の傳記。

**じつてんき** 濕電氣 【名】〔理〕『液を用ふる電池より發生するによりていふ』ようでんき(動電氣)に同じ。(乾電氣に對して)

**じってんばつき** 七顚八起 【句】敎皮の失敗を經て、遂には成功すること。ななころびやおき。

**じってんばったう** 七顚八倒 【句】『七たび・八たび顚倒する義』苦痛に堪へずして、此方彼方に伏しまろぶこと。

**じつてんらく** 十天樂 【名】〔音〕唐樂の一。聖武天皇、笛師當世(ぢよ)弟魚(ぢよ)に勅して作らしめきと傳ふ。盛衰記 伶人等にはかに十天樂を作り始めて是れを奏しし」

**じっと** 嫉妬 【名】ねたみ。そねみ。りんき。うはなりねたみ。

**じっと** 【感】Ⅰしずの音便。狂言 鐵砲 三「すっぱと切っては、しっとと打ちけて」當流小栗判官 馬門、蛾錠しっとおろし」Ⅱじっとりの略。女殺油地獄「しっとと逢瀨の波枕」

**じつど** 濕度 【名】〔理〕『英 Humility』大氣中に含まれる水蒸氣の割合。これを表はす二法あり。大氣の單位立積中に含まる水蒸氣の量を以てするを、絕對濕度と稱し、現在大氣中に存ある水蒸氣の量と同立積中にある同溫度に於ける飽和水蒸氣の量との比を以てするを、關係濕度又は比較

**じったにくわう** 閑谷黌 【名】舊岡山藩の私學。池田光政の和氣(ぢ)郡伊里村字本谷に建てしもの。寛文十年創校、翌年成り、地勢靜閑、讀書に適すと呼ぶ。明治維新後荒廢せしが、再興して、今縣立中學たり、閑谷學校。

**じったまき** 倭文手纏 【枕】腰しき人の手纏の義にて、數ならぬものなるより、かずにもあらず・いやしにかけていふとも、倭文布(ぢ)の意にて、その數多きより、かずにかけ、倭文(ぢ)と賤(ぢ)とは同音なるより、いやしにかけていふともいふ。萬葉 しづたまき數にもあらぬかも」あれど、千とせにもがと思ひつるかも」しづたまきいやしきわがゆゑまずらを」のあらそふ見れば」

**じったん** 悉曇・悉談・悉旦・悉檀・肆曇・七旦・七曇 (梵 Siddhaṃ) 【名】〔成就又は所成と譯す。文章・句法を成就する義』Ⅰ梵語の母韻。Ⅱほんじ(梵字)に同じ。さんすくりとく(敦斯克栗多)參照。

悉曇切韻(ぢ) 【句】〔語〕梵語の字母・母音と子音とを配合して、綴音を作ること。

悉曇五十字門 【句】〔語〕悉曇の字母四十七字より、體文(卽ち子音)の中の濕字(ṁ ṁ)を除き、哩(ri)・哩(ri)・里(li)・里(li)の四字を加へたる五十字。

悉曇十二章 【句】〔語〕次條に同じ。

悉曇十二韻 【句】〔語〕悉曇の字母四十七字の中なる摩多(mātṛ 卽ち母音)の十二韻。

悉曇十八章 【句】〔語〕悉曇の字母四十七字中の體文(卽ち母音)と摩多(mātṛkā(卽ち子音)とを本として生ずる十八箇の文字。

**しったん** 【感】水音又は鼓・太鼓の音などの形容。盛衰記 女房五枚羽子板、太鼓の上手でしったんにしったんしったん七段作る御百姓」慈久井桂蔭「軒のつらにも解けわたり、谷の水音したんしったん、ぽんぽんと鳴る鼓」

**じったん** 實彈 【名】鉄砲に、彈丸を裝塡

濕度と稱す。單に濕度といへば、通例後者を意味し、百分を以て表はす。普通とす。

**しつ-と** 濕土【名】しめ(濕地)に同じ。

**じっと** 熟ご凝ご【副】周章せず、こらへて沈著にせる狀。西鶴「十二段共金員」御しはぶきを聞きけるが、胸にこたへて、じっとして、今におなかを這ふやうな、あおぞろぞろとこそばいと」

**しっとく** 失德【名】身の修まらぬこと。おこなひのきず。

**しつ-とく** 濕毒【名】かさ。瘡毒。

**じっとく** 十德【名】Ⅰ(佛)十箇條の德行。法師の十德、即ち義知法義・能廣宣說・處衆無畏・無斷絯才・巧方便說・法隨法行・威儀具足・勇猛精進・身心無倦・成就忍力、また弟子の十德として、灌頂を受けんとする弟子の具ふべきもの、即ち信心・種姓清淨・恭敬・三毒不僅・惜身・勇健・堅願行等の種類あり。野々宮「因果…」を辨へざる十德・五逆の罪人」Ⅱ『おきもつ(貞觀)の轉訛なりといふ』素襖(ｽｵｳ)に似て、袴を縫ひつけたる衣服。近世の平士以下の著用せしものにて、作りては胸紐を附け、下衆(ｼﾀｼﾞｭ)は布にて作りしが、德川時代には、士分の者は用ひず、專ら醫師・畫師・同朋等、禿頭の公服となり、紹・紗等の薄物にて、無地無紋・羽織のごとく打掛けて著、帶はせず、下に袴を略するもあり。

十德四幅袴(ｽｵｳﾞ)【名】十德を著、四幅袴を穿ちたる服裝。犬道物(ｲﾇﾐﾁﾓﾉ)の矢取犬・素・馬の口取又は板輿を舁く者などの風俗なり。

**じっとく** 拾得【名】(人)支那唐の僧。天台國清寺の僧。豐干(ﾌｳｶﾝ)に拾ひ養はる。寒山と親友たり。豐干去りて、二人赤行方を失へり。かんざんじっとく(寒山拾得)參照。

**しつとくし-ん** 漆毒疹【名】漆の刺戟に因りて生ずる赤疹。皮膚に發して、痒(ｶｻﾞ)を覺ゆ。うるしかぶれ。

**しつとくし-やう** 失讀症【名】(醫)『獨Alexie』

**しつとけ-い** 濕度計【名】(理)『英Hygrometer』大氣の關係濕度を測定する器。ダニエル濕度計・吸收濕度計・毛髮濕度計・レニョオ濕度計等の種類あり。檢濕器。

**しつ-とく** 濕船渠【名】『英Wet dock 又Basin』船渠の一種。港の一部に岸壁を築きて、船を著け、荷物の積卸に便ならしむ。(乾船渠に對して)

**しっとん** 【感】物を押しつくるやうに打ち、又は押すさまなどにいふ語。又その拍子。文殊捕地獄「船は新造の乘り心…岡に乘った乘って來た、しっとんとんとんしとととんとん」

**しっとり** 【副】Ⅰ しとしとと濕を含める狀。しっぽり。ただした。Ⅱ沈著にてしづかなる狀。夕霧阿波鳴渡「せめて一年しっとりと、一つ寢ふしも仕たいぞと」

**しづとり** 賤鳥【名】(動)ほととぎす(時鳥)の異稱。(古語)「風俗通」しづ鳥。ほととぎす也。名にものみ山里に鳴くしづ鳥は卯の花ばかり都とや思ふ」

**じっとり** 【副】しっとり(尻綱)に同じ。りはすはでない、じっとりとした女子があるっちゃ、世話してくだんせ」浮世風呂「餘

**しっ-づな** 指綱【名】しりづな(尻綱)に同じかるべし。又、てだは(手綱)に同じかるべしともいふ。

**しっ-ない** 室內【名】室の內。房中。

**しづない** 靜內【名】(地)日高國七郡の一。北海全道部の內にて、アイヌ人の居住者最も多し。

**しつない-いっぎ** 室內遊戲【名】居室內にて行ふ遊戲の總稱。例へば碁・將棋・歌カルタ・玉突などの類。(戶外遊戲に對して)

**しつない-さうしよく** 室內裝飾【名】家の各室を見にくからぬやうに裝ふこと。

**しつない-しやてき** 室內射的【名】室內にて行ふ一種の遊戲。小形の空氣銃に、コルクの丸を詰め、飾りつけたる種種の的を狙ひ擊つもの。

**じつなし** 術無し【形Ⅰ】じゅつなし(術無し)の訛。

**じつなん** 日南【名】(地)今の安南地方の古稱。

**じつに** 實に【副】げに。まことに。

**しつ-にふじんざい** 失入人罪【名】(法)過失により、無罪を有罪と判決し、又は輕罪を重罪と判決すること。(失出人罪に對して)

**しづぬさ** 倭文幣【名】しづぬのにて造りたるぬさ。(古語)萬葉「しづぬさを手にとりもちて」(古語)

**しづぬの** 倭文布【名】しづ(倭文)に同じ。

**じっ-ぬっ** 實熱【名】病氣その他の理由により、子として、本來その體の具有せる熱氣。日本靈異記「父母愛に溺れ、さなきだに實熱深き稚子を、絹に包み、綿に捲き」

**しっ-ぬん** 失念【名】Ⅰ(佛)心を散亂せしめ、所緣の境において明記すること能はざらしむる、一種の煩惱。

**じっねん-ろん** 實念論【名】(哲)『英Realism』概念は各觀的に實在すと主張する說。これに二種あり。一は極端實念論と呼び、普遍は箇物に先だちて存する實在なりとするものにして、プラトン(Plato)哲學の影響の下にあるものなるより、プラトン風の實念論ともいひ、他の一は、穩和實念論又は概念論とも呼び、普遍は箇物の內に存する實在なりとするものにして、アリストテレス(Aristoteles)の影響を受けしものなるより、アリストテレス風の實念論といふ。實在論。唯名論に對して)

**しづ-のいはや** 志津岩屋・靜岩屋【名】石見國邑知(ｵﾁ)郡出羽(ﾃﾞﾊ)村の海岸とに在る洞窟。また播磨國印南(ｲﾝﾅﾐ)郡阿彌陀村龍山(ﾘｭｳｻﾝ)の西北麓なる縣社生石子(ｲｺｼﾞ)神社の社殿。但馬國のは兩所共に大己貴(ｵｵﾅﾑﾁ)命の隱れし處なりと言傳へ、播磨國の大石神社は大己貴命・少彥名(ｽｸﾅﾋｺﾞﾅ)の二神を祭る。たつやまいし(龍山石)參照。萬葉「おほなむちすくなひこなのいましけむしづのいはやは幾代經ぬらむ」「見よ。

**しづ-のめ** 賤の女【句】しづ(賤)の條下を見よ。

**しづ-の-や** 靜廼舍【名】(人)加藤字萬伎の家號。

**しづのや-かしふ** 靜廼舍歌集【名】(書)加藤字萬伎の歌集。一卷。「見よ。

**しづ-の-を** 賤の男【句】しづ(賤)の條下を見よ。

**しづ-の-をだまき** 倭文の苧環【句】しづ(倭文)の條下を見よ。

**しづ-ば** 濕葉(ｲﾄﾞﾊ)【名】(佛)まがしゆの(摩酸首羅)を見よ。

**しづ-ば** 吐罵【名】しかりののしること。叱罵。

**しっ-ば** 【感】Ⅰ十分にたわめたる狀。百合若大臣野守鏡「しっぱとたもつて放つ矢」大原問答繁昌「枝も鳴さぬ春風に靡けや靡け、しっぱと靡け」Ⅱすっぱに同じ。柏狩紀本鳥やれ出かいた小太郎、しっぱと討て、小太郎と、力をつけて拜み討ち」

**じっぱ** 十派【數】Ⅰ十の支派。Ⅱ(佛)臨濟宗の十の流派、即ち相國寺派・建仁寺派・南禪寺派・天龍寺派・建長寺派・本福寺派・大治寺派・圓覺寺派・水源寺派・妙心寺派の併稱。Ⅲ(佛)眞宗の十の流派、即ち本願寺派・大谷派・高田派・佛光寺派・興正寺派・錄照寺派・證誠寺派・毫攝寺派・錦織寺派・專修寺派の併稱。

**じっぱ** 十把【數】一把の十倍。

**じっぱ** 十把一絡(ｹﾂﾗｸ)【句】數は多くとも、極めて價値なきものとして取扱ふこと。一束つかまへ。

**しっ-ぱい** 失敗【名】しそこなひ。しくじり。

**しつ-ぱい** 失望【名】のぞみの叶はねこと。あてのはづれたること。失意。

**じっ-ぱう** 十方【名】東・西・南・北・東南・東北・西南・西北・及び上・下の併稱。しほう(四方)

**じっ-ぱう** 十方【名】東・西・南・北・東南・東北・西南・西北・及び上・下の併稱。しほう(四方)

**しっぱう** 失亡【名】ばうしつ(亡失)に同じ。

**じっぱ-ろくぼう**(六方)**はっぱ**(八方)參照。

**じっぱ-ろくぼう**(六方)**はっぱ**(八方)參照。

**じっぱう-くう** 十方空【名】(佛)十方世界





の悉く空なること。

**じっぱう-ぐれ** 十方闇・十實暮【名】陰暦にて、甲申より癸巳までの十日の間。この間は、十方の氣がくらがりて、何事の相談もとのはずといふ。六十日にて一巡し、一年に六回來復す。

**じっぱう-ぢふふげん-しきしん** 十方業障現色身【名】(佛)十方衆生の意業(ｲｸｶﾞｳ)に隱ひて、普く示現する佛・菩薩の色身。妙音菩薩・觀音菩薩の類。盛衰記「妙音大士は、十方業障現色身の證を得」

**じっぱう-せかい** 十方世界【名】(佛)『東・西・南・北・東南・東北・西南・西北世界及び上・下世界の併稱。十方に有情(ｳｼﾞｮｳ)の世界の存すること、無量・無邊なりといふ』全世界。世界全體。大千世界。師鼎「羽衣「それ久堅方世界をさだめしに」

**じっぱう-ぶつど** 十方佛土【名】(佛)十方に在る諸佛の淨土。閑鈴藻「十方佛土之中以西方・爲望」

**しっぱく** 質薄【名】『ひっぱく(迫迫)』Ⅱの訛か。

**けんやく**(檢約)に同じ。

**しっぱ-しっぱ** 【感】眼又は喉などの潤滑ならずして、不快なる感じ。(俚語)

**しづ-はた** 倭文機【名】しづ(倭文)に同じ。(古語)「虫大君のみおびのしづはた結び垂れ誰れやしびともあひ思はなくに」

**しづはた-おび** 倭文機帶【名】しづはたにて仕立てたる帶。(古語)萬葉「いにしへのしづはた帶を結びたれたれちふ人も君にはまさじ」

**しづはた-ごろも** 倭文機衣【名】しづはたにて仕立てたる衣。(古語)夫木「み山吹く秋風さむみ東屋のしづはた衣いまぞ打つなる」

**しづはた-に** 倭文機に【枕】しづはたの如くにの意にて、その綾は亂れて見ゆるより、みだる(亂る)にかけていふ。後撰「しづはたに思ひみだれて秋の夜のあくるも知らず啼きつるかな」

**しづはたやき** 賤機燒【名】背、駿河國賤機山の讃より產せし陶器。交趾(ｺｳｼﾞ)燒を摸したるもの。白土に萌黃色の釉藥(ｳﾜｸｽﾘ)を用ひ、賤機の二字を印せり。我が國の樂燒(ﾗｸﾔｷ)にて、德川家康のこの地に移り住みし頃、尾張國瀨戸の工人の從ひ來りて創めしものならんといふ。

**しづはた-やま** 賤機山・倭文機山【名】(地)駿河國安倍郡にある山。安倍川の東岸をなせる龍爪(ﾘｭｳｿｳ)山の地脈の漸次低下したる末端にして、高さ約二八〇尺、その麓に淺間(ｾﾝｹﾝ)神社あり。別稱、青葉岡。枕古今「けさ見れば霞の衣おりかけてしづはた山に春はきにけり」

**じっぱ-ひとからげ** 十把一絡【句】じっぱ(十把)の條下を見よ。

**しっぱふ** 濕法【名】(化)微物の成分を知るに、試藥又は電流を用ひて行ふもの。濕式。濕遊。化學分析法。(乾法に對して)

**しつ-ぱん** 濕板【名】『英Wet plate』寫眞撮影に用ふる感光板の一。硝子板をよく磨き、その一面にコロヂオン液と沃化物とを交へたるものを流して、薄き膜を作り、これを硝酸銀の溶液に浸して、感光性を與へたるもの。長き曝露時間を要すと、製法に熟練を要すとのために、現今は使用減少の傾あれども、精密なる圖畫文書の複寫等には多くこれを用ふ。(乾板に對して)

**じっ-ぱん** 十判【名】十箇の捺印(ｵｼﾞﾙｼ)。

**じっぱん-うらがき** 十判裏書【名】江戸幕府の評定所の目安裏書の三奉行十人の捺印(ｵｼﾞﾙｼ)あるもの。

**しつぱん-はふ** 濕板法【名】濕板を用ひて、寫眞撮影をなすこと。(乾板法に對して)

**しっぱらひ** 尻拂【名】しんがり(殿)Ⅱに同じ。

**しっぱひ** 【名】しんがり(殿)Ⅱに同じ。

**しっぱひ** 【名】Ⅰ『どぶりの音便』じっぷしⅡに同じ。浮世風呂「おお、あっつ、っつっつ、っつ、しっぱりだ、しっぱりだ」Ⅱ次條に同じ。夏目太子傳記「君がため鐵しっぱりと抱める鎧に懸をもつ」

**じっぱり** 【感】木の枝などの捲む音の形容。しっぱり。

**じっぱり** 實馬力【名】じっぷりき(指示馬力)に同じ。

**じっぷりき** 實馬力【名】じっぱり物(名)浴湯の熱さの、しっぱりと身にしむこと。浮世風呂「子供衆には、ちとしっぱり物でござりませう」

**しっぷ** 失費【名】にふひ(入費)に同じ。

**しっぷ** 備比【名】『櫛の齒の如く比(ｸﾗﾍﾞ)ぶ意。詩經の周頌良耜篇に其崇如墻、其比如櫛、以開百室、百室盈止とあるに本づく』殆ど隙間なくならぶこと。建物のことみあへること。密接。連接。

**じっぷ** 實費【名】實際に要したる費用。

**じっぷ** 實否【名】Ⅰ『否の字の音、正しくはふ』實なると實ならぬと。じっぷ。

**じっぷ-がく** 實費額【名】實際に費消したる高。

**しっ-ぷつ** 執筆【名】Ⅰ筆を執りて書くこと。Ⅱ同官を書立て置き、除目(ｼﾞﾓｸ)の當日、官に任ぜられたる人名を、その官名の下に書加ふること、又その人。著國「その樣、除目の執筆の定なりけり」Ⅲ連歌俳諧の會の時、文臺の前に坐りて、人の句を懷紙(ｶｲｼ)に書く役。「ふこと。

**じっぷ-ばらひ** 實費拂【名】實費額を支拂ふこと。

**じっぷ-べんしやう** 實費辨償【名】實費額を辨償すること。

**しつ-ぷ** 濕布【名】Ⅰ濕へる布。Ⅱしっぷあぼふ(濕布藥法)の略。

**じっ-ぷ** 實父【名】實の父。血を分けたる父。(養父などに對して)

**じっぷ** 實否【名】じっぷ(實否)に同じ。十訓「たしかに實否見て參りなんや」

**しっぷあんぼふ** 濕布藥法【名】しっぷふ(濕布繃帶)に同じ。

**しっ-ぷう** 疾風【名】Ⅰ疾く吹く風。烈風。Ⅱ『地』『英Brown wind』風級の一。每秒六乃至十メートルほどの速力を有するもの。陸上にては、木の枝を動かす程度なり。

疾風に勁草を知る【句】『後漢書の王覇傳に「光武目、顧川知、勁草に」とあるに本づく』困難を經て、始めて節操のすぐれたるを知る譬。(諺語)

**しっ-ぷう** 栉風【名】次條を見よ。

**しっぷう** 栉風・沐雨【句】『風に栉(ｸｼｹﾞ)り、雨に沐す」といふ義。唐書の秋石傳傳に「玄皇帝栉風沐雨、目擊鋪一以定天下」とあるに本づく』雨風に曝されて、辛苦艱難を嘗むること。

**しつ-ぷか** 執深【名】熱心深きこと。多情。好色。無事志有意、娘の手と取違(て、わたしが手を握るといふは、をへねえ、お前もしつぶかな人だ」

**じっぷく-わや** 十服茶【名】茶道にて、三種の茶を、各四服づつに裏みて、各の一服を試みへて、殘九服に他の一種(これを客といふ)を加へて、その十服を飲みあつること。後には茶三種を以て、各三服づつに裏みて、客を加ふるもあり。回茶。こうちや(貴茶)參照。

**じっぷつ** 實物【名】實際の物體。現物。

**じっぷつ-かうくわん** 實物交換【名】(經)『獨Naturalter tausch』貨幣の紹介に依らず、直接に貨物と貨物とを交換して、交易を營むこと。物物交換。

**じっぷつ-けいざい** 實物經濟【名】實物交換によりて總の取引の行はるる經濟狀態。自然經濟。(貨幣經濟・信用經濟に對して)

**じっぷつけいざい-じだい** 實物經濟時代【名】(經)實物經濟の行はれし時代。(貨幣經濟時代・信用經濟時代に對して)

**じっぷつ-けうじゆ** 實物教授【名】(哲)「生徒に實物を示して教授する義」ちよくわんけうじゆ(直觀教授)に同じ。

**じっぷつ-じゆんびはふ** 實物準備法【名】(經)『英Bal property reserve method』紙幣發行法の一。不動產を引換準備として發行するもの。スコットランド人ロオ(J. Law)氏の發案に係る。

**じっぷつ-せい** 實物稅【名】(經)貨幣以外の物品を以て納稅すること。主として、實物經濟時代に行はれたり。こくせいひん(國稅品)參照。(貨幣稅・課役等に對して)

**じっぷつ-だい** 實物大【名】實物と同等なる大きさ。

**しっぷはたい** 濕布繃帶【名】木綿ガアゼの類を水に浸して、局部にあて、その上

に油紙を被ひて、繃帶にて全部を卷くこと。〔眼布。眼布巻法〕

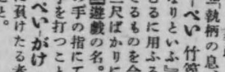
**じつぶん** 實聞【名】實際に聞くこと。〔虛聞に對して〕

**しっぺい** 疾病【名】やまひ。病氣。

**しっぺい** 執柄【名】■政治の權柄を執ること。執政。■撥紋と闕白との異稱。平遣執柄の息、英才が鞭も」

**しっぺい** 竹笞【名】■漆笞の音なりといふ。譯家にて、人を打戒むるに用ふる具。竹を割りて扁くせるものを合はせて作る。長さ三尺ばかりにして、弓形をなす。■遊戯の名。片方の手の指を、他の手の指にて反(ひ)らせて、人の手を打つこと。

**しっぺいがけ** 竹笞賭【名】勝負に負けたる者を、竹笞(■)にて打つこと。



(■)しっぺい

**しっぺいがへし** 竹笞返【名】■竹笞にて打たれたる時、また竹笞にて打返すこと。■他の攻撃に對して返報すること。

**しっぺいけ** 執柄家【名】せっけ(摂家)に同じ。平家、平家亡び、源氏の世盡きなん後、大幾冠の御末、執柄附の公達(きんだち)たちの、天下の將軍になりたまふべきか」

**しっぺいしょうしょ** 疾病證書【名】或人の疾病に對し、醫師がその狀態を證明するために作製する文書。

**しっぺいほけん** 疾病保險【名】疾病に罹りたる場合に、罹病者並びに家族を扶助する目的にて設くる保險。獨逸のごときは、政府より强制して、下級民をこの保險に入らしむるに努めたり。

**しっぺん** 執鞭【名】■鞭を手に執ること。■鞭を執りて、馬を御すること。

執鞭の士【句】論語の述而篇に「富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之」とあるに本づく。『御者。太平記「手を垂れて、膝に入る、宛も執鞭の士に同じ」

**じっぺんしゃいっく** 十返舎一九【名】〔人〕江戸の戯作者。通稱は重田貞一。駿府町同心重田與八郎の第二子。故綴、不羈にして、吏務を厭しとせず、職を弟に讓りて、大阪に遊び、近松餘七と號して、淨瑠璃作者となり、寛政六年江戸に出で、後專ら戯作を事とす。東海道中膝栗毛最も世に名あり。天保二年歿す。年六十七。

**しっぽ** 疾歩【名】はやく歩むこと。はやあし。

**しっぽ** 尻尾【名】■動物の尾。しりを。しりっぽ。■一至大猫の尻尾でなぶる小蝶かな」■垂れたる尾。物の端。■失策の結果。ぼろ。

尻尾を出す【句】『人に化けたる狐の、尻尾をあらはす意』隱したる事、あらはる。化(け)の皮あらはる。ぼろを出す。

**しっぽ**〔貶〕**じっぽり**に同じ。用明天皇紀「人鳥二人しっぽと臥し給ふ」

**じっぽう** 七寶【名】〔佛〕■七種の珍重すべき寶。金・銀・瑠璃・頗梨(ひ)・珊瑚・碼碯・硨磲(しゃこ)の總稱。また瑠璃を除きて、赤眞珠を數へ、或は頗梨・珊瑚を除きて、水精(すいしょう)・赤眞珠・碼碯・硨磲・玫瑰(まいかい)・赤眞珠・碼碯・硨磲・玫瑰・赤眞珠・碼碯・硨磲・玫瑰・赤眞珠・碼碯・硨磲・玫瑰

**じつようしんあんとうろくひん** 實用新案登錄品【名】實用新案の登錄を受けたる物品。

**じつようしんあん-はふ** 實用新案法【名】實用新案に關する事項を規定したる法律。明治三十八年制定、同四十二年改正。

**しつよう-しやう** 失用症【名】〔醫〕精神作用の障碍によりて、目用の事物の用法を誤ること。

**じつよう-しゆぎ** 實用主義【名】〔哲〕ぷらぐまてぃずむに同じ。

**じつよう-たんゐ** 實用單位【名】〔理〕『英Practical unit』CGS法に依る單位の或倍數をして、實用に適せしむる大きさに變ぜしめしもの。

**じつよう-てき** 實用的【連體】實用に適するさま。實際に役立つさま。

**じつよう-むき** 實用向【名】體裁よりも、實用に適するを主としたること。

**しつら【名】**わらびな〔蕨菜〕に同じ。

**しつ-らい** 失例【名】ふれい〔不例〕に同じ。

**しつ-らい** 疾雷【名】じんらい〔迅雷〕に同じ。疾雷、耳を掩ふに及ばず【句】『六韜』の軍勢篇及び淮南子の兵略訓に出づ。「迅雷耳を掩ふに及ばずして」に同じ。〔諺語〕

**しつ-らい** 失禮【名】しつれい〔失禮〕に同じ。

**じつ-らい** 日來【副】ひごろ〔日頃〕に同じ。

**じつ-らう** 室老【名】からう〔家老〕に同じ。

**しづらかす【動四他】**しづれしむ。『萬葉百首』「友とやゆるぎの森の雪を見て孕ふ鶯のしづらかすらん」

**しづつらひ【名】**【一】しつらひこと、又そのさま。裝置。『源氏』さすがに、寢殿のうちばかりは、ありし御しつらひに變らず。【二】おまし。御座所。『源氏』うへは東の中のはなちいでに、御しつらひことに深くしなさせたまひ。

**しつつらふ【動四他】**『爲(し)つらふの義なるべし。つらふは、接尾語』設け裝ふ。ととのふ。とり繕ふ。裝置す。『萬』「そこに迎へてんと思して、しつらひおきて」

**しつ-らん** 温燗【名】〔醫〕發汗療法などのために、皮膚の赤くなりて爛(ただ)るること。ただれ。

**しつ-らん** 執蘭【名】支那都國の古俗にて、三月の上巳(じやうし)に、灤(らん)浦(ほ)二水の邊にて、魂魄を招き和(なごま)め、不祥を攘(はらは)ふために、蘭を執りて、祓をなししもの。

**しつり** 垂【名】しづれ〔垂〕に同じ。〔古語〕『萬葉』いざさらば木の下道はよきてゆかん嵐にたへぬしづりひまなし」

**しづ-り** 倭文【名】しづおり〔倭文織〕の略。〔古語〕『倭文神、此云二斯圖梨俗未一』

**じつ-り** 實利【名】現實の利益。實際の効用。

**じつ-り** 實理【名】實際上より得し道理。

**じつり-しゆぎ** 實利主義【名】【一】實利を標準とする主義。現實主義。【二】〔法〕刑罰は社會の安寧幸福を保全するを目的とする社會防衛の手段にして、社會の必要と實益とに起因するといふ主義。

**しづ-は** 垂葉【名】しだれは〔垂葉〕に同じ。

**しつ-りやう** 質量【名】〔理〕『英Mass』物體の含有する物質量。普通物體の重量とほぼ一致す。これを重量と區別して考ふるは英國人ニュウトン〔Newton〕に始まり、氏はこれに定義を與へて、物體の密度とその容積との乘積にして、密度は物體の單位容積の質量なりといへり。その他、諸學者の定義あれども、物質の觀念容易ならざる難し。されど物理學上の計算の基礎としては、現在の諸定義にて、差支を見ず。じつてん〔質點〕參照。

**質量不變の定律【句】**〔化〕『英Law of constancy of mass』化學變化に依る諸物質の量の總和は不變なり、即ち物質はいふ、化學の根本たる定律。水素一量と酸素一量とを化合せしむる時は、常に水の九量を生ずるがごとく、物質は化合する時、その性質の全く一變するに拘らず、質量は化合前の總和に同じく、また反對に分解して生じたる物の質量の總和は、元の化合物の質量と同一なるによりて、この定律の誤にあらざるを知るべし。物質不生不滅の定律。

**質量保持の定律【句】**〔化〕『英Law of conservation of mass』前條に同じ。

**しつ-りやう** 温量【名】〔商〕水分を含めるまゝの重量。

**しつりやう-けいげん** 温量輕減【名】〔商〕運送中濕氣を含みて、重量を增したる貨物に對し、濕量に相當するだけの代價を輕減すること。

**しづり-ゆき** 垂雪【名】しづり落つる雪。若馬、庭で起きぬ戸をこそぐるやしづり雪」

**じつ-りよく** 實力【名】實際の力量又は技倆。

**じつりよく-ふうさ** 實力封鎖【名】實際の武力を用ひて、封鎖(三)を行ふこと。現時の封鎖は、皆これなり。(紙上封鎖に對して)

**じつり-ろん** 實理論【名】〔哲〕じつしようろん〔實證論〕に同じ。

**しづる【動下一自】**木などに積りたる雪などが落つ。〔古語〕『萬百首』あさまだき松のうらばの雪は見ん日かげさしこばしづれもぞする」

**しづる【動四他】**前條に同じ。〔古語〕

**しづれ【名】**しづれて落つること。しづり。〔古語〕歌木「雪を重みしだれるみきの枝なれば立さはる小笠にしづれ落つなり」

**しつ-れい** 失禮【名】禮義を缺くこと。しちらい。無禮。失敬。闕禮。亡狀。

**しつ-れい** 疾癘【名】えれい〔疫癘〕に同じ。

**じつ-れい** 實例【名】實際にある事例。

**じつ-れう** 質料【名】〔哲〕『英Matter』形式を待ちて、始めて個體となる素質。これを重んずるものは、即ち唯物論なり。けいしつ〔形式〕(二)參照。

**じつ-れき** 實歷【名】實地の經歷。

**じつれきだん** 實歷談【名】實地に經歷したる事につきての談話。

**しつ-れん** 失戀【名】成就せぬ戀。

**しつ-ろ** 失路【名】【一】道路を失ふこと。【二】失意の地位に立つこと。「記錄。

**じつ-ろく** 實錄【名】事蹟のありのままの

**じつろく-もの** 實錄物【名】德川時代の小說の一種。歷史を根據とし、これを潤色・附會し、讀者の興を惹くを主としたるもの。復讐譚・御家騷動・俠客譚等の類にして、文體流ね實實・平易、大抵作者の署名なく、官本にて行はれたり。

**しづ-わ** 後輪【名】『後(ご)つ輪の略』鞍骨(ぎつ)の後部の高くなりたる部分。しりつは。あとわ。しりわ。(前輪に對して)

**じつ-わ** 實話【名】じつだん〔實談〕に同じ。

**しつ-わん** 漆椀【名】漆ぬりの椀。

**しつゐ** 室草【名】支那興安嶺の山地より嫩江(ぜんこう)の流域にかけて住せしツングス、及び蒙古兩民族の總稱。

**じつ-ゐき** 日域【名】〔地〕日本國の異稱。

**じつ-ゐ** 實惠【名】〔人〕眞言宗の高僧。俗姓は佐伯。讃岐國の人。弘法大師に侍して、兩部の密教を受け、その奧旨を究む。河內國に觀心寺を創起し、延暦・淳和・仁明天皇の帶信を厚くす。承和十四年寂す。年六十三。

**しつ-ゐ-のまつり** 死杖祭【名】刑死せしものの、ために、社を建てて、その靈を祀ること。活遠祭(くわつをんさい)。

**しつ-ゑん** 漆園【名】【一】漆の樹を植ゑたる園。【二】〔人〕『曾て漆園の公吏たりしことあるによりていふ』さうし〔莊周〕に同じ。漆園の學。

**しつ-を** 賤男【名】「賤(ゐ)の男(を)」に同じ。〔古語〕『萬葉』堀江よりみをびきしつつみ鯨さすしづをのともは川の瀨まうせ」

**しつ-をか** 靜岡【名】〔地〕【一】伊豆(七島を除く)・駿河・遠江の三國の全部を管轄する縣。縣廳を駿河國靜岡市に置く。【二】駿河國にある市。安倍川の左岸に近く、中古、國府所在の地なりしにより、府中又は駿府と呼ばれ、明治維新の際、今の名に改めらる。市制施行以前は、安倍郡に屬したり。

**しつ-をかーさいく** 靜岡細工【名】するがざいく〔駿河細工〕に同じ。

**しつ-をく** 漆屋【名】漆にて塗れる建築物の總稱。宇治の鳳凰堂・中尊寺の金色(こんじき)





堂、京都の金閣寺、日光の東照宮など。

**して** 仕手【名】『仕は爲(し)の義』【一】おこなふ人。する人。【二】巧になす人。やりて。【三】能樂及び狂言にて、主要なる技を行ふ役、又その人。一曲のうちに、中入(なかいり)ある場合には、その前の方のを前仕手、後の方のを後(ご)仕手と呼ぶ。(脇(わき)・連(つれ)に對して)

**して【接】**『然しての略』しかして。そして。『萬葉』「して、切米は何程ほしい」

**して** 見れば【句】かくのごとき理由なるが故に。されば。

**して【助】**【一】ありて。『萬葉』吉野なるなつみの川の川淀に鳴ぞ鳴くなる山かげにして」【二】を以て。『源氏』こぎみして、西にか、へり思ふ心はしりたまへりやと、いひつかはす」【三】にて。古今「ひとりして物をおもへば秋のよの稻葉のそよといふ人のなき」『國』に因りて。『狂言』「ねがら」「きやつめが、酒に惑ひて、臥してをるからして、遲うござる」

**して** 四手【名】『しで(垂)の假體言』【一】七五三縄(しめなは)・玉串(たまぐし)などに附けしだらするもの。古は木綿(ゆふ)を用ひて、木綿四手(ゆふで)とも呼びしが、今は紙を用ふ。新古今「けふまつる神の心やなびくらんしてに波立つ佐保の川風」【二】白熊(はくゆう)の毛にて作りたる小さなる拂子(ほつす)のごときもの。槍の柄につけて、槍印とす。〔植〕しでやなぎ〔四手柳〕に同じ。

**して** 死出【名】しでのやま〔死出山〕の略。

**死出の旅【句】**死出の山に赴くこと。冥途の旅。

**死出三途【句】**『死出の山・三途の川共に冥途にあるよりいふ』冥途の旅。『大槻氏雜物語』腹かき破り、死出三途の御供と存ずれども」

**して【名】【一】**〔植〕いぬびと〔犬人〕に同じ。【二】〔動〕せぐろわし〔背黑鷲〕の異稱。

**して** 師弟【名】師匠と弟子と。

**師弟は三世【句】**師弟の緣は三世の間につながること。「主從は三世」參照。〔諺語〕『藤原定家卿の志の深きことは、師弟三世にしくはなし」

**して** 子弟【名】【一】子と弟と。【二】年少者。(父兄に對して)

**して** 私邸【名】自分のやしき。(官邸に對して)

**して** 賜邸【名】拜領の邸。恩賜の邸宅。

**して** 指定【名】【一】それとさし定むること。【二】〔法〕行政官廳が、法令の範圍內に於て、或事實を調査し、これに特定の資格を與ふること。また一私人がある者を指定して、權利を取得せしむること。【三】〔語〕助動詞の、事物及びその動作狀態を指定する意のもの。即ち「大なり」・「行くなり」・「善きなり」の如く、名詞・動詞・形容詞に添はるるなり、及び「父、父たらずとも、子は子たるべし」の如く、名詞に添はるたりこれなり。

**して** 仕丁・使丁【名】しちやう〔仕丁〕に同じ。

**して** 視聽【名】視ると聽くこと。しちやう〔視聽〕に同じ。

**して** 紫庭【名】『紫は紫微星の意』だいり〔內裏〕に同じ。

**して** 紫【名】鼓の音の形容。しでこと參照。

**しで** 紫泥【名】紫色の泥土。

**紫泥の封【句】**『漢書儀に「天子六璽、皆以二武都紫泥一封、史記高祖紀の正義に「天子六璽、皆以二武都紫泥一封、一說に、印色紫泥に似たるよりいふと』支那漢の代の詔書。

**じて** 耳底【名】耳のそこ。耳のおく。

**じて** 耳聽【名】耳にて聽くこと。

**じて** 次帝【名】【一】次の帝。【二】次に帝となるべき人。皇太子。『狂言』「惠亮なづきを打てば、次帝位にそなはる」

**して-かう** 指定港【名】船積・陸揚又は積替をなすべく指定せられたる港。

**して-がくかう** 指定學校【名】文部省がその卒業生に對して、或特別の資格を有する者と認むる學校。

**して-かさくさうぞくにん** 指定家督相續人【名】〔法〕法定の推定家督相續人なき場合に、被相續者の指定せる家督相續人。

**して-こうけんかんさくにん** 指定後見監督人【名】〔法〕最後に財產管理權を有する親權者が、遺言に依り指定せる後見監督人。

**して-こうけんにん** 指定後見人【名】〔法〕未成年者に對し、最後に財產管理權を有する親權者が、遺言を以て指定したる後見人。

**して-さうぞくにん** 指定相續人【名】〔法〕指定家督相續人と指定遺產相續人との總稱。

**じて-いし** 志手石【名】木などの化石。東遠江名所記「木の葉の跡ある石、山中より取りきたる、色黑うして縱理(たて)あり。志手石と名づく」

**して-じかう** 指定事項【名】【一】指定したる事項。【二】電報の取扱に就きて、發信者の指定する事項。即ち至急・至急親展・返信至急・道尾・再送・同文・留置・局待の類、これなり。

**して-しやう** 指定商【名】特に指定せられた商人。御用商人。

**して-ち** 指定地【名】指定する場所又は「土地。

**して-わたし** 指定地渡【名】〔商〕賣買せられたる物品の受渡を、賣主又は買主の營業地以外の買主の指定したる場所にて行ふこと。運搬上の諸費用は、賣主の負擔に屬す。「照。

**して-ていた** 指定値段【名】〔商〕さしね〔指値〕(二)に同じ。

**して-ねだん** 指定値段【名】〔商〕さしね〔指値〕(二)に同じ。

**して-めいだい** 指定命題【名】〔哲〕『英Definite proposition』主語によりて言表はされたる範圍が、明かに指定・確定せられたるに由りていふ』全稱命題と單稱命題との總稱。確定命題。

**して-ゐさんさくさくにん** 指定遺產相續人【名】〔法〕被相續者の指定したる遺產相續人。

**して-うた** 詩謂【名】詩の調子。

**して-う** 市朝【名】【一】『市場は朝開くによりていふ』まちなか。市中。太平記「我が首を刎ねて、市朝に被ㇾ曝獄」

**して-う** 駛潮【名】〔地〕きゆうてう〔急潮〕に同じ。

**して-う** 思潮【名】『英Current thought』その時代の人人の間に通有する思想。時代思潮。

**して-う** 鷲鳥【名】他の鳥類を捕へて食ふ猛禽、即ち鷲・鷹などの類。

**じて-う** 刼鳥【名】【一】極めて早く飛ぶ鳥。飛鳥。【二】圓悲にて、道ぐる石を斜に進詰むること。『萬葉』「四つ目殺しに中手を入れて、してうにかけて打切つて」

**じて-う** 四鳥【名】四羽の鳥。

**四鳥の別【句】**『孔子家語の類回篇に「回聞、逝山之鳥、生二四子一焉、羽翼既成、將分二于四海一、其母悲鳴而送之」とあるに本づく。『四羽の鳥が、その母鳥に「人界に生を受けながら、鳥にあられど、四鳥の別を致し」舞曲・歌古「四鳥の別、親と子に、二度逢ふぞ不思議なる」

**じて-う** 施條【名】【一】物に筋を附くること。【二】鉄身又は病身の內部に、螺旋狀の筋を刻みつけて、彈丸の飛行を强むること。

**じて-う** 枝條【名】えだ。樹枝。

**じて-う** 四條【名】【一】四本のすぢ。よすぢ。【二】〔地〕京都市の東西の街道の一。

**じて-う** 時鳥【名】【一】時節に應じて鳴く鳥。例「ばね春における鶯の類。【二】〔動〕ほとゝぎす〔子規〕に同じ。

**じて-う** 慈鳥【名】〔動〕からす〔烏〕に同じ。

**じて-う** 自調【名】〔佛〕三自の一。戒を持すること。

**自調・自淨・自度【句】**〔佛〕自己一人の煩惱を滅盡して、自己一人のみ宇宙の眞理に徹底すること。小乘の菩薩の、自利的に悟道して、利他的に慈悲を行ふ宗志なきこと。三自。

**自調・自度【句】**〔佛〕前條に同じ。

**自調・自度の二乘心**

**じて-う-おほはし** 四條大橋【名】〔地〕京都四條通の東方に方りて、加茂川に架せる鐵橋。長さ五十四間・幅四間。

**じて-う-とうゐん** 四條後院【名】じゆじやく〔野守集〕「自調・自度の二乘心」

ぬ八宗兼学院)に同じ。

**じてう-さい** 耳鳥齋【名】〔人〕懐川時代の漫畫家。通稱は松屋平三郎(一説には、平三また平兵衛)。別號は、編蜘齋。大阪の酒造家、のち骨董を業とす。畫風卑俗なれども、獨創に富む。別に戯作を試み、また道化浮瑠璃を善くして、その戯名を松平(まつだひら)と稱す。安永頃の人。

**じてう-じしやう-じど** 自調自淨自度【句】じてう(自調)の條下を見よ。

**じてう-じど** 自調自度【句】じてう(自調)の條下を見よ。

**じてう-じゆう** 施條銃【名】すないどる に同じ。

**じてう-たいしやう** 四條大將【名】〔人〕みなもとさだむ(源定)に同じ。

**じてう-たいなごん** 四條大納言【名】〔人〕ふぢはらきんたふ(藤原公任)に同じ。

**じてう-だちやう** 四條道場【名】こんれんじ(金蓮寺)を見よ。

**じてう-たかすけ** 四條隆資【名】〔人〕勤王家。隆實の子。後醍醐天皇に仕へて倒幕の事に參し、建武中興の政に與る。次いで足利尊氏の叛するや、新田義貞と力を合はせて攻伐し、正平三年後村上天皇を奉じて賀名生(あなを)に避け、同七年足利義詮と戰ひて陣歿す。

**じてうち** しで打【名】しでうつこと。

**じてう-ちゆうなごん** 四條中納言【名】〔人〕☰ふぢはらきんたふ(藤原公任)に同じ。

**じてうつ** しで打つ【動四他】『じでは、砧(きぬた)の擣。また繁き意なりともいふ』砧を打つ。(古語) 後拾遺、小夜ふけて衣しでうつ擣きけば念ぶぬ人もねられざりけり」

**じてう-てんわう** 四條天皇【名】〔人〕第八十七代の天皇。御名は秀仁(ひでひと)。後堀河天皇第一の皇子。御母は藤壁門院藤原竴子(ていし)。在位十年(紀元一八九三年—一九〇二年)。仁治三年崩ず。壽十二。

**じてうど** 自調度【名】〔佛〕「自調・自度」に同じ。

**じてうなはて** 四條畷【名】〔地〕河内國中河内郡枚岡(ひらをか)南村大字四條より北方飯盛(いひもり)山麓にかけての廣野。正平三年楠木正行、同正時の、高師直と戰ひて陣歿せしところ。

**じてうなはて-じんじや** 四條畷神社【名】河内國北河内郡甲可(かうか)村大字南野飯盛(いひもり)山麓に鎮坐せる別格官幣社。祭神は楠木正行。

**じてう-の-みや** 四條宮【名】☰山城國京都四條の南、西洞院の東に在りし藤原賴忠及び公任の邸宅。☰〔人〕ふぢはらのぶただ(藤原寛遊子)の稱。

**じてうは** 四條派【名】『吳春の住所は京都の四條通なりしよりいふ』日本畫の一派。松村吳春を祖とす。四條流。

**じてう-はら** 施條砲【名】禰身の内部に施條ある大砲。線條砲。

**じてう-ふう** 四條風【名】四條派の畫風。

**じてう-むぎ** 四條麥【名】〔植〕しがくむぎ(四角麥)に同じ。

**じてうりう** 四條流【名】☰紫山・造延法の一派。後嵯峨天皇より創まるといふ。☰じてうは(四條派)に同じ。

**じてうれい** 市條例【名】市がその自主權に由りて、市の事務及び市民の權利義務を定めたる事項。その事項は、法律命令に抵觸せざるを要す。

**じて-がさ** 四手笠【名】武具の指物(さしもの)の一。笠の緣より細く裂きたる紙を垂れたるもの。

**じてかす** 爲出來す【動四他】じいたす(爲出す)に同じ。

**じてかへす** 爲而返す【動四他】す(爲)の條下「を見よ。

**じてき** 四敵【名】四方の敵。 儀曲(義彩)「たとひ四敵の寄せ來るとも、この旗をさし上げば」

**じてき** 指擿【名】☰さししめすこと。☰あばき出だすこと。摘出。摘發。

**じてき** 詩的【名】『英 Poetical』詩趣を含めるさま。現實を離れて、感想に入るさま。

**じてき** 史的【名】『英 Historical』歴史に記載せらるるほどに有名なるさま。歴史上の。歴史上としての。

**じてきあ** 自適【名】『自らその意に適へりとする意』他の制縛を受けず、心のままに樂しむこと。「悠悠自適」

**じてきくうさざう** 詩的空想【名】〔哲〕次條に同じ。

**じてきさうさざう** 詩的想像【名】〔哲〕感想上に融せ、現實とかけ離れたる思想。その心像必ずしも客觀的實在と契合するを要せず。ポンテの冥界の想像の類。詩的空想。藝術的想像。

**じて-くるま** 四手車【名】武具の指物(さしもの)の一。車の輪に細き紙を垂れたるもの。

**じて-こい** 爲而來【句】よしきた。いざ來れ。 丹後風土記「これ、この馬を知ったか。池鯉鮒(ちりふ)の市で九兩一歩、親方の物なれど、十六貫のかはりに、五百目の馬なら、してこいと」

**じて-こぶし** 四手辛夷【名】〔植〕木蘭科に屬する落葉喬木。葉・花・形ともに辛夷に似、ただ花瓣の數多く、紫條を有するを異なりとす。ひめこぶし。

(しぶこでし)

**じて-さくら** 四手櫻【名】〔植〕さいふりぼく(采振木)に同じ。

**じて-して** 『接』じてを重ねて意を强めたる語。 狂言采ひろがり「してして、言ひつけた末廣がりを求めて來たか」

**じて-しやじん** 四手沙參【名】〔植〕桔梗(きちかう)科に屬する多年生の草。山野に自生し、莖の高さ二三尺、葉は長卵形、夏秋の際、紫色又は白色の花開く。觀賞用とす。やうちくしやじん。ちやうじぎきやう。

**じて-たをさ** 死出田長【名】〔動〕しでのをさ(死出田長)に同じ。(古語) 後馬樂「鮮之間「ひぢかさの雨も降らなむしでたをさあまやどり宿りてまからむして田長」

**じてつ** 磁鐵【名】〔鑛〕次條の略。

**じてつ-くわう** 磁鐵鑛【名】〔鑛〕『英 Magnetite』しさんさんくわう(四三酸化鐵)を見よ。

**じてづれ** 仕手連【名】能樂及び狂言にて、仕手の補助をする役。つれ。

**じてでい** 【名】『次條の意より轉じていふ』鼓を打つこと。また鼓の異稱。 盛衰記「この知康は、究竟のしてでいの上手にて、鼓判官と、異名に呼びけり」

**じてでい** 【感】『じてうつ(して打つ)を見よ』鼓の音の形容。じでい。じでいでい。 參照。

**じでと** 下手渡【名】〔地〕岩代國伊達(だて)郡小牛(こうし)村にある宇。立花氏の舊落地。

**じてどの** 仕手殿【名】その道にかけての老功者。やりてもの。 一代女「庵子(あんし)屋の仕手殿も見えける」

**じでのき** 四手木【名】〔植〕しでやなぎ(四手柳)に同じ。

**じてのく** 【句】す(爲)の條下を見よ。

**じてのたび** 死出の旅【句】じで(死出)の條下を見よ。

**じてのたをさ** 死出田長【名】〔動〕『くわんのうぐう(鶯鳥鳥)を見よ。一説には死出は賤(しづ)の窟なりと』ほとときす(時鳥)の異稱。してたをさ。(古語) 伊勢「名のみ立つしでのたをさはけさぞ鳴くいほりあまあたうとまれぬれば」

**じてのやま** 死出山・死天山【名】〔佛〕『別譯阿含經の四に「老山能壞・壯年盛色・衰耗之山能壞・一切强健・死山能壞・一切壽命」』病山能壞・一切强健・死山能壞・一切壽命・衰耗之山能壞・一切榮華宮貴・とある死山南門、七人重過、兩草相遇、破レ藤割レ骨折レ膚レ鱗、死天重死、故言二死天一とあるに出づ。死天山は死の險難を山に譬へしなり』死後たどり行くべき山路。さんづのかは(三途川)參照。 拾遺「しでのやま越えて來つらん時鳥とひしき人の上語らなん」

**じてのやまぢ** 死出山路【名】〔佛〕死出の山の山路。 增鏡「かくながらは、死出の山路も越えやすやうも侍らぬなんなど」

**じてばしら** 仕手柱【名】☰能舞臺と橋掛(はしがかり)との間の角にある柱。仕手の所作の起點とも終點ともなる所。☰昔の芝居の







舞臺の上手(かみて)にありし柱。仕手の篝りかがり所。

**じ-てふ** 寺牒【名】寺院より官廳に上る文書。又は寺と寺との間に取交はす牒書。

**じてふたい** 試帖體【名】〔文〕「支那唐の代に、進士に科したるによりていふ』じてんはいりつ(五言排律)に同じ。

**じて-むし** 死出蟲【名】〔動〕鞘翅(さやばね)類に屬する昆蟲。前翅短く、その端恰も切斷せられたるがごとき形をなし、體黑色にして、三條の赤褐紋あり。好みて動物の屍體に集まる。

(しむでむし)

**じてん** 絲轉【名】昔の小鉄のねぢまき。

**じてん** 支店【名】☰本店のわかれ。ていみなる場所に設けたる營業所。

**じてん** 肆店【名】みせ。商店。店舗。

**じてん** 市店【名】まちのみせ。市肆。

**じてん** 祀典【名】祀るべきものを記載せる書物。

**じてん** 趾點【名】〔數〕『英 Foot 又は Trace』垂線又は斜線が直線若しくは平面と交はる點。

**じてん** 指點【名】ゆびさし示すこと。指「示。

**じてん** 視點【名】〔美〕『英 Point of sight』繪畫の遠近法にて、人の目と直角をなせる地平線上の假定の一點。人がこの點を注視して、道路に立つ時、地面と並行する諸線は、皆この一點に集中・消失するが故に、視覺の中心とも稱す。せうてん(消點)參照。

**じてん** 支點【名】〔理〕『英 Fulcrum』槓桿を支ふる固定せる點。「重點・力點に對して」

**じてん** 司天【名】てんもんはかせ(天文博士)に同じ。 樂書記「伴翼在二祭囚中一、免二遠流之罪一、今度會二敘、殊舊司天之奏一」

**じてん** 至點【名】〔天〕『英 Solstitial point 又 Solstice』夏至點と冬至點との總稱。

**じてん** 四季【名】☰四季の天、即ち蒼天(春)・炎天(夏)・晏天(秋)・上天(冬)の併稱。☰〔佛〕じてんわう(四天王)の略。 太平記「多聞・持國・增長・廣目の四天、須彌の四方に住んで」四天・二天【句】四天王と日天・子・月天子との併稱。 謡曲「四天・二天の金剛力」

**じてん** 四天の座【句】次條に同じ。

**じてん** 四天の鉞【句】兜の前後・左右に一箇づつ打附けたる鉞。四天の座。四天の星。

**じてん** 四天の星【句】前條に同じ。

**じてん** 史傳【名】歴史と傳記と。

**じてん** 師傳【名】師匠より傳授せること。

**じてん** 賜田【名】古、功田と同じく、官職・位階に拘はらず、特旨によりて賜ひし田、また林野・牧場などを賜ひしこともあり。私田の一にて、輸租田の一なり。別勅賜田。

**じてん** 私田【名】私有の田地。令制には、位田・職田・賜田・口分田の他、その他各種の雜色、及び墾田の總稱にして、通例輸租田なるを法としたり。(公田に對して)

**じてん** 紫殿【名】寀(さい)りたる宮殿。太平記「水中に入ること五十餘町、一の樓門あり。……朱樓紫殿・金の欄干」

**じてん** 紫電【名】☰紫色を呈する電光。☰人の鋭き目つき。

紫電一閃【句】☰事の火急なる譬。☰紫電・清霜【句】『王勃の滕王閣序に見ゆ。光輝の閃くこと紫電のごとく、節操ゆ。凜たること清霜のごとくなる意といふ』凜然たる節操の譬。

**じてん** 辭典【名】じてん(辭書)に同じ。

**じてん** 字典【名】じてん(字書)に同じ。

**じてん** 自轉【名】☰おのづから轉ずること。☰〔天〕『英 Rotation』天體が、その中心を通過する一の直線を軸として、同轉すること。(公轉に對して)

**じてん** 次點【名】☰次に記せる點數。☰第二位の得點。

**じてん** 寺田【名】寺院の所有せる田地。令制にては不輸租田の一にして、菩薩戒本田・由家得度田・放生田・長生田等の種類あり。寺領。 本朝、水を寺の田に入れしかば、…寺田は燒くることなかりしかば」

**じてん** 自傳【名】自分にて書けり自分の傳記。自敍傳。「見よ。

**じてんか** 四天下【名】じてんげ(四天下)を見よ。

**じてん-かん** 司天監【名】陰陽頭(おんやうのかみ)即ち陰陽寮の長官の唐名。

**じてん-かんおやう** 支店勘定【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。本店と支店との間の總勘定。

**じてん-き** 指點器【名】彫刻家が、石膏にて作れる原型を、大理石その他の材料に移す時に用ふる器械。木製の基盤目の枠の、四邊を同じ數に割附け、移動し得る錘絲を下げたるもの。基盤枠と錘絲とにより、假定の並行面體をなすやう作られたるを以て、原型とこれを移さんとする材料との上に、その一箇づつを置きて使用す。從って、その二箇が大・小互に比例をなすものを用ふれば、原型より大きくも小さくも自由に移すことを得。

**じてんげ** 四天下【名】〔佛〕「しだいしう(四大洲)に同じ。 正長記「黑海を吹きて、日月二輪を深出す。須彌の牛腹におきて、四天下を照さむ。これより、始めて晝夜・晦朔・春秋あり」

**じてんけう** 侍天教【名】朝鮮の拜天主義の一徒黨。舊一進會の首領李容九の組織せしものにて、その教徒も、多く舊一進會員なり。「人。

**じてん-しや** 次點者【名】〔教〕次點☰を得たる人。

**じてん-しや** 自轉車【名】乘人自ら足にて、車輪を回轉せしめて走らする裝置の車。一輪・二輪・三輪などあれど、二輪のもの最も普通なり。また近時、自動機を取附けて、回轉せしむるもあり、オートバイと呼ぶ。その條參照。雙輪車。

(やしんてじ)

**じてん-しゆう** 四殿衆【名】四職の人。

**じてん-しゆぼ** 司天主簿【名】陰陽屬(おんやうぞく)即ち陰陽寮の第四等の官の唐名。

**じてん-じよう** 司天丞【名】陰陽丈(おんやうじやう)即ち陰陽寮の第三等の官の唐名。

**じてん-せうかん** 司天少監【名】陰陽助(おんやうのすけ)即ち陰陽寮の次官の唐名。

**じてん-だい** 司天臺【名】☰じてんもんだい(天文臺)に同じ。☰江戸時代に、天文・曆數の事を掌りし役所。天明二年江戸淺草片町に設置し、天保十三年麹町九段坂上に、文化中、江戸城吹上(ふきあげ)苑内にも增設せり。

**じ-てんだう** 四顚倒【名】〔佛〕四種の顚倒。凡夫のと二乘のとの二種あり。前者は、世間の實相に對するものにて、その無常を常とする常顚倒、その非我を我とする我顚倒、その非淨を淨とする淨顚倒の併稱。後者は涅槃(ねはん)の實相に對するものにて、その常を無常とする無常顚倒、その我を無我とする我顚倒、その淨を無淨とする無淨顚倒の併稱。じやうらくがびやう(常樂我淨)參照。 釋迦如來藏生貫「世間の榮華を樂むと雖、四顚倒の憂少時も離れず」「る人。

**じてん-ちやうう** 支店長【名】支店を管理する人。

**じてん-の-さ** 四天の座【名】じてん(四天)の條下を見よ。

**じてん-の-びやう** 四天の鉞【句】じてん(四天)の條下を見よ。

**じてん-の-ほし** 四天の星【句】じてん(四天)の條下を見よ。

**じてん-ば** 【名】〔植〕しやじん(沙參)を云ふ。「九州の方言」

**じてん-ばしら** 四天柱【名】〔建〕塔の心(しんばしら)柱の四方にある四本の柱。更にその外方に側柱(がはばしら)あり。

**じてんばったう** 四顚八倒【句】じってんばったう(七顚八倒)の訛。 釋迦如來藏生貫「四顚八倒狂死死に」

**じてんりう** 二天流【名】にたりうの(二刀流)に同じ。

**じてんわう** 四天王【名】☰〔佛〕『梵 Caturmahārāja-kāyikas の譯語』須彌山の中腹なる四方に城を構へ、上は三十三天の主なる帝釋(たいしやく)天に仕へ、下は八部鬼神を支

配して、佛教及び佛法歸依の人を守護すといふ持國天王(東方)廣目天王(西方)増長天王(南方)多聞(タモン)天王(北方)の併稱。又その居る所を、四天王天又は四王天といひ、六欲天の一にして、三界諸天の最低に位す。四天。四王。護世四王。吉野藤女無「須彌の四方の四天王」 **四天王** 武將の部下中、特に秀でたる者四人の併稱。「德川家康の四天王」「義經の四天王」等。

**してんわうじ** 四天王寺 【名】大阪市南區の寺にて、聖德太子の創立に係り、初は玉造(タマツクリ)の岸上(今の大阪城の在る處)に在りしを、推古天皇の時、現地に移しし、もの。本尊は、太子の物部守屋を攻むる時、彫刻せしめて髮裏に藏め、戰勝を祈りし四天王像。その地もと荒陵(アラヲカ)丘と呼びしより、山號を荒陵山と稱す。現時の堂宇は德川時代の建造にて、東大門は足利時代のもの。(ホウオン)天王寺。

**してんわうじゆ** 四天王樹 【名】杉檜(スギ)、檜(ヒノキ)、公孫樹(イチヰ)の四種の大木の併稱。

**してんわうじりう** 四天王寺流 【名】我が國寺院の建築法の一派。摂津國四天王寺の法式に準據せるものにて、建仁寺流と相並びて行はれたり。

**してんわうてん** 四天王天 【名】〔佛〕**してんわう**(四天王)**四**を見よ。

**してやなぎ** 四手柳 【名】〔植〕さいかちぼく(采振木)に同じ。

**してやる** 爲而遣る 【句】す(ス)の條下を見よ。

**してわ** 四手輪・垂輪 【名】武具の指物(サシモノ)の一。輪の周邊より多くの細き紙を垂らしたるもの。

**してをけ** 四手桶・垂桶 【名】武具の指物の一。桶の底より多くの細き紙を垂らしたるもの。

**してをしき** 四手折敷 【名】武具の指物の一。折敷より細き紙を垂らしたるもの。

**しと** 濕 【名】〔しとる(濕る)の窹〕せう(ス)ぺん(小便)に同じ。 墨花、御しとなどにぬれても、うれしげにぞおぼされたる」

**しと** 絽徒 【名】『絽は墨染の衣の義』そうさ(僧徒)に同じ。

**しと** 司徒 【名】支那上代の官職の一。堯の代よりその稱見え、周代には六官の一として、文教及び地方行政、農政、租稅等を掌り、大司徒、小司徒に分れ、漢代には大司空と共に、三公の一たりき。

**しと** 使徒 【名】〔基〕『英 Apostle 後世、傳道者の意に用ひらる』キリストの弟子にして、キリストの生涯と死と復活とを目擊し、これを世に傳へんがために、キリストに選ばれしペテロ(Peter)・ヤコブ(Jacob)以下十二人の者。初は基督教を迫害せしユダヤ教の學者パウロ(Paul)は、十二人の數には入らざれども、使徒たる權威を授けられて、外國に宣教せり。十二使。聖使。

**しと** 斷徒 【名】こもの。めしつかひ。斷り、山徒・山司徒に分れ、漢代には大尉司空と共に、三公の一たりき。後世、傳「役。

**しと** 鵶 【名】〔鳥〕『英 Hydrurio ram』水の落下する勢を利用し、自働的に高所に水を揚ぐる裝置の機械。

**しとうら** 志度浦 【名】〔地〕しど(志度)を見よ。

**しどうりつ** 自同律 【名】〔哲〕『英 Principle of identity』論理上の三大原則の一。一の事物はそれ自らと同一なりといふ原則、即ち甲は即ち甲にして、甲なりといふ原則、即自働的に高所に水を揚ぐる裝置の機械。

**しとうやうすゐき** 自働揚水機 【名】『英 Hydrurio ram』水の落下する勢を利用し、自働的に高所に水を揚ぐる裝置の機械。

**しど** 志度 【名】〔地〕讃岐國大川郡にある町。その海灣は志度浦と呼び、蜃の如き形をなす。高松市の東三里半。文治元年における源平二氏の古戰場。志度浦は、古、玉の浦とも屋島(ヤシマ)の浦ともいへり。 **しどど**(志度寺)參照。

**しど** 四土 【名】〔佛〕じどど(四佛土)に同じ。

**しど** 私度 【名】〔佛〕古、官許を得ずして、私に僧尼の形を眞似せしこと。自度。

**しど** 【名】しだら。しまり。紀律。

**しどが** 志度が 【句】しどなし(志度)に同じ。 **しどが無し** 【句】前條に同じ。 **しどが無し** 【句】前條に同じ。 **しどが無し** 【句】前條

**しいとつ** 編笥【名】しだふ(編衾)の誤讀。

**しいとづつ** 尿筒【名】古、東帶著用の場合に、小便をしこむため、從者に携へしめし筒形の便器。

**しいとでら** 志度寺【名】讃岐國志度町に在る眞言宗の寺。藤原不比等の建立、同房前(ふさ)の再興。本尊は十一面觀音。四國八十八箇所中、八十六番の札所。保元の亂後、崇德上皇讃岐に遷幸の時、この寺に御せられたり。花上野蓼の石碑、黙する海士が家までも、一目に近き志度寺は、志度の浦浪名に高き、丸龜殿の御菩提所」

**しいと-と**【感】しどしどに同じ。 其ひたひ髮もしいとに泣き濡らし」

**しいとど** 鵐【名】〔動〕 ■ほほじろ(頰白)に同じ。 ■あかしいと(赤鵐)即ちほほあか(頰赤)。 **あをしいと**(青鵐)・くろしいと(黒鵐)・ほほじろ鳥此云三芝苔吉」

**しいと-と**【感】しどしど 〔日〕の略。〔古語〕 蒐集「朝霧にしどとはぬれてよぶことり三舟の山に鳴きわたる見ゆ」

**しいとと-とり** 鵐【名】〔動〕しいとと(鵐)に同じ。

**しいとと-め** 鵐目【名】『形、鵐の目に似たる意にていふ』刀の栗形(くりがた)、又はその他の器物の紐を通す孔の緣に嵌むる金具。

**しいと-なし** 【形ク】しどけなしに同じ。

**しいとね** 褥・寢・茵・褥【名】すわり又は寢ぬる時、下に敷くもの。しきもの。ふとん。ざぶとん。むしろ。 其式部丞忠隆御使に參りたれば、茵さしいだし、物などいふに」 和名茵、之止禰」

**寢に臥す**【句】病に臥す。

**しいと-のうら** 志度浦【名】〔地〕しいと(志度)を見よ。

**しいと-のつかひ** 四度使【名】しいと(四度)に同じ。

**しいとはい** 四度拜【名】りやうだんさいはい(兩段再拜)に同じ。

**しいと-べう** 四斗俵【名】米俵の四斗入りてあるもの。地方によりては、五斗入なるもあり、五斗俵と呼ぶ。

**しいとべ-わらは** 僮竪【名】『しいべはしりべ(檢從)の略』ともわらは。〔古語〕 紀僮竪シトベ、ワラハ」

**しいとみ** 蔀【名】■古、高貴の家にて、又今も神社佛閣などにて、日光又は雨風を防ぐに用ふる戸。上端は蝶番(ちょうつがい)にて固著し、下端を、金物にて外方に吊上げて、水平に開くやうにしたるを、吊(つり)蔀又は揚(あげ)蔀と呼び、又これを作る材料の種類により、竹蔀・板蔀などいふ。高貴の家にては、格子の上に板、竹簾などを被ひて造りたれど、賤者の家のは、格子を用ひざるもあり。源氏、かどはしとみのやうなるを押しあげたる、見いれのほどなく、物はかなきすまひ」 ■和船にて、飛沫などを防ぐために立つる戸。 ■城郭にて、外部より見通さるる處を遮蔽する戸。




**しいとみ** 櫺子【名】〔植〕くさぼけ(櫺子)に同じ。

**しいとみいた** 蔀板【名】しいとみ(蔀)〔日〕の立てずに、取外しあるもの。

**しいとみがね** 蔀金・鎹・鉸【名】蔀のかきがね(鎹)に同じ。

**しいとみ-ぐさ** しどみ草【名】〔植〕くうだん(鐵線蓮)に同じ。

**しいとみ-くわんげつ** 蔀關月【名】〔人〕大阪の畫家。名は德基、字は子温、通稱は厚二、一に院二、雅號畫と號す。月岡雪鼎に學ぶ。人物・山水に長じ、法橋に敍せらる。伊勢參宮名所圖會及び山海名所圖會を著す。寛政九年歿す。年五十一。

**しいとみ-と** 蔀戸【名】■しいとみ(蔀)〔日〕に同じ。 徒然「夜は蔀戸よりあかしし」 ■關東地方の商店にて、夜間その店頭の入口に立つる、上下二枚の横戸。蔀間は、引上げて蔀梁(はりつな)の外方なる戸決(とまり)に納め置く。

**しいとみばし** 蔀橋【名】めりかばし(廊下橋)に同じ。

**しいとみ-ばしら** 蔀柱【名】戸溝を有して、取外(とりはず)し得る柱。店前の敷居の中央に立て、畫間は取外して置く。

**しいとみ-はめ** 蔀羽目【名】基盤目の桟を取附けたる羽目。

**しいとみ-ばり** 蔀梁【名】店の柱の上部に取附けたる大梁(おおはり)。ひとみばり。ひとみ。

**しいとみ-まど** 蔀窗・蔀窓【名】基盤目の格を取附けたる窓。

**しいとみ-や** 蔀屋【名】蔀にて圍ひたる假屋。「古語」 舞西侍日馬、しとみやより見わたしたれば」

**しいとみ-やま** 蔀山【名】〔地〕備後國比婆郡高野山(たかのやま)村大字新市(あらいち)にある山。出雲國に近し。 巢文「しとみやまおろす嵐のはげしさに柴の扉も明けぬころかな」

**しいとむ** 爲留む【動下二他】息(おき)の根を留む。殺し終はす。 源氏冷泉帝「すは伏猪よ、我れ仕留めんと誑寄れば」

**しいとむ**【動四自】ひたる(浸る)に同じ。 虞集 巢「水しとまば、さうづに乘りさがり」

**しいとん** 子螢【名】〔人〕支那宋の僧。文永年中、我が國に來り、一旦歸國し、正安元年寧一山と共に渡來して、鎌倉圓覺寺に居る。畫を善くす。德治元年寂す。大通禪師を謚す。

**しいとん** 檀子【名】〔植〕しいとみ(櫺子)の轉訛。

**しいと-もなし** 【形ク】しどけなし〔日〕を見よ」 言語・動作の落著きて上品なるさま。

**しいと-やき** 志度燒【名】讃岐國大川郡志度浦にて、平賀源內の燒出しし陶器。茶器類多く、その甥源吾は種種の器物を製出せしが、歿後その製法終に廢せり。

**しいとり**【名】機(はた)の緯糸を卷く呼、その隔に入るるもの。くさ。〔西國の方言〕

**しいとり** 湿【名】しとること。しめり。うるほひ。

**しいとり** 倭文布【名】『しづおり(倭文織)の約』しづ(倭文)に同じ。〔古語〕 紀倭文神、此云二新國梨能倭未」

**しいとり-じんじや** 倭文神社【名】伯耆國東伯(とうはく)郡倉吉村に鎮坐する國幣小社。祭神・は下照姫(したてるひめ)命。

**しいとり-べ** 僮從【名】『しいべはしりべ(檢從)の略』 紀僮竪シトベ」

**しいとみ** 蔀【名】基盤目の桟を取附けたる羽目。

**しいとみ-ばり** 蔀梁【名】店の柱の上部に取附けたる大梁(おおはり)。ひとみばり。ひとみ。

**しいとみ-まど** 蔀窗・蔀窓【名】基盤目の格を取附けたる窓。

**しいとみ-や** 蔀屋【名】蔀にて圍ひたる假屋。「古語」 舞西侍日馬、しとみやより見わたしたれば」

**しいとみ-やま** 蔀山【名】〔地〕備後國比婆郡高野山(たかのやま)村大字新市(あらいち)にある山。出雲國に近し。 巢文「しとみやまおろす嵐のはげしさに柴の扉も明けぬころかな」

**しいとむ** 爲留む【動下二他】息(おき)の根を留む。殺し終はす。 源氏冷泉帝「すは伏猪よ、我れ仕留めんと誑寄れば」

**しいとむ**【動四自】ひたる(浸る)に同じ。 虞集 巢「水しとまば、さうづに乘りさがり」

**しいとん** 子螢【名】〔人〕支那宋の僧。文永年中、我が國に來り、一旦歸國し、正安元年寧一山と共に渡來して、鎌倉圓覺寺に居る。畫を善くす。德治元年寂す。大通禪師を謚す。

**しいとん** 檀子【名】〔植〕しいとみ(櫺子)の轉訛。

**しいと-もなし** 【形ク】しどけなし〔日〕を見よ」 言語・動作の落著きて上品なるさま。

**しいと-やき** 志度燒【名】讃岐國大川郡志度浦にて、平賀源內の燒出しし陶器。茶器類多く、その甥源吾は種種の器物を製出せしが、歿後その製法終に廢せり。

**しいとり**【名】機(はた)の緯糸を卷く呼、その隔に入るるもの。くさ。〔西國の方言〕

**しいとり** 湿【名】しとること。しめり。うるほひ。

**しいとり** 倭文布【名】『しづおり(倭文織)の約』しづ(倭文)に同じ。〔古語〕 紀倭文神、此云二新國梨能倭未」

**しいとり-じんじや** 倭文神社【名】伯耆國東伯(とうはく)郡倉吉村に鎮坐する國幣小社。祭神・は下照姫(したてるひめ)命。





しろもの。貨物。

品無し【句】■愛想氣なし。にべなし。 雙生廣田川「班女、品なく振りまはし」 ■品(ひな)なし。下卑たり。 其そばの木、品なき心地すれども」

**品を爲る**【句】■上品ぶる。氣どる。しとやかしくなす。 ■言語・動作を特にしとやかしくなす。〔俚語〕

**品を作る**【句】前條に同じ。

**品を付ける**【句】もったいをつける。巧に言辭をつくる。 宰町子春「酔の誇霜の品を遣る」【句】きどりて巧に行ふ。あぢな眞似をす。〔俚語〕

**五つの品**【句】〔佛〕ごぼん(五品)に同じ。〔古語〕 拾玉「急ぎゆく宿しかはらぬ道なれや五つの品の四つのまことを」

**しな** 科【名】〔植〕しなのき(科木)の略。

**科の皮剝**(はぎ)【句】科の木の皮にて作りたる綱。しなつな。 太平記「楝木を揚げんとしける掘卷(ほりまき)の綱に、信濃皮むき千束入るべしと」

**しな** 支奈【名】〔植〕菊科に屬する牛蒡木。中央亞細亞に自產し、高さ二尺許。全體に白色の毛茸生じ、葉は羽狀に分裂して互生す。花は細小にて、三乃至五六ゐ、ちりて、小さき瓜狀花序をなす。せめしな。しなくわ(支奈花)參照。

**しな** 支那【名】〔地〕亞細亞洲の東部に位する國。直隸・山東・山西・河南・江西・陝西(せいせい)・甘肅・江蘇・安徽・湖北・湖南・雲南・貴州・四川・福建・浙江・廣東・廣西の十八省を本部と稱し、滿洲・蒙古・西藏等これに附屬す。首府を北京(ペキン)と稱す。もろこし。唐土。漢土。震旦。

**しな**【接尾】ついて・際・場合・段取などの意。「歸りしな」「來てしな」「もどりしな」

**しなあひる** 支那鴨【名】〔動〕たうがん(唐雁)に同じ。

**しない** 市內【名】市のうち。市街のうち。まちなか。〔市外に對して〕

**じーない** 寺內【名】寺院の境內。〔寺外に對して〕

**じない** 【名】〔動〕鵐(ほほじろ)類の總稱。

**しないーいうびん** 市內郵便【名】しないさくべつとありあつかひいうびん(市內特別取扱郵便)の略。

**じーないしよう** 自內證【名】〔佛〕自己の內心に於ける證悟の相(すがた)。

**しないーつうわ** 市內通話【名】電話の通話の、同一市內の兩地點間に行はるるもの。(市外通話に對して)

**しないーとくべつ** 市內特別【名】市內特別取扱郵便物として取扱はるべき郵便物を郵便局に差出す時、その表面見やすき場所に表記すべき語。

**しないーとくべついうびん** 市內特別郵便【名】次條の略。

**しないーとくべつとりあつかひいうびん** 市內特別取扱郵便【名】郵便物特殊取扱の一。同一郵便區市內に發著する通常郵便物に對し、料金の低減等特殊取扱をなすもの。內容の同一なるもの、百箇以上を差出す場合に限る。市內特別郵便。

**しないーはいたつ** 市內配達【名】■配達を一市內に限りて扱ふ一種の運送業、又その人。 ■停車場內に於て、鐵道小荷物として著せし荷物を、荷主の依頼に應じて、送り屆くる一種の運送業、又はその人。

**しなう** 詩囊【名】〔植〕『羅Sporangium』隱花植物の繁殖器官。囊狀をなして、內部に多數の胞子を生じ、成熟すれば、破裂して胞子を散布するもの。形態一樣ならず。芽胞囊。

**じーなう** 耳囊【名】〔動〕『羅Otocyst』下等動物の聽器。一の囊狀物にて、壁は皮膜組織より成り、中に透明液を有し、液中に、一箇乃至數箇の耳石と稱するものを含有す。また皮膜中の一定所に、知覺細胞あり。これより數多の毛樣突起を出す。聽胞。

**しなうーきん** 子囊菌【名】〔植〕次條に同じ。

**しなうきん-るゐ** 子囊菌類【名】〔植〕黴類の一。體は菌絲より成り、その大きさ、小なるものは顯微鏡的、大なるものは尺餘に達す。生殖は有性なると無性なるとの兩法によりて營まれ、無性生殖の場合には、菌絲の一部より樣狀の子囊發生し、中に八箇の胞子生ず。これに屬するものには、酵母菌・麴黴(こうじかび)の如き有用なるものと、青黴(あおかび)の如き有害なるものとあり。囊子菌類。

**しなうーくん** 子囊群【名】〔植〕『羅Sorus』數多の子囊の、相集りて、葉の裏に著生するもの。羊齒(ようし)類において見るもの、これなり。子囊堆。

**しなうーすゐ** 子囊穗【名】〔植〕『英Cone』上部に子囊の著生する穗狀の蕚。例へば土筆(つくし)の上端にある穗狀體のごとき、これなり。

**しなうーたい** 子囊體【名】〔植〕『羅Sporocarpium』黴類の子器。中に胞子を藏む。

**しなうーたい** 子囊堆【名】〔植〕しなうゐん(子囊群)に同じ。

**しなうちは** 支那團扇【名】支那にて製造する團扇。豪華團扇に似て、紗絹などに面を飾り、或は藤にて枠を作り、紗・絹を張りて、端を反らせたるもの、また鳥の羽にて飾れるもの等、種種あり。

**しながき** 品書【名】品物の名を書きしるすこと、又その書きしるしたるもの。しなづけ。目錄。

**しなーかたち** 品形【名】人がらと、かほかたちと。 徒然「品形こそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きに移さば移らざらん」

**しながーとり** 息長鳥【名】〔動〕にほ(鳰)に同じ。

**しながーとり** 階長取【名】神樂歌の曲の一。 神樂「しながどり瑪名の淡にあいぞ入る船のかぢよくまかせ船漕ぐな船漕ぐな」

**しながーとり** 息長鳥【枕】ねな又はあはにかけていふ。 萬葉「しながどり鳥ゐる山とよみゆく水の名にのみ寄せしこもり妻はも」 同「しながどりあはにつぎたる梓弓」

**しながーの-ゐほみささぎ** 磯長中尾陵【名】しながのやまたのみささぎ(磯長山田陵)に同じ。

**しながーの-たいしーの-みささぎ** 磯長太子陵【名】しながのみささぎ(磯長陵)に同じ。

**しながーの-なかやまーの-みささぎ** 磯長中尾陵【名】しながのゐほみささぎ(磯長中尾陵)に同じ。

**しながーの-やまだーの-みささぎ** 磯長山田陵【名】しながのたいしーのみささぎ(磯長太子陵)に同じ。

**しながーのはら-の-みささぎ** 磯長原陵【名】用明天皇の御陵。河內國南河內郡磯長村にあり。

**しながーの-みささぎ** 磯長陵【名】聖德太子の墓。河內國南河內郡磯長村大字太子叡福寺境內にあり。

**しながーのやまだーの-みささぎ** 磯長山田陵【名】推古天皇の御陵。河內國南河內郡山田村大字山田に在り。

**しなーがは** 品川【名】〔地〕武藏國荏原(えばら)郡にある町。東京市の南端に接し、東京灣に臨む。東海道五十三驛の第一程。 續後撰「品川に富士の影なき汐干かな」

**しながはーのり** 品川海苔【名】〔植〕『武藏國品川にて多く採るるよりいふ』あさくさのり(淺草海苔)に同じ。

**しながはーはぎ** 品川萩・草木樨【名】〔植〕豆(まめ)科に屬する二年生の草。沿海の地に自生し、牧草とす。莖の高さ二尺ばかり、葉は三小葉より成り、夏季、黃色の蝶形花を開く。きはぎ。

**しながはーびやうし** 品川拍子【名】神樂大鼓の拍子の一。鎌倉拍子の類にて、武藏國品川町の鎮守なる天王社より創りしもの。

**しなーかばん** 支那鞄【名】『支那より產出したるによりていふ』木にて作り、その外側を革又は紙にて貼りたる、箱形の鞄。

**しながはーやじらう** 品川彌二郎【名】〔人〕政治家。舊長州藩士。尊攘堂主人又は念佛庵と號す。吉田松陰の門人。王政復古に盡瘁し、子爵を授けられ、樞密顧問官・內務大臣に至り、明治三十三年歿す。年五十六。

**しながはーをとこ** 品革絨・此奈韋絨【名】品革にて鎧を縅すこと、又その鎧。 川中島 品革「品革絨の糸毛の鎧」

**しなーがら** 品柄【名】品物の性質。品質。し

**しなぎれ** 品切【名】賣りつくして、商品の無くなること。

**しなくたり** 差降【名】しな。等級。〔古語〕

**しなくな** 紀各有三瓷筥(ヘグリ)〔〕

**しなくる** 【動下二自】しなぶ(婆ぶ)に同じ。

**しなくれ** 【名】しなくること。

**しなくわ** 支奈花【名】攝細支奈(ヘグリ)の未開の頭狀花序。往時これを煎じて、蜘蛛編除の藥としたり。今はその花序より、サントニンと稱する物質を採取して服用す。

**じなけう** 者那敎【名】じやいなけう(者那敎)に同じ。

**しなこ** 支那語【名】支那人の用ふ國語。

**しなこそ**(支那語族)參照。

**しなこ-がく** 支那語學【名】支那語の性質、語法等を研究する學。

**しな-ところ** 品心【名】人がらと、心もち。〔源氏〕さぶらふ中に、しなこころすぐれたる限りをえりて」

**しな-ことず** 支那吳須【名】ヨ(吳須)[1]を一。支那語及びこれと親近の關係を有する安南語・緬甸(ビルマ)・西藏(チベット)等の諸國語、並びに支那內地の蠻族なる苗(ミヤウ)族等の使用する言語を包含す。各語詞は獨獨立に並置せられ、何等語形上の變化を取らざるによりて、孤立語の名あり、又その語詞の多くは、一シラブルより成れるによりて、單綴語とも呼ばる。

**しなこそ**(支那語族)參照。

**しなこ-ぶく** 支那語族【名】〔語〕語族の一。支那語及びこれと親近の關係を有する安南語・緬甸(ビルマ)・西藏(チベット)等の諸國語、並びに支那內地の蠻族なる苗(ミヤウ)族等の使用する言語を包含す。各語詞は獨獨立に並置せられ、何等語形上の變化を取らざるによりて、孤立語の名あり、又その語詞の多くは、一シラブルより成れるによりて、單綴語とも呼ばる。

**しなこん** 四納言【名】一條天皇の頃、納言の官に在りて、文藝の道に達せし四人の者、即ち大納言藤原齊信(ヘヒノブ)・中納言藤原公任(キンタウ)・權中納言源俊賢・中納言藤原行成の併稱。十訓中にも、四納言と聞えしは、齊信公任・俊賢・行成なり」

**しな-さかる** 【枕】『とな』は山坂の意。さかるは遠ざかるの意にて、越の國は京より遠く隔たれるによりていふとぞ、ひなさかる(鄙遊る)を見よ』こし(越)にかけていふ。宮案「しなさかるこしに五年すみすみてたち別れまくをしきよひかも」

**しな-さだめ** 品定【名】品がらの善惡の評定。品評。品騭(ヒンシツ)。

**しなし** 賞【名】しきたり。習慣。

**しなし-たり** 爲做【名】しきたり【句】しなす(爲成すの終下を見よ。

**しな-しな** 【副】物のしなひ撓むさま。しなやか。したした。 鄰遊記未編生貴「咲きしなだれてしなしなと」

**しな-しな** 【名】[1]品品【名】[2]さまざまの品。いろいろ。〔源氏〕三尺のみづし一よろひに、しなじなしつらひすゑて」[3]しな。それぞれの差等あること。等級。 雙生兩川人界の果報は品品」[4]あれこれの事ども。いろいろ。 心中及は氷の剛目「座敷に出でてしなじなささやき」

**しな-じなし** 品品し【形二】ひんよし。上品なり。〔古語〕宇治けだかくしなじなしう、をかしげなること、田舍人の子といふべからず」

**しな-じん** 支那人【名】支那の國民。主要の地位を占むるものは漢人と滿人とにして、殊に文化の中堅は漢人なり。

**しな-じやかう** 支那麝香【名】支那に棲める麝より採取せし麝香。良品を以て聞ゆ。

**しな-しやら** 【動四他】【しなしやらを見よ』態とめめきてしなやかに振舞ふさま。氣取りてなまめかしう振舞ふ狀。

**しな-しゆ** 支那酒【名】支那にて釀造する酒。最も普通なるは紹興酒と燒酒(シヤウチウ)とにして、その他は概ね混成酒なり。

**しな-しらべ** 品調【名】現在する商品の數量の調査。たなおろし。

**しなす** 【動四自】身體をしなやかに動かす。いやみなる姿に振舞ふ。品を爲(ス)る。

**しなす** 【動四他】ねさす。臥さす。〔古語〕 編中抄「みちのくのとふのすがごも七ふには君をしなして三ふにわれねん」

**しな-す** 爲做【動四他】なす。つくりなす。 源氏「池の心ひろくしなして、めでたくつくりののしる」

**爲做したり** 【句】失敗したり。しまったり。 狂言(金藤太子)「油斷して、打ちこかされた。さても、しなしたり。しなしたり」 太田蜀「やあこは母人かし、しなしたり、殘念極と感歎したりとて、すすべ數す」

**しなすがひ** 死なす甲斐【名】『死なぬがまだしも仕合せがひありとの義』甚しき不運。 曾根崎心中「理窟につまって、畢句には、しなすがひな目にあうて」

**しなすけ** しな助【名】『しなのもの(信濃者)を人名めかしていへる語』しなのもの(信濃者)に同じ。 機樞「しな助やおはちの底をならしやるな」

**しなせ-ことば** しな せ言葉【名】昔、藝人又は花柳社會に用ひられし言葉。粹なる言葉。 東海道名所記「祠堂の丁銀は、しなせことばの參らせものになす」

**しなせ-ぶり** しな せ振【名】なまめきて銘ぶる狀。嬌態。 東海道名所記「或はかこちて、口說をしかけ、又はしなせぶりの情を語りなど」

**しなぜめ** 品攻【名】〔商〕取引の目的物の少なきに乘じて、多額の買物を出し、相場の暴騰を待つて利益を得んと計ること。〔取引所の語〕

**じ-なぞ** 字謎【名】文字を離合して作りたる謎。折字の類。例へば、爲其人也君子」といひて「僞君子」と解する類。

**しな-たつ** 坂立つ【動四自】地勢起伏す。〔古語〕 萬葉「しなたつつくまさぬかたおきながのをちの小菅」 しなたつは原歌「郎枕詞としたり)

**しな-だま** 品玉【名】[1]玉を空中に投上げては、手に受けとめて弄ぶ技。弄丸。[2]てじな。てづま。

品玉も種(ネタ)から【句】材料あればこそ品玉遣も爲し得なれ、もとよりなるべき材料なくば、手の下しやうなし。〔諺語〕

**しな-だま** 支那卵【名】支那より輸入せる鷄卵。

**しなだまづかひ** 品玉遣【名】[1]品玉の技、又これを演ずる人。たまとり。[2]てじなつかひ。てづまし。

**しな-たゆふ** 【枕】しなは坂、たゆふは平らかならぬことにして、近江國ささなみは、大和國より行けば、坂路を經るより、ささなみ



念至極とばかりにて」

**しなすがひ** 死なす甲斐【名】『死なぬがまだしも仕合せがひありとの義』甚しき不運。 曾根崎心中「理窟につまって、畢句には、しなすがひな目にあうて」

**しなすけ** しな助【名】『しなのもの(信濃者)を人名めかしていへる語』しなのもの(信濃者)に同じ。 機樞「しな助やおはちの底をならしやるな」

**しなせ-ことば** しな せ言葉【名】昔、藝人又は花柳社會に用ひられし言葉。粹なる言葉。 東海道名所記「祠堂の丁銀は、しなせことばの參らせものになす」

**しなせ-ぶり** しな せ振【名】なまめきて銘ぶる狀。嬌態。 東海道名所記「或はかこちて、口說をしかけ、又はしなせぶりの情を語りなど」

**しなぜめ** 品攻【名】〔商〕取引の目的物の少なきに乘じて、多額の買物を出し、相場の暴騰を待つて利益を得んと計ること。〔取引所の語〕

**じ-なぞ** 字謎【名】文字を離合して作りたる謎。折字の類。例へば、爲其人也君子」といひて「僞君子」と解する類。

**しな-たつ** 坂立つ【動四自】地勢起伏す。〔古語〕 萬葉「しなたつつくまさぬかたおきながのをちの小菅」 しなたつは原歌「郎枕詞としたり)

**しな-だま** 品玉【名】[1]玉を空中に投上げては、手に受けとめて弄ぶ技。弄丸。[2]てじな。てづま。

品玉も種(ネタ)から【句】材料あればこそ品玉遣も爲し得なれ、もとよりなるべき材料なくば、手の下しやうなし。〔諺語〕

**しな-だま** 支那卵【名】支那より輸入せる鷄卵。

**しなだまづかひ** 品玉遣【名】[1]品玉の技、又これを演ずる人。たまとり。[2]てじなつかひ。てづまし。

**しな-たゆふ** 【枕】しなは坂、たゆふは平らかならぬことにして、近江國ささなみは、大和國より行けば、坂路を經るより、ささなみ



にかけていふ。 馬「しなたゆふささなみぢをすくすくとわが行けば」

**しな-たり** 篠垂【名】しのだれ(篠垂)に同じ。

**しなたり-くぼ** 篠垂【名】しのだれ(篠垂)に同じ。

**しなたんもん**(陰門)に同じ。〔古語〕 雲笛記「闘、シナタリクボ」

**しな-だる** 撓垂る【動下二自】[1]しなひ垂る。 鄰遊記未編生貴「咲きしなだれて」[2]頭びて人に寄りそふ。あまへて人に凭(ヨ)る。 生玉心中「こなたも憎からぬさがないと、しなだれ寄って、手を把れば」

**しな-だれ** 撓垂【名】[1]しなひ垂ること、又その物。[2]ささり(草摺)[1]に同じ。[3]しのだれ(篠垂)に同じ。

**しなだれ-かかる** 撓垂懸る【動四自】あまへて人に凭(ヨ)りかかる。

**しなだれ-をとこ** 撓垂男【名】しなだれかかる男。あまへ男。 淺茅田夕連慈「立田の藤と云ふしなだれ男」

**しな-づけ** 品附【名】しながき品書」に同じ。

**しな-つな** 科綱【名】しなの木の皮の纖維にて作れる綱。松前地方より產す。しなのかはむき。

**しなつひこ-の-かみ** 志那津比古神・級長津彦神【名】伊弉諾(イザナギ)神の御子。志那津姫神と共に、風を掌る。一名、しなとべの神。

**しなつひめ-の-かみ** 志那津姫神【名】伊弉諾(イザナギ)神の女。前條參照。

**しな-てる** 坂立る【枕】[1]坂の立てる意にて、坂は斜に傾けるものなるより、かた(片)にかけていふ。一說に、しなひ撓みて片より立てる意とも、又しなやかに屈伸する屑の意ともいふ。しなたつ(坂立つ)參照。 紀「しなてる片岡山に飯(ヨ)に飢(ヱ)てこやせるそのたびとあはれ」[2]しなたつ(坂立つ)を見よ。

**しなてる-や** 坂立るや【枕】[1]前條に同じ。 拾遺「しなてるや片岡山に飯(ヨ)に飢(ヱ)て臥せる旅人あはれ親なし」[2]しなたつの條に引ける萬葉集の歌なる、つくま(筑摩)もおきながら(息長)も近江國の地名なるよ







り、「篠用せるならんといふ』近江國琵琶湖の別名なる、にほのみづうみ(鳰湖)にかけていふ。 源氏「しなてるやにほの湖漕ぐ船のまほならねどもあひ見しものを」

**しなとの-かぜ** 級長戶風・科戶風【名】『級長津彦(シナツヒコ)神は風を掌るといふによりていふ』かぜ(風)[1]に同じ。〔古語〕 源氏「その身の罪は、皆しなとの風にたぐへてき」

**しなとべ-の-かみ** 志那斗辨神・級長戶邊神【名】しなつひこのかみ(志那津比古神)に同じ。

**しなぬの** 志奈布【名】科木(シナキ)の內皮の纖維にて織りたる布。布目甚だ粗く、色は赤黑くして、水鬼に堪ふ。まだぬの。しなぬの。さまみ(貧布)參照。

**しなの** 信濃【名】[1](地)東山道の一國。東土の中央高原を占む。四方、海に面せず、長野・松本の二市及び南佐久・北佐久・小縣(ヲガタ)・諏訪・上伊那・下伊那・東筑摩・西筑摩・南安曇(ヤスミ)・北安曇・更級(サラシナ)・埴科(ハニシナ)・上高井・下高井・上水內(ミクニ)・下水內の十六郡に分たれ、全部長野縣の管轄に屬す。信州。[2]しなのもの(信濃者)の略。〔江戶時代の語〕 機樞、安すものの米うし

**しなのいも** 信濃芋【名】〔植〕じやがたらいも(馬鈴薯)に同じ。

**しなのうめ** 信濃梅【名】〔植〕うめ(小梅)に同じ。 川中島合戰「信濃梅の梅干」

**しなの-おとぎり** 信濃弟切【名】〔植〕みやまおとぎりさう(深濃弟切草)に同じ。

**しなの-がき** 信濃柿・君遷子【名】〔植〕柿樹科に屬する落葉喬木。高さ二三丈に至る。葉は長楕圓形にて互生し、秋になれば、紅葉せずに落葉す。花は淡黃色、果は扁六七分の漿果にて圓く、熟すれば黃色となり、食ふべし。小淡柿。さるがき。まめがき。ひながき。こがき。

**しなの-がは** 信濃川【名】〔地〕信濃國にある川。千曲(チクマ)川と犀川との合流。越後國に出て、新潟港に注ぐ。水程約九十四里。

**しな-の-き** 科木・級木【名】〔植〕田麻(ヘグリ)

**しなの-ぐま** 信濃熊【名】〔動〕信濃國より產する熊。

**しなの-げんじ** 信濃源氏【名】清和源氏より出でて、信濃に居りし氏族。源經基の孫甲斐守滿國の二門、及び源義光の遠裔小笠原氏など、その主なるものなり。

**しなの-こう** 信濃公【名】〔人〕『藤後に信濃公に封ぜられしよりいふ』ふぢはらただひら(藤原忠平)の異稱。

**しなの-ごま** 信濃駒【名】信濃國より產する馬匹。

**しなの-さか** 信濃坂【名】〔地〕比叡山の惡眼(ヲガミ)堂のうしろの坂路。 機樞、叡山の謀坂は信濃坂を下り」

**しなの-ささぎ** 信濃豆豆【名】〔植〕いんげんまめ(陰元豆)に同じ。

**しなの-ささげ** 信濃豆豆【名】〔植〕前條に同じ。

**しなの-じ** 紋所の一。開きたる扇、卽ち末廣がりの形に擬したるもの。

(ろまのじのなし)

**しなの-そ** 信濃苧【名】〔植〕つなそ(黃麻)に同じ。

**しなの-たらう** 信濃太郎【名】[1]夏の雲を云ふ。『近江國越前國の方言』[2](動)けむし(毛蟲)を云ふ。『武藏國の方言』

**しなの-わ** 信濃路【名】信濃國の道路。 曲木蕉「信濃路遠き旅衣、日も遙遙の心かな」

**しなの-つむぎ** 信濃紬【名】信濃國より產する紬。 生玉心中「信濃紬の絲よりも、心が細く、氣も弱く」

**しなの-ぞくさ** 信濃木賊【名】信濃國より產する木賊。 狂言「天鼠が」

**しなの-やま** 信濃山【名】信濃國の山。一茅・寒さにも慣れてあるくや信濃山」

**しなの-を** 信濃苧【名】〔植〕[1]いちび(商麻)に同じ。[2]つなそ(黃麻)に同じ。

**しなはく** 支那白【名】『英 Chinese white』

**あえんくわ**(亞鉛華)に同じ。

**しなばこ** 品箱【名】釣道具を仕舞ひおく箱。「箱。

**しなばす** 支那蓮【名】〔植〕蓮の一變種。根莖太く、節間短きもの。

**しなばち** 支那鉢【名】支那燒の植木鉢。

**しなび** 撓【名】[1]しなふこと、又その狀。し



けて磨いたにより、すべすべ數す」

**しなのなし** 信濃梨子【名】〔植〕梨の一種。信濃柿の類にて、實の小さきもの、なるべし。 參照「むすび袋に、しなのなし、ほしなつめなど入れて」

**しなのなてしこ** 信濃撫子【名】〔植〕ふちなてしこ、藤撫子)に同じ。

**しなの-ぬの** 信濃布【名】〔信濃國より產するよりいふ』しなぬの(志奈布)に同じ。

**しなの-の-みや** 信濃宮【名】〔人〕『久しく信濃國に在りて、附近の官軍を統督せられしによりていふ』むねながしんわう(宗良親王)に同じ。

**しなの-はこいだ** 信濃羽子板【名】むかし信濃國より出だしし羽子板。夫婦の妻を盡けり。

**しなの-ふじ** 信濃富士【名】〔地〕くろひめやま(黑姬山)の異稱。

**しなの-まめ** 信濃豆【名】〔植〕いんげんまめ(陰元豆)に同じ。

**しなの-めし** 信濃飯【名】だいこんめし(大根飯)に同じ。

**しなの-もの** 信濃者【名】信濃國に生れたる者。同國は雪國なるより、冬季、江戶に出でて、唐臼を踏み、又は米穀商の下男に雇はれ、又は暦炭(ヘヒ)など賣りあるきたり。一般に大食なるものとせらる。しな助。おしな。 機樞、胖胃處さと藪醫見立てる信濃者」 同「信濃者江戶と國とは雪と雷」

**しなばち** 品野陶【名】尾張國春日井(ヘヒ)郡品野村より產する燒物。

**しなの-やま** 信濃山【名】信濃國の山。一茅・寒さにも慣れてあるくや信濃山」

**しなの-を** 信濃苧【名】〔植〕[1]いちび(商麻)に同じ。[2]つなそ(黃麻)に同じ。

**しなはく** 支那白【名】『英 Chinese white』

**あえんくわ**(亞鉛華)に同じ。

**しなばこ** 品箱【名】釣道具を仕舞ひおく箱。「箱。

**しなばす** 支那蓮【名】〔植〕蓮の一變種。根莖太く、節間短きもの。

**しなばち** 支那鉢【名】支那燒の植木鉢。

**しなび** 撓【名】[1]しなふこと、又その狀。し

なへ。 其藍の花のしなひ長く、色よく咲きたる」[2]武具の指物(ヲガミ)の一。輪の形のもの。

**しなび** 竹刀【名】『しなひ撓むよりいふか』劍術を稽古する時、刀に代用するもの。割竹を四箇合はせ束ねて造る。しなひだけ。ちくたう。

**じなび** 裝【名】〔動〕鵜(ウ)類の總稱。

**じなひ** 【名】しなぶること。

**しなひ-うち** 竹刀打【名】[1]竹刀にて擊ちあふこと。[2]手掌(ヲ)を反(ヘ)して、相手の手などを打つこと。 小町舞「風の手のしなひうちする柳かな」

**しなひ-さかゆ** 撓榮ゆ【動下二自】枝もたわわに茂る。〔古語〕 萬葉「春山のしなひ盛えて」

**しなひ-だけ** 竹刀【名】[1]竹刀を造るに用ふる竹。[2]しなひ(竹刀)に同じ。

**しなひ-づる** 撓弦【名】新調の弓にしなひを作るために、懸くる弦。

**しなひ-づる** 竹刀弦【名】刀背に擬して、竹刀に附くる弦。

**しなひ-ぶくろ** 竹刀袋【名】竹刀を入るる「袋。

**しなふ** 撓ふ【動四自】[1]しなしなと撓む。撓まむる。しなゆ。 玉「秋垂穗八握莫莫然(ヘヒ)」[2]逆はず隨ふ。 平家曲(ヲ)に逆いて押落さるな。水にしなうて渡せや渡せと」

**しなふ** 裝ふ【動上二自】生氣發ふ。薬醫す。

**しなふ** 匿ふ【動下二他】かくす。つつむ。しなむ。〔古語〕 字鏡「國、取り物而藏、志奈夫」

**しな-ふく** 支那服【名】支那人固有の衣

**しな-ふくろ** 志奈袋・科袋【名】志奈布にて作り、米穀などを入るるに用ふる袋。

**しな-ふん** 支那文【名】かんぶん(漢文)に同じ。

**しな-ふれ** 品觸【名】警察官が、盜品又は紛失品などの發見を容易ならしめんがために、その品目及びその特異の點を記して、古物商質屋などに觸るること。 西鶴「は

**しなへ** 撓【名】[1]しなふ(1)に同じ。

**しなばち** 支那鉢【名】[2]しなふこと、又その狀。し

へよく彫へおくや藤の花」 ■刀身に、横に一文字に、又は半月形に現はれたる紋。

**しなへづる** 撓弦【名】しなづる(撓弦)に同じ。

**しなほし** 篤直【名】しなほすこと。

**じなほし** 字直【名】數人相集まり、先づ一人或字を書きて、次の人に渡せば、その人この字に加筆し、かくして順次に檢閲を造り出す遊戯。筆數最も少なくして、最もよき圖柄となりたるを優れりとす。幸手(さって)より出でしものならんといふ。

**しなほす** 篤直す【動四他】改めてなす。再び作る。やりかへす。菅原「ざふしきどころまんどころなど定めて、所所など、しなほさせはべる」 「の方」

**じなみ**【名】丞だ(綾多)を云ふ。(越後國長岡)

**しなむ** 匿む【動下二他】しなん(匿ぶ)に同じ。〔古語〕起「匿」抱中(ひとのもとに)而自佩レ之」

**しなん** 指南【名】■しなんしゃ(指南車)の義をしへ導くこと。方向を示して導く。意にていふ。自鏡業に和歌の指南を請ひ」

**しなん** 至難【名】至極かたきこと。

**しなん** 四難【名】〔佛〕『法華文句記の五に出づ』人間の四つの難事、即ち諸佛の出世に値ひ難く、人身を感受して、この世に生れ出づるは得難く、平穏の治世には逢ひ難く、大善の功德は修し難きことの併稱。

**しなん** 四男【名】■四人のむすこ。■四番目のむすこ。

**じなん** 次男・二男【名】二番目のむすこ。二郎。次郎。

**しなんきょく** 指南極【名】〔理〕磁石の針の南に向ふ端。

**しなんさよう** 指南作用【名】〔哲〕『英Suggestion』肉體が、その圏繞界に對して、順正の位觀及び空間的の關係を保つこと。自己の圏繞界、及び自己に關係する個人的、及び社會的の事情を認むることを得る順正の能力。指南力。

**しなんし** 指南使【名】指南のために遣されたる使者。夫木「東漸のみのりの舟の指南使は西の方よりきたるなりけり」

**しなん-しん** 指南針【名】らしん(羅針)に同じ。

**しなん-しゃ** 指南車・司南車【名】『古今註に「大駕指南車起ゲ黄帝與二蚩尤一戰ヲ涿鹿之野ニ蚩尤作二大霧一兵士惑迷一、於レ是作二指南車一以示二四方一、遂擒二蚩尤一、舊說周公所レ作也、趙裳氏重譯來貢二白雉一、使者迷ヲ失路ヲ、周公錫以二輔車五乘一、背爲ニ指南之制一、趙裳氏載レ之以南、幷年而至、其國二とあり』支那にて、車上に木偶を据ゑ、車の回轉にかかはらず、人形の手は常に南を指すやうにし、遠行者をして、道に迷はざらしめんがために造りし車。周公の創製に係るといふ。磁石を應用せしものなるべし。今も支那官員の馬車には、磁石を備へ附けたるものあり。 蕉雨「指南車を胡地に引去る霞かな」

(やしんなし)

**しなん-ばん** 指南所【名】物事を指南する所。

**しなん-ばん** 指南番【名】昔、大名に仕へて、武藝の指南をなしし者。指南役。

**しなん-やく** 指南役【名】■前條に同じ。■事物の差圖案内をする役。

**しなん-りょく** 指南力【名】〔哲〕「目(ぢ)」に同じ。

**しな-め** 品目【名】物品の名目。いろめ。品。

**しな-めく** 品めく【動四自】品よく見ゆ。上品に見ゆ。〔古語〕甚「言葉しなめきなどいへば」

**しな-もじ** 支那文字【名】かんじ(漢字)に同じ。

**しな-もじ** 品文字【名】ひんじ(品字)に「品」。

**しな-もの** 品物【名】しなもの。物貨。物品。

**しなもの-ひきかへしょう** 品物引換證【名】くぶつひきかへしょう(貨物引換證)に同じ。

**しなものひきかへ-ばらひ** 品物引換拂【名】くぶつひきかへばらひ(貨物引換拂)に同じ。(正金引換證)に對して

**しな-もんじ** 支那文字【名】しなもじ(支那文字)に同じ。

**しなやか** 【數】■しなしな。柔か。たわやか。たをやか。■やさしく見ゆるさま。飯氏「いと清げにしなやかなる蛍の」

**しなやき** 支那燒【名】支那製の陶磁器の總稱。

**しなゆ** 撓ゆ【動下二自】しなしなとなる。しなふ。蕉雨「君に戀ひしなえうらぶれわがをれば秋風吹きて月かたぶきぬ」

**しなよし** 品好【名】品位のよきこと。上品。横古事談「公季ときこゆるは、…ゆゑしきしなよしなり」

**しならひ** 篤習【名】しならふこと。

**しならふ** 支那蠟【名】いはぜろう(櫨取蠟)に同じ。

**しならふ** 篤習ふ【動四他】しばしば行ふ。飯氏「よろづ有近ぞそらごとしならひける」

**じなり** 字態【名】文字の形。文字の姿又は意のまま。賀古鈔信七夢遊(じなり)と書きたる字態をば高燈籠に表はして無明の闇を照すべく」

**しなる** 篤慣る【動下二自】業に慣れて、よくなる。熟練す。

**しなれうり** 支那料理【名】支那固有の料理。その調理法は、世界第一と稱せらる。

**しな-わけ** 品別【名】品のわかち。類別。

**しに** 死【名】死ぬること。蕉雨「しにも生きも同じ心と結びてし友はたがはじ我れもよりなん」 古今「ひしきに命をかふるものならばしには易くぞあるべかりける」 日本武尊吾妻鏡「人に變った死にをする御身の果のいたはしや」

**死、一倍**【句】親死なば、一倍にして返金せんの約束にて、富家の子弟の借金すること。〔諺語〕本朝二十不孝「死に一倍の借金、千兩才覺させるに」

**しに** 死【接頭】冨る意。いき。いけ。「しに寄生」「しに女郎(ぢょろ)」

**じ-に** 耳賦【名】耳の外廻道にある脂肪腺より排泄せらるる脂垢。

**しに-あと** 死後【名】いにあと(去後)を見よ。

**しに-いき** 死生【名】■死ぬると生くると。死生。生死。■生死に關するほどのこと。死ぬること。心中及ばぬ末の舞旦「死に生きも用來かねまいと思へば、胸も塞がって」

**しに-いき** 死息【名】殆ど死なんとするほどの息。たえだえなる呼吸。

**しに-いくさ** 死軍【名】決死の軍。死を決したる戰爭。謙田氏傳名所蓑「爲義が死にいくさ、いつもの見せんと」

**しに-いし** 死石【名】「しぬ(死ぬ)■」を見よ。闘茶にて、打ちたる効力の無き石、又は敵に殺されたる石。

**しに-いでたち** 死出立【名】しにしゃうぞく(死裝束)に同じ。太平記「髮れての死出立に、皆曼陀羅を書いてお附けたりける」

**しに-いる** 死入る【動四自】■いる(入る)は接尾語。しぬ(死ぬ)を强めていふ語。飯氏「しにいるたまの、やがてこの御からにとまらなん」

**しに-うま** 死馬【名】死にたる馬。死馬(ぢ)。(いき馬に對して)

死馬が屁を放(こ)る【句】到底見込なしと思はれし物事の、意外に回復せし譬。〔諺語〕

死馬に針を刺す【句】『針を刺すは、鍼治を施す義』いかに手だてを用ひても、到底無効なる譬。〔諺語〕

**しに-うを** 死魚【名】死にたる魚。死魚(ぢょ)。(生魚に對して)

**しに-おいぼれ** 死老耄【名】老いぼれて、殆ど死ぬばかりなること。しにぞこなひ。(老人を罵る時にいふ)

**しに-おくる** 死後る【動下二自】■死ぬべき時に後る。■しにのこる(死殘る)に同じ。

**しに-おくれ** 死後【名】死におくること。又その人。

**しに-かかる** 死懸る【動四自】死に近づく。

**しに-かくご** 死覺悟【名】死ぬる覺悟。天の網島「名殘の文の言ひかはし毎夜毎夜の死覺悟」 「問」死學。

**しに-がくもん** 死學問【名】活用せざる學

**しに-かけ** 死掛【名】死なんとすること。瀕死。垂死。

**しに-かさなる** 死重なる【動四自】死體、重なり合ふ。保元「獅子(ぢ)が上に死に重なって戰ふとぞ聞く」

**しに-がて** 死粮【名】死に臨みて食ふ粮。盛衰記「これや、この下蔭のいふなる死粮とは」

**しに-がね** 死金【名】■死ぬる時の費用のために貯ふる金。■貯蓄するのみにて、利用せぬ金。■使用せしだけの効力なき金。

**しに-かは** 死皮【名】■死にたる動物の皮。■死者の著たる衣類。死人の遺物。即ちその衣服・携帶品など。

**しに-かばね** 死屍【名】しかばね(屍)に同じ。〔古語〕葉黄記「屍銭。シニカバネ」

**しに-かはる** 死變る【動四自】■死にて、形變る。■死にて、再び生れかはる。「生きかはり、死にかはる」

**しに-かへる** 死返る【動四自】■甚度も死ぬ。蕉雨「思ふにし死にするものにあらませば千度ぞわれはしにかへらまし」 蕉雨「帰・あさがほいく死にかへる法(ぢ)の松」 ■『かへる(返る)は接尾語』死なんとするほどに堪へがたくなる。「死ぬばかり」、「死ぬべく」を參照。〔古語〕雷耳「ましてほの聞く若き人は、しにかへり笑ぶ」

**しに-がほ** 死顔【名】死にたる顔。死人の顔色。(死顔(ぢ)に對して) 手習鑑「生顔と死顔は相好のかはるもの」

**しに-がみ** 死神【名】人を死に誘ふといふ、想像の神。 天の網島「死ね死ねとくる死神の」

**しに-きは** 死際【名】死なんとするきは。今はのとき。さいご。しにめ。命の際。臨終。

**しに-きらひ** 死嫌【名】死ぬることを嫌ふ。盤餐「老骨に死嫌あり涅槃像」

**し-にくし** 篤惡し【形一】篤すにむづかし。太平記「敵の大將と見知らぬ程こそ葉武者かりし」

**しに-くじ** 死國【名】多くの國の中にて、死に當るべき國。

**しに-くち** 死口【名】巫女(ぢ)の神おろしに



よりて、死人の神がかること。死靈の口寄(ぢ)をなすこと。(生口(ぢ)に對して)

**しに-こ** 棲殭蠶(ぢ)の紅(ぢ)「まゆ」御用の事ありとは、生口か死口かといへば、いやさればよと」 太平記「これこそ敵の運の盡の死狂よとて」

**しに-ぐるひ** 死狂【名】しにものぐるひ(死物狂)に同じ。

**しに-ごしらへ** 死拵【名】しにじたく(死支度)に同じ。 天の網島「首しめくくる罠むすび、われと、わが身のしにごしらへ、見るに、目もくれ、心もくれ」

**しに-ごふ** 死業【名】〔佛〕過去の業報(ぢ)によりて死ぬること。 太平記「この人、死業や來らざりけん」

**しに-ごもり** 死籠【名】蠶兒の繭の中にて死にて、蛹(ぢ)に化せざるもの。

**しに-さま** 死樣【名】死ぬるありさま。

**しに-しだい** 死次第【名】他人の死にしを、そのままに捨ておくこと。 天の網島「重惡人のこの治兵衛、死次第とも捨ておかれず、跡が跡まで御尻介」

**しに-じたく** 死支度【名】死ぬる支度。しにごしらへ。しにまうけ。しにようい。

**しに-じに** 死死【副】死ぬべきほどに、生氣なきさま。

**しに-しやうぞく** 死裝束【名】死ぬる時のいでたち。しにいでたち。しにじたち。 許六「一竿は死裝束や土用ぼし」

**しに-す** 死す【動佐變自】しぬ(死ぬ)に同じ。〔古語〕 供奉「誠に、物おもひにしにするものとは」

**しに-すがた** 死姿【名】死ぬる時の姿。今宮心中「ゆきたけ揃ひし死姿、刃に伏すは古手にて」

**し-にせ** 老舗・老鋪【名】『しにせる(篤似せる)の假體言』先祖代代に傳來せる家業又は店。古き店。 天の網島「所がらなり、しにせなり」

**しに-せに** 死錢【名】しにがね(死金)に同じ。

**し-にせる** 老舗・老鋪る【動下二他】賣りこみて老舗となる。今宮心中「店一軒の主になり、商ひもしにせて」

**しに-そこなひ** 死損【名】■死にそこなふ念の上の死恥ぞや」

**しに-はつ** 死果つ【動下二自】■死に終はる。全く死ぬ。 秋太「いと死果る心地せさせたまへば」 ■悉く死ぬ。したたゆ。

**しに-たゆ** 死絶ゆ【動下二自】一人も殘らず死ぬ。廢絶す。しにはつ。

**しに-ちくしやう** 死畜生【名】いきちくしやう(生畜生)に同じ。今宮心中「生畜生の死畜生と」

**しに-つく-は** シニック派(英Cynics)【名】〔哲〕けんどうがくは(犬儒學派)に同じ。

**しに-づら** 死面【名】しにがほ(死顔)に同じ。今宮心中「親・兄弟に難義をかける、笠太い奴と、死顔をまぶられ」

**しに-てたち** 死出立【名】しにいでたち(死出立)の略。 貴族雜志中「初(ぢ)は、白無垢、死出立、黥路の闇を黑小袖」

**しに-てま** 死手間【名】死ぬるに就きての手數又は時間。 釋迦如來眞生實、ええ、死手間のいる罪人、火が燃ひたら、水飲ません」

**しに-とき** 死時【名】死ぬる時。死ぬべき時機。

**しに-とこ** 死處【名】次條に同じ。

**しに-ところ** 死處【名】しにば(死場)に同じ。

**しに-のこり** 死殘【名】死にのこること、又その人。生きのこり。

**しに-のこる** 死殘る【動四自】われのみ死なずに生きて居る。生きのこる。しにおくる。ながらふ。

**しに-ば** 死場【名】死ぬる場所。さいごところ。さいごば。しにどころ。しに場所。往生場。死處(ぢ)。 太平記「蓬(ぢ)くも見えたまへひつる死場かな」 丹波與生「しにばへ、馬も引くまいかん」

**しに-はだ** 死肌【名】死人の肌。

**しに-はだ-たち** 死膚斷【名】死裝を切裂くこと。〔生肌斷(ぢ)に對して〕 觀音「生膚斷・死膚斷」

**しに-はぢ** 死恥【名】死後に殘る恥。(生恥(ぢ)に對して) 東井島「女先立ち、男は跡に死にそこなひ、見苦しき沙汰に逢ふ、無念の上の死恥ぞや」

**しに-はつ** 死損ふ【動四自】死なんとして、死にかね。死ぬべき時に死ぬるを得ず。 蕉君「西行は死にそこなうて枯かな」

**しに-ぶと** 死人【名】しにん(死人)に同じ。〔古語〕起「亡者、シニビト」

**しに-びと-さばき** 死人捌【名】死人を取扱ふこと。 賀古鈔信七夢遊「ええ、なんぼうの亡者にも出あはふが、今から怖うてなるものか、ちと叔父坊主が死人さばきを見習へと」

**しに-ぶし** 死節【名】死ぬる時の節。

**しに-ぼくろ** 死黑子【名】木村の朽ちたる節。

**しに-まうけ** 死儲【名】人の死ぬ前に身體に出來るといふ黑子。 傳聞金鈔子「死黑子・物著黑子をうらやまん」

**しに-むじ** 死儲【名】しにじたく(死支度)に同じ。〔古語〕 墨莊「まだしにまうけをせよと、夢に見たまひければ」

**しに-み** 死身【名】■死ぬべき身體。何時心中及ばぬ末の舞旦「八年拜まぬ親の顔、見たうなうて何とせう。生身は死身もしひつつと」 ■死にたる氣になりて、力の續く限り働くこと。 蜻蛉日記「生身の舞、一期の浮沈とひっつくばい、死身になってぞ居たりける」

**しに-みづ** 死水【名】死にぎはに口に注ぎ入るる水。末期(ぢ)の水。

死水を取る【句】死水を遂く人の口に死生。生死。

注ぎ入る。臨終の世話をなす。〔組織覚魂者〕「死水を誰れにとられん淺ましと」

**しに-むしや** 死武者【名】決死の武者。〔雷俵小紫列草〕死武者の惡霊ら」

**し-にん** 死人【名】死にし人。しにびと。しびと。亡者。

死人に口無し【句】死後、その人の事をとかく批難すれども、死人は、これを辯解することを能はざるものなれば、是非を定めがたし。〔諺語〕「稱。

**し-にん** 至人【名】〔佛〕しやか〔釋迦〕の尊

**じ-にん** 神人【名】神社に奉仕する下級の役人。神人(ジン)。**いぬじにん**(犬神人)参照。

**じ-にん** 自認【名】自分一個にて、その物事を是認すること。

**じ-にん** 自任【名】Ⅰその事を、自分の任務となすこと。Ⅱ自ら自己の才能容貌を誇るに足ると思ひこむこと。うぬぼれ。

**じ-にん** 辭任【名】〔佛〕任務を辭すること。

**じ-にん** 慈忍【名】〔佛〕慈悲と忍辱(ジニク)と。

**し-に-め** 死目【名】しにぎは(死際)に同じ。〔心中萬年草〕昨日にも著くならば、死目にあはうもの」

**し-に-ぬらう** 死女郎【名】女を罵りていふ語。〔徳川時代の京都・大阪の語〕〔丹波與作〕「死女郎のふりはりめ」

**し-に-もの-ぐるひ** 死物狂【名】死ぬる覺悟にて狂ふが如く働くこと。しにぐるひ。〔吉野都女鑑〕宗徒の兵抜きつれ、抜きつれ、死物狂の拜み打ち」

**し-に-やう** 死樣【名】しにかた。しにざま。〔太平記〕武士たる人は、平生の振舞はよしやともかくもあれ。最後の死樣をこそ執することなるに」

**し-に-やまひ** 死病【名】命の助かりがたき病。しにやん。死病(ジビ)。〔紫式部日記〕現在親の死病、寂いて悲む子の心、可愛とも思うて下されぬ」〔心中万代記〕あの舞子もしひよっと、死病うけたりとも、母樣の懐しさに、臨終もしそこなひ」

**し-に-やみ** 死病【名】前條に同じ。

**し-に-よういん** 死用意【名】しにじたく(死支度)に同じ。〔義経記〕こちの用意は死用意」



**し-に-より** 死慾【名】死が近づきたるために、ますます慾深くなること。

**し-に-わかる** 死別する【動下二自】一方は死に、一方は生殘りてわかる。死別をなす。永訣す。(いき別るに對して)

**し-に-わかれ** 死別【名】しにわかること。(いき別に對して)

**しぬ** 篠・小竹【名】〔植〕しの(篠)に同じ。〔古語〕〔萬葉〕池のべの小榎が下のしぬなしぬばむ」

篠の目(ノ)【名】Ⅰ『めは群(ムレ)の義』篠の叢り生えたるもの。**しぬのめ**(篠目の)参照。

**しぬ** 死ぬ【動奈變自】『息(イキ)去(イ)ぬの略』Ⅰ息絶ゆ。命をはる。この世を去る。死す。殺す。Ⅱ活氣あらず。勢あらず。「この畫は、死んで居る」Ⅲ圍碁にて、石を圍まれて取られる。**とにし**(死石)参照。

死なばもろども【句】死ぬる時は共に死せん。

死にぬらう【句】死にぬらんの音便。

死にぬらうとぞいひける【句】死ぬほどに堪へがたし。**とにかへる**(死返る)Ⅱ参照。〔古語〕〔源氏〕死ぬばかりわりなきに」

**死ぬべく**【句】前條に同じ。〔古語〕〔源氏〕「かんの君はわれかの心地して、しぬべくおぼさる」

死ぬ者貧乏【句】活きてあらば、他と同樣の幸を受けんものを、死したるがために、その幸にありつき得ず。

死ぬる瀬【句】死ぬべき場合。〔心中萬年草〕「子を一人育つるに生る瀬か死ぬる瀬か七度あるとは惟い内」

死んでの長者より、生きての貧人【句】死して富者とならんよりは、貧しくとも、活きてあらん方好もし。〔諺語〕

死んでは、一文にもならぬ【句】死ぬといふはつまらなきことなり。〔諺語〕

死んで花實が咲くものか【句】死にては、萬事休す。いかなる場合にも死な



ざるに如かず。〔諺語〕

死んで花實が生(ナ)るものか【句】前條に同じ。〔諺語〕

**しぬ【鮫】しぬぬ**に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「夜くだちにねざめてをれば川瀬とめ心もしぬに鳴く千鳥かも」

**しぬき** 仕抜【名】芝居にて、多勢の捕手にて、一人を取巻きて、一同聚を掛けつつ、たてをすること。

**しぬく** 篤抜く【動四他】十分になす。しつくす。しとど。

**しぬぐ** 凌ぐ・凌ぐ【動四他】**しのぐ**(凌ぐ)に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「高山のすがの葉しぬぎ降る雪の消ぬとかいはも鰍のしげけく」

**しぬ-すすき** 篠薄【名】**しのすすき**(篠薄)に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「いもがりと我が通ひぢのしぬすすきわれ通はずばなびけしぬ原」

**しぬぬ【鮫】しのぬ**に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「朝霧にしぬぬにぬれてよぶこ鳥み ふねの山ゆなきわたるみゆ」

**しぬ-の-め** 篠の目【句】しぬ(篠)の條下を

**しぬのめの** 篠目の【枕】しぬといふ語の相同じきより、**しぬぶ**(忍ぶ)にかけていふ。〔萬葉〕あきがはうるや川べの小竹(シノ)のめのしぬびて寝(ネ)れば夢に見えけり」

**しぬばく【動他】しぬぶ**(忍ぶ)の延。〔古語〕〔萬葉〕年のはに來鳴くもの名ほととぎす聞けばしぬばくあはぬ日を多み」

**しぬばす** 忍ばす【動四自】**しぬぶ**(忍ぶ)の敬稱。〔古語〕〔萬葉〕「玉だすきかけてしぬばし」を見よ。

**しぬば-ゆ** 忍ばゆ【句】**しぬぶ**(忍ぶ)の條下

**しぬば-ら** 篠原【名】**しのはら**(篠原)に同じ。〔古語〕「妹がりと我が通ひちのしぬすすきわれし通はばなびけしぬ原」

**しぬび** 私奴婢【名】古、一私人に使役せられたる賤民。物品と同じく、交換・賣買せられたり。私賤。〔續日本紀〕「見官私奴婢、逃亡經二月以上、捉獲者、甘分賞一」

**しぬび【鮫】**Ⅰしぬぶこと。しのび。〔古語〕Ⅱしぬぶ材料。しぬびぐさ。〔古語〕〔萬葉〕「わがせこがしぬびにせよと」

**しぬび-ぐさ** 忍草【名】**しぬぶぐさ**(忍草)に同じ。

**しぬび-づま** 誄【名】**しのびごと**(誄)に同じ。

**しぬび-づま** 忍妻【名】**しのびづま**(忍妻)に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「ここだくも思ふ心をしぬぶ」とならぬしぬびづまかも」

**しぬぶ** 忍ぶ【動四他】**しのぶ**(忍ぶ)に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「まきの葉のしなふせの山しぬばずてわが越えゆけばこの葉知りけむ」

忍ばゆ【句】『ゆは助動詞る四の轉。ゆを見よ』おのづから忍ぶやうになる。〔古語〕〔萬葉〕「瓜はめば子ども思ほゆ栗食めばましてしぬばゆ」

**しぬぶ** 忍ぶ【動上二他】前條に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「人目多み目こそしぬぶれすくなくも心のうちにわがもはなくに」

**しぬぶ-ぐさ** 忍草【名】墓ひ思ふ材料。〔古語〕〔萬葉〕磯に生ふる菅の根取りてしぬぶぐさはらへてましを」

**しぬぶらふ** 忍らふ【動四他】**しぬぶ**(忍ぶ)に同じ。〔古語〕〔萬葉〕「さす竹の舎人男(トネリ)もしぬぶらひ返らひ見つつ」

**しぬ** 縗【名】**しぬぬ**(鮫)**しぬ**(篠)の略。

**しぬ** 稻【名】〔植〕**しぬ**(鮫)**しぬ**(篠)に同じ。(主に熟穀)として用ふ。〔古語〕〔萬葉〕「しぬ十握稻(ジネ)」

**しぬ-いと** 縗【名】布を織る時、緯條にしたる絲。はたしぬ・しぬ。〔萬葉〕「縗、殘絲餘也、志爾絲」

**しぬう** 之遠【名】**しぬう**(之遠)に同じ。

**しぬ-うら** 【名】鐵の一種。四目(ノ)の頭の鋼きもの。

**しぬ-くし** 【名】蕃目(ノ)の箭の異稱。

**しぬ-しし** 【鮫】Ⅰ**しなしな**に同じ。Ⅱ靈祕なる物を嗚む時の感じ。

**しぬん** 思念【名】おもふこと。心に常にかくること。

**じ-ぬん** 次年【名】次の年。翌年。

**じ-ぬん** 自然【名】**じせん**(自然)Ⅰ~Ⅲに同じ。

自然の法衣(ジ)【句】人力を假らずに、自然と出來たる法衣。〔義経記〕「常憲自然の法衣、身に纏へり」







**じねん** 慈念【名】〔人〕高僧。名は延昌。慈念はその諡(オクリナ)。加賀國の人。比叡山に登り、顯密の奥義を究め、補陀落(フダラク)寺に居る。朱雀・村上兩天皇の門師たり。年八十五。

**じ-ねん** 自然【副】**しぜん**(自然)に同じ。

**じ-ねん-かい** 自然界【名】**しぜんかい**(自然界)に同じ。

**し-ねんがう** 私年號【名】朝廷にて定めしものの外、私に設けたる年號。我が國の未だ年號なかりし時代に、渡唐せる僧が、彼の土に倣ひて、假作したるに始まるといふ。例へば繼體天皇の代の定和・欽明天皇の代の貴樂など、後世の僞作に係るもの、また中古以後、地方の勢力ある者の私稱に係るもの等あり。逸年號。異年號。

**じねんがう** 自然梗【名】灰篠に同じ。

**じねん-と** 自然杌【名】蕪菁又はすぎ竹等に結ぶ種實。飯に炊き、又は粉として食す。ささみどり。〔雷俵紫野草子〕「じねんごの藪吹く風ぞ暑かりし」

**じねん-こじ** 自然居士【名】Ⅰ【人】優婆塞(ウバソク)。和泉國日根(ヒネ)郡自然田村の人。姓法相を修め、後に禪に歸して、南禪寺の大明國師に師事し、後に京都東山の雲居(ウン)寺に住す。頭を剃らず、法衣を著せず、時に或は袈裟を纏ひて、高座に登り、或は鼓を撃ち、扇を取りて舞ひ、以て佛道に誘引せんがための方便としたり。Ⅱ謡曲の一。說法の場に、諷師(ウ)を上げに來れる女兒の「無情なる人賞に連れ行かれんとする」を、自然居士が、さまざまの恥を忍び、力を盡して、遂に助けかへすことを作る。

**じねん-こだう** 自然惟道【名】〔佛〕他の教を待たず、本覺の内藏に依りて、自然に開悟すること。

**じねん-じ** 自然慈【名】〔佛〕師に依らずして、自然に發する菩薩の惡悲心。

**じねん-じやう** 自然生【名】〔植〕**やまのいも**(薯蕷)に同じ。

**じねん-じよ** 自然薯【名】〔植〕前條の註。

**じねん-せい** 自然生【名】**じねんば**(自然生)に同じ。

**じねん-せき** 自然石【名】Ⅰ人工を加へぬ、天然のままなる石。Ⅱ天然に出來たる石(人造石に對して)

**じねん-ち** 自然智【名】〔佛〕師授によらず自然に備はれる智。功用を假らずして、自然に生ずる佛の一切種智。法身の妙智。本覺の智。〔太平記〕「その法忽に成就して、自然智を得たまひて」「然嗣」に同じ。

**じねん-とう** 自然銅【名】〔鑛〕**しぜんどう**(自然銅)に同じ。

**じねん-に** 自然に【副】**しぜん**(自然に)に同じ。〔源氏〕「じねんに、心をさめらるるやうになん」

**じねん-ばえ** 自然生【名】草木の、播種せずに、自然にはえ出づること、又その草木。自生。じねんせい。

**じねん-りよく** 思念力【名】〔哲〕**がいねんさよう**(概念作用)に同じ。

**じねん-りや** 〔英Chiraria〕【名】〔植〕菊科に屬する二年生の草。高さ約一尺。葉は大形にして、やや三角形をなし、鋸齒あり。花は初夏、莖頂に頭狀花序をなして開き、その色、紫紅・黒紫・淡紅など種種あり。觀賞用として栽培せられ、園藝品種多し。

(やりらねし)

**しね-わる** 【名】心しねしねとして、わるきこと。根性わる。

**しの** 篠【名】〔植〕Ⅰ**しのだけ**(篠竹)の略。新古今「河やしろしのにをりは〈乾す衣いかにほせばか七日ひざらん」〔續丸〕「清貫は篠の小籔に走り入り」Ⅱ篠金物にて造りたる鎧。Ⅲ**しのふえ**(篠笛)の略。Ⅳ**しのま**奏(篠卷)の略。〔越後國の方言〕

篠突く雨【句】篠にて突く如き勢の雨。

**じ-の-おぼしめし** 宇の思召【句】じ(宇)の

**しの-おりべ** 志野織部【名】〔織部焼の一種〕志野焼の半面に、綠色の釉藥(ユウヤク)によりていふ。〔織部焼の半面に、綠色の釉藥(ユウヤク)を施したるもの。

**しの-がき** 篠垣【名】篠竹にて作りたる垣。



篠の網戸【句】篠竹を編みて作りたる戸。〔山里のしの網戸の隙をあらみ明けてぞ見つる朝顔の花〕

篠の衣【句】篠竹の間に身を置くこと。〔夫木〕草枕しの衣の夕しぐれいかなる色をわきて染むらん」

篠の小笹(ササ)【句】しの(篠)に同じ。〔新古今〕「ふしわびぬ篠の小笹の假枕はかなの露や一夜ばかりに」

**しの-すすき** 篠薄(ススキ)に同じ。〔金葉〕今はしも穂にいでぬらん東路の岩田の小野の篠の小薄」

篠の小吹雪(ユキ)【句】篠を亂して、雪交りに風の烈しく吹くこと。また篠を吹きなびかす風ともいふ。**をぶき**参照。〔古語〕〔信長記〕「あふみぢのしのの小篠をぶきはやひかずこもりましやせぬらんしのをぶきやさきんだちや」

篠を束(タバ)ぬ【句】大雨の形容。夾篠參照。「篠を束ねて降る雨」

篠を突く【句】雨の勢烈しく降る狀に譬へていふ語。

篠を亂す【句】篠をつく雨に、風の交り降るる狀に譬へていふ語。

**しの-いり** 篠入【名】芝居にて、囃子(ハヤシ)の三味線に、篠笛の音を交へたるもの。

篠入の合方(ガタ)【句】篠入の鳴物を用ふること。

**しの-ろくわい** 市農會【名】市の城内に耕地・牧場・原野などを所有する者、及び農業を營む者より組成する農會。

**しのう-けい** 司農卿【名】**くないきやう**(宮内卿)の唐名。〔拾芥抄〕宮内卿、司農卿

**し-のう-こう-しやう** 士農工商【句】**しみん**(四民)に同じ。〔心中天網島〕「無實にや、士農工商の品數數のその中」

**じ-のう-つはもの** 衷の物【句】じ(衷)の條下を見よ。

**じ-の-おぼしめし** 宇の思召【句】じ(宇)の「條下を見よ。

**しの-おりべ** 志野織部【名】〔織部焼の一種〕志野焼の半面に、綠色の釉藥(ユウヤク)によりていふ。〔織部焼の半面に、綠色の釉藥(ユウヤク)を施したるもの。

**しの-がき** 篠垣【名】篠竹にて作りたる垣。

**しの-がなもの** 篠金物【名】〔篠竹の立ちたる狀に似たればいふ〕鐵の細き板を並べて、金具とし、たるもの。〔義経記〕「大荒目に篠金物打ったる鎧」

**しの-ぎ** 鎬・凌【名】しのぐこと。

**しの-ぎ** 鎬【名】Ⅰ刀の身の、背(ス)と刃との間に隆起せる線。みね。〔保元〕「手先六寸、鎬を立てて、前一寸には、峰にも刃を不附けたりける」Ⅱ〔建〕「形、前記の鎬に似たるよりいふ」隅木(スミキ)などの脊峰(ハネ)。鎬を削る。【句】Ⅰ切合ふ時、互に鎬の部分の强く擦るるによりていふ。刀にて、烈しく戰ふ。〔太閤太子實博記〕「大勢に渡り合ひ、鎬を削り戰ひける」Ⅱ烈しく爭ふ。〔孕蕉集〕今にも源平軍となれば、兄弟鎬を削る中」

**しの-ぎ-さがり** 鎬下【名】刀劍の鎬の、穂先より遠かに下の方にあるもの。〔太平記〕「偏尚長刀のしのぎさがりに、菖蒲形なるを脇に挾み」

**しの-ぎ-づくり** 鎬作【名】刀劍に鎬を附くること、又その刀劍。

**しの-ぎ-づくり** 鎬造【名】刀身に鎬を有する。

**しの-ぎ-のみ** 鎬鑿【名】中央に鎬を附したる鑿。

**しの-ぎ-ば** 凌羽【名】遠き方へ飛ぶよき矢。一說に、古の一種の矢羽の名より出で、その羽にて矧(ハ)ぎたる矢なるべしと。〔古語〕〔萬葉〕「梓弓ゆばらふりおこしのぎばを二つたばさみ」

**しの-ぎ-ぼり** 鎬彫【名】中央に鎬を附して彫刻すること。

**しの-ぐ** 凌ぐ・凌ぐ【動四他】Ⅰ押分けて行く。しひて通るしぬぐ。〔千蔭〕いづもも八雲の底をしのぎ、鹽鳥大和の境に入りすぎたり」Ⅱたわましむ。しなはす。しぬぐ。古今「おく山のすがのねしのぎ降る雪の消(ケ)ぬとかいはん鰍のしげけく」Ⅲ上を犯す。あなどる。反抗す。〔宣薫〕「海歌・志乃久」Ⅳ辛抱して過ぐす。こらふ。〔宣薫〕「海歌・志乃久」の日、その日を凌ぐ。〔桃歌・猿蟹合戰〕芝向後色の道ふつりと存じ切り、恥をしのぎ御奉公仕らん」〔女殺油地獄〕「未だ肌寒き川風を酒に

きてそそりゆく」

**しのぶくり** 篠括【名】括袖(クヽクヽ)の、細かに縫ひたるもの。

**じのこ** 磁粉・地粉【名】土器又は瓦の破片より作れる粉末。漆に混ぜて、漆器の下地に用ふ。

**しのこし** 篤殘【名】しのこすこと。じのこしたること。

**しのこす** 篤殘す【動四他】なしつくされずして、餘りを生ず。やりあます。

**しのごて** 篠鏝手【名】一の鏝と二の鏝とに、篠金物(カナモノ)を取附けたる鏝手。

**しのごの** 四の五の【句】し(四)の條下を見よ。

**しのごの五の(てごの)** 篠崎三島【名】(人)大阪の儒者。名は應道、通稱は長兵衛、都州とも號す。伊豫國の人。初は商たりしが、四十歳の時、儒となり、宋學を唱ふ。詩書・天文・卜筮に通ず。寛化十年歿す。年七十七。

**しのざき・せうちく** 篠崎小竹【名】(人)大阪の儒者。三島の義子。名は弼、字は承弼、通稱は長左衛門、一に畏堂と號す。詩文を善くす。嘉永三年歿す。年七十一。

**しのざき・とうかい** 篠崎東海【名】(人)江戸の儒者。名は維章、字は子文、通稱は金吾。宏覽博識にして、著書頗る多し。元文五年歿す。年五十四。

**しのーざさ** 篠笹【名】(植)このだい(篠竹)に同じ。

**しのーじし** 女の髪の結ひ方の一。形しの字の如く見ゆるもの。

**しのーじま** 篠島【名】(地)尾張國知多郡に屬する島。師崎(モロサキ)の南、海上約一里にあり。全島を一村とす。周回一里半餘。延元三年義良(ノリヨシ)親王(後村上天皇)伊勢より東國に志したまふ時、颶風に遇ひて、漂著せられし處。

**しのーすがき** 篠簀搔【名】篠竹を綴り合はせたる簀子。たかすがき。曾國集、五月雨はしづのしのやのしのすがきふしどころまで水は來にけり」

**しのーすすき** 篠薄【名】(植)穂の無き薄。しぬすすき。源氏「穂にいでぬ物おもふらしのすすき招く袂の露しげくして」

**しのーすだれ** 篠簾【名】篠竹を編みて作りたる簾。夫木「だつれどまばらに編める篠すだれ忍ぶ人めも得こそかくれね」

**しのーすねあて** 篠脛當【名】しのだてすねあて(篠立脛當)に同じ。

**しのーせん** 使の宣【句】し(使)の條下を見よ。

**しのーぜん** 四膳【名】よのぜん(四膳)に同じ。

**しのーせんじ** 使の宣旨【句】し(使)の條下を見よ。

**しのーそうしん** 志野宗信【名】(人)志野流香道の祖。通稱は三郎右衛門。三條西實隆に從ひて、香道の蘊奥を究め、足利義政に仕ふ。大永二年歿す。年八十一。

**しのだ** 信太【名】(地)和泉國泉北郡の村。古は、その附近一帯を信太郷と呼び、有名なる信太森ありたり。今、村内大字中村にある同名の森は、卽ちその遺跡なるべしといふ。又、古歌に葛の葉を詠合せたるものの多きによりて思へば、當時は、葛の名所たりしなるべし。夫藝、和泉なる信太の森の樟(クス)の木の千枝に分れて物をこそ思へ」

**しのーたいふ** 史大夫【名】大夫の特に從五位下に敍せられたる者。大夫の使。

**しのーたう** 私黨【名】きさいたう(私市黨)を見よ。

**しのだ・おほはしりう** 篠田大橋流【名】せきぐちきんけい(關口金鷄)を見よ。

**しのだ・きんけい** 篠田金鷄【名】(人)せきぐちきんけい(關口金鷄)に同じ。

**しのーだけ** 篠竹【名】(植)細くして、叢生し、その葉の細かなる竹の總稱。しのざさ。しのの。しぬ。萬代「しの竹のふしはあまたに見ゆれどもよよに疎くもなりまさるかな」

**しのだ・すし** 信田鮨【名】『狐は油揚を好むといふによりて、信太森の狐の傳說を取りて名づけしなるべし』いなりずし(稻荷鮨)に同じ。

**しのだ・ていかう** 篠田定考【名】(人)江戸の書家。名は業、字は子浩、通稱は五郎藏。明浦と號す。大橋流より出でて、明浦流を創む。また畫をよくし、星岳と號す。安永九年歿す。

**しのたてすねあて** 篠立脛當【名】鎧の脛當の、表に細き鐵板を縱に並べ附けたるもの。しのすねあて。

**しのだ・のーもり** 信太森・篠田森【名】(地)しのだ(信太)を見よ。

**しのだ・まき** 信田卷【名】『しのだ』し(信田鮨)を見よ』油揚を半分に切り、その中に、芝蝦の茹(ユ)でて皮を剝きたるものを容れ、口を干瓢にて結へ、砂糖醬油・味淋にて煮古めたる食物。

**しのたまはく** 子曰【名】『四書などの中に、「子曰(クワツ)く」と書起したる文句の多きよりいふ』儒教の學問・淺學。「俚語」「すこしは、子のたまはくを習った御藤で」

**しのーだれ** 篠垂・鎬垂【名】兜の鉢の上に、八幡座より垂れたる筋板。古のは劍形、後世のは銀杏形(ギンナン)・蝋頭(ロウトウ)にして、銀又は白鑞(ハクロウ)にて飾れり。しなだれ。しなだり。「見よ。

**しのーちやう** 使の廳【句】し(使)の條下を見よ。

**しのづかいがーかみ** 篠塚伊賀守【名】(人)次條に同じ。

**しのづかーしげひろ** 篠塚重廣【名】(人)武將。伊賀守と稱す。武藏國の人。自ら畠山重忠六世の孫と稱す。新田義貞の四天王の一人、又その十六騎の一人。勝勇にして、功勞多し。終る所を知らず。「よ。

**じのーつき** 袞の坏【句】じ(袞)の條下を見よ。

**しのーづけ** 羅【名】ふじづけ(紫漬)に同じ。

**しのーつづみ** 四鼓【名】鼓の一種。中大鼓をいふといふ。

**しのーて** 眞手【名】『て(手)は筆蹟の義。しんしよ(眞書)を見よ』かいしよ(楷書)に同じ。金塵色紙に書きて、山吹に附けたるはしの手、春の詩」「見よ。

**じーのーなぞ** 字の謎【句】なぞ(謎)の條下を見よ。

**しのーに**【副】しをれんばかりに。しなひて。しなしなと。しののに。しぬのに。(古語)新古今「あふことは井野の里のさざのいほしのに露敍る夜は床かな」

**しのーに** 四二【名】ろく(六)に同じ。(遊廓の隱語)曾我兵庫頭信奈殿といふまいぞ、秩父の六郎重保と身が名も無用、四の二といへば合點」

**しのにむ** (英syrony)【名】(語)語形異なりて、意義の相同しき又は相似たる語。例へば、國語の家と家屋と・支那の見と視と看との類。類語。同義語。

**しーのーね** 羊蹄【名】(植)『羊蹄(ギシ)の根の義』ぎしぎし(羊蹄菜)に同じ。「に同じ。

**しのねーだいこん** 羊蹄大根【名】(植)前條

**しのの**【枕】濡れそぼつさま。しとど。しつとり。しぬぬ。(古語)散玉「誰れ聞かんこせのさ山の杉のうれに雨もしものにくきら鳴くなり」

**しーのーはぐさ** 篠葉草【名】(植)このの(篠)に同じ。(古語)新古今「散らすなよしのの はぐさのかりにても露かかるべき袖の上かは」

**しーのーめ** 東雲【名】『枕詞しののめの(東雲の)の轉用せられしもの』あかつき。あけがた。あけぼの。古今「東雲のわかれを惜しみわれぞまづ鳥よりさきに鳴きはじめつる」日本紀神武「未だ東雲の晴がりより引出す牛の犂や」『名香の一。ほひ涼やかにて薄し。

**しののめーくさ** 篠目草【名】(植)『しののめに開くよりいふ』あさがほ(朝顏)の異稱。

**しののめーの** 篠目の【枕】しののめ(篠目の)に同じ。新勅撰、朝がしはぬるや河邊のしののめのしのびてぬれば夢に見えつつ」

**しののめーの** 東雲の【枕】明くほがらほがら等にかけていふ。古今「しののめのほがらほがらとあけゆけばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき」後撰、東雲にあかでわかれし袂をぞ露やわけしと人やとがむる」

**しののめ** 篠井【名】(地)信濃國更級(サラシナ)郡塵崎(ヲサキ)村の大字。川中島の内に屬す。明治維新以前は盛んなる宿場なりしも、今は隣村布施村に篠井停車場設けられ、當時の面影なし。停車場は、信濃線と中央線との







連絡驛なり。

**しーのーはこ** 尿の箱【句】し(尿)の條下を見よ。

**しのはし** 忍ばし・偲ばし【形二】したはし。忘れがたし。源氏「そのあとをもしのばしく」

**しのばずーのーいけ** 不忍池【名】(地)東京市下谷區上野の岡と本郷臺との間にある池。東西約三町、南北約四町、周圍十二町餘。多くの蓮を植う。古は神田川・淺草川・荒川と相通じて、一面廣大なる沼澤なりきといふ。寛永元年僧天海池中に、一小島を築き、辯才天を安置す。上野の岡を比叡山に擬して、東叡山と呼びしに對し、琵琶湖の竹生(チクブ)島に擬せるなりといふ。

**しのばずーぶんこ** 不忍文庫【名】屋代弘賢の書庫。三字あり書。

**しのはちーでんだ** 篠八千代田鏡商

**しのーはら** 篠原【名】(植)いたちしだ(鏡商ぬはら。俚語集)わが衣は野原しのはら萩の花ずりやさきんだちや」

**しのはら** 篠原【名】(地)近江國野州(ヤス)郡の村。中仙道中の古驛、野州村の東北に接す。元暦二年平宗盛の斬られし處。栗太(クリタ)郡野路(ノジ)に接せり、「野路の篠原」と謳ひたる古歌多し。東關紀行「野路といふ處に至りぬ。篠原といふ所を見れば、西東へ遙かに長き堤あり」

**しのはらーくにもと** 篠原國幹【名】(人)武將。薩鹿兒島の藩士。明治維新の際、軍功を以て、陸軍少將近衛兵長官となりしが、征韓の議協はずして、故山に還り、明治十年西郷隆盛に從ひて、兵を擧げ、吉夫越(ヨシフ)にて戰死す。

**しのび** 忍【名】『1』しのぶこと。內證。內密。夫木「承密旨(ハクヒツ)」『2』しのびある事(忍歩)に同じ。大鏡「御供廻かろがろと、わざと忍の町乘物」『3』身を隱して、敵陣又は人家などに、密かに入込むこと。忍術。國姓爺合戰「日本墨・韃靼・和の伯達多といふ忍の上手を相具し」『4』しのびもの(忍者)の略。太平記「或夜の風雨に紛れて、逸物の忍を八幡山へ入れて」『5』せったう(竊盜)の異稱。

**しのびーあい** 忍合【名】『1』忍刀(シノビガタナ)の柄。吉野忠魯寨より三保谷、折よくば討ち奉らん下心、忍の柄に手をかけ」忍の夫(ヲ)【句】しのびをま(忍夫)に同じ。和泉式部日記「ことわりや今は殺さじこのわらは忍の夫のいふことにより」『2』忍の者【句】しのびもの(忍者)に同じ。門田八島「只今敵の忍の者、茱が討留め候」忍の緒【句】『もと兜の內部に忍ばせ、頭髮に結びつけしよりいふ』兜に附けて、頤(オトガヒ)にて結ぶ緒。しのびれを。曾の緒。排蹴天祭獻軍法「勝って兜の忍の緒、心の紐をしかとしめて」

**しのびーあし** 忍足【名】他人に氣づかれぬやうに、こっそりと歩むこと。ぬきあし、さしあし。天の鳴島「治兵衛は、つっと往ぬるかほ、又ひきかへすし」のびあし」

**しのびあひ** 忍逢【名】男女の密會。一代女「これを珍重がりて好く人ありて、仕著(シキ)合力にて、しのび逢の男絕えず」

**しのびーあふ** 忍逢ふ【動四自】しのびあひをなす。牛窪朝顏話「若氣のあやまり、奧女中としのびあひ、御手討にあふ所を」

**しのびーあみがさ** 忍編笠【名】昔、吉原の遊廓へ通ひし者の、身を忍ぶため被りて行き編笠、又それを借りて被ること。淺草泥町(ヂマチ)、卽ち今の田町邊にありし編笠茶屋にて借るを常とす。又己が家より被り行くを、手あみ笠又といへり。吉原ぶよひに、編笠被る風習は、享保より稀になり、元文に至りて、全く止めり。また京都の鳥原遊廓の入口にも、江戸に倣ひて、編笠茶屋出來たることありといふ。

**しのびーありき** 忍行【名】次條に同じ。源氏「六條わたりの御しのびありきのころ」

**しのびーあるき** 忍行【名】人に知られぬやうに、忍びであるくこと。しのびありき。しのび。門行。

**しのびーいる** 忍入る【動四自】しのびこむ(忍籠む)に同じ。源氏「いみじくしのびいりたまへる御ねくたれのさまを」

**しのびーおひ** 忍追【名】夜中に、船にて、敵前などを通る時、帆を捲くて乘ること。

**しのびーかく** 忍書く【動四他】ひそかに書く。源氏「あなかちにしのび書きたまへらん御心ばへ、もにくからねば」

**しのびーかご** 忍駕籠【名】人に知られぬやうに乘りたる駕籠。一代男「科なき身には、しのび駕籠、四人がかりに乘りざまに」

**しのびーがたな** 忍刀【名】隱して所持する刀。ふところ刀。

**しのびーがへし** 忍返【名】『1』敵人の侵入を防がんために、塀の上に、尖りたる鐵又は竹などを繁く斜に打並らべたる設備。やぎり。用明天皇紀「人無し大門閉じて、鐵門の忍びがへしは劍の山」『2』形、花鋏に似て大なる釘拔形。

**しのびかへす** 忍返す【動四自】甚しくかくす。深くつつむ。源氏「かかるけしきをも見えたてまつらんと、しのびかへしつつ聞きも入れぬさまにて」「じ。

**しのびーくぎ** 忍釘【名】かくしくぎ(隱釘)に同じ。

**しのびーぐさ** 忍草【名】その物事をしのぶくさはひ。思のたね。元輔集「行くさきの忍草にもあるやとて露のかたみも置かんとぞ思ふ」

**しのびーぐみ** 忍組【名】忍の者の仲間。伊賀者・甲賀者の類。

**しのびーぐるま** 忍車【名】『1』人目に立たぬやう忍びて乘りゆく車。夫木「さ夜ふかすしのび車のうはしろに霜ふるまでもとにと。俚歌拾遺集「影はづかしき我が妻、忍車を引くな沙の」

**しのびーけんどん** 忍慳貪【名】慳貪蕎麥を持運ぶに用ひし箱。內部に仕切ありて、狹き方へ、汁つぎ及び藥味などを入れたり。

**しのびーごと** 忍事【名】忍びてなすこと。祕密の事柄。密事。源氏「かかる御しのびごとにより」

**しのびーごと** 忍言【名】『1』ひそかに忍ぶ言。源氏「ありつる忍言どもは、耳とまるることやまじりたりつらん」『2』誅【名】『忍言の義。しのぶ(忍ぶ)[二]を見よ』死人をいたみて、その平生の德などを述べたつる言葉。しぬびごと。誄辭(ルイジ)。記、佩刀前誄(ハカシノサキノルイ)

**しのびーこま** 忍駒【名】三味線の駒の、特に調子を低くするために用ふるもの。長唄女鹿切「思の色をしのびこま」

**しのびーこむ** 忍込む【動四自】忍びて入りこむ。侵入す。しのびいる。

**しのびーこむ** 忍籠む【動下二他】深くつつみ隱す。源氏「今まで、かくしのびこめさせたまひける惡き」

**しのびーさく** 忍咲【名】忍びて物をいふ聲。ひそひそ、ごゑ。盛衰記「念珠おし揉み、忍聲にて」

**しのびーさんおゆう** 忍三重【名】浮瑠璃の手の一。忍音(シノビ)に彈きかすむる三重。

**しのびーしのびーに** 忍忍に【副】人に知れぬやうに。ひそかに。古今「みちのくのあだちのまゆみわがひかば末さへよりこしのびしのびに」

**しのびーすげ** 忍菅【名】地中に根の遠廣がりたる菅。夫木「下根さへ人江のしのびすげ忍びもあ(ず)からき世なれば」

**しのびーすまひ** 忍住【名】忍び隱れて住まふこと。五人女「雪のよしみの人を頼みて、わづかなる板庇を借りてしのび住、何か淺世のたよりもなく」

**しのびーた** 忍田・隱田【名】おんでん(隱田)に同じ。

**しのびーだ** 忍路【名】隱れて忍びて行く路。俚歌集「足駄車忍路を、紫井のよそに廻らして」

**しのびーだいやうちん** 忍提灯【名】外部より覆ひかけて、光の洩れぬやうにしたる提灯。丹波與作「主なき馬の、夜中といひ、繫がれあるは、いぶかしし、提灯立てよと呼ばはって、忍提灯箱はづせば、萬燈會の如くなり」

**しのびーづきん** 忍頭巾【名】忍歩(シノビ)にかぶる頭巾。御新板參文「非道の刀さすがよ」ひそひそばなし。ささめごと。私語。「古語」「ありつる忍言どもは、耳とまることやまじりたりつらん」

**しのびーとり** 忍鳥【名】忍音(シノビ)に同じ。

**しのびーかく** 忍書く【動四他】ひそかに書く。源氏「あなかちにしのび書きたまへらん御心ばへ、もにくからねば」

**しのびーかご** 忍駕籠【名】人に知られぬやうに乘りたる駕籠。一代男「科なき身には、しのび駕籠、四人がかりに乘りざまに」

**しのびがたな** 忍刀【名】隱して所持する刀。ふところ刀。

**しのびーがへし** 忍返【名】『1』敵人の侵入を防がんために、塀の上に、尖りたる鐵又は竹などを繁く斜に打並らべたる設備。やぎり。用明天皇紀「人無し大門閉じて、鐵門の忍びがへしは劍の山」『2』形、花鋏に似て大なる釘拔形。

**しのびかへす** 忍返す【動四自】甚しくかくす。深くつつむ。源氏「かかるけしきをも見えたてまつらんと、しのびかへしつつ聞きも入れぬさまにて」「じ。

**しのびーくぎ** 忍釘【名】かくしくぎ(隱釘)に同じ。

**しのびーぐさ** 忍草【名】その物事をしのぶくさはひ。思のたね。元輔集「行くさきの忍草にもあるやとて露のかたみも置かんとぞ思ふ」

**しのびーぐみ** 忍組【名】忍の者の仲間。伊賀者・甲賀者の類。

**しのびーぐるま** 忍車【名】『1』人目に立たぬやう忍びて乘りゆく車。夫木「さ夜ふかすしのび車のうはしろに霜ふるまでもとにと。俚歌拾遺集「影はづかしき我が妻、忍車を引くな沙の」

**しのびーけんどん** 忍慳貪【名】慳貪蕎麥を持運ぶに用ひし箱。內部に仕切ありて、狹き方へ、汁つぎ及び藥味などを入れたり。

**しのびーごと** 忍事【名】忍びてなすこと。祕密の事柄。密事。源氏「かかる御しのびごとにより」

**しのびーごと** 忍言【名】『1』ひそかに忍ぶ言。源氏「ありつる忍言どもは、耳とまることやまじりたりつらん」『2』誅【名】『忍言の義。しのぶ(忍ぶ)[二]を見よ』死人をいたみて、その平生の德などを述べたつる言葉。しぬびごと。誄辭(ルイジ)。記、佩刀前誄(ハカシノサキノルイ)

**しのびーこま** 忍駒【名】三味線の駒の、特に調子を低くするために用ふるもの。長唄女鹿切「思の色をしのびこま」

**しのびーこむ** 忍込む【動四自】忍びて入りこむ。侵入す。しのびいる。

**しのびーこむ** 忍籠む【動下二他】深くつつみ隱す。源氏「今まで、かくしのびこめさせたまひける惡き」

**しのびーさく** 忍咲【名】忍びて物をいふ聲。ひそひそ、ごゑ。盛衰記「念珠おし揉み、忍聲にて」

**しのびーさんおゆう** 忍三重【名】浮瑠璃の手の一。忍音(シノビ)に彈きかすむる三重。

**しのびーしのびーに** 忍忍に【副】人に知れぬやうに。ひそかに。古今「みちのくのあだちのまゆみわがひかば末さへよりこしのびしのびに」

**しのびすげ** 忍菅【名】地中に根の遠廣がりたる菅。夫木「下根さへ人江のしのびすげ忍びもあ(ず)からき世なれば」

**しのびーすまひ** 忍住【名】忍び隱れて住まふこと。五人女「雪のよしみの人を頼みて、わづかなる板庇を借りてしのび住、何か淺世のたよりもなく」

**しのびーた** 忍田・隱田【名】おんでん(隱田)に同じ。

**しのびーだ** 忍路【名】隱れて忍びて行く路。俚歌集「足駄車忍路を、紫井のよそに廻らして」

**しのびーだいやうちん** 忍提灯【名】外部より覆ひかけて、光の洩れぬやうにしたる提灯。丹波與作「主なき馬の、夜中といひ、繫がれあるは、いぶかしし、提灯立てよと呼ばはって、忍提灯箱はづせば、萬燈會の如くなり」

**しのびーづきん** 忍頭巾【名】忍歩(シノビ)にかぶる頭巾。御新板參文「非道の刀さすがよ」

世を忍頭巾の浪人に」

**しのび-づま** 忍夫【名】公ならぬ夫。しのびをとこ。しのびのつま。かくし男。密夫。月蘆集「しのびづまおきつる後はささぬ戸を叩くに知りぬ水雞なりけり」

**しのび-づま** 忍妻【名】公ならぬ妻。かくしをんな。かこひもの。しのびをんな。續千載雜四「若かりし時、忍妻の腹に、男子一人設けしを」

**しのび-でかけ** 忍出掛【名】忍びて外出すること。しのびあるき。曾我物語「今日の非番の徒然と、朝日奈の三郎同道にて、忍出掛の至り風」

**しのび-ところ** 忍所【名】■人に知られぬやうに、忍び隠れて居る處。かくれが。■なつかしく思ふ所。「古語」源氏「こころ年へたまへる御住所の、いかでか忍びどころなくはあらん」

**しのび-とだな** 忍戸棚【名】男女の密會する戸棚。「代男」しのび戸棚と申すは、これも内證より通路仕懸けて、男を入れおき、逢はすることなり」

**しのび-とり** 忍取【名】夜中に忍び寄りて、敵城を乘取ること。

**しのび-ながし** 忍流・隱流【名】退けて、遠所の官に左遷すること。「古語」紀「隱流、シノビナガシ」

**しのび-なき** 忍泣【名】聲を立てずに、ひそかに泣くこと。しのびねに泣くこと。

**しのび-なぐさみ** 忍慰【名】忍び隱れて慰むこと。「代女」石垣町にあり時は、色白にして、全盛の男、しのび慰の花車(ハナグルマ)座敷、伽羅で固めし御肌麝かなる風情」

**しのび-なみだ** 忍涙【名】ひそかに涙をながして泣くこと。忍泣の涙。先代萩「君おもひ、わが子を思ひ、心のおくのしのぶ山、しのびなみだの折からに」

**しのび-に** 忍に【副】人知れず。ひそかに。「古語」源氏「しのびに御ふみ、かよはしなどして」

**しのび-ね** 忍音【名】■ちひさき音。ここ五。■しのびて泣く聲。新古今「時鳥まだうちとけぬしのび音はこゑ人をまつ我れのみぞなく」■『おぼつかなき音にて鳴くよりいふ』時鳥(ホトトギス)の初音。源氏「しのびねや君もなくらんかひもなきしてのたをさに心かよはば」

忍音泣く【句】しのびなきをす。大觀「火たきや陣屋など破らせけるほどにこそえ撲へず、しのびねなく人人侍りけれ」

**しのび-ね** 忍寢【名】人目を憚りて、隱れて寢ぬること。本朝三國志「しのびねもせぬ妻ごめの」

**しのび-ねを** 忍根緒【名】「忍の緒」に同じ。

**しのび-のこす** 忍殘す【動四他】隱くして出さずに置く。「古語」源氏「かくしのび殘されたる事ありけるをなん思ひぬると」

**しのび-の-を** 忍の緒【句】しのび(忍)の條下を見よ。

**しのびの-をか** 忍岡【名】(地)しのぶがをか(忍岡)に同じ。墨國餘記「霜のうちあらはれにけり時雨をば忍の岡の松もかひなし」

**しのび-はだつけ** 忍膚附【名】移穀(ハダツケ)に用ふる膚附。

**しのび-び** 忍火【名】音をたてずに、打つ切火(キリビ)。若風俗「小者にしのび火を打たせ」

**しのび-びと** 忍人【名】■人目をしのびて通ふ男女。「古語」拾遺「かうしのびびと殺けたまへる人を、二つなくおぼしさわぐ」■世に隱れしのぶ人。隱者。

**しのび-ぶね** 忍船【名】人目をしのびて漕ぐ船。

**しのび-まはり** 忍廻【名】次條に同じ。

**しのびめつけ** 忍目附【名】主命により、他に氣附かれぬやうに觀察する武家の臨事の役。しのびまはり。

**しのび-もとゆひ** 忍元結【名】外部より見えぬやうに結ぶ元結。一代女「島田に忍元結三筋まはし、その上に、長平紙(ハナガミ)の幅廣を掛け」

**しのび-もの** 忍者【名】變裝して、敵地に入込み、樣子を探る人。かんじや。かんてふ。しのびのもの。しのび。

**しのび-ものみ** 忍物見【名】主命により、忍び隱れて、敵狀をうかがふ者。足輕など、この役に當る。かまりもの。かまり。しばみ。くき。くさかまり。

**しのび-やか** 忍やか【形動】忍び隱れたるさま。ひそか。源氏「しのびやかに、心にくきかぎりの女房の四五人さぶらはせたまひて」

**しのび-わらひ** 忍笑【名】しのび笑ふこと。

**しのび-わらふ** 忍笑ふ【動四自】しのびやかに笑ふ。平前「拵忍びわらひけり」

**しのび-をとこ** 忍男【名】しのびづま(忍夫)に同じ。「代女」月に六齋のしのび男」

**しのび-をんな** 忍女【名】しのびづま(忍妻)に同じ。「代男」左に天の川、磯鳥といへるにも、船子の淵枕、しのび女ある所ぞかし」

**し-のふ** 縮葡【名】しだふ(縮納)に同じ。

**し-のふ** 忍【名】■植。しのぶぐさ(忍草)[一][二]の略。伊勢「わすれ草生ふる野べとは見らめどもこはしのぶなりのうち顯まん」■(植)小鹿骨(ハツシ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、黑褐色の鱗毛を有せる根莖。長く匍匐して、處處より葉を生ず。葉は數回の羽狀複葉にて、葉裏に多數の子囊群を有す。「惡・海州骨碎補」■糞(ハツシ)の色目の一。表は萌黃、裏は青。秋用ふ。

**しのぶ** 信夫【名】■(地)岩代國十郡の一。郡役所を福島市に置く。上古、今の伊達(ハタ)郡と合して、一國を成し、信夫國と呼び、大化の改新に郡となりて、石背(ハセ)國に屬し、のち陸奥國の一部となれり。伊勢「君をのみしのぶの里へ行くものを會津の山のはるけきやなぞ」■しのぶぐさ(信夫草)の略。「主として思ひ忍ぶ意に言掛けて、歌に用ふ」「惡」夫木「知られじなしのぶの衣濃き摺の人目ばかりに亂れわぶとは」

信夫の鹿【句】岩代國信夫の邊より出づる鹿なりといふ。夫王「一夜をばしのぶの鹿の狩衣目も夕こりの山寒くとも」

しのぶの亂(ハツシ)【句】信夫摺の筋目正しからぬに、思ひ忍びて、心の亂るるを言掛けたる語。「古語」伊勢「春日野の若紫のすりごろもしのぶのみだれかぎり知られず」

**しのぶ** 忍ぶ【動四他】■思ふ。したふ。しぬぶ。「偲ぶ」古今「忘られん時しのべとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬあをとどむる」蜻蛉集「五にしのびしのばれて、物三年は夜晝なし」■堪ふ。こらふ。しのびこらふ。しぬぶ。新撰「幣人のいるののきぎす妻戀にしのばれぬれはわれもたてつつ」■人目にかくれてなす。ひそかになす。しのびかくる。新勅撰「しのぶ山しのびて通ふ路もがな人の心の奥もみるべく」

**しのぶ** 忍ぶ【動上二他】前條に同じ。古今「思ふにはしのぶることぞ負けにける色には出でじと思ひしものを」

**しのぶ** 忍ぶ【動四自】■かくる。人目にかからず居る。夫武藏人男「人にしのぶの繪ふかき」由茅「葉がくれに散りとどまれる花のみぞしのびし人にあふ心地する」■隱れて通ふ。飼五「しのびたる男、鳴りけるきぬをかしがましとて押しのけければ、孕蜜鑑「六十九になるしわんぼうの隱居が、玉といふ飯焚になった一夜しのんで」

**しのぶ** 忍ぶ【動上二自】前條に同じ。枕「物へだてて聞くに、人の忍ぶるが、夜中などうちおどろきていふ言は聞えず」

**しのぶうり** 忍賣【名】常磐津浮瑠璃に合はせて演ずる踊。本外題は「垣衣(ハツシ)」

**しのぶ-ぶえ** 篠笛【名】篠竹にて造りたる横笛。里神樂文は俗曲の囃子などに用ふ。しの。

**しのぶ-がをか** 忍岡【名】(地)東京市下谷區上野公園地の舊稱。夫王「出合茶屋忍が岡は无もな」

**しのぶ-ぐさ** 忍草・忍草【名】(植)■のきしのぶ。軒忍。「垣衣」和名「垣衣。一名、鳥韮、之乃布久佐」■わすれぐさ(萱草)に同じ。伊勢「忘草をしのぶぐさとやいふらん」■

**しのぶ-ぐろ** 志野袋【名】「志野流」にて用ふるよりいふ。香包を入るるに用ふる、踊き袋。

**しのぶ-じょけん** 信夫絹軒【名】(人)流學者。舊鳥取藩士。名は繁。海保漁村・芳野金陵・大槻磐溪等に從學し、詩文に通ず。明治四十三年歿す。年七十六。



**しのぶ-すり** 信夫摺・忍摺・忍摺【名】陸奥國信夫郡より出だしし摺模樣の絹。模樣の法目正しからぬによりて、信夫振摺(ヘンシブリ)ともいへり。「一說に、源融(トホル)の歌に『陸奥(ハツシ)のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れそめにし我れならなくに』とあるは、惑といはんために、陸奥の信夫の地名を言掛けたるに過ぎざれば、信夫郡の產物とするは誤にて、惑草の葉と葉とを打亂して、摺附けたるものをいふと。後世も、その葉葉を、深綠その他の色にて染出したる布帛をいひ、人形・鳴鳥市の一名產として、布呂敷・半襟等に應用せり。草の綾摺。伊勢「この男、しのぶずりの狩衣をなん著たりける」

**しのぶ-のくさ** 惑草・忍草【名】(植)しのぶぐさ(惑草)[一]に同じ。古今「ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞ生ひける」

**しのぶ-のもり** 信夫森【名】(地)岩代國信夫郡にありし森。千載「いづくより吹きくる風の散らしけんたれもしのぶの森のことの葉」

信夫森の言の葉【句】「思ひ忍ぶ意にかけて、人に見すべからざるものといふ義。森は、葉の緣語」隱してなしたる歌の批評。

**しのぶ-の-やま** 信夫山【名】(地)しのぶやま(信夫山)に同じ。夫木「鳴けや鳴け信夫の山の呼子鳥つひに止らぬ春ならずとも」

**しのぶ-の-をか** 信夫岡【名】(地)■しのぶやま(信夫山)に同じ。續古今「何事をしのぶの岡の女郎花思ひしをれてつゆけかるらん」■河內國北河內郡甲可(カフ)村大字岡山の舊稱。新撰「待つ人もなどかたらはで時鳥ひとりしのぶの岡に鳴くらん」

**しのぶまんぢゅう** 忍饅頭【名】かすがのまんぢゅう(春日野饅頭)に同じ。

**しのぶ-みづ** 忍水【名】魔を飼ふために、人の尿に浸けし餌なりといふ。鑒三百眞「紅葉する垣のもとなる忍水とりてあかふの鷹にかふらん」

**しのぶもぐせいさう** 忍木犀草【名】(植)れせだに同じ。

**しのぶもぢずり** 信夫振摺・忍綾摺・惑綾摺【名】『もぢは、もぢる(捩る)もつる(縺る)・みだる(亂る)等の意。すりもぢかす(摺斑す)を見よ』しのぶずり(信夫摺)に同じ。「古語」千載「もしもする宮城が原の下露にしのぶもぢずりかわく世ぞなき」

**しのぶ-やま** 信夫山【名】(地)岩代國信夫郡にある岡。福島市の正北約十五町、阿武隈川の左岸に在り。高さ約五百尺。但し古歌に詠めるは、信夫郡一帶の諸山の概稱なるべしともいふ。しのぶやま(信夫山)・しのぶやまぶのをか(信夫岡)參照。新勅撰「しのぶやまぶのをかのみちかよふ道もがな人の心のおくも見るべく」「種。

**しのぶ-わげ** 忍髓【名】芝居の鬘(カツラ)の一。

**しのべ-だけ** 忍竹【名】しのめだけ(篠芽竹)に同じ。新古今「うきふしをおもひも入れず忍竹しのべとねこそまづ泣かれけれ」

**しのまき** 篠卷【名】あめ(綿筒)を云ふ。「西國及び土佐國武藏國の方言」

**しのまきうを** 篠卷魚【名】三枚におろしたる小魚を、二本の金串に卷附けて燒きたるもの。口取などの附合(ツケアハセ)に用ふ。

**しのみや** 四宮【名】(地)山城國宇治郡山科(ヤマシナ)村の大字。概(ガイ)川の水源地。この邊、四宮河原の稱あり。仁明天皇第四の皇子人康(ヤスヤス)親王の館地なりしによりて呼ぶ。

**しのみや-がはら** 四宮河原【名】(地)しのみや(四宮)を見よ。盛衰記「三條を東へ、賀茂川・白川打越えて、粟田口・松坂・四宮河原を通るには」

**しのみや-まつり** 四宮祭【名】近江國大津市の鄕社天孫神社(舊稱、天孫第四宮)の祭禮。もと陰曆九月十日に行はれ、今は十月十日に行はる。大津祭。

**しのめ** 篠芽【名】■遲く生じて、色青く味苦き筍。和名「長岡筍、之乃米」■(植)次條の略。

**しのめ-だけ** 篠芽竹【名】節の間長く、葉の小さき一種の竹。しのべだけ。しのめ。千載「時鳥かたらふ聲を聞きしよりあしのやにいこそられれ」

**しの-や** 篠屋【名】篠にて葺きたる家。新千載「時鳥かたらふ聲を聞きしよりあしのやにいこそられれ」

**しの-やき** 志野焼【名】『志野宗信の特に嗜好せしによりて名づくといふ』足利義政の頃、尾張國瀨戸にて、茶器用として、將軍の命を承けて造りたる陶器。肉厚く質粗にして、白色の釉藥(ユウヤク)を施し、龜甲の劈痕を生ぜしめ、花卉を畫きたり。「ふ。

**しのや-まき** 志野流【名】(動)■ぬき狸に同じといふ。

**しのり-う** 志野流【名】香道の一流。志野宗信を祖とす。

**しのり-がも** しのり鴨【名】(動)游禽(ユウキン)類に屬する鳥。冬季我が國北部に渡來す。體は時褐色、腹部は赤褐色を呈し、また眼前と耳邊とに、髮白色の部分あり。おきのけんてう。

**しの-を** 鬼絃【名】琵琶の絃の名。薩摩琵琶秘傳鬼絃也、背以二鬼髓一作之、故如レ此書也」

**し-は** 支派【名】本流より別れたる一流派。えだは。わかれ。

**しは** 志波【名】(地)次條を見よ。

**しば** 柴波【名】(地)陸中國三十二郡の一。郡役所を目詰(メヅメ)町に置く。この邊の地區、上古は子波・志波・志和・斯波等とも書き、斯波城を置かれ、弘仁二年に至りて、斯波郡の名始めて見ゆ。

**しば** 斯波【名】■(地)前條を見よ。■姓氏の一。足利氏の支流。足利泰氏の子尾張守家氏を祖とす。室町幕府時代には、三管領の一となる。足利氏の子孫、自生する小草。葉は細小にして尖り、根莖は匍匐して、各節より根を生ず。庭園・臺防などに廣く植ゑて、土の崩壞を防ぎ、且つ美觀を添へしむ。しばえ。「結縁草」■(植)しばみ(榛)に同じ。■しばえ(芝見)の略。■(地)東京市十五區の一。

**しば** 芝【名】■(植)禾本科に屬し、原野に自生する小草。葉は細小にして尖り、根莖は匍匐して、各節より根を生ず。庭園・臺防などに廣く植ゑて、土の崩壞を防ぎ、且つ美觀を添へしむ。しばえ。「結縁草」■(植)しばみ(榛)に同じ。■しばえ(芝見)の略。■(地)東京市十五區の一。

芝の砌【句】榛芝の生ずる邊。聖帝の御住居。

**しば** 柴【名】山野に生ずる小さき雜木。そだ。しばぎ。新古今「思ひ出づる折焚く柴の夕けぶりむせぶも嬉し忘れだたみに」

**柴の庵**【句】柴の庵(ハ)に同じ。

**柴の庵**【句】次條に同じ。

**柴の戸**【句】柴の扉(トビラ)。新古今「いづくにも住まれずばただ住まであらん柴のいほりのしばしなる世に」■我が家の謙稱。

**柴の戸**【句】前條に同じ。千載「わがたのむ日吉のかげはおく山の柴の戸までもささざるめやは」

**柴の楓**【句】前條に同じ。

**しば** 菜草【名】麦地に生ずる雜草。菱(ヒシ)の類。しばくさ。和名「菜草、之波、一名類草」

**しば** 駟馬・四馬【名】馬車を挽く四頭の馬。四駟。

駟馬も追ふ能はず【句】『說苑の說叢篇に「口者駟也、舌者機也。出舌不當、駟馬不レ能追也、また文子に「出言不當、四駟不レ能追」とあり』一たび口に出して過つ時は、駟馬にて追ふとも及ばず。「諺語」

**しば** 司馬【名】■支那國の周代に、六官の一として、軍事・交通等の事を掌る官。漢の代には、司徒・司空と共に三公の一たりき。■古の地方官の稱(ショウ)の唐名。

**しば** 死馬【名】死にたる馬。しにうま。

死馬に鍼を刺す【句】「死馬(シバ)に針を刺す」を見よ。

死馬の骨【句】戰國策の燕國の條に「郭隗曰、古之人君、有レ以三千金一使二消人求一千里馬一者上、馬已死、買二其骨五百金一而歸云云、消人對曰、死馬且買之五百金、況生馬乎、不レ能三非年一千里馬至者三」とあるに本づく。■先づさほどにもなき人を優待すれば、他の賢者自ら來り集まる。■「駿馬の骨」に同じ。

死馬の骨を買ふ【句】前條を見よ。

**しば** 仔馬【名】こうま。幼駒。

**しば** 滋婆(梵SIVA)【名】婆羅門教にて、萬物を破壞して、また再造する威力ありとしむすばれたるのみにあらず」

**しば** 柴【名】山野に生ずる小さき雜木。そだ。しばぎ。新古今「思ひ出づる折焚く柴の夕けぶりむせぶも嬉し忘れだたみに」

**柴の庵**【句】柴の庵(ハ)に同じ。

**柴の庵**【句】次條に同じ。

**柴の扉**【句】柴の扉(トビラ)。新古今「いづくにも住まれずばただ住まであらん柴のいほりのしばしなる世に」■我が家の謙稱。

**柴の戸**【句】前條に同じ。千載「わがたのむ日吉のかげはおく山の柴の戸までもささざるめやは」

**柴の楓**【句】前條に同じ。

**しば** 菜草【名】麦地に生ずる雜草。菱(ヒシ)の類。しばくさ。和名「菜草、之波、一名類草」

**しば** 駟馬・四馬【名】馬車を挽く四頭の馬。四駟。

駟馬も追ふ能はず【句】『說苑の說叢篇に「口者駟也、舌者機也。出舌不當、駟馬不レ能追也、また文子に「出言不當、四駟不レ能追」とあり』一たび口に出して過つ時は、駟馬にて追ふとも及ばず。「諺語」

**しば** 司馬【名】■支那國の周代に、六官の一として、軍事・交通等の事を掌る官。漢の代には、司徒・司空と共に三公の一たりき。■古の地方官の稱(ショウ)の唐名。

**しば** 死馬【名】死にたる馬。しにうま。

死馬に鍼を刺す【句】「死馬(シバ)に針を刺す」を見よ。

死馬の骨【句】戰國策の燕國の條に「郭隗曰、古之人君、有レ以三千金一使二消人求一千里馬一者上、馬已死、買二其骨五百金一而歸云云、消人對曰、死馬且買之五百金、況生馬乎、不レ能三非年一千里馬至者三」とあるに本づく。■先づさほどにもなき人を優待すれば、他の賢者自ら來り集まる。■「駿馬の骨」に同じ。

死馬の骨を買ふ【句】前條を見よ。

**しば** 仔馬【名】こうま。幼駒。

**しば** 滋婆(梵SIVA)【名】婆羅門教にて、萬物を破壞して、また再造する威力ありとし

て、崇拜せし神。

**しば** 暫【副】しばし(暫)の略。〔古語〕 古今「今しばとわびにしものをささがにの衣にかかりわれをたのむる」 飯尾山姫「しばさせ給へ」

**しば** 屋【副】しばしば。しきりに。繁く。「じ。〔古語〕「しば鳴く」「しば立つ」

**じば** 磁場【名】〔理〕じおば(磁場)に同じ。

**しば-あぢさゐ** 柴紫陽【名】〔植〕こあぢさゐ(小紫陽)に同じ。

**しば-あめ** 屋雨【名】むらさめ(村雨)に同じ。

**しばい** 支配【名】■取締ること。管轄。■しばいにん(支配人)の略。

**しばい** 詩牌【名】■詩を記したるふだ。■作詩の際、小さき札に、韻字一箇を記して、各人に配布し、その當りたる文字にて、詩を作らしむるもの。■歌がるたの如く、漢詩を起承と轉結と二句づつに分ち記し、前者を讀みて、後者を取るやうにしたるもの。しがるた。

**しばい** 紙牌【名】紙のふだ。紙箋。

**しばい** 紙背【名】■紙の裏。■文章の裏面に含まれる意義。「眼光、紙背に徹す」

**しばい** 四配【名】孔子の廟に配祠せられし四人。顏子・子思は右に、曾子・孟子は左に配せらる。

**しばい** 試賣【名】試驗的に貨物を賣却すること。

**しばい** 司馬懿【名】〔人〕支那三國時代の名將。字は仲達。魏の文帝に仕へ、漢の孔明と屢戰ふ。後に宰相となり、國政を專にす。嘉禾三年歿す。

**じばい** 兒輩【名】こどもたち。こどもら。

**じばい** 時輩【名】當時の人人。

**じばい** 次配【名】つまい(後妻)に同じ。

**しばい-かんぢやう** 支配勘定【名】江戸幕府の職制の一。勘定奉行に屬し、幕府の領地及び財用等を掌りしもの。算筆に長ぜる者これに補せらる。

**しばいかんぢやう-しゆう** 支配勘定衆【名】支配勘定に屬せる人人。

**しばい-した** 支配下【名】支配のもと。部「下。配下。

**しばい-じよ** 支配所【名】江戸時代に、遠國奉行及び郡代・代官の治めし幕府の領地、各部内に役所又は陣屋、及びその出張所を置きて、民政を掌りたり。

**しばい-にん** 支配人【名】〔商〕主人に代りて、その營業に關する一切の裁判上及び裁判外の行爲を爲す商業使用人。主人の營業のために、その全力を盡すべき者なるを以て、自己が商業を營み、或は第三者のために商行爲をなし、或は無限責任社員たることは、主人の許諾あるにあらざれば、行爲を得ず。

**しばいにん-とうろくぼ** 支配人登記簿【名】支配人の選任・解任及びその代理權の消滅などを登記するために、本店又は支店所在地の裁判所に備ふる商業登記簿。

**しばい-いほ** 柴庵【名】柴を結びて作りたる庵。〔古語〕 夫木「秋風になびく稻葉のたえまよりほのかに見ゆる鹿がしばいほ」

**しばいも**【名】〔植〕すずめのえ[illegible]に同じ。

**しばう** 紙砲【名】かみはりづつ(紙張銃)に同じ。

**しばう** 至寶【名】最も貴き寶。

**しばう** 四寶【名】四種の貴重なる物。文房の四寶【名】『明一統志』「新安志云、歙縣文房四寶、謂:紙・墨・筆・硯:也」とあり』筆と墨と紙と硯との併稱。

**しばう** 師保【名】師匠と保母と。

**しばう** 四方【名】■東と西と南と北と。■諸方。世上。天下。「四方を經營す」■角。はうばう。くるり。まはり。四かく。四角。五三方に似て、孔の四つある臺。六

**しばう**(四牟)【名】■に同じ。四方に使す【句】『論語の子路篇に「子曰、行己有恥、使於四方、不辱君命」可謂士矣とあるに本づく』國のために四方の外國に至りて、折衝の任に當る。

四方の志【句】『繫辭傳矢を見よ』天下諸國を遊歷し、又は經營せんとする志。

「下。配下。

夫遊四方四維に地響して、ぼっかり打拔く槻の扉」

四方・八面【句】次條に同じ。

四方・八方【句】四方と八方と。あらゆる方面。四方八面。

**しばう** 私報【名】ししん(私信)に同じ。

**しばう** 肆放・侈放・恣放【名】はうし(放肆)に同じ。

**しばう** 市坊【名】まち。市街。

**しばう** 四望【名】四方を眺むること。四方の眺望。

**しばう** 志望【名】心がけ。のざみ。

**しばう** 思望【名】思ひしたふこと。思慕。

**しばう** 資望【名】門地と人望と。

**しばう** 姿貌・姿望【名】すがた。かたち。姿容。

**しばう** 死亡【名】死ぬること。

**しばう** 脂肪【名】動物の體中に在るあぶら。成分は炭素・水素・酸素にして、多くは二種以上の脂性化合體、即ちパルチミン、ステテリン、オイレン等のエステルとなりて混在し、不揮發性なり。パルミチンとステアリンとに富むものは、牛脂・羊脂・豚脂の如く固狀を呈し、オイレンに富むものは、肝油・鯨油の如く液狀を呈す。すべて燃燒して、體溫・體力の原となる。また植物の種子・果實より採取する油をもいふことあり。しぼうさん(脂肪酸)參照。

**しばう** 子房【名】〔植〕種子の房室の義』雌蕊の最下部の成熟して果實となるべき部分。膨大して、囊狀をなせるを常とし、內に一室乃至數室を有し、胚珠を藏す。

**しばう** 子房【名】〔人〕ちやうりやう(張良)に同じ。 吉野都女『子房が祕藏、孔明が骨髓』

**じばう** 時報【名】その時時の知らせ。

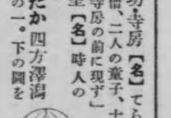
**じばう** 自暴【名】我れを我れとそこなふこと。やけ。次條參照。

自暴自棄【句】『孟子の離婁上篇に「自暴者不レ可二與有レ言也、自棄者不レ可二與有レ爲也。言非二禮義一謂二之自暴一、吾身不レ能レ居二仁由レ義、謂二之自棄一也」とあるに本づく』我れと我が身を廢棄することを。やけになること。

**じばう** 寺坊・寺房【名】てら。僧庵。平家「二人の祕僧、二人の童子、十人の下僧、七寶の大車、寺房の前に現ず」

**じばう** 時望【名】時人の希望。

**しばう-おもだか** 四方澤瀉【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(かだもおうはし)

**しばう-がき** 仕方書【名】〔商〕商品を注文する時、その品の名・種類・形狀などを明細に書きて送る書附。

**しばう-がみ** 四方髮【名】獲附髮(かぶせ)をかき、手拭にて包みたるもの。

**しばう-がや** 四方榧【名】〔植〕とうせんがや(朝鮮榧)に同じ。

**しばう-かゐ** 子房下位【名】〔植〕『英 Inferior ovary』子房の、雌蕊より下に位するもの。花托が子房の側壁に沿ひて伸長し、これを癒合せる結果にして、例へば胡蘿蔔(ぎやうじん)・胡瓜(きうり)などの花に於ける類。(子房上位に對して)

**しばう-き** 觀方器【名】測量上直角線を定むるに用ふる器械。直徑一寸五分高さ六七分許の圓箱より成り、周圍に三箇の穴ありて、その最小なるを窺けば、自己に對して、直角の方向にある物體を同時に見ることを得。

**しばう-ぎ** 紡織機【名】紡織機械の一。普通三機より成る內の、最初の工程に用ふるもの。

**しばう-きうじよ** 死亡救助【名】職務のために受けたる傷痍又は傳染病等に原因して死亡せる巡査・看守の遺族に與ふる給助金。弔祭料。

**しばう-ぎん** 四寶銀【名】しいうちやうぎん(四寶丁銀)とにうまめいたぎん(四方豆板銀)との總稱。「同じ。

**しばう-くわた** 脂肪過多【名】〔醫〕次條に

**しばう-くわた-しやう** 脂肪過多症【名】〔醫〕『羅 Lipositas universalis』脂肪の過積して、甚しく肥滿する病。多くは飽食・逸飲し、安坐・逸居して、運動不足なるより起り、歩行困難・發汗・蛋白尿等を呈し、同時に心

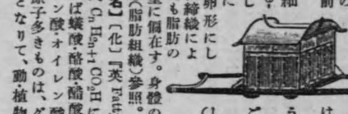




臟の肥大等を來し、脈搏・呼吸等異狀を生ず。肥詐病。

**しばう-けんあんしよ** 死亡檢案書【名】したいけんあんしよ(死體檢案書)に同じ。

**しばう-ごし** 四方興【名】『四方より任意に乘り下りし得る故に名づく』輿の一種。屋は四方卸(ぬ)にて、輿の四方に簾を掛けたるもの。上皇・攝政・以下公卿・伶倒の遊行に使用す。鎌倉以前には見えず。



(しどうはし)

**しばう-さいぼう** 脂肪細胞【名】〔醫〕『獨 Fettzellen』結締織細胞の變じて、多量の脂肪を含むに至れるもの。圓形又は卵形にして、微顆狀に集合し、結締織によりて繼絡す。核も原形質も脂肪のために壓せられて、胞壁に偏在す。身體の諸部に存す。しぼうそしき(脂肪組織)參照。

**しばう-さん** 脂肪酸【名】〔化〕『英 Fatty acid』化學組成が一般式 $C_nH_{2n+1}CO_2H$ に合する一鹽基酸類。例へば蟻酸・酪酸・酪酸・パルミチン酸・ステアリン酸・オイレン酸等の類にて、その炭素原子多きものは、グリセリンとのエステルとなり、動植物の脂肪を形成す。

**しばうさん-なとりうむ** 脂肪酸ナトリウム【化】脂肪酸のナトリウム鹽にして、$C_nH_{2n+1}CO_2Na$ なる一般式を以て表はさるるもの。例へばパルミチン酸ナトリウム・ステアリン酸ナトリウム等の總稱。

**しばう-しかくのまつり** 四方四角祭【名】しかくしきやうのまつり(四角四境祭)に同じ。

**じばう-じき** 自暴自棄【句】じばう(自暴)の項を見よ。

**しばう-しきみ** 四方榿【名】送葬の時、棺の外四隅に竹箒を立てて、榿を插すこと。

**しばう-しきん** 死亡賜金【名】在官・在職中に死亡したる官吏の遺族に對して、一時に給與する金錢。高等官は年俸の三分の一・判任官は月俸三箇月分を給せらる。

**しばう-しつ** 脂肪質【名】成分が脂肪なる物質。多量に脂肪を含める物質。

**しばう-しんだんしよ** 死亡診斷書【名】醫師が、その取扱ひたる患者の死亡したる時作る證明書。「證」に同じ。

**しばう-しや** 蘋・芳舍【名】かみなりのつぼ(雷)

**しばう-しや** 四望車【名】牛車(ぎつしや)の一。箱の四方に簾をかけたるものかといふ。太上天皇・皇又は攝政・關白などの用ひしもの。

**しばう-しや** 忘望者【名】死亡せる人。希望者。

**しばう-しやうめん** 四方正面【句】しほう(四方)の條下を見よ。

**しばう-じやうる** 子房上位【名】〔植〕『英 Superior ovary』子房の、雌片より上に位するもの。例へば蓮(ぐ)・百合(ぐ)などの花に於ける類。(子房下位に對して)

**しばう-しようしよ** 死亡證書【名】或人の死亡を證明して、醫師の作る文書。

**しばう-しようめいしよ** 死亡證明書【名】前條に同じ。

**しばう-しゆ** 脂肪腫【名】〔醫〕『羅 Lipoma』圓形に座取りて、隆起せる惡性ならぬ腫。發育緩かなれども頗る巨大となる。

**しばう-しろ** 四方白【名】兜の鉢の、前後左右に、銀又は白鐵(ぐ)を張りたるもの。(片白・二方白・三方白に對して)

**じ-はうせき** 次寶石【名】〔鑛〕寶石に次ぎて貴重せられ、裝飾用に供せらるる鑛物。例へば、水晶・瑪瑙などの類。

**しばう-せん** 脂肪腺【名】〔醫〕ひしせん(皮脂腺)に同じ。

**しばう-そう** 脂肪層【名】〔生〕『獨 Fettschicht』或動物の體の皮下にありて、脂肪より成れる層。鯨などこれを有す。

**しばう-そしき** 脂肪組織【名】〔醫〕『獨 Fettgewebe』粗鬆(ぞ)なる結締織にして、脂肪細胞の多數の集合より成るもの。廣く皮下に亘りて存し、また各臟器の周圍、及びその間にも存す。

**しばうだけ-の-ゆみ** 四方竹弓【名】弓身の、木を中心として、四方より竹を合はせたる弓。普通の弓は、前後の兩側より竹を合はせたるに止まる。

**しばう-だな** 四方棚【名】方形の板二枚を、二本の柱にて支へたる棚。茶席にて用ふ。

**しばう-ぢ** 芝打【名】■物の端の、地面に觸るること。しばすり。 本朝三國志『錦革の物の具、同じ毛の抽草摺・冠の板より芝打迄、金具打つたる忍草』■春の裾・即ち上より數へて、その第五の幅(ぐ)。くつの。

**しばう-ちく** 四方竹【名】〔植〕竹の一種。幹は徑七八分にて、四角なるもの。肌にぶらつきあり。多くは杖に用ひらる。しかく竹。

**しばうちなが** 芝打長【名】物の端の、地面に觸るるほどに垂れたるさま。曾我『連雀の鍬(ぐ)の山吹色なるを、芝打長にかけきせ』

**しばうちやうぎん** 四寶丁銀【名】江戸時代の通貨の一。正德元年・二年に亙りて鑄造せられ、享保七年まで通用せし丁銀。縱二寸九分・横九分强・重量四十一匁、品位銀二十分・銅八十分。寶の字四箇を綜印として記せり。

**しばうつり** 屢移【名】たびたび所を變ふること。一說に、鳥の忍びて立つこと。〔古語〕 山家『片岡にしばうつりてなくきぎすたつ羽音とて高からぬかは』

**しばう-とどけ** 死亡屆【名】死亡者のありし時、その旨を月番吏に屆け出づること、又その屆書。

**しばう-とどけいでぎむしや** 死亡屆出義務者【名】死亡屆を差出す義務ある者。第一、戶主、第二、同居者、第三、家主・地主又は土地もしくは家屋の管理人。

**しばう-とり** 四方取【名】四方・普平地にて、敵の取附きやすき城。

**しばうながれ** 四方流【名】〔建〕寄棟造(ぶきやなぶき)又は方形造(ぶきやなぶき)の屋根に用ふるもの。

**しばう-ぬき** 四方貫【名】柱の四方に貫(ぬ)を差込むやうにしたるもの。

**しばう-の-つじ** 四方辻【名】よつつじ(四辻)を云ふ。〔信濃國の方言〕

**しばうはい** 四方拜【名】元日の早朝に天皇の清涼殿(古は、清涼殿の東庭に出御あり)て、天地・四方及び山陵を拜したまひ、天下泰平・萬民安寧・五穀豐熟・寶祚長久を祈りたまふ儀式。今は三大節の一と定めらる。百官若天皇野守鶯はや新玉の四方拜・節會・樂子・小朝拜。

**しばう-はなびし** 四方花菱【名】紋所の一。扇を花菱より厚味のあるもの。即ち略、方形をなす。

**しばう-びき** 四方引【名】しへきび(四壁引)

**しばう-ぶん** 脂肪分【名】脂肪を有する量。

**しばう-へう** 死亡表【名】『英 Mortality table』死亡率を算定したる表。

**しばう-ほけん** 死亡保險【名】〔植〕子房の側壁。

**しばう-へき** 子房壁【名】生命保險の一。保險者が被保險者の死亡したる時、一定の保險金額を支拂ふもの。終身保險。

**しばう-まさ** 四方柾【名】柱の四面が柾目を現はせるもの。

**しばうまめいたぎん** 四寶豆板銀【名】江戸時代の通貨の一。四寶丁銀と同時に鑄造し、また同時に通用し、また同じく寶の字の極印四箇ある豆板銀。縱六分・横六分・重量四匁二分、品位銀二十分・銅八十四分。

**しばうゆ** 脂肪油【名】液狀をなせる脂肪。

**しばう-らう** 芝浦【名】〔地〕東京市芝區の東京灣に沿ひたる處。「代男『八王子の榮實』

**しばうりつ** 死亡率【名】死亡數の百分率。

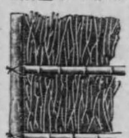
**しばうる** 四方位【名】四つの方位。東西南北。

**しばえび** 芝蝦【名】〔動〕『東京の芝浦に產する者最も名有るよりいふ』蝦の一種。大き四寸ばかり、淺海に棲息し、體色淡黃にて、細かき紋斑あり。尾は稍紅色を帶ぶ。しろえび。

**しばかうかん** 司馬江漢【名】〔人〕江戸の洋畫家。名は峻、字は君岳、春波樓、また西洋遊人と號す。鈴木春信・谷文晁に從ふ。

後、長崎に赴きて、洋畫を學び、油繪及び銅版繪を描く。花押に洋字を用ふ。我が國洋畫家の祖と稱せらる。文政元年歿す。年七十二。

**しばがき** 柴垣【名】Ⅰ柴をゆひ合はせたる垣。ふしがき。しまがき。『源氏』「なかだつしばがきして」Ⅱしばがきぶし(柴垣節)の略。Ⅲしばがきをどり(柴垣踊)の略。『狂歌集』「奴柴垣を打つ所を畫に書いて」




**しばがきのみや** 柴離宮【名】たちひのしばがきのみや(丹比柴離宮)に同じ。

**しばがきぶし** 柴垣節【名】明暦の頃流行せし小唄。その元唄は「柴垣、柴垣、柴垣ごり袖ちらと見た。振袖へ、雪のふり袖ちらと見た。絲竹初心集の北國の米春唄に出づといふ。初は、この唄に伴ひて、二人立並びて、手を打ち胸を打ちて踊るを「柴垣踊といひ、これを行ふを「柴垣を打つといひしが、後には、ただ比丘尼などの拍板(ひやうばん)に合はせて唄ふものとなれり。

**しばがきをどり** 柴垣踊【名】前條を見よ。一代男『柴垣踊は知ってかと寄ねけるに、夢にも知らずと申す」

**しばかくら** 柴神樂【名】元日に奈良春日の若宮社前にて、里人集まり、束ねたる柴を捧げて、神樂を奏すること。

**しばかはのり** 芝川苔【名】(植)『錢河國富士郡芝川に產するよりいふ』かはあをのり(川青海苔)に同じ。

**しばかぶ** 客株【名】客商なるたち、又その「人。

**しばからと** 柴唐戸【名】岡中に設くる兩開の門扉。高さ四尺、幅さ一尺四寸許なるを普通とし、煤竹(ススタケ)にて、周圍の枢(クルル)を造り、上半は割竹の菱組とし、下半は茨を斜列して、扉の兩側より煤竹にて押縁したるもの。

**しばかり** 柴刈【名】柴を刈取ること、又その人。劉逸。『川中島合戰』「我れとても、胎内から柴刈ではなければ」

**しばかり-わらは** 柴刈童【名】小供の柴刈。『萬葉』「紅に刈る柴刈童となるとも、大工わらはとなる事なかれ」

**しばーがる** 嘎る【動下二自】喧のために、聲かれたる如くなる。しやがる。

**しばがれ-と系** 嘎聲【名】しはがれたる聲。しやがれごゑ。『平家』「しはがれ聲の事。…虚空に、しはがれたる聲を以て、…と、三聲呼びて」

**しばき** 柴木【名】しば(柴)(Ⅰ)に同じ。『保元』「小舟を借りて、柴木を上に取掩ひ」

**しばぎ** 【名】(植)あかめがしは(赤芽柏)に同じ。

**しばぎり** しば桐【名】(植)むさしあぶみ(武藏鐙)(Ⅱ)に同じ。

**しばく** 柴陌【名】うつくしき道路。都の「市街。

**しばく** 柴白【名】柴と白と。

**しばく** 四白【名】家畜の四肢の下端に白毛ありて、その部の皮膚も、白色を呈せること。よつじろ。

**しばく** 詩伯【名】漢詩の大家。

**しばく** 詞伯【名】詩文の大家。

**しばく** 死魄【名】『魄は月の輪廓の光輝なき部分。朝日より少しづつ光を生ずるによりていふ』太陰暦の朔日。

**じばく** 自白【名】『自(ジ)ら白(ハク)す義』Ⅰ自己の行爲・心術を自ら申すこと。まうしひらき。自狀。Ⅱ(法)刑事にては、刑事被告人が、檢事の事實上の陳述を是認すること。民事にては、原告もしくは被告が、相手方の事實上の陳述を自認すること。

**じばく** 自縛【名】Ⅰみづから己が身を縛ること。おのれと自由を束縛すること。Ⅱ我れと己が行動を檢束すること。

**しばくさ** 柴草【名】(植)しば(柴草)に同じ。『新古今』「花ぞ見る道のしばくさ蹈分けて吉野の宮の春のあけぼの」

**しばくさ** 芝草【名】(植)しば(芝)(Ⅱ)に同じ。

**しばくし** 市舶司【名】支那唐・宋・元・明時代に、亞剌比亞人の貿易を行ふ諸港に置き役所。管船局を兼ねたる稅關の如き事務を執りたり。提舉市舶司。

**しばくーしよ** 止泊所【名】しゆくはくしよ(宿泊所)に同じ。

**しばくーらべ** 芝競【名】Ⅰ草原にて、馬を驅け競ぶること。一說に、野飼の馬を乘競ふことならんと。『太平記』「駒放つ野べのうなゐぶ芝くらべ長き目くらしこれやなごきめ」Ⅱ小供などの、葉・茅花(ツバナ)を摘み集めて、長さを比ぶる遊戲。「略。

**しばくり** 柴栗【名】しばくりあめ(柴榛雨)の粒の小さきもの。ささぐり。『松屋』「しばぐりの色づく秋の山風に梢を去らぬこのはざるかな」

**しばくりげ** 柴栗毛【名】馬の毛色の一。栗毛の一種ならんといふ。

**しばくるま** 柴車【名】しばつぐるま(柴積車)に同じ。『夫木』「峯高き牛の尾山に入る人は柴車にて降るなりけり」

**しばくれあめ** 柴榛雨【名】『俄かの大雨を利用して、柚人などの伐採したる樽に、柴などをも載せて、河に流し下す意にていふとぞ』甚しく降る雨。おほあめ。しばくり。『古語』

**しばくわう** 司馬光【名】(人)支那宋の政治家また學者。字は君實、涑水(ソクスイ)と號す。仁宗・神宗に歷任し、王安石の施政に反對す。曾て勅を奉じて資治通鑑を編す。元祐元年歿す。世に司馬溫公と呼ぶ。

**しばこうゑん** 芝公園【名】(地)東京市芝區にある公園。坪數十六萬八千坪。もと德川氏の廟所にて、老樹多し。

**しばさい** 芝栄・芝施【名】矢を射る時、矢先の芝地に人多く居て、采配を振りて、矢の飛ぶごとに聲を立つること。

**しばーさかな** 芝魚【名】『もと、江戸芝邊の漁夫の海より獲たるばかりの雜魚を賣りたるよりいふ』種種取交せたる小魚。雜魚(ゾウ)。一代男『長屋すまひの侍衆に召使はれて、朝の買物、しばざかなを籠に入れ、吾藏屋の前、この邊より品川まで、海邊、小家つづき、幾師まちといふ。小者を取りて、江戸に出す。これを芝者といふ」

**しばし** 暫し【副】少しの間。しばらく。『源氏』「しばしこそ」「に同じ。

**しばーしば** 暫時【副】しばしばしばしば。しばしば。しばしばしば。『源氏』「しばしばもものはかなかりけるかな」

**しばしば** 屢【副】『しば(暫)を重ねたるもの』しばしばしば。暫く待て、暫く待て。『古語』「世いつのまにか裝束しつらん。帶は遊のままに結ひて、しばしばしばと追ひくる」

**しばしば** 【副】次條に同じ。心中宵庚申「父も不憫に目をしばしば」

**しばしば** 【副】涙出づる時、又は眼の球邊に澁き感ありて、繁く目ばたきするさま。しばしば。

**じばーしば** 【副】Ⅰ水分の浸出するさま。Ⅱ蒼(アヲ)は強からねど、深く身にこたふるさま。しっぱり。じいはり。『源氏』「宇屋を見るもぞかみたち、身柱元からじはじは、瘧病みたる如くなり」

**しばしばーめ** 屢目【名】『しばたく(屢叩く)を見よ』悲しさをこらへて、しばたたく目附。『浄閑』「もしばしば目」

**しばしむ** 爲始む【動下二他】なしはじむ。行ひはじむ。

**しばーしん** 司馬晉【名】せいしん(西晉)に同じ。(石晉に對して)

**しばーしんめい** 芝神明【名】次條に同じ。

**しばーしんめいぐう** 芝神明宮【名】しばだいじんぐう(芝大神宮)に同じ。

**しばじめ** 爲始【名】しはじむること。「はじめ。

**しばーじやう** 志波城【名】陸中國紫波(シハ)郡日詰(ヒツメ)町の東方に在りし城。延暦二十二年の創設。安元年中藤原秀衡の弟樋爪太郎俊衡この城に居りしより、一に樋爪の館ともいへり。

**しばーしやうじよ** 司馬相如【名】(人)支那前漢の詩人。字は長卿。卓王孫の女文君を





妻とす。子虛賦を作りて、武帝に知らる。元狩六年歿す。

**しばす** 師走・四極・極月【名】『年果つの義』陰暦十二月の異稱。極月(ゴクゲツ)。

**しばすーあぶら** 師走油【名】師走の月の油。この月に油をこぼせば、火に祟(タタリ)らるとて、こぼしたる者に水をあびせて咒(ノロ)ふ俗習ありしより特にいふ。今宮心中、世にひろがりし俗し名をこしはす油が身の上にかかる涙とこぼれそひ」

**しばすーぎつね** 師走狐【名】師走の頃の狐。その羅珠に冴えて聞ゆとぞ。狂言『宋ひらが』「地紙よくとは、この紙の事でおりやる。師走狐の如く、こんこんといふほど張って」じ。

**しばすーどき** 師走時【名】しはす(師走)に同じ。

**しばすーはうず** 師走坊主【名】袁の見すぼらしくて、たよる處もなきが如き者の譬。用捨箱『袁やつやつしく、便りなげなる者をさして、師走坊主・師走浪人といふ詩の昔ありしゆゑに」

**しばすーびくに** 師走比丘尼【名】おちぶれて、袁の見すぼらしき比丘尼。『愛宮』「しはすびくにの歌の袁さよ」

**しばすーらうにん** 師走浪人【名】袁のやつれて、たよる處もなきが如きものの譬。夕霧阿波鳴渡『師走坊主、師走浪人昔は鎗が迎に出る」

**しばーすり** 芝摺【名】『しばうち(芝打)・しばつき(芝突)・しばひき(芝曳)を見よ』Ⅰ鎧の草摺(クサズリ)の最下の板。Ⅱしばうち(芝打)に同じ。『甲陽軍鑑』「それ幕は、軍旅の寶器なり。狩の幕、串をば五輻(ヤ)にあてがひ、芝摺と地の上の間、三寸に打つなり。…軍陣の時は芝打といふ。常は芝摺といふなり」

**しばすり-とろも** 柴摺衣【名】山などを分けゆくとき、柴に觸れたる衣。『古語』「岩根ふむ山のたつきの夕されば柴摺衣うちしをれつつ」

**しばーせん** 芝錢【名】寛永年間、江戸芝にて鑄造せし寛永錢錢。

**しばーせん** 司馬遷【名】(人)支那前漢の歷史家。字は子長。事に因りて宮刑に處せられ、憤懣して史談の遺志を紹ぎ、史記を作り、史家の模範となる。世に太史公と稱す。のち中書令に任じ、歿年詳かならず。

**しばーぜんかう** 芝全交・司馬全交【名】(人)德川時代の戲作者。通稱は山本藤十郎、交遊と號す。江戸芝に住し、大蘆流の狂言師を業とす。佳作多く、毎年に新作を出だし、一時山東京傳とその盛名を競ふ。寛政五年歿す。

**しばた** 柴田【名】Ⅰ(地)陸前國十三郡の一。郡役所を大河原(オホカハラ)町に置く。Ⅱ姓氏の一。足利氏の一族斯波(シバ)氏より出づ。越後國新發田(ニヒハリタ)城に據りしを以て、柴田と稱す。

**しばた** 新發田【名】(地)越後國北蒲原(カモハラ)郡にある町。新潟を距る七里。溝口氏の舊藩地。郡役所を置く。

**しばーだいじんぐう** 芝大神宮【名】東京市芝區宮本町に鎭坐する府社。祭神に伊勢大神宮の御分靈。寛弘二年の創立といふ。陰曆九月十六日を祭日とし、土生姜を商ふ。露店珠に多し。世に生姜祭・生姜市の稱あり。芝神明。

**しばたーかついへ** 柴田勝家【名】(人)武將。通稱は權六。修理亮と稱す。尾張國の人。織田信長に仕ふ。勇武にして、智略あり。越前國に封ぜられ、北陸を定む。信長の歿後、信孝と謀りて、秀吉を除かんとし、天正十一年兵を舉げて大敗し、越前國北莊(キタノシヤウ)に自殺す。年五十四。

**しばーたかつね** 斯波高經【名】(人)あしかがたかつね(足利高經)に同じ。

**しばたーきうをう** 柴田鳴翁【名】(人)心學者。名は享、字は陽方、通稱は謙藏。京都の人。その講話の妙に感じて、道に入る者甚だ多し。天保十年歿す。年五十七。

**しばたーきごろう** 柴田義董【名】(人)四條派の畫家。通稱は喜太郎、字は威伸。琴海また琴緒と號す。備前國の人。人物を巧みにす。文政二年歿す。年四十。

**しばたーげき** 柴田外記【名】(人)仙臺藩の家老。本姓は佐竹。柴田宗朝に養はる。名は朝意。中務(ナカツカサ)また內藏介と稱す。伊達宗重と、伊達式部との郡境の伊より出でて、寛文十一年原田甲斐のために、公廷にて殺さる。年六十三。

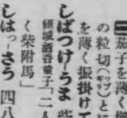
**しばたーぜしん** 柴田是眞【名】(人)畫家また詩人。初名は龜太郎。江戸の人。古瀟(コセウ)寛政に詩會を學び、後、鈴木南嶺の門に入り、四條派の畫を學び、遂に一家をなす。明治二十四年歿す。年八十五。

**しばーたたく** 屢叩く【動四他】『しばしばめ(屢目)を見よ』頻りにまたたきをなす。宇治拾遺『血のなみだを垂れて、目をしばたたきて」 著聞『目ばかりしばたたきけり」

**しばーたちと** 司馬遼等【名】(人)彫刻家。支那南梁の人。繼體天皇の十六年に來朝して、大和國高市郡坂田に住みたり。その子多須奈、その孫鞍作(クラツクリ)止利(トリ)、共に佛像彫刻家として著る。さかたでら(坂田寺)參照。

**しばーたつ** 屢立つ【動四自】Ⅰ嘗などしきりに聞ゆ。『古語』「『萬葉』「堀江漕ぐいづての舟の梶つくめ音しば立ちぬ水脈(ミヲ)早みかも」Ⅱ波しきりに立つ。『金葉』「鳥風にしば立つ波のたちかへり恨みてもなほたのまるるかな」

**しばたーふぢ** 柴田藤【名】紋所の一。下藤(ヤツフジ)の內に、一の字を容れたるもの。柴田氏の所用なり。


(ちぶたばし)

**しばたーふんれい** 柴田紋嶺【名】(人)江戸の書家。名は央、字は子華、通稱は清八郎。また偕芝とも號す。寛政十三年歿す。年四十六。

**しばーたん** 司馬談【名】(人)支那前漢の史家。司馬遷の父。世世太史たり。武帝に仕ふ。元封元年歿す。

**しばーたらう** 客太郎【名】客者を罵りていふ稱。

**しばーち** 芝地【名】しばふ(芝生)に同じ。

**しばつ** 四極・四八津・磯齒津【名】(地)四極(ヤツミ)山(Ⅱ)のある處。『萬葉』「千沼回(ヲ)より雨ぞ降りくるしばつのあまあめて編ほせりぬればへむかも」

**しーはつ** 爲果つ【動下二他】なしおふす。しつくす。『源氏』「御はらへもしはてず、さわぎたり」

**じーはつ** 自發【名】他の力を俟たず自ら發動すること。自然に起ること。

**じーばつ** 自伐【名】Ⅰ『自(ジ)ら伐(バツ)る義』己れの功に誇ること。Ⅱ『自(ジ)ら伐つ義』孟子の離婁上篇に『國自伐而後人伐之』とあり。自ら他より攻められて滅亡するやうにすること。自滅を招くこと。

**しばーついわ** 芝築地【名】芝を植ゑたる土の垣。『盛衰記』「幾內寮の芝築地の陰より、…刀二つ持ちて、海へ入る」

**しばーつかみ** 芝掘【名】梶弓にて、食指を伸べて、矢をつまむこと。

**しばーつき** 芝突【名】『しばうち(芝打)(Ⅱ)・しばすり(芝摺)・しばひき(芝曳)を見よ』突穫(ヨツ)の底。

**しばーつけ** 柴附【名】四方手(ヨツデ)の內、前輪(ヤツ)の右方に寄けたるもの。

**しばーづけ** 柴漬【名】Ⅰふしづけ(柴漬)(Ⅱ)に同じ。『萬葉』「柴漬の沈みもやらで春の雨」Ⅱ茄子を薄く櫛形に切り、茗荷の子と蓼歯の粒切(ツブギリ)とに、蓼の穗を多量に入れ、醬を薄く振掛けて漬けたる漬物。ふしづけ。『醒睡笑』「茗荷子二人談合とりどりの折に、折焚く柴附馬」

**しばーつけうま** 柴附馬【名】柴を載運ぶ馬。

**しばっーさう** 四八相【名】(佛)さんじふはちさう(三十二相)に同じ。『著聞』「四八相儀遇の勝因」

**しばーつす** 爲外す【動四他】しそこなふ。『盛衰』「われ、まことの天地(ヤツ)にうけられたる國の親ならばしはづさじと思して」

**しばーつすゐらい** 視發水雷【名】『英Observation mine』布設水雷の一種。適當の位置に沈設し、電線を以て、陸上の看守所に連ね、敵艦その上に來るを見定めて、直ちに電流を通じて、爆發せしむる裝置のもの。(觸發水雷に對して)

**じばーつすゐらい** 自發水雷【名】『英Positive mine』しさくはつすゐらい(觸發水雷)に同じ。

**じばつてき-じやうじよ** 自發的情緒【名】

〔哲〕『英 Spontaneous emotion』いうさつ

**じゆうしよ**〔有機的情緒〕に同じ。

**しばつなぎ** 芝と繋〔名〕馬を芝地にとどめ繋くこと。當後小栗判官雲雀の床の芝繋ぎとある所に乗りしづめ」「音便。

**しばつばら** 芝原〔名〕**しばはら**芝原の

**しばつぶて** 屋礫〔名〕迅速につづけざまに礫を飛ばすこと。

**しばつみぐるま** 柴積車〔名〕〔車〕刈取りたる柴を積みたる車。しばぐるま。萬葉春どりのしばつみぐるま牛をよはみ誰がふるさとのかきねしめしぞ」〔柴を束ねて。山より帰すこと。しばぐるま。

**しばつみぶね** 柴積船〔名〕刈取りたる柴を積みたる船。しばぶね。しばをぶね。萬葉「柴積船の、ところどころに行きちがひたるなど」

**しばつやま** 四極山〔名〕〔地〕〔摂津國住吉の邊の坂路なるべしといへど、今の何れの地に當るか明かならず。四八津山。磯崎津山。萬葉「しばつ山打越えくれば笠縫の島漕ぎかくるたなびく小舟」〔豐後國大分郡見兩郡の境なる海岸にある山。高さ二三四〇尺。山頂平夷にして、眺望よく、高城山址あり。一名、柴津山。高崎山。**しばつやま**〔芝津山〕夢照。

**しばつやま** 柴津山〔名〕〔地〕前條〔二〕に同

**しばつやま** 芝津山〔名〕〔地〕豐前國企救（きく）郡芝津村の西南にある山。山頂平地をなし、人家・陸田あり。古歌に詠めるは前前條〔二〕の四極（しじ）山にあらずして、この山なるべしともいふ。一名、貫（ぬき）山。しつやま。〔芝津山〕夢照。

**しばて** 芝手〔名〕芝を植ゑたる土手。しば

**しばてい** 司馬貞〔名〕〔人〕支那唐の史家。字は子正。自ら小司馬と號す。史記索隱及び補三皇本紀の著あり。

**しばてんがく** 芝田楽〔名〕芝生にて、田楽の舞を演ずること。平家「芝田楽百番、百番の一つもの」盛衰記「芝田楽踏ならせて見せ奉るべし」

**しばとり** 屋鳥〔名〕『屋鳴き鳥の義』〔一〕しきりに鳴く鳥。〔二〕**にはとり**（雞）に同じ。〔古語〕山家「もの思ひはまだ夕ぐれのままなるに明けぬと告ぐるしばどりの聲」「じ。

**しばとゐる** 芝土居〔名〕**しばて**（芝手）に同

**しばな** 芝菜〔名〕〔植〕芝菜科に屬する草。湯地に生じ、葉は宿根より叢生し、やや圭に類し、莖の先に、帶黄綠色の細花、穂狀花序をなして簇生す。その葉は、酢味噌に和して食用す。うみぜきしやう。うみにら。萬葉「さほ川の岸のつかさのしばな刈りそね在りつつも春し来らば立ちかくるがね」

**しばながしどう** 柴流銅〔名〕**ささぶき**（笹吹）に同じ。

**しばなきどり** 屋鳴鳥〔名〕**にはとり**（雞）に同じ。

**しばなく** 屋鳴く〔動四自〕しばしば鳴く。しきりになく。萬葉「御岡生の竹の林に鶯はしばなきにしを雪は降りつつ」

**しばなくわ** 芝菜科〔名〕〔植〕顯花植物。被子類草子葉門の一科。草本にして、沼澤に生ず。しさいくわ。

**しばなつ** 爲放つ〔動四他〕爲しかけたるままにして捨ておく。源氏「野風の袋に入れこめたる所によせかげ、何かあらちかなるさまにしはなちたり」

**しばに** 底土〔名〕底の方にある土。〔古語〕馬「はつにははだ赤ちけみしはにはにぐろきゆ玉三つ栗のそのなかつにを」

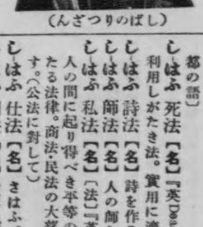
**しばの** 芝野〔名〕芝の生えてある野。ゆ砂の侍日馬「しば野の中より鳥の立つを」

**しばのう** 芝能〔名〕**たきぎのう**（薪能）に同じ。

**しばの-のの** 芝の野の〔枕〕頭音の同じきより、**しばば**屋にかけていふ。萬葉「くゝず人の若菜つまむとしばののしばしば君を思ふころかも」

**しばのへきかい** 柴野碧海〔名〕〔人〕儒者。讃岐國の人。栗山の弟。名は允升、字は應登、阿波侯に仕ふ。詩文に長ず。天保六年歿す。年六十三。

**しばのりつざん** 柴野栗山〔名〕〔人〕徳川幕府の儒官。名は邦彦、通稱は彦輔、古愚軒とも號す。讃岐國高松の人。昌平黌の教官となり、尾藤二洲・古賀精里の二人と共に、世に寛政の三博士と稱せらる。程朱の學を唱ふ。文化四年歿す。年七十二。


（んざつりのばし）

**しばはぎ** 芝萩〔名〕〔植〕〔一〕**ひめはぎ**（姫萩）に同じ。〔二〕**くさはぎ**（草萩）〔二〕に同じ。

**しばばし** 柴橋〔名〕柴にて造りたる橋。池上などに架して、雅致を添ふるに用ふ。太平記「橋柱落ちて見るも危き柴橋あり」

**しばふ** 司馬法〔名〕〔書〕七書の一。兵法を論じたるもの。支那周の司馬穰苴の說をその門弟の追輯せしものといふ。一卷。

**しばはゆし** 蜀し〔形二〕**しばはゆし**（蜀し）に同じ。〔古語〕名義抄「蜀、シハハユシ、シホハユシ」

**しばはら** 芝原〔名〕芝の生えてある原。しばふ。しばつぱら。

**しばび** 潮合〔名〕**しほあひ**（潮合）の約。

**しばび** 柴火〔名〕柴を焚きたる火。柴火の會（ゑ）〔句〕山野に遊山して、その場にて催す茶の湯。のがけ。

**しばひき** 芝引・芝曳〔名〕芝の上に曳きずる部分の意なるべし。**しばうち**（芝打）・**しばずり**（芝摺）・**しばつき**（芝突）を見よ。太刀の金具の一。鎺（はばき）と鍔金との間に伏せたるもの。

**しばひこ-じんじや** 志波彦神社〔名〕陸前國宮城郡鹽竈町に鎮坐する國幣中社。祭神は志波彦神。式内の古社にて、古來、鹽竈神社の末社と稱し、明治七年その本社に合併し、二社共に同格なり。

**しばひと** 柴人〔名〕柴を刈取る者。一代男「鹿山吹・みつとてこの三人、その比柴人のすさみにもうたふほどの女とて」五人女「柴入一荷（ぜ）をおろして、鎌を握りしめ」

**しばひめ** 芝姫〔名〕ょたか。淫實記。〔京都の語〕

**しばふ** 死法〔名〕『英 Dead letter』實際に利用しがたき法。實用に適せぬ法。

**しばふ** 詩法〔名〕詩を作る方法。

**しばふ** 師法〔名〕人の師たる道。師道。

**しばふ** 私法〔名〕〔法〕『英 Private law』私人の間に起り得べき平等の關係を規定したる法律。商法・民法の大部分は、これに屬す。〔公法に對して〕

**しばふ** 仕法〔名〕きはふ。しかた。方法。

**しばふ** 司法〔名〕〔法〕裁判の形式にて、法律を適用する統治作用。民事・刑事の裁判。〔立法・行政に對して〕

**しばふ** 諡法〔名〕おくり名を附くる法。

**しばふ** 四法〔名〕〔文〕漢詩の作法にて、起句・承句・轉句・結句の併稱。

**しばふ** 子法〔名〕〔法〕法の繼受において、摸倣によりて成立たる方の法律。〔母法に對して〕**けいじゆはふ**（繼受法）參照。

**しばふ** 芝生〔名〕芝の生えてある場所。しばち。千載「今宵れて摘みてかへらんすみれ咲く小野のしばふは露しげくとも」

**じはふ** 寺法〔名〕寺院の法度。太閤ちきり禁酒はからき寺法かな」

**じはふ** 字法〔名〕〔文〕文字・語辭に就きての法則。〔句法・章法などに對して〕

**しはふ-がく** 私法學〔名〕〔法〕私法の法理を研究する學。

**しはふ-がくしや** 私法學者〔名〕〔人〕私法學に精通せる學者。

**しはふ-ふかふ** 欺ふ〔動四自〕**しばふく**（咳く）の延。〔古語〕源氏「うちもしはぶかひたまへれば」

**しはふ-かんなう** 司法監督〔名〕財政監督の一。歳計豫算の施行後、その行爲が正當なりや否やを調査し、若し不當ならば、財務行政の長官の責任を問ふもの。我が國にては、會計檢査院の調査により、帝國議會この權を行ふ。

**しはふき** 咳・欺〔名〕しはぶくこと。せき。枕草「欺嗽、欺字亦作咳、之波不岐、肺家則成也」





**しばふき** 柴葺〔名〕屋根を柴にて葺くこと。又その屋根。

**しばふ-きくわん** 司法機關〔名〕〔法〕司法權を行ふ國家の機關。即ち裁判所。〔行政機關・立法機關に對して〕

**しばふ-きやう** 司法卿〔名〕明治十八年の官制改革前に於ける司法大臣の稱。

**しばふ-ぎやうせい** 司法行政〔名〕〔法〕司法權の行使を圓滑ならしむるために、その準備又は補助として行ふ行政。即ち訴訟手續以外の裁判所の事務及び恩赦・復權等に關する政務。司法大臣これを統轄し、合議裁判所長・區裁判所の判事（判事二人以上なる時）もしくは監督判事（判事二人以上なる時）・檢事總長・檢事正、各その權限内において、これが機關の一部たり。法務行政。

**しばふき-やみ** 咳病・欺病〔名〕しはぶく病。せきの病。〔古語〕源氏「この魂より、しはぶきやみにやはべらん」

**しばふ-きよく** 司法局〔名〕海軍省の一局。海軍に關する司法事務を扱ふ所。

**しばふく** 咳く・欺く〔動四自〕しはぶきをなす。せきをなす。しはぶかふ。しはぶる。枕中納言物語「しはぶきつつ出できたる」

**しばふ-くわん** 司法官〔名〕司法事務を扱ふ官職。即ち判事・檢事の總稱。〔行政官に對して〕

**しばふくわん-しほ** 司法官試補〔名〕判事試補及び檢事試補の總稱。

**しばふ-くわんちやう** 司法官廳〔名〕司法事務を取扱ふ官廳。即ち裁判所・檢事局等の總稱。〔行政官廳に對して〕

**しばふ-くゐき** 司法區域〔名〕司法事務の取扱に關して定めたる土地の區域。

**しばふ-けいさつ** 司法警察〔名〕〔法〕刑事裁判の準備として、犯罪人の逮捕・搜索を目的とする警察。現行法にては司法大臣の監督に屬す。〔行政警察に對して〕

**しばふ-けいさつくわん** 司法警察官〔名〕司法警察の職務を行ふ權限ある官吏及び公吏。即ち地方長官・警視總監・警視・警務長・警部・警部補・憲兵將校及びその下士・鳥司・憲兵・林務官・市長・町長・村長など。

**しばふけいさつ-ほじよくわん** 司法警察補助官〔名〕〔法〕司法警察官を補助して、司法警察の事務執行に任ずる官吏又は公吏、即ち巡査・憲兵など。

**しばふ-けん** 司法權〔名〕〔法〕統治權の一部。法律を適用する權力。裁判所にては、天皇の御名によりて、これを行ふ。〔行政權・立法權に對して〕

**しばふ-さいばん** 司法裁判〔名〕〔法〕民事及び刑事の裁判。司法事件を扱ふ裁判。〔行政裁判に對して〕

**しばふ-さいばんくわん** 司法裁判官〔名〕司法裁判を行ふ裁判官。

**しばふ-さいばんけん** 司法裁判權〔名〕〔法〕司法裁判を行ふ權限又は權力。

**しばふ-さいばんしよ** 司法裁判所〔名〕〔一〕司法裁判を行ふ權限ある裁判所。通常司法裁判所と特別司法裁判所とに分ち、通常司法裁判所は區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院に、特別裁判所は軍法會議・領事裁判等に分つ。〔二〕明治五年より同八年までの控訴院に相當す。大級裁判所の一。今する控訴院と、大級裁判所の決しがたき訴訟とを受理し、また司法卿の命を受けて、高等官と華族との犯罪を取調べしもの。

**しばふ-じけん** 司法事件〔名〕〔法〕司法事件と民事事件との總稱。〔行政事件に對して〕

**しばふ-じむ** 司法事務〔名〕司法裁判と司法行政との事務の總稱。〔行政事務・立法事務に對して〕

**しばふ-じん** 私法人〔名〕〔法〕法人の一。財産權の主體たるもの。その目的により、公益法人と營利法人と、その組織により、社團法人と財團法人とに分つ。各その條を見よ。〔公法人に對して〕

**しばふ-しやう** 司法省〔名〕各省の一。司法大臣の統轄の下に、その行政事務を取扱ふ中央官廳。大臣官房の外、民事局・刑事局・監獄局を置く。

**しばふ-しやう-さいばんじよ** 司法省裁判所〔名〕明治五年より同八年まで設置せられし司法裁判所の一。大級裁判所の裁判に對する控訴及び大級裁判所の決しがたき訴訟を受理し、また高等官及び華族の犯罪につきて、取調をなししもの。

**しばふしやう-れい** 司法省令〔名〕司法大臣の發する省令。

**しばふ-たいじん** 司法大臣〔名〕各省大臣の一。司法省の長官。裁判所・檢事を監督し、民事・刑事・戸籍等に關する事項、その他各級の司法行政事務を管理す。

**しばふ-てつづきれい** 司法手數料〔名〕司法卿が個人の請求により、特別にその事務を執る時、徵收する手數料。〔行政手數料に對して〕

**しばふね** 柴船〔名〕**しば**・**しばみぶね**（柴積船）に同じ。新古今「暮れてゆく春の淡は知らねども霞におつる宇治の柴船」源平布引瀧「折から比叡の山おろし、柴船の助もなく、水に溺るる不便さよ」

柴船の宵拵（こしらへ）〔句〕手廻（ぜん）の過ぎたることの譬にいふ語。

**しばふ-はふ** 司法法〔名〕〔法〕公法の一。司法に關するもの。即ち刑法・刑事訴訟法・民事訴訟法・破産法の總稱。

**しばふ-はん** 司法犯〔名〕〔法〕普通の犯罪の稱。〔行政犯に對して〕

**しばふ-ぶ** 司法部〔名〕明治十三年より同十四年にかけて、太政官に置かれし六部の一。恩赦及び行政裁判、その他司法上の事務執行の方法を查理し、その主務官廳の事務を監視せしもの。

**しばふ-ぶる** 咳る・欺る〔動四他〕**しばふく**（咳く）に同じ。〔古語〕源氏「このもかのもしはぶる人ども、すずろはしくて、濱風を引きありく」

**しばふぶる** 咳る・欺る〔動下二自〕前條に同じ。〔古語〕萬葉「雲がくれかくれいにきと歸りきてしはぶれ告げれをくよしのそこになければ」

**しばふる** 【動四他】しやぶる に同じ。

**しばふるひ-びと** しはぶるひ人〔名〕しはぶかひ人の誤にて、咳（がい）をする人なるべしと。續ある老人の意といふ說もあれど、假名遣違へり。**しばぶかふ**（咳ふ）參照。〔古語〕源氏「このもかのもにあやしきしはぶるひ人どもあつまりて」

**しばべや** 柴部屋〔名〕たき木を入れおく部屋。ものおき。一代男「柴部屋にしのびて、物の蔭より聞けば」風流東配置「捕へおきて、柴部屋に、羽がひじめにして」

**しばまた** 柴又〔名〕〔地〕武藏國南葛飾（かつしか）郡金町（かな）村の大字。帝釋天を祭れる題經寺あるによりて名高し。於染久松色懺實「あれが在所は、葛西（かつ）の柴又村」

**しばまつ** 柴松〔名〕小松なりともいふ。西行物語「柴松のくずのしげみにつまこめてとぶみが原に牡鹿なくなり」

**しばみ** 柴見〔名〕**しのびものみ**（忍物見）に同じ。

**しばみる** 屋見る〔動上一他〕しばしば見る。〔古語〕萬葉「あからびく數妙の子をしば見れば人妻ゆゑにわれ戀ひぬべし」

**しはむし** 吝嗇〔名〕しはき人を卑しめていふ語。しはんぼう。源氏「せむし吝嗇は名のみにして、嗇ならず」

**しばむら** 芝村〔名〕〔地〕大和國磯城（ぜ）郡纒田村の大字。德川時代に、纒田氏の陣屋ありし處。

**しはん** 師範〔名〕〔一〕てほん。模範。標式。平家「太政大臣は、一人に御範として、四海に儀刑せり」〔二〕學問・技藝を教授する役。〔三〕**しはんがくかう**（師範學校）の略。

**しはん** 四半・籌半〔名〕〔一〕布帛の正方形に裁ちたるもの。〔二〕綴の指物の一。輻と長さとを二尺と三尺との割合にて、竪長に作れる幟。四方・半幟（ばん）。〔三〕射術にて、二寸四方の板の的。くはん（九寸）參照。

**しはん** 私版〔名〕〔一〕私人の出版、又はその書物。〔官版に對して〕

**しはん** 私犯〔名〕〔法〕權權の原因となる不法行爲。

**しはん** 紫斑〔名〕紫色のまだら。紫色のよし。

**しはん** 紫鞍〔名〕傷痍えて、なほ紫色の痕跡をとどむるもの。

**しはん** 屍斑 【名】〔醫〕人の死後、漸次皮膚に變化を呈し、通常六時間乃至十二時間後、下垂する部分に生ずる斑點。下垂部の毛細管及び靜脈に、血液の多く集合するに因る。

**しはん** 詩伴 【名】詩を作る仲間。

**しはん** 齒板 【名】〔動〕軟體動物の咽喉に存する咀嚼器。

**しはん** 篩板 【名】〔植〕『英Sieve-plate』篩管の橫隔膜。所所に齒孔あり。

**じはん** 自判 【名】自身に書きたる署押又は捺したる印。

**じはん** 寺判 【名】寺院の印。寺印。

**じはん** 兒斑 【名】〔醫〕小供の皮膚に存する青色の斑。臀部・腰部に多し。

**じはん** 事犯 【名】〔法〕刑罰又は懲罰に處せらるべき所爲。

**じばん** 襦袢 【名】じゅばん(襦袢)の訛。

**しはん-おん** 四半音 【名】〔音〕『英Quarter-tone』一音即ち全音の四分の一。

**しはん-がくかう** 師範學校 【名】小學校教員となるべき人を養成する學校。北海道及び各府縣に、一校又は數校を置く。舊稱、尋常師範學校。また女子師範學校・高等師範學校・女子高等師範學校あり。各その條を見よ。

**しはん-きん** 四半斤 【名】こはんぎん(小半斤)に同じ。

**しはん-け** 師範家 【名】中古以來、學問技藝を以て、代代師範として立ちたる家。例へば、和歌における二條家・冷泉(ライ)家・飛鳥井家・藤波(ハヤ)家・三條西家、蹴鞠における飛鳥井家・藤波(ハヤ)家の類。

**しはんけい** 視半徑 【名】〔天〕『英Apparent radius』觀測者より天體の表面に引ける切線と、その天體の中心へ引ける直線とのなす角。じちょくけい(視直徑)參照。

**しはん-けういく** 師範教育 【名】初等教育及び中等教育の教員を養成する目的の教育。

**しはん-せき** 四半石 【名】〔建〕角形の石を、接目を斜にして、敷石としたるもの。玄關・車寄・正門前等に敷く。

**しはん-だい** 師範代 【名】師範(二)に代りて、門弟を教授するもの。

**しはん-ねつ** 紫斑熱 【名】〔醫〕けっぱんねつ(血斑熱)に同じ。

**しはん-ぱう** 咨坊 【名】しはき人。しはむし。けちんぼう。しはんぼ。(俚語)

**しはん-びやう** 紫斑病 【名】〔醫〕皮下の溢血より進んで、內臟に出血を起す病。

**しはん-ぶん** 四半分 【名】四つに分ちしその一。半分の半分。よついち。四分の一。

**しはん-ぼ** 咨坊 【名】しはんぼう(咨坊)の略。

**しはん-やく** 師範役 【名】師範(二)たる役。

**しはん-や** 芝矢 【名】屋外の芝生などにて、矢を射ること。

**しばや** 柴屋 【名】(一)柴葺の家。〔古語〕壬三暮れかかる峯のしばやの夕霧にたれしら雲の衣打つらん」(二)柴を積みおく家。

**しばや** 芝居 【名】しばゐ(芝居)(三)(四)の訛。

**しばや** 柴山 【名】柴の生えたる山。雜木山。後拾遺「いかばかり降る雪なればしながどりなのしばやま道まよふらん」

**しばやま** 芝山 【名】(一)(地)上總國山武(サム)郡二川村の大字。觀音寺あり、その本尊なる十一面觀音(俗に厄除大士といふ)に參詣する者多し。(二)姓氏の一。藤原姓にて、勸修寺家の支流。裔大納言實愛を祖とし、明治維新後、子爵を授けらる。

**しばやまがた** 柴山潟之山潟 【名】〔地〕加賀國江沼郡・能美二郡に跨る潟湖。周回三里二十三町。

**しばゆばり** 麻病・淋病 【名】『屢(シバ)尿(ユバリ)の義』りんしつ(麻疾)に同じ。〔古語〕和名抄『淋、字亦作麻、之波由波利、小便數也』

**しばよしかど** 斯波義廉 【名】〔人〕足利氏の臣。武藏國渋(シブ)城主斯川義鏡(ヨシ)の子。斯波義敏と同姓便の家督を爭ふ。應仁の亂、山名宗全に黨し、亂後、尾張國に赴き、濟洲(ジシ)城に卒す。一說に、文明二年陣中に卒すと。大條參照。

**しばよしとし** 斯波義敏 【名】〔人〕武將。大野義鑑の子。斯波持種に養はれ、義健の嗣となる。然るに、將軍義政、義廉を斯波氏の嗣をなしし、これと家督を爭ふ。座仁の亂、細川勝元に黨し、延德二年卒す。年六十一。前條參照。

**しばよしまさ** 斯波義將 【名】〔人〕武將。足利高經の四男。義滿の時、宿將の望を負ひて、細川頼之に代りて、執事となる。世に管領と稱す。管領の名これに始まる。義滿の薨後、義持を擁立し、應永十七年卒す。年六十一。

**じはら** 自腹 【名】(一)自分の腹。(二)自分の自腹を切る。〔句〕わが金錢を出して支拂をなす。身錢(ゼニ)を切る。自切(ジキ)をなす。「じ。

**しはらい** 四波羅夷 【名】〔佛〕次條に同

**しはらいさい** 四波羅夷罪 【名】〔佛〕『波羅夷は梵Pārājika』じゅうはんかい(四重禁戒)に同じ。

**しばらく** 暫 【名】歌舞伎十八番の一。荒事の忠臣が、揭幕より暫く暫くと聲を掛けつつ出來り、花道にてつらねを演べ、主君の危急を救ひて、惡公家の惡本を捏くことを演ずるもの。本外題は種種あり。從って、その役名も、不破伴左衞門・鎌倉權五景政・泉小次郎・石山源太・安倍宗任・巴御前等、場合によりて變更す。

**しばらく** 暫・須臾・雲時 【副】(一)少しの間。しばし。しまらく。萬葉「吉野川ゆく瀨をはやみしばらくも絕ゆることなくありてとせぬかも」(二)當分の間。かりに。〔結く〕(三)長らく。久しくややしばらく。

**しばらひ** 支拂 【名】(一)支拂ふこと、又その金。(二)國庫又は金庫より、金圓を拂ひ渡すこと。

**しはらひ-いうよ** 支拂猶豫 【名】(一)支拂を一時延期すること。(二)〔法〕商人が、商業上の債務につき、天災・事變によりて、支拂を果す能はざる場合に、債權者の過半數以上の承諾を得て、營業所の所在地又は住所地の裁判所に申請して、一年を超えざる範圍內の期間、支拂の延期を受くること。

**しはらひ-がかり** 支拂係 【名】支拂の事務を扱ふ人。

**しはらひ-せいきうしよ** 支拂請求書 【名】(一)支拂を請求する書面。(二)支拂命令官にあらずして、歲出豫算の一部の執行を命ぜられたる官吏が、金庫に對して、歲出の支出を請求する書面。その請求及び取扱上の權は、大體において、支拂命令に同じ。

**しはらひそうきん-かはせてがた** 支拂送金爲替手形 【名】〔商〕或銀行が、他の支店銀行より、我が銀行を支拂人として振出て來りし、送金爲替手形の總稱。かかる一種の形式を具有する手形あるにあらず、支拂銀行より見たる送金爲替手形の稱呼に過ぎず。

**しはらひ-たてかへきん** 支拂立替金 【名】自己に支拂を負擔すべき義務なけれども、他の仕拂をなすべき人に代りて仕拂ひたる金錢。

**しはらひ-たんたらしや** 支拂擔當者 【名】〔法〕(一)他人の支拂を引受くる人。(二)手形の支拂地が、支拂人の住地と異なるとき、支拂地に於て、支拂人に代りて、手形面の金額を支拂ふべく、その手形に記載せられたる者。

**しはらひ-ち** 支拂地 【名】〔法〕手形面記載の金額を支拂ふべく定めたる土地。しはらひばしよ(支拂場所)參照。

**しはらひ-ていし** 支拂停止 【名】〔法〕商人又は會社が、總債務の辨濟をなすこと能はずして中止するに至りたる狀態。

**しはらひ-てがた** 支拂手形 【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。當方に於て、直接に支拂ふべき義務ある手形の總稱。

**しはらひてがた-かんぢやう** 支拂手形勘定 【名】〔商〕簿記にて、支拂手形の受渡及び支拂に關する始末を整理する勘定。

**しはらひてがた-きにふぢやう** 支拂手形記入帳 【名】〔商〕支拂手形勘定記入する帳簿。支拂手形帳。

**しはらひ-てがたちやう** 支拂手形帳 【名】〔商〕前條に同じ。

**しはらひ-てんぺう** 支拂傳票 【名】〔商〕銀行會社などにて、現金の支拂をなしたる場合に、その受附掛の作製する傳票。支拂切符。支拂票。

**しはらひ-にん** 仕拂人 【名】(一)支拂をなす人、又なすべき人。(二)〔法〕振出人の委託に應じて、爲替手形又は小切手の金額を支拂ふべき義務ある者として、その手形に記されたる者。氏名又は商號を記載するを要す。

**しはらひ-ばしよ** 支拂場所 【名】(一)〔商〕債務の支拂地內に於ける、即ち支拂人の營業所、或はその住所、或はその居所など、これなり。

**しはらひ-ふのう** 支拂不能 【名】〔商〕債務者が債務を完濟する能はざる狀態。ふさいとうくわ(負債超過)參照。

**しはらひ-へいきんきじつ** 支拂平均期日 【名】〔商〕支拂期限の異なる數箇の債務を一口として、同時に支拂ふ場合に、債權者にも債務者にも公平なるべき支拂期日。その數箇の債務中、支拂期日の最も早きものの支拂期日を起算日とし、その翌日より、他のすべての債務の支拂期日に至る日數を計算し、これをそれぞれ各債務額に乘じ、その各乘積の和を、債務金額の和にて除し、得たる商を、初に定めし起算日に加ふれば、これを貸出するを得。

**しはらひ-へう** 支拂票 【名】〔商〕しはらひてんぺう(支拂傳票)に同じ。

**しはらひほしようとがき** 支拂保證小切手 【名】宛名銀行がその支拂保證をなしたる小切手。この場合、その銀行は、その小切手面に「支拂保證何何銀行」なる證印を捺(ス)す。

**しはらひほしようれう** 支拂保證料 【名】〔商〕仲買商が、その荷主に對して、賣賣を委託せられたる貨物の賣先の支拂を保證する場合に、普通の販賣手數料以外に受くる口錢。賣先資力保證料。代金支拂保證手數料。

**しはらひ-まんきじつ** 支拂滿期日 【名】〔商〕手形の支拂はるべき日、即ち手形金額の支拂を請求し得べき日。

**しはらひみさい-はいたうきん** 支拂未濟配當金 【名】〔商〕銀行會社又は商店が各株主又は資本主に未だ配當せざる純益金の總額。

**しはらひ-むじゅんびてがた** 支拂無準備手形 【名】〔商〕手形面に記載せる金額を支拂ふ資力なくして發行せる手形。

**しはらひ-めいれい** 支拂命令 【名】〔法〕(一)區裁判所の督促手續において、債務者に對し、債務の辨濟を促すため、裁判所の發する命令。債務者は、この命令送達の日より、一定の期間內に義務を履行するか、又は裁判所に異議を申立てざる時は、この命令によりて、强制執行を受くるものとす。(二)仕拂命令官が、その官署に屬する豫算を使用する際、國庫をして、現金の支出をなさしむる證書。

**しはらひめいれい-くわん** 仕拂命令官 【名】〔法〕仕拂命令を發する權限を有する官吏。即ち各省大臣、及びその委任を受けたる官吏。

**しはらひ-もとうけだか** 仕拂元受高 【名】特別會計にて、歲出の支出に充つる資金。

**しはらひもとうけだか-さしひきぼ** 仕拂元受高差引簿 【名】特別會計に於ける仕拂元受高・仕拂請求書受領濟額・仕拂額を登記するために、金庫出納役の備ふる帳簿。

**しはらひよう** 仕拂豫算 【名】各省大臣が、毎年度決定の豫算定額に基き、仕拂命令官の仕拂命令を發し得べき限度額を定めて、大藏大臣及び會計檢査院に送付する文書。仕拂豫算書。

**しはらひよさん-しよ** 仕拂豫算書 【名】前條に同じ。

**しはらふ** 支拂ふ・仕拂ふ 【動四自】金錢を拂ひ渡す。しはらひを鎖す。

**しはらふつ-ぼさつ** 四波羅密菩薩 【名】〔佛〕金剛波羅密(東方)・寶波羅密(南方)・法波羅密(西方)・羯磨波羅密(北方)の四菩薩の稱。

**しばり** 縛 【名】(一)縛ること、又その物。(二)〔商〕借主に一部返濟の能力生じても、約定の期限に全部を返濟するまでは、これを許さざる貸附金。〔銀行の語〕(三)ぜったいばい(絕賣場)に同じ。〔花合の語〕

**じばり** 【名】おもむろに壓迫するさま。じいはり。じうはり。

**しばり-あぐ** 縛上ぐ 【動下二他】からみあぐ。くくりあぐ。

**しばりきゆう** 芝離宮 【名】東京芝區濱松町にある離宮。明治維新前、紀伊藤の濱屋敷なりしが、明治四年有栖川宮、於邸となり、同九年離宮に指定せらる。

**しばり-くび** 縛首 【名】兩手を後方に縛りて、首を斬ること。女殺油地獄「主人の金四ツ寶三貫目偸り引負ひ、この節季に立てねば、切腹か縛首」國花語士鑑「せめて親兄の敵縛首を討つぞと聲をかけて」

**しばり-つく** 縛附く 【動下二他】縛りて、放れねやうにす。

**しばり-なは** 縛繩 【名】縛りたる繩。日本武尊吉備鳥「すはといはば、縛繩はり切つてくれんものと」

**しばり-め** 縛目 【名】縛りたる結び目。なはめ。天の網島「人だちすれば、侍立寄って、しばり縛る結び目。

**しばる** 縛る 【動四他】(一)束ねむすぶ。括(ク)る。宇治拾遺「しばられやせんずらん」(二)逃亡を防ぐために、繩にてくくりいましむ。捕縛す。

**しばる** 芝居 【名】(一)芝生(シバフ)に居ること。〔古語〕夫木「しばるする山松かげのゆふすずみ秋おもほゆる日ぐらしの聲」甲陽軍鑑「御座敷の內、又芝居などならば」(二)芝生に同じ。源月抄「利休の露地は、芝居にて、飛石なし」(三)敵味方の對陣して、闘ふ場所。國「出雲の阿國が、京都の四條河原の芝居にて演じ始めしよりいふ」歌舞伎。演劇。(四)しばゐざ。しばや。勸進帳「隅田川をして、芝居中を泣かせた。さりとては名人ぢや」(五)芝居小屋。芝居。(六)ちょっと芝居をする」

**しばる-いしやう** 芝居衣裳 【名】俳優が狂言中著用する衣裳。

**しばる-いり** 芝居入 【名】俳優の芝居に通ふこと。若風雲「明くれば芝居入、暮には樂屋がへり」

**しばる-うた** 芝居唄 【名】元祿前後に、上方の劇場にて、役者の舞踊に合はせて用ひし唄。後には、上方にても、江戸の劇場と同じく、杵屋一派の長唄を用ふるに至れり。

**しばる-がかり** 芝居掛 【名】芝居がかること。

**しばる-がかる** 芝居掛る 【動四自】芝居の狂言に似たる振舞を爲して爲す。

**しばる-がへり** 芝居歸 【名】芝居を見に行きて歸ること、又その時。若風雲「芝居歸りの濱の水茶のかかに呼びこませ」

**しばる-かんばん** 芝居看板 【名】劇場の正面、櫓の下に列べて掲ぐる看板。

**しばる-き** 芝居氣 【名】芝居の狂言めかさんとする心。事をたくみて興がる氣質。しばるごころ。藝氣。

**しばる-ご** 芝居子 【名】劇場に出づる若き俳優。元祿頃の語。若風雲「芝居子銀一枚になる」

**しばる-こくるひ** 芝居子狂 【名】芝居子に溺れて、遊蕩に耽ること。若風雲「懇はじま

り、芝居子狂、是れぞ出家に偏はりし遊興」

**しばゐごころ** 芝居心【名】しばゐぎ(芝居氣)に同じ。

**しばゐごと** 芝居事【名】■芝居の狂言。五人女「都にて見覚えし芝居事、種となりて、俄かに說を作り」■芝居の興行。世間子息形氣「芝居事に加はって、年年の損」■芝居を戲似たる所作。

**しばゐごや** 芝居小屋【名】芝居を演ずる建物。しばゐざ。劇場。

**しばゐざ** 芝居座【名】前條に同じ。

**しばゐさかもり** 芝居酒盛【名】芝生の地にて、酒宴をすること。曾我「各こと、かしこにおり居て、芝居酒盛をぞしたりける」

**しばゐすぎ** 芝居過【名】芝居の狂言の終りたる時刻。五人女「芝居過より、松屋といへる水茶屋に居流れ」

**しばゐせん** 芝居錢【名】芝居見物のとき仕拂ふ錢。劇場の木戸錢。醒睡笑「能を見物せんとて、芝居錢十文づつはし」國、金剛太夫、勸進能に、芝居錢三十文づつ取りければ」

**しばゐぢやや** 芝居茶屋【名】劇場の附近に在りて、看客の案内・食事、その他の用事を辦する茶屋。

**しばゐばなし** 芝居噺【名】芝居道具並びに下座(ゐ)鳴物を用ひて、世話物を講ぜし一種の講談。三遊亭圓朝の創意に係る。

**しばゐばんづけ** 芝居番附【名】芝居の狂言の外題役割・場面の編等を記したるものの。綴りて冊子とせるものと、一枚摺なるものとあり。もんばんづけ(紋番附)・やくわりばんづけ(役割番附)参照。

**しばゐもの** 芝居者【名】■劇場にて、種種の事を勤むる人の總稱。■俳優。太閤「夜あるく春のなどりや芝居者」

**しばをぶね** 柴小舟【名】しばつみぶね(柴積船)に同じ。夫木「柴小舟まぼにかけなゆふしてて西の宮人風祭しつ」

**しばをんこう** 司馬溫公【名】(人)しばくわん司馬光に同じ。

**しび** 【名】(動)かめのこ(龜手)の異稱。

**しび** 強・誣【名】しふること。こじつけ。蒐黑、まつがへりしひにてあれやも三つ栗の中すぎてこず待つといはむやも」

**しひ** 椎【名】■(植)殼斗(ゆ)科に屬する常綠喬木。高さ三四丈に達し、葉は長楕圓形にて、淺き鋸齒あり。表は深綠、裏は黃褐色をなす。雌雄同株にて、雄花は黃なる穗狀をなし、實は擬の殼に包まれ、喰ふべし。かしひ・しひがし。■椎の實。書紀「椎拾ふ橫川(ゐ)のちごのいとまかな」

**しひ** 施肥【名】肥料を作物に與ふること。

**しひ** 侈靡【名】おごり。驕奢。

**しひ** 市費【名】市に關する費用。市の負擔すべき費用。

**しひ** 私費【名】■一私人のはらひ入費。(官費・公費に對して)■じひ(自費)に同じ。

**しひ** 是非【名】ぜひ(是非)に同じ。

**しひ** 鮪【名】(動)眞黑(マグ)の大なるもの。萬葉「あらたへの藤江の浦にしび釣るとあま船とよみ」

**しひ** 鴟尾・鴟尾・蚩尾【名】【建】『張師正の倦游錄に「漢以宮殿多災、術者言、天上有二魚尾星一、宜レ象二之一、於是飛魚形、以鎮之、唐以來寺觀廨宇尙有レ爲二飛魚形一、尾指上者、不レ知何時易名曰二鴟尾一」とあり』建築上の飾物の一。宮殿などの棟の端に取附けたるもの。鯱鉾(シヤチ)の類。とびのを。くつがた。三代實錄「大極殿西鴟尾、半折而落焉」

**しひ** 紫薇【名】(植)さるすべり(紫薇)に同じ。

**しひ** 紫微【名】しびせい(紫微星)の略。太平記「紫微・北辰の拱陣も斯くやと覺えて嚴重なり」

**しひ** 至微【名】極めて微細なること。又、聽秀(字は紫芝)を評して、その眉字を見れば、人をして名利の心を去らしむといひし故事に本づく。『』他人の顏色の美稱。はいし(「拜芝」参照。

**しひ** 四美【名】四の美とすべきもの、即ち良辰・美景・賞心・樂事。

**じひ** 次妃【名】正妃に次ぐ妃。

**じひ** 侍婢【名】側に仕ふる女。こしもと。

**じひ** 自費【名】自らまかなふこと。自辨。

**じひ** 慈悲【名】■(佛)他に樂を與ふる心と、他の苦を拔く心と。諸佛・菩薩の一切衆生を愛念したまふ心。拔苦(ガ)・與樂(ラク)。だいじひ(大慈大悲)参照。觀氏「佛のしたまふ方便は、じひをもかくして、かやうにこそはあなれ」■あはれみ。なさけ。玄殺神地獄「親の始は皆人の子、子は親の慈悲で立ち、親は我が子の孝で立つ」慈悲具足【句】(佛)慈悲の心を備へたること。平家「慈悲具足の山王」

**じひ** 侍婢【名】側に仕ふる女。こしもと。

**じひ** 自費【名】自らまかなふこと。自辨。

**じひ** 慈悲【名】■(佛)他に樂を與ふる心と、他の苦を拔く心と。諸佛・菩薩の一切衆生を愛念したまふ心。拔苦(ガ)・與樂(ラク)。だいじひ(大慈大悲)参照。觀氏「佛のしたまふ方便は、じひをもかくして、かやうにこそはあなれ」■あはれみ。なさけ。玄殺神地獄「親の始は皆人の子、子は親の慈悲で立ち、親は我が子の孝で立つ」慈悲具足【句】(佛)慈悲の心を備へたること。平家「慈悲具足の山王」

**じひ** 慈悲の裝(ヨウ)【句】■僧となり、又は法衣を身に纏ふこと。盛衰記「放逸の利劍、慈悲の鞘を佩すること」■僧侶。

**じひ** 莩尾【名】『書經の堯典に「鳥獸莩尾」とあり』鳥獸の交尾することを。つるむ。

**じひ** 耳鼻【名】耳と鼻と。

**じひいんこうくわ** 耳鼻咽喉科【名】醫學上の一分科。耳鼻咽喉に關する一切の醫術。

**じひえ** 慈悲衣【名】ころも。法衣。忍辱鎧。

**じひがし** 椎樫【名】(植)しひのき(椎木)に同じ。

**じひがたり** 强談【名】しひて爲すはなし。しひごと。(古語)高野「いなといへどしふるしひのがしひがたりこの頃聞かずてわれ戀ひにけり」

**じひがひ** 慈悲貝【名】買ふべき必要はあらざれども、賣手に同情して買ふこと。一代女「折節の秋の淋しき女郎數多、じひがひにして、太夫出羽を慰めける」

**しひがもとさいまろ** 椎本才麿【名】(人)大阪の俳人。大和國の人、また和泉國の人ともいふ。名は則武、字は少文。甘泉庵・松笠軒・蕉雨翁などの號あり。井原西鶴の門に學ぶ。元文三年歿す。年八十三。

**しひかわら** 尸毘迦王(梵 Śibi)【名】(佛)しびだいわう(尸毘大王)に同じ。

**じひき** 字引【名】■漢字を集めて、その字義を說きたる書物。字書。■じとよ(辭書)に同じ。

**しひ-きゆう** 紫微宮【名】■しびゑん(紫微垣)に同じ。■ここの。皇居。

**しひ-じと** 强言【名】■しひたり(强語)に同じ。(古語)高野「いなといへど語れとのもせこそしひいは申せしひごとをのる」■無き事實を、有りといひなすこと。讒言。「誣言」

**じひ-さう** 慈悲相【名】(佛)佛・菩薩の備へし慈悲の相貌。梁塵「慈悲相は眼にあり」

**しひ-さを** 椎梓【名】椎の木にて作りたる水棹なりと。紀「椎樠・シヒサヲ」

**しひし** 篠【名】しんし(篠)に同じ。

**しひ-しば** 椎柴【名】■叢生せる椎の木。新撰萬葉「位山まだしひしばの蔭にゐて我が登るべき道はいそがず」■喪服の色。つるばみ染。千載「もろ人の花咲く春をよそに見てなほしぐるるは椎柴の袖」■喪中。

**しひしばがき** 椎柴垣【名】椎柴の生垣(ヲ)。太平記「椎柴垣の隙あらはなる山ぶつの庵」

**じひ-しん** 慈悲心【名】慈悲の心。なさけぶかき心。慈入弁往生「慈悲心あまって、身の薩埵」

**じひしん-とう** 慈悲心鳥【名】(動)『鳴く聲、じひしんといふやうに聞ゆとて名づく』ぶっぽうそう(佛法僧)(ロ)に同じ。

**しひ-せい** 私費生【名】じひせい(自費生)に同じ。(官費生・公費生に對して)

**しひ-せい** 紫微星【名】紫微宮に屬する星。紫微。

**じひ-せい** 自費生【名】教育費を自辨する生徒。私費生。(官費生・公費生に對して)

**じひ-せいと** 自費生徒【名】前條に同じ。(官費生徒・公費生徒に對して)

**じひ-せまる** 强迫【名】【動四自】しひて迫る。むりに迫る。强迫す。

**しひた** 椎田【名】(地)豐前國築上(チクジヤウ)郡に屬する町。中津街道の宿驛。織道宇佐線の一驛。濱町とも稱す。

**しひたいわう** 尸毘大王(梵 Śibi)【名】(佛)釋迦が前生(ゼンセイ)にて、王たりし時の稱呼。その時、菩薩の行を修したりしが、





業に逐はれたる譬(ヒ)を救ふために、おのが身の肉を割きて、鷹に與へしことあり。尸毘迦王。尸毘王。慈悲記「尸毘大王としては、地に代って、命をも捨てたまひけり」

**しひたく** 虐く【動下二他】しへたく(虐く)に同じ。

**しひ-たけ** 椎茸【名】■(植)擔子菌類に屬する菌。椎・栗などの木に生ず。香氣高し。人工によりて、楢・柏・楢などにも生ぜしむ。傘の外面は紫黑色或は黑褐色にて、裏面と柄とは白し。生にても、乾しても食ふべし。「香蕈」■次條の略。

**しひたけ-たぼ** 椎茸髢【名】■『德川時代の御殿女中の髪の髢を椎茸の傘のごとき形に張出ししよりいふ』かたはづし(片外)の異稱。■奥女中の異稱。

**じひたひ** 自額【名】芝居の髮(カツ)の一。白髮の額の如く、額帽子を用ひざるもの。

**しひ-たれ** 【名】しみったれを云ふ。(奥州の方言)

**しひ-ちゆうだい** 紫微中臺【名】くもうどうぐうしき(皇后宮職)に同じ。(孝謙天皇の御時、一時改められし稱呼)

**しひつ** 試筆【名】■こころみに書くこと。■かきそめ(書初)に同じ。俳諧「庭訓は春の初の試筆かな」

**しひつ** 紙筆【名】紙と筆と。筆紙。

**しひつ** 史筆【名】歷史を書く筆づかひ。

**じひつ** 自筆【名】自ら書くこと、又その書きたる物。自書。大鏡「刀の先して、自筆に書かせたまへるなり」

**しひつ-く** 强付く【動下二他】しひて說きつく。無理に勸む。

**しひつ-くわ** 紙筆畫【名】(美)紙を捻(ネ)りて筆に代へ、これを墨に浸して描く繪。支那より傳はれるもの。

**しひ-て** 强ひて【副】むりに。おして。古今「濡れつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば」

**しひと** 鬼【名】しうと(舅)に同じ。(古語)名遺珍・蟬翁・シヒト

**しひと** 死人【名】死にたる人。息の絕えたる人。死人(ジニン)。

**しひとい** 死人色【名】青ざめて凄みを帶びたる色。

**しひと-かつぎ** 死人擔【名】早稻などを擔ぐものを見りていふ語、又その擔ぎ方。即ち普通のと反對なる擔ぎ方。丹鶴叢書「合點だ合點だ、死人擔をぶっぐちけ」

**しひと-がへり** 死人返【名】芝居にて、俳優の立ちたるまま、うつむけに轉(ウタ)ること。

**しひと-のまくら** 死人枕【名】(植)うつぼぐさ(靫草)に同じ。

**しひと-ばな** 死人花【名】(植)まとじゆしそ(「語」)に同じ。

**しひと-め** 姑【名】こうさめ(姑)に同じ。(古語)

**しひな** 粃【名】穀の實の瘠せて、成熟十分ならざるもの。■果物の實の成熟せぬもの。

**しひ-ないしやう** 紫微內相【名】孝謙天皇の御代に置かれし官職の一。兵事を總轄せしもの。大臣に准ぜられ、大納言藤原仲麿これに兼任したれど、叛を謀りて誅せられし以後、つひに廢絕す。

**しひな-せ** 粃【名】しひな(粃)(ロ)に同じ。(古語)初名「粃・之比奈世」

**しひな-つむぎ** 椎名紬【名】河內國椎名より綾出だしし紬。

**しひ-なり** 椎形・椎樫【名】兜の鉢の頂の尖りたる形のもの。

**しひ-ね** 榴【名】こぶ(瘤)に同じ。(古語)初名「榴・之比禰」

**しひね-つ-ひこ** 椎根津彥【名】(人)神武天皇の御代の功臣。初名は珍彥(ヒコ)。東征の際、椎根津彥となる。大和國造に任ぜらる。

**しひ-の-き** 椎木【名】(植)しひ(椎)(ロ)に同じ。

**しひ-の-み** 椎實【名】■椎の果實。■しひのみふで(椎實筆)の略。

**しひのみ-だま** 椎實彈【名】尖頭を有する楕圓形の銃彈。(圓彈(ダン))に對して)

**しひのみ-ふで** 椎實筆【名】穗の形、椎の實に似て、太書(ダイ)に用ふる筆。「じ」。

**しひ-ふし** 鮪節【名】まぐろぶし眞黑節に同じ。

**しひん** 四品【名】人を、年齡によりて、幼(六歲以上)・少(十六歲以上)・壯(三十歲以上)・老(五十歲以上)の四種に區別せしもの。

**しひん** 詞品【名】(文)しし(詞姿)に同じ。

**しひん** 尿瓶【名】しゆびん(溲瓶)に同じ。

**じひん** 自擧【名】しゆびん(溲瓶)に同じ。結ぶこと。和山拔「行水いたし、髮もとき、自擧に收上げ」■能(ノウ)にて、結髮せし時代に、役者の平生の結髮のままにて、登場すること。

**じひん** 慈愍【名】なさけ。あはれみ。慈悲憐愍。維摩天象甘露雨「大師慈愍を垂れ、我れを誘ひたび給へ」

**しひん-せき** 泗濱石【名】『書經の禹貢篇に「嶧陽孤桐、泗濱浮磬」とあり、傳に「泗水涯水中有レ石、可二以爲一磬」とあり』支那泗水の涯より出づといふ石。樂器の磬(ケイ)に用ふ。平家「焦熱地獄より取傳へし四濱石も、この山にありとこそ候へ」

**しひんばいばい** 試品賣買【名】(商)みほんばいばいの見本賣買に同じ。

**じひんもの** 自擧物【名】能(ノウ)にて、自費のままにて登場する役。例へば、「烏帽子折」「望月」「鉢木」の前仕手(ヅカ)の類。

**じひめ** 次姬【名】大食會の時、御膳に奉仕する第一の采女に次ぎて、取次の役をなす第二の采女。しんどり。

**しひや** 椎谷【名】越後國刈羽(カリハ)郡にあり。北陸街道の一驛。堀氏の舊城地。

**しひやう** 詩評【名】詩歌を評すること、又その文。

**しひやう** 死病【名】必ず死ぬと定まれる病。なほらぬ病。しにやまひ。女殺油地獄「者婆でもいかぬ死病」

**じ-ひやう** 時評【名】當時の出來事の評論、又その文。

**しひやう** 時病【名】その時の世の中の弊害。

**しひやう** 四拍子【名】笛・太鼓・大鼓(ダイ)・小鼓(ヒヅ)の四種の樂器にて、拍子を取ること。さんびやうし(三拍子)参照。

**しひやう-し** 四拍子【名】(音)『英Quadruple time Common time』平等拍子の一。二拍子の重複せるものにて、一少節に拍數四を含み、第一拍は强聲、第二拍は弱聲、第三拍はやや强聲、第四拍は弱聲なるもの。

**しひやくよ-しう** 四百餘州【名】(地)『圖書編に「呂東萊紫微詩話云、李芳州鄴・汝州太守二詩、安得二吾泉四百州一、皆如二此邦二千石一」とあり』支那全國の州の概數。本朝三國志「張良は石公が草履取、その張良につづく者四百餘州になかりし」

**しひ-ゆく** 强往く【動四自】しひてゆく。むりにゆく。貫之集「足曳の山のかひとりん」

**しひら** 蹈【名】うはも(上衣)に同じ。(古語)源氏「白き衣の、いひしら子すすけたるに、きたなげなるしびらゆひつけたる」

**しひらんと** 《英Brilliant》【名】(音)商音の摩遊音の一。即ち舌論を上齒に近づけ、その間に俠路を作りて、氣息を摩擦せしめて發する音。m・n・ng 及び s・z・sh の諸音はこれに屬す。喉音。

**しひり** 痺【名】■しびれ(痺)の轉訛。博多小女郎波枕「しびのきれは痺の妙藥」■能(ノウ)の狂言の一。太郎冠者、淀鯉を買ひに行けと命ぜられ、作病して行かず、ふるまひの供と聞きて、直ちに病癒ゆることを作

れるもの。

**しびりくそ** しびり糞【名】しばしば大便を催すこと。びりぐそ。

**しびる**【動下二自】痺せちぢまる。縮小する。〔古語〕 翠毛「みづづきもせずいづきて、御腹ただしひれにしひれて、例の人の腹よりも、むげにならせたまひぬ」

**しびる** 痺る【動下二自】血液の循環鈍くなりて、神経の感覺を失ふ。「言」

**しびる**【動他】小便したたる。〔豐後國の方言〕

**しびれ** 痺【名】しびるること。麻痺。

**しびれ** 痺が切れる【句】永倦□に同じ。

痺を切らす【句】 **Ⅰ** 長く坐りて、足をしびれさす。 **Ⅱ** 待ちくたびる。待ちどほに思ふ。 **Ⅲ**『貴ふ方の人が待ちくたびるる意にていふ』物惜みして、容易に渡さず。

**しびれい** 紫微令【名】紫微中臺の長官。〔李謙天皇の御字、一時改められし稱呼〕

**しびれうなぎ** 痺鰻・電鰻【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。形、鰻に似、大さ三尺乃至六尺に達し、全體黄褐にして、斑紋あり。神經中樞に發電組織ありて、强き電氣を發す。南米の淡水に產す。えれきうなぎ。でんきうなぎ。

**しびれえび** 痺鰕・麻魚【名】〔動〕軟骨類に屬する魚。形赤鰕(かび)に似、體色は黑灰。頭の兩側に、數多の六角柱狀物より成る發電機ありて、電氣を發し、攻防をなす。我が國現地の近海に產す。

**しびれぐすり** 痺藥【名】麻醉せしむる藥。麻醉劑。麻藥。

**しびれなまづ** 痺鯰・電鯰【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。亞弗利加洲ニイル河に產す。體の長さ二三尺、全身の皮下に發電器を有し、これに觸るれば、電擊を感ずでんきなまず。

**しびれいと** 四尾連湖【名】〔地〕甲斐國西八代(やしろ)郡蛭ケ嶽の中腹にある湖水。周圍十七町半。富士八湖の一。

**しびれーめ** 痺目【名】視力を失ひたる眼。〔古語〕 名義抄「眩、シビレメ・シヒタリ・カタメシヒ・メカチ・カタメシヒタリ」

**しびわう** 尸毘王【名】〔佛〕しだいわう(尸毘大王)に同じ。

**しびゑん** 紫微垣【名】支那の天文學の星座の一。北極の周圍に位し、北極五星(太子・帝・庶子・后宮・天樞)・北斗七星以下三十九の小星座を含み、三台星を含める太微垣及び天市垣と合はせて、三垣の稱あり。天帝の居の所と見做され、天子・天位に譬へられたり。紫微宮。

**しふ** 集【名】詩歌・文章を集めたる書物。枕物語「集など書寫すに、本に罷つけ事」 增無「集にもやさしき歌多く侍るべし」

**しふ** 濕【名】しめること。

**しふ** 濕を惡みて下(もと)きに居る【句】『孟子の公孫丑上篇に「仁則榮、不仁則辱、今惡辱而居不仁、是猶惡濕而居下也」とあるに本づく』惡名を嫌ひながら、善行を偽さぬ譬。〔諺語〕

**しふ** 執【名】深く思ひこむこと。執著心。執念。 蕉氏「この世にしふとまるべきことなしと、心づかひをせしに」

**しふ** 子婦【名】子の妻。よめ。

**しふ** 氏譜【名】氏族の系譜。「尊ぶ御。

**しふ** 師父【名】 **Ⅰ** 師父父と、 **Ⅱ** 父の如く

**しふ** 師傅【名】 **Ⅰ** もりそだつること、又その人。 **Ⅱ** もり。かしづき。

**しふ** 四府【名】左近衛府・右近衛府・左兵衛府・右兵衛府の併稱。

**しふ** 紫府【名】 **Ⅰ** しふきゆう(紫宮)に同じ。

**しふ** 詩賦【名】詩と賦と。かくし男。

**しふ** 私兒【名】まをとこ。

**しふ** 紙符【名】紙片に書きたる護符。

**しふ** 紙布【名】紙絩(ぢ)を緯(よこ)とし、經(たて)に瓦斯絲又は絹絲を用ひて織りたる織物。弊城國白石には、天具帖(ぢょう)を、伊豆熱海にては、雁皮紙絩を用ひたるものを產す。紙布織。

**しふ** 强ふ【動上二他】無理になす。押して行ふ。 蕉葉集「いなといへどしふるしひのがしひがたりこのごろ聞かずてわれ黙ひけり」

**しふ** 認ふ・固ふ【動上二他】〔前條の語の義〕無きことを、ありといひなす。事實を曲げていふ。こじつく。附會す。

**しふ** 癡ふ【動下二自】器官の作用失す。玉葉「目しひたる龜の浮木にあふなれやたまたま得たる法のはしばね」 謡曲「御眼も暗みしか、御耳も聾(ろ)ひたるか」

**しふ**【名】あぼ丈(擔荷)を云ふ。〔信濃國松本の方言〕

**しふ** 澀・澁【名】 **Ⅰ** しぶき味。 **Ⅱ** あか(垢)に同じ。〔古語〕 **Ⅲ** かきしぶ(柿澁)の略。

**しふ** 使部【名】 **Ⅰ** 古、太政官八省以下の官衙に、雜事に使はれし小役人。左右あり、今の小使の如き類。その下に直丁と雇使丁とあり。つかはれべ。 **Ⅱ** 明治元年より同十八年まで、各官署にて、公文の授受などに從事せし判任官、或は等外吏。

**しふ** 支部【名】本部の管理に屬し、本部と分離して、事務を取扱ふ所。(幹部に對して)

**しふ** 四分【名】 **Ⅰ** 十分の四。四割。 **Ⅱ** しさうくわん(四等官)に同じ。

**しふ** 四部【名】四種の部類。

四部の弟子【句】〔佛〕しぶゆ(四衆)に同じ。 使然「四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり」

**しふ** 四武【名】陣形の、四方に備へたるもの。 太平記「四武の例碑、堅を碎きて、百戰の勇力、變に應ずしかば」

**しふ** 篩部【名】〔植〕『英Pilum』木部と共に維管束の一部をなすもの。莖にありては、樹皮の內側、木部の外側に位し、根にありては、これと交互に放射狀をなして並列す。その中に篩管を有し、また時には、靱皮纖維ありて、これを强固ならしむるものあり。「名。

**しふ** 祠部【名】じんぎくわん(神祇官)の唐匠稜(部部に對して)

**じふ** 習【名】〔佛〕しふげ(習氣)に同じ。

**じふ** 堅符【名】印鑑。御璽。 太平記「天子の璽符を頸に懸け、白馬素車に乘って」

**じふ** 慈父【名】 **Ⅰ** いつくしみ深き父親。 **Ⅱ** 父親の尊稱。

**じふ** 慈婦【名】 **Ⅰ** いつくしみ深き婦人。(ぢょ)。

**じふ** 舅婦【名】あによめ。あひよめ。

**じふ** 自負【名】『自は恃む意』じまん(自慢)に同じ。「とも。

**じふ** 十・拾【數】五と五とを合はせたる數。十が一二(ぢゅう)【句】十の中の一二。殘餘の僅少なること。

十中八九は【句】『漢書の朱博傳に「平晝輕重十中八九」、三國志の周宣傳に「宣之鈴ゐ參、十中八九、世以比建平之相」炎などとあり』次條に同じ。

十に八九は【句】『漢書の宣帝紀に「書產大耗什八九」、同書丙吉傳に「至今什八九矣」などあり』十中の八九は。大方は。九分九厘は。

十の八九は【句】前條に同じ。

十の尻を曲げる【句】『十の字の末を曲ぐれば七の字になり、七は質と音の通ふよりいふ』貧におく。まげる。〔俚語〕

**じふあく** 十惡【名】 **Ⅰ** 支那唐の法律にて、大罪と定められし十種。即ち謀反・謀逆・謀叛・惡逆・不道・大不敬・不孝・不義・內亂の併稱。はちぎやく(八虐)じあく(五惡)參照。 **Ⅱ**〔佛〕十戒を守らぬこと。十惡業(ぢゅう)參照。

十不善業(十善)【句】じちじ(七支)參照。 謡曲「九品蓮臺間雖二下品一、應足、惡十惡一兮、翁引接」

**じふあくごふ** 十惡業【名】〔佛〕前條 **Ⅱ** に同じ。

**じふあくごにん** 十惡人【名】十惡業(ぢゅう)を犯せる人。 平僧太子傳「佛法は僞之、讒言し嫉ひし五逆罪、十惡人とは我れ我れ親子」

**しふあぶ** 澀鮎・澁鮎【名】さびあゆ(錆鮎)

**しふいた** 四分板【名】長さ一間、厚さ四分(實際は三分位)にて、幅一尺內外なる杉材の板。下見(ぢょう)板・天井裏板などに用ふ。

**しふいち** 四分一【名】 **Ⅰ** よついち。四分の一。 **Ⅱ**〔化〕銅と銀との合金。四分の一の銀を含める意の名稱なれども、品位必ず





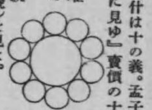
しも一定せず、或は少許の金を加へたるもあり。おほろがね。 **Ⅲ**〔建〕『一寸角の四分の一なるべしといふ』入隅(ぢゅう)の部分角柱どのもの。

**四分一の家**【句】一町の四分の一の狹き邸宅。古、大臣の邸は、一町を占むる割合なりしにつきて、貧素なるをいふ。〔古語〕 大鏡「この大臣のみぞ御ぞうしうちに、六十よまでおはせし。四分一の家にて、大葉したまへる人なり」

**じふいち** 十一・什一【名】 **Ⅰ** 十分の一。十が一。 **Ⅱ**〔數〕じひしんてう(慈悲心鳥)に同じ。

**じふいち** 什一【數】『什は十の義。孟子及び史記の越世家などに見ゆ』實價の十分の一。「什一の利」

**じふいちえう** 十一曜【名】紋所の一。下の圖を見よ。


(うえちいふじ)

**じふいちがう** 十一號【名】〔佛〕じふがう(十號)を見よ。

**じふいちくわつ** 十一月【名】年の第十一にあたる月。しもつき。

**しふいちぐわつ**・**ゑ** 十一月會【名】しもつき ゑ(霜月會)に同じ。

**じふいちけい** 十一經【名】〔書〕じふいつけい(十一經)に同じ。

**じふいち**・**にんそく** 四分一人足【名】永倦。

**しふいちにんそくやく** 四分一人足役【名】戰國時代に、諸侯の人民に課したる賦役の一。

**じふいちぶん** 十一分【名】十分(ぢゅう)以上なること。普通以上又は豫期以上にて、滿足すべきこと。なほ强めて、十二分ともいふ。 矢口鷹「目ごとの注進に、一度のわるい沙汰もなく、十一分の味方の勝」

**じふいち**・**めん** 十一面【名】〔佛〕次條の略。 賢宮狩獵七惡黙「抑當時の本尊は、聖德太子の前生、舍衛國にて作り給ひし十一面」

**じふいちめんくわんおん** 十一面觀音【名】〔佛〕次條に同じ。

**じふいちめんくわんぜおん** 十一面觀世音【名】〔佛〕『梵Ekaṃ-śīṣa lokeśvara(阿利也嗟迦娜舍目佉の譯語』六觀音の一。面の十一あるもの。

(しんおぜんわくんめちいふじ)

即ち本體の面の外、頭上に、九面あり、その中央面の頂には又一面あり、面ごとに、慈悲・怒(ぢゅう)・嘲笑などの相を現す。十一面觀世音を念ずる時に唱ふる呪文、大・小の二呪あり。 慶雲寺「大日眞言百遍、十一面眞言百遍」

**しふいちめん**・**たい** 四分一面體【名】〔鑛〕『英Tetartohedral form』〔鑛〕對稱の關係完全に現れずして、完面體の四分の一の面數にて圍まるる形。

**しふいち**・**らふ** 四分一鎭【名】四分一 **Ⅱ** を接合するに用ふる鎭。

**じふいちわ** 十一位【名】 **Ⅰ**〔佛〕十地と妙覺位との總稱。 **Ⅱ** 武家の格式の順序、即ち第一に將軍の一族、第二に大名、第三に守護、第四に外樣(ぢょう)、第五に評定、第六に御供衆、第七に申次(ぢゅう)、第八に奏方、第九に國人(ぢょう)、第十に奉行、第十一に未男(ぢょう)と立てしし俗稱。

**じふい**・**けい** 十一經【名】〔書〕支那の十一部の經書。即ち九經に孝經・論語を加へたるもの。じふさんきやう(十三經)參照。

**じふい**・**しゆう** 十一宗【名】佛教の十一の宗派。即ち俱舍・成實・律・法相・三論・華嚴・眞言・天台・禪論・淨・淨土の總稱。

**じふいんえん** 十因緣【名】〔佛〕十二因緣中、未來に屬する生(ぢょう)と老・死とを除きたるもの。

**しふいろ** 澀色・澁色【名】澁柿のごとき色。うすがきいろ。

**しふうち** 士風【名】士人の氣風。好尙。

**しふう** 詩風【名】詩の格調。

**しふ**・**うちは** 澁團扇・澁團扇【名】柿澁を塗りたる下等の團扇。かきうちは。 風俗文選「蔡左「なに思ふ長雪醒の澁團扇」

**しふうん** 濕雲【名】しめりたる雲。 太平記「濕雲油然として雨を降らす事、國土に普し」

**しふうるか** 澀鰯鮎・澁鰯鮎【名】『うるかは、澁き味を賞するものになるよりいふ』うるか(鰯鮎)に同じ。「ること。

**じふえい** 集英【名】すぐれたる者を集むる。

**じふえう** 十曜【名】紋所の一。九曜に更に一つの星を加へたるもの。

**しふおんかん** 集音函【名】『英Sonnder room』電信にて通信する際、敎筒の音響が同時に起りし時、相互の混雜を防ぎ、また通信の祕密を保護するために、通信擔任者の一方に、音響符號を集中せしむる裝置。

**しふかい** 拾芥【名】『漢書の夏侯勝傳に「經術苟明、其取青紫、如俛拾地芥耳」とあり』 **Ⅰ** 塵芥をひろふこと。 **Ⅱ** 自己の拾集したる物の謙稱。

**じふかい** 集解【名】數多き解釋を一所に集めたるもの。しふげ。

**じふかい** 十戒【名】〔佛〕じっかい(十戒)を見よ。

**じふかい** 十界【名】〔佛〕じっかい(十界)を見よ。

**しふかい**・**せう** 拾芥抄【名】〔書〕『じふかい(拾芥)』を見よ』漢文の雜錄にして、歲時・歲運・十二律・二十四氣・物忌等の事より音樂・經史・文筆・諸社寺・錢文・蔗物・賣買・五色・飲食・方角・養生等の類を記せるもの。六卷。藤原實熙(ぢょう)の著。一說に、祖父公賢の撰に基づきて增補せるものなりと。

**じふが** 十號【名】〔佛〕佛總を讚歎して名づけし十種の尊號、即ち如來・應供(ぢょう)等正覺(ぢょう)・明行足(ぢょう)・善逝・世間解(ぢょう)・無上士・調御丈夫・天人師・佛陀・世尊の併稱。この內、無上士・調御丈夫を、無上士と調御丈夫との二名目に分ち、世尊を除きて、總名とし、以て十の數に充つる說もあり。又、無上士と調御丈夫とを分ちたる上に、世尊をも加へて、十一號とも立つ。

**しふが**は 澁川【名】 **Ⅰ**〔地〕上野國群馬郡にある町。高崎市の北四里。 **Ⅱ**〔地〕河內國の舊郡の一。明治二十九年、廢せられて、甘草・白朮(ぢょう)・胡黃(ぢょう)の粉を調合したる粉藥。昔、寺にて奏(ぢょう)を出す前に、湯に入れて先づ奏したり。

**しふかがし** 澁かがし【名】〔植〕まとばしに同じ。

**しふ**・**かき** 澁柿・澁柿【名】成熟しても、味の澁き柿。醂(ぢょう)し、又は干して食ひ、又柿澁を取る原料に供す。しぶっかき。 吉野御女無「御所柿と澁柿とは皮もかいでも知れるもの」

**しふかき**・**はら** 澁柿原・澁柿原【名】一面に澁柿の生じをる處。 蕉葉「玲瓏「鳩吹く」や澁柿原の蕎麥ばたけ」

**しふ**・**がく** 習學【名】ならひまなぶこと。

**しふ**・**かす** 澁滓・澁滓【名】柿の澁を取りたるあとの滓。 蕉葉「正秀「澁滓や鳥も食はず寒ばたけ」

**しふ**・**かたびら** 澁帷子・澁帷子【名】柿澁をひきたる帷子。元祿の頃まで流行せり。

**しふ**・**がっしやう** 四部合唱【名】〔音〕『英Four-voiced chorus』四音部より成る合唱。合唱中の最も普通なる形式にして、男聲二組(一は低音、一は次中音)と、女聲二組(一は中音、一は高音)と、又は男聲四組、又時には、女聲四組より成る。

**しふがっそうきよく** 四部合奏曲【名】〔音〕『英Quartet』四箇の樂器にて奏する曲。第一バイオリン・第二バイオリン・ビオラ・セロの四箇を用ふる絃樂四部最も普通にして、又ホルン四箇・コルネ。ト四箇などを用ふる吹樂四部もあり。

**しふがっとう** 澁河島・澁河島【名】雅樂左方の一。隋の煬帝、汴澁河にて作らしめしものといふ。我が國にては、中古の大法會に於ける行道に屢この樂を奏したり。舞なし。

**しふ**・**かは** 澁皮・澁皮【名】 **Ⅰ** 樹の幹又は果實の表皮。 **Ⅱ** 茄ぬけせめ顏の肌。 蕉葉「澁皮に表はしあだいそれた江戸の水」

「澁皮が剝(へ)ける【句】容貌が、やや麗はしくなる。

**しふかは** 澁川【名】 **Ⅰ**〔地〕上野國群馬郡にある町。高崎市の北四里。 **Ⅱ**〔地〕河內國の舊郡の一。明治二十九年、廢せられて、

中河内郡の一部となる。㊁姓氏の一。足利氏の一族。足利泰氏の子義顯を祖とす。

**しぶ-かはこ** 澀革子・澁革子【名】竹の網代(ゐじろ)の上を紙帳にして、澁を引きたるはこ。

**しぶかはすけざゑもん** 澁川助左衛門【名】〔人〕しぶかはるくさう(澁川六藏)㊁に同じ。

**しぶかはばんごらう** 澁川伴五郎【名】〔人〕江戸の柔術家。名は義方。關口氏業(ぎょう)に學びて、遂に一家をなす。澁川流柔術の祖。寶永元年歿す。年五十一。

**しぶかはふじわり** 澁川太織【名】上野國群馬郡なる澁川町附近より製出する太織。

**しぶかはりう** 澁川流【名】柔術の一派。澁川伴五郎を祖とす。

**しぶかはろくざう** 澁川六藏【名】〔人〕天文家。名は舜治。泰海と號す。通稱は六藏また助左衛門。暦學に精し。正德五年歿す。年七十七。㊁(三代)。字は敬直。和漢の學、及び蘭學に通ず。德川幕府の天文方見習となり、御書奉行を兼ぬ。小東に蟄れ、禁錮せらる。天保十年歿す。年三十五。

**しぶ-がふ** 集合【名】㊀あつまること。㊁(兵)あひ。㊂あつめ合はすること。㊃(兵)離散せる兵軍を集圍すること。

**しぶ-がふ** 習合【名】『習は積重ぬる義』㊀二つ以上の宗教の教理を折衷すること。㊁しぶがふけう(習合教)の略。

**しぶがふいし** 集合意志【名】〔哲〕英(Collective will)個人が團體を形成する時、その相互の關係より起ると考へらるる意志。卽ちその團體内の多數の個人の智識・經驗が、或は衝突し、或は融合し、或は同化して成立するものにして、その各個人は、又これによりて感化支配せらる。

**しぶがふくわ** 集合果【名】〔植〕ふくくわ(複果)に同じ。

**しぶがふけう** 習合教【名】神・佛兩教の調和折衷を圖れる教說。

**しぶがふさい** 集合罪【名】〔法〕同種類の行爲を繰返し、又は繰返すを目的とするに由りて構成する犯罪。

**しぶがふさいがいほけん** 集合災害保險【名】〔商〕同一事情の下にある多數の者を包括して、被保險者とする災害保險。

**しぶかしんたう** 習合神道【名】三部神道の一。神・儒・佛の三教を折衷して、立てたる神道の一派。

**しぶがふ-しやしん** 集合寫眞【名】多人數を一圖として撮影する寫眞。

**しぶがふ-しよ** 集合所【名】くわいがふところ(會合所)に同じ。

**しぶがふせつ** 習合說【名】〔哲〕こんせいせつ(混成說)に同じ。

**しぶがふたい** 集合體【名】集團のものの集合して成立ちたる物體。

**しぶがふたい** 集合隊【名】〔兵〕軍隊の運動發起前、若しくは戰鬪後、狹小なる地域中に集合する隊形。

**しぶがふ-ぶつ** 集合物【名】箇箇の物體が集合して成れる物。

**じぶがふます** 十合枡【名】中古より近古に亙りて使用せられたる一種の桝。容量は使用地及び時代に依りて各異なれども、何れも今日の十合、卽ち一升桝よりは甚だ少量なり。

**しぶがふ-めいし** 集合名詞【名】〔語〕『英Collective noun』箇箇の物件の集合して、一事物をなせる名詞。例へば英語のarmy(軍隊)・class(級)・class(階級)・class(讀會)・nation(國民)の類。西洋諸國の語にては、これが說明語にこの名稱を立つる必要あるが故に、特に別の規定あるが故にも、我が國語及び支那語の如きには、その必要なし。

**しぶがふ-れんず** 集合レンズ(英Converging lens)【名】〔理〕しうれんれんず(收斂レンズ)に同じ。

**しぶ-かみ** 澁紙・澁紙【名】柿澁を塗りたる紙。敷紙又は包に用ふ。かきがみ。

**しぶき** 習氣【名】『來の習慣。

**しぶき** 集義【名】『是集義所生者、非一義而襲取之也』とあるに本づく。『義を積重ねること。

**しぶき** 集議【名】數多の人が集まりてなす評議。

**しぶき** 繁吹・頻吹【名】㊀しぶくこと。㊁しぶかれて飛散する水氣。飛沫。

**しぶき** 澁菜【名】〔植〕そくだみ(蕺菜)に同じ。和名抄に「澁、之布木・來名也」

**しぶき** 澁木・澁木【名】楊梅(やまもも)の皮。楊梅皮。ももかは。

**じぶき** 什器【名】『史記の五常記に「作二什器於壽丘」とありて、註に「素隱曰、什器、什數也、蓋人家常用之器具非一、故以十爲數、猶今云二什物一也」とあり。什は十の義』要用なる器物。必要なる道具。什具。什物。

**じぶき** 十義【名】『禮記の禮運篇及び晏子春秋に見え、又、荀子には「立二天學一設二庠序一修二六禮三明二十教一」とありて、註に「十教卽ち十義」とあり』儒教にて、父は慈に、子は孝に、兄は良に、弟は悌に、夫は義に、婦は聽に、長は惠に、幼は順に、君は仁に、臣は忠に、一說には、君は令に、臣は共に、父は慈に、子は孝に、兄は愛に、弟は敬に、夫は和に、妻は柔に、姑は慈に、姉は聽なるべきことの十箇條の德目の併稱。十教。

**しぶき-あめ** 繁吹雨・頻吹雨【名】しぶきとなりて降る雨。

**じぶきう-の-づ** 十牛圖【名】悟道見性(分)の順序を、牧童の牛を索めて、家に歸るに譬へ、十種の圖に描きたるもの。卽ち尋牛、見跡、見牛、得牛、牧牛、騎牛歸家、忘牛存人、人牛俱忘、返本還源、入鄽垂手の十相。尋牛より騎牛歸家までは心法俱有の境界。忘牛存人は法空・心有、人牛俱忘は、心法雙空。返本還源と入鄽垂手とは直空妙有の意を表せるものにて、各圖樣何れも圓輪の中に畫くが中に、人牛俱忘は、圓輪のみにて、何物も畫添へず、反本還源は、花笑ひ、水靜かなる狀を描く。支那宋の禪僧廓庵志遠(師遠とも書く)の作なりといふ。石鼓の夾和尙と壞納の璉和尙は、これに和を造り、天台の智旭はこれが註疏を作れり。

**じぶき-かんぢやう** 什器勘定【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。商店・會社などの家具・什器を制理するもの。備品勘定。

**しぶきく-わいしよ** 集義外書【名】〔書〕しふぎわしよ(集義和書)を見よ。

**しぶ-きん** 集金【名】金錢を集むること、又その金錢。

**じふ-きん** 十錦【名】じつきん(十錦)を見よ。

**しぶきん-いうびん** 集金郵便【名】郵便の一。差出人の要求により、指定せられたる金受領書、又はそれに相當するものを添付するを要す。

**しぶきん-がかり** 集金係【名】集金を掌ること、又その人。

**じぶきん-で** 十錦手【名】じつきんで(十錦手)を見よ。

**しぶきん-にん** 集金人【名】自己又は他人の債權によりて、金錢を取集むる人。

**しふ-ぎやう** 執行【名】しゅぎやう(執行)を見よ。

**しぶ-きゆう** 紫府宮【名】仙人の居處。紫府。

**しぶ-きよく** 渋曲【名】『渋の字の音一にしふ』㊀しありてまがれること。波の形をなすこと。ひだ。㊁〔地〕『英Folding』地殼收縮の結果なる、造山力又は噴火等に因りて起りたる地層の波狀。

**しぶ-きよく** 四部曲【名】〔文〕『英Tetralogy』三部曲に、なほ滑稽を主とせるサチュロス劇(Satyrdrama)卽ち我が國の能(分)に對する狂言の如きものを添へたる稱呼。四部作。四部劇。

**しぶきよく-ひく** 渋曲谷【名】〔地〕『英Folded valley』渋の字の音、一にしふ』構造谷の一。渋曲の四所なる谷。

**しぶきよく-さん** 渋曲山【名】〔地〕『渋の字の音、一にしふ』次條に同じ。

**しぶきよく-さんがく** 渋曲山嶽【名】〔地〕『英Folded mountain』渋の字の音、一にしふ』構造山嶽の一。渋曲の隆起せる部分なる山嶽。渋曲山。

**しぶきよく-さんみやく** 渋曲山脈【名】〔地〕『英Folded mountains』渋の字の音、一にしふ』渋曲の隆起せる部分の山脈。地球上の長大なる山脈は、大抵この部を成す。

**しぶきよく-しよ** 拾玉集【名】〔書〕慈鎭和





尙の歌集。七卷。

**しぶきよとう** 集魚燈【名】魚類を誘ひ寄するために燃す篝火。火を慕ふ魚類の習性を利用し、古くは松材を燃料とせしが、近來石油燈又はアセチリン瓦斯を用ふ。

**しぶきわしよ** 集義和書【名】〔書〕『しふぎ(集義)を見よ』問答體の書簡の體名交文にて、文教殊に陽明學に關する自說、並びに廣く經世濟民に關する方法を述べたるもの。十六卷。熊澤蕃山の著。なほ同人の著にて、この書の續篇とも稱すべきものに、集義外書十六卷あり。

**しぶ-ぎゐん** 集議院【名】明治二年に公議所を廢して、設置せし議政機關。公議を執りて、萬機を決する爲め、公議人を集めて會議せしめし所。同四年左院の所管となり、同六年廢せらる。

**しぶぎゐん** 市部議員【名】府縣會議員の一。市部より選出せられたるもの。(郡部議員に對して)

**しぶく** 私服【名】私人常用の著物。(官服に對して)

**しぶく** 私腹【名】我がはら。じばら。私腹を肥す【句】公事にたづさはれるを利用して、私利を營む。

**しぶく** 私福【名】しり(私利)に同じ。

**しぶく** 紙幅【名】紙のはば。

**しぶく** 雌伏【名】この上なき幸福。

**しぶく** 『後漢書の趙温傳に「丈夫當二雄飛一、焉能雌伏」とあり』時機の到來を待ちつつ、他の人の下に屈伏してあること。(雄飛に對して)

**しぶく** 澁苦・澁苦【名】㊀音調などのなめらかならぬこと。㊁味澁くしてにがきこと。

**しぶく** 集句【名】詩の一體。古人の句を集合融會して作る一篇の詩。

**しぶく** 繁吹・頻吹【動四他】風類りに强く吹く。宇治拾遺、風にしぶかれて」

**しぶく** 澁く・澁く【動四自】しぶる。とどこほる。遲まる。「古語」 續撰集、霜枯の蘆間にしぶく釣舟や心もゆかぬわが身なるらん」

**しぶく** 【動四他】㊀無理に伴ふ。しよびく。㊁行李などを外部を包み、題にて括る。(石見國の方言)

**じふく** 字腹【名】『英Patrix』活字の字母を造る基となるべき、模型の文字。父型。

**じふく** 時服【名】㊀時候に相應したる衣物。時衣。㊁王朝時代に、皇親以下諸臣に賜ひし春秋もしくは夏冬の服料。また德川時代に、將軍・諸侯より、春秋毎に臣下に賜ひし縮入の小袖。

**じふく** 什具【名】じふぐ(什器)に同じ。

**しふくいんしよ** 四福音書【名】〔書〕新約全書中の馬太(マタ)傳・馬可(マク)傳・路加(ルカ)傳・約翰(ヨハネ)傳の併稱。キリスト教教僕の本源たるもの。ふくいんしよ(福音書)參照。

**しふくさ** 羊蹄菜【名】〔植〕ぎしぎし(羊蹄菜)に同じ。「古語」 和名抄、羊蹄菜、之布久佐、一云、志」

**じふくぢつ** 十九說法【名】〔佛〕法華經普門品(ふもん)の中に說かれたる、十九回の說法。平安十九說法の秋の月、照らさぬ胸もなかるべければ」

**しふくち** 澁口・澁口【名】慳貪(ケン)なるもの。いひ。にくまれ口。「豊臣秀吉、重れて屋根でさかったら、四足くくって、西の洞院へ流してくりよと……猫にまで澁口の」 重修太閤記、首が落馬いたさうぞと、澁口いふも、茶の湯者を鉢に持つたる身のならひ」

**じふくつう** 兒腹痛【名】あさばら(後腹)㊁に同じ。

**じふく-どよう** 十九土用【名】夏の土用の特に十九日間のこと。(十八土用に對して)さよう(土用)參照。「代々、十九土用と十九日とは、人皆淺ぎかれ、夏なき國もがな、汗かかぬ里もありやと云うて叶はぬ處へ」 夫婦異稟、夏の日絕えがたく、殊に十九土用にして、岩水・心太でもくれかねて」

**じふく-にち** 十九日【名】愚者の隱語。(江戸時代、天明頃までの語)只今御笑草、この頃京城明神地内に山猫の茶屋ありて、此所の蜻蛉の方言ばかの事を十九日と隱語にいへり。ばかの字十九日に似たればなり」

**じふく-ぬの** 十九布【名】十九たばば(一束は八十本)の絲綛を用ひて織りたる布。卽ち一幅の中に、絲綛一千五百二十本ありて、組織きはめて緻密に、外觀美麗なり。主に弓袋などに用ひたり。

**じふくもん-だな** 十九文店【名】享保の頃、小間物・小道具などを、何れの品も現金十九文づつにて、安賣せし店。今も日本橋區日本橋通二丁目の西方の横町に、十九文横町とあるは、その跡なり。

**しぶくり** 澁くり・澁くり【名】じぶくること。じぶつくり。

**しぶくり-や** 澁くり屋・澁くり屋【名】じぶくる人。じぶくりやすき性質の人。

**しぶくる** 澁くる・澁くる【動四自】すねて怒る。わがままに、腹を立つ。「鬼になってじぶくる奴は、石頭遊んでどやさた」

**じふくれう** 時服料【名】王朝時代に、春秋又は仝夏二季に賜はる衣服の料。

**しふくわい** 集會【名】あつまり。よりあひ。集會。會合。會集。

**しふくわい** 集會・結社の自由【句】〔法〕大日本帝國憲法が日本國民の上に認めたる自由權の一。法律の範圍内において、集會結社をなすも、禁制せられざること。

**しふくわい** 集塊【名】かたまり。

**しぶくわい** 市部會【名】市と郡との經濟を分別したる市縣にて、市部特別の經濟を議決するために、市部議員のみにて組織す府縣會。(郡部會に對して)

**しふくわい-がん** 集塊岩【名】〔地〕『英Agglomerate』火山灰質又は熔岩質のために膠結せられたる火山岩塊より成れる一大岩塊。その近傍における火山岩塊以外、種種の岩片をも混ずるため、判明なる層理なし。火山附近に多し。この岩石所在の地方は、浸蝕によりて、奇勝を呈すること多し。我が國の妙義山・耶馬溪の類これなり。

**しふくわい-ぢやう** 集會場【名】集會する場所。

**しふ-くわいらう** 祠部外郎【名】神祇大副(ぢんぎ)の唐名。

**しふくわ-しふ** 拾菓集【名】〔書〕邪曲を集めたるもの。一卷。俗明空の編。

**じふくわつ** 十月【名】一年中の第十にあたる月。かんなづき。

十月に、心無き人を頼むな【句】十月は、日の短き時なれば、思慮なき者に用事を頼むな。(諺語)

十月の小春(ぢ)【句】十月は、氣候春に似たり。(諺語) 徒然、「十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ」

十月の小六月(ぢ)【句】十月は、六月頃の氣候にも似たるほどに暖きことあり。(諺語) 續紀事始、「秋も過ぎゆく十月の小六月とて、温かや」

十月の投木(ぢ)【句】十月は、木を植うるに適したる月にて、投捨ておきても生育すべ。(諺語)

**しふ-くわん** 習慣・習貫【名】㊀ならはし。しきたり。風習。慣習。㊁〔菅〕『英Habit』個人が常に同一の傾向を有する性情又は行爲。㊂〔法〕くわんふ(慣習)㊁に同じ。

**しふくわん** 四分官・四部官【名】しぶくわん(四等官)に同じ。

**じふくわん** 十願【名】〔佛〕『普賢(ぢ)の十願』を見よ。

**しふくわん-せい** 習慣性【名】〔理〕くわんせい(慣性)に同じ。

**しふくわん-はふ** 習慣法【名】〔法〕くわんしふはふ(慣習法)に同じ。

**しふくわん-ふうたい** 習慣風袋【名】〔商〕くわんしふふうたい(慣習風袋)に同じ。

**しふくわん-わりびき** 習慣割引【名】〔商〕くわんしふわりびき(慣習割引)に同じ。

**しふ-げ** 集解【名】じふかい(集解)に同じ。

**じふ-けう** 十教【名】じっけう(十教)に同じ。

**しふ-げき** 襲擊【名】おそひうつこと。不意討。

**しふげき-たい** 四部擊【名】〔文〕しぶきよく(四部せんとする軍隊の一部隊。

**しふ-げふ** 習業【名】職業又は學業を習ふこと。修業。

**しふげふ-しや** 習業者【名】習業する人。

**しふ-けん** 集權【名】權力を一所に集むること。(分權に對して)「中央集權」

**じふけん** 執見【名】〔佛〕己が心に執持して離さざる見解。

**しふこ** 集古【名】古物を集むること。

**しふこ** 澀語・澁語【名】しぶる言語。ともることば。

**じぶこ** 什伍【名】Ⅰ軍隊にて、十人又は五人の組合。Ⅱ隊伍。軍隊。

**じふこ** 十語【名】〔書〕竹取物語・空穂物語・伊勢物語・狭衣物語・浜松中納言物語・夜寝覚物語・源氏物語・浜千鳥物語・夜の寝覚物語・浜松中納言物語・狭衣物語・源氏物語・水鏡・伊勢物語の併稱。

**十語**・五草【名】〔句〕前條の十種の物語と、徒然草・枕草紙・四季・御筋の記・御湯殿の記の五書との總稱。德川時代には、高貴の人人の間に、これを婦入道具として、集櫛に飾る風習あり。

**じふこう** 十講【名】〔佛〕じっこう(十講)を見よ。

**じふこかく・けい** 十五角形【名】〔數〕『英 Quindecagon』十五邊より成る直線形。

**しふこ・じっしゅ** 集古十種【名】〔書〕我が國古代の器物・書畫(金石・刀銘などの、當時現存せしものを十七部門に分ち、谷文晁等にその形を模寫せしめ、寸尺・出所などを詳記せしもの。八十五卷。松平定信の著。

**じふこ・しやうぐわつ** 十五正月【名】じふにちしやうぐわつ(十五日正月)に同じ。じふ・かもじ。

**じふこ・しゅう** 十五宗【名】〔佛〕佛教の十五箇の宗派。即ち十宗に大念佛宗・一向宗・時宗・日蓮宗・禪宗を加へたる稱呼。じふさんしゅう(十三宗)參照。

**じふこしよ・こんげん** 十五所權現【名】熊野の新宮に祀れる十五社の神を、本地垂迹(ほんぢすいじゃく)說に由り、權現として呼ぶ稱。本宮の十二所權現と同じ神に、伊勢・住吉・出雲の三神を加へたるもの。じふにしよこんげん(十二所權現)參照。

**じふこそん・くわんおん** 十五尊觀音【名】〔佛〕正觀音・千手觀音・馬頭觀音・十一面觀音・准胝(じゅんでい)觀音・如意輪觀音・不空羂索(ふくうけんじゃく)觀音・白衣觀音・葉衣觀音・水月觀音・楊柳觀音・阿摩提觀音・多羅觀音・青頸(しゃうきやう)觀音・香王菩薩觀音の總稱。

**じふだいこ・だいじ** 十五大寺【名】『延喜式・拾芥抄及び塵添壒嚢抄に見ゆ』十五の大なる寺、即ち七大寺に藥師寺・大后寺・不退寺・法華寺・超證寺・招提(ちょうだい)寺・宗鏡寺・弘福寺を加へたる稱呼。又、大后寺・不退寺・超證寺・宗鏡寺・弘福寺を除き、本元興寺・東寺・西寺・四天王寺・崇福(すうふく)寺を加へてもいふ。じちだいじ(七大寺)・じふだいじ(十大寺)・にじふだいじ(二十五大寺)・じふにだいじ(十五大寺)參照。大寺・奈良は七大寺・十五大寺など見てしらぶるに」

**じふにちがゆ** 十五日粥【名】正月十五日、年中の疫氣を除くとて食ふ小豆粥(あづきがゆ)。望粥(ぼうがゆ)。

**じふにちしやうぐわつ** 十五日正月【名】正月十五日、即ち小豆粥(あづきがゆ)を食ふ日。

**じふ・こふ** 十刼【名】〔佛〕じっこう(十劫)を見よ。

**じふ・こんがう** 執金剛【名】〔佛〕『何れも昔手に金剛を執ればいふ』Ⅰ胎藏界の三部の中、金剛部の諸衆の稱。持金剛。金剛手。Ⅱ諸天・諸佛を警護する夜叉(やしゃ)神。

**しふこんがうじん** 執金剛神【名】〔佛〕手に金剛杖を執りて、帝釋天の宮門を護る夜叉(やしゃ)神。執金剛夜叉。金剛手。金剛力士。

**しふこんがう・やしや** 執金剛夜叉【名】〔佛〕前條に同じ。

**しふこんがう・りきし** 執金剛力士【名】〔佛〕前前條に同じ。

**じふこ・や** 十五夜【名】Ⅰ陰曆十五日の夜。三五の夕。滿月の夜。望(ぼう)の夜。Ⅱ陰曆八月十五日の夜。秋は空氣中の水蒸氣漸く減じ、月光明ふなる故に、この夜、觀月の宴を開く。仲秋。名月の夜。芋名月。じふさんや(十三夜)參照。Ⅲ名香の一。明月よりも油强く、香風丸く强し。Ⅳ(ありあけ(有明))に同じ。

**じふさ** 十座【名】〔佛〕『十席に分ちて、法華十講)に同じ。『法華經を講ずるよりいふ』ほっけじっこう(法華經)に同じ。

**しふさい** 拾採【名】拾ひ採ること。拾ひあつめること。

**じふさい** 十齋【名】〔佛〕じっさい(十齋)を見よ。

**しふさう** 四不像【名】〔動〕有蹄類に屬する哺乳動物。鹿の族にして、支那に產し、牡の角、先づ同長に二分岐し、その一方主幹に相當する枝の、更に同長に二分す。

**しふさく** 習作【名】〔佛語Shū-sa 英Study〕藝術家が、創作の練習として作ること、又その作れるもの。

**しふ・さん** 集散【名】集むると散ずると。集まると散ずると。

**じふさん・がた** 十三潟【名】〔地〕『若木川を初めとして、十三の川注ぎ入るより名づく』陸奥國北津輕郡と西津輕郡とに跨る潟。東西二里・南北一里半・周回六里餘。湖の西部は鹹くして、東部は淡し。

**じふさんがふます** 十三合枡【名】中古に用ひられし桝の一種。その容量は、今の一升二合五勺餘に相當すといふ。

**じふさん・きやう** 十三經【名】〔書〕易經・詩經・書經・周禮(しゅうらい)・儀禮・禮記(らいき)・左傳・公羊傳(くようでん)・穀梁傳・孝經・爾雅・論語・孟子の總稱。また爾雅・孟子を除きて、老子・莊子を加へたる總稱。

**じふさん・くわいき** 十三回忌【名】人の死後、十三年目の正忌。十三年忌。十三年。

**じふさん・くわつ** 十三月【名】『十二月の次の月なればいふ』しそうぐわつ(正月)の異稱。小町舞、心さ(十三月の春日かな」

**じふさんけい** 十三經【名】〔書〕じふさんきやう(十三經)を見よ。

**じふさん・こえ** 十三越【名】〔地〕じふさんたうげ(十三峠)(二)に同じ。

**じふさん・じくわい** 市部參事會【名】市部會・都部會の區別を設くる府縣において、市部のみの經濟に關し、府縣參事會の職權を行ふために設くる會議機關。府縣知事・府縣高等官・參事會員及び市部會にて選擧したる府縣名譽職參事會員を以て組織す。

**じふさん・しふ** 十三州【名】〔地〕富士山の頂上より一目に見ゆといふ四方の十三箇國。野州・富士おろし十三州の標かな」

**じふさん・しゅう** 十三宗【名】〔佛〕Ⅰ現に我が國に行はるる佛教諸宗、即ち華嚴宗・天台宗・眞言宗・法相宗・律宗・淨土宗・臨濟宗・曹洞宗・黃檗宗・眞言宗・日蓮宗・時宗・融通念佛宗の併稱。Ⅱ支那の佛教の宗派なる毘曇(びどん)宗・成實(じょうじつ)宗・律宗・三論宗・涅槃(ねはん)宗・地論(ちろん)宗・淨土宗・禪宗・攝論(しょうろん)宗・天台宗・華嚴(けごん)宗・法相宗・眞言宗の併稱。

**しふさん・しゅぎ** 集產主義【名】〔經〕そうがふしゅぎ(綜合主義)に同じ。

**じふさんだい・しふ** 十三代集【名】〔書〕十一代集中、八代集を除きたるもの。即ち新勅撰・續後撰・續後拾遺・古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今の十三部の歌集。

**じふさん・だいゐん** 十三大院【名】〔佛〕次條に同じ。

**じふさん・だい・ゐ** 十三代會【名】〔佛〕胎藏曼陀羅の中央なる中臺八葉院、東方の遍知院・降三世院・南方の金剛手院・除蓋障院・北方の觀音院・地藏院に、更に二重にその外圍をなせる外金剛部院と四大護院とを加へたる稱呼。

**じふさんだい・ゐ・ばさつしやうじゆ** 十三大會菩薩聖衆【名】〔佛〕十三大會の曼陀羅に現れたる菩薩。即ち中臺八葉院の九尊・遍知院の七尊・降三世院の三十九尊・虛空藏院の二十九尊・持明院の五尊・虛空藏院の二十八尊・金剛手院の三十七尊・除蓋障院の九尊・觀音院の四大菩薩・地藏院の九尊・外金剛部院及び四大護院における各東西南北の四尊との併稱。釋迦牟尼聖(しゃか)・二天・羅刹女(らせつにょ)も、十三大會菩薩聖衆も、いかに哀れとおぼしけん」

**じふさん・たうげ** 十三峠【名】〔地〕Ⅰ『頂上に古塚十三あるによりていふ』大和・河内兩國間の七道の一・河內國中河內郡と大和國生駒郡とに跨る。山號北高安村神立(かんだつ)より國界まで二十三町。伊勢物語に記されたる在原業平河內がよひの遺跡といふ。十三越。Ⅱ中仙道の中、美濃國土岐郡大湫(おおくぼ)より東憲那(とうのぐん)都大井町まで三里半の間の山路。難路なりしも、今は可兒(こ)郡御嵩(みたけ)町より大井町に出づる者多きために、この山路は殆んど廢絕せり。

**じふさんちゆう・たふ** 十三重塔【名】十三層の塔。朝鮮に多く、內地には少なし。

**じふさんねん** 十三年【名】次條に同じ。

**じふさんねん・き** 十三年忌【名】じふさんくわいき(十三回忌)に同じ。

**じふさんぷつ** 十三佛【名】〔佛〕不動釋迦・文殊・普賢・地藏・彌勒(みろく)・藥師・觀音・勢至・阿彌陀・阿閦(あしゅく)・大日・虛空藏の十三佛。死者の初七日を司り、釋迦は初江王と變じて、二七日を司り、文殊は宗帝王と變じて、三七日を司り、普賢は五官王と變じて、四七日を司り、地藏は閻魔王と變じて、五七日を司り、彌勒は變成(へんじょう)王と變じて、六七日を司り、藥師は泰山王と變じて、七七日を司り、觀音は平等(びょうどう)王と變じて、百箇日を司り、勢至は都市王と變じて、一周忌を司り、阿彌陀は五道轉輪王と變じて、三回忌を司り、阿閦は蓮華王と變じて、七回忌を司り、大日は祇園(ぎおん)王と變じて、十三回忌を司り、虛空藏は法界王と變じて、三十三回忌を司るといふ。

**じふさん・まるり** 十三參【名】京都にて、陰曆十三日、十三歲の童男・童女が山城國下嵯峨村の法輪寺の虛空藏菩薩に參詣して、幸福を祈ること。

**じふさん・もんぜき** 十三門跡【名】天台・眞言・淨土の三宗中に屬して、宮門跡(ぐうもんせき)たる十三寺。即ち輪王寺・妙法院・聖護院・照高院・青蓮院・梶井宮・曼殊院・毘沙門堂・圓滿院(以上天台)・仁和寺・大覺寺・勸修寺(以上眞言)・知恩院(淨土宗)の併稱。

**じふさん・もんぱ** 十三門派【名】〔佛〕じふさんしゅう(十三宗)に同じ。

**じふさんや** 十三夜【名】Ⅰ陰曆十三日の夜。吉野都女無「よさ櫛の宴委窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛りまだしき間の內」Ⅱ陰曆九月十三日の夜。この夜、宇多天皇の御時より、十五夜に次ぎて、觀月の御宴ありたり。のちのつき。のちのこよひ。栗名月。豆名月。蘆葦とまる氣でひとり來ませり十三夜」

**じふさん・り** 十三里【名】〔植〕『栗(九里)より(四里)旨(うまし)といふ意』さつまいも(薩摩芋)の陰語。

**しふ・じ** 習字【名】文字を書きならふこと。かきかた。てならひ。

**しふし** 志布志【名】〔地〕大隅國曬蒲(ゆ)郡にある町。南は有明浦に臨む。

**しふし** 澁し・澁し【形ク】Ⅰ澁の味あり。口中、敎歛せらるるやうの感あり。Ⅱ常かならず。しぶりてあり。夫木「營の摩まだしぶく聞ゆなり巢立ちの小野の森のあけぼのの」Ⅲはでやかならず。くすみてあり。「しぶい顏」

**じふ・し** 十指【名】じっし(十指)を見よ。

**じふ・し** 十師【名】〔佛〕じっし(十師)を見よ。

**じふ・し** 十死【名】じっし(十死)を見よ。

**じふ・じ** 十字【名】Ⅰ十の字。十文字。Ⅱ『書の何曾傳に「何曾逸豪累世…茨餅上不三所作十字不食」とある故事に本づく』むしあり(蒸餅)又はまんちゅう(饅頭)の異稱。東魯聞十字」Ⅲふじかい(十字街)の略。Ⅳ救所の一。黑き方形の中に、十字を白抜にしたるもの。十の字。十文字。Ⅴ『英 Cross』航海者の珠に注目する南方の星座。南小字。

**じふ・じ・あがり** 十時上【名】午後十時頃に霽るる雨。蕓「十時あがりに、傘はなすな」

**じふじい** (英 Gipsies 又 Gypsies)【名】厥米に流浪する一種異風の種族。容貌・體軀・印度人に似たり。蒙古の成吉思汗(ちんぎすかん)の西征の頃、印度を逐はれて、歐洲に入りし者の後裔なるべしといふ。馬車を住居とするものもあり。占術に巧みなりと信ぜらる。男は巻實鑄懸(ぎょうけん)などを業とし、女は俚謠を唄ひ、舞踊などをなして生活す。

**じふじか** 十字架【名】『英 Cross』Ⅰ柱に横木を添へて、十の字の形にし、罪人の手足を縛りつけて、磔刑に處したる刑具。くるす。Ⅱ基督の磔死せられしより、紀念としてその教徒の尊崇する十字形の標識。くるす。

**じふじがい** 十字街【名】ようつじ(四辻)に同じ。

**じふじきやう** 十字鏡【名】『英 Saurosoc-ro』偏光器の一。一箇の平面鏡と二箇のニコル回轉鏡とより成り、結晶の薄片に平面偏光の平行線を通過せしめて、消光方位を驗するに用ふるもの。

**じふじ・くわ** 十字火【名】〔兵〕一方の軍の射擊。即ち左右よりの射線が交叉して、十字形をなすこと。

**じふじ・くわ** 十字科【名】〔植〕蘭花植物。莢子類・雙子葉門・離瓣花類の一科。草又は稀に半灌木にして、十字形の花冠と、四强雄蕊とを有し、果實は莢(さや)をなす。分布きはめて廣く、種類もまた頗る多し。例へば大根・油菜・薺(ぺんぺんぐさ)・山嵩菜(ばくち)などの類。これに屬す。十字花科。「に同じ。

**じふじくわ・くわ** 十字花科【名】〔植〕前條

**じふじくわ・くわ** 十四經【名】〔書〕十三經に大戴禮(だいらい)を加へたるもの。漢氏倫理・成論・格致論・素問靈樞・十四經・入門難經・脾胃論・脈論・逆氣論・萬卷の書に眼をさらしたこの坊主」

**じふじ・けい** 十字形【名】十の字の如き形。

**じふじけい・くわ** 十字形花【名】〔植〕十字花冠を有する花。

**じふじけいくわくわん** 十字形花冠【名】〔植〕花冠が四片の花瓣より成りて、二片づつ相對し、恰も十字形をなすもの。即ち十字科に屬する植物の花に見るもの。

**じふし・じ** 十四事【名】武藝にて、射・騎・神・刀・拔刀(ばっとう)・擊劍・薙刀・槍・鳥銃・石火筒・火箭・捕縛(ほばく)・拳(けんぽう)の併稱。

**じふじ・せき** 十字石【名】〔鑛〕『英 Staurolite』柱狀に結晶し、二箇十字形に相貫ける石。硬度は七度半、透明もしくは不透明なる赤色乃至黑褐色を呈す。我が國にては、肥前國に產す。斜十字石。

**じふじ・たい** 十字帶【名】十字形にかくる繃帶。

**じふ・しち** 十七【名】Ⅰ十七歲。Ⅱ妙齡の女子。を乙女。少女。芭蕉「種の十七、大根畑の老女」俗語佐渡國の「十七は竹に油を塗るごとし」

**じふしちかてう・けんぱふ** 十七箇條憲法【名】けんぱふじふしちてう(憲法十七條)に同じ。

**じふしちくわい・き** 十七回忌【名】人の死後十七年目の正忌。十七年。

**じふしちぢう・けんぱふ** 十七憲法【名】けんぱふじふしちてう(憲法十七條)に同じ。

**じふ・しち・し** 十七史【名】〔書〕支那の十七部の歷史、即ち史記・前漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・後魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史の併稱。にじふいつし(二十一史)參照。

**じふ・しち・ち** 十七字【名】はいく(俳句)に同じ。

**じふしちてう・けんぱふ** 十七條憲法【名】けんぱふじふしちてう(憲法十七條)に同じ。

**じふしちでん** 十七殿【名】古の禁中にありし十七の御殿、即ち紫宸殿・仁壽殿・承香殿・常寧殿・貞觀殿・宜陽殿・綾綺殿・溫明殿・麗景殿・宜耀殿・安福殿・校書殿・淑景殿・後涼殿・弘徽殿・登華殿の併稱。

**じふしち・もじ** 十七文字【名】じふしちじ(十七字)に同じ。博雅、吉野山十七文字で譽めたちず」

**じふしちや** 十七夜 【名】 ■陰暦の十七日の夜。 ■じふしちやまち(十七夜待)の略。五人女「十七夜代待(ダイマチ)の通りしに、十二燈を包みて、我が身の事、未来知れぬやうにと祈りける」 俳諧新選「松が枝にまだ望あり十七夜」

「同じ。

十七夜の月 【句】 たちまちづき(立待月)に

**じふしちや** 十七屋 【名】 『十七夜の月を立待月(タチマチ)ともいふより、忽ち著きの意になりていへるものといふ』 ひきゆくや(飛脚屋)の隠語。 傳燈「夕立は十七屋から京へ知れ」 『十七屋木綿合羽へ馬を入れ』

**じふしちやうだて** 十四挺立 【名】 小早(コバヤ)の、櫓の数十四挺を用ふるもの。

**じふしちやまち** 十七夜待 【名】 七夜待の最初の日の新額なるべし。 じふにもち(十二盤)参照。

**しふ-じびふ** 習字帖 【名】 習字の手本。又は習字の草紙。

**しふ-しふ** 拾集 【名】 ひろひあつむること。

**しふ-しふ** 集輯 【名】 よせあつむること。編輯。

「さま。

**しふ-しふ** 習習 【擬】 風のそよそよと吹くさま。 御氏「女君、例のしぶしぶに、心も解けずものしたまふ」

**しふ-しふ** 澀澀・澁澁 【擬】 しぶりながら爲すさま。いやいやながら。

**しふしふ-がほ** 澀澀顔・澁澁顔 【名】 不機嫌なる顔つき。澁面。 日本振袖始「始の顔色引きかへて、しぶしぶ額にて立出で」

**しふしふ-きげん** 澀澀氣嫌・澁澁氣嫌 【名】 不平ありげなる機嫌。 浄本太平記「しうとめのしぶしぶ機嫌」

**じふしまい** 十姉妹 【名】 ■(動)燕雀類に属する小鳥。四十雀(ガラ)に似て小さく、羽色は白と柿又は白と黒との斑なるを普通とす。多くは籠中に飼養せられ、愛すべき鳴聲を發す。 ■(植)ほそづいばら(薔薇科薔薇)に同じ。

**しふ-しん** 執心 【名】 (佛)しふねん(執念)に同じ。

**執心の波** 【句】 執心を波に譬へていふ語。 傳燈廣録「今は何をかつつむべき、これは源三位頼政、執心の波に浮沈む」

執心の水 【句】 執心を水に譬へていふ語。

「見よ。

**じふ-しん** 十身 【名】 (佛)じっしん(十身)を見よ。

**じふ-しん-はふ** 十進法 【名】 (數)じっしんはふ(十進法)を見よ。

**しふしん-ぶかし** 執心深し 【形一】 しふねんぶかし(執念深し)に同じ。

「はてさて、狐と申すものは、執心深いものでござりまする」

**じふ-しもち** 十字餅 【名】 じふじ(十字)■に同じ。

**じふ-しやう** 執障 【名】 (佛)我執と煩惱障、また法執と所知障との併稱。

**じふ-しやうしよ** 祠部尚書 【名】 じんきはく(神祇伯)の唐名。

**じふ-じやのめ** 澀蛇目・澁蛇目 【名】 澀目傘の柿色なるもの。

「ること。

**じふ-しゆ** 拾取 【名】 ひろふこと。拾ひと

**じふ-しゆ** 執守 【名】 執りて守ること。固く守ること。

「に同じ。

**じふ-しゆ** 四部衆 【名】 (佛)ししゆ(四衆)

**じふ-しゆ** 十手 【名】 じっしゅ(十手)を見よ。

**じふ-しゆう** 集衆 【名】 じゅうしゅ(衆集)に見よ。

**じふしゆう** 十宗 【名】 じっしゅう(十宗)を見よ。

**じふしゆ-かう** 十種香 【名】 じっしゅかう(十種香)を見よ。

**じふ-じやく** 習熟 【名】 習ひて熟練すること。なれて習性となること。

**じふしゆ-くやう** 十種供養 【名】 じっしゅくやう(十種供養)を見よ。

**じふ-しよう** 襲承 【名】 うけつぐこと。

**じふ-じよう** 十乘 【名】 (佛)じふじようくわんぼふ(十乘觀法)の略。

**十乘の風** 【句】 (佛)十乘の觀法によって迷執を一掃するを、風の塵を拂ふに譬へていふ語。 盛衰記、傳教大師、黠三江州

**十乘の床** 【句】 (佛)十乘の觀法は、心の安住する所なるによりて坐する床に譬へていふ語。 謡曲「熊野」上「十乘の床のほとりに、瑜伽の法水を湛へ」

**じふじようくわん** 十乘觀 【名】 (佛)次條に同じ。

**じふじようくわんぼふ** 十乘觀法 【名】 (佛)『乘とは車乘の意、即ちこの觀法に乘りて、涅槃(ネハン)の實所に到る意』 三論(サンロン)の妙理を悟得するに至る十種の觀法、即ち第一觀不思議境、第二眞正發菩提心、第三善巧安心、第四破法遍、第五識通塞、第六道品調適、第七對治助開、第八知次位、第九能安忍、第十無法愛の併稱。もと天台宗の開祖智顗(ギ)の自ら工夫・實踐せるもの。上根の者は、第一法のみにて悟了し、中根の者は、第六法までを用ひて悟了し、下根の者は、第十までを用ひて悟了す。止觀十乘。十乘觀。十乘。

**しふ-しよく** 襲職 【名】 職務を承けつぐこと。

**じふ-すけ** 十介 【名】 尼子の十介を見よ。

**しふ-ずみ** 澀墨・澁墨 【名】 灰墨を澁に交ぜたるもの、即ち黒き澁。

**しふずみ-ぬり** 澀墨塗・澁墨塗 【名】 澁墨にて、板塀・下見(ヒミ)などを塗ること、又これを業とする人。

「同じ。

**しふ-せい** 集成 【名】 したたせい(集大成)に

**しふ-せい** 習性 【名】 習慣となりたる性質。くせ。ならひ。

**しふせい-くわん** 集成館 【名】 相模國足柄下郡小田原町に在りし舊小田原藩の學校。文政五年藩主大久保忠眞の創立、明治五年廢せらる。

**しふせい-りう** 集成流 【名】 劍術の一派。波多野直好を祖とす。

**じふ-せうこふ** 十小劫 【名】 (佛)小劫の十倍の時間。こふ(劫)■(二)せうこふ(少劫)参照。 盛衰記、正覺を十小劫に成じて」

**しふ-せつ** 執節 【名】 節刀を執りて、大將となること。 義経(吉野卷)「義經執節の勅を受け」

**じふ-せつ** 十利 【名】 じっさつ(十刹)を見よ。

**しふ-せん** 集錢 【名】 ■しゆせん(集錢)を見よ。 ■せんさし(錢差)を云ふ。伊勢國の方言」

「たる稱。

**しふ-せん** 澀煎・澁煎 【名】 柿澁にてねりしたる、柿の汁。

**しふ-せん** 澀扇・澁扇 【名】 しぶうちわは(澁團扇)に同じ。







**じふせん** 十全 【名】 『周禮の天官醫師職に「歳終則稽其醫事、以制其食、十全爲上、十失一次之、呂氏春秋に「賢醫十全、不一能成功」などあり』 完全なること。全く危險なきこと。

**じふ-ぜん** 十善 【名】 (佛)十惡を行はぬこと。十善戒を持つこと。十善業(ジフゼンゴウ)。十善道。(十惡に對して) 保元「十善の戒行(カイギヤウ)重きに依りて」

**十善・萬乘** 【句】 『ばんじよう(萬乘)を見よ』 天子の位。 盛衰記「大慈大悲の君、十善萬乘の主として」

**十善の主** 【句】 次條に同じ。 浄瑠「今上は二歳にぞなりたまふ。あさましきまでのおんいけなさにて、いつくしき十善のあるじに定まりたまふ」

**十善の君** 【句】 『天皇は、前世に十善戒を持ちたる果報により生れたまへるなりといふ、佛者の說によりていふ』 **ていわう**(帝王)の尊稱。十善の帝王。十善の王。 盛衰記「朝政色を失ひ、……思ひけるは、十善の君はかりなく思食さるる女を」

**十善の國** 【句】 『前條を見よ』 帝王のしろしめす國土。 太平記「義施太子は、始留(ヤ)國の翁に身を與へて、檀施行を修したまふ。これは、皆、十善の國をあはせたる、十六の大國を保ちたまひし王位なれども」

**十善の位** 【句】 「十善の天位」に同じ。 舞丸「十善の位をも知るべき身が」

**十善の正法** (ショウホウ) 【句】 (佛)『道理に合へる正しき法なるよりいふ』 **じようぜん**(十善)に同じ。 正法記「十善の正法を行ひて、國を治めしかば、人民これを敬愛す」

**十善の帝王** 【句】 「十善の天位」に同じ。 盛衰記「年來の重恩を忘れ、十善帝王に向ひまゐらせて」

**十善の帝位** 【句】 次條に同じ。 平家「たとひ十善の帝位に誇りたらんとしふとも、黄泉の旅に出てなん後は、牛頭・馬頭の責を免れたまはじものを」

**十善の天位** 【句】 (佛)『十善の君』を見よ』 帝王の位の尊稱。十善の位。十善

**じふたぎ-なみや** 後塞雙矢 【名】 のちふたぎなみや(後塞雙矢)に同じ。

**じふたに** 澀渓・澁谷 【名】 (地)越中國水見(ミ)郡太田村の字。二上山(ニジヤウ)の麓。渓間に楓樹多し。 萬葉「澁渓の二上山に鶯ぞ子生むといふ」

**しふたに-とえ** 澀谷越・澁谷越 【名】 (地)しぶたにとえ(澁谷越)の轉訛。

**しふたん** 集團 【名】 あつまり。むれ。團

**しふだん-しやげき** 集團射擊 【名】 (兵)敵多の砲兵中隊を一戰場に布列し、同じ目標に向ひて、射擊を集中すること。

**しふだんていさつ** 集團偵察 【名】 (兵)多人數が一團となりてなす偵察。

**しふ-ち** 習知 【名】 習ひ知ること。ならひ覺ゆること。

「しつぢ。

**しふ-ぢ** 執持 【名】 心にまもり操ること。

**執持名號** 【句】 阿彌陀如來の名を念ずること。

**じふ-ぢ** 十地 【名】 (佛)『世間の大地が、草木等を生長せしめ、山河等を荷負して動かざるが如く、この地位に在る菩薩の、よく中道佛智を生成して住持し、また無緣の大悲を起して、一切衆生を擔荷し、これを出離せしむるによりて、地といふ』 無明(ムミヤウ)の惑を斷じて、眞如を證する十階段の地位。即ち歡喜地・離垢地(ノ)地・發光地・燄慧地(ニ)地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地の併稱。菩薩二十地の位に入れば、決して退轉することなく、佛果に進超する事を得、十住・十行・十廻向の三十位の上、妙覺の下に位し、合はせて四十一位といふ。 盛衰記、慶滋那佛の造立の志は、戒法興行のためなり。十地の階級によりて、報身能化の形異なれども」

**十地苦行の大士** 【句】 (佛)『苦行を重ねて、十地の位地を踏破せる勇士の意味にていふ』 ほさつ(菩薩)の異稱。 平家、萬德圓滿の世尊、十地苦行の大士たちも、力及ばせたまはぬ次第なり」

**じふぜん-じまつり** 十禪師祭 【名】 しじがたにまつり(鹿谷祭)に同じ。

**じふぜん-だち** 十善道 【名】 (佛)じふぜんの天位。十善の帝位。十善の位。

「十善の天位を捨てて、三明(サンミヤウ)の覺路に趣かせたまふ」

**十善の髮髮** 【句】 『十善の君』を見よ』 帝王の髮髮の尊稱。 盛衰記「十善の鬢髮を落し、九品(クボン)の蓮臺を志したまふ」

**十善の床** (ジ) 【句】 (十善修業の床の義)

「十善の天位に同じ。 增鏡「十善の床を裝みたまふも、賤しき身の宮仕なりき」

**十善の王** 【句】 「十善の君」に同じ。 平花

「そこらの上達部・殿上人御送仕うまつりたまひて、御興の捧げられたまへるほどこそ、なほ限りなき十善の王におはしますめれ」

**十善の王位** 【句】 「十善の天位」に同じ。 著聞「十善の王位を捨てて、一乘菩提の道に入らせたまひにけり」

**じふぜん-かい** 十善戒 【名】 (佛)じっかい(十戒)に同じ。

**じふせん-きんくわい** 十錢銀貨幣 【名】 じっせんぎんくわい(十錢銀貨幣)を見よ。

**じふぜん-ごふ** 十善業 【名】 (佛)じふぜん(十善)に同じ。

**じふせん-さつ** 十錢札 【名】 じっせんさつ(十錢札)を見よ。

**じふ-ぜんじ** 十禪師 【名】 ■十人の高德の、選ばれて內供奉(ナイグブ)を許されしもの。 殺生禁斷、或稱、或省、病著・髮、詔光・供養・並修・其身當時・稱爲十禪師・其後・有闕、擇清行者・補之」 ■次條の略。 盛衰記、身吉といふ童御子の龍りたりけるが、十禪師の御前にて、俄かに狂ひ出でて舞ひかなでける」

**じふぜん-じ-ごんげん** 十禪師權現 【名】 『國常立尊以下天神七代を經て、地神五代中の第三代瓊瓊杵尊まで通算すれば、第十位に當るによりて、十禪師と呼ぶといふ』 山王七社の一。地神第三の瓊瓊杵尊にて、地藏菩薩の權化(ゴン)なりといふ。十禪師。平家、十禪師權現・客人(マラウド)八王子三社の神輿を飾り奉って」

**じふぜん-じまつり** 十禪師祭 【名】 しじがたにまつり(鹿谷祭)に同じ。

**じふぜん-だち** 十善道 【名】 (佛)じふぜん

**じふたぎ-なみや** 後塞雙矢 【名】 のちふたぎなみや(後塞雙矢)に同じ。

**じふたに** 澀渓・澁谷 【名】 (地)越中國水見(ミ)郡太田村の字。二上山(ニジヤウ)の麓。渓間に楓樹多し。 萬葉「澁渓の二上山に鶯ぞ子生むといふ」

**しふたに-とえ** 澀谷越・澁谷越 【名】 (地)しぶたにとえ(澁谷越)の轉訛。

**しふたん** 集團 【名】 あつまり。むれ。團

**しふだん-しやげき** 集團射擊 【名】 (兵)敵多の砲兵中隊を一戰場に布列し、同じ目標に向ひて、射擊を集中すること。

**しふだんていさつ** 集團偵察 【名】 (兵)多人數が一團となりてなす偵察。

**しふ-ち** 習知 【名】 習ひ知ること。ならひ覺ゆること。

「しつぢ。

**しふ-ぢ** 執持 【名】 心にまもり操ること。

**執持名號** 【句】 阿彌陀如來の名を念ずること。

**じふ-ぢ** 十地 【名】 (佛)『世間の大地が、草木等を生長せしめ、山河等を荷負して動かざるが如く、この地位に在る菩薩の、よく中道佛智を生成して住持し、また無緣の大悲を起して、一切衆生を擔荷し、これを出離せしむるによりて、地といふ』 無明(ムミヤウ)の惑を斷じて、眞如を證する十階段の地位。即ち歡喜地・離垢地(ノ)地・發光地・燄慧地(ニ)地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地の併稱。菩薩二十地の位に入れば、決して退轉することなく、佛果に進超する事を得、十住・十行・十廻向の三十位の上、妙覺の下に位し、合はせて四十一位といふ。 盛衰記、慶滋那佛の造立の志は、戒法興行のためなり。十地の階級によりて、報身能化の形異なれども」

**十地苦行の大士** 【句】 「十地苦行を重ねて、十地の位地を踏破せる勇士の意味にていふ』 ほさつ(菩薩)の異稱。 平家、萬德圓滿の世尊、十地苦行の大士たちも、力及ばせたまはぬ次第なり」

**じふぢ-ぐまつり** 十地祭 【名】 しじがたにまつり(鹿谷祭)に同じ。

**じふぢ-ぐ-ぢ** 十地苦行 【名】 (佛)『十地の位地を踏破せる勇士の意味』 ほさつ(菩薩)の異稱。 平家、萬德圓滿の世尊、十地苦行の大士たちも、力及ばせたまはぬ次第なり」

**じふぢ-ぐ-ぢ-しん** 十地苦行心 【名】 (佛)眞言宗にて、衆生の有すといふ十種の心想、即ち異生羝羊(ヘイセイテイヤウ)心・愚童持齋心・嬰童無畏心・唯蘊無我(ヘイウン)心・拔業因種心・他緣大乘心・覺心不生心・一道無爲心・極無自性心・祕密莊嚴心の併稱。この內、前の九つまでは、顯教の域、無明の分際にして、未だ眞の成

といふ。又、佛の正覺の極證位に對して、分證位といふ。菩薩の最上位。 太平記「君御在位の間、外には五常を正しくして、仁義を專にし、內には五戒を守りて、慈悲を先としおはせしかば、いかなる十地等覺の位にも到らせたまひぬらん」

**十地の菩薩** 【句】 (佛)菩薩の最上位に達したる菩薩。 釋迦如來眞生實、十地の菩薩・五百羅漢」

**しふぢ-かん** 集治監 【名】 舊監獄則における監獄の一種。徒刑・流刑及び舊法の終身懲役に處せられたる者を拘禁せし所。

**しふ-ぢや** 澀茶・澁茶 【名】 『香氣なくして澁きよりいふ』 下等なる茶。

**しふ-ぢやく** 支部長 【名】 支部の長。

**しふ-ぢやく** 執著 【名】 (佛)執心して思ひ離れぬこと。繫著(ケ)。

**しふぢやく-じし** 執著獅子 【名】 長唄にて演ずる踊。安永二年に、初代中村富次郎の森田座にて初演せしもの。獅惑卒陽書おろし、中村兵次・杵屋作十郎振附をなす。

**しふぢやく-しん** 執著心 【名】 執著する心。

**しふぢやく-りよく** 執著力 【名】 執著して遂行せんとする意志の力。

**しふ-ぢゆう** 集中 【名】 ■一所に集むること。 ■(兵)全兵力を指定の地點に集合すること。

**しふ-ぢゆう** 集注 【名】 一事物に集まりそそぐこと。また集めそそぐこと。

**じふ-ぢゆうきん** 十重禁 【名】 (佛)『十種の重大なる禁戒の義。梵網經に見ゆ』 じふぜんかい(十禁戒)に同じ。

**じふ-ぢゆうきんかい** 十重禁戒 【名】 (佛)じふぢゆうかい(十禁戒)に同じ。

**じふ-ぢゆうし** 十住心 【名】 (佛)眞言宗にて、衆生の有すといふ十種の心想、即ち異生羝羊(ヘイセイテイヤウ)心・愚童持齋心・嬰童無畏心・唯蘊無我(ヘイウン)心・拔業因種心・他緣大乘心・覺心不生心・一道無爲心・極無自性心・祕密莊嚴心の併稱。この內、前の九つまでは、顯教の域、無明の分際にして、未だ眞の成

佛を得るに至らず、最後の祕密莊嚴心に及んで、全く成佛すと說く。**じふぢ**〔名〕十地。參照。

**じふぢゆうしんろん** 十住心論〔名〕〔書〕**ひみつまんだらじふぢゆうしんろん**〔祕密曼陀羅十住心論〕の略。野干鈔〔理〕の成佛の義をば、十住心論には、徒に年劫を積みて、心身を費すといへり」

**じふぢゆうはっく** 十中八九〔副〕じふ(十)の條下を見よ。

**しふぢゆうりんけい** 襲重鱗莖〔名〕〔植〕鱗莖の一。その鱗片の厚くして、相重なれるもの。

**じふぢろん・しゆう** 十地論宗〔名〕〔佛〕**ぢろんじゆう**〔地論宗〕に同じ。

**しふ** 四勿〔名〕『論語の顏淵篇に「非禮勿し視、非禮勿し聽、非禮勿し言、非禮勿し動」とあるに本づく』視聽言動に就きての四つの禁ずべきもの。

**しぶつ** 死物〔名〕死にたるもの。生命なきもの。活動せぬもの。(活物に對して)

**しぶつ** 詩佛〔名〕〔人〕**おほくぼしぶつ**〔大窪詩佛〕を見よ。

**じぶつ** 時物〔名〕時節に相應したる物。

**じぶつ** 事物〔名〕ものごと。「の訛。

**じぶつ・がき** 澁柿・渋柿〔名〕〔書〕天地生植・正朔曆數・帝王后妃等の五十五部に分ちて、著く本物の本原を記したるもの。十卷。支那宋の高丞の撰。

**しぶつきせい** 死物寄生〔名〕〔生〕『英語 prophyte』寄生生活の一。或生物が他の生物の死體又は生物などに寄生すること。例へば黴菌の餅に生じ、黴類の朽木に生ずる類。(活物寄生に對して)

**しぶつく** 四佛工〔名〕我が國における四人の有名なる佛工、即ち定朝(ぢやう)・運慶・安阿彌陀佛・流慶の併稱。

**しぶつくわん** 支佛觀〔名〕〔佛〕**じぶにいんえん**(十二因緣)に同じ。

**じぶつくり** 澁くり・渋くり〔名〕じぶつくること。じぶくり。

**じぶつくる** 澁くる・渋くる〔動四自〕じぶくること。ひろひ得たること。

**しふつう** 四佛土〔名〕〔佛〕天台宗にて立つる四種の佛土、即ち凡聖同居(ぢやうどう)土・方便有餘(ぢやうよ)土・實報無障礙(ぢやうがい)土・常寂光(ぢやうじやくくわう)土。四種の國土。四土。

**しふつつら** 澁面・渋面〔名〕次條の音便。

**しふつつら** 澁面・渋面〔名〕不滿足らしき顏つき。しぶき顏。渋面(ぢう)。

**じふて** 十手〔名〕じつて(十手)を見よ。

**じふでし** 十弟子〔名〕じふだいでし(十大弟子)に同じ。桑華「かくて佛、中の間の高きに中尊おはしますア。その御側に十弟子並みたり」

**じふてつ** 十哲〔名〕じつてつ(十哲)を見よ。

**しふてぬぐひ** 澁手拭・渋手拭〔名〕次條に同じ。

**しふてのごひ** 澁手拭・渋手拭〔名〕かきてのごひ(柿手拭)に同じ。

**じふてふいっぽん** 十帖一本〔名〕いっそくいっぽん(一束一本)に同じ。

**じふてふがみ** 十帖紙〔名〕おにすきはらがみ(鬼杉原紙)〔二〕に同じ。

**じふてふげんじ** 十帖源氏〔名〕〔書〕源氏物語の卷卷の大體を、平易なる詞にて綴り、所所に註釋をも加へ、繪をも入れたるもの。十卷。野野口立圃の著。

**しふてん・くわん** 集電環〔名〕〔理〕すりっぷりんぐに同じ。

**じふてりや** 實扶的里〔名〕ちぶてりや(實扶的里)を見よ。

**じふと・いり** 十度入〔名〕じやど(死人)の轉訛。

**じふど・いり** 十度入〔名〕土器(かはらけ)の七度入より四まはりの大なるもの、十度に十斗の意を懸く。「海人藻芝「鍾(かなけ)は…近代、間(ま)の物・五度入・七度入・十度入・寒鼻の」斯種種土器全用來「酒興盛故也」

**じふと・とく** 拾得〔名〕おとし物を拾ふこと。

**じふと・とく** 習得〔名〕習ひて覺ゆること。

**じふと・とく** 十德〔名〕じっとく(十德)を見よ。

**しふと・ぐさ** 死人草〔名〕〔植〕じびとぐさ(死人草)の轉訛。

**しふとくぐ・ふつ** 拾得物〔名〕拾得せる物件。

**しふとし** 〔形一〕强情(ぢやう)にして屈せず。盛衰記「義貞……未だ力づかず、侍らめども、心しぶとき奴にて」太祖「しぶとくも客めるる色や枇杷の花」

**しふとっを** 則〔名〕しうとっを(則)に同じ。(古語)

**しふな** 〔名〕(魚)たなご(鯉)を云ふ。(關西の方言)

**しふ・なは** 澁縄・渋縄〔名〕神祭のごとき色に染りたる繩。

**じふ・に** 十二〔數〕十に二を加へたるもの。

**じふに**の御衣(ぎよ)〔句〕じふにひとへ(十二一重)〔二〕に同じ。

十二の司(つかさ)〔句〕「後宮(ごくぐう)十二司」に同じ。

**じふに・いん** 十二因〔名〕〔佛〕次條の略。

**じふに・いんえん** 十二因緣〔名〕〔佛〕『梵語 Dwâdaśa-pratîyasamutpâda の譯語。緣の字、因の韻に引かれてネンと發音す』緣覺の觀門。三世に渉りて、六道に輪廻(ぢやう)する緣起を、無明(ぢやう)・行(ぎやう)・識・名色(ぢきしき)・六處・觸(ぞく)・受・愛・取・有(う)・生(しやう)・老死の十二に次第したるもの。三世に配すれば、無明と行とは過去、識より有までは現在、生と老死とは未來、また無明と行とは、四諦(たい)中の集諦、識より受までは苦諦を詳かにせるもの、愛と取とは煩惱、生と老死とは苦諦との循環・連續する趣を示せるものと見ることを得。十二緣起。十二牽連。二六の緣。因緣觀。支佛觀。じふいんえん(十因緣)參照。著國「十二因緣の心をもめてた」說ききかせて教化せられたる」舊曲「江口「それ十二因緣の流轉(るてん)は車の庭に廻るがごとし」

十二因緣心裏に空し〔句〕〔佛〕十二因緣に依る生死(しやう)流轉(るてん)の迷の雲の、心裏に晴れわたりて、一物を留めず。有(う)空二門中の空間の意を示せる語。謠曲「三千世界眼前書・十二因緣心裡空」

**じふに・うん** 十二運〔名〕除陽道にて、人の運命の吉凶を判ずるために、暦日に設けて、人間に配當せし胎・養・長・休官・臨・帝・衰・病・死・墓・絶の稱。その內、帝以上の六つに當るを有井(ひ)とし、衰以下の四つに當るを無井(ひ)とす。

**じふに・えんぎ** 十二緣起〔名〕〔佛〕**じふにいんえん**(十二因緣)に同じ。

**じふに・かい** 十二階〔名〕推古天皇の時代に定めたる十二等の冠位。即ち大德・小德・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智の併稱。冠は各、當色の絹(きぬ)にて縫作り、その頂上を撮み、總べて裳のごとくし、緣を著けたり。これを授けらるる者は、各氏によりて一定せしものの如く、後世のごとく、加階轉昇せし例始と無し。大化の新制以後、十三階・十九階・二十六階と漸次增加し、天武天皇の頃より、位冠に代ふるに、位記を以てするに至れり。

**じふに・から** 十二雀〔名〕(鳥)こがら(小雀)に同じ。

**じふに・き** 十二忌〔名〕〔美〕支那風の山水畫に忌む十二の缺點。即ち布置迫窘なること、遠近分ればなること、山に氣脈なきこと、水に源流なきこと、墟に奔陳(ぢん)なること、樹に四枝少なきこと、石の只一面なること、樓閣の錯離せること、濃淡宜しきを失すること、點染に法なきこと。元の倪自然の定めたるもの。

**じふに・きやく** 十二格〔名〕古の官省の十二種の區劃、即ち神祇(ぎ)・中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮內・彈正・京職及び雜の併稱。

**じふに・きゆう** 十二宮〔名〕〔天〕『英語 Zodiac』黃分點を起點として、黃道帶十二の星座に分ちたるもの。即ち白羊宮・金牛宮・雙女宮・巨蟹宮・獅子宮・處女宮(一に、陰陽宮)・天秤宮・天蠍宮・人馬宮・磨羯宮・寶瓶宮・雙魚宮の併稱。各星座に屬する星を、假線にて連結する時、それぞれ羊・牛・二人・女等の形をなすとて名づけしものにて、時計も解もなかりし時代に、夜は星の位置によりて、時刻を判斷し、晝は十二宮中における太陽の位置によりて、季節を概知する必要より定められしものの。その名稱も支那・印度・ギリシヤ等、大抵一致せるによりて、その名稱の出所の共通なるを知る。







**じふに・ぐう** 十二宮〔名〕〔佛〕『大集月藏經等に見ゆ』前條に同じ。

**じふに・くわう** 十二光佛〔名〕〔佛〕阿彌陀佛の光明を十二種の德用に分ち、その各德用の異稱。即ち無量光佛・無邊光佛・無碍光(ぐわう)佛・無對光(ぐわう)佛・燄王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・無稱光佛・超日月光佛。盛衰記「一方の十二問に十二光佛を、一體づつ立て奉りければ、四方に四十八體の十二光佛御座しけり」

**じふに・ぐわつ** 十二月〔名〕年の第十二にあたる月。しはす。極月(ごくぐつ)。

**じふに・ぐわつ・わらひ** 十二月往來〔名〕〔書〕正月より十二月までの書翰文を載せたるもの。一卷。作者詳かならず。

**じふに・ぐわん** 十二願〔名〕〔佛〕「藥師の十二願」を見よ。

**じふにぐわん・わう** 十二願王〔名〕〔佛〕『藥師如來の十二願』を見よ』**やくしにょらい**(藥師如來)の異稱。本平記「十二願王誓を題す故に、天下の治亂この冥應に懸らずと云ふこと無く」

**じふに・けい** 十二經〔名〕〔醫〕漢法にて、手足に於ける十二の經脈、即ち肺臟・大腸・心臟・小腸・心胞絡・三焦・膀胱・腎臟・膽臟・肝臟・脾臟の併稱。

**じふに・げっ・げん** 十二月建〔名〕『をさ(建す)を見よ』十二支を、一年十二月に配當したるもの、即ち正月は寅、二月は卯以下、この順にて、十二月丑に至るまでの稱。

**じふにげん・きん** 十二絃琴〔名〕弦の十二筋ある琴。

**じふに・けんれん** 十二率連〔名〕〔佛〕**じふにいんえん**(十二因緣)に同じ。

**じふに・さい** 十二齋〔名〕**ろくさい**(六齋)を見よ。

**じふに・し** 十二支〔名〕〔曆〕えと(干支)を見よ。又、さんし(三支)・じふにじう(十二獸)參照。〔曆〕(佛)『支は支分の義』**じふにいんえん**(十二因緣)に同じ。

**じふに・じう** 十二獸〔名〕(佛)『大集經に見ゆ』一晝夜を十二時を守護するといふ十二種の鳥獸、即ち蛇・馬・羊・猴・鶏・犬・猪・鼠・牛・獅子・兎・龍の併稱。支那相傳の十二支と相違せるは、獅子と虎とのみ。さんじゅうろくさん(三十六禽)參照。

**じふに・しゃく** 十二尺指腸〔名〕〔醫〕『十二指を並べたる程の長さなるよりいふ』小腸の一部、幽門より空腸までの間の最も幅狹く、馬蹄狀に屈せる部分。全長三十サンチメートル。膵汁・膽液ここに注入す。

**じふに・しちやう・かたる** 十二指腸加答兒〔名〕〔醫〕十二指腸に發する加答兒。

**じふに・しちやう・ちゆう** 十二指腸蟲〔名〕〔動〕圓蟲類に屬する蠕形(ぜん)動物。帶黃白色又は類赤色にして、長さ雌は三分乃至六分、雄はその半ばに過ぎず。頭に小鈎あり、人類の小腸殊に十二指腸內に懸著寄生して、血液を吸收し、大害をなす。

**じふに・じ・じゆう** 十二時中〔副〕『昔の時刻にて、晝六時・夜六時、合はせて十二時間の義。宋史の葛邲傳に「嘗日、十二時中英歎自己」「其實踐如此」とあり』晝夜いづれの時にも。二六時中。「見よ。

**じふに・じまはし** 十二使徒〔名〕しさ(使徒)を見よ。

**じふに・じん** 十二神〔名〕〔佛〕次條の略。

**じふに・じんじゃう** 十二神將〔名〕〔佛〕『玄奘三藏譯の藥師經に見ゆ』藥師如來の十二願に應じて、晝夜の十二時を保護する十二の神なる伐折羅(ばさら)大將、寅の神なる迷企羅(ぎら)大將、卯の神なる安底羅(あてら)大將、巳の神なる珊底羅(さんてら)大將、午の神なる波夷羅(はいら)大將、申の神なる摩虎羅(まこら)大將、酉の神なる眞達羅(しんたら)大將、戌の神なる招杜羅(しやうとら)大將、亥の神なる毘羯羅(びから)大將。十二夜叉(やしや)大將、十二神・十二神明(みやう)。扶桑略記「並彩色八尺、十二神將等像」盛衰記「十二神將の冥罰も揭焉にして、一門終に亡びぬるこそ無惜なれ」

**じふに・じんみやう** 十二神明〔名〕〔佛〕前條に同じ。

**じふに・しゃう** 十二章〔名〕きうしゃう(九倉時代新興の眞宗と日蓮宗とを加へたる稱。

**じふにしゆうでん** 十二衆天〔名〕〔佛〕**じふにてん**(十二天)に同じ。

**じふにしょ** 十二所〔名〕(地)羽後國北秋田郡にある町。扇田(おうだ)町の東二里。

**じふに・しょうぐわん** 十二願〔名〕〔佛〕『乘は運載、即ち衆生を運載して、實所に到らしむる義』**じふにぐわん**(十二願)に同じ。

**じふにじょうぐわん・いわうぜんせい** 十二願醫王善逝〔名〕〔佛〕『善逝は諸佛十號の一にて、如來といふに同じ。**やくしにょらい**(藥師如來)に同じ。平家「仰き願はくは、山王七社、王子眷屬護法聖衆(しやうじゅ)・東西滿山十二乘願醫王善逝…玄應を垂れたまへ」

**じふにしょ・どんげん** 十二所權現〔名〕熊野三山の一なる本山に祀れる十二社の神を、本地垂跡(すいしやく)說に由り、權現として呼ぶ稱。即ち證誠殿の國常立(くにとこたち)尊は阿彌陀、中御前の伊弉諾(いざなぎ)尊は藥師、西御前の伊弉冊(いざなみ)尊は千手觀音、若王子(にやくおうじ)の天照大神は十一面觀音、禪師宮の忍穗耳(おしほみみ)尊は地藏菩薩、聖(ひじり)宮の瓊瓊杵(ぬに)尊は龍樹菩薩、児(ちご)宮の彥火火出見(ひこほほでみ)尊は如意輪觀音、子守(こもり)宮の鸕鷀草葺不合(うがやふきあへず)尊は聖(ひじり)觀音、一萬宮の國狹槌(くにさづち)尊は不動明王、十萬宮の豐斟渟(とよくむぬ)尊は普賢菩薩、觀請十二所の泥土煮(ひじにに)尊は釋迦如來、飛行(ひぎやう)夜叉の大戶道(おほとみち)尊は不動明王の權現なりといふも。那智には、この外、なほ米持金剛の面足(おもたる)等を毘沙門天王の權現なりとして、護法童子とし、十二所權現の使者として祀れり。異說多し。**じふにしょどんげん**(十五所權現)參照。盛衰記「狩文十二所權現者、熊野廳現之顏、本迹淸皮之誓」

**じふにそう** 十二社・十二所〔名〕〔地〕武藏國豐多摩郡淀橋町字角筈(つのは)の字。應永年間、熊野權現を勸請して、若王子以下十二所の神を祀れりといふ。境內に泉池あり。

**じふに・たいぐわん** 十二大願〔名〕〔佛〕**じふにぐわん**(十二願)に同じ。翠玉「藥師佛の御前の方の母屋の柱には、十二大願の心を繪に書かせたまへり」

**じふにだいぐわんいわうぜんせい** 十二大願醫王善逝〔名〕〔佛〕**じふにじょうぐわんいわうぜんせい**(十二乘願醫王善逝)に同じ。

**じふに・だいじ** 十二大寺〔名〕十大寺に法華寺と西隆寺とを加へたるもの。

**じふに・だいてんしゅ** 十二天衆〔名〕〔佛〕**じふにてん**(十二天)に同じ。

**じふに・だん** 十二段〔名〕能(のう)にて、獅子舞を十二段に舞ふこと。

**じふにだん・さうし** 十二段草子〔名〕〔書〕**じやうりじふにだんさうし**(淨瑠璃十二段草子)の略。

**じふにちやう・だて** 十貳挺立〔名〕小早(さはや)の櫓の數十二挺を用ふるもの。

**じふに・てうし** 十二調〔名〕〔音〕次條に同じ。

**じふに・てうし** 十二調子〔名〕〔音〕支那にて定めたる、音樂の十二の調子。七音(しちおん)〔二〕の宮に當る音を黃鐘(おうしき)とし、これを絕對基音とし、徵(ち)に當る音を林鐘、商に當る者を太蔟(たいそう)、羽に當る者を南呂、角に當る者を姑洗、變宮に當る者を應鐘、變徵(ちい)に當る者を蕤賓とし、賓より上に、なほ大呂・夾鐘・無射(むえき)・仲呂の五階を設け、各調子の差を五度づつとしたるもの。淺代の五行說にては、これを十二支・一年・十二箇月に配して、黃鐘は子・十一月、大呂は酉・十二月、姑洗は寅・十一月、夾鐘は卯・二月、蕤賓は辰・三月、仲呂は巳・四月、林鐘は未・六月、南呂は酉・八月、無射は戌・九月、應鐘は亥・十月とし、また正・三・五・七・九・十一を六律といひ、二・四・六・八・十・十二を六呂といひ、合はせて律呂と稱し、律を陽に、呂を陰に配す。我が國にては、黃鐘を壺越(つぼこし)と呼び、下無調は龍吟調ともいへり。支那の黃鐘(おうしき)・蕤賓(ずいひん)・林鐘(りんしき)・夷則(いそく)・無射(むえき)・應鐘(おうしき)・神仙・上無(かみなし)と呼び、下無調は龍吟調ともいへり。支那の黃鐘(おうしき)と我が

國の黄鐘(ハウヂキ)とは、文字同一にして、調子は全く異なれり。十二律。

**じふにてん** 十二天【名】〔佛〕上下八方を護る天部、即ち東方の帝釋天、東南方の火天、南方の焔摩天、西南方の羅刹天、西方の水天、西北方の風天、北方の毘沙門天、東北方の伊舎那天、上方の梵天、下方の地天と二天即ち日天、月天との併稱。十二大天衆。十二衆天。藝曲〔善思〕「矜迦羅(キンジン)制多迦(ヤクシ)十二天」

**じふに-とう** 十二燈・十二灯【名】Ⅰ『陀羅尼集經六千轉陀羅尼軌に、病人を救ふ法の供養物を掲げて「果食十盤、燃二十二燈」とあり』神佛に供ふる十二本の燈明。三本・四本・五本と並べともする。藥師の十二神將に供ふる意に出でしなるべしといふ。Ⅱ十二燈を供ふるための料金。五人五、十七夜代持(ヂ)の通りしに、十二灯を包みて、我が身の事、未知れぬやうにと祈りける」 繪獄淚袖『北』人にばけて、初穂賽錢十二燈をしてやれ」

**じふに-とき** 十二鋼【名】神佛に奉る十二巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二刻。即ち今の二十四時に當る。一晝夜。さま時〕參照。

**じふに-はう** 十二方【名】四方と八方とを合はせて、一切の方位を示す稱。梁塵今夜の燈火の光、十二方浄土佛世界に到るらんと見えて」

**じふに-ひとへ** 十二單【名】Ⅰ女官の盛裝の時の裝束。重袿(カサネ)を十二領重ねし下に、單(ヒトヘ)を著たるをいふに始まり、後世、五衣(イツツノ)にても、唐衣(カラギヌ)・裳(モ)を打掛けたるをもいふ。十二のおんぞ。盛衰記「藤重の十二單の御衣召されたり」 Ⅱ唇形科に屬する多年生の草。葉は方形にて、高さ五六寸。葉は長倒卵形にて、鋸刻を有し、對生す。共に毛茸(ハウジン)密生す。花は白に薄紫を帶ぶるもの普通なり。うるき。うるひ。『十二重筋骨草』

**じふにふかけ-あみがさ** 十二符掛編笠【名】『符は編む義『編笠の編目十二あるもの。求古集曲〔高笠〕「十二ふかけたる編笠をふかぶかとひっかうで」

**じふにぶ-きやう** 十二部經【名】〔佛〕じふにぶんきやう(十二分經)に同じ。

**じふにぶん-きやう** 十二分經【名】〔佛〕一切經を、釋迦の說法の樣式によりて、十二種に分てるもの、即ち一に修多羅(スタラ)、契經と譯す。二に祇夜(ヤ)、重頌又は應頌と譯す。三に和伽羅那(ヲカラ)、授記と譯す。四に伽陀(カタ)、不重頌。諷頌又は孤起頌と譯す。五に優陀那(ナン)、無問自說と譯す。六に尼陀那(ナン)、緣起又は因緣と譯す。七に阿波陀那(ハタ)、譬喩と譯す。八に伊帝目多伽(クタキ)、本事と譯す。九に闍陀伽(ヂタ)、本生(ハウジン)と譯す。十に毘佛略(ビブラク)、方廣と譯す。十一に優婆提舍(ハイブダイ)、論議と譯す。十二部經中の方廣と授記と無問自說との三部は小乘教に缺くるところとす。十二部經。梁塵「十千の魚、十二部經の首題の名字を聞きて、皆切利天(ハウリン)に生れたり」

**じふに-ほん-やぐるま** 十二本矢車【名】紋所の一。十二本の矢羽よりなる矢車。

**じふに-にん** 十人【名】人のかず十。十人十色(ヒキ)【句】人は、各異なるところあること。

十人十腹(ハラ)【句】人は、各考の同じからざること。

**じふにん-くみ** 十人組【名】五人組制の倍數なるもの。相互の非違を戒め、治安の機關たりしことは、五人組制に異ならず。五人組制の偏はれる後までも、地方に依りては、本制に據りしものあり。

**じふにん-といろ** 十人十色【句】じふにん(十人)の條下を見よ。

**じふにん-とばら** 十人十腹【句】じふにん(十人)の條下を見よ。

**じふにん-なみ** 十人並【名】容貌・技量などの普通なること。ひとなみ。毛玉心草「顏も十人並なれど、そなたをのけて此の世界に、女子があると思ふにこそ」

**じふに-もん** 十二門【名】平安城の舊内裏にありし十二の門、即ち陽明門・待賢門・郁芳門・美福門・朱雀門・皇嘉門・談天門・藻壁門・殿宮門・安嘉門・偉樂(ヰラク)門・達智(ヂ)門の併稱。

**じふにもん-ちやづけ** 十二文茶漬【名】その價の十二文なる茶づけめし。鶴屋卓蓋「十二文茶漬は、傳通院前に、辰巳屋とて出てたるが初なりとぞ」

**じふに-もんめ** 十二匁【名】江戸時代にあり し、掲代十二匁の姐婦。駒込深話「二朱にも、こんな德用向、結構なしろものもあるかいと、のろいまなこで見るほどな ほ美くしく思はれ、こいつを十二匁にしたらどうだらう」

**じふにもん-ろん** 十二門論【名】〔書〕三論宗の一。羅什三藏の漢譯せるもの。一卷。三論宗の基礎となれるものにて、十二の法門を開きて、一切皆空の理を說けり。龍樹菩薩の著。

**じふに-やくし** 十二藥師【名】京都の十二藥師、即ち石藥師・芝藥師・昆陽(ヒ)藥師・福昌藥師・薔薇寺・鉢(ハ)藥師・威心院・雙林寺・因幡堂・布袋藥師・粉糟藥師・北野松德院藥師の併稱。

**じふにやくしやだいしやう** 十二藥叉大將【名】〔佛〕じふにじんしやう(十二神將)に同じ。

**じふに-らい** 十二禮【名】Ⅰ〔書〕『文中に、阿彌陀を禮拜しながら唱ふる、十二の偈(ヲ)あるによりていふ。さんらいあみだぶつ、讃禮阿彌陀文』の異稱。Ⅱ〔佛〕『前項の禮讃の文に本づく阿彌陀佛を一日に十二度禮拜すること。十二禮拜。

**じふに-らいはい** 十二禮拜【名】〔佛〕前條Ⅱに同じ。梁塵「かの龍樹菩薩の十二禮拜を思ひて」

**じふに-らう** 十二郎【名】『真丈雜記に「十二郎は猿樂なりと、年中恒例記に見えたりとあり』猿樂を演ずる者。

**じふに-りつ** 十二律【名】〔音〕じふにとふし(十二調子)に同じ。野守鏡「則天皇后の時、十二律に定められにけり」

**じふに-れっこく** 十二列國【名】〔地〕支那晉・衛・鄭・曹・陳・燕・宋・楚・秦の併稱。

**しふ-ぬき** 澀拔・澁拔【名】Ⅰ澁き味を除き去ること。Ⅱ澁柿の澁を去りたる柿。

**しふ-ぬり** 澀塗・澁塗【名】柿澁にて塗ること、また澁色に塗ること、又その塗りたる物。

**しふぬり-えぼし** 澀塗烏帽子・澁塗烏帽子【名】柿澁のごとき色の漆にて塗りたる烏帽子。盛衰記「やゝありて、兵衞佐、澁塗の立烏帽子に白直垂著して」

**しふね-がる** 執念がる【動四自】しぶねくがる。しぶねくがる。この向ひなる事すこし引きやらせよ。御事たてさせんといふに、しふねがりて聞かねに」

**しふねし** 執念し【形Ⅰ】執念深し。執著强し。源氏「かれは、しふねくとどめて、まかりにけるにこそ」

**しふ-ねん** 執念【名】〔佛〕深く思ひ込みて移らぬこと。執著心。執心。

**じふねん** 十念【名】〔佛〕『阿彌陀の四十八願中の第十八願に出づ』六字の名號(ミナ)、即ち「南無阿彌陀佛」を十遍唱ふること。十聲の念佛。盛衰記「一念・十念も正つ、早くと宣ひければ」

十念・血脈(ケツ)【句】〔佛〕浄土宗にて、戒脈と信者との間に、十念を授受する法。けちみやく(血脈)參照。

「今より、汝が十念血脈受けたる亡者は、往生疑ひあるべからず」

十念・稱名【句】〔佛〕じふねん(十念)に同じ。盛衰記「十念・稱名の聲絶えず、三尊十念の枕」【句】十念を授けられて、病床に橫たはること。曾我物語「臨終の一念は接衆の光明を期し、十念の枕の上に聖衆の來迎を待つこと」

十念を授く【句】〔佛〕浄土宗にて、觀無量壽經中の「分聲不斷、具足十念」稱南無阿彌陀佛とといふ文句に本づき、十回の唱名を、その信者に授けて結緣せしむること。他宗にて、三歸・五戒等を授くるに擬したるなり。

最後の十念【句】〔佛〕次條に同じ。臨終の十念【句】〔佛〕死際に行ふ十念。これを行へば、念念の中に、八十億劫生死の罪を除くを得て、極樂浄土に往生すといふ。最後の十念。

**じふ-ねん** 十年【名】一年の十倍。十年一昔【句】十年の前と今日とを比ぶれば、變遷甚しく、さながら古き時代の如き感あり。

**じふねん-じ** 十念寺【名】京都土京區今出川寺町通に在る浄土宗の寺。本尊は大佛像。僧眞阿の開基。永享三年足利義教の創建。

**しふねん-ぶかし** 執念深し【形Ⅰ】思ひ込むこと深し。執念甚し。しぶねし。

**じふの** 十能【名】次條の略。

**じふ-の-のう** 十能【名】『じふく(五德)の類にて、効能多き器の義かといふ』炭火を載せて持運ぶに用ふる具。鐵鋼などにて造り、多くは木の柄を附く。おきかき。ひかき。

**じふ-の-じ** 十字【名】紋所の一。圓形中に十字を浮れたるもの。十字。十文字。

**じふの-じ-せん** 十字錢【名】寛永銅錢の一。元文元年に、江戸深川十萬坪にて鑄造せしもの。黄白色にして、徑八分の七分のとあり。皆孔の上部又は廓内に十の字あり、又これを缺けるもあり。

**じふ-の-しま** 十島【名】『平假名のあほ(阿呆)は、これを分解すれば「十のしま」の四字となるよりいふ』ばかもの(馬鹿者)を云ふ。(大阪の方言)

**じふのじ-むすび** 十字結【名】かたいむすび(叶結)に同じ。

**じふの-ぶし** 四部の弟子【句】じふ(四部)の條下を見よ。

**じふは** 十派【名】じっぱ(十派)を見よ。

**じふは-い** 集配【名】Ⅰ集配【名】Ⅱあつむると、くばると。集めて配達すること。Ⅲじふはいにん(集配人)の略。

**しふはい-さんとうきよく** 集配三等局【名】集配の事務を取扱ふ三等郵便局。(無集配三等局に對して)

**しふはい-にん** 集配人【名】いうびんしふはいにん(郵便集配人)の略。

**じふ-はう** 什寶【名】寶として祕藏する什具。たから物。

**じふ-ばう** 十方【名】じっぱう(十方)を見よ。

**じふば-う-ぐれ** 十方闇【名】じっぱうぐれ(十方闇)を見よ。

**しふはう-しや** 襲芳舍【名】平安京大內裏の五舍の一。凝華舍の北にあり。この庭に鋪蘭木(いかなる木か明かならず)ありきといふ。かみなりのつぼ。しはうしや。和名襲芳舍。在凝華舍北。加美奈利乃豆保」

**じふはう-じやうど** 十方浄土【名】〔佛〕じっぱうじやうど(十方浄土)を見よ。

**じふはう-せかい** 十方世界【名】〔佛〕じっぱうせかい(十方世界)を見よ。

**じふはち-かい** 十八界【名】〔佛〕じふはちきやうがい(十八境界)に同じ。

**じふはち-がゆ** 十八粥【名】陰曆正月十八日に、大師供養のために作る小豆粥(ガユ)。大師粥。

**じふはち-きやうがい** 十八境界【名】〔佛〕感覺の機官たる六根と、その對象となる六塵と、それらの二つに由りて生ずる意識作用の六識との總稱。十八界。

**じふはち-けんじやう** 十八賢聖【名】支那晉の高僧慧遠(ヱン)の廬山の白蓮社に集まりて、念佛を修せる當時の名僧名士百二十三人の内、最も著名なる十八人。即ち慧遠・慧永・慧持・道生・曇順・僧叡・曇恒・道昺・曇詵・道敬・覺明・覺賢・劉程之・張野・周續之。張詮宗炳・雷次宗の併稱。太平記「十八賢聖を結びて長日に六時」

**じふはち-けんじゆ** 十八賢衆【名】前條に同じ。

**じふはち-こう** 十八公【名】〔植〕『松の字を分割すれば、十八公の三字となるよりいふ』(松の異稱。重盛「丁松も女松の十八公、この年頃の振袖の」

**じふはち-ささげ** 十八豆豆【名】次條の詞。

**じふはち-ささげ** 十八豆豆【名】〔植〕じふろくささげ(十六豆豆)に同じ。

**じふはち-じんつう** 十八神通【名】〔佛〕じふはちへん(十八變)に同じ。「條に同じ。

**じふはち-じんへん** 十八神變【名】〔佛〕前

**じふはち-だいし** 十八大師【名】古來大師の號を勅諡せられたる十八人の高僧。即ち天台宗の傳教大師(最澄)・慈覺大師(圓仁)・智證大師(圓珍)・慈慧(ヱ)大師(良源)・慈惠(ケイ)大師(覺運)・慈眼(ゲン)大師(天海)・眞言宗の弘法大師(空海)・本覺大師(益信)・興教大師(覺鑁)・理源大師(聖寶)・道興大師(貞惠)・法光大師(眞雅)・月輪(ガツリン)大師(慶範)・慧燈(ヒ)大師(運如)・曹洞宗の承陽大師(道元)・浄土宗の圓光大師(源空)・融通念佛宗の聖應大師(良忍)の併稱。

**じふはち-だいつう** 十八大通【名】天明の頃、世は華奢に流れ、人は遊興に耽りし中に、最も名高かりし、江戸の十八人の通人。多くは藏前の札差(サシ)もしくは市中の豪商にて、十八人全部の姓氏は傳はらず、また時時の異同もありしが如し。蜘蛛の巣籠「天明の比、花車・風流を事とする者を大通又は通人・通家など唱へて、この妖風世に行はるる。その中にも、十八大通とて、十八人の通人ありけり。皆長たる者は日本橋西河岸の〈材木屋と聞ゆ〉小鳴・御藏前なる〈札差大口屋治兵衞〉文魚なり」

**じふはち-だんりん** 十八檀林【名】くわんとうじふはちだんりん(關東十八檀林)を見よ。

**じふはち-どよう** 十八土用【名】夏の土用の十八日間なること。(十九土用に對して)

**じふはち-の-きみ** 十八公【名】じふはちこう(十八公)に同じ。毛吹草「十八のきみは御門の飾かな」

**じふはち-ばん** 十八番【名】Ⅰかぶきじふはちばん(歌舞伎十八番)の略。Ⅱその人の得意として、當詞行動にあらはす事柄。おはこ。

**じふはち-べらはふ** 十八描法【名】(美)支那風の繪畫にて、人物を描く十八種の法。即ち高古遊絲描・琴枝描・鐵線描・行雲流水描・混描・釵頭釘描・馬蝗描・釘頭鼠尾描・曹衣描・蚯蚓描・折蘆描・減筆描・柳葉描・竹葉描・戰爭水紋描・枯柴描・減筆描。

**じふはち-へん** 十八變【名】〔佛〕神通に由りて現はす十八種の變化。即ち右脇出水・左脇出水・左脇出水・右脇出水・身上出水・身下出水・身下出水・身上出火・履水如地・履地如水・從虛空沒而復現・地沒而現・空中・空住・空行・空坐・空臥・現大身・現小身。十八神通。太平記「この時、令利弗(ホツ)、慈悲・忍辱・孝(ヱ)の意を發し、身を百千に化し、十八變を現して、還りて大座に著きたまふ」

**じふはち-まつだひら** 十八松平【名】まつだひら(松平)を見よ。

**じふはち-もつ** 十八物【名】〔佛〕大乘比丘(ビク)の常に身に隨ふべき佛制道具の十八種。即ち五衣と二衣と)・鉢・錫杖・佛像・菩薩像・經・律・火燧・香爐・香盞(香爐と香盞と)・繩床・坐具・漉水囊・瓶・手巾・楊枝・澡豆(小豆・大豆など)を乾して、粉にし、穢れた手を洗ひ浄むるに用ふるもの、即ち洗粉)・刀子(剃髮・裁衣・截爪の用に供するもの)・鑷子(鼻毛を拔き、刺(トゲ)を拔くに用ふるもの)の併稱。ろくもつ(六物)參照。

**じふはち-らかん** 十八羅漢【名】十八人の羅漢。即ち十六羅漢にな ほ二人を加へたるもの。慶友尊者と賓頭盧(ビン)尊者とを十六羅漢の後に加へたるものと、迦葉(カシ)尊者と軍徒鉢歎尊者とを、その前に加へたるものとの二種あり。黄葉千里「大明の所帶くづし蘖達の和尚たち、十八羅漢の國を忘がきて」

**じふはっ-しゆう** 十八宗【名】〔佛〕十宗中の禪宗を臨濟・曹洞の二宗に分ち、なほ融通念佛宗を眞宗・日蓮宗・時宗・普化宗・修驗宗・黄檗宗を加へたる稱呼。

**じふはっ-しゆ-もつ** 十八種物【名】〔佛〕じふはちもつ(十八物)に同じ。

**じふはっしりやく** 十八史略【名】(書)十七史及び宋鑑の正史に就き、取捨折衷して、太古より宋時代までの事蹟を記述し、初學の教本に供せしもの。七卷。支那元の曾先之の撰。

**じふはっちやうだて** 十八挺立【名】小早(はやぶね)の櫓の數、十八挺を用ふるもの。二九挺。

**じふはってん** 十八天【名】(佛)三界諸天の一部。色界(しきかい)にありといふ十八の天。即ち梵衆天・梵輔天・大梵天(以上初禪天)・少光天・無量光天・光音天(以上第二禪天)・少淨天・無量淨天・遍淨天(以上第三禪天)・無雲天・福生(ふくしやう)天・廣果天・無想天・無煩(ぼん)天・無熱天・善現天・善見天・色究竟(くきやう)天(以上第四禪天)の併稱。約めて四禪天といふ。

**じふはっぱん** 十八般【名】『水滸傳の第一回に見ゆ』十八種の武技、即ち矛(ほこ)・槍・弩(ゆみ)・鈹(やり)・鞭(むち)・簡(ふだ)・劍・鐵鞭(ゆみ)・斧・鉞(おの)・戈(ほこ)・戟(ほこ)・牌(たて)・棒・鎗・樹(ほこ)を いひ、また弓・弩(ゆみ)・鎗・刀・劍・矛・盾・斧・鉞・戟・鞭・簡・槌・叉・把頭(ぶくろ)・綽繩(立)の略。

**じふはんぎ** 十番【名】じふばんじたて。十番仕立(たて)。

**じふばん-うらがき** 十判裏書【名】じゅばんうらがき。十判裏書)を見よ。

**じふばん-ぎり** 十番切【名】曾我兄弟の工藤祐經の館に斬入りて、復讐せし時、捕へ討たんとせし鎌倉の臣十人を斬りしこと。重忠工人を呼ぶやら逃るやら、隣町八丁九丁町、十番切の五月闇、夜討の入り たるごとくなり」

**十番切の番士**【句】江戸幕府の十番切の間(ま)に勤めし番士。

**じふばんぎりーのま** 十番切間【名】江戸城中の間(ま)の一。曾我五郎時宗の十番切の繪を畫きたる所。

**じふばん-じたて** 十番仕立【名】『江戸の廐友(ともだち)』十番町に住みし馬乘・用ひ始めしに因るとも、麹町の十番町に、その仕立屋軒ありしに因るともいふ。馬乘袴の一種。襠(まち)甚だ高く、裾まはり濶し。じふばん。

**しふばんちやう** 史部番長【名】明治初年に太政官に置きて、書狀の發達を掌らしめし判任官。同十八年廢せらる。

**しふはんりつきえいくわこうさい** 四分半利附英貨公債【名】我が國債の一。日露戰爭による臨時事件費支辨のために、明治三十八年三月と同七月との二回に、三千萬磅づつ、國外にて募りし四分半利附の英貨公債。

**じふはらみつ** 十波羅密【名】(佛)【一】唯識論に十勝行と稱して、菩薩十地の行法とせるもの。即ち一に施波羅蜜、二に戒波羅蜜、三に忍波羅蜜、四に精進波羅蜜、五に靜慮波羅蜜、六に般若波羅蜜、七に方便善巧波羅蜜、八に願波羅蜜、九に力波羅蜜、十に智波羅蜜。【二】『眞言宗』にて、印・相をむすぶに、十波羅蜜を、十指の各に名づけたるよりいふ。十の指(ゆび)。

**じふぶいちだいづ-きんなふ** 十分一大豆銀納【名】江戸時代に、總收穫高の十分一を畠租として、石代にて納めしこと。

**しふ-ふく** 集福【名】幸福を招き集むること。

**じふぶく-ちや** 十服茶【名】じっぷくちゃ(十服茶)を見よ。

**じふぶぜん-ごじふ** 十不善業【名】(佛)じふあくごふ(十惡業)に同じ。

**じふ-ぶつ** 什物【名】じゅもつ(什物)に同じ。

**じふ-ふにもん** 十不二門【名】(佛)天台宗の六祖荊溪大師の著せる「法華玄義釋籤」の中に見えし觀心上の色心不二門・內外不二門・修性不二門・因果不二門・染淨不二門・依正不二門・受潤不二門・自他不二門・三業不二門・權實不二門・遠近不二門。これを別錄せしより、一部の書目となりぬ、天台學徒に重用せらる。

**じふ-ぶん** 十分・充分【副】物事完全す。不足なく。飽くまで。

**しふ-へき** 摺襞【名】(植)『摺の字の音、正しくはせふ。左右より摺(たた)みて、縱に襞(ひだ)をなせるもの。

**じふ-は** 襲步【名】(兵)步兵が敵陣に突喊する時用ふる步法。要領は速步に同じく、一分間に約百二十步とし、敵に接近するに從ひて漸次に增加し、遂に疾驅に及ぶ。

**じふぼ** 十母【名】實母・出母・繼母・庶母・嫡母・繼母・惡母・養母・乳母・諸母の併稱。

**じふぼく** 輯睦【名】やはらぎむつぶこと。

**じふぼし** 十星【名】紋所の一。大なる圓形を中央に据ゑ、その周圍に大なる圓形九つを配べたるもの。

**じふま** 十魔【名】(佛)佛道修行を妨ぐる十種の魔、即ち蘊(うん)魔・煩惱(ぼんなう)魔・衆(しゅ)魔・心魔・死魔・天魔・美根魔・三昧魔・菩提法智魔。

**じふまい-ざさ** 十枚笹【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(さざいまふじ)

**じふまい-づくり** 十枚作【名】小判十枚を以て、一枚に作りたるもの。

**じふまん-おくせつの-ど** 十萬億刹土【名】(佛)『阿彌陀經に「從是西方、過二十萬億佛土、有一世界、名曰二極樂、其土有レ佛號二阿彌陀、今現在說法」とあり。一佛土は、即ち三千大世界をいふ。億の字、萬の韻に引かれて、ノクとも發音す』次條に同じ。盛衰記 土を思ひ、風蟲松を吹く折は、近く常樂我淨の觀を凝らす」

**じふまん-おく-ど** 十萬億土【名】(佛)『典據は前條に同じ。億の字、萬の韻に引かれて、ノクとも發音す』娑婆世界より西方なる極樂淨土に到る間に在りといふ無數の淨土。

**じふまん-おく-の-くに** 十萬億國【名】(佛)前條に同じ。源氏「西の方十萬億の國隔てたる、九品の上の望にたがひなく」

**じふまん-おく-の-ごくど** 十萬億國土【名】(佛)じふまんおくど(十萬億土)に同じ。十訓「十萬億の國土は、海山にだてて遠けれど、心の道の直ければ、つとめて到るとこそ聞け、と打出したりければ」

**じふまん-ふげん** 十萬普賢【名】(佛)無數に化身する普賢菩薩。十萬は大數を用ひて、無數を示せるなり。法華經普賢勸發品「一萬文殊…十萬普賢、滿山護法、數數の神神」

**しふみ** 澀面・澁面【名】じふつら(澁面)に同じ。川中島合戰、無念無念も十面ばかり、一言の返答なく」

**じふもく** 十目【名】數多の人の目。十目の視る所【句】『大學に「十目所、視、十手所レ指、其嚴乎」とあるに本づく』多數の人の一樣にしか思へる意。

**じふ-もじ** 十文字【名】じゅもんじ(十文字)に同じ。

**じふ-もつ** 什物【名】【一】じふぶつ(什寶)に同じ。【二】じふぼう(什器)に同じ。

**じふもん-いろ** 十文色【名】總絲をいふなるべし。冥途飛脚「心は蜘蛛手かくなはや、十文色も出で來るは、南無三寶目が暮れると、足を空に立歸り」

**じふもんじ** 十文字【名】【一】縱橫に交叉して、十字形をなすこと。盛衰記「太き馬を十文字に引きからげて」【二】轡の一部。鐵(くつわ)の中の十字形をなせる鐵材。【三】よき烏帽子。【四】じゅもんじろ(新廣)に同じ。【五】たれがしま、種子島)四に同じ。【六】じゅもんじやり(十文字槍)の略。堀川波の藝、素鎗・片鎗・十文字」【七】ようつじ(四辻)を云ふ。「陸奧國津輕の方言」

**じふもんじ-ぐつわ** 十文字轡【名】じゅもんじくつわ(田雲轡)に同じ。

**じふもんじ-しだ** 十文字羊齒【名】(植)じゅもんじだ(撞木羊齒)に同じ。

**じふもんじ-だすき** 十文字襷【名】じゅもんじ(撞木反)に同じ。

**じふもんじ-つが** 十文字榑【名】(植)おほしらびそ(大白檜�″)に同じ。

**じふもんじ-やり** 十文字槍【名】穗先の十字形をなせる槍。十文字。

**じふもん-せん** 十文錢【名】【一】『その一枚は、當時の通用錢十文に當りしよりいふ』【二】『その一枚は、當時の通用錢十文に當りしよりいふ』

**じふもんぢ** 十門派【名】(佛)けんぼんほっしゅう(顯本法華宗)の舊稱。

**じふもん-もり** 十文盛【名】一杯十文づつの一勝めし。丹波樂亭「酒が四升五合、十文盛が七十杯」

**しふや** 澀谷・澁谷【名】(地)武藏國豐多摩郡にある町。東京市の西。鐵道山手(やまて)線の一驛。玉川電氣鐵道の起點。

**じふ-や** 十夜【名】(佛)『觀無量壽經に「於十日の視る所」に同じ。

**じふやく** 十夜【名】(佛)「じふがう(十發)」に同じ。

**じふ-みやう** 十名【名】(佛)じふがう(十發)に同じ。

**じふ-ぶん** 私憤【名】私事に關するいかり。私事のうらみ。私怨。(公憤に對して)

**じふ-ぶん** 脂粉【名】【一】紅(べに)と白粉(おしろい)と。紅粉。【二】じょうう(化粧)に同じ。脂粉の氣【句】婦人らしき氣分。柔弱なる氣分。

**じふ-ぶん** 支分【名】細かに分つこと。

**支分・節解**【句】『中庸章句の序に「支分節解、脈絡貫通」とあり』文章を解釋するに、支體を分ち、關節を解くがごとく、詳しく細かなること。

**じふ-ぶん** 死文【名】實際に効力なき文章、又は法令。

**じふ-ぶん** 斯文【名】『論語の子罕篇に「天之將レ喪、斯文、後死者不レ得レ與於斯文也」とあり』斯の文の義。文學・學問の義。しだう(斯道)參照。儒家にて、その奉ずる道。

**じふ-ぶん** 詩文【名】詩と文章と。

**じふ-ぶん** 刺文【名】いれずみ。ほりもの。刺青。

**じふ-ぶん** 識文【名】やうもん(陽文)に同じ。

**じふ-ぶん** 紫文【名】『支那にて帝意の文章を韓文、柳宗元のを柳文いふ例に擬へて文章を韓文、柳宗元のを柳文いふ例に擬へて文章。』紫式部の文章。源氏物語の文章。「らひぶん。

**じふ-ぶん** 士分【名】さむらひたる身分。さむらひ。

**じふ-ぶん** 自刎【名】じけい(自刎)に同じ。

**じふ-ぶん** 自裁【名】みづから裁斷すること。

**じふ-ぶん** 時文【名】【一】當時の文。【二】支那の近代の文體。即ち『黃錄・書牘又は官府の告諭、新聞の記事などに用ひらるるもの。同じく新聞紙上の文にても、論說は古文に近きを常とし、小說・戲曲等の文は、殆ど純然たる談話體にして、時文はその中間に立つ通俗の文體に外ならず。

**じふ-ぶん** 時分【名】【一】ころ。ころ。時期。女殺油地獄「こちの人か、子供がお產の時分を忘れ、何處にどうして居さしやんした」百合若大臣野守鏡「夫婦は時分





と、三階の襖・戶障子明け過ぎて、この間こそと指して」

**じ-ぶん** 耳聞【名】耳にて聞くこと。

**耳聞は目見に如かず**【句】『說苑の政理篇、又は魏書の崔浩傳等に見ゆ』耳にて聞くよりは、目にて見たる方明白にして覺りやすし。百聞は一見に如かず。「諺語」

**じふぶん** 自分【名】おのれ。われ。

**じふぶん** 自分【代】われ。おのれ。自身。

**じふぶん-あまのさへづり** 紫文蜃之囀【名】(書)源氏物語の空蟬(うつせみ)の卷までを、俗語に改作したるもの。五卷。多賀宰七の著。

**じふぶん-えうりやう** 紫文要領【名】(書)玉の小櫛の舊稿なるべしといふ。二卷。本居宣長の著。

**じふぶん-おんかい** 四分音階【名】(音)半音階より更に小なる音階。一全音の距離にある四の音の上なる變を以て、半音階的半音下げ、下なるを變を以て、半音階的半音上ぐる時、その差は四分音階を成す。

**じふぶん-おんぷ** 四分音符【名】(音)『英Crotchet』全音符の四分の一の長さなる音を示す音符。

**じふぶん-がつて** 自分勝手【名】己れのみの都合を計ること。「まへがつて」みがつて。

**じふぶん-がら** 時分柄【副】時刻なれば。時節柄。淨瑠璃出世鏡雪「時分柄、心中の下地か、五人女「時分がらの世の中、金銀の入る事ならば、思ひながらなりがたし」

**じふぶん-き** 四分儀【名】(天)『英Quadrant』天體の高度を計量するに用ふる器。九十度の分度器に望遠鏡と指針との裝置あるもの。象限儀)に同じ。

**じふぶん-きうしふ** 四分休止符【名】(音)『英Quarter rest』全休止符の四分の一の長さだけ休止すべきことを示す休止符。

**じふぶん-きめ** 自分極【名】ひとりはんだん。獨斷。

**じふぶん-けん** 支分權【名】(法)或權利作用の一部が他人に屬したる場合に、その他人に屬せる權利作用。

**じふぶん-ごれつ** 四分五裂【名】『四五に分裂する義』ちりぢりに裂けて、順序なきこと。

**じふぶん-しごと** 自分仕事【名】己れ一人の敬益になる仕事。おのれのみの仕事。心中天網島「水の泡目、それなら私が內證の自分仕事にしましやう」

**じふぶんしよ** 私文書【名】一私人の文書。私書。(公文書に對して)

**じふぶんしよきさうさい** 私文書僞造罪【名】(法)文書僞造罪の一。權利・義務又は事實證明に關する私人の文書、もしくは圖畫を僞造又は變造したるによりて成立する罪。私書僞造罪。

**じふぶん-たい** 時文體【名】時分【二】の文體。

**じふぶん-てきび** 時文摘批【名】(書)擬古文の用語・語格などの古格に違へるを正したるもの。一卷。村田春海の著。

**じふぶん-と** 自分と【副】おのれと。自分より。

**じふぶん-とき** 時分時【名】食事の時刻。

**じふぶん-ながら** 自分年【副】自分でさへも。われながら。じぶんと。みづから。

**じふぶん-はうし** 四分胞子【名】(植)胞子細胞の分裂に因り、四箇となりて生ずる胞子。

**じふぶん-めんきよ** 自分免許【名】うのぼれ(己惚)に同じ。

**じふぶん-もち** 自分持【名】自費にて事をなすこと。自辨。

**じふぶん-りつ** 四分律【名】(書)『四度に分ちて戒條せるよりいふ』律宗所依の經典。佛滅後百年、曇無德羅漢の上座部の律より拔萃結集せるもの。聖武天皇の時、鑒眞來朝して、これを傳ふ。

**じふぶん-ゑん** 四分圓【名】(數)『英Quadrant』互に垂直をなす二つの直徑によりて、四つに分たれたる圓の一部。象限(ぞうげん)。

**じふ-めい** 襲名【名】親父は師匠などの名を襲ぐこと。

**じふ-めん** 澀面・澁面・十面【名】じふつら(澁面)に同じ。

**じふ-もく** 十母【名】數多の人の目。十目の視る所【句】『大學に「十目所、視、十手所レ指、其嚴乎」とあるに本づく』多數の人の一樣にしか思へる意。

**じふ-もじ** 十文字【名】じゅもんじ(十文字)に同じ。

**じふ-もつ** 什物【名】【一】じふぶつ(什寶)に同じ。【二】じふぼう(什器)に同じ。

**じふもん-いろ** 十文色【名】總絲をいふなるべし。冥途飛脚「心は蜘蛛手かくなはや、十文色も出で來るは、南無三寶目が暮れると、足を空に立歸り」

**じふもんじ** 十文字【名】【一】縱橫に交叉して、十字形をなすこと。盛衰記「太き馬を十文字に引きからげて」【二】轡の一部。鐵(くつわ)の中の十字形をなせる鐵材。【三】よき烏帽子。【四】じゅもんじろ(新廣)に同じ。【五】たれがしま、種子島)四に同じ。【六】じゅもんじやり(十文字槍)の略。堀川波の藝、素鎗・片鎗・十文字」【七】ようつじ(四辻)を云ふ。「陸奧國津輕の方言」

**じふもんじ-ぐつわ** 十文字轡【名】じゅもんじくつわ(田雲轡)に同じ。

**じふもんじ-しだ** 十文字羊齒【名】(植)じゅもんじだ(撞木羊齒)に同じ。

**じふもんじ-だすき** 十文字襷【名】じゅもんじ(撞木反)に同じ。

**じふもんじ-つが** 十文字榑【名】(植)おほしらびそ(大白檜貴)に同じ。

**じふもんじ-やり** 十文字槍【名】穗先の十字形をなせる槍。十文字。

**じふもん-せん** 十文錢【名】【一】『その一枚は、當時の通用錢十文に當りしよりいふ』【二】『その一枚は、當時の通用錢十文に當りしよりいふ』

**じふもんぢ** 十門派【名】(佛)けんぼんほっしゅう(顯本法華宗)の舊稱。

**じふもん-もり** 十文盛【名】一杯十文づつの一勝めし。丹波樂亭「酒が四升五合、十文盛が七十杯」

**しふや** 澀谷・澁谷【名】(地)武藏國豐多摩郡にある町。東京市の西。鐵道山手(やまて)線の一驛。玉川電氣鐵道の起點。

**じふ-や** 十夜【名】(佛)『觀無量壽經に「於十日の視る所」に同じ。

**じふやく** 十夜【名】(佛)「じふがう(十發)」に同じ。

**じふ-みやう** 十名【名】(佛)じふがう(十發)に同じ。

**じふ-ぶん** 私憤【名】私事に關するいかり。私事のうらみ。私怨。(公憤に對して)

**じふ-ぶん** 脂粉【名】【一】紅(べに)と白粉(おしろい)と。紅粉。【二】じょうう(化粧)に同じ。脂粉の氣【句】婦人らしき氣分。柔弱なる氣分。

**じふ-ぶん** 支分【名】細かに分つこと。

**支分・節解**【句】『中庸章句の序に「支分節解、脈絡貫通」とあり』文章を解釋するに、支體を分ち、關節を解くがごとく、詳しく細かなること。

**じふ-ぶん** 死文【名】實際に効力なき文章、又は法令。

**じふ-ぶん** 斯文【名】『論語の子罕篇に「天之將レ喪、斯文、後死者不レ得レ與於斯文也」とあり』斯の文の義。文學・學問の義。しだう(斯道)參照。儒家にて、その奉ずる道。

**じふ-ぶん** 詩文【名】詩と文章と。

**じふ-ぶん** 刺文【名】いれずみ。ほりもの。刺青。

**じふ-ぶん** 識文【名】やうもん(陽文)に同じ。

**じふ-ぶん** 紫文【名】『支那にて帝意の文章を韓文、柳宗元のを柳文いふ例に擬へて文章。』紫式部の文章。源氏物語の文章。「らひぶん。

**じふ-ぶん** 士分【名】さむらひたる身分。さむらひ。

**じふ-ぶん** 自刎【名】じけい(自刎)に同じ。

**じふ-ぶん** 自裁【名】みづから裁斷すること。

**じふ-ぶん** 時文【名】【一】當時の文。【二】支那の近代の文體。即ち『黃錄・書牘又は官府の告諭、新聞の記事などに用ひらるるもの。同じく新聞紙上の文にても、論說は古文に近きを常とし、小說・戲曲等の文は、殆ど純然たる談話體にして、時文はその中間に立つ通俗の文體に外ならず。

**じふ-ぶん** 時分【名】【一】ころ。ころ。時期。女殺油地獄「こちの人か、子供がお產の時分を忘れ、何處にどうして居さしやんした」百合若大臣野守鏡「夫婦は時分

**じふ-らい** 集来【名】ぢらい(来集)に同じ。

**じふ-らい** 襲来【名】ぢらい(来襲)に同じ。

**しふ-らい** 習禮【名】大儀の行はるる前に、掛の官員の、その禮式を練習すること。うちならし。〈古語〉〔著聞集〕「習禮ありけり」

**しふ-らうちゆう** 祠部郎中【名】[史]しきぶ(祠部)の唐名。

**じふらうべ-ふし** 十郎兵衛節【名】いちのやぶし(一谷節)に同じ。

**じふ-らく** 十樂【名】(佛)極樂淨土にありといふ十種の快樂。即ち聖衆樂・五妙境界樂・快樂(ケラク)無退樂・引接結緣樂・聖衆俱會樂・見佛聞法樂・隨心供養樂・增進佛道樂の併稱。

**じふらく-とう** 十樂講【名】(佛)淨土の十樂を講讃する法會。

**じふらく-ぬん** 十樂院【名】じふらくぬんもんせき十樂院門跡の略。

**じふらくぬん-の-うへ-の-みささぎ** 十樂院上陵【名】花園天皇の御陵。山城國上京區累田口町青蓮(シヤウレン)院の東南にあり。

**じふらくぬん-もんせき** 十樂院門跡【名】『十樂院は京都に在りし里坊の院號』天台宗の門跡。東陽房覺慶を祖とす。その本房の東陽房は比叡山の西塔北谷にあり。

**じふらせつにょ** 十羅刹女【名】(佛)法華經の陀羅尼品(ホフラ)において、法華行者を守護せんと誓ひし十の羅刹女。即ち一に藍婆(ランバ)、有結縛ともいひ、二に毘藍婆(ビラン)、離縛ともいひ、三に曲齒(ヒヤク)、施積ともいひ、四に華齒(ケシ)、施華ともいひ、五に黑齒(コク)、施黑ともいひ、六に多髮、被髮ともいひ、七に無鼻(ビヤク)、無著(ムヂヤク)ともいひ、八に持瓔珞(ヨウラク)、持華(ケシ)ともいひ、九に皐諦(ヒヤク)、何所ともいひ、十に奪一切衆生精氣といふ。すべて、その形體と性質とに依る區別にして、日蓮宗徒は、鬼子母神と共に尊崇す。平家「十羅刹女、十人の下僧に變じて、隨逐給仕したまへり」

**しふ-らく** 習禮【名】ぢらく(習禮)に同じ。

**しふ-らく** 習禮【名】ぢらく(習禮)に同じ。掛の官員の、その禮式を練習すること。うちならし。〈古語〉〔著聞集〕「習禮ありけり」

**しふ-らうちゆう** 祠部郎中【名】[史]しきぶ(祠部)の唐名。

**じふらうべ-ふし** 十郎兵衛節【名】いちのやぶし(一谷節)に同じ。

**じふ-らく** 十樂【名】(佛)極樂淨土にありといふ十種の快樂。即ち聖衆樂・五妙境界樂・快樂(ケラク)無退樂・引接結緣樂・聖衆俱會樂・見佛聞法樂・隨心供養樂・增進佛道樂の併稱。

**じふらく-とう** 十樂講【名】(佛)淨土の十樂を講讃する法會。

**じふらく-ぬん** 十樂院【名】じふらくぬんもんせき十樂院門跡の略。

**じふらくぬん-の-うへ-の-みささぎ** 十樂院上陵【名】花園天皇の御陵。山城國上京區累田口町青蓮(シヤウレン)院の東南にあり。

**じふらくぬん-もんせき** 十樂院門跡【名】『十樂院は京都に在りし里坊の院號』天台宗の門跡。東陽房覺慶を祖とす。その本房の東陽房は比叡山の西塔北谷にあり。

**じふらせつにょ** 十羅刹女【名】(佛)法華經の陀羅尼品(ホフラ)において、法華行者を守護せんと誓ひし十の羅刹女。即ち一に藍婆(ランバ)、有結縛ともいひ、二に毘藍婆(ビラン)、離縛ともいひ、三に曲齒(ヒヤク)、施積ともいひ、四に華齒(ケシ)、施華ともいひ、五に黑齒(コク)、施黑ともいひ、六に多髮、被髮ともいひ、七に無鼻(ビヤク)、無著(ムヂヤク)ともいひ、八に持瓔珞(ヨウラク)、持華(ケシ)ともいひ、九に皐諦(ヒヤク)、何所ともいひ、十に奪一切衆生精氣といふ。すべて、その形體と性質とに依る區別にして、日蓮宗徒は、鬼子母神と共に尊崇す。平家「十羅刹女、十人の下僧に變じて、隨逐給仕したまへり」

**じふりき** 十力【名】(佛)佛が十種の事を知る力、即ち是處非處力とて、是の處と非の處と、即ち從ふ所の因緣の種類により、或果報を生ずと生ぜぬとの區別を弁知る力、業報(ゴウ)力とて、一切の衆生の過去・現在・未來の善惡の諸業、受報の異相を知る力、定(ヂヤウ)力とて、一切の禪定(ヂヤウ)を知る力、根力とて、他の衆生の諸根の上下如何を知る力、欲力とて、他の衆生の諸欲の如何を知る力、性(シヤウ)力とて、世間種種無數の性を知る力、至處道力とて、一切の道の到る處の相を知る力、宿命力とて、衆生の生死の時・端正と醜陋と貴惡と生善とを見知る力、漏盡力とて、有漏(ウロ)盡きたらん後は、更に後あらざるを知る力の併稱。

**じふりき** 十力の數珠【句】(佛)佛の十力の功德を表徴せる數珠。舊曲「敦下劫」「およそ沙門の形ち・謂つべし、十力の數珠を手に纏ひ」

**じふりき** 十力【名】(佛)佛の十力の功德を表徴せる數珠。舊曲「敦下劫」「およそ沙門の形ち・謂つべし、十力の數珠を手に纏ひ」

**じふりしはう-て** 十里四方鐵砲改役【名】江戸幕府の職制の一。日本橋を中心として、五里づつ東西南北に及ぶ十里四方の間の鐵砲改役。老中の所管にして、大目付の兼役。ただ一員あるのみ。

**じふり-しふり** 澀澀・澁澁【競】しぶしぶ(澁澁)に同じ。夫木「世の中は秋になりゆく若草のしぶりしぶりや笑みてすぎなん」

**しふ-りつ** 四部律【名】[佛]律を四分したる稱。即ち十誦律・四分律・僧祇律・五分律の稱。[佛]比丘法・比丘尼法・受戒法・滅諍法の稱。

**しふりつき-えいくわ-こうさい** 四分利附英貨公債【名】我が國債の一。明治三十二年に外國市場に募集せる鐵道公債・事業公債、北海道鐵道公債と、日露役の當時募集せる六分利附第四回・第五回の國庫債券を償還整理するために、同三十八年に募集せる外國債との稱。利率年四分。

**しふりつき-ふつ-わ-こうさい** 四分利附佛貨公債【名】我が國債の一。五分利附の內國債償還のために、明治四十三年佛國にて募集せるもの。利率年四分。

**しふり-ばら** 澀腹・澁腹【名】便意を催せども、澀りてよく通ぜざること。

**じふり-まつ** 十里松【名】いきのまつばら(生松原)を見よ。

**じふりん-じ** 十輪寺【名】[史]山城國乙訓(オツ)郡大原野村にある天台宗の寺。本尊は地藏菩薩。西國三十三箇所の最初の札所。小鹽山と號す。[史]播磨國加古郡高砂町に在る淨土宗の寺。初め眞言宗なりしが、源空住持たるに及びて、淨土宗に改む。圓光大師四十八箇所遊逍の一にて、寶瓶山と號す。

**じふりん-ぬん** 十輪院【名】奈良市十輪院町にある眞言宗の寺。聖寶の開基。空海も曾て住せしことあり。本尊は地藏菩薩。現在の本堂は鎌倉時代の建築に成る。

**じふりやう-さつ** 十兩札【名】太政官札の一。十圓の不換紙幣。

**じふりやう-とり** 十兩取【名】相撲(スマヒ)にて、幕下(マクシタ)の力士の內、首位より數へて、十名の者。もと給料十兩以上の者に非ざれば、この格に入る能はざる定なりしが、明治十七年以來、必ずしも然らざることとなれり。又この十名中の首位の者を、貧乏神と呼ぶ。貧乏閻などの貧乏と同じく、力量は幕の內の力士に劣らざるに拘らず、ここに取殘さるる者多きよりの稱なるべし。

**じふ-りよう** 十陵【名】昔、每年、葛城(カツラギ)の山陵(ヤマツ)の陵、允仁天皇の田原の陵、桓武天皇の柏原(カシハ)の陵、崇德天皇の八島の陵、仁明天皇の深草の陵、光孝天皇の後田原(ノチタハラ)の陵、醍醐天皇の後山階(ヤマシナ)の陵、その他、山城國大幣(ヘイ)に在る、冥府(メイフ)の使を遣されし十箇所の陵。即ち天智天皇の陵(ミサザキ)、村上天皇の後宇多天皇の陵(ミサザキ)、白河天皇の母后茂子の陵の併稱。はちぼ(八墓)參照。

**しふる** 澀る・澁る【動四自】[史]澀滯に拂取らず。滯る。[史]心遲まず。〈源氏「車よりおりて、しぶりゐたるも、怪しかるべければ」〉[史]しぶり腹を病む。

**しふる-しふる** 澀る澀る・澁る澁る【競】しぶしぶ(澁澁)に同じ。

**しふ-れん** 習練【名】れんしふ(練習)に同じ。

**じふ-ろく** 四分六【名】十分の四と十分の六との割合にて分つこと。

**じふ-ろく** 十六【名】[史]じふろくむさし(十六指)の略。(江戸近在の方言)[史]能(ノウ)の假面(カメン)の一。十六歲ほどの少年の顏に擬したるもの。「敦盛」、「知章」などの曲に用ふ。

**じふろく-うち** 十六打【名】打紐を作るに、八打(ヤウチ)の二倍、即ち十六條の絲を組合はすること。

**じふろく-うらぶき** 十六裏菊【名】紋所の一。十六瓣の菊花を裏面より看し狀にて、花托を中央に附くるもの。

**じふろく-かさねぎく** 十六重菊【名】紋所の一。大なる十六瓣の菊花の上に、小なる同一のものを重ねたるもの。

**じふろく-ぎく** 十六菊【名】ぎく(菊)五に次條に同じ。

**じふろく-くわんぼう** 十六觀法【名】(佛)

**じふろく-さうくわん** 十六想觀【名】(佛)「觀無量壽經に見ゆ」阿彌陀如來の淨土及び佛身を觀ずる十六種の法。即ち日想觀・水想觀・地想觀・寶樹觀・八功德水觀・寶池觀・寶地觀・寶樓觀・華座(ケ)觀・想像觀・佛眞身觀・觀音觀・勢至觀・普想觀・雜想觀・上輩上生觀・中輩中生觀・下輩下生觀の併稱。十六觀法。墨荒「觀無量壽經の十六想觀思ひ出でられて、よよ、へられたまふ」

**じふろく-ささげ** 十六豆豆【名】(植)豇豆の一種。莢(ケ)極めて長く、豆の數、一莢に凡そ十六ばかりづつあり。若きは、莢ながら食用とす。十八ささげ。じふろく。

**じふろく-さすがり** 十六さすがり【名】じふろくむさし(十六指)を云ふ。(上野國・下野國逢の方言)

**じふろく-しま** 十六島【名】(地)利根川の注口常陸國行方(ナメカタ)郡の南隅にある地方の泛稱。もと利根川の運び來れる砂・泥の十餘の洲崎を成しものの、漸次地積を增加したるもの。今は島の形を存せず。

**じふろく-せうごく** 十六小地獄【名】(佛)『大智度論に見ゆ』八大地獄(八熱地獄)に部屬せりといふ八寒氷地獄と八炎火地獄と。眷屬地獄。

**じふろく-せつ** 十六節【名】曆の上における、一年中の十六の季節。二十四節より立春・春分・立夏・夏至(ゲ)・立秋・秋分・立冬・冬至の八節を除きたるもの。

**じふろく-ぜんじん** 十六善神【名】(佛)大般若經を轉讀する時、釋尊と共に擁ぐる十六の佛法守護の神。即ち達哩底(ダリテイ)惡吒大將・熱毘(ネツビ)惡大將・縛日噜大將・迦毘羅大將・宮毘羅(クビラ)大將・眞特噜大將・波夷噜大將・摩虎噜大將・迦噜大將・俱吠噜大將の總稱。何れも深奚大王の子にして、七萬阿僧祇の眷屬を有すといふ。一說に、提頭賴吒(ヂトラクタ)善神・毘盧勒叉(ビルロクシヤ)善神・毘沙門(ビシヤモン)善神・散喜善神・除一切障難善神・離一切怖畏善神・救護一切善神・摧伏毒害善神・殆救諸有善神・師子威猛善神・勇猛心地善神の併稱。その形體は多く甲冑を著用し、手に武器を持つ。著聞「大般若書寫に由りて、十六善神立添して加護したまひけるや」

**じふろく-だいあらかん** 十六大阿羅漢【名】(佛)じふろくらかん(十六羅漢)の略稱。

**じふろく-だいしやう** 十六大將【名】(佛)じふろくせんだいしやう(十六善神)に同じ。

**じふろくちやう-だて** 十六挺立【名】小早(ハヤ)の櫓の數、十六挺を用ふるもの。

**じふろく-とう** 十六藤【名】苗字の末に、藤の字のあるもの十六種。即ち近藤・加藤・內藤・安藤・春藤・後藤・伊藤・遙藤・武藤・齋藤・佐藤・神藤・須藤・葉(ヨウ)・尾藤・工藤・遠藤の併稱。すべて藤原氏より出で、加賀に住みしは加藤、遠江に住みしは遠藤、齋宮寮に職掌ありしものは齋藤、木工寮に職掌ありしは工藤など、住地・職掌等の呼稱より起る。

**じふろくにち-がゆ** 十六日粥【名】陰曆正月十六日に食ふ小豆粥(ガユ)。

**じふろくぶん-おんぷ** 十六分音符【名】(音)『英 Semiquaver』八分音符の二分の一。全音符の十六分の一の長さなる者を示す音符。

**じふろくぶん-きうしふ** 十六分休止符【名】(音)『英 Semiquaver rest』八分休止符の二分の一。全休止符の十六分の一の長さの休止を示す休止符。

**じふろく-むさし** 十六指・十六武差【名】遊戲の一。圖に示せるごとき盤の上方なる正方形の中央に、一箇の親石、力士と呼ぶを、周圍に十六箇の子石(ハヤ)を配置し、親石と子石と交互に一割づつ移動せしめ、親石は相對せる二つの子石の中間に入りて、これを取らんとし、子石は親石に取られざるやう警戒しつつ、これを下方の三角形內に追詰め勝たんと、互に技を競ふものの。さすがり。十六さすがり。むさし。五花六直。舞慶むさし。


(しさむ(ろふじ))

**じふろく-や** 十六日【名】紋所の一。かどたて四日を四つ合はせたるもの。

**じふろく-もさう** 十六夜【名】陰曆十六日の夜。いざよひ。既望。

**じふろく-やしや** 十六夜叉【名】(佛)毘首羯摩夜叉・劫毘羅夜叉・法護夜叉・眉目夜叉・廣目夜叉・護軍夜叉・珠賢夜叉・滿賢夜叉・持明夜叉・阿吒縛夜叉・縛蘇松龍王・薩摩那龍王・補沙毘摩龍王・訶利帝天佛・解羅縛跋大天佛・雙目大天佛の併稱。一說に、じふろくせんだん(十六善神)に同じと。

**じふろく-やへ-きく** 十六八重菊【名】紋所の一。十六菊の瓣と瓣との切れ目の部分に、總に花瓣の先端を添加して、複瓣を現せるもの。

**じふろく-らかん** 十六羅漢【名】(佛)[史]『玄奘譯の法住記に見ゆ』釋迦の命により、一定の期間、この世に在住して、正法を護持するを任とすと信ぜらるる十六人の阿羅漢。即ち賓度羅跋囉墮(ビンドラバラダ)・迦諾迦伐蹉(カナカバツサ)・迦諾迦跋釐惰闍(カナカバリダジヤ)・蘇頻陀・諾詎羅(ダラ)・跋陀羅(バダラ)・迦哩迦(カリカ)・伐闍羅弗多羅(バジヤラフタラ)・戍博迦(シユハカ)・半托迦(ハンタカ)・羅怙羅(ラゴラ)・那伽犀那(ナガセナ)・因揭陀(インガダ)・伐那婆斯(バナバシ)・阿氏多(アシタ)・注荼半托迦(チダハンタカ)の併稱。五百羅漢とは關係なきものなり。[史]『阿彌陀經に見ゆ』釋迦の高弟十六人。即ち舍利弗(シヤリホツ)・目犍連(モクケンレン)・摩訶迦葉(カシヤ)・迦旃延(カセンネン)・俱絺羅(クチラ)・離婆多(リバタ)・周利槃陀伽(シユリハンダカ)・難陀(ナンダ)・阿難陀(アナンダ)・羅睺羅(ラゴラ)・憍梵波提(ケバダイ)・賓頭盧頗羅墮(ビンズルバラダ)・迦留陀夷(カルダイ)・劫賓那(コフヒン)・薄拘羅(ハクク)・阿冕樓馱(アミルダ)の併稱。阿冕樓馱は十大弟子中の阿那律に同じ。十六菩薩。じふばちらかん(十八羅漢)參照。

**しふわ** 澀輪・渋輪【名】(蹴)さうだがつを(さうだ鰹)に同じ。

**じふ-わう** 十王【名】(佛)冥府にありといふ十人の王。即ち秦廣王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・變成王・泰山王・平等王・都市王・轉輪王の併稱。中有(チウウ)の亡者、冥府に入るや、初七日に秦廣王の廳に至り、以下順次に二七日・三七日・四七日・五七日・六七日・七七日・百日・一周年・三周年に各王の廳を過ぎて、罪の裁判を受け、末世の生處を定めらるといふ。冥府には、閻魔のみなりしに、支那に入りて、道教の思想混入し、十王の稱起れり、我が國にても、平安朝時代には閻魔のみなりしに、鎌倉時代、禪宗の渡來と共に、十王の思想も傳はるに至れり。じふばちらかん(十八羅漢)參照。墨書記「娑婆世界の罪人の冥途中有の旅にして、七日七日に、十王の手に渡さるらんも、かくやと思ひ知れたり」

**じふわう-がしら** 十王頭【名】兜(トウ)の鉢の形の名。

**じふわう-きやう** 十王經【名】(書)ぶっせつぢおうきょうほっしんいんえんじふわうきやう(佛說地藏菩薩發心因緣十王經)の略。

**じふわ** 拾遺【名】[史]遺漏を拾ひ補ふこと。[史]史記の汲黯傳に「汲黯獨出入禁闥、拾遺補闕」とあるに本づく。[史]君主を輔けて、その過失を補ふこと。[史]じしゅう(侍從)の唐名。下學集「侍從、拾遺」[史]薫物(タキモノ)の一。沈香・丁子香・甲香・甘松香・熱鬱金香・黏香の六味を煉合はせて作る。また麝香を加ふともいふ。[史](書)じふわかし(拾遺和歌集)の略。[史](書)うちじふわものがたり(宇治拾遺物語)の略。墨江「君見よや拾遺の年の路五本」

**しふわ-くさう** 拾遺愚草【名】(書)藤原定家の歌集。四卷。

**しふわ-とうえ-ぶしふ** 拾遺後葉集【名】(書)扶桑拾葉集の轍集に擬して撰びたるもの。二十四卷。江田世恭の撰。

**しふわ-しふ** 拾遺集【名】(書)しふわかしふ(拾遺和歌集)の略。

**しふわ-せう** 拾遺抄【名】(書)しふわかしふ(拾遺和歌集)を見よ。

**しふわ-たいしつ** 澁井太室【名】(人)儒者。名は孝德、字は子章、平左衛門と稱す、佐倉侯に仕ふ。擢でられて老職となり、天明八年歿す。年六十九。

**しふわ-わかし** 拾遺和歌集【名】(書)『萬葉・古今・後撰の三歌集に次ぐ』ちたるを拾ふとの義にて、名とす』三代集の一。歌數一千三百五十一首を收む。二十卷。別に拾遺抄と題するもの十卷ありて、歌數五百九十四首を收む。集抄兩者の關係については、前者は花山法皇の勅選、後者は藤原公任(キンタウ)の撰なりとも、又はその反對なりとも、或は何れも法皇の勅撰なりともいひ、また抄は集より抄出せるなりともいふ。集は抄を基として增補せるなりともいふ。

**しふわ-ゐんぐわい** 拾遺員外【名】(書)藤原定家の家集。

**しふ-ゑ** 集會【名】しふくわい(集會)に同じ。太平記「藏王堂に集會して」

**じふ-ゑんぶ-きんくわ-へい** 十圓金貨幣【名】貨幣法に基きて發行せられたる十圓の本位貨幣。品位は金九・銅一。









じふろく

**じふ**ふん・さつ 拾圓札【名】明治通寶の一。十圓の不換紙幣。

**しぶ**をんせん 澁温泉・澁温泉【名】〔地〕信濃國下高井郡平穏村に在る温泉。上野國に通ずる縣道に當り、高さ一六四三尺の高所に位す。泉質は酸性泉にして、僅麻質斯・貧血などに効ありといふ。澁湯。

**しべ** 蕊・蕊・蕊【名】〔植〕■すべ(蕊)に同じ。和名抄『蕊・之倍、花心也』 太平記『丹楽の蕊の湯立つ日南(ヒナ)かな』 ■〔総緒(ヒモ)の飾。金管の蕊は、緒の端の總の附際に、金管を捲き、絲の蕊は、緒の端の總の附際を、絲の中に心を入れて、卵形に膨ませたるもの。

**しべ**ぎ【名】わらし(藁梢)の略。

**しへい** 紙幣【名】法貨として、硬貨と共に流通する紙札。金銀貨に兌換すと否とに由りて、兌換紙幣と不換紙幣に別ち、發行者の異なるに由りて、政府紙幣と銀行紙幣とに別つ。札(ツ)。楮幣。紙錢(セン)。軟貨。紙幣消却【句】損傷紙幣又は不換紙幣を回收して、廃棄すること。

**しへい** 砥平【名】砥石(ハイ)の面の如く平かなること。

**しへい** 幣幣【名】つかひもの。にへ。禮物。

**しへい** 使聘【名】使をやりて訪問すること。使を以て禮物を贈ること。

**しへい** 私兵【名】自分の兵。

**しへい** 支兵【名】支隊の兵。

**じへい** 時弊・時病【名】その時の弊害。

**じへい** 寺兵【名】■そうへい(僧兵)に同じ。

**じへい** 辭柄【名】いひぐさ。口實。

**しへいし** 紙幣司【名】しへいれう(紙幣寮)の前稱。

**しへいは**っかう・ぎんかう 紙幣發行銀行【名】紙幣の發行權を有する銀行。我が國の日本銀行の類。

**しへいは**っかうはふ 紙幣發行法【名】紙幣の發行上に採るべき方法。

**じへい**・べん 自閉癖【名】〔醫〕『羅 Vahlae conniventes』小腸の内層なる粘膜に存する數多の横襞。糞分の吸收面を増大する便に供す。

**しへいるゐじ**しようけん 紙幣類似證券【名】紙幣に類似せる證券。主務大臣は、その發行及び禁止を命ずる事を得。

**しへい**れう 紙幣寮【名】明治四年より同十三年まで、大藏省に屬して、紙幣製造に關する事を掌りし役所。

**しへう** 指標【名】〔數〕『英 Characteristic』一數の常用對數は、その數が一より大ならざれば正、小ならば負にして、常用對數を、その小數部の正なる様に書きたる時の整數部の稱。

**しへう** 紙票【名】紙のふだ。かあど。

**しへう** 師表【名】『表は典(ヒロ)を見るためのの表木』の師となり、手本となること、又その人。

**じへう** 四表【名】こも。四方。天下。世間。

**じへう** 辭表【名】職務をやむる時、その旨を記して呈出する文書。いとまぶみ。辭書。

**しへうば** 紫驃馬【名】黒鹿毛(カゲ)の馬なるべしといふ。 續日本紀『新羅國奏驃馬二疋』

**しへき** 詩癖【名】詩を好むくせ。

**しへき** 四壁【名】■家の四方の壁。■あたり。きんべん。四隣。合壁(ヘキ)。家ただ四壁【句】四方に壁あるのみにて仕物なき貧屋。

**しへきびき** 四壁引【名】檢地の際、屋敷の四方に餘地を與ふること。四方引。

**しべ**ーと 藥粉【名】くわふん(花粉)に同じ。

**しべだ** 四吠陀【名】〔佛〕古代に北西印度に移住せるアルヤ民族が當時の傳語を以て記せる四種の讃美歌。即ち力荷吠陀(リグ)・娑摩吠陀(サマ)・阿闍婆吠陀(アタル)・夜集吠陀(ヤジュル)の四種。

**しへたく** 虐【動下二他】■むごく扱ふ。非道に扱ふ。虐待す。 後拾遺『人を苦しめ、物をしへたくること』 ■無實の罪におとす。〔古語〕 續紀『制勅合し理、獄訟無変(ヘカ)』 ■〔別離。

**しへつ** 死別【名】しにわかれ。永訣。死室支廳の所管。

**じ**へつ 辭別【名】暇乞して別るること。「し」告別。

**しへつつり** 死別離【名】しべつ(死別)に同じ。

**しへつ**ところ 藥取【名】〔地〕千島國九郡の一。擇捉(ヒロ)島の北部。根室支廳の所管。

**しへ**ーばうき 楷帚【名】藁箒(ホウキ)を束ねて作りたる帚。一代男『しべ巻にて、夷(ヒロ)に背(ヒロ)をたたかせ』

**しへ**ん 四邊【名】■四方の邊。四方。■あたり。近所。 ■四つの邊(ハシ)。四周。

**しへ**ん 詩篇【名】■詩を記載したる書物。詩集。 ■〔書〕『英 Psalm』舊譯全書の一卷なる約五十篇の詩集。おほむね神德を讃美せるもの。

**しへ**ん 紙片【名】かみきれ。

**しへ**ん 支辨【名】■とりはからひ。わきまへ。 ■金錢を支拂ふこと。

**しへ**ん 四辯【名】〔佛〕しびけん(四無礙辯)の略。 鶴翼分類『四辯・八音の如來に親しみて』

**しへ**ん 思辨【名】■思考して、道理を辨別すること。 ■〔哲〕『英 Speculation』經驗的知識を排斥して、徹頭徹尾思考すること。純粹思考。 ■觀察及び推理の範圍を逸して、疎漫に失する思考。

**じへ**ん 事變【名】■かはりたる出來事。 ■國家に於ける大事。戰爭までには至らざる騒亂。變事(ヘン)。

**じへ**ん 時變【名】その時時の變事。

**じへ**ん 自辨【名】自ら費用を支辨すること。じぶんもち。自費。

**しへん**ーけい 四邊形【名】〔數〕『英 Quadrilateral』角形に同じ。

**じへん**ーすう 自變數【名】〔數〕『英 Independent variable』或式又は方程式中にて、任意の値を取得る數。又その數によりて、値の定まる數を因變數といふ。

**しへん**ーてつがく 思辨哲學【名】〔哲〕『英 Speculative philosophy』經驗的知識を排斥し、先天的思考のみによりて建設せんとする哲學。今理論に胚胎し、西曆第十九世紀の中頃、一時獨逸の哲學界を風靡せしフィヒテ(Fichte)・シェルリング(Schelling)・ヘエゲル(Hegel)一派の傾向なりしが、ヘエゲルの死後、漸次に科學者及び哲學者の反對する所となり、今は信ずる者殆ど無し。

**しへん**てん 四辯天・四辯天【名】我が國にて、名高き四つの辯才天。即ち竹生島(ヒロ)・江の島・厳島(ヒロ)・箕面(ヒロ)の四箇所にあるもの。

**しへりや** 西比利亞・西伯里【名】〔地〕亞細亞洲の北部に位する露西亞の領地。さいべりや。

**し**ほ 潮・汐【名】■うしほ(潮)[1]に同じ。 萬葉『なこの海にしほのはやひばあさりに出でむとたづは今ぞなくなる』 ■〔潮汐の意より轉じていふ。きり。しほあひ。しほどき。機會。 飲太『水の海と落つる涙はなりにけりあふべきしほもなしと聞くより』 ■『しほひし』を見よ。 ■『しほ』おもむき。情趣。きよく、風致。愛嬌。 五十年忌歌合建『なぜに、そなたは、しほがない』 平家物語『機嫌ゑがほのしほの目ほそめ』 潮逸(ヒロ)ふ【句】潮時よし。 夫木『しほかなふあさかの浦の追風に機もとりあへずいづる舟人』

**潮ならぬ海**【句】みづうみ。あはうみ。 太平記『沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれゆく、身を浮舟のうきしづみ』

**潮の泡**(ヒロ)【句】潮水の上に生ずるあぶく。しほなほ。 記『小鳥皆是潮沫(アワ)凝成者矣』

**潮の間**(ヒロ)【句】潮の干滿の間。しほあひ。 新古今『しほの間によもの浦浦たづぬれど今はわが身のいふかひもなし』

**潮の目**【句】愛嬌を含めて細くしたる目つき。 狂言子盗人『まだ藝はないか、しほのめ、しほのめ、しほのめ』

**潮の八百會**(アヒ)【句】潮の諸方より滿ちあふ處。**しほあひ**(潮合)參照。 祝詞『八鹽道の潮の八百會にます遠間都比咩と云ふ神』

**潮の八百路**(ヒロ)【句】海中に在る多くのみち。 祝詞『大海原に持出でなむ、かく持出でなば、荒鹽の鹽の八百道の』

**潮の八百重**(ヘヒ)【句】廣大なる海上。 記『月讀尊者、可二以治一滄海原潮之八百重一也』





潮向ふ【句】潮のさし口に向ふ。 新伝授『五月雨にゆふしほ向ふ流川せかれていと水まさりつつ』

**潮を踏む**【句】世間に出でて辛酸を嘗む。つらき目にあふ。一代男『いかにもこの浦のしほを踏んで、老いての咄にもと思ふぞ』 世間子息氣質『慰らしめのため、親仁に、ちっとしほを踏ませうと』

**潮を焼く**【句】海水を煮て、鹽を製す。藻鹽草を焼きて、鹽を製す。しほやく。

**しほ**ー鹽・塩【名】■しよくえん(食鹽)に同じ。 和訓栞『其蜻村・或(ヒロ)新雨焼鹽』 ■しほけ。しほかげん。鹽梅(ヒロ)。 ■江戸時代の大阪新町における娼妓の階級の一。つぼねの次、かげの上。

**鹽が浸(ヒロ)む**【句】世の辛酸が身にしむ。世を渡る經驗がつむ。所帶じむ。しほじむ。 浮世風呂『前方はちっと道樂だつけが、今では鹽がしみたか、それはそれは大人しうなって』

**鹽に焼く**【句】鹽漬にす。

**鹽に焼く**【句】「潮を焼く」に同じ。 記『枯野(ヒロ)をしほに焼き、其(ヒロ)が餘(ヒロ)琴に造り』

**鹽の位**【句】しほ(鹽)[1]に同じ。「と。

**鹽の光**【句】海水の夜間、燐光を放つこと。

**鹽を出す**【句】鹽田(ヒロ)をなす。

**鹽を踏みに出す**【句】世わたりの經驗のために、子女を奉公に出す。〔大阪の諺〕

**しほ**ーあ 堅い鹽【句】かたし(固鹽)に同じ。 安藤『はじかみ附けたるかぶら、堅い鹽ばかりして』

**しほ**ーの鹽【句】〔基〕『英 The salt of the earth』新譯全書馬太(ヒロ)傳第五章第十三節に出づ。その生存が、世界にとりて、利益となる種類の人人。

**しほ**ー師輔【名】師として、教へ輔くること、又その人。

**しほ**ー師保【名】君の師となりて教へ、且つ保育すること、又その人。

**しほ**ー試補【名】或官に任命せらるるまで、官廳の事務を實地練習すること、又その者。文官試補・判事試補の類。

**しほ**ー入【助數】物を染汁にひたす度數。萬葉『わぎも子がかたみがてらと紅のやしほに染めて』 後拾遺『色ふかき袖の涙にならふらし千しほ八千しほ染むる紅葉は』

**しほ**ー鞍【名】烏帽子・革・綿綱などに有する鞍(ヒロ)・糧きを「正しほ」、粥なるを「小しほ」といふ。

**しほ**ー思慕【名】したひおもふこと。

**しほ**ー師模【名】てほん。師表。模範。

**しほ**ー四墓【名】藤原鎌足の墓と藤原冬嗣の墓と同冬嗣の妻の墓と同冬嗣の姿源氏の墓との併稱。また後に、藤原良房の墓を加へて、五墓とせり。**じほ**(五墓)參照。

**じほ**ー侍補【名】宮内省の職員の一。天皇に常侍して、闕失を補益することを掌りしもの。明治十年創置、同十二年廃止せらる。

**じほ**ー麺脯【名】かるすみ(鰹)に同じ。

**じほ**ー字母【名】■〔語〕漢字の諸音の種類を代表する文字。普通には、幫・滂・並・明・非・敷・奉・微・端・透・定・泥・知・徹・澄・孃・見・溪・群・疑・精・清・從・心・邪・照・穿・牀・審・禪・影・曉・匣・喩・來・日の三十六字母とし、見は牙音の清音(k)、溪は同牙清音(k')、群は同濁音(g)、疑は同清濁音(ng)等のごとく、同種類の音を代表す。(字子に對して) ■〔語〕あるはべつさに同じ。 ■ほけい(母型)に同じ。

**じほ**ー慈母【名】■いつくしみの深き母。 ■ほは(母)を親愛していふ語。(嚴父に對して) ■〔儀禮の喪服篇に「慈母如母」とあり。傳に「妾之無子者、妾子之無母者、父命妾曰、女以爲子、命子曰、女以爲母。若是則生養之終二其身一、如母、死則喪之三年」とあり』母に代りて保育する婦人。養母。保母。保母。

**しほ**ーあし 潮蘆・汐蘆【名】海岸に生ずる蘆。 藤典『松原の下枝にまじる汐蘆の』

**しほ**ーあひ 潮合・汐合【名】■潮のさしひき。しほどき。 ■潮の滿合ふ處。「潮の八百會(アヒ)參照。 古今『わたつみの神つしほあひに浮ぶ泡の消えぬものから寄る方もなし』 ■しほ。ころあひ。しほどき。機會。 今鏡『はね返さんと思ひしが、是れぞよき潮合と、ためらふ處を折重なり』

**しほあへ**ーもの 鹽和物・塩和物【名】鹽にてあへたる魚。

**しほあへ**ものーやく 鹽和物役・塩和物役【名】足利時代に、鹽魚類に課したる雜稅の一種。

**しほ**ーあん 鹽餡・塩餡【名】砂糖の代りに鹽を加へて、味を附けたる餡。

**しほ**ーあんばい 鹽梅・塩梅【名】食物を調理する鹽の加減、又その味。しほかげん。しほめ。 ■を見よ。

**しほ**ーあゆ 鹽鮎・塩鮎【名】あいきやう(鰹)。

**しほ**ーあらし 鹽風・塩風【名】荒く吹く鹽風。

**しほ**ーあわび 鹽鮑・塩鮑【名】鹽漬にしたる鳥賊。

**しほ**ーいか 鹽烏賊・塩烏賊【名】鹽干にしたる烏賊。

**しほ**ーいり 潮入【名】池川・田などに、海水の注ぎ入ること、又その池川・田など。

**いほいり**ーいけ 潮入池【名】海魚を飼ふため、海水の通ふやうに作りたる池。

**しほいり**ーぜめ 鹽炒責・塩炒責【名】拷問の一種。炒りたる鹽にて體を熱して責めしもの。 地獄先達『腹に子のある綸蛸(ヒロ)の格、鹽炒責にしてくれう』

**しほ**ーいわし 鹽鰯・塩鰯【名】鹽づけにしたる鰯。

**しほ**ーう 紙縫【名】紙のつぎめ。

**しほ**ーう 士峯【名】〔地〕ふじさん(富士山)の別稱。 萬葉『まのあたり、日月のために雲門を開くかと、天を支へ、日月のために雲門を閉ぐかと』

**しほ**ーう 支峯【名】えだの峯。分峯。

**しほ**ーう 支封【名】分家の領地。

**しほ**ーう 司封【名】支那にて、諸侯王の封僧を掌りし役。

**しほ**ーうに 鹽雲丹・塩雲丹【名】海栗(ヒロ)の卵巣に鹽を加へて練りたる食品。きうに。

**しほ**ーうみ 潮海・汐海【名】鹽分を含みたる海、即ち普通の海。うみ。〔あは海に對して〕 土佐『いとあやしく、しほうみの邊にてあざれあへり』

**しほ**ーうり 水咀【名】〔動〕みづすまし(水咀)を云ふ。〔西國の方言〕

**しほ**うりーのーにようばう 水咀女房【名】〔動〕あまがへる(雨蛙)に同じ。

**しほう**ーろく 士峯錄【名】〔書〕富士山に關する詩・歌・文章などを集めたるもの。六卷。士師(ヒロ)玄同の著。

**しほう**を 鹽魚・塩魚【名】鹽をふりかけたる、又は鹽漬にしたる魚。しほざかな。しほもの。 藤裏『鹽魚の齒にはさかふや秋のくれ』

**しほ**おし 鹽押・鹽壓・塩押【名】茄子・瓜などを鹽漬にし、蓋の上に石などの重量物を載する漬方、及びこの漬物。しほづけ。 萬葉『長屋王遊びやあがつても、因はてへげへ知れてらあ、鹽押の茄子を地獄落しへかけたといふひしやげた野郎と…』

**しほ**おひかぜ 潮追風【名】潮のさしひく方向に吹く逆の風。 藤典『紀上『由貫の戸渡る早舟、汐追風の吹上や』

**しほ**かかり 潮繋【名】潮時を待つために、船を泊むること。

**しほ**かげん 鹽加減・塩加減【名】しほあんばい(鹽梅)に同じ。

**しほ**がしら 潮頭【名】沖よりさし來る潮のさき。さししほ。 萬葉『名月や門にさし來るしほがしら』

**しほ**かぜ 潮風・汐風【名】鹽氣を含める風。海上に起る風。うしほかぜ。 新古今『須磨の蜑の袖に吹きこす鹽風のなるとはすれど手にはとまらず』

**しほかぜ**ぎく 潮風菊【名】〔植〕しほぎく(潮菊)に同じ。

**しほかぜ**ーさう 潮風草【名】〔植〕くさたちばな(草橘)に同じ。

**しほかは**ーつを 鹽經・塩經【名】鹽引にしたる鰹。

**しほかは**ー川・塩川【名】〔地〕若代國耶麻郡にある村。若松市の北三里。鐵道敷越線の一驛。鹽川館址あり。

**しほかは**ーふんりん 鹽川文麟【名】四山派の畫家。京都の人。字は子温、木佛道人と

鑒す。岡本豊彦の高弟。弘化年間に歿す。年七十餘。一説に、明治初年に歿すと。

**しほ-がひ** 潮間・汐間【名】しほ干潮間に同じ。〔古語〕〔雲葉〕伊勢の海の清き渚のしほがひに神馬藻(ホンダワラ)や搦まん貝や拾はん玉や拾はん」

**しほ-がひ** 潮貝・汐貝【名】海に産する貝。古今「伊勢の海の浦の鹽貝ひろひあつめ」

**しほ-がひ** 鹽貝・塩貝【名】鹽漬にしたる貝の肉。一代女「酒より前に、しほ貝喰うてしまひ」〔雲葉新題〕礒山「しほ貝の水の渇や五月雨」

**しほ-がま** 鹽竈・塩竈【名】Ⅰ潮水を汲入れて、鹽を製するかまど。Ⅱ薇座鈴(ミヨウ)を砂漠に和し、固めて、四角に切りたる薬子。陸前國の鹽竈神社附近にて製して賣初めしものといふ。〔鹽釜〕Ⅲ〔植〕しほがまざくら(鹽竈櫻)の略。

**しほ-がま** 鹽竈・塩竈【名】Ⅰ〔地〕陸前國宮城(ミヤギ)郡にある町。松島灣の南端に臨み、仙臺市より四里。沿岸一帯を千賀(チガ)浦又は鹽竈浦といふ。北方の丘上に鹽竈神社あり。Ⅱ昔の笛の名。

**しほ-がま-がや** 鹽竈萱・塩竈萱【名】〔植〕かるかや(苅萱)を云ふ。〔陸奥國の方言〕

**しほ-がま-まぎく** 鹽竈菊・塩竈菊【名】〔植〕玄參(ハシカイ)科に屬する多年生の草。山野に自生し、夏秋、紅紫色の花を開く。しほがまさう。こましほがま。

**しほ-がま-さう** 鹽竈草・塩竈草【名】〔植〕前條に同じ。

**しほ-がま-ざくら** 鹽竈櫻・塩竈櫻【名】〔植〕八重にて、花のみならず、葉まで美しきもの。しほがま。井蘭雲平河内鶯「翅となれや鹽竈櫻」

**しほ-がま-じんじや** 鹽竈神社・塩竈神社【名】陸前國宮城郡鹽竈町に鎮坐する國幣中社。祭神は武甕槌(タケミカヅチ)命・經津主(フツヌシ)命・鹽土老翁(シホツチノオヂ)。式内の古社、また東奥第一の社。

**しほ-がま-の-うら** 鹽竈浦・塩竈浦【名】しほがま(鹽竈)[二]を見よ。古今「陸奥(ムツ)はいづくはあれど鹽竈の浦こぐ船の綱手かなしも」

**しほ-から** 鹽辛・塩辛【名】魚介などの肉・子又は腸などにて、鹽からく造れる醬(ヒシホ)。今昔「このしほからなどつづしるほどに」

**しほ-から-ごゑ** 鹽辛聲・塩辛聲【名】しほがれこゑ(嗄聲)の異語。〔古語〕〔泉鏡〕うたひをばしほから聲にたてふしを拍子はづれにとくおそく、しどろもどろに謡ひなし」

**しほ-からし** 鹽辛し・鹹し【形Ⅰ】鹽氣强し。しほはゆし。しはゆし。

**しほから-とんぼ** 鹽辛蜻蛉・塩辛蜻蛉【名】〔動〕蜻蛉の一種。雄性にて、體は蒼灰色にて、黑條を有す。雌性は、麥稈蜻蛉といふ。しほとんぼ。

**しほ-がれ** 潮潤・汐潤【名】しほひ(潮干)[二]に同じ。〔古語〕〔雲葉〕しほがれの水に蜑人くぐつもて玉藻刈るらむ」

**しほ-ぎ** 鹽木・塩木【名】鹽を焼くに用ふる薪。新千載「いかにせん阿漕(アコギ)が浦に袖にぬれてつむやしほぎのからき思を」

**しほ-ぎく** 鹽菊・塩菊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。海邊に多く、高さ一二尺。葉形は菊の似、表は深綠、裏は蒼白色をなす。秋、菊に似たる黄又は綠色の花を頭狀花序に著く。いはぎく。うはぎく。ききやうぎく。千年艾。

**しほ-ぎぬ** しほ絹【名】紺の一種なるべけれど詳かなず。〔古語〕宇治「しほぎぬのあをいとふ物著て、帶して」

**しほ-きり** 潮切・汐切【名】Ⅰ三月三日前後頃の、毎日曇れども、南降らぬ天氣。Ⅱ荷船の艪床の表に附くるもの。なみきり。Ⅲ一本水押(ハナオシ)の一部。

**し-ぼく** 司牧【名】『ぼくみん(牧民)を見よ』人民を治むること、又その官職。牧民。地方官。知州。知州事。

**し-ぼく** 四木【名】Ⅰ四種の木。Ⅱ茶・桑・漆・楮(ハタ)の四種の木。「三草・四木」

**し-ぼく** 指墨【名】しどろ(指墨)に同じ。

**し-ぼく** 死墨【名】〔美〕日本畫にて、墨の塗方の變化なきこと。(活墨に對して)

**しほ-ぐ-きよく** 指北極【名】〔理〕しほまく(磁極)を見よ。

**しほ-くぐ** 潮莎草【名】〔植〕莎草(ハマスゲ)科に屬する多年生の草。沿岸の半鹹半淡の地に生ず。葉は細長く、夏秋、茶褐色の花を開く。うしげ。

**しほ-くぢら** 鹽鯨・塩鯨【名】鹽漬にしたる鯨。昔は元日の吸物の料に供せられたり。雲葉「水無月や鯛はあれどもしほ鯨」

**しほ-くび** 鹽首・潮首【名】Ⅰけらくび(鰹姑首)[二]に同じ。本朝三國志「素餐(ソサン)の鹽首、むづとつかんで」

**しほ-くみ** 潮汲・汐汲【名】Ⅰ鹽に製すべき潮水を汲むこと、又その人。鳥葉「しほくみや千鳥のこして歸る海人」Ⅱ〔動〕花の露を吸ひて、始終飛びめぐる蝶類。Ⅲ長唄、常盤津掛合にて演ずる踊。鳴曲の松風より鏡樂せるものにて、潮汲姿に烏帽子・狩衣を著て、在原行平を慕ふ狂態をなす。

**しほ-くみ-ぐるま** 潮汲車・汐汲車【名】潮水を汲みたる桶を運搬する車。謡曲松風「汐汲車わづかなる浮世めぐるはかなさよ」

**しほ-くみ-ぶね** 潮汲船・汐汲船【名】潮水を汲取りて運ぶ船。曾我鬼心中「鹽竈の浦を都に堀江漕ぐ潮汲船の跡絕えず」

**しほ-ぐもり** 潮曇・汐曇【名】海上に漂ふ水氣のために、曇るが如く見ゆること。謡曲「老人と見えつるが、潮曇にかきまぎれて」

**しほ-ぐるま** 鹽車・塩車【名】鹽を運搬する車。鹽車(エンシヤ)。雲葉「甲斐がねや穂蓼の上をしほぐるま」

**しほ-け** 潮氣・汐氣【名】うしほの氣。海上の水氣。雲葉「しほけ立つ荒磯にはあれど行く水のすまし水がかたみとぞこし」

**しほ-け** 鹽氣・塩氣【名】しほからき味。鹹味。鹽分。

**しほ-けぶり** 鹽煙・塩烟【名】製鹽する時、竈より立ちのぼる烟。しほけむり。拾遺「浦風に焼くしほけぶり吹きまよひたなびく山の冬ぞさびしき」

**しほ-けむり** 潮煙・汐烟【名】潮水のしぶきの、烟の如く見ゆるもの。海水のしぶき。

**しほ-けむり** 鹽煙・塩烟【名】しほけぶり(鹽風)に同じ。

**しほ-こし** 潮越・汐越【名】潮水を引導くこと、また波送ること。歌木「煤乘れるまやのあしよりもる雪や見し潮越の樋にもあるらん」

**しほ-こし-の-まつ** 汐越松【名】あたかのまつ(安宅松)[二]に同じ。西行「夜もすがら嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松」奥の細道、越前の境吉崎(ヨシザキ)の入江を舟に棹して、汐越の松を尋ぬ」

**しほ-ごろも** 潮衣・汐衣【名】潮水を汲む時に著る衣、また潮水にぬれたる衣。謡曲「東からげの潮衣くめば月をも袖に望潮の」

**しほ-さい** 潮菜【名】〔動〕次條の略。

**しほ-さい-ふぐ** 魚鱗【名】〔動〕ふぐの一種。近海に產す。皮膚平滑にして小刺なく、背部は黑褐色にして、白色の小點散在す。肉は味美にして、毒少なし。いそふぐ。

**しほ-さかな** 鹽肴・塩魚【名】しほうを(鹽魚)に同じ。一代女「それぞれの鹽肴取出だし、かりそめの樂しみ」

**しほ-さかひ** 潮境・汐境【名】潮水の流れ分るる境。國姓爺、唐と大和の潮ざかひ、うくら者かと疑へり」

**しほ-さき** 潮先・汐先【名】Ⅰ潮のさし來る時、又さし來る潮の波先。萬葉「風わたる浦のみなとのしほさきに波乘りこえて鳴鳴くなり」Ⅱ廻鵜し始むる場合。流鶯「いで、このしほさきを借りて、なさくじりそ」

**しほ-さけ** 鹽鮭・塩鮭【名】鹽引にしたる鮭。

**し-ぼさつ** 四菩薩【名】〔佛〕Ⅰ上行菩薩・無邊菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩の併稱。Ⅱ菩賢菩薩・文殊菩薩・觀音菩薩・彌勒菩薩の併稱。或は彌勒を除きて、勢至を加ふ。くそ八・九條)參照。謡曲(金札)「然るに、佛法東漸とて、三如來・四菩薩も、皆目城に地を占めて」Ⅲ數珠にて、百八箇の員數外にて、一箇の玉。

**しほ-さば** 鹽鯖・塩鯖【名】鹽を振りかけて







干したる鯖。

**しほざは** 鹽澤・塩澤【名】〔地〕越後國魚沼郡にある町。魚野川の左岸、六日町の南一里。三國(ミクニ)の道路に當る。

**しほ-さんま** 鹽秋刀魚・塩秋刀魚【名】鹽漬にしたる秋刀魚。

**しほ-さゐ** 潮騷【名】上げ潮時、海水の騷しく高まること。潮のさわぐこと。〔古語〕萬葉「うしまどの浪のしほさゐ島どよみ寄せてし君にあはずかもあらむ」

**しほ-し** 鹽押・塩押【名】しほおし(鹽押)の略。

**しほ-しいら** 鹽鰹・塩鰹【名】鹽漬にしたる鰹。その鹽乾にしたるを、九萬引(ヒキ)などに謂れそぼつさま。しほほ。謡氏「しほしほと泣きたまふ」盛衰記「俗も骨もしほれければ」

**しほ-じほ** 鹽鹽・塩塩【名】鹽氣の多量なる狀。

**しほ-じむ** 潮染む・汐染む【動四自】Ⅰ潮氣に染みて濕ふ。〔多語〕謡氏「世をうみにこころしほじむ身となりて」Ⅱ物事に馴れしたしむ。なじむ。謡氏「かかる住びにしほじまざらましかば」

**しほ-じり** 鹽尻・塩尻【名】Ⅰ濱邊にて、砂を圍く塚の如くに積上げたるもの。これに潮水を注ぎかけ、日に晒して、鹽分を固著せしむ。〔古語〕伊勢「富士の山を見れば、形(ナリ)は、しほじりのやうになんありける」Ⅱ〔動〕にしの類。殼の形、前項のしほじりに似たり。Ⅲすりばち(擂鉢)の異稱。

**しほ-じり** 鹽尻・塩尻【名】Ⅰ〔書〕尾張藩の天野信景の隨筆。和漢の書を引證して、家系傳記より、神佛の由來、自家の詩文などを、何くれとなく書集めたるもの。もと運慶湛筆壬申隨筆など、別別に名ありしを、伊勢物語中の鹽尻といふ語につきての創見、この書の卷頭にあるによりて、取りて總名とす。卷數もまとは確定せざりしを、天明二年名古屋の人西村常樂校訂して、百卷とせり。近年、活版に附して刊行す。五卷。Ⅱ〔地〕矢條を見よ。本朝二十四孝「鹽尻指して急ぎ行く」

**しほ-じり** 鹽尻・たちげ 鹽尻峠・塩尻峠【名】〔地〕信濃國東筑摩(チクマ)郡鹽尻村より諏訪郡諏訪町に通ずる坂路。高さ三八一尺。犀川と天龍川との分水嶺をなす。天文年中武田晴信の小笠原未曾の兩氏と戰ひし處。

**しほ-じる** 鹽汁・塩汁【名】しほみづ(鹽水)に同じ。〔古語〕雲葉「飲三鹽汁一シホジルヲノミテ」

**しほ-すまし** 鹽清汁・塩清汁【名】焼鹽にて味を附けたる煮汁。うしほ。

**しほ-ぜ** 潮瀬・汐瀬【名】潮水の流るる筋。潮流。謡「しほぜのなをりを見れば遊びくるしびがはたでにつまたて見ゆ」千載「いはおろすかたこそなけれ伊勢の海のしほぜにかかるあまのつりふね」

**しほ-せ** 鹽瀬・塩瀬【名】組織物の一製綾。精練等の方法は、ほぼ羽二重に同じく、經絲と緯絲との太さ、並びに組織の方法は、全く博多織に同じきもの。

**しほ-せん** 子母錢【名】〔搜神記に出づ〕ぜに(錢)の異稱。

**しほ-せんべい** 鹽煎餅・塩煎餅【名】米の粉を捏ねてふかし、押延めて、方形又は圓形等に切りて乾し、醬油を附けて焼きたるもの。

**しほ-た** 鹽田・塩田【名】しほはま(鹽濱)に同じ。

**しほ-たうち** 潮湯治・汐湯治【名】鹽湯に浴して、病氣をなほすこと。うしほたうち。

**しほ-たき**【名】(動)みづすまし(水黽)を云ふ。〔土佐國の方言〕

**しほ-だし** 鹽出・塩出【名】食物の鹽氣を抜去るため、水につけおくこと。

**しほ-だし-かげん** 鹽出加減・塩出加減【名】鹽出(ダシ)の程合。

**しほ-だち** 鹽斷・塩斷【名】神佛への所願の際、雲ひて、或時期の間、鹽氣のある食物を喰はぬこと。歌謡深草「惣別、姐妹屋(ヤヤ)のものは、神佛ばかりいぢって、鹽斷だの茶斷だのと騒ぐけれど」

**しほ-だひ** 鹽鯛・塩鯛【名】鹽をふりかけて干したる黄色の鯛。雲葉「鹽鯛の齋ぐきも寒し魚のたな」

**しほだま** 【名】〔植〕たぶのき(椿)を云ふ。〔上總國の方言〕

**しほ-たまご** 鹽蛋・塩蛋【名】ちゃしんたん(七星蛋)に同じ。

**しほ-だら** 鹽鱈・塩鱈【名】鹽漬にしたる鱈。太鼓「鹽鱈や旅はるばるのよどれ面」

**しほ-たる** 潮垂る・汐垂る【動下二自】Ⅰ潮にみて濡れそぼつ。しほどく。〔古語〕夫木「しほたれば蜑にも袖をかしひ海礁菜つみにと浪をわけつつ」Ⅱ『こぼしほを見よ』涙のために、袖濡れとほる。しほどく。〔古語〕千載「しほたるるいせをのあまやわれならんさらばみるめを刈るよしもがな」Ⅲ悲歎に沈む。しほどく。〔古語〕雲氏「前の世ゆかしうなんと、打ちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」Ⅳ泣く。泣(ナ)く。〔賽宮の忌詞〕

**しほだれ-やま** 鹽垂山・塩垂山【名】〔地〕美作國勝田郡湯郷(ユガウ)村の北にある山。吉野川に臨み、風景頗る佳なり。名所いつとなくしほたれ山のさざれ水暮れゆくまに音添へつなり」

**しほ-ぢ** 潮路・汐路【名】Ⅰ潮のさしひきする路すぢ。千載「霞しく春のしほぢを見わたせば綠をわくる沖つ白波」Ⅱふなぢ。うみぢ。海路。海上。拾玉「夕なぎに都はるかに眺むれば心のはてもなきしほぢかな」

**しほ-ぢ** 【名】〔植〕はりぎり(刺桐)に同じ。

**しほ-ぢち** 新發地【名】『新(シン)發意(ホツイ)の約』新に發心して、佛道に入りたる人。しんぼち。今參道心(ハツシン)。〔古語〕小夫貴集「これなかの朝臣、病にわづらひて、三河のしぼちを呼びに」増鏡「かのしぼちの御迎のやうなる釣舟も」

**しほつ** 鹽津・塩津【名】〔地〕近江國伊香(カゴ)郡の村。琵琶湖に臨み、越前國敦賀に出づる要路たり。

**し-ほつ** 死殁・死沒【名】しぼつ(死亡)に同じ。

**し-ほつ-いぢ** 鹽漬地・塩漬地【名】自筋の入りたる黄色の礫。

**しほ-づけ** 鹽漬・塩漬【名】野菜・肉類などを鹽に漬くること、又その漬けたる物。醃藏。

**しほ-づけ** 鹽附・潮附【名】鹽を踏ましめて、智慧づくること。

**しほつ-しま** 塩津島・志發島【名】〔地〕次條に同じ。

**しほつ-しま** 志發島・志勃島【名】〔地〕根室國花咲郡に屬する島。水晶諸島中の最大なるもの。周回十二里。「し。

**しほつちの-かきな** 鹽土翁【名】次條に同じ。

**しほつちの-かみ** 鹽土神【名】伊弉諾(イザナ)の神の御子。鹽土翁ともいふ。

**しほ-ばし** 鹹ばし【形Ⅰ】しほはゆし(鹹し)に同じ。

**しほ-つめぐさ** 潮塡草【名】〔植〕はまつめぐさ(濱塡草)に同じ。

**しほつ-やま** 鹽津山・塩津山【名】〔地〕近江國鹽津にある山。夫木「風吹けば空にひかたのしほつやま花ぞみちくる神つの白波」

**しほ-づる** 鹽鍋・塩鍋【名】鹽づけにしたる鶴の肉。一代女「しほづるの骨すこし」

**しほ-て** 餞・四方手・四方出・鹽手【名】鞍の前輪(ハウ)と後輪(ハウ)との左右に著けて、鐵(ハガネ)製(ハリ)を止むる鐶。鞍の四方手。かちつけ(勝附)かれづけ(枯附)しばづけ(柴附)さつづけ(取附)むすびめ(結留)もづけ(物附)參照。歌集「鞍(ハウ)が首をしほでの根に結付けて、馬に打乘り、弓杖つき」曾我會稽山「あの馬留めよといふ程に、鹽手を振いつかみ」

**しほ-て-とほし** 餞通【名】鞍の一部。前輪(ハウ)と後輪(ハウ)の左右、兩端に近くして、鞍を通す孔。

**しほ-て-の-まつり** 潮出祭【名】常陸國多賀郡松原町大字安良川(アラカハ)にある八幡神社にて、毎年三月に行ふ祭禮。

**しほ-どき** 潮時・汐時【名】Ⅰ潮水の差引く時。もしほどき。Ⅱしほ。しほあひ。機會。

**しほ-どく** 鹽解く・塩解く【動下二自】しほだる(潮垂る)に同じ。〔古語〕雲葉「夜より、雨こまやかに降出でて、その人々しほどけたらんは、さるものにて」

**しほ-とけ** 潮解・汐解【動】しほどけきさま。〔古語〕千載「さみだれは苫の雫に袖ぬれてあなしほどけの浪のうきねや」

**しほ-とけい** 潮時計・汐時計【名】潮の満干と月の出入との時刻を記したる表。

**しほ-とけし** 鹽解し・塩解し【形一】しほどけてあり。〔古語〕源氏「よる波にたちかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとはん」

**しほ-ところ** 鹽所・塩所【名】鹽を取る所。鹽田。起「地地、シホドコロ」

**しほ-とし** 鹽解し・塩解し【形一】しほどけし。鹽解しに同じ。〔古語〕相模集「早苗ひきもすそよどるといふ田子もわがごと袖はしほどからじな」

**しほ-とび** 鹽飛魚・塩飛魚【名】鹽漬にしたる飛魚(トビウオ)。

**しほ-とん(ほ)** 鹽蜻蛉・塩蜻蛉【名】〔動〕しほからとん(ん)。鹽辛蜻蛉(シホカラトンボ)に同じ。

**しほ-な** 鹽菜・塩菜【名】鹽漬にしたる菜。

**しほなめ-ゆび** 鹽嘗指・塩嘗指【名】ひとさしゆび(人指指)に同じ。

**しほ-なゆ** 潮萎ゆ【動下二自】しほしほと萎(ナ)ゆ。しなぶ。〔古語〕蜻蛉「なりを見れば、いたうしほなえたり」

**しほ-ならぬ-うみ** 潮ならぬ海【句】しほ(潮)の條下を見よ。

**しほ-なる** 潮馴る・汐馴る【名】しほ衣(潮染む)に同じ。〔古語〕後撰「鈴鹿山いせのあまのすてどころもしほなれたりと人や見るらん」

**しほなれ-ごろも** 潮馴衣・汐馴衣【名】潮水に馴れしみたる衣。しほ(ぐ)みたる衣。

**しほなわ** 潮泡・汐泡【名】「潮の泡」の約。〔古語〕歌「谷ぐくのさわたるきはみ・鹽沫(シホアワ)のとどまるかぎり」

**しほ-に** 鹽煮・塩煮【名】食物を煮るに、食鹽のみにて調味すること。

**しほ-に** 鹽荷・塩荷【名】荷造したる鹽。

**しほ-ぬき** 鹽抜・塩抜【名】さるがけ(猿掛)に同じ。

**しほ-の-き** 鹽木・塩木【名】〔植〕ふしのき(鹽廣木)に同じ。

**しほ-の-まつ** 鹽松・塩木【名】香道に用ふる灰の一。土をよく煎りて造るといふ。〔越後國の方言〕

**しほ-のみ**【名】〔地〕紀伊國東牟婁(ムロ)郡串本(クシモト)町の南に突出せる上野(ウノ)半島の西南端。本州の最南端をなす。岬角に燈塞及び無線電信局あり。

**しほ-の-みさき** 潮岬【名】〔地〕紀伊國東牟婁(ムロ)郡串本(クシモト)町の南に突出せる上野(ウノ)半島の西南端。本州の最南端をなす。岬角に燈塞及び無線電信局あり。

**しほ-のめ** 潮の目【名】しほ(潮)の條下を見よ。

**しほ-の-や** 鹽谷・塩谷【名】〔地〕下野國鹽谷(シモツケ)郡氏家(ウジイエ)町より喜連川(キレガワ)町邊に亙る舊稱。同國鹽原・字都宮を立ちて行く道に、鹽屋といふ所あり。

**しほ-の-やきさん** 鹽谷箕山【名】〔人〕儒者。宕陰の弟。名は誠、字は誠之、通稱は修補。晩翠園とも號す。後、幕府の儒官となり、明治二年大學教授に任ぜらる。明治七年歿す。年六十三。

**しほ-の-やじやう** 鹽谷城・塩谷城【名】下野國鹽谷(シモツケ)郡矢板町にありし城。正治・建仁の頃に、宇都宮業綱(ナリツナ)、鹽谷五郎朝業(アサナリ)の始めて築きしものなりといふ。

**しほ-の-やたいうん** 鹽谷宕陰【名】〔人〕儒者。名は世弘、字は毅侯、九里香園とも號す。江戸の人。博覽にして、文章に長ず。濱松侯に仕へ、後に幕府の儒官となる。慶應三年歿す。年五十九。

**しほ-の-やま** 鹽山・塩山【名】〔地〕〔一〕甲斐國東山梨郡七里(ナナサト)村なる鹽山(ヤマ)の舊稱。平地に屹立せる一小丘にして、松樹繁茂す。古は鹽を產せりといひ、今も山下に鹽類泉湧出す。古今「鹽の山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く」〔二〕延喜式に見えたる上野國の牧場。今の北甘樂(カンラク)郡磐戸(イハト)村、西牧(ヒシガイ)村邊なるべしといふ。東の牧・西の牧・南の牧・北の牧等の地名は殘れり。

**しほ-の-り**【名】〔動〕みづすまし(水黽)を云ふ。〔越後國の方言〕

**しほ-ば** 鹽場・塩場【名】〔一〕しほはま(鹽濱)に同じ。〔二〕鹽を產する土地。

**しほ-ばな** 鹽花・塩花【名】不淨又は忌嫌ふべき事ある時、鹽を振掛ること。

**じほ-はふ** 字母法【名】音字の、音素によりて、發音の通りに表はさるるもの。

**しほ-はま** 鹽濱・塩濱【名】海水を幾回も注ぎて、日光に乾し、濃き鹽分を瓏留せしむる設備ある海濱の沙地。しほだ。しほば。はま。鹽田(ヒヤウ)。

**しほはま-うんじやう** 鹽濱運上・塩濱運上【名】江戸時代に、鹽濱に課したる運上。

**しほはま-ねんぐ** 鹽濱年貢・塩濱年貢【名】前條に同じ。

**しほ-はゆし** 鹽ゆし【形一】しほからし(鹽辛い)に同じ。

**しほばら** 鹽原・塩原【名】〔地〕下野國鹽谷(シモツケ)郡にある町。箒川の水源をなせる溪谷にして、溫泉湧出す。地塊圓逕なるを以て、浴客絶えず、また秋季紅葉の美に富む。鹽原の大綱(ヒロ)、福渡戸(フクワタド)鹽釜・鹽湯・畑下戸(ハタケノヘ)門前(モンゼン)・古町(フルマチ)の七箇所の溫泉。福渡戸・門前・古町の三所、中にも最も繁昌す。この外、領巻(ヘマキ)新湯(ヘマキ)・古湯・本(ヒノモト)にも湧出す。

**しほ-ひ** 潮干・汐干【名】〔一〕潮の引去ること。しほがれ。蜻蛉「あらつの海しほひしほみち時はあれどいづれの時かわが戀ひざらむ」〔二〕しほひがり(潮干狩)の略。

**潮干の道**【句】潮退きたる跡の通行し得るところ。蜻蛉「明石湯潮干の道を明日よりはしたる石死(シビ)の海の彼岸を山に聲、潮の聲までは過ぎたれども、山には達せざる意にていふなるべし」さとりの世界。涅槃(ネハン)「古語」蜻蛉「生きしに死にの二つの海をいとひみてしほひのやまを忍びつるかも」

**潮干の寛**【句】潮の引きたるあとの靜けさ。蜻蛉「あせか湯しほひのゆたに思へらばうけらが花の色にいでめやも」

**しほ-ひ-がた** 潮干潟・汐干潟【名】潮の引去りて、干潟となりたる處。新千載「沖つな



み吹上の濱の汐干潟まさご亂れて歎ふるらし」

**しほ-ひ-がり** 潮干狩・汐干狩【名】潮干の時、干潟(ヒガタ)をあさりて、貝などを取ること。殊に陰曆三月三日の大潮を往とす。しほひ。

(しほひがり)

**しほ-ひき** 鹽引・塩引【名】〔一〕生魚を鹽漬にすること、又その魚。主として、鮭・鱒にいふ。〔二〕次條の略。

**しほひき-ざけ** 鹽引鮭・塩引鮭【名】鹽漬にしたる鮭。しほびき。

**しほひ-ぶね** 潮干船・汐干舟【名】潮干狩をするために漕出したる船。俗曲「汐干がり」「あれ潮がひる潮干舟、彌生のくせの曇りがち」

**しほ-ひる-たま** 鹽乾珠・潮涸瓊【名】神代の神寶の一。潮を引かする効ありきといふ珠。しほひるに。干珠(ヒルタマ)。「潮滿瓊(ミチタマ)」に對して〔古語〕記「悉ひ請(ウ)けば、鹽乾珠を出していかして」

**しほ-ひる-に** 鹽乾瓊・潮涸瓊【名】前條に同じ。〔古語〕

**しほ-ふ** 四法【名】〔佛〕〔一〕じ(四倭)に同じ。〔二〕三寶の一なる法寶を四稱に分ちて、證果の次第を示したるもの。即ち法(佛教の法)・理(佛の教法中に說き現す道理)・行(前項の道理に隨つて修行する戒・定・慧)・果(修業の結果なる證悟)の四法。〔三〕「眞宗の四法」を見よ。〔四〕「法華の四法」を見よ。

**しほ-ふ** 嗣法【名】〔佛〕弟子の、師僧の法を嗣ぐこと。**じんぼふ**(傳法)參照。「禪家の語」

**じほふ** 實法【名】〔實法(ジホフ)の音便〕じつぼふ(實法)〔二〕に同じ。〔古語〕







は、じほふにはあらぬものぞ。すべて、妻を思ひはねか」

**しほ-ふき** 潮吹・汐吹【名】〔一〕りんせい(輪精)に同じ。〔二〕〔動〕じほふきがひ(潮吹貝)の略。〔三〕里神樂の馬鹿踊などに用ふる、片眼小さく、口の尖り出でし、男性の醜き假面(ペン)。しほふきめん。屠龍工鹽業、今、童の弄に、口の尖りたる面は、鎌倉鶴ヶ岡の拜殿に、海よりあがりたるとて、しほ吹と名づけたる面あり。これを學びたるものと思はる。

**しほふき-いは** 潮吹岩・鹽吹岩【名】伊豆國田方(タガ)郡伊東の海岸にある岩。滿潮の時は波勢激して、數丈の潮烟を噴出す。

**しほふきがひ** 潮吹貝・鹽吹貝【名】〔動〕海螺(ニシ)類に屬する貝。大いさ一寸に滿たず。形はまくり貝に似て、殼の外面には輪層浮出し、內面は紫色を帶ぶ。淺海泥砂中に棲む。しほふき。

**しほふきめん** 潮吹面・鹽吹面【名】じほふき(潮吹)〔三〕に同じ。

**しほふく** 潮吹・鹽吹【名】〔動〕じほふき(潮吹)〔二〕に同じ。

**しほ-ぶた** 鹽豚・塩豚【名】鹽漬にせる豚の肉。

**しほ-ぶね** 潮船・汐舟【名】潮路を滑きわたる船。〔古語〕萬葉「しほ船のこそ自浪にはしくもおふせたまほか思はしへなくに」

**しほ-ふね** 鹽船・塩舟【名】鹽荷を積む船。

**しほ-ふねきね** 潮船宜禰【名】海上を船にて往來する神人。〔古語〕山家「波につきて磯岡方(ヲカタ)神はしほふねきね待つにやあるらん」

**しほ-ふね-づくり** 鹽船制・塩舟制【名】荷に並ぶ物なるより、**なら**ぶ(並ぶ)にかけていふ。萬葉「をぐさをとをぐさすけをとしほぶねのならべて見ればをぐさ勝ちめり」

**しほ-ふま** 鹽踏・潮踏【名】子女を他人の家の寄託して、世間を見しむること。〔關西の語〕

**しほ-ふり** 鹽鰤・塩鰤【名】鹽漬にしたる鰤。對島の產、有名なり。また鰤の肉を四片に切り、その一片に、食鹽と麩とをまぜて撒布し、紙を覆ひ、甕にて包み、細繩を捲きたるを經といふ。

**しほ-ふろ** 鹽風呂・塩風呂【名】潮水を沸して浴する湯。しほゆ。

**しほ-ほ**【動】しほしほの略。〔古語〕萬葉「葦垣のくまどに立ちてわぎもこが袖もしほほに泣きしぞもはゆ」

**しほ-ぼし** 鹽乾・塩乾【名】魚類を鹽漬にして乾したるもの。ひもの。

**しほ-ほる**【動四自】しほほにぬる。そぼつ。しぼぬる。しとどにぬる。〔古語〕記「衣被(ヒレ)萬(ヨロヅ)の何語(カタラ)ふ富乎」

**しほ-ま** 潮間・鹽間【名】潮水の引きてある間。しほあひ。〔古語〕金槐集「和歌の浦のしほまにあそぶ濱千鳥蹈みさぶらんあとな惜しみそ」

**しほ-まぐろ** 鹽鰹・塩鰹【名】鹽漬にせし鰹。千鳥の產、有名なり。

**しほ-まち** 潮待・鹽待【名】潮のさしくるを待つこと。天神記「今宵船出と夕波に、潮待してぞ居たりける」

**しほ-まつば** 潮松葉【名】〔植〕櫻草(ハナカラ)科に屬する多年生の草。我が國北部の海濱に自生す。莖の高さ數寸、葉は卵形、夏季、紅色また白色の花開く。

**しほ-まねき** 望潮【名】〔動〕〔一〕干潮の際、大なる鋏を動かすさま、潮を招くに似たるより名を得たりといふ。〔二〕十脚類に屬する節足動物。大いさ六七分。頭胸部扁平にして、前邊に廣く、殆ど後邊に二倍す。腹部・雄は狹くして、七環節あり。雌は廣し。雄の鋏は、左右何れか大なり。海濱の砂地に棲む。しようもんがに。「革」に同じ。

**しほ-みがは** 蓑革【名】ひきはだがは(蓑肌)に同じ。

**しほ-みぐさ** 鹽見草・塩見草【名】〔植〕うのはな(卯花)〔二〕の異稱。〔古語〕

**しほみ-さか** 鹽見坂・塩見坂【名】〔地〕遠江國濱名郡白須賀(シラスカ)町の東南にある坂路。長さ約六町、南に大洋を望み、東北に富士山を眺め、古來佳景を以て知らる。富士紀行「立返りいく年なみか忍ばまし潮見坂にて富士を見し世を」

**しほ-みち** 潮道・汐道【名】潮の差引によりて烈しく流るる水脈。

**しほ-みづ** 潮水・鹽水【名】しほはゆき水。うしほみづ。海水。鹹水。

**しほ-みづ** 鹽水・塩水【名】鹽氣を含める水。鹽を交へたる水。

**しほ-みつ-たま** 鹽盈珠・潮盈珠【名】神代の神寶の一。潮を滿たしむるに効ありといふ珠。しほみつに。滿珠(ミチタマ)。〔潮涸瓊(シホヒルタマ)に對して〕〔古語〕記「攻めなば、鹽盈珠(ヘタマ)をいだして溺らし」

**しほ-みつ-に** 潮滿瓊【名】前條に同じ。〔古語〕

**しほみ-ばし** 汐見橋【名】造庭法にて、汐船の底板一枚を利用して造れる橋。池尻の狹き處に架するを普通とす。

**しほむ** 染む・潮む【名】しなぶ。しをる。衰ふ。枕「御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりてしぼみ」

**しほ-むき** 鹽剝・塩剝【名】淺鍋(ハガ)などを、生きたるまま身剝(ミハ)にすること、又その物。

**しほ-むし** 鹽蒸・塩蒸【名】鹽氣を加へて、蒸籠(セイロ)などにて蒸したる食品。「鮭。

**しほ-むつ** 鹽鯥・塩鯥【名】鹽漬にしたる紙魚(シミ)。〔古語〕萬葉「しほ船のこそ自浪にはしくもおふせたまほか思はしへなくに」

**しほ-ん** 資本【名】〔一〕親王の位階の一。ほん(品)參照。〔二〕じん(四位)の俗稱。源氏「殿の家司(ケイシ)季綱四品ゆるさせたまふ」

**しほん** 四品【名】〔一〕もとで。もときん。もと。〔二〕〔經〕『英(Capital又Stock)』特定の用途に充てらるる財貨。商法上の狹義には、醵出したる基金。この意味には、株式會社と株式合資會社とに限り、且もと醵出の金なるが故に、これを株式に分つを要す。〔三〕前項の資本の數額。「子。

**しほん-か** 子本・資本家【名】利子と本金と。元利。母本金を出す人。資本主。

**しほん-かがり** 四本掛【名】獸鞦の懸(ヘガ)の立木の四本なるもの。かがり(懸)〔二〕參照。

**しほん-かぶ** 資本株【名】〔商〕株式會社又は株式合資會社が出資人に付與する株式又は株券。

**しほん-かんぢやう** 資本勘定【名】〔商〕かぶけんかんぢやう(株券勘定)に同じ。

**しほん-きん** 資本金【名】資本の金。資金。

**しほん-きん-かんぢやう** 資本金勘定【名】〔商〕『英Capital account』資本の投入及びその增減を計算・整理する勘定科目。投入の資本額を貸方に、資本の減出額を借方に記入す。普通の商店にては、資本主勘定ともいふ。

**しほん-し** 資本主【名】〔一〕〔商〕しほんぬし(資本主)に同じ。〔二〕資本主【名】〔一〕しほんぬし(資本主)に同じ。〔二〕次條の略。

**しほん-かんぢやう** 資本主勘定【名】〔商〕しほんぬしかんぢやう(資本主勘定)に同じ。

**しほん-しゅつし** 資本出資【名】〔經〕金錢又は有價物の出資を目的とすること。(勞働出資・信用出資に對して)。

**しほん-ぜい** 資本稅【名】〔法〕『英Capital tax』各個人所有の資本價格を標準として賦課する租稅。

**しほん-ぬし** 資本主【名】しほんか(資本家)。

**しほん-ぬし-かんぢやう** 資本主勘定【名】〔商〕しほんきんかんぢやう(資本金勘定)を見よ。

**しほん-ばしら** 四本柱【名】〔一〕相撲(スマ)の土俵の四方に立つる柱。〔二〕げんやく(檢査役)〔三〕に同じ。

**しほん-ばり** 四本張【名】あんさん(行燈)〔二〕を云ふ。『加賀國の方言』

**しほんばり-あみ** 四本針編【名】四本の編棒を用ひて、編物をなすこと。手袋・靴下など、皆この編方に依る。

**しほん-ぼね** 四本骨【名】紋所の一。四本の骨の扇に、八の字を附したるもの。

**し-ほんわう** 四阿王【名】淨飯(ジヤウ)王・白飯(ビヤウ)王・斛飯(ボン)王・甘露飯王の併稱。「釋氏の諸王」參照。

**しほ-め** 鹽目・塩目【名】〔一〕鹽の分量。しほ

あんばい(鹽梅)に同じ。Ⅲ次條に同じ。
薩摩藩に下袴に鍵人が、裕羽織も塩目よき、大蛸昆布・柳樽」

**しほめ** 潮目【名】しほのめをなすこと。愛嬌を含む様子。

**しほめぐろ** 鹽目黒・塩目黒【名】鹽漬にしたる目黒。五人女「母は盃の用意とて、鹽目黒に、口の缺けたる酒徳利を取りまはし」

**しほもち** 鹽餅・塩餅【名】食鹽を加へて味を附けたる餅。

**しほもの** 鹽物・塩物【名】魚類を鹽漬にし、又は海魚を日に乾したるもの。えんざよ。

**しほもみ** 鹽揉【名】生の野菜に、鹽を振掛けて、鹽にて揉み和げたるもの。

**しほや** 鹽屋・塩屋【名】Ⅰ鹽釜にて、鹽を煮る家。〔古語〕源氏「さるしほやのかたらに」Ⅱ鹽を賣る家、又その人。Ⅲ『安政の頃、江戸深川に狂氣の鹽賣あり、大石瓦雄は我が子なり、何の守は我が伯父など大言するを常とせしより起るとも、京都に、だてなる鹽賣あり、劇場の衣裳を貰ひ、これを著て賣るあき、或高貴の姫君をそそのかして、自殺するに至りしより起るともいふ。〔うぬぼれ。自慢。〔文化・文政頃の隠語〕夫婦以来馬芝居にて、見物が狂言をし、役者かへつて見物をする。…鬼角己は己が蟲眞だなど、口口に鹽屋をいふ」

**しほや** 鹽谷・塩谷【名】〔地〕下野國八郡の一。郡役所を矢板町に置く。

**しほや-あぶ** 鹽屋虻・塩屋虻【名】〔動〕雙翅(ハエ)類に屬する昆蟲。白毛密生し、本邦産の虻の中にて最大なるもの。益蟲の一。むしひきあぶ。

**しほ-やいと** 鹽灸・塩灸【名】少許の鹽を盛りたる上に、灸を點して、患部を温むること。

**しほ-やき** 鹽燒・塩燒【名】Ⅰ海水を煮て鹽を製すること、又その業に從ふ者。Ⅱ魚肉に鹽を振りかけて、燒くこと、又その燒きたる魚肉。

**しほやき-ぎぬ** 鹽燒衣・塩燒衣【名】次條に同じ。〔古語〕源氏「須磨のあまのしほやきぎぬのふぢごろもまどほにしあればいまだ著馴れず」

**しほやき-ごろも** 鹽燒衣・塩燒衣【名】鹽を燒く人の著る粗末なる衣。しほやきぎぬ。〔古語〕源氏「須磨の海人のしほやきごろもなれぬれど無るといふものは忘れかねつつも」

**しほやき-ば** 鹽燒場・塩燒場【名】鹽燒(Ⅱ)を行ふ處。しほば。

**しほやけ** 潮燒・汐燒【名】日光のために、海水の炎蒸して生ずる、赤味を帶びたる水蒸氣。

**しほやけぶり** 鹽屋煙・塩屋烟【名】鹽屋にて鹽を燒くけぶり。門出八島「夜は燃え晝は消えつつ薄烟、鹽屋烟と立ちつづき」

**しほゆ** 鹽湯・塩湯【名】Ⅰしほぶろ。鹽風呂)に同じ。金葉「しほゆあみに、西の海の方へまかりたりけるに」Ⅱ自湯に食鹽を溶かしたる飲料。Ⅲ鹽分を含める温泉。夫木「わたつ海ははるけきものをいかにして有馬の山はしほゆ出づらん」

**しほ-ゆあみ** 潮浴・汐浴【名】海水温浴または海水浴。

**しほ-らし**〔形二〕しおらしを見よ。

**しほり** 絞・搾【名】Ⅰしぼること。Ⅱしぼりぞめ(絞染)の略。Ⅲ花瓣の紅白などの斑あるもの。

**しほり-あぐ** 絞上ぐ・搾上ぐ〔動下二他〕Ⅰ雑巾などを、紐にて括りて、高く上ぐ。Ⅱ苦しき聲を上ぐ。Ⅲ極度にしぼる。

**しほり-えぞぎく** 絞眼夷菊【名】〔植〕さつまぎく(薩摩菊)に同じ。

**しほり-かす** 搾滓【名】汁を搾り取りたる殘の滓。しめかす。

**しほり-がみ** 絞紙【名】しぼりて、皺を寄せ、眼に吹くもの。

**しほり-ざき** 絞眸【名】しぼり(絞)Ⅲの花瓣に咲くもの。

**しほり-しる** 搾汁【名】物をつぶしなどして搾り取りたる汁。「同じ。

**しほり-ぞめ** 絞染【名】くくりぞめ(括染)に

**しほり-だし** 搾出【名】細き錫管中に蔵めたる繪具を、管の一端を壓搾して、他端より捻出せしむるもの。

**しぼり-どう** 絞銅【名】製銅法の一。金・銀・銅・鉛の合金を、南蛮絞法によりて熔解分解せしめて、幾個せる銅。

**しぼり-なき** 絞泣【名】聲を立てず、袖を絞るが如くに泣くこと。「萩。

**しぼり-はぎ** 絞萩【名】Ⅰ絞りたるままにしておくこと。Ⅱ絞染の括りたる絲を解き、縮みたるままにして、壁(ハ)さぬもの。

**しぼり-もん** 絞紋【名】絞染の法によりて染出したる紋所。天明の頃流行したり。

**しぼる** 絞る・搾る【動四他】Ⅰ強く壓して水分を出だす。古今「いつはりの涙りせば唐衣しのびに袖はしぼらざらまし」Ⅱ涙に寨がる眼を強ひて見開く。〔古語〕源氏「大將の君も涙にくれて、目も見えたまはぬを、强ひてしぼりあけて見たてまつるに」Ⅲ無理に出ださしむ。「稅をしぼる」「聲をしぼり出だす」Ⅳ強く締括る。絞染をなす。Ⅴ脂(アブ)を絞る」の略。Ⅵ布帛を疊み上げて、紐にて絞る。

**しぼる** 痲る【動四自】小便快く通ぜずして、滴り出づ。

**しほ-わけ** 鹽分・塩分【名】俎(ハセ)の上にて、庖丁を以て、鳥を捲づること。

**しほ-わた** 潮曲・汐曲【名】潮の陸地に滯入したる處。〔古語〕山家「淡路島せとのなごろは高くともこの汐曲におし渡らばや」

**しほ-わり**〔名〕〔動〕みづまし(水鳳)を云ふ。〔東國の方言〕

**しほ-をけ** 鹽桶・鹽桶【名】鹽を入るる桶。

**しほ-をんじやく** 鹽温石・塩温石【名】鹽を煎り、布に包みて、温石に代用するもの。

**しま** 島・嶋【名】Ⅰ四面水に圍まれたる陸地。Ⅱ池などの中に設けたる築山。伊勢「しま好みたまふ君なり。この石を奈らん」Ⅲしまのおほかみ(島大臣)を見よ。Ⅳ天飯の米穀取引所の在る處、堂島(ハ)の地名を略していふ。『めし』飯を云ふ。〔關西の語〕Ⅴ島に祀れる神。Ⅵ琉球を征服せしに基くか。『諸島にて、鎮西八郎爲朝を祀りて呼ぶもの。

**しま** 縞・島・嶋【名】〔鳥物の略にて、中古南蠻諸島より、始めて渡りしが故にいふ。〕種種の色絲を、横縞に織りなして、布帛の模様に、種種の筋を現はしたるもの。

**しま**【名】〔じまと無言〕に同じ。花鳥餘情「童の誘に、無言を行ぜんと約束して、無言無言とうしまにかねつくといひて、何にても打鳴らしての後、ものいはぬことをするなり。しまといふはしじまなり」

**しま** 樣【名】さま(樣)に同じ。〔熟語にいふ〕「よこしま」「さかしま」

**しま** 四魔【名】〔佛〕四種の魔、即ち煩惱(ナウ)魔・五陰(ハウ)魔・天子魔・死魔の併稱。各その條を見よ。舊雜譬喻下卷「方便の矢をつまつて、四魔の軍を破りたまふ」

**しま** 死魔【名】〔佛〕『死滅は善人の佛道修行を障害するによりて、魔の一とす』四魔の一。死ぬること。舊雜(第六天)「煩惱(ナウ)の惡魔・陰魔(ナウ)・死魔・天子・業(ハウ)魔、その外、從類、悟の道を障碍(ハウ)の群鬼」

**しま** 揣摩【名】情を揣(ハ)り、意を摩する義』おしあて。おしはかり。推測。

**しま** 詩魔【名】詩を好む病。

**しま** 綴麻【名】支那の五服の一。三從伯叔父・母・舅姑兄弟の喪に著用せしもの。

**しま** 紫磨【名】しまのうごん(紫磨黃金)を見よ。

紫磨・忍辱(ニウ)【句】紫磨金色(ハウ)の肌と慈悲柔軟の相と。共に佛の身に具はるもの。舊雜譬喻下卷「秋の風消えずして、

**しま** 四萬【名】〔地〕上野國吾妻郡にある溫泉場。澤田村に屬し、中之條(ナウ)町の北方四里餘の山間なる、吾妻川の支流四萬川の溪流に浩ふ。泉質は鹽類泉に屬す。

**しま** 志摩【名】〔地〕Ⅰ東海道の一國。伊勢國の東南に斗出せる半島。古、伊勢島と稱す。文武天皇の時、一たび伊勢國に合し、養老三年再び分立す。もとは答志(ハウ)・佐藤





(ハウ)の二郡に分れ、のち佐藤は英虞(ハウ)と改稱せられ、明治二十九年更に合して、志摩郡を立て、三重縣の所管に入れり。志州。Ⅱ前項の志摩國全部を占むる郡。郡役所を鳥羽町に置く。Ⅲ筑前國の舊郡の一。舊怡土(ハ)郡の北に斗出せる半島の地。古は怡土郡との間に海水通じ、島をなせりといふ。明治二十九年廢して、怡土郡と合し、糸島(ハウ)郡を立つ。

**しま** 接尾】他の語に附して、はじめの意をあらはす語。〔江戸時代の俗語〕浮世風呂「元日しまから這入るところもあるめえ」

**しま-あそび** 島遊・嶋遊【名】しまより(島寄)に同じ。

**しま-あぢ**【名】〔動〕游禽(ハウ)類に屬する鳥。大いさ小鴨に似たり。春は暗色、腹部は灰白を呈す。喉に黑し。冬期我が國に渡來す。

**しま-あぢ** 縞鯵【名】〔動〕硬骨(コツ)類に屬する魚。鯵類の中にて、體高く狹く、背に黃に鼠色を帶び、腹部に至るに從つて、その色薄し。背側には銳き稜形の鱗あり。美味なり。こせ。じんがめあぢ。

**しま-あび** 縞合【名】縞の色合。

**しま-あは** 縞粟【名】あほあは(大粟)に同じ。

**しま-あをじ** 縞青鵐【名】〔動〕こうせんあをじ(朝鮮青鵐)に同じ。

**し-まい** 姉妹【名】Ⅰあねと、いもとと。Ⅱ同じ系統に屬し、多くの類似點を有する二つのもの。「姉妹篇」「姉妹艦」

**じ-まい**【名】じまく(自前)に同じ。

**し-まい-がた** 四枚肩【名】駕籠を、四人にて舁ぐこと。

**し-まい-かなごう** 四枚金鋼【名】鎧の胴の鐵の四枚胴なるもの。

**しまい-かん** 姉妹艦【名】『英sister-ship』原語は、普通の船舶にも用ふ』構造大いさ・噸數などの稍相同じき二隻の軍艦。

**しまい-かんばん** 四枚看板【名】こなだいし(小名題)に同じ。

**しまい-いかる** 縞斑鳩【名】〔動〕燕雀(ハウ)類に屬する鳥。普通の斑鳩よりはやや小さく、嘴は黃色にして、末端暗綠色を呈し、背部は灰褐色にして、雄は風切(ハウ)の末端白し。我が國にては稀なれども、支那には少なからず。小斑鳩。

**しまい-げいじゆつ** 姉妹藝術【名】各種の藝術は、その表現の方法こそ異なれ、その目的が美の表示にある點に至りては共通なるより、その各種間の關係の稱。例へば、彫刻と建築と繪畫との類。

**しまい-ご** 姉妹語【名】〔語〕『獨Tochtersprache』同一の古代語より支れ出でたる二つ以上の國語。例へば佛蘭西語・伊太利語・西班牙語・葡萄牙語等の、何れも、ラテン語より出でし類。

**しまい-さき** 縞鰹【名】〔動〕硬骨(コツ)類に屬する魚。近海に產す。體形鯛魚に酷似し、黃綠灰色を呈し、側面に褐色の四條の縱線あり。

**しまい-せん** 姉妹船【名】しまいかん(姉妹艦)を見よ。

**しまいた** 四間板【名】和船の大立(ハウ)中立鎧立小位の總稱。たつき立木)參照。

**しまい-だて** 四枚楯【名】楯の一種。

**しまい-ごう** 四枚胴【名】Ⅰぐつ(胴纖)に同じ。Ⅱ鎧の胴の、四枚の革又は鐵板を重ねて作りたるもの。

**しまう** 縞鶺【名】〔動〕鶺の一種。羽に斑のあるもの。

**しまう** 四孟【名】孟春(初春)・孟夏(初夏)・孟秋(初秋)・孟冬(初冬)の併稱。四季の孟月。

**じ-まう** 二毛【名】にまう(二毛)を見よ。

**じ-まうく** 爲設く【動下二自】まうけなす。準備す。〔古語〕宇治「くだものくひもの、しまうけて」

**しま-うしのした** 縞牛舌【名】〔動〕しまがれ(縞鰈)に同じ。

**しまうた-や** 仕舞屋【名】『仕舞ひたる屋の義。しまふ(仕舞ふ)四を見よ』しもたや(仕舞屋)に同じ。一代男「浮世の事は仕舞うたる家の金左衛門を誘ひて」

**しまうま** 縞馬【名】〔動〕奇蹄(ハウ)類に屬する哺乳動物。體形、耳蹄尾等は馬に酷似す。南亞非利加の平原に產し、體長六尺五六寸、牡は淡黃色、牝は白色にて、牝牡共に環狀に走る黑色又は赤褐色の縞ありて、虎の斑に類す。性質慓悍にして、飼養しがたけれども、驢馬に配して、雜種を生ぜしむることを得。まだうま。ぜぶら。

**しま-うり** 縞瓜【名】〔植〕まくはうり(眞桑瓜)を云ふ。〔陸奥國の方言〕

**しま-えび** 縞海老【名】〔動〕いせえび(伊勢蝦)に同じ。

**しま-えびず** 島夷・嶋夷【名】島に棲むえびす。

**しま-おり** 縞織【名】夫條に同じ。

**しま-おりもの** 縞織物【名】縞のある織物。しまもの。

**しま-おろし** 島颪・嶋颪【名】島より吹く荒き風。

**しま-か** 縞蚊【名】〔動〕やぶか(藪蚊)に同じ。

**しま-かぎ** 島陰・嶋陰【名】しまかげ(島陰)に同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「喚のかはたれどきにしまかぎを漕ぎにし船のたづき知らずも」

**しま-がき** 柴垣【名】しばがき(柴垣)Ⅱに同じ。和泉「おみの子の八重のしまがき下どよみなるがよりこば破れむしまがき」

**しま-がくる** 島隱る・嶋隱る【動四自】夫條に同じ。〔古語〕萬葉「島がくりわがこぎくればともしかもやまとへのぼる眞熊野の舟」

**しま-がくる** 島隱る・嶋隱る【動下二自】島の陰になる。島の彼方に見えずなる。萬葉「はしけやし妻も子どももたかたかに待つらむ君や島がくれぬる」

**しま-がくれ** 島隱・嶋隱【名】しまがくるること。島かげ。宇治「今宵はなほ御舟に具してあらんとて、島がくれなる處に具して泊りぬ」

**しま-かげ** 島陰・嶋蔭【名】島に掩はれて視えぬ處。島のかげ。萬葉「照る月を雲なかくしそ島陰にわが舟はてむとまりしらずも」

**しま-かぜ** 島風・嶋風【名】島に吹く風。島より吹來る風。金葉「島風にしばたつ浪の立ちかへりうらみてもたほれまるるかた」

**しま-がた** 島形・嶋形【名】山水の景を摸して作れる盆物。盆景。太平記「御前に、風流の島形を被居(ハウ)たり」「金申」

**しま-かなきん** 縞金巾【名】縞を織きたる

**しま-がに** 島蟹・嶋蟹【名】〔動〕たかあしがに(高足蟹)に同じ。

**しまがへ** 島替・嶋替【名】江戸時代の刑罰の一。配流せられたる島にて、更に罪を犯したる者に對して、その配流の地を他の遠き島に替へしもの。

**しま-がへる** 縞蛙【名】〔動〕さのるまがへる(殿樣蛙)に同じ。

**しま-かみ** 島上・嶋上【名】〔地〕摂津國の舊郡の一。明治二十九年島下(ハウ)郡と合して、三島郡となる。

**しま-がや** 縞茅【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。草茎(ハウ)の礎種。葉の高さ三四尺。葉は細長く、白き斑ありて、其ど雅致を呈するにより、觀賞用に供せらる。初夏、帶白褐色の穗を生ず。しますすき。しもくさ。しまよし。

**しま-がら** 縞柄【名】織物の縞の模樣。

**しま-がれひ** 縞鰈【名】〔動〕鰈の一種。形したびらめに類し、右側面には、十二條の黑線ありて、背より腹部に至る。しまうしのした。しました。つるした。

**しまき** 風卷【名】しまくこと。又その風。〔古語〕山家「淑戸わたるたなな し小舟心せよ蔵みだるるしまきよこぎる」

**しま-き** 石南草【名】〔植〕Ⅰしやくなげ(石南)に同じ。字治「石南草・志摩木」Ⅱさざ(海桐)に同じ。

**しまき** 島木・嶋木【名】島居の笠木に添ひて、その下にある横木。「に同じ。

**しまざき** 縞黃鯖魚【名】〔動〕ぎす(黃鯖魚)

**しまぎり** 縞桐【名】桐の材の、絲柾(ハウ)なるもの。最も貴重せらる。一代女「しま桐(ハウ)の掛物等より女綿を取出し」

**しまく**【動四自】烈しく吹きまく。夫木「くれ船と朝妻わたりけさなせそ伊吹の嶽に雪しまくなり」

**しま-くに** 島國・嶋國【名】四面海に圍まれたる國土。海國。島國(ハウ)。

**しま-くばう** 島公方・嶋公方【名】〔人〕晩

年、阿波國に走り、捷美(ヒ)にて蒙ぜしより いふ。**あしかがよしたね**(足利義植)に同じ。

**しまくらひな** 縞秧鶏【名】〔動〕涉禽(ショウキン)類に屬する鳥。秧鷄の類中最も少さく、わづかに雀ほどの大いさにて、背部は茶褐色にして、白點あり、腹部には、白と黑との横條多し。我が國には稀なり。

**しまくまやま** 島熊山・嶋熊山【名】〔地〕攝津國豐能(ハ)郡にある山。熊野田(ハ)村の北方に聳え、山中奇岩・怪石多くして、佳景なり。一名、鬼嶽。高麗「玉藻問しまくま山の夕暮にひとりか君が山路こゆらむ」

**しまげら** 縞啄木鳥【名】〔動〕きつつきの一種。羽に縞の模樣あるもの。

**しまこじま** 島駒・嶋駒【名】〔動〕燕雀(スズメ)類に屬する鳥。駒鳥に近けれど、色は全く異なり、背部は茶褐色、下部は灰白色なれど、胸部と喉部との各羽は、暗色にて縁取られ、ために鱗のごとくに見ゆ。支那に產し、我が國には稀に見ることあり。

**しまこん** 紫摩金【名】**しまのうこん**・紫摩寅金に同じ。

**しまこん-じき** 紫摩金色【名】紫摩金の色。著聞「その膚をねぶりたまふに、舌のあと摩紫金色となりぬ」

**しまさき** 島先・嶋先【名】嶋の斗出したる端。新六「風吹けば波の來寄する島さきのいはぬ思ひぐさだけわびぬる」狂言「鎖帷子」「あの島さきぞ、御手は掛くれ。渡らぬさきに、御手を掛くるでもなし」

**しまさざら** 縞笹【名】〔植〕**ちごさざ**(兒笹)に同じ。

**しまさらし** 縞布・島晒・嶋晒【名】縞ある晒布(ヌノ)。一代女「かりそめを二夜の女は、それほどに、島曝のかたびら、薄玉子の帶やはらかに結び」

**しまし** 暫【副】**しばし**(暫)に同じ。〔古語〕蜻蛉「などの海に舟しし貸せ沖に出でて波立ちくやと見て歸りこむ」

**しましく** 暫しく【副】前條に同じ。〔古語〕高麗「筑紫ぢのかたの大鳥しましくも見ねばこひしき妹をおきてきぬ」

**しまし-じま** 島島・嶋嶋【名】多くの島。



**しましも** 島下・嶋下【名】〔地〕攝津國の舊郡の一。**しまかみ**(島上)參照。

**しまし-じゆ** 縞繻・島繻【名】衣條の略。女發達地獄「結びかけ、島繻子・島繻子・嶋繻子【名】縞模樣のある繻子。一代男「色つくりたる女、肌には紅うこんの紬物、上にかちん染の布子・島繻子の二つわり、左の方に結び」

**しまじゆ** 島尻・嶋尻【名】〔地〕琉球國五郡の一。沖繩本島の南端。郡役所を那覇區に置く。

**しまし-す** 島巢・嶋巢【名】〔動〕**す**(鵲)に同じ。

**しまし-ぬ** 澄す【動四他】**すま す**(澄す)に同じ。〔古語〕撰集抄「尼、こころをしまして、念珠をすりはべり」

**しまし-すき** 縞芒【名】〔植〕**しまがや**(縞茅)に同じ。

**しまし-ずり** 島摺・嶋摺【名】島洲崎などの形を摺出だしたる摺衣(ヌノ)。〔古語〕盛衰記「島摺の直垂著て」

**しまし-そだち** 島育・嶋育【名】島にて生長したること、又その人。

**しまし-そめ** 縞染・島染・嶋染【名】織りて後に、筋を染出したるもの。

**しまし-ぞろへ** 縞揃・島揃・嶋揃【名】縞模樣の著物を揃ふること。若風俗「青茶・褐茶の島ぞろへ」

**しまだ** 島田・嶋田【名】**一**(地)駿河國志太(シダ)郡にある町。大井川を隔てて、遠江國金谷(カナ)町に對す。舊東海道五十三驛の一驛。名所方角抄「かなやと いふ宿あり、川の間一里あり。川の西は遠江なり。東に島田といふ宿あり」川の西は遠だまげ(島田髷)の略。醒六井桂馬「かかる苦患にわうもう日、島田亂れてはらはら」

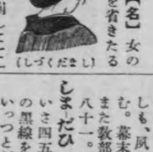
(いだまし)

**二**(島)豪・嶋田【名】洲濱(スハマ)の豪(ゴウ)。竹・梅及び厨(ヒ)子・鶴・龜の形などを飾りたるもの。賓客饗應又は婚禮などの時に用ふる裝飾の具。もと食物を盛りたるものにて、蓬萊山に擬したるものなりといふ。**すはま**(洲濱)**三**參照。根城反魂香「中に立つたるこの松は、島麥持つての取結び」

**しまだいじん** 島大臣・嶋大臣【名】〔人〕**しまのおほおみ**(島大臣)を見よ。

**しまだうしや** 島道者・嶋道者【名】相模國鎌倉郡江ノ島の辯才天に參詣する信者。巳(ヘ)の日の道者。

**しまだ-くづし** 島田崩・嶋田崩【名】女髮の結ひ方の一。島田髷の手を省きたるもの。絲者好みてこれを結び、また國禮の時などにも結ぶ。ひをくさたばね。浮世風呂「高慢なるかみ梳、はやりの島田崩しにて」


(しづくだまし)

**しまだ-くわうそん** 島田篁村【名】〔人〕**しまだちくわい**(島田重禮)に同じ。

**しまだ-だけ** 縞竹【名】〔植〕**きんめいちく**(金明竹)に同じ。

**しまだ-さこん** 島田左近【名】〔人〕志士。名は龍章。美濃國の人。島丸家及び九條家に仕ふ。和(ヤワ)宮降嫁の事を斡旋し、また文久二年浪士に暗殺せられて、四條河原に梟せらる。

**しまだ-さうちやう** 島田宗長【名】〔人〕連歌師。駿河國島田の人。字は久庵・柴屋軒と號し、宗祇に學ぶ。師の歿後、勅によりて、花の下宗匠の號を授かる。享祿五年歿す。年八十五。

**しまだ-ただおみ** 島田忠臣【名】〔人〕字多天皇の御代の儒者。字は達音、自ら氏を略して田といふ。醫を能くし、兼ねて文藻あり。美濃介・伊豫介を經て卒す。

**しまだ-ちようれい** 島田重禮【名】漢學者。文學博士。字は敬甫、號す。武藏國の人。海保漁村・安積艮齋に學び、また昌平黌に入り、助教に進む。明治の初、雙桂精舍を下谷に開く。文科大學教授・東京學士院會員となる。同三十一年歿す。年六十一。

**しまだ-づくり** 島田造・嶋田造【名】生絲の經(ヌキ)を製來する一法。經を二つに折返し、兩端を島田髷の如くに束ねること。

**しまだて** 島立・嶋立【名】甚石にてする一種の遊戯。

**しまだな** 島棚・嶋棚【名】四十八棚の一。床間書院などの隣に設くるもの。

**しまだ-ぼんこん** 島田藩根【名】〔人〕漢學者。筑德山藩士。家は藩の家老格なりしも、夙く修驗道に入り、神儒佛教を究む。幕末に勤王論を唱ふ。維新後、大參事また教部省出仕たり。明治四十年歿す。年八十一。

**しまだひ** 縞綱【名】〔動〕**一**鯛の一種。大いさ四五寸、體側には、横に並行せる五條の黑線を有す。我が近海に產す。いづたひ。いつつとだひ。

**しまだ-まげ** 島田髷・嶋田髷【名】**しまだわげ**(島田髷)に同じ。國語「島田髷には唐櫛と」

**しまだ-まんきち** 島田萬吉【名】〔人〕女歌舞妓の名人。近江國の人。島田髷は、この人の結ひはじめしものといふ。

**しまだ-もの** 島田物・嶋田物【名】駿河國島田の刀工、義助一派の銘へし刀。相州傳より出でたるも、上工少なきより位卑し。

**しまだ-ゆば** 島田湯葉・嶋田湯葉【名】島田髷の如き形に結びたるゆば。

**しまだ-わげ** 島田髷・嶋田髷【名】**しまだまんきち**(島田萬吉)を見よ。一說に、駿河國島田驛の遊女の結ひはじめしなりともいふ。女の髮の結ひ方の一。一・二の大小等により種種の形あり。天和・貞享の頃、十二三歲の少女より、若き女房。遊女などの間に行はれ、今も東京にては、未婚の女子これを結ふ。しまだ髷。しまだまげ。**しまだくづし**(島田崩)・**しまだ**(島田)・**ぶんきんだかまげ**(文金高髷)・**ゆひわた**(結綿)參照。

**しまだ-ちおみ** 縞縮・島縮・嶋縮【名】縞を織出したるちぢみ。女發達地獄「島縮に「微た







しかに、中(ナカ)の風と見た」

**しま-ちどり** 島千鳥・嶋千鳥【名】島に棲む千鳥。

**しま-ちやう** 縞茶字・島茶字【名】縞を織出したる茶字。(紋茶字に對して)

**しま-ちりめん** 縞縮緬【名】縞を織出したる縮緬。

**しまつ** 始末【名】**一**もとすゑ。はじめをはり。始終。首尾。**二**事のわけ。顚末。事由。**三**「始終を整ふる義」かたづけ。しめくくり。處理。「仕末」一代女「この自由なる大坂にして、始末より起れり」相撲色三味線「人生七十古來稀なる世に、始末の二字に 括られ、儲けためて使はぬ人の心が知りたし」始末にも終へない【句】手にあまる。世話のしやうなし。を・へ・ない。(俚語)

**しまづ** 島津【名】姓氏の一。源頼朝の子豐後守忠久より出づ。建久年中、忠久、薩摩國島津庄の下司(ツカサ)職となり、尋いで日向・大隅・薩摩の守護職となり、子孫その職を世襲して繁榮し、明治維新後、本宗たる鹿兒島の藩主忠義は公爵、忠義の叔父久光も同じく公爵を授けられ、日向國佐土原(ハラ)の藩主は一且子爵、後、伯爵に陞敍せられ、薩摩國の宮之城(ハラ)村の分家(ハラ)は男爵を授けられ、別に宗家の嗣子忠重の二弟も、各男爵を授けられる。

**しまづ-いへひさ** 島津家久【名】〔人〕武將。義弘の第二子。征韓の役に、父と共に明軍を新寨に破る。慶長十四年琉球を征服し、幕府これを家久に附す。慶長十五年卒す。年六十三。

**しまづ-がき** 始末書【名】**しまつしよ**(始末書)に同じ。

**しまづ-ごえ** 島津越・嶋津越【名】〔地〕**ごそうえ**(五倍越)に同じ。

**しまつ-ごころ** 始末心【名】儉約せんとする心。しまりぎ。五人女「萬の始末心を捨てて、大燒(ヤキ)する籠を見ず」

**しまつ しよ** 始末書【名】事實の顚末を詳記せる公文書。しまつがき。

**しまつ-すおろし** 島津巢【下・嶋津巢下】【名】『**しまつどり**(島津鳥)を見よ』鵜を、その鳥に喩みたる巢よりおろすこと。舊國「鵜籠を開き、取出し、島つ巢おろし、荒鵜ども、この河波にばっと放せば」

**しまづ-ただよし** 島津忠義【名】〔人〕舊薩摩藩主。齊彬(ナリアキラ)の子。叔父久光と明治中興の業を翼贊し、賞典祿十萬石を賜はり、尋いで毛利敬親(ヤカ)・鍋島直大(ハル)・山內豐範等と奏請して、版籍を奉還し、後に華族に列し、侯爵を賜はる。明治三十年薨じ、特に國葬の儀を賜はる。

**しまった** 仕舞た【句】**しまふた**(仕舞ふ)の條下を見よ。

**しまづたふ** 島傳・嶋傳【名】**しまづたふ**(島傳ふ)の略。

**しまづたふ** 島傳ふ・嶋傳ふ【動四他】島より島へと傳へゆく。高麗「うな原のかしこき道を島づたひい漕ぎわたり」

**しまった-たり** 仕舞たり【句】**しまふ**(仕舞ふ)の條下を見よ。

**しまづつみ** 縞包【名】厚くして、多くは布帛などを包むに用ふる一種の和紙。紀伊國より產す。

**しまつ-とり** 島津・嶋津【名】〔動〕『島の鳥の義』**う**(鵜)の異稱。「古語」和名抄「鵜鷀。志麻都止利」

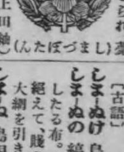
**しまつ-とり** 島津・嶋津【枕】島の鳥(家津鳥)・**ぬつどり**(野津鳥)參照。「記」「しまつどりうがひがとも」

**しまつなぎ-まつり** 島繋祭・嶋繋祭【名】**ちくぶしまつなぎ**(竹生島繋祭)に同じ。

**しまづ-なりあきら** 島津齊彬【名】〔人〕鹿兒島藩主。齊興の子。嘉永五年、露艦の攝津に來るや、藩邸警衛を名として、直に天機を伺ひ、數千兩を獻ず。風に開國の意見を抱く。安政五年薨ず。年五十。その神祠を照國神社と崇められ、別格官幣社に列せらる。

**しまづ-ひさみつ** 島津久光【名】〔人〕勤王家。齊彬の弟、又次郎と稱す。大隅國重富(シゲトミ)の領主忠光の嗣子となり、後、宗家に復し、和泉久光と改む。公武の間に奔走幹旋し、明治維新の際、機務に參與し、從二位左大臣に進む。同七年鍋島公と、議協はず、鹿兒島に退歸す。十七年公爵を授けられ、次いで、從一位大勳位に敍せられ、薨ず。年七十一。

**しまつ-ほたん** 島津牡丹・嶋津牡丹【名】紋所の一。下の圖を見よ。


(んたぼづまし)

**しまつ-むぎ** 縞紬【名】**一**縞をなせる紬。**二**(上田紬)に同じ。

**しまつ-もの** 始末者【名】儉約なる人。右大將傳「始末者の權正が死んでから、君を始め、御所中は勤定なしの取っていけ」

**しまつ-や** 始末屋【名】**一**始末なる人。儉約なる人。吝嗇なる人。しまりや。**二**遊興費を支拂ふこと能はざる客を、青樓より委任せられて、その辨償の方法を講ずるを業とする者。

**しまづ-よしひさ** 島津義久【名】〔人〕武將。貴久(ヤスヒサ)の長子。しばしば兵を起して筑前・筑後・肥前・豐前の諸國を定めしが、天正十五年秀吉に降り、改めて薩摩一國及び大隅・日向各二郡に封ぜられ、關ヶ原の役東軍に與す。慶長十六年卒す。年七十九。

**しまづ-よしひろ** 島津義弘【名】〔人〕義久の弟。兄と共に四隣を略定せしが、遂に豐臣秀吉に降り、征明の役に、殊功を以て封四萬石を加へられ、參議に任ぜらる。關ヶ原の役、石田三成に黨し、敗れ還りて、兄義久に因りて降を請ひ、封を子家久に讓り、剃髮龍居して餘生を送り、元和五年卒す。年八十五。

**しまつりくわ** 紫茉莉科【名】〔植〕**おしろいばなくわ**(紫茉莉科)に同じ。

**しまて-ぼん** 縞手本【名】織物の縞柄の見間のせと。島の淵戸。(古語)

**しまと** 島門・嶋門【名】島と他の陸地との間のせと。島の淵戸。(古語)

**しまとおやう** 縞鰌【名】〔動〕**たかのはとちやう**(鷹羽鮎)に同じ。

**しまながし** 島流・嶋流【名】刑名の一。罪人を島嶼又は僻地に遠し置くこと。流罪。遠島。

**しまなひく**【名】**かぜ**(風)の異名なりといふ。〔古語〕

**しま-ぬけ** 島拔・嶋拔【名】**しまやぶり**(島破)に同じ。

**しま-ぬの** 縞布・島布・嶋布【名】縞を織出したる布。一代男「朝妻には、いつの頃にか絕えて、賤の屋の淋しく島布を織る男は、大網を引きて、夜目を送りぬ」

**しま-ね** 島根・嶋根【名】しま。しまぐに。高麗「やまとをも遠くさかりて 弊が根の荒き島根にやどりする君」

**しまね** 島根・嶋根【名】〔地〕**一**出雲・石見・隱岐三國の全部を管轄する縣廳を出雲國松江市に置く。**二**出雲國舊郡の一。明治二十九年秋熊(ヤ)・意宇(ヤ)二郡と合して、八東(ヤ)郡となる。

**しま-ねずみ** 縞鼠・金華鼠・五道眉兒【名】〔動〕鼯齧(ヤ)類に屬する小獸。我が國の北海道又は歐洲・亞弗利加などに產し、穴居す。栗鼠(ヤ)に似、大いさ大なる鼠のごとく、尾は長からず。性活潑、上部は黃色にして、五條の縱線あり。下部は灰白、その毛皮はこれを數多連綴して、囊に製し、珍重す。とらふねずみ。

**しまね-はんたう** 島根半島・嶋根半島【名】〔地〕出雲國の北方にありて、西より東に突出する大半島。もと獨立の孤島なりしが、藏(ヒ)川平野の發達に起因して、本州と連なるに至りしなり。

**しまの-うち** 島之內・嶋之內【名】〔地〕大阪市南區の一部。南は道頓堀川より北は橫堀川(ヤ)川まで、東は東橫堀川より西は西橫堀川までの間なる、自ら島形をなせる地域。醒取千博鑑「いつても、島の內の祭は、俄が多うて、賑かなこと」

**しまの-おほおみ** 島大臣・嶋大臣【名】〔人〕『その飛鳥(ヤ)河上の邸に池を穿ち、池中に島を築きしに因るとも、また今の大和國高市(ヤ)郡高市村大字島ノ庄、御ち古の橋の島の地に住みしに因るともいふ』

**しま-の-と** 島子・嶋子【名】〔人〕**うらしまのこ**(浦島子)の略。(古語) 和泉式部集「あふこ

とを今はたのまねなかなれどまたこそあけ鳥の子が箱」

**しまのじょ** 島御所・嶋御所【名】〔人〕『しまくばう(島公方)を見よ』あしかがよしたね(足利義稙)に同じ。

**しまのじこ【名】**〔動〕燕雀(ヤクジャク)類に属する鳥。歐洲及び亞細亞大陸の北部に產し、我が國には稀なり。頭の側面は黑色、頭頂より背面にかけて暗赤色、腹部は黃色、胸部に黑色及び赤色の條あり。雌は背面に數多の黑條あり。てうせんのしこ。

**しまのみや** 島宮・嶋宮【名】天武天皇の離宮。今の大和國高市(タカイチ)郡高市村大字島ノ庄、卽ち古の橘島に在りしものといふ。

**しまのみやつこ** 島造・嶋造【名】上古の地方官の一。國造(クニノミヤツコ)と同じきものにして、島地を治めしもの。

**じまはし** 字廻【名】博奕(バクチ)の一種。文字を書きて、廻はして當(アテ)を定むるものならんといふ。

**しまはぜ【名】**〔動〕いしぶし(石伏)を云ふ。〔關西の方言〕

**しまはちく** 縞淡竹【名】〔植〕淡竹(ダンチク)の一變種。葉に白き縞の斑(フ)あり。美濃國に產し、庭園に栽培せらる。

**しまはと** 縞鳩【名】〔動〕あをばと(青鳩)を云ふ。〔東國の方言〕

**しまはぶたへ** 縞羽二重【名】適宜の色に染めたる生絲を用ひて織りたる縞柄の羽二重。横縞など種種あり。

**しまはへ** 縞蠅・大庶蠅【名】〔動〕雙翅(ソウシ)類に屬する昆蟲。形大きく、灰色を呈して、背に黑條を有す。夏月人家に多し。

**しまはんたう** 志摩半島【名】〔地〕伊勢國の東南に斗出して、志摩國を形成せる半島。

**しまばら** 島原・嶋原【名】〔地〕Ⅰ肥前國南高來(タカキ)郡にある町。長崎を距る陸路十八里。郡役所を置く。深溝松平氏の舊藩地。Ⅱ〔地〕『もと今の京都市魚棚室(ウオダナ)町にありしを、寛永十八年に今の地に移しなり。時恰も肥前國島原の亂に際せしいふ。世人この際に遊ぶを、號の城郭を攻撃するに比せしよりいふと』京都市下京區丹波街道の南方、卽ちもとの朱雀野にある遊廓。上の町・中の町・中堂寺町・太夫町・下の町・揚屋町の六坊あり。德川時代には、諸國の豪客來り遊びて盛んなりしが、明治維新後、衰退せり。西島(ナイジマ)。にし。Ⅲ〔地〕しんしまばら(新島原)の略。Ⅳ**しまばらきやうげん**(島原狂言)の略。

島原の亂【句】「天草(アマクサ)の亂」に同じ。

**しまばらか・せんき** 島原合戰記・嶋原合戰記【名】〔書〕Ⅰ肥前島原一揆(イッキ)の始末を記したるもの。五卷。遠山信春の著。三卷。著者詳かならず。一名、天草物語。

**しまばらきやうげん** 島原狂言・嶋原狂言【名】Ⅰ『京都の島原遊廓の名を取りて呼びしもの』傾城買の樣を演ずる一種の歌舞伎狂言。正保・慶安の頃、大いに京都に流行せり。Ⅱかぶきしばゐ(歌舞伎芝居)の異稱。

**しまばらーさうどう** 島原騷動・嶋原騷動【名】〔歷〕島原の亂に同じ。

**しまばらーじやう** 島原城・嶋原城【名】肥前國南高來(タカキ)郡島原町に在りし城。天正中島津氏ここに營して、龍造寺氏と戰ひ、元和四年松倉重政初めて築城す。のち松平忠房の居城となり、寛延二年戸田氏これに封ぜられて、子孫相繼ぎ、明治維新に及べり。

**しまばらーはんたう** 島原半島・嶋原半嶋【名】〔地〕肥前國の東南に斗出する半島。東側に有明灣を抱く。しまばら(島原)Ⅱは、この灣岸の町なり。

**しまばらーみなと** 島原港・嶋原港【名】肥前國南高來(タカキ)郡島原にある港。燈臺の設あり。

**しまばらーむすび** 島原結・嶋原結【名】婦人の帶の結び方の一。江戸時代に流行せり。

**しまばらもやう** 島原模樣・嶋原模樣【名】總模樣の一種。肩より裾模を下げたるやうに染出し、又は乳の邊もしくは襟の邊に模樣を置き、下はすべて高褄模樣にしたる、極めて派手好なる染方。

**しまびき** 仕舞【名】Ⅰ しまふこと。すむこと。すること。はて。をはり。Ⅱけびやう(化粧)に同じ。 狂言・未出『今日は、早や大晦日になりてござる。世間を見ますれば、しまひようして、歳暮の禮などにあり く人もあるに』 Ⅲ能(ノウ)の方法、卽ち形(カタ)。五『素舞(スマヒ)の義』能樂の略式の舞。卽ち囃子を伴はず、裝束を著用せず、仕手(シテ)一人、袴にて舞ふもの。地謠(ジウタ)は、後方に居並ぶ。

**しまーび** 島邊・嶋邊【名】しまべ(島邊)に同じ。〔古語〕 萬葉『春霞しまびに立てたづが音の悲しく鳴けば』

**じまひ** 字舞【名】舞樂の一。舞人が文字の形に立並びて舞ふもの。

**しまひーぎしや** 仕舞汽車【名】さいしゅうれっしや(最終列車)に同じ。

**しまひーぐち** 仕舞口【名】しまひにならんとする時。はてがた。終りがた。

**しまーひこ** 島彦・嶋彦【名】〔植〕一種の蔓草の名。蔓草の總稱ともいふ。〔古語〕 夫木「しまひこの繁みにはへる青つづらくるしきものは夕されの鹿」 〔語〕

**しまーひこ** 仕舞太鼓【名】菜子の異稱。〔女の

**しまひーだいこ** 仕舞太鼓【名】うちだいこ(打出太鼓)に同じ。 タ萬葉『春霞しまびに立てたづが音の悲しく鳴けば』仕舞太鼓の音まで、寂滅爲樂と替りなり」

**しまーびと** 島人・嶋人【名】Ⅰ島の住民。Ⅱしまもり(島守)に同じ。

**しまひーね【名】**かすみ(霞)の異名なりといふ。〔古語〕

**しまひーばしら** 仕舞柱【名】昔の芝居にて、客より佛像に送りたる鏡頭(ウ)などを插しおきし柱。 甲陽軍鑑『樂屋入の事、…正面の橋よりは、太夫一人通ふ者なり。又、太夫は物を下さるる時、太刀を持つてあがるなり。仕舞柱より出入をすべし』

**しまひーふろ** 仕舞風呂【名】終りになりて、湯槽の中の湯を流し捨てんとする時の湯浴。しまひゆ。 一代女『しまひふろに入りて身を改め』

**しまひーみせ** 仕舞店【名】しまひものみせ(仕舞物店)に同じ。

**しまひーもの** 仕舞物【名】賣れのこりたる品物。店仕舞に殘りたる品物。 生玉心中『すんと安い仕舞物があると聞く』

**しまひものーみせ** 仕舞物店【名】ふるだうぐや(古道具屋)に同じ。

**しまひーゆ** 仕舞湯【名】しまひふろ(仕舞風呂)に同じ。

**しまーひよどり** 縞鵯【名】〔動〕鶯の一種。形は、普通の鵯に似て、頭は白く、腹は灰色にして、その他は普通の鵯と同じ。

**しまひより・あきなひ** 仕舞寄商【名】〔商〕帳合米(ザイマイ)にて、毎期精算期の三日前に、新規の賣買を停め、殘賣・買戻のみを許して、取引を完了せしむること。

**しまーびる** 縞蛭【名】〔動〕蛭の一種。體や緑色にして、背面に五條の黃色線あり。人畜に吸著きて、血液を吸取るより、醫用に供す。一に醫用蛭ともいふ。

**しまーひろおと** 縞天鵞絨・島天鵞絨【名】縞織にしたる天鵞絨。〔代男〕羽織はどろふくれん黑きに、島天鵞絨の裏を附け、町人どしらへ」

**しまひろーやま** 島廣山・嶋廣山【名】〔地〕下總國猿島(サシマ)郡岩井町附近の高地。天慶年中、平將門この地によりて、平貞盛・藤原秀郷の軍を拒ぎたりといふ。

**しまーふ** 柳條布【名】縞織の上布(ジョウフ)。越後國小千谷(オチヤ)地方より產す。

**しまーふよ** 仕舞ふ【動四自】をはる。すむ。しまふ。

仕舞ったり【句】失敗せし時にいふ語。しまった。

**しーまふ** 仕舞ふ【動四他】Ⅰなし終ふ。遂げはつ。Ⅱ歳暮を迎ふ。かたづく。 狂言・未出『今日は、早や大晦日になりてござる。歳暮ふことはさておいて、何を一色、年とり物を調べも致さぬ。…かくのごとくにしまひ兼ねて、迷惑なことでござる』 Ⅲ〔商〕しまる(仕切る)Ⅱに同じ。





て、事件の結末を附く。らちをあく。かたをつく。 細鱗反覆畫『まづ斷書(ダンシ)めからしまはんと、太刀を拔かんとせしところに』

**しまーぶ** 島飾・嶋飾【名】いつぶし(伊豆節)に同じ。

**しまーぶた** 島豚・嶋豚【名】柴球の田舍に飼養せらるる豚。腹面長く、口尖り、頭大きく、耳も大きくして垂れ、腹部特に肥えて下垂し、地上に觸るるものあり。

**しまーべ** 島邊・嶋邊【名】島のほとり。しまび。 紀『大吉野のえしぬの鮎こそは島べもえき』

**じーまへ** 自前【名】Ⅰ芝居にて、何の貸用を業することの。〔かかへ、わけなどに對して〕

**しまーへび** 縞蛇【名】〔動〕蛇の一種。體長四五尺に達するものあり。形は青大將に似たれども、背面は褐色にして、四條の縞なる縱條あり。その體色・特に黑きを島蛇(シマヘビ)といふ。無害なり。なめら。

**しまーぼし** 島月・嶋月【名】つき(月)の異名なりといふ。〔古語〕 總歳『小夜ふくる緑の空に風吹けばいとどさえますしまぼしのかげ。しまぼしとは、月をいふなり』

**じーまま** 自儘【名】わが思のまま。 谷崎春雨『身まま・自儘になるならば』

**しまーまき** 島牧【名】〔地〕後志國十七郡の一。平地に乏しく、海岸は險嶮を成す。諸都(シヨ)支廳の管轄。

**しまーまつ** 島松・嶋松【名】島に生ふる松。夫木『秋風に吹きしかれたる島松の枝のいけにや波のこすらん』

**しまーまほり** 島廻・嶋廻【名】〔動〕ひびを云ふ。〔佐渡國の方言〕

**しまみ** 島回・嶋巳【名】しまわ(島回)に同じ。 萬葉『春がすみしまみに立ちてたづかねの悲しくなけば』

**しーみみづく** 縞木菟【名】〔動〕木菟中の最大なるもの。耳角最も著しきを以て知らる。北海道に產す。おほみみづく。しまふくろふ。

**しまーむくとり** 縞椋鳥【名】〔動〕こむくとり(小椋鳥)に同じ。

**しまむらーがに** 島村蟹・嶋村蟹【名】〔動〕きめんがに(鬼面蟹)に同じ。

**しまむらーはらげつ** 島村抱月【名】〔人〕文學者。通稱は瀧太郎。本氏は佐佐山。島村氏に養はる。東京專門學校文學部の出身。英・獨に留學し、歸朝後早稻田大學文學部の教授となり、文藝協會の幹事となり、又、文部省文藝委員に任ぜらる。大正二年藝術座を起し、新劇の爲に奮鬪す。大正七年歿す。年四十八。のち抱月全集の刊あり。

**しーまん** 蜑慢【名】〔佛〕一切の曼陀羅を四種に分類・解說せるもの。卽ち一に、大曼陀羅として、諸尊を總集せる壇場、及びその諸尊の形體、並びにその壇場の全體、又は諸尊を畫けるもの、二に、三昧耶(サマヤ)曼陀羅として、諸尊の手に持する器杖及び印契、本誓の異なるに從びて異なりを示す。諸尊の種字・眞言・呪文等にて、これらを口に唱へ、文字に記して、諸尊の作用形相を鑄造し、又は彩畫する等の事業。この四者は、諸佛・諸尊のみならず、宇宙間の一切の物、皆これを具有し、四者互に離れざるが宇宙の現相なりと說く。四種曼陀羅。

**しまーまん** 四曼相卽【句】〔佛〕四曼は互に融通して作用し、不離の關係にあるものなること。四曼不離。 太平記『一度三密瑜伽の道場に入りしより、永く三業(サンゴウ)卽是(ソクゼ)の春の華、滅が抉にか薫はまし。四曼不離の秋の月、何れの扉をか開すべき』

**しまん** 四慢【名】〔佛〕七慢の中の四種。 平家『三毒四慢』

**じーまん** 滋蔓【名】しげりてはびこること。

**じーまん** 自慢【名】われと、わが身をほめて、人に誇ること。自負。 傳鑑古道賢錄『長後「肥えたとて自慢はさせぬ暑さかな」

自慢・高慢・馬鹿の内【句】自慢は愚者のすることなり。〔諺語〕

**じまん・がほ** 自慢顏【名】自慢らしき顏附。

**じまん・くさし** 自慢臭し【形Ⅰ】自慢めきてあり。ほこりかなり。

**しまんと・がは** 四萬十川【名】〔地〕土佐國第一の大川。水源二あり。一は高岡郡不入(ハイリ)山より發し、仁井田川といひ、一は同郡西津野村より發し、越智面(ヤウ)川といふ。相會し、吉野・目黑の二川を合はせて下田港に注ぐ。長さ四八里。一名、渓(ヤウ)川。

**じまんーばなし** 自慢話【名】自慢してはなす話。

**しまんろくせんーにち** 四萬六千日【名】〔佛〕觀音の緣日。七月十日をいふ。その日に參詣したる者は、四萬六千日間參詣したる程の功德ありといふ。但し典故詳かならず。又、觀音以外の社寺にても、これに倣ふものあり。例へば東京芝愛宕(アタゴ)神社のごときは、毎年六月二十四日と定めらる。

**しまーめ** 縞目【名】縞の色と色との堺目。

**しまーめぐり** 島廻・嶋廻【名】Ⅰ島を巡廻すること。Ⅱ〔動〕ちやうさぎ(中鷺)に同じ。

**しまーめだけ** 縞女竹【名】〔植〕女竹の一變種。白色の縞なるもの。

**しまーめなう** 縞瑪瑙【名】〔鑛〕『英Onyx』瑪瑙の一種。色を異にせる部分が並行して、相連なるもの。

**しまーもず** 島鵙・島百舌【名】〔動〕りうきうもず(琉球鵙)に同じ。

**しまーもの** 縞物・島物【名】Ⅰ南壁諸島より船來せし品物。しまふ(縞)參照。 德川時代の語」Ⅱ田所の明かならぬもの。 東海道名所記『喜太夫といふもの、上總採になりて、太平記を語る。その間卽平家とも舞とも誠とも知れぬ島物なり』

**しまもの** 縞物【名】しまわりもの(縞織物)に同じ。

**しまーもめん** 縞木綿【名】縞を織りだしたる木綿織。

**しまーもやう** 縞模樣【名】襟樣の縞なるもの。

**しまーもり** 島守・嶋守【名】島を守る人。島の番人。 萬葉『やほかゆく島の鼻砂もわが懇におきまさらじか神つしま守』

**しまーや** 島屋・嶋屋【名】江戸日本橋瀨戸物町にありし飛脚屋。佐内町の和泉屋・室町の京屋、西河岸の大坂屋等と共に、江戸の飛脚屋の有名なりしもの。代代、主人の名を佐右衛門といへり。 雜記『あさっては側(ハタ)に見ますと島屋いび』

**しまやーせん** 島屋錢・嶋屋錢【名】寛永銅錢の一。正德の初に、京都島屋某の鑄造せしもの。

**しーまやぶり** 島破・嶋破【名】流罪に處せられたる者の、密かにその島より逃れ出づること、又その罪人。しまぬけ。〔德川時代の語〕

**しーまやま** 島山・嶋山【名】島にある山。 萬葉『しま山に赤き橘うづにさし』

**しまやまーばだ** 島山畑・嶋山畑【名】島山にある畑。 太閤『人住まぬ島山畑や落つる雁』

**しまーよしたけ** 島義男【名】〔人〕肥前國佐賀の人。字は國華、通稱は關右衛門。海軍監軍・陸軍參謀、また山形縣令に歷任す。明治七年職を辭して、國に歸り、江藤新平と共に亂を起し、捕へられて刑せらる。

**しまーより** 島寄・嶋寄【名】空中に多くの水氣を含めるため、島の近く見ゆること。しまあそび。

**しまーらく** 暫く【副】しばらく(暫く)に同じ。〔古語〕 萬葉『しまらくはねつつもあらむをゆめみにもとな見えつつあるをねしなくる』

**しまり** 締【名】Ⅰゆるみなくなること。ゆとりなきこと。緊要。Ⅱ放埒(ホウラツ)なる行の止めて、眞面目になること。 淨瑠璃『釜さまに早く別れたのが、あれが身のしまり

にもなったのさ」 三 とりしまり。監督。四 しまつ。倹約。五 すべくくり。統御。

**しまつさしまり**【名】戸締。

締が無し【句】しだらなし。だらしなし。放埒(ホウラツ)なり。

**しまりそなへ** 締備【名】軍の最後陣を取締る隊。

**しまりや** 締屋【名】倹約なる人。しまつや。

**しまる** 締る【動四自】一ゆるみ無くなる。二かたく結ばる。三とざさる。ふさがる。「木戸が締る」 四放埒(ホウラツ)なる生活を止めて、眞面目になる。かたくなる。五相場あがる。ひきしまる。

**しまる** 締る【動四他】一かたく結ぶ。しばる。「虱おほ君のみこの柴垣やふしまりしまりもとほし」 二統べくくる。とりしまる。

**しまろ** 縞紀【名】縞を織出したる紀。縞模様のある紀織。

**しまわ** 島囘・嶋囘【名】島の斗囘し、或は灣入せる處。島のまはりの海。しまみ。〔古語〕 萬葉「ももづたふ八十のしまわを漕ぐ船にのりにし心わすれかねつも」

**しまわうごん** 紫磨黃金【名】〔佛〕『孔穴の聖人優劣論に「金之精者、曰三紫磨」猶二猶入之有」墨也」と云に本づく。紫は紫色、磨は垢濁なき義』すぐれたる黃金。しまごん。しこん。

紫磨黃金の膚(ハダ)【句】〔佛〕紫磨黃金の色をなせる膚。佛身の形容。さんじゃにさう(三十二相)參照。 太平記「肉身忽ちに變じて、紫磨黃金の膚となり」

**しまゐそうしつ** 島井宗室【名】〔人〕筑前國博多の富豪。名は茂勝、通稱は德太夫。薩髮して、盧自軒端翁と稱す。呂宋・遠羅・支那・朝鮮などと貿易して、巨利を博す。茶技を宗易宗休に學び、大いに信長・秀吉に優遇せらる。元和元年歿す。年七十七。

**しまん** 縞紬【名】一陝取(ハリ)るべき所を、細筆にて勤を引き、鮫模様の如くせしより いふ。舶來の銅版畫。「江戸時代の語」 二細巧なる人物畫。

**しみ** 蝨(ジラミ)【名】〔動〕蝨科(シラミカ)の昆蟲。〔古語〕 萬葉「しらぬひ筑紫の國に、いとけなき子らを置き、山を隔てて遠く離れ来ば、母なる人の、手放ちて、夜の昼の、別きたまはぬ、父なる人の、ことだにも、いまだ聞かず、…」

**しみ** 染【名】一染(シ)むこと。色の染まること。二物に染み汚れたる斑點。汚染。汚點。三皮膚に生ずる一種の斑點。紫黑・黑(ホクロ)・淡褐色などあり。

**しみ** 凍【名】こほること。凍氷。〔古語〕 萬葉「夕暮はみぞれにしみやとけぬらん乘氷の毛尾あり。衣服・書籍などの間に生じてこれを食害す。きररむし。しみむし。 源氏「しみといふ蟲のすみかになりて」

(み し)

**しみ** 滋味【名】滋養分を含める味。

**しみ**-**いる** 染入る【動四自】しみこむ(染込む)に同じ。

**しみ**-**かへる** 染返る【動四自】『かへる(返る)は接尾語』强く染む。〔古語〕 萬葉「御けはひ・にほひなど、ぞ、しみかへらせたまへる」

**しみ**-**こほる** 凍氷る【動四自】一甚しく氷る。しむ。氷結す。〔古語〕 萬葉「衣手の薄きや春の關なちんわが身はいとどしみこほりつつ」 二不安・悲哀などのためにめいれば、家内の上下しみこほり、二階には逃場もなく」 源氏「泣調」

**しみ**-**こみ** 染込む【動四自】深く染(シ)む。染みいる。滲入す。淡調す。

**しみ**-**こん** 凍蒟【名】『氷蒟の略』こほりごんにやく(氷蒟蒻)を云ふ。「甲斐國の方言」

**しみ**-**ごんにやく** 凍蒟蒻【名】こほりごんにやく(凍蒟蒻)に同じ。

**しみ**-**さぶ** 茂寂ぶ【動上二自】木など茂りてものさびる。〔古語〕 萬葉「大和の青香具山(カグヤマ)は…春山としみさび立てり」

**しみ**-**しう** 四味臭【名】『四味の臭を和する物の義』じゃかう(麝香)に同じ。

**しみ**-**したたるし** 【形一】したたるしを强めていふ語。心中實感申「男色立て 拔く詞の優しさ、そのいき方に尚なづむと、しみしたたるく取廻せば」

**しみ**-**じみ** 染染【副】深く心に感じて。しんみり。つくづく。 後撰「さし入りたる月の光も、一きはしみじみと見ゆるぞかし」 浮世風呂「もうもう、しみじみしやだ」

**しみ**-**たつ** 茂立【動四自】茂りて立つ。〔古語〕 萬葉「いもらがりいまきの峰にしみたてるつま松の木は古人見けむ」

**しみ**-**たれ**【名】一しわきこと。又その人。吝嗇。二根性の小さきこと。氣意地なきこと。又その人。

**しみち** 爲道【名】しかた(仕方)に同じ。

**しみづ** 清水【名】一『澄(ス)水の約か』湧出づる清き水。清泉。拾遺「逢坂の關のしみづに影見えて今や引くらん望月(モチヅキ)の駒」 二豆腐を搾りたるあとの汁。

**しみづ** 清水【名】〔地〕一尾張國西春日井(カスガイ)郡にある町。南は名古屋市に接す。二駿河國安倍郡にある町。靜岡市の東二里餘。巴(ハ)川の河口。その前面は清水港と稱し、開港場として、東海岸に於ける良港なり。 三〔地〕一廷喜式に見ゆ。信濃國に在りし古驛。今の北佐久郡小諸(コモロ)町の邊なるべしといふ。 萬葉「おりたちて清水の里に住みぬれば夏をぞしらぬ聞きわたるかな」 四姓氏の一。德川家の一門。德川九代將軍家重の子重好、寶暦八年邸を清水門の傍に得て、清水と稱す。明治維新後、伯爵を賜はりしが、後故ありて爵位を失ふ。

**しみづく** 凍附く【動四自】こほりつく氷附く)に同じ。「古語」 壬三「さざの葉にしみつく霜のよまを、てはみ山もさや に衣ちつなり」 萬葉「朝の妻をそのなりに、素足に雪駄しみつけば、袋に裳の一襲」

**しみづく** 染附く【動四自】染まり附く。深くそまる。

**しみづく**【動四自】ぬれてじとじとする。心中見は本の雨日、見惚る道もしみづきし草鞋に編笠の二人連、やあ平兵衛獄いかい暑さでござるの」

**しみづくわんじや** 清水冠者【名】〔人〕みなもとよしたか(源義高)の異稱。

**しみづだうかん** 清水道閑【名】〔人〕石州流茶人の名家清水氏の初世。京師の人。名は宗治。傳習庵と號す。初片桐貞昌に學び、のち伊達氏に仕へて、仙臺風呂屋町に住みしより、風呂の道閑と呼ばれ、また古道閑とも稱せらる。慶安元年歿す。年七十。

**しみづだに** 清水谷【名】一〔地〕東京市麹町區紀尾井(キオイ)町舞慶橋内にある地。明治十一年大久保利通の、島田一郎等に殺されしところ。今、公園となり、八重櫻多し。二姓氏の一。本姓は藤原氏。西園寺公經の子實有を祖とす。子孫相繼ぎて、明治維新後、伯爵を授けらる。

**しみ**-**たる**【動下二自】一鄙吝なる樣をすす。みすぼらしき樣をなす。浮世風「きたねえ、けちな手補に、水が浸んでゐて、しみつたれた小憎さ」 二心小さくあり。意氣地なくあり。

**しみ**-**たれ**【名】しみたれの略。

**しみづはまおみ** 清水濱臣【名】〔人〕國學者。村田春海の門人。通稱は玄長。江戸の人。醫を業とし、江戸不忍の池邊に卜居し、泊洎舍(ハクキシヤ)と號す。歌文を以て聞ゆ。文政七年歿す。年四十九。

**しみづ**-**みなと** 清水港【名】〔地〕しみづ(清水)(二)を見よ。

**しみづ**-**むねはる** 清水宗治【名】〔地〕武人。長左衛門と稱す。小早川氏に屬し、備中國高松の城主たり。天正十年羽柴秀吉に圍まれ、防戰其だ努めしが、秀吉甲部川の







水をその城に灌(ソソ)ぐに及び、一死以て城中の衆に代らんことを請ひ、秀吉の檢使を迎へて、自刃す。年四十五。

**しみづもん** 清水門【名】〔地〕『昔、この邊より淸水湧出でしによりていふとぞ』江戸城諸門の一。飯田町一丁目に在り、大手門の西北十一町、竹橋門の西北四町。

**しみづりうけい** 清水隆慶【名】〔人〕彫刻家。京都の人。寛永頃法眼に敍せらる。

**しみづ**-**ろくべゑ** 清水六兵衛【名】〔人〕陶工。摂津國嶋上郡五百住(ヰヅミ)村の人。京都五條坂の清兵衛に學び、また信樂(シガラキ)の陶業をも修む。明和中、窯(ヨウ)を五條坂に開きて、茶器を製せり。慶巢・吳春等と交遊す。寛政十一年歿す。年六十二。

**しみとうふ** 凍豆腐【名】こほりどうふ。氷豆腐に同じ。

**しみとほる** 染徹る【動四自】一染込む。深くしみ入る。しみわたる。 萬葉「戀しくにいたき我が身ぞいちじろく身にしみとほり」

**しみぬき** 染抜・汚點抜【名】織物等に附著せる汚點を取去りて、淸淨にすること。

**しみはいばい** 試味賣買【名】〔商〕しげんばいばい(試驗賣買)に同じ。

**しみみ** 茂み【名】〔鳥〕しげくひまなきさま。しみら。〔古語〕 萬葉「見まくほりわが待ちこひし秋萩は枝もしみみに花咲きにけり」

**しみむし** 蝨蟲【名】〔動〕しみ(蝨)に同じ。

**しみん** 嗜眠【名】〔醫〕『羅 Sopor』病勢進みて、絕えず眠氣を催すこと。この一層重くして、意識を失へるを昏睡といふ。

**しみん** 四民【名】人民の四階級、卽ち士・農・工・商。四民を外(ホカ)る【句】士・農・工・商以外の遊民にてあり。 御所巡「四民をはづれ、野に遊びのほ、てんがら」

**しみん** 士民【名】一士と庶民と。 二士族と平民と。

**しみん** 市民【名】市の中に住居せる人民。

**しみ**-**もち** 凍餅【名】氷らせたるかき餅。湯にひたし、砂糖などを掛けて食ふ。かきもち。こほりもち。

**じみやう** 自名【名】おのれ。自分。 東鑑「自名之課役、一切不レ致二其勤一」

**じみやうーき** 慈明忌【名】じひしきめいき。十七年忌に同じ。

**じみやうじ**-**やま** 慈明寺山【名】〔地〕うねびやま(畝傍山)の俗稱。

**じみやく** 支脈【名】一わかれたるすぢ。支線。 二〔植〕『英 Veins』葉の中脈より分れ出でたる脈。〔技脈〕

**じみやく** 死脈【名】一死に近き脈搏。 二不用物のみ〔古語〕 萬葉「あかねさす晝はしみらにぬばたまの夜はすがらに」

**じみやく** 自脈【名】一自ら已れの脈を取りて、病を察すること。 源氏十二「位長生萬年」自脈取るやら、もだくだと」

**じみら** 茂ら【動】しみみ(茂み)に同じ。〔古語〕

**じみる** 染みる【接尾】その物事によく似寄る意。「年寄じみる」「學者じみる」

**じみわたる** 染渡る【動四自】しみとほる(染透る)に同じ。

**しむ** 私務【名】一私人の仕事。〔公務に對して〕

**しむ** 至務【名】至極のつとめ。

**しむ** 凍む【動四自】こほる(凍る)に同じ。 狭衣「ひろごり降る雪、消えやるべくもあらず しみわたる」

**しむ** 染む【動四自】一そまる。そむ。 貫之「雨なれど時雨といへば紅に木の葉のしみて散らぬ日はなし」 二深く入る。附著す。「滲む」 拾遺「もみぢ葉に衣の色はしみにけり秋の山からめぐり來しまに」 三深く感ず。思ひ込む。 源氏「わが心ながら、いとかく人にしむ事はなきを」 四身にこたふ。とほる。「親の意見と霜夜の鐘は五臟に六腑にしみわたる」

**しむ** 染む【動上二自】前條に同じ。 源氏「朝夕すずみもなき頃なれど、身にしむるこころちして」

**しむ** 染む【動下二他】染(シ)むやうにす。「古語」 枕「からの香いみじうしめたる匂、いとをかし」

**しむ** 占む【動下二他】一わが物となす。領有す。 二我が思ふままにす。占取す。

ありつく。 浮世風呂「もうお貴をしめたか」

占めたり【句】次條の略。

占めたり【句】十分しとげたり。我が思ふままなり。しめた。

**しむ** 締む【動下二他】一ゆるまぬやうにす。堅く結ぶ。 二塞ぐ。閉づ。 源氏「やんごとなき御かたがたの、物見たまふとて、この戸口は閉めたまへるなるべし」 三おしつく。迫壓す。 四きびしく監督す。きびしく取締る。 五おさへ苦しむ。捉へてさいなむ。 浮世風呂「今度、おめへが江戸詞を笑ったら、一番しめてやらうと思つて、待ってたはな」 六鳥などの喉を强く壓して殺す。くくる。 妻人狂言鮫切形「さ、あ、しめやせう。シャンと手を打ち…」

**しむ** 使む・令む【助動】他を使役して、動作せしむる意。す。さす。

**じむ** 時務【名】當世に急要なる務。時勢に適應せる經世策。

**じむ** 事務【名】取扱ふ仕事。しわざ。つとめ。

**じむ** 寺務【名】一寺院の庶務。 二興福寺の上首。大乘院と一乘院との住持、交番に補せらる。 三大なる寺の統領の稱。 農原「僧官位。寺務」

**じむきてい** 事務規定【名】じむじゅうてい(事務章程)に同じ。

**じむきょくはう** 事務局報【名】局報の一。事務上に關して、電信局、その他郵便・官署相互間に往復するもの。

**じむく** 仕向く【動下二他】一仕は爲(ス)の義』 二相手をさし向く。しかく。 三商品を、買人または賣人に向って發送す。

**じむくわん** 事務官【名】一長官に隷屬して、庶務を扱ふ補習官。奏任にて、樺太廳・北海道廳・府縣及び朝鮮・總督府・臺灣總督府・關東都督府に各數名を置く。北海道廳の第一部長、府縣の警察部長たる事務官は、特に警務長・府長と稱す。 二規定せる法規の範圍内にて、行政事務を扱ふ官職。卽ち内閣大臣と進退を共にせぬもの。(政務官に對して)

**じむくわんちやう** 事務官長【名】部下の事務官を總括指揮する職。

**じむくわんほ** 事務官補【名】事務官の次位にあり、所管事務を掌る官吏。

**じむくわんり** 事務管理【名】〔法〕法律上の義務を有せずして、他人のために、事務を管理すること。民法上、契約不法行爲等と共に、當權發生の原因の一にして、本人の意思に反せずしてなしたる場合に、有益なる費用を出したる時は、本人にその償還を請求し、本人のために、有益なる債務を負ふ時は、本人にその辨償をなさしめ、又は擔保を供せしむるを得べく、この本人の意思に反してなしたる場合には、本人が現に受ける利益の限度において、償還又は辨濟をなさしむるを得。

**じむくわんりーちやう** 事務管理長【名】その事務を管理する權限ある官廳。

**じむくわんりーちやう** 事理管理廳【名】その事務を管理する權限ある官廳。

**じむけ** 仕向【名】一しむくること。あつかひ。待遇。 後撰古遠「家山「わせ・おくて皆こちからの仕向なり」」 二商品等を先方へ宛てて送ること。

**じむけ**-**かう** 仕向港【名】航海業者に於ける、貨物・商品等を送り屆くる港。

**じむけ**-**くち** 仕向口【名】〔商〕簿記上、支店勘定に於ける一。自店より勘定を起すこと。當方勘定へ被仕向口に對して)

**じむけ**-**ぐち** 四無礙解【名】〔佛〕じむげち(四無礙智)に同じ。

**じむけ**-**ぢ** 仕向地【名】商品を仕向くる土地。注文品の發送先。

**じむげち** 四無礙智【名】〔佛〕佛の有する四種の智、卽ち一に法無礙智にて、一切法において、自在に分別・了知する智、二に義無礙智にて、一切の義理に通達して、疑滯することなき智、三に辭無礙智又は詞無礙智とて、一切の言辭、卽ち諸方の方言に通達の智、四に樂說無礙智とて、巧に言說を使用し、他をして、その說法を樂求・愛敬する念を起さしむる智。この四無礙智を言說に表はす時は、四無礙辯又は四辯といふ。

**じむげべん** 辭無礙辯【名】〔佛〕前條を見よ。

**じ-むげん** 時無間【名】〔佛〕「五種の無間」を見よ。

**じむ-しつ** 事務室【名】事務を取扱ふ室。

**じむ-しやうてい** 事務章程【名】各官廳に於ける事務取扱の手續を定めたる規程。事務規定。

**しむしゆ-かいけふ** 占守海峡【名】〔地〕『峡の字の音、正しくはかふ』占守島の東北端なる國端崎と鐵劍カムチヤツカ(Kamtschatka)半島とに挾まれたる海峡。古利留(クリル)海峡。

**しむしゆ-たう** 占守島【名】〔地〕千島列島の北端に在る島。我が領土の最北端に位し、他の九島と共に占守郡に屬す。島形長方形にして、長さ七里半幅五里あり。膃肭獸(オツトセイ)・黑狐を産す。

**じむ-しよ** 事務所【名】事務を取扱ふ所。

**じむ-しよ** 寺務所【名】寺務を取扱ふ所。

**し-むしよね** 四無所畏【名】〔佛〕**しむね** 四無畏(名)に同じ。

**じむ-そうちやう** 事務總長【名】關東廳に屬する高等官の一。民政部長を兼ね、關東長官を佐け、長官事故あるときはその職務を代理する。

**しむそん-せん** シムソン線(英 Simson line)【名】〔數〕『この連結線が必ず直線をなすことを初めて證明せし、英人シムソン(R. Simson)の名を冠らせしとぃふ』圓周上の一點より、これに内接する三角形の各邊に下せる垂線の足を連結する直線。

**じむ-たんたうしや** 事務擔當者【名】或事務を擔當する人。

**じむ-ちやう** 事務長【名】事務員を指揮して、その事務を總轄する人。「用。

**じむ-ひ** 事務費【名】事務取扱に要する費

**じむ-ひきつぎ** 事務引繼【名】後任者が前任者より、その擔當に屬する事務を受繼ぐこと。

**しむら-にんじん** しむら人參【名】〔植〕繖形(サンケイ)科に屬する一二年生の草。滿地に自生す。莖の高さ二三尺、葉は細長く、夏季、白色の小花を開く。

**し-むりやうしん** 四無量心【名】〔佛〕十二門禪中の四禪。即ち一に慈無量心とて、能く樂を與かる心、二に悲無量心とて、能く苦を拔く心、三に喜無量心とて、人の離苦得樂を見て慶悦を生ずる心、四に捨無量心とて、如上の三心これを捨して心に存著せざること。四等。

**し-むる** 四無畏【名】〔佛〕佛又は菩薩が大衆の中に說法するにあたりて、畏るる所無き四種の事。佛の場は、一に一切智無畏(正等覺無畏)とて、佛自ら一切の智を具足するが故に、一切の智を畏れざること、二に漏盡無畏(漏永盡無畏)とて、煩惱(ボンノウ)を斷じ盡せるが故に、煩惱に對して畏れざること、三に說障道無畏(說障法無畏)とて、一切の邪法を畏れざること、四に說盡苦道無畏(說出道無畏)とて、一切の苦惱を畏れざること。菩薩の場は、一に總持不忘說法無畏とて、よく教法を聞持し、衆義を區持して忘れざるがためなること、二に盡知法藥及智衆生根欲性心說法無畏とて、藥に世間種種あり、菩薩能くこれを了知するが故なること、三に善能問答說法無畏とて、一切の異見皆能く摧破し、一切の正法(ショウホウ)悉く能く成立し、無量の衆生一時に來て難問するも、悉く能く一時に酬對するが故なること、四に能斷物疑說法無畏とて、衆生問難するに、意に隨つて、法如法に解說し、能く巧に衆生の疑を斷つ。これを能斷疑と名く」が故なること。四無所畏。

**じむ-ゐん** 事務員【名】事務を取扱ふ者。

**しん** 神【名】**しん**かみ。かみさま。鬼神。神明。狂言(きやうげん)「狐と申すは、みな神にておはします」**しん**靈妙なる感應。**しん**ところ。精神。「神、相通ず」**しん**神聖なること。**しん**神道。

**じむ-ゐん** 神飛び、魂馳す【名】恍惚として、心ここにあらず。**じんやう**(神往)參照。

**しん** 神を驚かし、鬼(キ)を泣かしむ【句】鬼神をも感動せしむ。

**しん** 紳【名】支那にて、高貴の人の、朝服著用の時、腰を束ね、その餘を垂れて飾とする、幅廣き帶。おほおび。

紳に書す【句】『論語の衛靈公篇に「子



對して)

眞は立つが如し【句】『東坡志林に「眞生し行、行生草、眞如し行、行如し草如し走」とある事に本づく』眞書は、その勢、人の立てるが如き行。「謎語」

眞を保つ【句】『楚辭の卜居篇、漢書の藝文志等に見ゆ』天より付與せられし眞性を失はぬやうにす。天眞を保持す。

**しん** 瞋【名】〔佛〕三業(サンゴウ)の一。いかり。うらみ。にくみ。嗔恚(シンイ)。

**しん** 親【名】**1**したしきこと。したしき交。**2**おや。父母。**3**みうち。親族。

**親は泣寄**(ナキヨ)【句】『佛神のお蔭ぞと意見に、親は泣寄の二人が肝に應へつつ』

**親は泣寄、他人は食寄**(クヒヨ)【句】凶事の場合は、親身の者は、哀悼のため寄り集るも、他人はこれと反對にて、樂しき時より外、寄りつくものでなし。「謎語」

**しん** 身【名】**1**からだ。み。身體。**2**〔佛〕**しんじん**身業)を見よ。

身口(シン)・意の三業【句】〔佛〕**さんごふ**身・言・書・判【名】身體と言辭と筆跡と文章と。支那唐代に、官吏登庸の標準とせしもの。

**しん** 寢【名】いねること。ねること。ねどこ。**寢處**。「寢に就く」

**しん** 辛【名】十干の一。かのと。

**しん** 申【名】十二支の一。さる。

**しん** 辰【名】十二支の一。たつ。

**しん** 進【名】皇太后宮職・皇后宮職・春宮坊の判官。大と少とに分つ。

**しん** 脣・唇【名】くちびる(脣)に同じ。「じ。

**しん** 軫【名】**1**車の床緯(ヨコイト)の上に加へたる横木。**2**二十八宿の一。みつうち。

**しん** 參【名】二十八宿の一。からすき。

**しん** 震【名】八卦の一。その符號は☳。

**しん** 疹【名】〔醫〕皮膚に特發性又は續發性に生ずる一小部の異常物。その色・光澤及び隆起の狀により、丘疹・斑疹・水疱疹など、種種の區別あり。

**しん** 晉【名】**1**支那の朝廷の名。分れて、西晉・東晉の二となる。各その條を見よ。**2**こつしん(後晉)を見よ。

**しん** 秦【名】**1**支那の朝廷の名。西戎より起り、その王、政の時、次第に六國を平げて、天下を一統し、三十六郡を置き、中央集權の政を行ひ、始皇帝と稱せしが、僅かに三世にして、楚漢に滅ぶる。我が國紀元四四〇年より四五五年まで。**2**贏秦(エイシン)。**3**ぜんしん(前秦)を見よ。**4**こうしん(後秦)を見よ。**5**せいしん(西秦)を見よ。

**しん** 清【名】支那の朝廷の名。滿洲長白山下より興り、明の萬曆四十四年に皇帝の位に即き、十一世に傳へて亡ぶ。我が國の紀元二二七六年より二五七九年まで。

**しん** 臣【代】君主に對する家來の自稱。

**しん** 【稔】靜まりかへりたるさま。ひつそり。森閑。

**じん** 仁【名】**1**博く愛する心。めぐみ。あはれみ。**2**仁愛。同情。**3**孔子の、最高至善の德とせしもの。愛の理體。**4**じんじゃ(仁者)に同じ。**5**ひと。にん(「人」)

宋襄の仁【句】『左傳の僖公二十二年の條に見ゆ』**1**支那春秋の世に、宋の襄公の、敵國楚を憐み、その備無きに乘ずるは仁にあらずとて、攻めざりしため、却つて大敗せし故事。**2**無益なる慈悲。

身を殺して、仁を成す【句】『論語の衛靈公篇及び戰國策に出づ』生命を拋ちて、世道のために尽す。

**じん** 腎【名】**じんざう**(腎臟)の略。

**じん** 杜松子酒(英 Gin)【名】ブランデエの一種。大麥又は麥芽・馬鈴薯・果實を醗酵せしめ、杜松子(ヒノキ)の搾汁と少量のテレビン油及びホップをも加へて、香味を添へしもの。和蘭(オランダ)にて、多量に製せらる。

**じん** 仞【助數】『釋文に「仞七尺也、小爾雅に「四尺曰ㄴ仞、倍仞謂ニ之尋ㄴ、漢書の應劭傳の註に「五尺六寸曰ㄴ仞」とあり』高さ又は深さの單位。尺の七倍。一說に、尺の四倍なりとも、五尺六寸なりともまた八尺なりともいふ。

**じん** 尋【助數】『周禮地官鋤氏註に「八尺曰ㄴ尋、倍ㄴ尋曰ㄴ常」とあり』長さの單位。尺の八倍。ひろ。

**しんあい** 親愛【名】したしみいつくしむこと。極めて睦しきこと。

**しんあい** 信愛【名】信用していつくしむこと。

**しんあい** 深愛【名】深く愛すること。

**じんあい** 仁愛【名】めぐみいつくしむこと。

**しんあう** 新鶯【名】初春に囀る鶯。

**しんあう** 深奥【名】おくぶかきこと。容易に窺ふべからざること。蘊奥。

**しんあう** 神奥【名】神祕にして、深奥なること、又その物。

**しんあう** 震央【名】〔地〕『英 Epicentrum』震源の直上に當る、地表の一部。通常、震動を感ずること最も早く、且つ最も强く、又主として、上下動を感ず。

**しんあん** 診案【名】診察して、その病狀を調ふること。

**しんあん** 新案【名】新しき工夫。「味。

**しんあん** 審案【名】しらべだすこと。吟

**しんあん-しゆかん** 新安手簡【名】〔書〕新井白石と安積(アサカ)澹泊との往復の手簡を集めたるもの。二卷。立原(タチハラ)翠軒の編。

**しんあん-とくきよ** 新案特許【名】**じつよう**

**しんあんとうろく**(實用新案登錄)の俗稱。

**しんあんりう** 新安流【名】〔佛〕**じやうどん**(淨藍)を見よ。

**しんい** 新意【名】新しき意義。「意匠。

**しんい** 宸意【名】**1**〔文〕**しんぎん**(宸襟)を見よ。天皇の御意。叡旨。

**しんい** 深意【名】ふかきわけ。

**しんい** 眞意【名】**1**まことの心。**2**心意。精神。

**しんい** 鍼醫・針醫【名】はりい(針醫)に同る醫師。名醫。

**しんい** 神醫【名】治術の神の如き効驗あ

**しんい** 神異【名】人間業ならぬこと。ふしぎ。正綱記、渡唐の時にも、或は五筆の藝を施し、樓櫓の神異ありしかば」

**しんい** 神意【名】神のおぼしめし。神の心。

**しんい** 新衣【名】新しき衣服。

**しんい** 深衣【名】『禮記に「朝玄端、夕深衣」とあり』儒者の衣服。

**しんい** 寢衣【名】ねまき。

**しんい** 襯衣【名】はだぎ。襯衫。

**しんい** 嗔恚・瞋恚【名】**1**いかり。いきどほり。**2**〔佛〕『梵 Krodha (訖羅駄)の譯語。恚は、瞋の字の韻に引かれて、ニと發音することあり』三毒の一、また十種煩惱の一。怒り又は恨むこと。謠曲朝長「いまだ嗔恚の角背の御有樣ぞいたはしき」

嗔恚の角(ツノ)【句】瞋恚の恐ろしきさまを形に譬へていふ語。常盤千歳馬、迷に迷ふ瞋恚の角の枝高き、海が枝技にと」

嗔恚の毒蛇【句】〔佛〕嗔恚の、己が心を苦しむるを、毒蛇の噛むに譬へていふ語。謠曲朝長の長恨の一念、盃の影晴き夜に、「嗔恚の毒蛇くるくるくるくる」

嗔恚の炎(ホノホ)【句】〔佛〕瞋恚の身心を熱惱して苦しむることを、炎に譬へていふ語。嗔火。

嗔恚の炎(ホノホ)【句】〔佛〕前條に同じ。謠曲秀上「今の根はあり」し報。瞋恚のほむらは身を焦す」

嗔恚を燃やす【句】嗔恚を炎に譬ふる

恚を燃やしたり」

**じんい** 人意【名】人のこころ。人心。人意を强くす【句】人に氣强き思をせしさす。

**しんい** 深憂【名】深き憂。非常の心配。

**しんい** 神佑・神祐【名】神の助。天佑。冥助。

**しんいう** 神遊【名】精神の援けいづること。

**しんいう** 親友【名】したしき友だち。

**しんいう** 心友【名】同心の親友。心の友。(面友に對して)

**しんいう** 宸憂【名】天皇の御心配。

**しんいう** 宸遊【名】「しんきよ(宸襟)を見よ」天皇の御遊。

**しんいう** 軫憂【名】『軫は楚辭九章に「心

鬱結而紆鬱」とある鬱にて、屈曲の義。また楚辭九章の「出二國門一而鬱懐」とある鬱の王逸の註に「鬱猶也、懐思也」とあり。しんたん(鬱悼)しんねん(鬱念)参照。心にわだかまるうれひ。心いたみうれうること。

**しんいくがく** 心意科學【名】〔哲〕せいしんくわがく(精神科學)に同じ。

**じんい-しゃくわい** 人意社會【名】せいぢしゃくわい(政治社會)に同じ。

**しんい-せつ** 神意說【名】『英 The theory of divine institution』國家又は法律は神意によりて成立すといふ學說。猶太(ユダヤ)教の教ふる所は、その最も著しき例なり。

**しんい-いちぶぎん** 新一分銀【名】■新に發行したる一分銀。■あんせいいちぶぎん(安政一分銀)に同じ。

**しんい-いちぶぶんきん** 新一分判金【名】■新に發行したる一分判金。■まんえんいちぶぶんきん(萬延一分判金)の別名。

**しんい-いっしゅぎん** 新一朱銀【名】■新に發行したる一朱銀。■かえいいっしゅぎん(嘉永一朱銀)に同じ。

**しんい-いふ** 深揖【名】禮式の一。手に笏を執り、腰を折りて、俯伏すること。(閑揖に對して)

**しんいん** 眞因【名】眞實の原因。

**しんいん** 親姻【名】■親族と姻族と。■えんつづき。姻戚。

**しんいん** 信印【名】しるしの印。

**しんいん** 浸淫・浸婬【名】■ひたること。ひたすること。■おぼれすさむこと。耽溺。

**しんいん** 心印【名】〔佛〕『禪宗にては、不立文字を主意とする心が直ちに佛法の實義を印可する意にいふ』眞理に徹底したる、內心の實證。佛心印。(主に禪宗にいふ)〔青葉集〕心印は摩訶迦葉(マカカシヤ)に

**しんいんぎん** 新印銀【名】正德年間に改鑄し、寶曆十年まで通用せし印銀。その一匁は三十六文(一に四十八文)に通用せり。

**しんいんぐわものがたり** 新因果物語【名】〔書〕『これより先、鈴木正三の因果物語あるによりていふ』ほんてうにじふかう(本朝二十不孝)を見よ。

**しんいんさう** 浸淫瘡・浸婬瘡【名】初はあせものの如く小さくして痒く、後に痛みて、流流いいて、肌を浸潤し、鬆に全身に擴がる瘡。しんみざう。伊呂波字類抄浸淫瘡(シンヤウ)

**しんいも** 新芋【名】その年に植ゑて、その年に收穫したる薩摩芋・里芋など。

**しんいり** 新入【名】しんさん(新參)に同じ。

**じん-う** 甚雨【名】おほあめ(大雨)に同じ。

**じん-う** 腎盂【名】〔醫〕『英 Pelvis』腎門の內方に存する腔所。腎細管より生ずる尿は、ここに集まりたる上、輸尿管によりて、膀胱に送らる。腎腔。腎盂。

**しんうすゆきものがたり** 新薄雪物語【名】淨瑠璃の一。寛永頃の假名草紙薄雪物語によりて作れるもの。互に相手の子と娘とを落しやりたる園都兵衛と幸崎伊賀守とが藍腹を切り、兵衛の妻梅の方と三人にて悲痛なる笑をなす。醜。三人笑と稱して、名あり、文耕堂・三好松洛・小出雲等合作。

**しん-うち** 心打・眞打【名】『心は中心の義、打はうつ(打つ)(英)を見よ』落語・講談などの一座の中にて、技倆最もすぐれ、一座の最後に出演する主腦者。しんとり。

**しん-うん** 進運【名】進みゆく機運。進みゆく世運。

**しん-えい** 眞影【名】まことのすがた。寫眞。

**しん-えい** 神影【名】神の影像。みえい。

**しん-えい** 宸影【名】天皇の御畫像。天皇の御寫眞。

**しん-えい** 心影【名】〔理〕ほんえい(本影)に同じ。

**しん-えい** 神裔【名】神の子孫。神の血統。「和歌。

**しん-えい** 神詠【名】神の詠みたりといふ

**じん-えい** 人影【名】人の姿。ひとかげ。

**しん-えう** 深奫【名】しんおう(深奥)に同じ。

**じん-えう** 心要【名】〔佛〕法門の極致。

**しん-えき** 津液【名】■津津とにじみ出づる液。■つぼき。唾液。

**しん-えき** 宸掖【名】『しんきん(宸襟)を見よ』きん又身(禁被)に同じ。

**しん-えき** 津驛【名】ふなつきば。みづうまや。水驛。

**しん-えき** 神易【名】神意によりて現るる「易。

**じん-えき** 尋繹【名】たづねしらぶること。調査し研究すること。

**しん-えつ** 親閱【名】親しく檢閱すること。

**しん-えふ** 新葉【名】新しく生じたる葉。わかば。嫩葉。

**しん-えふ** 心葉【名】こころば(心葉)に同じ。日本振袖始「錦のきせなが銀の心葉・鬢づらに取って附け」

**しん-えふ** 針葉・鍼葉【名】〔植〕針形の葉、卽ち松・杉などの葉。(闊葉に對して)

**じん-えふ** 腎葉【名】〔植〕腎臟形の葉。

**しん-えふ-じゅ** 針葉樹・鍼葉樹【名】〔植〕針葉を有する木の總稱。卽ち松・杉などの類(闊葉樹に對して)

**しん-えふ-じゅし** 針葉樹脂【名】〔植〕樹の脂。

**じん-えふ-すいば** 腎葉酸模【名】〔植〕まるばぎしぎしに同じ。

**しん-えふ-わかしふ** 新葉和歌集【名】〔書〕弘和元年宗良親王の撰みたまひし歌集。二十卷。元弘以後弘和まで、殆ど五十年間の歌を集めたるものにて、後龜山天皇、これを勅撰集に準ぜられたり。

**しん-えふ-わかしふ-さくしゃ-ふるゐ** 新葉和歌集作者部類【名】〔書〕新葉和歌集の作者を部類して、その略傳を揭げたるもの。一卷。神原忠夫の編。

**しん-えん** 親緣【名】■親類の緣。■近き

**しん-えん** 宸宴【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の御催しの酒宴。太平記、清涼殿にして、和歌の宸宴これありと雖も」

**じん-えん** 人烟・人煙【名】■人家の竈より立つ烟。炊煙。■人家。戶數。

**じん-えん** 腎炎【名】〔醫〕じんさうえん(腎臟炎)に同じ。

**しん-えんげき** 新演劇【名】■現代を寫實的に演ずる旨を標榜して起りたる芝居。新派劇。(舊演劇に對して)■新しき脚本によりて行ふ演劇。「略。

**しん-おほしま** 新大島・新大嶋【名】炎條の

**しん-おほしまおりす** 新大島紬・新大嶋紬【名】大島紬に似せて織りたる木綿まじりの織物。しんおほしま。

**しん-おほはん** 新大判【名】次條の略。

**しん-おほはんきん** 新大判金【名】■新に發行したる大判金。新大判。■まんえんおほはんきん(萬延大判金)に同じ。

**しん-おん** 神恩【名】しんげいん(神惠)に同じ。

**しん-おん** 新音【名】あらたなる音。新聲。

**しん-おん** 心音【名】〔醫〕『英 Sounds of heart』心臟の鼓動の音。心室の收縮期と同時に發する筋音と、半月瓣閉鎖の際に生ずる鼓音との二種ありて、心臟部に耳を觸れれば、前者は鈍くして長く、後者は清くして短く聞ゆ。

**しん-おん** 脣音【名】〔語〕■音韻學上、七音の一。柔音(ニウイン)には清音p・次清音p'(ph)・濁音b・次濁音b'(bh)・清濁音m の五種ありて、すべて破裂音なれど、支那には、P(字母は幫)・P'(字母は滂)・b(字母は並)・m(字母は明)の破裂音以外、なほ清音f(字母は非)・次清音f'(字母は敷)・濁音v(字母は奉)・清濁音m(字母は微)なる摩擦音の脣音あり。前者を脣音重、後者を脣音輕として區別す。■『英 Labial』齒音學上、氣息が兩脣の間を通過する時に生ずる破裂音。卽ち、ば行・ぱ行兩者の子音の類。また脣的鼻音なる、ま行の子音をも包含していふ。兩脣音。しんおんく(齒脣音)參照。

**じん-おん** 仁恩【名】仁を垂れ、恩を施すこと。なさけ。

**しん-おんめし** 新御召【名】御召紬鑑に似せて織りたる木綿まじりの織物。

**しん-か** 臣下【名】家來。臣。臣下といふものは、君の若くおはします御心のおろそかにおはします時こそはべれ」

**しん-か** 神歌【名】■かみうた(神歌)に同じ。■平安朝の末より鎌倉・室町時代頃まで存せし謠物の一種。■謠曲にて、翁の曲の稱。

**しん-か** 身恒【名】■身を價ふ代金。みのしろ。■技倆の價値。手腕の價値。

**しん-か** 新家【名】新に建築したる家。新屋。

**しん-か** 心下【名】〔醫〕しんくわ(心窩)に同じ。





**しん-か** 眞假【名】眞と假と。まことと、かり。

**しん-か** 眞價【名】眞實の價値。

**しん-か** 親家【名】しんるゐ(親類)に同じ。

**しん-か** 請假・請暇【名】〔佛〕『請は漢字の宋音・暫く暇を請ひて外出すること。(禪宗の語)』

**しん-が** 新芽【名】新しき芽。しんめ。

**しん-が** 神我【名】〔佛〕『我體常眞にして、靈妙なればいふ』外道所執の眞我。

**しん-が** 眞我【名】〔佛〕まことの我(ガ)。涅槃(ネハン)の我德。(妄我に對して)

**じん-か** 人家【名】人の住む家。井伊直弼「河邊人家の煙道絕えて、朝來一片の霞をのむ」

**しん-かい** 神階【名】朝廷より神に授くる位階又は勳位。位田を寄せらるるを例とせり。かみかうぶり。神位。

**しん-かい** 簽誡【名】いましめ。こころえ。

**しん-かい** 心界【名】心の範圍。心の世界。

**しん-かい** 身界【名】〔佛〕『界は分の意にて、佛の身分の義』ぶっこゆり(佛舍利)に同じ。

**しん-かい** 深海【名】■ふかき海。■(地)『英 Deep sea』海中の寒原より一層深度を增したる處。凡そ深さ二百メエトル以上を

**しん-かい** 申解【名】■申(ハ)ベ解くこと。いひわけ。■『皺排錄』に「有二屬路申解!到!省謁編!聖字・案吏指爲二不敬一」とあり』天子に地方の事狀を申し上ぐる書。

**しん-かい** 新戒【名】〔佛〕新に戒を受けて剃髮すること。 梁書世宗紀「新戒、シンカイ」

**しん-かい** 新開【名】新に開墾すること。又その土地。

**しん-かい** 信海【名】〔佛〕信心の功德の廣大無邊なるを海に譬へていふ語。

**しん-かい** 信海【名】〔人〕京都の淸水寺成就院の勸王僧。兄月照の後を繼ぎて、同院に住す。安政中、外船の事起るや、法を飾して、攘夷を祈り、事天聽に達し、叡感を與せしが、幕府に聞えて捕へられ、安政六年獄中に寂す。年三十九。

**しん-が** 津涯【名】水ぎは。きし。ふなつき。渚涯。

**しん-がい** 震駭【名】ふるひおどろくこと。

**しん-がい** 侵害【名】■をかしそこなふこと。■(法)他人の權利を無視して、その範圍內に踏入り、損害を蒙らしむること。

**じん-かい** 人界【名】人間の世界。にんがい。「じ。

**じん-かい** 滸涯【名】しんがい(津涯)に同

**しん-かい-がく** 心界學【名】せいしんぐわがく(精神科學)に同じ。(物界學に對して)

**しん-かい-ぎょ** 深海魚【名】〔動〕大洋の深所に棲息する魚類の總稱。例へば銀鮫・ばらむつあかうらめぬけ等の類。

**しん-かいせん** 深海線【名】海底電線の一種。深海に用ふるもの。(淺海線に對して)

**しん-かい-たいせき-そう** 深海堆積層【名】〔地〕深海の底に堆積して生ずる地層。

**しん-かい-ち** 新開地【名】■新に開墾したる土地。■新に開けたる市街地又は町村。

**しん-かい-めんをねんき** 新開免祖年期【名】〔法〕官有の水面を埋め立てて、民有としたる土地に許可する、五十箇年以內の免租年期。

**しん-かい** 深坑【名】底の深き穴。

**しん-かい** 深更【名】よふけ。深夜。 梁書「夜は深更になりぬ。人は、鳴をしづめたり」

**しん-かい** 深苔【名】奧深きまた。

**しん-かい** 深耕【名】田畑を深く耕すこと。

**しん-かい** 深交【名】ふかき交際。

**しん-かい** 進講【名】『講を進むる義』貴人のために、書を講ずること。御前講義。

**しん-かい** 神幸【名】神のいでますこと。神體を他所に遷し奉ること。 太平記「神幸に惡を成し奉る故なり」

**しん-かい** 神交【名】精神と精神との感應すること。

**しん-かい** 進行【名】すすみゆくこと。「迅。

**しん-かう** 信仰【名】■信じ尊ぶこと。尊信。■宗教上の客體を信ずること。宗教に歸依すること。信心。

**しん-かう** 信向【名】『漢書の韓延壽傳、後漢書の寇恂傳等に見ゆ』他人を信じ尊びて、その道に歸向すること。

**しん-かう** 親交【名】親しき交際。

**しん-かう** 親幸【名】親近して、寵愛すること。

**しん-かう** 親好【名】親しくして、仲の好き

**しん-がう** 信號【名】あひづの符號。合圖。

**しん-がう** 神號【名】神の名稱。 蜀志「關羽傳」羽主の名字なければ、髯馬にもあらず、神號ならねば、額共見えず」

**じん-がう** 深淺・深壕【名】ふかきほり。

**じん-かう** 仁孝【名】■仁慈と孝行と。■仁心ありて、孝行なること。「ど。

**じん-かう** 腎腔【名】〔醫〕じんさう(腎盂)に同

**じん-がう** 人豪【名】器量のすぐれたる人物。人傑。

**しん-がう-き** 信號機【名】列車の運轉に際し、危害の有無を知らしむる機械。種種あれども、構內信號機・構外信號機・出發信號機などに區別す。

**しん-がう-き** 信號旗【名】信號として用ふる見物席の一。東西の下機敷(ボックス)。外旅(ボックス)の次。「る旗。

**しん-がう-しん** 信仰心【名】信仰する心。信

**しん-かう-ていし** 進航停止【名】平時に海賊船の疑ある船舶、又は戰時に封鎖逆反禁制品輸送等の疑ある中立船、又は減船船が、敵船として捕獲すべきものにあらざるかを檢査するために、停船を命ずること。

**しん-かう-てつがく** 信仰哲學【名】『獨 Glaubensphilosophie』獨逸にて、啓蒙時代に於ける、理性を偏重する哲學の反動として、信仰に基きて、根本眞理を立てんとせし一派の哲學。その代表者は、第十八世紀末における獨逸のハマン(J. G. Hamann)・ヘルデル(J. G. Herder)・ヤコビ(F. H. Jacobi)など。

**しん-かうど** 眞高度【名】〔天〕『英 True altitude』地球の中心より見たる天像の高度。視高度に觀差及び淩氣差の加正を加へたるもの。

**しん-かう-はう** 信號報【名】船舶通報の一。船舶所有者、又はその代理人と船長との間に行はるる通信。特に指定する燈臺にて、その沿海を通過する船舶と、信號によりて受せらる。

**しん-がう-はうち** 信號報知【名】信號を用ひて報知すること。

**しん-がう-ふ** 信號夫【名】信號に從事せし海軍卒。明治十五年置かれ、同十七年廢せられたり。

**しん-がう-へい** 信號兵【名】信號に關する事務に從事する海軍卒。一等より五等まで階級あり。「しるし。

**しん-がう-へう** 信號標【名】信號に用ふる

**しん-がう-らっぱ** 信號喇叭【名】信號のために吹奏する喇叭。

**しん-がう-れう** 信號料【名】信號報の料金。

**しん-かき** 眞書【名】細字の楷書を書くに用ふる筆。しんかきふで。

**しん-かき-ふで** 新客【名】しんきゃく(新客)に同じ。「て。

**しん-かく** 新格【名】新しく定めたるおきて。

**しん-かく** 眞角【名】(かんし)能樂(ノウガク)の假面(ペルソナ)の一。「鐘馗」・「鬼」など用ふ。

**しん-かく** 眞覺【名】〔佛〕佛の究竟(クキヤウ)の覺悟。(相似覺・隨分覺に對して)「と。

**しん-かく** 審覈【名】くはしく取調ぶること。

**しん-がく** 秦樂【名】秦の歸化人の傳へたりといふ雅樂。

**しん-がく** 清樂【名】せいがく(淸樂)に同じ。

**しん-がく** 深窑【名】しんよう(深谷)に同じ。

**しん-がく** 進學【名】學問を勵まし進むること。

**しん-がく** 新學【名】■新しき學問。■〔佛〕(ハ)ちの新發意に同じ。

**しん-がく** 新樂【名】■あたらしき音樂。■支那隋・唐の代の音樂。(古樂に對して)

**じん-がく** 晨嶽・晨岳【名】『晨は朝日の出づる方。即ち東の義』東方の山。『書記「日、晨岳に出づれば、龍樓・竹園の共しき興を忘れず」

**じん-がく** 心學【名】【一】心より學ぶこと。【二】享保年中に、石田梅巖の創めたる通俗なる道德說。陽明學を基とし、神道・儒道の教旨を融化して、平易に說きたるもの。天明中、手島堵庵・中澤道二により、盛んに行はるるに至れり。道話。道學。

**じん-がく** 神學【名】『英Theology』【一】神を、組織的に研究する科學。【二】〔基〕キリスト教を組織的に研究する科學。

**じん-がく** 人格【名】【一】人がら。人品。【二】〔哲〕『英Person又Personality』意識の、內容は時時變化するに拘らず、智的又は感情により統一せられ、道德上、責任ある行動をなす個體。じが〈自我〉參照。【三】〔法〕『英Person又Personality』各人が社會の一分子として、從すべからざる自由・自存・獨立の目的を達し得る權利の主體。

人格の障害【句】〔哲〕『英Disorders of personality』記憶の連續及び人格統一の意識の、多少從害・破壞せられたる狀態。

人格の分裂【句】〔哲〕『英Division of personality』『自我の分裂』に同じ。

人格の變換【句】〔哲〕『英Alternation of personality』人格の障害の一。一定時期の間と他の一定時期の間との意識又は精神流動の狀態の全く相異なりて、これらの二時期の交互に起ること。自我の變換。

**じん-がくかう** 神學校【名】『英Theological seminary』神學を教授する學校。

**じんかく-くわ** 人格化【名】〔哲〕『英Personification』人間以外の事物に、人格の特性中の或物、若しくは、その全部を歸すること。人類以外の事物を、人類の如く情意あるものと見做すこと。

**じんかく-けん** 人格權【名】〔法〕『獨Persönlichkeitsrecht』人身權の一。自己の人格に伴ふもの。生命權・身體權・自由權・名譽權・氏名權・肖像權に分つ。各その條を見よ。

**じんかく-さりつ** 人格差律【名】『英Personal equation』【一】〔天〕天文の觀察の際、人人によりて、時間の計定に一定の差誤あること。【二】〔哲〕個人の性癖又は特殊性に基いて、觀察したる結果と意識の事實とに差異あること。

**じんかく-しんけう** 人格神教【名】〔哲〕『英Personal religion』人格の性質を有するさま。

**じんかく-せい** 人格性【名】〔哲〕『英Personality』人格の有する屬性、即ち理性・自己意識・自己決定の類。

**じんかく-せつ** 人格說【名】〔哲〕『英Personalism』すべてを人格的に解して、あらゆる現實體は、人格性を有すと說く學說。スエデンのボストレェム(Boström)の說のごとき、これなり。

**じんかく-てき** 人格的【副】〔哲〕『英Personal』人格の性質を有するさま。

**じんかげ-りう** 神陰流【名】上泉秀綱を祖とする劍法の一派。

**しんかげ-りう** 新陰流【名】柳生(やぎう)宗嚴(むねよし)より出でたる劍法の一派。

**しんかげ-りう** 眞陰流【名】天野忠久を祖とする劍法の一派。

**しんか-じしや** 請客侍者【名】〔佛〕『じんかは請客の宋音』禪寺にて、住持の私客に接待する役僧。

**しん-かせうき** 新可笑記【名】〔書〕『これより先、知伽子の可笑記あるによりて名づく』武道傳來記・武家義理物語と同じく、士人の心掛となるべき小話を記したるもの。五卷。井原西鶴の著。

**しん-がた** 新形【名】新しき樣式を具へたるもの。

**しん-かたかな** 眞片假名【名】樗書の漢字に片假名を交へたる書法。「ること。

**しん-かだり** 心語・眞語【名】心打(こうだ)の語

**しん-たう** 澤河鳥・澁河鳥【名】しんかたう澤鳥(しんたう)に同じ。

**しん-か-でん** 神嘉殿【名】宮中にて、神嘗の神を祭る所。古は大內裡の中和殿の正殿をいへり。

**しん-かは** 新川【名】〔地〕東京市京橋區霊巖島の一部。摂津國灘(なだ)の酒を賣捌く酒問屋多く住せり。傳慶・新川は上戸の建て





**じん-かん** 甚寒【名】甚だしく寒きこと。凄寒。

**しんかん-しよ** 新刊書【名】新刊の書物。新刊物。

**しんかん-もの** 新刊物【名】前條に同じ。

**じんがめ-あわ** じんがめ鯰【名】〔動〕じんあわ〈鯰鯰〉に同じ。

**しん-から** 心から【副】こころから。心のそこから、底から【句】心底(しんそこ)から。しんから。

**しん-がら** 新柄【名】新なるがら。今までになきがら。

**しんがり** 殿・尻狩【名】【一】一軍の退く時、列の最後にありて、追及する敵を防ぐこと、又その軍隊。しづばらひ。殿後。最殿。事のあとおさへ。おさへ。しりおし。【二】

**しんがり-いくさ** 殿軍【名】後軍に居りて戰ふこと。「つ軍隊。

**しんがり-ぞなへ** 殿備【名】陣の最後に立

**しん-き** 心悸【名】〔醫〕左胸廓前面第五肋間の一小部、乳腺の內方に起る運動。心臟の運動により誘起せるものにして、觸知また目擊するを得。俗に、動悸といふ。心搏。

**しん-き** 心鬼【名】「心の鬼」に同じ。

**しん-き** 心機【名】心の發動。心のはずみ。心のはたらき。

心機一轉【句】心がはりす。心のはたらきの轉換。

**しん-き** 振氣【名】元氣を振ひ興すこと。

**しん-き** 神奇【名】人間業以上にて、奇妙なること。靈妙不可思議なること。

**しん-き** 神器【名】【一】神を祭る器具。【二】じんぎ〈神器〉を見よ。【三】『文選王命論の呂尙の註に「神器帝位也」とあり』天子の位。帝位。

**しん-き** 振起【名】ふるひ起すこと。ふるひ起ること。さかんになること。

**しん-き** 蜃氣【名】蜃(ハマグリ)の吐く氣。しんきろう〈蜃氣樓〉參照。太平廣記「蜃氣忽ちに乾達婆城を吐出せるかと怪しまる」

**しん-き** 晨起【名】朝早く起くること。はやおき。早起。

**しん-き** 箴規【名】いましむること。「箴諫。規戒。

**しん-き** 識危【名】馬の旋毛(つむじ)の一。馬の前肩の下にあるもの。

**しん-き** 晨暉【名】朝の日光。あさひ。朝暉。

**しん-き** 神幾【名】靈妙なるはたらき。測り知るべからざる機略。

**しん-き** 神鬼【名】きしん〈鬼神〉に同じ。

**しん-き** 神氣【名】【一】天地間の萬物を組成する原氣。【二】不思議なる運氣。【三】物事の說明すべからざる趣。韻致。【四】精神と氣象と。【五】こころろ。精神。

**しん-き** 神龜【名】不思議なる龜。卜占に用ふる龜。津岡安夫遊「古の伏羲氏の天下に王たる時、神龜・龍馬出現せしより」

**しん-き** 神龜【名】聖武天皇の御代の年號(紀元一三八四年—一三八八年)。

**しん-き** 新規【名】【一】新なる規則。【二】新しきこと。

新規蒔直し【句】さっぱりと、新たに初より蒔直すこと。

**しん-き** 心氣【名】【一】こころもち。きもち。精神。神氣。【二】心のはれやかならぬこと。もだえしれること。しんく。陰氣。怨鬱(うつ)。「辛氣」女武王人男「ええ、齋摩や辛氣や、と頭を擡いてぞ留りける」【三】しんきびやう〈心氣病〉の略。建寶往來「心氣・腹病・虛勞」

**しん-き** 心氣・心機【名】心沛きたつこと。くく惱む。重修子女子「さて、辛氣がわく」

心氣を碎く【句】種種心を勞す。種種心配す。蘆象鱗「あらぬ女の眞似をして、五年・七年しんきを碎くも、大事を思ひ立つたる故」

心氣を燃やす・辛氣を燃やす【句】じれったく思ふ。生主心中「辛氣もやして待つ背に」

**しん-き** 新奇【名】新しく珍しきこと。

**しん-き** 新禧【名】新年のよろこび。新年の祝賀。

**しん-き** 信義【名】【一】信と義と。【二】人の行ふべきまことの道。まことの筋道を守ること。

**しん-き** 心木【名】【一】心棒となる木。【二】活動の中心となるもの。

**しん-き** 身木【名】みき〈身木〉に同じ。

**しん-き** 眞義【名】まことの意義。

**しん-き** 清規【名】〔佛〕『漢字の宋音』禪宗における寺院と僧侶との法規。

**しん-き** 新義【名】【一】新しき意義。新しき見解。【二】〔佛〕眞言宗中、根來(ねごろ)の僧覺鑁(かくばん)の教義を奉ずる一派。新義眞言宗〈古義に對して〉しんぎは〈新義派〉參照。

**しん-き** 新儀【名】あらたなる儀典。あたらしき禮。

**しん-き** 宸儀【名】『しんきん〈宸襟〉を見よ』天子の御身。天子。平家「宸儀南殿に出御して、近衛殿下に陣を引き」

**じん-き** 辭宜・辭義【名】じき〈辭宜〉の訛。曾我物語「何となきじんぎにいひなして靜まりぬ」

**しん-ぎ** 眞僞【名】まことと、いつはりと。

**しん-ぎ** 信疑【名】信ずると、うたがふと。信ずべきことと、疑ふべきこと。

**しん-ぎ** 審議【名】つまびらかに議すること。委しき相談。

**じん-き** 人氣【名】世間又は或地方一般の景氣又は氣風。にんき。

**じん-ぎ** 神器【名】【一】神より受傳へ來たる寶物。【二】矢條の略。

三種の神器【句】我が國にて、天孫降臨の時、天照大神の手づから授けたまひしより後、代代の天皇の繼承したまふ三箇の寶器。即ち八咫(やた)鏡・天叢雲劍・八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)の併稱。各その條を見よ。

三種(さんしゅ)の神寶(さんぢんの)

**じん-ぎ** 腱儀【名】はなむけ。餞別。

**じん-ぎ** 神祇【名】天つ神と國つ神と。天神と地祇と。盛衰記「神祇の威光たのもしや」

**神祇・釋教・戀・無常**【句】『勅選和歌集の分類より起りたる語』神と佛と戀愛と無常と。世の中に起る種種の事相を總括していふ語。心中及は冰の別旦・鬱草の種うゑんとて固めしは、神か佛の堂鳥を：法華長屋の名を立てて神祇・釋教戀無常、中にこめたる中町や」

**神祇の家**【句】神祇の事を掌る家柄の家。吉田・白川・萩原三家の稱。

**じん-ぎ** 仁義【名】【一】仁と義と。【二】道德。道義。徒然「君子に仁義あり。信に法あり」

**しん-ぎ-あへ** 新茄和【名】料理の一。茄子をあへたる食品。しんこあへ。

**しん-きう** 賑救・振救【名】にぎはしすくふこと。賑恤。「きこと。

**しん-きう** 眞舊【名】まことにて、且つふるきと。新古。【五】新曆と舊曆と。太陽曆と太陰曆と。

**しん-きう** 親舊【名】親戚と故舊と。

**しん-きう** 申救【名】種種に いひなだむること。

**しん-きう** 審糺・審糾【名】つまびらかに問ひただすこと。「ること。

**しん-きう** 審究【名】つまびらかに研究す

**しん-きう** 鍼灸【名】はりときうと。鍼治と灸點と。

**しん-きう** 神丘【名】『莊子に「鼷鼠深穴乎神丘之下」以遺「蓋鑿之患」とあり』神を祭りてある丘。

**じん-きう** 尋究【名】たづねきはむること。

**じん-きう-でん** 賑救田【名】王朝時代に、窮民の賑救にあてし田。

**しん-きう-しん-しやう** 心悸亢進症【名】〔醫〕官能的心臟病の一種。即ち俗に動悸の激しく打つ病。

**じん-きう-うしよう** 神器考證【名】〔書〕三種の神器を詳かに考證せるもの。二卷。栗田寬の著。

**しん-きかく** 晉其角【名】〔人〕えのもときかく〈機本其角〉を見よ。

**しん-きく** 審鞫・審鞫【名】罪狀をつまびらかに糺問すること。

**じん-きく** 訊鞫・訊鞫【名】きくじん〈鞫訊〉に同じ。

**しん-きく-さい** 心氣臭し【形ク】心浮たた





た藏ばかり」

**しん-がひ** 眞貝【名】〔動〕あこやがひ〈阿古屋貝〉に同じ。

眞貝の玉【句】あこやだまを〈阿古屋玉〉に同じ。

**しん-かふ** 親狎【名】したしみ狎(な)るること。「略。

**しん-かふ** 新甲【名】しんかぶきん〈新甲金〉の

**しん-かふ** 新株【名】株式會社又は株式合資會社が、その資本を增加する場合に、新に募集する株式又は株券。これを募集する場合には、舊株の所有者に、これを引受く優先權を認むべきものとす。こかぶ〈舊株に對して〉

**しん-かふ** 蜃蛤【名】〔動〕はまぐり〈蛤〉に同

**しん-かふ-おち** 新株落【名】〔商〕しんかぶはいたうけんおち〈新株配當權落〉に同じ。

**しん-かふきじふはちばん** 新歌舞伎十八番【名】俳優市川團十郎の七代・九代の當藝(ハマリ)を選みて名づけたるもの。十八番と稱すれども、實は十八番以上あり。即ち虎の卷・荏柄問答・地震加藤・高時・酒井の太鼓・文覺勸進帳・紅葉狩・大森彦七・吉備大臣・重盛諫言・釣狐・伸光・山伏・摺侍・伊勢三郎・敵浪・左小刀・素襖落・鎧・獅子・新七つ面・二人袴・吹取婆等は著名なるものにして尙油坊主・中山問答など數多あり。

**しん-かふきん** 新甲金【名】元祿以後の甲州金、即ち甲安金・中金・甲重金・甲定金の類。新甲。

**しん-かふけん** 新株券【名】〔商〕新株に對して發行する株券。

**しんかふ-つき** 新株附【名】〔商〕しんかぶはいたうつき〈新株配當附〉に同じ。

**しん-かふぬし** 新株主【名】新株の所有主。

**しんかふ-はいたうけんおち** 新株配當權落【名】〔商〕株券の定期實買にて、賣方が新株の配當を受くべき權利を自己に留保して、買方に讓り渡さざること。新株落。〈取引所の語〉

**しんかふ-はいたうつき** 新株配當付【名】〔商〕株券の定期實買にて、舊株に對して、賣方が、その株に附屬せる新株の配當を受くる權利をも、買方に讓り渡すこと。新株附。〈取引所の語〉

**しん-かべ** 眞壁【名】普通の家にある土壁。「の壁。

**しん-ぶは** 新顔【名】新に加入せる人。

**しんかま-つき** 眞鎌樗【名】〔建〕鎌手の一法。土臺桁などの如く、その下に支承物ある時に用ふるもの。

**しん-かん** 宸襟【名】しんきん〈宸襟〉を見よ』天皇のみそなはすこと。

**しん-かん** 宸輪【名】『しんきん〈宸襟〉を見よ』天皇の書きたまへる文書。宸筆。右大將條會眞記「渡子鳥跡は都に殘れども身は松山に雲をのみぞなく、と御宸翰を染められ」

**しん-かん** 震撼【名】ふるひうごかすこと。ふるひうごくこと。

**しんかん** 辰韓【名】〔地〕三韓の一。今の慶尙南道の東北部に占據せしものの如く、その一部より興りたる新羅國に滅ぎる。

**しん-かん** 神鑒【名】神の照鑒。平家「志のいたり、神鑒、空(クウ)にあり」

**しん-かん** 身幹【名】からだ。軀幹。身軀。

**しん-かん** 辛艱【名】つらくなやむこと。

**しん-かん** 審勘【名】つまびらかに考ふること。勘審。

**しん-かん** 神感【名】神の感應すること。

**しん-かん** 心肝【名】【一】心臟と肝臟と。【二】こころ。きもだま。重修子「御親子の御懇意心肝を披(ヒラ)く【句】心中をうちあく。肝膽を披瀝す。

**しん-かん** 箋諫【名】いましめ。いさめ。

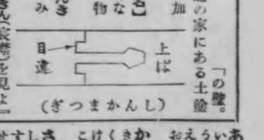
**しん-かん** 新刊【名】新なる出版。新版。

**しん-かん** 深閑・森閑【副】物音聞えず、さびしきさま。しん。ひっそり。

**しん-かん** 眞贋【名】ほんものとにせもの。眞物と贋物。

**しん-がん** 神龕【名】ほこら。神殿。

**しん-がん** 心眼【名】形示上の事物を辨別する心の働。眞理・趣味などを見わけ味ふ力。(角眼に對して)



(ぎつまかんし)

**しんかび**

**しんかい**

**しんかく**

**しんかん**

**しんぎ**

**じんぎ**

**じんかん**

ず。くさくさとしてあり。

**じんぎ-ぐみ** 神祇組【名】江戸時代の男伊達の一。旗本水野十郎左衛門を首領とし、部下もまた多くは旗本奴なりき。

**しんき-くわせいがん** 新期火成岩【名】〔鑛〕くるさんがん(火山岩)に同じ。

**じんぎ-くわん** 神祇官【名】Ⅰ古、太政官の上に位し、伯(ハク)・副(スケ)・祐(ユウ)・史(ヒトツ)の四部官及び神部(カンベ)・卜部(ウラベ)・使部(ツカヒベ)・直丁(ヒタヨボロ)等の職員ありて、祭祀を掌り、全國の神職を總轄せし官廳。即ち太政官と並びて、祭政の二事を分掌せしもの。かみづかさ。かむづかさ。Ⅱ明治元年設置の七官の一。知官事・副知官事・權判官事・書記の職員ありて、神祇・祭祀・祝部(ハフリ)・神部(カンベ)を總管せしもの。同二年太政官の上に列し、伯・大副・少副・大祐・權大祐・少祐・權少祐・大史・權大史・少史・權少史・史生官掌の職員を置かれて、祭典・諸陵・宣教・祝部・神部を管掌することとなり、四年神祇省と改稱せられ、各官と共に、太政官の下に列することとなれり。

神祇官の八神【句】古、神祇官の八神殿に祀りし八柱の神。はっしんでん(八神殿)参照。

**じんぎくわん-ねんちゆうぎやうじ** 神祇官年中行事【名】〔書〕正月より十二月までの間における諸社の祭禮・神馬・神饌等の事を記せるもの。一卷。著書詳かならず。

**しん-きさみ** 眞刻【名】烟草などを、正しく細かく刻むこと、又その刻み方の物。

**しんぎしう** 新義州【名】〔地〕朝鮮平安北道義州郡に在る都會。鴨綠江の左岸にありて、安東縣と相對す。京城の西北十二里。

**じんぎ-じむかかり** 神祇事務掛【名】神祇事務課の職員。參與職を以て補し、課務を處れす。

**じんぎ-じむきよく** 神祇事務局【名】明治元年設置の八局の一。實(ジツ)・補(ホ)・權補・判事・權判事・書記の職員あり、神祇・祭祀・祝部(ハフリ)・神部(カンベ)の事を掌りし所。同年閏四月廢止、神祇官これに代れり。

**じんぎ-じむくわ** 神祇事務課【名】明治元年に設置せられし七課の一。神祇・祭祀・祝部・神戸の事を掌りしもの。翌年廢止せられたり。

**じんぎ-じむそうとく** 神祇事務總督【名】神祇事務課の長官。議定職を以て補し、事務を統轄せしもの。

**しんぎ-しんこんしゆう** 新義眞言宗【名】〔佛〕新義派に屬する眞言宗。(古義眞言宗に對して)しんぎは(新義派)参照。

**しんき-しやう** 心氣症【名】〔醫〕ひぽこんどりいに同じ。

**じんぎ-しやう** 神祇省【名】明治四年神祇官を改稱せし中央官廳。卿・大輔・少輔・大丞・少丞・大錄・權大錄・中錄・權中錄・少錄・權少錄・宣教・教長官・宣教大官・宣教判官・宣教權判官・大掌典・中掌典・少掌典・大神部・中神部・少神部の職員ありて、祭祀・諸社・宣教・祝部(ハフリ)・神戸(ヘ)に關すること を掌りしが、同五年廢止、教部省これに代れり。

**じんぎ-だて** 仁義立【名】親切らしき風を裝ふこと。

**しんき-きりく** 新機軸【名】新しき機軸。新規。「なる方法。

**しんぎ-ちざんは** 新義智山派【名】〔佛〕しんぎは(新義派)を見よ。

**しんき-きつ** 新木津【名】〔地〕山城國相樂(ソウ)郡に在る地。關西鐵道接ノ宮線の一驛。

**しんきつ-れう** 奏吉了【名】〔動〕きうくわんてう(九官鳥)に同じ。

**じんき-とり** 人氣取【名】人望を得んとする方法、又その方法に巧みなる人。にんきとり。

**しんきなく** 心氣泣【名】こころ亂して泣くこと。五十年忌歌舞伎「これほど思ひ合うた中、なぜに女夫(ウフ)になられぬと、しんきなく泣きなんだる」

**しん-きぬ** 新絹【名】その年に、新に取りたる絲にて織りたる絹。

**じんぎ-の-かみ** 神祇伯【名】しんぎはく(神祇伯)に同じ。

**しんぎ-は** 新義派【名】〔佛〕眞言宗中、新義の學說、即ち根來(ネゴロ)の僧覺鑁(カクバン)の所說を遵率する一派。豐臣氏の兵火に罹りて後、更に二分派を生じ、大和國なる豐山(ブザン)派と紀谷寺(ダニデラ)に立籠りし學僧は、豐山派の祖となり、京都大佛の一隅に智積(チシヤク)院を起しし玄宥は、智山派の祖となり、明治三十三年眞言宗各派分立以來、共に一派を公稱して、各自の管長を戴くに至り、根來は祖廟の地として、單に總本山の空名を有するのみ。(古義派に對して)

**じんぎ-はく** 神祇伯【名】古の神祇官の長官。かみづかさのかみ。かむつかさのかみ。

**しんき-びやう** 心氣病【名】〔醫〕ひぽこんどりいに同じ。

**しん-きふ** 審級【名】〔法〕訴訟に對する審理の繫屬すべき裁判所の階級。例へば第一審・第二審・第三審の類。

**しん-きふ** 進級【名】等級又は學級の進むこと。惠み與ふること。Ⅱしんどふ(賑給)を見よ。

**じん-きふ** 迅急【名】早くしてはげしきこと。速かなること。迅速。

**じんぎ-ふくろ** 仁義袋【名】〔薬俗〕袋の義か。はかまく(袴)を云ふ。(信濃國木曾の方言)

**しんぎは-ちざんは** 新義豐山派【名】〔佛〕しんぎは(新義派)を見よ。

**しんきふ-し** 賑給使【名】しんどふし(賑給使)を見よ。

**しんきふ-ていねん** 進級停年【名】じつえきていねん(實役停年)に同じ。

**しんきふ-でん** 賑給田【名】しんどふでん(賑給田)を見よ。

**しん-きん** 眞金【名】純粹の黃金。眞實の黃金。「金。

**しん-きん** 新金【名】Ⅰ新たに發行したる金貨。(古金に對して)Ⅱまんえんきん(萬延金)に同じ。

**しん-きん** 嚫金【名】布施(ウ)の金。節用集「嚫金。布施也。嚫施也」

**しん-きん** 親近【名】Ⅰしたしみ近づくること。Ⅱ側近く召使ふ親しき家來。

**しん-きん** 慎謹【名】きんしん(謹慎)に同じ。

**しん-きん** 神筋【名】手象部にある筋肉。

**しん-きん** 辛勤【名】つらきつとめ。

**しん-きん** 神襟【名】神の思召。陛下の思召。

**しんきん** 宸襟【名】Ⅰ品字箋に「宸、室之深奥者、又帝居曰宸、取北辰之義(加し)象宮室也、又宸廳宸衷、宸翰宸遊等、不敢直指一至尊、稱其居也」とあり。天皇の御心。おほみごころ。叡慮。太平記君の宸襟を休め奉りたる者は」

**しん-きん** 岑寂【名】極めてけはしき峰。

**しん-きん** 呻吟【名】うなること。うめくこと。うめき。

**しん-きん** 新銀【名】新に發行したる銀貨。(古銀に對して)吉野都女無「いや義貞が二人あるものか、新銀・古銀同じ通用」女殺油地獄「このうちかひに新銀五百八十匁」

**しんきん-えん** 心筋炎【名】〔醫〕心臟の壁をなせる筋肉層の炎症。

**しんきん-おほはん** 新金大判【名】きやうはうおほはんきん(享保大判金)に同じ。(古金大判に對して)

**しん-きんぎん** 新金銀【名】新に發行したる金銀貨。(古金銀に對して)

**しんきん-るゐ** 眞菌類【名】〔植〕菌類の一部。普通の黴菌といふ。

**じんぎ-もの** 仁義者【名】なさけ深き人。博愛者。

**しん-きやう** 侵境【名】他國におかし入ること。

**しん-きやう** 進境【名】進む地位。すすみたること。

**しん-きやう** 親兄【名】しんけい(親兄)に同じ。(薩摩・鹿兒島「我が君、親兄(シンケイ)の禮を重んじたまひ」

**しん-きやう** 新京【名】あらたなる都。(古京に對して)(後漢書「王光る下光る新京朱雀のしだりやなぎ」

**しん-きやう** 神饌【名】酒食を供へて神を祭ること。(盛衰記「去る十一日に、神祇官にして神饌あり」

**しん-きやう** 震驚【名】振驚。振駭(ガイ)ふるひ驚くこと。震駭。震恐。

**しん-きやう** 神鏡【名】Ⅰ神前に立てある鏡。神の鏡。Ⅱわたのかがみ(八咫鏡)に同じ。

**しん-きやう** 心鏡【名】心の萬象を寫すを、





鏡に譬へていふ語。

**しん-きやう** 新居【名】あたらしきすまひ。(舊居に對して)

**しん-きよ** 侵漁【名】Ⅰ他の領域に侵入して、魚を捕ふること。Ⅱおかしかすむること。「と。

**しん-きよ** 寢御【名】天子の寢ねたまふこと。

**しん-きよ** 進御【名】天子の進み出でたまふこと。いでまし。おでまし。

**じん-きよ** 腎虛【名】〔醫〕精液の盡きたるより起る病。陰虛。邪婦仁玉傳「腎虛」

**しん-きよ** 心胸【名】むね。こころ。

**しん-きよう** 震恐・振恐【名】ふるひおそれること。震驚。

**しん-きよう** 申供【名】まうしのぶること。陳述。供述。

**しん-きよう** 神興【名】〔哲〕れいきん(靈感)

**しん-きよく** 宸極【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天子の位。帝位。

**しん-きよく** 新曲【名】新しく作りたる曲。(芸曲に對して)「まぐま。

**しん-きよく** 心曲【名】心中の委曲。心のく

**しん-きよみづ** 新清水【名】きよみづでら(清水寺)に同じ。

**しん-きり** 心切・心剪【名】蠟燭の燃えさかるを剪み切る具。しんきりばさみ。燭切。

**しん-ぎり** 新切【名】甘鹽にして、輕く日に乾したる魚肉。(鰺(アジ)の新切)

**しん-ぎりしやしき** 新希臘式【名】〔美〕『英 Neo-Greek style』古代希臘の藝術の樣式を復興して、近代の思想・感情を表現せんとする藝術。第十八世末より第十九世紀にかけて、歐洲に流行せり。

**しんきり-ばさみ** 心切鋏・心剪鋏【名】しんきり(心切)に同じ。

**しん-きろう** 脣氣樓【名】〔理〕『蜃は、蛤なりとも、蛟の屬にて、形龍蛇に似たりともいひ、その物の吐きたる氣の樓臺・城郭となりて見ゆとて呼びし名』海邊又は沙漠等にて、空氣の密度均しからざるがために生ずる光線の屈折又は全反射作用に由りて、遠方の地物又は船舶の空中に浮びて見ゆる現象。かひやぐら。きつねだな。なごのわたり。海市。具樓。蜃樓。空中樓閣。乾闥婆(ケンダツバ)城。

**しん-く** 辛苦【名】くるしみ。なんぎ。苦楚。

**しん-く** 深紅・眞紅【名】極めて濃きくれなゐ色。まあか。曾我會稽山「眞紅の總打たるは鎧の總卷」

**しん-く** 震懼【名】ふるひ懼るること。

**しん-く** 身軀【名】からだ。身體。

**しん-く** 親句【名】〔文〕佛語逆句附方の一。前の句の言語に因みて附くる句。(疎句に對して)

**しん-く** 氣の鬱すること。うるさきこと。長唄女團扇「しんくな仕事でござりんす」

**しん-く** 寢具【名】寢ぬる時の道具、即ち夜具・布團・祇など。ねだうぐ。臥具。

**じん-く** 甚句・甚九【名】『謠ひ初めし人の名より出づとも、神供(クウ)の歌より出て、その轉訛なりともいふ』俗謠の一。歌は、都都逸(ドドイツ)などと同じく、七音・七音・七音・五音の四句より成り、調子は、地方によりて、同じからず。木更津甚句・米山(ヨネヤマ)甚句・名古屋甚句・相撲(スモウ)甚句などあり。

**じん-く** 神供【名】Ⅰ神に供ふる供物。Ⅱ〔佛〕護摩の時、道場外に別に壇を設けて、十二天並びに職・野の諸鬼神を祭ること。

**しん-く-いしふ** 身口意【名】〔佛〕次條に同じ。

**しん-く-いしやう** 身口意業【名】〔佛〕身と口と意との業。身口意。三業(サンゴウ)。相城酒合童子「心に思ひ、身に忍び、口に戀しと焦るるも、身口意業の三どふの」

**しん-くう** 眞空【名】Ⅰ〔理〕『英 Vacuum』エテテルと名づくる一種の想像上の氣體の外は、何もなき空間。空氣の存在せざる空虛。Ⅱ〔佛〕諸法の眞相の眞實に空なること。

**しん-くう** 神通【名】Ⅰ時代又は方處を隔てたる人の精神の、不思議に一致すること。Ⅱ珍しきめぐりあはせ。

**しん-くう** 新宮【名】本宮より新に神靈を分ちて祀れる神社。いまみや。

**しんぐう** 新宮【名】〔地〕紀伊國東牟婁(ムロ)郡にある町。熊野川の河口に位し、熊野三山の一なる新宮權現あり、南紀第一の市場なり。水野氏の舊落地。「同じ。

**じん-くう** 人空【名】〔佛〕がくう(我空)に

**じん-くう** 神宮【名】Ⅰ神の御宮。しんきゆう。Ⅱいせだいじんぐう(伊勢大神宮)の略。Ⅲ官幣大社の中にて、特に尊崇する神社の稱。熱田神宮・橿原神宮の類。

**じん-くう** 神供【名】じんく(神供)に同じ。

**じんぐう-かいかふ** 神宮開園【名】室町幕府の職制の一。伊勢內外兩宮に關する事務を專掌せしもの。

**じんぐう-がは** 新宮川【名】〔地〕くまのがは(熊野川)に同じ。

**じんぐう-かんべしよ** 神宮神部署【名】かんべしよ(神部署)に同じ。

**じんぐう-きねんさい** 神宮祈年祭【名】伊勢大神宮にて、年穀の豐穣を祈らるる祭典。上古は、毎年二月十二日に行はれ、後、九日に改められ、明治維新後十七日に定められ、當日勅使參向して、幣帛を献ず。じんぐうとしごひまつり。もとごひまつり(祈年祭)参照。

**じんぐう-くわうがくくわん** 神宮皇學館【名】神宮司廳の下にありて、皇國の道義を講じ、國典を教授する官立學校。本科・專科・選修科の三科を置く。伊勢國宇治山田市に在り。

**しんぐう-くわん** 眞空管【名】〔理〕『英 Vacuum tube』治と眞空に等しきほどの極薄(氣壓二ミリメートル以下)なる氣體の存留せる硝子管。例へばガイスレル管・クルウラス管・レントゲン管の類。

**しんぐう-けい** 眞空計【名】〔理〕『英 Vacuum gauge』眞空內の氣壓を測るに用ふる壓力計。

**じんぐう-けう** 神宮教【名】神道の一派。天照大神を主神として、皇祖の遺訓を奉じ、國體を講明して、風教を益するにあり。明治三十二年宗教の管轄を脫し、神宮奉齋會を組織せり。

**しんくう-けっしやうくわん** 眞空結晶罐 【名】『英 Vacuum crystallizer』眞空を利用して、砂糖を結晶せしむるに用ふ汽罐。

**じんぐう-じんげん** 神宮權現 【名】くまのはやたまじんじゃ(熊野速玉神社)に同じ。

**じんぐう-じ** 神宮寺 【名】古、神社に附屬せし寺院。本地垂跡(ホンヂスイジャク)の說によりて寺内に神を祀り、又、神社内に神宮寺を立つ。明治維新の際、神佛分離の事ありてより廢せり。この僧を社僧と呼びたり。みやでら。神宮院。神供寺。神願寺。神護寺。

**じんぐうじ** 神宮寺 【名】〔地〕羽後國仙北(センボク)郡にある町。御物(オモノ)川の北岸。大曲(オホマガリ)町の西北四里。奥羽線の一驛。戊辰の古戰場。

**じんぐう-しちやう** 神宮司廳 【名】伊勢大神宮の祭祀を司る所。祭主(皇族これに補せらる)以下、大宮司・少宮司・禰宜(ネギ)・權禰宜・宮掌(ナカヅカサ)等、これに屬す。

**じんぐう-じやうけい** 神宮上卿 【名】じんぐうてんそう(神宮傳奏)の舊稱。

**じんぐうじ やくしこう** 神宮寺藥師講 【名】摂津國住吉社の北なる神宮寺にて、正月八日に行ひし會式(ヱシキ)。

**じんぐう-じようはつくわん** 眞空蒸發罐 【名】『英 Vacuum evaporator』砂糖製造の際、蔗汁の濃厚ならしむるために、眞空を利用して、水分を蒸發せしむる汽罐。

(しんくうはつじようくわん)

**じんぐう-てんそう** 神宮傳奏 【名】昔、公卿の中より選ばれて、伊勢神宮の事を奉仕・執奏せし職。舊稱、神宮上卿。

**じんぐう-とうにん** 神宮頒人 【名】室町時代、伊勢大神宮の事を掌りし職。神宮奉行。

**じんぐう-とじびまつり** 神宮斬年祭 【名】じんぐうきねんさい(神宮斬年祭)に同じ。

**じんぐう-とりゐ** 神宮鳥居 【名】紋所の一。輪の中に鳥居を描きたるもの。

**しんくう-はうでん** 眞空放電 【名】〔理〕『英 Vacuum discharge』稀薄なる氣體中に於ける放電。眞空管を用ひて行ふ。管内に電流を通ずれば、管内の氣體の種類に依り、その氣體特有の種種の色の光を發し、また稀薄の度合に依りて、發光の模樣を異にす。

**じんぐうばらひ** 神供祓 【名】じんぐうばらひ(神供祓)に同じ。

**じんぐう-へい** 神宮幣 【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(じんぐうへい)

**しんぐう-まつり** 神宮祭 【名】三井寺の山中にある新經(ヘグリ)明神の祭禮。五月五日に行はる。

**じんぐう-ねん** 神宮院 【名】じんぐうじ(神宮寺)に同じ。

**じんぐう-ぶぎやう** 神宮奉行 【名】じんぐうとうにん(神宮頒人)に同じ。

**じんぐう-ぶじやう** 神宮衛士 【名】伊勢大神宮の職員。神宮の警衛に從事する判任待遇。

**じんぐう-ぶじやう** 神宮衛士長 【名】伊勢大神宮の職員の一。上官の指揮を受けて、神宮の警衛に從ふ判任官待遇。

**じんぐう-ぶじふくわやう** 神宮衛士副長 【名】伊勢大神宮の職員の一。神宮衛士長を補佐する判任官待遇。

**じんぐ-くわうごう** 神功皇后 【名】〔人〕伸哀天皇の皇后。諱は息長足(オキナガタラシ)姫尊。氣長宿禰(オキナガスクネ)王の女。御母は葛城高額(カヅラキタカヌカ)媛。伸哀天皇の二年皇后に立ち、天皇の崩後、攝政して、三韓を征し、六十九年崩ず。御年百。じんどうくわうごう。

**しんぐ-じ** 神供寺 【名】しんぐうじ(神宮寺)に同じ。

**しんく-しまだ** 深紅島田・眞紅嶋田 【名】深紅の手がらを掛ける島田髷。諸國盛髷歌「眞紅島田に今朝結ふ」深きいはや。

**しんく-ばう** 新公方 【名】新に任ぜられた征夷大將軍。

**じんく-ばん** ジンク版 《英 Zinc plate》 【名】あえんばん(亞鉛版)に同じ。

**じんぐ-ばらひ** 神供祓 【名】神に供ふる神饌を祓ひ清むる式。どぜんばらひ。

**しんくひ-むし** 心食蟲・蘊蟲 【名】〔動〕果實又は樹木の枝中に寄人して蝕害する害蟲の總稱。種類あり。

**しんくん** 眞君 【名】しんさく(眞宰)に同じ。

**しんくん** 神君 【名】①『史記の封禪書に見ゆ』おかみ(神)に同じ。〔道家の語〕②〔人〕さくがはいへき(德川家康)の敬稱。

**しんくん** 神郡 【名】神領の郡。神社に隸屬せる郡。即ち神戸の大なるもの。

**しんくん** 神軍 【名】神又は君主の自ら統率する軍隊の敬稱。

**しんくん** 進軍 【名】軍隊を進むること。

**しんくん** 親軍 【名】天子の親兵。近衞(ヱ)。

**じんくん** 仁君 【名】いつくしみ深き君。

**しんくん** 人君 【名】きみ。君主。

**しんくんしよるねじゆ** 新群書類從 【名】〔書〕德川時代に編纂著述せるもの、及びその時代の文藝・風俗に密接の關係ある書籍二百種を蒐めたる叢書。演劇・歌曲・書目・舞曲・狂歌の五部に分つ。十冊。國書刊行會の編輯。

**しんくらうど** 新藏人 【名】六位の藏人の中にて、氏の藏人に次ぐる新任のもの。

**しんくれなゐ** 新紅 【名】〔植〕かうほね(河骨)に同じ。

**しんくろだに** 新黑谷 【名】〔地〕くろだに(黑谷)②を見よ。大原問答書集第「都新黑谷といふ處にて、蓮生坊と呼ね給へ」

**しんくわ** 新花 【名】新に開きたる花。朗詠「霜蓬老鬢三分白、露菊新花一半黃」

**しんくわ** 新菓 【名】新に工夫して製造したる菓子。

**しんくわ** 新貨 【名】しんくわへい(新貨幣)の略。

**しんくわ** 心火 【名】①疾妬又は忿怒の情の烈しく起りたるを、火に譬へていふ語。心の火。胸の炎。平家女護島「柴火の筧、心火の遺」②星の一。心星。

**しんくわ** 心花 【名】〔植〕頭狀排列の花序に於て、外方の花と內方の花とが、その形狀を異にする場合の內方の花。(緣花に對して)

**しんくわ** 心窩 【名】『窩の字の音、正しくは「か」』みぞおち(鳩尾)に同じ。

**しんくわ** 噴火 【名】〔佛〕噴恚の炎(ホノホ)に同じ。

**しんくわ** 秦火 【名】支那秦の始皇帝が、天下の書籍を收めて、焚燬せしこと。

**しんくわ** 親和 【名】親しみ和(ヤハラ)ぐこと。仲よくすること。和熟。

**しんくわ** 進化 【名】①進歩に伴ひて、漸次、物事の狀態の變りゆくこと。發展。②〔生〕『英 Evolution』同一生物が、その體制、おのづから簡單より複雜の域に進みて、次第に變化すること。今日見るがごとき地球上の生物の千差萬別の種類を有するも、これが結果に外ならず。

**しんくわ** 神火 【名】不思議なる火。火山の噴出する火烟など。

**しんくわ** 神化 【名】①不思議なる變化。②神の化育。神の德化。神の靈化。十訓「神化潛通、無爲兩治、德之上也」③德積りて、神たる境に至ること。神になること。

**しんくわ** 心畫 【名】『人はその書きたる文字に精神の發露する故にいふ』文字。書。

**しんくわ** 清畫 【名】支那清代の書。南畫最も多く行はれたり。

**じんくわ** 寢臥 【名】寢ねること。

**じんくわ** 人和 【名】人心の和合。

**しんくわい** 神怪 【名】あやしきこと。不思議。奇怪。神奇。

**しんくわい** 心外 【名】①一心の外。心の外。②思のほかなること。意外。③甚しく我念に感ずること。

**しんくわい** 心外無別法 【句】〔佛〕われらの一切の對境たる世界は、皆自身の心より作り出すものにて、心を離れて、別に諸法あるにあらざること。聖德太子勝鬘經「心外無別法、佛も法も心にて、夫婦も亦心なり」

**しんくわい** 身外 【名】身體の外。一身の外。

**じんくわい** 燼灰 【名】①もえさしと灰と。灰燼。②火に燒けて消失すること。

**じんふくわい** 人外 【名】にんくわい(人外)に同じ。

**しんくわう** 晨皇 【名】〔人〕支那秦の始皇帝。『秦皇漢武』

**しんくわう** 神光 【名】神變不思議なる光。神佛の身より發するといふ光明。著聞「神光、室を照す」

**しんくわう** 身光 【名】〔佛〕佛菩薩の身より發するといふ光明。

**じんくわう** 人皇 【名】天皇。にんのう。

**じんくわう** 神光 【名】〔佛〕しんくわう(神光)に同じ。

**しんくわうみやうじ** 信光明寺 【名】三河國額田(ヌカタ)郡岩津村にある寺。文明十年松平入道信光の創建。本尊は、慈覺大師の造りたる彌陀如來の坐像。

**しんくわ-しゆぎ** 進化主義 【名】〔哲〕しんくわせつ(進化說)に同じ。

**しんくわせつ** 進化說 【名】〔哲〕①『英 Evolution』進化論的快樂主義 【名】〔哲〕『英 Evolutionistic hedonism』活力の廣く且つ長くして、健全强壯なる生物は、よくその生命を維持し、然らざるものは消滅の悲運に際會すべきと同じく、人も社會の法則と宇宙の法則とに順應して、その活力を廣く且つ長からしむる者、即ち快樂は人生の目的にして、これに合する行爲は善なりとする見解。即ち生物進化の理法を道德の研究に應用したるものの。この說の代表者は英のスペンサア(H. Spencer)なり。進化的快樂說。進化說。進化主義。

**しんけ** 新家 【名】①べつけ。分家。②公家(クゲ)の慶長以後、新に一家を立つるに至りしもの。絕家を再興せしもの、清華家の二男・三男等にして、別家せしもの等ありて、官位は大納言・參議等に至るを先途とせしがごとく、日野西・岩倉・久世・東久世・武者小路・三宝院(ミヤウヰン)・東辻・千種(チクサ)等五十餘家あり、明治維新後、多くは伯爵・子爵に列したり。

**しんけ** 心外 【名】しんがい(心外)①に同じ。心外無別(ベツ)【句】〔佛〕次條の略。心外無別法(ベツポウ)【句】〔佛〕しんくわいむべつぼふ(心外無別法)に同じ。[illegible]己心の彌陀、唯心の淨土なれば、心外無別法、即心成佛」謠曲「柏崎」「三界は一心なり。心外無別法」

**しんけ** 信解 【名】①信仰と了解と。②鈍根は信に、利根は解すること。③信仰より入りたる悟。

**しんけい** 親兄 【名】わが兄。親身(シン)の兄。しんきやう。實兄。

**しんけい** 親系 【名】〔法〕親族關係の系統。直系・傍系及び尊屬・卑族等の區別あり。各の條を見よ。

**しんけい** 心計 【名】こころづもり。もくろみ。かんがへ。

**しんけい** 身計 【名】一身上のはかりごと。

**しんけい** 眞景 【名】まことのありさま。實際の景色。實景。

**しんけい** 深閨 【名】奥深き所にある寢室、又は女子の部屋。

**しんけい** 神恵 【名】①神のめぐみ。②〔基〕かんろたい(恩寵)に同じ。

**しんけい** 神契 【名】神の引合はせたる不思議なる緣。

**しんけい** 神經 【名】①動物體における感覺・運動・分泌・營養等を掌る器官。神經細胞と神經纖維とより成り、神經中樞より起りて分岐し、全身に分布して、末端は、五官・筋肉・腺等に終る。②知覺。③神經の過敏なること。神經質なること。

**しんけい** 針形 【名】〔植〕『英 Acerose又 Aciculate』葉形の一。葉身極めて狹く、先端の尖銳なるもの。例へば松の葉の類。

**しんけい** 脣形・唇形 【名】〔植〕『英 Labiate』花形の、脣の形をなすもの。即ちその五箇の花瓣のうち、二瓣は、合して上脣を成し、三脣は、合して下脣をなすもの。例へば糟蘇(ウツボ)・桐・胡麻などの花の類。

**しんけい** 晨鷄 【名】魂に鳴く鷄。曉鷄。

**しんけい** 筱警 【名】いましめて忠告すること。

**しんけい** 榛荊 【名】①いばら。荊棘。②いばらの生ひ茂れる處。

**しんけい** 親兄 【代】しんみの兄。實兄。

**しんげい** 眞藝 【名】〔人〕げいあみ(藝阿彌)を見よ。

**しんげい** 親迎 【名】①したしく出で迎ふること。②支那にて、結婚に際して、妻を迎ふるために、夫みづから出向くこと。

**じんけい** 仁恵 【名】めぐみ。あはれみ。恩惠。

**じんけい** 仁兄 【代】きくん(貴君)に同じ。

**しんけいえん** 神經炎 【名】〔醫〕神經の炎症。多くは神經の損傷、又は附近の器官に於て炎症を呈する炎症の傳播等に原因し、知覺異常及び疼痛を呈する。急性・慢性の別あり。

**しんけいか** 神經家 【名】神經質の人。

**しんけいしつ** 神經質 【名】〔生〕神經組織の一。支柱物質にして、細胞並びに微細なる纖維より成り、結締纖に類似す。







**じん-くわん** 人寰 【名】じんきやう(人境)に同じ。

**じん-くわん** 神官 【名】しんくわん(神宮)に同じ。俗語「大人しく物知りぬべき顏したる神官を呼びて」

**しん-くわんえい** 新寛永 【名】寛永通寶の、寛文以後に鑄造せしもの。

**しんくわんき** 新願忌 【名】「初七日(シヨナノカ)の忌」に同じ。

**しんくわん-じ** 神願寺 【名】①しんぐうじ(神宮寺)に同じ。②しんじゐ(神護寺)を見よ。

**しんくわん-りう** 心貫流 【名】丸女(マルメ)藏人太夫(タイフ)を祖とする、劍道の一流。神蔭(カゲ)流に出づ。

**しんくわ-りよく** 親和力 【名】〔化〕くわがくてきしんわりよく(化學的親和力)に同じ。

**じんくわ-るゐ** 仁果類 【名】〔植〕果樹類中、多漿にして、食すべき部は、萼又は花托より成り、その中に子房を藏して、核をなせるもの。

**しんくわ-ろん** 進化論 【名】①〔哲〕『英 Evolutionism』理想は現實の終極點として存在するものにして、自然は理性に向ひて進歩しつつあるものなりとの見解。古代にあるものは、アリストテレス(Aristotle)これを代表し、近世にありては、英國の學者は、概じてこの說明法に傾けり。進化說。創造論。②〔生〕『英 Evolution theory』生物は、みな外圍の諸狀態の影響を受けつつ、次第に下等より高等に進むものにて、すべての生物は、悉く同一の祖先より分化し來れるものなりといふ學說。佛國のビュッフォン(Buffon)・ラマルク(Lamarck)等、多少この說を鼓吹し、英國のダアヰン(C. Darwin)及びワレエス(A. R. Wallace)の自然淘汰說出づるに及びて、大成せらる。また英人スペンサア(H. Spencer)は精神的にこの說を主張し、心理的社會的倫理的の諸現象をも、この說によりて說明せんとし、いはゆる綜合哲學の大成を企圖するに至れり。

**しんくわろんてきくわいらくしゆぎ** 進化論的快樂主義 【名】〔哲〕『英 Evolutionistic hedonism』活力の廣く且つ長くして、健全强壯なる生物は、よくその生命を維持し、然らざるものは消滅の悲運に際會すべきと同じく、人も社會の法則と宇宙の法則とに順應して、その活力を廣く且つ長からしむる者、即ち快樂は人生の目的にして、これに合する行爲は善なりとする見解。即ち生物進化の理法を道德の研究に應用したるものの。この說の代表者は英のスペンサア(H. Spencer)なり。進化的快樂說。進化說。進化主義。

**しんけ** 新家 【名】①べつけ。分家。②公家(クゲ)の慶長以後、新に一家を立つるに至りしもの。絕家を再興せしもの、清華家の二男・三男等にして、別家せしもの等ありて、官位は大納言・參議等に至るを先途とせしがごとく、日野西・岩倉・久世・東久世・武者小路・三宝院(ミヤウヰン)・東辻・千種(チクサ)等五十餘家あり、明治維新後、多くは伯爵・子爵に列したり。

**しんけ** 心外 【名】しんがい(心外)①に同じ。心外無別(ベツ)【句】〔佛〕次條の略。心外無別法(ベツポウ)【句】〔佛〕しんくわいむべつぼふ(心外無別法)に同じ。[illegible]己心の彌陀、唯心の淨土なれば、心外無別法、即心成佛」謠曲「柏崎」「三界は一心なり。心外無別法」

**しんけ** 信解 【名】①信仰と了解と。②鈍根は信に、利根は解すること。③信仰より入りたる悟。

**しんけい** 親兄 【名】わが兄。親身(シン)の兄。しんきやう。實兄。

**しんけい** 親系 【名】〔法〕親族關係の系統。直系・傍系及び尊屬・卑族等の區別あり。各の條を見よ。

**しんけい** 心計 【名】こころづもり。もくろみ。かんがへ。

**しんけい** 身計 【名】一身上のはかりごと。

**しんけい** 眞景 【名】まことのありさま。實際の景色。實景。

**しんけい** 深閨 【名】奥深き所にある寢室、又は女子の部屋。

**しんけい** 神恵 【名】①神のめぐみ。②〔基〕かんろたい(恩寵)に同じ。

**しんけい** 神契 【名】神の引合はせたる不思議なる緣。

**しんけい** 神經 【名】①動物體における感覺・運動・分泌・營養等を掌る器官。神經細胞と神經纖維とより成り、神經中樞より起りて分岐し、全身に分布して、末端は、五官・筋肉・腺等に終る。②知覺。③神經の過敏なること。神經質なること。

**しんけい** 針形 【名】〔植〕『英 Acerose又 Aciculate』葉形の一。葉身極めて狹く、先端の尖銳なるもの。例へば松の葉の類。

**しんけい** 脣形・唇形 【名】〔植〕『英 Labiate』花形の、脣の形をなすもの。即ちその五箇の花瓣のうち、二瓣は、合して上脣を成し、三脣は、合して下脣をなすもの。例へば糟蘇(ウツボ)・桐・胡麻などの花の類。

**しんけい** 晨鷄 【名】魂に鳴く鷄。曉鷄。

**しんけい** 筱警 【名】いましめて忠告すること。

**しんけい** 榛荊 【名】①いばら。荊棘。②いばらの生ひ茂れる處。

**しんけい** 親兄 【代】しんみの兄。實兄。

**しんげい** 眞藝 【名】〔人〕げいあみ(藝阿彌)を見よ。

**しんげい** 親迎 【名】①したしく出で迎ふること。②支那にて、結婚に際して、妻を迎ふるために、夫みづから出向くこと。

**じんけい** 仁恵 【名】めぐみ。あはれみ。恩惠。

**じんけい** 仁兄 【代】きくん(貴君)に同じ。

**しんけいえん** 神經炎 【名】〔醫〕神經の炎症。多くは神經の損傷、又は附近の器官に於て炎症を呈する炎症の傳播等に原因し、知覺異常及び疼痛を呈する。急性・慢性の別あり。

**しんけいか** 神經家 【名】神經質の人。

**しんけいしつ** 神經質 【名】〔生〕神經組織の一。支柱物質にして、細胞並びに微細なる纖維より成り、結締纖に類似す。

**しんけい-がく** 神経學【名】『英Neurology』神経系統につきて論究する學問。

**しんけい-きう** 神経球【名】〔醫〕心臓の實體内に存在して、その鼓動を掌る血球。

**しんけい-きゅう** 神経弓【名】〔醫〕脊椎骨の背側に突起して、弧狀をなす部分。

**しんけい-くわ** 脣形科・唇形科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。分布區域きはめて廣く、殊に温・熱兩帶に多くして、脣形花を開く。薄荷・蟇草・香薷(カウジユ)・紫蘇・胡麻・藿香(クワカウ)等、これに屬す。

**しんけい-くわい** 神経塊【名】〔動〕しんけいせつ(神経節)に同じ。

**しんけい-くわくわん** 脣形花冠・唇形花冠【名】〔植〕合瓣不整齊花冠の一種。脣形をなせる花冠、即ち脣形科の植物に見るもの。

**しんけい-くわびん** 神経過敏【名】〔醫〕神經の脆弱不寧固にして、聯かの刺戟にも、動かされやすく、從って思想・感情・行爲すべて動搖しやすき狀態。

**しんけい-くわん** 神経管【名】〔醫〕軀幹の背側にありて、神經中樞即ち腦・脊髓を包容する部位。動物性管(内臓管に對して)

**しんけい-けい** 神経系【名】〔醫〕次條に同じ。

**しんけい-けいとう** 神経系統【名】〔醫〕動物の全身に分布する神經性の器官。動物性神經系統及び植物性神經系統に別つ。神經系。

**しんけい-さいぼう** 神経細胞【名】〔醫〕主として、神經中樞部に存在し、傳導・通信の用をなす細胞。形狀・大小は均しからず一箇又は數箇の突起を生じ、その一箇は眞直に延びて、神經纖維となる。しんけいそしき(神經組織)參照。

**しんけい-しつ** 神経質【名】〔哲〕氣質の一。精神の興奮は緩けれども、强度にして、且つその持力に富めるもの。憂鬱質・氣鬱質・黑膽質(多血質・粘液質・胆汁質)に對して)

**しんけい-つう** 神経痛【名】知覺神經又はその分枝の分布區域内に限りて、發作的に不定移動性の激しき疼痛を感じ、數分間乃至數日間持續し、或は久しく去らざることある病。その發する部位に依りて、坐骨神經痛・肋間神經痛・三叉神經痛・顔面神經痛・乳腺神經痛等の種類あり。

**しんけい-びやう** 神経病【名】〔醫〕神經系に屬する一般の疾病。

**しんけい-まひ** 神経麻痺【名】〔醫〕まつせつしんけいまひ(末梢神經)に同じ。

**しんけい-まひせつき** 神経麻痺器【名】〔醫〕神經末梢の機能を有する器官。即ち五官器の類。

**しんけい-やく** 神経藥【名】神經過敏又は神經痛等に用ふる藥。例へば臭素加里・安知必林(アンチピリン)の類。

**しんけい-らい** 神経癩【名】〔醫〕癩病の一種。神經を浸せるもの。主として、紅斑と白斑とを生じ、神經肥厚す。斑紋癩・麻痺癩(結節癩に對して)

**しんけう** 親教【名】したしく教ふること。

**しんけう** 信教【名】宗教を信ずること。信教の自由【句】『我が國の憲法にては、第二十八條に見ゆ』安寧秩序を妨げず、且つ臣民たる義務に背かざる範圍内において、いかなる宗教を信ずとも、政府はこれに關渉せざること。こうにんけう(公認教)參照。

**しんけう** 眞教【名】まことのをしへ。

**しんけう** 新教【名】〔基〕『英Protestantism』基督教の一派。獨逸のルウテル(M. Luther)等の唱道したる宗教改革の主義を奉ずるものの總稱。ぷろてすたんと。(舊教に對して)

**しんけう** 神橋【名】神殿に架する橋。また神社の境内にありて、神輿の渡御する橋。

**しんけう** 心教【名】〔人〕京都聖護院の住僧。據大僧都に至り、また逮獄を巧みにす。文明七年寂す。

**しんげう** 泰光【名】〔植〕はりぐさ(黍光)〔に同じ。

**しんげう** 信樂【名】〔佛〕佛に歸依し愛樂すること。浮土眞宗信樂まこと時いたり」

**しんけう-し** 親教師【名】〔佛〕じゅこうし(受業師)に同じ。

**しんけうは-しやくわいしゆぎ** 新教派・社會主義【名】〔經〕基督教社會主義の一。個人の共濟的團結により、基督教社會主義を實行すべしと主張するもの。

**しんげき** 侵擊【名】敵地に侵入して攻擊すること。

**しんげき** 進擊【名】進みて攻擊すること。

**しんげき** 新劇【名】在來の演劇に滿足せずして起りたる新らしき演劇。新らしき芝居。(舊劇に對して)

**しんげき-たい** 進擊隊【名】進擊する軍隊。

**しんげき-ぶたい** 進擊部隊【名】進擊する部隊。

**しんけだい** 新華臺【名】新しき華臺。三代男「何左衞門と呼びし名も、新華臺と位辨に殘ればやる方なく悲しさ」

**しんけつ** 宸闕【名】『しんきん(宸襟)を見よ』『きんりつ(禁闕)に同じ。

**しんけつ** 心血【名】精神。氣魂。「心血を傾注す」

**しんけつ** 審決【名】審判の決定。

**しんけつ** 鍼穴【名】けいけつ(經穴)を見よ。

**しんけつ** 親月【名】『この月、人人が親の墳墓に詣づるよりいふ』陰曆七月の稱。下學集「親月、シンゲツ」

**しんけつ** 新月【名】その夜、東天に上りそめて、光のあざやかなる月。みかづき(三日月)に同じ。(天)さくげつ(朔月)に同じ。

**しんけつ** 人傑【名】衆人にすぐれたる人。

**じん-けつ** 心月庵【名】東京市淺草區向柳原なる松浦伯爵邸内にある茶室の名。

**しんけつ-しよ** 逮決所【名】けつだんしよ(決斷所)に同じ。

**じん-けふ** 任俠【名】にんきふ(任俠)に同じ。





**しんげ-ぼん** 信解品【名】〔書〕法華經二十八品の中の第四品。羅漢かの信解品の窮子のやうなる召集めては、今おのおのに衣など賜はすべし」

**しんけん** 審檢【名】つまびらかに取調ぶること。

**しんけん** 神讖【名】神の讖言。神諭。

**しんけん** 神劍・神劍【名】神より授かり又は神に供へたる神聖なる劍。

**しんけん** 神權【名】『英Divine right』神の威權。

**しんけん** 親權【名】『英Parental authority』父又は母が、その父又は母たる身分に基き、法律の規定により、その家に在る未成年の子を監護教育し、及びその財産を管理する權利と義務との集合。母がこれを行ふは、父の知れざる時、死亡したること能はざる時に限る。

**しんけん** 信驗【名】しるし。あかし。信證。

**しんけん** 審儉【名】つまびらかにしらぶること。

**しんけん** 簾言【名】眷身・處世上のいましめとなる格言。

**しん-げん** 讖言【名】ざんげん(讖言)に同じ。

**しん-げん** 進言【名】意見を申し上ぐること。建言。

**しんげん** 信言【名】信用すべき言葉。

**しんけん** 信玄【名】〔人〕たけだしんげん(武田信玄)を見よ。

**しんけん** 申嚴【名】申(サル)ねて嚴戒すること。

**しんけん** 森嚴【名】秩序正しく、おごそかなること。

**しん-げん** 震源【名】〔地〕地下における地震の起點。即ちこの點に弱所生じて、地殼に波動を生ぜしむるなり。

**じん-けん** 仁賢【名】仁心ありて賢きこと。

**じん-けん** 人權【名】〔法〕『しんかくけん(人格權)に同じ。

**しん-げん** 人權【名】〔法〕『佛Droit de l'homme』人の生れながらに有する自由及び平等の權利。てんぶけん(天賦人權)參照。

**じん-げん** 人言【名】人の言語。人語。世人のうはさ。他人の言語。人話。

**しん-げんさき** 新劍先【名】劍先船の一種。

**しんげん-じや** 親權者【名】〔法〕親權を有する人。

**しん-げん-しようぶ** 眞劍勝負【名】白刃を執りて、斬りあふこと。

**しん-げん-しよ-はん** 身言書判【句】しん(身)の條下を見よ。

**しんけん-せつ** 神權說【名】こうにんけんせつ(帝王神權說)に同じ。

**しんけん-ぶくろ** 信玄袋【名】多くは布帛にて作り、底を設け、口を紐にて締め括るやうにしたる手提(ヤツ)の袋。

**しんげん-りう** 信玄流【名】かふしゅりう(甲州流)に同じ。

**しん-ご** 新戶【名】新に一戶を立てたるもの。

**しん-こ** 新古・新故【名】あたらしきと、ふるきと。新舊。

**しん-こ** 新香【名】あたらしき香物(カウノモノ)。

**しん-こ** 新香【名】からのもの。かうから。つけもの。

**しん-こ** 振古【名】『爾雅の釋言に「振古也」とあり』おほむかし。太古。往古。

**しん-こ** 餘粉【名】粳(ノウ)の粉を水にて捏ね、蒸して、餅の如くにせるもの。しんこもち。粉餈。

**しん-こ** 神湖【名】〔地〕上野國榛名(ハルナ)湖の別稱。

**しん-こ** 神庫【名】じんこ(神庫)に同じ。

**しん-こ** 眞個・眞箇【副】まことに。全く。

**しん-こ** 神語【名】神の言語。神託。

**しん-こ** 清語【名】清國の言語。支那語。

**しん-こ** 新語【名】あたらしき語。

**しん-こ** 身後【名】しご(死後)に同じ。身後の諫【句】『蘇洵の諫仲論に「以不能事逮逮伯玉二而退」獨子瑕と故有二身後之諫」とあり』我が死後に、君に上る諫言。

**身後の名**【句】『晉書の張翰傳に「使三我有二身後名一不如即時一杯酒」とあり』我が身死したる後の名譽。

**しん-こ** 讖語【名】未來の效驗を說きたる語。未來記のことば。讖言。

**じん-こ** 神庫【名】神社の寶物を納め置く庫。ほぐら。

**じん-こ** 神戶【名】かむべ(神戶)を見よ。

**じん-こ** 人戶【名】人家。民家。

**じん-こ** 壺期【名】物事の盡くる時期。

**じん-こ** 壬午【名】みづのとうま、又その年。

**壬午の變**【句】明治十五年に起りし朝鮮事變。國王李熙の父大院君、王妃閔氏一族の權を握にするを惡み、漢城の兵を煽動して、亂をなさしめ、且つ我が公使館を燒かしめしより、公使花房義質(ヨシモ)殿談して、償金と駐兵權とを得たり。

**じん-こ** 人後【名】人のした。他人のしり。他人の下風。人後に落つ【句】『李白の詩に「風流豈肯落二人後一」とあり』事を爲して、人に後れを取る。

**じん-こ** 人話【名】じんげん(人言)に同じ。

**しん-こ-あへ** 餘粉和【名】『形しんこに似たるよりいふとぞ』しんきあへ(新茄和)に同じ。

**しん-こ-い** 身語意【名】〔佛〕しんくい(身口意)に同じ。

**じん-こ-いすむ** (英Jingoism)【名】國際間の事件に關して、不正の理屈を主張して、他國を侵略せんとする主義。侵略主義。膨力的征服主義。「ど」

**しん-こく** 鍼孔・針孔【名】はりのあな。めつ(身)の條下を見よ。

**しん-こく** 鍼功【名】はりを製造する職工。

**しん-こく** 鍼工【名】さいほう(裁縫)に同じ。

**しん-こく** 診候【名】しんさつ(診察)に同じ。

**しん-こく** 新功【名】新しき手柄。

**しん-こく** 新工【名】新なる工事。

**しん-こく** 侵寇【名】おかしあだすること。「と。進擊。

**しん-こく** 進攻【名】進みて敵を攻むること。

**しん-こく** 進貢【名】貢物を進獻すること。

**しん-こく** 神工【名】神の製作。天製地作。

**しん-こく** 神功【名】神の功德。

**しん-こく** 神妙【名】神の功德。

**しん-こく** 神功【名】神の功德。

**しん-こく** 慎厚【名】つつしみぶかく篤實なること。謹厚。

**しん-こく** 振興【名】ふるひおこすこと。

**しん-こく** 深紅【名】しんく(深紅)に同じ。

**しん-こく** 深厚【名】深く厚きこと。

**しん-こく** 人口【名】人の口さき。太平記「名を天下の人口に殘す」人の噂。

**じん-こく** 人口【名】人の口さき。太平記「名を天下の人口に殘す」人の噂。ひとかず。

**人口に膾炙す**【句】『林嵩の周朴詩集序に「一篇一詠、膾炙人口」とあり』世人に賞揚せらる。名高くなる。くわいしやく(膾炙)參照。

**じん-こう** 人工【名】人の力にて作り出だすこと。(天工に對して)

**じん-こう** 仁厚【名】なさけ深く誠實なること。

**じんこう-かいはう** 神功開寶【名】次條のじんこうかいはうせん 神功開寶錢【名】

天平神護元年に鑄造せし銅錢。面に神功開寶の文字を刻す。神功開寶。神功錢。

**じんこう-かうしん-はふ** 人工更新法【名】〔農〕前伐の林を伐採して、次伐のものを造る造林法。專ら人力に依りて、苗木を植附け、又は種子を播附く。

**じんこう-かんみしつ** 人工甘味質【名】サッカリンその他これに類する化學的製品にて、含水炭素にあらざるもの。これを用ひて味を附けたる食品は、販賣することを許されず。

**じんこう-きそ** 人工基礎【名】〔建〕人工によりたる基礎。〈天然基礎に對して〉

**じんこうくわうごう** 神功皇后【名】〔人〕

**じんこう-こきふ** 人工呼吸【名】疾病・急激なる打擊・溺水などのために、呼吸の停まりたる時、人工を以て再起せしむる應急手當。

**じんこうこきふ-はふ** 人工呼吸法【名】人工呼吸の方法。

**しんこう-こくはつ-そけん** 新工告發訴權【名】〔法〕舊民法における古有訴權の一。古有の妨害となるべき隣地の新工事を廢止・變更せしむる訴權。即ち現行法における古有保持の訴の一種。

**しん-こうさい** 新公債【名】我が國の國債の一。明治元年より同五年までの間、舊諸藩にて借用せし債務を、改めて政府の公債とし、年利四分にて、明治二十九年を償還期限と定めしもの。

**じんこう-さいくわう** 人工採光【名】さいくわう〈採光〉を見よ。〈天然採光に對して〉

**しんこうさい-しようしよ** 新公債證書【名】新公債に對して發行せる證書。五百圓・三百圓・百圓・五十圓・二十五圓の五種あり。

**しんこう-じ** 秦公寺【名】くわうりうじ〈廣隆寺〉の別稱。

**じんこう-じしやく** 人工磁石【名】じんざうじしやく〈人造磁石〉に同じ。

**じんこう-しんじゆ** 人工眞珠【名】人工によりて產出したる眞珠。

**しんこう-せん** 進貢船【名】古、琉球より、圖書及び方物を載せて、支那に到りし船。

**じんこうせん** 神功錢【名】じんこうかいはう〈神功開寶錢〉に同じ。

**じんこう-たんさんすゐ** 人工炭酸水【名】砂糖を加味せる水に、炭酸瓦斯を飽和せしめたる飲料。

**じんこう-ちく** 人工竹【名】人工にて、紋飾を加へたる竹。例へば斑紋を附して、虎斑〈ふち〉竹に擬し、燒色を附けて、煤竹〈すすだけ〉に擬したる類。

**じんこう-てうさ** 人口調査【名】一國一地方、又は一階級に於ける人口の增減、及びその現況を調査すること。

**じんこうはぎんらく** 神功破陣樂【名】じんくわうはぎんらく〈秦王破陣樂〉に同じ。

**じんこう-ひんけつ** 人工貧血【名】〔醫〕人工を加へて、貧血せしむること。多くは外科手術の際、出血を少なからしめんがため、腕・脚等の局部に行ふ。

**じんこう-ふくわ** 人工孵化【名】人工に依りて、魚卵を孵化せしむること。鯉・金魚・鮭・鱒などに行ふ。ふらんき〈孵卵器〉參照。

**じんこうふくわ-はふ** 人工孵化法【名】人工孵化の方法。

**じんこう-ふんぱう** 人工分封【名】人工にて、蜜蜂の分封を行ふこと。

**しんこ-うまぶ** 糁粉馬【名】馬の形を、糁粉にて作りたる小供の玩弄品。毛吹草「しんこ馬も今やひくらんもちつき夜」

**じんこう-やうしよく** 人工養殖【名】人工に依りて、魚卵に雌魚の精を注ぎて、孵化せしむること。

**じんこうりうざん** 人工流產【名】人工を以て流產せしむること。姙娠により、母の生命の危險なる場合などに行はる。

**じんこうりん** 人工林【名】播種・植林等の人工によりて成立したる森林。人造林。〈天然林に對して〉

**じんこう-あ、とうはふ** 人工越冬法【名】人工を以て、冬寒及び春温の温度を與へ、雛卵をして、その年内に孵化せしむる法。

**しん-こきふ** 深呼吸【名】肺臟内の空氣を、十分に入れ換ふるために、胸腔の伸縮を深大ならしめて行ふ呼吸。

**しん-こきん** 新古今【名】〔書〕しんこきんわかしふ〈新古今和歌集〉の略。

**しんこきん-しふ** 新古今集【名】〔書〕しんこきんわかしふ〈新古今和歌集〉の略。

**しんこきんしふ-みの-の-いへづと** 新古今集美濃家裝【名】〔書〕門人大矢重門が、新古今和歌集の歌の心ばへをたづねたるに答へたるもの。五卷。本居宣長の著。美濃家裝。

**しんこきんしふ-をはり-の-いへづと** 新古今集尾張家苞【名】〔書〕新古今集美濃家裝の說を駁したるもの。五卷。石原正明の著。尾張家苞。

**しんこきん-しんせう** 新古今 新抄【名】〔書〕しんこきんわかしふ〈新古今和歌集抄〉に同じ。

**しんこきん-ぞうせう** 新古今增抄【名】〔書〕新古今和歌集の註釋書。はじめに古抄の說を擧げ、次ぎに自說を記せり。二十卷。加藤磐齋の著。

**しんこきん-わかしふ** 新古今和歌集【名】〔書〕八代集また二十一代集の一。土御門院の元久二年、源通具・藤原有家・同定家・同家隆・同雅經五人これを撰進し、後鳥羽上皇の親しく關預し給ひしもの。二十卷。

**しんこきんわかしふ-せう** 新古今和歌集抄【名】〔書〕新古今和歌集の註釋書。四卷。東〈ひがし〉常縁〈つねより〉の著。一名、新古今新抄。

**しん-こく** 親告【名】〔法〕被害者の告訴。と。自己の報告。

**しん-こく** 深谷【名】底の深き谷。深壑。

**しん-こく** 新穀・新穀【名】新に收穫したる穀物。

**しん-こく** 新國【名】新に建てたる國。

**しん-こく** 深刻【名】きはめて切實なること。

**しん-こく** 辰刻【名】じこく〈時刻〉に同じ。

**しん-こく** 神國【名】〔地〕『神の開きたまひし國の義』わが日本國の美稱。神州。皇國。正祓詞『大日本は神國なり。』〔基〕『英 Kingdom of God』天國の、この世に實現せられたるものゝ、ユダヤ人の期待したるオシヤの王國のごとき、これなり。

**しん-こく** 清國【名】しん〈清〉に同じ。

**しん-こく** 深黑【名】極めて黑きこと。

**しん-こく** 申告【名】申し上げること。役所に申し出づること。

**しん-こく** 新刻【名】新に木版に刻むこと。

**じん-こくうかい** 盡虛空界【名】〔佛〕一切の衆問を包容せる廣さ。〈盡未來際に對して〉

**しんこく-かかく** 申告價格【名】役所に申告する價格。

**しんこく-ざい** 親告罪【名】〔法〕『獨 Antragsdelikt』被害者または被害者の最近親族より告訴するにあらざれば、これを問はざる犯罪。例へば、猥褻姦淫罪・過失傷害罪または親族・家族間における竊盜・詐欺・恐喝・横領の類。

**しんこく-しや** 申告者【名】申告する人。

**しんこく-しよ** 申告書【名】申告のために調製したる書類。

**しんこく-せうせつ** 深刻小說【名】深刻なる材料を、それにふさはしき描寫によりて現はしたる小說。〈光明（ひかりみち）小說に對して〉

**しんこく-はふ** 申告法【名】〔法〕納稅義務者をして、その義務を定むるに必要なる所得・財產・職業などを屆け出でしむる方法。

**じんじ-けいうん** 神護景雲【名】稱德天皇の御代の年號〈紀元一四二七年—一四二九年〉。

**しんじざ** 新五左【名】田舍ざむらひ、又は物馴れぬ屋敷者を嘲りていふ語。〈明和天明頃の遊里の「語」〉大雷鳥「しよくは、もののふやかた者。これ新五左の始めなり」

**しんこさいく** 糁粉細工【名】糁粉を用ひて、花鳥その他種種の形を作ること、又その作りたる物。

**しんじ-じ** 神護寺【名】山城國葛野（かどの）郡高尾山にある眞言宗の寺。東寺に屬す。和氣清麿の創立。延曆中、清麿河內國に神願寺を建てしが、のち奏請して、この地に遷







し、次いで勅して、空海に住持せしめ、名を神護國祚眞言寺と改め、勅願寺とす。後、偖文覺その荒廢を慨し、つひに源賴朝を禮越（ゐやを）として再興す。

**じん-こ-じき** 神今食【名】古、六月と十二月との十一日、即ち月次（つきなみ）祭と同日の夜、天照大神を神嘉殿に勸請し、御飯を供へ、天皇親しく祭りたまひ、また御親らも祭に同じく、ただこれには新穀を用ひず、舊穀を以てしたり。雲龜二年始めて行はれ、應仁以後廢絕す。じんこうじき。じんごんげ。かむいまけ。拾芥抄「六月十一日、月次祭・神今食」

**しん-ごしふゐ-しふ** 新後拾遺集【名】〔書〕次條の略。

**しん-ごしふゐ-わかしふ** 新後拾遺和歌集【名】〔書〕二十一代の一。藤原爲遠・同融・飛鳥井雅縁の勅を承じて撰せしが、中途にして薨じ、天授元年藤原爲重續成せり。二十卷。

**しんごしんしようじ** 神護新勝寺【名】下總國印旛（いんば）郡成田町にある新義眞言宗の寺。本尊は、弘法大師の造れる不動尊。成田山・明王院を號す。偖寬朝の開山。

**しん-ごせんわかしふ** 新後撰和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。正安三年藤原爲世の撰進せしもの。二十卷。

**しん-ごだいし** 新五代史【名】〔書〕ごだいし〈五代史〉を見よ。

**しん-こつ** 心骨【名】精神と骨體と。

**じん-こつ** 人骨【名】人間のほね。平英「人骨の念珠も、この箱にありとかや」

**しんこ-ばな** 糁粉花【名】〔植〕もちずりぐさ〈擬摺草〉を云ふ。〈筑前國の方言〉

**しん-こま** 新小判【名】■新に鑄造したる小判。■まんえんこばん〈萬延小判〉の別稱。

**しん-ごばん** 新御番【名】江戸幕府の職制の一。寛永二十年に初めて四組を置きしが、後には、八組となれり。平時は交番し、將軍外出時には、前驅をなす。「の頭」

**しんごばんがしら** 新御番頭【名】新御番子孫二不レ能二晨昏一」

**しん-こばんがしら** 新小判金【名】■新に發行したる小判金。■まんえんこばんきん〈萬延小判金〉の略。

**しん-こふ** 身業【名】〔佛〕三業の一。身體より生ずる業。例へば十惡中の殺生・偸盜（ちうたう）・邪淫の類。

**しん-こふ** 心業【名】〔佛〕いこふ〈意業〉に同じ。

**しん-こふ** 賑給【名】〔佛〕『しんごふ』と讀むべき由は、年中行事祕抄に見ゆ。古、毎年五月、日を擇びて、京中の貧民に米鹽を給ひし儀。豫め廳院・大膳・職等の米鹽數を計算し、足らざれば、左右兩京の義倉に存する錢・穀をも計算せしめ、當日、大臣陣に著き事を行ひ、檢非遣使承りて、各條里を巡行して給與したり。公事根源「賑給。これは、いやしき民に、米鹽など給ふなり」後拾遺「近江・紀伊二國飢、遣二使賑給一」

**しんごふし** 賑給使【名】古、天吳ありし地方に、救恤のため、派遣せられし臨時の官。三代實錄「賑給使」

**しんごふ-ちやう** 賑給帳【名】賑給に關することを記したる帳。

**しんごふ-でん** 賑給田【名】賑給に供する田地。貞觀「所出五多、功遂不レ成、私製田一百町、在二備前國一永爲二賑給田一」

**しんごふ-ぶん** 賑給文【名】賑給に關する事を記したる文書。藤野貞藏「賑給文」

**しん-こまつ** 【名】〔植〕松杉（しやうさん）科に屬する常綠喬木。北海道及び樺太に產す。樹皮は赤褐色を呈し、針葉細く、枝に直角に著生す。あかえぞまつ。あかまつ。

**しん-こん** 身根【名】〔佛〕五根の一。外物に接して、知覺を起す機官。

**しん-こん** 信根【名】〔佛〕五根の一。確く佛教を信じて、他のために迷はざること。

**しん-こん** 心根・神根【名】「根は一身の根本たる義」こころ。こころね。精神。

**しん-こん** 心魂・神魂【名】たましい、靈魂。

**しん-こん** 新墾【名】荒蕪の地を新しく開墾すること。ひはり。

**しん-こん** 新婚・新昏【名】新に結婚すること。

**しん-こん** 晨昏【名】■あさばん。朝夕。■朝夕仕ふること。

**しんこん** 眞言【名】〔佛〕『梵語 Mantra 曼怛羅』の深語。眞實の言說、即ち法身大日如來の意。■方便・假說の語にあらざる言說。佛の言語。保元「眞言妙典の御法樂」■呪文。陀羅尼。源氏「しんごんの深き道をだに、かくしとどむることなくひろめ仕うまつり侍り」■しんごんしゅう〈眞言宗〉の略。增鏡「眞言の深き妙法」

**しんごん** 眞言師【名】〔佛〕眞言宗の法に依りて、加持祈禱を修する僧。大鏡「佛僧はやんごとなき智者あるは持經者。しんごんしどもなり」榮雲記「大納言阿闍梨祈禱」

**じん-こん-じき** 神今食【名】じんこじき〈神今食〉に同じ。禁祕抄「二季月次、神今食、自二一日一至二十一日一也」

**しんこんじき-さう** 身金色相【名】〔佛〕三十二相の一。身體黃色を呈せるもの。

**しんごん-しくわん** 眞言止觀【名】〔佛〕しんごん〈眞言〉の條下を見よ。

**しんごん-しわだう** 眞言七堂【名】眞言宗の寺院における七堂、即ち金堂・講堂・五重塔・大門・經藏・鐘樓・鼓樓ともいふ。

**しんごん-しゅう** 眞言宗【名】〔佛〕佛教の一宗。大日經・金剛頂經を所依とし、祕密陀羅尼の加持力によりて、即身成佛することを教義とするもの。釋迦の滅後七百年、龍猛これを金剛薩埵より受け、龍智・金剛智・不空・善無畏等の祖師を經て、支那に傳ふ。我が國の空海、入唐し、惠果より傳へて、高野山金剛峰寺及び敎王護國寺（東寺）を根本道場として弘む。のち覺鑁（かくばん）紀伊國根來（ねごろ）に大傳法院を開き、新義を唱へしより、前者を古義と稱す。現今、古義派は、總本山敎王護國寺の外に、高野派・醍醐派・大覺寺派・御室（おむろ）派の四派あり、て、新義派もまた豐山（ぶざん）派・智山派の二派に分る。なほ外に、修驗（しゅげん）道あり。相應宗。密宗。陀羅尼宗。眞言陀羅尼宗。眞言祕宗。「眞言の十二流」參照。

**しんごん-しよ** 眞言書【名】〔佛〕眞言宗の教義を說きたる經文の總稱。雙紙「ある眞言書の中に、呼子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり」

東寺によれり」

**しんごん-けう** 眞言教【名】しんごんみつけう〈眞言密教〉に同じ。

**しんごん-さくもつ** 深根作物【名】〔農〕亘科に屬する作物の總稱。

**しんごん-さんぶきやう** 眞言三部經【名】〔書〕さんぶきやう〈三部經〉を見よ。

**しんごん-し** 眞言師【名】〔佛〕眞言宗の法に依りて、加持祈禱を修する僧。大鏡「佛僧はやんごとなき智者あるは持經者。しんごんしどもなり」榮雲記「大納言阿闍梨祈禱」

**じん-こん-じき** 神今食【名】じんこじき〈神今食〉に同じ。禁祕抄「二季月次、神今食、自二一日一至二十一日一也」

**しんこんじき-さう** 身金色相【名】〔佛〕三十二相の一。身體黃色を呈せるもの。

**しんごん-しくわん** 眞言止觀【名】〔佛〕しんごん〈眞言〉の項を見よ。

**しんごん-しわだう** 眞言七堂【名】眞言宗の寺院における七堂、即ち金堂・講堂・五重塔・大門・經藏・鐘樓。

**しんごん-しゅう** 眞言宗【名】〔佛〕佛教の一宗。大日經・金剛頂經を所依とし、祕密陀羅尼の加持力によりて、即身成佛することを教義とするもの。釋迦の滅後七百年、龍猛これを金剛薩埵より受け、龍智・金剛智・不空・善無畏等の祖師を經て、支那に傳ふ。我が國の空海、入唐し、惠果より傳へて、高野山金剛峰寺及び敎王護國寺（東寺）を根本道場として弘む。のち覺鑁（かくばん）紀伊國根來（ねごろ）に大傳法院を開き、新義を唱へしより、前者を古義と稱す。現今、古義派は、總本山敎王護國寺の外に、高野派・醍醐派・大覺寺派・御室（おむろ）派の四派あり、て、新義派もまた豐山（ぶざん）派・智山派の二派に分る。なほ外に、修驗（しゅげん）道あり。相應宗。密宗。陀羅尼宗。眞言陀羅尼宗。眞言祕宗。「眞言の十二流」參照。

**しんごん-しよ** 眞言書【名】〔佛〕眞言宗の教義を說きたる經文の總稱。雙紙「ある眞言書の中に、呼子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり」

**しんごん-だらに** 眞言陀羅尼【名】〔佛〕しんごん(眞言)〔二〕に同じ。だら(陀羅尼)参照。[補説]この經のたしかなるにつきて、この眞言陀羅尼をば申しつるなり」

**しんごんだらに-しゅう** 眞言陀羅尼宗【名】〔佛〕しんごんしゅう(眞言宗)に同じ。

**しんごん-ち** 新墾地【名】新に開墾したる土地。新開地。

**しんごん-ひしゅう** 眞言秘宗【名】〔佛〕『眞言秘密の宗旨の義』しんごんしゅう(眞言宗)に同じ。

**しんごん-ひみつ** 眞言秘密【名】〔佛〕眞言宗の教義は、大日如來の三密を本旨とする微妙秘奥の教義なること。金剛乘教。心中萬年草」士はまた土砂の功德の眞言秘密」

**しんごん-みょうけう** 眞言密教【名】〔佛〕『大日如來の三密を旨とする秘密微妙の教の義』眞言陀羅尼の教法。金剛乘教。眞言教。金剛瑜伽教。

**しん-ごんみやうぶ** 新權命婦【名】命婦の一。權命婦の次、御差(サス)の上に位せしもの。明治二年設かれ、同四年廢せられたり。

**しんごん-めうてん** 眞言妙典【名】〔書〕しんごんさんぶきやう(眞言三部經)の尊稱。保元「これを限りと御心ぼそく、眞言妙典の御法樂にも」

**しんごん-りっしゅう** 眞言律宗【名】〔佛〕律宗に眞言宗を兼ぬる宗教。もと空海入唐の際傳へし律宗にして、慶長の頃、明忍これを唱へ、慶安中淨厳これを盛んにし、寛政の頃、慈雲律師に至りて大成し、河内國高貴寺を本山としゐのち眞言宗に屬せしが、明治二十八年獨立して、大和國西大寺を本山とするに至れり。

**しんごん-りやうぶ** 眞言兩部【名】〔佛〕胎蔵界と金剛界と。理性と智性と。金胎(ヘタイ)兩部。

**しんごん-りよかう** 新婚旅行【名】新に結婚したる新夫婦の相携へてなす旅行。西洋の風俗より移り來れるもの。ほねいむん。密月。

**しんごん-ゐん** 眞言院【名】〔一〕古、内裏の八省院の北、皇居の西に在りて、僧侶參集して修法せし所。天長六年空海の、唐の内道場に準じて、宮中において祕法を修せんことを奏請せしによりて、毎年これを行はれしが、承和元年空海再度の奏請により、勅解由(ユヒ)廳をこれに充てられしを、その初とす。修法院。曼陀羅道場。拾芥抄「眞言院、在八省北」僧綱八候、勤行修法念誦等」〔二〕大和國東大寺中の一院。弘法大師の造立にして、その影像あり。

**しんこ** 粽粉餅【名】しんこ、粽粉(ちまき)に同じ。

**しんこ-もち** 粽粉餅【名】しんこ、粽粉(ちまき)の一。

**しんごらう-は** 新五郎派【名】小笠の流派

**しん-じりやう** 新御靈【名】じりやうしゃ、御靈社(ゴリヤウ)〔二〕に同じ。

**しんじりやう** 新御靈【名】〔枕〕前記新御靈社にて、六月十七日の例祭に行ふ神事。

**しんさ** 辰砂【名】〔一〕〔鑛〕しんしゃ(辰砂)に同じ。〔二〕『その色の辰砂に似たるより名づく』支那にて、宋明代に亙りて製出せし磁器。銅にて著色したる血紅色の釉(クスリ)を用ふ。青磁と共に支那磁器特種の装飾として、世に珍重せらる。

**しんさ** 參差【名】しんし(參差)を見よ。

**しんさ** 審査【名】くはしく檢査すること。

**しんざ** 新座【名】【一】新に設けたる座。太平記「新座本座の田樂を呼びくだして」〔二〕あらたに役に就くこと。あたらしく召抱へらるること。しんざん。「足利時代の語」狂言「文相撲」「一人にては使ひ足らぬ程に、新座の者をだいぶ抱へようと存ずる」

**しんざ** 新座【名】〔地〕にひくら(新座)を見よ。

**しん-ざ** 神座【名】れいゐ(靈位)に同じ。[補説]大日本國武州太守平重盛神座と過去帳に入れられて」

**しん-ざ** 陞座【名】〔佛〕しんぞ(陞座)を見よ。

**じん-ざ** 人差【名】〔哲〕『英 individual difference』各個人の精神作用の諸方面に於て、他人と異なる特種の點。じんさしんりがく(人差心理學)参照。

**しん-さい** 薪柴【名】たきぎ。しば。

**しん-さい** 薪菜【名】たきぎと菜蔬と。

**しん-さい** 神菜【名】心となりふりと。精神と風采と。

**しん-さい** 神祭【名】神道の式にて行ふ祭。

**しん-さい** 神齋【名】ものいみ。

**しん-さい** 神社【名】〔一〕〔枕〕神社にて、齋(イミ)の前日より、不浄の輩入るべからずと書きて、門戸に立つる札。

**しん-さい** 眞宰【名】宇宙の主宰者。造化の神。眞君。太平記「眞宰の臂を繋(ク)いて、壺中の天地を識し」

**しん-さい** 親祭【名】天皇が御自身に神を祭りたまふこと。「るること。

**しん-さい** 親裁【名】貴人の自ら裁決せら

**しん-さい** 新歳【名】【一】しんねん(新年)に同じ。〔二〕〔佛〕『比丘(ビク)にとりては、新年元旦のごときものなるよりいふ』夏安居(ゲア)の終りし翌日、即ち七月十六日。

**しんさい** 新妻【名】新に娶りたる妻。新婦。にひづま。

**しん-さい** 震災【名】地震のわざはひ。

**しん-さい** 心齋【名】『心の齋(イミ)の義。莊子の人間世篇に見ゆ』心を虚しくすること。虚心担懷。

**しんさい** 眞宰【名】〔植〕しやくさ(羊踏菜)を云ふ。〔田雲國の方言〕

**しんさい** 眞滓【名】〔人〕高僧。俗姓は紀。京師の人。弘法大師に從ひて、密教の奥秘を究め、尊法阿闍梨となる。承和年中、仁明天皇の勅を奉じて、唐に遊學す。貞觀二年寂す。年六十一。

**しん-さい** 心材【名】〔植〕『英 Heart wood』樹木の幹の木質(ツキ)部の内層、即ち比較的早く成れる部分にて、腐敗を防ぐべき物質を含める、堅硬なる部分。色は紅黄、黒褐など、樹の種類に依りて異なれども、褐色なるもの最も多し。あかみ。堅宰木質。中心木質。(液材に對して)

**しん-さい** 身材【名】からだ。體格。身幹。

**しん-さい** 浸劑【名】〔醫〕『羅 Infusa』内用藥劑を均等の粗末に製し、沸湯を注ぎ、時時振盪しつつ、五分時ほど、重湯煎上に置き、冷えたる後、濾過して製したるもの。

**じん-さい** 人才・人材【名】才ある人物。秀才の人。

人材登用【名】人才を採用して、官職に就かしむること。

**じん-さい** 神在【名】じんざいに、神在(カミアリ)の略。(土佐國・出雲國の方言)

**じん-さい** 神西【名】〔地〕播磨國の舊郡の一。明治二十九年神東郡と合して、神崎郡となる。「ふる道具。

**しんさい-ぐ** 神祭具【名】神を祭る時に用

**じんさい-くわん** 腎細管【名】〔醫〕さいぬうくわん(細尿管)に同じ。

**しんざい-こ** 神在湖【名】〔地〕出雲國簸川(ヒカハ)郡にある湖。周回一里二十町餘。古稱、神門(カミト)湖。

**しんざい-しさん** 深在指節【名】〔醫〕前膊筋前側深在層の一節。四條の腱を有し、各指を屈折することを司る。

**じんざい-とうよう-しけん** 人材登用試驗【名】人材を登用するために行ふ試驗。

**しんざい-なべ** 浸劑鍋【名】銅或は黄銅にて作り、内面に錫を鋳きたる深く圓き鍋。木の柄と重き蓋とを有し、底部に至るに隨つて次第に狹小となる。浸劑を作るに用ふ。

**じんざい-に** 神在煮【名】じざいもち(自在餅)せんざいもち(善哉餅)を見よ。小豆に餅を入れ、醬油にて煮、砂糖をかけて食ふもの。(土佐國の方言)

**しんさい-ばし** 心齋橋【名】〔地〕大阪市南區の勘之内と南船場(ミナミ)の堺なる長堀川





に架する縦橋(長さ二十間餘)幅二間餘。橋の南北に通ずる街路を心齋橋筋と稱し、最も繁華の地なり。

**しんさい-ほけん** 震災保險【名】〔商〕損害保險の一。土地又は建築物等の、地震のために破壞せらるる損害の塡補を目的として付するもの。

**じんさい-もち** 神在餅【名】じんざいに(神在)の轉。(田雲國の方言)

**しんさいーよばう-てうさくわい** 震災豫防調査會【名】文部大臣の監督の下に、震災豫防に關する事項を攻究し、その施行方法を審議する合議制の機關。會長・幹事各一人、委員二十五人を以て組織す。

**しん-さう** 晨粧【名】朝の化粧。太平記「佳人徒錯を飾りし弘徽殿の前には」

**しん-さう** 身相【名】すがた。かたち。太平記「不動明王(金色(コンジキ))の身相を現じて」

**しん-さう** 心想【名】おもはく。おもひ。

**しん-さう** 心喪【名】喪期終りたる後も、なほ心だけは喪に服すること。

**しん-さう** 心操【名】心のみさを。志操。[補説]心操落居して、柔和を性に備へたり」

**しん-さう** 深窓・深窗【名】奥深き窓の内。太平記「祕して、深窓に在りしかば」

**しん-さう** 深草【名】深く生ひ茂れる草。

**しん-さう** 眞草【名】【一】眞書と草書と。〔二〕〔鑛〕物の草書。

**しん-さう** 眞相【名】實際のありさま。

**しん-さう** 神草【名】〔一〕ふしぎなる草。〔二〕〔植〕にんじん(人參)に同じ。

**しん-さう** 神葬【名】神道の儀式を用ひて葬ること。(佛葬などに對して)

**しん-さう** 新造【名】〔一〕新に造ること。〔二〕『姫禮に先だちて、新にその妻の居所を造るよりいふとぞ。新婦人の稱。また人の妻の敬稱。しんぞ。〔三〕十三四歳より二十歳位までの處女。しんぞ。〔四〕新しく造りたる和船。[新轍]〔五〕『新造の船の義といふ』江戸吉原の遊廓にて、姉女郎に附屬し、使役せられて、遊女の見習をなす少女。禿十三四歳に至れば、新造として出し、禿は前結に改む。初めは振袖新造、稍長ずれば袖を留めて留袖新造といふ、又番頭新造といへるもあり。しんぞ。「新轍」巻の四松「新造つきだし、田立ちばえ」

**しん-さう** 神造【名】〔一〕神の造りたること、又その物。〔二〕[補説]深く造詣することの。

**しん-さう** 深造【名】深く造詣すること。深造自得【句】『孟子の離婁下篇に「君子深造之、以道欲其自得之也」とあるに本づく』深造して、道を體得したること。

**しん-さう** 神像【名】神の肖像。神のかたち。

**しん-さう** 心臓【名】〔醫〕血管系統の中心器。動物の種類によりて、形狀大小等一樣ならざれども、人類のは、胸腔内、左右兩肺の間に在り。ほぼ倒圓錐形なる中空の筋肉質物にして、内腔は中隔によりて、全く二分せられ、その各半も横隔膜によりて、上下に二分せられ、上部を心耳、下部を心室といふ。しんし(心耳)・しんしつ(心室)参照。

**しん-さう** 心像【名】〔哲〕しんじゃう(心象)に同じ。

**じん-さう** 刃創【名】かたなきず。金創。

**じん-さう** 人造【名】人力によりて造ること、またその造りたる物。人工。人作。(天造に對して)

**じん-さう** 腎臓【名】〔醫〕尿の排泄器官。人類のは、腹腔の背部、脊柱の兩側に一箇づつありて、腺より成り、各蕈豆形をなし、灰赤色を呈す。

**じんさう-あふあるる** 人造士・瀝青(英 Artificial asphalt)【名】石油及コールタアルの蒸溜殘渣をアスファルトに混和したるもの。

**じんさう-あゐ** 人造藍【名】コオルタアルより得たるナフタレンを原料とし、食鹽の化學的處理法を經て製造したる藍色素。その性質・植物の藍と同一なり。(天然藍に對して)

**じんさう-えふ** 心臓葉【名】〔植〕心臓形の葉。

**じんさう-えふ** 腎臓葉【名】〔植〕腎臓形の葉。

**じんさう-えん** 腎臓炎【名】〔醫〕腎臓の炎症。發熱して、腰部に疼痛を覺え、手足陰囊等に水腫を發するに至る。「腎炎。

**しんさう-おろし** 新造下・新艘下【名】しんすを(造水)に同じ。

**しんさう-かひ** 新造買【名】遊廓の新造を買ふこと。しんそう(新造)買参照。

**しんさう-がん** 深造岩【名】〔地〕火成岩の一。岩漿が、地下の深處において凝固して、成りたるもの。高壓の下に、徐々に冷却したるがため、鑛物成分は悉皆結晶して、粒狀の石理を呈し、また岩衝・餅盤をなして現出す。深成岩。(火山岩・斑岩・輝岩等、これに屬す。深成岩。)

**じんさう-ぎうらく** 人造牛酪【名】動物性或は植物性脂肪に人工を加へて、乳脂樣に製したるもの。(天然牛酪に對して)

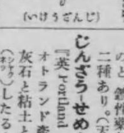
**じんさう-ぎぬ** 人造絹【名】じんさうけんし(人造絹絲)に同じ。

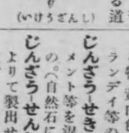
**しんさう-きん** 心臓筋【名】〔醫〕心臓壁を構成する筋肉。横紋筋の一種にして、他の骨格筋のごとく、横紋を有し、細長なれども、諸所側枝を出し、隣接側枝と連なる。

**じんさう-きん** 人造金【名】かふせいきん。合成金に同じ。

**しんさう-ぐ** 神葬具【名】神葬に用ふる道具。

**しんさう-けい** 心臓形【名】〔植〕『英 Cordate』心臓の如き形。即ち下部は心臓形と同樣にして、上部の鈍圓なるもの。


(いけうざんじ)


(いけうざんし)

**じんさう-けい** 腎臓形【名】〔植〕『英 Reniform』腎臓の如き形、即ち下部は心臓形と同樣にして、上部の鈍圓なるもの。

**じんさう-けんし** 人造絹絲【名】ぎけんし、擬絹絲に同じ。

**じんさう-こほり** 人造氷【名】じんさうひよう(人造氷)に同じ。

**じんさう-ごむ** 人造護謨【名】せるろいどに同じ。

**じんさう-さうげ** 人造象牙【名】前條に同じ。

**じんさう-さんご** 人造珊瑚【名】あかとだま(朋石珠)に同じ。

**しんさう-しき** 神葬式【名】神道によりて「葬る儀式。

**じんさう-しきそ** 人造色素【名】人工を加へて製造したる色素。即ち人造の染料・顔料などの類。(天然色素に對して)

**じんさう-じしやく** 人造磁石【名】〔理〕人工によりて、鋼鐵片に磁性を與へたるもの。鋼鐵片を電流を通じたるコイルの中に暫時入れおき、もしくはこれを強き棒磁石の一極にて、その一端より他端に向ひて、數回摩擦するか、又は二本の棒磁石の異なれる極を、その中央におきて、左右に反復摩擦すれば、磁性を付與することを得。人工磁石。(天然磁石に對して)

**しんさう-じつ-しつえん** 心臓實質炎【名】〔醫〕しんさうにくしつえん(心臓肉質炎)に同じ。

**じんさう-しやうなう** 人造樟腦【名】鹽酸ビネンの結晶、即ちテレビン油に乾きたる鹽化水素を通じて得るもの。

**じんさう-じやかう** 人造麝香【名】人工による物。黄白色の針狀結晶物にて、原料は、ブランディ等の中に存する一種の炭化水素。

**じんさう-せき** 人造石【名】砂礫・石灰・セメント等を混合して、石の如く固めたるもの。(自然石に對して)

**じんさう-せんれう** 人造染料【名】人工によりて製出せられたる染料。在來のものには、コオルタアルを原料として製造するものと、鑛性藥劑とを以て製造するものとの二種あり。(天然染料に對して)

**じんさう-せめんと** 人造セメント【名】『英 Portland cement 原語は、亞米利加のポオトランド產の石に似たるよりいふ』石灰石と粘土との混合物を窯に入れて灼熱(シヤクネツ)したるものを、更に粉碎せるもの。種種の用に供す。

**しん-さうち** 新相知【名】新しきしりあひ。

**じんさう-といし** 人造砥石【名】人工に依りて作りたる砥。セルラックを溶し、碧砂を混和して、型に入れて作る。また金剛砂(明石珠)に同じ。

**じんさう-しやうなう** 人造樟腦【名】鹽酸ビネンの結晶、即ちテレビン油に乾きたる鹽化水素を通じて得るもの。

**じんさう-じやかう** 人造麝香【名】人工による物。黄白色の針狀結晶物にて、原料は、ブランディ等の中に存する一種の炭化水素。

**じんさう-せき** 人造石【名】砂礫・石灰・セメント等を混合して、石の如く固めたるもの。(自然石に對して)

**じんさう-せんれう** 人造染料【名】人工によりて製出せられたる染料。在來のものには、コオルタアルを原料として製造するものと、鑛性藥劑とを以て製造するものとの二種あり。(天然染料に對して)

**じんさう-せめんと** 人造セメント【名】『英 Portland cement 原語は、亞米利加のポオトランド產の石に似たるよりいふ』石灰石と粘土との混合物を窯に入れて灼熱(シヤクネツ)したるものを、更に粉碎せるもの。種種の用に供す。

**じん-さうち** 新相知【名】新しきしりあひ。

**じんさう-といし** 人造砥石【名】人工に依りて作りたる砥。セルラックを溶し、碧砂を混和して、型に入れて作る。また金剛砂

**しんざう**

**しんざう-にくしつえん** 心臓肉質炎【名】〔醫〕心臓病の一種。心臓の筋肉に發する炎症。

**しんざう-はれつ** 心臓破裂【名】〔醫〕心臓の動脈に病るか、又は心臓實質炎等ある者の、身體過勞を致せる際等に、心臓の破裂すること。破裂の部位は左室前壁又は心尖部に多く、大抵朝死す。

**しんざう-ひせう** 深意秘抄【名】〔書〕服飾の事を記せるもの。一卷。撰者詳かならず。

**しんざう-びやう** 心臓病【名】〔醫〕心臓の作用常態を失し、動悸はげしく、脈搏の不齊になる病。心臓神經病等の種類あり。心臓瘤・心臓肉質炎・心嚢炎・心臓神經病等の種類あり。

**じんざう-びやう** 腎臓病【名】〔醫〕腎臓の作用常態を失ひて、蛋白質など種種の物質を含む病。急性・慢性の腎臓炎・尿毒性等に分たるれど、結局同病なり。

**じんざう-ひよう** 人造氷【名】人爲により、低溫度を生ぜしめて、水を氷結せしめたるもの。二重の槽を造り、外槽に水、内槽に氷らすべき水を盛り、外槽水中に、急劇に結晶硝酸アンモニヤを投じ、又は鹽水槽に凍らすべき罐を懸垂し、水槽中を通過して、罐底に開口せる管より壓搾空氣を送入して、水中の熱を奪ひ去りて造る。(天然氷に對して)

**じんざう-ひれう** 人造肥料【名】種種の原料を集め、これを工業的機械力によりて製造したる肥料。例へば過燐酸石灰・骨粉等の類。

**しんざう-べんまくびやう** 心臓瓣膜病【名】〔醫〕心臓病中、最も多く發するもの。瓣膜の開閉十分ならず、もしくは瓣口に狹窄を來すものにて、通常左心に發す。僧帽瓣最も多くこれに罹り、大動脈瓣口これに次ぎ、三尖瓣に發するは稀なり。原因は種種なれども、殊にレウマチスと密接なる關係あり。

**じんざう-まし** 人造麻絲【名】木綿絲を纖維光澤を生ぜしめ、又は綿絲に膠質の糊を附け、これをフオルマリンもしくは重クロム酸加里液のごときものにて酸化せしめ、水に對して不溶解ならしめたるもの。人造麻布の原料となる。

**しんざう-まひ** 心臓痲痺【名】〔醫〕心臓筋全く停止すること。

**じんざう-まふ** 人造麻布【名】人造麻絲を用ひて織製したるもの。一見麻布のごとくなれども、折目を生ずる缺點あり。

**じんざうりん** 人造林【名】じんこうりんく人工林〕に同じ。

**しん-さく** 神策【名】〔書〕巧妙不思議なる謀計。「神算。

**しん-さく** 新作【名】あらたに作りたるもの。新しき時代の製作。(舊作・古作に對して)

**しん-さく** 新策【名】〔書〕新規なる策略。

**しんあん**〔新案〕に同じ。

**しん-さく** 振作【名】振ひ作(ヨ)すこと。振興。振起。作興。

**しん-さく** 浸削【名】侵して削り取ること。

**しん-さく** 進策【名】策四の一種。士庶の、時務に關する意見を述べて上るもの。

**じん-さく** 人作【名】じんざう〔人造〕に同じ。

**しん-さく-へいもんゐん** 新朝平門院【名】〔人〕仁孝天皇の女御。孝明天皇の御生母。藤原政熙(ヨリ)の女。御名は典(ミチ)子。弘化四年鳥太后となり、同年崩ず。御年三十七。

**しんさ-くわん** 審査官【名】或物事の審査を司る官吏。例へば特許局審査官・恩給局審査官の類。

**しんさくわんほ** 審査官補【名】審査官の職務を補助する職。

**しん-さし** 尻刺【名】〔書〕しりさし〔尻刺〕の音便。

**しん-さしき** 新座敷【名】新築の座敷。

**じんさ-しんりがく** 人差心理學【名】〔哲〕こせいしんりがく〔個性心理學〕に同じ。

**しん-さつ** 新札【名】新に發行したる紙幣。新紙幣。

**しん-さつ** 振刷【名】さっしん〔刷振〕に同じ。

**しん-さつ** 審察【名】つまびらかに視察すること。

**しん-さつ** 神察【名】神の如く明かに察すること。きはめて鋭敏に洞察すること。

**しん-さつ** 診察【名】醫師が患者の病症を見分くること。

**しんさつ-じよ** 診察所【名】醫師が患者を診察する所。

**しんざつ-ぼう**【名】〔書〕しんさつはしんさ〔尻刺〕の訛か〕しんぼうぼう〔心張棒〕に同じ。

**しんさ-はうこくしよ** 審査報告書【名】審査したる事柄につきての報告書。

**しん-さん** 身三【名】〔佛〕十惡業・十惡業の中、身にて行ふ三つの事。即ち不殺生・不偸盜(ヤウ)・不邪淫及び殺生・偸盜・邪淫の總稱。飯田・柏崎「人間の身三・口四(ク)・意三の十の道多かりき」

**しん-さん** 神算【名】巧妙なるはかりごと。妙術。神策。

**しん-さん** 心算【名】心中の計算又は計畫。心計。胸算。心匠。

**しん-さん** 辛酸【名】〔書〕『味の酸きと辛きとに譬へていふ』しんく〔辛苦〕に同じ。辛酸を嘗む【句】辛苦に逢ふ。

**しん-さん** 深山【名】奥ふかき山。みやま。深山・大澤龍蛇を生ず【句】非常の地には非常のものを生ず。

**しん-さん** 新參【名】〔書〕主人に、新に仕ふること、又その人。しんざ。いままゐり。(古參に對して)〔書〕新しく加入すること、又その人。しんい。

**しん-さん** 進山・晉山【名】〔佛〕山に進む義。僧が新に一寺の住職となること。

**しん-さん** 神山【名】〔書〕神を祀れる山。〔書〕神又は仙人の住める山。蓬萊山。〔書〕くすしくけだかき趣のある山。篠山。

**じん-さん** 腎盞【名】〔醫〕じんう〔腎盂〕に同じ。

**しん-さんぎよく-わかしふ** 新三王和歌集【名】〔書〕後水尾院の鳴集集、中院通茂の老拔集、烏丸光榮(ミツ)の榮葉集の三集中の歌を撰抄して、題題としたるもの。二卷。

**しんさん-しき** 進山式・晉山式【名】僧侶が一山の住持となりて、入寺する法式。進院。進寺。

**しん-さんじふろくかせん** 新三十六歌仙【名】〔書〕後鳥羽院・土御門院・順德院・後鳥羽院・雅成(ヤス)親王・宗尊親王・道助入道親王・式子內親王・藤原良經・同道家・同公經・久我通光・藤原實氏・源實朝・藤原基家・藤原家良・慈鎮和尚・前大僧正行意・源通具・藤原定家・八條院高倉・後成卿女・宮內卿・讃岐門院少將・藤原爲家・同信實・同雅經・同家隆・同具親・源家長・鴨長明・藤原秀能(ヤス)の三十六人の和歌人。〔書〕前條の歌仙の和歌十首づつ凡て三百六十首を集めたるもの。

**しんざんまひ** 新參舞【名】昔、大名・旗本などに新に仕へたる者が、儀式としてなしたる舞。

**しんざん-もの** 新參者【名】「しんざんもの」に同じ。

**しんざんゐ-ちゆうじやう** 新三位中將【名】〔人〕たいらのしげいら〔平重衡〕の異稱。

**しんざん-もの** 新參者【名】しんざんゐもの〔新參者〕に同じ。新町笑話「家中に人もありしに、しんざものの某を人がましく思召されでや」

**じんざ-もみ** 甚三紅【名】承應の頃、京都長者町に住みし桔梗屋甚三郎の染めし染色。色は、紅梅に同じく、茜を用ひて染めしものにて、婦人の衣服の胴裏に用ひたり。

**しん-さや** 尻鞘【名】しりさや〔尻鞘〕の音便。

**しん-さらやしきつきのあまがさ** 新皿屋舗月雨傘【名】脚本の一。「播州皿屋舗」を換骨奪胎したるもの。魚屋宗五郎の妹お蔦、奸臣岩上典藏の意に從はず、讒せられて主人磯部主計介に井戸に斬捨てらる、宗五郎酒の勢に乘じて、磯部邸へ暴れ込み、終に理非明白になるといふ筋。河竹默阿彌の作。

**しんさゐゐん** 「委員。

**しんさゐゐん** 審査委員【名】審査を行ふ審査委員の會議。

**しん-さゐ** 伸子・篆・簇【名】布帛を洗張(ハリ)し、又は染むる時、布帛の兩緣に刺留めて、弓形に拡め張り、皺・襞などを伸すに用ふ





る、細き竹串。しいし。はばだし。狂言「鶯」「紙屋に足らぬ物ならば、篠組張のやうな物ではなかつたか」

**しん-し** 眞摯【名】實直にして、事に當りて拙まぬこと。まじめ。摯實。

**しん-し** 慎思【名】つつしみて思ふこと。

**しん-し** 脣脂・唇脂【名】脣に紅(ベニ)をさすこと、又その紅。

**しん-し** 脣齒・唇齒【名】〔書〕くちびると齒と。〔書〕密接なる利害關係を有する間柄の譬。國絲豐合鳥、大明・鞆組、向後唇齒の因をなし」

脣齒の國【名】利害關係の深密なること、恰も脣と齒とのごとき國。國際關係の親密なる國。

**しん-し** 信使【名】〔書〕つかひ。使者。

**しん-し** 信士【名】〔書〕まことある士。〔佛〕在俗のまま、佛法を信じて、受戒せる男子。しんじ。淸信士。信男。優婆塞(ソク)。在家人(ザイケ)。〔信女に對して〕たる男子の法名の下に添ふる語。しんじ。〔信女に對して〕「意志。

**しん-し** 心志【名】こころざし。おもはく。

**しん-し** 心思【名】おもふこと。おもひ。こころ。かんがへ。

**しん-し** 心師【名】我が心の師たるもの。

**しん-し** 神子【名】〔書〕神の子。〔基〕『英God's Son』救世主。キリスト。神の子。

**しん-し** 神姿【名】〔書〕神のすがた。〔書〕すぐれたる容姿。かうがうしき姿。

**しん-し** 神祠【名】神を祀れる祠堂。神社。

**しん-し** 深思【名】深く思ふこと。

**しん-し** 深紫【名】濃き紫色。

**しん-し** 深旨【名】深き旨意。深意。

**しん-し** 浸漬【名】水にひたすこと。水につくること。

**しん-し** 浸死【名】水にひたされて死ぬること。若鳳爲新死の类美麗」

**しん-し** 新死【名】あらたに死にたること。

**しん-し** 新紙【名】しんぶん〔新聞紙〕に同じ。

**しん-し** 新誌【名】新しき雜誌。

**しん-し** 新詩【名】〔書〕新作の詩。〔書〕新體の詩。佛事」

**しん-し** 新司【名】信任の國司。後漢「忠房朝臣津の守にて、新司はるかたが、まうけに屏風調じて」

**しん-し** 進止【名】〔書〕進むと止まると。〔書〕たちゐ、ふるまひ。坐作・進退。〔書〕進退・許否の命令。さしづ。〔國〕進退・許否して、思ふままに支配すること。さしづ。曼書「一國田地、帝皇進止實少、皆爲三寶之領」

**しん-し** 進士【名】〔書〕支那にて、科舉に及第せし者の稱號。周禮の王制には、五士の一とし、隋に至りて、始めて一科目となり、唐・宋も亦この科目を存して、他の科目よりも重要視し、明・淸に至りては、本科目のみとなり、淸朝滅後は、外國大學卒業者に就きて試驗を課し、及第したる者に與ふる稱號となりたり。〔書〕我が國にて、支那の制に倣ひ、古、式部省にて試驗を行ひ、諸官に登用するため、諸國より選拔したる才學ある人。神龜五年に始まる。「ふるきしんし」などに待らずば」

**しん-し** 進仕【名】進みて仕官すること。

**しん-し** 紳士【名】『紳を身に著ける士の義。しん〔紳〕・しんし〔搢紳〕を見よ』身がらのよき人・上流に位する人。

**しん-し** 親子【名】おやと子と。おやこ。

**しん-し** 臣子【名】臣たり子たる者。

**しん-し** 宸旨【名】〔しんきん〔宸襟〕を見よ〕天皇の御意・宸意。「と。

**しん-し** 震死【名】雷に打たれて死ぬること。

**しん-し** 嗔責【名】〔佛〕『嗔はだ・しん〔瞋嗔〕の略』布施せられたる物。

**しん-し** 鍼師【名】典藥寮の職員。鍼術の事を奉仕せしもの。

**しん-し** 振子【名】『黃蕚の義』古、道饗(ヤウ)の式を行ふ時に、方相氏に隨ふ小兒。朱衣・紺布・末額(ヒタ)を附く。小儺(ナヤ)。內要式「振子二十人」

**しん-し** 振子【名】〔理〕『英Pendulum』物體の重心外の一點を中心とし、重力の作用により、て振動せしむる裝置。普通にいふは單振子にて、伸縮することなく、また重さなき絲の一端に、質點即ち重さのみありて、體積無き錘を吊したるもの。(但し、實際において、小さくして重き錘を吊して造る外方法なし)また一の剛體の重心外の點を過ぐる眞線を軸として振動し得べきやう造りたるを、複振子といふ。これも長さの異なる無數の單振子の集合せるものと考ふるを得ふりこ。さげふり。

振子の周期【句】〔理〕『英Period of pendulum』振子の錘の、その振幅を一回往復するに要する時間。

振子の等時性【句】〔理〕『英Isochronism of pendulum』振子のその振幅小なる間は、地球上一定の場所においては、その周期が、錘の質量及び振幅の如何によりて變ずることなき性質。西曆一五八三年伊太利のガリレフ(Galileo)の發見に係れり。

振子の長さ【句】〔理〕『英Length of pendulum』單振子の支長と重點との間の長さ、即ちその絲の長さ。

**しん-し** 晉子【名】〔人〕榎木其角の雅號。

**しん-し** 身子【名】〔人〕しやりほつ〔舍利弗〕の譯名。太平記「昔、天竺に、身子と申しける聖聞(ヤウモン)」

**しん-し** 參差【名】長短齊しからず、又は互に交錯するさま。

**しん-し** 神慶【名】〔書〕天子の御印。玉璽。〔書〕やかのかたち〔八尺瓊曲玉〕に同じ。正倉院內侍所・神璽も芳野におはしませ」

**しん-じ** 心字【名】漢字の「心」といふ字。心字の池【句】「心」といふ字形に造りたる園池。

**しん-じ** 信璽【名】天子の御信印。

**しん-じ** 信士【名】〔佛〕しんし〔信士〕に同じ。

**しん-じ** 深慈【名】ふかきなさけ。

**しん-じ** 心事【名】〔書〕心に思ふ事。心の中に計畫せる事。〔書〕心に思ふ所と實際の事柄と。考と事實と。

**しん-じ** 神寺【名】しやじ〔社寺〕に同じ。

**しん-じ** 神宮【名】かんだち〔神館〕に同じ。

**しん-じ** 神事【名】神を祭ること。かむわざ。かみごと。しんじ。

**しん-じ** 臣事【名】臣として仕ふること。

**しん-じ** 眞事【名】まことの事柄。

**しん-じ** 眞字【名】楷書に書きたる文字。

**しん-じ** 進寺【名】〔佛〕しんさんじ〔晉山式〕に同じ。

**しん-じ** 新字【名】〔書〕新しく製作したる文字。〔書〕天武天皇の時、壬部石積(ヤウ)等に命じて、漢字に擬して、新に造らしめし文字。皇・神などの類。

**しん-じ** 審事【名】陸軍裁判所及び陸軍軍法會議の職員の一。獄審に從事せし勅任官又は奏任官。明治十五年設置、同十九年廢止。しんじも〔審事補〕參照。

**しん-じ** 眞時【名】〔天〕〔英true time〕しんたいやうじ〔眞太陽時〕に同じ。

**しん-じ** 心耳【名】〔書〕精神と耳と。〔書〕〔醫〕脊椎動物の心臓內腔の上半。魚類にありては一箇にて、諸體部より還り來る靜脈血を受け、肺を用ひて呼吸する脊椎動物にありては、左右二室に區別せられ、右側なるは、靜脈血を諸體部より受け、左側なるは、動脈血を肺より受く。しんし〔心室〕參照。心耳を清(ヤウ)す【句】精神と耳とを淨らかにす。

**じん-し** 迅駛【名】はやきこと。

**じん-し** 尋思【名】よく考ふること。

**じん-し** 仁祠【名】〔書〕衆民に仁惠を與ふる社寺。平家「叡岳に至りては、帝都東北の仁祠として、國家靜謐の請願を致す」

**じん-し** 仁慈【名】いつくしみめぐむこと。

**じん-し** 人事【名】〔書〕人の爲すべき事柄。〔書〕人間社會の事柄。〔書〕おくりもの〔贈物〕〔書〕に同じ。〔國〕男女の交接。いろごと。〔書〕人の一身上に關する事項、又、人の身分能力に關する事項。「人事相談所」「人事局」人事を解せず【句】色慾を知らず。性慾起らず。

人事を盡して、天命を待つ【句】『支那唐の傳時が戒子書に「盡人事・聽天命・可也」とあり』人力の及ぶ限りは事を忘ら子して、その成否は天運に任す。〔諺語〕

**じん-じ** 神事【名】じんじ(神事)に同じ。
**じん-じゅう** 神秀【名】神の如く、靈妙に秀づること。秀靈。
**じん-しゅう** 新秋【名】秋の初。はつあき。
**じん-しゅう** 新愁【名】あらたなるもの思ひ。あらたなるうれひ。
**じん-しゅう** 深愁【名】ふかきうれひ。
**じん-しゅう** 神州【名】〔地〕■大日本帝國の美稱。神國。皇國。■支那人が自國を指していふ尊稱。
**じん-しゅう** 信州【名】〔地〕しなの(信濃)□に同じ。
　信州の四頭【句】武田信玄の時代に於ける信濃國の四侯、卽ち村上・小笠原・諏訪・木曾の四氏。
**じん-じゅう** 仁獸【名】〔動〕『公羊傳に、麟者仁獸也、有二王者一則至』とある本づく。『春りん(麒麟)の異稱。百日曾其、麟は仁獸にして、生けるを喰はず、生草を踏まずといへり』
**じん-しゅう-くわん** 進修館【名】豐前國下毛(シモツケ)郡中津町に在りし、舊中津藩の學校。藩主奥平昌高創立し、廢藩の際廢す。
**じん-しゅう-だんじ** 神州男兒【名】日本國の男兒。
**じん-しゅう-ななこ** 信州斜子【名】信濃國松代(マツシロ)附近より產出する斜子。
**じん-しゅう-りう** 信州流【名】をがさはらりう(小笠原流)□に同じ。
**じん-しゅ-かん** 脣齒音・脣齒音【名】〔語〕『英labio-dentes』上齒と下脣とを用ひて發する子音。國語には、この音なし。英語のf・vは、これなり。
**じん-じ-かさがけ** 神事笠懸【名】神社の祭祀に興行する笠懸。的には鹿・雉・鴨・鯉などの贄(ニヘ)を用ふ。八幡社・諏訪社などにて行はる。
**じん-しき** 深識【名】ふかき智識。ふかき見識。(淺識に對して)
**じん-しき** 新式【名】あたらしき法式。新樣。(舊式に對して)
**じん-しき** 審識【名】つまびらかに識ること。
**じん-しき** 心識【名】〔佛〕心と識と。小乘俱舍にては、兩者を同體異名とし、大乘唯識(ユイシキ)にありては、別體と見る。
　一圓の心識【句】〔佛〕■『古、心臟を意識の存する處と考へしよりいふ』しんさう(心臟)に同じ。■心王と心所との總稱。
**じん-しき** 身識【名】〔佛〕五識・六識また八識の一。身根によりて、外物を知覺すること。
**じん-しき** 眞識【名】〔佛〕■妄念を離れたる心識。卽ち六識中の意識の淨心。■生滅の相を離れたる眞心。
**じん-しき** 神識【名】精神。靈魂。
**じん-しき** 身色【名】身體の色。舊曲・歌古
**じん-じ-きん** 眞字金【名】『眞字にて「文」の字の添刻ありよりいふ』げんぶんきん(元文金)に同じ。
**じん-じ-ぎやうせい** 人事行政【名】〔法〕公益行政の一。人の法律上の地位を明かにする目的とするもの。
**じん-じ-きょく** 人事局【名】陸・海軍兩省にある一局。陸海軍武官・文官の進退、任免・補職・命課・勾俸・休職・停職・職役・備役その他人事に關する一切の事務を掌る所。
**じん-じ-くわんけい-じけん** 親子關係事件【名】親子の身分關係にかかる訴訟事件。
**じん-じ-こばん** 眞字小判【名】げんぶんこばんき(元文小判金)に同じ。
**じん-じ-さう** 人字草【名】〔植〕『花舞の並列せる形、人の字に似たるよりいふ』虎耳草(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。山間に自生す。葉は根生、花莖は葉間を出て、夏季に、白色の小花を開く。
**じん-じ-しふ** 壬二集【名】〔書〕みにしふ。壬二集を見よ。
**じん-じ-ぜい** 神寺稅【名】古、神田・寺田より、その神社・佛寺に納めし稅。
**じん-じ-そしよう** 人事訴訟【名】〔法〕人の身分・能力に關する事件。卽ち婚姻事件・親子關係事件・相續人廢除事件・隱居事件・禁治產・準禁治產及び失踪等につきての訴訟。
**じん-じ-そしよう-てつづき-はふ** 人事訴訟手續法【名】〔法〕人事訴訟の手續を規定せる法律。明治三十一年の公布。
**じん-じ-たな** 神祀棚【名】棚の一種。床の間・書院などの脇に設け、その內部に神を祀るもの。
**じん-じち** 眞實【名】じんじつ(眞實)に同じ。〔古語拾遺〕「しんじちにはあらねど、うれしくこそあれ」源氏「しんじちの親のやんごとなく思ひ捉てたまへらんを」
**じん-じ-つかさ** 人事長【名】鎭守府司令長官の幕僚の一。麾下の職員の人事に關する事務を掌るもの。
**じん-じつ** 秦室【名】支那の秦の王室。保元「秦室七世の風に歸りき」
**じん-じつ** 寢室【名】睡眠する室。ねま。
**じん-じつ** 清室【名】支那の清朝の王室。
**じん-じつ** 新室【名】■あたらしき室。新にまつくりたる室。■あたらしき妻。にひづまはなよめ。新婦。
**じん-じつ** 心室【名】〔動〕心耳と共に、脊椎動物の心臟の一部をなすもの。心耳の下に位し、魚類にありては、ただ一室ありて、血液を鰓(エラ)に送り出し、氣化の後、動脈血となりて、身體諸部を循環せしむる用をなし、肺に行ひて呼吸する脊椎動物にありては、一室乃至左右二室より成り、一室なる時は、動脈・靜脈・兩種混合の血液を肺及び身體諸部に送出し、二室なる時は、右側の室は、同側の心耳より移る靜脈血を肺に、左側の室は、同側の心耳の受けたる動脈血を全身に送出す用をなす。「ひ。精神病。
**じん-じつ** 心疾【名】心のやまひ。きちがひ。
**じん-じつ** 滲漏【名】しみうるほふこと。
**じん-じつ** 信實【名】まめやかにして、いつはりなきこと。正直。
**じん-じつ** 親昵・親暱【名】したしみ睦むこと。親近。
**じん-じつ** 眞實【名】■いつはりにあらぬこと。心中實眞也、眞實の子を持つと思召せ」■忠實。誠實。■〔佛〕絕對の眞理。眞如。眞諦。
　眞實中道一如(ニヨ)の法【名】〔佛〕虛妄ならず、偏僻ならず、平等にして差別無く、常住にして變らざる法界の眞理。野守鏡「眞實中道一如の法、なほ以て空・假の二法を具足して」
**じん-じつ** 迅疾【名】じんそく(迅速)に同じ。
**じん-じつ** 人日【名】『東方朔の古書に、元日には雞を、二日には犬を、三日には猪を、四日には羊を、五日には牛を、六日には馬を、七日には人を占む由記せるよりいふ』元節句の一。陰曆正月七日。ななくさ。人の日。
**じん-じつ** 壺日【名】■月の末日。晦日。■年の末日。大晦日。
**じん-じつ** 壺日【副】ひねもす。終日。
**じん-じつ-たい** 眞實體【名】じったい(實體)に同じ。
**じん-じつ-てがた** 眞實手形【名】〔商〕『英Bonafide bill』債權・債務の實際に發生又は存在する際に、作成する手形。空手形に對して)
**じん-じつ-はらかん** 眞實報恩【名】〔佛〕眞實に四恩を感じて、報謝すること。保元「眞實報恩の道」
**じん-じつ-ばう-むげくわう-によらい** 盡十方無碍光如來【名】〔佛〕あみだにょらい(阿彌陀如來)の異稱。
**じん-じつ-はうし** 眞實報士【名】〔佛〕じっぽふし(實法士)に同じ。
**じん-じ-ときんじゆつ** 浸漬鍍金術【名】物品を單に各種鍍金液に浸して、附着せしむる鍍金法。
**じん-じ-にぶきん** 眞字二分金【名】次條に同じ。
　「略。
**じん-じ-にぶばん** 眞字二分判【名】次條の
**じん-じ-にぶばんきん** 眞字二分判金【名】江戸時代の通貨の一。文政元年より同十一年まで發行し、天保六年廢止せられし二分判金。眞字にて「文」の字の篆印あり。草字二分判金と合はせて、文政二分判金と呼ばれたり。眞文二分判金。眞文二分金。
**じん-じ-のう** 神事能【名】古、春日神社の神







事に興行せし舞曲。春日神社に仕へし猿樂師圓滿井(ヱンマヰ)といふ者、田樂より工夫して、新曲を作り、振付(フリツケ)を創意せしに始まり、後弘く諸社の神事に用せらるるに至れり。
**じん-じ-はじより** 神事端折【名】ちんちはじより(ちんぢ・端折)を見よ。
**じん-じ-はふ** 人事法【名】〔法〕人の能力及び身分に關する法規。
**じん-じ-びや** 〈英(ginger beer)の訛〉【名】清涼劑の一。生薑(ショウガ)を潰して、熱湯を注ぎ、酒石酸・砂糖・麥麴を加へて製したる沸騰性飲料。じんじんびや。
**じん-しふ** 震慴【名】しんせふ(震慴)に同じ。
**じん-しふ** 新澀・新渋【名】今年新にしぼりたる柿液。
**じん-じふ-きやう** 神事奉行【名】毎年の放生會の時、八幡宮の神事を奉行せし職。
**じん-しふ-けう** 神習敎【名】神道の一派。唯神の道不言の敎を遵奉し、國典を修明し、實祚の無窮・國運の隆盛を祈り、國民の本分を全うするを主旨とす。明治十七年に芳村正秉(マサノ)の唱へしもの。
**じん-じ-ふせい** 人事不省【名】全く知覺を失ふこと。喪神。
**じん-じ-ふはちばん** 新十八番【名】しんぶきじふはちばん(新歌舞伎十八番)の略。
**じん-しふね** 新拾遺【名】〔書〕次條の略。
**じん-しふね-しふ** 新拾遺集【名】〔書〕次條の略。
**じん-しふね-わかしふ** 新拾遺和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。藤原爲明の、後光嚴院の命を奉じて、撰進せし歌集。爲明中途にして歿せしかば、戀・雜の部は、頓阿法師これを撰みたり。二十卷。
**じん-しへい** 新紙幣【名】新しき紙幣。
**じん-しへ-ぺっさいしふ** 清詩別裁集【名】〔書〕しいそうびっさいしふ(五朝詩別裁集)を見よ。
**じん-じ-ほ** 審事補【名】陸軍裁判所又は陸軍軍法會議の職員。審事の事務を見習ひし判任官。
**じん-しまばら** 新島原【名】〔地〕『京都の島原に擬して命名せしもの』今の東京市京橋區新富町で、明治元年遊廓を設けし時の屋敷跡にて、明治四年吉原遊廓內へ移轉せし後は、新富町と改稱せしもの。島原。
**じん-しまり** 眞締【名】表面はしまりなきが如くなれども、心底にしめくくりのあること。
**じん-しん** 信臣【名】■信頼する臣。寵臣。■信使として遣はされし臣。
**じん-しん** 親臣【名】したしき臣。信頼すべき臣。
**じん-しん** 親信【名】親近して、信用すること。
**じん-しん** 搢紳・縉紳【名】『笏を紳(大帶)に搢(ハサ)む人の義。縉は搢と同じく、下の紳の字に引かれて、偏の變化せるもの』官位自分の高き人。
**じん-しん** 眞信【名】まことの信心。眞の心。
**じん-しん** 眞心【名】■まことの心。まごころ。■〔佛〕眞實にして妄ならざる心。
**じん-しん** 新進【名】あらたに世に進み出でたること、又その人。「新進の後生」
**じん-しん** 心神【名】こころ。精心。
**じん-しん** 心神喪失【名】喪失のため、或は他に原因して、精心の活力を缺くこと。きゝぬけ。
**じん-しん** 心神耗弱(ヨワ)【句】心神喪失より輕けれど、心神衰へて、行爲の利害を識別する力の乏しきに至れること。
**じん-しん** 心身【名】心と身體と。
　心身相關【句】〔哲〕心理と生理とは、その作用・活動の直接に關係あること。例へば心に怒を生ずれば、身體にもそれに適應せる狀の現るる類。
**じん-しん** 神心【名】神の心。
**じん-しん** 身心【名】身體と心と。
**じん-しん** 眞身【名】■眞の肉體。畫像・木像等に對して)■〔佛〕理智冥合の法身。
**じん-しん** 身神【名】身體と精神と。からだとこころと。
**じん-しん** 振振【副】■鳥の群り飛ぶさま。■盛なるさま。■信厚なるさま。
**じん-しん** 森森【副】■木の高く鬱ゆるさま。こんもり。■或あり十木の高く、奥深く重みあるさま。川中島合戰「森森たる人品千丈の松の如く」
**じん-しん** 蓁蓁【副】桃の葉の盛んに茂るさま。
**じん-しん** 榛榛【副】種種の草木の亂れ茂れるさま。
**じん-しん** 岑岑【副】肉體のうづき痛む感ずるさま。
**じん-しん** 涔涔【副】■雨のしげきさま。■汗・涙などの流るるさま。
**じん-しん** 津津【副】さかんに湧出づるさま。「趣味津津たり」
**じん-しん** 駸駸【副】■『詩經の小雅四牧篇に『駕彼四駱、載驟駸駸』とあるに本づく』馬の速かに走るさま。■物事の進歩するさま。
**じん-しん** 深深・沈沈【副】■夜の靜かに更けゆく狀。百合若大臣野守鏡湯口の燈明しんしんと眠れば人も寢入るらん」■奥深くしづかなるさま。一代女「風しんしんと、杉村のこなたは、稻荷の鳥居のほとりにて」■恭さの身に沁みわたるさま。
**じん-しん** 申申【副】ゆったりしたる狀。「まゝ身のくつろげる狀。
**じん-しん** 新新【副】次第に新しくなるさま。
**じん-じん** 神人【名】■神と人と。■神のごとき人。神通力を得たる人。仙人。■神に奉仕する人。かんなぬし。じにん。保元香椎(カシヒ)宮の神人等」
**じん-じん** 眞人【名】『莊子の天下篇に見ゆ』道德の高き人。まことの道を體得したる人。道家にて、儒敎における聖人と同樣の意に用ふ。しんにん(眞人)參照。
**じん-じん** 新人【名】■新しく娶りたる妻。〔書〕『英young wife』悔い改めて、靈の生活に入れる人。新生の人。
**じん-じん** 津人【名】わたしもり。
**じん-じん** 深仁【名】ふかきめぐみ。
**じん-じん** 深潭【名】ふかきふち。深淵。
**じん-じん** 審訊【名】つまびらかに訊問すること。
**じん-じん** 信心【名】■信仰する心。信念。大乘經「愚癡の衆生信心さめ、佛法を疑ひ」■信仰して祈念すること。祈願。■〔佛〕阿彌陀如來の他力本願にのみ歸依して、自力の心を拋つこと。あんじん。(眞宗の語)
　信心決定(ケツヂヤウ)【句】〔佛〕疑念をさしはさまざる信心。御文章「この三首の歌の心は、初は一念歸命の信心決定の姿を詠みはんべりぬ」
　信心過ぎて、極樂を通り越す【句】宗教に凝りすぎるを誡めたる語。(諺語)
　信心の家には、惡魔來らず【句】信心する者の家には、佛神加護するゆゑに、惡魔入り來らず。(諺語)
　信心も德の餘(ヨ)【句】信心するも、生活に餘裕ありての上の事なり。後生は德の餘(諺語)
**じん-じん** 信神【名】神を信仰すること。かみしんじん。
**じん-じん** 壺心【名】『孟子の盡心上篇に『盡其心者知其性也、知其性則知天矣』とあるに本づく』心のほとを盡すこと。
**じん-じん** 靈臣【名】『詩經の大雅文王篇に出で、その疎に『蓋忠愛之篤、進進無已也』とあり。蓋は進の義。蓋忠なる臣』ぢうし(忠臣)に同じ。
**じん-じん** 人臣【名】けらい。臣下。
**じん-じん** 人身【名】■人のからだ。人の身體。■個人の身の上。『人身攻擊』
**じん-じん** 人心【名】■人のこころ。■『書經の太禹謨篇に『人心惟危、道心惟微』とあり』本來の性にあらぬ心。私心。人慾。人心は測り難し【句】『史記の淮陰侯傳に『蒯通說二韓信一曰、常山君成安君、二人相與、天下至矚也、然而卒相禽者、患生二於多慾一、而人心難一測也』とあり』人の心は測り知るべからず。(諺語)
　人心の同じからざること、その面(ツラ)の如し【句】次條に同じ。
　人心は面の如し【句】『左傳の襄公三十一年の條に『人心不一同如二其面一焉』とあり』人各心の同じからざるは、その面貌

の異なれるがごとし。〔誘語〕 「心。

**じん-しん** 仁心【名】めぐみ深き心。仁慈の心。

**じん-しん** 深信【名】〔佛〕深固の心を以て、法を信ずること。

**じん-しん** 深心【名】〔佛〕三心の一。深く佛の教を信じて、疑ひ變ずること無き心。きはめて深遠なること。太無「この翁どもの命はまれなること、甚深甚深希有(ケウ)希有なりとは、これを申すべきなり」

**じん-しん** 壬申【名】十干の壬(ミヅノエ)と十二支の申(サル)とに當れる年。

壬申の亂【句】天智天皇の崩後壬申の歳における、弘文天皇と大海人(オホアマ)皇子(天武天皇)との爭亂。弘文天皇敗れて、近江の山前(ヤマザキ)に崩ず。

**じん-じん** 仁人【名】同情深き人。仁者。

**じん-じん** 人人【名】ひとびと(人人)に同じ。

**じん-じん-か** 信心家【名】信心する人。信心者。

**じん-じん-きうりがく** 人身究理學【名】せいりがく(生理學)に同じ。

**じん-じん-ぎやくとく** 信心獲得【名】〔佛〕あんじんけつちやう(安心決定)に同じ。〔眞宗の語〕

**じん-じん-けん** 人身權【名】〔法〕人格權と身分權との總稱。

**じん-じん-こうげき** 人身攻擊【名】一個人の行爲を發(ハツ)きて、その人の身の上を攻擊すること。

**じん-じん-さうくわん** 心身相關【句】じんじん(心身)の條下を見よ。

**じん-じん-さつしつ** 心神喪失【句】じんじん(心神)の條下を見よ。

**じん-じん-さうしつ-しや** 心神喪失者【名】

**じん-じん-しや** 信心者【名】じんじんか(信心家)に同じ。

**じん-じん-ぜい** 人身稅【名】各個人の存在事實を基礎として、課稅の單位に定むる稅。

**じん-じん-せいりがく** 人身生理學【名】せいりがく(生理學)に同じ。

**じん-じん-だうりう** 眞神道流【名】柔術の一流。揚心流より出でたる山本英早(ヒデ)を祖とす。

**じん-じん-とうけい-せつ** 神人同形說【名】〔哲〕きじんとうけい(擬人說)に同じ。

**じん-じん-とうけい-ろん** 神人同形論【名】〔哲〕前條に同じ。

**じん-じん-とうじやう-せつ** 神人同情說【名】〔哲〕『英Anthropopathism』擬人說の一。神が人間同樣の感情及び情慾等を有すといふ說。希臘(ギリシヤ)古代の多神教の類。

**じん-じん-は** 眞心派【名】〔佛〕日蓮宗の一派。不受不施派に類するもの。

**じん-じん-ばいばい** 人身賣買【名】人身を賣買すること。

**じん-じん-ばしより** 神事端折【名】じんじんばしより(神事端折)の誤。

**じん-じん-びや** 新人物【名】新進の人物。

**じん-じん-へいかう** 身心並行【名】〔哲〕せいじんぶつりてきへいかう(精神物理的並行)に同じ。

**じん-じん-へいかう-せつ** 心身並行說【名】〔哲〕次條に同じ。

**じん-じん-へいかう-ろん** 心身並行論【名】〔哲〕せいじんぶつりてきへいかうろん(精神物理的並行論)に同じ。

**じん-じん-りう** 新心流【名】せきぞりりう(關口流)に同じ。

**じん-じん-りやうせい-せつ** 神人兩性說【名】『英Parapsychism』基督は神人の兩性を俱有すと唱ふる神學上の立脚地。神人兩性論。基督兩性論。

**じん-じん-りやうせい-ろん** 神人兩性論【名】前條に同じ。

**じん-じん-ろん** 信神論【名】〔哲〕いうしんろん(有神論)に同じ。

**じん-じん-ろん** 親炙【名】『親近して薫炙せらるる義』親しく接して薫陶せらること。弟子が直接に先生に就きて學ぶこと。

**じん-しや** 辰砂【名】〔藥〕『支那辰州の產、最も良品なるよりいふ』水銀の硫化物。多くは塊狀又は土狀をなし、小結晶又は粒狀をなす。透明乃至不透明にして、深紅色・金剛光澤を呈し、比重重し。水銀の原鑛として、重要なり。我が國にては、大和・肥前・伊勢・阿波の諸國より少量を產す。

**じん-じや** 眞蛇【名】能(ノウ)の假面(ヅラ)の一。「紅葉狩」・「羅生門」等の鬼物に用ふるもの。

**じん-じや** 信者【名】宗教を信仰する人。一心の人。

**じん-じや** 人車【名】〔鐵道〕しんりきしや(人力車)に同じ。 ▣人車鐵道の車輛。

**じん-しや** 仁者【名】めぐみ深き人。仁心のある人。仁人。

仁者は愛へや【句】『論語の子罕篇に「仁者不憂」とあり』仁者は心寬にして、命を知るが故に、往くところとして自得せざることと無きゆゑに、憂ふるところなし。〔誘語〕

仁者は敵無し【句】『孟子の梁惠王篇に「仁者無敵」とあるに本づく』博愛の者には、敵對する者なし。〔誘語〕

仁者は山を樂しむ【句】『論語の雍也篇に「仁者樂山…仁者壽」とあり』仁者は義に安んじ、命を知るがゆゑに、重厚にして遷ちさること山の如し、故に山を樂む。〔誘語〕

**じん-じや** 神社【名】神の鎭坐せる所。神を祀り、公衆の參拜の用に供したる建物。かみのみや。かみのみやね。やしろ。ほこら。

**じんじやあ-ええる** (英Ginger ale)【名】一種の混成酒。生薑(ショウガ)を加へたる黃褐色の夏季飲料。炭酸瓦斯及び少量の砂糖を含む。

**じん-しやう** 眞性【名】〔佛〕宇宙の眞實の本質たる道理、又これを受けたる吾人本來の心體。眞如の理。

**じん-しやう** 眞症【名】〔醫〕まことの病症。(類似症に對して)

**じん-しやう** 新粧【名】あらたなる化粧。

**じん-しやう** 新官【名】『未じ官へ食し新』とあり。官は、支那において、秋・新穀を廟に薦めて、神を祭ること。▣新穀を神にささぐること。 ▣天子の、新穀を食せらること。にひなめ。にひなめさい(新嘗祭)參照。

**じん-しやう** 信賞【名】賞すべき功勞ある者は、必ずこれを賞すること。

信賞必罰【句】『後漢書の宣帝紀贊に、「孝宣之治、信賞必罰」とあり』賞罰の嚴重なること。

**じん-しやう** 神藥【名】 ▣神に供ふる飲物。 ▣不思議に湧出して、靈驗ある飲物。

**じん-しやう** 神牀【名】神を安置する床。

**じん-しやう** 參商【名】 ▣參星と商星と。 ▣『參と商の兩星宿の相隔たれるに譬へていふ』遠く相離るること。

**じん-しやう** 針匠【名】針を作る人。

**じん-しやう** 心匠【名】 ▣工事の見積を、心中にて定むること。 ▣事を心の中でたくむこと。心計。心算。

**じん-しやう** 紳商【名】身柄よき商人。上流の商人。

**じん-しやう** 紳章【名】憲警の佳民中、學識・名望ある者に、總督府より授くる徽章。

**じん-しやう** 身章【名】『左傳に「衣身之章」とあるに本づく』 ▣身のかざり。 ▣衣服。

**じん-しやう** 身上【名】 ▣一身に關する事柄。みのうへ。しんじやう。 ▣資產。身代。財產。 ▣その人の價値・長所。「あれが彼の身上だ」〔俚語〕 ▣俳優の給金。

身上が廻(マハ)る【句】豐かなりし家のくらしむきが苦しくなる。身代がまはる。

**じん-しやう** 心象【名】〔哲〕『英Image』感覺もしくは感覺的要素の、心中に再生したるもの。

**じん-しやう** 心性【名】〔佛〕不變の心體。吾人本有(ホウ)の清淨なる心。眞心。 後拾遺記「心性みなもと清ければ、衆生すなはち佛なり」

**じん-しやう** 眞正【名】〔佛〕しんせい(眞正)に同じ。

**じん-しやう** 眞情【名】いつはりのなき心。まごころ。

**じん-じやう** 心狀【名】心のありさま。





**じん-じやう** 心情【名】心の趣。こころ。こころもち。

**じん-じやう** 心上【名】心のうち。こころ。 ▣紀貫之集「心上の須彌山是れに在り」

**じん-じやう** 親情【名】親しむ心。

**じん-じやう** 身上【名】 ▣しんじや(身上)に同じ。女殺油地獄「不孝の淚上、身上の破滅」 ▣身體の上。からだ。みうち。太平記「身上の衣」

**じん-じやう** 申狀【名】願書の訴狀。「鎌倉・室町時代の語」

**じん-じやう** 進上【名】 ▣たてまつること。まゐらすること。進呈。獻上。 ▣長者に上る書翰の上書に用ひて、敬意を表する語。 ▣『後漢書』「過上、采女正殿」

**じんじやう** 審祥【名】〔人〕高僧。我が國華嚴宗の開祖。もと新羅の人。唐に遊學して、賢首大師に華嚴を受け、天平年間我が國に來りて、大安寺に留まり、眞辨の乞によりて、華嚴經を講じ、天平十二年より十四年に至りて講を終り、同年に寂す。

**じんじやう** 眞盜【名】〔人〕高僧。我が國天台宗眞盛派の開祖。俗姓は紀。比叡山に在ること二十年。後、黑谷の青龍寺に隱れて、大藏經を閱し、西敎寺を再興す。また足利義政及び土御門天皇に圓頓戒を授く。明應四年寂す。年五十三。永正三年圓戒國師・明治十六年慈攝大師の諡號を賜はる。

**じん-じやう** 新庄【名】〔地〕 ▣羽前國最上(モガミ)郡にある町。最上川平原の一部なる新庄平野の中心地。郡役所を置く。戸澤氏の舊藩地。 ▣大和國北葛城(カツラギ)郡の村。永井氏の舊藩地。 ▣姓氏の一。藤原氏より出で、駿河守直親の後なり。足利氏の末に、近江國坂田郡新庄城に居る。慶長九年常陸國麻生に封ぜられ、明治維新後、子爵を授けらる。

**じん-じやう** 尋常【名】 ▣八尺と一丈六尺と。 ▣僅かなる尺度。「尋常の布」 ▣極端ならぬこと。なみ。普通。通常。 ▣『普通なるは、即ち惡しからぬ意なるより轉じていふ』すぐれたること。殊勝。上品。立派。平治物語「年ごろ、この御所へ參るとは、皆人知れりとて、尋常に出でたたせて」太平記「敵ながらも、弓矢取って、尋常に死したる者哉と譽め人こそ無かりけれ」 ▣大男のおそろしげなるが、さすがに尋常げなり」

尋常一樣【句】普通と異なるところなきこと。なみひとと同じ。

**じん-じやう** 盡淨【名】〔佛〕執著を脫して、身心の全く淨きこと。眞空にして、一切の情執を留めざること。

盡淨鑛融(ユウ)の演說【句】〔佛〕『諸法皆空にして、自性(ジシヤウ)なきが故に、虛通融鎔して同一如なる窟』釋迦の一代五時の說法中の第四、卽ち般若經の所說。この經の所說は、二乘の人の免れがたき法執を斷ちて、つひに法華の中道實相に入らしむる階段にして、釋迦は二十二年間にこれを說けりといふ。じじゅう(五時教)參照。太平記「釋尊…正覺を成じし後、頓大三七日、過小十二年、盡淨虛融の演說三十年、一實無相の開顯八箇年」

**じんじやうえふ** 尋常葉【名】〔植〕『英Pteris longifolia』針形卷瓣などに變形せぬ普通の葉。

**じん-しやうがい** 新生涯【名】從前と異なりたる生活。新しき處世法。しんせいがい。

**じんじやう-かうとう-せうがくかう** 尋常高等小學校【名】尋常小學校の教科と高等小學校の教科とを一校に併設するもの。

**じん-しやう-がき** 身上書【名】『じんしやう(身上)に圓を見よ』俳優の一年間の給金を記して、興行主と俳優との間に取りかはす契約書。

**じん-しやう-きむ** 身上義務【名】〔法〕身體上又は精神上の勤勞を目的とする義務。例へば兵役義務の類。

**じん-しやうぐん** 新將軍【名】新に任命せられたる將軍。

**じんじやう-けいさつ** 尋常警察【名】〔法〕

**じんじやう-ちゆうがくかう** 尋常中學校【名】あうがくかう(中學校)の舊稱。

**じんじやう-てつだう** 尋常鐵道【名】普通の軌幅を有する鐵道。我が國にては三呎六吋、西洋にては四呎八吋半を有するもの。

**じん-じやうとうもんゐん** 新上東門院【名】〔人〕誠仁(ヒトヒト)親王の御息所(ミヤスドコロ)。後陽成天皇の御母。內大臣藤原晴右(ハルスケ)の女。御名は秀子、一說に晴子。阿茶(サ)の局と稱し、三宮に准ぜられ、元祿六年薨ず。御年七十六。

**じん-じやうに-よらい** 新成如來【名】〔佛〕本地より垂跡(スイジヤク)せる如來。垂跡の佛。

**じん-じやうは** 眞盛派【名】〔佛〕天台宗三派の一。眞盛を祖とし、近江國滋賀(シガ)郡坂本村なる西敎寺を本山とす。

**じん-じやうばこ** 進上箱【名】進物を入る箱。若眞盛「是れを二階の各樣へと、進上箱一つわたして」

**じんじやうひしんけい** 針狀披針形【名】〔植〕針形を帶びたる披針形。

**じん-じやうひつぱつ** 信賞必罰【句】じんじやう(信賞)の條下を見よ。

**じん-じやうふ-しやう** 眞性不生【名】〔佛〕眞如の道理は、萬有の不滅を意味すること。 後拾遺「眞性不生の道を示し」

**じん-じやうみやく** 腎靜脈【名】〔醫〕腎臟內にて、老廢物・卽ち尿を吸收られて、清淨になりたる血液を、下行大靜脈に入らしめ、その內を流るる血液と共に心臟に歸らしむるもの。〔腎動脈に對して〕

**じん-じやうまめ** 眞盛豆【名】『眞盛寺の尼の創製せしによる』黑大豆を炒(ヘ)り、青芥子の葉を揉りて、水に浸き、衣とした る菜子。こけむすまめ。こけまめ。

**じん-じやうもち** 身上持【名】じんたいもち(所帶持)に同じ。

**じん-じやう-もの** 進上物【名】進上する品物。進物。 狂言「目出度」「何方へ、進上物になさるるとあっても」

**じん-じやう-やき** 新庄燒【名】羽前國最上(モガミ)郡新庄町より產出する陶器。天保中、酒井(サカイ)彌兵衛(ヤヘ)が製出せる創り、次第に聲價を得て、多額を產出するに至れり。最上燒。

**しんじゆう-ゆわう** 針狀硫黃【名】〔化〕針狀に結晶せる硫黃。熔けたる硫黃の固まりはじめたる時、殘部の液を流出せしむる時に得る。

**しんじやう-れんがふ** 身上聯合【名】〔法〕『獨 Personalunion』二箇以上の國家が、同時に同一の君主を戴き、各獨立の領土を統御するもの。

**しんじやうれんがふ-こく** 身上聯合國【名】〔法〕身上聯合をなせる國。君合國。

**しんじやう-ゑ** 新嘗會【名】にひなめまつり（新嘗祭）に同じ。

**じんじや-かう** 神社考【名】〔書〕漢文にて、二十二社をはじめ、著名の神社及び靈異方術などを記せるもの。三卷。林道春の撰。一名、本朝神社考。

**じんじやき** 人車記【名】〔書〕『人車は信範の二字の省文』兵部卿平信範の記錄。近衛天皇の久安五年より高倉天皇の寫應元年までの事を記せるもの。寫本三十四冊。一名、兵範記・平信記・平兵部記・平洞記・北隣記。

**じんじや-きよく** 神社局【名】內務省の一局。神社・神官・神職に關する事項を取扱ふ所。

**しん-しやく** 新釋【名】あらたに解釋すること、又その解釋したるもの。

**しん-しやく** 斟酌【名】〔水又は飲料などを酌みわけ、また酒などを酌みかはすこと。〕〔照らし合はせて取捨すること。事情・場合などをくみわけて、計らふこと。本平記『かかる事には、謀作・謀計などもあるぞかし。卒爾には、いかが申し入るべきと斟酌して』〕〔控目にすること。遠慮。辭退。蘆家草『阿呆な斟酌仕過いて、湯の辭儀は水になる』〕

**じん-しやく** 人爵【名】『孟子の告子上篇に「有二天爵者一有二人爵者一……公卿・大夫・此人爵也」とあるに本づく』爵位階級など、すべて人間社會の作り設けたる稱書。（天爵に對して）

**じん-しやく** 仁爵【名】なさけ深くして、柔弱なること。

**しん-しやく-がほ** 斟酌顏【名】斟酌する顏附。ひかへ目にする樣子。夏目漱太子『倫敦塔』『あぶないことをと斟酌顏』

**しんじやく-ほふしんわう** 眞寂法親王【名】〔人〕高僧。宇多天皇の皇子。俗名は齊世（ナリヨ）。母は橘廣相（ヒロミ）の女。圓城（ヘンジヨウ）宮、又、法三宮と稱す。出家して、眞言宗の奧旨を究む。延長九年薨ず。

**じんじや-けいもう** 神社啓蒙【名】〔書〕全國數百社の緣起行事などを考說したるもの。八卷。白井宗因の著。

**じんじや-けんちく** 神社建築【名】〔美〕神社に關する建築。大社造・神明造・大鳥造・住吉造・春日（カスガ）造・流造・八幡造・日吉造・權現造等の種類あり。

**じんじやさいさん** 神社財產【名】神社に屬する動產及び寶物の、地方廳保管の神社財產登錄簿に登錄せられたるもの。

**じんじやだいしやう** 深沙大將【名】〔佛〕佛教の守護神の一。玄奘三藏渡天の時、流沙河にて遇ひし神なるより、深沙と呼ぶといふ。太山府君の化身（ケシン）なりとも、多聞（タモン）天の一名なりともいふ。

**じんじやてつだう** 人車鐵道【名】人力にて押動かして、軌道を運轉せしむる車。

**じんじやべんらん** 神社便覽【名】〔書〕諸國の神社のことを、見易く記せるもの。一卷。白井宗因の著。

**じん-じやます** 神社桝【名】神社にて使用する桝。各神社によりて種種あり。宮中・伊勢用桝等は伊勢にて、神供桝は春日にて用ふるが如し。

**しん-しゆ** 神主【名】〔一〕『史記の夏紀に「爲山川神主」とあり』神となりて、その地を主るもの。〔二〕儒教にて使用する位牌。官位・姓名を書き、祠堂に安置す。

**しん-しゆ** 神酒【名】神に供ふる酒。みき。

**しん-しゆ** 新主【名】新しき主君。書國『主殿司（ノカミ）の新主』〔新主の御用を勤むとて、參らぬ由申しけるに」

**しん-しゆ** 新酒【名】今年釀したる酒。（冬の門出）『新酒としさけ。（古酒に對して）』

**しんしゆう-ぜんじ** 眞宗禪師【名】〔人〕丞の次、建能を見よ。

**しんしゆう-ほふえう** 眞宗法要【名】國語にて記せる眞宗の聖典三十九部を編めたるものにて、本願寺派に限りて、この稱を用ふ。本願寺派の法主法如が派內の學匠をして編輯せしめしもの。しんしゆうかなしやうけう眞宗假名聖敎參照。

**じんしゆかいりやう-ろん** 人種改良論【名】（ゆうせいがくすに同じ。

**じんしゆ-がく** 人種學【名】『英 Ethnology』人種に關する研究を總括したる稱。人種及びその繫屬たる種族の身心上の諸性質を調査し、その結果を對照し、各地方住民の由來を考定するを本領とす。人類學の主要なる一部をなす。

**しんじゆがひ** 眞珠貝・珠母【名】〔動〕辨鰓（ベンサイ）類に屬する軟體動物。介殼はやや方形をなし、兩殼は少しく不同にして、その外面は暗褐色を呈し、粗糙にして、數多の薄層を重ねたるがごとき狀をなし、內面は眞珠色を呈して、閃光を帶ぶ。しんじゆ（眞珠）參照。


（いがゆじんし）

**しんじゆ-がん** 眞珠岩【名】（鑛）玻璃質の暗褐色なる流紋岩。共心的割目（ワレメ）を有す。

**しん-しゆく** 振肅【名】衰へたるを、振ひ起して、おごそかにすること。

**しん-しゆく** 森肅【名】おごそかなること。森嚴。

**しん-しやく** 伸縮【名】のぶると、ちぢむこと。のばすとちぢむること。のびちぢみ。

**しん-しやく** 參宿【名】しん（參）に同じ。

**しん-しやく** 心宿【名】しん（心）に同じ。

**しん-しやく** 軫宿【名】しん（軫）に同じ。

**しん-しやく** 信宿【名】『左傳の莊公三年に「凡師一宿爲舍、再宿爲信」とあり』二夜宿すること。二晩どまり。再宿。

**しん-しやく** 辰宿【名】せいしゆく（星宿）に同じ。

**しんじゆく** 新宿【名】〔地〕東京市四谷區の町。もと內藤新宿と稱し、甲州街道の第一驛にして、青梅街道の分るる所たりしが、のち府下豐多摩郡に屬し、大正九年市內に編入せり。

**しんじゆく-ぎよえん** 新宿御苑【名】東京市四谷（ヨツヤ）區新宿町に在る帝室御苑。ぎよくせんえん（玉川園）參照。

**しん-しやくこう** 申叔舟【名】〔人〕朝鮮李朝の學者。字は泛翁、保閑齋と號す。世宗の命を奉じて、我が國に來聘せり。諸文（ショモン）の製作に預り、日本語にも通じ、海東諸國記を著はし、我が國の歷史・地理を誌せり。世宗十三年歿す。

**しん-しやくせいげん-はふ** 伸縮制限法【名】（經）せいげんぐしんはふ（制限屈伸法）に同じ。

**しんじゆ-くわい** 眞珠灰【名】〔化〕『英 Pearl ash』木灰の水浸液より蒸發・精製せる炭酸カリウム。

**しんじゆ-くわう** 眞珠光【名】『英 Pearly lustre』眞珠に似たる光澤。「「に同じ。

**しんじゆ-くわうたく** 眞珠光澤【名】前條

**しんじゆ-けい** 眞珠鷄【名】（動）うみきじ（海雉）に同じ。

**じん-しゆ-しんりがく** 人種心理學【名】（哲）『英 Race psychology』心理學の一。各人種に特殊なる、心理學上の狀態を研究の範圍とし、精神上の進化の最簡單・最低度なる形式の者をも對象とす。種族心理學。しゆくわいしんりがくく社會心理學）參照。

**しん-しやく-しよく** 神主職【名】神主（シンシユ）の職。太平記『賀茂の社の神主職は、神職中の重職として』

**しんじゆ-せき** 眞珠石【名】（鑛）質は松香石に同じくして、眞珠光を放つ寶石。

**しんじゆ-そう** 眞珠唇【名】（動）『英 Pearly oyster』貝殼の內面にある薄き層。眞珠質より成り、美麗なる光澤を帶ぶ。

**じん-しゆ-たんぱくせき** 眞珠蛋白石【名】（鑛）寶石の一種。葡萄或は鐘乳狀にして、眞珠の如き光澤を有す。





**しん-しゆつ** 進出【名】進み出づること。

**しん-しゆつ** 神出【名】次條を見よ。

**しん-しゆつ** 神出鬼沒【句】鬼神の如く、忽ち顯はれ、忽ち隱るること。出沒の巧なること。

**しん-しゆつ** 滲出【名】しみ出づること。

**しん-しゆつ** 心術【名】心の由る所の道。こころだて。性術。

**しん-しゆつ** 賑恤・振恤・振卹【名】金品をめぐみ施すこと。

**しん-しゆつ** 鍼術・針術【名】鍼醫の行ふ醫術。支那古代の醫術の傳はれるものにて、細き鍼を、人の身體の患部に插入して、治療す。はり。

**しん-しゆつ** 仁術【名】『孟子の梁惠王上篇に、「無傷也、是仁術也」とあり』仁を行ふ方法。〔一〕「醫術（醫術）」に同じ。

**しんじゆつ-きん** 賑恤金【名】軍人恩給の一。陸・海軍の下士以下にて、公務のために傷を受け、又は病に罹りて、現役を離れ、免除恩給を受けざる者に給するもの。

**しんじゆつ-まい** 賑恤米・振卹米・振卹米【名】すくひまい（救米）に同じ。

**しん-しゆつ-てき** 進取的【形動】われより進み出でて、事をなすさま。

**じん-じゆ-でん** 仁壽殿【名】じじゆうでん（仁壽殿）に同じ。

**しん-しゆ-ながし** 神酒流【名】東京の御島の邊まで漕ぎ進み、積める神供を海に流し、宴を船中に張りつつ月島・佃島を一周す。

**しん-しゆ-ぶつ** 神儒佛【名】神道と儒道と佛道と。

**しん-しよ** 新春【名】〔一〕新なる春。はつはる。改春。〔二〕陰曆にて、新年。宗因『新春の御慶はふるき竹葉かな』

**しん-しゆん** 浸潤【名】〔一〕しみとほりて潤ること。〔二〕次第にしみこむこと。

**しん-しゆん** 辰宿【名】（鑛）寶石の一種。菊菊或は鐘乳狀にして、眞珠の如き光澤を有す。

**じん-じゆ** 人主【名】きみ。王。人君。君主。

**じん-じゆ** 人種【名】〔一〕『法苑珠林に「無量衆生時、有二一人一合集圓浮提內男女、唯餘二萬二千人一」とあり』人類のたね。ひとだね。〔二〕『英 Human race』骨格・皮膚の色・言語などの異同により、分ちたる地球上の人類の種類。種種の分類あれど、最も普通には、黃人種・白人種・黑人種、又は亞細亞人種・歐羅巴人種・馬來人種・亞弗利加人種・亞米利加人種などとす。

**じん-じゆ** 人壽【名】人の壽命。「こと。

**じん-じゆ** 仁壽【名】仁德ありて長命なること。

**じん-じゆあん** 眞珠庵【名】京都紫野大德寺內に在る茶室。僧一休の所用せしもの。

**しん-しゆう** 新衆【名】しんさん（新參）に同じ。甲陽軍鑑『御小人或は新衆なんど』

**しん-しゆう** 眞宗【名】（佛）〔一〕眞實の宗旨。（各自信ずる所の宗旨を指していふ）〔二〕じゆうどしんしゆう（淨土眞宗）の略。眞宗の五派【句】（佛）本願寺派・大谷派・佛光寺派・高田派・木邊（ベ）派の併稱。ごけ（五家）〔一〕參照。

**しん-しゆう** 眞宗の四法【句】（佛）眞宗の開祖親鸞の立敎の綱領たる敎・行・信・證の併稱。即ち釋迦の敎、珠にその大無量壽經の所說と、その敎に基づきたる修行、即ち南無阿彌陀佛の名號を唱ふること、阿彌陀佛を信じて、一點も疑はざる心と、極樂に往生して、涅槃の證果を得ることと。けうぎやうしんしよう（敎行信證）參照。

**しん-じゆう** 臣從【名】臣下となりて從屬すること、又その人。

**じん-しゆう-かな-しやうけう** 眞宗假名聖敎【名】〔書〕國語に記せる眞宗の聖典三十九部を編めたるもの。內容は本願寺派の眞宗法要と同じくして、序次の次第のみ異なり。大谷派の法主の命に依り、僧慧琳等の撰集せしもの。

**じん-じゆうくわう-さう** 身縱廣相【名】（佛）三十二相の一。頭より足に至る高さと、左右の手を張りし長さと齊しきもの。

**じん-じゆ** 人參【名】〔一〕『史記に「爲人參、泛潤之語、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣」とあり』水の物を漸次に浸すが如く、徐徐に人を諫すること。太平記『泛潤之語、膚受之愬、事起二子小納言一、皆是レ大』

**じん-じゆん** 信順【名】（佛）所聞の法を信受して、これに隨順すること。

**しん-じゆ-をけ** 神酒桶【名】神酒を盛る稱。

**しん-しよ** 心緒【名】心のはたらくこころ。心の緒。


（神酒桶）

**しん-しよ** 寢處【名】ねどこ。ふしど。寢室。「しんそ。

**しん-しよ** 深阻【名】深くけはしきこと。

**しん-しよ** 神所【名】神社のある所。（加茂三所の神所とかや）

**しん-しよ** 神書【名】〔一〕神に關する事を記したる書籍。〔二〕神靈なる書物。

**しん-しよ** 信書【名】個人間の意思消息を通ずる文書。てがみ。書狀。

**しん-しよ** 信書秘密の自由【句】（法）憲法上の自由の一。信書は、國家が刑事上又は行政警察の目的のためにする場合にて、法律に依るに非ざれば、差押へ又は開封するを得ざること。

**しん-しよ** 眞書【名】〔一〕かいしよ（楷書）に同じ。〔二〕眞實の事を記したる書籍。「眞書太閤記」「文。

**しん-しよ** 讖書【名】未來記。豫言書。讖

**しん-しよ** 新書【名】新に撰述し、又は出版したる書。「こと。

**しん-しよ** 親書【名】貴人のみづから書く

**しん-しよ** 親署【名】天皇陛下が親しく署名したまふこと。

**しん-しよ** 臣庶【名】けらい。人民。臣民。

**しん-しよ** 晉書【名】（書）二十一史の一。唐の太宗が房玄齡・李延壽等に命じて撰ばしめしもの。西晉四代五十四年間の事と、東晉十一代百二十年間の事とを記せるもの。百三十卷。十紀・二十志・七十列傳・三十載記より成る。載記は五胡十六國の事を記す。

**しん-しよ** 心所【名】（佛）對境によりて、貪瞋（シンイン）等の情を起す心法。（心王に對して）

**しん-しよ** 寢所【名】しんしよ（寢處）に同じ。

東馬毎夜可レ候二于御装所之近邊一」

**しん-じよ** 醸醤【名】搗りつぶしたる魚肉に糯蕎(ハダ)又は麴飼粉などを加へて固め、陽煮にしたる食品。吸物の實として用ふ。

**しん-じよ** 神助【名】神のたすけ。天助。天佑。太平記「爲レ仰二和光之神助一」

**しん-じよ** 新所【名】新に造りたる所。

新所の旬【句】内裏造營終りて、初めて陛下紫宸殿に出御あり て、郡臣に酒を賜ひ、政事を聞かせらるる儀式。公事根源

「おほよそ旬には色色あり。内裏新しく造られて後、はじめて南殿にて行はせたまふをぞ、新所の旬と申す」

**しん-じよ** 新書【名】(書)買誼の本傳中に載せたる文を取りて割愛し、五十六篇としたるもの。十卷。漢の賈誼の撰。

**しん-じよ** 新序【名】(書)支那、百家の傳說を集めて分類せるもの。唐以前は三十卷なりしが、宋以後は十卷となれり。漢の劉向の著。

**じん-じよ** 甚暑【名】甚しき暑氣。大暑。酷暑。

**じん-じよう** 尋所【名】じんじよう(尋承)に同じ。平家「八嶋へ參る案内を知らぬぞ。じんじよせよ」

**じん-じよ** 仁恕【名】あはれみ深くして、他の罪過を問はざる心。「じ。

**しん-じよう** 申證【名】しようこ(證據)に同

**しん-じよう** 新訟【名】新しき訴訟。

**しん-じよう** 晨鐘【名】曉に撞く鐘。朝の鐘。あけのかね。曉鐘。「驗。

**しん-じよう** 信證【名】あかし。しるし。信明證。【二】(佛)眞實の證悟。

**しん-じよう** 震悚【名】ふるひおそれること。震怖。

**しん-じよう** 心證【名】〔法〕『獨Inhalt』訴訟事件に對して、裁判官の心中に惹起せられる推定。

**しん-じよう** 眞乘【名】〔佛〕『ぶつじよう(佛乘)を見よ』眞實の教法。

**じん-じよう** 人證【名】〔法〕裁判所にて、證人の申立を、證據とする法。

**じん-じよう** 晨鐘【名】しんじよう(晨鐘)に同じ。

**じん-じよう** 尋承【名】案内すること、又その人。尋所。盛衰記「觀家を西國の案内者に惡む。屋島の尋承せよ」

**しん-じようえふめいしよ-わかしふ** 新松葉名所和歌集【名】(書)古き名所和歌集に洩らせる名所、又は近世、名所となれるものを集めたるもの。二卷。尾崎雅嘉(ガカ)の撰。

**しん-じよう-じ** 新勝寺【名】しんこんじよう(神護新勝寺)に同じ。

**じん-じよう-だいめい-し** 人稱代名詞【名】【名】〔語〕〔法〕〔人代名詞〕に同じ。

**しん-じようとく** 進宿德【名】〔音〕雅樂の一。高麗樂に屬し、壹越(ヰチ)調。 遊走德。拾玉抄「進宿德」

**しん-じよく** 寢食【名】ねむることと、食ふこと。

**しん-じよく** 浸蝕【名】〔地〕『英Erosion』漸次に水のしみこみてそこなふこと。水蝕。

**しん-じよく** 神職【名】【一】神社に奉仕するもの。かんなし。神官。太平記「賀茂の社の神主職は、神職の中の重職として」【二】官國幣社以下、府縣鄕村社及び神祇署(ヤシロ)の職員の總稱。しんくわん(神官)【二】參照。

**しん-じよく** 神色【名】【名】精神と顏色と。

**しん-じよく** 眞色【名】【名】(義)じよく(自色)に同じ。

**じん-じよく** 人色【名】【名】人の通常の顏色。

人色無し【句】『漢書の李廣傳に「吏士無二人色一」とあり』恐怖して、顏色を變ず。顏色を失ふ。

**じん-じよく** 紙織【名】はたをおること。

**じん-じよく-じく** 浸蝕谷【名】〔地〕『英Erosion valley』浸蝕作用のために生じたる谷。水蝕谷。

**しんじよく-さんがく** 浸蝕山嶽【名】〔地〕『英Erosion mountain』浸蝕谷の生ずると共に、その間に挾まりたる部分の殘りて、山嶽をなすもの。水蝕山嶽。

**しんじよく-さよう** 浸蝕作用【名】〔地〕『英Erosion』浸蝕する作用。動搖する水が土地・岩石を研磨・破壞する作用。

**しんじよく-しけん** 神職試驗【名】官・國幣社の神職たる資格の有無を定むる試驗。奏任待遇の神職たらんとする者を試むる高等試驗と、判任待遇の神職たらんとする者を試むる尋常試驗との別あり。前者は、内務者に委員を設けて施行し、後者は各地方廳に委員を設けて行ふ。

**しんじよく-だいち** 浸蝕臺地【名】〔地〕『英Erosion tableland』巖曲(ガカ)せる山脈などの、風雨に削磨せられて平になれる臺地。

**しん-じよたい** 新所帶・新世帶【名】あらじよたい(新所帶)に同じ。

**じん-しらう** 甚四郎【名】たうぞく(盜賊)を云ふ。〔東京の語〕

**しんしる** 新知【名】〔地〕火條を見よ。

**しんしる-しま** 新知島【名】〔地〕千島群島の一。千島國得撫(ウタ)島の東北の海中にある新知・計吐夷(イ)・牛知夷(イ)等の諸島の總稱。松輪(ガカ)・雷公計(ガカ)等の諸島の總稱。相合して、一郡を立て、新知郡といひ、根室支廳の管轄に屬す。

**しんず** 信ず【動佐變他】【一】まことと思ふ。疑はず。源氏「しんじたがたき事と思うたまへしかど」【二】信仰す。

**しんず** 進ず【動佐變他】【一】すすむ。たてまつる。さしあげ。【二】昔の軍陣にて、旗を後方に返す(ヘンガヘ)すに對して)

**じん-すけ** 甚助【名】『腎助の意か。助は、人名めかすために添へたるもの』淫魔又は絞殆深き性質、又その性質の男子。

**しんすね** 浸水【名】水にひたすこと、又侵し入る水。

**しん-すね** 進水【名】新に建造の船を、造船臺より滑らせ下して、水に浮ぶること。ふなおろし。しんざうおろし。

**しんすね** 深水【名】深き水。

**しんすね** 晨炊【名】早朝にかしぐこと。

**しんすね** 深邃【名】奥ふかきこと。幽邃。

**しんすね** 深水【名】しみこみたる水。

**しん-すね** 薪水【名】【一】薪と水と。【二】薪を採ること、水を汲むこと。飯を たくこと、水を汲むこと。「薪水の勞」

**しん-すね** 神水【名】【一】神に供ふる水。太平記「一足も引かず、討死すべしと、神水を飲みてぞ打ちたちける」【二】靈驗ある水。

**しんすね** 心醉【名】『酒に醉ひたるがごとくに迷ふ意』物事に深く耽りて、心の奪はるること。

**しんすね** 神瑞【名】神のしるし。靈妙なる祥瑞。「蘊奥。

**しんすね** 神髓・眞髓【名】その道の奥義。

**しんすね** 心髓【名】【一】中心の髓。【二】中心。中稱。骨髓。

**じん-すね** 靈痒【名】『痒は病み勞るる義』心を盡し、力を勞すること。ほねをり。

**じんすね** 腎水【名】『腎臟より分泌せらるるものと說信せしといふ』せいえき(精液)に同じ。「代男「うなるよりこの方、腎水をかへほして、さても命はあるものか」

**しんすね-しき** 進水式【名】新造船の進水を行ふ儀式。

**しんすね-だい** 進水臺【名】新造船の造船臺より滑りて、水中に進む間の經路。

**しんすね-ち** 浸水地【名】浸水せる土地。

**しんすね-をけ** 神水桶【名】神事に用ふる水桶。

**しん-すね** 信施【名】〔佛〕信者より三寶に捧ぐる布施。盛衰記「若干の法勝寺領を知行し給ひながら、修理造營を悉に三寶の信施を受け」

信施・無慚【句】〔佛〕僧侶が信施を受けながら、放逸無慚なる振舞をなすこと。平家「彼の信施無慚の罪に依つて」

**しん-せ** 嗔施【名】〔佛〕『嗔はだつこん(瞋嗔)の略』施主布施に同じ。

**しん-せい** 申請【名】〔法〕私人が官廳に申し出て、或事柄を請ひ求むること。

**しん-せい** 神性【名】【一】こころ。精神。【二】神の屬性。

**しん-せい** 神制【名】神の制定したる事物。

**しん-せい** 神聖【名】神神しく貴きこと。







**しん-せい** 神政【名】『英Theocracy』神の統治の義』政權を宗教權に從屬せしめ、宗教の首長が、神意を代表して、政治の統御となる制度。

**しん-せい** 參星【名】しん(參)に同じ。

**しん-せい** 軫星【名】しん(軫)[二]に同じ。

**しん-せい** 心星【名】【一】しん(心)[七]に同じ。【二】しんくわ(心火)[二]に同じ。

**しん-せい** 辰星【名】【一】ときつほし(恆星)に同じ。【二】ほし(星)に同じ。

**しん-せい** 新星【名】【一】新に發見したる星。【二】〔天〕變光星の一。突然現出する恒星。急速に光度を增し、數日ならずして極大に達し、爾後次第に光度を減ずるを常とす。

**しん-せい** 深政【名】政治又は政令を新にすること、又その政治・政令。

**しん-せい** 新製【名】新に製すること。新造。

**しん-せい** 新制【名】新なる制度又は體「制。

**しん-せい** 新聲【名】あたらしき歌曲。

**しん-せい** 新正【名】新年の正月。

**しん-せい** 新靖・新婿【名】あたらしきむこ。はなむこ。

**しん-せい** 新生【名】〔碁〕『獨Neugeburt』信仰によりて、心の一變せるありさま。新しき生涯に入れること。しんじん(新人)參照。

**しん-せい** 新晴【名】あらたに晴ること。

**しん-せい** 晨星【名】夜明の空に殘る星。よあけぼし。

晨星落落【句】【一】まばらなるさま。まれなるさま。【二】知人の漸く減ずる狀。

**しん-せい** 親政【名】天皇が自ら政を行はせたまふこと。

**しん-せい** 親征【名】天皇自ら出征したまふこと。

**しん-せい** 深井【名】深きゐど。

**しん-せい** 深穿【名】深きおとしあな。

**しん-せい** 深省【名】心中に深く省みること。深く省み悟ること。

**しん-せい** 鍼生【名】古、典藥寮に奉仕し、鍼術の教を受けし者。

**しん-せい** 眞性【名】【一】(醫)他の物のまじらざる性質。純粹。(假性に對して)【二】天賦の性。天性。【三】現象の本體。眞如。

**しん-せい** 眞誠・眞成【名】まこと。眞實。

**しん-せい** 身世【名】この身とこの世と。現身と現世と。

身世を辭す【句】『溫子昇の常山公主碑に「竜辭二身世一」從二忘妃於伊洛一」とあり』この世を去る。死ぬ。

**しん-せい** 眞正【名】まことにして正しきこと。「じ。

**しん-せい** 心性【名】しんじやう(心情)に同

**しん-せい** 信西【名】ふぢはらのりみち(藤原通憲)に同じ。

**しんぜい** 眞濟【名】〔人〕眞言宗の高僧。山城國神護寺の第二組。姓は紀氏。京都に生る。空海に師事し、命に入りて、神護寺を嗣ぐ。承和三年小野篁の一行に加はりて、唐に赴かんとし、海上颶風に遇ひて果さず。齊衡三年僧正に敍し、貞觀二年薨す。年六十一。著作多し。世に高雄僧正又は紀僧正といふ。

**じん-せい** 仁聖【名】仁德ある聖人。

**じん-せい** 仁政【名】なさけ深き政治。

**じん-せい** 人世【名】人の世の中。このよ。うきよ。世間。

**じん-せい** 人性【名】【一】〔孟子の告子下篇に「人性之無分於善不善也、猶二水之無分二於東西一也」とあり』人の本然の性。【二】人の性質。

**じん-せい** 人生【名】【一】人類の生命。人類の生存。【二】人のこの世に生き長らふる間。人の一生。

人生、意氣に感ず【句】『唐の魏徵の詩に「人生感二意氣一功名誰復論」とあり』人は富貴功名よりも、意氣の投合するを尊ぶ。

人生、意を得ば、須く懷(ツ)を盡すべし【句】『唐の李白の句に「人生得二意須レ盡レ歡、莫使二金樽空對レ月」とあり』得意の時には、歡樂を盡すべし。

人生七十、古來稀なり【句】『唐の杜子美の句に「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」とあり』七十まで生くる者は稀なり。〔誌語〕

人生字を識るは、憂患の始【句】『宋蘇軾の句に「人生識字憂患始、租記姓名二可以休」とあり』なまじ文字・學問あるは、苦勞を招く種なれば、むしろ知らざるが心安し。〔誌語〕

人生のための藝術【句】ぢんせいのための藝術の條下を見よ。

人生は行樂のみ【句】『漢書中の楊惲の詩に「田二彼南山一蕪穢不レ治、種二一頃豆一落而爲萁、人生行樂耳、須二當貴一何時、淫荒無レ度、不レ知二其不可一也」とあり』人の世にあるは、僅少の間なれば、ただ樂しみて、一生を送るに若かず。

**人生は朝露の如し**【句】『漢書の蘇武傳に「人生如二朝露一、何久自苦如レ此」とあり』人生の短きことは、朝日の出づる前の露のごとし。〔誌語〕

**人生は白駒の隙を過ぐるが如し**【句】『白駒隙を過ぐ』を見よ。〔誌語〕

人生は風燈の如し【句】『漢史の耶律和尚傳に「嘗人生如二風燈一、石火不レ飲將何爲」とあり』人生の期すべからざることを風前の燈に譬へていふ。〔誌語〕

**じん-せい** 人聲【名】人の聲。ひとごゑ。

**じん-ぜい** 人稅【名】人を課稅の目的とする稅。例へば人頭稅の類。(行爲稅・物稅に對して)

**しんせい-かい** 新生界【名】〔地〕『英Cainozoic group』新生代を、地質系統の上より見たる名稱。近世界。

**しんせい-かはせ** 眞正爲替【名】〔商〕『英Real exchange』需要・供給の關係より生ずる爲替相場。(名稱爲替に對して)

**しんせい-がん** 深成岩【名】〔地〕しんさうがん(深造岩)に同じ。

**じんせい-くわん** 人生觀【名】〔哲〕『獨Lebensanschauung』人生の起原・目的・價値等に關する見解。歷制主義・桑天主義・禁欲主義・幸福主義など、種種あり。せかいくわん(世界觀)參照。

**しんせい-くわんせつ** 眞正關節【名】〔醫〕二或は數箇の諸骨の互に相連接して、諸種の運動を營むもの。單軸・二軸・螺旋・三軸・蠣合に分つ。何れも關節軟骨にて被覆せられ、關節藥・滑液・關節腔を有し、分泌する滑液によりて、運動に便す。

**しんせい-しや** 申請者【名】申請する人。申請人。

**しんせい-しよ** 申請書【名】申請の旨を記載したる文書。

**しんせい-そう** 新生層【名】〔地〕『英Cainozoic strata』新生代の成生に係る地層の總稱。

**しんせいたい** 眞聲帶【名】〔醫〕『羅Ligamenta glottis vera』せいたい(假聲帶)を見よ。(假聲帶に對して)

**しんせい-だい** 新生代【名】〔地〕きんせいだい(近世代)に同じ。

**しんせい-ちやう** 神稅帳【名】古、神田の收稅を記入せし帳簿。

**じんせい-てつがく** 人生哲學【名】〔哲〕『獨Lebensphilosophie』人生の目的・價値・手段等につきて研究する哲學。

**しんせい-にん** 申請人【名】申請する人。申請者。

**じんせい-は** 人生派【名】〔文・美〕『人生の藝術に對して』人生派を主義として奉ずる一派。(藝術派に對して)

**しん-せいふ** 神政府【名】『神の政府の義』神政を行ふ政府。

**しんせい-ふさくるはん** 眞正不作爲犯【名】〔法〕『獨Echtes unterlassungsdelikt』不作爲に依る不行犯、即ち不作爲に依る命令違反の罪。(不眞正不作爲犯に對して)

**しんせい-へうぐ** 神聖表具【名】掛物の表裝の一種。天地・四方を金襴等の華文ある帛を用ひ、象牙・柴榑・鐵力木(ヤマ)・角・水晶・寶石等の軸を用ふるもの。主に佛畫の表裝とす。

**しんせい-めい** 新生命【名】あたらしき生涯。新らしきいのち。

**しん-せいめん** 新生面【名】せいめん(生面)【二】に同じ。

**しんせい-もくえうび** 神聖木曜日【名】〔基〕『英Holy Thursday』しようてんさ(昇

天祭に同じ。

**しん-せいわゐん** 新清和院【名】〔人〕光孝天皇の中宮。仁孝天皇の御養母。後桃園天皇の皇女。御名は欣子内親王。弘化三年崩ず。

**しん-せう** 新梢【名】新に生じたる梢。

**しん-せう** 秦椒【名】〔植〕さんせう（山椒）に同じ。

**しん-ぜう** 薪樵【名】薪を採ること、又その人。

**しん-ぜう** 侵擾【名】侵しみだすこと。

**しん-ぜう-ぼうだい** 針小棒大【句】針ほどのことを棒ほどにいひ立てること。物事を誇張して、大袈裟にいふこと。

**しん-せかい** 新世界【名】㊀新しく發見せる國土。㊁南北亞米利加及びオオストラリヤ兩大陸の總稱。（舊世界に對して）

**しん-せき** 臣籍【名】㊀臣民たる身分。國民の分限。㊁皇族以外の臣民籍。

**しん-せき** 親炙（〜名）しんしや（親炙）に同じ。

**しん-せき** 親戚（〜名）親族と緣家と。みうち。しんるゐ。

**しん-せき** 眞蹟・眞跡・眞迹【名】その人のまことの筆蹟。親筆。

**しん-せき** 晨夕【名】朝と夕と。あさばん。朝夕。日暮。朝暮。

**しん-せき** 新關【名】新に造り構へたる關所。文武天皇時、さては新關にて候ふな。

**じん-せき** 神石【名】〔地〕備後國七郡の一。

**じん-せき** 神席【名】しとね。しきもの。ふとん。

**じん-せき** 人跡・人迹【名】㊀人のあしあと。㊁人の往來。

**じん-せき** 腎石【名】〔醫〕ぬうせき（尿石）を見よ。

**じん-せつ** 親切【名】懇にいたはること。まめやか。

**しん-せつ** 深切【名】甚だ切實なること。

**しん-せつ** 臣節【名】人臣の節操。

**しん-せつ** 深雪【名】高く積りたる雪。

**しん-せつ** 信節【名】信義ある節操。詐りなきしるし。

**しん-せつ** 新雪【名】新年となりて初めての降雪。新年の雪。

**しん-せつ** 新說【名】㊀あらたに聞く話。㊁あらたに立てたる意見。（舊說に對して）

**しん-せつ** 新設【名】新に設くること。從設すること。屈服。

**しん-せつ** 震慴・震懾・震攝【名】おそれをののくこと。震怖。

**しん-せん** 神饌【名】神に供ふる飲食物。「ること。

**しん-せん** 神占【名】神に祈りて疑を決す

**しん-せん** 神泉【名】㊀神井ますといふ泉。㊁靈妙なる泉。

**しん-せん** 神仙・神僊【名】せんにん。かみ。

**しん-せん** 深泉【名】水底ふかき泉。

**しん-せん** 深淺【名】㊀深きと淺きと。

**しん-せん** 進戰【名】進みて戰ふこと。

**しん-せん** 賑贍【名】にぎはしめ（むこと。

**しん-せん** 賑恤。

**しん-せん** 新選【名】新にえらぶこと。

**しん-せん** 新撰【名】新に撰述すること。新に著作すること。

**しん-せん** 新鮮【名】㊀あたらしき魚。なまうを。鮮魚。㊁きはめて新しきこと。

**しん-せん** 新船【名】新造の船。

**しん-せん** 新錢【名】新に鑄造通用する錢。（舊錢に對して）

**しん-せん** 針線・鍼線【名】㊀針と絲と。㊁さいほう（裁縫）に同じ。

**しん-せん** 針氈【名】針のむしろ。針氈に坐す【句】不安・畏怖の地位に在り。

**しん-せん** 震戰【名】ふるひをののくこと。

**しん-せん** 震顫【名】〔醫〕『羅Tremor』身體の或部分の震ふ狀態。俗にふるへ」といふ。

**しん-ぜん** 神前【名】神の御前。やしろの御前。ひろまへ。「見よ。

**しん-ぜん** 神仙【名】じふにりつ（十二律）を見よ。

**しん-ぜん** 寢膳【名】衾ねることと食事と。寢食。

**しん-せう** 宸聰【名】〔しんきん（宸襟）を見よ〕天子の御きき。叡聞。

**じん-そう** 迅走【名】じっそう（疾走）に同じ。

**じん-そう** 賺送【名】旅立つ人にはなむけすること。餞餞。

**しん-そうけん-もんゐん** 新崇賢門院【名】〔人〕東山天皇の宮人。名は賀子。中御門天皇及び諸皇子を生む。寶永六年薨ず。年三十五。

**しん-そう-りう** 進走流【名】〔音〕しんじようさ（遒宿德）に同じ。

**しん-そく** 神足【名】神の如く不思議に早き足。釋迦牟尼弟子、六通自在の神足に、魔軍逢のごとく捲いて」

**しん-そく** 神速【名】不思議なるほど速かなること。

**しん-そく** 親族・親屬【名】㊀みより。うから。やから。緣家。親類。（緣族に對して）

**しん-そく** 親屬【名】〔法〕後見機關の一。或人若しくはその家の利害に重大なる關係ある事件を協議決定するために、親族會員にて組織するもの。

**しん-ぞく-くわいぎ** 親族會議【名】〔法〕前條に同じ。

**しん-ぞく-くわい-ゐん** 親族會員【名】〔法〕親族會を組織する會員。三名以上とし、親族その他、本人又はその家に緣故ある者の中より裁判所の選定するを通例とすれども、後見人指定の權利ある者も、遺言によりて、これを選擧することを得。

**しん-ぞく-けつ-こん** 親族結婚【名】親族關係を有する男女の結婚。（交叉結婚に對して）

**しん-ぞく-けん** 親族權【名】〔法〕私權の一。親族上の身分に伴ふ權利。即ち親權・戶主權・後見權の類。身分權。

**しん-ぞく-こきん** 新續古今【名】〔書〕次條の略。

**しん-ぞくこきん-わかしふ** 新續古今和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。後花園天皇の永享五年、飛鳥井雅世の勅を奉じて撰せしもの。多く北朝君臣の詠を採る。二十卷。

**しん-ぞく-こん** 親族婚【名】しんぞくけつこん（親族結婚）に同じ。

**しん-ぞく-さうたう** 親族相姦【名】〔法〕直系血族・配偶者及び同居の親族又は家族が、互にその財產を竊取すること。その刑を免除す。

**じん-そく-さくぶん** 迅速作文【名】題を課して、一定の短時間に、文章を作らしむること。

**しん-ぞくだいりん-わかしふ** 新續題林和歌集【名】〔書〕新題林和歌集以後の歌を集めたるもの。十六卷。撰者詳かならず。

**じん-そく-つう** 神足通【名】〔佛〕六通の一。山海を飛行し、動作意の如くなること。神境通。

**しん-ぞく-にたい** 眞俗二諦【名】〔佛〕眞諦と俗諦と。眞俗。（梵語Satyadvaya）眞俗二諦、內外の兩典、形の如く存知す」

**しん-ぞく-にだう** 眞俗二道【名】〔佛〕前條に同じ。

**しん-ぞく-はい** 親族拜【名】古、禁中にて、敍位の儀了りたる後、敍者の親族の堂上にある者の殿を下りて行ひし拜禮。

**しん-ぞく-はふ** 親族法【名】〔法〕親族に關する事柄を規定したる法律。

**しん-ぞく-れい** 親族例【名】〔法〕親族の範圍を定めたる通則。

**しん-そこ** 心底【名】しんてい（心底）に同じ。

**しん-そつ** 眞率【名】天眞に任せて飾らず、率直なること。まじめ。眞摯（〜名）。

**しん-そつ** 新卒【名】新しき兵卒。あら手の兵。「人。神商。

**しん-そん** 神孫【名】神の血統をひきたる

**しん-そりこ** 進曾利古・進蘇利古【名】〔音〕樂の高麗壺鼓（〜名）調の一。拾芥抄「進曾利古」

**じん-だ** 糠秩・粃太・糠秩・粃秩・秦太【名】㊀ぬかみそ（糠味噌）に同じ。㊁糠に麩と鹽とを加へてならしたる食品。醉又は酒にて食ふ。

**しん-たい** 身體【名】からだ。體軀。身體の自由【句】〔法〕憲法上の自由の一。即ち憲法第二十三條に「日本臣民は法律に依るに非ずして、逮捕・監禁・審問・處罰を受くることなし」とあるもの。

**しん-たい** 賑貸【名】貸民・賑貸之」

**しん-たい** 眞諦【名】㊀〔佛〕『梵Paramārtha』の譯語。虛妄（〜名）を離れたるが故に、眞といふ。諦は眞理の義。二諦の一。眞實等の理。實相。眞如。實體。法性（〜名）。涅槃（〜名）。（俗諦に對して）㊁成佛の法。佛法。（俗諦に對して）太平記「大慈大悲の薩埵に知遇（〜名）し奉らば、眞諦・俗諦、善願の望を達せん」㊂眞の法則。眞の道理。眞の妙所。

**しん-たい** 眞諦【名】〔人〕『梵Paramārtha』（波羅末陀）の譯語。印度の高僧。西天竺の人。梁の大同中、三十餘歲にして支那に來り、武帝の優遇を受く。次いで國難に遭ひ流離の間、金光明經・攝大乘論・起信論等六十四部の經（二百七十八卷）を漢譯し、陳の大建元年寂す。年七十一。

**しん-たい** 新體【名】あたらしき體。あたらしきかたち。

**しん-たい** 神體【名】神のみたましろ。

**しん-たい** 進退【名】㊀進むと退くと。進退。





**しんせんーゐゐじゆわうらい** 新撰類聚往來【名】〔書〕四季十二月の所用の書簡文を解め、その間に日常の通用字を類聚したるもの。三卷。丹峰和尙の著。

**しんせん-ろくてふ** 新撰六帖【名】〔書〕源家貞（〜名）・藤原爲家・同知家・同信實・同光俊の五歌人が、古今和歌六帖の假名題にて詠める歌どもを記せるもの。五卷。

**しんせん-わかしふ** 新撰和歌集【名】〔書〕古今集中の秀歌三百六十首を集めたるもの。紀貫之、勅を奉じて選定せり。自己の作四十四首、その中にあり。四卷。

**しんせん-ゑん** 神泉苑【名】王朝時代の天子の遊覽場たり。地。相撲・射術・雨乞・菊花宴等の事を行はれし事もあり。正殿を乾臨閣と呼びたり。京都二條城の南に、今もその址ありて、東寺の所管となれり。

**しんせん-ゑん-まつり** 神泉苑祭【名】神泉苑の善女龍王社にて、八月一日に行ふ祭。前條參照。

**しん-そ** 譖訴【名】さんそ（讒訴）に同じ。

**しん-そ** 神訴【名】神の訴。太平記「神訴忽ちに落居して、八月二十二日神木御歸座あり」

**しん-そ** 辛楚【名】『辛は辛（ピリ）き味、楚は人を笞（むちう）つ義』いたみ苦しむこと。

**しん-そ** 親疎【名】したしきと、うときと。

**しん-そ** 神祖【名】㊀功德の偉大なる祖先。㊁あまてらすおほみかみ（天照皇大神）の尊稱。㊂〔人〕さくがはいへやす（德川家康）の尊稱。〔江戸時代の語〕

**しん-ぞ** 陞座【名】〔佛〕『漢字の宋音』高座に登りて說法すること、又その高座。（禪宗の語）

**しん-ぞ** 新造・新艘【名】㊀しんぞう（新造）國の訛。（熊野牛鹿）女の惣名をたぼと云…十三四より二十頃迄を新造といふ」㊁しんさう（新造）㊀㊁に同じ。

**しん-ぞ** 眞ぞ・神ぞ【副】しんぞ」切れ振る舞ひたい」

**しん-そう** 進送【名】送りまゐらすること。

**しん-そう** 申奏・進奏【名】申し上ぐること。奏上。

**しん-そう** 寢膳【名】〔しんきん（宸襟）を見よ〕天子の御きき。叡聞。

**じん-そう** 迅走【名】じっそう（疾走）に同じ。

**じん-そう** 賺送【名】旅立つ人にはなむけすること。餞餞。

**しん-そうけん-もんゐん** 新崇賢門院【名】〔人〕東山天皇の宮人。名は賀子。中御門天皇及び諸皇子を生む。寶永六年薨ず。年三十五。

**しん-そう-りう** 進走流【名】〔音〕しんじようさ（遒宿德）に同じ。

**しん-そく** 神足【名】神の如く不思議に早き足。釋迦牟尼弟子、六通自在の神足に、魔軍逢のごとく捲いて」

**しん-そく** 神速【名】不思議なるほど速かなること。

**しん-ぞく** 親族・親屬【名】㊀みより。うから。やから。緣家。親類。（緣族に對して）

**しん-ぞく** 親屬【名】〔法〕後見機關の一。或人若しくはその家の利害に重大なる關係ある事件を協議決定するために、親族會員にて組織するもの。

**しん-ぞく-くわいぎ** 親族會議【名】〔法〕前條に同じ。

**しん-ぞく-くわい-ゐん** 親族會員【名】〔法〕親族會を組織する會員。三名以上とし、親族その他、本人又はその家に緣故ある者の中より裁判所の選定するを通例とすれども、後見人指定の權利ある者も、遺言によりて、これを選擧することを得。

**しん-ぞく-けつ-こん** 親族結婚【名】親族關係を有する男女の結婚。（交叉結婚に對して）

**しん-ぞく-けん** 親族權【名】〔法〕私權の一。親族上の身分に伴ふ權利。即ち親權・戶主權・後見權の類。身分權。

**しん-ぞく-こきん** 新續古今【名】〔書〕次條の略。

**しん-ぞくこきん-わかしふ** 新續古今和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。後花園天皇の永享五年、飛鳥井雅世の勅を奉じて撰せしもの。多く北朝君臣の詠を採る。二十卷。

**しん-ぞく-こん** 親族婚【名】しんぞくけつこん（親族結婚）に同じ。

**しん-ぞく-さうたう** 親族相姦【名】〔法〕直系血族・配偶者及び同居の親族又は家族が、互にその財產を竊取すること。その刑を免除す。

**じん-そく-さくぶん** 迅速作文【名】題を課して、一定の短時間に、文章を作らしむること。

**しん-ぞくだいりん-わかしふ** 新續題林和歌集【名】〔書〕新題林和歌集以後の歌を集めたるもの。十六卷。撰者詳かならず。

**じん-そく-つう** 神足通【名】〔佛〕六通の一。山海を飛行し、動作意の如くなること。神境通。

**しん-ぞく-にたい** 眞俗二諦【名】〔佛〕眞諦と俗諦と。眞俗。（梵語Satyadvaya）眞俗二諦、內外の兩典、形の如く存知す」

**しん-ぞく-にだう** 眞俗二道【名】〔佛〕前條に同じ。

**しん-ぞく-はい** 親族拜【名】古、禁中にて、敍位の儀了りたる後、敍者の親族の堂上にある者の殿を下りて行ひし拜禮。

**しん-ぞく-はふ** 親族法【名】〔法〕親族に關する事柄を規定したる法律。

**しん-ぞく-れい** 親族例【名】〔法〕親族の範圍を定めたる通則。

**しん-そこ** 心底【名】しんてい（心底）に同じ。

**しん-そつ** 眞率【名】天眞に任せて飾らず、率直なること。まじめ。眞摯（〜名）。

**しん-そつ** 新卒【名】新しき兵卒。あら手の兵。「人。神商。

**しん-そん** 神孫【名】神の血統をひきたる

**しん-そりこ** 進曾利古・進蘇利古【名】〔音〕樂の高麗壺鼓（〜名）調の一。拾芥抄「進曾利古」

**じん-だ** 糠秩・粃太・糠秩・粃秩・秦太【名】㊀ぬかみそ（糠味噌）に同じ。㊁糠に麩と鹽とを加へてならしたる食品。醉又は酒にて食ふ。

**しん-たい** 身體【名】からだ。體軀。身體の自由【句】〔法〕憲法上の自由の一。即ち憲法第二十三條に「日本臣民は法律に依るに非ずして、逮捕・監禁・審問・處罰を受くることなし」とあるもの。

**しん-たい** 賑貸【名】貸民・賑貸之」

**しん-たい** 眞諦【名】㊀〔佛〕『梵Paramārtha』の譯語。虛妄（〜名）を離れたるが故に、眞といふ。諦は眞理の義。二諦の一。眞實等の理。實相。眞如。實體。法性（〜名）。涅槃（〜名）。（俗諦に對して）㊁成佛の法。佛法。（俗諦に對して）太平記「大慈大悲の薩埵に知遇（〜名）し奉らば、眞諦・俗諦、善願の望を達せん」㊂眞の法則。眞の道理。眞の妙所。

**しん-たい** 眞諦【名】〔人〕『梵Paramārtha』（波羅末陀）の譯語。印度の高僧。西天竺の人。梁の大同中、三十餘歲にして支那に來り、武帝の優遇を受く。次いで國難に遭ひ流離の間、金光明經・攝大乘論・起信論等六十四部の經（二百七十八卷）を漢譯し、陳の大建元年寂す。年七十一。

**しん-たい** 新體【名】あたらしき體。あたらしきかたち。

**しん-たい** 神體【名】神のみたましろ。

**しん-たい** 進退【名】㊀進むと退くと。進退。

〔書〕神武天皇より崇峻天皇までの間の姓氏一千一百八十二を神別・皇別・蕃別に類別し、各その本原を計（〜名）れたるもの。崇峻天皇の勅を奉じて、萬多親王・右大臣藤原國人・參議藤原緒嗣（〜名）など撰す。今存するものは抄本なるべしといふ。三十卷。

**しん-せん-すゐなう** 新選髓腦【名】〔書〕歌學に關したる事を記したるもの。一卷。藤原公任の著。

**しん-ぜん-ぢう** 神仙調【名】じんぜん（神仙）に同じ。（貴族中と六との間に、神仙調あり」

**しん-せん-つくばしふ** 新撰菟玖波集【名】〔書〕二條良基の菟玖波（〜名）集に倣ひて、連歌を集めたるもの。二十卷。宗祇法師の著。

**しん-せん-でん** 神仙傳【名】〔書〕神人・仙人の傳記を記せるもの。十卷。支那晉の葛洪の撰。

**しん-せん-ねんぺう** 新撰年表【名】〔書〕我が國の年表。一卷。清宮秀堅の著。安政年間始めて刊行し、明治に至りて、增補・訂正して改刻したり。

**しん-せん-はくどう** 心尖博動【名】〔醫〕しんぷく心悸）に同じ。

**しん-せん-ばんしうらく** 神仙萬秋樂【名】ばんしうらく（萬秋樂）に同じ。

**しん-せん-へいはくしんせれう** 神撰幣帛料【名】へいはくしんせれう（幣帛神饌料）に同じ。

**しん-せん-まんえふしふ** 新撰萬葉集【名】〔書〕寛平年中の后宮の歌合の歌を採へたるもの。眞字にて載せ、旁に七言絕句を添へたるもの。二卷。菅原道眞の撰。菅家萬葉集。

**しん-せん-もん** 神仙門【名】平安城の大內裏淸涼殿の南庇、殿上の西南向、御ち殿上の小板敷と香殿との間に在りし門。

**しん-せん-もんゐん** 神仙門院【名】〔人〕後堀河天皇第二の皇女。御名は體子（〜名）。建長八年內親王となり、三宮に准ぜられ、弘長元年尼となりて、妙智覺と號し、正安三年薨ず。御年七十一。

**しん-せん-らうえいしふ** 新撰朗詠集【名】〔書〕公任の和漢朗詠集に倣ひて、同じ題にて、詩・歌・文章を撰び集めたるもの。二卷。